}

1

複不

月

明治四十三 年 二

許

明治四十二年十月

明治四十二 年

月月1

一

五

中

五

日 日 日

再發印

版行刷

編輯代表者

發行者

右心表者

印刷者

印刷所

三協印刷株式會社

東京市京橋區 弓 町 二十四番地

次

東京市京橋區 弓 町 二十四番地

高

雄村

吉

館

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

株式會社隆文館

古 城 貞

(肥後文獻叢書第二卷奥付)

進歩雲は 文學者にあらざるなり然れども其の詩賦は既に樂洋集に出

園

めくみのみ流れて報いえぬ老らくの身の心しらなむ

君のめくみのふかりしたむくいりえぬことをなげきて

武士のとろてふらもそのまゝにさめおきてし御代を久しき

跡たれ神の御垣のみしめなば猾なかれと世を守るらし

波問よりあらばれ出て今もよにめくみ盡せぬ住吉の神

幸逢太平世

そとは契りもおかめ住を花にとばる、みよしのおく

とひ来る人の心もおくふかきこの山かけの居れて

寄神

たかみとりに染てゑかくらむしける青葉のちの山のは

山家客來

今よりのよばびも久し久方の天とけふ鶴に千世たちきりて

遠山如畫圖

千世萬世々の春にもへたてなくさくらた雲とみよしの山

蒲池氏の母八十の賀選といふことを

ける

肥後文獻叢書第二巻

吳淞園歌

宇野風

極月上澣

明治四十一年ほよく謹にして三代に歴四十有年の間藩政を掌理し国家士

民を以て念とし頃刻も燕安のあらす以て思遇にへられたり而し

て共の銘の思想殺して詩歌となるもの此の如くなりしは所謂中

日月ありといふべきものか今之れを貯寫校訂するに借りて一言を

附記す

て、人の吟誦に上れるものありまた其の詠歌も制藻雅にして後世

にふべきもの少からずこの歌集は巣雲の自から選せられしものに

て原本は其の裔孫勝太氏の藏せる所なり抑々雲一たび靈公の

知を蒙り藩政の街に常らるゝや鋭治謀りょく 百難を排して釐

革の功を奏し公をして天下に肥後鳳凰のあらしむるに至りもの

其の補弼の功興りて鮮少ならざるものありしなり而して雲

拂びてもあとよりつもる世のちりにくもる鏡ばいかてみかくむ

霧ふかき山路なりともこえてゆく路のたちをふみに迷ばし

かくなん申おこせたる返し

いさきよき心のつるききりばらへまよひのきつな世にかゝるとも

こととる人の心のますかゝみくもらばはらへ塵の世中

すなほなる道なまよびそ朝夕にこゆる路霧ふかくとも

公のことありて旅たちける竹原支路かくなむ

行方の遠からぬたもしたふ哉しばしわかる旅そと思へば

平井正雄の鶴崎にゆくか送りて

なすことのなきそやさしさいさある人の昔のふみを見るにも

あつめつる雪のゆふへのいにしへた今はた學ふにこそ知れ

たひまくらかたしくはかばるよも同都の夢をしそ思ふ

くさむしろれられぬたひの枕にもまとろむ程やふるの夢

披書逢背

ちり浮ふ木のはと見ればタの入日にちかき神の釣舟

海原やうきたつ雲の涙間よりほのかに見ゆる神津島山

旅宿夢

海珠出

なかめつく強くきにけり旅きのふにけふはかばるなかめた

覆中眺望

かくよみたよしさるにより花蔵といふ題にて和歌

すとなん申こし柿本に奉納ときしかにょみてつかはし

八四九

ふけ柿本なる御像に千世の色をふ君かことのは

となん御歌賜りけるかたしけなさに

ことにあふけ神御像作~吉長久つたへむ家の守護

ゆく末のちとせよぼふ松の風ふくも八十の春はしめに

美濃墨俣にやとりけるに安藤 古長柿本の像を得て

冷泉入道殿の御許に見せ奉りければ

とりかす石に習ひて幾千世も同齢ともにかそへむ

田中菊八十歳の賀松有獄といふことを

矢橋舟踊るたよりにのらはやとうち出の寝にしばしやすらふ

まつほとやおそとよばふなり多くれ涙のよとの渡りに

硯石に和歌をそへておくられし人にこなたよりも現石をつ

かばしけるやつかれもおなしよはひなりければ

こえていまゆくも夢かきたそかれにたとるうつゝのうつの山道

渡待舟

げふみつるさめの床のうつゝまたあすよりのちに夢とならまし

たそがれ頃うつの山をこえ侍りて

覚の床にまかりて

よしや世にかゝるきつばきりえすと心の剣ときはやむま

ともに見しむかしやしたふ秋の月影を袂の器にやとして

雑植物

成人の母七回忌追縞の和歌ありけるに秋復

ありとのみうつゝに見ともそのはらや木の世にのころ

ばかなしや絡の煙のかたみそとそれさへ今はみれの白雲

支路は任ありてあっまにありけるをいたみて申しける

今はかなしかるらむ親と子のわかれなからの別れなれば

横田の身かり追善に法華十如是進あり如是

相を

常なら風や悲しき柳原ちり行あとに釈をのこして

ちきりおく言葉の末も枯果てるへたたとろもすの莖

竹原氏の房子八月五黄泉におもむきけるないたみ

て頼の許に申しける

人もいま心やかよふさかにのいとかの山のまつの夕風

寄鳥戀

夜がへたつる月影も松にもりくるものとしらすや

寄出待戀

寄月待戀

ぬき

かたみにせむわかれ路の涙のは手にもたまらす

袖にちる泪の玉の数々はちにくたくるおもひとしれ

肥後文獣叢書第二巻

あか星の光もうすく見るかうちしらむそなたの東雲の空

なれてゆたけき池の水かみうつす姿も千世の友鶴

おのかすむ池の心をうちとけてあそふ汀のの諸整

鳥のればまたよこめて逢坂の戸さわ闘をかよふ旅人

池邊鸛

ひく琴のしらへも千世のこなれや軒の松の風のかよびて

開路

谷かけやこにもちょの名にしおふ色をふかめてる松かえ

いつの世の二葉やたかく生のほりれさしも深き谷の松かえ

松風入琴

うぶしより神のめくみの深みとり千世もさかえむびろまへの松

谷松年久

言のはの種ともなりて幾ちとせちりうせめ色のわかの浦の松

所から千世のひきも高砂や尾上の松に風のやとりて

社頭松

名所松

わかみとり世の春に生そびてゆるかけや高砂の松

またくひなみにすかたをうつしつく茂る一木のからさきの松

松年久

八四八

改港同状集

心にわすれもやらていそのかみふるの中道絶むとやする

人傳怨戀

なほさりのことをたにたのむそよわかいつはらぬ心ならびに

さともと頼むもあやなあや筵緒になるまでも厭れん身は

あひみても後もつらさのたへめ哉猶一ふての文を見ぬまは

わかれてののちの心のいかなればかくの人のたまつさ

久戀

うらみしもうらみられしもきぬくを惜むは同心とそれ

歸無書懋

あふことをまつとせしまに年月をあたに過める中そつれなき

互惜別戀

ばらひてもまたもつもらむ事のまれなる床の戀もうらみも

契

かき返る心にふかき氷くきたあさきになしてかへすつれなさ

かされてまたてにとれば引墨のあとも調にたかふ玉つき

稀逢慧

いつまでかよにすみ吉の草の名をつみしもやらてよび渡るらむ

返書懋

松風のたくひとなりていつか我うき姜琴の音にやかよばむ

人よしれかきなす琴の緒をたえてれにさへたてる胸のおもひた

寄玉戀

八四七

するつびに名をやなかさむ沼川ふかきおもひを水上にして

寄笨戀

くれてゆく春をもしらし花鳥の色をよそにこひわたる身は

寄泪懋

とひもこの人に恨をかされつくしきふれやのさむしろ

暮春戀

ひとりの枕の塵のこのまゝにつもらは床の山となりなむ

戀筵

うしや世の人にぜかれて中川のあふせもたえてあた涙をたつ

懋地象

人とれすちきりしたうたて我心いられにもろ名そうき

世にもれしうきな人のことにてりやゆかむ中を悔しき

懷人絕戀

すてられしうらみにたくわ下もえの煙はよその風にたくへむ

かりゆく心もしらて怨みさへ空たのめなる人までぼうし

かくとたにつたふる人のなかりせは怨むることも中やたえなむ

顯後悔懋

雪ふれは煙を添て世のためといそく心もみれのすみかま

なかめやる限りやいつこ白雲につく野山の雪の

このあさけも檜原も埋れて雪より外の山のはもなし

逢坂の欄の往来も見えぬまでふり積雪やとさしなるらむ

明やと路の鳥の夜をこめて雪の光にはやも明らん

雪朝眺望

降ばれて雲間の月の出るよりひかりあらそふ峯の白雪

月かけもつもり積るかとばかりに光りを深きよばの白雪

關路雪

小夜ふかくつもれる雪れ覚して音にしらるゝ竹の下をれ

月前雪

降つもる雪の光にのこる夜もしてあけゆく野のかよひら

ふみ初てゆきこそこのけつもれるまゝの雪の通路

このあさけ待らん人の心をもとびゆく道の雪にしられぬ

深夜雪

あすばまたいかにつもらむあさもよひきのふは泣き庭の白雪

行路朝雪

雪逐日深

ゆき踊るつばさも見えて月影のあかしの浦にちとりなくなり

肥後文獻叢書第二巻

わすれむとおもふもおなし思ひにて心にさらわ俤そうき

忘れてさつみにもゆかていつまでか世にのえの道まよふらむ

神もしれかばすこよびの新枕末なかれとちかふことばか

おくふかきもして戀のしるへた人にたのむはかなさ

逢誓懋

忍ひつゝまつ夜の床は音せしと積る塵たにえこそばらばね

馮媒戀

つらくともいかにかこたむ思ふことしらせて後の中ならばこそ

忍待戀

しられなば中(うきやまさらむと思餘りていひそかれぬる

不言戀

あかすなほいま一よりと夕日影入野分ていそく鷹人

不出言戀

埋火の光は春のいとゆふのあそふと見えずねやの長閑さ

野鷹狩

山み雪しのきてやくすみをおもはやすきれやの埋火

爐火似春

米とほく嵐も見えてかまの吹く小野の山もと

向爐火

八四六

吳淞園歌集

してふさへかればて、霜にとらたる庭のあさちふ

秋に見野のちくさも色かへてあらぬ枯生の霜の寒けさ

閑庭霜

野霜

こえてこしあとは時雨のするか路やふしの裾野にそめくれる

駿河路を過ける跡に時雨の雲の見えければ

このさとはふるかうちにも朝日影さすが時雨の村雲の空

露のぬき日たって霜のなれやにしきたけさはおれるもみちは

露にうすく箱に色こく染なしてにしきみさらすのもみちば

朝時雨

うすくこく時雨にて紅葉はのにしきおりかくばたの山

紅葉帯絹

色をわく梢も見えす露のちほに染るきくのもみちは

山の紅葉を見て

色へむのちのちとほの初入やまつむらに染るもみちは

ふもとには木々をのこして姫のいそく手染や峰のもみらは

紅葉深

紅葉末過

またやみむすめる影さへ所さへこよひ稀ならむさしのゝ月

めければ

油とほくやすらふひまも涙の上の月にうかれて千鳥なくなり

八四五

枯のこる青葉とみれば冬の池のあしまののうはけなりけり

月前千鳥

落葉せしもりの棺にすむ月の影あらばなるよばの寒けさ

ちりつもる木のにも深き箱の上にこほりてすめる りの月影

蘆尚水島

空にすむ影をうつして山河のこほりてみかく月のけさ

さむけしな宇治の河瀬の代木にいさよふ月の影もこほりて

森間寔月

かぜさやく音さへたえて池水の氷にとつるあしの箱かれ

池水の汀にたてろしのばのさやくも寒き霜の朝かせ

河上寒月

風にちもみちた交て落くろやいともばえある流の白浜

あらしの紅葉やちりぬらんとなぜの瀧の水のくれなゐ

うすくこく風の心に吹ませてもみちに染流のしらいと

霜かれの草にましりて見し秋のかたみにのころ庭のしらきく

瀧落葉

庭殘菊

三の徑れてのこれる一もとの菊さへいまは箱の下くさ

さやけきたいつにたゝへむ秋も夜も月も最中の名にしおふ影

なかめこし秋やいくあき月ばからて老の友となるらん

秋といへばこれや友とてよなくにむかふ心なりやしろらむ

最中月

あたら夜の月のなこりなさそひくるあらしのたちの暁の鐘

月秋友

いやらてちたびや千度月にうつか砧の音のさやけさ

よそなからきけば心もすめるよの月にしてうつかさ

月前遠鍾

月やしる月はかばら秋をまたかさねる老の心ほそさた

月前擣衣

のまに見影よりも村雨のばれて更行月のさやけさ

ばれてこそひかりそまさろ過てゆく一村雨は月のためかも

月前幽情

さやけさのいつくばあれと明石かた月もところの名にや澄らむ

雨後月

世にしらぬ哀そへて木のまもる月み山の秋のよなく

海邊月

深山月

ひさかたの空ゆく月も所えてあかしの油の名に照らすらん

稀にむさしにまかりて九月十三夜の月のさやかなるたなか

見よや人こよひの月のみたすしてみちなむとする影のふかさを

めくみある世なか月に出てきくもちとせの色やみす覧

八月十五夜は三秋のなかは月もなかなる名の月としてやまと

もろこしのむかしいまわきてめつるうへ也又我朝にては九月十三

夜更に後の名の月としてみちさるかけためてしむろはふかきを

へや世にほとこぜるかといともかしこくおほへ侍る

露に色をかされて匂ふまかきのきくに秋を久しき

秋ことの色もかはらて長月のかさしに匂ふ千世の白菊

つもりてばしつくも花の下水となるてふ千世のきくの上の露

同野の草葉の露もちよの秋に契りてむすびわくらし

菊久

戻っゝくきれのきくの花のかけうつるもちよの秋の河水

菊 露

影みてる名よにめてからやまと見はやす秋のなか空の月

河邊菊

ろとも名ぼくもらした秋こよびばれてる月そうへなき

三五月正

~.

名月時

八四四

秋はまたしと思ふに小男鹿のなくやみ山のもみちする頃

呉淞悯集

一つらはたか玉つきやうすゝみにかきけすかりの夕暮の空

なきつるこゑにきこえてゆふくれの雲に消ゆく天津かり金

深山鹿

ひとふたつよまんとすれば秋霧の空にかきけつかりの玉つき

たまつさを誰とや忍ふくれの霧のまよいの天津雁かれ

暮天雁

あふくそよ夜さへさへ幾千せてもらぬあきの秋津洲の月

霧中

くれかゝるさとより黒霧こめてやとりにたとろ秋の旅人

なばの雲のうちなひき田面色つく秋の夕かせ

にいまさきやはのころ野への草花てふ花の色をつくして

かせそよく軒はのに音そへて過るもさいし秋のむら雨

花

秋の夜のなかき思ひやのころらん朝けの風のわきて身にしむ

明とや妻こひて鳴鹿のこゑもさひしくさそふ朝かせ

まつにうき雲吹はらふ秋風のあとさたかにもみれの月影

名所月

八四三

夜かされ光りもそばむ空にまつ影ほのかなる秋の三日月

峯上月

月おそき山田をひとりもるか友とや よふよいの稲

三日月

物おもふ心とふかくおきそふるまくらのうへの秋のゆふ露

田上稲妻

ふる郷やいまは野となるくさむらにおのれ仕えて鶉なく也

夕露埋枕

おのか名に人やとひこむ山の心にもに松むしのこゑ

故鄉

みたれなくこゑたばいかてきゝわかむおほかる野の蟲の聲々

出家蟲

れにたてゝのよなくなくはいかにつれなき妻やとふらむ

野蟲

山遠みふけゆくよばの腕の音をあらしの末にきくそさひしき

大江山みれの嵐のふき落ていく野をわたるさなかのこゑ

夜 鹿

秋のせのやとりとなりてのはのそよく夕の音のさびしさ

降とてもあふよさはらし村雨の空よりうへの星のちきりば

あまの河なかれてたえめ涙をかけて幾世の星合の空

七夕雨

ふてふりにはあらぬ星合も何そばかこつ天の河霧

七夕祝

別れ路のなみたの霧の玉くしげふたよともなき星のちきりば

七夕霧

このゆふへ天の川風吹からにより羽すしきかさっきの橋

七夕露

くれまをさそなひさしと七夕の雲のはたてをながめらし

七夕風

星合の影もさやけし天の河月のみふれの涙にうかひて

七夕

吹ばらふくさ木の外の露なとたもとにのこす秋の夕かせ

なくてふく草木もある秋風の露やは拂ふ釉の夕暮

七夕月

秋夕風

大井河いせきもなつはとまらていく瀬の涙に秋やたつらむ

肥後文獻叢書第二巻

あびきするかたはいつこそ秋霧のうちにゆるあまのよび

朝

みなへ誰にちきりてまつち山みたれてたてる花の姿は

河邊霧

たかためにに露をよそひて女郎花なまめく花の色やみすらん

山女郎花

しめゆびて見世もある古郷の森におきふすさを鹿の

女郎花

小男鹿のかよび跡や秋の野の森のにしきの中をたえる

故郷萩

枝にみる色はかりかはくむ袖のかけさへ匂ふのした露

野外萩

はえありや花もおもけにおく露のひかりみそふる露の玉

萩映水

ふくかぜの音ばかりにくる秋の色も見するのはつかせ

萩露

欧風のすがたも見えて秋の野にまれく尾花の神をひまなき

春日野や春はわつかに見草の尾花おしなみ秋かせそふく

初秋萩

野海

八四二

呉松闒狀集

はかなしや身を夏むしのたくひにてともによるの鹿の思

うおきしぬしやたそかれしら露の結ふ垣根の花の夕顔

夏

垣夕類露

あくろよもしてや木々の下にさつのとも影のこらむ

しかまつと幾夜かされて五月山峰にさつかのともしさすらん

曉更照射

なつははやおいその杜になく蛹のこゑも涼しくかよふ秋風

連夜照射

夏の日のなかきもあかす せみらくる、棺に壁しきるなり

晩夏蟬

枝しげきのかけに身ないべてなくも木ふかき空蝉のこゑ

日暮蟬聲急

五月雨はやゝばれてしも程なき た雲おこる夕立の空

林下蟬聲

すの外にふくもおもにすすいしさを肩にまかすのさよ風

夏天象

閨中扇風

ずらしさはまちえと月の高根より神におちてる夏の夜の影

月光落夏

八四】

秋來水

秋きぬと夜のまに結ふ玉笹の葉分すしき露の

心からけさばあつさも夏衣吹とばかりの秋のはつかせ

早秋曉露

夏衣きなれしまゝにこのれぬるあさけ涼しきあきの初かせ

秋風

きのふけふ桐の一葉のちりしより世に吹かばる秋の初かせ

初秋朝

けさはまつ音のみかへて吹風萩やとりに秋やきぬらむ

このゆふへまたきに秋やかよふらんみそき涼しき杜の下風

御する川瀬にうきばなかしてもなかれ老の涙をよりける

杜夏

なにそのいばおもひに岩間より出て螢のよろばとふらむ

さらてたにあけやすき夜の闇の戸を何そばたくなるらん

夏蟲

夏鳥

かび舟のか時とや大井川なみにうかれぬ篝火の影

對插問背

毎夜鵜川

入をまち出ればば月を山かけにへたて幾夜鵜舟さすらん

連夜總川

おのれ

うかひなき頃の河つらに月になるほとやらかしとうかび舟川瀬をくす篝火の影

鵜川篝火

まといそく鵜舟や大井河くたるはぼやきせの篝火

夜川篝火

幾千町うるや田子のいとまなくとても盡小田の早苗は

鴨川篝

いそかわる田子の心や五月雨のばれておくての早苗とる他

早苗多

早稲おくておなしみとりの若苗を千町をひろみうる渡すなり

雨後早苗

さゝなみやしかの海つらふく風にてらす螢の みたるゝ

探早苗

飛ほたるおのかひかりにゆく水の涙のよるへも見えて涼しき

湖上流螢

肥後文獻叢書第二巻

篝さすらし

ならしばしける棺をとりいれて月さへうとき夏の山里

すいしさに外山も深くなしてしつかにむもふ夏の夜の月

山家夏月

吹なひく竹の分に影もれて月を見せたる風のすゝしさ

外山夏月

あつき日も入江の涙を出て夏をわするゝ舟のゆふ風

竹風夜涼

すゝしさは夏を忘れて日くらしのこゑもおちくる杜の下風

夏としもいばねの松の下かけにまちと石風の袖のすいしさ

船納涼

たくへ見むこそなけれなでしこの色をつくしてるまかきば

樹陰納涼

ふるさとを思ふかうへにしのへとや旅のとこに匂ふ橘

花

これもまた色こそ見えれる森に香やばかくろ風の橘

旅宿橘

きのふしもけふばむかしと明る夜のなこりゆかしく匂ふ橘

夕橘

たか釉ふれしむかしの名残とて身にしむ斗匂ふ橘

曉更

八〇

きたかにはいかゝきかまし五月雨のふろにまきれてなく時鳥

さとわかめころとや名のる時鳥ふのにしのふともなし

五月時鳥

むさし野やかきりもしらす鳴て行末はいつこの山ほとゝきす

きたかにはいかてきかましほとゝきすあら磯浜の音にまきれて

名所時島

なきすてゝいつくにゆく 時鳥天津まのよばのひとこゑ

海邊時島

雲間時為

もれ出る月見よとや時鳥霊のたえまの今のひとこゑ

おもひれのさめなればそ時鳥きくもくらさぬよばの忍び音

めなるさめともしてやよひに鳴てゆくらん

雲外時鳥

一聲はゆめかうつかあかつきのれさめほのかにきく時鳥

镁覺郭公

管のまばなにを忍びて時鳥明かた近き空になくらむ

ほとゝきすいつの習に待わふる我にけうとき音なるらん

いつまでかなかてつれなき時鳥まつにこのよも明かたの空

曉開時鳥

時鳥なれたまつとて花に染し心もいまぼうすくなりゆく

八三九

水上整

くるより光そしろきかけろふのみの草葉にすたくも

飛火てふ名もこそうへや夏の夜のみたろ、春日のばら

草ふかき野中の水に飛釜もとの心をしりかほにして

月になほまつもうからし夕闇のをてらしてとふかけ

あつめつる世をしのへとや今も窓ののひかりみすらん

野笠

ちかたためくりくて夕立の行方はよ所になるかみの空

つきよそに過行夕立の風にこなたのはしわすすしさ

あま衣ほすまもなみのひさし久しくはれの五月雨の空

遠夕立

さびしさになれてすむ身も五月雨のばれぬ日は久しかりけり

按五月雨

閑中五月雨

とちはつる雲にへたて有明の月夜もくらき五月雨の空

五月雨のふろ屋の軒に たえのおとそさひしき

さして世にもとまれとふり出てなくや鈴鹿の山時鳥

夜五月雨

鈴鹿山をこへ行頃時鳥の鳴ければ

けふの日は暮ても更にをしむそよ曉までを春とおもへば

しみこしけふさへ暮て行春のこりは空に有明の月

影うすくしむもくれてゆく春の名殘斗にあり明の月

かけうすく選山かつらゆく春の月にかけたるあばれたそ思ふ

かすみつとうすき影にもゆくぼろのつきめなこりは有明の月

三月夜

さの字かしらにおきて春のうたをよめとありければ

まち散る惜みて春ことの花は幾世のなかめなるらん

暮春月

うつし植しその宿からや布引の滝の名たかくかくる藤沢

子の許より花に布引やこにうつせは瀧の名の音にも

ため花のふちなみと和歌を添ておくられける返し

春の日数もらて松かに色そひかる花の藤沢

てゆく春にさかりの藤のはなすより後は夏かけて見む

常盤なる松のみとりに紫の色をかばしている藤沢

暮春藤

いっくよりしたひきらんころの苗代水にすたく蛙ば

春ふかき池の水草にかくろひて壁にあらばに蛙なくなり

松上紫藤

水邊蛙

分袖さむからて夕暮に色のみ雪とまかふ卯花

待島

夕月の頃ともいはし卯花のかきればかりは有明のかけ

月影のうつると見えて夕門のころわすろ、庭の卯花

空にすむ月ならなくに夜よしとも思ふばかりの庭のうの

行路卯花

ひとすちはゆきかふ人の跡なきやしけりそ残す野路の夏草

卯花似月

生初春おもへば程なきにいつしかけろ野の夏草

野徑夏草

めつらしな秋もまたて出るさゆりの花にむすふ朝露

木しげみ朝日かくれの夏草にむすふもすし露のたまゆら

夏草

雲とみしだかれの花の色きえてみとりにつきくたちの山のは

きのふけふもばれて山とほく見ゆるわかれの色をすいしき

夏草露

れよとつく鐘をきくまもなつの夜のあくると告てとりの鳴なり

みしか夜やまつとはなしに出る月のあとよりやかしらむ山のは

遠山新樹

夏曉

八三八

たにたにちりゆく花を惜みつゝいかに嵐いとひきぬらん

園歌集

なべて世にちろてふ花のなかりせに暮行を誰か惜まむ

この宿のちょかされて出る花の春てふばるに契らん

惜落花

千代萬世々の春にもへたてなくさくら雲とみよしの山

花契多春

ちらぬまになにとて人とはさらむかやか軒端の花のさかりた

寄花祝

ちれば咲花よりはなの木のもとにあかて幾日か送りきぬらん

依花待客

花下送日

のとけしなけふはむかひて見る花によきよと思ふ風たにもなし

四方はいまさかりを見せてからこちのおなし櫻の花の白妙

さくら花軒の山にさく頃にたちの高根も雲そかかれる

静見花

さそふなよいくかもあらぬ花盛あらしは山の名にしたふとも

遠近見花

むらきえの雪かとたちに見ゆる也かすみのひまの山の欄は

なかめやる遠山もとのさくら花それとばかりに霞へたてゝ

山花盛

行みちもえそいそかれぬ山ふきの花にとまれといばめ色かば

八三七

影うつす涙さへ匂ふ山吹の花のかたみや玉川の水

なかれゆく春やとめて川岸にさく山吹の花のしからみ

路山吹

ゆたかなる秋をたのみに稲ふさの山田にふ苗代の水

さくらちるふもとの小田に風おちて花の涙たつ苗代の水

河山吹

物思ふ頃ならともかすむ夜の月こそ春のあばれなりけれ

月よ花色もひかりも長閑にてあくろ夜あたら春の一時

春山田

春の夜やいつくばあれと名にもにすかすむ明石の浦の月影

さくなみやよるへも見えて月影の霞をはらふかの浦かせ

春 夜

くり出すすかたはいつこ春の日に乱れてたえぬ空のいとゆふ

浦は月

はなの雲きえていつしかあさみとりまことの色をみよしの山

晴天遊糸

雲と見し青根の色治てよし野の川の花の白涙

花落枝緑

花浮水

梅花まつ喉初る山さとはかれし人めら春になりゆく

人とは松の香に匂ふ梅さく頃はえこそさられぬ

長閑さばたくひもなこの浦とほくみるめかすめる春の曙

山家梅

のとけな梅の色香~ふかき江にかすむなにはの春の店

八重たちこめてみつしぼり入江長開き涙のあけぼの

遠浦春噌

さらてたにふけゆくよばの春雨に軒の雫のおとのさひしき

ふくる夜の鐘のこゑさへうちしめり淋しさそふるやの春雨

江春时

草木もおなしめくみにうちしめり緑色をふ春雨の頃

春雨夜靜

さえかへろあらしや冬のしがらみをかけてそ氷る春の山川

とけ初氷もまたそ詰ふなる春ふかくらめ池の心は

春 雨

冴りも所にふく風のまた雪さそふ二月の空

天の月もまた雲とちてふる雪の空はさなから春としもなし

餘氷

除雪

春きや野逆のそことなくわかな求る袖の寒さ

肥後文獻叢書第二巻

花はよしさでもなにと思ふこそまつにあまれる心なろらめ

遠見花

月かすむ夜半にとりて踊るやとりいつこに有明の空

花の色に心とめしといそくらんよふかき空に帰るかりかね

待 花

名あきや雲路はるかに踊るかり見送くるかたに馨にのこりて

あまつ空霞分てはるくと見えみみえすみ帰るかりかね

夜蹄

さくやこの花折そへておくろそよこれもなにほのえにこそありけれ

歸雁遙

難波より携来りしものに梅花折そへ人に贈るとて

めくみある人の心をくむさけの匂ひも深き花のさかつき

見せはやとおもふばかりなさかつきに添てそおくる梅の一花

御返し

折てこそ色さえ香さへえならすよさそなさかりの梅の下宿

清源野

梅折ておくられし人によみてつかはしける

きえのころ雪かと見した折てこそ色もわかえの梅の初花

さく花のさかりやいつこなすのまたもくる風に匂ふ梅が

吳淞園歌集

天の戸の明るひかりにいとはやも春しりてかすむ山のは

遠山设

色に香になれもあかすや葉の春の日くらし花になくこゑ

なかきひもやゝくれ竹にうつりきてれくら鶯のこゑ

梅はまた匂はやとのくれ竹に春そとて楽鳴うくひす

花問鶯

あけぼのやおのかなくれも名にしあふあしたの原ののこゑ

竹裏

雪はまたふろすなからにけさははや春そとしりて鶯のなく

きのふけふくるからになれもきて囀や時におくれぬ

春きといかて知らむにまたふろすなからの常の整

朝聞

きのふけふや吹きわたす春風にとくる氷の池のさゝなみ

驚知春

ふくもげさやばらく春の初かせやおと長閑なる庭の松かえ

雪霜にとけて今日もくる春に色をみとりの松のひとしほ

春風解氷

松迎新春

神津かせふくも長開に立春のかすみに匂ふ涙の花

八三五

異くさばまたかれの春にもえてまきれぬわかなかそつむ

求若菜

これそこの君におもの〻ばしめとやまつろわかな成らん

摎若

幾千世をかけてや春のけふことにれのひの小松ひきも絶せぬ

ふくそとばこと木に見えぬ春風もなひく柳の枝に知らる〻

くりかへんなひくもなかき春の日本風にまかする青柳の糸

いつる日のひかりのとかに世ばなくて今は敷島の春

山姫のたもとゆたかに立初る炎や春の霞なるなむ

柳隨風

のとげさを霞に見せて佐保姫の春をよそふろの山まゆ

きのふ今日雪ふる野へもからいつしか春とかすむ通路

道とほみいとゝかすみの春ふかくとけていく野の末たとろなり

霞添春色

山さむみのころやそれと白雪も霞にきゆるたちの山のは

春きとまつ遠山にやまひめの霞のかけて見すらし

行路霞

あら玉の春むかへてけさばせのみつのはしめとふ諸人

けさとへは高きいやしき程に春をむかべて祝ふ長開さ

今朝ははや氷をいてふ手も心とめるむ春の若水

元朝

秋にみむ民のみつきも降雪のためゆたけき春のはつ空

立春水

春のこしけらめを見せて今朝ははやそれと斗に空をかすめる

いつしかた春やたちけむ朝霞たなびきてのとかなる空

立春雪

ふゆかれのこするにふくもやばらきてけさやこのののはつ風

立春霞

吹きなびく柳の糸にくる春の風のすかたも見えて長し

けさははや過行年と立春の空にわかる峰の横雲

わかるものとかに峰の横雲やけさ立初る春と霞に

立春風

今朝はや日影のとかに天津空かすみも春もたちにけり

立春

呉淞園歌集

肥後文獻叢書第二巻

松浦潟なみのちさともかすみつゝもろこしかけて春や立らん

ふくかせもけさはやばらく音羽山こえて都に春やきぬらん

うこきないぼくら山の朝霞たつや都の春のはつしほ

初春海

ふる年の雪はらひし旅だけさ立春のそのとき

都初春

月も日もすゝみおくくれす今日といふ年の初に春はきにけり

中立春

また日数のこれとあら玉の年のばしめた春といふらん

元日立春

今年より猶やすらかになからむと唱ふる御代の春はきにけり

あめつちとともにせめ萬代の君かめくみの春は来にけり

寛政四年試焙

あまさかるひともいばす君が代の悪もらさめ春は来にけり

去年の冬改元ありければ

老の身も今朝はおばせぬ心哉わからへろてふ春をむかべて

安永二年庚戌試筆

やすらかになかき御代とてみちとせのを始めの春はきにけり

安永三年元朝

君のりにふれて混ぜひわるか、姉君のかつかつもひろひ

集めて、もの拾ひしなり、されと父君は御歌よみおふことにか

つくかいやり給ふのみにて、詠草なんといふものし給ふこ

となく、そのころは兄君も姉君も、いたくいとげなくましましゝ

ほとなれば、書きとめなんとし給ふ事もあらずして、みうせ給

ひのちにべて、過ちびる色紙たにさくなとやうの、ま

此典は

ひな人の油にふろもかしこしなおほ内山のの春風

公なり

院の御門の名つけ給へりと年の春風でふ香木を

殿より給へりしかしこまり申しにみて奉れる

追加

山河を読みさやけみ萬代にしらさんとてそさためけらしも

玉ほこの道の八十隈ふみみすばいかてかふかき悪あらめや

書くらのようつの文の巻々は君かへむ夜のかすとなすらむ

萬代のもとびたてしたのしみにおひの心もさかゆなるへし

て、七首の歌をよみ出たらは、七十の節によそへてなむ、

和歌

八

先君子歌集終

宇野風校

天保の三年の春

こ

君のみつからものし給へりと御道の犯に、ぜひねれば

にはふきね、

すべなし、また文化の十四年に、都へまうのほり給ひしの歌

は、神の守りてふ、

御歌こそさばかり多かりけめ、いたく口をしけれと、今はぜん

れらにりたるより、かつくとものしびれば、

惟治

神山にけさしもみゆるしら雪にきみまちえたるひかりとそしる

いろかへぬ竹のみとりに手なれては千代は心にまかぜさらめや

大人たちにたてまつれる

紅に八重たつ霊をそめなしてあさひのかけそにほひそめける

竹の新居何かしののそみなり

たつれこしけふた千年の初めにて屋をしもそ長くとはなむ

朝の雲ひにそめられたるいまた出ところ

雪のつもるひかりのあらばれて袖にかくやく君が玉もの

にか〉やく君が玉もの

春たばしげき小松のわかみとり今一人の色をそへなむ

しらす

みな人をまなびの道にいさなへとたからたまびし心わするな

神ならふ御代たふとみて蔵部子は人ならふよのさかにうつるな

和歌

かのつゝれの袖につゝめるはなほ忘れ難くて

くれ竹のなほくふしある心より花にうつらぬ色そみえけり

移る世の花にならばねの返し

天地の神もあばれとめて今老ふ水もわかなむ

雪の中に開得たりの返し

宮河の水のなかれの年へても遂に曇らぬかみそしる

若草のつまの鏡との返し

肥後文獻叢書第二巻

風の守より文庫つくるへく、山みつのきなかれたたまぼりぬる

を、うれしみよろこびて、歌をよみてこゑしれるともかきにおく

り、ふき歌をこひもとむとて、おのれなさへそのかすにくはへら

れて、とほく女かよぼして、その事物せられける、よろこび

おもひてうひまなびのたとくしきをもわすれ、その歌にこだへ

海量大德の七十のほきなるに、去年の夏のはしめつ比

契り置きて松の葉かするかそへつゝ君がよほひの程をしろ哉

ことし八月の十まり四日の日に、

七十の春の千年に別そゑて相おびる千代の若松

分する山路のもみちかへさにはそて照斗染やましなむ

ぴのこころを

いさこともおほにな思ひそ末つきてみかけよとしも積ろみゆきた。

九月十一日熊本にまうつとて、また夜をふかめて、祠室にまかり

申にまうてたりしに、雨のふりければ、おまへなる木にて、

かみたちのめくみの雨にたちぬれておほきのもとによるそうれしき

蔵部は谷といふところにてさくらの一木二木もみちした

みて

うひまなびのともに

かみたちのみたまたすけししら雪のふりしたさとすけふ哉

みつからよりこびて

五月雨のあらそひかれて咲きそめのあばれとみよ

五月はかりに庭の萩咲出たるみおしておくるとて

打なひき春さりくらし別の山にも野にもかすみたな引

夜のほとに軒はの梅や咲ゆらむまと吹くかぜの今朝はかれる

題しらす

手折つるこき紅の桃色に君ころのふかきみそしる

梅

玉とみし澤ののことの葉はおなしひかりに夜をてらさまし

朽木昭恒のもとより緋桃をかりておこしたりければそのよ

ろこびいふとて

そめてますらな

人々の歌をみて

すそたふとき

梅ににほひあばしゝやかたをのましろのたかの来居もするらん

相おひの友とみきりの松かえに契る八千代のするそ久しき

鷹梅に居識

もりちかす山田の庵のいなむしろしきても人にあふよしも哉

色も香もしろくそにほふ梅の何か文なき春の夜ならむ

八十賀に

神風に心にかゝるうき雲はらひつくしてかへるうれしさ

眞情を桃のその生に立ことさらにみかきそへなむ春のひのひかりにあたるまとのしら

八三一

あら玉の年のひかりの御返し

津ののこやのののひに釉われてたゝいたつらにまつか久しさ

生けるゆきののふの日かすべてたゝいたつらにまつかくるしさ

輪へおくれる父のしたかき

玉の緒はよし絶えぬともますらかのやたけ心にしのひてそふる

忍待戀

なみの花咲けるかみればわたつ海のあなたはまたき春や立らむ

望春々未到可在海門來

吹風にまと打雨は木の葉にて眞砂は霜と見ゆる月

幾千代のよはひかへなむなれくと魅とまつとに契り置きては

葉聲落如雨月色似

水無月の照れる夕日の影さへものきばにちかきいろそ涼しき

と松とかけるに

ならすてのうちより秋のかよひきつれに涼しきのうら風

声のかけるに

君かわか釉れて打よする波の原に折しばしそも

扇に歌がきてよと人のこひければ

波野のすきにでものせし者をおくるとて

なか月の時雨の雨のふることを思ひ出には釉めらしつき

海浜

のゆかりの色の萩の花きみにみせむと手折てそこし

きのふなむとむらひし人の身まかりにければよみて遣しける

逢みつるきのふたつひにゆく道のわかれとしもはおもにさりけり

木ののかけと炙り置きてあとなくきゆる人そかなしき

五月十六日夜夢歌

五月雨のふるにつけてもいとしく袖のなみだのひまなかるらん

照月のかけさへわかす更る夜におもふやみちを思ひこそやれ

消えにける小萩の名残には軒にしのふやなかめわふらん

まかつみの神におほせて嘆くともなほはてしなき恨みとふしれ

よるの露あしたの風を心して老木の松よおもかぱりすな

阿蘇山の下津岩の岩はしらうこかわみよの守りなりけり

堀めしによみておくる

八千年のこゑもたかれに名のるなり宮のたつの聲のゆたけさ

まちえたる君か千年を諸こゑに宮のたつのなきわたるなり

岩かれのこりしく山もおのつから安く行きかふ神の御馬代

社上鶴舞山も有

肥後文獻叢書第二巻

神 馬

題しらす

千さとへてかばらすにほふくれなゐは人のころの色やそふらむ

七十の跡のよばひそはるかなる神のみわまのに契りて

鳥の跡をまなひにはふ虫はうらみの秋のしるしなるらし

おなしくのお花をおくる返しに

に

八月六日むすめのくすの葉に虫の文字かけるをおくる返し

朝ぼらけかすめる袖の春風にまたふみわけよ峰の芝草

玉くしげ二重の山をこえしよりそなたの空をながめてそふる

にしきかけにそむるもみち葉にかへる秋の色をみすらん

仙人のおる袖にほふ菊のまくらのちりをばちふうれしさ

題しらす

きみ日風の氣にておはしけるに、 けふ賜りたるいろ(のき

くた、 やかてみ枕のへにさしつき見めて給ふを、みまつるにつけ

て、此菊のめてたきためしに、君の御心さしのそばりて待ちまし

かば、ほとなくおこたり給ひて、千世も拾ひなんことく、いと

よろこばしければ、

十三回周忌

立かへる月日につけていとまたわすられかたき音はなかれけり

いまもおもかけにして見ゆる哉君にわかれしの空

八三〇

歌

神無月時雨あへ比なから神のみ山は雪ふりにけり

春霞立わかるとも吾兄子は面かばりせすわれたしまたされ

かし

惟

つかへこし神の社にみわすゑて早かへりこといはひてまたむ

十八日山には雪の見えければ

阿蘇大宮司の館にて一日一夜かたらひ明して眞幸

阿蘇山ののしら雪打とけてかたれるよびばあかすもあらなむ

明るひかのたちを立出てわかれ行くとて

今朝はまた雪そ

手折けむ心をそへて梅の花世にいびらぬ香にそにほへる

啓蟄は此里もおとろくしく侍りしに其後一日二日は暖に侍し

にきのふよりは風またさえて雪も物うきばかり侍りぬ

椎馨

の啼きて移りし宿の梅が枝

あら玉の春のひかりにさそばれて梅咲くのきに来なくうくひず

梅を打て

惟

手折る人のころも花の香も君ならずして誰かしろへき

御がへし

わかれにし秋さりくれば行水のかへら君をおもひこそませ

朝日影にほへる花のおもかけたかたみにみむと思ひかけきや

鷲を聞て

天地といやとほなかくあふきみむ朝日ににほふ花の面影

八二九

久かたの天津みそらに飛たつのさやけきは我聞つる

打わたすまゝのはしつきくにたゆることなくふみかよひこね

散かゝること葉の色のはえなくて人のみらむもやさしかりけり

さしおほふ衣の袖の神垣にかけていばむ君か萬代

和歌

手折つる紅葉の色もふかけれと志さしにはなほしかれけり

心さし深く染めてそ手折けるもみちの色はよしうすくとも

御かへし、

花のあるならすば我もまた香かれる雪と見てややまっし

紅葉を打て

手折る人の心や染つらむ紅ふかくにほふこの花

うるばしき君か手折し梅の花分けて色香をあばれとそ見る

雪とのみ見てややみなむ春風の梅のにほひをさそばさりせは

御かへし

獨のみ見てややみなむ我宿に紅にほふ梅のはつ花

かへし

黒はきのふんげふもなる神の音にのみ聞く峯の白ゆき

雪の御歌程こにはめつらしくとて

みそきながる水の絶えせする我はかよはむせみのいほりに

社頭祝

みそき川清きなかれに案しめてみかく心にちりも曇らし

常にもよるひろわかす行くものはかくこそあれと君やみるらん

眞幸か歌はみやひか也そば

阿蘇山の谷より出つろうくびすたことにありやととふそ嬉しき

きらき三日川亭にいたりて

阿蘇山のの白雪ふみ分ではしくもことにきます君かも

和田の神ちまたの神にたむけて旅の長路を安くゆかなむ

ゆらに玉のかす(つゝみもてかへるのにしきたそまつ

長瀬眞幸とひきたりて

花のかの露のひかりも移ひて朝日ににほふの

打なひく春の色とて青柳のみとりの空に遊ふゆふ

おひの契りかけるのはしめにてみとりも深き庭の松が枝

微湛法師のうまのはなむけによめろ

萬代もかはらぬ色や玉くしげ二みの浦の波の白ゆふ

題しらす

吹かせに打そへてよる涙も千代をしらふる住吉の松

二見浦

本居のうしみみつからかき給へりし御像のまへにわかつきて

なかき世のかたみにみよととほかゝみうつしゝ人のかけそ戀しき

もみち葉のちりに秋をしのふにもひとりのみふる涙をはしれ

山の端にかたむく月の影みてはつくしの空とおもひおこせよ

本居のうしのみうせ給ひて、またのとの其日に、大人のみつか

らかき給へりし御像をかけて、手むけすとて、 長瀬ぬしのよみ給

ひなん見せられけるに、おのは心の外なることによりて、こ

とさらにそのむしろにつらならぬことのうれたさに、ぬしの歌に

こたべて、いさかのへ侍る、

みは

おもふこと身にしなければ暁のときの溺れかきよそにこそきけ

みやこなりける人に

宮はしら下津岩根にふと敷てつかへまつらむことをこそおもへ

うるはしき君かしへの神風に世の人くさやみな磨きけむ

萬代もあらぬ心にまかせてと君をそいのる常盤かきばに

題しらす

たくひなき君かめくみの深みとりから水の千代もすまなむ

時は今君かこゝろの春風になびく草木の色の長開さ

川尻の御かりやにまうのほりける時よみて奉れる

神祭るけふを千年の始めにて契るも久し瑞の前

新君拝神社

夏山にともすほくしの影みてもまつしのはるみつの狩くら

いにしへの溢れる世の面影を春の野飼の駒に見すらし

照射

そろひさす御とに向ふ前にきみは八千代の春いはふなり

社頭祝

くさく

あしひきの山風寒み啼鹿のおなし思ひにいこそれられれ

坂の路へたつる朝きりのばれぬ思ひに年や經なまし

寄鹿戀

月夜よみ君もやくるとほとにきくすばとよみかけに啼なり

寄霧戀

すみの江のうらむとなしにいつよりか心によするわすれかひ

すみの江にありと聞きこしかひわかかたにしもいかてよりけむ

我がたにしけりにけりな忘草の江にこそありと聞か

寄月戀

まちつやといさとふらばむ妹子が庭もさやかに月にてるらし

久かたの月のみふれの桂かちかけても人をわたるかな

住吉

と唱、江チとほつあふみ下唱ルカ如シ、

極樂寺天然長老、玉名郡廣福寺 住ノ時、ヨミテ贈リシナ

り、玉名の日本書紀ニ玉杵名トアリ、和銅中郡郷ノ字二字=定メ

ラレシ時、玉名ト二字ニナリシカトモ、訓本ノ たまきな

いまさらに六年かほとの春秋を夢かとのみるおとろかれぬる

二重山こえてゆくとも阿蘇のれにもゆるげふりの思ひろな

玉杵名のひかりつたふる古寺にのりのかみやみかきそふらむ

色見えわか葉にもなほしのふなりきのふぼうすき秋のなかめを

あとふみ芝生の花にものふの心のおくもつみてしるらむ

手折みる人の心のふかみとり千年ちきれるから崎のまつ

なつかしき色もことにそ匂ふなるたひえの山のやま吹の花

くれ竹の千代をかけてもにほふかなきみまち得たる宿のふしなみ

くり返しからぬ藤の花かつらいふ千年のかけにかくれば

平山めしの物せられ四種の草木の歌

しら雲には打ちかけて飛たつの壁高の原にこそきげ

うこきなきのしつめの営ばらくや君かはしめ虎らむ

雲間鵶

吹かせのさえ行まゝに空ばれて黒もさぼらぬ冬の夜の月

松間雪

とばれし人めも草もかればて、末葉のにそこぼれる

山里のあれた庭もふりつもる雪にみかきて月をみる哉

しらの軒の高より出くる月の光さひしも

けふり民のかまとの賑びは雪にうもれめ遠の一むら

遠かたのしげきかまとの賑ひは雪にうもれめ爛にそしる

出家冬月

山のかひそとも見えすかきくれてふかくも雪の積りぬるかな

遠村雪

おもふことわりとはなしに小夜千鳥啼きけはやすわせられす

晴る夜の軒のつらつらくにみかける月の影のけさ

千 島

見し秋の花の袂に冬かれや残る色なき霜のした草

寒 草

たえのけふりはかりやふり積雪にうもれぬ峰のすみかま

冬の歌

夢の朝の霊の別れより夕への袖の雨をひまなき

いろかばる眞葛原の夕暮はうらみからなる秋かせそふく

奇夢慧

みちのくののふもちすりつけふのほそめの年は軽にけり

さしか思び入の花いつしか人の心をもみむ

不逢戀

動

すみの江のきしの松原雪ふればうらばにもがいるしら波

かたしきのとこそげきさやくたかのやかたの冬のよの月

松間雪

水島や立ちくらしきたののさかのうらに千鳥啼なり

みつしほに明石のとなみさわくらしすまの浦わに千鳥しば啼

冬夜月

さやく深山ののさの葉にこぼれる月か獨みしかな

浦千鳥

葉かへせぬまつば十かへり花のおも影みせて積る白雪

冬山家

八二六

君子歌集

ほに出てまく尾花もふる雨にぬれてさひしき秋の夕暮

おく露の色も千くさの菊の花心の秋に咲も殘らす

秋雨

秋も花の色に千代のかすそふきくの白露

久かたのたなびく雲の上にしてあまつとめも袖かへすらむ

立おほふ峰の霧の絶間より落くる瀧の音の涼しさ

菊露

秋風にしへ!玉松のこゑは千年もかはらさりけり

姉きみの御しらへの琴を顕輔朝臣の歌をひきてあげつりへること

ありてよめる

天津かみやすの河みつせきとめて月の御船を渡すもかな

日につけるひかりも湧き月夜にはうるばしみする人をまたろゝ

月

露しげき眞葛原のうらみても秋はつろとやくる人のなき

秋風の身にしますばも、草の花のみて散り過ぬらむ

月夜待友

きみのふさへけふにくれて行く夕への空そいとさびしき

さの葉のさやく霜よのつきかけたひとりみ山の冬のさひしさ

八二五

さゝの葉のさやく深山の月影も君としみれば長閑かりけり

冬のきて峰に残れるまつの葉を分出る月の影を淋しき

ふゆふかみにもみち松風もばれたる空にすめる月影

寒夜月

ふゆの日のなかれてはやきあすか川かく行く物と風や吹らむ

冬河風

ふり初るふしのたかれのしら雪を千年つむべき庭にみしかな

かくよめる此十三日殿の御家とくの御いはびにめしたるにその

日の能のはしめふじの山なりければなり

ありとたにしられぬ宿の庭草にむすふ朝けの霜のさむけさ

おく霜につはなましりの面かけも残らぬ庭のいろのさびしさ

山初雪

心とてばらば庭はおちつもる朽葉の上に置朝霜

置霜の夜寒かされて朝な色かはり行く峰の紅葉は

閑庭霜

むらしく晴みばれすみ行雲のはたて定めぬ夜にもふるかな

紅葉霜

時雨雲

まくすばらなひく秋風露ふけば月のひかりもともに散りつゝ

仲秋月

いさことも露おきそへと秋萩の花のへてらす月かけ

野外秋月

軒てる庭の紅葉は色こきたおきてそいととはみる

にこひいのれられぬに折ならすきぬたの音を聞かさひしさ

庭紅葉

かきろひの夕さりくればばたすきしのに落ちる秋風の吹

開檮衣

九重の大内山の紅葉はわきて色こく染にけるかな

秋夕露

たましきの御庭の露に咲きくのにほひば千世もふりせさりけり

萩の花もとの心をわすれすばかたみに君かむかし戀らし

いにしへをわすれ色に出て露にしぼる秋萩の花

秋の野の花の雫に立ぬれてつまとふの壁の聞ゆる

題しらす

野外

うつら啼夕のそらも静なりあらきの分のふかわ夜なれば

肥後文獻叢書第二卷

たちかへる秋もはかなく幕行けばけさそまさる袖の夕露

秋霧にかくれていにm影のなかめにうかふ夕暮のてら

わかぬきみかためにと折きくのにほへる袖は千代もかはらし

秋夕のころを

和田の原八十島かけてすむ月のこほりかわたる海士のつり船

菊

ふけゆけばしつかきぬたの音たえぬあさの小衣霜やらん

海邊月

詠むればむなしき空の多くの草葉にあまる秋の白露

聞梓衣

難波江や氷の上の小舟渡るや月の光り成るらん

秋夕露

むつましき影とこそみれ衣手にやとれる月のなる光りば

江上月

おく露もにほふ花の色わけて千草にうつる朝ぼらけがな

月前

露すかるわさのいれのぼつかにも釈ほのめかすみか月の影

秋朝

月影のみち行きの中空を御代のひかりとあかすこそみれ

新秋月

八二四

君子歌味

たままつのみかく光やおきそばることの霧に宿る月影

喉にほふ花野の露の色々もひとつに月の影にすみけり

月前松露

天の河やすの渡りたたなばたの一夜としもは何契りけれ

月前草花

に出る秋のはしめとおく露もそよくいな葉にまつ結ふらむ

七夕契

新秋

夏草のしげき道にそまよひぬるいかにかりてばことの安けむ

秋

夏歌

風のかへすくも涼しきはひも夕暮の手のもり

郭公人ならすとも五月雨のこなたに壁を聞よしもかな

夕納涼

かる香に心をさそふあやめ草軒にかよふ夜中の手枕

題しらす

夏草のこときょをよそにみてみやまの庵に月のすむらん

あやめ

澤水のくらきてらすこそよろ光るてふ珠には有けれ

山家夏月

八二三

よるも縮みよとか月の中とろらしたとこかみなの花にほふの

眞葛原うらさひしくも秋の夜の露にふけ有明の月

月影も清き葉分の風の音に千代をしらふるまとのくれ竹

秋野外

まぜの内に月のひかりをさしそへて にそにほふ白くの花

月前竹

月影も夜の露のふる里に風のきぬたのそ身にしむ

月前菊

もみち葉のにしきにあきて山姫の月にさらせる流のしら絲

月前博

月影にたな引雲のあればこそきえぬ光りのよにそらるゝ

月前瀧

月影には打かはしのよ寒をつくる衣かりかね

月前

露しき秋も末の月かけにひとまつ蟲のそ淋しき

月前准

岡へなるわさ田の霧に立われて月にまつとふさをしかの壁

月前蟲

月前

大和歌ふ物は、高きいやしき、時にふれ古文によりて、うたひ

出た言葉になむ有ける、みことのりして撰み給ひしより、世

々にみがきそへて、調の花色まし、筆の林り行まと、いつよ

りか三はしらの神とて、光りそび給ひて、家毎に法を立、たこ

また波のひかりは曇りなき池のかみにてりかはしけり

飛螢うつらふ影の清ければつきもまため水の白波

これも古歌によりて、たかしくうたひ出給へり、

たまとのみのかみに飛養ちりかゝりてもくもらさりけり

右

左

十一番

むすひあけてひるちあかしとみよしの瀧つ河内に整飛かふ

左右ともに、古歌をおもしろくとりなし給へり、

三芳野の瀧つ河内も山水もあかめばおなし波の涼しさ

右

ふ手の楽もあかぬ山木に影さへみえてとふ哉

武士の八十うち川そいさきよきふかきおもひのふちに有れとも

十番

なり、

肥後文獻叢書二巻

よし野かは天津をとめの玉の緒ちにけりなほたる飛かふ

てる月の影をやとして夏ひとへに涼し袖の浦波

春にもおとらぬうらのみるめ武氣にかすむ夏の夜の月

水邊螢

ひも多くに立よりてむすふもあかね山の井の水

海邊夏月

風になったもよそに吹上のまさこのしもの月の涼しさ

夕納涼

久かたの月みるほとも難波かたみしかきの夜をそうらむろ

砂月忘夏

かち枕のわたりの深き夜に今も啼なり山ほととぎす。

海邊夏月

水上郭公

す成にたるや、過たるはさるの理にこそあらめ、ことに難波

津のよしあしあけつらはむは、いとくかたき事にて、雲の上の

みにゆひ折斗にして、ゆるされ給ふ人ましまさすとか、ましてや

つかれことときの、かゝるからやかしきたかいけたんは、あやうく

物くるほしけれと、友かきのゝそみにそのかし給ふを、はつへ

き中にしあられば、笑ばれ草とて、

とにせしより、品たかく道々しくて、いやしきはふへくもあら

左

つくし人のいかてかくまていひおほせ給ひけん、

たましきの光りも加茂の清き瀬も都なりけり都成けり

石川やせみの小川の湧き瀬に玉とみたれて螢飛かふ

禁庭夜色鴨流晩凉、

玉敷の底にはよるもみかは水かふかさきのばし

右

左

右は古歌によりて工みなしたり、とりだしくこそ、

山河のくまもあらばに飛星のはやしに影やならへむ

五番

夕つきのふれ濡かへる川へには螢そほしの林なりける

左は心詞やすらかにて見様也、

夕月夜木かくれおほき山河のくまもあらばに行かな

右

涼しさは岩うつ波のひっきより山下水のしつけさやます

四番

へし、愚意によらば、

水の沫のひかり、いさよふ波にうつらふ影、取の御たくみ

K111

おもひ河思が乱れて水の法の溜めほたるの影そながる~

武士のやそうち川に飛螢いさよふ波にかけそうつらふ

右

左

玉かつらおなしかさしの光にも釉ふるかはや神さび渡る

九番

左右ともに神々しく、めつらかなる御たくみ、ゆうあるべきな

られと、

をとめ于かかさしの玉めきり袖ふる川に螢飛かふ

早河の瀬川姫の玉かつらまち出たりと見ゆるか

右

玉川の光りやまさる波の音の清きなかれも心とまれと

入番

暮とも猶こまとめて水かはむかやく井手の玉かは -

いさこゝに遊びて行かむといひ、暮ぬともにまとめてと、とも

に興ある夕なり、

飛螢たれしのひてか立花の小島の崎にもえわたるらむ

右

山蔭やなつ なつみの川に飛かふゆふく涼しも

右

左

一番

水邊

八束穂にえむ秋の色みえて小田の早苗はとりもつくさす

十一番歌合

早 苗

なきぬなりつれなく見え暁のうさも忘る山時鳥

時鳥につかなる音はふかき夜の雲のいつくに啼て行らむ

あれまさる人の心は故郷にむかしわすれぬ軒の立花

曉郭公

たのしめる人もあらばとひてましいかにみ山の五月雨のころ

の雲ふもとの草にとちられていと世にふる軒の五月雨

やまふかき草のいほりの五月雨にこふるむかしの花も一時

五月雨に岩波たかき山河の音はまくらもうくばかり成

ふろき世の人を友とて五月雨ににこらぬ山をすみよかりける

みつまさる軒の山の麓の糸くる人もなき五月雨の空

草も木もしさまされと山里に人めはかる五月雨の空

郭公晝

さみだれに谷の戸ほそば雲とちてた淋しさのましら啼なり

左心深く幽玄なるに、右の詞たくみに一箇ある、いつに高調なる

山河の岩うつ波の立になれ空にくだけて飛かな

足びきの山下水の木かくれてもゆるおもひや養成らむ

右

左

玉さゝの夕風よりも蜘手なる水のなかれそ涼しかりける

三番

うこそ、

河の夕風も涼しげなれと、螢の十文字に飛かふさまた、せき入

小川の、とさまかうさまなろに、おもひよせ給ふたくみをかし

せきて水行川の手にそ小田の夕はかふ

夕まくれほたる飛かふ玉さのそよとばかりに河風のふく

右

左

11

初瀬河白ゆふ花のほえばあれと夏もなつみの暮や涼しき

左山陰や、晩涼さこそと思はれて、打しやうすると、夏なき心地

す、右たきり落る水おもに映するのさま、 いといさきよし、さ

れとひくかたないは、

落瀧津水沫てらして初瀬河じらゆふ花にとひかふ

八二〇

君子

きぬと立かへてけり蟬のはのうすき袂にかよふ朝かせ

首夏風

そとさす逢坂のせき

たちかばる春を一夜のへた

夏

らむ

や行そむろ花の木の間に霞む夜の月もにほへる窓の春風

暮春雨

あら小田をかへすくも民草のあふくめくみや春雨の空

題しらす

おのつから人にしられす険にほふ深山の花の色を長開き

春田雨

おりなせる春の衣のかさしとて波のあやにもにほふ藤かな

一人の春の色をふ松が枝にむらさきふかくかゝる藤波

花

長閑なる置ににほふ春の日はうら安園のひかり成らむ

山里に思ひ入てそさく春の心にまかせてはみる

山家花

手折へき枝さへ雨のふりぬればぬれつゝ

仰みるけぷりの末もけふいくかわかてふる五月雨の空

五月雨も軒はも湖の水の上やふもとにつきく波のしら糸

八一九

月まつとむかふ高の時鳥びたりみきりに壁の落くる

あしびきのそともかけとも啼かばすもあまたの山郭公

雲はる嵐の山の時鳥月のかつらの里になくなり

すまのうらやこき行舟の時鳥啼こそかばせあばらしま

時をほにあげて幾度かおなかのに啼らむ

すみの江のまにかよひて郭公むこのとまりを啼て出らむ

山家五月雨

あかつきの夢に見えけるいにしへをしのびれになく時鳥かな

南北時島

あまのはらふみとゝろかしなる神のあとなき空にすめる月影

曉時鳥

打出るいつみの水にひらて月彩なから結ふ涼しさ

夏歌

わかみとりなへてれる庭のおもに咲けるもしろ垣の卯花

いつらに詠めし花の春くれて今は青葉のかけしけりつゝ

卯 花

春雨のぼる山に一村に残りてにほふ花の白雲

くれの朝きりかくれ花をありとしらする枝の春風

雨後の花

ことばむさして暮しけむむかしもかくや山のばの月

曉花

さす

朝かけになれて見しかと櫻花まためつらしくおもほゆるかな

喉にほふ

瀧 花

にこりなきそこにかけ見えて花のひま行谷河の水

谷 花

そはるたかれの花を吹てあまつ空よりにほふ春風

よそにのみほのかにみつゝありかれてとふにかひある山欄かな

峰 花

夜の程にぬらむ山の端にあさゐる雲の立もになれす

山 花

朝 花

引の山のに袖めれて花のこすゑをたつれてそ入

花

くろ識の糸むすば釉に香をやとめまし

なるへばな

霞む夜の名もいかにおほとものうらみて帰る春の雁かれ

中々にこゝろありてや春霞花咲峰と立かくすらむ

夜歸雁

題しらす

出てき紅の色ふかく三千年にほふもの

はて枝もたきによれ櫻咲やゆたけき年のためしか

緋 桃

ひまみゆる春の霞のうす緑黄ににほふ花の色哉

小米楔

むかしたか心を引此花の車とゝめの名にはおひけむ

淺黃櫻

夕日影にほふ軒端の花の色もやまと心のたくひやばある

車 留

若楽つむかたみに袖をふりばへて野澤のみつにもすそぬらしつ

白たへの袖をかたみにふりばへて澤のわかな千代もつまゝし

一本には

澤若

梓弓立かへるしるしとて下野のはらばまつかすむらむ

早春霞

春の日をかけのたりなのなかしとは花みぬ人やいび初めけむ

ひさかたの空行かせもかかるなり四方の山の花の嘘は

先君子歌集

筑波のこのもかのもに花のかけもちくさの山さくら

花

花滿山

れる御代の春へと咲にほふ内山の花の長開けさ

妻こもるゆかりの色と春の野にともにすみれの花そにほへる

山櫻

朝ぼらけかすめる袖の春風にまたふみわけよみれの草

すみれ

唐崎のまつ吹風ものとかにて霞をするし』の浦なみ

題しらす

君が袖けるもゆたかにのしめの霞春めきにけり

湖上

鶯のも聞えすさひしきば花なき里の春のあけほの

折てみるあかわ色かも梅の花たか袖ふれし名疫成らむ

あらこまつなく河の若草の春のみとりとそみる

野徑價

白雪のかくれる枝を化とみて春やおそきと驚のなく

題しらす

谷風の寒ければ暮と明とまたろ花のいまたふくめり

おしなべての噓の白雲にやまとしまれもにほふ春風・

咲花のかけよりしらむ山のはや色の千くさのかすみたな引

うすくこくたなびく峰の春霞今朝より花の咲初めらむ

待 花

世のちりの人はのきばの里にみてくらす春の長開けさ

花

こそまではまばらに見えしまつの葉もうつもれてにほふ花の白雲

題しらす

おのつから人にしられて咲にほふ深山の花の色を長開き

おしなべて花の咲める時にこそ春のころは長開けかりける

花膝前年

溜かたのまつの棺の雪とのみにほふみ山の花の白雲

朝かすみほのかににほふ足引のとほ山さくら花咲にけり

霞たつなかき春日のくるまてみれともあかわ山さくらにな

よき人のよしとみまさにおく山のたにのさくらもにほひまさまし

石ふみかさなる山のおくにてもにほふ櫻の色はかばらす

花

深山花

朝かすみ山まゆ遠くたちこめてほのにほふ花の面影

たつ波もかすみの底にうつもれて遠さかり行志賀の浦舟

にほの海やさ波よする春風にかすみわたれるしかの唐崎

常盤なるまつにならひて一人のみとりにのころのむらきえ

湖上霞

わかなつむかたみに袖をゆりばへて野澤の水にもすそぬらしつ

松残雪

卿

春の山の長閑にかすむ光りこそさまれる代のすかた成けり

たにの月を打出る水の花に深山の里も春こそしれ

梓弓立けら唐衣きしまの山に霞たなびく

たまの緒のゆらくも長き春のびのばしめといにふけふにやはあらぬ

な草の春の若葉をつみそへて千代にいませと祝ひつる哉

あら玉のとしの初に梅の花はや千代の春もかささむ

初春蔵

春

いつしかも柳の糸の打なびき春きにけりと鶯のなく

澤若菜

學

惟

先君子歌集

肥後文獻叢書第二巻

梅の花それとも見えすふる雪に香を葬れてやりなく

雪きえめ遠山の端の朝日かけさすがに春とたっ霞かな

春風にとけ行涙の花もうち出て啼谷のうくひす

早春

打なひきかすめるのにわか草のつまこもれりと雉啼なり

春風の吹も長閑にかすみたつをちかたのへにきくす啼なり

朝ぼらけ花よりしらむ山本のかすみのおくにきゝすなくなり

唐春のすそのにつま戀の飛たつきすとよむなり

啼きの妻もこもりて霞しく春のばらを立てならせる

若草の妻とふ雉はうちなびく心も春の野に啼なり

青柳の糸よりかけて白露の玉のをゆるく作風でふく

春くればさほのかはらに打にて風によらるゝ青柳のいと

春のきる霞のふく風にみたれてなひく青柳のいと

我門の五本柳いつしかとみとりになひくばる風そふく

雉

唐崎の松のみとりもうつもれて霞のみたつ春の明ほの

柳風

さ波やひらの山風のとかにてつりする海士の袖も霞めり

わたる波路のすゑのほのとかすみをわたる志賀の浦船

近江の海八十のみなとに立渡る霞分て出る船入

八一六

田廬歌集卷六

廬歌集終

明治四十一年六月上澣

宇野東風識

られたろなりまた後世よりは翁を指して單に人とな其の詠歌

許して云々するものあれども翁は彼のならとして花月を

友とする風雅人の流にあらず 此の二書を見ば赤思ひに過くるも

のあらむあゝ霧は常時に於ては異觀せられ後世よりは歌人観

せらる登寃ならずや今此の田橋集を経するにあたりされた記

して箔の爲めに籍す

八一五

世に残置度由に而先年以來々出精仕候處段々

板本出來近年從幕府於裏六番丁屋敷地被下置温

故堂と申書を建古史舊典之校合を専仕皆彫刻

仕候右書齋には御旗本衆以下多出席有之私儀も

先年追々罷出類書選述之加勢をも仕候右

依願板本一部完年々御入銀を以て此方様へ検校
より差上申候に付學校へ御藏本に被仰付候
一御國においては幽齋様御歌道之儀は各別之御儀
に付今更奉稲候に及不申靈蔵院様學校被遊御建
立諸道之學を御興被遊候に付而伊形庄介儀は
職方爲稽古上京被仰付滋野井大納言様へ御入門
奉願御相傳を受罷下申候處早世仕御傳來絕断仕
候先教授高本敬藏儀古道を尊信仕博學に而古體
近風之歌をも詠専古學を興申懇志有之既先年
相達學校に而國史之會讀等私罷出相催候様被申
談候に付寛政四年之比より日々時習館へ出席仕
專講習仕候處同五年私儀爲遊學京都伊勢江戸へ
罷越其後年々遊學に泥越候に付學校出方は相止
其以後は宿本において講習候右之通先年遊學
仕候節は毎度爲御心附餘計之御出方も有之以御

右二書は翁の手記にして其の學意公明に其の抱資正大なるを見る

べ當時世に學問とは籍くないひ人倫の道とば儒教を描き

て外に道なしと思ひ是れにらさるものを指して異端となすあり

さまなりしに翁の學ぶ所父子弟を導くところ偶~之に反するを見

て疑を抱き要路の人之を詰間しかば の二書を以て答へ

右學意二冊は亡父長瀬七平へ要路御役人中より

問合有之候節書達致候扣之草稿を以書寫之

明治三年三月

長瀬五十槻

可有之左候は、彌以古學之道興隆可仕と

候に付今以當御役御用之透々を以會讀等仕

篤志之面々を相誘講習仕候儀に御座候以上

七月

長瀬七郎平

得業仕候間右學問筋永 御國へ傳不申候而は

折角御出方を以遊學仕得業仕候詮も無之少將様

思召も等閑相成奉恐入候俊之器用之人を選導

仕私儀是まて學得申候丈け之所にて而も授興

仕置候は、後年までも永相傳繒秀才之人繼而出

一松平隱岐守院様へも御實父君田安故右衛門督

様思召を被爲繼古製之裝束を被成御好既先年爲

上使御上京之節古製之御裝束を被用御供廻まて

被成候由今以會津に垣津靈神を被奉祭候由

一松平越中守碇信様へは御實父君田安故右衛門

督様被繼御志古道を被成御尊集古十種と申書を

御選被成梓行被仰付故右衛門督様御再興之古譜

之舞樂御興行被成候本書之通右舞

通右舞樂は先年

此方様へも御傳來に相成候に付私儀爲拜見

松平越中守様御屋敷丶度々被差越少將様被遊御

出候節は各別御供にも被召連被爲拜見難有儀奉

存候將又右越中守様先年御老中御出勤之御役

人中へ御示に成候御書付之中に御政道を掌り候

者は近年之御記録を軀鑑と致し先役之申次第を

先格と心得 本朝政事之元律合格式有之事を

知らすと有之候律合格式は古 朝廷において天

下之御政を被行候に百官其職掌を守り取行候

此法を以規矩と仕候事に御座候間右御書付

之趣を以相考申候へは深古道を御尊被成今日に

御取行被成候思召難有儀に御座候

八一三

一江戸に而塙検校保己一と申盲人群書類従と申大

部之書を彫刻仕古書之散逸を惜候而數百部摺立

一松平周防守様甚古道を御尊被成本居中衙御懇意

被仰付御家來之儒者小篠大記と申者を中衛門弟

に被仰付度々松坂表へ被差越教を受申候

一江戸聖堂林大學頭様御定諸課之中には課と

申も被立置候由

一立花左近將監様へは御歌御好に成私門弟柳川御

家中鷹尾伊織と申者へ古事記之講釋等被仰付候

一奥平大膳太夫様へは御先代已來古風御好被成候
間本居中衞門弟渡邊上野介と申司を被召出御
歌をも被成御詠御先代之御歌集には本居序文を
も被仰付候
一松平筑前守様に而は御家來青柳勝次と申者
中衜門弟に而古道學宜候に付故實と申役に被仰
付筑前續風土記選述被仰付候由
古風に被仰付御馬之飼方まて古式に被仰付候由
其節御裝束一式田安御用人長野靭負殿より調進
有之候由先年靭負殿噺に而承申候
朝廷において古道御尊崇御儀は本書之通に付今
更奉稱候に不及御堂上方是以勿論之儀に御座候
於武家も代々之大將軍家御尊敬不淺就中右大臣
實朝公於歌道卓絕之才有之定家卿之門弟にて殊
に古風を被好候而萬葉集之風體を初被詠摸中に
は勝たる歌も多相見え其家集を金槐集と申候而
梓行仕候既帥定家卿之詞にも鎌倉右大臣者長ヶ

たる歌よみとこそ存候へ此之歌を見候時者歌

は物憂く覺候と有之候次に足利家代々歌道に被

得名候も多有之御當代に而は別而東照大權現様

御掟に自他受身神國者儒釋仙道等外國之を以

先之專之則暫閣我主人忠を他人主に屬か如し是

本之理を失に非ずやと御座候由乍恐相考申

候へは誠に難有御掟に而御座候次に有徳院様深

被遊御尊古道有職之學を被遊御好田安故右衛門

督様被繼御志古學を御興起被成候儀は本書之道

覺

長瀬七郎平

六月

居宣長著述之書共に悉敷相見え申候

肥後文獻叢書第一

會津風土記等御選述御領内神社御改祭式等御正

を被召神學宋學に被成御玉山講義

垂加

一松肥後守証様には甚被成御尊神道山崎嘉右

一水戸様にては黄門様深被成御尊古道大日

本史禮儀類典等大部之書御選逃御座候而 禁裏

へ御獻上に相成候由惣而被成御好古義候に付萬

葉集之註釋を下川邊長流借契沖へ被仰付萬葉集

代匠記を書立指上申候當時古意之學を専世に唱

候様に相成候者右兩人より相始近年萬葉集之註

釋宜書出來候は古代匠記をと仕候

一尾張様に而は御家老横井十郎左衛門町と申人本

居門弟に而大に古學本居著述之書多は此人之

求に應著作に相成古事記傳以下板行等も皆名護

屋表に而彫刻仕候右等之儀も専此人之周旋に御

座候

一紀州様へは本居中衛を若山へ被召出古書之講釋

被仰付中衛物故仕候後は門弟稲掛十助と申者を

養子に被仰付本居名跡相續被仰付當時本居三四

右衛門と相改於若山古學師相勤居申候

に御座候

E廬歌集巻云

之要作多古式ならぬ事のみに御座候へは能吟味

相

不成とは入力之及ところにあらす畢竟は神之御

心なる事古より今之眼前に世之婜成行を見而知

へく候ヶ様に申は縦分道理を以申候己か臆度

空論安説に而は無御座候共證古史共に明白に

見候事に御座候然は上代 天皇治天下給に厚

天神地祇を尊崇給天下萬事之政事を必紳之命を

奉て神之御心之儘に行給故に卜事を謹み重祭祀

を行給故に神祇官を八省百官之首に被置諸務は

神事を先とせられ候由條式に懸然と相見え

申候然處後世祭祀を疎にし神事は縦令事之様に

心得祈禱等は減へる業と申様に相成候は漢煎之

さかしらに而軽薄成世之風俗とは乍中實に不要

神明軽忽祭祀之罪不淺儀に御座候既に外國に面

も古代は別而鬼神を尊崇し祭祀を重候由は何書

禮記等を史傳にも多相見え周禮に大宗伯小宗

伯と申官は皇國之神祇官之如く共司に大藏小

凧なと申官ありて飛祈臓を司り候由相見申候神

を祭り神に祈は左之道に御座候行法行事は後世

天台眞言之秘密修驗陰陽道等之所行を取巫

右之私學問手筋學意之儀御尋に付大略如此に御

座候惣而前條之趣悉師受之趣を以申述候Sさ

かも私之了簡を用不申候無段は先師賀茂真淵本

八一一

有之事を不知して是を學候者無御座候に付此

義を私儀年より深慷慨仕多年精研不怠且篤志

之面々をも相誘日夜講習仕敦導相勵申儀に御座

候

して正しき古式を用可申事に御座候されと神を

祭は古之道之大本宗源に而御座候へ共道は 天

皇之被知食候物に而直巫蔵之徒之私に職業と仕

喉儀には無御座勿論 皇國之道に候へば上下貴
賤巫藏小道之徒とSへとも一統不學候而は不叶
儀に候所中比より以來儒佛之學專世に被行人皆
外國之道を而已無上儀と信用仕中世以來儒佛
皇國に用給へるは元来 皇國に宜道無之故には
無之古 皇道之博く優美にして儒佛之類も畢竟
皇道を飾して時にとて其羽翼とし給ふ 叡
慮より起候儀に而佛之を不惜候而は治天下
給に事缺くる事有之候故には無之候辨不申候殊
更我自國に四海萬國にも無
る眞之正道
之職業と而已心得候も是又大誤に而 皇國之道
は學間に御座候へは皇國に生候者誰か此道に
已の之學間は神職祠官之輩
あまたに座理心大
扨又 皇國目
に御座候居其

得其大

如背6夷法朴合候为

扨く大なな附老

らはも候は宗淳

に申劣儀不

交に其

そ交佛面の只唱

禮候なに忌文は是み漫

記儀と御て學其心り

只

内之古を主張して信仰を破候僻見と

候6根元之主 ･篤度不心得候而外

成間違に而御 快老莊之

會して

は無之

ので

に

外

更々同義

而御座候 或は皇學は老荘之意を取

類も同様に而古代に無之名目に而後世に唱違に

當時世上に而私學問を普通之神道者流歌學者等

之類と相混同様に心得候者全右根元之學筋不案

内に付而之儀に御座候別而俊學國學抔申名目は

漢學佛學に對し外を主とし内とし皇國を客

とし外とし候申分にて大取違に而勿論古代に曽

而無之中比四道之儒と申而紀傳明經明法算道と

云各博士を被置候へ共學道國學道等申博士者

不被置候に而も知へし尤後世申出候拙陋之名目

に而御座候間私學間においては然様に紛敷名目

は稱し不申只博く古を學候と迄申候而別に殊

に新規之學名は立不申候惣而和書訓和歌な

肥後文獻叢書第二巻

漢候又へた変!

何教而申候候學加

も画面 個不に

不之非皇な借

候に仕た得と機序て

御達し其らばに事上同よ

國交所破に代義り

不母謂り説外に伺

は非の直候な國て候

壓而申事!

に申更目重んし候儀に而則顯露政事を助成候幽事に而御

座候顯露之政事とは上者 天皇之治天下を給よ

下は一國一郷之主迄各所を領而行候政事は

現在人之所爲に而候放古語に顯露事と申而下文

之幽事に對し神を祭候者幽冥に通候儀に御座候

間幽事とは申に而候神は幽冥之中に坐候而吉凶

禍福を掌り給ふ故に人之所爲行之顯露之政事畢

竟は幽事より成り調候物に御座候是を入力之所

爲とのみ心得候而神明之助有事を不知候者愚之

至に御座候凡世中に有と有所之事共大小と無く

善惡皆悉神之御心之所爲に不有と云事無し治亂

存亡盛衰禍鬴年之豊凶等かに人力之限を盡而

能取行ても一わたりは其取行之致樣精疎虛質

等による事とのみ誰も思へとも其事之能成と

アラハニゴト

ツリゴト

不依して可有之哉神職祠官之輩は神事祭鱗をこ

そ共職業とは仕候へ是は神祇道と申候而

廷に而は神祇官と申職司を被置候而其より今、

至迄神祇之祭祠を取行又此職より天下之神職祠

官等を掌り支配仕候事に御座候古道之學間を掌

申ものに而は無御坐候尤神を祭候者於古道尤

歌六

相見之候へども神腦被

知食候大道に而國之如く殊更に強而不設作道

に候間是を神道之行と申而別に異様之儀も何も
無之事に御座候只々上代之國風を明め古言を以
語傳候神代上代之古事を詳候時は古道は古事
之上に備有之古事は古言を以語へ候へは
古言を解而古事を明め候へは自ら上代之意を得
候而古道之趣に通申候古神化上代之古事記日本
書記等之古書共に所蔵に而古事共に悉代に
有之候實之事跡に而上古には文字は無之候故
皆語傳に而候へ共少も違忘事も無之僑誤事
之質朴正直成世之儘に傳來候を飾事も無之書
記候ものに而御座候へども後世に設作候虚説之
類に而は無之共據有之共證正しき事迄に御座候
へとも大古之事跡に候へは間々異不側之儀多
有之候間今人之凡に而はとやかくと疑申候然
ども是は愚之至に候能古傳説之旨を明め知候へ
候
扨其道之ともは古事記日本紀等

孝徳天皇に惟神父・

書に見えた

名目は未曽無之事に御座候

云名

故後世に而道とし候へど上代には然様之

めに而御座道云是神道とを初め古書ともに明白に旨に難通候に付荒増右之通に御座候此趣を以

私學間筋幷學意をも御考御詳察可被下候然處

八〇九

天下給正大公共之道成故に萬上より敷行給而下

民者一己之私に行候物に而は無之下たる者善・

悪も其時々々之上之掟に從行申物に而御座候

様に申儒者は夫に妾姉之通

申候へとも下民は上

論し候事少しも有之而は難治且民之道之本意に

而を起し 朝廷に向び弓を

賊子も出来て親を蹴りを亡すにも物故深く是を禁事に

古道之意味は古史舊典を不熟語候而は其

ヨロ

は少も疑惑之儀は無之悉實事なる事を信用仕も

のに而御座候強而是を疑候は漢意之さかしらと

申ものにて上古質朴之世の國民之真意に而は無

御座候但千有餘年習來候而世俗之心に染人候漢

意に候へば容易に難除去候此漢意不除候而は古

意は難得候に付是を學問之緊要と仕候扨古道之

儀は随分邃吟味置候而自分一己之行は惣而之時

之風俗に従公之御掟を敬守厚奉崇 天朝四民

各共職を務子々孫々共家業を不失萬世無窮相傳

候を古道之旨趣と仕候縦合美善を盡候古道なり

とも今時之風俗に戻り己一人異様之行仕候は道

之本意に叶不申狩私に而御座候道は「天皇之治

方様へ御傳來に相成申候其砌獪稽古をも被仰付

鞆負殿掛合等私より始末取計申候儀に御座候次

に詠歌之儀者幕府興力加藤又左衛門と申人

前條岡部衛士門下に而殊に高弟に御座候間術士
手筋之古風詠方此人より承申候而萬葉集佳調前
後二篇江戸にて撰逃仕御用人高瀬文取次を以
少將様へ差上申候尤二篇先年彫刻仕今以世に行
れ申候惣而古風近愷詠方歌道之筋は前條中衙至
而功者に而御座候間其教をも受申候扨又放實方
之儀は幕府御小姓組伊勢萬助様伊勢流御家許に
而御祖父伊勢平藏以来御高名に付奉願御入門
仕御家傳を受申候右之通先年追々京都伊勢江戸
等へ遊仕漸得業仕候然處右學間は至而大葉に
而全體手博無際限儀に御座候間容易得業難仕御
座候右學問之次第者先づ古事記萬葉集等之古言
之書を熟読翫味仕 皇國神代以來相傳之古道之
旨を明して知り次に六國史律令格式に渉り諸
記を考候而中世以降之儀制度を詳にして有職
故實音樂詠歌之儀に至迄各共道々之書を考し
世々之損益を知候時者上代之質朴中古之文華

御宇天皇とも奉稱古歌に 天皇は神にしませは

と詠候事多く有之是則 天皇現在之神に而坐候

由に御座候其神と坐候 天皇之所行給道に而候

ミトアメノシタシラススメラミコト

皇租神道に随行給ふ故に古語惟神又明神

カミナカラ アキッカ

瞭然明白仕候乍然ヶ様に博識精密之業を盡候事

は數多之年月を積永勤不怠功に而無御座候而

は得業難仕候尤大略古道之趣は會得仕候迄之儀

執學之人に有之候へば敢導を以速に成就仕候

儀も御座候抑々皇國は 天照大神之皇孫天壤無

窮被知食候御國にして第一稲國に勝れ水土

美膏腴にして人民殷富強盛に有之風俗質朴淳

厚にして内簒奪之無之外に覬覦患無之君臣之

名義正しく厳に貴賤相分世錄世職萬古不易

海内無双之國に而御座候故昔三韓國王東方に神

國有り日本と云と申而深恐怖服従仕又國人も

君子禮義之國と稱美仕候由古史ともに相見申候

扨皇國之道と申候には 伊邪那岐 伊邪那

美二大神之始行給而 天照大神御以來神々相

傳皇々相受給候 天皇之治天下給大道に而御

座候上代には道之名も無之御代々々之 天皇

田廬 集巻六

候に

岡部参

参四

を指上候處則田安御殿大番役に被召抱御學士被

仰付候其節より参四儀術士と改名仕相勤候處師

齋幷東之進等にも相勝學識卓絶實に千古之一人

御興候も右東

御坐候處其後

進儀學士に而御講習仕喉

之

被成御典候

業院様台間御秘説も

有

同人妹蒼生子幷齋門弟部門共に江

戸へ 罷下東之進儀

之進儀律格式有職等之御用被仰

束染 被遊御覽候由其後田安

故右衛門督腙武 檥御學士被仰付 有徳院様之御志

繼國史舊記等委被成御考索有職故實裝束

等之儀迄悉被成御論判古式之裝束古譜之舞

こも被成御再興御著述之書凡百二十餘部御出

に相成候中に

私學問手筋幷學意之儀先年於京都羽倉齋 之

申人 皇國軔体雕 古意之學業興候而有徳院

様御代上表仕京都へ學校を建立仕 皇國古道之

業を世に弘め中度段奉願候於東山邊地面

下置既取立申筈之處病氣に相成無 無程物故仕候に

付成就不仕候然處右之由緒を以右

座候由右之通専復古子有之御學士御断申上人

抜群成申候 見中衙見解に相叶候由にて著述之

中に間々私説をも取用姓名を顕梓行相成居申候

且又有職方之儀は京都に而功者之面々へ問合仕

於江戸田安様御用人長野靭負殿へ入門仕故右衛

督様御遺説 不拝聴御考之古式之裝束古譜

之舞樂をも相傳仕 候右舞樂者先年靭負殿を以此

Q≺

相勝師術士にも狩一層亭識高博文強記にし

て古史舊典を講究古實古歌之考索詳審精覈言行

篤實之學者に而古事記傳四十四巻を始古書古歌

之註解等大部之著述數十篇世に行尤高名無

門人都鄙に多名簿凡七八百に及申候既御堂上御

方々様へも深被成御尊敬講説を被成御聽聞著述

之書も差上候中には妙法院宮様より被奉備 叡

覽候由右之通之名家 座候間私儀右中衛門弟

に罷成先年再往遊學 を受古意之學業を

居中

と申紀州樣御醫師伊勢松坂居住本に付故右衛門督樣思召に相叶御大業を奉助成

且萬葉考を始數之著仕學を世に弘め古體

之歌長短幷古文をも始而摸詠作仕門生諸國に多

有之候就中

の事をあげつらひあきらめられけり、かれ年をくずして學の業な

れりしかば、固にかへりて、なし心の人々をいざないしへられ

ぬ、今かくわが国にいにしへ學のさかりなるは、またく此大人のみ

ちびきのいさんにて、園にては、此道のおやともおやとたゝふべ

大人になんありける、かくてよばびのかぎり、のみちに心をふ

かめて、歌よむことはむれとせられざりしかと、はやく萬葉集の

調をあらばされたろを見て、共志のたかき事をしるべし、此集こた

ひ武室の、よくえらび集められたるは、まことにおやおもひ

のころ深き、かくこそあらまほしきわざなりけれ、なほあらばさ

長瀬大人、其家の名を、みつから田ぶ勢とつけられば、門の

にあればなりけり、されば家の集も、 もて名とせられた

り、其あつめられたるゆゑよしば、其子武室ぬしのばし書につばら

にいばれたるがごとし、大人わかゝりしより、神のみちたたふとみ

て、いにしへのふみゝる事をつとめられければ、わが殿にもきこし

めしよろこびたまひて、その業をなしたへぬべきよしにて、めぐみ

のたまものさばなりしかば、京にまうのぼりて、たかき家々のつた

へごとゆうかび、伊勢にゆきて故鈴屋のしへをうけ、江門に

いで、芳宜園にごりのやのたちまじらひ、明くれにい

やけふたにも、水の心にまかせなむ、

肥後文獻叢書第二巻

田廬歌集は、はやくよりいと見まほしくおもひ居つれど、もたる

人も聞えれば、くちなしくのみ思ひなげきつろを、今年ゆくりな

く、翁の自筆草稿本を、本田龜氏の見せられければ、いとうれ

しく、年比の奴がひかなふ心ちして、やがてとなしぬ、されど

いまだ清撰にいたらず、りくかきいれもあり、又部立なども

しどけなきがうへに、狡合せし人の心に、種々ましろしなとつけ

てあれば其心しられぬかざりば、大方本のまゝにうつしおきぬ

書人は其人しられど、箔のまなこ幸室と、足のならんと

おもはるれど、なほよく嬉れて記しぬべし、又此集の文は、

足の文集の中にありければ一序にこに書のせつろなり、此跂

によれば、まな子幸室めしの序文もありつらめど、此には記さ

れず、これまたづれて書のすべし、

明治三十年九月

中尾五百樹

れたるふみども、くさくあなれど、おほくばしたきのまゝなれば

つきつきえらびいで、かきゝよめて、人にも見すべしとのあらまし

いとも(よろこばしくて、まつ此ふみのおくつかたに、一筆かき

そふるになむ、天保八年八月、

八〇六

田廬歌集六

きうたなり故に世にばれるなりわろきはばらさるなり上古

のうたは皆すくれたりと思ふへからすさて人だなとの歌はことに

深きなり人の比に至りてはおのつからの巧にはあらす古への

すくれたるによりて巧を思ひめくらして得たる巧なり後世人のお

よびかたころに至りてははやよきうたかよまんとかまってよ

めるものなり此後世世の人いつれも皆よきうたをかまへたる物な

りさていつれも古のよきをならふうちにもおのつから其世

其世の風ありて古人とは殊なりかくて次第に世のうつれるにした

ひて弟にうつりかばれる其中に又よきあしきかばり有り 必

も後にいたるほと次第にわろきにもあらす後にもよき歌も有り然

れともよしといへとも古へのよきとばかりて後のよきなりさて今

の世にして歌をまんには其中にいつれをとらんといふにこ

人々の心なれば必さためてはいびかたし 上古の人はつくらすかさ

らすたゝ心におもふまったよめいて今の世に心のまゝによむへ

きにあらず 今の人のよむは皆古人のまねをするなれば入っ

事なりされたとひ萬葉風をよみてもつくり事なればそのつくり

事の中にいろくのたかひあるなれば人々心のむかはんに従ひて

古へのつくりことなまれふべきなり但しっくり事とはいへとも人

情になる事なければ古へをふも皆古の人の情まれふなり

人の情は神代より今に至るまてかばらぬところばかばらなれば

そこさへきよき川波に、舟をうかべてなかれよる、おきの玉もの打な

ひき、来よりつとへるますらかの、みやひなの子のおもふとち、うた

けてうたふことのはに、吹なる笛の音もすみて、波のつゝみのうつか

も、ゆめかとばかりくれてゆく、秋の日かけのしげきに、さす棹人

神水川に舟をうかべてうたへる

あばれはいつとわかれとも、風の身にしむらまくれ、月のいとしもさ

やけきは、むさしの秋のもちの夜、くさのまくらにまとろめば、露に

袖にそおきあまろ、

秋のあばれ

物は萬におぼけれと、花よりめでだき物はなし、花は千くさににほへ

とも、櫻にまさる花そなき、ところはいつくわかれとも、芳のよく見

花さかり、

花ためつろ今様

右詠論同評寛政五年より同六年まで江戸にありとほと千翁

と問答の一篇松坂へおくり遣して本居大人に絆を詰るを今こ

にしろす

よむうたもことことくつくりことにはあらす 牛は實情なり さて世

世の風體の中にまつ古今集の中のやすらかなる古調の歌を古今に

わたりてよろしき體なるへしなほいはまほしきことは山のことく

なればさらにさらにつくすべくもあらす

れば默のさまきすになるものなりまた古へふり好める人やく

すれば 歌詞にあらぬ事をいび出たる有りこは深くいましむべき事

也またみつから歌よみ得たりとおもふ人おのか心のままに よみい

てつひにいとみたるなる歌のよみ出つろもあなりこれ又みつか

らいましむべき事也 歌まなびば教をうけし人は身まかりあるは遠

き境にへたゝりてよしあしあげつらふ人なくとも歌よまむかきり

ばいつまでも教をうけし人に難うけさらむと思ふ心にてよみ出な

はみたりにになるましき也 みつからょみ得しとおもひほこる人は

友垣のうちにてまのあたりその歌を難するは稀なるものなりつ

たなき事なりとも後のよにとまろへきもしられれば後の世の

人にはつへきにあらすやとにもかくにもあさくしきもたくめる

古のよき歌を學ひかりにも古の歌なりとてあしきすかたをまな

ひしきひろふことなかれ古への歌とてもひとつ心にふとよ

み出てるのきばめてとのほりたろも有るへけれと深く思ひめ

くらしょく味ひていび出てたりと見ゆるそおほきまして末の世に

歌よむには 一首はみ出てなに返すかへす心に味ひて詞をえらみて

にはふもとのふべきなり歌ばたはやすきわさにて侍らすかた

きものゝかきりなりけり 今の大御代古へにまされる事のみおほか

中に歌よむわさと手かくこそ古に及ばぬを思ふにも手も眞

心よりなし出たるものなれは人の心のおのつからいにしへにおと

書おける學びなばいにしへには及ばすとも賤しき癖め計のや

くに有るへき也歌もまたしかりとおもぼろれと古きをまなふにし

事侍らこはおのれ思ふ心をかいつられたろのみなればい

となめけなる此詠歌の論井千険の答ともに一わたり皆さる事なりさ
れとなほ深

こまかに論はんにはくさくの論あるしまつ上古の人の歌は

巧なる事なしと思ふば駅を見しらぬ論なり上古の歌にも巧にある

事なり燃れとも後世の巧をばちかひてことさらに思ひめくらし

て巧をえたるにはあらす巧もおのつからにえたる巧なり故にめて

たし此事に千の論のことくなりすべて古人の歌は思ふ心のまま

になほくよみ出つるそのうちにおのつから巧ならも有りたたあり

なろもあるなり又上古の人はよきよまんとはぜ只心

のふろしわさには思ふまゝによめれば其中にはわろき歌もよきう

たもありしなり其よしあしはかばらすさて上古にもわろきも

あれとも古事記書紀にのれるはみなよきかきりなりすくれてよ

本居大人評

ことそおほかるへきそば心して見たまへかし

長めのみもとへまねる

本・

りたろによりてしかるならむ手かくわさは古へによらんと思ふに

は二百三百年このかたをもとしてれびてはいつまでまなふと

もいやしきくせにはなるへからすふろき代の能書を聞ゆる人々の

を安らかによむ事がたかれば何事もなき方のみ心に懸てよ
むことにはすめり古への巧なるは求め くめるにあらておもふ
心の深きなりそれいかにといふに古へ人はまうけてよます唯折に
ふれ事にのぞみて心におもふ事をうたび出せり其思ふ心の泣き深
き有りて其らかなるなたにいひ出せるは安く深くおもへろ事
をよみ出てたろに巧になむ有るさて今の人の何事もなく湿らなる
さまなみまひよめるばいつも同しさまにのみ成行てそれ好め
るたくひばたかよめろも一つ口より出てたろ如くになんよくおも
へば是ばたかゝるへくなんあらぬそも(入てふ心の一つさまな
ろやばある其ひとりひとりの心すら昨日と今日の心はかばらふも
のなればさとび言もてかたらふには一つ事はいてこずなんかれ古
へ人のは心より出たる歌なれば歌ことに心かばりてめつらしき
後の人は其古へのことばのみとりておりか心にもあらぬ事
よみ出て見ればめつらしげなくたかよめるも同しさまになれる
なるへしこをもておもふに下れる世にまうけよむといへと心をい
にしへ人になして真心より深くおもひめくらしてよみ出てなは一
つ事には成るましきことわりなりさりとてめつらしくょまむとし

て来てあらぬ事いひ出むよりはめつらしけなくとも一首の調べる

そまさりぬへきて 歌ふははしめより 巧なる事をよまむとして

其巧なる安らかにいびのふろ事のかたければ歌のさましく

六

O

わいためかたきことになり心もばたさとひ心のみに成下りたれ

はおほくよみてみやひことをよく知り明らめ心もみやひ心にな

りすべきなり其詠よまむにも其題を詞書の歌よむ心になさ

後の世にはさとひことさばになりて みやびことはばされば

つかしき事をはいびとぐろわさをしらすなん有るこそ古き歌とも

を見てそのけしめた知へき也 歌に多くよまされば駅まなひは得か

たし何となれば古人は常言やかてみやひことにてさとひとなかり

のみ成るもの也さればたく巧めるふしもなきたてよむへ歌

おほくよみて口たらんたりにふれては巧める事を安らか

にしかもたけたかくよまむとおもひめくらすべきなり共さまば

萬葉集より三代集古今六帖三十六人の歌集の中に よき歌をとろへ

中にも萬葉集の中の調へよくととのへる歌古今集のよみ人しら

れぬうたあるは奉れとも有りし時奉れる歌こそことにすくれて

おぼえればた後の新古今千歳集拾遺なとの中にも上手のよまれ

しには古へになさ恥ちぬことあなるよく撰びとろへきされ

と男の雄々しからむことを忘るべからずそれわする時は歌さ

まよぼく心せまく物語の様に成行くものなり其たしきば萬葉

の 心とせむにしくことなして心たいにしへ人になさむも萬

を見ておのつから古人の心を知るべきなり後の世の歌は何事も

ふわりなくむつかしくしひてきこえがたきやうにいひなしむ

はも耳のそこにとまり侍れとそこに心おこして身もたなしらすつ

とめまなび侍るなりささささきも申つる如くあしきばあしきといまし

め給ひていさゝかもいにしへのふりにかなへらんやうに引直し給ひ

石上古の山道奥深き事の意をもさとさしめ給へかしさるは己が

ちなき心にしもひそかにおもひとりはおほよそいにしへの歌を見

侍ろにいつれもくたゝありのまゝに直くふつゝかなるひとつ意に

よみいてたろか心はいとも高くしてすかたいきほひいばんかた

なく雄々しく見やひていとめてたく後の世のことさまにたくみ

なしおもひくるしみからうしてこしらへいたせるにはあらさめり

されといにしへの人に意直くみやひたれば言も躍もおのつからやすらかに高しともたかくこそ見えた今の世の人は今世のさとびにましらべるからにすてにさとひたればいひいつることの葉もやかてさとびていやしくそある抑巧におもしろくよみなさんとおもふになて近世のうた人の情になん侍ろなそもいやしとしてなほくやすらかによまむとおもへはひたふるにおもひきもなくたゝあさくき歌になりてをかしきふしもなくなりぬめりしかすかに双人もよまぬめつらしきことかもいひいてんとすればへりてひかくしきこ としもかまへいたすやうになりゆくなりこばいとつくしむべき事なりかしすべてすかたいきほひば上つ代のさまむと学び侍ろへしまた古言もよくえらひて 今の世にかよへらんかきりつかひ侍る

のたまびこせたまふ事ともつぱらに見侍ろに歌よむ事ののりばいとよく思ひ明らめたまへれば更にいはむ事なく侍ろされと千常におもへる事ともなきにしも侍られぱいさゝかかびつけばへりつら(古へのよき歌を見るにたく何事もなくてしらへよくととのほりたる歌のみにあらすいとたくみなるもあなり其たくみな

も後の世の巧なるとはことにて心は巧にしてうへぱいと安らか

なり何事もなき事をよみ出たるは先にまれひやすく巧なる事を安

らかにいびのへたろぱいとしもまれひかたきわさなりされば古へ

ふり好みて人にも古へふりによみてよと教ふるひとも巧なること

千大人へ

〃

へきか必しも近き世の萬葉風なりとて物するやからのことくふろこ

とまゝにつられてよみもえわからかきうたよみいてんばな

このわさとこそおほへ侍れまたてにかばばよくくととのってかな

>ともたかばぬやうにすべてわさなろへしかゝることともにびゆ

くうちにおのつからもさとりなんかしむと學はんに萬葉集の調よ

き歌ともさては古今集のなかなるよきかきり六帖のも又に家々の集

のよきすかたとももえらひて用ふへきにやばたうひまなひのほと

題をまうけてよむ事もなとかあしからんよくなれるべきこと

にこそなほくばしくはみまのあたりにとひまつらんものそあなかし

つきえてのれる小舟はかたふける竹のまかきとなりかきりなき 海原

風まぜに雪ふろよひにわひあへふといほのうちにあし火に吹

てす布がたきめ有のことくとりきそへつゝ明なむほとのみ行きた

るすさひにはしかことあらぬひげさへかきなてつへく夢もむすば

枕にのこる ともしびかけうすくやゝびましらみゆけば竹のあみ戸

おしひらきてみれば朝風はしたなく吹入軒近くれ竹のささえ

たるつもれる雪のいとしもせばき袖につゝみあへめまてちりかり

ぬるをうちはらひなとするにきたろのこの入來りて父さしい

たせるたとりみれば弓削の君のもとよりけさの雪いかにみそなばし

ふらん ちきりおき給へる舟なもよそびいかとくなとあ

るに返しばせてつかひに打つれてともにその舟にのりちかうわた

りの水門より 浦山かけてこきいてつゆけばしらぬひのつくしのわ

たかつかれて波にうかふる雪の烏山こきかへる海人の小舟のかちの

音におとろきてかもめの立さわきたるいはんかたなしゆくへきため

め舟出なればたゝ引しほにまかせまかせてしらめ国へもたゝよひな

んとおもふまてうつりかばる雪の山つれつれに雲にそひてなんみえ

ければ花にわする、家路にあれと雪にはいまたきかわすさひかなと

いふうちにや、そらばれて日かけほのめくとそみえしありし島山

弓削某かもとに人々つとびて雪のあしたにのりてといふ

ことをかける

おのれ過し比より君のたしへをうけていにしへふりを刺よひとなく

にしめてことの葉の道をしまなびがてらあやしくもつたなくも折

にふれてよみいてわれともとよりかとなければすかたころもいと

いとつたなくしてとのばのみそおほかるされとたくぼへもた

らぬオなればいかはせんしかばあれとあたし人の百たびせんには

己千たひせばなとかは人なみ!にはいたらさらんとのふろきこと

八〇一

可然

本居許と所々に目

鈴屋大人の評

かたへ次に

(付)は

あ

千蔭大人こたへの文

人又は翁と

付箋) 千翁とのみ可

たまのちはひたむけてとことはに榮えむやとのそこだからこれ

よみうたのこゝろを橘千蔭と論文

筑紫人小山菜かもとめにまかせて書てあたふろ文井歌

歌に師なしとむかしの人はのたまひおかせてしかとうひひのたと

くさにぼろへする人はたな 「はあらぬかたにやまとひなま

こゝに小山ぬしばしめて歌よむことをまなはれにたちのひろき

あつきみたまのふゆかなかき世までにわすれしてそのふてのあと

常にとこのへにかけなむよそひなともころにもの そのよ

しひとくだりかきそへてよと岡崎してこばるまゝにやかてか

なむ

はいやさやしけるすかたみにてうつみ火によりふしたる手枕の夢

さめて弓削の君のいほのうちになんまとわたりける

いにしとしの春霞とともにしらぬ火のつくしの故郷をしも立出て玉

しきのひらの みやこへまうのほりて花ちらふころしも鳥かなくあ

つまののみかとに下り侍りてふりし代のことならかにかくにまな

ひ侍るとてことかしこのものしり人たちにしたかびて教をうけばた

歌よみすとてたりにつけたるまとねのむしろにもつらなり侍りし

早くより相しりし友垣の如く御むつひとしもなりてあけくれうら

寛政の六年といふとしの春の末つかた江門の旅のやとりた

いて故郷に帰らんとして日ころしたしみむつひたる人々

にわかれたつくる文

呉竹の長き世かけてちのみの父の命をいにふけふかも

子をおもふ親の心はさらなり子として親をおもふもとより世のこと

わりならん誰の子かその親の千とせ萬代をことほかさらめやにさ

れば五十のよほひをへめるかすらなくてよろこへるならひなるにま

して我父は此とし六十の春をしもつゝみなくむかへ給ふれば已かよ

こひも 何にたとへんさるたたたにのみやにあるへきと今より

ゆくさき萬千とせの末までも老せすいませとことほきするにいはひ

歌なん物して人々にもこびり其は書は今世のためし

にならひて寄竹蔵といへる題にてかくなん

父の六十賀歌をこふ序

春霞立わかれにし君しもしのふ涙は時雨とそふる

わかれ路の詞の花のかすを見つゝのはんあはん日までに

別れゆく風は千里にへたつともころばかりはかよぼさらめや

おなむしろにあはん日までにといふ事を

なく聞えまぬらすればわせの君たちもばしむかふおと ひなすした

しみ給ひて ほと》きすたちかへるころもみちにほへる夕へ雪おもし

ろきしたももろともにめて侍りて何くれとあそび居待るばにい

つしか此としの春にさへ立かへり今はそのふの梅ものこりなく

山路の櫻もにきほへる比にもなりにたればいかてまた長き春日

ともにかさゝむとこそおもひ侍りしにかの故郷の母としか春さら

は汝をしまたんこそのかとてにちきりおきつれは今は手をゝりてこ

そまたうすらめたいわけなき子のおよそけたらんたさへ見まほし

なん達からほとによそひして故郷にかへらむとすめるさぱいへ

かゝる折しも見すてゝいなんば花なきさとに住やならへると帰る雁

にひとしくいひなされんもいとくくちをしきのみかはましてわせ

の君たちにからくもわかれゆかんことをしも思ひ侍ればしかすかに

ふる春雨のひまもなくひちぬるばかりになんよしや故郷に侍ると

も筑波のみれのさわらびたり(はまゝの浦まの千鳥としか

よば言魂のたすけちはひて玉つきの便はかりはかよび侍らさらめ

やたらればくはなわすれ給ひそなすて給ひそなほからぬとしの

うちにはくりきてみえまねらせんあなかしこ

菅の根のれもろにきこえ給へる御せうそこのつばらにうけたま

ばる あるひとのとしみのほきことすとてすすめまねらせし歌とみ

におこせ給へちまやかておくりつれば いとよろこほひ侍りき事

ことや君とほきつくしの海路へて来ましつくばやくよりかもの翁

をしたひ倭文子かなと見給ひてあばれにおほして歌しのひと

ひつるを聞侍りて深きみ心さしのほとためてくつかへりかつ千里

へたててわかこしのまなびのびろこりぬる事をなんいといとよ

ろこほひ侍りきいかて御まのあたり昔今の事とも聞えかばしてむ

とおもひ侍りしにゆくりなくかたらひまぬらするよいかばうれ

からさらん 君ふりに見る事のみいそしくてよみうたのかた

にうとくおばしぬとなんきこえたまへり千おもふにた歌はふ

りる世のさま計めてたきものはあなれ其ふりぬる世の歌をまれ

はんにはまつおのれか心を上っ代の人の心になしてこそまれひ出

けれ上代になさむにはふりぬるふみをも見明らめておの

か心となさむより外のことはあらしかし千いけなかりし時

のしを聞侍りしもしかこそ有けれ君うらなくきこへ給ふまへ

におぼけなけれと御よみの事は心にのこさすさく 聞え奉る

きなりしかばあれとみさかりの比おほやけ事にかつらひて何

計のとび明らめし事も侍られぱおほつかなきわさになん御まの

あたりにこそあなかしこ

さらに秋をしまたんときこしめる君かことは、むなしかりけり

あさ霧のたちのまかひにすきしきみ忍ふそ露けかりける

+九九

久しくおとつれまねらせすいかおにすらんとうしろめたくおもう

給へらる〵折しも玉梓の便のいへるみきればまことや父の君日

ころのみことちをもらせ給ひてすきにし秋腸にたちかくれさせ給ふ

とゆくりなくつたへうけ給ばりてたちまちにむれうちふたかりかき

くらし降る涙の時雨隙もなくたもとひろまもあらす あなかなしと

もいはんすへしらすなむさでも世の中は常なきちのとむかしより言

つきしばけにいつはりならすなん過に春眞幸東路にかとてし侍り

時みたちにまうてまかり申侍りつるに管の根のいともれもころ

に聞え給ひてさらに君をしたらんとの御歌をさへ給はせたるも

の己もおもひのほか東に長居し待りてちきりまぬらせしこともむ

なしくなりにたればたときその夜のいめとなんおもほくていとくか

なしくこそはやくもりまうて今一たびもまみえまねらせきりし口

しさよ おもへばおもへばばかなき世になん君ばさこそなげき給ふ

らめとみこゝろのうちおしばかられていひ出むことのはもなしやい

さかとふらひ申さんとてつたなきことのはとりそへてみもと人た

ちへまねらするになんあなかしこ

阿蘇の大宮司のみまかれる障て 其子 三位惟馨のもとに弔

「ふ

歌とももとある秋の部に菊花盛久とあろ題にてよめる

ことのけふのためとて植おきし我故郷の花をしそおもふ

秋風に香をたにおこせ故郷のの白菊めしゝらぬばゝ

歌とも千葉かもとまてとて

けふは長月の九日になむなくて世の菊ためつる日そかし掛まくもか

こき九重には前栽に喉をゝりたる菊にわたかつけ給ひみきちゃう

にはくみのふくろかけ わたしなみかば水の清きなかれに菊のした

りむすびて千歳のよばひなのはへみかばらけいくそたひめくり

ていときやうあることにこそあれ下かしもにもほとくよろこび

ふめる日になんあるこの秋やいかなる秋にそゆくりなく過し比よ

りやんことなき殿のみおもひにこもりて世の中ひそまりぬる比に

しあれば旅のやとりもなにとなくさうしうなかめらるゝに故郷

のあやしき前栽なる花なんいかに咲いてたらんなとことしのみみす

てつるかくちなしさによみいてたり

九月九日故郷の花かおるふ歌

すべせんすへしらに音のみを啼てそこふることきけばいともかなし

もつゆたにいとひおほせしなでしこのいへにしあらばかきなて

とり見む父のいかなれば獨おくれてうつせみのばかなかる世をくい

もくゆらむ

のまにくしょくしろよみにいにきと初雁のつかひつけつれいにむ

きのふたまばりたるみ いとすみやかにともの侍りしに例のか
たはらいたき調のみにて侍れすこしはかなほむふしも侍らんやよく
よく筆をくばへ給はれかしいつれそ歌になり待らんて贈り侍らん
すべて眞幸ばさとにありしほとは事ら古ふみのかうかへのみむねと
つとめたりしかば交藻にはいとも(つたなく手かく事さへわきて
びも待ちさりしかばたく己が心のまゝにかいちらしつつ歌もこは
くるしき口のまゝうそふき出つれは古のみやひには中々似つかうへ
うもなしましても學ももとよりつたなくなん侍ればいかはせん
しかすかにみつからはふらかしすてんもくちをしきわさにおもひた
まふればまずらの心ふりおこして幾重へたつらん 雲霧ふみわけ
つくばる(遠き東路にいてたちて今も此のみかとにありて思
ひかけする大人のみなしへの 深きみにかくろひつゝ朝よびにまな
ひかれるぼしにいさくらふ山くらき心のたと(しさも東雲のあ
けゆくやうにやうくしるくおもひ明らめ侍るさはいへなほいたり
いたらふしくそおほかめるれかはくは己が深きおもひことをし
もあばれみ おほさばいさつけものこし給ふ事なくあしきふしくを
はつよくいましめ明らかにさとし給ひてばれやらぬこゝろのくま

ばらさしめ給へ申さん事多かれとつくしがたうなんあなかしこ

(可)贈答はふき給ひても有なんか

千蔭返しの文(付箋)意也作歌別に詞書を作りて加ふべき

なり上に出たればころにはふきてからす

七九八

は木すら妹と兄ある世にしおもひたのめる大船の帆足の君は

猫子のめつ子をとめたひとのうかばらからなき風にはらふしつ〉

も一世に二見のうらの二たびもあひみむとのみ明けくれにおもひ

わたらひあら玉の年の七とせへぬるまにまたきにかよふ秋風のふき

七九七

田廬歌集巻六

たのまし竹芝の海のみるめのしばくもめし見ま

言と帆足長秋 女みさとかこそのはつきばかり 長門國二見浦と

はかなくならせ給ひける時

武蔵野やしける夏野に職五郎君四月十九日くすの名におふやとのゆらかせるそのすゝのれのさやかに聞え

も來すてこらくる年のへわればいやさやにきかまくほしき いやし

きによせまくほしく朝夕に我は思へとぬとおくとわればしぬへとそ
のとの木の柱にとりかけしそのすゝの緒の長き世に絶えてみた
れてきかへむよしのなければとりつなくすへのしられぱいにしへ
に所得とふ玉すりのおもひなかひきゝつかむ人にたらひもろ
ともにむかしへしふ磯千鳥音なきかよはしとことばにくちぬ名の
みかたみとやせん

きさかりに其殿にめしたまばしてうまゆみの歌つかへしめふろこ
との意ことくとひたまひ聞明らめておむかしみうれしみませる御
心の花のにほひに陥るさの道もわすれてなかき日の影をしみつゝ又
さらにまねらむ日をしそこらくにまたせるばしにおのか身しいたつ
きぬれば つきて行もあへめに百津舟つとふ入江のあしのけに磨き
こひにしまれて夜かされまされぱたちまちにあつくいましてまこ
ともとはさすなりぬいかなるや神のまかそも此 君の御命なかく
いましば うるはしみせす吾君をたすけたまひて古ことのまなび
さへそみさかりにおこしまさむと天つ水ふきこびのみ人のい
つきうかへしむらきもの心たかびて浦千鳥音にそながるこふこ
のはひたもとほり大丈夫の心はなくてたかやめおもひしたへとせむ

すへのたつきをしらす夕暮の空にむかひてなけきつるかも

かもとよりこびにつかばしたりけるに

常世しきてよさろふ神風の伊勢のとことばにしきしめばろゝさ

石の上ふるの神わさあるものをあらわしほりにまよふしれ人

鈴屋大人の十七回忌の歌をおひつきにあつむとて 石塚龍

わさか古も今もおなし世の中のすへなきものか 北神のなしますわ
ほしみかたらひて 聞まくほしみれもころにおもほしめして春花のさ

さそあやにうれたき

風鹿の膝折ふせてかしこみてつかへまつれる

我君のいろ弟の君は草の和かくいまして天雲の五十重か上に御

心は思ひあまりてふるき世の 手ふりしぼしふることのみふみ歌よ

み朝夕にいそしみますと賤しきやたらなき我をふることの道しる

へと大船のおもひいるところにて身まかりぬるよしきってかなしみ
て歌よ

みておこぜたるかへし 江戸のやとりよりふみのばしに

の歌もさらにたくふくしくへきにあらず かくれこそからさ

へにひむかしの神の御風と天つ水ふきかしこみ御まかひのやつこ

と名のりわたつみの涙路をわたりはろくにたつるみつきは大船

のさかちほさすとしのはにみつき来りてみょくにまつろふもの

まして 風のうちになりいてむ天の盆人ふときも きもの

誰かはわか天皇のしろしめす やまとしまれたひたふるにたふ

天照日女命天をはしろしめし葦原の水穂のは萬代に日の大御子の

す風としらさんものと事しよさし給ひて 久方の天つしるしの八

咫鏡御手にとらして神蔵ほき給ひて祚つきのよさんのまにま天雲を

八重かきわけて神降くたりいましてつかの木のいやつきくに高御

座天つ日つきは天地のよりあびのきばみてらす日月のむたうこき

なくつたへ来座て天下をさめ給へば物のふの八十とものをはかるか

やのつかさく御代かされつかへまつりて選長く親の名たくす四

方の大御民らもまつろへのむけのまにくくやすくおたびに

なて拾ひさめ給ひて 神なからしらし来ましてちなる萬のこと

ばもちつきのたらひてあればなにわさも ゆたけくためししかあれ

ばいともたふとくかしこくも有ける御石上古き神代 ゆかたりつき

いひ来たる すめろきの神のみわさは上代のみわさにしあれば大

直日直きの其まゝにまけすしひすいつはらすかさる事なく皇神

のなしのまゝなるこれぞ みわさにしあれば天下あらゆる国のもろ

とばさらむ皇の神のをしへを眞心にうけさらめやもしかあるに今の

世人はさひつるやからのくになるえみふりこちたきわさまさこ

とうけつかびつくあやしともおもひさとらすきたなげくうるさし

津神わか大王のかす風としきます

としもしれ人のあきらめえすて

ちはやふるあらふろ

国をゆくしくも東夷といひおとしのはしめば

らさばにして虎ちふ神大口の岬すたきて人の道なかりしかわ

たの外の西の風よりくたらよりひとりの道の物ったへ來りて今の

ことばひらけつ~うるばしくめてたき園となれりきと八十まかつ

日のたわことにいひときまぜておほけなく其 天皇の天下ります

わさをあなつらひいふかりかろめ人のおみのまめにつかふるこゝろ

ばとらへんなひからもじのさかしらぶみに村きもの心まどへろば

かぜらがからさひつりのたばことのおまつれことなくれ竹のよゝの

人々まさことゝとふとひてことにおほく月くさの花そめこ

ろたはやすくうつろひ行て今にもからのこさけに酔しれてくる

はしきものまなびのさきりの風もぜにみちひろこりで我のごこと

もして玉ちはふ神の御代々々有きちふその古事を其まゝにしろしつ

へし石上ふろきふみのまきまきもいともつたなきくに人のむかし

かたりとなほさりに見すきすき神ろきのおほきみのりおろそか

に思ひあなつりうけかばず 古き神代のすめ神のまことのわさはいか

なれはかくれすたれしくはかり世のくたれにもまかつびの神のみ

大汝少彦名神代よりいびつきけらくそらみつ大和は言魂のきち

はふ言たまのたすくるとそこなしもおもひたのみてねき事を人

田廬歌夥巻六

ますらたよ心ふりおこしいさゝめも手弱女なぜたばわさなぜそ

千藤六十賀に春蔵といふ事を

銀太刀腰にとりにき大王のしこのみたてと御代々にあかき心

管の根のもころくに二つなくきばめつくして天皇に仕へま

つれ、打なひくたをやめすらにみかも ますらと上つ代は事し

もあれば、しかる いさをありけりかけまくもいともかしこきたら

ひめ神のみことばもうちのいくさたつとへつはものとのへ

ましていさなとりわたの外なるさひつろやからの風へにおほみふれ

いきわたらしまつつろはぬのこきしを食園のやつことなしてま

たさらにかへりきましぬひろぬひめ大みきさきもいくさひとひきね

ましてやまと路ゆいてあひたまひせのみ子の御軍をしもたすけまし

近江の国にいむかひしあたたことむけ天下さため給びぬかゝる世の

古きあとしあきち原 つばらくに十寸鏡見とあきらめますらな

のとこさひすてあらまし物

のみ代よりおほみ身に太刀とりばかし廣矛を手にとりもたし波斯弓

に天のまか矢たはさみてくぬちことはきよめあらふる入ら

ちはやふる 神をまつろへ玉かつらいやとほなかに くしろしめし

われすめらへにつかへまつれる臣の子も八十件男も物部のゆきき

八隅 大君の食園と敷園の敷島の 天地のわかれし時に

すめろきの神の命の大みわさはしめ給ひて大八洲海山川草木をも

生なし給ひうつそみの世のことわさたことくにきためたまひて

七九玉

しらそれにはしける烏羽玉の妹か黒髪わかれこしより

小弓いるわらは遊のいとまにもちゝのかへさはいつととふらん

うれたみうた

江戸のやとりより家なるかみなめによみておくりける

我君の出立のまに袋ひて来づくに鳥啼東の風に僕の年の一

とせ 武蔵野の草の枕に旅紐ときさせず夜をかされまろをすれば

大丈夫と思へる我も手弱女の思たわみてしぬふくさしげる わか屋の

さみだれのみたれてのみやこふる子のその子の母もまけなかくまつ

らむ物とあけくれにしふ心に手まくらのいめにやかよふす鏡か

けにや見ゆるいひやらぬおもひのは玉梓の便もつけしとる筆にか

きもつくさす思ふ子をしぬふるつまた飛鳥の翼しあらば天つそらか

り行てもあひ見てました

とぜ萬代までに幾かへり立かへりこん春ことの霞ににほふ山櫻花打

かしわらはなす老せすあれや名におばす屋との橘其みさへ其花さ

へにいやてりにいやとこしくにありつくも君にあえやも萬代のはる

春ことの花かりかさん百とせも千とせも君は老せさらまし

これこそことあけそするこの君の長きよはひな 千五百

みなすなれ

めりイニ かはあれとイニ

すみれしこゝろをくみてすみだ川みめ世の人のかけもこひけり

なつさひてうなかみかたのになれずになれてもすたく友千鳥かな

隅田川のほとりなる整子のむかしのひとの過日とて四月

十日まり五日の日にふるきたおもふうたこへろ闘野清修

かすゝめにまかせて

千 島

右五首は寛政此のもの

大ひえやひえの嵐吹ときて雪の花ちるしかの山さと

かのこのさゝに霜さえてかけすさましきのよの月

名所雪

難波江のあしまをわけて舟のへにもともにも雪の花ちる

閑庭冬月

みなと風寒くふくらし難波た潮干のかたに千鳥啼なり

雪中

肥後文獻叢書第二

かしこきや すめら御風は百千々の風のきばみに天の下いてらしませ

茜さす日の大神のあれませるもとつみ天地の神のつくらす浦安

ののびてますらかのき雄固いつ風のかしこきと玉ちはふ

よわくったなきのこらを付けましさとせる歌

石の上ふりにし代より世の人の言けらくあめなるや棚橋つ女はあ

玉のとのひとまちわびてあふよばこよび彦ほしのはやもあ

ばんと久堅の天の川原の夕霧に手ひつち川波にものすそわれてた

たわたりいわたらすとふこのよらそ雨なふりそれその川の水しまさ

らばぬば玉のこよひのちきりむなしかるべし

神風やみもすそ川にみそきしてくにやすかれといのりこそすれ

掛まくもかしこがれとも玉たすきかけてそいの君か八千代

七夕のうた

神風の伊勢の国とのふの宇治のわたりは山からか木立もしゝに水

からかさやけくすめりもかれこそ上つ御代よりみやはしら太敷まし

てこゝにもしつまりませれきゝことまことたふとくあやしくも

神さひいます神の大宮

伊勢の大神の御前を拝み奉りて

長歌

田廬歌集巻五

たよりなき人のまろれのさむしろに思へばかなしさゆる夜嵐

柿の木末にかへろむら鴉啼さわくまてふくあらしかな

冬夜嵐

あつふすまよとこもさえてかてのあかつき深く霜むすふらん

冬夕嵐

春山にしみしばなの面かけたくへてもろき木木のおちばか

曉霜

かれる田におふろひつちのほにいてふたゝび秋のさかえたそ見る

落葉

かものなくなつみの川の山かけもさすがにうつるにはのいけ水

門田にひつちのをひたるた

さかの入野のすゝききりにほのみしかけもうらかれにけり

御庭の池に鴨のうかへろを見て

あそのれの夕ゐる雲の廻り来て託の原に時雨ふりけり

野

玉うきにうきしあふいにしへもおほゆるばかりおつるつきの葉

時雨

落葉

こめ高根の雲は晴初外山のさとになほしくれつゝ

を見て

雲のゐろあそ山あらし吹しきてあられたにしろ御狩野の原

十九三

露もり苦屋の軒もふりつもる雪につくろふ小山田の雪

霰

狩人のあさふむ道やまよふらん降つむ雪の深くさの野は

田家雪

月のすむ秋の夜のみかふりつもる雪にはてなきむさしの原

狩場雪

手はなれの鷹のつばさもたわむまて吹まくかせに雪はふりつゝ

風さえてつもれるきその白雪にけさ跡つけていつろかり入

野雪

友よひてかよふ水島の磯千鳥野阪にかよふ聲の夜ふかさ

幕行年のひとよのあきば我かへさちかしと待たむ家人

白雪のふりつもりぬる老の身をわすれて踊る年いそくらん

浦千島

のこりなくちりしもみちのむなし枝にいろなき秋のいろはみえけり

大江戸にて年のくる夜によめる

落葉のに

立かへる春は一夜になりぬれとみゆきつもれる遠のやまく

歳暮山雪

白雪のふりにしあとたつれてやふみゝんよぼのまとの暁

ふかき御庭の木々もうつもれてふる白雪の山なしけり

もとよりも玉しきみてし御庭をも月にみがきてつもる白雪

だれこめし母屋の玉たれかけてや風にみたる雪を見てまし

雪 見書

山つみのかさしの紅葉ちりばて雪まつ嶺を空にさへける

さよふかしたゆるはゆまの鈴の音も霜にさえゆく足柄の山

として御の雪を見て

なかへり旅居に年もくれ竹の一夜のほとになりにけるかな

一夜あけば次かかへさたまつの月にかさなき子らか待やよろこぶ

降らなむ春まつよひのうれしさにいとゝかりの夢も詰はす

門の松しめ引わたし家ことに年のいそきそいとなかりける

くれてゆくとしのいそきにもろ人のゆきひまなき市路なりけり

竹のとの一夜に梓弓かへらん春をまつそうれしき

ゆたかなる御代こそことにうれしけれ冬をもしらめ埋火のもと

年のくる夜によめる

すみの江のおもひたとめの玉かつらちりかみたるるあられ松原

十月十五日よへ時雨いたくふりてつとめて高とのより 西山

さ夜ふかみ照月さえておく霜に色をまかくてさける梅が枝

寒月照梅花

~

あつふすまなこやか下にやす寢してわひあへ身のあばれたそおも

立かへる春待かれて白雪のまたふるとしににほふ梅かえ

寒夜

くれてゆくとしのいそきもわすられて来る春を待えつるかな

年内早梅

ふる雪のふかき路ふみわけて入に人の跡こそとへ

年内立春

神無月まなき時雨におく山の岩がき紅葉色はふかしも

冬懐舊

露むすふみきばのさの霜よりや堅くもこぼる庭の池水

なつみ川なくなる鴨のそひて御舟の山や風さえめらん

*

くれかわるこちのみしてふる雪にまきの板戸もさしそわつろふ

冬の歌の中に

薄暮雪

七九二

歌五

秋の夜のあばれはいとくふかくさや醤の床を月も問ひきて

故郷月

秋かしまの海士の馴なれて波間の月を見ろらん

なれも又とこよの秋をこふゆいかにおなし旅なるあまつかりかね

妹が名をまつやとはまし啼わたる初かりかよいかにつけしと

花さかさとにはすまぬ我なから春はおくれわかりのやとりか

海邊月

旅にしての壁をきくて

中々にほかの盛におくれてそにほひばふかきの下きく

このれるあさけの風にちりてほころひそむる萩花つま

殘菊帶霜

秋田かるかりほのとまやあれにけりあかつきのいくよもりてか

いかての月のなみたのつもりてや小萩かもとのとおくらん

早秋萩

ふるさとの人もすむ夜の月影にこふるころやくまたなすらん

暮秋露

七九一

月も日もながることくくれ行て春はひとよになりにけるかも

もろともに朝くらうたふみや人のこゑすみのほる明かたの空

千早振神代のまゝの神あそびうたへはやかてくる天の月

年くる夜

すみだ川さをさしのほろ舟人の袖白たへに雪をふりける

神樂する所

埴安の池のつみのなみつきに枝もたわらにつもるしら雪

雪の降るに人々舟にのりて

のころのなさに霜さえてかけすさましき冬の夜の月

池邊雪 當坐

今朝のさけましろの鷹を手にするて雪ふみなつみ出る狩人

閑庭冬月 千东亭兼題

きのふこそいにしかいつのまに空かきくらし時雨ふるらん

雪の朝鷹狩したる所

夕さればわきてさひしき里にこからはきにけり

時雨

山家初冬

田廬歌集巻五

枯のこる池のはちすの下水にうつる紅葉の色はふかしも

井口正方渡邊氏足かあとより来れるに

あるにそめある葉の下紅葉なかばちりぬる花のかたみか

春秋のたむけにあかわかきみのとこみや所みれはかしこし

花ちりし木末をとめてけふばたきたしのふ木々の紅葉

あかもひく妹にならひて秋ふかき山の紅葉にてりそめにけん

十月十一日龍田山の紅葉見に人々とともに行て泰寺の庭

の池のほとりにてよめる

大かたに思ひ入るさとの秋にしかのこゑにそ有ける

春花のおもかけみせてよしの川くたす筏も紅葉かさせり

山中秋興

はやくしもふけゆく月をとめてそに山のほのかびは有ける

水上落葉

春臣長月の名におふ夜はのかひもなくばやく更行月のかけ

かなとよめるに

みやひなの心にくまのなけれはや天てる月の影もすむらし

中島春臣 くまもなくかたらひあかすみやびたの心にあえて月

はてるらしとめるに

ますらなか弓にきてふばしか枝の下葉よりこそまつもみちけれ

松間月

肥後文獻叢書第二巻

故郷の人も今夜に入ひものおなしこころに月や見るらん

しきてよろてふ 神風のいせのうみの底ふかき神にかつける白

玉の玉のゆらにうなけつるその玉の緒は糸のよりあばれかも其

のたえてみたれて二見たそこのいくりにましてそのしら玉

たいせしまやいかなるあまかふたゝひもがつきあけてん玉かつらた

えぬひかりをとばにてらさむ

おしている山田のくろのさのさしもやすけき住居なりけり

鈴屋大人の日に秋といふこゝろを

いさり火のかけかとばかりみなそこのうかもよりこん岸の紅葉

十月ばかり立田山の奥山田といふ歳にして

蓮葉のにこら池のかゝみにはかけも下てるやまのもみち葉

くれやすさ日かけにおちて龍田山月のかつらも立そめにけり

いろふかき山の紅葉もさしかばすさかつきにこそてりまさりけれ

紅葉の水にうつれょうた

かべるさによめる

てりまさる月のかつらのもみちはのかけわきもこかいへちわすれて

一夜れてまし(旋頭歌)

東の空に月の見えそめければ

おれてしまちえてそ秋山の木々のもみちはてりまさひろ

むさしのやはてなしとのみみし秋の月をこよひはやとのまゝにて

今は又むかしなりけり入方の月にしのひとこゝろつくしも

八月十五夜

初雁の聲聞て家なるかみなめにいひつかはしける

わさもこかめる夜ふけゆく秋風にまつとやつけ のこゑ

八月十五夜蝕人々歌になきかといへり

よひのきのかけこそしばしかくれつれ更行月そまそかみなる

中空には光のきつるは月もおもひのふけとか

露おもみ萩花つま折掛て玉しく野へになく鹿のこゑ

てる月の影は千里をへだてれと心つくしの秋のよの空

おもひきやすむ秋を三とせまでかたしく袖に宿すべしとは

月のいる空にいちのしたばれていてなきむさし野の原

鹿

秋風につゝれさせてふ虫はあれとまよひかちなるしつかき安

月 武蔵にありて

こその秋におもひなれてやふるさとのわれたまつ出音にたてらん

わかのれるはゆまつるとふるさとの人もやさやく鈴虫のころ

虫のなきける聞て

かくばかり風すゝしくなりめなり麻衣の身にそばぬまで

はつせ川はやせの水に月すみてのへのしかのそかなしさ

月になくつか野の鹿や露霜のふりに夢をつきてみつら

瀬山のへの月に啼かばや瀬の水のあかすとやなく

の紅葉

七八九

やしほにもそみとそめなぼくれてゆく山の紅葉もかひばあらした

月下

所せき菊のにほひふかききりのまかきもへだてさりけり

山人のいかにつくりてみそのふのきくに千年の色をみすらん

村雨のつゆににほひてまぜのうちの菊はくさいろそふかむる

暮秋紅葉

しろ木にいさよふ涙の音のみそたちもへたての宇治の川霧

御庭のきくによみて奉る

山川もよりてつかへし神の代の瀧のみやこは霧こめてけり

ゆふば川さてさわたす下つけや水上かけてかかるゆきり

よしの川花さしわけし筏しも遠近たとる秋の夕霧

夕けふり立さかえめる秋見えて四方にたえせめ萬代のこゑ

河霧

うかりける其年月も今は又わすれてかたるれやのあかつき

みとせべて草にやとりしかけたこよびつまやの軒に見るかな

花園の御館の高とのより

かよひ来る風もなつかし秋のよにはさしかばすかさゝきの橋

七夕島

玉の夜寒みかも枕つく我とこのへにこぼろきなくも

五首寛政の北の也

しかふす野へのあさ萩霖ににほひそめけりちらまくたしも

萩の花ちるらん野へにふすのつまとふ弊もうらふれにけり

秋夜

天の川ゆふなみ高み木なれささしそわつろふ月人をとこ

秋野

いつしかと門田のいなばおとつれて袂にかよふ秋のはつかせ

もとゆびにしものおくまては玉のその黒かみをかきもそめなん

かへりこむ時には父かわすれたれか來めるといふかしみせす

しかちゝばいつくととへばかなりの言葉にえへといぶかめくしさ

ことし髪置のよろこひせきすれば

夕からすれくらいそくすなりあそふ我子も今やかべれる

としもと我子らばちゝのかへさないつとまつらん

さなきかわきてなしとするおやの心を今はくみてしるらん

父はいつととふ于か言にしかはゝのつゝむ思ひやいろにいつらん

【肥後文獻叢書第二巻

いつしかと袖にまた夕風にほころびそむる萩花つま

早秋萩

霧はるとほのへの風に啼て秋の別をそらにつけけり

むら鳥の羽かせなひ引板なりてふせのまとや月そもりける

りにあびてもりあかすよの月影は心あかでもすみわたるかな

田家暮秋

さとくぼみ人こそくまれみくさおふるせか井の水に月にすみけり

八月十五夜とのゐして月を見て

むさしのや月のためにはつくらめを野分にまかすかりのいぼりか

すめる夜の月にやとはむきしてあれしあかたの宿のむかしな

月

すてしひだのはへ桁にけりかり田のすゝめ立もさわか

おくて刈る千町の田面秋行はもりすてられし引板のはへ

野 分

あきばきの花のにしきた五百ばたにたなばたつめそ様にしめけん

田家秋暮

PR

秋ことに契たかばめ風やみつなかばにことは間ばれと

七夕草花

七夕柏

七八八

四

かたときの日比の袖の露けさばものかはしかのこふるこ

うつろはむ釈をへだて、千代ふかきまがきににほふ白菊の花

旅宿 同

おもふ秋の日はけふのみにくれゆくそてそ露けかりける

けふのみにくれまくいとしきかなむかしの秋を思ひたくて

末遠くみわたす野邊の川霧もかつきえそめてなびく朝風

九月盡 鈴屋翁忌辰 追悼題

ふくろおびて行や東の道すからすさめし筆の心みしかさ

御館の高殿に登りて東の方を見て

うるおきし人は五十ちの昔にてのころかたみの松もくちにき

東の行かひの部の末に

末つひにたてむ煙のためにとてうゑやばおきし松の五葉を

ひしゃ への君地にうつしうゑ置給

おほ 君身ま 給 今年五

り

り給

なべてもくれ秋にさきちていろつきそむろばしの紅葉

八月の九日の夜風いみしう吹きけるになる五葉の松根く

此松今より十年の昔よりおほちの

ちてたふれたりければ

松を推

君大阪より箱に

あれ夜の野分にあますおくてもたのみありける秋に見えけり

御の中にはの紅葉ぜろを見て

七八七

はしに

東にあり地域のたよりにつけて家につかはしける女の

せしもさまるからかたや残る夕日の影も薄ひて

むさし野や野分にあれの庵にとまもる月のかけやもろらん

野分せしくさの枕の夢路にもたふせの秋をおもひこそやれ

葉月十七日夜あらき風いみしう吹て雨はたつよう降ければ

いと夢をも結ひかれて

ゆめなたに結ぶ程なき枕へに何ほにいていまぬくん花か

九月の初めばかり龍口の御館の西の方なる假宿りの窓なる

草原に夕風のそよ吹けるを見て

軒近き川瀬の水にかよひ来て音打そく夕立の雨

つくろばて月待軒におとつれてひとつら過くる初雁のこゑ

八月十九日吐月亭にて夕立しければ

たしかふすつか野の草のかり枕むかしの秋の夢やあはせむ

野分してのちの啼ける夜に

かきりあるけふにくれゆく日数にもちよなか月の秋やたのまむ

九月もけふにくれゆくとしてもこのたゝよくもなし

山かばに残る夕日の影くれて行したふ岡のへのいほ

旅宿

九月盡祝 日淺園當座

不破山のせきば木葉に閉にける月のもりにはいく世

くれまとい路をいそく旅人のまとふまてちる木葉かな

てつむ庭もせきまて八つかほのたりほの秋は千五百代にもか

別々にしげき多けのけふりにもある秋のさかえたそしる

かしこくもゆるすみつきのあばれひにきえみすらん

聖路落葉

立こむろ末のゝたの夕きりに音のみむぜふあきの川水

あきばやくなかは更行夜のそらにふるもさびしき雨の音かな

霧隔川

いととく心づくしの秋風に何かうしとか虫のなくらん

あきば早くれゆく夜半の川風に音も観れてうつ衣かな

つくしよしと啼蝉を

秋もやらなかばめる夕風にうらばかれゆくむくらふのやと

河遠排表

水

ほり江こくからのしつくもすむ月の光そへばや玉と見るらん

月のすむほり江の水もはやければなかる影もよとまさりけり

肥後文獻叢書第二巻

にしつく玉もとてりそいてひかりくまなき秋夜の月

題しらす

山吹の春の面かけ水底にふかくもにほふの水

とのいにありて御庭の池のほとりにつばといふ 草の花さき

たるかけの水にうつれるた

ながつきの木末は春の面かけにさきかへりたる花の色かな

おなしきまり八日の日とののかへろさ 北の御門の前な

川の堤にうるし櫻の花の春にひとしくさきかへりたるた

つくろはて月を枕にやとさまし野分にあれしかやの軒には

八月九日の夜風いみしう吹て後

そともなるふもとにたちて天雲にあふけばいよ高きふしの江

右六首日田御代宦鹽谷大四郎様のもとめによりてのうへにか

せ給ふなり

とことばにたえめ手向かみちのくのまかきかしまによする白波

吉田富士

かれたてる入江の背に属すきてすむ月かけもふくる夜の空

山川にわたす土橋にほろれとしたゆく水に月も濁らす

月に芦

立そむろのへの霧に壁にして田居におりくる雁の一つら

橋下月 盡賛

右三首は君より三つのを拾り歌よめとおほせことありげろによ

吹上のはまのよろなみ月すみていろをあらそふ白菊の花

山川にわたせる橋のしぼくもゆきかふ釉にかなるしらきく

ぼくもかよふ山路にかかり來てきくさかりなる川の架橋

桁ふみて妹かりかよふ板はしのしたにこぼれてにほふ白菊

わたりゆくやなつまん所せく菊咲にほふ川のたなはし

よろかよふ神もまよぼし白菊の花さきにほふくめの岩橋

月前菊

千世あせ花のいろかなかことにていく秋めるゝきくの下露

橋邊菊

秋の露かにこりてか床さやく此暁のしもとおきけむ

寄菊槻

秋の夜の千よ長月にそめてうつろふ色をしら菊の花

の夜の千よ長月に戻そめてうつ

ふけゆかは晴もやすらんやとの名の枕にしろまちの月

菊花盛久

夜風の音吹かよふ川のにやく影おそき月を待見ん

枕硫亭小集宿題に水逸待月

川をひのつゝみのはしの下葉よりやゝてりそめる夕日影かな

思ふことなき身なからもいこたれつくまなき秋の月にむかへば

江上月

露霜の袖にいくたび置いてくれてゆくしきのふらん

ちょきをしらせて露ふまかきににほふ白菊の花..

暮秋懐舊

むら鴉れくらにいそく壁ばしてタ日かよふ西の山のは

籬菊

麻衣身にしむばかり吹かせに木末のせみの壁をしくろゝ

秋夕

露わけて人もやとふとこ萩さく庭の夕は立またれけり

秋風涼しく吹ければ

神なから手向るわさと見し山の紅葉にあかめ神やなからむ

庭 萩

もみち葉はまたき時雨にそめて秋はつれなく幕てこそゆけ

神紙

秋たけてさよ風寒み啼虫の壁もかれ野のやの枕へ

暮秋紅葉

北風吹て虫の啼ける夜

みたまひける歌

まちなかりけりとりゐにふかす 夜の月かけ

見ろまゝ

の男かぼすをはらふとて夕暮いそくむらさめの空

江戸龍日のとのゐにて秋の月詠る

風に散の木末も多くの空にみたるむらからすかな

李秋村雨

きのふよりけふばまさりあすもまたつきてみむろの山の紅葉

夕暮鴉

いかばかり思ひ入てかお山の木々の紅葉はそめまさりけん

奥ふかく思ひ入める山里は紅葉の色も世ににさりけり

浦安の園の名しろしてる月にくもら御代の影あふく哉

紅葉深

うかりしもうれしかりしもむかしへや今は形見の秋夜の月

寄月祝

皆入れよとのりうつたへに物かなしくもすめる月影

月前幽情

秋のよの月まつ宿とひてましたかきのしろへに

よひのまのくまとなりに浮供もきえてふけゆく月のさやけさ

月前松

月前

秋ふかきの木末にさきたちて黒わのを下葉てりける

びちかきてうゑてし賤千代田に長五百秋のそみる

石丁橋上より

\

大みたから肌たる色もなかりける八束垂穂の秋のしなびに

九月朔日宇出泰雲寺へ御代香としてまかりける時道にてよ

める

さす棹のかけ見の秋の川水に月のみふれや酒出らん

かくばかりあばれしらんと秋ふかきのへにそしめしゃとの月影

八月十日水樓天眞亭月

ふかみ身にしむょはの秋風に野もせにすたく虫のこゑく

あたにたつ名はありめとも女郎花なまめく野へに一夜れなまし

ふかき野への千くさに影さしていとばれそふる夜の月

おきますなばながもとの白露に光をみかく秋夜の月

野亭月

いにしへのあばれしれとやよる涙の音吹そふろすまのうら風

もしほやくあまのなれ釉せはみいと身にしむ油の秋風

題しらす

川ょとにうつろふ月の片われに秋もなかばの影を見えける

海邊秋風

月影澄水

七八四

丽歌巻四

月十五香福寺7月

月あかきょにのりたる人の川水に盃をあらふかたに

みなれ棹さす手たゆたふ盃に月もくめるあきの川淀

秋の夜の更行空にすむ月のあばれたそふろむしのこゑく

秋風にさそばれいてしかりかればわかふるさとや過てきつらん

我ことく物やおもへる輝かれも草の枕をかりとこそなけ

ひくらしの山のとかけにふけてひとまつむしの壁をさひしき

旅のやとりにして雁のわたろを見て思ひつゝけたる

秋ことによへる雁かれも壁のほとはいつもいつもめつ

・枕たひれの朝け空ことにすみわたりてさしのほる日

いといとうるぼしきにひとつら 二つらよひかはしかすかにな

わたろふこゑこそまして耳とまろこちすれいかに古郷人の

玉つきやかけてきつらんとしとみをおしあけてなかめいてつれば

いとひろかなるむさしの野の空にほそうわたりたろさまだとへば

ばなた色なら紙にしてきたらんやうにてかかしうみるものか

ら中々おろかなる筆に詞につくしがたうなん

むしの音はいつれともなきあばれさも君によりてそ思びわくへき

千古

覽

れやの戸はさらにもさしさらら た萩の錦にふくろよの月

七八三

雲の上の御はしに近くすみなれていく秋月のもりあかすらん

深夜月

しろらめやふるさとにしもすむ月を草の枕に夜たた見るとは

禁中月

あきのよのあばればいと深くさや鴉の床月もとひきて

旅宿月

ぬれつゝも分行末はたちの野のつゆより袖にやとる月影

故鄉月

おきあまろ露みよすかにいめ人の伏見の心にやとる月かけ

いく秋かしまのあまの馴れて波回の月を見るらん

田家月

遠江引佐細江の水をつくしみを葬てや月もすむらん

海邊月

くまの水をよく夕風に月の御舟もさし出にけり

秋のよの月すみのほろ阿蘇のや煙の外はくまたにもなし

嶺

月

うるおきしやとの白菊いく秋が君かかさんとさきにほふらん

歌をやさ于からとにかくろとてよみてそへたる

菊花秋 菊崎檢校七十賀やさ子かこへるによりてよみて贈る

女郎花名をなつかしみ秋の野にいさやとらせん今夜はかりば

さらめたにゆきすきかたきあきの野に女郎花さへさかりなりけり

今さらに物なおほしそばきの花のにしきにたちましりつゝ

秋萩の花の錦に立ましりいまさん君はものおもばめや

女郎花を

験なきものはおもはばきの花のにしきにたましりてばと

よめるに和ふ

まぜのうち味をかりたろ白きくのにほひをそへててらす月かけ

月済みそれともいさや白きくの香をしろへにてたらばならなん

千族が病につ萩の花をおもひて

家にあらば獨のみやばめてなまし旅のとこにさゆる月夜を

こひもむさしの原にてる月を故郷人はいかに見るらん

月の夜菊を見て 千葉亭兼題

夕されは峯にもなにもさしかの秋のきもろ聲になく

八月十五夜旅にして月をみて

紫の玉とこそ見ればきのにほふかうへにかけるゆふ露

鹿よめる

肥後文戯叢書第二巻

いつれそとわかの中にも鈴虫わふりすていたきとこそきけ

々にきそへる秋の虫の音をいつれをよしと君わきゝつや

返し

三島自寛村田春昌 千古經覧等にいほりのかたに虫の

音聞にとてゆけるてよみて贈る

長月やまたき時雨の空ばれてのころ夕日の影にほへる

秋だけ野分にひかわひたなりてふせのとまや月そもりける

秋の末つかたに

山人のかさしの菊のうけてのむ盃に千代も經へし

田家のうたに

菊

春山にふしみし花の名残とてきすかにもろき木々の落はか

松風のしらへよりふさきにほふ詞のはなに千代そこもれる

落葉

やさ子返し

>よめり

右やさ子いまの世の琴のしらへ菊崎につたへてつれにひけ

りこひも師の賀歌とて人々にすゝめこへるまめこゝろためて

たをやめのいぼふころないく釈もにほほん菊によそへても見ん

松風も千代にかよはん手弱女のけふかきならす琴のしらへに

あばれさのいつよりもけふおもほへて夕風わたる庭の荻原

こゝろあらばゆめなちりそ吾妹にさなから見せお様の上の露

幽栖萩風

萩の露みおとさて折て

九月十三日夜龍口のとのみに行とてきみか宿にうゑし秋はきにけりなしかのこゑのたえせするかな

られつゝ

かりかねのきこゆる空に月すみていと、身にしむよばの秋風

て

九玉のうち當座

秋の夜の月みなしおほかる野へにおつから道ゆく人もたちとおりけり

おなしく東にて夜のをきって

野花 村田春海亭月大会の歌

はつかりのこゑきゝしより打つれて春いつしかと待日そなき

武蔵野の花するにおく露のひかりをみかく秋の夜の月

東にありし時初雁のなけるをきいて

名所月 縺か家の集歌

ほのいてゝなびく門田の夕風にまつまたれる初雁のこゑ

小倉山とよむまてなくはへたたる涙なしのふなろらん

みなへしといふ事を句のうらにおきて

ゆふくれの露にしたれて宮城野のふるのも昔をやこふ

逢見んとあさけゆふけにこし物かなとか人のつれなかろらん

く生出ければ

けにこし物名

水上はいかにして白雲のたったの川にさらす錦そ

龍田川紅葉

てほりにやりて其やとりにうゑられたるみやこにて木村豊持のむかし京に行てすめりしほと宮城野の萩の根を入し あばれさのいつもにかばる夕かな音吹かよふさの上風

むつまし

くかたらばれし井上何かに其根をわかちておくられしないま

ももたろよしにてこたび豐持の孫のもとに根わかちてる

(京よりおくりけるをやいて其前栽にうける枝葉うるは

さびしさはなれ すめる夕くれに音たゝならぬ荻の上風

禁中月 同すむ空につれて聲さやかにもわたっ誰かね

故郷のふ軒に音つれてさよ中ふかくわたるかね

なくかりのこゑきくことにふるさとの空のみいととなかめ江戸橋をわたりて

河きりの中にわたせる橋のうへに夜長月のつきそすみける

ともさやにてる月のかけにいたるあきのみやひと

千蔭かもとの前栽に萩のさけるをみこのやとのこはき咲きけり山にはしかつまよび今や啼らん

萩の上の露

つゆしものさゆるやまとにかれやらて啼すさひたるきりきりすかな

長月はかり久しくとはめ友 とに

むらさめのふりすさひたろ夜もすから啼こそきそへまつ虫のこゑ

かきくらとふることしのふ雨の夜にあばれたそふる鈴むしのこゑ

きりきりず

萩なりやかりの床におとつれておいのまくらにかよふ秋風

雨夜

おとなふもさびしかりけりあれまさるつま屋の軒の萩の上風

萩聲近枕

にほのうみや八十うらかけてすむ月にそこの玉藻もてりそばりけり

萩風

江上月

すむょばの月にころにあるやいかにきけばあばれもふかきょの虫

右十一首月題よみて奉ける時のかへうたなりみ てたるみあた

とて更に書とめるになむ

月前虫

すさびする雪の雨風かつばれて曉ふかくきゆる月影

曉に空ばれて月さえけるた

いつしかと待れしよひの月かけたしかもかくすが雨雲のそら

肥後文獻叢書第二巻

八月十五夜雨ふろ

胸なくていさみにゆがむくたら野の古枝ににほふきの花

夕日がけくれゆく野への遠近にくらもとむろむらからすかな

おのつからなれる錦 たったの山ののもみらは

いとゝしくあばれそばれる月影にうつやきぬたの遠近の

山紅葉

青雲のたなびく日すらたつきりにつくむ箱根の海もかくれぬ

船木きろ音をたてわりきりに遠近たとろあしからの山

月前捽衣

やとりせんかたやもいつらまくらかのこかのわたりこむろゆきり

山路霧

山のはの豊はた雲に入日さし紅にほふゆふくれの空

けさ見れば門田のわせのいくほともなくてかるへく色付にけり

日がすべてあれゆく床の暁にあばれたそふろさなかのこゑ

あきふかくなるしるしにや音つれもたえて程ふるやとの鈴虫

暁

ちはやふる神代にかけしまそかくみくもらて照す月はいく秋

天の下うこきなき世の政ためしにすむや月ょみのかけ

月のすむ秋の夜すから絶せめばたかためにうつなるらん

すむ月の影もふけゆくさよ風にいとかのうつなり

月前祝

月前排左

大くらの入江のなみに月さえて数もあらばにわたるかりかね

月夜に夜よしと秋の中空に告てや雁の渡るらん

あきのよのふけ行空に月すみて啼すさひたる虫の壁々

露むすふみになか末に月落て啼明しめる野への虫の音

月前雁

八千くさの花に結べる自の光をそへて照らす月かけ

武蔵野やかになくす花おく露のいろをあまたにやと月影

月前虫

色かへわ松のひまもる月かけばとはにくもらて照むとそおもふ

吹ばらふの嵐に雲きえて木の間をもる月のさやけさ

月前草花

野らとのみあれにしやとの庭なれとかれすも釈の方はとひけり

ふかき庭の千草におく露を玉にもみかく夕月のかけ

見ればかつ昔の秋の雨かけたしのふかにすめる月影

七七九

大空にくまなくてのみ見へきかばのこしの月そことなる

ふかき光をそへて照る月に露の玉とく庭のあさちふ

庭もせにおく白露を玉とのみしきても見つる月の影かな

松間月

すみだ川汀のあしに風さえて綾瀬の波にみたる月影

とめらか調布さらす玉川やさらにもみかく月の影かな

庭前月

飛の翅の外にくまもなし 木立山にすめる月影

川邊月

むさしのや名におふ秋は水のあとかおひてもやとる月影

草に入りの行へやしらぬびのころつくしのふるさとの空

山月

つけわたる鳥の八聲に霜さえていやか軒はに月かたふきわ

野月

うつそみの世の長人となき世にならへて見ん長月のつき

鶴聲茅店月

九月十三夜

右三十七首久佐の波可と諡け双子の歌

よひのまの雨雲ばれて曉のそらにみかける望の月かけ

待月

おなしき夜とのゐにありて雨風いみしう降てのほとば

いとくちなしくてねつるを暁にさめて見れば

ふるさともおななかばの秋にすむ月はへたてし望のよの空

十五夜月

渡守くれまやいまもいそくらんすみたの川をこむる炊きり

やとりせむ家やいつらぼみわか崎さのわたりこむろあき霧

ふりにけるあとはきけとしかすかのわたりやいつく歌きりの空

八月十五日とのみにありてかしこきおほぜことをうけた

まばりてよみて奉れる月十五首

寝てのまくらにそれとむさし野の草のはつかにのこる

故郷のたより徒夜のゆめ路にもきけばなつかし初雁のこゑ

咲花にうらみしまゝの一聲たけふめつらしむ秋のかりかね

啼わたる初かりかに家人は打つれて來む春やまだまし

すみだ川きり立こめてかつしかや田の面にわたる雁のこゑ

にほ鳥のかつしかわせにおく露は今朝をむろ雁の泪い

古渡霧

奉れる初雁

八月九日の御舘にとのねして御下賜ばりてよみて

肥後文獻叢書第二卷

庭前月

たきちゆくはやせの水をせきとめていさよふ月の影もみてまし

都島きて遊ぶ見えて月のすみたの秋の川水

遠近もわか深山の中なれとおほつかならすすめる月影

筑波嶺の地面のもにきりばれての居に移ろふ

海邊月

こめし夕霧ばれて岡のへののこのまにみかく月かけ

本立もあらばに見えてすみのほる月に並びの岡の松かえ

山中月

見るまゝに心もすみて世にはまたおもひくまなきょぼの月影

むさしのや花の末の白露にいく秋なれてやとる月かけ

秋ことにかけうとからすてる月に馴ても見るかよひの空

おなしくばこゝろあひめる故郷の友と見まくのほしきょの月

寝よとうつ鐘のひきはゆれとなほいかての夜の月かけ

たのめつる人ありかほに夕雲にはしいきょふ山のぼの月

うたれの夢もむすばめ手枕に待夜める有明の月

見月

歌集

おのつからずゝしくもあるか池水に影さへすめる夏の夜の月

右十二首は寛政の鈴屋の筆加へ給へろ也

さぼへなすあらふる神もみなつきの今日のなこ になこむとそきく

夏月涼

君いはふそのかみ山のあふび草いく千代ふとも色はかばらし

六月

あふひ

けふよりは罪もらし白川のたきつはやせにみそきしつれば

ぬばたまのやみもまよに卯花のさかりに嵌る里の中道

さみだれのばれしゅふへの雲まよりさやかにてらす月のかけかも

水無月

さつきやみおはつかなさに郭公なくなるこゑは空もとろに

足引のみやまのおくにいたらばともしくもあらし 時鳥

あしびきの山時鳥わかことくいもにつきよたゝなくらん

雨後月

おあまろ袖の露とふ物はあれしつまやの軒の月かけ

よるなみに光をみかく玉のうらやはなれ小島の秋の夜の月

閑閨月

おきあまる千くさの露や彦星のあかてわかるゝなみたなるらん

海邊 月

神代より契りたせわやすの川い年なみに立かへれとも

七夕別

人なみの手向を星のいとばすば布やかてかさまし

二星契久

けふばかりおそといかにいさむらん星の手かびの牛の歩

七夕衣

跡たえてとふもなき葎生のやともいばす秋に来にけり

七夕獣

あきばきの花すり衣立へて、 ふめつらしき初風そふく

大かたにおもひ過せしあばれさの身にしみそむる秋の夕風

幽栖秋來

立秋

田廬歌集巻四

大かたの光にましてうつるかなさみたればれし空の月影

水まさる門田にむれて啼かへるいれられぬよばあなかまとなく

雨後夏月

夜もすから蛙の壁をきいて

五月やみあやめもわかす降雨におほつかなしや山時鳥

なでしこのさかりの色もうつろひて飲まつころになりにけるかな

ほとゝきすこゑもまとほになりぬればまたろゝものは萩の上風

雨夜に時鳥の啼くかたに

みきするかのかばらの夕まくれたもとすしき風そだちくる

秋をまつ心を

みそきするあやのなみの涼しきにまだき枕もあやしまれけり

立かへる袖をすしきうきことはみなつきばつろ夕祓して

けふの日のみそきになつにはつ瀬川はやき早瀬に罪はのこらし

夏

道の高木のたけに雲ゐつゝふもとの海をすくる夕立

六月

三笠山さしゆくかたも見えわかす雲立わたる五月雨の空

肥前温泉嶽に夕立しけるか

木津川のわたりに雨いみしうふりければ

とめ子か袖吹かす夕風に変わすらる 賀茂の川つら

肥後文獻叢書第二巻

我やとの花橘わさきにけり山ほとゝきすこゑ絶すなけ

我やとの花たちばなに喉にけり山ほとゝきすなとか来なかわ

こゆるもくらき夏木立こゝろすゝかの山のましみつ

けふもまたばれめないめにくれ行ていくかふりぬる五月雨の空

鈴鹿山を越

たかだかと待えしかひも夏山の木末に秋やちかつきぬらむ

五月雨

いふせさに常にもまさる賤かやのかやりくゆらす夕なりけり

東京よりかへりてのち久しく来らさりげるに

ひきたつるばらへの駒のみゝと川夕への風に罪はのこらし

蚊 火

なみ路へて持まねきつるたれなれや常世にかかるやとの立花

名所夏

なつもなほかけうとからやとりかな小島の月の秋をおほへて

盧橘年久

六月七日宇公にやとりて

千日軒のはほのかけにもときばの山ほとゝきす

藤崎にて郭公を

田歌庁巻三

夏の野のかりにも人に見えしとやしけみにさけるひめゆりの花

大御食につかへまつるも芳野川うかひかともばかかりさすなり

夏艸

小山田の苗代水に所えてなくやかはつのあさゆふのこゑ

鵜川

神さふるあそのみたけにもゆる火をけつばかりなる夕立の雨

五月雨の実にぬれて少女子かすそわの田ゐに早苗とるなり

夕立

行水をこなたかなたにせき人て川そび小田にゆたれまくなり

卯月たち夏は來われと春ふかくうつみしままに霞む遠山

河苗代

とめて人のころのしつけさもむかふいはまの水にこそしれ

遠山

あし別の山時鳥うちは 今そなくなるさみだれのころ

閑對泉心

狩人のほくしの松はきえわれとなほ山深くおもひいるかな

郭 公

橘の木のもと近く家居してかれずもきく山時鳥

賀茂川納涼

七七五

稲掛大時鳥啼あたりに書きたろの肩に歌請ければ

時鳥なきすてゆく一聲にてまの關にもとまらさりけり

高本順が屋の軒近くをうゑたるによみて送る

時鳥啼てる一聲につきこそこれありあけのそら

なれたしも待夜更行うたゝれの夢がうつゝか山時鳥

五月やみおほつかなき時鳥夜深けて音に啼わたるかな

月前 島

うらふれて物おもふやとのさみだれに聲なしみそ山ほとゝきす

深夜時島

五月雨の空もとろに足別のやまほとゝきすふりばへてなく

我宿の庭のうの花さきにけり山ほとゝきすいつかきなかん

雨中時島

枝たれしきしの柳のうちそよき夕涼しき川つらのやと

時

しみ立るもりの木葉の若みとり立よるかけも涼しかりけり

風來水樹間

夕かけに見ればなつかし昔わかいもとれにけるとこなつの花

新 樹

さらたにさかりすくなきことの葉の花にそちらむ春の山風

三月十五日御殿山の花見に行給ひて さらわたにさかりすくなき

さくらばなしてふけ春の風とよませ給へりした思ひばさ

れて

山のたり月の明暮にかわすもきくかうくびすのこゑ

われやおくろかりやさきたつとあらそひし空の霞も立初にけり

花さか里にはともにすまぬ身のさすがにいそく雁のたびゝと

山家鶯

水そこのかけも玉もになびきあひてかよりかくよる青柳の糸

かへるかりた

呉竹のくらにちょなかそへてや春つけそむる鶯のこゑ

水邊柳

さきそめし高根の花のかけをさへあら田の水にすきかへしけり

春山田

深山照射

めばたまのやみもまよば卯花のさかりに吹る里の中道

卯 花

今朝は青葉か隆に待そめつ花にいとひし春の山風

見し花の木末はいつか青葉山おなしみとりに見えわたるらん

首 夏

おもひきやけふのみあれにもろかつらかけつゝ人に見えむ物とは

山新樹

賀茂御祭にしたかひて

かけしげき御代にあふひのもろかつらかけてそいのろけふのみあれ

しみつる春は一夜にくれ竹のかけなつかしき夏はきにけり

賀茂祭

さくら色にそみし衣はなれわれとかへましききふにそ有ける

わきかへてさらにそしき花の香にふくそみにし春の衣は

竹亭夏來

更衣

夏

田廬歌集巻三

七七四

朝日さすみれよりかよふばる風にやむる池のうすらひ

玉たれのですもうこか春風に軒のたるひは解そめにけり

東風吹春水

世にありてきくは物かはくさいほのあばればふかき春雨のころ

幽栖春雨 久志本外記亭出題

あすか風あすたに心あらしと花にいそかれてたとろ春山

世の人の心や空にあくがれて木末の花に立かすむらん

春雨にぬるともよしやあしびきの山さくら花けふそかさらん

花のうたのうちに

紫のあやも黄染のさころもまちえし春の色はへたてわ

みとり子の昔と人やわらはましい路にいそく春の心は

あすか山に花見に行て

立かへろ春の ひるうれしさばいへなる人を見るこちして

うけてのむ君が流れの盃に千年の春のかけも見えけり

立かへるとしと我身も春のかりけさより空に飛こころかな

貴賤迎春

ひろかへろ袖にあまれるうれしさに立おとりても舞いてぬへし

文政三年正月元旦

春の雨のあまねき御代の悪とて千年かけてやふり初めらん

立そむろ春の光にわか君の千年のかけたあふくけふかな

にょしならの大宮にめてそめて千代とことばにかかる梅がゝ

冬こもりぼろきにそひそむろみがきのうめそ千代にかならん

七七三

りばへてなかなく鳥の壁のうちに天の岩戸の春や立らん

くすり子にわをなそらへし父母のかけさへうかふけさの盃

立そむろ霞の袖やつららむおほ宮人はにはよみすと

年のたつけさのみそむろくすり子のおいさきしき千代の盃

けさは父とる手おくるさかつきにのみそめし世の春こひつゝ

梅花久薫

むさしのやはてなくつもる白雪松の千年にかされてそ引

としの初に

たらののふる枝の萩の雪のうちにもゆる若なみけふやつまゝし

黒の子にしろへさせてや白雲のふるののわかなつまばつまゝろ

たとめ子やいへたも名なものらずとも雪間の若楽しるへたにせよ

雪中子日

しめし野になきみゆさにうつむとも跡たにつけよ里のうなぬ子

白雪のふる桜のきの下をれに若なたつぬるくたちのの原

筑波やこのもにかかる春風にうすらひなかすと川の水

遠江江の波 うらいつ甲斐かれこゆる春の初風

諏訪のうみみきにわたる春風にそこもろみて解る氷

雪中求若菜

あくがる心つくのはてなさをおもひたくふろ武蔵野の春

深山花

もろともにみてばこそあれ千舟く大江のみとの春のあけぼの

人々 春野に遊ぶ

山里のかきの草に啼くきずおなしおもひたしろらめや

江上春

歳の男がことしばしむる小山田のいつほに出てかりなさめなす

春山家島

春山田

つむ横川の寺の夕にもふかくそにほふふきの花

今ははや六十にあまる老が身を父四つといふ重荷をへけり

老馬にたへの重荷をゆひそへて家路いそかむ春は来にけり

えの山吹

あそのれの吹きおろす春風にぬるみし水もまた氷りけり

春のばしめわか身のおもひた

いつのまに木末みとりの若葉山花に見なれしとしもなし

餘

新 樹

は壘につき右手を口におほへろ前つかたに若松をくけうにたて

かさりたるを置きて年の始のことほき申すさましたり

肥後文獻叢書第二巻

津輕いことばむ春さればえそか千島も花や咲ると

十二月十六日我君少将に任給ひけるに御よろこび同月二十

三日またせ給ひける此日春立そめけるにみきたまばりて夜

になりぬればいとあたゝかなる雨ふりいてける

つかるふれいさこととはむしらえその千島の花やいかにと

不知火集に

わたりもりいさといばれとすみだ川つみの花にきそふ旅人

遠島花

今朝見ればきその雨にもうつろばて御園の花をなほ盛なる

すみ田川の花見に物して

こその春らりに花の際に来ていやめつらしく今日もみるかな

玉くしげ二とせかけて花のさかえか三つは四つばにそみる

さくらさくみその春のとのゐには七日へぬともかくなからこそ

夜ひとよ雨ふりげるつとめて

立かへりともにあひ見む家人のおもかけにさく初櫻かな

瀧口の御たちの庭の花を

大江戸にありて花の咲そめたるをみて

つればよしうとくてもあれ花さかんなりたにとばぬ心つよさか

イな

イナ

こそより春かけて久しくとは人に

眞木のたつあら山中もわけぬへちら櫻の花にほぼ

田術歌集巻二

ことさらに取りよそひても見ゆるかな春のいすみのきわがさの山

ばるのはじめによめるうた

もえそむる柳の色もまだあさきみどりに春のかげぞ見えける

春

柳春色

花鳥の色香のみかは人の心もにあらたまりわる

軒近き梅の木に香ににほふのころ朝いの夢にかよびて

萬物感陽和

玉もひの氷は解けて汲みそむろわか井の水にかよふ春風

梅絶賛

うとからでとへかし梅のさかりには山くら戸のりならとも

風解氷

たらそむるかすみのうくひすの聲のあやかしおりそえてけり

遠山につもれる雪のむら消えてかすみそめたる春日影かな

早春2

早春霞

春下

田廬歌集巻二

1

みや人のかくるかつらと見ろまでに山まつがえににほふ藤なみ

藤崎の藤のさけるを見て

六九

花さか松にも春のさかえとてふかくにほふふちなみの花

島崎村の松にかかりたる際の盛なろを見て

遠山はかすみながらにくれそめてかへる家路につぐる鐘の音

おなじころ野路より夕ぐれに帰るに遠山を見て

今朝さゆる風におほせてわざと花のかとめ春のは

吹くとしもおほへ春の山風に木するの花ぞ袖にかなれる

咲きとさく花のにほひをたぐへきてのどかにかひろの山

花の香音せ風にぬすまれつ杉のむら立たちへだつとも

四月朔日風~身にしみければ更衣のこころを

はふり于かわさとに初もにほふらしみまへの櫻さかりなるころ

風静花芳

咲きとさく花のいろにもふろき便のにほひなそへて照らす月影

社頭花

みよしのや花に明けにしい! への春おもほゆる朝日影かも

月照花

花 祭

花の春待ちえて打出つる人のことばもまづにほひけり

花島のこゑをのこしてゆく春を立ちもへだてめ春霞かな

おのづからかすむ春日にまかせてや下もえそめし野への早

暮春霞

とことばにちらずもあれな葉がせめ松の木末にかかる藤波

松上藤

春の野にあさきざしの心あさく人にしられしつまごびのこゑ

雲かかるあら!の山の木するよりとなぜにおつる花の白波

維

はなちるや鷹の羽の眞白みにふりきかへたる春の雪かな

となのを見て

わけのぼる雲さへ花ににほふなりょし野の山やちかく成るらん

ことばす六田のよどの渡守花ちりにきといふはまことか

春雪のふりける日鷹狩を

芳野の花見の犯行の中に

みよし野の芳野の種をうつしうゑてたぐひあらしの山櫻花

けふこずはあすば名におふ山風ににほふの花やちりなん

大井川いばねのなみの立ちかへりあすも来て見ん な

嵐山の花見にゆきて

見花の面かけさら夕暮にいとどあやしき袖の移り香

肥後文獻叢書第二巻

暮れて行く春の名残もつき弓の心強くや此夜あくらん

すかのれのながゝりきともおもほえすけふにとぢむる春の日数は

三月盡夜

尾につめることりの春の色のふかきタべにに木の芽かな

三月盡

年高くなりての後もかばらればゆく春したふこころなりけり

茶をにろいへに立ちよりて

飛鳥川七瀬のよどにかすむよの月にも春はとまらざりけり

老人惜春

山吹のしがらむ井手の水にだにくれゆくばよどまざりけり

暮春月

暮春山吹

七六八

田歌集一

吸の男があらすきかへす春の田のかへすがへすもあかめ花哉

東路の花の霞に立ちかへり来て見ん春に命なりけり

隅田川堤の道のおくふかく花のほらにも入るここちして

題しらず

櫻さく木かげにはする馬の弦の音にも花やちるらん

隅田川の花見に行きて

見てもなほあかわすさびになる花の一枝はゆるせ春の山守

龍口の御庭の花さける比馬弓射給ふ時に

雨雲の入相いそぐ夕べにもなほくれかめる花のかげかな

飛鳥山に花の枝を折ることとどむろよし板に書きて

立てたろた

老らくのあばれさそへて有明の月かげかすむ窓のあけぼの

有明の犬は霞にくもる夜のかげよりしらむ春のあけぼの

感應寺にて

木の花のあまびにになとさきそめてくる春ごとに思ひそふらん

啼鳥のそられなられどはかられつ花も明けゆくあふ坂の

落 花

ちりつもろ花のみ雪にのる駒 しやなづめる春の山越

七六七

花未忘

花は雪とふりにしやどなれば日にそへてとふ人まれなる

花落客稀

山風にふりしく花の白雪をそでにばらびてゆくばたが

しめども枝にとまらでちりばてし花のわかれに春雨ぞふる

櫻花ちるもとに女の行きあひたる

20

水上ばあばのみこそしげるらめいさきの波に花がほれる

花の散りて後に雨ふりける日に

おもふどちまとするよに唐端たたまくをしき花の下陰

有明の月かげのこるかた山の花よりしらむ春のあけぼの

水上の落花

月影のかくろふのみぃ大井川花ながす瀬にくらくちりぬる

夕月のかくらふだにもおしき夜に花の色さへ見えずなりゆく

花の歌の中に

おなじ枝に八重に一重にさきかへて色をあらそふ櫻かな

月入花灘晴

山里のたよりしなくば櫻花まだきににほふ色を見ましや

八重一重のに

雨はれ夕べさびしき山かげにおくれてにほふ花の色な

山里より櫻の枝を折りておくれるに

ふり夜の雨にも色のうつろばで喉殘りたる花の枝かな

すごく色をくらべて八重一重咲わかちたる花の一枝

入相のかれてぞをしきふる寺のあらしの庭の花の嘘は

ちらぬまに立ちやかへらむ櫻さく遠山寺のいりあひの

たづれこし木末の花は雪とけのみふりぬるてらの夕ぐれの空

龍口の御舘にとのぬして雨は御庭に花の盛に

さきたるを見て

旅やつれし釉もかかるやとちる花ことに立ち寄りける

ちる花をうかべてささぐ盃にゑびをすすめてかかる春風

行きて袖にしめつる花の香を帰る家路のつとにしてまし

生ばかり谷中感寺の花見に行きて

黒の木末はのしら雪にかすめてから春の夕風

すみだ川きしの山吹やまずのみみつつしのぱんいやとしのはに

しらす

まさる小田のくろなる櫻花移る影もさきかへしけり

隅田川ささしのほろ舟人は花の木末をわたろと見る

たちかへり明日も来て見むしばしちらすな春の川風

としのばにきて見んことのかたければわきてぞしのぶきの櫻木

同しなりに

末遠く分行くになの自雲に来しあとたどる春の川づら

園生の花にほ

かしるべにて嵐ところせき花のにほひにかすまれて日も夕幕の谷陰の

山路花

王子村いなりの御やしろのもとなる八重櫻の盛なるか

ふけるふせやの軒の八重さくら一木に残る春の色かな

かへるさ日暮の寺に立より庭の花を見るにくれちかく

なりければ

花にしたふもばかな石見のや高角山の春のむかしな

にのころ花を見るかな

水鳥の葉の中ののころいろ香はまたことにして

分入れば残る色香もふかき青葉かおくの櫻木の陰

今さらに残るうらみもなかりけり青葉がするにかよふ嵐は

見渡せば豊島原ははてもなし霞む筑波の山のみにして

三月十八日人登朝臣の忌に

そ

の音をいたづらにいかてか過きん駒とめてあくまでも見山櫻花

おなしき日あすか山にて

朧なる月にかすめてさく花のにほひもいととふかきょのそら

道行機の本にとまれる

ながら日へともいとばじな花咲く園の春のとのみは

花守にならまし物を梓弓春のみ園の木かげさらずて

は日ごとに咲きまさりけり

ふかきそへて御七六六

隅田川かげ見る花の白波に棹さしいづる春のいかだし

歌集一

たかせさす棹の楽もかたるなり岸のさくらのさかりなる北

山づみのかくるゆふかもみよし野の瀧つかふちに咲けるさくらは

河邊花

らくとにほふ朝日にうら安のぶりしろき山ざくら花

くろろまていさ見て行かむ春の日の光ににほふ山ざくら花

瀧瑰花

みよし野の岩もとざくら人ならば見世の春の昔とはばや

花映日

芳野山のかたに

やみもすそ川に見えてさくや神路の山さくら花

柄の音もきかわとて櫻咲く神路の山の春ののどけさ

つらつらとみればば心もなぐるさの遠山ざくら盛りなろころ

神路山の花

常よべの赤いかばかりのときとかへろさいそぐにとばまし

おくれと啼きてやいそくしののめの空にきえゆくの一つら

秋ざりわけて水にける惟がれの霞む空にはまよばざりけり

遠山花

雁金の花を見すててゆく空にふるはなみだか春のころ

朝日影にほへる花の木末より雲井にはるる富士の根の雪

隅田川の花見行て

白川のあさ瀬の波にかなるなるあそ山ざくら今や咲くらん

春の富士を

咲きつづく花より花をやどりにて心ゆくらむ旅れたそおもふ

彌生ばかり白川のほとりを過きて

別の山ざくら月の明暮に待ちにし花ばさきそめににけり

旅行人に

鳥の尾上のさくらながき日に見れどもあかめ色に有りける

花始開

すかのれのなかき春日は暮れれどあかめまとゐの花のかな

青柳のいとながき日を分けくらしあく世おぼえめ花のかげかな

さくら咲くうまやづたひに霞みたつてふ山もわけつくしてん

花下忘

中垣の人はなかなかさく花の匂ひぞよそにへだてさりげる

霞中尋花

渡守とくとないひそすみだかはくれなばなげの花の下陰

隣家花

あやの涙もかかるなりきしのさくらの花の盛は

ばにやすの池の みのさし柳さしもみどりになびく春かな

水の氷吹きとく春風にそこにもなびく青柳の糸

池邊柳

春風になびく川柳かげうつろふ水もみどりなり

さほ姫のかつらの玉か青柳の糸よりかけてわける白露

年を経て人は老いゆく春ごとに柳のかみぞみとりなりける

水泥柳

和田津みの神にながるろしいま川しかも春べと霞む白涙

柳

海邊早春

笛吹にめされてかへる人の山路も今朝は霞みそむらん

まわりイ

早春霞

有明の月に霞にくもる夜のかげよりしらむ春のぼの

潮さゐの波をかしこみ酒のほのかにかすむ神津島山

明行くや八重の路のほのぼのとかすみをわたるの釣舟

ちちぶれの谷には雪のまだきえでとしまのばらば霞めこめたり

海邊震

御茶水といふ所よりちちぶ山を見て

みなれ棹なれ川瀬にこぐもたどるばかりに霞みこめたり

肥後文獻叢第二巻

川 霞

あさみふけ行く夜中の霜きえてすむ空に啼くなる

春雨のばれし雲間の夕月夜かげこそのこれまつの村立

春の夜の月あかきに雁なく

みなれ棹さす手もゆたかすむ夜は月にこがるるなみのともぶれ

春雨ばれし夜の月を

おのづからうつるしみづの名におひていとどおぼろの春の夜の月

ちる花をなげかふころの空なれや夜わたる月もくもりがちなる

春の夜の船路に月見て

ちはやぶる神の御代よりいく春か月はおぼろに霞みそめけれ

かすむ夜の月にはいとどかしたれてながめがちにも過くる比かな

下くらしかやが軒もる月影もややおぼろにぞかすみそめぬる

春の夜はふけゆくままにいとどしく霞にくもる月の影か

そのれのみ雪きゆらし今朝見れば白川の瀬の水にごれる

まだあさき春の川瀬の水の色につつみのやなぎもえそめにけり

春のはじめ白川のほとりを過ぎて

柳ばらの堤を見て

我門の青柳の糸うちはへてくるやと人をまた日なき

門 柳

七六四

田連歌集巻】

川上にあらふわかなのな。 てのよにもつきせじ年に摘つとも

のころ間のわかなおいたれどそでにもつまむわかかるがに

白妙の袖ふりばへて少女等がかたみにあまるすずなみぞつむ

□□の神の口か春ごとにつめどあまたのあまなからなば

多春採若菜

氷解くる野澤にせりつむとおりたつ妹が袖やわれなん

春はまだあさ澤小野にふる雪を袖にはらひて若なつまばや

若菜

さえかへりふる野の雪をふみわけて若たづめる里のうなぬ于

妹が袖ふる野の雪のむらぎえにすずな摘む子の家路きかまし

ふみわけ跡なづかしも白雪のふる野の若なつめる子やたれ

澤若菜

雪中若菜

うぐいすのこゑのあやたもおりそへてかせにみだろろ青柳の糸

打なびく柳の糸にうぐいすの肇のあやたもおりはじめけり

風の音ものどかに今朝は吹きかべてよりこそそむれ青柳の糸

たちそむる霞のきの鶯の壁の綾をもおりそへてけり

春のはじめの歌のうちに

我宿に梅の花さくちらぬまにはやきて見ませみやびの友

梅の花さけるた

はにやすのつつみにたちてみわたせば雲井にかすむ三芳野の山

ふりさけてみれば少女の眉引の遠山島に立つ霞いな

七六三

あそび神代おぼえてうれび山天のかぐ山霞たなびく

神のますあその御池にもゆる火のけふりよりこそ霞みそむらめ

遠山霞

朝床にきけばむつまじむら竹のれぐらながらの鶯のこゑ

山 霞

ふる年の雪だにきえぬ山里もすむにぞ春をしろらん

竹鶯

打なびき霞むばるべは背垣のまちかき山も遠ざかりぬる

山家初春

さえへろ嵐さむみたれこめてらびにけり春のよすがら

春みなほさえのころ夜あらしにいとどれがての床のさむしろ

としかばり春は立てともなほさえて霞みかれたる空にも有るかな

初春山

はつ春の初子の野心の姫小松千代のれざしをこめてこそひけ

年のはじめに風のわづらひして心ちあしかりける時に

こめて今朝あら玉の光をもあふが間は春としもなし

君が代の千よのふる道跡とめて引くや子日の野の若松

子

袖ふれ東小女の移香をたたいてかたろうめの下風

萬代の亀井の水にかなりきて梅さく春のかつしかの里

とめ来つる園生の梅の花はや移ひなからにほひましけり

東路になほさむしふじのれのふもとの山につもる白雪

大空に霞みながらもさえかへりふく山風にあわ雪ぞふる

葛飾の梅見に行きて

うぐひすの音もらせる梅が枝にふれとたまらぬ春の雪かな

寒

山里の梅咲きたりと吹風にたぐへてつぐる春の曙

咲きそろ花のその名もさちありとことほぐ草の春のためしか

春の初の歌の中に

草といふ花を篚にうゑて御前に奉れる

梓弓春の若菜に我君の七世の数をそへてこそつめ

わらべのはまいる弓に立ちなみてふりふりあそぶ春の市町

七日若菜

市町にの子のあそべるた

都鳥うかむすみだの春川にこぐや小舟の棹もゆたけく

まだあさき春の市女の花の神たちつられてもかよふをほ路か

隅田川にのりそむ

きのふまでゆききいそざし市人の今朝のあゆみの長閑成るかな

雪のうちににほへる梅の色をへてかげおぼろなる春夜の月

白雪ふろすを出でうぐびすの初音しらぶろそのの枝

梅に月のかたある扇に

いつしかとのどかにかよふ春風ににほひそめたり園の梅枝

薄氷解けゆく春の初風ににほひそめたる梅のはつ花

春風に神のこころもひらくらむいがきのうちににほふ梅枝

春風光發苑中花

ならの葉の名におふ御代にめでそめて今もつくしに匂ふ梅枝

社頭梅

明日もまたつぎてとひこん山里の垣ほの梅の香をしるべにて

梅 花

誰かさとの梅のあたりを春風のすぎてかここにかなりきめらん

山家梅

ばきとさく花の色香をあたらしみ風もしづけきの梅枝

梅遠薫

軒はくちまきばれてすみなれし人はおとせめ宿の梅枝

梅花風

處せき梅のにほひにかすまれてたらさりがたき春のくれ な

矢倉のやどりちかきあたりなる家のすむ人もなきに

うるたりける梅の花盛りなりけるを見て

七六二

ふしみつる年はいつしか呉竹の一夜のほどに春はきにけり

山がらすれぐらいづる一聲もこころづからやけさはのどき

あら玉の年のはじめのよろこびにまづ我君の千代いはふなり

くるとあくと逢見馴れつる家人の面わめづらし今朝の春

田廬歌集巻一

明るより空もかすみている日のひかりのとき春はきにけり

世に春になりぬときは玉たれのたすに入りくる風ものどけし

明けぬとしつぐろやこゑの鳥の音ものどかにしらむ今朝の春

音たえしかけびの水の今朝はゝやかすかにかよふ春の初風

むすぶ手のしづくの氷解けそめて袖にのどけき春の初風

にはつ鳥かけのやこゑに明けそむろ霞とともに春立ちにけり

天のさしいづる朝日子のかげのどかなる春はきにけり

こまくらしらざもろこしなほ外の国もへだて立てる春かな

年の初めに

春立ける日

白雪のまだふろとしのうちながら春とやかすむ阿蘇のかみ山

年月はまだ冬ながら遠山に霞たなびく春立ちとぞ

年のうちに春立ける日に

田廬歌集巻一

春 上

あと垣のうちもへだてす来る春のえないはふしづが門松

七六一

鶴の千代萬代をこの君にゆづりてぞくむ竹葉の宿

大城の下の市町過きて

くみそむろ生井さく井の水そこにさかゆる老の影でみえける

ふくみたる乳ぶさにかへてみどり子にまづのましむる今朝の盃

くすり子になりしむかしば六十あまり春を七とせ頂けるかな

つながゐのながく生井にくむ水はいかにさく井の幸にあるかも

ふる年に春に立てれど汲みそむろわか井の水はほこほりけり

三日の夜うたひばじめつかへまつりけるを

梓弓はるの衣の花のそでつられてよはふ萬代のこゑ

水上はとほきながれの盃に千年の春のかげぞうつれる

元 日 天保二年

敷島のやまとしまれた出てそめて霞む日かげばあたし固まて

む月たつ空ともいにすさえかへりふれどたまらぬ春の雪かな

ふる年の氷も解けて汲みそむろ若井の水に春や立つらん

松が枝にかつける雪の白妙にほひそめたろ朝日影かな

すばの海氷解けけり春にまだあさまのたけや霞みそちらん

我君のみまへに年のはじめのよろこびまして

御酒たまばりて

あそのれの雪だにいまだ消えなくに霞たなびく御狩野の

天が下やすらげきかもあそ山の神のけふりの末もみたれす

きしま朝日〉やくそのかみのかさしのくぬき朽果めらし

たむろのそこほれる坂なしの坂の深雪は跡たえぬらし

玉くしげ二重の山をこえゆかは手野の神杉見えすかもあらん

高だけに雲そかられるこの夕へゆふ立せむか栗まきぬべく

あまさかるなにはあれとつゝ疾尾の上を見れば都と思ほゆ

くにおく露寒からしこの夜らの曉くたち田さばになく

楢山といふありなくて大神に奉る飯をばそこのはとりて盛

るとなむ

なら山の棺のとりてもるいびの香をかくばしみうけむかも

黒人ともかくみつろなと口口口つといふもろこしのあくめの

神駒なといへるたくひにもやとおほゆ

にあまり岩かとに打はへたり朝日にうつろふ 毛色のきらくと

いとしろき事いはむかたな世には雪なとこそしろきもの

かきりのやうにいれとそばかすにもあらすいかに成行くに

かとためらふほとにふりかへり爪をけつりたるやうなる岩をさら

とのほりて行くさばかりけばしきみわく大路のことかけ

行方しらすなりぬとなむ程茂みつからかたりけるそのころし

もみたけの南のふもとにょしみ明神の御社ある所に夜なく下り

かたちかぼりてほらばつかれたるやうにておしみしかく尾ばたけ

大神のいさめ

東路にかつく筑摩の鍋ならて何おもひてかいのるねかひそ

さと人の物あらそばゝいとぼやも霜の宮居に満載せよ

ばたのうちふみあらしつゝの駒の足掻もけふは神のまに

みたらゑの歌こそとほくゆなれ神のみこしも今かなるらん

明治四年辛未五月十二日三日書寫 藤原 長

ひと月につまむかへすな

きさらきのこの慶應二年歳次丙寅二月十一日於阿蘇官舎鶴鳴堂中採毫

藤原川(小山)

七六

梓弓的石山をこえてくれて内のみ牧にこまつなくかも

高本順大人家集

と見るこちす是を上宮の水と此日ころおほく人ふみけかした

山あらふみなわさかまくきのふかもふみしかほらの石はいつらそ

春秋のひかむといへる比は人さばに御山にもうてのほろそのはて

の日とみに御池より水あふれてはみれたあらび谷にとろき落ち

御社のあたりにては常に水なき所にしきなみうちてよしの川な

こば下野の狩いへりこのかりは大神世にましゝ時にしめ給ひし

よりちかき天正のまて時の大宮司年ことに二月に宮つこらめ

しつとへ八十とものあともひて下野といふところにて三日の

ひたしてそのえもの御神に奉るおよそ大御園にてつかさく

らぬある人の獨するばかならずこをためしにひくとなむればこ

鎌倉の右大将のふしのまきかりすとて大宮司の許にはるばる使

またして此時のさまなつたへさせられけれかくいかめしき祭の

わさなりしも今はたえて久しくなり

宮人のとも矢に和幣とりそへて祭りかりせしのへばこの野へ

そのとれの神さるの日にあたりて天宮のはふりかもとにとまる

り給ふその時とも親子とも山にいりて樫の木をきりてかたばかり

きみて姫になつらへ奉りみこしのうちにさめ奉るそのほと

のことふかくひめたるわさともかすくありとなむ

お山の樫の本末うちきりて神のみときといはひそまつる

りいとあやしきになむ

宮人といふもの折とて三たり四たりともなびて山に分入け

るに野かひの牛馬なと物におそれたろさまにてちりくにけまと

ふおほかみなとのおひ來にやとあやしく心もとなくおもふほとに

むかひの岩の上に月毛の馬ひとつあらばれたり世のつれの馬には

七五九

しら雲のうへにいばゆる久かたの月毛のこまに神のこまかも

御嶽のうちに大神のめさる馬とてむかしよりすめりといへりさ

れとも常にはさたかに見たるものもなくてたら家の眞砂地に千里

あるかい

ひつめのあとのこり又はきりの中にほのかに弊し

たゝきにあり

つるなとばかりきゝわたりたろにこの三とせ四とせばかりさきに

り

いさやこらくゝかりからんいひけなすこしきの岩に煙たつ見ゆ

千町の沼とてえもいばす廣き沼ありそこにくといふ草ひまもな

く生しけれりみのなと縫ふにいとよしとてつれには深くいましめ

てかりとることをゆるさす 文月の廿九日大神御物料とてみとしみ

の民とも出てこのくかかるその後なっていることをゆるさすぎ

ほとにこの日は里の民ともさばかりき沼に所せきまてあつま

りて夜になればたいまつ星のことくともして夜もすがらかりとろ

とそその沼ちかきほとにこしきの岩とてけにそのかたちのいは

ありそれにけふばかりゆけなとのやうなろけふり立のほろといへ

あらび清むとなむ所の人はいひつたへたる

きらきのみの日の祭とくせなむ謝おろすべくばたになりにき

もりながしにゆくよびそ袖ふきかへす風にすゝしき

里にいにしへよりつたへたろうたひものあり田植歌となむいふ

める御田植祭の日は駕輿丁かしかましくこれをうたふなくてこ

のわたりの黒人田をうろころばさらなりむ月のはしめより木に

草刈にもひたふるにこれのみうたふかくて文月の六日の夜御社

のまへに里人かすしらすつとひて壁をそろへてうたひばしめうた

ひなから大宮司のかりゆきて門にさし入りて左右にわかれたす

みてうたふしばしうたひてまたもとの道にいて、御社のまへにう

ひさむこれをれもりなかしといふかくしてのちばしばすの月

はてるまてはわらはへの口すさみにも是をうたふことなしとな

む

きよし水無月末の六日あその大神をみこしにうつし奉りて神主宮つ

れなと御供にてはるかなる田面にうつし奉りてさまさまのまつり

わさなとあり是を御田植祭といふこの道すから宮つ子とも早苗

をつかれて手にくとりもちてみこしになげかけ奉るこれぱいに

へよりのならばしとなむ

高 本 順

みたうゑのけふになれば玉ちはふ神のみこしにたてまつる

阿蘇布理

肥後文獻叢書第二巻

このゆうへ秋風す

れもりなかにいさゆむ子ら

ふりばへてれへなとすかくて長月の六日にたきすきみめ七日をへて
、八日の

夜すから火をたきてさまのかくらつろきたもちて舞ふこと

なとあり暁になりて夜一夜だきたるおき火をたてよこ三枚ょつる

ばかりこしきひろけて紅のほのほのおそろしき中をかくら男みて

くらと鈴とみさゝけてたとめたみちびきてすらとわたるよそ

に見るさへたへかたきたいかてからくほとゝへは神の物し給ふに

こそたく夏の日にあたりたる石なとふむこちなむし侍りといへ

潔

秋霜のはふり子火焼屋の火たきたとめにいとまあらすな

小夜更てつろきめきもち宮つ子か立まふ袖にあきの霜おく

火焼屋に六十日こもりしたとめ子か火のほのなかを今わたる見よ

霜の宮のあたりに火焼屋とてしつらひて 文月の六日よりしもの宮

の御神をみこしにたてまつり十二三ばかりの女のわらはおなしく

こもりてみこしの下によるひろとなくひたふるに火をたくすこし

おこたりぬればとみにさむくなりて秋のみのりあしくとなお

きば人の行かひえならぬやうにしつらひたればとめしばし

まとろむほとなとははふりて物をへだてなかき火はしもて薪そ

又二月中の巳又は未の日に巳の年の御神をみこしにたてまつり

て親の家々にうつし奉りて夜もすがらに神樂なと奏すかく行めく

りたまふこと六夜七日となむそのちばしめて里人をつかふ是

を鍬おろしといふおほよそむ月のばしめよりこの祭まてばかりそ

めにも鍬をつかふことなし

トシ子

いにしへしぬふとすれと、石上ふることふみは、そのばもわきまへ

かたく、夕やみのとくしくて、みなのまとへる道に、照月のさ

し出てしかこと、五百隈や八萬隈おちず、 あきらけくみちびきをし

へ、しほつゝのちとたのみし、秋津彦櫻根うし、八百とせも千とせ
ま

高本順大人家集

本居大人みまりまして三とせといふとしの九月九日そ

の日なりければ披書思といふた人々歌よみて手向ける

ついてによみ侍りける長うた

まれけなほとぼれめ宿の花すむかしの人の踊り来るかに

そのむしろにて影を深くてよめる草花

敷島のみちたれとや秋津彦みつさくられと名にたくへけむ

月も日もめくりくれとも白露のきえに人は音つれもなし

かとうた

なかき日を、みしかしとったりあびしも、あら玉の年のむとせの、

ちなればこひしみせした、まかことかおよつれことか、こその秋み

まかりますと、かれのたよりにきて、うつとも夢ともわかす、

春もたち夏すき枕も、長万のけふその日とゆく川のせみの苦屋

にまと居してありしみかたか、うつしにたゝにむかひて、へ

と夕風わたる、さゝの葉のさやとばかりも、こたれはせむすへたな

み、草むらにわふとふ虫の、のみしながる、

七五十

ひとゝざの心つくしの田なつものおほろがにわかにすべしやも

賜ばりてれる所の田なつ物をとりなさめてよめる

みつき春さりくれば、あら小田をあらすきかへし、夏くれば袂と

ほりて、みしふつき植ゑ早苗穂にいつる秋になれば、引板は

へて、まもる庵に、露霜のおくて待ちいて、いと早も早かりほし、

かきろひの夕になれば、になひもて家にかへらむ、めば玉のよばにう

すつき、父母にまつりもあへす、わかためたまついぞくとて、霧深き

朝川わたり、雲いる夕山こえて、しつの男がこにはこへろ、よれ

よ此飯、

めくり来るけふの日さへそをしまろ 暮行く秋の名のみかは

いにしへの道のしろへとたのみつる君もおかしになりにけるかな

おなしむしろにて題をわかちてよめる九月盡

反歌

ぜ、と朝ゆふにのみいのりも、うつそみの世のならばりは、すべもな

くみとせがさきのない月のまたきてくると、雲かくれましぬれ、

いまばたゝ形見にあくる、玉くしげふたみのうらの、うら千鳥あとり

み残る、まさくにありしおもかげ、立そはりみるに涙を、とゝめか

ねつも、

李氏のよみ給へりとて長き短き歌とも長瀬か見せたま

へるにいとかむつ世のみやひすかたにしてめてたしとも

めてたくないってことくばへ侍らむやあか賀の大人

にこと問し人々もこには中々に殘少くなりにて侍る

千里のちにかく古ふりの玉なす光は殘れりけるよと

かけうつす今宵の月のためとてや水の心も秋にすむらん

君侯小隊度烟霞、且 今宵弄月華、池潤清泉開皓鏡、天晴碧漢控仙槎、

長洲露口芙色、沃野風香粳稲花、元月名園成逸趣、游觀不覺及柄鴉
、

臣李順草

秋日陪 駕遊成趣園

八日此里の民のはやきには卯月に田をうるおそきに五月

にうるか五月田とそいへりける

神まつる頃にもなりぬ八代の卯月のみたは今や植うらん

卯月田の頭

し

成人日宮地の里に一樹の櫻あり黒人此花の咲きそろを見て

年のはやきおそきむしる是なにしろ時のしるしとするなる

いきや子ら水まかせてよ小山田の苗代櫻咲そめにけり

肥後文獻叢書第二巻

苗代櫻の歌

神風のいの固なる、さく飴のすゝのやのうし、大人にもよゝし心

しきしまの道にいやたて、石のかみふることふみを、まつふさに

ときあきらめて、世の人をいさなひますと、なる神の音に聞きつ

見まくおもひためらず、みよしのゝよしの山の、花くは櫻たつれし、菅笠のしをりのままに、はるといゆきとふらび、すかの根のりに

鈴屋大人の身まかり給ひてまたのとのその月のその日に

順かせみの屋に人々つとひて大人のみつから給ひしみかた

をかけてたむけなとしてふるきたおもひて歌ょみけるた

千鳥あとしかよば、大空を渡る翼はよしやなくとも

飛鳥のつばさしあらば速日別速くも行きてこと間ぼました

折にふれつゝいび出たりしことも歌ちふへくもあらわ

いかさまに思けるにか長瀬主かしきつめもたりて名にき

こえし橘のうしにしも見せまつりぬといひおこぜしかばむ

れつふれ侍りしにおもひかけすめてたしなとのたまひてあ

かり世のしらへのみやひとなむたまひげるこは身に

おばぬものから夜ひかる玉をゆくりなくえたらん 心ちして

いともそかしこき是をたつきにたえすことばまほしくて

李順

橘子

よろこびにたへすなむ

七五六

すまわこかみのもりの時鳥なれもむかしをしのび音をなく

高本 大人家集

かきろしまの山のさみだれにあその川岩たくらん

あつめつる我なこりとや草の庵の朽ちに跡にとふらし

夏されば行きて結びしたつ原の岩井の水は今もすむらし

思ひ出て北の宮居のほときす杉の棺のあかつきの

すてしこかみのもりの時鳥きく人もなき音をやなくらん

またおくる

今さらに山へからて時鳥まちこし君か宿になかなん

里をわく頃こそあらめ時鳥おのかさ月もつれなかろらん

返

わく頃なられと時鳥とほやく聲の聞えこさらん

また

深山は出てなくとも時鳥さとやわくらん壁のきこえね

またかし

またおくる

この頃はまれなる山のほときす壁まつ里に出てにけらしな

またかへし

有明の月にまとも時島みやまないつる聲そつれなき

またおくる

くす根ほる岡ののくろしみをしてや人の遊びゆくらん

*五五

或る年機饉にて百姓ともの苦しめるなり人の野遊にさそび

ければ

花のあるしならすに我もまた薄れる雪と見てややまとし

かくし

きのふもふもなる神の音にのみきく峯の白雪

惟

雪とのみ見てややみなむ春風の梅の匂をさそばさりせば

手折つる紅葉の色も深けれと心さしにはしかすけり

十八日山には雪の見えければ 惟 馨

神無月時雨もあへわ頃なから神のみ山は雪ふりにけり

雪の御歌今程こにはめつらしくめてゝ

かし

順

こゝろさし深くそめてそ手折ける紅葉の色はよし薄くとも

夕かけて今もなくなり北の宮すきの木末の山ほとゝきす

きしまころの五月雨にあその川なみ音そとゝろく

むすひつる草の庵はくちてはかりや夜をてらすらん

夏木立風も涼しきたつ原の岩井の水に今もすみけり

紅葉を折りて贈るとて

啓蟄は此里もおとろおとろしく侍りしに其後一日二日に

りしきのふよりは風またさえて雪もものうきばかり侍りぬ

惟 馨 阿大宮时

今朝はまた雪こそつもれ麓のなきてうつりし宿の梅が香

かし

肥の風の道の後なる、熊本の殿につかって、つろき太刀其名もたか

き、高本のはかせの君は、から文の道のばかぜと、其の道はそかま

に、ときゝかせ入をしへつき、朝夕にみち引ます、前回の神なら

ふちふ、神の代の直きてふりを、かれてまたたふとみませろ、事のたふとさ、

本先生によみて奉る

伊勢の海清きなきさに楽しかびは言葉の玉をひろめてそ行く

人々の今日の短冊をたまばりて 順

山の井の淺き心も君をのみしたふ心はふかきとしれ

返し

高本大人のよみて賜ひける吉野山の歌のかへ 宜長

わけ見けむ花のよしの山よりも深き心のおくそゆかしき

心ある君かわけゝむみよしの花のしなりにまたも行見む

肥後文獻叢書第二巻

鳴ふろす山みに出てゝ時島こひまつ里にはやもなかなん

時鳥こひまつ黒のありそとも知らてや山に鳴ふるすらん

惟典より返し

手折る人の心も花の香も君ならずして誰がしるべ

順

手折けむ心をそへて梅の花世にいひらめ香にそ匂へる

阿蘇典のもとにおくる

まとろまていく夜きくらむ世のちりばらへる庵の窓の村雨

かし

順

よしさらば一夜やとりて草の庵に老の身をしる雨をきかなむ

八月十五日高山正之のおとつれにあるしまうけして何く

れとかたりかはしゝかり正之昨年の今夜 皇都にて管の

御宴にせことなとったり出て頼りに落涙しければ順

去年のけふ雲井に聞きし琴の音を山松風のさそ忍ふらし

かし

正之

ふてふ言の葉うれし筑紫にも都を墓ふ人のありとは

梅を折りて

葉月末つかた高本大人の川観の屋をとび侍りけるなりには

かに雨のふりければ

眞幸

せみ

七五四

手折けん心をそへて梅のはなよにいひしらぬ香にそ匂へる

七五三

高本順大人家集

寄說

於伊勢松坂管相寺席上贈答

寄花祝

みとりなるの毛ころもうちぼへてたのしかるべき君か御代かも

かいり

高山正之が緑亀の頭を乞ひければ

久にて玉拾ふへきしろへせよわかの浦路の松をためしに

みとり子よ我をよくみてなか子にもおちのむかしたかたりつかなむ

末遠き君が千年にあさみとり霞める春の空にしらるゝ

敬太郎とのへ

生れては死しうまれては死ぬろこそ人のつれにして天地の武士の手にとりもてる梓弓八百よろつ代に君かまにまに

道なれなにかになげきかなしまむ

寄弓親

ちかうへの溶行けばこそ一日にも千五百頭をうみ給ふらめ

わたつ海の神にき立つ毛ののぼりは君がまにまに

我つれに戦々々のつくしみなくして今かくいふは偶幸な

子孫かぼくは深淵水のおもひをなすべし

足別の山をを君萬代にしけりさかえむためしとは見む

ちばのさつけしまゝに生きて身をそこなす今かへすなり

安次殿

順

すめ神の御手にまかしゝやさかにのいやさかえ行く君のみ代かも

此書付は我等立たる跡にて長瀬氏へ可申候

寄玉

違世

天の原豐さかのほる月齢のくまなくすめる君かみ代かも

寄月祝

たらちねの親のをしへし左にし又とりふ老のをこなさ

君が代読ふとならし久方の便のあなたに鶏鳴渡る

風といふ病にふける時

その子孫はみ山のくち木のすがたをもしのふならひなれば

我宿のかきにさけるとこなつの花にさかえむ君み代かも

為菅笠日記の道とめて屋の大人なとふらびて

みよし野の花をわけても間來つる君か枝折の道にに

川上秋月

月ばかりかたみなれとは高側の宮のみや人思はさりげむ

秋のよの月にいくたひおきぬつゝその事となきしつらむ

世のうさもさらては何になくきまむ老となるまで月をこそみね

故鄉月

秋來てばすつるあふきもあるものを契かばらぬ星合の空

散花をよろさへ見すは時鳥彌生の月になく音きかめや

七夕

日に千里ゆくへき駒もさまれるよにはのとかにあそふ春の野

暮春郭公

もろこしも東風ふくたびに匂ふらし大和島根の花の盛は

おそくときならひもうれし山櫻そなたに花の日敏と思へば

よしのわけ見春ばとほけれと心に消えめ花の白雲

知る知らぬあるしは間にす喉殘る花ある宿を行きてむ

花

りくの歌

時はいま秋の夜ながら春江の花と月とをみるこちする

肥後文獻叢書第二巻

孔の文読む人よりは孔子の消しけん人そ我にゆかしき

冬枯野へと見つへもおもふかなかくてそ春にもゆるわか草

豊前中津の儒者梁田正犯か 論語の崔子就齊君章を塗抹して

ものふの子弟を敢へ導くよしたきって贈りたる

おとにのみきゝわたりつる鈴屋ゆきてあひ見し昔をそおもふ

時習館のありさまのやおとろふるにつけて

立わかれ又象潟のかたければばしほりもあへめ袖のうら波

しらす

海士小舟まこと初瀬の山なら行く春の湊ともかな

みちのくの人にわかれをゝしみて

きのふ見にきたったの山風にちりも始め庭のもみちは

はつせにて

龍田山のもみち見にまかりける比夜もすがらあらしばけしかりけるあける日村井大人の山荘のもみちをよみける

昔わかすみにし庵のあとへは空にこたふるまつ風の音

月のみや猶すみらむわかいほりむすひし山の井の水

人の世はかばり行けとも山里のわれまつ風は今もふくらし

松廬の古趾をたつれて

末遠くゆくせの波も白河の名にあらばる秋の夜の月

阿蘇の萬松廬をおもひやりて

七五二

高本順大人家集

あまたつれてこちにゆくの翅や月のくまとなるらむ

魚龍潛躍水成文

はるの浦の波にしたかふ月影の流れて君をてらしてしかな

鴻雁長飛光不度

思ひいてなかむる月もかすむよの折しも人の育つれもなし

願逐月華流照天

賤の女かのさころもいく度かうちはらへとも月のてりくる

此時相望不相闻

のかとか

玉すだれかけてもなほ春の月行くとも見えぬ影そのとき

擣衣砧上拂還來

ますか みむかふもおなしつき影や編ある人のよてらすらむ

玉戶簾中巻不去

たかきやにつきの光の花ちりて春のなかめもおもしろの夜や

應照離人粧鏡

朧夜の月のいつくか高き屋にのぼりて人をおもひいつらむ

可憐樓上月徘徊

今たれかすむ波路にあくかれて月に溶くらん春の浦舟

何處相思明月樓

みればまつ秋の心をすみわるわか葉もえ出る浦の月影

誰家今夜扁舟子

麓庵(小澤)

每首感吟山陰忘冷氣不覺及深更侯

ころこそなほあくがれ湊江の月落ちかる花の棺に

いく人か月にきほひてるらむ影も霞まぬ春の夜の空

落月摇清滿江樹

つきのゆくみちのはてこそなかりけれ明石の神や志賀のうら波

不知乘月幾人節

みつ汐にかすみあまきるわたつみの波間をさして月をいりぬる

碣石瀟湘無限路

かすみしく入江の月もたちかたの浦より西にかけそかたふく

斜月沈々悔霧

みなとえや霞なかれてゆく春の日数もつひにくれむとすらむ

江潭落月復西斜

たひ衣はるもなかばになりにけり家路にはなほたちもかへらて

江水流去欲盡

しら波のうちぬる雰に古さとの花ちりにきと夢に見えつ〉

可憐春牛不還家

いろくつの底にひれふるほとなれや波のあやなす浦の月影

昨夜百潭夢落花

おもほえす霜やおくらむ夜半の空はるともいにすすめる月影

汀上白砂看不見

空裏流霜不覺飛

此後彼家にまかりける時これがおくよみてみんとてよめる

典(阿蘇)

はるの夜のはなのひかりの玉あられくもの林の月をみかける

まてよみたろに夜もやく更行けばいとれふたしかされてこそ

此おくたもよませ奉らんとて立歸り其後音もせすいかにふ

たりけんかし

にほふ花のあたりを行きめくる春のいり江や井手のした帶

月照花林皆似

かすむとは見ゆる物から春の月いかなる江にか影のなからむ

江流芳甸

何處春江無月明

いく千里なかれつくらむわたつみの波のまに浮ぶ月

わたつみの中よりいつる月とてやしほもろともに影の見ゆらむ

瀧々随波千萬里

海上明月共潮生

波江やかすみの末のうなばらもひとつにつゝくぼろの夕しほ

ばるのよの空に一むらゆく雲のあとしら波に月そうつらふ

春楓浦上不勝愁

なかむればつきより外の影もなしなかれ江邃くおくる白波

白雲一片去悠々

おぼつかないかなる人を照すらむかすむ入江の春のよの月

但見長江送流水

あら玉のかされて見つれともおなし影なる水の江の月

不知江月照何人

人の世とかきりばあらし波の月うつれはかぼるならひなからも

江月年4望相似

みなとえやばしめて人をてらせしはいつれの年の年にか有りけむ

人生代々無窮巳

いにしへに誰か見そめつるかけならむ入江の波に霞む夜の月

江月何年照人

さやかなる秋にもまさるなかめかなひとり空行く月の光に

江瞬何人見月

あまつ空いり江の波もひとつにてちりも曇ら4月の影かな

皎々空中孤月輪

白砂のはまの眞砂もわかわまでひかりたよする月の浦波

江天一色無線

七五

ひとりの旅にしあれば霞たつ春の山へも物そかなしき

やとりしてばれまたまては山さとにわれも日をふろ五月雨の空

いかにまた月やとれとは結ふらん身さへかりの袖のしら露

分るまのゝかやばら風さえてたひの炎にむすふ夕しも

高本大人家集

谷深きのつらとけにけり今ばみやこに花もさくらし

うたれの枕にちかきたきの音は夏としもなき山陰の宿

栄の月をおしあけかたに雁なきて軒の山にかたふく

けさ見ればば残る松さへ埋れて我ゐる山を雪にさひしき

うこきなき岩根のさくら君かためありへて匂へ萬代のぼる

手にむすふ松の岩の水きよみ栄も千代のかけそ見えける

萬代の秋まつ虫のこゑすなりとはれとしろし君か爲とは

十かへりの花かとそ見る君か代に千とせふるべき松のしら雪

花見れば身のうきことはわすられてあらぬ嵐にものをこそおもへ

心あてにそれかとそ見るたそがれの風にほのめく夕かほの花

露しき野へのゆきは秋にきの花すりきめ人そなき

むらさきの冬の花とて匂ふなるこれやその見し秋の白菊

花

七四九

春江潮水連海平

詩句題にして歌よめといへればよめる順(高本)

春の夜友たちとひ来て物かたりするついてに春江花月夜といへる

春江花月夜

大空に春のならびにまかすともころの月のかすますもかな

うらやましいかなる露かこの世にも花の蓮のうへにおくらん

谷川やみ法をかきし言のは今もながれてきくのした水

身のつみのかさなる霜をいかにせむ朝日をさしてたしへさりせば

いさ人に花見むためといひなして吉野のおくの宿もとめてむ

夏の日にあしやの涙のきそふてふ身をうき見るのよるへしらばや

今は世秋風たちぬ行へなくちろもみちばに身をやたくへむ

ばかなしやかきおくとても行末にたれかしのふのもりの朽葉は

深山木の花の下紐春さむみとけぬためした身のちきりとや

見せはやな蝉の羽衣うすけれと染色こき袖のなみだを

秋の野の霧のたえまの花すゝきほの見人にこひやわたらん

契りおきし人はかれのとなりにて霜のみ深き宿の通路

延懐.

戀

上になほうらつたふ千鳥なくなり

あさみけしきの森のあさぼらけかすむ棺にあわ雪そふる

聲たえすしのたの森のほとゝきす千枝の雫をなみたにやかる

ゝきす

黒ばれてうちくれは池の蓮のあさことににひもとく花をたえせめ

きよみしへにおろす雁かれた池のかみに移してみる

きのみきばによせし俤もわするばかりにこぼろみつ

見るまゝに雲井はるかになりにけり翅そかすむ春のかりわたつみの
なきさのもりのもみちば路の船とちらす秋風

大あらきのもりの下草かられとも冬にあとなくうつむもみちは

春の色の今一しほたあさみとり霞にそむる岡のへのまつ

青柳のうつろふ池に風ふけのたまもゝなひくとそ見る

池

浦なみにひっきそへてひと木のみになるの松の夕風

露霜の岡への松に老にけりつれなき色に秋をかされて

雪つもる磯松が枝にみつ鹽に波かけてこそあらばれにけれ

森

河や音も涼しき夕やみにほたる玉ゐるなみのうきくさ

玉島や雲ふきばらふ秋風に河上とほくすめるつきかけ

あすか川さむき河瀬にたかやめのかさしの玉のあられふるなり

松

吉野川かけ見る岸に風ふけばくたくろぼろのいばなみ

すまのあまのまとほのころもうらさえて煙たてそふおのかもしほ木刈てほす門田の稲のあとゝめて冬は雪こそつみかばりぬれ

河

石上ふろの山田はあれにした七四八

肥後獻叢書第二巻

むかしにかへす春のますらた

みわたりや夕立風の涼しくてほに出てつへきあのみなと

ふかく来るや山田のひたすらに霜のおくては色つきにけり

ますかゝみ見ぬめのうらに夕霞八重しく雲の名にこそありけれ

立寄りてしばしば夏をわすれ草生ふてふ岸のまつの下かけ

きのふけふになるみのうら風に音こそかばれ神っしらなみ

かれ

村雨の雲の行手の中そらに一撃名のる山ほともばらばあさちふの露しく床に鵶鳴なり

有明の月をちかたの涙のしあれば谷のかけ草もえいて〉みとりに残る雪たにもなし

夏てもひく人もなきあやめ草なとかくれめに根さしそめけん

これをたに秋の色とてたてる山の下草うつろひにけり

お山の雪の下なる管の根のなかくそわればうつもれぬへき

高本順大人家集

よのほとの雪は野山にふりしきる朝明の空さりげなき

風ふけば手折らぬ釉もあさのこぼれて匂ふ花の下かけ

わか門の板井の清水くむ人は夏もあさけの袖や涼しき

秋の花の白露朝ことに風よりさきにおきて見ました

かたふくか軒の花をもるかけの枕にちかきあり明のつき

天の月をあかつきつけてなく鳥もみしかき夜中のそられかましき

れやちかきのはかせに夢さめてなみた玉ちるあかつきの床

身をてらす光ともなきまとの雪にいく暁のかれたきくらん

朝

けふもまた霞ながらに暮にけりふるとも見えぬ春雨の空

五月雨はその河はらに水こえてからぬますけや涙の下くさ

なみたさへもろくそ落る桐の葉にむら雨そく秋の夕くれ

夕暮の衣手さむしみよしのや山ゆきけのあめのふるさと

花の香をかすむかたよりさそび来て身に寒から野への春風

夕立の黒ふき送るみれつゝき夏もあらしの音そぼけしき

水の岡のくすばをうちつけにうらみてすくるあきのはつ風

吹おろす嵐をさむみ山かつのしばの袖かきかこふなり

雨

霜枯のそれとも見ため野へに来てうつれにかばる世をそしりつる

さく野へにましりてけふくれぬ色なる露に移るまて

里人は今やうちむれ春日野の雪まにもゆる若菜つむらん

音にたての鹿のなみたや夏の野のけみが下の露とおくらん

しら雪と見てやみなんかつらきやたかまの欄にほぼさりせば

みるまゝに夕たつ山の雲ばれて入日涼しきのまつばら

小くら山木の葉の色に出てしよりしのひもあへぬ技鹿のこゑ

久方の天のかく山ゆきふればしらゆふかくろみれのまさかき

野

春のよの月まつほとの手枕に風もさそばの花の香をする

まとちかき竹の葉をよく夏の夜の夢のたちは秋とそおもふ

秋の夜をなにかかこたむいつはとて霧にならば袖の上かは

下折の壁なかりせは小夜ふけてふるとも雪をいかしらまし

山

都人かすみかたとろ多くればいつくの花のかさなるらむ

とこ夏の花の露ちる夕かけに雨の名の風そすしき

釉わる夕への秋のならほしもいつより身にはしられそめけん

あられふるのと山の雲間よりさすや夕日の影をさむけき

夜

夕

てや人をおくるに言葉をもてすとSへるふることあ

せしかはよく思ひさ

ためてあすのたる日にかと出せはやとなむいへる

鈴

おはくの友にましらびてまなびのみちひよいすいめ

同し國同しさにかいる人をしもえつることたま

ちは神のたすけたまふるにこそとひともひともう

れしく朝よひかりあはするに玉はこのみちをもと

みさかえ天つちとともにきはまなくましくてと

きはにかきはにつがの木のやつきにきてしを

す大御國にしあれは大みかとのみさたは天雲のむ

かふすきはみをひとくさのあらんかきりかしてみ

つしみまもらさらめやもものまなひするともから

そをしもひかてからかへさらむかくはSへともおの

れらはからふみのわさにいとまなしあはれそのみち

にさとからむ人もかもと年比おもひたまへるに長瀬

の真幸なむその人にはありける一とせ神風のひせに

ひきて本居大人にことひ鳥か鳴あつまにひたりて詠百首和歌

肥後文獻叢書第二巻

むるこゝろ山の井のあかすして今一たび大人のすす

のやをとひ大江門の友達をもみはやと思ひたちける

をしはしのわかれもをしけれともたゆみなき心さし

をめて、おのれもすめなとさやかなる秋にありとも春の月霞をわたる影はわすれし

夏引の手ひきのいとたわきも子かよるの袂にしろき月影

たかやとも月見る秋になかきよもれに明けぬるやつもれる

くろ夜のさむきあらしに霊はれて雪よりいつる山のぼの月

自餘準之

神路山かすみのうへに出つる日の光にかなるはるのさかきは

かみ代よりかはらぬものや諸人のけふのあふひのかきし成るらん

月の秋のこよひもなかの岩清水神のひかりや空にみつらん

人の世に神こそわたせすばの海の氷のうへのみちを見るにも

春夏秋冬

神祇

順上

本

高 日

寛政八年彌生月十二鈴鹿川おなし流もかはるせをやそ瀕しら浪わけて

しらなむ

天照す光はきはもなきものをそらにしめゆふへた

てなせそ

れはとておろかなる心におもへることもをすいろ

にかきつくれはあやしうけつらひかましきもこち

たきからふみの心ならひならんかも

七四六

高本順大人家集

天皇神なからそのおなしきをしろしめしてとつ國の

事なりともとるへきをはとり給ひ又そのことなる

しろしめしてこにはもちゐましきをはもちゐたま

なしたその道

をおこなふかたちと物とは國にしたかひ時につれて

ことなりたとへはう~れは物くひさむけれは物きる

はいつくの人もおなしけれともそのきものくひ物は

おの ことなるかことし同しきをしりてことなる

をしらさらむは大御國の人のう~れはひつしいのこ

らをほりしさむけれは裘なといふものをねかふがこ

としてとなるをしておなしきをしらさらむはとつ

國の人はうゑてはものきさむうしては物くふらむと

おもへるかことしひつれもかたつかたつならぬかは

かけまくもかしこきみよしの

外

朝々

こたからには序といへりかみ代にも年 たけたる

ふそ道なる。

土翁とよびてそかほからひに天孫もしたかひたまへり

れた五つには友かきかたみにまでいろもてましはる

そみちなるにゅからには倍といへり歌にもものふの八十件の

男のおもふとち又うらこひしわかせのきみになし

こが花にもかもな

此五つのすちはあめつちのなしのまに

あさなさなみむ

なる物にしてたかきもいやしきもおはよ図も

とつ國も人とし人たるものはみなおなきにしもあらすして千足の國の名におひよろつみ

ちたらはしてめてもとりおこなふへきことになむからのひにしへ

のことはにもわれは周にしたかふとそうなるからは

あるしさたまらす夏殷周なといてしばくかはれり

れすらくぬちの人はかにもかくにも世のさたにし

たかふならひなれはくしも周の代の人なるからに夏

殷の禮をもまなひしれともそはもちゐすして周の

禮にしたかとなむそも(大御國は天つ日つきの

七四五

孔子

そをもとにして國のまつりことをも家のわさを

こと

世の人のころ詞をしり

世の人のこゝろ詞をしり萬葉集のたくひをいふ

律令格式

とをみてはおはやけのみさためをしりからの三鷹な

からの詩のことし

とのこ

はさきしかれこそ天つ空のへたてなきかこと下つ

のさかひわかれしごとかたつくならすわひため

たしともめてたき御回にはあなれ

しかはぁあれはものまなびせひともからのふみをよみ

てはおなしき道のことわりをふかくきはめ御國のふ

みをみてはことなるかたちと物とをつはらにかうか

へぬへきものになむ大御國のふみのうちにしもふる

ことふみらをみてはSにしへの代のかたちをしり

古事記日本紀のたくひないふ歌をあつめたるをみてはその

タル

阿蘇布理

りくの歌

春江花月夜

詠百首和歌

長瀬真幸ぬしをおくる歌丼序

目次

に志す人々に出て来たりぬかくて其の學統に属す

へきもの猶熊本に止まらず近くは長崎遠く±京坂地

方にも及ぶに至れり豈に偉ならすや況んやの歌

はさきに戚のをさへふれるものあるやさ

る人多くは大人の名をたに知らねはまことにくち

をしき極なりおのれ夙くより大人を景慕し其の歌の

世に残れるかつ拾ひあつめて寫しおきしを

に一冊となし大人を偲ぶものためにとて物しお

になむさてかくひふは東肥の後學宇野東風 明治

三十九年九月中旬雨そいく窓の中にてしるす

肥後文獻叢書第二巻

大御國の人の物まなひは漢籍をのみよみて事たりぬ

へきものにはあらす御國のふみをもつはらに見るへ

き物なめりおはよそ人にはかならず五しなのやから

そなるそのしなことにおのつからわかるすちあ

ぞを人のみちとなむいへるたくひあけてかそふへからず

やは子をめくしひ子は親をしたふそ道いときなきおとなをさきにしていときなきはしたか

ばなし、なおきて、つまばなし、となむ

四つにはおとなと

千矛神出雲より倭風にのぼりまさんとせしとき蚋すせりひめの命

大みさかつきをとりてうたひたまひけるみうたにもしこそばをに

いませ、あにもよ、めにしあれば、なおきて、

オホキミサキ

へり違つかみ代に入

外をつとめ妻は内をまもるそ道なるこたからには別とい

とじにわればめつ見そなといへり。

り歌にも父きみに我はまな子を母 三つには夫と妻をふとは

なるにおいて

こたからに

ふたつにはおやと子お

むすばれ天皇のへにこそしなめなと

オホキミ

これからには義といへり大御は此道よろづの風にすくれたりいに

しへの歌ともみてもしりぬへし海ゆかばみつくかばね山ゆかは草

と臣君は臣をかへりみ臣は君をうやまふそみちなる

オミ

あきらめて身におこなひ家をいさめ世のたすけとも

ならまくするわさならしその五しなのひとつには君

長瀬眞幸ぬしをおくる歌幷序

其

いへるものまなひはその道を

七四四

ラフミ

★サキ

中國三

至りて加藤千蔭村田春海等と交り學成り國に帰り

合にかいる珍しきものあらんとは思はさりきとて しか再び伊勢に遊はんとする時送られし歌即ち彼

たく賞せしめ給へりとなむ後大人之れを傳へ承 の叡覽を辱くせしものなりさて寛政九年大人亦閉

て感喜再拜し其より自ら田舎珍夫と號せられたり を得て異幸と共に伊勢に至り翁を訪ひ師弟の約をな

さて大人の身西埵にあり且つ其の名儒を以て顯し帰りて國内の子弟を誘導せられしより 全典國風

榮譽をも知るもの稀にして世に埋ればてにたるもの

ならんかしさらすは彼をして唯二人のみとの語をは

發せしめさりしものを、大人は素より鴻盜にして國

學者にあらすされとも我か熊本を中心として皇典を

究め國風を詠するもの、今は盛なるは全く大人の

誘液によれるものなりそも熊本には藩主の顧

細川幽齋公の流を汲みはゆる詠歌の道に暗からぬ

人亦少からさりしかと時勢の髮につれて後やうく衰へはてしを大人世に出て大いに皇典を尊み國風を奬められぬ折しも本居翁の學風漸く盛にして其の名天下に響きわたりぬれは大人も亦翁を慕い益々心を斯道に注かんと欲しなから身は藩學時習館の祭酒たるを以て長瀬真幸を勧めて伊勢に遊はしめられぬよて真幸伊勢に至りに就きて其の學を問び又江戸眞幸途京都に滞在すること數旬小川某と交りしに得たり後象山遺集成るに當りて其の友中村敬宇これ題して匹夫の著作にして 天覽を蒙るもの前に佐川田の國歌あり後に象山の此の賦あり三百年間唯二人のみ無上の榮と謂ふへしといへり實に無上の光とひふへしされとも此のを蒙りしもの只此の二人のみにあらす我高本順大人もまた其の光榮を蒙ふりしなり寛政のころ長瀬眞幸江戸伊勢に遊はんとせしときそれを読めて送られし大人の歌はれ國風は其の技とせられたかはかはかりの

高本順大人家集序

佐久間象山あるとき櫻の賦を作りて 天覽に入るを

其の妻伊笹といへるもの掖庭の針醫なりしか偶々其

の歌を見ていたく嘆賞し携へ 秋宮の覽に供へ

まつりしを 上皇掖庭に入らせ給ひ御机の上に

其の歌のあるを覧せさせ給ひのたまはく田 に高本類大人家

堂滿堂、言室滿室、抵掌扼腕、每論終日、或繼之以梁先生遺稿

古城貞吉校

進口、

二子膠漆相合、而今唇舌相突、一何至此、余時常畏

子、手巻日夜不置、既而知屬文、時々間論其術、言

戊戌之夏 門人 池邊展校

讀岩先生、亦與子倶焉、亦嘗對左氏班馬之書論說、

、常上于

維寶曆某年某月某日、友人大城燠敬具薄奠、以告長 口日、君子疾沒世而名不稱焉、向余問病也、似傷名

卿之靈、曰嗚呼長卿歸于竈穸、壽夭雖命、不亦甚惜之不稱者、子何其傷、子何其傷、夫鴻鵠之雛、豫章

乎、子生英發絕人、而志業不遂、每念之至、不覽掩一之天、人々皆知其將奮逸翮、人々皆知其將任棟梁、

面而歔欷、余嘗與子俱學書福子高氏、子生十歳、余也。子雖志業不遂乎、人々皆已知其將爲大禽鉅材、而口

九、坐席相當、几案相偶、往亦相友、反亦相友、余子材於死後而不置、是子名稱而不朽、子何其傷、若

幼耳、非有聞友益親仁之道、心未能辨人之情、孰薄 有知余言、是感子病時不能告、唯是爲憾已、壽天命

敦厚、而得子日親一日、顧天之使相合乎、既而受句「也謂之何哉、嗚呼々々、謂之何哉、饗、

祭吉處士長卿文

所噴耶、公其何所懟耶、

方長、稍々而反既合、涕淚滂沱俛濕衣袂、在側良

七四二

力所能獲、彼群小之巧黠兮、設罻羅施機辟、何虐之夜、至甲若乙、余書雖拙、得記姓命、余文雖陋、得

甚兮、遂捕以鍛其翮、玉之美而曜兮、錐之以謂之玼、 述中情者、與子相親、與子相磋也、是天實閔余之不

裘之良而粲兮、泥之以謂之膩、彼讒人之陸梁兮、哆 宵、以子與我也、子生二十年逝、永之相友居其半、

然傅會、以訾沒乎草野之萑々、漂乎滄海之漭々、寃|子習子狎、子不我短、子生之日、余已愧子夙德、子

哉寃哉兮、天何使公至此耶、嗚呼忠賢之不遇兮、自死之後、愈益思子夙德、子之病革而啄也、余往而問

古其累々、比干見兮、箕子見鏢、子胥夷兮、屈|焉、子曰、命在旦暮、我心也惛、余曰、子年少血氣

平沉汨水、恙公之忠而賢兮、名聲赫而不巳、公其何

肥後文獻叢書第二卷

久而去、後數日溘焉逝矣、嗚呼天、旣奧焉、何速奪

之耶、美哉若人、天何使之札乎、子生之日時或生異同、則高言誼譁、盡日不巳、至乃旁人七四一

橫梁靈感公襲封也、有志創學校、大夫將順成之、國初以

來、刑法頗酷、大夫作法师、要在寬宥、於是建徒苔 恙公之不幸兮、遇世之劇、袤僻登用兮、忠賢擯斥、

二條、國老遂月嗣掌、以斷政治于其家、故家臣或竊 推破荊璧兮、重襲燕石、謂娥媚可醜兮、謂婆額可懌

與國政、大夫立議、置佐貳官、興機密局、與衆大夫 皎々爲黑兮、墨々爲白、白之與黑兮、莫之能、謂

議、々定然後行之、於是黜陟得正、小大之事、無不 白梟爲蹇驚兮、指神龍爲蜥蜴、差公之不幸兮、豈人

諹菅公祠文

先大夫堀公行狀畧

生二男二女、長某嗣、次某爲河部氏嗣、女長嫁竹原

氏、次嫁某氏、

怡、人皆服其和、君夙受學岡朱陵、蓋有所得也、

十年、未嘗怠慢、其勞至矣、優游以終餘年、乃免其 建櫨局、及雜稅局、以畜貸賂、而彌縫其不足、靈感

職、其班如故、又改加秩百石爲邑入、邑入凡三百石、 公初立也戳、公憂之、大夫乃定經費減雜用、有司得

且存加秩二百石、凡免職者、褫削其加秩例也、唯君 人、區畫得宜、於是用寖給、大夫之政績、四方來取

不然、益特恩也、君爲人謹勑、串習事務、其接下也|法、事開江都、台臺目以良臣、白河侯傳台言於我公、

之允、爲勘定頭、食邑入百石、寶曆元年忠之允沒、 周悉、先是用人挾君權逼執政、機密局一建、此亦除、

君襲其食邑、爲更番騎、四年爲泮宮監、五年進班上 大夫憂農政之不整、夙夜刻意者十有三年、租稅均平、

士、入年轉監察加秩二百石、十一年從公役于江都、 民亦大悅、於是每顆置倉舍、帶殼稻、以備非常、

台臺命公修增上寺、君攝奉行事、功畢、台臺賜銀及 大夫恒日、安不忘危、古之道也、國不可忘武也釁舍

服、公亦賜服報其勞也、十八年爲副奉行、加秩四百 之側、置東西二榭、職是之由、會台臺命天艸戒備、於

石、安永二年爲奉行、加秩六百石、班比着坐、八年是缮治器械、大分諸將士、輪次逐歲、以備不虞、於是

又增賜加秩百石、以班中着坐、天明二年改加秩爲邑|武事大整、以其職務之條目、使之遵守、於是有伺服

寬政三年君年六十七、公命曰自壯至老、服勤數 膺、無有墜失、台臺屢命納金、國殆將不能給、於是

公於是使橋本總右衛門傳之于熊本、大夫將赴江都、

拜台言之辱、老且病痢、不果、今大夫堀公宜代拜

謝、時祗役在江都,嫌於從便、故大夫命分孫君、新

治行李往拜之、称听都

下似有文

先生遺稿卷之八

忠之允爲司農椽、食邑入百石、考稱元之允、後稱忠

不反者也、使若帮聞言之風、則可以少牖其心也夫、

吉海君墓誌

流行不可奈何、汝其努力、其見器重也如此、其後公

其臧如故、祖父字孫左衛門、亦爲司鷹、歷仕妙解公 公固惜君材、寶曆六年復其職、明和元年復所削邑、

眞源公妙應公、考諱正幸、亦爲司鷹、後轉親近、 別賜秩二百石、井邑四百石、嘉其分績也、明和七年

又進宮監、歷仕妙應公靈雲公隆德公、賜采邑入二百一命赴長崎、知邸監事、勘定頭如故、以君耄老也、

石、位出親兵隊長右、無子、養君爲嗣、君本姓山中|公恤其職劇、遷為親兵隊長、安永六年十月六日以病

氏、父字猪平、母齋藤氏、以寶永五年十二月二日綻|逝、享年七十、葬于往生院、君爲人坦迤、嫺於辭、

于大坂、年十有六、冒綾部氏、享保中考致仕、君承 捷於筆翰、上牋言事、雖事紛錯、未嘗立稿、君頗嗜

嗣襲其食邑、爲番中士、既而爲鶴崎假宰、事々周 草書、屋後別搆小齋、竹窗蓬戸、設机其下、揮染自

胃、無有敗墜、賜九曜上下服、無幾爲真、元文四年 樂、所善玉山先生、朱陵先生、大川上人、面山和尚、

轉勘定頭、位次銃隊長時、歲荐饑、用不足、君迺奔 其他知友、自縉紳大夫至閭閻之士、不可枚舉也、

命于大坂于江都、屢出奇計、彌縫匱乏、公大悅、賜 其旁通無礙也、娶岩男氏、生一男四女、男有疾不可

九曜服、延享元年從公如江都、是年亦饑、公延見君 承嗣、養江島氏之子、名幹字傳喜爲子、襲其食邑、

曰、頻年穀不登、而國事無蹪、汝之力也、今汝收餘燼 1 女 早亡、一女爲傳喜配、一女適水足左助、一女未

將復炎々、而亦復饑、汝志得無熠乎、雖然、天災之|嫁、銘曰、過而能改、聖賢所與、沉其終

延見勞勉者數矣、賜九曜外套衣、延享四年進階行人、寬政七年九月十一日、中着坐故奉行吉海君逝、年

寬延元年以過失免職、削采邑之半、君廼營負郭之地、 七十二、某月三日葬於本因寺中、明年九月、其嗣某

愼謹節儉、以禮自律、十數年如一日也、可謂善改過|齎譜及狀、請誌於煥、々删取以作文、曰君諱某、稱

者也、嗚呼、士以過廢也、不知悛改、居然逐非者有市之允、姓吉海氏、其先仕大友氏、大友氏滅、家居

之、憤々忿恚、食噎其喉、疽發其背、以及其天年者

有之、非議在上者有之、怨仇其友者有之、是皆昏憒

筑後、高祖稱木工右衛門、寛永十年始來我藩、爲清

口石見之臣、曾祖稱平兵衛、始仕公家爲委吏、祖

七三九

梁先生遺稿卷之八

馬、姓源、出自村上帝、村上帝二十二世、右大將久 君諱正員、字孫助、姓綾部氏、出自藤原氏、其先肥

我通興第三子號棒菴、諱祖秀、仕先封加藤氏、棒菴 前人、世爲著姓、六世之祖、字攝津佐、仕田原紹忍、

卒、子將監嗣、加藤氏有罪國除、將監家居江都、妙 以驍勇聞、紹忍屢賜書賞之、曾祖父字理助居豐前、

解公開其材、引見者數矣、公遷封于我也、請將監曰、妙解公之爲世子也、舉爲司鷹、公遷封于我也從焉、

夕、諷誦詠吟、不知老之將至、嗚呼君亦善人之徒哉、

綾部君墓碑銘

於辭分也、正保中將監移病、公乃命子縫殿襲其實禄、

別賜稍食五十口於將監、以優其餘年、將監譚宗政、

既老號有安、縫殿諱宗辰、延寶中老、子諱通久硐、

我之新建之初、稱功臣名族者、有及其身而而亡、有「稱久馬、自是以來、四世皆稱久馬、下津氏之以久馬

至子若孫而亡、有下而爲士庶、無有孑遺、豈其積不爲稱、蓋自通久始也、通久卒、子諱通章硐、君以享

善之所致乎、何其不幸也、方今傑然稱著姓者、亦於「保八年八月十二日誕、以安永七年十一月三日逝、享

其始祖無段孚之親℃或有之、嗚呼天耶、不可奈何、 年五十有六、葬于流長院、君性質直愛人、習於威儀、

下津亦我之著姓也、自其來寓、百四十餘年於此、凡

六世子々孫々、承統繼世、班爵秩祿、未嘗墜墮、豊

得無非奕世有善人、而天與之哉、下津君諱通政

善劍及槍、貫於射事、深於茗理、最嗜誹辭、每值花晨月

夜以繼日、殆忘寢食云、嗣子景久乞碑文于余、余係以

銘、銘曰、公之爪牙、不墜其職、斷々無他、可以爲則、

下津大夫墓碑

以往、公之如江都將啟必從、益將監明於常故、嫺

騎隊長、十二年七月命鎮鶴崎、十三年十月任滿而歸、 肥後子之墳墓之國也、子豈忽然哉、將監拜稽首曰、

安永二年二月又鎭鶴崎、五年致仕、君以享保九年三|臣夢寐之之日久矣、敢不唯命是奉、於是賜采地入千

月十七日生、以享和二年十一月十八日修、春秋七十一石、以客遇之、既而賜山林、以給探樵、益殊恩也、

九、葬于本妙寺、君爲人嚴莊誠一、未嘗疾言遽色、|公討賊島原也、將監從焉、有功狀、公莞真源公襲封、

學劒於寺尾子、夙極其蘊、居恒曰安不忘危、古之則將監將致仕而去、時公將如江都、固留將監日、此行

也、武人之職、在果毅衞國耳、刺擊之法宜常講之、一也以孤新立、階阼多事、擯相之任、舍子而誰、自是

中島歸水善拳法、又究劒理、常延以爲賓、談論往復、

其報、安永十年府褒之以白銀若干、天明三年命爲目「君諱景壽、稱七兵衛、長谷川氏、源姓、出自清和帝、

見醫、翁最長治痘、寛政中痘大行,上治案十六條于五世祖伯耆守繁隆、居上州長谷川、因氏焉、高祖景

再春館、人服其能、享和三年麻疹又大行、涻日夜奔 隆始仕我藩、食邑入千石、曾祖景元、寛永中與父景

走、不寐者蓋三閲月、所全治甚衆、七月廿一日問病 隆赴有馬、有戰功、別賜食邑入二百石、二口口年景

於某氏、遽然終矣、翁以延享四年生、春秋五十七、一隆病終、命景元襲父祿、而前祿如故、邑入几千二百

葬于法宣寺後先塋之側、諱敬信字好生、一字承受、 石、景元請頒二百石、以賜二弟某々、許之、寛文十

號意巷、本姓原田氏、母吉田庚菴之妹也、庚菴有一二年增賜邑入三百石、長子稱十之允、早亡、孫景親

女、養翁配之、以翁爲嗣、於是冒吉田氏、吉田氏之一承祖、是爲祖考、邑入千石、考景直稱仁左衛門、寶

先曰良菴、良菴之子曰養菴、庚菴其子也、三世業醫、永中襲、享保八年爲八代騎隊長、頻年饑嗪、國用不

居海氏邑、庚菴受禁方於河尻山田某、遂移居河尻、 足、執政立議、欲滅番騎諸隊長、各錄羸弱若平素無

時東洞子之術大行、治法一變、庚菴守故不遷、翁亦一狀之人以聞、景直獨曰臣屬無羸弱、又無無狀之人、

竊疑萬病一毒、不切脉之說、著箋注金匱要畧、其附|臣祿數陪於番騎、請收臣祿、公義其言、事終止、九

言中粗言其意、翁之幼也、師事仲文江良子、專攻經|年遷扈從騎隊長、十九年轉用人、元文五年賜采秩三

義、不好詞章、其學夙成,其爲人也、慍恭慈良、與百石、延享二年增賜食邑入二百石、君其嗣也、享

人忠、又能爲人解紛、鄉里皆賴焉、寬政中大水、里三年八月襲食邑入千石、寬延二年六月爲三十名銃隊

民殆將爲魚、翁性善蹈水、或方或泳、以拯溺者、其長、寶暦四年七月遷留守騎隊長、八年六月又遷先鋒

長谷川君墓碑銘

鄉之人皆曰、翁能肉白骨、既而翁又予藥窮民、而却

之、掉尾于華屋大廈、絕跡于篳門圭竇、獨不失古疾 「救人之功、大率類此、初配吉田氏、早沒、繼室以古

醫之風者、於意菴翁乎見之、翁居恒曰醫仁術也、 贺氏、皆無子、養侄名綽字肅裕以爲銅、銘云、起死

苟有濟人、則豈問類之貴賤、家之貧富哉、故有乞診肉骨、其技以鳴、救急解難、其行以章、貧富一視、

者、不避祈寒隆暑、雖深夜必往、蓋以爲常、於是一|德洽闔鄉、斃而後巳、命名其長、

、翁近之、

意菴墓碑銘

吉田以戒其子孫、可不謂賢乎、

長沼翁墓碑

岡枧翕墓碑

翁諱貞恒、 姓長沼氏、 稱小十郎、 其先美作人也、 翁諱眞勝、姓岡松氏、稱作左衛門、其先筑後柳河人、

六世祖稱右衛助、仕森侯爲騎隊長食祿千石、戰沒於|稱主汁、天文中來居豊後高田、遂家焉、考稱孫兵衛、

長篠、五世祖稱十郎左衛門、亦爲騎隊長、戰沒於大|妣小野某之女也、翁年十七爲鄉小吏、恪勤二十餘年、

坂、高祖宇右衛門爲五十名銃隊長、曾祖淺右衛門有 擢爲卿長、寶曆十一年巡檢來、翁辨治人馬、無有墜

故致仕、祖考十郎右衛門來寓我藩、妙應公命爲中扈 失、於是賜上下服以褒之、十三年六月遷關鄉長兼代

從、考亦稱十郎左衛門、亦爲中扈從、翁小代氏之子 官、長子數右衛門代翁爲高田鄉長、安永七年賜外套

也、十郎左衛門養以爲嗣、靈感公學槍法於門司子、 衣、賞其嘉積且年勞也、天明四年三月翁請老、得允、

寬延元年門司子薦翁爲對、寶曆十一年命爲槍師、明「稱十時關養子慶右衛門代翁爲關鄉長、兼代官、翁

和三年賜九曜上下服、六年賜食祿百石、安永六年賜「以正德二年五月七日生、以寬政元年十月三日終、

九曜袍、天明三年增賜祿五十石班銃隊長、皆褒恪勤|秋七十八、謚曰鏡明坊素觀日源、葬於高田上德村、

也、翁以寶永六年十一月七日生、以天明八年正月十一有三男一女、長數右衛門、次雲古、爲侍醫、次薙髮

日沒、享年八十、娶口氏生一男一女、男名明英、稱爲僧、女配慶右衛門、翁性愼謹、好儉素、某年罹

十郎右衛門亦槍師、女適志水藤七、初翁之微也、鎌「疾而絕、家人被以縑衾、有頃而蘇、勃然怒責家人口、

田正行以善槍聞、翁寄食以學焉、鎌田氏爲人頗峭也、 吾儕布被以得免凍寒足矣、何以此物爲、因戒子孫曰、

翁能誠諧、不失其歡心、一日謂翁曰己矣己矣、子之|凡世之敗家、無不由奢侈、汝等其愼焉、大城子云、

材不足有成、蓋激之也、翁於是奮發磨勵、日夜不休、小有則小侈、大有則大侈、常人之情也、翁能守分、

卓爾於衆子弟之表、遂得其蘊、翁遇弟子甚嚴也、然

子弟愛慕無倍者、蓋有和行于其間者、翁無他嗜好.

居恒談槍勢、訴々終身、古人云敢有二事嗚呼、風俗之澆漓、天下滔々唯利之視、醫人亦皆化

既而太閤命諸將曰、北晋州而後和、公於是與諸將攻一既己就擒、城中之士開之請降、公許之時立花侯黨石

晋州、造轒轀車、以毀城趾、臣森本儀飯田角先登、 田、攻大津陷之、既而聞石田就擒、乃歸保柳川、

途屠之、既而太閤許和、命諸將班軍、石田小西譖公-攻之、立花侯亦降、公慰撫之、請東照宮以釋其罪、

于太閤、太閤大怒將賜死于公、時公在伏見、會夜地-東照宮賜公書以稱北功、委以肥後筑後二國事、時島

大震、城宇大壞、公率士卒二百人入城以談之、太閤一津候亦黨石田、公與黑田侯倶訶薩州、島津侯因我先

大說、公园自明其無罪、亡幾、太閤命諸將、再伐韓、 公、請釋其罪於東照宮、東照宮、以故公及黑田侯引

公拔梁山、又與諸將攻南原克之、既而公據蔚山、缮治-兵還、是年東照宮賜公以小西售封、幷前五十萬石、

城壘、又射出巡督西生浦及機張、明楊鎬及韓兵來攻 於是新築城于熊本茶臼山以治、八年公如江都、謁東

蔚山、兵號十萬、臣清兵衛等出戰、不利、闔門堅守、 照宮、東照宮乞公女、以配紀州公、十年拜從四位下

告急于公、々乃艤艦勒兵、人腰米鹽急趨之、虜怖公 待從、十六年三月秀賴如京師、見東照宮、公與淺野

威風、不敢近、公得入蔚山、城中食戳、且虜絕汲道、 侯護秀賴、秀賴以得無恙、世稱歎之、五月辭大阪、舟

公奮曰吾戰死以報國耳、孰與饑渴以斃、將出戰、會毛 中罹疾、六月二十四日、薨于熊本城、享年五十有一

利候黑田侯等來援、明兵韓兵皆綏、公乃追擊、獲首 葬于中尾山、呜呼、公伐韓也一每戰皆克、韓人震怖、

二千餘級、太閤歎賞、賜以備前刀、既而李如梅及如: 至今稱公名、以止兒啼、且能撫其民、秋毫不犯、故

柏、率兵六萬來攻、公乃使其臣庄林等夜侵、獲首五[民至今愛慕焉、公曉水理、受封肥後也、導川築堤、

百級、慶長三年八月太閤薨、遺命諸將班師、諸將盡大興民利、國至今受其賜、公晚引儒雅、講明論語、

還、五年上杉氏據國以叛、東照宮射率諸將討之、尕察自憾其學道之不夙云、銘曰、塞旗斬將、樊會是似、

石田有覬覦之心、固留之、且請自往、東照宮謝其忠一觸機制勝、孫吳足比、征韓之舉、功冠諸帥.服其勇

悃、使公就國、以監九州、旣而石田果叛、小西屬焉、公-武、國共仁義、殊域爭錄、口而不置、赫如星日、名

乃率兵攻 宇土、會東照宮使人來告、曰石田小西敗闷、一浴天地、

于鏡城、北兵使韓克誠方募兵、々大振、公弊而擒 奏館、浮田宰相命公及鍋島相良二氏擊之、公力戰獲

之、乃入侵城、將以王子赴吉州、韓將梅天率兵三萬、| 首級三百九十、虜自火其館以自殺、無有孑遺、宰相

要公于路、又走之、既至吉州、留士卒守之、率軍及諸將、至公營、大稱歎公閥、既而石田三成曰、王

還安邊、撫慰其民、微租稅以供軍食、民甚愛戴焉、 城食匱、且漢南十萬、隔河而陳、旦業將來突、請退

明帝遣使喻公、書云請歸二王子、大明發兵四十萬、 保釜山浦、公曰武夫力取干城,今未接兵而棄之無為

以救朝鮮、小西行長敗走保王城、即日屠之、行長及「也、且漢 南雖衆、懦怯 也、何足 畏哉、三成 曰、子

浮田諸將、皆既授首、獨存 將軍一人耳、仄開將軍 輕漢南、盍弊而走之、公曰易々耳、夜半部勒往襲之

勇且仁、心甚欽之、若許所請、則爲將軍護歸路、艤 | 躬親斬將、漢南人大亂、諸將議曰、淸正孤軍必取敗

數千百般、以送將軍於日本、若不得所請、則大兵將「朗、是國之辱也、乃皆各發後兵、至則漢南已敗走、

至、唯將軍圖之、公命侍史作報書、豐臣朝臣淸正謹 於是合力追擊、斬獲甚多、镓襲臨津、得馬牛及稻菽

報書大明皇帝所擒王子、所謂軍實也、非請太閤、「還、衆大飽飫、宰相及諸將、遣使太閤、請退保釜山浦、

則不可歸也、行長賈豎也、宣矣其敗走也、吾幸據險 太閤許之、會沈惟敬議和、太閤命公還二王子、王子

于此、王出在前、明兵雖衆、不能一時踰至、顧一日得歸、贈公書以陳謝、其文中云、慈悲如佛、王李

不過萬人耳,我兵雖寡、足以鏖萬人、然則比及四十-贈書太閤、以稱公德、云君子中之君子也、爲之營生

日、我能得殲四十萬人、然後飲馬鴨綠、直犯帝闕、 祠於南大門外、王子親祝祭文、高官三人司之云々、

寇于

可也、公見、大說曰、王子在我掌握 浮田宰相在王城、與公書使之來保、時吉州爲虜所圍、

中、鍋島侯曰、敵诱我耳、不可深入、公不可、孤軍告急於公、故宰相書曰、援吉州而後奉命、乃兵至

突進、東北行五十二日、擒二王子于會寧、置之鏡城、｜吉州、攻虜走之、獲首級三千、乃梅城兵、與倶赴王

命甲士若干人護之、厚遇之、淮軍攻女箕、而拔其城、｜城、明將李如松驍勇盖世、是時在開城、土人相驚曰、

旣而女鎮人來襲者一再、皆擊走之、斬獲甚多、將旋 清正將來襲、如松阳之大怖、退搦平壤、既而虜保傳

東北隅

日、至安邊、留宿泱旬、以得鍋島侯、乃相與進軍、

至長橋、有人榜路側、曰王旣逃在大明、二王子姑避

小西遣兵討之、不克、躬自率兵攻之、乞援于公”々

乃赴之、手鎗木山彈正殪之、志岐滅、旣而又陷本渡

城、天草平、太閤大賞歎、賜書勞之、十八年太閤克

及行長諸將、分道而進、公就咸鏡道、東北行十有三

太閤與織田信雄有隙、軍于柏井、既而綏、公爲「遣兵討韓、命先鋒於公及小西行長、賜公以大幟、署

殿、敵兵群突、力戰卻之、太閤攻加賀野井、公獲首「日南無妙法蓮華經、公拜謝曰、臣盡死力以耀公武於

級若干、十五 年太 閤西征 九州、公從、諸城皆降、 殊域、不敢唇此幟、乃與行長俱具戰艦、傅釜山浦、

使公假守宇土、既而賜肥後佐々成政、公於是退宇土、 公攻慶州、獲首級千五百、進兵至忠州、行長後至

會太閤旋軍、公乂從焉、島津侯享太閤于筑前岩屋、 麾下士卒頗淫掠、公諭行長火之、翌日將赴王城、

太閤使公奉命.以賜茗器于島津侯、翌年四月太閤使 南二道、一達南門、一達東門、行長與公爭道、將相

公讓佐々成政之罪、以賜自盡、是日讚岐國守尾藤氏 攻擊、鍋島公解之、公遂就南道、々有大河、前騎報

亦賜自盡、肥後讚岐皆國除、太閤沒入尾滕氏之器械、 曰、巨流渺瀰、濟無舟楫、且敵陳兵于岸、列艦于渚、

盡賜之于公、既而曰吾將封汝以廣土、讚岐全國、肥|將擊我半涉、公至、佇馬良久、見鳥群浮而下、知其

後半國、唯汝所欲、公拜謝曰、若得小封於肥後、何-僻兵、乃命善游者數人、獲艦而來、軍盡濟、前驅又

幸加之、於是賜二十五萬石于公、二十四萬石于小西 報曰、人屋鱗沓、樓閣摩天、盖王城也、公長驅而門

行長、太閤謂公及行長臼、成政有罪故誅之、其臣何|焉、前十日、王李心率衆而逃、城中無人、公具狀報

罪、汝等撫而畜之可也、公於是籍佐々氏臣三百人而太閤 既而浮田宰相、石田三成、及諸將、各率軍來、

臣之、十七年、志岐林專及天草伊豆守、據天草以叛、 公及行長至宰相營、以受區處、宰相與三成議、使公

武則、片桐且元、加藤嘉明、亦各獲首級、世謂北條氏政于小田原、賜書于公、使之東上、公乃發熊

之七本鎗、至今稱之、太閤增賜七人、各邑入三千石、本、迎太閤于岡崎、慶其凱旋、且勸太閤宿尾州中村、

附公以銃手百五十名、與力二十騎、公於是改稱主計「中村者太閤之產土也、太閤大悅、二十年正月、太閤

、女公子之嫁矢田部侯也、君與展事、賜服一枚. 淨涧公諱清正、姓加藤氏、小字虎之助、祖考諱清信

四年正月台臺命公濬武藏上總信濃之川、君與開章程、 稱因幡守、屬齋藤氏、戰沒、考諱清忠、小字鬼者、

功成、二月八日台臺召君賜服及銀于城中檜聞、是日-稱彈正右衛門兵衛、年三十八卒、豐太閤之母、沉池

公亦賜服、六年燕寢新成、賜外套衣、是年七月遷用 公之母之從妹也、以故母千因太閤于長濱、公時年讒

人班比着坐、八年七月賜上下服及麻衣、以用人親近 五、天正四年公年十五、太閤命元服、賜邑入百七十

而戦劇也、賜服數矣,不復錄、寛政二年進班中着坐、 石、邏卒久兵衞殺人負㝔、衆無敢近、公膂力絕人、

三年從公如江、四年四月公將歸藩、君與疾從之、 格而縛之、太閤稱歎、增賜二百石、以爲偵騎”九年太

沒於尾州小越驛、君以寬保元年四月生,以寛政四年 閤攻鳥取、命蜂須賀侯及公.諜城背之險、公知其必

四月二十九日修、享年五十二、葬小越驛、既而改葬,有伏、謂侯曰盍請從兵、侯不可、乃雙騎、傅城、伏

我姊原山、君無子、晩有一女子、幼也、以澤村氏之一起、公射而郤之、獲首級、太閤手賜黃金一篩、又增

子一根爲樹,以士厚之女妻之、君爲人質實而敏、口, 賜百石、十年攻冠城、公先登獲首級、賜書褒之、山

不言人短、苟有一善、必贊而成之、仲尼曰、君子成 崎之戰、公與徒兵三人、直人賊軍、手刺近藤半助、

人之美、君有焉、其爲學也、不治章句、務畜其德、 獲首復命、賜急拔 一口、十一年 正月攻 軀山、與木

其判理度、宿儒不及,其在家也未嘗有厲色、門庭 村某俱獲近江新七、五月賤嶽之役、公馬、人嘲其

整然、其在官也亦然,其在公側也、以陳善閑邪爲已經不擇馬、公曰有膝栗毛何傷、邃步至賤嶽、爲一番鎗

任、風節挺然、不可搖奪、趣舍往々有與古人符者、一獲戶波隼人、是時福島正則、平野長泰、脇坂安治、

肥後太守加藤淨池公神道碑

槐山之椒、爰卜其宅、茂樹在上、清泉在側、美哉佳

一城、想見其德、

副奉行、河尻父老惜之、曰願得假君二三年則足矣、

銘云、凡今之人、誰如君淑、尚賢忠君、不失古則、

將聞于府、人或諭之乃止、是時士壽既爲奉行、君生

事士壽、翼々惟謹、人稱其弟、然其議政也、不少

假借、究討而後已、人稱其奉公之義、三年從公如江

都葉、生翁於竹野郡樋口邑、妹川里宰國武定寛以爲-爲更番騎、明和五年遷爲司物、安永三年爲河尻宰、

嗣、以其子妻之、定寛六世祖曰兵部定佐、以勇聞、 河尻瀕海、賈船來往、舶艫相陶、且土人輕悍多詐

其後胄世爲里宰、享保五年夏六月、大水漂沒民屋、 廳頗擾也、君之至也、訟訴少息、處期年、民有改

田皆爲磧、播逃甚多、翁尚幼、以父之疾 攝里宰 行者、有處士江良某、賢而好學、君將就見之、或曰

事、庫府逅恤、周旋盡力、民免饑寒、翌年定寛致職、 宰不宜自輕、必致之、君曰吾欲見之、爲其賢也、賢

翁襲爲里宰、居職數十年,畎甌大治、居民稍稠、人者豈可召致哉、逐往見之、識者多之、曰下賢如是、

稱其功德、翁致職、子定熙襲、定熙先翁逝、定熙有 雖宰天下何有、九年賜服一枚褒嘉績也、天明元年遷

國武定次墓碑

小坂氏、本姓氏、

君韓廷、字士議、稱九郎助能幹父蠱、老而益勤、粲有分績、豈非克終者乎、

十八、葬妙玄寺、僧謚日自然院天禪日定、嫡子通定

小坂士議墓誌銘

漢里城、々陥、子孫始遷於我、家世藏槍及刀、實祖「子日定尙、亦襲其職 翁以天明三年十二月十六日逝、

先之澤存焉、翁自少好學、頗通經義、學禮於伊東子、 享年八十二、鳴呼周室叙官也、里宰爵下士,今吾東

夙入其室、享保九年靈雲公甫五十、命工製秋、訪法 方以庶人爲之、益取其親民、而使催督也、然其人苟

於翁、時人荣之、享保十三年命為禮師、居職五十餘 士行者、則不能訓誘 勉勵、又不能果 决以坎

非有

年、賜食邑入百石班銃隊長、門生千餘人、以元祿九險也、翁士人之裔也、蓋有家風存焉、宜哉稱其能終

年十月十二日生、以天明三年九月十二日終、享年八「職也、詩云靡不有初、鮮克有終、古人之所難也、翁妙年

有疾、以嫡孫通義爲嗣、襲其食邑、翁旁達兵法、尤

精火攻、其他劍法抽刀法、茗理鍼方、皆極其蘊、其

爲人也謹勅而温、未嘗失色於人、子弟能循繩墨、

庭秩如也、可謂能任其職矣、

翁諱定次、字利八、姓國武氏、本姓重富氏、考號洞

'姓戴先生之子也、先生有四男、長字士壽、中着坐

奉行、次字士厚、府學教授、次稱及八、爲永良氏嗣、

君其季也、小坂一明如江都也、爲假養子、一明以病

沒江都、逐以爲嗣、於是冒小坂氏、襲食邑入千石、

出新趣、清人汪竹里賛先生之書曰、澀如春柳、乞苦 翁諱通幸、稱十助、號河水、本姓肥田氏、有故冒永

之人、相踵于門、先生未始拒之、必使之得其所欲而廣氏、肥田氏出自丹部、翁先臼肥田通忿、居豐前羅

永廣翁碑

告、發矇而後己、善屬文辭、尤工書、刻意松雪、間

、是 肥藩有 道君子、艸野 先生之墓也、先生之 長、六年告老、命子嘉善襲共邑入、別賜先生以稍食

德、敦龐雅純、先生之行、優柔周悉、人皆稱善、先 七口、寛政八年三月五日終、春秋八十二、娶野中氏、

生未必稱善、人皆以爲不可、先生未必以爲不可、必 生一男三女、二女早夭、一女過不破九郎次、男名嘉、

其實、先生自幼好學、既長也、開道于退墮塚子、 字伯信、一字嘉善、世子近侍、銘曰、玉名之北、蓝

及愼庵藪子、頗窮奧突、講究孜々、老猶不倦、與其里之陽、其山嶽々、其水湯々、營宅於此、想見其人、

友森尙齋、百里來往、談論剖宅、其誘後進、丁寧誨一於千萬載、分聞如新、

艸野先生墓誌銘

又善賦詩、才思泉出、一坐歛手既長、學徒進、詩

亦鵲如也、天明七年三月十七日以病終、春秋二十四、

所著有詩文集三卷、鳴呼大春之幼也、禱父病於藤吐、

每夜獨行、不使人知、其孝可知也、大春之在蓐也、

友朋擁枕、其空空之事、友朋爭爲出貨營之、其信可

知也、銘曰、晋弼唐勃、才性可比、命之不長、又何

相似、

正十五年也、考字長之進、號固庵、師事竹塢佐藤子、

年十四入大學、能說尙書、娓々沈着、宛如老儒然、

太春其一字也、父名愁祥、字伊左衛門、一字士善、 去、先生諱雲、字士龍、一字雲平、姓草野氏、六世

仕清水大夫、兄名洪民、善屬文、早天、大春生俊異、一祖艸野隼人、筑後草野城主也、和仁之役戰沒、實天

竹塢之嗣曰潭水、有疾夙致仕、養固庵爲嗣、於是冒

佐藤氏、更字华七、食邑入三百石、爲儒員、潭水晚

有男、曰半彌、固菴病將沒也、生纔二年、時先生長

於半彌七歳、舍先生而立半彌、時人羲之、公特命賜

先生稍食三口、以爲學資、元文二年爲中扈從、寶曆

四年爲府學訓導、十年賜廩米祿百石、明和三年爲府

學助教班銃隊長、安永元年賜加秩百石班行人、十年

以廩米爲邑入、天明四年增賜加秩百石班二十名銃隊

鳴呼側室園氏、以寶曆五年九月三日、誕大夫人于宇土、「大春既沒之三月、其父士善学々而來臼、曩吾喪長

十有三年、往居江都二本榎邸、天明二年四月、爲先 洪民、今又喪融也、吾有何罪、天何使吾子然哉、

君大詢公妃、在白金邸、無幾徙居龍口邸、大夫人嘗 皆有子、我獨亡矣、人皆有孫、吾獨亡矣、吾儕小人

有娠、數月而墮、後不復娠、公有二男二女、皆庶出「之栖々皇々、皆爲子孫動也 吾已矣哉、流涕歔而

也、盖大夫人逮下之德之所致也、七年九月公病革也、 不巳、余亦爲之落涙、既而請碑文於余、曰願因先生

以今公爲、實大夫人之母弟也、大詢公既薨、大夫「之靈、使融也不朽、余曰子之二子、皆名於文辭、世

人號曰瑤臺院、既而有疾、欲就國以養之、寛政三年「人口而不置、是不朽也、何假吾文之爲、固請、余

十有二月今公請之於台臺,四年閏二月台臺聽允、於一叙次其名姓及行事、大春諱融、字八郎、姓井手氏、

女也、

井手大春墓碑銘

人特鍾愛之、遂同館而居、寛肥藩小君瑤臺大夫人墓誌

大夫人諱地子、姓細川氏襲其食邑、寛政元年九月磨貞石、以表其墓、

、君釋弓曰、若彼一

隻、吾匕既貫之、志在雙獲、是以緩矣、敢謝、公聞

其名、觀共射、大褒賞之、命爲射師、齡已七十、

善射、與壯歳無異、門生數十百人、嫡子久戡、

及芍藥、無它嗜玩、盖其天

性云、

之、既而一發累中、一坐酉稱善一日試射、矢方貫、有客偶至、曰請子試剖彼筈、日「是四月發江、六月至熊本、新築館于南郊居焉、人

吁是毀瓦畫墁之數也、敢辭、客固請、君不得已一發、 啊小愈、六年十有二月、剔髮爲尼、享和三年正月十

筈弦而剖、君嘗遊八代、長岡大夫延見之、有雙翠 日以病薨、春秋四十有九、謚曰無相妙空大姊、二十

烏方戯池上、大夫諸君射之、君持滿良久、大夫曰我 有三日葬于護國山中、桂幹公子同茔、初今公有第二

聞子名也久矣、何其發之緩也、君不應、左右窃非笑「子、曰熙吉、大夫人之就國也從焉、時年鑱三、大夫

七三

肥後文獻叢書第二卷

、推恩宇土作諱興文之政八年天、謚曰桂輪公

子、大夫人命濶其鍌、曰我死必我於此、與凞也同

居如住H矣、故不敢違分也.伏惟大夫人爲人靈慧、

善書及和歌、服飾器用、不同華麗、唯取其供而已、

不喜伎舞淫曲、好種蓮菊七二九

梁先生遺稿卷之八

海蠡之用、始於西域、吾邦黃冠之徒、以爲降神之具、 君諱友久、姓岩佐氏、稱善助、號直軒、邑入二百石

礪波山之戰、始用海蠡、進退士卒、其後效以爲常、 班銃隊長、以元祿元年三月十四日生、以寳曆七年十

蓋以其聲能徹也、鐘皷之音、非不振也、然上山阻之、 二月十八日終、春秋七十、君生十四年、學射於豐岡

則或不達獨海蠡之音、必能串穿、其吹之有術、苟一氏、既壯、以善射聞、射梅蕊於百步之外、百不失一、

岩佐善助墓碑

寶螺師吉住翁墓碑

、命名維壽、

二十石、相繼世爲海蠡師、

口所謂與烏獸草木同腐者也、由此觀之、其人雖天哉、「不得其術、則不處盡其用矣、吉住翁得其術者也、嘗

其名不朽、則愈於壽也遠矣,其人雖壽哉、其名煙滅、學之於道士正藏院、習繹有年´世稱以爲青氷、安永元

則天之不如也、島原大小篠鼎甫字释卿、幼而好學、 年有命參之於兵書、以共用、於是與兵學師橫田子

長而不改、寬政十二年來我門、蓋島原侯之命也、爲「俱考訂之、進退之節、尕合之度、周悉詳密、哮讎之

人淑良.日夜勉勵、進修有序、賦詩屬文、絢然可觀、 法、大備矣、翁諱常房、姓吉住氏、稱角左衛門、

既而聞菊池人滋江公畏精三禮、就而叩之、多所發明、先吉住安清、仕泰辉公于丹後、松向公遷豐前也、從

享和三年六月與疾歸鄉、文化元年六月十二日沒、葬 焉、公既老若中津城也,常侍其左右、賜邑入百石、

櫻井寺先塋之側、享年二十有五、其家君叙熙投書于-翁其應流也、寶暦五年爲徒扈從、安永二年遷徒使番、

余云、兒也在先生之門數年、頗有進益、吾日望其有三十年爲海蠡師筞戰皷師、天明七年爲中扈從、文化元

成、今也不幸就木、願得先生之文,以勒其碑、使兒一年賜擬作百石、二年得蠡于薩、其狀秀異、音亦清朗、

也不朽、余既悼卿之逝、又哀叔熙之衷、不覺泣泣「獻之于世子、世子大說、賜白銀三枚、翁以元文年六

然下、遬爲之操觚呜呼昇居業之勤、孝弟之實、 月十八日生、以文化三年七月十七日沒、享年七十一

名既籍々於友朋閭里之間、且有所著西洲集若干、i爲人謹愿服勤、五十二年如一日也、弟子受業者、凡

則是千歳不朽也、豊待余文哉銘云、檢身勤學文思一五百餘人、娶野尻氏、生一男稱角助、繼父中扈從五

超醜、豈謂之天攝視、君其子也、邑入如父、君自幼好學、涉獵經籍、 昔顏子短命而死、然後世口其賢而不置、是千載不朽

既長、善射、又學鍛於薩州正良、盡得其秘、生平蘊 | 也、七十子之外、壽考者蓋亦不少、然其名不傳、則

兵衛、諱清埋製食邑入、爲銃隊長

上、其子又稱喜禪、告人日、古者之教、禮以制

吾友大槻君古之所謂慷慨之士也、居恒曰世祿之人、 之、樂以和之、今也禮樂癈墜、治心無方、我有取于

碌々沒世、是負國恩也、議論激切、有時乎泣下、然 禪、蓋其所得、豈可與記誦訓詁之徒、同日而語哉、

其性情介、不近權要、抱志終身、益亦命也哉、君以 君多臧兵器、々皆完繕、大超儕輩、又好賑恤、苟有

享保十九年正月十日生、以寛政四年月日沒、享年五 窮人、則不問已有無、是以人感其恩、其敢子孫也有

十九、葬于门门寺、君諱清輝、稱專助、本姓赤井氏、 方、臨歿遺訓、曰汝若不勉于家、不忠于國、則九京

出自源姓、其先丹州人也、居大槻城、後世因氏焉、 之下、我將與汝絕、娶上埜氏、生三男、長曰謙太、

大槻彈正少弼諱家治、爲豊太閤麾下、太閤數褒其閥、 承嗣邑入二百五十石、爲更番騎、旣而遷縣尹、今爲

薩州之役、戰沒、會丹州山崩、大槻城爲之壓、家眷

坤治、嗣堀 内氏、爲穿 鑿頭、今 遷奉

世子附、次曰

皆殲、獨有幼兒、年纔三、在乳母家、得免、乳母抱 行班、着 坐、次曰 矢柄、嗣上 野氏、爲親 近監、嗚

以寓其母家高橋氏、既長、仕但州杉原侯、稱又兵衛、 呼天莫知耶、其降祥也、不於其身、則必於其子孫、

諱家勝、其子次郎兵衛、諱家俊、亦仕杉原侯、杉原 君之三子、皆爲顯職、深荷寵光、蓋君積德之所致也, 侯無子、家絕、於是移居出石、隱棲終身、其子喜兵「易云、積善之家、必有餘慶、此之謂也、銘云、學能

衛諱清章、仕我推恩若狹侯、佗命為靈雲公傅、靈雲|治心、抱節慷慨、恤人憂國,敢子義方、天報弗、

公來嗣本藩也、從焉、賜邑入三百石、班親衛銃隊長「子皆顯榮、

大槻君墓碑銘

甘寐惟綏、

蓄之氣、肥後文獻叢書第二

嚴肅、隸眷不離、居官淸廉、寮屬惟依、噫歸窒穸、

漏之於其淬、故其劍剛利、人皆珍之、先是

我藩之劍工、口口今也良工相踵、君實爲之嚆矢、晚

好讀老莊、又潛心于小篠生墓碑銘

七二七

橫梁先生遺稿卷之八

石、待以士禮、總莊長如故、曾祖稱加右衛門、邑入君姓綾部氏、諱幹、字傳喜、本姓江島氏、綾部孫助

五十石、爲總莊長、以病辭職、口口考嘉右衛門邑入|養以爲嗣、妻以其子、安永二年爲時習館授讀、居賦

百石、爲更番騎、寬延元年君嗣、邑入如考、亦爲「六年、孫助沒、於是襲食邑入二百石、爲更番騎士、

番騎、既而爲從騎、寶曆六年十二月、轉近侍、讚岐 實安永七年也、天明元年為訟庭監、二年轉假穿鑿頭、

夫人、靈感公之妹也、公命爲夫人內尹、賜加秩百石、 五年賜上下服、六年爲眞、寬政二年賜單麻衣、五年

班銃隊長、實明和六年十二月也、安永七年夫人薨、 進班行人、七年乂進班親近弓隊長、加秩五十石、

爲我世子坊尹天明四年遷近侍、亞俫組脇兼中謁者、 褒其績也、八年遷郡監、享和二年又賜上下服、三年

賜加秩百石、五年世子立、是為大詢公、其職如故也、 督雜稅局、郡監如故、文化元年、台府命以關東川

七年二月及增賜加秩百石、班五十名銃隊長右、是年「之繇、費用巨萬、君與口其事、賜袍勞之、是年局中

今公立、寬政二年七月進班比着坐、叉增賜加秩百石、 頗有革政、君與有力、賚外套衣、君以延享四年生、

其職如故、而有時攝用人事、三年五月爲用人、增賜「以文化二年左月二十二日終、春秋五十有九、葬于古

加秩二百石、四年十二月以秩百石爲邑人、邑人凡 往生院、先塋之側、君爲人嚴正、家庭之間肅如、朝

百石、七年二月爲世子少傅、八年進班中着坐、又增 堂好閱書圃某或弄花、無他嗜好、其爲穿鑿頭也、

賜加秩百石、加秩六百石、九年九月廿六日病沒、春一核實其情、務在寬宥、痛絕賄賂、以風厲其下、其爲

秋六十五、葬于安養院、在職五十年、賜衣前後數十|郡監也、亦能稱其職、君無子、養兄子江島四郎助、

枚、娶水足氏、有三女、無男、養鎌田某爲嗣、女一 以爲嗣、食邑入二百石、爲更番騎士、銘曰、在家

綾部君墓碑銘

先引、既而爲總莊長、寬永五年七月賜食邑入百五十

早亡、一妻內藤市之允、一妻口口、君爲人質實、口

君諱朝見、姓牛島氏、稱角兵衛、高祖稱甚右衛門、 無臧否、史記萬石君之行曰、雖齊魯諸儒、自以爲

世居飽田五丁、妙解公就封也、拜迎于南關、遂命為「不及也、君頗似之、

牛島君墓誌

君諱興勝、字太一郎、姓長岡氏、肥藩之公族也、班一知其人之分淑、

其姪木村豐信、未適歸而沒、實寛政九年正月二十五

日也、自其誕於天明口年十二月二十五日、十八年於

此矣、葬於中尾山本妙寺中、媛爲人貞而敏、言容婉

娩、益其天性也、善事父母,視聽於無形無聲 人稱

其孝、銘曰、孌如少艾、溘焉就木、庸々猶可哀、

長岡君墓誌銘

規度、鳴呼世人之淪乎愛也、自幼放縱、唯其所欲

故其丈夫子、則州處終日、不聞義訓、洗遊之耽、怠

惰之事、女子々則驕慢淫蕩、辨給巧豁、浮揚於此、

傲翔於彼、以亡其身、以隕其口者、往々有之、豈不

父母之罪哉、如吉井氏、可謂善敢子也、銘曰、既執

孀道、又有母德、愛而善誨、疾夫姑息、一男六女、

無不令淑、

媛字里佐、姓大木氏、大木兼之女也、兼暉定儷於

大木氏墓誌銘

雖曰數促、名永年、

澀、必鮮而明、酒醪茗湯、必潔而美、酸酸豉醬、必 上着坐、寛政二年命爲用人、三年十二月七日沒於江

粹而旨、鄉里稱其能執婦道、而能理家事、以寛永四 都龍口邸、春秋二十有六、家隸五六人、欲躬與柩以

年丁亥五月二日生、以天明七年丁未十二月二十二日 反葬於肥後、凡反葬者、例當開於台府、以君之公族

逝、春秋八十有一、葬本妙寺中、生一男、名文字子 也、既聞於台府、則從衛不得不備、事有不可行者、

彬、一字文平、府學訓導、子彬之幼也、吉井氏擇師 乃止、葬於東海寺中少林院、君好學、善屬文、其所

就學、子彬少懈、則教誨諄々、牖其心而後已、其宅 論著、切於時病、君爲人儉素而勤、其接人也、不挾

近市、曰紛擾喧嘩、非君子之居也、乃勸子彬遷、子|門地、其理家也、家眷訴々然也、其居職也、敏而善

彬於是卜閑寂之地、而居之、日與學士大夫磨勵究到、慮、邦人皆曰後來棟梁之任、舍君而誰、其沒於江都

是以子彬之業成、藹如也、其敢女子々也、以謹慎寡 也、一邸之人爲墮淚、曰天何斯人、天何喪斯人、

言、顓事紡績、嚴立課程、禁窺猥褻戲慢之書、不許「嗚呼其生也、人望歸焉、其逝也人惜而哀之、非有心

詣巫覡道釋之場、故六女貞靜如一、皆嫁為人妻、不失柔得之美、何能如是乎、銘曰、家理官治、世傳其賢、

横梁先生遺稿之八

寛文中始來仕我藩、食邑入三百五十石、後爲用人、 婦人諱類、姓吉井氏、考字安右衛門、其先仕先封加

食邑人千石、曾祖諱豐持、亦為用人、食邑入千三百藤氏、加藤氏國除、世々家居、妣粟屋氏、粟屋五郎

石、既而遷爲參政、食邑人二千石、又遷爲國老、食|太郎之裔也、室町氏時、五郎太郎以驍勇稱、事詳青

邑入三千石、加秩五百石、祖諱豊明、食邑入三千石、 史、吉井氏生十八年、爲西岡氏婦、其助薦奠、必肅

老諱豊明、嗇作食邑如故、君承嗣食邑入二千七百石」而忠,其事舅姑、必恭而愉、其接賓客、必和而婉、

學禮於永廣子、夙人其室、寶曆中賜章服以褒賞之、 其馭奚婢、必莊而惠、織任縫劒、必巧而固、染清澣

許嫁、君以延享三年六月十八日生、以寛政四年六月

君諱貞勝、字世吉,稱新五、姓木村氏'其先丹波人、 五日卒、享年四十七、葬於松雲院、銘曰、世祿由禮、

曰上林加賀守、織田氏時爲宇治宰食邑四百九十石、 如君幾人、圖書數函、貽謀子孫、生也愛戴、死也哀

其後子孫世爲宇治宰、食邑如故、高祖諱豐政、稱半一惜、傳譽後世、嗚呼合德、

平、實宇治宰峯順之弟也、胃木村氏、蓋其本姓也、

吉井氏墓誌銘

木村君墓碑銘

字士篤、稱萬之助、好學有令聞、一女早亡,一女未

九年

枚、四年又賜衣勞之以其服勤五十年也、以享保自幼好學、研精無怠、善詩及國風、時々諷詠以遣心

七月四日生、以寛政八年三月十日終、春秋七十三、 情、精于軍事、受之伊藤氏之門云、其他槍劍射騎、

翁爲 人敏而温、能得人 之歡心、晩搆小 游於盡湖之一無所不精也、君爲人温恭、未嘗失色於人、其治家有

上、花晨月夕、必往逍遙焉、益其襟懷亦有異於衆醫|法度憖如也、晩好貯圖書、曰吾髮種々、無能為也、

人者、娶村井氏、無男、生一女、粪水野氏之子堅琳|欲貽之子孫耳、天明中爲騎隊長、騎士之有材者、君

以爲子、以其女妻之、堅琳先亡、又養財津氏之子宗「必試而薦之、其貧約者、君必告而賑之、警戒諭導、

恕為嗣、今爲侍醫、廩禄二百石、銘云、鳴呼鵲岸、 無所不至,以故一隊之士、訢然戴之、其捐館舍也、

才敏質溫、清濁不失、得歡於人、貧富一視、心懷慈|皆爲涕泣哀之、娶清水氏、生一男二女、男名豐信、

仁、生谷於世、死荳徒润、

苟有來請者、未始不竭力也、是以闔境之人、有簷疾一特恩也、寛政元年巡檢使至、使翁侍湯藥、賜白銀三

不然

廩禄凡二百石、

侍醫如攸、改加秩五十石爲廩禄、別賜加秩五十石、天明六年以老辭司匕、九月命免之、

醫人尤甚,權貴之家來請、則投袂而起、屨不及給

翕既亡之翌年、其嗣子宗恕來日、吾父之喪、 賜擬入百石、巡檢使病、萬方不効、翁進

十一年

以客歳三月十三日葬於報恩寺中、無辭以勒其碑、願 劑病頓愈、公褒之賜衣及白金、明和九年增賜擬入五

假先生之笔、予雖不敏、樂稱人之善以傳焉、况翁不」十石、大洵公時爲世子、使翁倩診、賜衣及銀、既而

唯其善可稱、又有平生之舊、乃諾、夫後世風俗澆漓、 爲仵醫匕兼醫監、班上士、改擬入百五十石爲廈禄、

鵠岸田中翁墓誌

銘日、誘之導之、弗牽弗抑、菁々之戎、爰邃其育、

忠善之行、踐其世迹、石兮可撕、命名不鑠、

稱柳宅、自號曰鵠岸、夙受業復陽非先生、深入其室,

雖在家闈、肅如朝廷、先生椎而少文、然其屬辭也、 則必來迎翁、其起死肉骨者、不可枚擧也、予之老母

贍富綺綁、為人所推、言語頗吶然、其說詩也、靡々 在也、託診于翁、屢病屢起、得以天年終、實翁之賜

混々、使人解頤、先生晩搆北郊、亭之面衆山列峙、 也、去歳予在江都、其病也不得執手、其葬也不得

授業之餘、兀坐披對.訢然樂焉、凡人之有招邀、告 臨其壙、爲以爲憾焉、今得其系而説之,不知泣之交

辭不往、曰吾目日飫落霞飛雲、不徇願口飽甘闔↓頤、系曰、高祖禰喜三、事于中納言甲府公、後馬

其志尙有過人者、嗚呼烦之少也、頗熹議論、先生曰一取候之臣、曾祖亦稱喜三、亦為鳥取侯之臣、祖稱柳

頰舌不可服人也久矣、不如著之於文章行事、烦敬銘 宅、元祿十五年以醫事仕我先君妙應公、賜月俸二十

於心、不敢復事唇吻、然烦於文章行事、不能如先生|口、父稱道乙、正德六年鳩外様醫、賜月俸五口秩十

之敎、有深愧焉,先生既沒之三年、君恭請墓誌焕烦、 五石、翁諱種德･字子崇、姓出中氏、幼名辰次郎、

乃叙其家系、以作誌銘、泣浪々下、不知言之不倫、

其爲作也、攝外様醫事、宼延元年賜白銀二枚、寶曆

四年又賜白銀二枚、六年岔道乙沒、翁桐、賜月俸

口秋二十石、九月爲副醫監、八年賜外套衣及麻衣、

鵲岸田中貧賤之人來請、則辭以不暇、恝然不顧、翁獨梁先生遺稿之八

豫言事之成敗、鮮不中者、蓋其才識有轶于人、晩罷

職也、毫無慍色、超然自得、人稱之、既沒之五月、

長幸齎其家譜、來請銘碑、余乃略叙其系以爲文、鋁

曰、不驚寵辱、古之所難、固矣壙宅、永寐其安、

府學訓導岩下先生墓誌銘

、公如江都、有疾鰭藩、賜朝鮮濩、明和三年賜裕衣及 有功、嗣君於羽州也、與兵衛家居、一日慨然歎曰、

上下服、既而公親加愸諭、又賜拾衣及袴於坐前、八 君今居於遐裔、窮愁困阨、無有啪者、吾豈可優游

月兼大監察、十二年賜上下服、從是而後賜服、親加愸「消日哉、乃單身跋涉至羽州、周衞至密、不可近也、

諭者數矣、不復錄、五年二月班留守大頭、其在江都 會田父納藿、與兵衛乃茅蒲褙棋、與之爲伍、私達名

也、攝國老事、安永二年六月爲中老、加秩千石、天「於左右、嗣君喜而走出、執手而泣、留數日將去、謂

明三年九月爲國老、加秩千五百石、兼偏頭、五年十一嗣君曰、異日天如悔禍、復有茅土之慶、不在君射、

月靈感公薨於江都、大詢公立、君時在江都、台亞賜則將在子孫、臣家三世不敢委質於他、嗣君喜、賜金

拜謁,六年正月、公有疾革也、君赴江都、公薨、今若干、與兵衛 子曰 伓意、休 意子 曰淨貞、皆不仕、

公立、君又得拜謁台豪、寛政二年八月罷職、十一月不負加藤氏也、淨貞子字吉兵衛、箴仕吉也、時靈雲

致仕、子長幸襲共邑入二千石、君享保二十年正月二| 公爲世子、命為賽人、隆德公襲封也、進爲膳夫、班

十二日生、寬政六年正月十三日修,春秋六十、葬一下士、以忠直稱、先生其子也、自幼好學、師玉山秋

定寺、君幼機警、風標爽然、為一時望故少任劇職、 子、大夫某謂秋子日、吾帮面牆、願得一弟子以備顧

卒爲國老、君愛好人俭、日夜延客、清濁無所失、能「問、秋千薦先生、於是先生年二十五、陛廳史、學宮

擢先生爲訓導、先生之教人、衎々無倦、從其所長

而培之、使人能繼志、故一時成器達材之士、先生之

門居多.居職三十餘年、自下士遷中士、自中士遷上

士、賜食色百石、以天明五年十月十八日終、享年七

十、所著有桐子命 二卷、左傳比事文矩十卷、文集若

府學訓導岩下先生、諱通亮、字大雅、一字吉右衛門、干、娶富田氏、生一男二女、男名靖、字君、襲

世居肥後、高祖字與兵衛、仕先封加藤氏、從伐朝鮮、 其食邑、女皆適 士人、先生 爲人忠 款、不好戲謔、

子弟、 外、妙解公增賜三百五十石、從番頭遷大監察、寛永九

受翁之獎勉裁抑者、不可枚舉、寛政三年命班處士、「年增賜百五十石、幷前一千石、歷仕真源公妙應公、

褒之也、方今士庶之分甚嚴、翁得班士類、闔國菜之、 長之第三子曰長常、真源公命爲近侍、新賜二百石、

翁多技能、茗理插花法、毘佉羅悉曇之學、頗極其蘊、妙應公立、長常有疾辭職、亡幾二兄相尋疾沒、命

最善書、諸體遒美、稱於一時、屢遊豐後、岡侯賜白|常襲父食邑、寛文中累遷爲扈從番頭、既而轉奉行班

銀五十枚者三、翁爲人嚴、雖燕居獨處、必正座儼然、 騎隊長右、其子長貞、扈從番頭增賜二百五十石、

然其接人也溫柔、能得其歡心、以寛政四年七月二十一用人、其子長春、扈從番頭、轉用人、加秩三百石、

二日沒、享年七十三、翁終身不娶、養其族公正爲嗣、 其在江都也、攝叄政事、延享元年爲參政、加秩七百

亦好學、教道邑人、命班處士、來請其碑文、余乃述|五十石、三年以加秩爲邑入、邑入凡二千石、別賜加

世系、系以銡、銘曰、時人好高、多卑世業、乃怠乃 秩五百石、 君長眷之孫也、父長該有病、故君承祖、

慢、它轍之躡、翁也謹敕、舊株之甘、其事似污、其一時年十二、賜稍食八十口、寛延二年襲長春食邑、寶

志則岑、繼述是孝、莫愧于心、

曆六年爲用人、以疾辭職、九年復就故職、十一年

後師事鶴灘加元生、以鞠池之僻遠、□□名文學者若

元和五年始仕我松向公于小倉、食邑入五百石、班組

墓碑

〃

潮見山居焉、既而爲有馬氏所陷、公重戰沒、公重在

山鹿也、娶合志氏、有子曰公成、父之歸杵島也、留、君諱長富、稱新兵衛、自號曰阪泉、姓平野氏、出自

在外家、實翁之五世祖也、公師子曰公種.先是公師|北條氏、君先曰平太郎時滿、居尾州蟹江、其曾孫宗

有勳於大村侯、侯賜公種以大村氏、以女妻之、世爲「長、移居津島、支裔蕃殖、有十六族、宗長四世孫、

著族、公成卜居鞠池、建天池元水神祠、其嗣曰公實、其｜曰質長、無子、養船橋氏之子爲嗣、是爲大炊助長治'天

嗣曰公春、其嗣曰公淸、翁公淸弟也、公淸無子、故「正中仕織田氏、織田氏滅、任豐臣氏、長治沒、子長景嗣、

翁承嗣、世不墜舊業、以祝爲食、翁幼受學於水斯立、 元和元年大阪城陷、長景死之、其子長之、家居數年、

干人、蓋翁覆翼之、且士之在北鄙者、及邑人壷梁先生遺稿卷之八

111

邑入二百石、爲番騎、君嗣、亦爲番騎、邑入如考、 稱德帝命營春日之祠、島田丸乃祭水神於猿澤、水神

寛延元年遷從騎、從公如江都者數矣、爲從騎組、 咸格、逐能役使水屬、祠得以成、帝說、乃命主天地

寶曆十一年台臺營惇信公廟、命我公佐功、我公使君 元水神之祭、賜御書及笏、自是而來、橘氏世々崇

與董焉、廟成、賜衣勞之、明和四年遷步隊長、六年|水神云、島田丸六世孫曰好古、大納言鎮守府將軍、

有故辭職、安永元年爲監察、加秩百石、既而有病、 伐叛臣純友有功、封伊豫、好古七世孫曰某、鳥羽帝

不能奉職、為留守番騎、處數年稍差、爲番騎組脇、 賜公一字、曰世々以公冠名、於是某更名曰公光、公光

居職數年、又罹疾乃辭職,公褒其有勞、賜紋服以免「孫曰 公業、嘉禎 中移封 肥前杵 島、公業卒、子公

其職、寛政三年致仕、七年病痢而沒、享年六十八、 嗣、公義有四男、長曰澁江公村、次日牛島公茂、次

葬于往生院、君為人質實、夙遊森省齋之門、省齋受曰中村某、次曰中橋某、公義獨命公村奉水神、他子

學于孚齋先生、孚齋先生之學、蓋深得程朱之旨、吾不得與焉、公村五世孫曰公治、是時天下大亂、公治

藩之宿儒、皆祖述其說、君爲私淑之人、則其所得可「屬足利氏、足利氏屢賜書以褒其閥、其書猶存、公治

知也、又好覈武技、皆得其蘊、君爲人至孝、母病、 五世孫臼公勢、徙居多久豆包城、公勢子公親與後藤

在蓐不脫帶者數年、君娶末藤氏、生二男一女、長貞|澄明戰不利、因龍造寺隆信、公親有二子、長曰公師、

經亦質實、不墜家聲、今爲監察、加秩百石、次爲板本次臼公重、來寓我山鹿、處數年、舊臣來迎、於是城

君諱貞陶、字子範、稱太右衛門、姓藤崎氏、阿部貞|翁諱公豊、字士錫、稱貞之允、自號曰紫陽,姓澁江

任之裔也、其先居奥州藤崎、因以爲氏、考諱貞泰、 氏、左大臣橘諸兄公苗裔也、諸兄公之孫曰島田丸、

藤崎君墓誌銘

澁江翁墓碑銘

君又命※以其墓誌、既有十厚之文、是以今或略其事、

或補其遺以作文、府學助教大城嫇謹撰、

氏嗣、女適岩佐士之允、銘曰惟君質實、子孫是則,

夙志斯學、大有所得、旁好武技、其蘊是極、於萬斯

年.分名永馥、

也、嗚呼自君沒二百年干此、八世之孫、今上卿長岡

遣骨於熊本、延寶五年妙應公命建寺八代麓山、

封之也、以反其稅、賜長子興長、五月献唐羅一卷麻 以遷遺骨、賜邑入百石、及山三十町、其臨終也、家

衣十領於東照宮、以慶治平、太閤之薨也、君不徵神臣請殉者甚多、皆不計、獨許田中盛永、盛永獲罪于

童子八瀨之稅、以待幕府之裁、於是東照宮使山岡法|太閤、太閤募求之、君憫而匿之、使之保首領、其恩

印傳命、賜二邑如太閤之時、十一年冬君患瘧、公屢 莫大、事詳家史、君為人忠誠、夙有英武之譽、歷世

賜書問之、且使菅輝宗侍其病、以日開其劇易、十三年 慕府皆器重之、一時諸侯視君如儕輩、君能諳人情察

杵築城樓災、泰勝公松向公妙解公、皆賜書慰勞之、且 時勢、故謀慮必中、治理必得、最長戰略、麾下多死

賜器械及衣服、既而君又病、松向公賜三百番謠本日、 士、故以寡克衆、且嫺辭令善筆翰、其他多技能、至

子欲窺此本也久矣、寡人惜未許、今贈之以慰憂鬱、 茗理謠曲、皆極其蘊、古之所謂允文允武君有焉、六

蓋此本妙庵公子之所書而以五采錄其曲節、諸樂家之「世之孫,上卿大山君徵先儒藪士厚、錄其神道碑、時

秘、無所不載、十六年君罹疾於小倉第、松向公請京|靈感公親書永觀子孫四字、以刻其碑、蓋不忘其大勳

杵而謂土井侯曰、臣名一字、與台臺同、不日將改、土井 師官醫吉田法眼、及諸醫以治之、屢臨其第、以戒

侯聞之東照宮、東照宮曰勿、不穀遂以吾一字與之耳、 者、妙解公時在中津、亦使人侍其病、日報其差劇、

土井侯傳命于君、故終身不改、世皆榮之、公就封豐 東照宮聞病革也、賜良藥者三、且命本多侯贈書以問

前、杵築如故、於是增賜君邑入五千石、芻田千石、請「之、於是贈書於本多侯、以謝幕府之特恩、献幕府以

於幕府以君爲杵築城主、六年四月東照宮命君曰、豐刀及其裝具、以書奉枥向公、謝其殊遇、告以後事、

有某々田一萬七千石、汝其判其事、君於是檢其田判其且献其茗器、此器也天下之名器、而世之所偏知也、

事、然幕府不徵税、及君之沒、公命致其税於幕府、 十七年正月廿三日、賦歌一首、擲筆而逝、享年六十

東照宮命曰、康之忠不穀、三成之亂、亦郤其書、而「三、謚曰春光院英宗傑、荼毘分骨、葬於杵築安

不報、不穀嘉之、欲胙以茅土、然義不受石州、事赫寺、及京南禪寺、妙解公封肥後也、命建一寺、遷葬

前日、知其不可屈、故使之判之、以取其税、其實則

築七一九

晋州堅城也、諸軍憂其難攻、君先登遂陥之、軍還、 者一再、三成復讒公于東照宮、君就其所善有司、白

大閤將封君石見半國以爲侯、君固辭曰、委質事之、 公之不貳、東照宮乃延見君、自是以後、反益親公、

又與之同列、臣以爲非義、大閤大感服、不奪其志、 既而益封杵築于公、五年君及有吉立行、往鎮杵築、三

於是載神童子及八瀨二邑於一札、押印賜之、且副以 成等擧亂、以書銛君、君不報、於是使故豐州侯義統

茗器、器名深山、其所甚愛玩也、東照宮亦感稱君義、 徇豐州、民多應之、乃攻杵築、君固守之、黑田老侯

賜以茗器、先是公借金百枚於秀次、秀次獲罪於太閤 聞杵築急、出二軍援之、一軍先至、君與之通謀、出

也、石田三成譖公、曰受秀次路、太閤詰公、公懼、 戰石垣原、手斃二人、敵兵辟易、一軍亦至、君與之

自蟄其邸、三成等潛謀、將逼公自盡、公大怒、投袂 夾擊、敵軍大敗、義統降、此役也敵兵奪先隊之銃、

而起、曰我爲國除賊、而後死而己、君固諫、公乃止、家臣數人直逼義統、奪其徽幟以報之、爾後以爲君之

君欲納金以辨之、帑藏匱乏、乃竊告之於東照宮、東、徽幟、既而三成伏誅、君赴攝報杵築之捷、黑田老

照宮引君臥內、賜金百枚、君遂因淺野侯以納金、副|上書東照宮、以告君殊勳、於是延見賞其忠勇、君退

年太閤任太政大臣、君亦拜從五位下、任佐渡守、是以鱸魚、曰寡君以窮乏故、貸金嗣君、非受其賜也、

時太閤 賜豊臣 及菊桐紋 于君、十五年 從伐九州、巖|敬使陪臣某納之、且日公之不黨秀次、太閤怒濤、乃

石之戰、敵放火牛、諸軍大亂、獨我軍整然、太閤遣|引見君、命左右反金日與一郎、昔不與岳翁之反、其

使於君、褒其有備、十八年菲山之役、君多具鍬、甚人豈可以貨致之乎、手割瓜以賜君、是微君、公之

得其用、太閤聞而美之、乃諸軍具鍬、軍之有鍬自存亡未可知也、公深感其志、欲益厚之、於是妻於君

是始也、既而太閤使諸將略奧羽、淺野侯告太閤日、 之長子諱興長、以其第三女、慶長三年太閤薨、頒遺

請與康之俱、君從公往、公終役而先還、君猶從淺野|器於諸侯、賜君以寶刀、四年三成等謀害東照宮、公

氏而留奧羽之間、歸途賊起、旋軍伐之、拔數城、太憂之、乃請東照宮、以和加賀侯、故三成之謀終不得

閤賜鎧以賞君功、文祿元年朝鮮之役、從攻諸城陷之银行、君奔走其際、大竭心力、臺德公開之、以書勞君

梁先生遺稿卷之八

月太閤賜神童子邑、於君以給茗費、蓋織田公之所賞

賜也、又賜八瀨邑於堂荒川氏、以爲養老田、十四

以九曜紋、用之如巳之紋章、日遇其家臣、視之公臣、

命日使家臣用九曜紋、亦所不同也、太閤圍因州鳥取

井、攻竹鼻伐勢州、十三年從攻紀州、皆有功、十一

賜寶刀一口、時太閤在姬路、使君擇設茶亭之地、君

賜以采地、養夫人之姪沼田氏以爲子、逐配之於君、 得一山曰、林壑洵美、且可以備要害、太閤喜而搆亭、

元龜元年攻御牧、力戰獲首級、身被創者五、天正元 遂以松井爲山名、後年伏陽城成、賜邸于君、如諸侯、

年靈陽公與織田公有隙、上野清信讒公于靈陽公、靈一庭有美石、太閤臨視賞之、後人亦以松井呼此石、其

陽公怒欲賊公、君深憂之、因人以明公之無罪、靈陽|風流雅致、為人所欽尙也、亦往々有類于此者、十年

公不聽、君將自殺、以感悟靈陽公、會織田公帥軍至、 光秀弑織田公、人以其世子之舅、疑公黨光秀、君乃

靈陽公大恐、屛居若州、公得無恙、既而攻河州貝堀、 告其討賊之意于太閤、太閤賜書于君、以嘉公父子之

先登陷之、敵將自殺、五年拔片岡城、六年織田公攻 忠誠、既而公老、世子襲封、是爲松向公、太閤增公

伊丹、使君守屛島、以絕敵援、敵衆圍之、君衝虐郤 封、且命以封内七千石增賜君、其後從攻諸城皆有功、

之、織田公賞之、凡公每出戰、君必從焉、其功弘多、 十二年小牧之役君力戰、東軍爲之披靡、太閤賞以實

不可枚擧也、是年公封丹後、君竊羽翼之、故有此慶、刀、後東照宮入洛也、引見君曰、汝殿於小牧也、吾

八年公就國、使君假守勝龍寺城、九年賜君一萬三千-不能無憾、然亦爲其主也、至其指揮、則古今絕倫、

石、以守久美城、公作三軍、一軍則公自帥之、一軍今猶在于目、吾嘉其忠武、賜以寶刀、是從陷加賀

則命公子玄番君、一軍則命科帥之、禮秩比公族、賜

共謀與復、十一年靈陽公命織田公討賊、君年十九、 也、君率舟師援之、燒毛利氏船、獲其將元忠、時君

帥其人至、靈陽公命君屬我軍攻箕作、力戰有功、先一不擐甲、躍入敵船、輕不啻、太閤聞而嘉之、曰松

是賊陷我勝龍寺城、君與我軍俱伐而復之、十二年戰|井之爲、可以爲舟師之則、遂進燒雲伯二州之海濱、

桂川、我軍將走、君奮擊而進、以勵士氣、溼敗賊軍、獲船七十餘、因州熠、織田公賜書賞之、太閤亦賞之、

靈陽公賞之、且親觴之、賜朱漆槍、泰勝公待以客禮、

諱長之、攻攝州尼崎城拔之、逐使長子諱廣之居之、

宜哉其祀繹々、其子孫亦永享其福也、君諱康之、小

一技-藝之士、相訾相罵、自以爲帝者、累々有之、

字甚助、後改胃助、又更新助、以天文十口口十一月

豈不卲哉、趙集賢薦李雪笹、使之書興聖宮之扁、實 朔、涎于城州松井城、妣荒川氏、謹案系口口守府將

與吾邦僧雪舟、舉狩伯信描於御障、同日之談也、余|軍源滿政十世孫、正五位下式部丞諱重行、仕鎌倉氏

愛其遜讓、有君子之風、豈可以藝士視焉哉、紫潭翁 有戰功、賜邑於城州綴喜郡、於是城于松井鄉居之、

性好劍阙、行年七十、锲而不舍、益劉備結髦、嵇康 自是逐氏焉、重行七世孫、諱成之、屬北條高時、高

焠鐵之類、寓意以自樂耳、近得集賢禊帖十八、以柔時有覬 覦之志、成之耻 其不義、潜匿 不仕、足 利氏

爲得意之書、乃鈎摸而勒之、已成、益亦得意也、翁 厚聘招之、乃委贄事之、於是復賜舊封、成之七世孫

爲人恭謹、其事主也忠、其致仕也、觴詠雪月、卓然

於物外、亦不可以藝士視焉、

日病卒、正之有二男、子長諱勝之、

次則君也、三好之亂、一族死之、君時出在勢州、故

不得死其難、八年泰勝公奉靈陽公在江州、君來、

書禊帖十八頁後

昇平二百餘年、海内蒙其澤、其爲功德也、豈不大乎、

亦必永享其

不可、如子所言、則心巧意匠、既已擾々忙々也、焉|福、極向公之爲佐命慕府也、松井君與有力矣、方今

能作幽事圖乎、客粲然曰、子言幽於書、

從五位下松井君墓誌

墓誌銘

有聲、人物動止、云爲瞻視顧望之狀、禽鳥差池、頡

頑狱猫、浮沈之象、無所不具、而後謂之眞盡則可、

曰、江村幽事圖、蓋出杜詩、然則林木畏佳、流水若 梁先生遺稿卷之八

今此圖茅舍數屋、流水一泓、香靄茫々而已、是謂之

眞青、則我惑焉、余曰作幽事圖者、自非其心幽寂則|蓋有功德於民者、其祀世々不絕、其子孫長之卒移居松井、命家臣守尼崎、廣之後更正之、永

祿六年九月廿六不然、夫嗇也者、能盡物之象、而不能書物

之聲、呪於物之情乎、何如詩之觸物無遺乎、今觀此 余一寓目於此卷、抃喜曰、是真幽事圖也、有客在側

可闕一也、薩人馬子達獨不用笔、染指頭墨池以描成、

凡山之〝兀、水之潺湲、鳥獸之飛走、人士之憂喜、

皆能狀之、以極其妙、余喟然歎、曰吾道亦不尙假之

於身外、而未能如士達之伎、豈不可愧之甚哉、

題江村幽事圖卷

題□□漫錄後

世之所課盡笔、有鉅有細、有健有軟、各適其用、不

者、加之旁及典籍、作爲萬編、吾邦猶被其澤、翁之載、宛如有

珍之之意、盡在於此乎、亦以德之類也、書云、德

其物、此之謂也、

書

題原校鬧恐瓿

賀眾得康熙帝墨帖珍之、以其貴乎、彼之與我、車軌不一天降女主、賜之勇智、後製蒙琪、征其所愾、甚至

同、彼之貴者、於我何有、將以其精乎、書之精者、 牙、長頭隆鼻、黄金之目、鬚眉是蝟、狡焉韓虜、破

豈唯此而已、夫世祖以區々之胡、邃奄有四海、歷代 膽喪氣、如風拂稿、一戰獲利、威公用張、國斯永庇、

之庶富、未有盛於清者、蓋其規模洪大、有不可勝言|彥山之巔、傳藏深閟、有人圖之、毆疫呈瑞、惊乎千

題神功皇后銕假面

則概然而局、浮然而躁、可不戒乎、

康熙帝墨帖

之惠也、今又得此均是花也、或曄然而麗、或邑然而槭、是其故何、

畫像、以供燕間之樂、亦相公垂顧之所致也、因命臣,其根核之得養與不得也耳、夫人心有根核也、苟得其

煥錄其言、且紀所以得之之由、

養、則其發乎外者、靄然而和、充然而美、若失其養、

題插花版

滅也、嗚呼、羶臊之俗、而有馨香如此、足以愧世之卷、益知詩啇不可並稱也、邃題、

不忠不義之人、己酉之亂、寡人嘗聞其畧、未及其詳、

嚮已得附錄、以盡其終始、實相公凡書之珍於人、有以精者、有以貴者、有以德者、古

指頭展而誦之、則嶮巍之狀、如在目然、潺湲之聲、如在

耳然、偉人奇士之狀、歷々可察、猶如與之晤言然、

世稱王維詩中有書、書中有詩、詩書並稱也尙矣、余

居恒以爲成三公、古之善書者也、世並稱之、

至今藉 々也、然年 代久遠、其書 存者蓋 僅々耳、間

「傳之者、多是贋也、吾友山仲瑟嘗得野公真蹟於東

毛人聞而有其罪不亦大乎、

荃道風藤佐理行浮海圖後

書臺隸焉、有貨穀之儲、有賓客之接、盛則盛矣、|水戶相公之所藏、有夷列像、及附錄、盍得松前

是謂之得其道邪、非邪、獨玄宅之精舍、覆以茅薈、 之副本也、寛政庚申之夏我公將歸藩也、借觀累日、

不過五六間、所在唯一鉢一杖耳、微則微矣、是謂之「獨謄寫其附錄、若其列像、設色細縟、非窮數十日之

不得其道耶、非邪、嗚呼之二者、孰得孰否也、

夷酋列像

吾師曰、道不同則不相爲謀、况吾昧浮屠之道乎、其「真、可恨、

不已、余未見其

之吳道玄也、不可不珍、

年於此、是其非吳道玄也必矣、雖然、鱗甲飛動、睛

眸如生、使觀者懔々然、非到精妙、安能如此、是非

吳道玄題主宅寺壁

都、命工爲墨本、一日出示余、宛然晋王右軍書也、

可謂摹倣極妙者、使人愛不已、昔庾翌易右軍書、

右軍不覺、設使公易右軍書、亦安知非其已所爲矣、

二藤公之書世已並稱之、則亦使人愛配將何言、雖然、今浮屠氏鉅麗其堂、熾緻其室、有

御焉、有徐福力、則不可成、故使人竊屬相公之書人寫之、日請致

之于歸藩之後、畫人許諾、無幾畫成、傳致熊本、我

祖龍之世、人皆墊、困其繇役、家皆慄々、恐其刀 公大悅、展玩不舍、一日謂侍臣曰、汝等未之聞乎、

鋸、徐福卓然獨見、浮海而去、其智固有過人者、若「己酉之歲、毛夷一部作亂、此十二人、各率其下部、邈

使福携其妻孥、艤一小航去、則比之魯連可也、謂之一截賊路、不得走亡、故賊魁三十餘人、頃刻伏誅、其

慕聖人乘桴之言、亦未以爲甚迂也、務不出於此、欺|功偉矣、松前侯既大賞之、叉描其像、以置坐間、使

上竊財、奪人童鬟、興、其爲後圖也深矣、夫毛夷之僻也、盈

虧紀月、榮枯紀年、漁射以充腹、未嘗知耕耨、非有

禮義之敎、非聞忠孝之言、然此十二人、各自振拔、

能盡其力、其悃款報國之意、可謂美矣、雖松前侯羈

縻得宜、惠威並施之所致乎、抑亦由天理民彝之不泯

古人有言、曰書力千年、畫力八百、吳道玄沒千有餘

琵琶湖圖

吳道玄書龍

有取寒山之詩也、

溫柔敦厚之爲詩散也向矣、夫浮屠氏旣棄大倫、而與「燕趙之士、豈有勝馬遷者哉、然能使其文奇者何也、

人情背馳、則猶何論温柔敦厚乎、是以其詩多有枯樹|詩曰、他山之石、可以錯玉.彥禮與吾黨游、其文始

倚巖、急流拍崖之態、余所不取也、夫寒山雖生于聲詩|大奇、亦猶如馬遷之於燕趙之士乎、然則吾黨碩々然

之代、不能脫其態、嗚呼亦數哉、雖然、寒山之詩、間一石耳、雖然、石既有錯玉之德、則彥禮豈怒其唐突于

或有特秀奇拔、出人意表者、蓋得諸禪也、是余所以|珠玉哉、途題、

寒山詩集

題赤彥禮文卷

答曰、子知其一、而未知其二、今子與我、生有道之一九污一擺、既屬醺餘之戲、戲山喬岳、唯其心匠所至、

世也幸矣、若有暴君興、則君子伏于田野可也、竄于縮彼遼邈、豈無費仙之技、挾此崔嵬、殆異郛賢之譬、

巖穴可也、之夷狄可也、孔子欲居九夷、亦爲是也、

洩々熙々、自存眺奇之思、飄々々、忽生陵雲之志、

夫事不豫、則不可應變、吾故爲應變之具耳、一坐粲 善哉丹青、蓋亦文之別幟、

然慘笑、逐題、

可已、何以萬國爲、故傳日、荒服之外、聖人不治、某

畫山引

、居恒 置之 其側、余與二三友過 竹嶼之矗々樛々、志賀松之蓊々蔼々、崩波奔濤、如

而觀之、戲之日、夫君子之在家也、齊其家而可已、 在于耳、雁口鳧鷗如烟海、使觀者神王魂飛者、非能

在國庭也治其國而可已、居天下之廣居也、平天下而「得其勝、安能到此、余爲之絕倒、滚、

題有客圖琵琶湖來、請于余、余曰果能嗚呼書豈唯在巧哉、亦眞韻也耳、

堪輿萬國全圖

節、恢々乎有餘地、故自露其眞韻、此其所以佳也、

得其勝耶、我

未閲其地、安知能得其勝、果不得其勝耶、我未閲其

地、安知不得其勝、客曰、石山之嶮、銑峰之岩嶢、

吾友某藏 萬國全圖馬遷之在周南也庸々耳、及與燕趙之士交、其文始奇、

横梁先生遺稿卷之七

使人食而不厭也、實至寶哉、蓋吾那之於書、其學之

之道也、

也膚、是以或拘々於法、或卞急自肆、故不塾滯、則

偷脫不足觀也、彼土則否、其學之也刻、是以疾徐得

雲鳥詞輸跛應古賀先生需

雖然、氣骨|華人之書、雖其劣者、必有佳處、片紙可珍矣、況此

懍々、千載如新、余未嘗不爽然自失也、世無以其怪、 卷數十張、各々奏技、譬猶如海錯山蔌、襍陳之于前、

並舍其氣骨可也、詩云采葑采菲、無以下體、亦君子

甚矣空海之怪也、世之所傳、雖不可盡信、空海書

嬴政之相、想必富榮貴昌、無以加焉、然奢淫暴虐、

以爲亡天下之基、子孫爲戳、顏淵之相、顧必貧賤天簿、

不可言焉 然天下後世言德行、則爲貫首也、故身有

富榮貴昌之相、君子不以爲喜、身有貧賤天薄之相、

君子不以爲憂、然則斯書閲之亦可、不閲亦可、

嗚呼、是陶齋翁之遺稿乎、曩歳余阻風于森江十數日、

題陶齋遺稿

猶欽嚮焉、

題風鑑原理後

其學術事業、

亦足稱焉、不唯書而已、

相其有驗耶、將無驗耶、吾未之識也、假分相有驗耶、

島、留誨數月、梱載而歸、々則又鑿井、傾倒而後已、 道譬日月也、朱夫子能披雲霧之翳、使後死者得視赫

如此者數年、居民稍衆、又多墾田、以勤稼穡、居民| 曜々之光、其功偉矣、是以數百歳之下、殊域之邈、

益衆、民到于今稱其功德、由是觀之、不啻、亦唯憾不能生於淳熙慶元之際、而優游

涵泳於其門、今斯卷錄弟子名氏、粗舉其知行之所至、

學者置之坐右旦夕閱之、則與躬至鹿洞、而親相切、

又奚擇氣結心爵、殆將成疾、翁與書生四三人、來要余上岸、

供帳甚盛、翁被酒劇談、驟雨集、激波进、余胸次爲

之廓如也、後未數年翁逝、今得此卷讀之、其詩豈弟

而不失規度、猶如其人、古人云、詩心聲也、非虛言

也、翁而在、則余將再逛其地、以請齒牙之餘論、鳴

呼已矣夫、

其或似者、

韓退之曰、浮屠氏善幻多技、如空海者、豈其人乎、

今閱其書亦怪甚、夫書心畫也、吾黨彝倫之教、已促

典常、則其於書也、亦不可采怪也固矣、朱子年譜外記跋

世人好圖晦隱潜遯之士、而至崇顯榮達之人則否、是一去、役島乏水
、居民廛少、翁出資鑿井、資盡則來

之、翁爲說經、其言剴切、侯每歎服、免卒、乃辭

跋孤山隱居圖

地圖也、

水戶長子玉所著也、蓋子玉夙好游東鹵西斥、躬親蹈

之、故墮山喬嶽、鉅漫細流、險阻湫隘之所、犬牙繡錯

之狀、無所不載、且參之天度、校之地程、欺無墜失、

可謂盡矣、夫中國之圖、其詳悉者多有焉、吾邦則忽

諸、吾始見此圖、訴然喜曰、易之不出戸廷、而知天

下、此圖有焉、

如輕健利足之人振々然、日距非脚躡其巓、頭闖其洞、

豈足以爲樂山者哉、笨懦孱足之人、與羈絆之人、

圖之于壁、繪之于軸、曰彼飢其體膚、副其脛毳、何

勞也、安如我之臥遊之安哉、二者孰是孰非、夫口之爽

者、終日食珍、而不知其味、耳之爽者、終日聽樂、而

不如其音、非有勝情、則雖日躋哉、雖日玩哉、豈足

多哉、苟有勝情、則冥搜與臥遊、其亦奚擇、仲尼曰、

仁者樂山、是蓋有存于躋玩之外者矣、

如竹書

題日本輿地圖

彬々然君子書也、公嘗評司馬公書曰、盛德之支流餘

裔、余於此帖亦言

粲乎如霞、躍乎如龍、就而眸之、則日本輿題名山書卷後

凡書華者不實、實者不華、獨公之書華而實、實而華、

學田帖

朱子取之于心、以正其筆、宜哉其相似也、

也難矣哉、況林逋托身於清絕之地、妻梅子霍、操標風

朱子學田帖

、

愛其書、至摹倣之、孔子曰、君子不以人廢言、豈獨豈非以其行之於
榮達之日易矣、而其守之於潜遯之時

言乎哉、

肥後文獻叢書第二卷

此帖道而整、余初見之也、誤以爲柳書、柳有言、曰

學書在正心、心正則筆自正、蓋柳取之筆、以正其心、

韻、有異於衆隱士者乎、宣哉世之愛而欽之也、夫顯於

一世、而後世無稱、豈果顯耶、晦於一時、而後世圖

而傳之、豈果晦耶、故君子一出一處、未嘗介其胸、

安其所遇耳竹爾薩州役島人、寛永應安之際、僑居廣島、教道

士民、士民改行者甚衆、嘗遊江都、藤堂侯聞其宿儒

聘靈梁先生遺稿卷之七

傳稱、公學魏武書、吾未見魏武書、蓋其雄拔之氣有

題跋

公猶

爾、使家聲增、千秋是葆、何啻雲仍、

竹生寒水、枝々垂氷、斬製華筒、雅致無朋、大人賜

朱子帖

紙匠木村之家藏華筒、名日垂米、黃宇和島侯所蓋有得于琴也、古曰
、琴禁也、能禁人邪心、豈不然

賜也、

者、莫如絲聲、絲聲條暢打餘、棉連纖忽、如雨之過江、

一如風之入林、秋□鳴焉、晨鶴唳焉、其他千象萬狀、

不可枚舉、人一聽之、則胸結頓解、是其所以爲最也、

吾畏友琴山翁、性好彈琴、晚年尤深、心平和而行方面、

垂氷筒銘 #序

轕蠠

毛、諸重山嶽、先會所畏、後會所感、百世之師、七

十之卓、

金石繇竹、匏土革木、孰非先王之遺音、然能使人感興

北聲易調、南竹屬鏃、千乘治賦、片言折獄、死子路賛

琴譜

檢夕誦、唯籍之湎、潛心覃思、淑蕙之辨、善哉問 軸書書兼有、豈不
至寶乎、

友、與之習串、德之馨香、將聞於遠、

曰、古云與善人居、猶如入芝蘭之室、吾日與古人

游、與之化也、邃口曰蘭、

墨君徽也 物徂來曰、君徽之於詩、洗倭人之習如、

室銘 #序

脇子善築室墻東、貯書萬卷、日孜勉於其中、其言

端石雖美、其奈錘重、鄴瓦雖珍、破碎誰保、有竹易 | 大槻士毅□得諸名將圖及賛、示之於大奉行松下君、

涝、製爲佩 、隨身浮々、宜躋雲棧、雖誤墜地、其 | 松下君監定、以爲其叔祖父之所謄寫、叔祖父者何、

質永全、於乎奇矣、心喜欲癲、

墨君徽書畫軸跋

作竹硯銘、云、

又悉散其濯如者於丹青之際、是唯評其詩及書、未及

其書、蓋未見其書乎、抑亦有所未滿其意耶、不可知也、

「 然以余視之、書亦超然出於流俗之表、所謂濯如者存

K、嗚呼享保年間、君藩諸名家之書、今多散失、此

朝似焉者、予因感君子采物之弘、夫以操之姦桀、非德容文之辭足以動人、惡能致之哉、余因有感焉、

達磨賛

畫蘭賛

亦不仳、

終葵々々、無物不靡、世人訛傳、開元進士、帖像于

鍾馗賛

櫻井士良得竹硯于薩、繪繪以爲袋、虎牙以爲墬、

之上髮皤、雖如神而怪哉、蓋是賢而隱者、

竹研銘 #序

龍韜之秘已授、狙擊之英斯挫、穀城之下石黃、橋

黃石公賛

一之香、

溫々君子、時有赫怒、歴階舉袂、威風先敷、戮彼優

戯、郤此裔俘、魯權如山、齊權如羽、嗚呼魏、允

爽谷會圖賛

蘭賛

三閭之佩、非不馥兮、無人之境、

據孑然之孤城、身履仁義以斃、非有斗大之膽、何阻

直乎其外、虛乎其中、節夫之貞、君子之風、

竹賛

席卷之勢、誰謂天也無知、社福流於奕世、

美人之魂、高士之配、凡百之芳、爾爲之魁、

貝甲朱禄、想彼娘子之軍、令聞廣譽、赫此青史之文、

立花紹運公賛

萬夫之敵、一世虎臣、單騎斬將、旁若無人、勇肝義|士行卓然、奥村氏之伉儷、身守孤城、能撫循能戒厲、

膽、實是絕倫、

失題

關羽賛

九年面壁、何其澤、維此精神、大於一身、

察應大表、解癥五藏、禁方不洩、得之長桑

*10

壁、以铥惡鬼、雌俗之妄、必有怙恃、邪爲辟易、

何關知不知、馥郁無人境、千秋王者芳、三閭大夫佩、

常佩之、曰硯及袋、伊集院善次所贈、善次曰、硯

清八之所製、袋則君衣之餘也、清水某遺以虎牙、

日我家藏之久矣、願供君子懸錘之用、永宮二生

歌賛之、皆善次之石友也云、嗚呼、士良也者、千

里之羈也、一身孑然、擔簦躡屩、非有先容之人、

非有屬託之簡、一旦卒然相遇、人不愛其家珍、自

有嵎于樹間者、就之無有焉、有叩門扃者、窺之無有一赭鞭々草、始制醫藥、民免札瘥、其仁也博、

焉、當其發々也、揚沙礫飛瓦石、拔樹木破牘屋、壯

神農賛

雜說

原校赤松上肌

石、口口赤松、氣象卓、頗有儒風、

上不止、

逐踰其湍、余於是喟然歎曰、時習之義、其在於斯哉|狀如女子、能推祖龍、佐漢成業、報韓立忠、受書黃

其在於斯哉、

二字层按當作托蕊

數矣、猶尚奮其鬐鼓其鰓、以突其急流、數子房賛

一日大城子觀于鞠水、有鬫於湍者、察之魚也、志在

| 南陽養節、三顧致身、風雲之會、魚水之親、蕭何

縮々引去、既而又上、又爲湥霍所壓不能上、如是者|數、伊呂可期、自比管樂、蓋亦兼辭、

孔明賛

五柳稱佳色、三閭餐落英、何唯隱逸趣、終古傲霜情、

時習說

賛

以稱、名與軀俱埋、一何眇也、臧獲之人、猶能有一

材一能、以開于後世、是其智臧獲之不如也、然則臧

獲之賤、未可以爲賤、富有崇高、未可以爲貴、仲尼、誰刳趙璧、投之文房、涅而不緇、與悳永明、

曰齊景公馬有千駟、死之日、民無德而稱焉、

白石碑銘應荣霞亭需

徒大不足以爲大、徒貴不足以爲貴、蓋其說在鯨鯢、 麗之譙、緻美之臺、爲之一廢委地、一何暴也、於是

鯨鯢鱗類之大者也.嘘潮爲雨、擊浪爲雷、一何偉也、 天下之人言其暴、怨惡不啻、其習~也、能達卉莖、

然不能脫棧々之罟、迷惑畏縮、終爲人所獲、一何拙 能皷木柯、使之鞠養、又能引雲雨、澤於天下、一

也、夫咫鱸尺鯉、猶能跋扈、是其智鱸鱣之不如也、 仁也、於是天下之人、稱其仁而不置、均是風也、然

然則鱸鯉未可以爲小、鯨鯢未可以爲大也、富有崇高」前爲天下所惡、而後爲天下所稱、何其相反也是自

之人、車騎炫燿、氣烁灼人、一何盛也、然無材德可|取之也、子曰、君子之德風也、呜呼可不戒乎、

於踰湍、奮其髻皷其鰓、以上急流、鎮于汨、倒于齊、雖然、術豈容易、

鯨說

斯、願得聞捕之之術可乎、曰可、衣以長袖、着以冐絮、牽之西矣東矣、北矣南矣、 郊、然後人得而見之、德未洽也、翔于千尋之上、而

以爲觀焉、猴疲不敢舞、則笞杖從之、叱罵而錐股、 不敢下、人不能見也、然則鳳常有、而不能見者、目

血流至踵、猴不勝痛、乃起而舞、日得泉累千有、人一力有涯也、鳳果常有也、夫常有之物、而人不能見其

謂之曰、夫猴者禽獸之捷者也、然爲子所困也、一至於五彩之燿、不能開其和鳴之鏘、嗚呼、

鳳說

憒也阿也、豫也土也、其地多猴、亡業者捕而養焉、

繫之以重鐶、居之圈檻之中、其食不過朝三而暮四、

其最巧者、而目記其面目與毛色、相謂曰、彼可取而

捕猴者說

則猶涸澤而漁、豈有餘鱗乎、言已畢、射士怍然變色、

再拜曰、數射之事、既得聞之、敢問子之所射、書生

曰、如余所射、大異于是、然子非其人、余不欲與子

言之、射士固請、則撫几曰、道可道非常道、射可射

非常射、逐不與言、

敷也、勿失、有項猴又飲皆醉、於是大呼逐之、猴大

駭、醉而不能走、或數步而仆、或十餘步而仆、因捕

所目記者以歸、而敎之、故若是之巧也、人無及也、

然彼不得自縦、如此其困矣、貪婪以致之耳、側有人

聞之、曰善矣、然子徒見猴貪耳、子之貪不亦大乎、

猴主感其言、登山釋猴、以樵爲產云、余幼時聞之、

今猶臆之、因戲記、

射者甚衆、不可殫論、余揚較之耳、子其以類推之、

吳之射也、入其國則必言其强、見其君必言其賢、言 居吾語子、吾嵖人也、無業可以爲食、一日與悍少年

是如非、言非 如是、廣 肆利害 存亡得 失之事、以射 謀捕猴、多齎酒殽、與俱登山、到最多猴處、衆猴恂

人君之心、盖蘇張之射也、以家量貸、以公量收、其 然而走、壺據樹焉、佯不知者、設席其下而飲醋、則

取之公也薄、其取之民也厚、公厚歛焉、已厚施焉、 屢舞躚々、因去而伏于深蓁之中窺之、則衆猴皆下、

愛之猶慈母之於弱子、以射民心、盖齊陳氏之射也、凡|踐躝挐櫻、飲良久、皆起而舞、如余所爲、於是覿

期月而馴、則出之于檻、而教之踏舞、又期月而成、 鳳也者、未始常有耶、非耶、夫上有洽德、則來遊其

則之七

原校得著滿之解

七Ot

盜」也、請少進之、望色聽聲、知病之所在、湯熨酒以

焉、布帛之衣、鬆磁之器、無不囓焉、其爲害也大矣、及之、金石鍼砭以攻之、以射其治、使死者得復自還、

唯猫可以制之也、故君子取其能、而不問其他、豊唯盖扁鵲氏之射也、始如處女終如脫兔、衝虛擊不虞、

猫而已、於人亦然、

其出奇也無窮、以射其勝、擊無不破、攻無不取、盖

原校以下恐脫我之字

壺梁先生猫說

先生鎗粽成文也

緻、慎思以致其固、講習以致其精、涵泳以致其化、

艱險澁刻、久而後成、一成不反、故物不能奪之也、

亦猶陶之一成不反也、作陶說、

車、盖農人之射也、粉白墨黑、刘芳澤設筓珥、當日

之夕、正蛾眉而立衢閭、以射男子之情、盖婦女子之

猫也者、其貌卑佞可惡也、其聲媚靡可惡也、時或掠 射也、凡毛者羽者、海之錯陸之毛、煇之以薪、齊之

日本下恐有悅字貞吉按傳云商案篝汗

稻若麥、將播之也、或枏或粗、既播之也、或耘或耔、

炎暑隆寒、無毫避之、面目黎黑、手足胼胝、唯力是

視、以射其登、其大有年也、瓯塞滿篝、泻邪尚谷百

刻、久而後成、一成不反也、古之學者、博學以致其

子以

君子見陶必觀焉、蓋有取於陶也、以木爲器、非不牢 「何爲業、書生不應、讀書自若、三、曰余亦常射耳、

也、陰以濕之則蠹焉、陽以曝之則墊焉、以鐵爲器非 射士日、我與子連墻十餘年、而未嘗見子之射也、子

不固也、居之于水則鏽焉、居之于土則爛焉、獨陶則 何以言常射、書生莞爾而吹、日余所謂射也者、非謂

不然、陰不能蠹之、陽不能墊之、水不能鋪之、土不 左支右屈之謂也、嘗試言之、夫夏則資皮、冬則資絺、

能爛之、是其故何也、夫陶也者、水之以致其緻、風 旱則資舟、水則資車、而待其騰貴、以射其利、小者

之以致其燥、懸之以致其固、火之以致其化、艱險澁|致千金、大者累鉅萬、盖賈人之射也、若黍若黎、若

陶說

一書生與一射士、連墻十餘年、不相謁請、一日射士

射說

亦君子之道也、

吾見其雷、而未見龍、夫稱物先其所見、後其所不見、

欲陵暴之、乃負抉拾往見之、盛氣而揖之曰、膳汚蓐、亦可惡也、猫有三可惡、然君子畜之何、夫、以味、濟其不及、而洩其過、以其中和、蓋雍人之射

鼠之爲獸、黠而能竄、贍巍之肉、稻粱之米、無不遺稿卷蛺動、無不好火、故皆投於焰々之中、不覺其身

得之、答曰得之相人、夫呂望磻之一羸叟也、文王得之盡也、龍雖神哉、亦蟄類也、宜矣其不能免也、然

之以基王業、涯叔敖海濱之一臞士也、楚莊得之以霸」則稱其髯不以龍、而以雷何、雷之所激、而有此髯、

原校飛下恐教藏字

曰是良馬也、燕王疑之、强而後納之、一日試之、徐

燕王有馬千駟、取其肥者収馬說

其小發也虺々焉、其大發也殷々焉、陰陽相薄之所致

也、世俗之貴鉅鞠也、固其數也、雖然、培養於人之

卉、縛束剪剝、喪其天也久矣、孰與其蕃蕪蔓延、不

失其眞者、

雷髯說

得爲人、子其愼勿失信、我所以字子之說也、

大者過二三寸、比之大於盆者、則猶如瓦礫之於結綠

岡松亮來請字余、々字之曰信甫、余所謂信也者何、

菊榭說

之人士、好築鞠榭、而貴鉅鞠、刀之以滅其枝、 已、天之信也、載山岳而不重、呑江海而不洩、播則

爪之以踈其葉、培之灌之、唯恐其幹之不大、縛之束 生焉、鑿則得泉.地之信也、就燥火之信也、流濕水

之、唯恐其幹之不直、其生苕也所存一而已、其餘則剪 之信也、其言有實、其行維钝、人之信也、天而失信、

焉、以故其發華也大於盆、夫鞠之在林薄也、蕃蕪蔓 則不得爲天、地而失信、則不得爲地、火而失信,則

延、唯見其枝、而不見其幹、其發華也、小者半寸、「不得為火、水而失信、則不得爲水、人而失信、則不

小戴曰蟬有矮、言其有貌也、大戴曰飲而不食、言其

廉也、君子之於物也、言其長而不言其短、古之道也、

學者可不察乎、

諸侯、臣故知良馬不必肥也、燕王大說、日今日以來

與子俱相人、

人青物之心無已、人而不足、延及蟲豸、一何刻也、

岡松信甫字說

有常而可信之謂也、夫晝夜運轉、乾々日月、麗焉不

東都之、有一人取甚臞進之、

也、是豈有物哉、然震所必有髯何、是龍髯而巳、易

曰雲從龍、雲龍相從之物也、故雲之蠡也、龍乃乘之、

當陰陽相簿之時、電火奔轉、龍從之不已、不覺隕於下

土、逐有此遺髯、龍也者神物也、其逐火而隕何、夫

則四蹄均調、疾則逐飛追奔電、燕王大說、日子何以 蜩飛醃梁先生遺稿卷之七

世人愚蟬曰、就燿不知避、曰不知蟷螂狙已、嗚呼、

、

養說

蟬說

活哉、作人漬說、

目、蓋所不忍也、無是子曰善、請待其翼之長放之有言曰君子仁民愛物、君子苟愛物、則傷物以娛其耳

顆桴之所能無是子畜鶴、余謂之曰、甚哉子之玩物也、無是子嘸「之性猶如犬之性也、且物之氣味同者、其於人病也、

然不悅、曰夫鶴也者、古人之所重也、易曰、鳴鶴在|其檢太概一也、故膽之苦、可以解痞、蘗之苦亦可以

陰、詩曰、鶴鳴九皐、我故畜之耳、豈在玩物、余笑 解痞也、然則何無驗之有、今用韓漬、亦有無驗者、

日、其然豈其然、夫易采其善無不應、詩采其誠之不「是蓋不中於病也、嗚呼、人之多惑也、以爲得眞、

可揜也耳、豈傷其翮鎩其翼、置之其園之謂乎、孟子 則死人可活、是愚夫愚婦之見也、病之革也、豊根核

鶴說

氣味異乎、曰生於廟 堂之上、及於 閭閻之下、使天下之人 熙々焉「吾邦本不生人漬、近歲江府得種于朝鮮、住々藝之、

稱快也、豈不大哉、易云、隨風巽、君子以申分行事、 醫人或曰若無驗何、余謂之曰、其形異乎、日無異、

人說

焉、首疾焉、當此時搖尺餘之約、則風々然生、於是「而如彼其澤々也、故一燥一濕、一带一否、在得其宜

喙者愈怖者已、首疾者脫然、人之巧亦至矣、雖然、 耳、筑人有憂其色之不美、日灌之者、亡幾而敗、大

其施不能出牀第之外、是巧之所以有窮也、吾黨之善|城生聞之曰、助長豈獨宋人而已、作苔說、

生風者異於是、不假一縷之力、不費一撝之勞、数焉

風也者天之噫氣、非人之所冀而得也、炎蒸之時、人˴稠密襍迷、久而不帚、則滅其性、故時帚之以蠲其害, 望雲霓、既不可得、望天之晅、又不可得、喙焉、呻「其帚之也、猶如慈母之撫弱子也、唯恐損其質、夫然

原校鋆々恐習々直按零々長風聲不

翳木之下、叢篁之陰、有物蒼碧、如設氈然、若甚燥

說

其

人所漁也、余無以應、遂記、

則枯、甚濕則腐、隕籜之被也、希踈則育其性、若豈唯々獵々之謂哉、故君子巧爲下、

無異、然則何無驗之有、凡物生天地之

際、其形同者、其性必同、牛之性猶如牛之性也、犬

世漁者乎、商之漁利也、求龍斷登之、左右麾以售、

人之於物、各有所嗜、猶如蟲之就荼或芬也、然人之｜工之漁利也、作淫巧奇器、以蕩人心、農則於野、士

所同嗜、未可謂之嗜也、人之所不必嗜而嗜之、而後則於朝、其他漁者、不可勝數、余今六經以爲網、捕道

可謂之嗜也、文王之於菖、孔子之於薑、屈到之於菱、 於香溟之海、切思以爲鈎、釣道於達奧之淵、余亦漁

齋王之於雞跖是也、夫茶也者、古所無也、晋時始有 之徒也、客曰善哉漁也、子漁道者也、雖然、子今

之、陸羽作經、盧同作詩、茶大行于世、朝嘗夕嚼、 邦君所網、儼爲敢官、是子唯知己漁道、而不知己爲

于中、夫既爵蘊于中、則不能不漏泄于口也、故嘈々雅

々、鵲鴉之詩也、啾々隍々、泰黿之詩也、其他鋌乎走

者、蹻然踶者、鼓短者、鼓超者、其鳴也必有所漏泄焉、

然則是皆詩也、故田夫之唱詩也、巷女之吟詩也、歌人

之辞詩也、徘人之章詩也、然則君子之言志、直言之則

也、何故局々區々、傚之周漢、擬之李唐也、日凡物

捨範模、則不得其正矣,吾聞君子出辭氣、斯鄙倍、

周漢李唐所以遠鄙倍之模範也、不可捨矣、作詩說、

嗜茶說

獨所甘而已、是之可謂嗜乎、可謂嗜也、作嗜茶說、

漁說

夫有血氣之類、無不有性情也、有性情者、不能無蘊

與伯禹同惡、雖有良醞哉、雖有美酯哉、皆斷然不悴、

鳳出之世、則不枯矣、時也耶、

獨所句疑有誤說

粒々然、作飱陷之、其味頗美、既而其竹皆枯、嗚呼、| 以充清凉醫融之飲、然是人々所同甘、未可謂之嗜也、

毅也者生於芋々之標者也、今糍々之幹而生之、非恒|夫芻豢與菽芼並陳、不可得兼則人取芻豢者必多、酒

也、夫愧非恒、故適足以自災也、或日、竹若生實於「與茶並設、不可得兼則人取酒者必多、獨门口則不然

大城子一日據梧而坐、有客至、從容而問曰、人各有
所好、敢問子所好何、曰余無所甚好、又無所甚不好、
是以無常好、客曰、其然、豈其然、子必有所最好者、
强言之、余則默良久曰、其唯漁乎、客曰善哉子所好、
昔舜漁於雷澤、太公漁於磻溪、子其躪于聖賢者乎、
雖然、我與子相䣝、五六年于此、我見子出漁也四三、
且子家無藋夕之竿、又無繩々之網、未可以謂之好漁
也、曰余所謂漁也者、非投竿撒網之謂也、子獨不見

熊府之竹、往々有實、其在樹也離々然、摘而擇之則
原校田下恐收如之子
政庚申之冬、柴君霞亭將歸、余置酒于此、徘徊躊躇
于庭以樂、柴君曰、此亭之勝、遠則蘇鞍之山、峻極
乎天、煙雲開闔、易貌異態、鶴鎌之埜、廓然無際、
凡物當有而有之恒也、不當有而有之非恒也、非恒之
一也、柴君曰善哉、子之扁此亭也、是人々所宜為戒
也請爲吾記之、余曰、子也者吾柴先生之子也、耳
聞若說也熟矣、將焉用余言、曰古人贈言之義、子豈

可默止哉、余無辞以應之、遂書以爲贈、

沼田大夫之小遊、在芹川之上、余嘗扁之曰觀瀾、寛

觀潤說贈紫霞亭

使之固其本矣、書日本固邦寧、贵翅邦哉、

竹實說

有業鬆者、能圓草木之枝葉華顆於器、阿難扶陳綽約「潤於是乎生、若夫潢汙行潦之水、亭然不動、瀾何由

錯落之狀、粲然明矣、燁然美矣、亡幾悧刘剥落、器 生哉、故鄒賢有云、觀水有術、必觀其澜、今士坐廓

不可海用也、問其質則曰析梓耳、有業繡者、能岡島「廟之上也、不能澤民、其在閭閻之中也、不能善身、

鞭蟲魚于衣、拚飛鋋走蠕動潛伏之狀、粲然明矣、燁-其言也爲枇爲糠、爲瓦礫爲糞土、是猶如無源之水、

然美矣、亡幾破裂穿蝕、衣不可復服、問其質則曰椹 不能生潤也,君子則不然、學問思辨、以立其本、出

絺耳、夫繡與鬆文也、末也、稀與梓質也、本也、不「則利人、處則不失身、其言也爲珠爲璣、爲文玫

察本質而事末文、是其所以致敗也、故凡物莫如固其「瑰、是猶如有源之水、自生潤也、沼田大夫頗好學、

本、其本不固、而能永久者、未之有也、飯田氏之子「需此篇也、在弱冠之左右、故余以是戒之、亦敢誨之

本、來遊我門、能文辭、絢然可觀、余字之曰子固、

飯田生字說

風之至也、有其聲瀏亮、如龍之吟、如鸞之嘯、有數

說

壺梁先生遺稿之卷七.

曰、夫水產巖阿之下、脉々葆々、日夜不舍、

巨石、磔々硐、如攢峯如疊巒、如虎之狀、如獅之

圓、其它怪草偉木、不可枚舉、然子獨取之於水者何

岳、余物、奇則奇矣、然不招災者幾希,蓋其說在竹生教、

落講田、櫛比繍錯然也、近則脩竹萬竿、矗々猗々、府內武田翁以醫
閒、扁其堂曰容德、余自京師歸也、

路出府內、始訪其居、翁具筆研以需余文、余唯々默

良久、曰夫一塊鐵之在山也、人未材之、冶人鑄之、

以爲鼎爲釜爲鍾、人始材之、是其故何、有容德也、

若夫塞然無所容、則鼎不能爲鼎、鼐不能爲鼐、釜不

能爲釜、鍾不能爲鍾、與一塊銕何異、人豈得而材之

乎、一嗓株之在山也、人未材之、匠人劉之以爲匜、

爲盤、爲、人始材之、是其故何、有容德也、若夫

塞然無所容、則匜不爲匜、盤不能爲盤、不能爲、

尊不能爲、與一株何異、人覺得而材之乎、夫所

崇乎海、谿澗峽谷之流、無所不容、潢汙行潦之水、

無所不容也、所崇乎山、苛煩蔓裳之少、無所不容、

鉅槃磎砢之樹、無所不容也、人亦然、德足以容1

之人、而後一家之人崇之、德足以容一鄉之人、而後

一鄉之人崇之、德足以容一國之人、而後一國之人崇

之、德足以容天下之人、而後天下之人崇之、嗚乎天

之所以爲大者、以其能容萬物而不飽也、仁人之所以

爲大者、汎容魏人而不外之也、書曰、有容德乃大、

此之謂也、翁之德之量、一面之暫、豈所能知哉、雖

然、旣己扁其堂日容德、則其志可知也、於乎醫亦仁

術也、非有容德、惡能濟其業哉、翁說、是爲記、

七:

横梁先生遺稿卷之六

容德堂記

下恐當有所焠告所化之二字

其質朱而有文、隱然如衣之有粲然者九、其質源而其「天明四年甲辰、春正月二十有七日、台臺命 靈感公、

文淺黃、如檫之在蓋、輻之在輪然者五、其質朱旣、 助武藏上野信濃濬川之役、公即日命諸臣、及福田君

而玄粉純者二、其質灰而其文鮭、如篆而成款或識者 菅役事、時諸臣皆役、獨福田君在江都、遙議賛之、

各一、新質而淺白文云然者七、赤 質 而 漂 文、雷回 二月功成、台臺召福田君賜時服三、披衣一、餅銀二

然者八、玄之與黃犬牙相接者六、其質深黑、見之淺 十於城中槍間、執政水野出羽守忠友君傳命、奏者番

黃文、眸而視之、則有壆析者三、純黑髹然十五、纯|土井大炊頭利和君授賜物、是H 靈感公亦賜物數品

白鋈然者卌七、其質淺紅而其文鵑、遠而見之、如有|福田君、君曰我以餅銀遺子孫、恐子孫不能久保之、

穿孔、近而視之、蕭胡然者二、凡二十四種、百五十「是棄台臺之賜也、乃以餅銀二十購良刀、得濃工兼定

福田君刀記

者十、其質綠、其文朱之與黃與青、如英蕩然者五、

五、黑質而黃之與白點、如錯銀三、青質而白文、如宇者、觚者、反者、楠者、凸者、凹者、其他奇々怪

月之恒然者七、白質而綦文、如鴻雁之燭、而有序然」々、不可枚舉、其大者經寸半、大之至也、三分之一

者四、縑質而白文、如聚米然者六、排質而綠文、如[redacted]小之至也、其厚半寸厚之至也、四分之一、薄之至也、

棼絲然者七、紫質而沿文、如蟻結然者四、赤質而紫 余友穴工氏藏之日舊矣、余視而愕然、曰造物者之巧、

文、蛛網然者六、黃質而黑文、如臯比然者三、經質、纖悉一至于此也、心甚欲之、然其所珍寶、不可以請、

而汁文、如科斗然者九、一靑一白、如糾索然者八、 退而求似者於四方、無得、乃就穴工氏、作記置之几

一赤一黃、文必方、如簧然者七、五采相襍、如組然「案之間、時々展玩以自樂、

六枚、其狀圓者、中規方者、中矩有類鉆母者、類終於是福田君大悅、曰是足以使子孫永保、以記台臺之

葵者、斜銳類圭者、半圓類璜者、肉好如一類環者、 賜、乃裝飾、詩曰、貽厥孫謀、福田君有焉、福田君

廣首細腹類衽者、缺刻類木葉者、如疊峰連巒者、三 名賴雄、稱空平、

稜者、四叉者、六出者、八有銳而如危者、有反而如

續君之居、有喬木數林、庇蔭數十叺、余逍遙其下、

文石三筐、四七二十八區、黃質而黑文、如點漆然者

人之德、達而忘其友、怒而忘其身、是非美德也、果

非美德耶、貴而忘勞、施而忘報、務公事而忘私菜、

聞人之善、而忘人之非、可不謂美德耶、然則能忘可

忘者、而不忘不可忘者、是爲得之矣、翁之壯也、入

事其親也孝矣、出使四方也、未嘗辱君命、鄉黨稱焉、

僚友推焉,可謂不忘不可忘者、翁爲人對物忘我、莫

逆不啻、其致仕也、脫然榮于荒野、言未嘗及世故、

可謂能忘可忘者、善哉其扁之也、易云、君子虛以受

八、忘我之謂也、仲尼無我、顏忘犯而不校、子路願

衣馬與朋友共、皆能忘我也、忘我之義、大矣哉、

惟喬園記

郊野者、匠師盱之睨之、尺之丈之、爲檬爲柹、楣

爲梁、不能終其天年者有之、是樹之不幸者也、今此

樹託于膏腴之地、居于爽愷之所、既無水潦岩石、鞭

策牛羊之困、又無匠師盱之睨之、尺之丈之之累、枝

「葉如此其蔚焉、楨幹如此其碩焉、是樹之幸者也、

亦然、生于閭閻之中、耘籽糞壅、于茅索陶、終身役

々、不能成其材者有之、生于工商之間、劉鑿斷析、

負荷拮据、終身役々、不能成其材者有之、其或生于

士人之際者、家事多故、公務鞅掌、或爲疾痛所苦、

不能成其材德者有之、是人之不幸者也、今續君生

于世祿之家、邑入二千石、可謂富矣、位列大夫、可

謂貴矣、加之家眷無故、公事間踈、又無疾病之累、

」則可不謂多幸乎、余唯願學問研究、以成其材、以喬

其德、材既已成、德既已喬、則一國之人、將庇蔭焉、

豈翅樹之喬而已、遂名其園曰惟喬、蓋取諸夏書、

文石記

忘我軒記

有、有人于此、圓領而方袍、一旦幡然棄其道釋其服、

而欲入我道、則余將引之、以齒之于黌中、泥石乎、

子曰、與其潔也、不保其往、此之謂也、

林翁扁其栖曰忘我、忘也者其美德耶、忘人之托、忘

余哂曰、夫芰荷生于游泥、君子服之、蘋蘩生于行潦、 日嗚呼樹生于澗谿之中、爲水潦嚙、爲嵓石箝、輸困

鬼神享之、是皆采今之潔、而不問前汙也、斯石違菩|委縮、不能遂其性者有之、生于行路之際、牛羊嚼焉、

薩之頂、而蟄于地中也久矣、滌用之、亦何不可之「鞭策戮焉、剝剔刻蝕、不能遂其性者有之、其或生于

梁先生遺稿卷之六

六九九

一步而俯、再步而伏、恭一步、猶如感施不可仰也、

既而路稍坦易、雁行而進、前行者指示曰是楓也、 釁中地得一扁石、徑不滿尋、宛如壼然、六棱六下、

望之如一爐火然、行里許、前如爐火者、化爲列炬、 象有撩持之也、仰之以實水二三石不至浴也、遂以爲

行里許、前如列炬者、化爲千張紅氊氇、既到則陳几 洗、或曰是石菩薩之益也、以爲泮宮用、不亦穢乎、

石洗記

原棱伏罕之下恐舱一步之二字

之月、觀者甚衆、余與二三友遊焉,取道兎谷、險甚、 是爲記、

岑于我府城之東者、其龍山耶、山上頗多楓樹、建子「若有背者、非我千孫、詩曰、貽厥孫謀、大塚翁有焉、

叟及

余、齡已在七十左右、則不能無感慨、故因圖記之、

使後之遊者、想見昔遊之狀、蓋亦主人翁之志也、

龍山觀楓記

及大琢上人、皆己作黃泉客、今主人翁李先生馬人翁築園、二十年于此、其來遊者、松洞米夫子、孤|大塚翁嗜酒、家置一巨觴、朱質金章粲々然、客至則

山藪先生、青溪辛先生、愛日古先生兄弟、板徵卿、 必滿引、訢然而樂、未嘗失温克之色、一日幡然而曰、

所適也、主人雖口舎而不問、亦見其雅量、嗚呼、主

觴記

于竹林中、劃然長嘯、使鳥门者、島原醫人本多子正「設席悞甚、於是或噏然而嘯、或淡然而歌、或相然而

也、上月思亭、轍小轆轆、操不律以至、手指螵々者、抃、或皷然而拊髀、賦詩者有之、引榼者有之、擁膝

壺粱陳人大城煥也、手執凉繖、腰横轀具劍、單舟輕「者有之、坦腹者有之、箕踞者有之、端坐者有之、唯

棹、泝于川、將來會而未至者、鹽井辛伯释也、凡其所適、興大發、不知H之于虞淵、月出而後歸、

十有一人、各々有詩、別錄之、堂北陰蔽之所、僕|嗚呼余三四年前、遊此山也、楓巳隕墜者十七八、去

從雜集、有坦腹者、有箕踞者、有睡而發鼾者、有坐一歳則楓未染者十五六、今年則無樹不紅者、又未有一

而畫沙者、有附耳而語者、有拊脾而談者、亦各從其葉墜幀者、豈不幸哉、余喜得其時、逐記、

夫酒也者、喪身敗家之具耳、我不至喪敗也幸矣、我

唯恐子孫有以此喪敗者、於是鋟之鍥之、以創其觴、

而示之其子孫、曰我自得此觴、失言過行不爲少也、

吾不復敢飮、子孫世之、藏此觴以爲戒、勿置巨觴、

陽、浣紗溪之側,買五六 者、白嶼馬叟也、其左手捧荷葉、右手持莖以吸酒、

畝之地、以築游憩之堂、扁曰叢桂、堂之西廂、設朱 雖至數四、不失温克之色者、南岳安公雍也、童子在

欄干、中置石几、恭琴案也、朱欄之外、及南簷之下」前、提门以前却、其就機樹翳薈之下,安牀水中、擁

皆躒也、小者如碁子、大者如不托、泉自西北隅發、 膝喫烟、且觀促鱗之嚵嚼跳躍、而似與之相忘者、分

深々乎貫中庭而流、宛如一大幅練然、水之左右綠艸|弟村蟠年也、攀芭蕉以題詩者、嗣村子陽也、循樊

靡々、如鋪陳靑氍然、往々奇石突起、有苦粧點助 蘺凝立、把千里鏡、以搜佳勝者、第二子村子也、

其佳狀、水之首雜樹茂密、側多菖蒲、水之尾架月思|踞松根而注視桔梗花者、長府豎人上傩允之也、郭翔

可以漱餘阱也、堂面伐石山、戞々有聲、

山谷唅苔、久而不止、右則阿羅尾峰、隆崇崔、有

山鹿驛人遺余燈一枚、全以紙爲之、而無物以爲骨、 時吐雲、綠翔英飛、變幻不一、左則平田千頃、浣紗

其形象堂而六觚、銳危反宇、絺搆甚牢、梁梁楣桉、 溪之流、潺々湲々、入祓川、遐喝豁達、洞人胸次、

莫不畢具、六面皆極薄紙如紗或羅然〝雕厚紙作蟠龍、|翁每佳節、折簡以會吾黨、吾黨亦必赴、杯娯而後歸、

若伏虎若逸馬、若游鯉若揚鷹若舞鶴、以施五采粘之「今玆七月七日又會、酒數行、各從所適、翁命令嗣村

於面、畜火用力之精、設色之妙、愈益見矣,余置「子陽、作雅集圖、子陽之畫、近時益工、自泉石卉木、

諸几上、以悅眼目、一夜風暴至、燈顛於几間、危陷「至鳥獸人物、皆能入妙、其烏帽鶴氅、踞磁皷俯石几、

柱折、如擢腐枯之物、余於是撫几而歎、日今世威儀以彈七粒琴、風範卓然者、主人村翁也、後有童子、

整齊、辭氣安定、外如賢而枵然無實者、比々有焉

是猶無骨燈于、其未至一顛、如摧腐枯之物也、幸矣、

叢桂園雅集圖記

手蒲葵扇、時々鼓動、以來清風、其坐蒲團而評騭詩、

沒滿研池、又記

日修大矣、比之水得本眞、外則能照百物、内則能藏|亭、三面皆暢、簷間施小轆轤、細綆矮瓶以汲水、而

骨燈神物、子共勉旃、是我所以名子齋也、

道貌藹然者、紫溟李先生也、有童子翩躚來去、聽其

使命、其醉顔赫然、睥睨左右、扼腕抵掌、談鋒鋭

琴山村翁有山水癖、小山之帝梁先生遺稿卷之六

六九七

癸未之歳夏六月庚戌、重與諸君遊泰泉觀、道士出謂物所動躁、能全其本眞、講修是勉、則所講日明、所

重遊泰泉道觀記

物、内則深厚、能藏神物、夫人之性亦靜矣、其動躁

也、爲物所動躁、子居此齋也、取于淵以深思、不爲

自有超俗之想、亦猶如弘景、雖隱山中時與世故以爲|低之隤、如山之崩、皆非其性也、唯其在淵也、门而

樂、元章雖拘吏務、時間逸暢以自適也、嗚呼、自非 不動、寂而無聲、是得其性者也、外則凝澄、能照百

風塵表人、焉能知先生之樂乎、

原枝世之下疑有字

碌々之物以爲樂、然二子捨彼取此者獨何也、其志超

々乎在風塵表也、陵池先生甚愛松風、又好奇石、 松士哲築齋於非淵之側、問所以扁之余、余曰子齊

以故戶廷之際、有松蔚焉、有石碑焉、遂題其楣曰松 於井淵、請扇之曰淵、夫水之性也靜矣、爲波濤、

石、蓋先生慕弘景與元章之爲人也、先生風韻特秀、 風蕩之、或相突而然、爲瀨爲灘、爲潘爲縣水、地勢

其志樛々乎、今實爲教官、雖有誘掖之累、欣々綽々、 使之然也、其聲也如驟雨之夜下、如暴風之朝至、如

淵齋記

物之可以悅人耳者、爲鐘鼓琴竽、古之人有捨鐘鼓琴不在彼、則黼黻文章之曜乎目也、烈風疾雷之聒乎耳

笑而不聽、獨聽松以爲樂者、陶弘景是也、物之可以「也、何所見問乎、由此觀之、居深山空谷中、以爲學

悅人目者、爲黼黻文章、古之人有捨黼黻文章而不玩, 者、勉以爲之者也、非真好之者、子其尸居淵嘿、注

獨玩石以爲樂者、米元章是也、夫聽锵々之音以爲樂、心乎此、而不在乎彼、則子道盡矣、何必深山空谷中

敦與聽謖々之聲以爲樂、玩粲々之色以爲樂、孰與玩|之去、道士服矣、諸君稱善、於是乎記、

松石亭記

其心不在焉、視之不見、聽之不聞、苟注心乎此、而

而己、焉如此實者乎、築土以像之、畫壁以像之、是

非自然也、惡如此自然者乎、

之似峰者、袖之而歸、置之坐右、愛玩不巳、遂名曰余曰、夫古之學吾道者、必於深山空谷中、今也或是

獨秀峰、夫古之好山者、寫之于粒、寫之于辭、是虛珠之亡也、夫獨妄之聲過其耳、則毀其慮、一綫之色經

目、則碎其情固也、自非在深山空谷中、奚能得盡

吾道、吾近將履古人之躅、余曰何必然、余所日誦、

曰慈然不忍去焉、於是乎人始知其所好也、既而得海石

之文也、凡天下之物、

淪爲、紛綸紆轉、沓々疊々也、是爲洗馬橋二也、菰蘆數十畝茸々焉
、鳧鷺猺澡、|辛伯彝之游北筑也、獠古瓦、有識在背、曰天平、益

比孜回集於其側、是爲菰蘆洲三也、衹山之椒、有一 都府之遺也、伊
太素鑿池、和子成造會、致仕米主題

偃松、蒨々葱々、蔭蔽數百步、衫袷之候、浮游子弟,之曰靜友、伯彝
既擢文字、i子亦皆以詞賦開於天下、

宴飲於其下,踏舞嘯歌之狀、歷々可辨、是爲游人松、 此戔扁蝕剝之
微、何以得四子之寵、大凡古之物多功

四也、西顧則樽翠萬仞、如削成然、有雲然觸石而一緻、今之物多楛
惡、風俗醇澆之所由也、君子慕古、

出、爲旗爲旆、爲恭爲帷、一瞬之間、變幻不極、是罩及其物 亦唯惜
之波餘也、夫未央銅雀珍於彼、我土

爲小金峯、五也、峻乎東南之隅、落霞浮嵐、蔭映｜未聞珍古瓦者、
我土之有古瓦研、恭自辛子之游北筑

堂、是爲釋伽文峰、六也、之六者皆足以悅目快心、 始也、是不可不
記、

朽木君樂之、然朽木君不取扁於此、而取之於其所最 獨秀峰記

愛者、朽木君何以最愛漣猗、蓋好自然之文也、夫刻 歐陽子有言、曰
視其所好、可以知其人焉、豈不然

書雕鏤、非不交也、然非自然也、斬木而劉之、密石|哉、爲人易良款心者、必好平端質實之物、爲人偏僻

龔之、則文油然而生、焠金而鍛之、精砥磨之、則文 邪詭者、必好奇淫浮夸之物、是猶如形之必有影、聲

粲然而出、斯二者之文、頗近自然、然不得不待人、「之必有響也、故有在々々之量者、必好萬頃之水、

唯水則不然、水之行地上也漠之焉、風一加之、則爲 有特拔秀穎之才者、必愛孤絕之峯、池先生以教官于

有驒有駱、有駰有聊、或虢或琬、或跳或騰、一奇觀

數十仞、連甍重阿、翬飛鳥革、綺錯霞縟、是為府城苟有其德、則其自著、故君子貴物之出於自然者、

層樓一也、有一長橋蜒々然、都之人士、洗馬於其下、善哉朽木君愛漣猗也、善哉以是名其園也、

都府樓瓦研記

、一合一離、如羅如繡、

如鱗如髮、自然之文也、夫君子和順積中、英華著外、

周旋中規、折旋中矩、亦自然一釁也、朝誦夕講、身不離于典籍、人未見其所好也、

今玆夏遊于鶴崎也、得孤絕之峯乎海隅、目注神馳、

遺稿卷之六

往、

記

或連館而至、飽觀飫視而後歸、余非無志也、如官縻/

何、然則山水之遊、可終廢乎、曰否、近郊之地、

佳區者、往々有焉一時間携諸子游焉、或朝冷而某山人草堂記

原校北跑首結搆與前祀同恐【簡再空投G

龜泉記

美、烟靄雲嵐之奇、不可殫狀也、是

古之嗜山水者、搜之于輪蹄不及之地、或中宿而至、

淅々瀝々、與泉聲相奪、五也、是爲記、

無盡藏也、是爲伐石丘、二也、出村西行梅樹甚多、

得籍一體然、水清而洌、可以浣紗、是爲浣紗 悠然而遊、洋焉而來、三也、有松爽而聳、矯々然也、

也、村之西南石丘隆然、凡府之有事於石者、皆取用 藤蔓之、如蚪之將浴、如龍之將飲、四也、有芭蕉

於此、自加藤氏來、二百餘年、未嘗減耗是亦造物者「往々而植焉、如柿而疏隙、然風之至也、颯々沓々

蟒字疑字貼

1

地往々有焉、或朝飧而往、或夕铺而往、徘徊風路、 或晩晡而往、其歸也腹猶果然、雖無高蹈逸舉之趣哉、

其歸也腹尚果然、呜呼、是亦吾黨之逍遙游也、西溪其 亦足以取快於一時矣、龜泉其一也、蓋龜泉有五勝、

一也、西溪距城十里而近、有水發源于村巻之際、直 泉泌々然、出於累石之際、如語加笑、如繁手之粒、

出沸然、益詩所謂檻泉者也、有魚數百尾、或扶或寸、 小嶅之聲、一也、泉尚且漣、爲龜文、爲雷回文、爲

悠然而往洋然來、投之以搏飯、則相蹂躪爭之、猶如 綾羅、爲茶組文、其他委迤新餘、雜亂不可狀也、

漢兵聞籍死爭赴然、既而各得一粒而去、亦猶如漢兵 有魚無數寸者、虞者咫者尺者聚一散、猖狂焉跳躍焉、

冬春之交、蹲衪玖蘂、照映一溪、殆難爲懷、是梅

溪、三也,出梅溪西行里餘、奇石累比可愛、石能發

刀劍、故凡癌蕘者、磨鎌于此、是爲磨鎌坂、四也、

其它卉木竹箭之其隱也非有意於隱、亦猶如人之甘然就寐、與覺不相

關也、伊尹太公是也、其隱也有意於隱、亦猶如人之

將咯珍膳、而枵其腹也、晋季諸子是也、故世有隱之

隱者、不可不察也、山人之隱、其有意與否、未可知

也、雖然、山人於世味獪探湯、狙食猿飲、如將以沒

身者、則非有意者乎、將非有意乎、有識者其能辨之、

|作軸认於泄味爾探湯然、簞食瓢飲、欣然而樂、如将极其身

者、則非有意於隱也明矣、他日使余言無驗、則余將焚管研矣

漣猗園朽木君築園於壺水之上、扁口漣猗園、有六景、城樓

雅齋焉、堯舜周公制作禮樂、尊卑有等、長幼記

固、君子之雅也、謙遜巽順、揖拜原校人下恐吮欲之字

、

其巓、顏曰曰虛、赤!第二卷

六九四

彥禮來需其記、夫甘脆既悅口有數、君子之雅也、

則欲緻美以適其體、緻美既適其體、則欲壯麗以優其言不妄發、々無鄙陪、君子雅也、飲酒温克、不失威

居、壯麗既優其居、則欲車馬以曜其行、四物既已備|儀、君子之雅也、小人反是、輕脫浮虛、以爲雅者有

矣、則欲長生久視以飫其樂、甚哉人之無極也、是以之、矜夸詈罵、以爲雅者有之、沈湎酗蒚、以為雅者

秦皇漢武、日與方士游、欲與美門亦松一相遇、終身「有之、酣歌狂舞、以爲雅者有之、於是君子以爲俗、

惑而不反也、夫公子於彼四者、無所不備、然則公子「忌之惡之、訾之擠之、豈不戾哉、夫殷紂為靡々之樂、

之名其亭、有秦皇漢武之意耶、吾聞公子爲人穎敏、 北里之舞、多聚野獸飛鳥、狗馬奇物、以酒爲池、懸

崇尊儒学、日與國之俊秀周旋徵逐、夢寐周公孔子七-肉爲林、牛飲者三百人、使男女裸以相逐其側、由小

十子之徒、則又何暇願與美門赤松相遇哉、況公子之「人觀之、則豈非所謂雅*哉、雖然、後世言惡者必稽

明、足以燭其所以爲惑乎,夫君子雖不肆于物外哉

時間攀名山崧嶽、以陵大虛之香茫、御風来雲、翱翔

焉徘徊焉、以觥心胸之結矣、是君子之樂也、公子其

有取于此乎、彥禮曰善哉、說君子之樂也、使人飄々

生陵虛之意、是爲記、

有序、言語

有度、作事有法、一進一退,一趦一拱、無不有節、

以閼人之放蕩漫敖之心、由小人觀之、則豈非所謂俗

|者哉、雖然、後世言善者稽焉,因是觀之、小人所以

爲雅者、君子之所以爲俗也、小人之所以爲俗者、君

子之所以爲雅也、口口爲人聰敏好雅、名其齋曰雅、

余乃辨君子之雅與小人之雅、以爲是記、

西溪諸勝記

雅俗之說古所無也、後世好事者爲之、雅蓋謂不失其

正也、俗益謂沉其汚俗也、今也世漸衰人漸薄、物失

其名、名違其實、彼之所以爲雅者、此之所以爲俗也、 古之好山水者、必索之輸蹄不及地、或中宿而至、或

於是議論紛紛擾々也´然則雅終不可辨乎、曰否、雅有「再宿而至、飫視飽靚而後歸、吾以職於學也、日赴是

二、有君子之雅、有小人之雅、夫居家整齊、執事貞 恪、山水之樂、其已巳乎哉、曰不然、近郊之外、勝

梁先生遺稿卷之六

伊敷之山、在麑城之西、躡巉踰巇、扳搓夤緣而上者

揚彩園記

山水、故陳君子之出處、以爲是記、

四三里、使人超焉如出倒景之外、花城公子嘗小游于

六九三

可謂善處者也、然此地勝如彼、則余恐異日不能割愛

陵虛亭記

潤之德而已、何在悅人耳目、宜哉世俗之有時而畏惡

喔咿嚅喨之徒、膠於出者也、君子不取焉、荷蓧耦耕、 有時而悖怨也、大夫島田君之園、東南暢焉、宜於月

抱木負石、膠於處者也、君子不取焉、君子一出一處、 夕、余題其扁、曰揚彩、取諸謝莊、夫日風雷雨也者、

唯其所遇、無不自得者、境野君夙命親近、毫不好阿|昭々者也、其德大矣、然人猶溺於其一身之適、以生

諛之言、既而遷行人也、紹介無失、階祚甚整、然有 畏惡悖怨於其間、況細於日風雷雨者乎、可不戒懼乎、

不屑於懷者也、浩然辭職去、可謂不膠於出者也、今「若夫園之勝、月之美、大夫之雅尚也者、諸君子之文

得此地、扁曰槃澗也、手不擇卷、且其所著數千百言、 盡矣、余亦何言、聊書此以爲記、

境野君卜居笙邑、々何以得名、或曰此土出竹、可以 目耳、夫月之出也、光華燦然、浴於四字、大虛得之

中笙也、或曰、昔時善竽者處焉、未知孰是、地甚爽 寥廓、山丘得之爵隆、江流得之瀲灑、卉木得月以爲

愷、前有寬閑之野、後有岑蔚之丘、有水名曰錦、環 粉采緣飾者、不可枚舉也、然則月也者、貴人之觀者

堂之趾.逶々迤々焉、有潭曰戈、有巖曰硯、皆取諸「也、是人之所以愛、而所以未嘗有畏惡悖怨也、夫日

其象,其他喬墮帖屺之山、或遠或邇,皆献技於前、 之嘆々、風之烈々、雷之褫々、雨之冥々、有戾發

使人酬酢不暇、夫一出一處、君子之道也、進取奔競、

槃澗亭記

踈也、今日余與諸君游、愛其樹石、蔭焉踞焉、優游忘|夫日之曜物也、其德大矣、然人有時而畏焉、風之戾

歸、嗚呼數耶、又且他日屢來、一如秋夫子之故、則一物也、其德大矣、然人有時而惡焉、雷之發物也、其

樹也石也、將欣々乎生色、然余之文辭於夫子也、猶|德大矣、然人有時而悖焉、雨之潤物也、其德大矣、

如玦之於懸藜、則樹也石也、其將有快々之意、

然人有時而怨焉、獨月也者、無德於物、而人甚愛之、

未嘗畏惡悖怨、是其故何、凡人之所愛者、在快其耳

壺水之尾爲高梁、距城二十里而近、先公賜墅於澤村|既歿二十餘年於此、未聞文人騷士來游於此者、何其

數存焉、慈眼菴多嘉樹危石、秋夫子甚愛之、蔭焉踞

焉、諷誦哦吟以樂焉、率無虛月、何其遇數也、夫子

原校下作何其涑影之子

冷亭記

行投袂、以過其門、豈有能至者哉、由此觀之、則求

友之道、在善其聲耳、堂在茂樹清流之間、勝景頗多、

余舍而不錄、戒以此言、

原枝以下可推之銃董遇之媒

慈眼菴壁記

或旦暮遇之、或千載一遇、何其踈數之相懸也、蓋有

友以成其

材者、不可枚舉也、故先聖立以爲五典之一、然則朋 夫人之所輕、莫如瓦磚、瓦磚果可輕耶、安樂寺廢瓦、

友之爲倫、豈不重哉、大槻士毅扁其堂曰嚶鳴、蓋取 石氏某得以爲研、鞏固緻密、可比銅雀、人皆珍之、

諸求友之義、其志豈不美哉、傳曰君子善其聲、而千 瓦磚豈可輕乎、嗚呼安樂寺之始建也、豈有珍之者乎、

里之外應之、士毅苟能養德愼行、以善其聲則天下豈 世之相距八百餘年、而後人始珍之、然則安知今之

有不應者乎、士毅苟不善其聲、則鄕曲之士、且將疾|磚、不珍於後世乎、莊周有云、芬苛有時而帝、善哉、

之天造、分嗣君保君、引余於其亭、四顧暢然、風生

於衣袖之間、余因題曰冷善、蓋取諸列御寇、

安樂寺瓦研記

周文王得鬻子而友之、漢光武得嚴子陵而友之、魏文

嚶鳴堂記

夫之愛昭曠也、取之於天造、夫人之所好各異、猶如

其面然、何必仇視、雖然、使余有取焉、則從今大夫

々膾炙於人口、今茲仲夏、有人得石植於靈岩洞、款|氏、有嫩卉茂樹之美、有假山泉石之麗、先大夫搆亭

曰槍垣女、啟而觀之、則儡然瓦偶人也、蓋棺垣所自於其中、奧邃可戀、亭今己廢圮、今太夫除卉木廢泉

造也、腐帛朽楮谪於其中、蓋其所作爲之歌也、自檜一石、架亭於假山之巓、頗多遐矚、於是崧岳培堞,川

垣沒、九百年於此、豈不奇哉、是所謂冀千載之遇者耶゛｜原林落之勝、可坐而領、使人飄々有凌雲之意、蓋愛

蓋其所藏、世之所謂檜垣集者耶、既已朽腐不可知也、 昭曠也、嗚呼先大夫之喜奥邃也、取之於人巧、今大

惜哉、

唉得下子夏而友之、孟獻子得樂正求牧仲而友之、一

此一彼、相以成其德、其他賢能之士、待六九一

樹梁先生遺稿卷之六

有客曰、此院不唯宜雨、又宜月也、雪也、余曰羲御

方馳、求月之皓、不可得矣、時未祈寒、欲雪之霙不

可得矣、余今得雨足矣、客又曰、不唯月雪、尤宜霖

潦、雨久不已、流水氾濫、則數千萬頃之由、變作一

大湖、於是丘山聚落、一浮一沈、遠邇蔭暎、使人難

爲懷、余曰夫霖潦民之害也、國之秧也、君子不忍觀

以爲樂焉、嗚呼世見人之患、以爲已樂、知已之逸不

|知人之艱者、比々有之、可不戒乎、遂書之於壁、

檜垣像記

盆石記

一瞬萬奇、勝景不啻、余不覺躍然喜曰、美哉雨也、

故惡之、甘竹也者、竹之君子也、我故愛之、余曰、

夫言辭之甘者多詐、器械之甘者多榕、苦竹之謂小人

則似、甘竹之謂君子則我未得其說、曰傳不云乎、甘

受和白受彩、忠信之人可以學禮、由此觀之、甘之與

白、忠信之類也、忠信之人非君子何、余爲之絕倒、

不愛苦竹何、或對曰、苦竹也者、竹之小人者也、我

或好植甘竹、余謂之曰、枝葉與苦竹相似、節簳與苦 乙巳之秋、余游釋迦堂後院、前有渺茫之田、側有岑

竹相似、其得風也瀏亮、得雨也麗艷、得月也嬋娟 蔚之丘、遙山遠落、一高一低、或椅或狐、口伎於此

得烟也蓊鬱.亦與苦竹無有異也、然子獨愛甘竹、而「余縱目良久、天忽曀々、雨從西來瀟々也、丘山聚落、

釋迦堂後院壁記

甘竹記

斯石也、余善其言、遂記、

主人善盡繪、余名其堂曰後素、主人起拜、曰是子命|在泰山之巔、則能出雲下雨、以澤萬物、此我所以玩

我以忠信也、

余友某得一盆石珍之甚、余見而謂曰、子志簡大、余

信之之日久矣、今何齷齪玩物之弊、一至于此也、曰

霡々霂々籟々沛々、草木得之滋碩、黍稻得之潁苞者何、 夫物必有遇、或旦暮遇之、或千載遇之、其得之於旦

曰雨也、何物成之曰、忽乎攤乎者耶、曰忽乎搖乎者、 暮之近、非不奇也、得之於千載之遠、而後可以見

何物成之、曰傳曰觸石而出、膚寸而合、不崇朝而雨 其奇也、故古之立言者、不知於一世、則藏之於名山、

天下、由此觀之、則其石耶、某拊髀曰、一拳石之小、以冀千載之遇矣、檜垣妓也、善和欲、既沒、其什往

曰法師疊石爲山、鑿土爲水、清幽明媚之狀、如出於「人之聖哲庸愚、幼長卑尊之狀、無所不邈也、欣々勃、

天者然、夫烈風不能動焉、疾雷不能振焉、物之凝者「戚々侃々、戰々招々之情,無所不寫也、故善畫者、

莫如山也、千轉萬軫、唯其倨向、物之通者莫如水、 必博識多通之人、而有磅唐盤鏈之氣、因此觀之、則

人既有山之凝、而有水之通、則何業不廣、何志不遂、 書也者、非無害、又有益也萬々、故余有采於畫、

不象也、加之

蓮政寺假山水記

者也、中川子樸嗜讀書、殆忘寢食、余迺名其亭曰樂

只、

有益者、夫盡也者、日月星辰、江海山岳之著、無所

後素堂記

者之樂、今日亡之、今日之所樂、明日亡之、然則樂 夫好小技曲藝之人、其心必怪異偏固何也、是其生平

終不可常得乎、曰否、上繙典謨、下誦諸 子 百家之 所見隘陋、所識局狹也、故子夏氏有言、曰雖小道必

書、則日見其所未見、日聞其所未聞、日嘗其所未味、 有可觀者、致遠恐泥、君子不爲、是以君子燕居之間, 日修其所未有、其樂滾々而至、源々而來、未始一日一寓意之樂、不可不擇也、其擇之也必於無害者、必於

不樂也、然則天下之樂、莫樂於讀書之樂也、樂之真

之水不可以爲小、唯其心之有取焉、

大亦可以小、小亦可以大、故我來優游於此側、不知

其假、遂記、

不可以爲小、鑿士六九〇

肥後文獻叢書第二卷

未始開之、有清越秀妙之曲、未始聞之、率然聞|師其有監于此耶、夫須彌之山雖大哉、由至大者觀之、

之、則樂焉、若夫恒于此則否、有良醞美漿之飲、未一則一拳石、奚擇一拳之小、由至小者觀之、則亦須彌

始嚼之、有肥腩雋永之肉、未始噉之、率然醌之則樂|也、無邊之海雖潤哉、由至潤者觀之則一勺水、奚擇

焉、若夫恒于此則否,有高厦曲房之宅、未始居之、 -勺之小、由至小者觀之、則亦無邊也、故疊石之山

有勢御陪侍之人、未始役之、率然居之役之則樂焉、

若夫恒于此則否、由此觀之、人之所樂者在所未見、

在所未聞、在所未味、在所未有也、夫其所未見、所

未聞、所未味、所未有、不可常得、不可常得、則昔

不象也、鬼神魑魅、罔象罔兩之幽、無所不象.析柟

豫樟荆榛茅棘、凡百卉之華賓、無所不象也、鋌走

食脰鳴掌聽之蟲、凡氣類之有知者、無所橫梁先生遺稿卷之六

六八九

侍醫岡松子潔構亭于白河之崖、顔日吐月、余與諸子 而率然見之則樂焉、若夫恒于此則否、有恢偉詭異之

吐月亭記

樂只亭記

其中、飛鷺翔雁、飲牛牧馬、都人士女、田夫野婦之 遊、俯瞰則流水泓泫、石瀨之聲濠々濯々、足以洗耳、

一往一來、如展盡岡然、人苟憑檻一眺、則使之心飄|有鳥汎汎、有魚潑、似與人相忘者、仰望則衆山繚

々乎、如身已換骨、以到羽人之宮者、若夫春則翠柳|繞、遠之則何蘇大矢多原釋迦之峯、近之則龍田雁回

維々、紅桃爛夕、與流水相蔭映夏則浮凉濕衣、熠熠 飯顆甲鑽之嶺、嶄嶷龍炎、屈盤逶迤、浮嵐流雲、湏

來集、秋則霜葉照眼、璧月如流、不啻如今日之勝云、 臾異觀、足以悅目、加之有廣莫之埜、喬木矮林、脩

吾聞先大夫築園于此也、土脉既動、則視其耦堡、以|竹茂草、民廛梵剎、往々在焉、使人應接不暇、然主

知民力之足否、肅霜既降、則視其刈穫、以知年之豐 人之顏、無取于此、余心窃疑焉、既夕、東岑吐月、

歉、又且使後世子孫、親觀其暴膚塗足、祈寒暑雨、 影在水心、微風一拂、爲璜爲圭、爲紫金蛇、變幻萬

日暮從事之狀、以知稼穡之艱難、豈唯爲憩息燕樂哉 象、不可殫狀、遠近之山、得月而縹緲深邃,民廛梵

夫大夫之當國也、既富之而又敢之、民蒙其澤也渥矣、 剎、得月而幽奇 其他長洲小渚、汎舟浮筏、行人去馬、

於是四方來取法、事聞於台臺、台臺辱目以良臣、白 爲之緑飾者月也、其愈於晝日之觀也遠矣、余於是脫

河侯傳台言、大夫將拜言之辱於江都、有疾不果、

然而釋、躍然喜、曰宜哉、主人取於力"以顏此亭也、

大夫爲人謙讓、不有其功、屢辭增祿而不受、世稱其 客曰、吾聞古人以珠比詞章云、人自謂握靈蛇、夫月也

賢、其將告老也、曰功成者退、天之道也、寛政四年、 者、珠之象也、主人固工詞章、刀圭之餘、遊憩于此、

上表辭職、不許、固辭乃許之、書曰臣罔以寵利居成 則必吐俊句以驚人、是亦非吐浔乎、余爲之鞭然、遂

功、大夫有焉、余於大夫之功業也、既見而識之、今「併録其言、以作記、

又遊此園、觀其屋廡之質而緻固、益欽其賢、戀々乎

不能去、遂書以爲記、

世之所謂樂也者、其果樂之眞者耶、非耶、今有絕嶮

激流之勝、未始見之、有珍怪奇巧之物、未始見之、

源夫人涖焉、 大詢公之爲世子也、五年夏四月涖焉、 爲釋迦文峯、飛霞縹緲、五色無囗者、爲五霞山、如

逍遙盡日、途觀群螢歸、公既襲封也、七年春正月又「狗之蹲者爲犬塚、有樹滋碩、森々然者、爲孤戍嶺、

涖、大夫手自烹茗以獻之、寬政三年致仕也、遂居以|如摶飯者、爲飯顆山、如累甲者爲甲鎖山、如積米囊

終天年、今大夫堀公相繼掌國政、亦時遊以宣其氣、 者、爲米囊山、右顧則雁回之山、邂逅辨盤、巖阿深

今大夫好學、間屢延儒雅、余與陪者數矣、然未得陪「奥之中、有縣泉、日亭午則見、如一匹練也、俗呼日

其野舘、某年分嗣君以遊倅爲用人、用人不得與國老 午時水、左眄則峻々極乎天、孤烟累炊者、阿蘇山也、

同宅、例也、故分僕從、別居野舘、余久聞勝、欲一 流雲來去、隱見出沒者、大矢山也、使人酬酢不遑、

寓目、用人職劇、且頻赴江都、遷延已十年、故未得「加之前有空濶之野、不知其幾千萬頃、近村遠落、點綴

先大夫堀公將營野舘、天明元年之春、相攸於白河漆|殆奪天工、風之定也、倒影鏡中、明媚可愛、有魚潑

川之際、既得之也、乃命土木、冬十月終功、扁吳湘|洌聚跳、有鳥頡頏群嬉、如與人相狎也、有樓三面皆

半江、玉山秋子所書也、蓋取諸杜詩、聽政之餘、時|達、階十數級、左折右轉以上、虎牙桀立、淺 巔

々遊憩以自樂焉、二年春二月、 靈感公及貴介妹淸者、爲朝來名峯、峯轡是寒、濃翠浮嵐、俄頃改觀者、

狀、水上翠樹薈蔚、鉸其枝葉、以作連巒攢峯之勢、

吳淞園記

凹者凸者、隋者圓者、妍者媿者、苔蝕蘚暈、奇不可

公子築舘於壺水之汭、問取以扁之、煥拜手稽首曰、 覽、今遷爲大監察、徙居于本舘之側、文化三年之冬、

其唯綠筠乎、公子曰、地多卉木、獨取之於竹者何、 命煩作野舘記、於是十二月初六、與二三子弟、倶

煥謹對曰、君子虛以受人、竹之虛中、有似君子之德也、 以得飽觀焉、割漆川之水、以注之于庭,其狀迂矣、

君子終身不變其志操、竹之翠然以貫四時、有似君子|恰如龍之蜿蜒也、風之至也、疊波爲之鱗、蠢動不止、

之德也、故君子取於竹、以脩其國、人亦比君子於竹、 架以石橋、灣々如虹也、水涯皆礫、大者如拳、小者

以美其德、詩云瞻彼淇澳兮、綠竹猗々、有斐君子兮、如雞之丸、往々安巨石、或坦然而平、或突然而峙、

終不可緩、此之謂也、公子曰善、

梁先生遺稿卷之六

舘記

綠筠近遠之山競

人壽幾何、子家必有剩物、盍斥賣以營之、云諾、 必待其廖、其使人也器之、必集衆能以濟其事、是以

數閱片園成、余命之曰瀨盈、取諸邶風、一日會諸子、 人得其庇廕、愛戴其德、若夫其爲人卞急編狹則反是、

余亦與焉、憑欄四顧、有熙々之色、有客進曰、我 譬之猶如小屋矮舍也、不能容人、故必罰其小過、必

今日被酒甚、願放言無諱、請品諸君園、村翁之業桂、 攻其小疵、其使人也必求其備、罵詈杖撻無所不至、

三面皆山、脩竹茂樹、清泉怪石、非不妙絕、唯病涓」於是人不得其庇廕、怨而並作、由此觀之、雖有崇高

々之流、不可容刀、李敎授之川觀、瞰長堤之远迤、 之位、苟無寬裕之德、則與居民一致也、可不戒乎、

控巨流之澎湃、來往之舟、舳艫相銜、非不佳勝、唯一故仲尼有云、曰居上不寬、何以觀之哉、

余云以君之澤、子無朝夕之虞、不可謂貧也、 也、能容衆人、故小過不詰、必待其改、小疵不問、

寛齋記

白河之崖、爲水囓者數矣、府興徒築之、且施長堤、

崖之辯齬也、堤外往々有游地、獨蝦蟆坂下頗潤、余

瀬盈園記

莫如焉、是亦各其志也、君子舍而不論、雖然、君子

不樂一日之樂、而樂終身之樂、不樂終身之樂、而樂

千載之樂、然則非得位而行、舍筆研而何、

之事亦然、非經苦熱之地,焉得到此清凉之境哉、於|秀、野亦寛闊、非不眼曠、唯病無智者之樂、辛助

是諸子欣然喜、賦詩屬文、窮日之力而後已、鳴呼世「之不窺、松桂蕉竹、薛々蓊々、非不深邃、唯病人屋

之人或撒網投竿以爲樂、或飛鷹逐獸以爲樂、或圍棋「四填、無延眺之美、獨此園巨流渺瀰、且甚清冽、可

蹴鞠以爲樂、或倡優歌舞以爲樂、自以爲天下之樂飲可嗽、浮筏行舟、飛鷺泛鳧、有揭者有屬者、有垂

夏被設賜之誤

釣者、有撒網者、有浣紗者、有浴馬者、宛如展畫然、

加之赤霄金粟龍田雁回之諸山、流雲飄霞、奏技于几

案之前、鳴呼美哉、天之賜也、我窃以爲吾黨諸園之

冠也、馬叟相然抃曰、他人有心、予忖度之子之謂也、

一坐粲然皆哂、因書爲記、

謂訓導馬叟云、子盍築園于此、以樂餘年、云我家|寬也者何居、謂寬裕有容之謂也、譬之猶如大廈廣廡

無資、病摻黷之水、不可濯纓、城助教之麗澤、續君之園、前有泉沼、後有畎畒、致仕大夫米公扁之一地氣清涼、衣袖之間、風冷然善也、於是顰者伸、眩

曰釣耕、夫釣耕也者、匹夫之事也、较君國之著姓也、 者定、喙者歌、呼苦者舞、使人飄々然、若換骨者然、

釣耕豈其處哉、曰不然、夫釣人定體潛心、懸三尺之|余謂諸子曰、古人有云、非逢苦寒、焉開梅香、是日

既而取道竹樹之間、氣漸蘇、行數十步、到靈樹院、

釣耕園記

恐肉靡骨融、化爲異物、同行者或蒸或眩、或喙呼苦、

念五、余將遊靈樹院、諸子或疾或畏暍、其疾者

亦遊於物外之流耶、夫一舉一息、人情所不免也、今 曲踊三百、其畏暍者、其言游支、其形蹙々然、其能

之爲吏者、有息於優樂者、有息於田獵者、有息於宴 軒然從我者、赤彥禮、横子稽、仲土粹、栗長甫四人

會者、有息於奕棋者、亦所謂張弛之道也、君子不尤耳、院在荒丘、距府城十里而近、踰段山道島崎、是

焉、雖然、若使君子有取焉、則取於優樂於田獵、於「日也天微陰、蒸熱蟲々然、鹽汗交流、衣盡濕矣、唯

宴會於奕棋者乎、抑亦取岩氏之諷詠乎、

遊靈樹院記

有得者、耕夫苦其四肢、唯力

是視、然後有秋、有似仁者之爲也、米公其有取諸乎、

且夫太公釣徒也、釣而不已、卒得文王、立功有周、

伊尹耕夫也、耕而不已、竟得成湯、專美有商、由是

觀之、釣耕豈可賤哉、詩曰、之子于釣、言緡之綸、

余願續君苟能積德累行、使人有緡綸之言、書曰、其

父墾焉、其子不肯菑耕、余願續君于公于私、夙夜恪

々、不廢其父祖之業、嗚呼、釣之與耕、其義大矣哉、

米公之扁、豈偶然哉、

夫俛首乎會稽參伍之事、終身僕々以沒、吏之陋者也、

入詠魚於獨繭之末、似思而在幽奧、既而觀其昭然者於後戶、則亦望外之樂也、

不可不記、

亭記

山邈矣、余於是相然而抃曰、美哉主人之搆堂也、蓋

時間闢後戸、以樂其反常也、余初遊此地、以爲其勝

昔者老耼爲柱下史、縱心於虛無之域、莊周爲漆園吏、

縱心於洸洋之言、陶元亮爲彭澤、縱心於松菊之徑、

是皆有超卓之志、以遊於物外、以自養者也、岩氏薩

之史也、日赴層次、恪勤不啻、其歸也諷詠於一亭之

中、訢然自樂焉、亭有入勝、遂扁曰八詠、嗚呼岩氏 六月六八五

碔梁先生遺稿卷之六

夫恒望乎危巘之嶺者、必願一臨乎無景之谿、恒遊達

齋權佐視作於河泯也、受館於斗城門牆之外、丘墳壘 奥之地者、必願一遊乎寬閑之梦、何也、樂其反於常

々然也、因扁曰壘々、余一日造焉、曰異哉子 之也、 也、今夫過草莽之居、有海錯之設、過郛城之居、有

權佐曰、異我扁者、非特子而已、然是我所樂也、曰|林泉之勝、則必愕然而起、訢然而喜、何也、出於望

敢問子之所樂、曰我性旁通多可也、儒生文士、醫人「外也、柏氏之亭在於島崎、余與諸子遊焉、石巖怪奇、

僧徒、其他技能之士、無所不交焉、今我職事鞅掌、 林木蓊鬱、遂如而深矣、既而闢後戸、則昭然而豁矣、

不能屢相見、以開唇吻、於是一日望丘墳、曰此壘 有麥浪菜添之美、有細澗碎礫之麗、而鞍嶽崴矣、蘇

壘々亭記

原校則之字恐慫

柏原氏園亭記

之、則偷也、其佗有兪位者、有偷祿者、有偷名者、 屠、讃瞿曇氏之妙、論裝什之文、其佗一技一能之士、

有偷勢者、之數偷者、子知惜之、而唯吾扁是憎、何「欲與之相見、則必向丘境而呼之、則其夜必與之相見、

其裕于彼、而likely于此也、余愛其辨乃入、主人嗜焉不 此我所樂也、余胡廬大笑、曰子之所夢果夢耶、今日

復言、余據梧坐、喜其居之寂、不識日之薄崦嵫、將

去、主人顎然曰、子亦今日偷我閑、

與子相對、果非夢耶、吾未之知、遂記、

薛字 作盱字

原校者之字恐慫貞吉按似未必慫

則閑也者以其道得之、君子不處、況其得之以偷盜乎、| 之中、豈無一儒生哉、倘髣髴來格、其夜必夢見儒生、

君子不飲盜泉之水、不入勝母之里、惡其名也、吾不上論齊魯之風、深泗之敢、下談古今禮制之壁、治亂

欲入子室、主人摻吾袂日、子之言法言也、噩々之言「之由、又一日望丘墳、曰此壘々之中、豈無一文士哉、

也、誰敢問焉、雖然、我有一說、願聞之於下風、夫尙髣髴來格、其夜必夢見文士、論左氏馬班之偉美贍、

源之 混 々者、洪爐者之有也、人皆私之、口我泉我 譚李杜陶謝之高奇攻緻、又一日望丘墳曰、此壘壘之

池、是非偷乎、林之蓊々、洪爐者之有也、人皆私之、 中、豈無一醫人哉、尙髣髴來格、其夜必夢見醫人讚

日我陵我阿、是非偷乎、今夫王天下者、日順天應人、 赭鞭之功、論和緩扁倉之技、又一日見丘墳、曰此壘

自我觀之、則偷也、得一國者、口兼昧推广、自我觀 々之中、豈無一老衲哉、尙髣髴來格、其夜必夢見深

購也暫下恐佚不字

二三友朋浮游鼇山、得一園亭、扁曰偷閑、主人

以冥晤、則我扁此堂虛哉、余則稱善者三、謂之曰獨出邀、余謂主人曰、爲人臣者臣之職、為人子者有子

闕劉伶可憾耳、主人曰耽乎鞠蘗、遊乎昏冥、視四貴」之職、爲人弟者有弟之職、君子焉得閑哉、且吾所日

二豪、猶如果蠃與冥曦、則別有人存焉、不復與言、 蓋 誦、曰君子終日乾々、又云君子所其無逸、由此觀之、

偷閑園記

或以爲非吾有、陷然不樂者、皆不免爲齷齪之徒、

遊竹林菴記

非吾有哉、況我礪吾墨、我銳吾筆、鋤其谿衍蓊鬱潺

觸而能轉、進而能達、智者之所資也、子之所樂其在

挺|天下之勝區秀地、非權貴之有、則浮屠氏之有也、吾

乎其體、君子之所傚也、子之所樂其在於斯乎、主人|黨縫掖之士、非所得而企望也、然則山水之樂其終已

又揖而不言、碩々磴々、翩而不撓、碎而不墊、介者/矣乎、豈其然豈其然、我一遊其境、探其岫摩其樹、

之所守也、子之所樂其在於斯乎、主人又揖而不言、 漱其泉踞其石1則心暢然而舒、體翻然而輕、安知其

旣而噱々然笑、余怪而右顧、則扁其楣日忘言、

遊靈樹菴記

也、子之所樂其在於斯乎,主人揖而不言、綽々約々 主人自道也、

於斯乎、主人又揖而不言、矗々鼇々、虛乎其心、湲玲瓏之狀而囊之、是果吾有也、非人有也、然則天

府城之阪、有一草菴、扁曰竹林、余謂主人曰、入其 下之山水、無非吾有者也、我於山水之樂、豈不綽

境則不見寸竹、上其堂則若山若丘、若水若野、所蹰|然有餘地哉、然則爲權貴之有乎、將爲浮屠氏之有乎、

頗多、然其扁不出於此、而徒掲空名者何也、主人喊「我將何憾焉、且夫天下之物、無非造物者之有者也、

々然而曰、甚哉子之固也、筶峯之淑然、山濤之特識|今私之曰是吾之山丘也、曰是吾之泉石也、自造物者

也、牧野之豁如、阮籍之曠達也、富丘之蔚然、王戎|觀之、則亦猶鳥之爭枝而嚇、蟻之爭垤而哭乎、豈非

之才之雋茂也、芹水之瀏然、阮咸之器之清徹也、有可笑之甚哉、由此觀之、則或自以爲吾有、居々傲人、

茂松一株、鏗々鏘、如奏七粒然、是嵇康之廣陵散

也、有枯柳數樹、蕭々索々、如憂如泣、是向秀之聞

鄰人之笛也、我日與之六者、聚首連袂、把臂交脚、 余與秀、有

石詭而瑩、一日余過之、相然而抃、超焉而樂、謂主

人曰、嶮々袤々、魁然而大、寂然而靜、仁者之所體

六八三

日愚念、其居也

多樹石、且有山水之觀、余屢遊焉、愚念既沒、爲甲

裴氏之有、扁曰夕陽、然人猶或以愚念呼之、今茲庚

子之夏、余與諸子造焉、酒一行、言及愚念、余乃語

諸子曰、曩愚念之在也、余謂愚念日、今有人於此、

呼之曰愚、則彼必奮然怒、按劍疾視、以惡聲反之、

然則愚也者、人之所忌也、然子以自冒何也、日縣聯選

壷梁先生遺稿巻之六

村田生之居、左顧金峯、右挹錦川、有竹美而深自念、終烹其身、融衡之才也、不深自念、終其

身、由此觀之、則雖有儇知才能、不念則不能脫禍、

况吾昏愚乎、書云、惟愚念爲叡、我私淑焉、余曰敢

問子所以念者何也、曰念以窒慾耳、余逡巡而退、起

拜曰無以加焉、子未始愚者耶、將其始愚而念以作叡

者邪、嗚呼自愚念沒、二十年於此、其言猶在耳、遂

書以作愚念菴記、

愚念菴記

有一老叟、廬於府城之阪、問其姓字則未至者也、在昔王良善御、與街轡相忘、養由善射、 藥之章、是樹之愚者也、愧偉磋研之石、非不佳也、

與弓矢相忘、僚之於丸、扁之於輪、瓠巴於瑟、伯牙 然無出雲韶玉之技、是石之愚者也、我已昏愚、爲世

之於琴、是相忘以至其極者也、衛孔叔文子能忘言、 之棄物、日與此四愚者接焉、則我之以自冒不亦可乎、

故人不厭其言、閔子騫能忘言、故言必有中、韓非不「余曰、子申々乎居、愀々乎遊、似無思念者、然子以

能忘言、故作說難、身邃爲戮、田巴不能忘言、故一念自名何也、曰夫桀紂之侵也、不深自念、終喪天下、

日服于人、不能服其心、然則不忘言而言、言之未至「起鞅之智也、不深自念、終戳其身、信越之能也不

者也、忘言而言、然後可謂之言之至者也、由是觀之、

忘之時義大乎哉、是主人所以命其堂之意也、余則抵

掌曰、子言可記、何借余文之爲、乃書以與之、

薩人大場某命其堂曰忘言、同邦人赤彥禮來請余文、 迤之山、非不麗也、然無峻特秀拔之勝、是山之愚者

余曰忘言何也、蓋取諸淵明之詩、彥禮曰否、莊周有「也、遲緩亭居之水、非不深也、然無急汨激湍之奇、

言、忘足履之適也、忘腰帶之適也、夫能相忘、物之一是水之愚者也、薈蔚柯攤之樹、非不美也、然無紅葩素

原校由之下

忠言亭記

記

者爲

忠言蟠龍之狀者、爲龍峯、有氣辯々勃々、蘢蓯澎湖辛丑之秋、余携諸子及莊鶴二生、遊于采釣園、莊生「之艱難者有之、是周公所以有無逸之作也、後世圖藝

鶴生皆西肥人、未熟其勝、余則遠瞻近視、右顧左眄、穫于屏障、以戒子孫者有之、抑亦有以夫、今此園親

指點以示之、曰蛟巖凹然、如箭筈狀者爲筈岳、其頂|觀播櫌耘耔之勞、蓋先大夫所以戒後嗣也、詩云、貽

奎然、如馬春之可以受鞍狀者爲鞍岳、卉木蔚然、如厥孫謀、先大夫有焉、

、夫肉食之人、少長於深宮之中、不知稼穡

遊采釣園記

「余入

土則塡也、入竹則也、入蘆則笳也、是無象而有象

者也、風亦然、客曰唯々、遂扁曰吹萬、嗚呼蒙莊不

欺予哉、

將取華乎、夫取之於不可常得者、豈如取之於常得者 雲浦、泉流逶迤、有軀往々出曝者爲軀水、蒼々黄

哉、然則吾非取 呼風而何、風也者、朝而至、夕而「扶踈蕭殺者爲櫨山、葱々蒨々、蓊茸紛披者爲竹里、

至、無不至時、其至也調々焉、刁々焉、發々焉、弗 彼爲鳶丘、此爲鮒場、彼爲笛田、此爲角浦、彼爲八卦宮

々焉、其入竹也瀏々亮々、作鸞鳳之聲、其入松也锵 此爲霧露園、彼爲花子叢、此爲道士家、二生唯々、日

々鍠々、如笙竿之音、其他觸石偃草、激水轉凹、灑 美哉奇矣、使人應酢不暇、俯臨則稻田數十萬畝旣

帳帷拂戶闥、勃焉而怒、綽然而解、其聲萬狀不可端倪、 苞且實、今玆有蟊害、救不甚稔、田畯與丁壯十數人、

客曰、夫月也雨也、雪也華也、皆有象若風之無象何、 衡從于旗畝之間、刈之一畝、以計其實、有蹲者、有

余曰惟無象、是以有象、夫物之有象、象而已、豈能「柠者、有呼者、有麾者、有執度者、有提斗者、有刈

有他哉、獨風則不然、因物成象、其象豈可枚舉乎、 之者、其聲銍々然、有簸之者、其粃揚々然、搔首者

客曰敢問風之因物成象若何、曰風也者、天地之氣也、二人、攢眉者三人、仰天而歎者一人、以其險歉也、

猶如人有呼吸之氣、夫人之氣無象、入匏則笙也、六八二

爲之憫然良久、既而暮色蒼然、烟靄四布、鷺烏草

飛、一白一黑、如碁之在局然、聊可以慰懷也、於是

命酌取醉、余從客謂諸子曰、農夫之業、深耕疾櫌、

霑體塗足、旦夕從事、未嘗休止、而有水旱蟊賊之憂、

豈不痛哉亭六

揚彩蓓映、不可得也、大虛無滓、欲雨之瀟々霏々、不

然、

A 幽竹居記

可得也、陽之煦々、欲雪之溏々雱々、不可得也、陰

之迈々、欲華之燦々、不可得也、然則月雨雪華、不

可常得者也、吾何取、取月乎、將取雨乎、將取雪乎、

六一

其果淡於聲色耶、其果薄於百戲耶、未可知也、聊書「世之言勝者、在月也雨也雪也華也、曦御方馳、欲月之

以俟他日之斷云、

記

吹萬遙見於積蘇之間、軀泉之流、近繞丘趾、新々曲々、

遊赤星氏園享記

時而不改、有似君子之操、草先生其亦有望于君耶、

豊翅草先生、余與二三友朋、亦皆有望于君`也、君

彝其勿忽焉、是爲記、

、

嗚呼甚矣、人情之趍於縱放、就於戯慢、嚮於侈靡也、 不可枚舉也、此亭之觀可謂富矣.然主人不取於此

今有人于此、試於稠衆廣坐中、大呼日、吾今作雅、 扁以幽竹何也、易曰、虚中而應、苟不虚中、則其應

有敢淫於聲、軼於色者、不得與斯爵、蓋去者十二三、 物也、不能無貉、不能無貘、則視而或不得其視、聽

又大呼日、有敢溺於奕於博於凡百之戯者、不得與斯 而或不得其聽、然則何足與言奇勝偉觀哉、夫物之虚

雺、蓋去者十五六、又大呼曰、有敢賁園華室、延石|中莫如竹、苟能體竹、則天地間之物、無所不應、夫

引水、以極侈靡者、不得與斯饺、蓋僅有存者、由此「然後可與言奇勝偉觀矣、善哉主人之取於竹也、主人

觀之、人之不淫於聲色、溺於百戯、沈於侈靡者幾希、 賢而好學、有公綽之孝、又有黔牟之仁、國人嘖々稱

赤星氏以貨雄於一鄉、何欲不得、何求不成、余今遊「之而不置、蓋亦虚中之所致也、主人爲誰、國之著姓、

其園亭、觀竹蓄茅次稻田菜圃、無他造爲、喟然歎曰、氏家君字某也、
、

恐冨作如爲此字世之

先生扁其堂日叢松、夫松之爲樹也、菁々葱々、貫四

似綀或龍、爲此堂故設之然、言山則閼曽瞿曇龍貓鞍

筈俵飯之峯、或近或遠、或低或昂、一顧易容、一瞬

改觀、加之側有蓊鬱之林、前有寛曠之埜、旅雁晨息、

如烟海然、其佗培塿潦豬、民落市廛、緣飾勝景者赤星氏非世之侈靡之徒也明矣、雖然、余未熟其人、

亭距城陬三里許、有丘隆然、締屋于其上翼然也、余彷

復於其庭數匝廼入、唔焉良久、日言水則桑湖鑑梁先生遺稿卷之畎叭之間者則不然、其所日接者、素璞之人

吾則以爲其子孫必將昌榮、何則天之報於人也、有速 也、恬澹之人也、優游自得、似有餘間者、且其居也

有不速、豈可概哉、余之同寮辛先生、扁其堂曰積善、 前有莽蒼之野、後有唅崍之嶺、徘徊翺翔乎其際、瞰

分嗣伯彛請記于余、余日善哉、先生之扁也、孟子不 清泉囑怪巖、顧美卉眄異木、以悞其心目、我見其隱

云乎、雞鳴而起、孳々偽善者、舜之徒也、先生晨興、 之爲其隱也、由此觀之、君子之欲隱於醫者、不可不

誘掖後生、三十年于此、辟之物則後生未視之兒也、 擇其所也、宮君彛在學也數年、學成而歸、其家世以

先生顧之撫之、鞠之育之、且其沈痾痼癖、迷而不反 醫爲食、以故不可改其業、夫君菀之業醫也、不於城

者、先生獎導之鼓舞之、大者足以供國用、小者足以市之際、而於畎畝之間、則可不謂能擇其所者乎、艸

原校此之下恐既其行二字

伍、逐々望々、唯鼻息是仰、我未見其爲隱矣、獨醫

天之漠々、其有知乎、抑無知乎、仁義忠信之人、仰|焉、醫人益於人也、不亦大哉、古之君子其隱也、於

不愧天、俯不愧地、而钝邅伶傍、或不免饑寒、或不一斯二者、嗚呼亦有以夫、卜姑置是、今我見醫之在於城

免死亡、天果無知乎、書云天道福善禍淫、不可改也已、市者、或顛飋趍走、不敢暇食、或與倡優耦、與滑稽

今有人于此,其行暴戾淫泆、而未必及禍'吾則以爲

起

積善堂記

非唯人役物而已、物亦役人、是不可不知也、天明辛

壬仲夏十有六日

卜之良者、與人子言則言孝、與人弟言則言順、使之

叢松亭記

於物、陷目於物、一身爲之羸、是爲物所役也、然則

獸蟲魚、無非物者、然人之靈也、就物於此、移物於 獨淑其身、先生之爲善、豈不大哉、吾聞先生之祖日

此、致物於此、弄物于此、以供之于己、均是物也、 靜菴先生、考曰雲岳先生、皆爲教官、然則辛氏之爲

而皆爲人役、人之於天地之間、其是貴哉、余曰然如 善、非唯一世、豈不積善之大者哉、雖然、報之速不

子之言也、雖然、子知其一、不知其二、世人之溺耳|速在天也、非人所得而知也、先生豈求報者乎、

激奮興起、以遷乎善、卜之益於人也、不亦大哉醫之良

者、能祛人疯疾、腿人慘苦、使癯者澤焉、使癈者其子孫必無孑遺、有人于此、易良慈仁而未必享福、 之在里閭六七九

焉、呪植茗于其園、灌焉培焉、護養之謹、 夫牧童之一往一來、皆獻伎能于此、不可殫記也、有

可不謂嗜茗者乎、世今有利休氏之道、其室如樸而文、客歎曰、夫人也者物也、曰山水卉木、風雨雲雷、禽

原枝其之下疑有字

並陳、則人々皆必舍蔽、而取肉者也、苾芬甘美之婿、 風之生也、锵然而鳴、竿邃之音、如鸞鳳之聲、亭所

爽恬澹泊之茗、二者列設、人々必舍茗、而取者 以得名也、余又爲之一抃、左睨則市廛基峙、皆見其

乎畦間而不見、斯日也朝雨一過、水爲之漲溢、途致

謂之嗜可乎、夫蹄喙鱗甲之肉、蘋蘩芹蒲之蔽、二者|此觀、余又爲之一抃、右則綠竹萬竿、矗々然也、

恐暈之誤

原稜此四字不可解少得再考

原酸茗也者之下恐,古者二字

君子有所嗜邪、無所嗜邪、人之在於天地之間、與蟲

出黌南門、西行數武、又南折行數百武、又西折、則

岩先生茗園記

遊一日亭記

於水之謂乎、

相同按此記未脫稿蓋

其器如唏袀躪彨場是

無所不釣、其采之也、禮以爲筐、幣以爲筥、採而用

之、其釣之也、幣以爲綸、祿以爲餌、釣而用之、國

無遺材、野無遺能、先公之意、蓋在于此、荳翅於山

何擇、人之於物、亦猶如蟲之或就蓼、或就苍耳.所

以不能無所嗜也、是以文王昌歜、孔子薑、齊王雞跖.

屈到芰、聖賢庸愚所不免也、夫嗜也者、人之所同嗜

而嗜之、未可謂之嗜也、人之所不必嗜而嗜之,而後

楛而珍、陳設有法、舉錯有儀、是嗜茗者乎

源駮玩嘟鰭茶

抑亦所嗜、在於茗外而存乎、余未知、下闕

| 黼頌|石磴數十等、剝々然也、余與諸子拾級而上、茅堂整

然、是爲一日亭、蓋取諸王子猷、地頗爽塏、眺甚

暢、岑然于西者、爲小金峰、有雲出焉、浮々然如氣

之生釜、既而忽々刭々、溶々隔々、一卷一舒、一

澹一濃、衆嶺爲之異態殊象、間不容瞬、余爲之一抃

可謂之嗜也、茗也者所無也、陸羽作經、盧同作詩、 曠然于前者爲揣摩垫、有水過其際、蜿蜒遴逶、如一

天下翕然貴茗、施及吾域、於朝於夕、甞之啜之、以「匹之練、斜曛來射、晃々然使人目牛墨、此水 潛行

代水漿、凉醫之飲人々無不嗜焉,然則先生之於茗、 也、然則世人之嗜茗、不可謂之嗜也、獨先生則不然、 薨堊壁、役々皚焉于翠樹之際、亦一奇觀也、余又爲之

與伯禹同惡、唯茗是耽、雖有桂醽哉、雖有佳釀哉、 一抃、其他林園村落、浮屠祠社之狀、翔禽游獸、樵

皆截然不顧樂也、

館之成也、花城公子詠扁于左右、左右曰、門墻之外、 處亦一樂也、雖然、出之與處、既已異歸則二樂不可

華卉甚多、盍取諸華、公子曰、卉木之英、綺然麗矣、 得兼也、壺水之麋、龍山之隈、有園莊扁日采釣、米

燁然照矣、我非不愛也、雖然、我意不在此也、左右一主營之、靈雲公名之、蓋主既有春陽夏雨之樂、而時

曰、滎廡之下、美石累比、盍取諸石、公子曰、土壤|々來遊于此、則又有采於山、釣於水之樂、二樂並得

之骨、斫然堅矣、瑩然輝矣、我非不愛也、雖然、我合存而不戾、可謂奇也、先公所以賜名之意、蓋在于

意不在此也、左右曰、館面于寶字峰、盍取諸此、公 此乎、或曰、古之賢相良弼、務在於采材釣能、材能

子曰、寶字之峯、崧然高矣、盤然大矣、出沒隱見于之所在、巖穴也艸莽也、市井也縲泄也、無所不采、

明霞館記

夫君子艱逸失得、無入不自得也、故出則體羣臣子

記

采釣園余聞之爲記、

左右曰、俯則滄海無限、不知其幾千里盍取諸此、

公子曰、渤溟之水、漭然闊矣、淵然深矣、阜鴈之翔、

猶如秕之在箕、檣帆之一來一往、猶如緯之在經也

遊實成寺記

記

梁先生遺稿卷之六

海氣香靄之中、我非不愛也、雖然、我意不在此也、

肥後文獻叢書第二卷

余與諸子游實成寺、三匝其園、曰吾得斯竹也石也、 我非不樂也、雖然、我意不在此也、有客進曰、山海

山也水也、置之我城間之中、以徘徊翎翔、則足以了「之際、槙如日之在嵎、粼如銀之在鎔、一青一黝、一

一世矣、有僧進曰、竹則可移、石則可移、堰之柳之、 鮭一源、如玉之在幌、如鳳之在岐、或爲一幅、或爲

激而行之、則水亦可移也、山則嶷然屹然、吾不知其「百道、不可爲狀、盍取諸霞、公子曰善、邃扁曰明霞、

所以移之也、余曰善琴者移之于粒、良薔者移之壁

巧築者移之于盆、能文者移之于筆、山豈不可移哉、

僧赧然無以應也、余視其赧然、自悔我涎、口在昔愚

公移山、余亦愚之徒也、僧於是解顏笑、乃相共滿引、

赤彥禮云、是民、嘔於春陽、育於夏雨、物皆蒙其澤矣、處則安步

恬體、采於山釣於水、優游以消日矣、出亦一六七七

橫梁先生遺稿卷之五

孔鄭二本、世儒論其優劣、其言紛如也、本之則皆是

聖人之微言、記傳之人不同、故有小異耳、何必崇此

失題

下之老也、先生也者、我北鄙之人也、敏而好學、不

屑爲一鄉之德者、於是出遊于國、又不屑為一國之德

者、於是東游京師、以道自任、孜々勉々、踐履匪懈、

四十餘年于此焉、當今之時、若明天子索輔世長民者、

則非先生而誰、加之耳順之上閱三旬、豈不天下之老

哉、今將壽天下之老、豈可不致敬哉、客曰善、遂以

德足以蓋一國、是一國之老也.德足以蓋天下、是天一以弁卷端、

知木村子好覈此經、吾是以知之、田代生曰善、後

得而開乎、曰可也、夫德足以蓋一鄉、是一狐之老也、 五六日、來責余文、職事鞅掌.未暇搆思、聊書此言、

解字當作烘字

文、有客來曰、甚哉子之敬先生也、肅々乎、我未面 而黜彼、田代生自紀州歸也、齎鄭注正誤來、曰紀藩

先生、蓋先生之博、上之墳典、下之稗官、無所不窺、 學生、木邮子自幼攻經籍、最好覈孝經、是其所著也、

無所不記乎、煥曰、先生之學非不博也、然吾敬先生 請先生之一言、余乃一再閱、大劍礫括無遺、異日

不在此也、曰蓋先生之文、浩如巨浪、煒如英葩、沂 謂田代生日、木村子其孝子乎、顧必孝子也、生起答

洄周漢、提挈韓柳乎、娯曰先生之文非不麗也、然吾 曰然矣、如先生之言、木村子視聽於未形無聲、鄉里

敬先生不在此也、曰先生之辨、如風雨之集、如江波|稱其孝、千里之邈、溟海阻之、先生何以坐知其為孝

之流、並駕宰端、藐視田騶乎、烦曰先生之辨、非不 子、余曰、吾聞之歐陽子之言、曰視其所好、其人可

捷也、然吾敬先生不在此也、曰然則子之敬先生、可

、人民之衆也、唯數能辨之、其它出師制祿、凡百之事、 焕在江都也、西向再拜、正襟而坐、將草西先生之壽

天之高也、星辰之邈也、唯數能推之、土壤之廣也、

壽西依先生亭

算學小筌序

亦各吐其英拔其秀、足以供君子之覽、嗚呼、亦先公

唱導之澤也、

佚蕩、不可勝狀、余爽然自失、曰子之技一

何至于此也、所謂慕好凝而道成者乎、假分起五郎氏

于九原、則將曰之子咄々逼人、既而又齎其所著刀劍

或問、請序于余、其論娓々、亦足以發世蒙、余乃弁

以此言、

餘、魏偉唯々退、爲之廢鍛者歲餘、既而移居於江左也、復事

槖籥、覃思研精、掴損于斯技者、數年于此、蓋亦才 夫行之於千載之上、而千載之下、發憤興起、猶如旦

性之僻、有不能自己者、於是見余謝罪者數矣、近持 暮遇之、文之能也、故古人稱文載道之器也、且夫攻

刀一枚來、有如蒉之聚於漢者、有如虹之亘于天者、 經也、躬能屬文、而後竹破氷釋、無所凝滞、則屬交

有如現之將動者、有如藻之新吐者、其他文理錯綜紆「之業、豈可廢哉、然我隔一瀛海也、何異於居楚而學

采茆集序

刀劍或問序

不得不資於數、々之用大矣哉、然世人或視以爲賤賈

古人有云、慕好凝而道成、豈不誠然哉、隸首之於數、 人之業、舍而不講、先君靈感公憂之、建黌口口也、

造父之於御、瓠巴之於瑟、傴僂丈人之於承蜩、盖 置算師三人、以敎國子、我藩世祿家之有數學、自是

其才性之偏好、而不能捨、逐至於其妙者也、松村仲|始矣、牛島子亦世祿家之子也、自幼好讀書、尤精於

廉自少善相劍、又好鍛冶、之薩之攝之江、以其數、天明中爲算師、今著此卷、以屬剎阙氏、請序於

術、其所焠之刀、有可觀者、人皆稱焉、余獨戒仲廉、 余、々辭以昧於數、固請不已、余乃畧言我藩數學之

曰君子之道有遠者大者、何必區々事小技之爲、仲廉|興、亦由先公之烈、以弁卷首、

齊語、所以爲難也、故自古能文之士厪々乎也、靈感

公創頖宮也、命學生旁屬文、而聽政之餘、時問著作

以唱之、於是國中之士、勉厲刻意、事操觚者濟々也、

今聊采錄、題曰探茆、豈謂有能躋能文之域者乎、然

最字疑動字仳

、熙々然樂、相誘相最不知倦也、鳴呼亦君子

余既善季成之爲人、又追思前言、心乃戚々焉、不可一之爭哉、

密醫林蒙求序

然聖人有取何也、昔聖人劉木爲耜、揉木爲耒也、耕

之利、人將聽其比德之音、吾聞剡々之刀、不能自斷、

醜相陵、臨財茍得、拏摸而食、排擠而飲、其

能自鳴、必得珩者、牙者、蒸钏者、然後鏘然、由此「也小人、聖人惡諸、整齊和容、執弓搢矢、揖讓升降、

觀之、人之有爲、不在自爲、必有鐔霸緱粹之用、必以飲不勝者、其爭也君子、聖人取焉、夫爭凶德也、

有珩牙綦钏之任、然後可以大有爲矣、不可不思也、

分耦詩序

哉、是猶如劍之牛犀、玉之得君子也、人將望其投虛 以辭、遂題之於首、

必得鐔者覇者、緱者鞞者、然後劃然、赫々之葆、不夫在者一畝而休、二畝而息、不能竟五六畝、而惰慢脱

鳴呼、世之醫人、頦踼於此、奔走於彼、終歲僕々、 者甚衆、聖人憂之、乃耦耕之法、以其筋力、於是

以斃者有之、若其有餘力者、放浪飲食、沈溺優倡者「民告訴々然喜、相勸相勵、不知其疲、天下之穀穰

有之、其能超然不群者其幾人、余曩至江都也、得樋也、既而聖人弦木爲弧、剡木爲矢也、射者一發而厭、

口季成驩焉、屢相來往、季成善詩、居業之餘、獨坐「二發而倦、不能盡五六發、而惰慢解脱者甚衆、聖人

於一室之中、風际自適、非有卓趺之志、惡能如此哉、 憂之、乃作耦射之法、以鬪其巧藝、於是射者怡然

一日出一册示之、曰碩師老手、動口古人、然問之則「悦、相杭相競、不知其疲、天下之射者濟々也、器人

不知其何代人、又不諳其何等人、益無章亂之習、是 競斯激、々則勵、々斯有以大成其業、此聖人所以有

以白首茫然、我竊憂焉、故有此作、其於育醫雛也、 取于爭也、夫詩亦猶如射也乎、以靜默爲弓、以思索

未必無一助矣、余一閲之、則凡係醫事者、罔羅幾盡、 爲粒、以才鋭爲矢、以練脩爲决拾、而射漢魏若李唐、

可謂勤矣、余乃曰善哉子之造也,网雛果能熟之、則 亦猶如射之志于正鵠、雖然未嘗聞耦賦以其英華者

能成其羽毛、他日將一舉千里、季成輾然而哂、爾來 也、獨吾先生始建分耦之法、競其殿最、於是學中

五年、余又至江都、季成既沒、其嗣元貞屬序於余、 之作者梁先生姫周之盛也、民之俊秀、爲士若大夫者甚衆、先王使|磨歟、人欲其一割一佩也久矣、今兢蓮池俟命爲知廳、

之與鄉飲酒射禮、而不除其版籍、所以敢忠厚也、周夫知廳之職、闔境之事、無所不湖、其爲任也豈不大

吾黨驩焉、其學大進、是猶如劍之就砥礪、玉之得

送訓導池君序

猶如劍有鈍釣巨闕、玉有結綠懸藜歟、來游我藩、與

佞媚於人、邑人相聚曰、今師之堂廡毀敗、吾黨之罪 |夫鈍釣巨闕之劍、非得砥礪、則不能爲軀糧之文、結

也、於是經營之、無幾而成、是豈非德之所致乎、雖|綠懸黎之玉、非得惻磨、則不能爲鏘鏗之聲、夫旣砥

然、吾與師不同道、吾所謂德者、師以爲何、我所謂礪、則無不欲得牛犀而割之者、夫旣脷磨、則無不欲

愚者、師以爲何、師將東征、請言於余、余旣昧其道、得君子佩之者、蓮池莊元稱爲人雅而温、穎而幹、是

又將何言、書此以贈、

送莊元稱歸蓮池序

送豪潮師東游序

海中一苞土耳、余前見村天錫者、磊々不羈之士也、

今又有野伯盈者、從吾黨而游、其志膠々也、鳴呼、

撮爾之土、何能出此特拔之二子也、益天草隸江府、

政頗寬、與小諸侯米鹽之治懸絕、是其所以生二子

者乎、然則人材之生在治、而不在土也、是爲序、

之衰也道微、民起家致富貴者、則曰不歸故鄉、猶如

之地、不能出瑰偉碩大之士、是其數也、夫天草也者、

衣錦夜行、是不啻欲誇榮昌而已、蓋欲華其墳墓、飾

其宗族也、孝子慈孫有不得者存、悰川翁鶴礎人也、

以文學升、爲先公所器重、翁不以富貴自逸、時間歸

-鄉里、與其父老飲、掃其墳墓、恤其宗族、忠厚之意、

著稱一時云、蘭陵先生悰川翁之族孫也、亦以文學所

1

重於世、而池氏之瓜葛葭学、存于鶴礙者十有餘家、

今玆夏先生將遊鶴礙、蓋欲繼悰川翁之意也、嗚呼、

遠人所易忘也,故曾于云、愼終追遠、民德歸厚、先

生今實爲敢官、誘進子弟、而身行忠厚之事、其有補

于世也可勝言哉、

我肥之大浮屠以百數、人見其堂宇麗也、則智其僧、

見其堂宇敗墮也、則愚其僧、吾觀其所謂智者、傢媚

於人、固獲於人、可謂病於夏畦、由我觀之、則其不

及愚也遠矣、我嘗造豪潮師、其門魏々一其堂々、

世之所謂智者耶、吾聞師操行高秀、不請乞於人、不

遺稿卷之五

三

六七壺將歸也、諸君子皆既有贈言、獨先塊阜之土無大材、牛蹄之涔無尺鯉、福小之封、狹窄

送野伯盈歸天草序

原校野疑过

但馬人櫻井子良自少嗜學、博→群籍、最好言治術、

虛、亦猶毛利氏之子也、皆日受學蓮山、

余聞蓮山先生之名也久矣、未知其人、及見公虛、乃

肅改容、日而今而後得知山先生之爲人、詩日、維

其有之、是以似之、非先生有君子之德、二子焉取斯

在昔子濯孺子以尹公之他端人、知其弟子之端、今余

見其弟子之風、知其師之有君子之德、公虛將歸觴於

鈞耕之園、請文於余、余嘉其得良師、書以贈焉、

送櫻井子良序

見杵築溝公余又何言、無己則有一、鄒賢不云乎、國之本在

金有型、型緻則器隨緻、型楉則器隨椹、土有鈞、鈞 家、家之本在身、故在上之身、不可不正也、身苟不

槃則器隨槃、鈞蹩則器隨蹩、夫師也者型鈞也、不可「正、則以惡直方忠貞之士、於是偷浮輕脫之人進焉、

不擇也、余曩見崔人毛利泰元、其爲人敦而愷悌、今又一諛佞之士畦焉、投間觸隙、以導其欲、綱紀於是

送溝公虛序

其將有光於祖業、可不勉乎、

生否將何以振家聲.傳日大上立德、其次立功、其次立言、

今子善好學、志道也如彼、則行將立德、又旣鈞深探

賾、發之於文章、則是非立言者乎、然則子善之爲、

、今日願得片言隻辭之貺、余曰、子好言治術、

夫治國之方、不可不立綱紀、而舉衆職也、子既已知

之、余又何言、不可不省力役而薄税斂也、子既已知

之、余又何言、不可不量賦入而制費出也、子既已知

之、乎隕、衆職於是乎怠、教導於是乎廢、刑罰於是乎濫、

力役於是乎繁、租税於是乎重、不能量入以制出、府

庫於是乎枵、當是時國之未滅者幸也、譬之诺基趾而

厦屋、糧櫨粢襶之材、無所不具、墻江戶櫳之用、

無所不施、然雨霖之日、礎欹屋傾、不久將覆、

治術者、不可不知其本也、雖然、此儒生之常言、子

豈不知之哉、世之人務遠而忽近、馳末而忘本者、比

々有之、故聊陳此以爲戒耳、子笑棄余言、亦所不慱

也、子歸之日、若以余言、告之君相于燕間之次、則

爲幸也大矣、非所敢望也、

去歳來遊我藩、每相見未嘗不語及經世濟民之事也、

今秋九月將歸其鄉、余餞之于竹里之野、酒三行、

士良謂余曰、今吾梁先生傳曰、其人存則其政擧、其人亡則其政息、
周之盛也、 研究、肘膠於素者益數年、其爲人温而秀、又且善屬

既有其人、以任其官、以行其法、故率土之廣、萬民｜文辭、數千百
言、滾々而來、鄒賢不云乎、豪傑之士

之衆、無不蒙其澤者、其人也※何、其心既正、其身｜雖無文王猶興、其子善之謂與、吾聞子善之先、H賂

既脩、内之則刑于妻孥、友于兄弟、足以齊一家、外「屋刑部、有蚴王室、醍帝賜之寳劍、今猶藏其家云、

之則敬以接官僚、和以御屬隸、足以保百姓之謂也、 夫刑部之烈、赫々爛衣、世人所知也、今昇平百年、

若夫其心也辟、其身也裹、内之則帷薄不脩、懿親不 無雞狗之警、雖有雋異之士、無所㢲其功、然則子善

送渡邊德夫序

子安其所遭耳、

當今之時、通邑大都興於學者甚衆矣、問北所以成學、

送脇子善序

好學、且善綴文、時來講之於吾門、近受周官于吾友

齋藤氏、其志樛々然、曰嗚呼、周公既因二代、加之

以文、天下之事、盡備於此、今之天地、古之天地也、

今之日月、古之日月也、此法豈不可行乎今哉、余既

偉志與言、然唯恐不能本之於其人、故聊書此、以

北行、

己仕也、乃曰公事鞅掌、其已也、乃曰家眷多、是 人也、政何以行哉、昔時王莽安石皆據周官以取禍敗、

志之不立也、志苟立則妻孥團欒之中可學也、職務紛 賓姦喀執拗、非其人之所致也、善哉、程子日有關唯

曉之中可學也、簞食瓢飲之中可學也、呻吟苦楚之中可|麟趾之意、然後可以行周官之法度、淡海人渡邊德

、徒有其官、而無其

|諧、似是

原校薄薄真吉按曲微日講之外不超过示能也原校六七二

們後文獻叢書第二卷

原掖以前後之句考之戒信作乃

外之則官僚心睽、屬隸腹誹稍長則懈、乃日我有菀結之病、或日我無擔石之儲、其

學也、豐人泉公直自幼好學、既長不改、今也已仕、叉

有夫妻子母之屬、猶尙誦數思索、夙夜不懈、加之負笈

四方、見異人求異聞、唯恐不及、自非有特拔之志、

立不變者、焉能如此哉、他日其學之成也必矣,其名

垂後世而不朽也必矣、雖然公直豈求名之士哉、蓋名

者實之符也、有此實則必有此名、故仲尼日、君子疾

沒世而名不稱也、雖然窮達有命、不可若之何、達則

施之於事業、固不朽也、窮則獨善其身、亦足以不朽

則皆良師友之賴、小浦也者豊之鄙也、居民識字者幾

希、猶何望良師友哉、子善少長其中、奮然發憤、日夜

其學大成矣、於是交游愈益相親、山君「均是人也、或與草木同朽、或名垂後世而不朽、苟甘

不容口焉、夫山君之爲兒之時也、其在東都也如彼、 與草木同朽則已矣、若夫欲名垂後世而不朽、則莫勤

遊我藩改其節也如此、是猶馬之駿者前驕惡、而後歛 學、學之成不成、志之立不立之由、今人少小好學、

乎今泉公 序

送無偏帥序

上毛山叔瑟官於我藩、六年於此、今玆口口之春、東|於是乎言、

論也、

送山叔瑟序

諧乎、他日觀其一日千里矣、嗚呼、千里之駿.傑出

之士、不可與凡馬庸夫並論矣、此余平生所持歸省其親、余既以文相友善、餞之於道、日夫馬之駿

者、爲草駒之時、不羣衆駒、昂々然獨舉、跳梁於西|無偏師將赴瓊浦,余腹之於堂、又送之於岐、或日、

東矣、怒則蹶而裂石、嚙而靡竹木、狂辟不啻、其漸老佛之徒、子之所不取也、何獨於無偏如斯、其歛

長之時服之也、鼜而不止、控而不前、絕鞅挫銜、折一切々也、曰凡物有可取、有不可取、苟有可取者、則

轅泛駕、踶而旁矣、人不能制之、其歛諧也、舒則四 取之可矣,何必問其不可取者、無偏服浮屠之服、是

蹄均調、八鑾鏘々然、疾則追遺風逐奔電、一日可致|浮屠而已、誦浮屠之言、是浮屠而已、然覽其所著作、

千里矣、蓋山君爲兒之時、虐乎友兒、暴乎奴婢、驕 則清簡奇古、非浮屠所能爲也、是余之所有取於無偏

恣而黠、父兄不能制之、業己長而遊學江都也、不能 也、且也吾邦浮屠而善詩者、比々有焉、於文則漠然

無負其才氣、恃其辯給、矜其博聞、夸其强志、是以「無聞、獨有一無偏耳、然則余之悃々切々也、不亦宜

交遊或有不親者、既而遊我藩也、雖則改其節、如醉

飽之時、則雄辯捷給、以屈服人人、人皆社口委爾引

去、是以交遊或有不甚親者、處歲餘、飲酒不甚醉、

論辯不至華、其行漸脩矣,於是交游知其改節、皆盡

相親、處數年、客氣盡去、謙遜自守、言不妄發、其

行大脩矣、、有玉于此、泥塗疆之、惡泥塗而捨之耶、將取之

乎、有金於此、瓦礫洞之、惡其瓦礫而捨之耶、將取

之乎、余則取其可取者也、詩云采拉菲、無以下體、

此之謂也、遂書以焉、

送素慎勿與小人遊、

來求言于余、余乃書之以贈焉.

黑炙漸漬、則其終爲君子人也可知矣、余送之日、太

生焉、則有浮々簿々、居々震々之容、

故激發奮起、苦心忍性、能靡勵其道者、往々有之、 故久與君子居、則動容周旋、言語造爲、無不君子者

獨親鸞氏則不然、子孫雲仍、奕葉相承、比之於世祿|久與小人居、則動容周旋、言語造爲、無不小人者、

大夫之家、故或間逸終歳、不免爲碌々之人、或怠惰|今夫之爲魚也、與陽喬居、則輕々躁々、滉瀇険嗎.

荒墜、頗悖其道、書曰世祿之家、鮮克由禮、余於此|唯恐流之峻劇也、與埤鰾居、則鰕々刺々、陵齊絕汨、

徒亦云、桂潭師亦親鸞氏之徒也、加之寺奉豊饒、有「躍如跳丸、去如激矢、有飛越江湖之勢、是皆與之和、

瞽御之分、有奚如之役、非有慍憤毙結之事、非有焦「不知所以然而然、吾友伊太素遊于京師、處數年、結

思飢體之爲、然師能脩其德、能治其道、推於一方、 省其親、整々濟々、有君子之容、余見而嘆、曰美

若資質有超人者、且屢征吾黨遊、好賦詩、俄頃成篇、 太素、何以得之、益太素在京師、無日不數於大人之

綽々乎有餘地、其文才雅思、亦天性也、余既嘉其資 門、其所與遊、非貴介子弟、則有德之士、心與之和、

質之美、又喜其有祂藻、而又惜其終於浮屠氏、苟使「不知所以然而然、余於是乎、愈益知所與居之人、不

師入吾道、則其所成豈不大哉、師旣從吾黨遊、則韓可不擇也、太素將復遊京師、其能久與大人君子居、

子所謂拘其法、而不入者耶、非邪,今茲將遊京師、

良易直、恭敬遜讓之心生焉.夫旣生焉,則有溫藹

々、整々濟々之容、與小人廣以寧驩、以寧白河人也、善屬文、其辭鹊如也、余

拊髀喜曰、有其人不足憂也、嗚呼、使天下後世、稱「夫人與黻冕之士居、則嚴莊之心生焉、與衰絰之人居、

公之功德、而不朽者、以寧之任也、以寧其可不勉乎 則愀悼之心生焉、與介胄之士居、則奮厲之心生焉、

哉、今茲以寧西遊崎陽過我褻、將行也請言于余、余「與疾病之人居、則憂菀之心生焉,故與君子居、則慈

乃書此以贈、

送伊太素序

肥後文獻叢書第二卷

送桂潭師序

居、則涂脫鄙吝 矜夸侮

凡今屠髮者、非寒饑無告之孤、則覆亡流離之子也、 慢之心生焉、夫旣六六九

喵梁先生遺稿卷之五

其他良冶名陶、巨螺碩魚、鬃蠟茗焉´及百卉之桴根華|世之功德于民者、人皆翕然稱之、又必有文十筆之者、

果、禽獸之喙角皮牙、無趾而走天下、無翼而翔四海者、 故天下後世傳而不朽也、夫姦回在朝、則治爲之不美、

不可勝數也、夫磅礴精粹之氣之於物如此、而其於人「邪說惑民,則敢爲之不明、故古之善理國家者、必先

也豈獨闕焉哉、必有碩大雋英之士顯于世者、然索然黜姦回、必先正邪說、曩白河太守菅公、執政于台府

無聞者何也、蓋其害有二、其民祟親鸞氏也甚於君父、 也、大黜姦回、弊政爲之一新、又且提柴岡尾三先生

朝之夕之、襯之役之、惟恐奉之不厚、獲罪其徒、害「以爲學士、邪說不得復行、方今天下稱其改弊政之功、

一也、其民甚好任俠、聯黨于此、结聚于彼、睚眦相 而嘖々不已、然至其止邪說之功、則稱之者厘、如

報、違言相仇、當其相仇也、雖與之貿首、毫無悔恨、 菑中之星也、其故何、蓋世之人、小人衆而賢者寡矣、

害二也,一國之人、湍炙漸清於此二者之日久矣、嘉|稱改弊政之功、衆人所同也、宜哉其衆也、稱止邪說

諭不能移之、猛分不能禁之、其爲害也豈不深哉、天之功、賢者之所獨也、衆人不必知、宜哉其寡也、夫

正之役、士人去纘于借敎如也、先侯赫然大怒、逐親 永者必昭々、寡者必冥々、昭々者久而不亡、冥者

鸞氏、於是親鸞氏滅矣,而任俠之氣則騰如也、方今久則泯亡、是其數也、然則其止邪說之功、不有文士

君侯好學.建興泮宮、崇尊儒術、上自四累之上、下一筆之、則天下後世、或泯然無聞、昌黎韓子曰、昔邪

至十等之下、皆無不翕然嚮化者、於是任俠之風澌、 說塞道、孟軻闢之廓如也、功不在禹下、由是觀之、

二害既已除矣、碩大雋英之士、其將濟々並興也、譬|止邪說之功、不亦偉哉、若天泯然無聞、可難之甚者

之猶如草木之蠹賊已除、其枝幹之碩、華實之美、可也、吾儕小人竊愛之之日久矣、去歲余在江都也、與

送廣耳飛兎奔電瀨以寧序

、傀竹異葦奇橘甘蔗之植殖焉、

霧嶽牧嶺、峰然大矣、有既江馬川、月河仙水、泓然|計日而待也、豈不盛哉、豈不美哉、彥禮好學、 遊

深矣、加之大海之負、鉅野之抱.於是楩枏豫章梓杞我藩、爲人順直而敏,有碩大之風、今將歸省其親、

梲櫝之材出焉、鏐箫銅鐵珠璣珅之珍生焉、騏驎 告別于余、乃菁此以慶其國之將興也、

之駕產焉者、假令眩惘一時驚愕後世、不免爲聖人之罪人也、「莊周有言、曰牛馬之氣能生機蝨、蟣之氣不能生牛

夫人有肢、禽獸亦有肢、人有耳也、目也、鼻也、口|馬、善哉其言之也、必也有崧山喬嶽、蒸洸之水、廣莫

也、禽獸亦有耳也、目也、鼻也、口也、人亦蹌々、 之野、而後其磅礴之氣、能生鉅大魁偉之物、其精粹

獸亦蹌々、人亦熙々憒々、獸亦熙々憒々、然刖人之、之氣、能產珍葆嘉瑞之物、薩大國也、有鶴山櫻

不爲姦、故刁自宮、筦仲察其惡、王安石面垢十年、

異焉、有聖人者出、區之別之、厲之遮之、鞭之杖之、蘇洵辨其姦、由是觀之、則其高者惡之類也、姦之徒

馳之遠之、於是人之與禽獸始判矣、雖然、毛茹血漿、也、孔子之所謂怪也、若其最下者、則君子反有所采

陶復陶穴、人知母而不知其父、暴陵爭奪、無有能制之一也、豪潮好詩、屢與吾黨遊問其行則日一食稻、余每

者、聖人於是位貴賤定配儷造宮室敢任烹、然後養|相視 未嘗不憫然、夫既憫然、則不能無言、夫既不能

生之具備矣、人倫之道成矣、是所以使人去禽獸、而一無言、而不陳之師前、則面從背憎也、有害於君子之

就人道也、是所以使人去其險艱、而就其易夷也、聖柔道、然師若以道不同、不相為謀詰之、則我無以應、

人之功、豈不偉乎、豈不大乎、然則爲怪奇嵓澁之行

赤彥禮

按經

所以異乎禽獸者何也、君臣也、父子也、昏嫁也、飲

十爲字下有之矣二字神之们可

浮屠氏之徒、其最高者以顆爲食、其次日一食稻、其

次斷酒及肉、其最下者、不獨饌酒肉、又畜妻孥子、 食也、居宅也、今浮屠氏髒々骯々、舍其所以異禽獸

故食顆者、卑日一食稻者、日彼未能避殼也,日一食」之君臣而不位焉、今浮屠氏子々偶々、舍其所以異禽

稻者、卑斷酒食者、曰彼未能不貪飽飫也、斷酒食者、 獸之父子而不親、今浮屠氏鰥々耿々、舍其所以異禽

鬼畜妻怒者、曰彼未能脫塵累也、是皆反人性、而行」獸之昏嫁而不營、今浮屠氏怒々欒々、舍其所以異禽

怪奇崫澁之事、以雄于人者也、夫旣以怪奇崫澁爲尙、 獸之飮食而不嚼、今浮屠氏杌々々、舍其所以異禽

故植立乎樹下、兀坐于石上、浴水探湯之苦、無所不「獸之居宅而不處、豈不怪之大者哉、況於浴水探湯、爛

爲焉、爛顗燒指之慘、無所不爲焉,孔子曰、索隱行 顱燒指之徒乎、凡戾人性者、鮮不爲惡、乖人情者、群

怪、後世有述吾不爲何則天地始闢、人之與禽獸無有 硐梁先生遺稿卷之五

六六七

從一國之人、則或有坐作失節、語言失體者、未嘗踰

贈浮屠豪潮序

工

栖々汲、

唯衣食是圖、其能超然遂志者幾希、余旣嘉元幹之得

其侶、而又喜其超然逐男子之志、於是乎言、

送緒處士序

距非身至高至廣、至大至夥、至奇至壯者、未足以

是視、其能超然途志者幾希、其不佳者、於酒於色淫蕩猖狂、以爲樂者有之、於配於鼀頓纇顚境之人、見涉獵天下之人、則或有赧焉自慚、爽然自

踢、以爲樂者有之、其他沈溺于娼舞優樂之觀、樗蒲「喪者、是其與小接者、氣與之小、與大接者、氣與之

傀儡之戲者有之、君子與之遊乎、曰不與也、必拊髀 大也、氣因其所接如此、其載小載大、何一視一聽、

於名山之巓、濯足於名水之流、探墟千古、觀風察俗、 心由之遷、心之遷也、氣與之和焉、故一日聽樂、則

求異聞見偉人、綽乎具有容焉踔乎其有立焉之人乎、 一夕有偷悅譴虞之氣、一夕扶病、則一日有憂戚慘痛

鹿門處士左元幹將東遊、余問其同游則無有也、余歎「之氣、一日爲惱、則三日有肅悚整齊之氣、三日爲將、

口、得非其人而與之、不如子然單行、宜哉元幹之不「則十日有崛屹果敢之氣、皆見北面、是非其與之和之

求侶也、既而有人來告、曰元幹與田禮夫俱焉、余於 所致乎、夫處士自少好遊、涉獵於天下、於山則多觀

是訴然撫掌、曰善哉元幹之遊得其人、余於田禮夫! 峻巇 崔岩、高極乎 天者、於水 則多觀 浛瀅濰沆、與

面識耳、未熟其爲人、雖然、屢覽其詩、而知其志、 勃澥合者、於土則多觀高埜千里、人居萬廛、所謂通

非為世俗之遊者也必矣,夫蠖屈蝇蟠、未嘗出封疆、 邑大都者、於人則多識塊梧奇偉、倜儻不羈、名震一

豊男子之志哉、雖然、其既仕者、僕々役々、唯公務「方者、氣與之和焉,宜哉其得雄壯磅唐之氣也、然則

涉獵於天下、則氣終不可養乎、日否、吾黨之

養氣者異乎是、上攻六經下讀賢哲之書、志道厲行、

特立剛毅而不變、夫然後氣沛乎大塞天地之間、於是

觀天下之予一面稍處士而偉之、日處士何以得此雄壯磅唐之氣「動心、道有大於是也、於乎處士既已有雄壯磅唐之氣、

也、夫沈伏潛居、未嘗出戶庭之人、見交游一狐之人、而從吾黨游者、三年於兹、若其終能以吾黨所以養

坦或有手足失厝、箝口畏蹙、未嘗出一狐之人、見衡、之、則其氣塞天地之間也、可計日而待矣、

一國之人、莫不正袂而敬、望塵而拜、不足以爲我榮 不能無疾病患難之虞、則必得相恤相救之人、而與之

也、二分齊國、我有其一、與齊君抗禮、如邦君兩君、 偕焉、相恤之人可得也、至同志之人、則不可得也、

不足以爲我榮也、盡有齊國、盡臣齊臣、南面稱王、 世之遊京若江者、觀郫餮之殷富、士女之華飾、以為

慶流于昙仍、不足以爲我榮也、何則非人臣之節也、 樂者有之、閱部技淫巧鵰偉¸物、以爲樂者有之

榮也、割地受封、位出群臣、富比小國、「夫跋涉山河、遊于千里之外、不能無疾病患難之處

送左元幹序

馬能忍乎、全節而死、是我上願也、尙何望乎、夕降

序

委質爲臣、無有二心、臣之節也、且我被燕恩也偓矣

之智、守不假器、守閭之狗能吠盜、不敢反走、我安 非耻功之不立者也、非耻名之不稱者也、且凡物擬而

忍棄城徒歸乎、我死燕士也衆矣、今栾城歸、則寡 竞非者衆矣.鰓白骨以擬象、竟不得爲象、磨城以

君必責以亡士敗軍之罪、父兄必怨以多數殺其子弟、 擬玉竟不得為玉、我故不欲擬二子、獨行我衷情已

責之與怨、一湊我身、則歸與死之間、不能容一呼吸、 矣.嗚呼、先生天下之高士也、其所敢則智者之所務、

然則焉得先生所謂輔孤主、而制群臣、矯國更俗乎、 勇士之所斷、忠臣之所急也、然我旄乎迷惑其言、不

雖然、我非懼死不敢歸、衣亦死、不歸亦死、唯願得 能奉敢、闇昧之甚、不可奈何、先生其寛焉、書報後

竭力而死而已、此我所以惑先生之言也、先生爲我出「數日、糧絕兵疲、燕救不至、燕將乃自殺、聊城吼

一計、曰捐燕棄世、東遊于齊乎、我又惑此言、吾聞|田單遂羼聊城、

當作非証由之不立名不醒行也

辟猶如說瞽者以文章、聾者以鍾皷、旄乎惑其言、 茍全節死、則股異處腸寸絕、不足以爲我辱也、暴我

闇昧之甚、不可奈何、來書曰、見我不能得也、是然 骨于齊野、梟吾首于齊市、不足以爲我辱也、此我所

矣.我亦既已自 以聊城爲墳墓也已、又有他矣乎、 以惑先生之言也、先生諄々申之、以管仲曹沫之事、

先生因爲我計日、不如歸報於燕、我惑其言、夫挈瓶「欲我澤而行之、何其敢之厚也、雖然我衷情則如所陳、

朝貴、車騎眩矅于道、玩好無所不得、嗜欲無所不給、

冥也、夫醉酒者、晝飲則夕醒、夕飲則朝醒、未嘗連 燕將報魯連書曰、吾在燕國聞先生之義之日舊矣、燕

晝夕、非酒而醉者、不然、昏々冥々終身無有醒時、 國僻遠、賤臣憒乎、事未得顛蹶望拜受敢於前也、

子其取一時之昏冥耶 將取終身之昏冥耶、余無以詰、 先生見吾在厄、不忍憫恤之心、敢以智者之所務、勇

鬻渡者對

士之所斷、忠臣之所急、敢不再拜謝其效之辱、雖然我

余遊伊勢也、有一丈夫、負人於河、一步而偃、再步|小國之駑將耳、豈足以處於智者之所務、勇士之所斷、

而僂、頭幾搶水者數矣、問之則鬻渡者也、狀貌温秀、 忠臣之所急乎、且性甚闇昧、雖面命哉、雖提耳哉、

對日子唯知醉酒之爲昏冥、不知非酒而醉之爲昏

擬燕將報魯連書

余同閭之人甚愛酒、無日不醉、々則謔浪叫號、不省中興之美、賢猶且難爲舟楫、呪於不肯如我者乎、余

事務、余謂之日、甚哉子之嗜昏冥也、是亦不可以已一逐不能屈之、

醉人對

盍造舟楫、是一舉渡數十人、其功甚多、何身代舟楫、

以自苦如此也、曰昔傅說身爲舟楫、以濟高宗、辽蔿

智者、有鬻能者、 鬻藝者、有鬻名者、凡天下之人、

漁之點者、畜鸕以爲食、絲之以繩、以環鉗其喉、鶥 非鬻賣者幾希、我不事鬻賣、雖然我惡彼自鬻其能,而

泌呑魚、則捽胡出之、余見之謂漁者日、貪哉子業也、 滅人能、自鬻名、而廢八名者、以故韜晦在此、余

是攘奪以爲生也、對日、夫拔城略地、士之力也、然城一日、夫鬻渡鬻之賤者也、吾告子、有鬻薪者、有鬻藥

之與地、非將士之有、指縦者之有也、是天下之通義者、子何不爲此等之事、曰我欲鬻薪、松栢何罪、我

也、余曰卑哉子之爲產也、命懸於一羽蟲、對日子獨「欲鬻樂、芷不何辜、我已惡彼自鬻滅人者、而害物自

知人之爲產之卑、而不知巳之爲產之卑也、子今以文「利.則是所謂尤而傚之者也、我豈忍爲之哉、余曰子

得祿、是命懸於一兎毫、余無以詰、揖而去、

畜鸕鷀者言

狀貌不似常人、何鬻賣自賤至于此也、丈夫日、有鬻

質、化爲緻微、髹之力也、由此觀之、髹也者有類於「有君子之風、余亦與數錢、以據其背、謂之曰、子之

敎也、然則吾術與子術、其又奚擇、余無以應。

其一、非是欲言之巧乎、記說君子也、則揚休玉色、 大城子一日見髹人、日太古之世、未有髹工、凡髹滅

子就之則温、是非色之分乎、然則其不取巧言令色何|質之材也、孟子曰術不可不愼也、子盍改藷、髹人座

也、益君子靄然乎內.而後粲然乎外、故其言不求巧|然笑、日薰之陶之、化其氣質、以成君子、敢之力也、

而巧、其色不求分而分、譬之草木、則猶枝幹膏乎內。」垸之襲之、施以木液、一成不反、堅如金石、鹽之

傳說君子也、則曰言語有章、且孔門之四料、言語居

髹人對

巧言令色義

雜文

、必好言 配、則性情得正、得詭僻黠之配、則性情不得正、苟

衝擊 排支、是未能遊乎其外者也、故凡言紛々綸々乎 性情之不得正也、淫蕩放僻、不知其敗家亡國也、豈

北域中者、皆未臻其極也、昔周公踔然乎富寵之表、故 可不戒哉、故詩百關雎、用之鄉人、用之邦國、所以

三握三吐、以下白屋之士、非有意于無驕、好禮之所 使人愼閨崗、而得性情之正也、仲尼曰關雎樂而不

致也、顏子超焉乎貧審之表、故餐糟殮糠、不改其樂 哀而不傷、今見其辭與義、不至淫傷、顧其聲音節奏、

也、非有意于無諂、樂道之所致也、子貢之言非不美 亦自和而本、有不至淫傷者存焉、吾不得聞之、嗚呼丶

也、然猶未免拍掂踏躡、衝擊排支之域也、

是互舉交發、以丁寧之、是亦夫子所以諄々誘人、

貧而無諂義

夫人之感於物、莫甚於伉儷之間、故伉儷之驩、君不

以致知、不致知則或逆施倒行焉、不力行則無以存、

不存誠則裭虛說夢焉、故不可偏重也、不可偏輕也、於「詩也者言性情者也、性情之得正與否、在感於物之際、

關雎義

其四敢、以文爲首、是先文也、德行顏淵閔子騫、是 而後榮華發乎外也、若唯欲巧其言、欲夺其色、則本

先行也、行有餘力、則以學文、是重行也、二者相先|心亡而不存、惡見仁者而心不存者、是夫子所以不取

後相弟兄者何、益聖人之敢、在知與行、不學文則無|巧言令色也、

能得之于臣、父不能得之于子、故君子得貞靚淑懿之

游之未善者、必好言拍拊蹈躡、擊劍之未善者硧梁先生遺稿卷之五

子曰、天未喪斯文也、国人其如我何、是重文也、且

讀

行餘學文義

制義

不異哉、

平生信古注、而陋吾黨朱注、然今以朱注之義詰我、豈

其室、愛其居之靜寂、其構之好美、故書以與之耳、 有魁偉之人、而後有魁偉之言、要之其心有所怫憒

白樂天詩曰、身心俱靜好、是非偕和之義也、靜好何 結、而漏泄之也、莊周之錄鵬、方朔之志希有、亦唯

必偕相之義、孔疏說靜好曰、賓主相樂、無所不安好 是己、李白之斯賦、采之于二子、亦不過以自况耳、君

也、夫以絃音靜好、喻夫妻偕相之義、朱注之說也、子「子哀其不得逞魁偉之材、而不尤其在、

讀李白大鵬賦

在一死生齊彭殤、而畏其爲儀、而辭楚聘、是豈一死

生齊彭殤者乎、因此觀之、周則言行不相掩之人、宜

哉當世王公不器之也、

也、有美一人、清揚婉兮、邂逅相遇、適我願兮、是

作漁父胠篋、以詆訛仙尼之徒、是豈任自然者乎、論

氏堂

周名續讀莊子

櫝字疑 字

皆發之憤々之中、而自不知其爲邪說妄論者也、夫子

稱遽伯玉曰、國無道則可卷而懷之、難哉、

之學與吾道背馳也、照々乎、豈待論哉、雖然、余

每讀消遙遊齊物等之篇、未嘗不拊髀稱善也、夫姬之

有客至、曰聞續氏爲其北堂、請扁於子、々書靜好二 衰也、禮樂壞崩、諸子嚇々焉、商申之於刑名、孫吳

字與之、夫郁好夫妻傚和之義、續氏之母既已寡矣、然 之於兵法、蘇張之於從衡,圭悝之於水土、亦唯功利

以偕和之義扁其室、豈不戾乎、余輾然良久曰、固哉 一是視、獨周廓然獨見、距然獨立、其言遠矣、北旨深

子之言也、夫引詩者、斷章取義、無所构泥、古之道 矣、豈不亦偉哉、雖然、余獨傕周之要在歸自然、而

男女相遇于野田卿露之中之詩也、孔子遇程子於塗也、

誦以况之、有女同車、淫犇之詩也、鄭子旗賦以愛樂

韓宣子之志、其他傳記所載、不可枚舉也、斷章取義

猶無所嫌也如此、况割文轉而用之、亦何不可之有、余

入、有酣歌狂舞、以爲雅罩、於是斥君子以爲俗、

智案坐之說,列禦寇莊周之徒、有同死生一覺夢之說、

復化為蝶"孰

克、不失安得已化為周復

己化爲周集

其正也、俗蓋謂沉其污俗也、今也世漸衰人漸薄、物 | 予讀齊物論、至此曰不知周之夢爲蝶、蝶之夢爲周

失其名、名違其實、彼之所以爲雅者、此之所以爲俗 與蝶必有分、是謂之物化、愀然而歎曰、甚周之妄也、

也、於是議論紛々擾々也、然則雅終不可辨乎曰否、 夢則夢也、豈可與物化混乎、夫雲化而為雨、不可復

雅有二、有君子之雅、有小人之雅、夫居家整齊、執、化爲雲、螟蛉化爲果嬴、不可復化爲螟蛉、凡物化而

事貞固、君子之雅也、謙遜巽順、揖拜有數、君子之一爲物、不可反於其初也、明矣、果周邪、安得己化爲

雅俗之說、古所無也、後世好事者爲之、雅益謂不失

哉、雖然、後世言善者稽焉、由是觀之、小人之所以

爲雅者、君子之所以爲俗也、小人之所以爲俗者、君

子之所以爲雅也、二者不可不辯、

周蝶

雅俗辨

闕人之放蕩漫敖之心、由小人觀之、則豈非所謂俗者

足下惠然再來則幸甚、欽遲々々、頓首、

昨々枉駕倣廨、會赴銀臺、不得拜迎、可憾々々、僕一忌之惡之、訾之擠之、豈不戾乎、夫殷紂爲靡々之樂、

以三月望發、取道小倉、舟過貴邦之纏、唯見蓮山施「北里之舞、多聚野獸、臘不鳥狗馬奇物以酒池、懸

々耳、余睴指點、曰彼崔嵬之下、得無非安川生之居一肉爲林、牛飲者三百人、使男女裸以相逐北側、由小

乎、恨身無朱陽翼、不能奮飛、人或曰、安川生在大一人觀之、則豈非所謂雅者哉、雖然、後世言惡者必稽

川氏塾、舟摩赤城也、甘逆目送、亦唯悵然耳、何圖」焉、堯舜周公制作禮樂、尊卑有等、長幼有序、言語

今來在下谷、僕喜躍不覺屐齒之折、廿八日午後得啜、有度、作事有法、一進一退、一趨一拱、無不有節、以

威俊、君子之雅也、小人反是、有輕脫深虛、

以爲雅者、有矜夸詈罵、以爲雅者、有沉湎酗酒、以

爲雅者知物化乎、嗚呼周之线也、禮蝇魋肘、者千抱

其儇智、以區々見、蔑聖人正大之道、於是老聃有絕

梁先生遺稿之五

詩、美矣斐々然、々地之相距五仲書

與未知其性行

龠雖小哉、不可失其度也、以換不似、奉乏訓導、日

夜惕々、唯恐罪戾之至、赤君之所知也、夫赤君質良 曩今泉生至、得審足下踐履萬慶、抃躍不止、江都一

才美、國之彥也、則其居職也、顧必從容優衍、吾儕 別來、無寸楮以奉左右、無所逃罪、君子海涵是祈、今

何敢置喙于其間、於乎、烦爲人師者、二十年于此、抑 泉生居業無恙、足下莫以爲念、近山川生來客齋滕氏、

亦厚顏哉、雖然、颇知子弟之情狀、導之於文辭、則時間游吾門、天資强記、畧諳經史、且好屬文、數百

英葩綺繡、非不麗也、如其偷浮何、導之於訓詁、則「千言、隨筆而來、唯憾未嘗受人指摘、故不能無疵瑕、

剖髮析絲、非不精也、如其齷齪何、導之於議論、則|使之在廠邑數年、則將天有可觀者、然生至貧、不能

解紛辨惑、非不詳也、如其支離何、故學校之敦、莫自給、不久將去、生之二三朋友、交來愬之僕、計不

若先性行、性行正而後其材可用矣且夫懷舊之士、短一知所出、幸與足下相識、知足下有君子成美之德、故

於文辭、�於校索、訥於議論者、累々有焉、若唯尙 敢布腹心、足下盍聞之于當路之人、以賜學資、是僕

文辭、或校索議論、則自視欿然、其終或至廢學、然「之願也、若得所願、則生必成材、以供國用、嗚呼生

爲國家之用者、多是出於惇篤之門、則敎導之術、不吃也者卵也、足下覆而翼之、則其惠不亦大哉、請垂明

可不愼也、赤君之在我也、烦得寓目薩之子弟之文若鑑、頓首拜、

與丸岡生書

合家無事、 區々之情不能巳、敢陳之于足下、赤君以爲如何、烦

近命爲都講、拜慶々々、夫敎官也者、國之範也、其 雖異邦、其官則同、其官同、則其所憂一也、赤君若

食雖簿、其爵雖卑、其責則大、苟身不正、則惡在爲「有得、請必相告、詩云投之以木瓜、報之以瓊瑤、烦

敢官、不可不愼也、譬之猶如尺衡龠量也、尺雖短哉、也待瓊瑤之報者也、

復赤彥禮書

竊願足下無復圍碁、以務 志業、煥白、

如何、若以文辭而已、則非所以供國家之用也、薩之

學出於室子、其源既清、豈唯尚文辭而已、雖然、煩

曩大槻輝之還也、得辱書、因審起居萬福、百餘里、安川右與出士瓏書

書牘

賦詩生之以閉、

之旅也、由是觀之,如矢之行,人君所宜趁著也、諸事也、古人圈线、愍野者有之、联古書畫者有之,貼

臺下聽政之餘、辱策諸生、問以史魚伯玉之事、諸生|亦答之如前、後數日又有一人來告、如前之言、僕於

欣躍、謹各陳其所見、史魚之德之所以偏、伯玉之德」是乎舌撟然不下、良久曰、士瓏何至于此、夫碁無

之所以得全、如諸生之所辨也、臣煥 伏惟、由君子處」之戲、非學士之所宜爲也、僕不識碁、聞之好碁者之

身之道言之、則伯玉可珍、而史魚則有所不足者、然」言、曰碁子比綴、恒如在眶睫之間、寐則夢與人圍碁、

由人君使臣之義言之、則史魚亦所宜珍者也、譬諸烏|苦思萬端、汗出洽背、驚而覺云爾、且僕嘗觀碁、其

喙石膏、烏喙石膏之氣偏也、唯其偏也、故可以大治當局者、目不見色、耳不聞聲、鼻不辨臭、口不知味、

人之疾也、如矢之行偏也、唯其偏也、故可以大格君 甚者聚蚊噆焉.毒蜂螫焉、不知其慘、水湔其襟、火

之非、可以大裨國之治也、豈可不珍哉、夫大平之久、 炳其髪、不知身之濡、頭之靡爛也、吁、甚哉褫人之

人失圭角、間有如矢之行則傕之、豈翅恤之哉、惡之一神也、顧當局者皆盡然、如此則何志不折、何業不廢、

非之、排之擠之、是直人所以不容於世也、益直人大|非學士之所宜爲也、且夫以碁爲食者、率皆奸惡譎

率乏含蓄之量、疾人之惡也已甚、故自貽此阻耳、是故之民、如不巧者、如甚拙者、以欺人利其賭、其術不

明君必取其長、而不問其短、扶持之、使之不至顛可端倪、人皆在其術中、而不知、今足下在其術中

仆、以大有資於此矣、然則朝有直人、君之明也、國而 不知耶、將已知之、而其樂不可以已耶、賭貨固卑

圍碁、數過以碁爲食者家、賭貨大板、僕曰或有之乎、

上諸生文副劄

然不至如此、後數日、又有一人來告、如前之言、僕

側矣、由是觀之、太宗之多得直言、積日累行、久而「士瓏足下無恙、甚贺甚賀、屬有一人來曰、士瓏日事

孚焉之所致也、孔子曰、信而後諫、此之謂也、

論、未言及之、故臣燠 忘憑陋、雀上副鴿者有之、賭飲食者有之、是自雅事、無害君子之

道、足下性之所好、不可以巳、則爲此等之事猶可、雖

然碁無疑之麟、使人志折業廢、非學士之所宜爲也、僕

也、於是射 納諫陰、夕聽箴规、甘之如飴、從之如流、褒之以物、

王者有之、出王者有之、問鼎者有之、請隧者有之、履「延之以位、久而孚於天下、宜哉其多得直言也、有人

霜之衡、不期然而然、夫齊桓晉文、雖赫一時、其心不一於此、羽毳不拔、卵殼不毀、未可以遽馴羽屬、必也

本道義、故其下化之、唯功利之視、汲々逐々、唯恐「設之飲啄、爲之桀巢、積日累行、久而孚焉、夫然後

不贏共身、故數年之後、其國皆爲疆臣所、善哉、孟 可使凡百之島路々於其廷矣、有人於此、蠢螵不傷、胞

子云苟爲先利後義、不忿不饜、伏惟 臺下襲茅土也、 胎不剖、未可以遽馴毛屬、必也設之餌食、為之叢薈、

首求直言、既而親莅泮宮、策諸生以太宗之事、今又一積日累行、久而孚焉、夫然後可使凡百之獸侊於其

唐太宗何以多得直言

伯以道稱、不必以位稱、夫旣以道稱、則今一邦之君、 問以王伯之辨、臣窃喜躍不已、夫王伯之辨、義利公

其志超然脫讒功利之域、明道正誼、使封内之民心悅|私、誠僭純駁之分也、臺下好學篤信、曩已求直言、

誠服、則得王道之實者也、豈唯一邦之君而已、今卿|又問以王伯之辨、則義理公私、誠僻純駁之分、蓋有

大夫其志超然脫瀧功利之域、明道正義、使衆僚群隸|瞭然於胸中者、然則行將措之於事業、而使民心舍功

心悅誠服、則得王道之實者也、豊唯卿大夫而已、今一利、而向道義、豈不國之福哉、是臣所以喜躍不已也、

士庶人其志超然脫灑功利之營、明道正誼、使儕輩屬|雖然人心之不可知也、今日得之、明日失之、臣伏願

1

親、心悅誠服、則得王道之實者也、若夫事求必成、而˙臺下存心於王伯之辨、終始如一、臣燠 誠惶誠恐饉對、

不由其義、業求必成、而不由其道、則雖有可觀者、伯

者之徒也、苟不免於此、則萬乘之主亦伯也、碣之夫 臣嫣 謹 對云、信足以於 一家、而後可得 一家之直

亦伯也、夫君子之德風也、小人之德艸也、上有好之、 言、信足以孚於一國、而後可得一國之直言、信足以

則下必有甚焉者、周之季世、天下之人、唯功利之營、 孚於天下、而後可得天下之直言、苟信未孚於人也、唯

沿々波流、誰能反之、是後王躬自取之也、若後王奉若恐言出而禍災隨之、然則雖置諫鼓哉、雖設謗木哉、將

天道、率由舊章、心誠好道義、而賤功利、則下豈有「焉得直言、太宗之爲秦王也、旣好話言、其踐祚也、朝

好功利者哉、然則下之好功利、後王之罪意、伊之負鼎、唯爾是倚、曹瞞之隃嶺、非爾則已已離

刻字小、而陰資以成已業、於是王伯殊歸、義利公私、

輔弼純駁識偽之分、彰々乎如丹青白黑然、自是而後、王

豈不戾哉、余嗜梅實、有感于此款賦、

有齊桓管交者興、陽的王、而陰挑以張其语

何則有大於是也,以北梅梅此均力與戰室

夏率露宏、以服步時王而巳、道安有二哉、周之衰

恭古之於梅也、稱實而不稱花、詩書所載亦唯實已近

世不稱實、而唯花之稱、是賦是贊、其亦極矣、昔孔子「臣煥 謹對曰、古者王伯以位稱、王也者何、天下之主

有力如虎、然不以力稱、墨子善戰守、然不以戰守稱、 也、伯也者何、諸侯之長也.昆吾豕韋大彭西伯、

梅賦井序

離文之甜兮、各有所長、何必仇視、雖然、或唯可餌

對策

頻譽、終以褫其精、使王豹倚焉、則當爲之阻聲、失其

商宮、心爽目膛、信至哉妙哉、不可得而名也、亂曰、

黼黻文章之絢兮、久視則使人目倦、毛炮炙燔之滋兮、

多食則使人口變、此器之至美兮、屢聽而不知厭、若其

一闋而舍之兮、使人嚮然以戀、既無大急小絕之憂兮、

又無貴賤易位之尤、嘉彼摽拂之便、懿玆同律之周、

於乎木久絕兮、松树不復脩、願言供合止之用兮、永

爲絲竹之朋、

女子、可怜孩兒、或唯宜單陷、於酒則不宜、或唯宜

酒、而不宜食、此菜酒食單陷、無所不美、又可以悅

孩兒、可以餌女子、且他菜不可鹽、此菓獨否、日可

以積、歳可以累、養病之珍、御冬之旨、凡百之菓、莫

靈於爾、語譚一及、口則生水、

仰秣、游魚出聽、雲藹々以似停城牆、塵浮々以飛屋一々蕡々、瑩々珠々、已熟也如黃金、未熟也如蒼玉、乾

梁、病者忘其痛、痒者忘其癢、憂愁斯陶、辮抑斯揚、 之濊然有聲、鉿然而馥、齒得之而滑、吻得之而清、

偏倚斯中、傾彼斯平、毅者和、隘者宏、踪者靜、沿|咽喉得之而快豁、腸胃得之而平、可以袪痞、可以

者清、當斯時也、使鍾期聽焉、則當爲之駭驚、數歎 解醒、楂梨之潔兮、柑橘之涵兮、榛栗之和兮、龍眼

問曰、寡人聞王伯之名、而未知王伯之實、其

辨如何、

之調國政、武丁取以譬、男女之得及時、詩人以

其面則增岑疊嶂、互秀競亢、崔嵬岧嶢´嶕㗩峻峭*或

尖或墮、奇象異狀、有洞穴之唅呀兮、吐納天元之精、

有美石之潤瑩兮、畜育至寶之性、其側則仙源靈泉、泌

々 涓々、瀏乎其淸、炊乎其漣、瀚漅汩活、沸渤回淀、

齧巖泐石、爲潘爲瀀、躍巨鱏之發々、潜驪龍之蜿々、於

是瑞獸麾癢于其桴、靈禽暴翼于其巓、自崩牙之拆出、

不知其幾千萬年、寔蒭蕘之所不窺、雉兎者之所不知、

爰有潜遯之士、心冲漠以好奇、手于藤蔓、趾于葛綮.

伻于峭屼、膝于巓巇、忘不資之身、以犯垂堂之危、風

鋭斧之剡、以屠蓊鬱之枝、是剿是削、載之于標、

前吁後喁、荷擔以歸、於是參之梁氏、倨句之法、質之

梟氏、修廣之規、楔之之以爲器、吹律求聲以適宜、惟

而輕示之、村大年在坐、試樑之、一坐皆驚嘆、余謂大年 之偏翼、小屏之象山水、樹之于艦之與舳、一則涌濯

曰、子識榭乎、大年日、器今始目之、安能識櫟法、信 激揚、一則辥崴甌´銅丁之森然、望之燿々煜、魚

手爲之耳、長岡君粲然、命煥賦之、其辭曰、

鬚之蘿々、施諸桐丸之如玉爾、乃字之曰木琴、以供

惟木之偉美兮、生于萬仞之山、托嶙峋之特巖兮、臨|君子之娛樂、吾朋之多眞意、視之躍然心如醉、形似片

窈窕之深磻、沐天露之津澤兮、被曜靈之溫暾、冬雪「雲之在太虛、飛拂魚[以試之、一往一來、一軒一輊、

不傷其械兮、夏風鼓養其繁、矗々以貞其幹兮,苞々-疾舒得序、踈數如志、變化百態、未嘗跌躓、始則鏘

以緻其根、五雲罩籠乎其梢兮、三秀芳馥乎其跟、益々鏗々、經々碎々、如雜佩之音、似水石相擊之聲、旣

姑洗、烦昧於律、未能知其中與否、長岡君一日出而「小舟之蹙々、載十七乙片木、々漸々乎以殺、宛如烏

捋浮拂也、不遽不停、鶥鸸蟠紆、狂放披猖、如

寐如覺、如存如亡、辟之猶如鸞鳳在遠空、己陵影氣

以翔、且將九雛之啾々、翩頡頑以哀鳴.又如蟋蟀

之吟曠野、商飈送其餘聲、綿夕兮繞々、將絕而又賡、

手累發、頹散 嫖飛、反覆 修炊、間不 容暉、如

有頃數

笑如啼、如詠如語、如嘯如息、如難如怒,恙韻之無

端倪、想像古人以懷、湿々喋々者、陶叟之笑虎溪也、

呱々嘔々者、老萊之爲兒啼也、嘗々琅々者、曾點之

詠沂水之涯也、靡々混々者、孔程之語于剡街也、繚

朓而清昶者、孫登之嘯于蘇門之崖也、衝醻而慄起者、

賈生之息漢政不諧也、其如喟然者、顏子歎夫子之堅

高也、其如嚇然者、文王怒密人之不共也、於是槽馬

宛如別鶴送哀音。

中夷則。第四中仲昌。 第五中南号 第六中夷則。第

中夾鐘。

向晚風語嗎不已。

淚

酒

宝

離

永某精樂音者也。曰第一中應鍾。第二中無射。第三

布帆一片掛秋風。

故人何事去匆々。不得杯尊此暫同應似當年憶鑪客。

之于丁之外面。蓋取其受木柔臑也。魚鬚長尺五寸。

賦之。

西子兆將還松江。余往訪之。則子兆已去。因一般上有藉々者。何以楮裹帛大如筋也。其長竟舟。糊

牆上飛花過雨後。門前垂柳掛糸初已知呦鹿隨閑步。亅形。兩舷之上。皆設銅丁各十七枚。後舷之下。則貫

更有鳴禽伴讀書。

木而出者三分許。前舷之丁。則在木間唔使之不相

至也。小之至也。舳艫皆施小屏。一爲山形。一爲水

訪友人村居

而殺。一木短於一木。一木小於一木8幅寸長尺短之

宿雨新晴舍餘潤。況有靑甸巧成禯應笑戀賞花前翁。 之狀。蓋片木十有七枚。大者幅二寸。長二尺。稍々

朱顏酡分銀爲鬂。

艦之一。別造一舟。覆而承之。自旁觀之。如纖腹鼓

游飛鳥山得襯字

上參差如也。舟長三尺。艦則三分長之一。舳則二分

二重嶺上幾重雲。絕頂登臨四望分回首鄉關何處是。|木琴上卿長岡君所藏也。蓋柷圉之流也。列片木于舟

層城百仍帶斜曛,

木琴賦井序

二重嶺

安步却餘書五車。

賦

月出江城起宿鴉。幽尋偶至故人家苦吟時就詩千首。

次韻安訓導安步園作

注桐丸于其首。以襟之則有聲。蓋如羲之於圉也。吉

七中林鐘。第八中姑洗。第九中太簇3

第十一中大呂。第十二中黃鐘。第十三中林鐘。第十

四中蕤賓。第十五中南呂。第十六中仲呂,第十七中

六五五

壺梁先生遺稿卷之四

慨然賦之。

千竿翠任映衣寒。

再遊難波。萱君謽。葛子琴。河子能田士章。」佳辰愛値雨痕乾。幽侶追隨此罄歡°滿逕苔從受履滑。

皆已逝。九日叢桂園

氷雪神人夢裡逢。雲中引我駕飛龍耳間惟覺天風颯。室引淸風竹作降。

直到蓬瀛第一峰。

夢遊富嶽

泉石憐君久托身。西山風致絕紅塵琴横夜月山當月。

大年韻

𥷑桂園席上次村虛室從前生白處。千秋將比草玄才飄然何日偷閑去。彩羽回翔玉樹前。

因賦贈之。

華館開莚酒若川。雄談論古日如年流風最喜家庭美。

紀如來松下菴成。見招。余有事故。不果赴。

11

孤舟口至水之頭。茅舍依林趣自幽塵間雖有觀燈樂。」歸驂西向渺山川。面州知隔幾年°園裡風花如有意。

月下何如霓句遊。

翩々來舞把杯前。

上元習靜居集

次寒泉先生韻

佐嘉關外紫溟西。知爾歸來問舊栖休向九重峯下宿。蓮峰萬仞勢雄哉。日々行程入望開相去殆將一千里。

秋風幾處夜猿啼。

回頭猶見白皚。

送人歸佐嘉關

天涯孤客思漫々。次上涙痕何日乾向夕子规啼不已。游子遙從滄海西。暫時停馬問幽栖°重來此地須投宿。

蜀江十有二長灘。

石鏡山頭月裏攀。

富岳

子規啼

武佐驛贈隱岐仲固

天涯爲客老風塵。歸到林丘意自眞屋後幽篁如待我。|繫総難波江水濱
。梅花依舊媚靑春獨春十五年前友。

溥々零露灑衣幅。

屈指多爲地下人。

共醉君家紫玉杯。

雪後園林粲似春。掬來偏愛素英新 誰知三椀多幽意。

雪水烹茶

淮南鴻寶枕中臟。三世名聲動四方共說奉和堪可唉。

謝中井君治兒允疾

秋月亭々出碧空。相逢麈尾沐風中若解攢眉事。

屢向廬山參遠公。源

席上次潮上人韻計離

故人一去奈難逢。琴酒相留欲斜春家在蒼茫瀛海上。

天邊秀出小芙蓉。

送神山君

春靜林亭雨似系。杯樽喜與故人期。請看萬朶梨花白。

能使幽窓暮色遲。

春雨訪吉井氏野田二翁至同賦

蟠根原托閬風巔。移向階庭經幾年4曲々笙簧如促舞。

春風吹落彩衣前。

賦松樹篇賀田六十

村頭分徑入雙林。十畝閑庭苔色深。唉指杳茫湖水上。

浮雲一片是禪心。

湘陰軒次近藤賢契韻

肥後文獻叢書第二卷

曝罟晴沙渺々間。

還鄉偶書

三兩荒村流水时,與葜來往事偏開冷璁门新樹陰之外。

省夏江村事

丹崖翠壁自崢嶸。下有潺湲流水。知是欲探奇絕處。

輕舟一片月中行。

題畫得八庚

十二街頭公子家。金鞍玉勒鬪豪華-逐來何管春風冷。

汗血斑々白鼻喎。

看調馬

眞人已著五千言。忽御天風問帝閶非是青蛇携在袖。

何敎紫氣滿關門。

題老子圖

園林寂寞夕陽斜。手汲流泉獨瀹茶○風外紛々雙蛺蝶。

來尋墻□一枝花。

林莊春事

細雨空濛晝不收。瞿塘峽口繫孤舟○一聲蜀魄知何處。

無那鄉關萬里愁。

子規啼

滌得俘中萬斛塵。

六五四

壺梁先生遺稿卷之四

送僧獨生往住洛西某寺

笠翩然一衲衣。書名遙向異方飛想像明州回首處。

天邊雪色映斜暉。

北地青蓮接紫微。高僧一寫發神機何時忽騎口龍去。

直到三峯餐雪歸。

題僧雪舟芙蓉圖

林園春雨曉來晴。數樹新花弄色明多謝黃鶯能喚夢。

綿蠻幾度近窓吗?

花晨

茫々春水帶輕烟。渡口聊停一葉船此土不唯山水美。

言談別自有淸泉。

原君次都韵見贈。却次其韵答之。

一自空山埋夜珠。愁雲悽雨暗城隅西燈影憧々裡。

髣髴時看猶據梧。

悼住田秀才

翠楊浦口水如煙。欲問同人此繫船o不怿青天生紫氣。

豊城原自有龍泉。

乾坤何別有滄洲。

豐城賦呈江君黎民。

六五三

琵琶海上白雲重。衣鉢欲尋開士蹤-梵唄寥々聽不極。

天風吹落四明峯。

送僧尋師叡山

欲攀一枝寄所思。晨起忽逐暗香去定在前村脩竹邊。

水靄蒼々不知處。

湖上探梅

澹烟流水占幽居。疑是孤山處士廬4千朶萬枝花似雪

慇懃照得案頭書。

題友人梅花書屋

爛熳枝々當戸低。閑吟盡日對鶯啼人間恐有尋源者。

莫使飛花點碧溪。

山齋桃花

海西名嶽是君家。靈液潺湲浸彩霞浴去翩然堪換骨。

乾坤何別問丹砂。

吉岡翁移居温泉山下

豐後山季業來學。無幾歸省其親。賦之送別。

已是潢池采茆芹。還將藝圃鬪芳芬何爲告別渠央甚。

反哺心飛烏嶺雲。

日落滄溟望渺茫。長風萬里送慈航神僧卓錫知何處。

翠荎山頭白鶴翔。

蕭然精舍薜蘿陰。幽賞何妨捌膝吟'看取禪心無住著。

浮雲一片過高岑。

憑靈樹精合和葉師的

故人棲隱托蒼山。危石清流亂竹間°誰識偷閑時一過。

相忘煞日弄潺溪。

過井大年別莊

一雙鵁鶄待君歸。

江城春光百花飛。客子悽々戀舊扉°風色依然鏡池晩。

送菅子舒還八代

五劍峯々高入雲。峯此名。

自注五劔

游子將歸大海濆。輕帆一片度斜曛認來前日幽棲處。

四面有竅似辦螉。陰陽之氣自相通°伏來時是坤輿動。

何說水旱兼大風。 數

送白井生還讃岐

地震詩

何識人間萬事煩。生涯不負一青樽-休潮酌罷常催睡。

別有乾坤夢裏存。

題幽人醉眠圖

邊城夜靜思漫々。抱得琵琶未肯彈。雖是中天餘月色

清光不似漢宮看。

肥後文獻叢書第二巻

茂松脩竹自清幽。家在西溪々水頭°琴酒風流多樂事。

村君山莊分韻

東方千騎使君賢。初度招賓滿綺筵忽有將雛僊鸖到。

恭聞公扁其園亭。曰春風。結句故云。

携來遙自碧溪傍。 世々相傳久珍藏。因慕高風時一拜。

吾曹非學米家狂。

自足軒先生袖石

從他風雪撲窓寒。樽酒論心夜欲。云是南園春色早。

慇懃相贈帶歸鞍。

雪夜過續氏。將歸見惠梅花。

相迎相引使人攀。百尺百樓玉樹間知是前村微雨過。

無端出沒幾重山。

登郡氏書樓

大江千里望霏微。別酒相留坐石磯日暮春風吹不斷。

片帆遙入碧空飛。

春日送村大年之崎陽

青衿歸到紫溟頭。離席相看淚便流何羨衣冠誇一世。

須將賦筆壓千秋。

1

送永富秀才

六五二

梁先生遺稿之四

香徑花開花落時。吳王日々引西施°醉顏容易扶人起。」不使莊生作越吟。

一任春風吹錦帷。

吳王美人半醉

雨雪飄搖驅馬遲。洛陽年少冶遊兒°樓頭倡婦顏如玉。

手炙銀笙未肯吹。

洛陽道值雪

楚天漂泊夜方長。獨對殘燈憶故鄉梟々三聲三峽曉。

無端叫斷九回腹。

夜猿啼

凉州一曲動淸秋。邊將傾聽溟便流。白草原頭回首望。

長安萬里暮雲愁。

凉州曲

十里蒼山掛夕 。一叢花樹映禪諸天日落春風起。

恐向人間作雨飛。

泰勝寺看花

茅舍三間蘿薜陰。山行避雨此相尋°飛泉忽傍巖扉落。

冥霧仍籠崖樹深。

山房避雨

桃李滿園花盡開。春風搖蕩映啕杯知君夙有懸車意。

八九年前手自栽。

六五一

明妃抱琵琶圖

廨舍蕭然歲欲深。杯樽聊慰旅中心賓來時弄朱粒曲。

西子璉來訪馬彥章。余時在坐。子璉賦詩。次

韵答之

書服雕弓出塞馳。前行半是羽林兒-蒼鷹忽入寒雲去。

雨雪飄搖捲大旗。

羽曲

蕭然環堵碧江隈。認得琴聲時一來偶有松間微月上。

從容携手步莓苔。

藪先生山叔瑟見過得來字

長洲渺々暮烟生。憶昔㴱平此勒兵。鐵枴山頭風浪急。

于今猶作鼓鼙聲。

須磨懷古

池亭風色入清秋。落木鳴禽事幽賸得枯魚濁酒。

擬迎明月放扁舟。

池亭秋夕

陌上春風楊柳枝。年々歳々蛾眉來欲寄征夫去。

愁殺沙場笛裡吹。

楊柳

迥場風颯楚臺前。馬若飛龍人似仙齊是腰間横白羽。

紛々放去不停弦。

白銀邸觀騎射

野亭風色晩霏微。宿烏相呼點々飛沈醉何愁村路。

松間掛月送吾歸。

夏夕盈視亭集

殘生轉愛艷陽時。况復相招把酒后仍是氷心餘一片。

乾坤唯有故人知。

瀨盈園賦示吉田兄

曳藜閑步本當車。相值山櫻樹下家4吟賞何辭拚一醉。

杯中時有點來花。

古溪堂觀櫻花。次主人韻。

佳人家在麗城隅。綠樹陰々暮鳥呼o西嶺餘霞看欲盡。

還迎好月醉水壺。

夏夕過飲奧村某宅席上次馬生韻

遠征何肯厭賢勞。累代執玄同國高突兀芙蓉三萬丈。

千秋雪色映干旄。

奉送世卿松井君之江都

相識他鄉雖樂新。應憐舊侶勸杯頻請君試問西方客。

誰是今時一美人。

肥後文獻叢書第二卷

春日過清水君園亭。桃李盛開因賦奉呈致仕大

夫朝雲君。

金鞭一下欲飛揚。原注楊柳

青袍白馬紫遊韁。相逐春風楊柳傍自是霜蹄多意氣。

看調馬

十月單于寇鴈門。陳雲如墨易黃昏弟兄一自從驃騎。

無復征袍見淚痕。

從軍行

虬鬚憔悴盡成霜。苦戰年々老朔方憐爾腰間留一劍。

猶能欲斬右賢王。

老將

霜下平原艸盡凋。剔々胡馬逐風驕4角弓彎向天山月0

射落高飛雙皂鵰。

胡人出獵圖

村翁賒酒醉醺々。頭戴靑巾來探芹知是前宵微雨過。

蓬蒿戶外有殘雲。

題江村幽事圖

雨裏春江水正漫。懷人樓上倚欄看明朝如值新晴好。

命駕翩然問呂安。

雨中小倉川江兄有詩見寄?次其韻答之。

111

素琴獨彈。

明月秋高瑍浦天。

屋後淸江一泓。窓前脩竹千竿。候晴靑薺時摘。乘夜 彩筆々美少年。偏憐二子此同船到時知是稱連璧。

。

春晚滿園綠草。雨餘一逕靑苔。花飛野鳥陶去。日落 輕舟宛似駕飛龍∩倏忽凌空不見蹤濟勝知君元有具。

送辛伯彛之崎陽

田園樂

日々微醺憑儿眠。

答白龍上人

江山雪晴圖

原注 讀

夕迎東嶺淸光。朝對西山爽氣,獨坐時調素琴。幾人 巢得朝餐珠樹花。翔來夕吸碧天霞曾爲緱嶺神人。

朝爽樓集得氣字

題林逋愛鶴圖

六言

七言絕句

跂雨度祇樹。忽隨秋葉飛。殘首今失二首少俟搜索。

源較注。先生嘗仿王右丞六

僧房聽雨

繞屋栽芳樹。门口春色中。對之須盡醉恐及落花風。

四

桃花潭芳樹

。

苔徑尋明月。幽窓宿白雲。泉聲與松韻最好夜深開。呦鹿鳴禽野居。青巾烏帽隣友。煮茶桑柘林間。抱甕

口經過繡戶朱門。來往千村萬落。巧言誰子堪憐。野服

宵聽逾靜渾是淨塵機。此生可託。知此風味。

今托孤山處士家。T佾三島

幾處疑群鷺集。長堤滅行人蹤。花漫千樹萬樹。玉削 已歷六旬又九年。人間酬酢半茫然?何同開士耽茶味。

三峯九峰。

牛羊下來應攀日觀最高峰。

送師黃二子

慘澹溪雲裡。無端欸乃催。忽看簑笠客隨意載春來? 偶隨垂楊途。來吟野店花。枕頭錢不乏經日醉流霞。

雪中紅梅

宿友人山居

一路人來去。依稀斜日前。片雲橫脚下º宛似步虛仙。 積霧吐明月。金天萬里秋。□□□□□º欲泝銀河流。

題扁舟載梅圖。應岡寒泉先生需。

渦酒家

孤島多鴻鳥。一看心自閑。飛々蒼靄外ˈ汎々碧波間。 沙漠口口口。相看始解顏。今宵須盡醉征伐幾人還。

關路行人

海上生明月

塞上逢故人

孤嶼多舟子。時々欸乃聞。非是忘機久何敎鷗鳥群。

自有仙源趣。紅桃夾碧流。朝來抱滿落花浮。

船嶼群鷗二首

不辨柴門處。林間通采樵。依然隱儿處山色最孤高。

暮靄已蒼然。牧兒事何遽。各々驅牛羊忽飛笛聲去。

春日溪居

牧溪

夜臥松間月。朝口洞裡霞。人間吾已厭8隨爾化丹砂。

經舊宅

溪流淺且淸。香芹擢波際。采々誰家孃。一任水霑袂

芹溪

忽訝松風起。還疑驟雨來。幽窓欹枕聽遙自碧山隈。

贈學仙者

孤鶴何遷遙從雲際下。梁上時回翻似待眞人

鶴梁

歸帆不可駐。佇立嘆行波。欲識離情切°春芳隨處多。

凝然長不動。體得道人心。日入殘霞在峯々帶紫金。

夜泉

山脊靑松古。著花映夕曛。天風當戸落。衣袂覺淸芬。

金峯

已度翠楊烟。遙々向朔北。睍睆鶯呼起 關山到未得。

江上送人

松花岡

春夢

暮靄擁香城。泠然玉磬鳴。聲々入風微°能使胸襟淸4 晨起探梅去。雪漫碧水濱。非有臙脂色-何能辨美人。

某寺五詠

寺晚磬

幽翠

題浦朗睡起石

浦頭何所有。但是打魚船。報道潮方至°鳴橈爭後先。

仙桃千萬樹。爛熳四時開。漢口多烟霞 誰能物色來。

袖浦漁舟

原校恐當作烟體合叉旗

丹霞橫嶺上。物象覺淸奇。日入時將滅。偏敎暮色遲。

心神自可養。獨坐對深谷。盡日無人過°時々聞伐木。

題桃源圖

山人何所好。綠綺粲爲遙岫歸

貪虎將負嵎。幾度犯龍顔。一朝晦跡去。高節逈難。

歸禽響幽谷。千嶺帶斜曛。在々多奇石迎我起白雲。 開簾月欲午,海色夜蒼然。素棟飄前浦°金波浸天。

芝海明月

歸鳥翻晴空。孤雲舞晚風。江山千里色宛在書圖中。

花逕流水

誰知丹桂樹。叢生絕四隣。欲問還徙倚中有讀書人。

寒曉

南樓晚眺

鳳鳴樓入勝應薩霈

連霄微雨過。無端苔莓合。唯恐破氈敉不肯除墜葉脩竹籠輕靄。扶疎俯碧江。明月移淸影。無端上書窻。

失題

夢中得三四題

咏竹棚子求養苔

時未蹴

村々連玉宇。樹々綴銀花。珍重今晨雪能散景致加。 陶來束嫩葉。綢繆誰能披。定知泣血夜一千里欲相貽5

青島積雪

因賦。

晨起降霜磴。千山爵未開。蒼々烟水上認得一枝梅。

詠史五首療隊駐詠史當是初一首

"以下四首似山居誰

春園芳樹下。巧引細流斜。-任飛花點-餘酣欲漱霞。

文。誰是知音者雲中自有君。

非有孤烟起。誰能認艸菴。家僮抱去。竹下汲清潭。

一片將歸去。遲々山一方。貪看閑逸趣不似世人忙。

西嶺餘霞

鹿山重誰將昆吾鐵。新作眞人牀。一臥三千歲神遊件玉皇。

有物卷束柔葉。墜在山嶼。樵人往々得之。呼不見鹿山色。烟雲日夜封。春霖忽已霽o嫩翠幾千里。

曰杜鵑消息。人或贈之于藍田境君境君求詩

叢生一畝竹。滿地籜龍饒。昨日纔三尺4今朝上紫霄。

鶯鳴澗

1

蘇山難可辨。幸此屬新晴。天風颯盈耳如聞鸞嘯聲。 可憐新竹色。嫩翠入看濃。唯恐風雷夜竿々化作龍。

東隅爭獻奇。中有孤煙起。不須指示人皆道蘇山是。|貞節同松柏。玄冬色自住。忽疑微雪集朶々粲生花。

吾愛阿蘇山。形勢似天姥。秋空淨如拭-秀色射眉宇。 題畫竹二首

一夜輕雷動。春流滿野田。非因能含活`何以要豐年。 慘澹孤村曉。數枝臨水開。溪風何栗烈遙送暗香来。

望蘇軒三首

詠枇杷

遮莫春芳歇。藤花雨裡開。滿園紛紫氣恐有真人來。」種松多歲月。貞翠截成陰。何要朱粒色山中自有

知勞圖三首十月

蕉石澗

初冬風日麗。箯揚一何翩。有丁善戲謔無人不粲然。 永晝眠初覺。吟哦澗水涯。題來蕉與石知是幾新詩。

轉磨當時日。風光屬小春。野人顏若鬼邪呼見天眞20

柿壇

春榆候新賓。老幼互相忘。一任鄰鷄喙衆澱自穰々。 行吟句始就。徙倚柿壇邊。葉々如相待。飄來植杖前。

同前二月

梅溪

林間掛月輝。寂寞蒼山晚。知是姓龐人°松門曳黎返。|久雨朝來霽。紫笋滿地饒。可憐盈寸質勢自凌雲霄。

樂々亭詠紫藤

松塢

鳴雁連斜日。歸帆落晚風。定知樓上客詩思在斯中。」雨過漸凝紫。阿難映夕暉。地偏人到少。一任鳥脚飛。

題書應柴野先生需

竹塢

題畫應坂井生

紫藤徑

五言絕句

山櫻四三樹。弄色雨餘新。堪迓嘉賓坐落花看作茵。

櫻壇

壺梁先生遺稿卷之四

間寥深澗裏。有鳥報新春。近在枝間語似迎移屐人。

遺稿卷之三

華舘隆然望不迷。官餘時使客相携4寧無黃霸能來鳳。

休厭言游枉割雞。習々風生高柳下娟々月掛碧梧西。

旅情今夕因君慰。醉裏新詩取次題。

縣宰寒泉先生宅集恭賦奉呈

輕棹將隨潮水去。不愁城裏醉歸。

吾甘張李風流似。君自龍門一世賢。

霏々細雨渺江天。此地清幽興同柴先生及芙蓉山人遊三匝祠得一先

葛子琴席上賦呈竹山先生

休笑跂狂田野客,無餘談古語頻顛

高亭近接大江潯。樂事自無塵事侵-君家父子美名傳。寧料相招開綺筵
詞賦將逢楊狗雪浪當窗宜展帙。

風松入坐似鳴琴。先容兼有曹丘意久客那爲莊寫吟。

偏喜石山城上月。慇懃照得友人心。

宿雪浪窗主人屢爲余會諸彥因賦謝之

春日過麓谷山人。山人善詩賦。嗣文晁以書 洞天元自多霞彩。裁作兒
孫斑斕衣

師聞。因賦

才高堪讓士衡多。遷喬鳥向憲間語拚醉人隨花庭歌。|百尺高臺掛麗暉
。壽筵迎客興何違謝家已是生珠樹。

村屨將歸還淹滯。林頭懸月々婆娑。

孟母還能斷錦機。換骨人從雲際至將禽近席邊飛4

復陽洞集壽萱堂六十

春園會客興如何。紫蟹銀魚酒若河o性僻空慚中散懶。

更憐春月朦朧夜。聲入朱粒情有餘。

11

塞上秋風葉落初。南翔萬里度長虛。二生贄想堯時制。

。

雁

高堂良口屬新晴,玄語相酬慰旅情-墻上花含春靄媚。

池邊柳惹晚風輕。靈珠元是期良價狗監寧無推馬卿。

樗散慚吾頭已白。昏々謾醉玉壺清一尺帛傳胡地書。雲際啕蘆逃弋繳o
江間唼藻就沮洳。

監。

丹青不讓李龍眠?山合臘雪晴初見林吐春花晚更鮮。

自牽-弱柳千條荒塚外。

飛鳥三匝古祠前。春風坐穩談成綺氣韻人高盡入禪。

梁先生幾載盤桓攝水濱。名聲早已四方-梅津吹笛春風夕。

墨海放舟晴月天。不啻文章成後學還能禮樂治遺編。

集

鳴禽伴讀書

嘗草況有五六一作知徐降席上賦呈

梁 杵樂阻風過方上回首鏡山千里邈。月前杯酒幾時同。

投宿偏喜隣酒肆。貰來聊此破愁顏。满喜常低

一從馬首蹶然東。半夜懷人客舍中澤國正逢龍節至10

四

危途幾處苦躋攀。况復盤回往若還七瀨河邊微月上。

三

久住道中

行亭相逢一醉具相引。共提殘尊上小船露荻風蘆蕭瑟夕。

松堤竹渚渺茫烟。玉壺流與銀河接仙羽橋疑烏連。

忽到故人棲隱地。浣紗溪口月娟。

原校噪恐鳴之

多俊士。文林恨不共翔徊。

11

七夕同馬彦章壺水汎舟訪琴山小隱

之子音容路傍相見便躊躇家傳鴻寶青囊秘。

次奉行島田君际瘦馬韻

彦根鈴子建贈詩次其韻答之

辨岔作糍

英材。

聲哀琴曲中。

欲避六四四

肥後文獻叢書第二卷

風光索莫古城隈。一道飛泉入望開已自鳳儀山下出

又從蛇口里邊來。穿雲粲々疑飄練o觸石殷々似激雷。

爲是溪流多浬渫。于今磊硐產炎蒸到處同。喜君淸館倚林叢青衿相值三千坐, 滄海遙來九萬風。盤裡沈瓜凉轉動談餘把酒辨方雄,

何圖側有將歸客。别鶴玉不如。1石飼來嘶始長。天生自異驚駘腹?思材原識求垌野。

從狩時看在渭陽,汗血色淸青玉勒瀆珠光映紫絲韁。人探名山石室書。簾外淸風夢裡到o梁頭明月望來虐。

休言清癯身將老。唐公元自愛肅霜。原護區德行塘公元|相思千里投佳句,報得慚非瓊與琚。

九重峰畔片雲間。凄風犬吠荒村外薄夜烏噪踈竹間。

樽酒暫時開,抵掌高談愉快哉世故酬來多樂地。

人間何物累靈臺。饒它白首屠龍技推爾青衿繡虎才。

自古江東江天時有雁書通P徑知松竹能容仲學是淵源本慕融。

|灣頭繫穎問幽居。紫门銀魚興有餘。墻上飛花過雨後。 愛爾翩々才子情。青年夙已得芳名彈琴一肉洋峨曲。

門崩垂柳懸絲初。鴻寶傳來三世業豪情看破五車書。 作賦千秋金石聲。釬鏌應逢風胡子-乾坤不假曹丘生。

隨呦鹿時 | 由來萬卷堪終世。南面何須要百城。

春日白水文館宅多謝主人能慰客。雪酣何敢說歸歟。

紫先生宅集倉善腳將還歸七八云

壺梁先生遺稿卷之三

六四三

瀑布圖

七十

壽米村翁澤國從來春色早。一枚須向故人傳。龙業

多爾清風堪刮目。壁間新掛七絃琴。

原校絕疑

征驂歸到古城陰。開宴何教俗事侵郢里裁歌翻白雪。 征駒侵曉氣翩々。歸到鸓媽巖窟前千里探奇酬夙志。

燕臺招駿致黃金。盈芳酯供賓坐盆植奇花慰母心。 他山攻玉學先賢。雨絕粳稻膏津外4月醉冠童酒谷邊。

飫肥

老請之0

年。今玆送金若干。既而我公命誘導邸中子弟。歸期在明晤語相忘天己暮。灣頭月影照人明。

辛伯彞恭承台命。說經昌平學。期年卒業。賜|應緣秋雨曉來睛。養眞惟愛杯中物-玩世不求身後名。

河邊雕閣對崢嶸。幽侶盍簪尋社盟忽覺淸風蘋末動。

因憶美人遙寄與。寧無魂夢動閑亭。

春松閣次森山生韻

貧家雖是無兼味。琴酒相看意不躁。

一叢梅花傍林扃。礬去偏憐朶々馨色覺盈焞侵蟻綠。

折綠萼梅贈井琴山附之以詩

書劍飄然來訪余。堪慚千里慕虗譽遊知岳湛稱連璧。

中庭石秀有淸流。鬢毛慚與丹楓映家釀喜教黃菊浮。

寞笑醺餘生故態。滿堂皆是舊同遊。

千里同人不愆期。相迎落日酒還披°高歌郢里知難和。

山莊風色入高秋。佳節年々此解愁。一逕竹主人有詩見贈和韻答之

田中八條二生至

同前

嘉會幸無塵事遮。吟筇不厭路程遐園栽脩竹癸亥九日叢桂園集主人有事故不至命子弟供張 蔥々佳氣滿君家。張宴喜無塵事遯屋後叢篁常駐翠

因賦謝之

疑蔣徑

壁掛孤琴似戴家。漫使口號題赤葉恨無肩輿就黃花。

非因五六來童冠。觴詠何能到暮鴉。源求魔字河顺

同前深無白日。

影看繙帙映鴉靑,玲瓏宛似千秋雪-錯落還疑北斗星。

階前珠樹競生花。步吟長祿橋頭月坐看壽安山上霞。

豫識期頤猶健食。行年七十未懸車。

紫氣豐城誰得窺。多爾卮言翻麈尾慚吾霜愛映烏皮。

向霄何必投車轄。前嶺無端懸半規。

情似呂嵇時命車。一道清風生几席數行過雨灑芙蕖。

十一月公殊命賜暇以母大田原生還題迫間維昔樓船絕大洋。千行靈燭駐餘光金波吐納黿鼉窟。風霜染葉々離披。不讓芳春花發時猩血九漸遊冶服。 珠斗闌干罔象鄉。夜暗十州丹樹照°曉淸三島彩霞場。雞皮三少妖姬姿。海生烽火光相射山出臙脂色可疑。

四

老少年

千秋不管遺蹤在。赫々偏能照史籍。

采摘知君供下物。悠然傾盡幾多瓶。

恍見五星聚漢年。彩暈曾迎浮鷁吐。長芒更射衮龍鮮交應朱博與蘭馨
。

芳莖挺。花發况教華露停榮見司空兼印佩。

馬訓導宅生綬草因賦贈之

111

長風飂々拂衣襟。一片柴丘大海潯波際乍摧烽火樹。 故人幽築托青山。舖 碧霧冥々隔世寰。逃晦應耽玄豹

洲頭齊擢珠林。宋都星吐紅芭隕ᴼ楚水萍褾朱實沈。|隱ᴼ縶維鷚駐白駒還,凉陰有待雲極長淸依然澗水

疑是燃犀多少客。遍窺靈怪九重深。

閑競秀峰 頭晴後月。相思他夜夢中。

送曾木生歸豊前生居曰豹隱窟故詩中及之

11

。

*四二

火棗進群仙。

白縫之海接青天。一望西南渺似烟秋夜登柴丘觀寒火詩六首

五

扣君家。

由來吾性樂丘園。剩有新醪滿緑鐏11

五

肥後文獻叢書第二卷

今日風流何物好。

昔時交友幾人存。貪看池底游魚靜。一任林頭棲鳥喧。

非是相逢原莫逆。誰能囑此初訝曜靈昏不沒。

稍知寒烁夜潛燃。風生鵬際明還滅波湧鯨邊斷復。

應是蓬萊催讌會。争陳焰緑雲間偏腰眇。暈紅波際忽蟬蝓獪餘王屋流烏色。

兼見龍門燒尾烟。吐氣巧成千仞閣泣珠潜慨九重

更疑身泛仙槎去。倏忽時過牛手邊朱瀲期秋紫海隅。波驕物色口千珠天低極北疑龍燭。

地接日南混蚌珠。列炬臨風光轉動群螢迎曉影將無。

何人新鑄菱花罷。直向水心收炭爐。

海色養茫半夜天。遙看寂點映波連宛如十日懸堯代。

出自亭々。紅蛇繚繞斜綠樹º彩鳥□縱來啄庭,

一醉赫然何處叟、中庭舞去自傲。

此中知有神仙在。不是秦皇欲褰裳

老來同是多眞意。睽殺世間多粉華。

寂寞幽亭對碧篁,何圖盛宴引|踈狂不翅銀臉堪礽醉。|霜後山莊興可賒。何妨偶坐到昏鴉丹楓樹密合斜照

還喜黃鸝能鼓腹飛絮落花春欲暮左琴右帙日偏長。 黃钔籬數花。竹石床無俗態素琴縹帙足生涯。

盆中別有芰荷淨,一坐頓敢衣袂香。

初冬村大年山莊次大年韵

席上次公翼韻

萬里長風大海津。波濤日夜蕩舟頻木綿山上雲如墨4 |駸々征騎向天涯。別酒相留館柳枝己是一身稱可委。

玉女嶼邊雨似綸捫虱偏同談務客生瘡全是寢苫人。何憚九折此乘危。蘭香風颯談經日兎苑雪飛裁賦時。

長灘三十有餘里。危嶮其如不訾身。

共說武昌魚自美。不須長鋏促歸期。

送辛伯之東武

泊守江港

青衿今日欲何之。遙指鄉關滄海涯命去應同中散駕

山翁水爭相引。山下清齋水上。

問束慚比子雲奇。一叢憲竹流鶯囀數曲床琴別鶴悲。

閲說幽栖隣鬼谷,歸求知是有餘師。

水靜山閑人跡稀。觀山觀水惜春歸水園昨夜逢山雨。

送都仲直還豫州

臨水山人弄橫笛。山風吹入水聲來。

野服綸巾此生。丹青憐爾獨攬名衆峰縹緲雲將吐

青山綠水絕塵埃。山舍蕭條傍水隈 水竹林山徑迴。

1 壑潺湲水有聲。誰識縱橫方寸玅能成俯仰再升情。

吾曹別有洋峩曲。請聽朱絃手裏

哈畫師芙蓉山人

休潮吾技雕蟲似。猶自優游了此身

山水何須如畫圖。片山水逼靈區 山旁導水非希聖。

夾水競揚熊耳山。山擁水雲偏杳渺水漂≡礫故潺湲? | 紫蟹銀魚勸酢頻。交情不管舊兼新盆中山寫滄洲趣, 水禽來去山林外。舍得山花向水還。

瓶裏花偷閬苑春?短褐相逢千里客同腹何識異鄉人。

水泡山幽意自閑,誰移山水戶庭間穿山直下鷄翹水。

過石川氏

水際移山聊學愚。水浸山柯湛不動由迎水靄忽將無。

探山摘水平生好,欲種山薺與水蘠。

山茶花傍水村開。朝隨水北賖山釀夕向山西拾水苔。

山石一時生水衣。水莧時依山路發°山櫻或傍水涯肥。

家住山南水上頭。日携山水邊遊將尋水練懸山壁。

初識壺中別有天。茅堂臨水轉寥然窳遮新樹重々翠。奈此山樵暎水流。水畔猿迎山月嘯山中禽逐水萍浮。

坐惹深潭澹々煙。已是玉衡明古典還將隸首逐先賢。|水間時撲山螢去。山下水騰不自由。

乃題詩。

海通,山西一路水之東水光時浸山光敞。

島子近築堂於壺井而居之。余與諸生過焉? 喬木 山還連水口勢雄。聞說山漿宜水物-遙 水母贈山翁。

圍屋。清流漲砌。闃乎不聞人聲,余嘉具得所。 共言山水生涯是,臨水攀山樂不窮。

水色霏微暎遠山。山籟水音偏寂 水山鹿自間。

点校色

恐樹

數之爲術也微矣?非澄心覃思。則不可得也。故」山樵隔水時相語。近涵翠亭詩序

尋水探山久不還。欲因山水謝人間山林窈窕連流水。

天然美質勝琳鏞。凝露臺邊手自收鴉看繽紛紺苑集。 山口幽蹊傍水斜。水屋爭栽山果樹。山僧醉許水梭花。

星疑錯落佛池浮。久藏寶匣同如意-曾列經筵齊點頭。」我生唯樂山將水。應住山間或水涯。

一作子雲玄尚白。慇懃遙向下方投。

水帶輕烟山擁霞。春山春水興堪賒水頭奇石蓮山徑。

佐賀關桂潭師惠凝露石同賦謝之

蘇山深處有茅室。歸隱多君名自芳谷裡白駒無漁絆?|十里之山五里水。一旬成水三旬山一水縈山木依微外。

霧中文豹倍輝光。當崽奔汪清泉響繞舍叢生翠樹香。 山落水波清迴間。水草連山堪受坐。山雲含水且怡顏。

到日優游何所造。時同鸞鳳嘯朝陽。

自圖山水誇神妙。名水靈山可往還。

水毫臨罷山陰帖。開課山僮步水隈。

送人歸隱蘇山得七陽

三軍整列統親兵。不唯室裡芝蘭馥總見階前玉樹榮。

欸待從來忘勢位。悠然共醉緑胥淸。

®

崚岹高館傍屏城?何料佳招及野生五禮傳家存典古。

小笠原相公宴集賦奉呈

山水謠和藪教授

肥後文獻叢書第二卷

慇懃約去重遊夕。玄語相酬明月前。

白水蒼山一路開。山烟水需望悠哉。水廬多與山店接。

山烏時追水蚋來。沈水香依山戸炷暎山紅傍水欄栽。

徙山廬向水海

古人擇森々寂々無何有之地講之其中。算師牛-流水環山與六三九

壺梁先生遺稿卷之三

莫道相看忘彼我。呪談山水有餘。

鏡山明月影婆娑。斜抱琵琶感慨多。一任征袍沾白露。瀟々寒雨灑江城。連榻飛觴寛旅情°窮巷却忻塵俗少。

偏敢猛士泣淸歌。波飄天際魚龍舞雲駐岸傍雷雨過。 幽林時聽野禽鳴。七粒操曲嵇康妙八月觀濤枚叔名。

風流可惜佳公子。漫當方面弄干戈。

失題

多謝□□能勸醉?何知身自似口蓬。

紫極重遭塵霧侵。瑤輿豈計狩高岑。□□□□□雖擎。

虐襟誰子與君同。遲日開筵歡不窮生涯堪愧雕蟲技。 天柱口無捧日心。南度衣冠空老死北征將士日銷沉。

雅致偏憐揮麈風。爲是假山連屋裡⁰偏疑縮地在壺中。」可憐帝運替移後。嶽路春風花草深。

短床還向樹間移、優游挂笏浮雲過槃礴揮毫白日遲,

邂逅論心多樂事。霑翰遮莫角巾欹。嗪酸翰

芳野懷古

墻上口口如有意。迎居往门口新花,

浮煙慘澹碧江涯。憑檻蕭然對暮鴉爲是從來耽阮嘯。

失題

園林四月變禽時。同侶相延舉酒卮幽屐不妨苔上印。

冬日西岡君至喜賦分韻

盤收萱草泄春輝。醺餘共喜新詩就⁰臘後不敢幽事違。

脩竹一叢流水上斜懸片月送人歸。

屢此相看須盡醉。從佗江上子规啼。

高樓把袂俯丹梯。一半斜陽碧樹西⁰論風原是稱齊魯。

歳杪過村大年

過古賀君邸美爾忽換凡骨去。飄然直自踏鼇頭。

寒煙蒼澹鎖柴扉。同侶携來此息機o窓對梅花疑雪色。

舍得八齊

蓬萊山上多霞彩。遙映兒孫舞戯衣。

海中孤島向何求。應認彩雲縹緲浮萬里風濤白於雪。

夏日送人遊繪島

初度延賓事不違。歡聲滿坐對春暉o賢同姜氏常猶績。

相逢忽與浮雲散。將阻東西萬里程。

參政堀君大媽人八十誕辰恭賦奉壽

飄颯風疑楚館生。人本一臺稱二妙、詩看全璧抵連城。

千尋崖樹颯如秋。珠輝夜吐鮫人室蜃氣朝翻神女樓。

教似孟家故斷機、五色桃隨庭際摘o千齡禽近席邊飛。

命駕還將同呂嵇︾銀膽紫蓴酬舊識o淡雲疎雨入新題。

忽能千里致嵇車。辯傾滄海難爲水衣振名口猶帶霞。

多君百鍛焠精鋼。開匣悲風颯一堂河漢初晴星錯落。 冬日江天辨不晴,公莊置酒禓離繽紛雪似梁園下。

芝贈松二生還鄉

詩裁。

繽紛雨雪前途。蓬席上次大澤者韻

雪中宿玉川漁家應加元厚需

知君多暇能探勝。襄裡文辭誰比隆。

饒它坐久將昏黑。月色娟々在指頭。

落日蕭然客舍初過妙解精舍賦呈大澤者

11

幽亭新築水西頭。官暇逍遙屬素秋風引鐘聲搖竹戶。 人產恢々大國中。文章追琢屬天工o棄繻原識山東妙。

月移林影上書樓。送陶時出廬山社o訪戴還同側舟(一揮塵還耽江左風。一片論心時撫劍°五絃翻雪巧移宮。

非是高僧耽判理。若爲方外脫身遊。

縱分都下無投刺。千載堪敢名譽隆。

東奧仲木生寄詩次韻大澤尊者遊川觀亭韻

答之二首

盡日相看無一語。風前含唉轉堪憐。

大海蒼茫萬里遙。秋風八月捲奔潮聲々動地鳴雷激村琴山宅詠紫白二牡丹

觀濤

慣屼山入盡中看。家醪何惜傾□□園菓還將充晚餐。 芙蓉新發水蒼茫。縱匕首鑱盈握-應是千秋永吐芒。

爲報浪華同社士。來遊一此采芝蘭。

休道相州人已逝。吾邦今日出干將。

*三八

而後文艺叢上第二卷

?

鬣々陵雲白馬驕?潛府何邊珠作闕神人無復石爲橋。

短身題得生雙翼,直到扶桑第一標。

名花燦爛艷陽天。不斷淸香浴綺筵處女色分姑射上。

眞人氣結函關邊。野禽舍得供朝餔˘胡蝶飄來貪午眠

世上炎塵猶未收?諸天獨自覺淸秋忽從無熱池邊過。

還向白蓮社裡遊。鉢底降龍多氣象禪餘揮塵亦風流。

蒼山流水境幽哉。杪履遙尋禪室來兜率天圍香剎泡。

優曇花映法輪開。生涯堪愧屠龍技分譽原推愛馬才4

相視欣然如舊識。碧雲呪復入仲廉々々好烨劒

中。忽投華牋句何工生涯堪愧雕蟲技。

身跡偏憐歌鳳風。海色晴分毛狄地9月煇秋冷羽人宮。

戶投身水一隅º蘆荻花凝迷旅鴈。

林堈月朗起栖鳥。白頭釣名疑望破屋供茶姓想盧。

半夜燒魚聊取醉。饒它寒氣裂人膚。

南土茫々一路通。看君行色逐孤鸿人烟十里江城外4|歸裝遙指海雲端。埜館相留共倚欄 沸泉兼菘上響。

初冬眺奇園送菅野君還浪華

送菅子舒還松江分韻

多病迎春猶在蓐回頭葱日獨空嗟。

朝華

何知身有簪纓累。醉臥青霞洞裡美爾乾坤多足跡、桑蓬酬得丈夫心。

去年今日攝江潯°揮麈彈琴情意深4 一別參商相隔絕4|山市東頭-逕懸,幽栖寄在古城邊坐餘黃菊猶浮白

何圖杖屨此招尋°霏微兩脚殘花外宛轉禽聲新樹陰6|人戴烏巾常誦玄。負々禽弊墜葉外霏々雨脚斜曛前

席上次伯潛韻

過青霞洞

已識盛名人盡慕。相迎相引日紛★0仨魚一

千里送艸池二先生遊松江

樹杪懸泉鴨似鼓。曉簫天籟入清聽。

對之盡日吾忘我 5 想得當年濠水。

失題

一作

亠畝林池淸且深。潺湲遙自碧山岑°陵空寧要琴高駕?上方香刹接青冥。投宿知師此裡停。已是渡杯驚海若。

役 所聊隨子產心。細雨晴時齊潑洞 香芹生處各浮沈。」寧無妙喝泣山靈?三千觀世雲生坐。一片澄心月滿庭

碧巖寺遙有此寄

聞僧萬口宿嗎

。

嫌它盡壁少文名。衣裳點々烟霞

珠貝千金詞賦鏘々金石只合才名期繡虎休言文字屬雕蟲。

呜

海市中。玄語相看堪醉倒。君心宛似玉壺清

生魚放池

片,隨

*聯】作嫺霞

衣落、金石能々入眠歸來堪向高堂獻。白鷺灘頭橘柚紅府城遙在大江濆。一路天南望自分三尺鱸魚秋正美。

同舟李郭酒應诫。論心明鏡池頭月染铵蒼龍山下雲。

雲山路不迷。飄然命駕此相携邦知魯衞稱兄弟

交自風流比呂?野服角巾憐故態鳴禽落木入新題。

留連秉燭談愈熟,何管闌干北斗低。

人日病中聞諸賢集川觀亭遙有此寄

郊居近接水西涯。盛會誰辭飛屐返芳艸侵庭知不掃?

垂揚堂戶且從遮。新醅澆去胸中磊-佳作麗於勝裡花。

天钮酞維遠樹依稀啥

送萱君譽重赴浪唱驪駒淚濕衣,淹留不似及瓜歸世官原識箕裘比0

夙志何曾弧矢達 雙屐千山探勝過孤帆萬里入雲飛。

到時應值春風起。 花鳥依然舊帝。

短服褊衣頭是蓬。左旋右抽疾於風單身欲敵三軍帥? 佳人來自浪華城
—一劍飄然萬里程o慕彼浮湘太史跡。

孤山亭集賦呈河伯潛

飄然何日乗桴去。翠麗山邊問爾廬。

好對梅花微唉色。浪華江上夢相牽。

聊同赤玉枝。

異域茫々萬里賒。其。

夜景更堪投轄去。殘螢點々映窓流嫄校將恐

琉球人

纔開停午後0

失題

。

是盡餘口。

昨日千門春色遍。今朝十里凍雲生半爲細雨紛々。

孤根本托碧山陲。試向階前手自移4嫩

席上和石川君韻

清芳還動納涼時。天台肯比明霞色-

借問誰家催晝夢。翩々胡蝶忽追隨。

春雪

詠午時花

從容時向了口語。何似蟠桃托海洲。

君是西方王母儔。手移嘉樹在墻頭千春秀葉閑初麗。」林際還看紅樹新。岸々烏巾羊仲侶蓬々髪羲皇人。

五色瑞膏凝不流。清籟自將緑綺合蒼烟欲傍斑衣浮。 晤言促席忘歸去。一帶浮煙暗四隣05

咏松奉壽某孺人

十里空山絕世塵。茅齋倚在碧溪濱o籬邊縱是黃花老0

共嗟斯會知何歲。行李今朝將問津豚校相恐

重陽後過山房

物。六月飛霜下碧空。

廨舍寥々江水濱。斜窓曲几絕塵埃爛慚似持螯客。

一氣兼凌萬丈虹。何畏應同赤帝子-飛逃堪唉白猿公

肥後文獻叢書第二卷

玄語喜隨揮應人。一世紛華雲過百年軀殼火因薪。

坐間時看腰間幽亭招客儿筵鮮。積局新晴四月天博物誰能同鄭相。

觀風君自似吳賢,孤松月上論心坐4萬竹風生把臂前。

相見共驚容鬢改一霑醋好村園風物屬清秋。乘暇飄然此嘯遊一石逕苔滋人跡絕。

霜林葉落鳥聲幽。老蒼偏喜時相逢大白休嘲頻自浮寥々淨界碧流邊。相値相逢子墨莚非是幽人能習靜。

何隨白肚共談玄。揮毫席上慈雲合彈指林頭月圓。

還伻飛花片々輕。芳艸池頭迷蝶舞°垂楊堤上澁鶯聲。

扁舟頻動山陰興。唉殺漫談堅臥名如十載絕雙魚篆文從古同秦字。

卉服于今想夏書。地似江南多橘柚°鄉皆海市富車渠

11

遮莫浮遊萍梗似。霑酎須臾玉壺傾䣕0鍥

忻因祖餞侍高堂。右帙左琴幽致長柳葉掩門風裏嫩。 江風一道送潮聲。幽室延來此繹盟憑儿白鷗方泛々。

桃花當戸雨餘芳。囀鶯聲滑方求友別鶴粒悲奈斷腹。|吟詩黃鳥故嚶々。鳴琴不惜翻流水萬卷還憐勝百城

雖是分襟千里隔。夢魂重此醉瓊觴。

論文。齒德風流最屬君喜逢鍾子頻探曲。

慚得郢人漫運斤。竹丏荔墻憐寂寞°匏樽濁酒亦酣醺。

晤言興熟忘賓主。四坐相看誰不欣。

對鷗樓二首

柴先生集得觴字二首

相共題。

尋盟幾載共小集次村大年韻

嘲老去猶餘舌。旗鼓相當欲剖毫。

高堂張宴引嘉賓。六十知逢覽揆辰麗澤園集藝州醫人赤松生至因賦

壽醫人堀内翁六十

相逢今日風塵絕。共對江頭雲卷舒。

寂莫茅堂隣野居。携樽愧比子雲廬-人將晩暮猶耽古。雄嶽岧嶢聳碧天。千秋秀色射人鮮雷轟深壑煙常合。

志本桑蓬在遂初。名嶽難探三十六玄言徒著五千餘。|日躍滄溟影倒懸。羽獵蹤餘大麓在壽安名自異邦傳。

樺世儀及諸子載酒

阿蘇山

亦恐却之誤

白銀臺畔月明中。無那佳期事已空彩思耽詩身欲瘦。」野客將歸天一涯。離筵何敢負佳期間山含白雲臨烏ㇽ0

青衿慕古氣方雄。縱分病渴長卿似去是觀濤枚叔同。 樹擁紅霞映絳帷°浮蟻酒醺談熟後˘啼鵑聲落月來時。

?o 原校去疑知

誰子今宵裁俊句。教君忽爾愈頭風。

惟言此地重遊日。依舊頻々問字奇。

傳訣共推三世業。

隔垣還視一方人。厨中酒釀流霞就庭上芝停華露新。

君自長生存妙術。應看蟠木八千春。

余在武昌米澤口學神保子惠詩賦此奉謝

誰得命車同呂嵇。千山萬水渺東西。論時雲壑龍初躍。

奏樂郊陬鳳欲栖。池濶茆芹應已采°門深桃李本成蹊。

何年此地南樓夜。月裏新詑風雲擁樹飄如旒。緬想西巡駐蹕年三四一作雷轟超潤睛

看雨電进屛廄畫吐烟

吾性由來厭世囂。飄然時向此園聞賓忽倒中郎。

命的還持吏部嫯。身隱杏林名即着遊經淮海氣何豪。

休風杉舍集田子長有病不至同諸子賦贈

雪後過遊學道院得文韻

悠然一酌傾浮蟻。頓覺乾坤春色回。

杯樽坐久無塵氣。獨有鳴禽入靜聽。

濁酒金鱗向坐開。報言遙自友生來枯魚人愛隨秋菊。|郭外春光煙繞扃。哈藜好向此亭停繁霜遮莫侵頭白

鮮眙吾憐對臘梅º盤裡疊紅々艷々枝頭凝雪々皚々。垂柳堪憐映眼靑。大海長風生拂塵名山秀色對橘經。

$ 野坂生贈濁酒幷魚

日頭接。

路自金牛谷口通。初地花深遮白日上方樓聳摩層空?

維遊頓覺消廛想。堪愧簪纓誤此躬。

11

會相看常若此。乾坤何有客中愁。

嗚磬寥々雲木中。緬懷千載朗公風嶺疑靈鷲峯二首

11

寒泉先生宅集傳道朗公曾愛山。遺蹤多在白雲間°神通力使巉巖鑿? 獨乘風雪度長堤。橋畔高亭望不迷⁰玉樹玲瓏臨坐照。

解脫身投空洞。上界日斜人到少諸天鐘響鳥飛還。 |氷山咫尺入憲relative低。敢看函丈青衿集談對遷喬黃鳥啼0

何時塵世口纓絡,巾舄翩然屢此

爲是相延寬禮數。能分野客醉如泥,

雪中過尾藤先生

擬李濟南神通寺作二首

風雪中庭更有寒梅散。遙隔窓紗送暗香。

作膾鸞刀響。一簇紅霞粲欲浮。

田子長贈鯉魚

同

六三四

百尺樓高對嶽道。天邊雪色照窓鮮新詩愧作尋常句| 道院寥々絕俗氛好乘晴雪此論文銀山十里迎人照。

雅會喜開眞卒筵。銀燭紅爐揮翰外-湖蓴淞膾把盃前。 珠樹千入看分。子晋寧無來鶴駕˘初平疑是起羊群。

餘酣促坐多幽致。舟裏疑陪李郭仙。

誰圖鼎裡泥丹罷。還勸九霞仙醞

萬仞芙蓉色映堂。幽期置酒興偏長6靑氈坐靜人如玉。

彩筆詩成字挾霜。己喜下交無適莫欲隨我覺問行藏。

寸鱗難可求。嘉魚喜自故人投非關腮向龍門暴。

疑是額敎王字留。晨駕琴高陵碧浪o昏逢呂望觸金鉤。

家長煙暖麗城頭。曳杖遙尋林築幽門駐靑牛來紫氣。

川餘白礫想滄洲。柳風吹面多談欘松月當窗添酒籌。

故人幽築在何邊。忽認杏林茫帶煙o德見膝前星自照。

對岳樓集賦呈諸先生二首

洲前況有孤松秀。笙籟當窗奏曲頻。

11

彦根西川子璉母堂八十乞詩

短榻下來多蜀客。誰應作賦似長卿。

況有前池烟水渺。忘機終日弄禽魚。

世子遊戶越別館辱賜陪從因賦

秋日過昭曠館分韻二首

香郁々入簾櫳

誰家狂子妄搔痒°搖蕩非關引晩風。

海上嘉木盈園鬱作叢┘最憐奇藹映墻4芳名本識中書省。

濃艶今看百日紅 零露溥々醉蛺蝶-飛111

別秘摩尼寶。不向人間容易投0

過淸林精舍。樺世儀及岩篠二生亦至。有詩僧

待之不來

嶺外奇花舊有名。官餘看弄愜幽情 應同虛白堂前發6

二

誰謂桂陽千里懸。忽移嘉卉在堂邊°清芳知待薰風吐?|雖是床頭簿作堆
。葦編不廢向憲開節同羊續懸魚意

濃蘂欲迎朱景然。賞遇香山居士劇名從賈至舍人傳。譽似公孫博物才。壁間山水應紇響瓶裡花香傍酒催。

緬懷裁詔揮毫處。色映鳳皇池水前。

深知淸雅能忘勢。坐上時迎樂牧來。

詠紫薇花三首

渫園芳草綠將匀。風中齊唱茹蒽婦ˇ雨裡同耕桧模人。名知肘後方新傳o琴中流水論交處階下青苔弄色鮮

別有前山嵐翠好。初知大米書如神。

一醉攀樓睨嶽雪。飄々身似挾飛仙。

遠坂國相廨舍

不必萬年枝上榮。紅蘂含風晴更麗濃姿裛露晚愈淸。

笑他桃李須更艷。謾道不言蹊自成。

市中棲隱對層城。幽徑頓成丘野情折臂元知三世業。

解癥能使五藏淸。墻東紅樹懸斜日籬畔黃花媚晚晴。

祇園萬木稠。寥々鳴磬警淸秋忽從赤羽橋邊過。

直入青蓮舍裡遊。苔色但餘馬跡在雲光欲傍客衣深。

高僧雄風颯々拂庭除偏喜追陪混曳裾朝儛應同遵海去。

寢門知是問安餘。滿籬黃菊花難老4 千樹丹楓霜下初。

堂開宴壽慈親花明石鏡山頭曉,

人住琵琶湖水濱。

日麗金龜城裡春。縹渺彩霞臨酒動 爛斑五色著衣新。

巍然華舘碧流傍。盛宴追陪興自長o楓樹帶墻上麗4 棲鳩乳燕報深春,
閭里蕭然絕世塵一塢桃花紅欲綻

田園雜興次某生韻

松下大奉行宅集

高閣連廊靄夕陽。官餘引客共相忘詩推俊逸鮑明遠。

奇禽啼過把杯前。酡顏慚與紅榴映o白首况憑烏儿眠,

浦口幸餘柔霧在。欲迎纖月泝清漣

學自淵源馬季長。一水奔烟林外白寒花帶露席邊黃

愧吾老去無能事。擊節漫謠既醉章。

參政堀君宅集

江天晴色轉妍鮮?披對誰人不適然狂蝶飄來移席處。

五日瀰盈園集

泉頭露竹影斜々。移床人與禽魚樂o揮塵情將朝市賒。前林墜葉送秋聲
o芋煨錦里園趣泛柴桑杯裡情。

遮莫園林芳正歇。毫端別自有新花

老脚不堪移屐遠。扁舟依舊此尋盟。

雨餘天氣喜柔嘉。來訪琴山高士家戶外風松聲謖々。」幽亭招客屬新
晴。佳節偏憐風物淸-西

暮春叢桂園集

九日泛舟過川觀亭次主人韻

由來世所稱。天然皓質少偉曾餐姑射千秋雪。

且飲崑崙萬古氷。三嗅時迎朝日低飛或欲晚風乘。

恐爲重譯樊籠貢4晦跡深棲山一層。

次田調節翁韻

牀上孤琴依舊在。欲彈黃鳥囀來時。

嘉瑞詠白雉

次琴山韻

清泉泌沸竹叢間。有無遷得家長富六十化來心自閑。 菊英含露席邊香。人同揚子稱清白書墓董家已老。

最喜壽安山色麗。膝前遙映舞衣斑。

爲是虛懷能待客。相忘霑醉語將狂。

同人誰肯負良期。尋得香芹溪水涯知爲高吟時擁有鼻

還因淸話此開眉。桃花一樹紅含露°楊柳千條緑掛繇。

門子松井君見賀七十賜佳作及鮮魚因賦奉謝

門前忽繫使人車。傳命慇懃情有餘蜀錦製來投俊句。」傳聞北地主詞盟。大器由來推晚成。三世靈方肘後秘。

吳淞捕得贈嘉魚。正逢稀壽開樽酒頓覺敢光生里閭。 太阿神劍匣中鳴、人間品評名相識病裡乾坤蓋未傾。

多謝大夫能愛物。歡聲滿坐興何踈0

肩與待君乘霽到。休嫌繞舍艸萊生。

宮暇乗春此盍簪。佳期何使世塵侵o風前狂蝶淸池上-| 高堂開宴使人攀。共醉玉壺春酒殷佳氣氤氳松塢外。

志賀長甫宅集

壽松田叟六十

愧我老來酣醉甚?時々拊髀發狂歌。

屐。

庭養青苔欲上階。慚我耽酣生故態多君寄傲到無懷。

望來偏愛前山色。斜景能敢物象佳。

春初島田君集

折簡招人々不乖。相携松下叩清齋-逕開芳草纔容§ 初夏露葵園集次主人韻

飄然何日尋江左,直接風流第一人。

瓶门尚餘黃菊在。金波杯裡泛來清。

清我榭迎嶋田君 暮尚記梅花作藤花

【嘗陪遊 屬

上巳叢桂園集

1

門葉由來異等倫。况逢知遇寵光新°好文常會鄒枚侶。一林間忽有宿禽驚報道樓頭月色明已是中秋逢苦雨。

忘勢時招樂牧賓。身倚芷蘭香滿室?家傳鈐韜算如神。 偏憐今夜屬佳?團々未得同班扇-皎々稍將倍夏。

九月十三夜江樓賞月

彥藩大夫岡本君有詩見寄次韻答之

小築。

還翻白雪入清歌。淙如石罅流泉咽颯似林間驟雨過。

世上如教鍾子在。 重將改調奏洋哦。

言促席世霑醉。遮莫時違世上情。

蒲葵園集次教授李韻

孤桐幾歲托扊阿Õ製得偏憐紋作蛇忽聽幽蘭操妙曲朝爽樓集聽琴

坐斟蒲酒謾沾唇。忘機應似随毆客莫逆相憐揮塵人。|雨後囀鶯新樹陰。十載友朋鑱屈指。千秋事業共論心。

歸棹從它纖月落。清流殘夜晃前津。

床頭剩有香醪美。一醉悠然擁膝吟。

聊仍舊貫營。房櫳墻壁未全成栽松已有蟠根擢。

移石欲敢蒼蘚生。晋字慕奇推大分 華山開幅愛三坪。

玄欲尋幽隱出城凿。佳節風光轉覺春°流水潺溪迎客響。」邨居負郭路纔通?輕屐相携入竹叢野色晴分幽窓外。

桃花爛熳照顔新,從它白髮三千丈。相伴青衿五六人。 梅花照在綠池中 裁詩毆走狸毛筆來毀鐃佗馬耳風。

况復泛觴多樂事。一言一笑總天眞0

僻地休嫌供給乏。願言杯酒屢來同。

幽亭春到興如何。招客高談酒若河ˇ弱柳新梅當戶麗。

紫蓴銀膾闲盤多。偏忻雲際能逃弋不問門前欲設羅

矮屋蕭然山一隅。獨開書帙趣偏殊-林深流水潺湲響。幽亭寄在水之。同侶携來端午辰ˇ對榴花漸映面, 端午川觀亭集

山房讀書

簪。

置酒幽亭雄志何辭行路難。孤帆萬里絕飛潤千秋詞賦風霜瀨公翼宅別宴得十三章

送伊大朴遊飛蘭島

支離何料得陪遊。君自江東第一流°知說遺經輕馬鄭。

稷下先生辯是雄。紅樹山中驅匹馬白雲江上逐孤鴻。

共言物色何人是。到處關門紫氣通。

還開幽徑引羊求。帳中盤盎供兼味-醉裏乾坤是十洲。

似解慇懃愛客意。啼鶯相喚在墻頭。

寒泉岡先生見招賦之奉謝

百尺高樓桂樹叢。離筵聚首對秋風信陵公子車虛左。

送藪教授之薩州

孤客。

雨湔鯨背忽陰晴。簧奏曲聽何極?島嶼浮空削不成。

一坐展來神王甚。乾坤何別有蓬瀛。

盛德敢人醉。還有玉壺春酒馨。

過柴先生

多君盡妙使人驚。勝槩初知第一名氣結屓邊時隱見題松島圖

卜築城頭塵事稀。相逢佳節興何違憲前脩竹初到。

武昌元自稱魚美。何厭王門混曳裾0

池上輕烟寒漸微。人裁金花耽臘酒o盤收萱草動春輝。

習家爲解山公意。揮麈彈琴未擬歸。

東土漫々萬里餘。離堂杯酒執君祛苦吟常慕老工部。

送馬侍讀陪從之武州

人日續氏席上得五微

竹扉松逕無人到。能似龐公栖隱上暮扃。

無。

池上杯槲醉復醒,十載談經慚首白妙年裁賦愛衿青。 窓靜歸雲縹緲孤。豈肯高飛存酷志只憐淸話對鴻儒。

肥後文獻叢書第二卷

聆言移席歡難盡。片月纖々宏覽今推行秘書。吹笛攝江花落夕揚帆琶水月初。

爽。

三尺蒯緱星斗寒。霧晴南山玄豹變雲低北海大腿搏。

君家別有朱紘曲。明月洲前好一彈源骹晴

恐暗

吟何處停。唇城直北有閑亭°應知夢裡遊三代。

不獨腹中藏五經。憑几天邊嶽雪白-欹巾樹杪海潮青。

由來坐欲酣。何妨揮塵互々3叢脩竹籠斜日。

百仍層城帶夕嵐。守道誰言玄尚白屬文原識青於藍。

明朝欲向天邊去。此地何年重盪梁先生遺稿卷之三

*二九

張讌龍門會嘉賓? 歡悏聲湧海溟濱帳中霞醞氤氳日。」何地風光如此亭。勾欄四望入郊坷林頭梅樹開初落

壽薩南兒太史七十

過續氏分弟有詩見第六句故云

聖賢。

映月

江上林亭路不過竹山子池亭

九日蓮光寺作

中情一寫昏媾似。何識君原異人

傾蓋相看此結盟。交歡未幾奈離情兼知善射同猿臂。 閑臥茅堂絕世塵。忽欣童子報嘉賓幽林寂々桃花雨。

況復吹笙作風聲。菱鏡池頭窺月色壽安山上服雲英。」滿的悠々竹葉春。共道連城同趙璧誰能千里比吳蓴。

扁舟重逐長風去。遙指浪華江畔城。

|投來尺璧有輝光。誰能意氣耽浮白我只文章愛老

縱使桑蓬酬夙志。漫游應是戒無方。

和樺君韵

和萱君嚳

退食何人乘暇日。珊々環佩散輕風

々彩筆壓詞場。求友逍遙在異鄉-佩去幽蘭何馥郁,

艷陽三月麗城東。千万春光映碧空霞際樓臺總似畫

熊府次松秀才

春望

宦遊千里易沽襟。况値秋光傷客心-疎雨村々催落木。」遲々春日集君家。一笑一談自不譁'池上暖煙連儿席。

凄風戶々急鳴砧。生前杯酒思吳膾愁裡文章多越吟。 城頭晴色映窓秒。金花着勝人如玉竹葉飛杯酒似霞, 仰首貪看飛雁過6寧無尺素寄家音。

若愛山公醉後興。休嫌倒載接離斜。

人日過續氏

客中早秋

黃鶴樓頭乘月遊?君自襟懷稱豁達?誰人琴酒最風流。 墻上碧桃粲熳春。已識董狐晋太史-箫傳子羽鄭行, 休隨凝露臺邊去?仙地風光易滯留。

天南元自星樞近。瑞影照臨黃髮身。

雨餘流水欲涵虹。桃花開處調鞍馬柳葉新時試角弓

人自龍山耽盛筵。我隨鷲嶺問安禪已看紅葉飄紺苑。

况有黃花勝白蓮。流水浮雲開步地鳴禽呦鹿說經前。

到來何用攢眉去。七寶厨中有迷。烏紗相對日將低`偏同避暑隨河朔。

還訝移舟入剡溪。松戶竹雲堪堅臥白沙青石傍幽棲。

凉風一道天如水。况有氷壺白玉闌干玳瑁梁。鏜葱住氣映初陽-誰知東海木公樹。 輕屐翩然樂儔生涯樂事在林丘赤膚山下餐霞過。

賦得松契遐年講奉壽五首酾駿喀

送池君之鶴崎

其五

香閣峻秋日本妙寺集得删

下當

到日寧愁逢暑熱。雄風萬里滿蘭臺。

宴酣時有栖鸞下。翔舞翩々彩羽輕。

西東條爾去還來。何用離歌臨岐哀腰下蛟龍含北斗。傳道風濤日夜聲?淙々偏入玉簾淸山含瑞霧枝頭出。

賦中金石動天台。彩舟堪放桃花水綠聊同竹葉杯。」星吐祥光蓋上明?閬苑神童來摘藥瑤臺仙女坐吹笙。

暮春送馬彥章之江都

低條裊々拂春雙腋願生金翅翼。 乘風直到說經筵。

其四

色堪掛蓬萊織女裙

爲是千秋同保壽。滿堂佳氣自氤氳4

一樹青松望轉分

其其三

三

人間一自認鳴鐘?初識眞借住絕峰路鑿巉巖疑役鬼。」本托崑崙千仞岡。何人移植洞房傍數雙玄鶴躡遷

天驅風雨有降龍。觀空月色臨深澗說法潮音動萬松。 幾片霞縹緲揚長與南山來秀色 還能十里動靈香。

愧我塵間纓侶,無因嶺曳孤笻3

年々况復生眞液。欲遣瑤池王母觴。

其二

其二

絕澗千尋石作橋。下界蒼茫群象?諸天黯澹萬靈朝。

下界蒼茫群象靜 諸天黯澹萬靈朝。 近接西方金母堂。翠色千春棲鳳駕 清風一道拂霓裳。

神馳應是同孫綽°仰首時看霞擢標。

朝々長此收華露。釀得香醪稱壽觴。

肥後文獻叢書第二卷

山中古寺欲千年。手打疹霜路更懸。一脉流泉近石上。

七層華塔聳鴻邊? 運淸白足高僧坐柳映低眉大士前。

金階玉砌絕塵氛P一樹靑松

?已迎姑射神人贈倚碧山。同人相引此躋礬貪看搖落諸天色

頓得浮生一日閑。揮筆片雲飄法窟論心明月映禪關

多師幾度容方外。木屐寧勞屢往還。

朱門繡戶玉爲扃? 上有長極萬古靑-欲獻西崑神女壽

已懸南極老人星。 三花珠樹交枝發-五色雲車並蓋停。

共說君家仙術在。堪因貞榦托遐齡。

壺梁先生遺稿卷之三

促席謾開濁酒樽經靜郛中寫絕調談清闕里入微言。一樹杪金幡拂碧霄。風鳴磬轉寥々の清池一半蓮成社。

寄題筑後清水寺

寒雨城頭木葉飄。誰圖忽此枉高軒o荒籬幸有黃花在0

優游須是消年月粒曲休彈別鶴音3

龍口邸舍喜柴岡尾三先生至

嘎群?咱此图

官暇相看開襟。灑然新築府城陰o節遲籬畔殘花在。

冬日脇子善宅集子善有歸歟之數

斯行恨不得隨君。處々秋光入望分o霜染自河關畔樹。

豫喜歸來迎客日。一場談話盡烟霞。

秋日送家君業親朋還有待嵇車。赤松山上餐雲母明月洲前掇石華。

陶然一醉來豪氣。欲上芙蓉第一峰。

歸福島

水清冷似翦淞。五色瓜從仙苑得盈樽酒與主恩濃。」吟藜秉暇到君家?聞通飄然游海涯奇絕應知飛謝屐。

北

別舘幽深紫翠重生楚。

上。相映兒孫舞衣。

七十初度

往々唯餘斷碑在。行人涕淚墮泫然。

壽西從駕遊成趣圍

菊城懷古

故。

報道幽栖佳節風光欲共題,孤山深處叩幽棲4 梅邊芳酌人皆醉。

賦之

人日孤山亭集得八齊

况有遊來樽酒美。風流總是似陶家。

帳裏春盤手自携。池草稍將牽蝶夢林風時又送鶯啼。

豫期桃李初開日。相引重來尋英雄名譽到今傳。回首遺蹤渾作田養老禮明敷敢日。

勤王略壯出師年。風搖虎口溪頭樹°霞縟鳳儀山上天。

,熊蟠何幸此相從風常淋漂疑逍遙堪避人間世。別是墻東天地存。

紀如來松下菴新成見招余有事故不得赴因

園裡開。角巾帽此追陪潺々流水粒中響。

謖々長風松下來。遙識虛堂生白地應同千載草玄才。

飄然何日偷閑去。共醉君家碧玉杯。

脇大夫萱堂初度開筵壽古稀。珠簾翠幌有光輝賢同歌母常猶績。

教識孟家能斷機、五色桃隨庭際摘千齡禽近席邊飛。

請看霞彩蓬萊復陽洞集寄懷分嗣在葦風飄翠羽嶺頭雲。連城豈獨懷中璧千載欲傳囊裏文。

堪羡舊溪歸到地。忘機終日對坐久階前墜葉深。非土感生王粲賦`思鄉情切越人吟。

一潛行與名山。何須函谷鷄前叩應是銀臺月下攀。 朱萸林下白牛車。地連北浦秋偏早9人對南山日易斜。

新產五馬出城關。豈可悽々傷別顏筆振雲烟過大海。」蕭然茅舍水之涯。佳會何辭相引賒黃菊籬邊烏帽客。

先在北浦

送田書記之武州

土得六麻莊

身。

不用深山要隱論。牆東忽已出風塵-林池自有滄洲春日訪怡雲道人

誰口膝前多彩思。鳳毛元自屬君門。

一自鳳池裁詔後。朝衣長惹御香留

鷄鳴曙色滿皇州。萬5千門淑氣流天擁冬日積善堂集分

擬賈至朝大明宮作

別有芙蓉天際雪。望來偏使馬啼遲。

「當作雙林

精舍

重陽後一日奉送總教屈君之武州

一別陽關奈別愁。天涯遙指海溟流孤舟夜繫青楊港。

過台勝因師今日多眞趣。不問人間是與非。

白社蕭條人至稀。烏巾相視對斜暉籬花堪伴醍醐味。

巨浪朝驕白馬洲。楚醴寧無明主遇隋珠休向俗人投。

重來好探蘇門勝。猶有當年鸞嘯儔。

「不果七八故云

二

送青木和卿還同前

師家自有悠然趣,何用更隨彭澤尋。

蘇油

肥後文獻叢書第二卷

行矣武昌江水上。雙魚屢託驛人還。

林露從沾瓔珞衣。幽處鳥還雲出岫諸天鐘動雨過扉。

防州和刚將遊遙聽鐘聲度碧岑。禪房寄在薜蘿陰來尋淨界無何有。」
干旄遙指海之涯。驛路秋光興可知當國幾年裁美錦。

看取浮心不住心。彈指林頭開月色談經大海送潮音。登高昨日賦新詩
。青牛港靜丹楓晚°赤石浦閑明月時。

高僧況復能言語。拂塵翩然坐夜深。

、原校林頭恐

紫垣星始散。

柳垂靑瑣露鑱収。玉墀緩步雄鵷鷺ˇ象笏分曹拜冕旒。

趣?

花樹何如鬪苑春。坐久霞醪擬換骨窗鳥語似留人。

愛君牀上三千卷。幾歳優游託此非因脩竹作樊垣,城畔何能隔世塵不啻淸風促嵇駕

偏憐真意似陶園暖煙十里連晴市春色一枝媚暮軒。

松江城賦奉長岡大夫兼呈嗣君

百仞城樓俯大皐。登臨開宴興偏豪ˇ幾回吐食忘軒冕

累代當塗推國高。松渚花香來把酒龍峯雲影映揮毫。

謝家何墜家聲美?五彩斑々見鳳毛。

九日盈師珉師及諸君過米大夫別莊 六二五

壺梁先生遺稿卷之三

松浦秋光興若何。名區幾處人看多。望夫石上雲纔合。 欲問上方秋色深。乘興佳節試登臨片雲吐納空王室。

神女臺前雨忽過。地似滄洲繞白礫º崖懸碧樹浸凟波3 度雨蕭條祇樹林?客聽貝經留白馬6花連寶地作黃金0

九日過蓮光寺

憐君此別路程賒。琴酒何妨日欲斜非是生涯耽送井元衡隱南鄉

宇喜村

西鎮雄都大海隈。觀風暫爾此低徊天晴處々人烟合。

傳聞往々多仙境。別後其如雲路賒。

夜暗家々珠市開。黑齒時凌蜃氣至紅毛或絕鵬雲來。

可憐一片眉山月。遙送金波灑把杯。

井元衡將隱南山過翠杜園席上賦

崎陽

長風掛席一扁舟。直絕滄溟萬里流-薩北山從波際見4| 玉樹林頭赤石磯。海天一望息塵機o帆飄遠影連秋帧。

日南珠傍筆端浮。夜尋舊寺花爲雨曉過古城雲作樓4 波淸沙映夕。几骨未能乘鶴去。長竿聊擬釣鼇歸0

聞說行々多勝地。願言携手與君遊。

況逢野叟談奇絕。偏覺人間事々非。

同大雅先生遊佐鋪途經八代賦贈西垣某

相似因分其根携歸植之其園中今始華

本托深山幽谷陲,緜々自學水簾垂。一從繚繞依嘉樹。|屏閣峻嶠積水漬。開窓偶坐對斜曛壹岐山色時々變。

長此繁衍抽瑞枝。喜見眞人凝紫氣°恍疑織女掛機絲。 五島封彊處々分。都府樓荒淹日月4覇家臺逈擁風雲

最佳微月嬋娟夕。風送飛香入酒后。

爲餘鉅樹階前色。猶說將軍有舊動

函崎

竹原氏嘗遊攝津觀水 側有紫藤形象與水簾 誰人向晚吹橫笛。風送聲々雜棹歌。

登將軍閣閣在筑前

城市南頭水一涯。吟行不覺夕陽斜聊尋翠杜園中趣。

將問赤膚山上霞°揮麈鳴琴元我侶巖屏松戶是君家。

水石。

誰將痼疾臥煙霞。園餘錦里先生跡窓對蘇門隱士家。

聞道南鄉春色早。相思一爲寄梅花-五六或作賜喵錦野村

邊樹入宿蘇門山下家

松浦

茅舍蕭條塵事稀。開窓海色望霏微°數行過雨丹楓岸

－片殘雲白石磯。村犬迎人疑舊宿漁翁掛罟曝斜暉。

回頭山寺知何處。風送鐘聲落竹扉。

之壹

的美元是無量壽。不用朱萸佩絳囊。

閣梵參差倚上方。登臨此日屬重陽偏憐紺苑黃花色。

還酢寶厨甘露香。巖樹洞雲何寂寞°經聲禽語自清凉。

九日過蓮光精舍

城東卜築此盤桓。不管穿堂四壁寒-多病猶修千古業?

散官剩得一枝安。柴欄橋畔分流水?竹樹林端出遠巒。

况有床頭明月至。素琴今夜爲君彈

蒲葵園客至喜賦

壺水西頭樹繞扃。雨餘明月滿中庭殘雲忽逐清風散。

叢菊能敎華露停。素影娑婆人作玉 金波漾蕩酒盈瓶。

高僧別有眞如偈。不許人間容易聽

不言亭賞月盈上人至分韻

一從寰宇入黄圖。雄國風流表海隅野似冀州饒綠耳。

鄉隣合浦產明珠。君原英妙輕千里誰道雕蟲非壯夫。

己是名山探勝遍。歸來重更問蓬壺

送山文學還津輕

聞說鄉關日本東。地隣毛狄最稱雄膏田千里人烟接。

海國從來魚利豐。定識仙臺夜月時携羽客御天風。

未能書劍隨君去。徒喜琴樽暫爾3

肥後文獻叢書第二卷

雄藩寵遇有輝光。萬里東遊晨戒裝楷法人推鍾太傅。

文章獨愛蔡中郎。青牛依舊過幽谷明月乘秋醉武昌

遙指芙蓉天際雪,到時重照讀書狀。

詠藤井序

朱陵先生再遊東都賦之贈別

上毛山名

匹馬翩々侵曉行。倚門欲慰老親情ᵒ辯傾稷下誰能敵。

身產山東原是英。金嶺月迎懷璧色赤城霞映舞衣明。

知君到日高堂上。滿坐歡聲弟與兄。金瑞赤城皆

送山叔瑟歸省上毛

寒畑暮澹鎖柴扉。同侶携來此息機窓對梅花疑雪色。

盤收萱草泄春輝。醺餘只任新詩就臘後何敎幽事違。

脩竹一叢流水上。斜片月送人歸。

歳杪過村大年

洛南嘉木動春輝。河北幽人下翠微循菟道忽乘明月去。

龍團擬滿皂囊歸┘芳芽應摘烟霞裡華露從沾薜荔衣。

我有竹籬茅舍在。何時相邀息塵機。

送人之兎道

溟海蒼茫萬里濤。孤蓬短棹氣何豪〞壺洲天抱三山近。

珠浦潮搖明月高。往々燃犀窺水怪時々垂釣掣神。

比隣元自風聲似。鞨鞢于今入曲操。

*二四

審梁先生遺稿卷之三

LULTICE

山文學將還津輕同諸君見過

詠朱魚

竹林。

有客禪院值

善音堂集初接津輕山文學

夜靜時開縹帙坐。寒星錯落傍懸0

爲迓高僧衣裏色。留連不問夕陽沉

爭能咫尺入幽深,籬邊猶醉黃花酒°松下還彈綠綺琴

枝横流水小橋邊。花發安禪空室前去還疑姑射雪|悲秋何處拂煩襟。一逕斜通碧水潯非是戶庭移竹石

謝山僧惠梅

龍門高秀彩雲間。白日開筵使客磬文藝一時依北斗。」故人家在碧江邊。寂寞園林傍野田°己是文章耿盛事。

歎聲滿坐唱南山。階前玉樹爭生色鼎裏金丹好駐顏。豈無書書入眞禪。世榮時好浮雲外赤葉黃花把酒前0

:怪交梨携滿袖 今朝新自鳳洲還。

來往只餘幽侶在。相携時上打魚船。

十日過聽松館道冲師偶至

奉壽秋先生六十

訪富元朗隱居

壚頭更有鸣箏婦。一曲吳歌使客留

·滿堂皆道思玄度。不獨清風朗月時4

二月流澌入御溝。可憐春色滿皇州千門楊柳東風度。

何識人間秋色悲。角巾烏帽互追隨青山己買沃州勝。

春色滿皇州

九日過蓮光寺憶山叔瑟

七言律

花影娟々鏡裏鮮。一片朱霞看欲散數株火樹坐將燃0

當年勾漏新爲分。試貯丹砂學地仙。

梁先生遺稿卷之三

綠藻靑蘋澹小泉。浮沉得所自攸然綺光燦々波間動

萬戸樓臺住氣浮。公子銀鞍驅馬去王孫金距闘雞遊。

黃菊還同彭澤籬。原領浮雲無住著何論醉態故參差。

寄來猶帶虎溪烟。暗香只合諸天滿春色偏能下界傳。

黃雲一帶接香臺。雨雪霏々向晚催正是高僧持偈處。

非關天女散花來。蕭條己灑雙林靜颯沓還飛下界回。

欣賞許杯相對久。無端池上白蓮開。

遙從瀛海潯,爲思同志此相尋東夷貝錦詩中麗

乙岳烟霞袖裏深。早己韋編脩舊業o終能蓬矢遂初心。

新知更引抔樽興,把臂風流入養

-原。精巧注此筵先生同白

嶼先生餞柴霞亭展

慚吳下俗。達愛晋時賢。共迓蟾蜍影同歌窃窕篇。

淸歡須潦倒。發語任狂顚。弧矢雖心壯o庭闈奈思鏗0

分襟將邈爾。雙溟忽泫然。只道逢行李寧無寄短箋。

草伯信陪從白河侯邸觀舞樂賦此寄懷

籩紛既陳。雁影隨毡墜。雅羣匝樹翔。終霄翫不厭o猶唱佼人章。

也

傖成卷

肥後文獻叢書第二趣園次柴君霞亭韻柴君將還鄉

得陪游先生後更張如左實

宽政庚申九月十三日六二三

飄風琶水潤。步月鏡山晴,叢竹搖波影孤松帶雨聲。 潮喧如擧樂。蘚濕似敷茵。霞彩離披外寧無延列眞。

偏憐景物淨。頓覺人心澄。粲々粉顏女-源々文思生。

雲烟逐筆。金石入歌鏗。遙熄風流美能教今古傾

關原吊古戰。丘垤記諸營。金鼓殷振地o師徒涌似羹。」報成稱不日。用力屬豐年。縮得饒奇勝闢來疑洞天。

歌聞四面起。戈已前徒迎。山河一作誓寰宇不言兵。千尋聳巨幛。萬頃漲清泉。曲檻蚪蜷跼長橋虹麗娟。

茅秀思被練。柏杉想列槍。宿經五十驛站行盡三千程。|深潭湛見底。浮靄渺無邊。石秀飛珠沫風徐疊碧漣。

雄岳青蓮秀。關門紫氣橫。行人立馬見~羈旅聽鷄驚。|霏微浸旨鷗。蹦湃浴芳蓮。傍砌銀鱗潑°臨軒彩翼翩。

地勢崎嶇阻。天倉空洞宏。櫓樓壓雉堞o第宅列鴟薨。非因欽遠客。爭此開離筵。供給無兼味杯盤徒四旋

五劇人肩摩。九逵車轂轟。裳衣孢猗稍o鞢踣施珠瑩?

洗削連箏鼓、販脂列鼎烹。倡姬容冶艷ˈ俠客氣崢嶸。

美政改時弊。名卿爲國楨。飛騰展足駿睨脘遷喬鶯。

培克歸三刺。詭隨付一挥。敢如雨露化法似權衡。

六府知應脩。九歌又可。民何稱小愒時是已元亨。 熊幡扈從去。雕客得攀躋。遊々飄簫管°淵々震鼓鼙

天地呈嘉祥。鬼神享克誠。異流歸口谷o斯道刈榛荆。 舞干應規度。踏節有高低。雙翼輕於蝶長裾欲拂霓

曠達排江左,絃歌似武城。不圖人壽短遇此黃河淸。塵飛撲繡戶。雲遏映丹梯。池沼潛魚出園林鳴鳳棲。

詠月應日河候需

之子精神足。妙驗才識幷。本嫌齊服紫豈變楚音傖o 論詩婕在魯。忘味想喫齊。知與夔龍語還同枚馬題。

大都多儒雅。誰人主社盟。何須慕外彪應要使中彌。忽有商飈起。似閉丹桂香。初昏離海嶠半夜度天潢。

鸞鏡看揚彩。金波坐動光。書帷淸若水°砌草凝霜。

泣天神。葵敲粲相次豆享同周禮盛。案笑梁妻貧,顆々鹽疑虎嘆々脯是麟

曙色開唇閣┘登臨屬發春。鼓鐘己備舉°簫管互相因。 威儀自整勅。文物猶彰明。才引鄴中侶`史無柱下名。

5

雕弓挾白羽。象珥映珠旒。審固心愈直肅酢容自修。

暫將明月滿。忽學奔星流。徹札非矜力汰椹聊有羞,

儀當鼉鼓節?養讓兕觥觫。明日射宮事誰能樹四鯸。

尊明閣聽樂

杏壇探雅曲。藝圃吐芳英,夢寐遊三代譽髦推一黌。

。載錢出東關。猿臂原同李一虎頭亦似班。

兜鍪星彩動。鞞哅豹文斑,楊策過鞍坂4彎弓向月山。

德非天吏逸? 賊是苗民頑。梟膽堪破鷹揚意似閑。

霆飛金鼓外。氛盡指壓間知築京觀罷元勳勒石還

威風推將種。聲譽動皇都、龍劍呈貽夢°虎鈐傳宿儒。

廟前新受脤。閫外得專誅。懷私誰貽阻勤王原靡鹽0

揮戈日忽轉。馳馬影將無。組練衣川上旟施鳥海隅。

疾雷天致罰。時雨人如蘇,不啻鰕夷錦°貢來肅慎砮。

習射澤宮

兩楹施耦次。五等會諸侯。禮樂仍因殷文章新造周。

途中山公斡之江都五十韻

華門屬帝系。寵節領天兵,部伍皆如虎°海隅大戮鯨。

擬送鎮守府分符辭北闕東奥作二首

五言排律

哔々搖蠟樹。隍々滿郭閨。青郊來彩鳥o璹水擢銀鱗。

齊魯風聲變o閭閻俗染新。易良與莊敬o長此教斯民。

題源將軍像

雪明山上山。霞縟樹中樹。回頭兎影懸°前村欲移步。

携得看花朋。吟行天將暮。窈窕出幽谷?選迤礬一路。

源將軍征氷戈日下曜。白羽月中明。徹外開風服坂東傳檄行。

征鴻分亂影。班馬辨哀聲。學熟飛鈷術才同橫槊名。

前茅張兩角。上座賞先鳴忽拂祆氛口長敢率土清。

同馬彥章富元朗避暑泰泉觀得十二侵

飛觀枕流水。蕭然試一臨。雲間分遠樹天際擢孤岑0

?鳴鶴在松陰

石裂泉聲咽。崖懸空翠深。幽禽來竹裏

鷹潁玄語。氷壺即片心。清風驅暑至時自滌衣襟。

生平鴻鵠志。夙巳羽毛成。欲探千秋跡-忽爲萬里行。

雲山跨匹馬,溟海駕長鯨廢寺花爲雨Õ荒噓氣作旌。

檐槍梁武走,江漢周昭征。魚腹葬何處水濱問悼情。

霸圖吊大阪。王化觀華京。氣是吞當世 心誰九閎0

德知周鼎重。服見漢裾輕。近有吳回崇。依然天子榮。

日邊聳鳳闕。雲裡擢金莖。聯步鵷鸞集分行環珮鳴歲月上

殊恩帶月俸。幽意戴烏巾。舊徑依然在唔知兼松竹親。挑闥青衿子。送余满路岵。山雲回望勢。崖尖逐行移。

世間甘好。多誤百年身。嘉遯看高節?考槃想有人。

次韻李先生致仕作

春之子風神美。來游彼一時。燈前同倚几花下共題詩。

恨。

春山晚歸得三淆

不修

壺水平如鏡。一葦不待。與鷗只是愛垂釣。何必要」心地圓如珠。談鋒懍入骨。吾邦少雅僧臨別徒搔髮

四十一

借問何所之。故棲還禪窟。共憐河上口同對山頭月0

麗澤園別麟定師得月字

石泉坐可漱。村犬看欲唬 抵掌丹青妙。能使人

新竹籠庭石〝殘花映澗流。秋期君莫負月下復同遊

天資元磁礴。時爲一幅畫。烟霞疾難褪丘壑興相擦。

暫駐將歸客。相携山舍幽。詩看飽與

四十

霞綺山亭送安川生再游在秋

多

文王是吾師。周公何爲謖?巘獨挑短桀坐。閑與古人

誚。巘支離妣取笑。孤介亦堪託。B 從來安天數。不一名刹深山裡。逶迤一路賒。踏隨隨五馬問法及三車。

和藪教授陪遊泰勝寺韻

三十九

提觴依北斗。展脚對南箕、書出眞形是一看神自馳。

復事周鸛。調鷺沙界楓初染。維園菌有華、知餐甘露味-陪賞到昏鸦

盈篇。魚器詠應同舞雩。人皆著褊柝◎栖々路傍人。

遮莫笑我遙哭小篠鼎甫

不見金丹効。徒教玉樹萎。孤魂何處去延望獨空悲。

歸路春山晚。孤月掃林梢?滿目光媚?映衣花影交

樵歌隔絕澗,鳥語躁高巢。獨樹村烟外°依稀認草案。

同前用陰山子韻

山香欲暮。偏覺興情添。風靜孤笻稔雲過雙袖霑。

前林花粲々。後幛月殲々。十里何辭遠°村邊見酒帘。

曉發熊城留別諸子

南筑樺生登富岳携雪水歸命工圖之余因題其| 削成千萬仞0多爾能探奇。海日三更夜°天鶏欲曉

終難駐。脂鞭須及時。離情言不盡˘欲去更遲40

同樫村元龍遊日暮里芬字

忽使意氣隅。崂

西

有弟夙善相。發言未嘗蹉。牙籌知仟佰°玉鏡分妍鵲。友朋多武弁。南山時試射。獸膂力知方剛。心膽一

* 已談天資美。又說人事結。歷々心中蘊。誰能得自何。烷崦 垂楊拂金鞍。飛花撲繡紋巘 百夫齊決拾。

三十八

三十三

。身也

也辱

惡氣著

疑問。開 今見貌似璞。期爾心如鋨巉寞向鮑肆過。 游魂知鬼狀。探賾窺天罅?片言若不符。如受市朝僞。

三十七

三十二

雙橋。 茫々三千界。飄々一宿液。 向月唱妙偈。

談來口嘅々。

肯許人間胸。20

有朋柔且剛。恰如千練鋌。+ 舉揹偏清高。心胸自于山僧字獨有。晤語時相暇。湘啜飛鶴逐孤錫。片雲隨

豁開。坐爲看雲靜。杯因迎月。 從前推强記。

三十六

一

之器

三十

三十五

亞。

阿拾年甫入。天然無欺譀。嘍即今見客慣。憶昔在襁

亂 朗々誦詩書。

有客身閑々。相引對枰邽。曝屻不啻爲魚貫。又此作

二十九

三十四

雁迓〇 嵺旒縫虐難擣⁰奇正勢相榕楮撚髭時傍觀。

敎人開韓疠。小隅坐雖閑雅。兩髦動齸髮

不復覺聲砑。

已有傾筐遇。又見倒徙衙。切世模人如李元郡英客似

書奇珠拼盤,譚妙油生

榨。 達觀心悠々。廛事誰能罣

三十 去年報弄瓦。今歲步纔斗。一楼合飴常買笑。缶又

止咛。碗餘間時負劍。中霄或易橆。M髋何日脩婦職。

婉娩事鈅凋。 镧

挑闊青衿子。云爲何脔膠。怀密 論道兩端竭。判理羣

執友號洗心。常來談爻卦。時已有消息行豈無超越

恐是使人病用

甚愛石榴樹。累々傍屋。¤ 已從飛鳥啄。何問狡

0 射物取 紫宮星錯落。朱唇秞髂。出 下物莫

二十三

風流愛曼倩。來去自無能。24 大隱甘市朝。博物辨

狗犽。玩世肉屢割。調人言不吟。峮滉 笑殺常家者。

每事多燧々。撐著

二十二

生憎費無極。釀成猶如鸸 厚顏縱無愧。上天何

不慍。 怕懼

日赫

夏蟲終苦。春氷又遇。 請着激行

水。竟是歸坎窪。

11+1

讀史忽廢卷。機變一何嗎。屻 雖貪當時榮。長敢萬世

坷。巇揣摩煞來刺。慘刻又招蚱。惲懿 所以士君子。

履道不偏僻。齮

二十

稍覺體中佳。猶

慵解帙玡。 骨似玉者

也

昨就故人飲。今朝方病症。岑々頭欲裂蒼々顏已肥。

淹杯 稚子來與葛。老婢又進菇。蟥?肥後文獻叢書第二卷

十九

月掛。

暮春時偷閑。浮游錦水磷。鷺陃如欲語竹石似相這。

恻 裳因抬翠褰。杖爲吟詩拽。屻回首前村樹。纖々微

二十八

西家有異人。生來自澹怕。身將縣解期 心與世榮謝。

三杯已吐奇。一斗忽作調。言何事要津人。焦心徒

二十七

一簣始報功。志似愚公。 峯巒自发嶷。洞穴又訝

鹆。衆翠色堪攬。九曲路自闕。嘍徘徊幽賞足。何必

攀嶠愎。

二十六

早梅樹敨叢⁰ 開花補林露。啜闌千低若斗。繽紛散作

丏 。蚋縱合野禽陶。不使家僮。峭回首渺如雪。盡

日憑欄。 S

二十五

使人祛心欅。亂

青葱一株樹。幾年托崖坯。嶰 蓋密層々高。枝重處々

檄。 竹尊醽花蓋。石鼎解脂渣。有時奏笙簧?

二十四

六一八

壺梁先生遺稿卷之二

—

貧,明月窺窗寒。

奢燕飲

向客詐。語

有三

雞從隣人攘。林任

三岔。

岐也扶風:

十三

碎川

哆言

痛哉斗筲士。繽紛饒欺詖。粉華欲自耀。肌膚家有藏+1

必寒山作。崤

跡兩蔫詿。郥*

十七

嗟彼市朝人。心中本自傢妃怀依違緣與督莊子倏忽此|庭際一片石。本被故人搵。禫螻 菲々草作茵?菁々荔

箫那º *不唯汗洽背?還見刺穿起荑何如物外侶。爲谢。岾畏佳風生窾。膚寸雲出碟,披對堪與語。何

言+1

十六

抗言齒方鮀。邮

士。却更來啤嗦。言

持物也

齒出

牛角

往還知阿誰。前村一老爸。小岈 手持玉麈剆。身跨黃牛飛騰何羨駿。柔順須守駹。此傌瓶盡乞隣嘗。屋側倩

十五

蓉也

+

悶里多稚女。招々互相御。翽織草爲矮席。折楊搆小/薄夜寂寥々。不復聞人呢。唔聲敝屋愁雨滴。破窗奈

鹰。崦 蜃羮調塗泥。豆飯是麴麵。翩躚忽引去。風壓。課童招紅友。付妻割枯齓。蠊團欒搠厨爐。痰

爭攀園中。

廖烘烩々。秋

十四

鮀。桷 聽鶯花底伴。下榻月裡輅。嶝商較今古事。」人柝。」 戶外蓬番々。墻上瓠宦々。鰓何事頬舌

互相

咋。嶆 －時覺膽寒。半夜敢心煆。嚇誰能胸次平。湛

如一帶塡。良劍。鞘楪五彩繡。巇 秋水星粲々。綠口毛髮

非有投虛利。何敢不若俗。 由來天下寶

々。蚝開

小腿

不用向人吗。非是扶風驛。門外路樵夫槎。屻 不擇酒聖賢。何期肉臙骖。』 幽獨安淸

隻案當戶牖。萬卷支屋瘵。喔間 奇來門生問。筆夥異

人借。嶼丘園不用賁。杯酒何羨酸。 日 貧簍安所

遇。未嘗倚窓作歐歌嗎

婆娑舉手舞。骯髒投袂餃。扶步而也

一丁最多技。

圖籍蠹易生。丹靑色己筵。 臨風時一呼。谷響似

傖無地不莓苔繞屋多澤蕒忽來烟嵐氣坐覺裳衣滚色敗

能扮戲。偏喜逢春社。忽見且將未還聞笑乂啊。

賽。無人懷姦喀0

鬼變

老奚名是藤°形狀何孋娙飆 背曲膚如飴°語叫聲似鶬。鑿崖安山神。望來自窗窕。DH 近有巫祝愿。新成

濁醪自浮觥ˉ終身只嗜崦 ┈➝夜來短燈下。聚童談鬼醜|堂宇稱

來短燈下。聚童談鬼醜堂宇。钃蟻 翠粱開重峦。苾芬列數。嶧 翕然來禱

窮谷無偷兒。短墻自可跃。越 依林山猿。隔煙水鳥

七尺身雖微。千秋心未啜。嘅感慨頻引杯。

破。嶋

不覺匏尊。

七

11

山田作瀉 环蚝地

猶似華山陰。往々生石韃。衆卉時或痱此物水瞻

五

千林皆肅殺 0 【獨淸幽。豈與春妍比只憐香霧花

雨過天如洗。夜來秋色凄。窮鄉人不到深樹鳥栖。

秋夜宿麗澤園訓導郝兄有詩見寄因次其韻

贈江鮓。

多爾久隱醫。卜居在南鄙。屋環兀山庭引潺湲水。

日落寒侵衣。天晴扇擁儿。僻地佳勝饒優游脫世累。|閭閻無可談。久己廢犀把┘ 岈製研時澄泥作杯新剖

枒?驌 推窗月嬋娟。步庭梧蕭灑。隣翁解酒趣。時來

四

11

醉面從風拂。吟眸惜月低。華宵多樂事4醉夢又何迷,

秋浮。

孤芳騷客愛。遲暮美人心。偏恐嚴霜至摧殘不耐秋。

和伊太素韻七十三首一韻不重押兼用古讀。都

二百九十二韻脚出于前今不重錄

貝其三十二首定係自選者

長不射。

厭浥多露氣o蔓延纒嶮嘑o摘來盈一掬可以療泄症。

凝接瞻諸。溪流駛似酎 * 玉隔深樹鳴。筒向小

池咤┘㎜ 逶迤入溝渠。潺湲灑屣稅。居民曉水利。

不見愧

父壺梁先生遺稿卷之二

六一五

柴門無過客。風物一凄其。花外茫如霧柳邊紛似絲。

過清音亭得水字

春雨

再會歸去向豊城。飄然一劒輕。丹餘肘後秘o彩慕膝前情。

送山田君還鄉

可比甘谷本知名。

散髪逢佳節。三杯醉落英。風流今日興還自勝淵明。

送醫人屈實甫還鄉

髪爲愛幽居寂。哈藜向此停。律身能處約信道常播經

春日過宮君新築

*稱餘慶歡聲動郭隅。維熊入吉夢一老蚌出明珠

分

謝爾分秋色。 枝々帶露淸P東籬非粉顔餘白礫

把臂將三歳。飄然負笈還多君懷美玉遙此就他山。

注第三句一

九日謝人惠菊花

別洒荷風外。征帆梅雨間o 故溪歸到日依舊對繻

賀辛同寮懸胍

誰候黃梅雨。移來靑竹叢0枝々籠宿靄3裊々引風

咫尺幽偏熟。瀟湘夢欲通。回頭時一顧疑在野村中

夏日送邮島君還鄉

失題

勝地滄溟上。停對夕春。苟文侵白礫黛色但一雨前宵過。江頭寒漸微。花飛春戶寂竹響暮禽歸

舞子濱

巷隘堪逃俗。談閑己息機。殘算好須盡4月色破林

非有幽人德。何敢遠客過。薰風飄凡席璧月拂藤蘿?

首春蒲葵園集分得五微

嘯風亭集同小倉彥嶽石君賦得五歌

殘雲橫海嶠。明月照園林。非是逢晴後誰能坐夜深。

懷古公餗分韻

烹茗論泉性。聽禽息俗機。殊憐日夕短。一道靄斜暉

欲問幽棲去。携藜入翠微。雲侵履齒起花掠鬢邊飛樽獪餘錄蟻吟自黃鸝 暗覺林生月偏敢夜色遲。

爾

逢珠輝生染翰。鴈影落彈琴。遙憶天涯客何□□一臨。

玉樹慚形穢 朱顏愧髪皤。重來如問我短裼臥 阿

青松。

濤自疑瑟韻P雲猶翻舞蹤。俳徊人不見行雨灑前峯。

山雨絲々細。澗花處々明。杯樽奈分袂惆帳對啼鶯?

弄·璋存瑞 懸來門有弧。知將與玄艸鍾愛想 烏克

墻上晴梅白。窓前露竹青。留連啼鳥換終日入淸0

知何日。悵然岐路間。多君抱美玉求友就他山。

豕隔鵬雲遠。舟過鯨海還春來逢驛使寧莫一枝

飛絮輕風外。低眉明鏡前。還疑洛神過鬟髮映波鮮。

春日玉照園作

紗齡隨漢將。幾歲戍漁陽,忽值親朋至憐吾鬟髮蒼

池柳春如醉。新晴二月天。陰々彩舸々拂烟。 携來酒若醽。舞去劍如霜。何日留片石凱歌動未央, 片帆飄素影。虎席駐清輝。露華兼涕淚不覺濕衣裳0

臨池柳

薄夜探梅去。忘軀跨蹇驢'浮烟連絕澗4 一朵橫荒廬4

錯落星相似。玲瓏玉不如。欲攀多所思徙倚月來初。

失題

別業臨流水。樵漁此結鄰。荷風飄席竹露□衣巾。

群鶴翔松塢。飛花散柳坡。遙々一水外認得酒家旗

中元水閣宴

閑對脩禪客。賦推製錦人。知君一醉落日嫩清淪

探梅

聞某別業集米大夫僧天盈至

十里黃雲合。寒郊欲暮時。僕人已痛矣?風色自凄其。一顆寂

原故

故國故何處。蒼茫大海東。象頭山色秀鼇背城樓雄。

別酒將斜照。孤帆向遠空。家庭歸到日棣蕚暎春風。|客路三秋後,其如易下春。崎嶇壊岸上倐忽暮雲

客途逢雪

鳥沒村邊樹。月懸山上峰。禪房何處是故々送鐘。

蘇山道中

相逢同一檻。遮莫雨沾衣。樹抄流泉灑鳥邊烟渚微。

盤收園菓麗。膳有筍魚肥。蓑笠誰家叟扁舟汎々歸。|秋雨淨埃塵?携樽過故人。白雲山色斷紅樹坐來新。

送清兄弟源精钚

唔語偏耽靜。琴書又可親。微酣興不淺閑臥賦詩頻。

雲間聽犬吠。木末有花開(聞說多棲隱ˉ應須招蛋

秋雨小酌

堪着破漢史。欲載向揚家。凡骨稍將換ᵒ蒼顏己作霞。

失題

難忘丘壑志。乗暇踏崖嵬。一徑通深處ᵒ白沙碧苔

美人貽玉號。白屋慰生涯。掀翻知桑落ᵒ氤氳覺桂花

送高子友遊蘇山

不用張燈花。中天懸月華,風從蘋末到烟擁竹邊斜。

螺盞傾冰酯。彎刀割綠瓜。餘酣戀賞久露氣湛窓紗。

中秋送人

中秋佳會夜。何料送將歸。忽唱離駒罷ᵒ遙追鴈飛。

梁先生遺稿卷之二

*111

*沆琶湖水。驚濤日夜聞。帆從空際落山入鏡中分。

謝人惠酒

幽地中元會。初知夜漸長。沙明添月色蘋轉覺風凉。

原校到富作曝露

中元水亭集

同前

。 黃鸝喚友至。晛院隔窓紗。忽倒中郎屐?相迎叔夜車。

明月初圓夜。臨岐忽斷腹 淸輝隨去路孤鴈逐行裝

浪華河伯潛至分韻

中秋送人

春應逢驛舍。花自撲征鞍。到處多遊樂°休歌行路難。

寂寞秋江曲。舟帆夜待風。雁蔥烟靄外樹色渺茫中。

楓露時々潤°篝燈處々紅。前山將吐月爽氣滿孤蓬? | 江城歲欲晩。留騎醉相看,萬里孤鴻逾千山積雪寒2

征衣多露氣。別鶴入琴聲。一去雲山隔何妨到五更。

歲晩送人

秋江夜泊

秋風郊郭外。此送故人行。節屬中元興6月逢永夜淸0

輕帆隨去雁。落日下長流。松浦停撓處-竹枝入曲愁。

松浦

茅堂修竹外。夏日轉幽深。往任泉流迸砌從苔色侵。

忽值朱明候,乾坤風自薰。須臾變滄海-萬里疊黃雲3

初夏林亭即事

麥稔

知爾耽閑趣。非關學任公。長竿橫落日小艇泝遙空

新年初七日。依舊問君家。一路梅如雪長堤柳帶0

友人赴釣神水

丙寅人日川觀亭集率然走筆

叢竹多含雨 孤松平擁雲。想看高閣上彤管映斜曛

老情無世味。衰眼覺昏花,佳會須沈醉'從他生有涯。

無復愁塡壑。何會勞勸分。夫妻隴畝際相視正欣々。

送人之城疑擁蜃氣。山自接鰲頭。試問任公跡潮頭月似釣。

雲自陣山斷。楓連鳥口紅。從他歸去晚月出野村東。

時々見乳鹿。往々 變鳴琴。素幘馬帽相携弄綠陰。

中元夜送人

嗟此經年別。其如千里長。離情語不盡白露濕衣裳

單身探海岳。何語不炯霞。滿酌君休厭。再逢髻

共送將歸客。偶逢月色深。杯任金波灑- 衣從白露侵。

瓜期知計日。鱸候已關心。歸到逢良夜與誰彈素琴。

琶琵湖

篁淨凝氷玉。瓶寒有蔗漿,休愁酒復熟雲霞濕衣裳0

麗澤園客至同賦

簷寂雅聞譎。憲辣轉受寒。山陰應已皓誰作子就看

闢田供學資。誰不仰洪基。春早梅村外土肥瀛海濱?

邦彥獻嘉謀。廟議屬明時°泮沼眞堪樂能效芹茆滋?|天暗將爲雪。雨來夜正蘭。就爐休筆研促坐且團欒。

11

別館滄江上。。

老闆愁中字。兒孫夢裡顏。邈然溟海外º曷得治裝還

縱觀芝浦公莊

小山爨縣尹闞學田島奉行有詩余因次其韻二首

麗館依高爽,不聞城市喧。人皆擁麈尾家本推龍門

山雪當晴戶。江光媚暮軒。强留歸騎醉月己滿前園。

次和田生韻

有詩余因次其韻

幽亭忽見紅輪輾。光芒映碧天。連巒多氣象。一水渺風烟

龜己磯頭曝┘鶴獪柸際眠°負暄何處叟-佇立小橋前 。

幽侶似羊求。

藜杖乘官暇。相携此嘯遊。新詩期鮑謝

鳥沒山村外。人歸野人頭。種松漸己老撫去意悠々 。

五日瀰盈園集

柴先生集分韻

新築倚林塘。憲前一水長。侵衣竹色冷滿坐荷風香。

非領玄真趣。何敢魚鳥忘。欣然相視笑4疑是在濠梁。

遊撫松園

旭日山水壽松田叟

有人三

身隱扁倉術。風礬鄒魯邦。謝君多厚意載得酒盈缸。別墅隣村落。蕭然絕世埃。竹風飄席過山色壓開

痛飲人將老。高談心未灰。待君晴月夜一重此訪吾來。

過平井氏林亭

肥後文獻叢書第二卷

分禁臠于李先生先生開宴余亦與焉

臠盛雕,遙投紫海濆。天厨多博碩御膳想氤氳。

正是欽儒士。何曾分細君。澤餘吾輩及共醉玉壺殷。

題依江山。卷幔宴舊故。風湍時疑琴°霧幛晚帶雨。

吾甘同偷閑。世笑諼競渡。何須披離騷°痛飮盪肺腑。

吐月亭主人爲愛清閑地。臨水此結廬、幽情裁句麗 逸志出塵孤

石瀨常疑雨。雲山宛似圖,堪嘲榮利客奔走一何愚。」轉宿西東邸。經過親舊間。踰時猶寄旅邃日戀家山

田數十畝。墾闢起邦基。運石隨皐鼓如雲集水

艷陽東作日。膏雨夏耘時,共喜菁莪色長承雨露滋逍遙欲夕春。氣疑蒸楚澤波似激吳淞。

林暗苔侵逕? 庭遙石作峰。披襟頻引白-頓覺豁人胸。

兩夜雪意 輔

喆梁生生遺稿卷之二

縱是經年別。其如千里遙。分明昨夜夢共到洛陽橋。日落秋光冷。迎賓共倚窓。歸禽過後圃片月晃前江。

韻時眾携酒

況逢南至日。己漏一枝春。看取青苔厚⁰深知脫世塵。

送人之京

佳日種極深歲月。次荒木秀才韻

。

冬至復陽洞集得十一眞

褐喪丹洞臥。幾載守玄眞。盆石如將語禽自可親。

一綺席披雲坐。金樽映日携。盛筵多樂事。共喜主恩齊。

謁菅公祠

誰辨靑天色。浮雲辫不晴。和他日事賜玦一時情3

身己漂鯨海。心猶在帝京。庭梅依舊綻千載有餘淸崚嶆屛樓上。登臨淩夕寬。鴻邊滄海小 樹杪萬山低。

。

中秋大迂江汎舟

III

白日高樓上。秋天四望低。披雲依繡丂開雅俯丹梯。

水上。 可以謝塵機。脩竹叢沙嶼孤松秀石崎。

知應畜鶴去。今已憶鱸歸。芰爾冥々地高翔與世違0

三

琵琶湖二

二

送人歸隱琶湖三首

敎

江南風日好。鏡水照靑娥。回棹隨緻手采蓮發覽歌。

鴛鴦淺處下、侶伴晩來多。渡口生新月一莫言如夜何。

秋日登披雲閣應 秋色看將老。候晴礬玉梯。連山紅樹外滄溟白雲西。

飛管疑來鳳。輕裾欲拂霓。當風裁俊句不待侍臣題。

初倦。飄々舊里回。驚波琶水上明月鏡山隈6

十載游

軒冕身纔脫。芰荷衣即裁。遙知歸到日長在釣魚臺。

一水晴開鏡。屙城晩掛蜺。羞陪曳裾後護與鄒枚題|漭沆湖流上,歸來一畝宮。渚雲連儿上帆影落中。

不慕簪纓侶。長隨蓑笠翁,羨君明月夕短棹泝長空葦迎明月。幽期事不違。烏巾寒白露短棹泝淸輝。

楓影中流暗︾蘆花觸處飛。何人吹笛去。遙隔渚雲微

詠松壽山中翁

往々擢蟠根。爽籟當軒響 清陰入坐繁。

瑞香和石鼎。花醞湛金樽。齊謠天保罷-獻壽兒兼孫0

五日靜觀亭集尋袾館。雨餘風物新。紅榴初發色皓髪古稀人。

兼味堪挤醉。幽談不帶塵,歸途雖邈矣?好是溯江濱。

蒲癸園集次琴山翁祖席春江口。離歌魂忽消ˇ 征途艸欲遍驛舍花相邀。

方壺高萬份。上有奕碁徒。局自生雲石子皆出蚌蛛。

+1

誰識東方朔。遙尋西海隅。歌從金母和2醉使玉童扶。

偷去蟠桃實。寫來五嶽圖。爲耽遊戲興o歸路過塵區。

+

新辭少室去。遙就大林幽。人保三千載-玉成十二樓。

囊中貯紫虎,雲裏跨青牛。時策床頭石2乾坤電火流。

邈然姑射上。靈會不須期。客自朱陽翼主原氷雪姿。

相迎傾沆瀣。端坐弄參差。才隔三才霧人間總不知。

] 常携長命錄且着六銖衣。

乗月瀛洲去。看花筒苑歸。敎童護竹杖o唯恐怍龍飛

滄洲横碧海。眞子屬天官。田自生芝术o林皆棲鳳鸞。

腰間雜玉佩。頭上切实冠。丹桂花開夜-陪遊在廣寒。

七

天台少女子。語笑自微々。购爍三花褅翩翻彩羽衣0

才能調鼎藥。未解弄雲機?欲謁嫦娥去俄然入月飛,

*

五

二

=

江南多女子。爭蕩木蘭舟。長袖知能舞。嬌歌不解

探蓮依小渚。合耻在中流。日夕波稍急歸橈難自由。

東郊一眺望。二月艷陽天,峰巒消曉靄?桑柘起春烔

鳩乳孤村外。犢眠流水邊。飄々散步去緬想浴沂賢。

江南曲二首

爲壓塵間事。來尋郭北田。連巒寒倒影。一水澹含烟。

落木悲風外。歸禽斜照前欲賒村酒去徙衙小橋邊

春日郊行

請看汗漫子。暫息崑崙隅。八角携靈篆五星秘寶符0

索中小電母。袖裏大鵬雛。來去總飄忽 何關造化樞。

秋日郊行

一呼田作海。流水盡朝宗。倏忽蓬萊出o參差樓閣重。

竿垂九節杖。鉤掛五斑龍。時見銀濤色化成紅醞濃。

十四

縹緲烟霞裏。玲瓏珠樹間。忽從三島至或自上京還

盤上雲英淨。瓶中松葉殷。厨人揚玉屑爲雪滿人寰。

十三

+11

青羊貪爾賭。白鹿致吾輸。更向巴卯去橘中交不孤?

K10

* 九

索莫四壁中。但是多蚨憾。雖居不寬閑-無人爲勃豯。」何知萬里懸。來去自遷。一隊辭三島中宵到上天。

倚林作桅枷。引流爲碾砑。偏喜土風朴兒童亦不嫚。 雲衢龍作駕┘銀漢月爲船。爲奏新翻谰殊恩賜玉田

三十

三觴人己醉。八駿客歸遲。欲照金娥色-粧樓在小坻0

四

叱罵。

茅檐帷薜荔。繩床席蒲节。5 一自甘山菽。不復思海

豁達空明外。依微島嶼中,銀臺舍海日朱幡舞天風。

手揉三芝草。身朝太乙宮。輕裾翻不己。一片見殘虹4

二十九

111

鐵。老婢字是嬅。幸是薪炊餘。偏能供咄

11

十八

崑嶺最高遊仙曲

巳是經年馴。何有一

一從息機心。白雉宿林杈〝f

二十七

朝獲 差池集井幹。翩躚上衣椵。美好堪愛憐。虞人

失弓弝。

三十二

鞠水吾邦浸?宛如豫州搓。奔波齧石稜流下山罅。

二十六

忽盈议。

憶昨鞠城傍,蹇驢得同跨? 雲飄疑旗影?野空堪表碼。 無端迎玉母。鬠覃瑤池壩肜冠戴金勝猗帶垂朱

神筭輕韓白。兒戲笑棘满。晚來風雨颯-無是威靈吒, 並蔕桃始綻。五色瓜新華。往々多珠玉。拾後

二十五

三十一

幡々千載犀潑々數尺蠖庶產多珍奇堪向天下侘嶠

寂間柴門中。論交踞床榪。或是殊柄鑿豈得無窕擷。

前塢雲悠々。後池梟啞々。玄默須終年4休問他人。

二頭。層々雲作樓。鳳驂迎弄玉o鶴駟引浮丘。

薄田二三頃。一半種擺程。村閑稀力役地僻輕布嫁。|歌曲才三揽。人間己萬秋。寄言東海叟-屋裏幾添

拙奴名為鮪。己短髮多星。慾辭齒半齬。幸餘一黎牛。跨來從

盈々銀漢水。分得洒瑤池。鳥盡琴高駕耦織女絲

笹梁先生遺稿卷之二

十九

忽礬積霧峰。削成愛似華。烈風褫茅蒲飛雲入肘膀。 聞說遊蓬萊。珠堂連廡厦。翩々件玉童躧々舞素死。

匹練分駒影。垂天觀鯤化。丘壑勝區多應接自不暇。 火棗壓銀杆。彩霞灑瓊。眞人有殊恩-新賜麟脯肜。

二十四

十八

世間競交結相得如新。浙々忽爲黑-昏夕還稱高如不食蟬。虛慕無腸蛇。 掌上一叵羅。床前雙

十七

二十三

水母

背向

斜陽矖。禾搖疑客招。竹梟似人笑。‟誰能一討尋 。

村路本多差。鱵路

月上藤蘿墻 ' 花滿荼蘼架°爲因愛風光。斗酒不辭貰,

忽逢府檄臻。夙夜戒行吧。應圖涓埃報°何悔簪纓註。

十六

幽谷民多瘤。孤村雞半沙。地 心與歸雲舒。稻。

完鶏自招犧 甘梨奈來螫。從來人間世事々多醋我

二十二

二十 一

麥將

頓覺歸靶。

屛居猶嫌近?北鄙移草序。徹帶有佩蘭科頭或冠樺。

。

漉來好用巾。湑得何須酢。高歌金石響終日未曾嗄。

十五

二十

水壺婿含桂。玉盌漿是蔗。爲是禮數寬-沉湎汚衣衿。

十四

四境報有年。喜得釀新稼頌應擬伯倫失寧同僕射推開

唯應花月親?無復人情怕。蓬戶錙寥々盡日有誰爹。 副々佳公子。幸有顏色假。負海聞風測中庭美樹嘉。

肥後文獻叢書第二卷

鰐淵知投文。猿崖戒來乍。骓0 四隣何所談。菽文思增。中情任筆瀉。毗瀉 奇葩綻青春。新條媚

朱夏。琴得知音彈。玉逢良賈賣。到處歎流風。幾人

要生涯貴逍遙?何必要臺榭。

結廬雖郭內巷险自無另峡

白。

忽己借此翼。俄頃拉彼髂。傍觀巖阿中。皆是足歌々。

不借。靜坐對騷人。沈吟到遙夜,此生尚適意。何管

妻孥嚇。

壺梁先生遺稿卷之一

揚帆向京師。無復風波遮。燕金資豈乏魯車賜堪詫。

店 臺閣陪鵷鸞。裳衣惹蘭麝。原知太冲賦。俄然躍紙

青樽翁々酒。玉盤鯢々炙,皆言將來省忽然擔簦

至也太素有老母每

懷太素太素忽至

假心乍助。思親一嗜喟。醫指猶末歸'倚門暫此逝

脚

耽詩忘寢食。任它旁人訝。結綈擬漢魏˘淸麗慕鮑謝

赫々璞生光。粲々糲作粺。纔己吐隻辭。一譽避三舍,

*

弱冠入泮宮。研窮推匪懈。朱紘花前撫雕弓柳畔射。

解頤譚二南。蹙頞愧五霸。廖々慕古人。進取何曾罷。

五

四

特苗受風災。奇衣奈人斥,誰料因微瑕。正是就五。

脞惦记 非待晏嬰贖。豈借莊生赦。青天白日升。忽已

屬凡五

解紛絮。

三

心如流水恬。戲殊他童役慧。呼爲總角隱º高僧語豈

唆o枉也不識和尙呼

太素爲角隱

立|

痛飯人買勇-淸狂客如蜡。三十六洞天總是人談從臥畎畝間。任它世間怍。野禽出樊籠¯山獸脫器擭

十三

人間多得失。何堪塵事拏。身懷無價珠貎如不售賈

疾風一拔樹。破屋難復瓦 し於 忽生歸歟歎。田園

問桑柘

十二

粉々市城中。結隣得温藉。五斗供蟻綠一甕但蟹螃

窓竹月娟々。堦草露塗々。纔及清雅談頭風忽己。

汰素下居擬可與安

野生連墻相驪甚

+1

柄

樺

也十載己倦游。歸鞍今始卸。已有友朋集又逢故舊。

+

繁華雖可樂。中心慊夸詐。應似北嘶駒還同南巢。

屈指日如年。思家淚盈眶。何時一堂中置酒會姻婭。

九

時隨西溪游。或向東山驀。蹬 流雲生屐齒。落花镜車

牙。蜊感綠旅况多。因遺蹤話。人世千餘年。燕如

丸走。

原校上值字疑得字

花榭移奇種。傳聞自月支。阿難依怪石爛熳映澄池。

葉妥蜂先護。香飄蝶亦知。非因昨雨過何值值全披

雲散山光媚、風徐潭影淸?寥々吠-犬處々囀殘鶯。

芳桂氷壺酒。紫玉椀羹- 爲憐暮景好苔徑引藜行。

三

南塘散步去。忽已度東橋。幽舘依脩竹淸池涵碧霄 。

坎壈憐我愚。琴帙喜君招。家僕能扶醉夜歸不厭遙

二

草廬幽僻地,相引避塵氛。碧蘚非因雨叢篁欲拂雲。

器應趙璧似。坐使荀香聞。共道新知樂?晤言到夕曛,

藪敎授次杜甫過何將軍山莊韻見示余做

有客雙々到,翩如駕鶴仙°蓬蒿聊守素-寂寞此談玄。

口時懸雨,野江晚吐烟。相看堪滿酌-新句况成篇。

同前次南子韻

非似華山勢?寧來玉女名一雲將寸合風自崆峒生。

不用勞遊屐。居然占勝,知君有餘慶(一爲吐芝英。

麗澤書院迎南極二賢

寄題野文學盆石名玉女峯

醉後談成綺 興來筆有花飞何年重把臂6別各天遐。

肥後文獻叢書第二卷

開爾婉孌時常游野江议。飛簷逐雁鸿。長竿釣鱧鯊。

寧無嶽神降。艸莽少匹亞一學書三冬足。開帙五行下

逸氣堪凌雲。異材憐泛駕。交遊皆俊髦聲譽日增加,

二

將別林泉去。其如月色何。傾樽酒仍在移榻露偏多

己是披衣舞,何妨擁膝歌。媒慢君不厭避暑此中過。

和伊太素韻三十首謙研咕嘟1

八

滿床連典籍。四壁接山雲。癖本同元凱游還擬少。

回風林景媚。返照澗流分。早晩移家去結憐逃俗氛,

翠壁雲爲帶?丹崖石吐泉,檜松多節目薜茘且纏綿。

雅賞無口謗。珍盤擲俸錢優游堪爛醉°綠婿□如川。

山墅稀人問。扉迎我開。行々折紫笋往々

四坐琴棋靜?閑窓鳥雀來。休漫著屐去-恐是破蒼苔。

六

將軍賜洗沐。盛宴對林花4 塵表人鶴談餘兵是蛇0

芬芳眼己醉。筆研興堪賒。綠逕子眞到疑憐谷口家

五

四

* 五

一朵色。伴故人閑。最喜延賓日-阿那映醉顔。」之子游初俗。將歸千里家。身能探海嶽衣自帶煙霞2

乾坤新綠暗 此種獨朱殷。烟珠應盈橐貯 烟尙染顔深。遇處多名境。何山最深深

龍口邸集送姬文學歸國得家字

磴古莽苔合。林深白H瞟濤聲股作鼓獪想討韓軍」

華表臨靑海。丹樓擁紫氛。陟方雖代邈-德到今聞。

珠惹潮頭月。幡餘嶺上雲? 儼然祀奠日長此覺風薰心

謝松獲之惠芍藥

靑牛駕無恙。歸到紫溟潯一非有觀周舉誰知小魯心。

知自廬山至。衣猶帶紫烟。柳風生靠塢花雨滿春天,

非愛浮雲色。何聽流水粒,相看歡不極淨話入靑運。

贈口君自京師歸

萬里滄溟上?雕宮望自分?崚幃疑蜃氣縹々擁鵬?

當作祠

日苗上人至得烟字

休嫌城市近? 小築似林坷。垂柳當春丂浮烟谈晚汀² 柴門落日靜。相引坐書煒。海嶽知耽勝 ' 烟霞猾點*

揚雄玄尚白。阮籍眼終靑,我有高山曲請君醉裏聽心 | 談餘辜尾 文苑羡雄飛、杯酒歡將洽極端生月輝

冬日松門子宅集得四支额破松賽

葡葵園小集

往々多奇絕。峯巒集一隅。霏微依石出°縹緲倚空孤

紅樹時明滅。靑岑忽有無。村翁何處去蓑笠互相呼

南筑藤園二君初至分韻

飄然書與劍。行色映淸晨,云是思讓草一非關戀紫

弄雛鶴山外。着彩錦河濱-籬菊應依舊4歸來泛酒頻。

對雪思山中舊居

五言律

秋山欲雨圖

壺梁先生遺稿卷之二

送亦君歸省薩州

飛雪紛城市。故山憶草亭。銀崖千仞皓 烟澗一泓靑。

記得有幽侶 時來叩暮扃 回頭何限意鶴唳送淸聽。

高閣合餘照。偏教暮色遲。烏啼過後万梅發滿枝。 翩々脫身去。終古養高心。滿腹甘清露。一枝安美陰

才藻橫文笏。交情醉玉卮。何圖樂牧侶忽唇孟家知。 淙々荻送響。颯々雨成音,幽客眠初覺前林落照深

題壹岐八幡社應吉野需 原校社恐

濕洞庭上香翻湊洧間0

遙分梁先生遺稿卷之二

井家祖先本仡々。應公命之論閥閲貴此處女脫兎將。

遊龍松引應井門子之囑

龔何足寶。

卑彼豨勇與豬突。其言靡々有次序優劣俶慝未始失。

送僧公兮嘆稱將晛之。汝之所欲果何物對曰非祿又非貨。

顧得王松之蓊鬱。乃命有司興丁夫丁夫如林一何聒。

鑿之拔之終狒之。前吁後喁聲如沸颮過電奔十里間。

毀墻忽向家庭達。子孫灌培百餘年枝又生枝花已發。

更有流膏往々凝。製藥好是換凡骨,君不聞此物由來

萬木宗。况又恩賜雨露濃。貞節堪比君子操。寵待何

羨秦皇封。老幹結鱗々己古。恍見階前來游龍

贈古賀生

于田于聲色。沈溺沒身到今傅借問先生何所醉。

云是麴糵多雅致。月之夕分花之晨自引大白浮數四。

骯髒時拍阮籍肩。潦倒還把劉伶臂,先生閻國之表式。

應知既醉又飽德。薩州一百二都城堪使人々心醉劇。

人々心醉々德周。豈同獨醉本有畫然則小醉益謙辭。

自稱大醉名正得。余是山鹿野豕身少時結交風騷客。

風騷之客好濡酣。須臾化去殆作癖今也誤爲一釁師。

羊膻來蟻無旦夕。且恐怠荒招罪過不得醺々從所適。

官是俗物非虛言。有時思之面自赤何年能脫羈絆去。

與君大醉吐胸臆。

京

* 四

其他肥後文獻叢書第二卷

大盈之西肥奇士姓為劉。一氣矯々難與儔-裁詩知是輕鮑謝

屬文還更擬韓歐。自言磊落大男子雕蟲何能足解憂

吾師志尙在高奇。既稱墨妙又善詩?片雲縹緲龍欲躍? 願使頑民蒙膏澤。願得明君獻謀猷°時哉帶々未得志

五采糜爛鳳來儀。既重一身兼二絕未始求名々自隨。 聊探東隅與西阪。皷橈大海探隩處-拊髀名山最高頭。

休上人兮素者。笑殺聲譽四海施若使生來同世代。」吾聞風采渴慕甚。豈圖忽此接淸眸僊々雄興頑懦。

安得相與並駕馳。自道技能非我素°東遊願與名德遇。」風霰迸兮江河流。四坐寂寥皆屏息'片言隻辭誰敢酬

迢々幽谷蹈泥過。六々長灘浮杯渡京國從前名德多。」 君不聞古之聖賢孔與孟。終身坎壈名徒留。君子從來

應知切測得眞窨。君不見瑠璃珊瑚及瑪瑙。非得經磨 安所遇。一任天翁弄牙籌。

梁先生遺稿卷之一

言是華甲逢初度。 兒孫對此開綺筵-白玉之杯流霞洒

一堂嘉賓盡眞仙。君不見丹頂之鶴忽群至。相將飛鳴 醉翁兮醉翁兮。號得偶與廬陵同。古來所醉豈一端。

獻壽前。珊々偏疑環響。鏘々還似㳙傳。昨有松 秦皇漢武酢于仙大后竇氏醉于老、蕭家之帝醉于禪。

薩州教授山本君。自稱小醉翁?有詩見寄。

因賦答之。

醉翁歌非序

陰山子

武城月夜吟送篠叔凞還島原

階庭 江春看將半。江草緑蒨々。雨餘新含輕烟濃。風前還

飄不已。池上湃々波闔起。樹間鏘々笙簧鳴4笙簧波|與遊絲亂。誰家少婦美如英。步向春風求芬芳。采々

潤音相和。洋々仙樂盈耳,對之超然塵想斷。疑是「不知日將夕。結來最愛忘憂名。君不見王孫遊分不復

引我坐蓬瀛。

返。但看年々江草生。江草年々色不改。何圖人髮難

再榮。

爲裁松鶴篇。君家妙藥原難老。知同松鶴齡永延。

江草歌陰山生宅宿題

奇石何落々。盆池宛如璧豈無神螯抃仉見魚兒躍。

盈石引應紫先4需

籟瀏亮起。宮商相應自諧然。野客一得聞此瑞。抃躍

安字疑些字

上有松樹蟠根。千秋蓊鬱翠色繁o怪節恍看虎視耽

乖條還似蚪身蜿,君不見九萬之風明際起。忽入松桂園歌留別主人凉秋八月海天淸,海天明滿武城、武城城中十萬戶。

戶戶爭起黏歌聲,余亦携君弄月色4月色依々似相迎。 結菴雖是傍都門。多種松桂繭成藩松桂能效四憐遠。

與君同是西溟客一矯首家山千里邈風瑟々兮樹蕭々。」終歲不聞世上喧。謖々松風吹瞵戶'娟々桂月媚軒, 思歸月下傷心曲。君言治裝將在近聞之歉嗟何其已。|多君咿唔在此裡,倘友常與古人論我亦從前同臭味。

嗟君獨能得及瓜。嗟我獨未得歸家-縱令明月長如此。」倚開時來共晤言。酒三盃兮琴一曲優遊別自有乾坤。

無意重更對姮娥。

無那歸期忽己逼。將向西土問故園西土萬里雖逖矣。

相思寧無夢魂。

松鶴篇-奉壽大醫伯吉田君六十應遠藤生之需

誰從嵩高萬仭巓。移之君家之堂邊~貞蕤不改四時色。

蟠根應知欲千年。龍騰虎伏何瑰偉兎絲女蘿自經線。

人稀。春風時放扁舟去。閑與童冠詠而歸。

約然奪目盡錦綺。愧我鬢髮己皤々醉顔酡兮徒拊髀

君不見幽谷之中深山巓。幾處霜葉勢欲燃。惟有樵夫

木客睨。曾無文士詩人憐。此物何關顯與晦。發色不

改年又年。是故古來賢達士。通塞樂天長泰然。

百味珍膳不許世人容易窺。有時招致同腹子藜杖籃輿相追隨。 難波江水接海遙,波濤怒號拍碧霄一夕長風吹不斷, 青衿烏帽同來止。我亦飄然放輕舟槃[浣紗溪水诶。|簇來千艘叉萬艘。帆飄遠影連銀漢 檣擁浮雲支斗杓。

列榻樹間共飽觀。殺己馨兮酒亦旨各々聚首揮彩毫4 江南江北多豪富冶遊年少爭宣驕。千金玩好知瓦石。

偷間遊憩忘塵累。最是十月小春辰頻鬅霜業蝕屐齒。

難波江歌贈萱君譽

衆木黃落候。楓葉獨深紅〞煒々照碧澗璨々哽蒼穹。所愛丘山之奇絕,不問人間之是非?呜呼高矣君之操。

琴山先生奇無比。生來唯嗜泉石美夙營別業在西溪。」不啻漆園棠莊做。

西溪觀楬歌

磊落大男子。微官託生涯,手把一杯酒 6口吟八詠詩3

終日々無所造。 看流雲兮聽長風

贈八詠亭主人

席上賦奉呈

春日島田君肥後文獻叢書第二卷

二

瓊臺依稀隔薄霧華頂使人頓欲攀-清溪使人頻思。

桃源之洞桃花塢。紅袘滿枝々交互。其他名區亦奇々。| 小民多營々。見利鎚末。中士或栖々功名相攘

回磴危棧各極趣?加之浮嵐與流雲行人去馬及飛羽。 吾黨有人美如玉,距立超然拔流俗昔日側微無戚容。

八百里間誰遁刑。遂一描出有餘裕師分得意眉宇開。」 即今顯貴無驕色。珍重一規而同模生涯不肯改其德。

愛玩日々究晨暮。臥遊咫尺身自間笑殺世人誇勝具。」陽春布澤滿江山。遲日幸逢訟庭閒忽飛折簡招舊故。

還山吟應久保山生需

言笑啞々有餘歡。熊蹯猩舌陳鼎殂江鮮沼毛溢于盤

老去不堪逐塵蹤。飄然歸隱碧山中。一畝之宮無隣里。」狂蝶隨風飄坐裡,啼鶯呼友過戶間-況有叢梅花正

下有潭水上峻峰。君心澄清潭水似君心高奇峻峰同。」繽紛來撲玉壺殷。

總瓊瑤,層樓之上深宮裡艷歌妙舞日相邀。

君不見百濟之人裁芳辭。梅花千樹水一涯一皎如晴雪

凝姑射。臞似列星纓紫微。中有風流傲吏宅。終年寂

寞到磁梁先生遺稿之一

10k

一世優游堪可了。那須更問無何鄉。

喬木千章齊矗立,飛泉萬丈又奔注赤城縹緲起明霞0

深山有鸞鳳。誰能與之心翺翔。幽谷有芝蘭。誰能與

楝花亭歌

潮師似癲豈是癲、山水之癖任自然從前苦慕台嶽勝。

題潮師所 台嶽圖

何幸此日陪坐間?仰名山兮聽妙奏心飄々兮身欲仙。

池非習家池?客似習家客。春日相逢命洒觴。抗言譚」時對之理琴曲。峨々之韻浴四筵,誰知山鹿野麋性, 北筑樺松二生至得家字

縮地何足羨。夫子得之喜滿顏。朝顧夕眄几案前。

君萬里遊。相送相泣言未盡。風帆翩翩不可留。

人負得移。寧無巨鼇戴且抃。靈運著屐徒自勞。長房

含風裊々拂碧流。二月三月花稍散千條萬條翠已稠。」其躬。靈區空入夢寐看。常陽有君欽儒流。遙贈一

去年幾人繫征馬。今年幾人繫別舟。我亦攀一朶。送 供愛玩美質皎然玉相如。宛似芙蓉聳霄漢。忽訝神

遊子何日返?離歎何時休。君不見銷魂橋畔多楊柳。

玻璁。夫子冥搜心未倦杖屨欲一礬棧。無那好

爲白

送人

折君不見乾坤第一奇。 萬伊芙蓉擢溟池﹀三峰勢齊疑三

島。九轉望同非九嶷。層氷不識幾千載。幽翠侵衣六月寒。君不見別傍絕岸寫偃竹。宛如蒼龍

飲碧湍。砥風雨晦冥時。此竿飛去入葛陂。

所賜也。

栗山柴先生命其盆石。日小芙蓉。蓋水公

風枝雨葉拂雲端。葱々蒨々幾萬箇 繁陰自是堪棲鸞

小芙蓉歌井序

高標惹烟烟淺々新條合露露惹烟含露多秀色0

楊柳歌往々化古喙三尺。职脘黄鳥枝上啼。撩乳飛花樽前落。須及

此時甘沾酣。況又今日新知樂。我既醉兮客欲歸。怎

懃重期明夕。遮莫女兒笑殺人。馬上接離取次着。

之心芬芳。鹿門山中有隱士。一臥十年閑且清。簪纓

即今累形骸,泉石猶未脫膏肓。楝花亭上晝寂。日

話舊溪自相忘。赤城之霞碧溟雲。忽隨彩筆滿高牀。

赤脚欲躡峰々巔國有嚴禁不能果爲之忽々數十年

忽聞來舶江稼圃。善書天縱有妙悟叉聞其身度石

餐得烟霞盈肺腑。師兮喜躍不能眠直向崎陽飛杖屨

囑托慇懃請營爲。江生俄然開絹素不須九污一擺煩。

攢峰疊巒隨手作。傅衍已看巖腹虛°輒還敢石骨露。

主人本有好竹癖。高堂畫竹滿粉壁?上羅列碧琅玕?

子壽萬年。異哉巫馬期。戴星徒爾爲。

畫竹歌

一躍千里凌雲煙。

三原邑宰宮士龍

汗偏

潮鳴館歌贈。

落木關心溫被情?送君津頭時仰望積翠霏微海一方。

翠霏微海一方。」二月三月艷陽天。逐去逐來大道邊垂揚欲怫黃<

欲往從之奈纓絡,徒使我心雲際翔

飛花故 紫繡韉ˇ爭訪華懼與行

業己人秦和室。廣譽兼傳子墨場。秋風非戀魚美調馬茫々揣摩原。斗折入滄海。中有萬仞山衆峰何嵬罪。 姓氏與之同。何其相反而異德疑是補天之餘化為人。

君不見有物膚寸生其阿,未崇朝兮俾滂沱。又不見泌 否則彩 思何能縟如織。又訝泗 濱之產 化爲人。否則

沸出仙液。往々天然豬爲池一浴頓覺明視聽。再浴 高談何能朗如玉。多君少小嗜遠遊行盡西鹵與東。

偏能祛舊痾。三浴四浴換凡骨。輕舉不用假鶴車。我 究兀三十六名山。山巔何處無足跡今日新知似舊知。

會赤脚躡其巔。鵬際風落披襟前。羣山如桴米。九州 笑言相對共鼓腋。珊々珠王携在囊紛々烟霞吐滿席

似彈丸。試向青天一長嘯。玄牝之門嗚瑲然。爾來時 我亦生來好跋涉。無奈一官長蝸縮'只今聞君語探勝。

思踰峻巉。于今猶使足心酸。知君夙己住其傍。探藥 心神忽馳丘與壑。君不見鵠鴻高飛縻蒼穹, 視之

日々滿奚囊、丈夫有志嫄匏繫。負笈比年客異鄉。鴻」徒奮翼。

一脊之肉厭九州。譚來雄癖如懸水蕩盡客裡許多愁。

温泉山歌送田子溫還揣摩原

石生行瞻石井某

左牽右牽人如蟻。浦口引上宛似丘一腸之膏盈千斛。

肥後文獻叢書第二卷

11

奔流懸呂梁,君辨與之同语々。奇花發清都。君文與

之同灼々。漢有訥於言之奮。晋有不識字之勒,君之

寸管調諸律。一綱舉衆目。苟能得其樞4何用更役。

備州有良宰。政事惠且公。築室于海上彈琴于其中。

君不見九萬之風生鵰天。無際之潮鳴湃然。對之搖

又曳々。流響餘韻互相纓。邑人聞之有喜色。皆曰夫

緑耳調罷赭紈袴翩々誰家子。最後控來鐵連 鳳爲頸兮虎爲春,

朱唇霜齒相映鮓疾如奔星

朱唇霜齒相映鮓Õ疾如奔星過漢徐似遊魚憩深

斯馬良穩稱無比。況復逸氣殊可憐若逢善御如造父

聳梁先生遺稿卷之一

君不見一之日二之日日睦。栗烈壹岐五島際。北風

々。

萬里惓波濤。雪華如手撲衣袂。報道大魚自西來、壯

士喜甚躍一再千舟萬舟何泛大旗小旗且旆。鳴

僮擊鼓聲如雷。倏忽一進與一退。鯨性能浮不能沈。

中流方羊欲何逝。人々負向空投須臾群降干矛,

粲如白蛇集碧澗。爛似列星一時流萬咺之浪化爲血2

鯨兮振怒天地崩。楚漢之戰何得比 昆明之陳難儔

擣虛堪擬孫武子。益辨不讓淮陰侯中有壯士最樂點。

單身蹈波乍沈浮。擢刀直刳鯨之腹貫以萬丈之長繩。

五九九

大龍師

君不見萬里隨身釜海涯。馬上閃々白虹飛。一揮忽散

十萬騎。再揮或解散重圍。膽氣矯々誰能敵。深入忽

擒王子歸。止兒啼兮祛瘧鬼。異域于今仰神威。微埃

不起昇平世。室裡空睡百餘載。慷慨譚古時一看。使

我心在金皷際。

吾師有喙長三尺。善譚妙理稱無敵瑟如鳴禽響秋林1

朱殷幾處見血痕。朱殷綠沈色相接箱万凛々驚人魂。

古木繞祠白日昏。壁間儼然鐵鎗存綠沈千載餘手澤。」璧月夜愈明。
一吸忽看衆壑走。一噓忽使萬山生。

作雨。眼

君不見驊騮新從渥洼來。飛騰奔軼勢壯哉。齒已長分

人空樂。何知昔是不群才。十舍之駑千里駿。共在郊

野同困窘。祇今無復田子方。兀老骨有誰愍。

䰢鬼將軍鐵鎗引

滄海產壯士。有力如虎兕。丈八蛇矛重千鈞。能投虛

余宿博多驛。驛人譚捕鯨之事頗詳余壯之。

作捕鯨行。

苦辛巳經百餘戰。感軻未封萬戶侯李廣數奇難成績。

廉頗遺矢不見收。刀痕箭瘢無人問°鐘鳴漏盡獨自愁。

捕鯨行

高唱凱歌入未央。自此年々事防秋荏苒日月空白頭。」名爲應非得風雲何展翼。

原按膧疑網之!按,字未必

雷皷羅裕動天地。魚麗鳥列忽卷舒-虜光驚走陰山傍。云是短袖技己癢,願言東遊開雙腋°赤馬關前控白牛。

乘勝追北膽氣揚。馬上割飛北斗傍營前射殺左賢王。錢拐山下飛金鍚。衣巾翻々身飄々。直到京師經流席。

轉戰深入度幾日。任他蟣蝨生甲裳麾下斬首三千級。」緇流到日如雲屯? 纔出片語皆辟易。君不見南溟有物

空遙人雲。壹岐五島多大吼、養壯士至千人。北溟

有魚字爲鯨。朝遊西崑夕東瀛。尾擊靑天時。

似水波乍相激。釋道安支道林 何事名聲漫藉長颯爽虬鬚有光輝。十歲學劍單當複°十三走馬疾如飛。

抱丘壑情。清秋八月月明天。飛揚心到金峰巓。金峰」十五殺人無忤視。二十爲將向金微誓言此行無匈奴。

之巓高萬仞。雲端秀出似靑運。上有縹緲神仙宅。側」旌旆逶迤日夜驅,嚴冬十月殺氣肅6黃沙飄揚白枯。

高子友宿小金峰歌

本是輕薄俠少年。生來好交客幽燕身長八尺腰十圍。

澤然古善哉時々乘微醉。談盛古來英雄事淙如流泉鳴山間。

颯似金風之夜至。意態聲音皆逼真o劇易高低各得次。

一語便敎懦夫興。再語能揮志士淚。邈爾九原人。凜

有生氣。

老將桐七尺强。傳歷將盈七百之星霜。蛇紋蠹篆早

已就。銀柱玉爪未全亡。吾邦左子稱好古。得之抃躍

心飛揚。珍誰不知幾重襲,缮治新成七寶裝。箪分

兮似有靈。隱然露出壽永銘。惟昔諸平遵海渚。隨身

無日不愛撫。雲停赤石磯。波刧紫檀浦。運移傾覆不

可扶。百萬之衆化爲魚。遺愛唯有此箏在。彈來一坐

盡噓彂。

行

緖方生譚古英雄事引

只見茫々潭水靑?送君爲作琵琶潭之歌。琵琶潭歌哀

情多,請君歸來試一唱。琵琶潭底有驚波。

之子本慷慨。遊學豈有方。逼窺故府記欲探名山藏。

壽永筝引

金罍美酒各獻酬。滿堂有客盡仙侶齊唱千秋乂萬秋。有潺湲玉女泉P
神仙玉女今何在。遺跡千載空依然

琵琶潭歌送人歸南鄙

多君躋攀明月。行尋遺跡興相牽3 誰知絕頂投宿處

借問遊子何處還。云是琵琶潭水邊~琵琶潭水深千尺。忽逢玉女與神
仙。白霓爲裳星爲佩飛來飛去何娩娟。

餘波遙與滄海連。君不見凉秋八月天如拭。前汙 空際齊跨彩鳳駕雲漢
還乗金龍船相携使到帝之側5

湛無煙 此時何人乘輕舸。半夜對月弄四。初疑水 上帝爲開列眞筵。
飲以淸郤碧霞醞賜以崐崙白玉田。

石相繫鳴。又似檠蛩寒呑聲。啣々已隔深林徹。淙々「受賜忻然拜舞
去。風吹衣袖故翩々忽是空中失步。

更入長空淸。白髪山頭月未落。赤松坂前雲欲停。不」身在金峯彩雲
邊,耳底猶餘蕭璈聾舉頭東天日已懸。

知彈者誰家子。非是龍女必湘靈。曲一閃兮天忽,

蘇門有隱士。嘯作鸞鳳聲。一朝碓混簪纓侶。七尺樹梁先生遺稿卷之
一

墥墳忽入夢。書劍暫還鄉。班荆談舊故把臂吐腎腹

況逢此良會,嘉賓粲滿堂。竹色侵氷的桂香飄玉傷。 有鶴有鶴雄又離。一生滄洲一瑤池朝餐並蔕芙蓉實。

四坐多俊句。啥哦喜欲狂?忽聞上曲别鶴音悲傷。 夕棲連理珠樹枝。未向人間容易過翩然試下井子家

豈同萍水合。胡為來去忙。分袂山河邈 何日沐芬芳。 一鳴驚人再鳴感。三呜四呜宮商和使人不覺舉袂舞。

武城邸舍别和田賢契

使人不覺擊節歌。借問非家誰最愛'綠瞳神人翁與婆。

去歳孟冬日。悽々送君行。豈意今春

豈意今春晩我亦賦東征。」婆是西方金母偉。翁是東海青華流-飧丹沙兮服氷玉

忽然投隣舍。文場尋舊盟,月夕共同賞雨晝互相迎。

雨晝互相迎。行道多年未曾休時々便控雙鶴去、縹緲直入九天

促席無賓主。一醉遺旅情。嗟君戒行理o征帆向西瀛。 九天來往如咫尺。帝處暫時聽樂留'歸來兒孫新開宴。

雙鶴歌#序

愛日書院别古公款

寂歴琴曲。結廬隣野田。近霄霜頻下前林紅

忽逢嘉賓至。相揖啓竹扉。歸禽點々過片月被林霏

四隣寂無聲,語々入冥微

七言古

暉

逢此和煦辰。晤言聊逃俗。命的心悠々。再三操琴曲。

請君休促歸。幽興在秉燭

林紅欲燃。

依々袒翠壁。垂々媚清漣。珍重天工妙何必愛春妍。

呼童命杯酌。列榻哦詩篇。潭鮑迎人躍°溪嘎對我

此遊多逸興。醉裏即是仙。

叢桂園觀楓作

明年朱景。

朝來微雨歇。庭草漸弄綠、林靜花自舞池暖島爭浴。

一別似弦筈。相思如今古。矯頭望著天 聚散當有數

何時摻君袂。心緒一得吐初春蒲葵園集得綠字

蒲葵園小集得悠々門前水。亭々水中礴。官餘多幽意垂釣坐斜。

候。我亦就郵程。君已辭故國重此對武城

來去何齬。使人嘆此生。仰看浮雲色聚散逐風輕。

忽々不能語。涕淚紛沾纓。願君 恭謹持家

井上有樂翁及其分室某氏。年甫七十。因賦

雙鶴歌壽之。

少時同筆硯。老去隔叄商,雁信离愁絕引頸徒

不。吾齒搖將墮。憶昨文場中盍簪弄機杼

此土多俗士。與誰相周旋。邂逅空谷裡足音喜然。

況得純厚士。忽此得結。有時乘微醉抗言吐肺肝。

在江部贈小小園臨曠野。佳節會友朋。菊蓋霜後媚°楓色雨餘增。

人肩相摩突。車馬一何喧。但待瓜時及揭日送晨昏。

深覺田園樂。風味可勝言。

森澤

九日麗澤園集得鵬字

雖遇春澤布。瀰意胡爲存。偶有二三友携時出門。

知爾歸養地。守株事不曉。尚能分其德°何愧在蓬藜。吾生何所慕。山棲與樓居。子舍雖僑寓。有樓百尺餘。

春日在江都贈大年

青嶂當軒秀。奇絕盡不如。我來一攀上超然心志舒

君有琴山墅。吾有竹里園。佳日互相引吟哦醉壺樽。|剩有綠婿湛。鮮紅擊江魚。彈琴乂揮麈優游情不踈

今吾居邸廨。宛如獸在藩。窮困又窘厄寧不損神魂。最是堪懸賞。前林月出初。

況復嗜遊學。西東馳輪蹄?桑梓入愁夢書劍向故溪。

過佐藤授讀僑居

瞻彼拚飛鳥。不敢改其棲,踪跡崇惟一o庸詎漫易蹊。萍藜觸處滿。潑湘躍銀鱗,對斯景物好剩傾紫酒醇。

之子何所業。世々執刀圭?友朋多切和緩欲提携。一饒它啼血鳥。漫促未歸人。

送醫人藤君玉還鄉

同柴先生汎舟墨水

一別海字

。終古使德全。

人事村蟠年宅得五九六

乘官暇時々醉如泥。

肥後文獻叢書第二卷

多紛挐。何必相排擠。不及茫々天壤間。何物不傀儡。井蛙身自安。何必羨東海。

終年無所營。裁句弄文彩。亦雅偷一時豈是期千載。

招々此盍響。旨酒喜歛待。俯仰堪一粲饒它客與悔。

如弦筈。實知會面難。愧我以康劣o贈言比聖賢。

古人尚推己。不欲獨取妍。古人多罪勉不肯懷宴安。

諸君須服膺羇旅多憂思。忽々送三春。豈圖相引去艤船下江津。

崖樹花初謝。葉々弄色新。兩飲風飄拂流波綠粼。

君今將東去。余亦向西還,雲山與煙海º各天萬里。

此裡堪占賞,何必高處登,開吟時擁膝醉臥且曲肱。

原甘控地覺。不羨摩天鵬。笑殺路傍客半夜頻飲水。

贈赤彥禮

故人如飄風。倏忽過吾土。恨不得晤言搔首空延蛇。

君綉未蒼之一

五九五

壺梁先生遺稿卷西山歛餘曛。暝色何爲遲。隱々層城上忽己出半規。別墅憐民舍。終年絕輪蹄。爲愛秋色静佳賓此招携。

素輝稍流動。瀲灩滿淸池。嗟彼同袍子。遙在天一涯。 一逕多隊葉。啞々宿禽啼。仰見山巒列。一高又一低。

中宵起徬徨。綿々多所思。惻然乃顧影。心曲將愬誰。」俯窺池水湛。漣漪亂如綈。玄對與把臂緬懷呂兼。

麗澤園同馬彥章邊君彛賦

對月懷友板徵卿宅席上作

何必問仙鄉。」向暮猶淹滯,酡顏貪風吹。

析字當作字

吾友懷高志。構亭臨碧漪。餘暇飛屐至素琴彈獨孤

遙々楓林上。一半掛斜陽。牧羊下村閭歸禽過雲岡。淵魚時出聽。野鳥又來窺。況逢修禊H群賢不愆期。

送馬彥章還山

上己灛盈園集

一看便彷徨?

俄然辭世累。倚林結茅堂。山色朝昏變。荷風坐臥香。

愛鶴同和靖。賣藥比韓康。佳辰迎友侶珍重引壺觴。

心藐軒兼冕。何會論得喪,彈琴或播帙四坐盡相忘。

多爾優游地。能敢白日長。

一朝風雲合。龍虎近冕旒。雖無和羹重時有借箸籌。

夢賚同傅說。恢復想武候。尖沙赤坂上藳人金剛陬。

已除豺狠害。無奈虓虎騰。藩屏將何在瓦解又土崩。

神算無端倪。衰運難可興。忠肝貫日月義氣激千秋。

擬孟襄陽待丁大作

寄題森子谷口亭

礬去勳誰贈。彼美隔遙天。

君子何所尙。隨時有行藏。谷口泉石麗晨跨蹇驢去。平湖澹生煙。北風何要洌忽有暗香傅。」天綱一解紐。王室如懸瘤。區々方寸地常懷寰宇憂。

沙村行欲盡。一枝春妍。偏疑雪華點ᴼ寧無星斗殘。

夕隨流水滸。乃就業篁陰。璧月稍將上爽氣滿衣衿。」仰看雲間翮。翩翻互追頪。聊此載書札千里相贈遺。

臨風時一彈。響淡趣何深。却愛知者少。高奇得冥心。」書中何所述。只言悲遠離。湛々盈樽酒°吾語知何時。

湖上探梅

詠史

空山忽己暝。萬象稍將靜。絕壁有飛泉溪送清響。

林岫鳥爭還。蘿軒月欲上。素琴殊未彈待君一來賞。

君亦引杖去。西山還艸堂。艸堂何所有藤蘿惹露凉。鮮膾滿銀盂。芳婿浴縹瓷。抗言談今古不必折毫釐。

壺樽明月下。朗吟醉清光。天眞信可保偉哉彥禮。少任任俠。曰慕儒雅。乃革其習。淺彼環一嶧陽千載幹,爰伐作雅琴。粲々素絲紗鑑々太古音。

々俊彥。乃躅其軌9其七

題井大年所藏古琴

隅有介弟。誼同信陵。獻可替否。實爲股肱。忘其戴丹梯百餘仞。樓觀幾重々。香幃何翠粲珠簾且玲瓏

冕。下彼擔簦。故天下士。來歸朋々。其六

下有雲夢澤。飄發起雄風。蘭殽支一閣桂酯置千鍾。

鴞。載好其音。敝滌舊染。仁禮存心。其

君子有所思行

今侯建學。車騎儼臨。耆德是向。古訓是耽。翩彼飛

五言古

有關虎臣。肆伐琉球。奕々艚艦。林々戈矛。乃擣萁此眞趣,傷哉俗夫。徒焦肺腑。

虛。執訊獲俘。上下讋服。駿奔獻貢其四

維新公子。恂武且賢。其武維何。鏖韓如掾。其賢維 頻引流觴。左右飲御。且嘯且歌。頓消萬慮。人帶筆

何。讓國如瓶。天嘉其衷。裒舭子孫。其三

研。同覓俊句。玉山應倒,金谷依數。笑他塵間。無

有嚴有雍。共武之服。於鳩僝功。其一

世有分德。龍公維淳。天賜叡智。胡然而神。煽々赫一篁。右則茂樹。怪石並秀。清泉爭吐。魚呑浮英,烏

哪。威耀朋隣。崔彼島。爰創重其二

陶飛絮。正丁祺辰。誰誤佳期。芳酒鮮肉-咄嗟張具。

時屬和煦。爰事遊豫。涉彼莽蒼。踰此峻路。左有叢

源公之胄。誕降墨江。相攸于西。維薩之封。濟々名

西園流觴詩

送薩人赤彥禮

陽。泣其啜矣。願子勿怠。俾德今蔚其中

四言

自子之來。四歷裘葛,仰視參商。奈此膠漆。言餞河

悧。風氣日陟。如玉斯溫。如蘭斯馨其九

大城媖著

亹々彥禮。求道不息?乃遊四方。以博其識。是切是

梁先生遺稿卷之一

堵。佔嗶居業,聖賢何人。庶幾可及其八

肥後文獻五九四

叢書第二卷

休矣田翁。學出室子。如金汰砂。如穀殿秕。其源旣 君子無所樂。辫
陶有愁容。長嗟蚩々子何日歸春。

清,北流匪滓。英紫溟先生遺稻卷之六

西瓜往々見題咏、南瓜則寂然、盖以爲不韻也、此篇

寫其形狀、巧而不俚、間有韓公石鼎聯句之趣、亦能

蒼老、夫苦瓜之敦、匏瓜之繫、誰肯爲韻、然遇二聖

馬先生南瓜詩

天清氣爽、是當賞月之期也、昔者菅公有言、曰中秋

玩月之遊、避家忌以長廢、吾藩之諱、適與此同、故

宜以今夕爲攀桂之遊、僕與已動、不可禁止:棹小

舟、徑赴廠莊、凡吾同社諸君、將其來施々、時哉弗

可失

失題

與馬彥章

兩次住稿皆領、而望前後、僕從俗上墓星山諸處、冒

暑奔走、流汗若浴、不啻吳牛之喘、夜則屬課會、勉

强坐督、十七日薄暮、初得少間、倉皇遯出、急棹小

舟、赴川上之茅茨、將解衣般礡、自慰數日之勞、俄

而衆醫持詩卷來集、即席乞詐、四更而散、困憊可知、

嗟乎退隱病夫、劫々如此、謂之何哉、住稿在案、不

能施丹黃、延至今日、爲此故也、敢以詳告、謝早緩

之罪、幸勿深怪焉、今乃照數還納、但佛國偈留之而

巳、偕評各附佳什之尾、餘俟面罄、不宣、

人、皆爲經訓之興象、今也南瓜遇老手筆、忽爲藝苑

之珍賞、因知微物猶有遇不遇,而況貴於物者乎、

馬先生南瓜詩云、黃熟南瓜正橫圖、開從柬浦寨之

邊、甘霖何料逢豐稔、老圃載鏈 在一巨船、就中

一二最稱大,宛如笑伯腹果然、其中空洞疑無物、

數百欲待容人全、膚厚知乏空虛地、其重宛似堅石

堅何人相贈情何切、碩菓不食有誰憐、大樽難泛江

湖上、生涯室誦漆園篇、阿葉以下漸入心

古城貞吉

校

事老杜詠物之法

謝辛訓導啓

應命丹黃、僭妄之罪、仰汪量耳、對客裁報、草々不

答馬 草

之書、順未閱之、他日抄成、惠示是幸、佳稿在案、

接手教、聞昨日有命、充今年邊警之備、足下矍鑠不

疎懶之性、加以事紛、未着潛部、今讀來示、且驚且 啻據鞍四顧、折衝之選、不亦宜乎、恭賀恭賀、但恨

愧、遽施丹黃、敢以還納、極知紕漏不足存錄、請一清時無戰伐事、不令足下磨墨盾鼻、賦從軍行也、新

裁擇、清恙想已復、時尚祈寒、千萬調護、冗中作服、 詩二篇、諷詠反覆、益見雄壯宏麗、不覺擊節嘆稱、

草々不宣、膀月二十七日、

答安東子敬

辱惠酒肉、荷愛良深、椰灸紅肥、酌翁々之白、以享「此卷也、荻軒右田氏輯之、先屬其僚友安藤繁信、使

盛意、何畏寒威之凛烈、

答大城寫八行、託秋鴻之遠信、此已踰分、復多儀、囊可

伯升

則如此、今舉一世、能知足下詩者、台州一人也、而土歸装甫開、爰蒙分惠、樂歌五袴、誇晝錦之餘榮、欣

奄忽長逝、僕既爲足下吊之、又爲一世慨焉、咄々彥

章、大雅之責、獨在足下、强加餐飯、勿左陷大澤、

貽台州笑於地下也、

第二卷

盛烟、相思之縷無盡、炭堪蓄火、方寸之丹長存、汗

顏拜貺、走筆刊酬、

四時圖歌序

圖十二月景象、乃請一柳氏及其門人、而春夏各題歌

一首、又請久志本氏及其門人、而秋冬各題歌一首、

別後藹陶、忽接書函、鄙懐頓浴、歳抄之賀、蒙惠米 盖一柳氏者、慕古調之高妙、久志本氏者愛時文之清

提、殊爲厚儀、例當僻之、然躁疆百里、酒脯不可致|新、其趣雖殊、然皆文質彬々、爲君子辭者也、於是

焉、是足下所以預語豚兒也、故不敢辭、敢以拜嘉、 披對之間、于圖于歌、不唯有四時興賞、而古今千百

但無以爲報、愧感交集、聞前日鄙詩已命裱匠、何爲「餘年、國風之體製、亦可見矣、肥後熊本教授高本順

然也、是醉中援筆之作、不記爲何語、顧不足覆醤也、序

若裝潢未成、請速止之、勿貽衰拙之羞、十二木占筮

下詩、於赫蹄中、便能判然知其爲正音矣、於是東西

乃慰鄙懐、叉凿歸後患麻疹、然己矣、慶喜曷極、 萬里、未嘗目擊、而推以爲同調、是所謂知音者、

順家拜清之以下、十有一人、同時罹此患、順鱵然在載一遇也、第論其雌雄、則台州旗皷、焉能當吾白嶼

于呻吟之間、因苦可知、然皆不至劇、今也稍起、勿一哉、台州雖崛起、而邊境寥々、無可與語者、足下則

勞遐念、曾木生奉訪之約、來意懇々、具以告生、使左提右挈、日摩月琢、所謂魯多君子者、所以荆山

緩其期、乃擬節氣凉冷而後發、顧在中秋前後、足下之璧"堆照乘之光也、台州之不能當、不亦宜乎、雖

日抵山鹿蝶、阻水一日、行李無恙、以重午至于家、

與故、事紛相仍、不得鯫作報、以至今日、遲緩之罪馬彥章

已、交淺言深、冀罪是幸

、

情原是希、秋熱更酷、千萬保嗇、適得小間、揮汗布

字、草々不宣、

門、想爲學之道、先生必有所指敢焉、固不待順言、 若能先來、携生而歸、或待生至、與之偕來、告所希望

然切問之辱、不可以無言也、姑誦所聞、以酬盛意而|也、如何如何、書團實以今月四日達、以舉家病患之

答安東敬簡

承諭、向者淹留旬、大慰渴望、但順日赴學館、歸

則疲倦、不得講習討論、以副遠來之意、是爲矣、

來書乃云、勝讀十年書、又云一動一靜、皆可學友、 足下口熊台州久矣、而僕未嘗問其詩、日者惠示青葱

惡是何言也、順本懶惰、加以老病、出則奉職無狀、 稠載二集、乃讀其所載若干首、格正調高、不失大雅

入則齊家無術、且耳聾骨痛、日甚一日、是以居處不一之音焉、宜哉其自任、曰西有白嶼、東有台州也、昭

得恭、寢興不以時、飮食不得適節、其佗憒々、一無明之代、文j日闇、翰墨之場、鷹揚虎視、不乏其人

可道、深自恧耳、而足下之言、如此者何也、極知足「然以僕視之、概舍正路而由邪路、故其於足下詩也、

下非諛言者、盖原愛之深、遂致高明之惑也、請更哲「貶之者曰明詩也已、褒之者曰敏捷、曰富有、是皮

之勿爲淪胥以陷焉、而增順罪戾也、前月三日、足下一相、豈足爲輕重哉、唯夫台州獨操介然、其志盖欲得

己發、雨滋西、行塗之艱、深以爲念、得書乃知、即其人、同心戮力、激夫頽波、而反諸涼源也、故獲足

內而不出之際也、而英偉之質、既己如此、幸能遜志、

務循其序、而致知踐實、一依其法、日夜孜々、以盡

其力、則他日所成、豈可測哉、且足下所謂世用者、

非治國平天下術乎、此乃大學之規模、勉强學問、物

格知至、則是等事業、亦將在其中,何必他求之爲也、

若其不然、唯世用是圖、竊懼駸駸然入於權謀利之

域、縱有所成、豈足觀哉、又聞足下嘗遊黑澤先生之

答井本孫太郎 椥川人

鄙評在尾、意長筆短、統祈亮察、

其成也大、竊聞足下齡未弱冠、是於古禮、聽而弗問、

辰書、肥後文獻叢書第二卷

五九

强之氣、軒軒乎鈎畫之間、豈所謂難老者耶、慶頌何極、

卷中藷作往往清新、漫施雌黃、未知當否”餘具別疏、

乃知足下才高氣巡.銳志斯學、盖一時之英也

書中之言、始以間劇緩急、論師儒之職、次以章句

詞章、及舍邇而取遠、非議今世儒者之所為、皆鑿鑿

八月二十六日書函至、乃承尊祖姑大孺人奄忽遠世、 可聽矣、末邃及順、而稱譽太過、且謂區區所為、

大為駭愕、仰天長嘆、起而北嚮、爲老先生懼、恭惟「與時俗不同、辭氣懇切、以求鄙言、此盖虗名妄傳、

尊祖誾庵老先生、平素友愛之隆、著聞乎一時、春秋「以順爲可與言者也、順之固陋、焉能當之、曩者邑

高邁、忽遭凶變、沈痛之情、何以堪居、禮曰七十唯 適闕館職、使順承乏、義不可辭、乃與一二僚友、劣

衰麻在身、而况先生今兹八十、唯足下竭力奉慰、飲 劣從事、而其所爲亦不出足下所非議、深自愧醌而已、

食忠養、勿令滑和、是則順之所望也、又辱示除先尊 豈有可爲足下言哉、但足下己知時儒所為皆不是家、

祖姑在日病證、及足下三年之內、游遭三裘之狀、情一盍由古人爲學之道耶、順甞聞之、古之學者自離經辨

意悽惻、讀之未莧、涕既零矣、既而又爲足下懼、今一志、以至强立而不反、循循有序、又必博學審問、

也足下上奉祖老先生、中事尊大人先生、下則身將 思明辨、以致其知、篤行以踐其實、夫然故其造出深、

立于朝、而以奕世名家、爲盛潘斯文之主盟、其爲任

也大矣、若以重裘之故、過爲哀毀、其奈二尊何、深

自寬抑、勿貽二尊之憂、此又順之所望也、又承是歲

十月、省庵先生百年諱辰、嗚呼哲人之遠、人增槪、

祭文殊見筆力、間有可言、僭妄點竄、聊以報來意、

豊潤色云哉、侯章之需、輒告吾黨、待成貢之、佳

順進講于府朝、衰朽之質、鞅掌戰事、不遑其他、性

他畫成門人爭乞之、若不滿其意者、必指示之曰、此

氣所不充也、是可擊也、必正氣充塞、無一膣可擊、

然後爲饺、以是視之、凡其所爲、皆以刀法推之也明

矣、余父竊謂人咸知翁多謔、刀術之緒餘矣、而殊不

知刀術亦志操之結餘也、順嘗聞之、翁謂其徒曰、凡

今爲士者、以武爲名、以是事君、而弗習武技也、其

可乎哉、尖刀也者、士所佩也、出入起居、以此衛身、

故習武技、必以刀術爲急、刀術難矣、不專心致志、

又畏暑、廢絕筆研、以故闕然不報、涉夏及秋、皐綍

之罪、深自慚愧、汪汪之度、不以是爲怪、今父惠書

修時候試問、兼辱盛儀、固己厚矣、况投命麒老先生

筆蹟乎、咸銘曷勝、先生德皇、素所欣器、思獲其斷

簡隻字不啻饑渴、而末由仁焉、曩者幸得足下見訪、

幗忌偕率、敢布腹心、既而聞之、先生近以衰老不復揮

灑、順乃絕望矣、不圖今日忽蒙下頒也、何貺如之、

敬謝敬謝、尊大人書云、先生今玆八十、是則二三年前

所作、蓋七十八九歲、不但龍繩之勢使人嘆服、即其康

知其然矣、翁晩獲武藏墨畫、而掛之壁、締悯數日、

乃悟其運筆、悉與刀法脗合焉、幗自效之、恻然可觀、

翁獨弗然、皆究其奥、蓋以刀法推之也、余於翁弋乎 寡君駕至白江都、至則視學、親自試諸生業、又使臣

衆、餘力善鉀、及相尹、凡人之多能、率不精研、而顺頓首、五月中旬足下書與詩卷併至、未及

簡

必中、學之者亦

章服、以褒賞之、翁又善銑鋭、遙擲朝、 君技神矣、有進乎技、傈誠心、乃浩其氣、技而不

乃召種勝、執政傳命、ㄇ乃父一溪以武三 教國子弟、一技、惟君是能、沒而不沒、厥子是承、我以爲銘、表

其用心也、盖投乎群、其勵精也、于玆數年、肆今賜 其幽岁、如不逮門、拜斯貞石、

喪、未嘗入於心焉、冀不辱吾武而已、翁志操如此、

是以刀術絕于人矣、以是视之、志操本也、刀術則緒

餘也已矣、酚、

空手入白双矣、乃又立門敎之、天明四年、翁二技之

則不可得也、故吾孳々斯技、是習窮達貧富、毀譽得

門人、請就榭而習焉、藩府許之、榭我演武處、凡習

武技、必於是孝、國典也、自是以來、一月三次、翁

率門人入榭而敢焉、其餘日夜肄於翁家、翁敢之不倦、

寛政二年 今公賜九星紋袖衣、時翁既老、不可造答安東做者、盖百三十餘年、翁獲之村上氏、能發明之、可以

往戍南鄙馬見原、朞年而反、番衛如故、安永三年、 氏専用木刀、而其法獨采用竹刀、初其師祖神免武藏、

以疾致仕、公許之、命長子種行嗣家、賜祿授職、 傳刀法於寺尾信行、信行第四子信淼、尤長其技、因

皆如翁心、翁雅好禪、於是則髪、號曰一溪、是護國別 冒神免氏、時人云武藏復出矣、而信森謂木刀之法、無

堂禪師所授云、享和二年壬戌正月二十有一日以疾 所不備、然法峻旨深、人多難之、往往中道而廢、故

終、享年六十九、沒之三日、葬于府之源覺寺側先塋 設此法、使學之者循序而進也、信森傳之兄子愚一、

之次、娶宗像氏、二男、長即種行、自番士遷扈從隊、一愚一傳之泉露、泉露以是傳之翁、且曰此法也、吾子

先翁而沒、次卬種勝、種行以爲嗣、今番士、克續翁「雖以名家可也、翁大悦、故翁門流采用竹刀、時人或

藝、命為三藝師、一女夭、翁自少好刀術、刀術二故謂之野田家、翁夂善手搏、賭砂此武藏父無二齋所以

與擊刺而已、翁皆至其妙、年甫十六、學拔刀於熊谷 傳濱田清勝也、故謂之濱田家、其法雖存、而無行之

直道、謂之伯耆家、至十八歳、盡得其傳、直道許以

相識、舊者莫吾子若也、吾子直述其實可矣、浮辭華敢人、翁之有門人、自此而始、學擊刺於澤村菜、謂

言非所欲也、順不得辭、乃按其狀、無所嘗聞也、曰-之寺見家、既曉其法、翁大父某使翁更師村上正之、

翁平姓、野田其族、諱種信、稱三郎兵衛、有馬之役、 於是盡棄其學、而從正之學焉、謂之武藏家、潜心竭

其先喜三郎、從眞源公、公進逼賊寨、銃丸如雨、喜 力、而其技大進、寶曆十三年、靈感公賜九星紋上下

三郎前以身蔽公、師還、公謂喜三郎曰、汝前日所爲、 服、賞其二藝也、翁益勉强、至明和年中、滚得所謂

如佐藤三郎兵衛於源廷尉也、汝其稱三郎兵衛焉、子「誠心直通者、此武藏家之極致云、断而正勝分其徒、

孫榮之、相襲稱三郎兵衛、父諱種弘、藩之番士、母-屬弟正之、翁在其中、翁亦有己門人、教學相長、

川野氏、以享保十九年九月朔、生翁于玉名郡和仁邸、 數十年、邃盡村上氏之道矣、而不自足、又遊太田泉

後徙居熊府、寶曆十年、種弘以老致仕、靈感公命翁「露門、泉露亦武藏家、而其所傳、與村上氏頗有異同、

嗣家、賜田祿入二百石、以爲番士、明和四年三月、 永露嘉翁志篤、盡以傳之、泉露又有所秘刀法、村上

先生遺稿卷之六

毀于余、因題

長府侯菊

棊資

一溪翁既沒、其第二此等之篇、不可乎驟得也夫押物爲氾 俗名 言葉、翁入山者、刋

、

嗟宇内寥

竟不得施、以其不可選也、如其尤者、則云揮毫鼠若「進老人履、爲王者師、赤松是學、黄石惟祠、

惟有波瀾疊躍、而無停流也、余反覆再三、丹黄在手

張子房賛

終南進士、誓護生靈、眼如閃電、手振流星、虛秏之

題鍾馗圖

流觴圖賛

白嶼馬君每一詩成、必使余評論之、余胡足爲賞音哉、雩、皆是栩々然天游、

題有馬訓導詩卷後

夢非夢覺非覺、豈唯胡蝶與莊周、傍花隨柳´浴沂風舞

以此為詐恐非詩之道也、

題荘子夢蝶圖

題鵁鶄圖

人未知春、異禽先占、晝聞暗香、夜見清艷、

題早梅鵁戯圖、應西岡周禎之需、

昔僧問其師曰、如何是酈通、師曰搬柴運水、今也1 天風月題安野訓導見寺詩後

題菊舎琴囊

月、肥後府學教授李謹識

昨日之新、今日之故、是温是知、循環無斁、

、萬國鶯花、抱琴獨往、着處爲家、

此

僧裹頭跣足、役々運土、而行歌自適、豈知其神通者

耶、將爲榮啓期之樂者耶、與彼披紫乘輿、身爲桑門、

心徼世利者、笑啻霄壤、凡詩人賦物、因彼眞理興哲感

耳、豈以粗跡為哉、宜平觀此僧之洒落、而淨心胸也、一雙眼如鏡、不靚白日、人而面牆、斯禽之匹、

但君於詩求之切矣、做好人譏彈之爾、近出斯以示

余、曰此三十年倡和之卷也、吾詩載在此者、請評騭「今之視昔、是圖是文、一觴猶在、一詠可聞、

焉、余曰異日應命草麋也已、是則整練上卷、况諸名

家詩、若聯珠然、豈可以鄙評儷入其間乎、固辭不獲、

乃申詠之、滔々數百言、雄壯逵逸、如黄河之赴海、

孽、安能遁形、威神赫奕、天地清寧、

風雨來、墨華雲霧飄飄擧、盖神境也、↑溪翁野田君墓表 此文既成、墓石短狹不能

盡勒″節畧上石、此其全者,

子種勝、狀翁行事、介翁門人荻

原栞屬順銘其墓、順辭以不文、某曰何以文哉、與翁

溟宇土帆足彥齡、竹崎子善、攜桂源遺稿來、曰此吾先以成其敢也、而其情志沒、而不沒者、存乎其詩、此其

君之詩、而今侯所輯也、將以鋟木、先君末年常俾吾子「所可傳也、其辭巧拙猶不足道、况體具否乎、二生唯唯、

評騭其詩、故今復應吾二臣者、就子謀之、請擇其可「因叙其本末、併識此語、敢以附卷尾云、享和改元春三

桂源遺稿跋

舊夢、益公始在江都、與一時列侯唱酬往來、列侯咸學

、温柔敦厚、

也、

俳諧者流、謂之蕉門刱建句、然而余懵其道、不能窺 傳者也、顺 拜受之、退而閲之、以爲可傳者、凡八百

深奧之旨、第謂此句之妙、其猶唐詩山空松子落語也、餘篇、幗表識之、以致二生、二生乃抄寫、持之又來、

歟、夫松子落地、口蛙投池、何奇之有也、而詩與諧、 曰先君嘗命左右、日吾詩固不足傳也、然後世子孫、

膾炎人口、推以爲絕唱者何哉、蓋以其境與其人、宛 若以吾情志所在、不忍委棄、欲刻而悍之、斐繁可也、

然可想也、空山寂歷、秋气凄凉、孤燈耿々、半夜未 勿多存蕪穢、以累人日焉、前日所擇不爲不多、請更

眠、不聞足音、唯有松子落地之聲、其境宛然、其人可删之、以副先君之意也、於是再檢之、所謂蕪穢者、

想、翁之居深川、所謂大隱雖在附险、心遠地偏、春·蓋已不存、然是遺命、不可不遵奉焉、强删定之、僅

天日暮、薇月未華、噹爾隱几、適聞口蛙投池之音、 存四百三十餘篇、稿舊有二名、今復依之、曰凌霄、

其境宛然、其人可想、此皆不假物之奇、弗用言之巧、

所謂發繊稠於簡古、寄至味於澹泊、短句之妙、至斯

極矣、宜哉膾炎人口、推以爲絕唱也、前此翁之俳諧、

興時俗同流、於是焉天機一轉、豁然大悟、其詞鄙俚、

其意雅馴、蓋自此句始、蕉門建、其謂是歟、臆見如

此、未知是否、馬君見示斯軸、因書之卷尾、煩君質

諸俳諧者流、且請詩之以續斯篇、與翁之二詠、媲美

於不朽詩於蘭亭高子式、刻意李滄溟 公亦倣之、凌霄閣集所

載是也、旣老矣、養疾于藩、遊居乎山澤之間、乃忘

筌蹄、別出杼柚、舊夢庵集所載是也、二生問予曰、

先君於古風、蓋闕如也、是以斯集不能具古今之體、

恐不足以傳也、如何、曰何傷乎、夫務巧其辭、必具

諸體、書生業詩者之所爲也、公侯於詩、何必然哉、

今之詩猶古之詩世、夫公居富貴、無聲色之嗜、唯詩

是好、豈徒乎哉、盖興觀群怨、以成其德五八五

紫溟先生遺稿卷之五

、 芭蕉翁詠池者有二焉、一是終夜遶池、以賞仲秋之月

或登高閣、或棹扁舟、手執此帖、聽其聲、觀其象、 也、一是口蛙投池、以述閑居之趣也、賞中秋者、馬

是乃與其人遊于晴好雨奇之間也、其樂如之何、嗟吾 君之斯篇、追叙其興象、慨嘆欣慕、至於池底遺楸、

老矣、不能共其遊、亦唯心驰之而已、主人屬余題其猶珍藏之、君之於翁、後世之子尖矣哉、还閑居者、

書馬彥章芭蕉庵古池詩後

翁、與彼以爲滑稽者、大有逕庭、而獨與余脗合、

賞音之餘、略記前日之說、以附乎其後、

詩歌也者、心聲也、書畫也者、心象也、聽其桦觀共

豹洞清玩序

以翁之高風、與旭將軍之英風相抗衡焉、乃馬君之於

夫之作、鄙俚其詞、而雅馴其意、近而遠、枯而艘、

禹法者也、祭禹其可、禹神在天下也、盖與水偕焉、 僅五七五言、而物不遁形、事不選情、宜哉其自我為

水之所在、即神所在、誠敬祭之、寧無神祐乎、父老古也、甞以詩家比之、盖陶韋之儔也、此豈可以滑稽

大悦、乃屬阪本政明書禹像、請余記其顚末、余踊躍|視之哉、要之其人高矣、是以其語如此超超、後之學

盛事、不敢辭焉、且謂曰雖有禹法、無斯司市、孰能 翁者、不知學其人、而徒學其語、謂之為滑稽、尚恐

舉之、以成斯功、我聞古者有生祠、父老其以齋藤氏 有愧其談言微中之旨也轍、而今讀斯篇、序引既稱翁

配食之、抑亦汝素志也、父老徐悦、越翌年是日始祭、一以隱逸之流、篇中所述、又皆其蟬脫風塵之致、卒之

以爲無窮之例云、

百有七十餘步、其費五十餘萬錢、不仰藩府、盡取諸

市庫、於是父老相謂曰、而今而後吾知不魚矣、此吾 前日有問余者、曰、世之文人謂業俳諧者、爲滑稽之

司市之澤也、尸而祝之、以功竣日、歲設薄祭、以報| 流、其於芭蕉翁亦然、果是也耶非邪、曰非也、他人之

罔極之恩、尙永世不壞、以安我子孫耶、乃謁諸司市、 俳諧、或可以爲滑稽也、惟芭蕉翁不可以滑稽視之也、

司市曰、善哉父老言也、第其尸祝、我焉當之、我奉

如是、功事速竣、實九月二十日也、所築石堤凡一千

書馬彥章芭蕉翁墓詩後

首端、不知他日肯以爲躍如之一人耶、否耶、

翁象其人躦如矣´豹洞主人設此帖也、若詩若歌、若書

若畫、凡適其懷者、隨得收之、其家雅在湖山之際矣、高橋雖曰市也、而戶口鮮少、不類他市、然以其

西岡氏子將父之命、請名于順、辭不獲、乃名之曰遥、

西岡生名字說

、以爲十全之醫也、汝

其勉旃、

以全字欲汝攻爾業、夙夜匪懈衎溢、泛濫

字汝曰宗全、宗汝師所授也、全則余所撰也、周禮醫師 市中、居民不免墊溺之患者、殆二百年焉、寬政六年、

條曰、歲終則稽其醫事、以制其食、十全爲上、十失 齋藤權佐 命爲司市、首欲修治之、而其役大懼民弗

一次之、十失二次之、十失三次之、十失四爲下、今-堪也、乃明政敎、以惠和之、一市乂安、有召父杜母

園田醫生字說

高橋此篇自首章至第十五章、皆阴道先生之語、又其謂周

祭禹記

近思錄會課及觀聖賢篇因問諸友策

長其傲、務不時敏、莫以進德、商書日惟學志、務

時敏、厥修乃來允懷于茲、道績于厥躬、六經語學、

而凡百善政、將畢行焉、豈獨山林繁殖乎哉、臣從而字之曰敏卿、遥志也、敏時敏、學不遥志,徒

不勝至願、取進止、

人、無先于此、遂為萬世爲學之訓、汝克省嘉名、允懷古

訓道積于汝躬、夫名父之所命、我代之而已、字朋

玉 汝、汝其勉

友所與、是吾任也、父暨朋友、咸欲

市張心在興國寺之言、亦具載之、且其行狀哀詞、及泥

塑、春風不見忿厲之容等、可以觀其德行氣象者、可

謂備矣、其於横渠先生也、亦其行狀、及開皇子生、見

餓莩者事、本次既收之、而註又附聞朧鳴、去虎皮

則不爲不備矣、唯於伊川先生、則游楊立雪之外、有[十室之邑、一溝之水、苟興土功者、或疏或鑿、或豬

二程學聖人之語而已、何其僅僅、可觀其德行氣象者、 或陂、此皆禹之法也、盖其文命敷于四海、能俾萬世

奚止於是也、而皆不載焉、文公編輯之精、豈唯於此 率由其法、以濟其利也遠矣、明德豈獨河雒哉、高橋

無意哉、未審其意安在、請各陳其所見、

吾藩五市之一也、壺川經熊府、會于祓川、經高橋之

市入于海、而隄防頽圮、霖潦時降、川水之憂、越寬政十二年正月、下令修築石堤、市民竭作、

競運土石、弗憚危險、人或止之、不可、曰爲吾同市

執役、而死所甘心也、至有果斃者、而其父母不悔焉

殖山林之論、諸生盡之矣、臣又何言哉、然臣愚竊謂

山林不殖、國無良木、人士不學、國無賢才、無良木、

則宮室之構、不得其材、無賢才、則官職之選、不得

其人、苟官職之選、不得其人、何以立政哉、故治國

之術、於斯二者也、雖弗可闕一焉、而其功之細大、

不可同年語矣、誠能擧其大者、則其細者不期而行焉

耳、臣聞封殖之道、擇地栽之、相時而培之、務深其根、

而强其幹、夫然後良木繁茂、而宮室之構 或棟或梁、

或病櫨、唯其所用、教學之道、亦猶如之、痒序學校、

是其地也、比年入學、閏年考校、七年小成、九年大

成、是其時也、存心養性、深其根也、擇善固執、强

其幹也、夫然後賢才輩出、而官職之選、或牧或事、

或準人、唯其所用、傳曰學殖也、盖此之謂矣、諸生

之論、似未及乎斯、故附以上言、恭惟教學之法、吾

藩固行之矣、此所謂大者舉也、伏願臺下益修明之、

鼓舞作、使我士人咸知講學、則官職之選、各得其

也、農於是乎將有露筋、而斃者矣、鸣呼慘哉、

上殖山林論劄子

浮食者、日滋衆矣、此猶聚蚊成雷、而集于一人之

農於是乎、將有通宵不寐者矣、若夫無道之邦、素餐 紫溟先生遺稿卷之六

故士無事、而食穀祿、則其傷民也、猶蚊虻之嘴膚也、

人謀、戮力同心、以討之可也、若猶不能、其食不同、故丹烏無事而差、白鳥於乎何傷、農則

則死之可也、若非貴戚之卿、而有可去之義、則見幾 穀、而士食之、士之於農類也、類也者、其食同矣、

尖爲卿大夫者、同僚將爲亂、已力不討獨討、則密以告則吐蚊、室氏之門、

原注不討之討恐能字誤

」

人、嘗論蘧伯玉不對放弑之謀、從近關出、

而拨此二語、即其義也、以質諸先生、先生然之、且

自爲說云、春秋時號令不行於諸侯、列國皆有世卿、

巨室以執國柄、廢立皆出其手、雖行弑逆之事、然更

立公子、率國人以奉之、國人亦皆安堵、爲無預於社

稷之安危、此其時勢、有與後世不同者、噫此說害名

敢也、過鄭氏萬々矣、夫鳩巣先生學精識高、所著大

學新疏等書、大益後學、獨於玆論、如是憒々者、何

也、是皆不可解焉、切懼後世亂臣賊子、以此藉口、

因記所疑、以待諸友之論斷云、

失 題

公羊傳論公子友如陳葬原仲、曰君子辟内難、而不自靖人自獻于先王、治則蹇々匪躬、故能承順其美、

匡救其惡、亂則自靖自獻、故能舍生取義、殺身成仁、

孔子曰、事君能致其身、苟能致其身、雖有治亂、人

臣之義、其弗畔矣夫、r

列國封建之固、不啻帶礪之盟、人生其國、仕乎其君、 而作、亦或可也、今弗爲此數者、惟不與而已、視其弑

所謂慕之如父母、仰之如日月者、於我乎見之矣、然而「君亂國、如秦人視越人之肥瘠、惡在其爲卿大夫也、

觀彼土之事、聽彼土之言、往々有可蹙頞者、武人俗「噫此言也、害名教大矣、然鄭氏訓詁之學、未足深

奭、或以此貽譏于吾道、吾道豈其然、竊懼童蒙亦或不焉、獨怪匯澤陳氏、學有淵源、於君臣之義、聞之必

之察、謬以吾道爲然、故原夫民生所以遷、彝倫所以「熟、而其註禮記、斯語之解、一依鄭氏、不徒不正之、

戮、而書以示之、易曰王臣蹇々、匪躬之故、書曰、 又從衍之、曰謹自畏避、不得干與何也、又怪我鳩巢

辟

外難、何休云、禮記曰、門内之治、恩扮義、門外之

治、義揜恩、此以内外爲斥家而言、義略可通也、雄

記曰、内亂不與焉、外患弗辟也、是亦當爲家之内外

也、而鄭玄以爲國之内外也、其言曰、謂卿大夫也、

僚將爲亂、己力不能討、不與而已、惡是何言哉而丹弄之、丹之於熊、非類也、非類也者、

君、傍與其溟先 心稿卷之五

益開天無二日、地無二王、元后繼天、群辟承德、下「延者三四百年、蹙者五六十年、甚則五十餘年而五

民祇若、莫有武適、君臣之義、於是乎立案、三代之制、易姓、其間土字分裂、或稱鼎立、或稱南北、所謂一

建侯封國、當其盛也、人生其國、爲其國之臣、非有 人者、爲三爲四、天下伥々無所適從、朱子爲此懼、

大故、不敢去父母之邦、故其於國君也、慕之如父母、 祖述春秋、用作綱目、以正名分、然又可以認後世

仰之如日月、惟民生厚君臣之義、不待敎而明矣、及 而不能行之當時、卒以中國陷沒、蠻夷為主、衣冠拂

周之東遷、王室衰弱、諸侯離昨又有强臣各專其國、 地、犬羊盈朝、民生因是大遷、君臣之義醤亂極矣、

從政者多其支族也、草莽之士、雖有懷道負才者、無「呼先王禮樂之國、孔子設敎之地、而君臣之倫、潛滅紊

由升朝、是以散之四方、冀有所遇以濟其志、是則時亂、一至於此、可勝慨哉、彼土之俗、鄂風相承、千

勢使然、雖以孔子之聖、而不得不爾、况乎奔競之士、有餘年、有加無革、是以鉅儒碩師、或不能察焉、

朝齊夕楚、君臣之分不定、去就之跡弗明、又何恩義爲習俗所蔽、祝君臣之倫、動輒泛然、獨我東方 皇

可言哉、當是時也、非惟一介臣爲然、諸侯陵天子、 統連綿、與天壞無窮、大將軍承弼、統諸候、均四海

愚見不大謬、順識、

失題

知有官長屬史、而不知有君臣、自是以降、所謂

姓有天下、

後讀經世鈔、載孔之逵之論、大意與余說合、乃知往古之治、是誠可尙也、而彼不得其道、遂郡縣之

不仕也、何以知其不仕、日當是時獻公獪在、公孫剽大夫犯國君、簒奪放弑、接踵于策、孔子爲此懼、作

非次而立、孫宮專國、一廢一立、奕棋之不如、孔子 爲春秋、以正名分、然可以垂諸萬世、而不能行之一

稱護伯玉、邦有道則仕、衛之無道如此、其不仕也可「時、率以宗周殄滅、七國分爭、合從連衡之說興、千乘

知、然則伯玉終不住乎、日否、獻公復歸、雖日猶夫之國、朝衡夕從、上下相欺、親戚相賣、民生因是遷

人也、朝多君子、伯玉盖於是仕矣、史魚尸諫、然後「君臣之義大溽亂矣、迨秦并天下、廢封建以爲郡縣、

靈公用之也已、

與天下以奉一人、夫舉天下以奉一人、若能如我 朝

一人者、數易姓於上、而百官變操於下、1 高之梁、其魚洋々、高之市,其民日

君、剽而納獻公、閻遵伯玉、伯不對而出何也、

喜

减爾、日孫林父之事、則既聽命矣、敢問蜜喜將弑其

林父非取决於伯玉者、故其逆謀不爲少

非敢爲懊也、爲國家賀官得其人也、歌曰、

民權之助也、因錄漁父之語、且作之歌、併以賠齊藤君、 可謂備奏、惟

喜、

十四年、孔子年五十六、適衛主迯伯玉、是歳

客語李子曰、日者泛舟于高梁川、覿一漁父、擧網中 距襄公十四年、盖六十三年矣、而伯玉猶爲大夫也、

流、而飲之酒、其人甚朴、盤坐舉觴,問其所居、曰 由是視之、林父逐獻公之時、伯玉年弱、其未仕也可

高梁之市、既醉、愾然曰、歎願吾市尹康寧壽考、永 知、故見難將作、奉身而行、所謂見幾而作也、豈可

宰吾市、尙我子孫亦無憂哉、問其政、曰吾輩小人、 以人臣律之哉、曰然則林父告之何也、曰林父之告、

安知政、唯知其愛民猶子、民親之猶父而已、凡吾 非欲其與己同謀也、盖伯玉雖弱、其賢既著、衛人服

一市之人、雖五尺之童、夜臥不敢趾尹之舎云爾、烏」之、是以問之、冀得其許可、以取信於國人而已、只

乎是古循吏也、不圖見之於今矣、市尹者誰、齋藤君 伯玉之言何如、曰先焉以君臣之義、繼之以利害之實、

失題 寛政庚申孟夏

乃幡然曰、恨此方無科擧、若有之乎、此文必首冠、 或問曰、孫林父將逐衛侯、告鎭伯玉、對曰、君制其

此人必擢用、而處顯職、必有嘉蹟、是固不待鄉舉里|國、臣敢奸之、雖奸之庸知愈乎、遠行、從近闢出、

選也、 史氏述之以傳漢土、則彼陋習、必有所觀省、 此恐非人臣之道也、而孔子稱其人、曰君子哉、也、

今既無科擧、此編徒藏篋笥、無有知者、不亦惜乎、

吁

曰此不可以論遠伯玉不對而出事

人、其文浮華、其人往々不足稱、偶得才者、授之官一維尹斯休、民之感々、羅尹斯憂、治我則尹、愛我則

職、憒々無狀、或至從政輒紛之、以貽大害、是 父、飢而佛之、寒而煦之、我尹廡严乎壽且康、保我

缺字疑琠字訛

以文取人之失、何如此方擇人、自有鄉擧里選之遺哉、 子孫、于永無

云今讀此編、文章煥然、識趣卓爾、其人則順悉之矣,

空言議也、當明其事實、然後論斷之、按

春秋魯襄公十四年、衛侯出奔齊、而二十二年孔子生、

至定公之五德、石井承味製之、乙丑之夏、杵築工藤子祐來遊熊

本、一日訪余北皐別廬、其人嗜茶、因語及于此、頤

余素不喜以文辭取人也、漢土李唐以來、專以科舉取

題崔磯郡齋文後

右余日錄一條、工藤子祐覽之、索余手抄、辭以不

余家藏三脚子、其凼有銘、曰山崎妙奇庵利休所用五

失題

日令我子孫知五德所自也已、奚以文爲、遂書

少文一室書圖、豈足道哉、臥而遊之、其樂至於

以贈焉、

、或 但較長、非余所宜佩也、且夫刀與五德、皆以其人貴

如京師、亦皆所云、來往預期程、而不得他適矣、而一矣、若或貨財鬻之、是汙蔑其人也、雖得千金、而吾

今衰病伏枕、讀此志以爲臥遊、其爲日十旬、爲程三 豈敢、唯千氏之高操、武林之義烈、彼此相易、庶幾

百里、歆羨何限、不管其所到之處、奇蹤勝蹊也、所「無愧也已、况余欲之非敢用之也、余深慕休翁、居恒

相見之人、皆是一時名流、其風流談笑、若會於一堂」願獲其遺物、以爲塗牆之具、今果得之、而十襲之耳、

之上、傍及土俗所傳、苟有可聽者、則必筆之、又其一殘缺何傷、遂置二物、絜五德而去、實文化二年四月

所視古器奇物、可入博古圖、凡此數者、皆具乎志中、 十五日也、

讀丁卯游一把、掛幅一幢、來譴余曰、此刀赤城義士武林隆重

志

諸四方文人、首微詩于吾黨諸子、各應其尖、而得若

干篇、遂及順、順今衰病、不得復言詩、但少時寓居

其山趾、盖七八年、其間之詩、間有及其境致者、男

濤之探舊稿、不問工拙抄錄以 塞 責、湛公受而載之、

盖從隗始之意也、

是以吾先輩米子隱、秋子羽、藪子厚等、亦不得欲觀之、時五德在府下宅、不可卒致也、他日別廬茗

遊于玆、偶有其詩、僅々而己、满公病之、今將逼乞|讌、子祐來會、預便致之、乃出示焉、其明子祜携刀

所佩也、掛幅即洞仙先生三浦安貞題刀詩也、敢請以

此二物、易疇昔五德、余曰吾不知茶理、五德在家眞

爲贅物、子若要此、直以遺之、何易之爲、第三脚殘

缺、恐不可用也、子祐曰、吾於此也、猶子於五德也、

頓示其所佩短刀、曰設此刀若是、則余不肯輟贈焉、

余性好遠遊、然少壯仕國、不得越疆、或役江都制、以慰

慈念、禮慶吊不同日、而况一櫝、豈可同之乎、第封 阿蘇嶽九州之鎮也、菩於國史、記於地志、見於殊域

賢之限、雖鄰邦乎、邈如千里、交際之儀、不得如禮|之書、名區勝地、固爲多矣、山寺福滿精舍主席自得

也、敢請原恕焉、順辭職事、辱勞下問、本月四日獲满公、舉其名勝、而欲以詩歌文辭、第地在遐阪、

命、曰以順恪勤既數十年、俾順歸隱、命義子 清之 嗣「騷人墨客、踐斯境者盖鮮、且其距熊府、百里而險、

而待其再請、乃與歸隱矣、今順辭職、輒得歸隱、

是異數也、若順如例入留守隊、而後歸隱、則嗣家

者、當爲番士、謂之平士焉、今也以其不然、清之超

爲大隊班物頭也、此等數件、皆鄉人所榮、足下情

同父子、故以詳告尊翁帳下、當具一簡、以白區

歸隱之狀也、衰質苦熱、加以冗迫、禮儀闕如、乞

代申鄙意、兼謝失敬之罪、

失 題

六月廿一日書函、以本月六日達自逆旅、乃知五月歸

失題

廠邑故事、凡請解職者、先許其請、置諸留守隊

以附斯書、使其後人知仲子爲善之志也、非是我儕私

願、抑仲子二親所希望也、順凄然而書

仲子信斯書也、職先生指教之由、敢請先生書其顛末、

然亦浩繁、近有二禮儀略者”玉水邨士翁所輯譯、家家、襲田祿入諸大隊、惟順教授如故、別賜俸月俸十

禮喪祭二篇、旁引諸書、審爲考證、且斟酌時宜、而一口、宜以體氣佳勝日、在家教授、時復赴學館也

家家可行、君若緣之、不俟他求也、仲子唯~而退、 蒙此命、且喜且懼、夫致仕教授、古人或有之、今順

第此書寒泉岡田先生藏板、吾府書肆無有焉、仲子乃「衰、何以堪之、然斯命也、紧邑所以寵異文儒也、未

借辛島助教藏本、命其左右寫之、未成,而仲子捐館、 可以遽辭焉、勉强奉之而已、獲命之後、賀客相踵

家臣遵奉遺命、繕寫畢功、示之於余、曰將獻此于仲「應接無暇、所以久闕報也、幸勿深罪、時下猶熱、千

子之神以展復命之義、邃以附之、永爲其遺物也、夫|萬自玉、順白、

途.無阻水之艱、遄臻家于、大慰鄙懷、聞秕駕後、

尊堂微恙、亡幾而復常、緬懷足下嘗藥之勤、速食

嘉、欣慰何極、又開本生尊祖妣以天年終、深爲足

下痛心、然足下旣出爲別家嗣、惟冀節哀從有大不稱焉者、夫阿部氏衣冠之族、仲滿生未弱冠、

朝廷已授階秩、又遣之唐、學聖賢之道、爲仲蔴者、

宜夙夜勤學、以成厥業、遄歸父母邦、而以其所得、

奉仕于朝廷也、庶幾有所裨益、以不負卵翼之天恩矣、

篤信仲子嘗問祠堂祭儀、順敬應之曰、文公家禮詳

唯文辭、未嘗知學之所當務矣、以是爲道、宜乎其不

如釋氏也、是以學者不可不知務焉、

失題

皆不敢留於彼、而復歸于此、此秉菀之性、雖釋氏不得 而始欲與歸爾、此豈吾所謂歸也哉、又曰、當是時清

不然、盖如此也、竊怪阿倍仲滿者"學聖賢之道、而 河亦受唐官、而子專責仲滿者何也、曰清河者、遇風

其所爲顧不及夫釋氏症、但其月出之歌、爲吾國風之 漂流、不得復命、乃再至於唐、然後受官,雖不能全

選、銜命之詩、列諸盛唐名家、無有愧色、是其詞藻「節、而原其情、則有不得已者、 比之仲滿、 盖徑庭

之美、固非數釋所企及也、故玄宗寵遇之、累進其官、矣、且余論仲滿者、疾其學聖賢之道、而不如夫釋氏

一時聞人李白王維、包佶儲光羲等、咸與之友、是其一也、何必人々而責之、雖然、此非獨仲滿之罪也、盖

弊譽之盛、又非數釋所得而彷彿也、然夷考其行、則 當時所謂學者、文辭而己、仲滿所學、師儒所敢、亦

聲譽赫々也、此皆釋 之道、一至此、可勝嘆哉、或曰、仲滿非弗歸也、遇

氏滅君臣之義、絕父子之親者也、然硯絕海好風早歸」風波之厄、不能達爾、曰仲滿歸也、非吾所謂歸也、

之語、則其慕 本朝、懷乎父母之邦、不能自已、故彼在唐數十年、官已至秘書監、然後會藤原清河爲使、

*字當作彝字

本邦釋氏、入西土者甚衆、而親對其主、奏己技能、 彼則不然、一造於唐、輙仕其朝、受其宮爵、易己姓

能播聲譽於一時者、盖三人耳、曰然、曰絕海、曰一名、夫受唐官無君也、易姓名無父也、傳曰、仲滿在

等揚、與海以詩、等揚以畫、詩不多傳、而其谷･唐思念鄉國、言苟及之、未嘗不悽惻也、是亦秉彝之

宋主一首、能陳 本邦之風俗、而無卑屈之氣、可謂一性、不能自已也、而彼不肯歸、是自也無父無君、

不辱使命矣、絕海賊熊野、等揚圖富嶽、敏捷之才、 而又自棄、則不可以爲人、尙何學之可言哉、由之觀

磁磚之氣、皆能萬里外、覽我之名勝焉、故明主悅之、 之、仲莔之行與數釋相反、而不相及也遠矣、學聖賢

或自賡和、或命文臣贊之、宜乎始在遲速、淮南食時、左思十稔、太白不用意、子美「偶讀蕉堅稿、至其與明太祖倡和之詩、有所慨嘆、曰

順頓首拜啓、竊視古人作文、遲速不齊、而其工拙未

藝苑失蕉堅稿

題

非遲無以凝思、非速無以應機、凝思以深源、應機以

何六化之浩々兮、混二氣而絪縕、旣流行而不已兮、 決流、殆不可紊也、嘗聞諸善書者、曰學書者、必立

灭凝聚而醇生、萬物而擾々兮、育形化之甡々、惟尺 於正、行於行、走於草焉、未能立也、而欲行者、固

蠖之微眇兮、亦稟氣而含真、寂無鳴音可聽兮、黯 無其理、未能行也、而欲走者、不仆則顚、學詩者其

無文彩可珍、唯天機之相感兮、能一屈而一伸、夫子「猶是也與、然專乎遲、則六情底滯、或害俊逸之氣、

之取諸物兮、擧龍蛇而爲倫、賤之可以喩貴、諒類異 是以吾黨詩課之約、必有宿題焉、而雍容吟詠、極其

而理均、羌屈伸之藏見兮、仰思乎古之人、摯耕莘而「凝思、又有率賦焉、而揮霍唱和、縱其應機、庶幾並

自樂兮、幡然澤乎斯民、說告廳而版築兮、爲啓沃之「行不相悖乎、若其會日、篇什不必貪多、人各具數而

諄々、師尚父之鷹揚兮、垂釣於渭水濱、諸葛之成相 可、唯不成者、罰之以太白而已、此約也、特爲初學

業兮、在南陽而隱淪、豈枉尺而直尋兮、咸金聲而玉「設矣、若夫吾兄或遲或速、所謂險阻艱難備嘗、驅逐于

振、若夫聖之語學兮、其孰不書紳、欲利用而崇德兮、

必精義而入神、蹇行藏之難、必兮遇明主而後出、惟

學之有緝熙兮、自脩而待物、蟲豸之蠢々兮、猶能

守而不失、色蒼黃而甘食兮、吐微絲而爲室。不爲憧

愷之感兮、度夷險而貞一、嗟乎此物之微争。亦可以

語君子之術、

病、不可、乃裁此篇以塞其責、朴陋之質、不「改竄長吟、各擅其美矣、第學之之序、必自遲而速、

能體物、聊以展贈言之誼爾、

者、五十餘年、故今言泉如湧、左右逢其源、揚

袂振筆、縱横衝放、若龍得雲雨、而躍天淵也、若驥

蹴坦途、而倏忽千里也、夫如是雖頃刻之間、累數十

篇、亦何不可哉、竊懼初學之士見其如此、而欲易

從之、則彼所云不立而行、不行而走、將見之於詞場

矣、故不自揣、以區々盟約陳諸左右、高明不鄙、或

以爲然、幸爲群英、復爲是約、敢以請焉、

一日遇余不在、則登北阜憩於斯閣、騁望于象外、以

暢超然之情、俄而風起雲飛、凡此諸山、或晦或明、

中津今泉公直、遊學吾藩、業就將歸、謂余曰

近獲尺蠖圖、頗可愛翫、敢請賦之、余辭以衰

尺蠖賦

寔祓水之隈、因名川觀、師時々携神足典公而來訪焉、

其南端曰金海山、古德奘善所修禪也、北端曰彌護岳、 吾子於先師也、又不啻支許也、故欲吾子記其所以樂

大塊意氣所由噓也、其間峯巒爭雄競秀者、不可勝擧、爾、且遺託也、吾子豈忍拒之哉、言未卒、淚浪而

閣之縱橫、不盈十笏、而其所容宏濶如此、三萬二千一下、余亦潸然、曰公之此情、無乃與吾道同也與、於

師子座何足道乎、余嘗從禪師乞阜下之地、以結別廬、是收淚而記、

彌字+字訛

北阜淨聖閣記

恐脫不字

二生之言固是矣、然其志也者、蓋烈丈夫也、而止於 乍晴乍雨、凝嵐散霧、彌漫原野、茫々如海、頓便此

禮、亦善乎、源注遷下

阜爲補陀落山、蓋山靈逞其奇、以供師之勝覽也、師

方怡悅、首倡妙偈、典公及眾弟子、從而和之、臨風

祓川西岸之丘、與石塘市門隔水相對者、謂之北阜、 朗吟、響振林木、此時也、薩陲亦當觀之、歡喜踊躍、

盖古者國府之直北矣、而今為熊府西南隅也、阜亦斷 與師同樂也、余適棹扁舟而至、師見之、翩然而下就

爲二、西者稍大、祗園祠在焉、東者周廻不充百步、 川觀廬、揮麈談、不知日之夕矣、嗚呼彼一時也、

高僅數仭、旁無延緣、突然而特起、東西有石階數十 文化乙丑冬十二月、師奄忽化矣、其明年春、嗣席典

級、轉折而上、左右及後、斷崖峭絕、上有小閣、扁「公、以師遺命、屬順作斯閣記、順日、斯閣也爲吾府

曰淨聖、安觀音薩埵之像、不知何人所置、今乃屬妙解 三十三天之一、顧其靈應足以頌薩埵之德者、必衆多

寺、寺主大琢瑛禪師、以其隳壞、因基再造焉、斯閣也可一矣、使釋子記之而可、順則道不同、敢辭、公曰不然、

坐望遠山、其最秀者爲阿蘇嶽、積雲皚々、紫煙屬天、吾豈使吾子作化緣蔬哉、吾於先師也、不啻父子也、

帝子之所居、神仙之所館、吾肥之鎮也、雖在東郊百 而先師之愛此阜、猶羊叔子於峴山矣、吾雖脫繫累、

里之外、朗如咫尺、郊之中間群山連屬、橫亘數百里、 然每登此阜、入於斯閣、追念往事、未嘗不墮淚焉、

能柔順侍病、往々丈夫不若、唯山人不啻孝婦女、凡/非所宜也、故輩止之而罷、余謂禮有之、婦人不踰疆、

單字上疑佚吾字

京、而居父喪、母氏又患中風、半身不仁、山人侍病 之好、幸勿惜一言、又云、山人固不欲娶、及反鄉里、

孝養極至、不須臾離于其側、若有事他適、必待母氏 父母既老、而山人無妻、不能安父母之心、以故親戚强

眠熟、託家人而出、竣事速歸、如是者于今十餘年、 之、然後娶焉、無子、其妻既寡、將躬負笈至肥、欲

余又問諸宗逸、皆如洲言、逸且曰、凡婦女孝者、或一見先生、乞其墓志及遺稿序、三千里外、婦人獨行、

、 栗二生書、曰丁卯秋、山人謂將遊西州、其意專在再

故欲觀之、而赴彼島、明年正月必訪先生、至期、余一見先生、乃與妻偕發、路遊熊野、而窘霖雨、獲病不

日夜企望、聞足音然、輒曰山人至矣、然逐不至、 可前也、謂妻曰、今已如此、姑還家養病、癒而

既而自京報曰、飛蘭島乘商船、直抵浪華、是以失信發、亦不晚也、輿而反、然病益劇、而終不起、實十

矣、予大缺望、爾後十數年、消息阻絕、往年其門人|一月十二日也、山人至願不遂而沒、吾儕深以為憾、

蓬洲賫山人書而來、余問其近狀、蓬洲曰、山人歸自 墓志之請爲是也、先生不愍山人則已矣、若弗忘往日

自筑前寄書、曰欲再遊熊府、既至福岡、寓南溟堂、

富、無滑乎心、是其天資、毫無矯飾而然、按大平平

善盡者、逆旅兒啼、山人與書慰之、井琴山觀而驚賞、 其污穢物、必親洗湔、不敢委人、况飲食湯藥乎、鳴

絕疑飩訛

自此其名始顯、余聞而邀之、淹留茅廬、蓋數月矣、 乎二客之言、可以見其絕孝矣,豈謂飄然神仙中人、

索書者益多、遼至以我侯命、圖寫西湖於屏障、余一 而有斯實行哉、初蓬洲至也、山人託墨書一紙、以寄

日問之、周遊列口若有聘之者、子其仕乎、曰否、自 惠焉、余竊謂其書大進、大雅以後無出其右者也、然

非 天朝、雖曰帝子、不肯仕也、吾性辣懶、唯意之「余非知書者、會田能村生自豊來、因 示 其 畫、熟 視

適、夫畫要寫萬物之眞象、既已祿仕、爲此羈絆、喪一日、此殆自然也、比之昔年、盖既霄壤、田能村生雅

吾天真、安能知物之眞象哉、其 高 尚 如此、其將行「善書、是必有所見.非若余妄論也、山人旁好詩、詩

也、余有贈序、略述其爲人、未脫稿而行、明年冬、 如其畫、書如其人也、毀譽得喪、不介于懷、榮辱貧

會飛蘭島人、盛談刺鯨事、盖壯觀也、而今其秋也五七三

蓬平山人歿之三年、其門人大平平栗二生、以書托僧「罕有、僅獲一二小盡、深以珍臧、初來熊本、無知其

、唯嘉伊孚九費漢源、而二子眞跡、長崎亦

蓬平山人墓誌

作墨蘭懐、然而其進乎技者、終不得而窺之也已矣、

云、其瓊浦歌十餘首、皆思親而作也、盖其大意思親 宗逸、請余誌其墓、夫信與吾肥、相去三千餘里、余

弗措、夢寐恍惚、歸乎故鄉、見二親垂白在堂、乃喜 不見山人、既二十五六年,其間寂無音問、則其行狀

乃懼、夕定晨省、冬夏温凉、雖無甘旨、采山釣水、「不可得而詳焉、然其請懇欵、不可峻拒、因略叙所識、

以忠養之、其樂也融融、俄然覺、則煢然孤客也、咨 以塞其責云、山人名正夷、字某、一字佐藏、蓬平其

嗟咏嘆、丁寧反覆、始使讀者涙下、余乃釋卷而嘆曰、 號、源姓佐竹氏、其先盖某城主、騒亂之際、率其部

嗚呼世之知均者多不知分、而知分者亦多不能知均、一下若干人、匿於信州山中、部下皆墾闢耕稼、以其

其弊也不蕩然自放、則掏焉自少矣、蓬平子則不然、 主、世代遷變、部下遂爲編戸、山人父諱某、懼亦

既知其均、而不拘焉、是以能游千里之外、猶一室之「農、乃以醫爲業、山人幼好畫、不事生產、以弟承家、

内也、又知其分而不蕩然、是以能厚其所厚、而思慕「乃游江都、與畫工宗紫岩等遊、其技益進、甞應加賀

不巳、發于夢寐矣、此其内必有進乎技者、而吾弗及侯命、與紫岩等盡百鳥屏風、其能可知、然江都畫流、

知之、所謂淺之爲丈夫者也、吾且止之、積以歳月、 不滿其意、浩然而反鄉里、父老曰、近有一人、形貌

則應幾窺其德機乎、既而仲春兩露既濡、生怵惕焉、日「不凡、往々登山、望富嶽而圖之、如此數日而去、不

久矣吾不覲也、父母之思予、當如之何、吾當疇昔之 知其姓名云、山人謂是必大雅堂池無名、我素所欣慕

祥夢是踐、即治行李告别于余、余義不可止、乃送之一也、乃又入京、問業于大雅、乃盡墨蘭一葉授之曰、子其

於郊、以其同居數月也、離別之際、不能不相與悽惻|學之、山人退寫其一葉、以示大雅、雅曰善、請學

焉、余於是不敢告以人各有分之語、而誦曹子詩、何之、如此者三十餘日、山人乃倣其筆意、變化形狀、

必同衾幃、然後敘慇懃、以廣夫均之義、用解彼此之

數十紙、以际焉、大雅解顔曰、子蘭成矣、自

此情好日厚、大雅死、乃遊長崎、時沈南蘋流派盛行、

非其所好尾閭所穴凡天之所覆、而地之所載、擧吾一家也、然 家、四海爲兄弟者與、唯知其均、不知有分者與、無

亦有分、所謂分者、四海也、中州也、列國也、列國 乃厚其所薄、而薄其所厚乎、彼既兄事乎我、我當以

之內、有鄉黨、有州閭、有隣里乃至各有闔廬、以辟 人各有分之說告焉、而喩之也矣、然猶未也、生雅善

燥濕寒暑、而極矣、均之人也、上之則王侯、下之則盡、最工山水、名擅于一時、又頗解音律、其將盡圖

衆庶、文身鏤臂之俗、穹廬甌脫之虜、短若三尺、長操也、必先閉一室、瞑目而坐、盖神游乎名山大川也、

十之、凡有血氣、而爲萬物之靈者、舉吾兄弟也、然「既而意會機發、奮袂放筆、縱橫衝放、揮霍瞥列、若

亦有分、所謂分者、他人也、以義合者也、以恩親而「簪泛塵塗、騏驥下峻阪、風雨驟至、而疾電激空也、

不可離者也、恩義之等、有緦麻、有小功、有大功、 若郢人堊、而匠石斤也、頃刻而工成、望而觀之、則

有齊衰、乃至各有君父斬衰、三年之服、而極矣、故」其山髒髒、其水汪汪、直覺其高深耳、就而玩之、則

自其均者視之、天下一家、四海兄弟也、自其分者視峰巒向背之勢、源委洄讼之狀、各適其宜、而其間雲

之、雖閭里之內、不能無親疎、而况數千里之外乎, 霧之巻舒、波 瀾 之 起 伏、人物之舉止、一樹一石之

信之去吾肥、實數千里之外、而佐竹生者來、佐竹生 文理色澤、靡不曲盡其巧也、及其與諸人擊鐃鼓、吹

者、信人也、信之山有蓬坪、佐竹氏家于其趾、因自 管簇、以樂胥也、翕純皦繹、亦復備矣、余既諦觀且

號蓬平子、常游京師、壬寅之春、自京師歴浪華、浮 審聽焉、又竊謂其書之齡汪汪者、所謂均也、各適

于滄海、觀風于肥之崎陽、冬十月、遂至於吾熊府、 其宜、曲盡其巧者、所謂牙也、其音之翕如純如者、

余援而止之、止之而止、橛升吾堂、入吾室、取吾琴又所謂均也、皦如釋如者、又所謂分也、彼得之於

書、讀且操焉、若生於斯長于斯、將老死于斯者、以柔手、而應於心、此豈不知而能哉、然盡之與樂、余固

余爲有一日之長、事之猶事己兄長也、親吾子弟年相非其流也、則未能的知其果然與否、一日生出其詩卷、

若者、從而等夷之、卑幼者撫之、又猶己卑幼也、余「以示于余曰、往者在崎陽之作也、請子斧之、余未始

川然驚、灑然異之、竊謂是何人也、是豈以天下為一 知生之言詩、乃欣然而讀之、詩亦清秀、盖詩畫相, 五七二

、吾子雖居市肆、

「然既有班秩、此亦武弁之屬也、吾子治產、勿貪姦利、

十一是常、則何辱士行之有哉、又觀夫井勿幕之象、

以能分貧振窮、答揚國家勸恤之意、則班愈洪、一老

曰、所謂永樂永爾樂也、吾子克訓子孫、以富驕、其

木村氏酒家也、家瀕於高瀬河、世用河水釀酒、又滌|謹身節用、如夫井甃而不溢、其守舊業如夫井之不改、

器于河、河水固宜醯、唯朝夕滌器者、頗有涉降之勞、 其事父母養體志、如夫井養而不窮、則素封之樂、胡

寛政某歳、今主人某鑿井於宅、將以滌器也、始掘丈不永久無疆也哉、主人拜受祝親、大悅而喜、邃載其

餘、得古錢若干文、曰天福、次得若干文、曰洪武、 榔、走六十里、觴余于府、具述父老之言、再拜稽首

又次得之最多、皆永樂通寶也、錢盡三泉涌出、合而一曰、敢乞先生一言、余曰善哉、父老之言也、維其盡

爲一、沸騰數丈、氾濫乎平地、須臾而歛、自是之後、矣、吾復何言、但古人有喜、則名物以志焉、余爲吾

不徒滌器、而一家飲食所用、洗濯所費、舉取於此焉、子名其井、曰天福井、名其酒曰永樂、若夫洪武姑待

主人愛其水清冽、試以釀酒數瓮、酒成甚美、勝河水之他日班進、則必有物可以武名焉者、是其兆也、余

釀者遠矣、主人大喜、乃會里中父老、視之以所得錢、| 亦爲吾子記父老之言、吾子勒之石、建諸井上、晨夕

酌之以所釀酒、且指其井日、某也不肯、何以得此、 觀省、慎從其言、又以示子孫、則庶乎永世罔矣、

自今以往、吾家之造釀、弗復用河水、而唯井之賴、

敢以乞丈人之言、一老舉觴、而祝之以錢文、日始日

天福、天錫爾福也、吾聞天道福善、是豈一朝一夕而「均之天下也、人民之所居、舟車之所通、深山大澤、

然哉、吾子祖考、咸能積善、以及吾子"而致天之驾、 龍蛇之所窟宅、魑魅罔兩之所跳梁而據處、黄河所源、

贈佐竹蓬平子序

、

於是連句館試、職務紛挐、然此鈔寫、弗敢倩人、

井泉、一老曰、次曰洪武、洪爾武也積其誠意、則凡事之不可已者、將自見焉、不必待 吾子益彊爲善、則酒滋美、家滋富、天福之至、有如

古人之言也歟、

三更燈下、兀坐執筆、眼昏臂掉、殆不成字、

唯此區區之意、伏希亮察、享和改元孟夏既望

天福井記

記乞上殿劄子曰、朝廷置勸講之官、輔導人主、豈止

講明經義、所以薰陶性質、古所謂承弼厥辟、出入

起居者焉、

又曰、皇帝陛下春秋之富、方賴左右前後之人、輔

養聖性、勸講之職任、莫重焉、

伊川先生辭免說書表曰、臣觀前古君臣道、合靡不

由至誠感動、信以發志、今臣道未行於家室、善未

信於鄉黨、何足以感動人主之心乎、苟不度其誠之

未至、而欲善辭說於進對之間、爲一時之觀、則可

矣、必欲通於神明、光於四海、久誠而無斁、臣知

其不可也,

之任、果止於是、程子之言、豈如此乎、子中誠英傑

之士、予知其卓然、不與世人同矣、程子所謂感動於

主心者、予實望之子中、予賀之也、爲是之故也、非
以斯行爲榮也、既而子中請予贈言、對曰、順進講有
年、未嘗有所裨益焉、愧之甚、其有何言可贈乎、敢
辭、子中請之弗已、時適讀程子書、至於勸講之事
惕然懼、肅然警、因摘其語告戒最切者、手自膽寫以
代贈言、子中勸講之暇、幸能玩之、其懼且警、亦或
有與順同焉者矣夫、

肥後文獻 書第二卷

謹案勸講之任、其重如此、而其鐘聲之喩、最爲告
君之切箴、爲講職者、可不懼且慎哉、其上書所乞
擇臣寮家子弟、使侍左右、主所讀之書、亦使讀之
之事、聞已舉行、第未知其端謹穎悟、言語必正、
鸟動必莊、果如程子所言與否矣、其他伏假之間、
於清凉之處、召見講官、俾陳說道義等事、亦不可
闕也、而兮不悉錄、竊謂勸講之職、苟知其任重、
論經筵劄子貼黃曰、臣以爲天下重任、唯宰相與經
筵、天下治亂繫宰相、君德成就責經筵、由是言之、
安得不以爲重、

又曰、夫告於人者、非積其誠意、不能感而入也

故聖人以蒲蘆喩敎、謂以誠化之也、今夫鐘怒而擊

之、則武、悲而擊之、則哀、誠意之感、而入也、

告於人亦如是、古人所以齋戒、而告君者、何謂也、

臣前後兩得進講、未嘗敢不宿齋豫戒、潛思存、

覬感動於上心、

又云、臣以爲今日至大至急、爲宗社生靈長久之計、

惟是輔養上德而已、

上太皇太后書曰、儒者得以道學輔人主、盖非常之

遇、使臣自擇所處、亦無過於此矣、

風送硫黃海上船.客心愁破坐飄然、一千餘里歸來日、

三十六灘將盡天、曾宿津樓舍月出、慣聽漁笛隔妇傳、

何妨熊府尙云遠、熟路江山行可憐、

至

港口孤帆候曉懸、潮生百丈不須牽、青山四遶如無路、

綠水纔通忽接天、日霽樓臺疑蜃氣、時清島嶼需人烟、

罟師蕩槳來何急、新得嘉魚欲錢、

曉發花子門

同舟將還黃雀磯、鶴磁西望幾千里、但見落日沒潮水、

鄉心徒逐飛烏逝、壯志未得長風起、赤石浦頭吊柿君、

蒼茫海霧曙光分、臥看鵜足津邊月、行蹈象頭山頂雲、

晴日共倚柁樓嘯、暮潮更乘漁艇釣、因億三春兩地遊、

與君行樂孰多少、平安城勝長安樂、何人出門不西笑、

請君試爲東武吟、武城壯麗冠古今、隅川楊柳誰攀折、

叡嶺桃李花淺深、

程子之賢、坐于廟堂之上、為政於天下、則雖伊周之

業、奚不爲也、而緩爲勸講之職、所言如此者、蓋

其可以輔導幼主也、人臣之義、與成己之功也、登若

成君之德哉、其君既能爲堯舜之君、其民欲不為堯舜

之民得乎、雖有一人之功、安能至於斯也、世人不察

焉、唯功是尚、故喜從政、而羞爲勸講之職也,不得

己、而 爲 其 職 者、亦不知其任之重、曰吾職與

鳴字下當有呼?

輔導之事、何與知之、解說經義無誤斯可矣、鳴勸

訓導近藤君子中、命赴江都、充世子邸講職也、其將

行也、順見之、賀焉、或曰、吾藩訓導歲命一人、往

侍世子、則維其常、不足以爲榮也、且子中邦之英傑,

年未三十、克爲人師、若擢而用之、使從政乎、其功

業所成、必有可觀者矣、今也不然、班不過儒員、祿

不過下士、蠕々獨行、役于千里之外、是可吊矣、登

可賀乎、吾子賀之、其說如何、日昔者伊川程子為崇

政殿說書、其言日、使臣自擇所處、亦無過於此、夫

送近藤訓導序

紫溟先生遺稿卷之五

播海舟中

熊府城南壺水濱、我家別墅與君隣、北叟南翁屢來往、

唯君邈若異鄉人、君自紅顏我白首、幽情銳氣不同趣、

深夜焚香坐莓苔、早晨揮策拂揚柳、此夕何夕得同舟、

共是一千里外遊、蕭蕭風雨篷窓下、促坐傳杯慰旅愁、

肯許自今在鄉里、忘年交契長如此、

住谷生扇面乞詩、因賦、

晴日長風揚斤席、朝辭浪華暮明石、明石浦暝雨蕭蕭、

觀潮樓上不觀潮、坐對篝燈睡何著、愁聽波濤拍岸驕、

憶昨春遊遍畿甸、尋花探勝不知倦、林下逢迎半異方、

樽前邂逅本同鄉、當時日長愁日短、即今夜短苦夜長、

安得天風吹雲散、直送我船度硫黄、

明石夜泊、遇雨、宿觀潮樓、

主人置酒暫相留、杜宇聲聲雨滿樓、只道烟霞尋勝地、

何圖杯酒接名流、唱雪不勞紇上曲、披雲忽散客中愁、

從它碧海蒼山隔、別後神交夢裡遊、

菅野氏席上、和中井生韻、仙

澱河南岸杜鵑聲、餘興依依望帝京、猶憶葵花開向日、 蒼茫淡霧島中山、

薫風披拂羽林纓、

肥後文獻叢書第一

澱河舟中懷京

五月四日、船過讚海、望象頭山、乃命小舟取道

龜城、而再登焉、把酒有感、吟備三月三

蒼海南邊望讃岐、更乘小艇伻漁師、潮頭近指龜城路、

雲際遙礬象嶽祠、記得桃花前渡處、依然霞色再升時、

流觴節變香蒲酒、遠客偏驚日月移、

君自江都揚策歸、余亦掛帆辭帝畿、邂逅相親喜何極、

南窓戢枝樹、北牖備州山、天明辭赤石、猶望夕陽還、

舟中贈磯田生

芳郊山暖看花回、勢海渚清餐玉來、晴日孤帆風不斷、

讚州行豫州開、

令節强把杯、榴花不可覩、唯有釣魚絲、繋爲長命縷、

歸帆不可揚、歸思一何苦、願如競渡舟、一發到鄕土、

西歸何日至、島陰久休歇、羨看東去船、風帆如滿月、

舟中口號

五日阻風三首

日游于此

歸舟曉發指天涯、波靜篷午景移、柔櫓緣搖如鏡處、

輕帆忽滿帶風時、淡島漁家婦黯澹、播陽驛路樹逶迤、

回看前日經過地、勝境靈蹤心自知、

曉風千里一帆還、波浪洶々殘夢間、日出回看前泊處、

倚盡赤欄干、凝望銷魂處、風送蕭蕭去、馬聲暮色、

蒼茫雨、

11

春盡歇、芳菲晝寂、鶯無語、唯有遙山滿目青、人與奈君明日是歸期
、

春俱去、

卜算子 同上

積水連空、離思何窮、帝都天在海雲東、意長短、

落月殘鐘、忽奈分袂、奈臨岐、奈飄蓬

11

怨雨愁風、零落殘紅、賞春遊、昨夢朦朧、伊人千里、

萍水相逢、只有一宵話、一樽酒、一絲桐、

行香子 送田能村君之京

詩除

豐州歸去幾山川、今夕休辭醉別筵、傳語中津城裡侶、

兒童唱得舊都篇、情之弟叉助,年甫十、學

今棣、結句故云

送件木生、兼寄中津諸子、

燈前勸酒暫蚪歡、回首曉雲殘月寒、筑水肥山元不遠、

但愁歸路雪漫、

送安立生

五六七

嵐山春滿堰河邊、水綠山青花帶烟、唯有鐘聲傳樹抄、

空波不見管粒船、

山晚雲光滅、何人度翠微、醉歌傳谷響、知是看花歸、

嵐山

芳野途中

春遊千里入京師、客舍相逢酒一卮、啼鳥嚶嚶花正發、

青松映白沙、潮水浸山麓、征馬與行帆、雙々互相逐、

平安客舍、送月形生還筑前、

戰陣誰無勇、憐君獨不殤、海風吹古塔、激浪至今揚

舞子濱

津頭花滿樹、津下水涵天、坐酌高樓酒、傍看萬國船、

乘風猶壯志、戀闕已衰年、苦問春雲外、錦帆何處邊、

敦盛墓

室津樓上坐雲烟、碧海青山落日前、望斷鎮西天渺渺、

臨風遙待謝公船、

室津登樓奉待

奉待之下疑有佚文

青松港口買扁舟、日揚帆泝海流、赤馬關門今不鎖、

高歌乘醉入長州、

赤馬關

良醫堂上客如雲、三世高名萬里聞、恰似春風吹草樹、

豊府大城醫生乞其堂號、書春風二字以畀之、副

以詩、

扶醉先辭壽酒筵、猶聞歌笑入風傳、早梅香動冬宵月、

已似朧朧春半天、

藹月族家賀宴、醉歸、途中口號、

雪裡當年探早梅、溪南溪北共徘徊、老來唯擬袁安臥、

驚見一枝春色回、

謝宇授讀贈梅花

赤壁追蹤綠水舟、初冬風色憶初秋、請看天上孤輪月、

曾照蘇公前後遊、

壬戌十月望、再泛我川、

乘興不須舟楫輕、野橋村路好閒行、楓葉蘆花零落盡、

唯餘孤月向人明、

不赴川莊久矣、九月十一夜、李然獨往、

多謝加餐相勸情、黃粱爲飯芋魁羹、今朝忽得村家趣、

疑是歸田賦已成、

謝山授讀惠粟芋

綵仗森然護紫宸、宮前草木自威神、傳聞橘柚隨仙使、

殊勝葡萄逐漢臣、

肥後文獻叢書第二卷

梔原山上古城墟、春草萋々百戰餘、今世昇平無一事、

日長閑讀洞中書、

贈安立椿洞

彥山佐竹生索其亭號、書盈視二字與之、副以詩、

朝來一片彥峰雲、白日冥濛望不分、驟雨隨風千里散、

川原盈視夕陽曛、

日南々去攀躋、匣裡蓮花長自撈、借問玖摩山月夜、

秋風幾處白猿啼、

中村劍客自玖摩歸、賦此問之、

白髮高人拂玉琴、虎堂月色夜沉沉、彈作秋波澎湃響、

頓令人坐洞庭陰、

送春江上日將曛、流水相將何處分、唯有楊花知別意、

不須攀折已紛紛、

失題二首

臨別慇懃東閣梅、春風千里送香來、那知玉蕊愁無主、

飛至西溟譎處開、

當日和羹事已非、謫居迢遞戀皇畿、逐臣不及寒梅樹、

千里關山一夜飛、

菅公廟飛梅二首

能令枯悴作榮芬、

何須包貢自維揚、

御衣暗濕追思淚、

恨殺先皇不及看、應神

當年仙使訪殊方、袖裡携來百濟新羅屬内官、那得春風花似雲、

宮詞十二首

赤城

名園丁煖酒醉彤墀、燒盡前庭紅葉枝、晨起君王無所見、

從容唯誦樂天詩、

蘇山寓居、酬安子孝見寄、

停杯似聽萬松風、

簾前草樹自婆婆、

天涯尺素杳難通【豈謂清歡此夜同、語及當年棲隱地、太平天子技能多、玉管吹來坐錦窠、百遍虞韶夜將、

繼稱勅旨不能飛、

與安山人話舊

天池影動侍臣衣、翠篠靑蒲傍紫微、獨立禖洲上鷺、

春日簡香山生

、

恩、

渤海使臣朝至尊玉樹玲瓏曉露鮮´惓和馬彥章夢鄉作

楊柳梅花畫作霜、

直置天涯易斷觴、誰家今夜笛聲長、海風吹落輪臺月、

、

年、仁德

烏啼曙色滿高城、欲別江亭感且生、曾是橋邊手栽柳、

共喜春光駘蕩天、宮梅花發浪華邊、君王何事還多感、

枝枝總動別離情東武客舍聞笛

遊詞客感流年、夢魂不識滄溟濶、

直到蘇山落月邊寄語高陽舊酒徒、春風明日好携壺、龍山一路看花去
、

直買扁舟泛書湖、

追憶靑闈並蓐一從恩詔賑窮貧、萬炊烟日々新、誰識春臺登眺意、

能將熙樂共黎民、同

高津宮闕草芊芊、露氣霜華御榻前、已是庶民子來日、

復租依舊更三年,

、賜衣新列紫微垣、枇杷滿椀纔擎出、

環佩珊珊拜恃鐘鳴宮樹散栖鸦、碧瓦清霜夜有華、怪得祁寒御衣薄、

叡心爲想小民嗟、

遠遊詞客有新章、彩筆翩翩霞色揚、天際不唯勞夢想、

隨風寄到赤城傍、汕

遙々入貢萬人歡、紫閣紅樓含瑞氛、階前嘉樹亦榮芬、唐家縱有櫻桃薦、

橘子香、封楠千秋連右掖、

江上春潮欲落時、江邊楊柳動金枝、牙檣錦緞多歸客、

春江曲

坐客如雲送我行、高堂秉燭綺筵明、深交爲說重遊日、

梅福應非今日名、

離歌一曲玉壺殷、西指熊城碧霧間、爲報千山風雨夕、

看吾親駕海龍還、

留別山中諸子二首

也自清風待主人、

自字疑有字訛

歸路芳菲踏作塵、誰家沈醉度三春、栞書無恙幽遽下、

初夏過清虐亭、逢仲髦醉歸、因賦贈、

彩筆翩翩作賦新、紅顏白哲屬青春、請君自愛凌雲氣、

海内風流更幾人、

寄佐元宙

千巖一路彩雲間、山似赤城飛瀑、若見中天霞色動、

須知吾輩有新篇、

携諸子遊北山留別坂惟

紅粉靑娥舞態開、蘭舟冒雨大江隈、行雲解爲新歌住、

莫是襄王宮裡來、

雨中泛江

空聞夜々杜鵑啼、

肥後文獻叢書第二卷

留別大伯啓

把酒良宵對月明、閑居無恙故人情、只令秋興堪裁賦、

官字疑宦字訛

世上從它拙官名、

席上酬坂惟

送別衡門日已曛、藤蘿窈窕路難分、有人若問棲遲意、

爲道山中多白雲、

熊城諸子訪蘇山草廬、臨別賦贈、

無邊明月白雲秋、安得相逢作勝遊、聞說湖山分八脉、
題詩何處倚高樓、
湖水悠悠似洞庭、扁舟何處吊湘靈、天涯一夜秋風至、
斑竹聲々不可聽、
千里琵琶湖水通、扁舟何處駕秋風、白雲不掩名山色、
倒影分明落鏡中、
寄湖中人三首
東籬猶自菊化黃、戶外南山寒影長、此日故人來載酒、
陶家那不似重陽、
霜落千山木葉丹、白雲回首正漫漫、登高昨日愁風雨、
秋色還應載酒看、
節後簡坂惟濵二首
問着阿郎總不知、
五六耳
紫溟先生遺稿卷之四
五六三
山寒五月更凄々、微雨窓前望欲迷、花落鄉園不歸去、
樹色、
蕭條風雨杜鵑啼、

望蘇山晴雪口號

滿園新樹綠將齊、獨坐山窓望轉迷、花事三首夏偶成休二首

聲聲總是勸人歸、

今宵應復醉君家、

幽亭把酒對斜暉、無那山林興易違、蜀魄不知留 別

瑤池影散紫霞裳、

何堪不醉草玄經、

偷間日步林塘、燕子花開風自香、疑是群仙新寵宴、

江山秋盡雨冥冥、載酒誰能問我亭、縱是子雲甘寂寞、

燕子花

雨中戲寄宇治君

登臨應有孟嘉才、類

柴桑處士到潯陽、謾擬風流共舉觴、只有黃花解人意、高樓九日菊花杯、四野浮雲逐望開、烏帽峯頭秋色好、

枝枝却似號頭香、

九日新晴、望嶽贈、

樓眺望、

棲霞舘集、主人不置酒、因戲賦愁情寄在不言中、

閑吟微醉度年華、

山園徒待步東風、桃李花飛樹々空、寂々芳蹊春欲暮

相迎酌酒野人家、満目青山落日斜、軒冕不知是何物、

山居、夢中得結語、閣成一絕、

漫成

欲從閬苑鬪芳菲、

扁舟愁殺未歸人、

子規啼血大江濱、楚水迢遙月色新、十二峯々聲不斷、

自熊府還蘇山、桃花一枝、貽宇治君、副以詩、

年年慣聽杜鵑聲、

子規啼

安乘鳳背到瑤臺、

河陽縣裡買春歸、一片紅霞傍馬飛、勝盡人間多少色、

宇治君以詩見招、賦此答謝、二首、

門前五柳日將斜、忽枉新詩粲似花、幸有門生扶脚疾、

離別苦、

將長鋏擬憑驪、縱是無車路不難、只要高臺多置酒、

錦鯖氷膾諫金盤、

滿天風雨曉初開、天外蘇峰雪作堆、想見三花珠春還似夢、

野岸江邨細徑通、水光明滅短墻東、心間人境稱深隱、

何必千山萬壑中、

深隱亭

竹筒新賜蔡倫家、有斐君侯恩意賒、覺但玉壺水可比、

清香不斷四時花、

所藏、豫州松山侯之賜、

題插花筒 名曰氷柱、紙工木村喜三次

四時詩卷欲盈車、七步八叉何足誇、誰道疾行無善跡、

看來溫麗盡春葩、

題白嶼翁詩卷

臨江懶復采芙蓉、回望雲山幾萬重、今古晏如東奧海、

狂風何處送艨艟、

丁卯秋日偶成

朝來細雨正催花、忽見狂風吹雨斜、砥恐山櫻開且落、

急要同侶命巾車、

二月廿八日到川觀亭

大奉行島田君示早起作、擊節之餘、賦此奉寄、

爲政餘間好濯纓、滄浪今日水方淸、春來縱作漁舟夢、

恐有遷鶯呼起聲、

龍門瀑布昔件看、回首思來六月寒、歸去玖珠山下道、

羨君家在水雲端、

雨後溪水暮烟生、散步空林風自淸、一閉柴門長不出、

山中偶成 以下蘇山作

摩尼各自繫衣回、

大光山色礫崔嵬、想見秋風瀟梵臺、三十三天明月夜、

壑底層氷猶未消、原注起句一作千

尺飛泉風色驕

聞諸子遊大光山賦贈

七級巖高瀑水遙、奔流噴雪落靑霄、怪來六月無炎熱、

七級瀑布

送別城南花發時´慇懃把袂問歸期、人間春色如流水、

凝露臺邊莫看棊、

送楯柳徑遊佐賀

大漠蒼茫風色悲、長雲一片繞旌旗、暮笳聲斷龍庭肅、

正是單于拜月時、

塞上曲

雲雨連旬藓不晴、江亭此夕月華明、偏憐橋外囂塵隔、

但爲思人望府城、

江村雨後對月

一帶淸川隔世塵、丹楓黃橘映流新、漁翁只道仙源近、

停棹偏驚要路津、

舟泝壺川過大奉行松下君宅

家々椒酒醉春筵、初日晴來萬里天、帶礪山河佳氣滿、

上

熊城二月雨蕭々、遙想蘇山積雪消、試看婦路寒梅樹、

開到緇川第幾橋、

送宮邦倫還阿蘇

春筵幾處鬪蛾眉、醉裡含嬌不自持、已看舞衣金樓織、

還聞供膳蠟薪炊、

其 二

荊釵蓬首誰家子、白日賣薪走城市、若道村野不懷春、

何緣擔頭插桃李、

路遇賣薪女有感

羽客笙歌何處遊、松風謖々讃岐州、若非仙嶠乘鼇背、

何得靈山蹈象頭、

東游仙曲讚州石翁壽詞

漢宮紈扇已成歌、衛國絺衣怨更多、吹到逐臣魂斷處、

靑楓蕭瑟洞庭波、

賦秋風

神宮仙館憶曽遊、衰病人扶强上樓、極望二重峰上路、

白雲猶似去年秋、

憶舊遊

五六一

送麻生伊織

風暖祇林日正長、霞靄 樹成行、停車曾愛紅楓樹、

更見櫻花疊雪香、

泰勝寺看花

為佐藤伯簡壽太孺人 艄簡豊鸛崎人、今生肥熊

府、太孺人留在鶴崎云、

乘鶴何年離海綺、故園回首彩雲飛、慈親不老栽靈橘、

應待仙公遊罷歸、

大矢山高渭水邊、醫家三世住雲煙、濟人豈獨靑囊籙、

杏樹花開是地仙、

叉、生爲叔父乞書、援筆立就、

矢部山中我舊過、山家門徑半臨河、幽人時掇金光草、

洗去清流月下波、

送一瀬生歸矢部、姓名

白嶼翁見示近作、使余評騭、戲爲此代評、

驪黃牝牡駕空高、赭白機賦漫勞、海内豈無千里馬、

天機何有九方皐、

南薩還來殘臈天、新正人日去翩々、交情不淺交歡少、

莫說熊城已閲年、

送重富生歸柳川

菟裘營就襲封年、

席上贈小寺生

黃鸝幾處囀殘春、雨後江村綠樹新、清風高臥南下、

知是羲皇以上人、

其 二

題詩會寄一枝春、豈意瓊瑤報忽新、縱是城中相和少、

烟霞却得賞音人、

用前重呈滄洲翁二首

豫州南畔石爲峰、峰下高堂佳氣濃、壽酒宛如仙掌露、

杯中影落石芙蓉、

伊豫中川大平仓尊八十賀宴、索詩、因賦石槌

山、以爲侑觴之詞、从石樹山一名石芙蓉

大平名读平、京師吉徐氏門

至樂堂中醉不歸、那知風雪夜霏々、此暫駐青田鶴、

祇恐瑤琴曲鹘飛、

南醫伯集、聽玉堂翁彈催馬樂、田

故人家在白河陰、偶爾偏汧乘興市、老懶自驚相訪潤、

當時尺樹縛成林、

舟湖白河訪安公雍

五千長道訪師來、百二重關愬母回、家住羽州高璧里、

光輝應映月山開、

送石山惟克 摩知

肥後文獻叢書第

何人趙舍嘆無魚、上客梁園盡曳裾、唯有肥州隱君子、

朝來山下一米廬、

示坂上生

青霞洞裡碧雞鳴、忽報逡巡酒巳成、分與人間扶老病、

偏疑沆瀣落三、

謝洞主見惠雞鳴酒

主板

歸田未賦燕歸時、白髮蕭條宦途客、秕酒分來破百憂、

恰似村中扶醉夕、

謝安公雍見惠社酒

醉折梅花把向君、明朝馬上雪紛々、莫愁別後山河隔、

夢裡相看書裡開、

送安東子和還柳川

綺筵留客醉金卮、初月纖々欲落時、蘆管已將吹首律

梅花先自入新詩、

失 題

鏡裡清霜秋更生、枕扶衰病宦途行、故人忽有烏椑贈、

深愧閑居賦未成、

謝板徵卿柿

主人供給勸瑤杯、况復行厨汝開、殊勝習池騎馬醉、

林風江月送舟回、

五六

紫溟先生遺稿卷之四

前川凍合即金沙、歲晚維摩病臥家、雪嶺崢嶸人不見、

臘月八日示僧

關山千里訪師來、文史三冬業就回、雪裡送君何所贈、

曉風香動一枝梅、

送近藤元龜還中津 元珌名遊稱

晨起提瓶汲井華、東雲微白煮霜花、高人千里如相對、

况復屋梁殘月斜、郭绍日東雷雷伯

謝征前中津侯臣

矢野醫伯見惠芳茗、征矢野元甫豊

主春作神

菅神祭、聽少女彈琴、

圓紈扇寄情來、道是仙翁手自裁、握裡清風堪駕我、

好携明月到蓬萊、

逸山江藤翁、今歲八十有三、爲余制團扇、以

見寄贈、賦此謝之、

嘉城北地仙家、遲日開筵酌紫霞、何必南山新獻壽、

千年河水遶門斜、

西肥眞木翁壽詞、應其男三折之需、

醉裡成鄉總是春、歲寒况復對松筠、吸酸三老堪圖畫、

一處一官一隱人、

鬢如雲十五人、彈琴一曲聽天眞、縱誇蓂葉南薰日、

何似梅花北野春、柳能用一作

五五九

阿蘇山月蕩清輝、白水東邊白石磯、更有秋風吹萬頃、

稻花香滿福田衣、

香福寺

歸去求麻峽水頭、猿聲幾處白雲愁、相思他日能相訪、

千里長流一日舟、

送黑木君津還鄉

右 冬

寒林一夜靜無風、積雪漫々曙色通、知是君家清白境、

連山曠野皓然中、

右秋

阿蘇山上暮雲晴、高瀨河邊秋月明、寶樹放光開淨界、

長此郡玉爲名、

右夏

驛舍商家擁四憐、炎天赤日起囂塵、清風不斷招提境、

閑看蓮花出水清、

右

兩岸鶯啼楊柳枝、前川日出影參差、正知諸界供花果、

淨室歸來朝食時、

光淨寺四時詠

明星依舊照梅花、

桀步由來跨水鄉、睨天雙目正膛4、忽然鍥得王孫手、

道是無腹却有腹、

王孫捉嶰圖

南山六月烈風生、振樹穿雲白額磬、萬古何人親縛得、

丈夫唯有一周生、

手柔弓燥草如煙、雉子朝飛五采鮮、帶箭不知何處落、

花毛颮々馬蹄前、

射雉

野人元與世塵踈、坐擁茅堂竹火爐、兒童忽報前溪雪、

渾似山陰夜興圖、

春色參差千萬枝、霜風何處覓金絲、寒鴉幾點隋堤上、

唯有行人笛裡吹、

寒柳

寒閨耿々不成眠、熟視殘燈一炷燃、漫自結花緣底事、

空庭無復聽然、

燈 花

那須原上率幽草、一日嬋娟玉作裳、豈獨上皇天奪魄、

姑蘇臺上亦淇梁、

肥後文獻叢書第二卷

詩云、長松樹下兩三人、戲次其韻、

過島田奉行撫松園、堀處士大八在坐、故主人

往歲曾追赤壁遊、石塘西畔憶同舟、孤雲一去知何處、

寒月依然照碧流、

甲子十月之望、懷慈仙師、

玉樹橫斜映壽卮、畫中花勝月中枝、流霞春醉酡顏色、

本是眞人氷雪姿、

題書紅梅瓶田中丹次需、云爲新年挂幅、

斜日歸家舉酒卮、青山滿目入新詩、誰知五柳陶門下、

自有由々一士師、鼻能總

寄安野士師

射生新賜兩彫弧、勅射毛州九尾狐、欲試馬蹄鳳城外、

爭追黃犬走平、

騎射圖

欲尋春信月中行、水朦朧微雪晴、忽見波間疎影動、

風前己有暗香生、

夜梅

繁影婆娑月裡看、何人寫得報平安、忽思秋色湘江上、

伬未乾、

竹

桃花己似武陵津、柳色還同灞水濱、恰好春風來勸醉、

春園即事

窓外寒梅驚早春、東風此夕暗香新、往年雪裡幽尋客、

咫尺翻同萬里人、

對梅憶友

花裡東風擊壤歌、今宵不醉奈春何、吾徒無復酬昭代、

只願朝陽鳴鳳多、

春夜草堂集

郭外園亭需落暉、一概無奈故人違、可憐桃李花猶在、

花裏啼鶯亦未歸、

其 二

甲河誰道不容舠、砥柱春雲隔岸高、幾處吹笙弄明月、

誰家勸酒醉仙桃、

寄草野生在砥山、分得四豪、

君家芳草好淹留、烟雨霏々晩未休、更似前江春水漲、

忘機直欲弄羣鷗、

春雨井氏藥堂得尤韻

澱水舟船暗裡行、臥聞柔櫓往來聲、愁夢醒來山吐月、

流光先辨樹端城、

舟 行

五五七

狐化爲美人

春臺遲日奏宮商、欲向雲衢下鳳皇、誰識南熏紇絕後、

韶聲猶自響扶桑、

一首、伊大素

聽樂 樾余賦、搓筆立成,

孤枕重食空自傷、朔風吹送玉階霜、還疑漏水新凍、

夢斷深宮一衣長

嘆宮四時怨 冬

秋水何人獨釣魚、披圖轉自嘆歸與、何須更畫南都賦、

巳識丹青事不虐、

題蓬平仙畫

杏艶桃嬌競勸杯、一花纔落一花開春園日々多幽賞

不似山陰興盡回、

其四

園林日々弄春華、每倒蘭樽到日斜、愛聽嬰々求侶鳥、

貪看寂々不言花、

其 三

芳園須罄酒杯歡、春服春風晚更寒、縱是花間斜景盡、

繁枝好就月中看、

其 二

吳飛絮滿衣巾、

羊公會向此中過、

因留酌、

香臺重疊倚中丘´寶樹井發星山

畫圖中

海東先報碧桃開、

看花恨殺五更風、金谷平泉轉眼空、何似千紅將萬紫、

霞觴勸醉玉清臺、天際龍車紛不來、雪裡未終黃竹曲

遊仙

秋風惱殺未歸人、

春城花發惜離顔、此去仙幾日攀、長路綿々行不盡、

秋風先入白河關、

青山一片白河濱、忽覺朝來爽氣新、蕭瑟桂花應有待、

題書雜花

初秋雜詩

七言絕

送人之奧州

千山雲際征路、二月花間別縫、劍騎壯遊見寵、文章盛

桃花開處即仙源、

仲春靚和花下飲 5

先將大藥救蒼生、

彥

送玉山先生從 駕赴東武、與諸子同賦、分十二彥山道士羽衣輕、1日
幡然濟物情、不逐群仙遊紫府、

體、得六言律、

贈佐竹生

着屐時尋勝境、彈琴獨坐幽栖、青苔石上花影、翠柳園 逢迎此日似成
蹊、

中鳥啼、

青年彩筆美名齊、千里乘春枉馬蹄、寂寞柴門桃李下、

喜米府樺松二子至

雲移東嶺西嶺、水合前溪後溪、草緑野麋有跡、桃紅山 不及廬山明日期、

客成蹊、

白露黃花己滿枝、何妨取醉臥東籬、莫將栗里今宵興、

和氣滿乾坤、消盡人間萬慮繁、竹葉酌時皆勝地、

業稱賢、論心今日倉卒、分手明朝杳然、東武諸侯會地、

美人好可周旋、

春風留在辛二子、將赴君山上人九日之約、前一夕見過、

逶迤接上頭、怪得空山人墮淚、

紫溟先生遺稿卷之四

日照湖山、津頭嵐氣集、馬嘶唵靄間、行客衣巾濕、

遠洲生暝霧、前浦半斜陽、歴々長橋外、緑波人影長、

粟津晴嵐

篝燈影明滅、洲渚暝雲重、聲來湖上雨、颯々入孤松、

勢多橋夕照

春湖不起波、帆影鏡中見、晩來樵者風、點々疾於箭、

唐崎夜雨

陽峯花已發、陰壑雪猶寒、獨往養和者、輕風倚秋看、

箭渡歸帆

昔日看雲處、依然山畔石、年々苔蘚深、唯有麋鹿跡、

間行

飲啄飽雲泉、羽毛若霜雪、不復貢周玉、空山獨自潔、

過隱

官跡風塵滯、離情歲月過、重來丘壑裡、依舊白雲多、

題十丁山中白雉贈大素

昨非雲出岫、今是烏歸林、千載無紇響、超然達世音、

蘇 山

題陶淵明圖 童子携從後

終H垂綸坐、柳陰風自多、不知山月出、蘋末動金波、

川莊即事

五五五

栽桃已發紅萼´摘蕨新漸紫苞、岩穴不須結構、山厨

何着腥、

山園即事

萬人曾辟易、清世臥莓苔、微月梨花夕、當場試一回、

槍

簪可作常侍、投可取封侯、何似新詩就、雲煙滿紙浮、

己削右軍書、唯供南郭嘯、厭跡托千秋、聽風鳴萬竅、

女媧且休鍊、鈞天元在此、只恐初平、仙羊將我起、

三尺蒼精龍、七里映秋水、誰道敵一人、曾斬白帝子、

石 枕

逝矣拳龍氏、龍吟不可聞、試截柯亭竹、吹來坐白雲、

劍

瓶疑瓴訛

滴々泰山溜、汪々文海深、建瓶氣不佳、影出古今心、

笛

蘆洲接稻田、雁下寒煙夕、哀音散遠風、惱殺孤舟客、

水滴 安野氏席上雜誌

堅田落鴈

古人曾入畫、長向雪中誇、不競三春色、翻開十月花、

何人此中住、鷄犬隔林巒、欲認歸時路、嚴々子細看、

題紅蕉圖

相逢談勝地、微月媚良宵、檻外淅川水、恍看兎道橋、

題畫山水

青々門外柳、記得手栽時、一自嬰塵網、春風長幾枝、

過件松亭話字地之勝

上山間古城、下山問古廟、古廟松柏間、空翠紛夕照、

經舊宅

春煙緑水洲、麗日青山郭、戸々種垂楊、不復分籬落、

古城山

江花一何好、江水一何遙、不見郎舟到、早潮復暮潮、

絕 句

薜荔爲短墻、比鄰可呼取、一任玉壺傾、賴君過獨酒、

春江曲

傲々鴻雁聲、盡是孤客涙、雁自故鄉來、不繫故鄉字、

鄰人對酌

何處是故鄉、千山復萬水、中宵鴻鴈來、獨自攬衣起、

客夜聞

肥後文獻叢書第二卷

夢裏鐘聲度、蓬剎署色多、林端何處寺、塔影落烟波、

赤日絕風涼、炎塵蔽物象、行到偃蓋陰、□□簫簧響、

題小景,

前軒偃松

蛙鳴水田、聒耳君休惡、自有可憐時、寥々春雨暮、

新古令集秋乎利仁安倍波許禮毛佐須賀仁安

波禮奈理遠多乃可波都乃由布久祖乃許惠

詠 蛙

水從蘇盈落、作濟即瀰盈、時有薪歌發、瓢々遺世聲、

蘇門先生游於延瀨見一人採薪″謂曰子以此

終乎、薪人曰云云遼驾歌二章而去、出文選注、

遠峯雪似迎、孤島樹如引、借問舟中人、清興盡未盡、

瀨盈園

地鼇頭島、園栽鳳尾蕉、青苔欺玉樹、不爲歲寒凋

宰府飛梅主、天朝補袞臣、德馨傳異域、到處一枝春

題鐵蕉 讃州丸龜城下高島氏園六詠之一

樽盡甕猶ﾈ 、半醉未成眠、諸君休且去、黃菊夕陽天、

題入唐菅公像

鷹據松樹、爽籟灑雄姿、宛似磻溪叟、坐茅垂釣時、

題淵明 應松岡三味請

題謌鷹

山中白日長、無客過茅宇、手把古人書、獨笑南下、

日出東峯上、黃雲雨雪收、曠原皓無極、一帶是寒流、

讀 書

古寺空山裡、秋天楓樹丹、歸鞍回首望、日照在雲端、

雪中眺望

踞石高柳陰、前對寒泉水、翠篠與綠蒲、微風自不已、

古寺紅楓

江雨新晴夜、扁舟望不迷、蒼々兩岸樹、月出杜鵑市、

泉上納涼

遠遊人未歸、一夜風發、江上楊柳枝、澀々映春月、

雨後杜鵑

江上春月 以下七首和歌題應人需

多謝分佳醞、寄來椹隱深、梅邊不待月、先對暗香料、

來詩曰:「雪夜隱士臥雲

深、想像氷壺酒”憖迎月甚

飛錫遊何處、彌天悵望長、玄風吹不斷、猶使犬梅香、

謝嶋田奉行惠酒

仙人有杏洲、聞在滄溟畔、待爾杏林、春花爛、

題慈仙師墨梅

江村連極浦、天濶海漫々、夜々懸明月、三山鏡裡看、

示醫生桂壽

憶昨故人來、共看初月色、初月今已盈、故人無消息、

五五三

一雨度芳溪、殘花看可惜、紛々

殘花看可惜、紛々落作泥似學醉歸客、

中秋走筆寄和田生

漭沆滄池潤、扁舟垂柳中、得魚須佐酒、何必問漁翁、

踏靑向何處、十里大江西、應望酒雄去、不關春草

肯來問水濱、飛珠粉可拾、白石激清波、照見夕流急、

開坂惟與今村生遊西郊戲贈

夜久浮雲斷、樓頭興可憐、停杯歌月出1月已在中天、

溪上觀螢、走筆簡宇治君、

月出見嬋娟、風生更搖動、一夜綺窓前、那得無幽夢、

中秋雨集、三更月出、

幽人何處去、滿逕落花紅、時有琴響、孤峯夕照中、

梅 影

落日繫扁舟、即是幽棲處、碧潭人影空、紅桃鳥啼去、

林花暮色時、轉自足幽賞、欲去且遲々、前山孤月上、

訪隱者不逢

花下忘歸

欲尋柳川路、先度松風關、墜露沾衣袂、馬嘶蒼翠間、

水島

星宮中夜肅、帝子拜瑤光、朔風環佩響、靑女不飛霜

松風關

疎雨晩蕭々、高城雲霧晦、望恸蘇門山、應在歸鳥外、

霜祠

西北炎雲起、海風車蓋飛、村邊已白雨、原上尙斜暉、

雨中憶蘇山

空翠□□□″涓々洗石苔、夜來春漲至、鼓動萬山雷、

遠村驟雨

昔人曾淑錦、傳此一川名、唯有桃花發、年々錦浪生、

鼓瀑

不聽采菱歌、渺至一池水、傍有神聖窟、風肅微波起、

錦川

連山横黛色、箭筈更雀崦、欲望通天處、白雲晝不開、

菱形池

翛然鳳音發、脩竹帶風時、元是軒皇管、新從嶰谷移、

箭筈峰

故名、古昔供御管云、

中庭嘉樹多、秋賞何累々、留客膽江魚、橙絲縷更美、

臺明竹 竹出于指之鎏明寺、

三冬方肅殺、一醉即和醇、莫道玉壺小、能生天地春、

連山表長海、峰勢本支分、仰見朝陽色、鳳鳴杳可聞、

謝白嶼翁見惠壺酒

筑州不可見、唯見筑州山、海霧冥々外、孤峰夕照間、

本山朝日:

送迎秦相府、朝謁漢皇宮、何如山館晚、把酒聽松風、

山鹿遠峰 長府侯前田別業雜詠"下同,

帝子有霞閣、乃在赤城標、日出九光際、依稀絳節朝、

把酒

岸長無雜樹、孤石俯淸川、緞帶纖々月、蟾蜍影已圓

蘇嶽朝霞

臨流弄夕月、光細未成葱、岸轉看孤石、蟾蜍影

其

日晴翠奩開、風冷清笙響、龍蟠長自馴、不敢干霄上、

蟾 岸

高樓倚百尋、征路亘千里、寶刀持贈君、下有寒潭水、

前軒偃松

瑤海泛龍舸″玉嶠駐鸞輅、巖開瀉醴泉、殊勝金莖露、

江樓送別

桂樹花開秋正分´園亭置酒好邀君簾前餘照看將盡、

琴裡高山不可聞、東道歸來纔税駕、西河老去轉離群、

盈々一水蒼炯古、猶似相思隔海雲、源能站

城訓導園亭、待馬彦章、不至、賦此寄之、時彦章自

江都市、探韻

忽見西風法旆揚、毫光先己照東方、金繩界道黃圖外、

寶樹成行紫野傍、不是淸門能遁跡、焉知白法別開場、

衣冠舊里相迎日、瓶裡蓮華轉自香、

原注起句當作青絲玉管、四五一作蕭條令古還

誰在、寥落乾坤屬我曹、後按仍舊爲佳、

送大琢禪師之京

繁紘急管酢葡萄、半夜樓頭興轉豪、共道一身渾是膽、

自誇三尺可吹毛、交遊海内還誰在、緩急人間托爾曹、

却憶當年燕市飲、荆卿有客姓爲高、

醉後作

帝寢憑高象紫宮、萬年佳氣欝葱々、玉魚長閉三泉地、

石馬齊斯半夜風、霜曙山河寒色肅、天晴隧道五通、

追隨此日千官淚、咫尺蒼梧思不窮、

擬上陵作

祗恐旅魂難作江敷珠語

夢、北風蕭瑟滿寒蘆、茵樂集有堀

何必西蜀中、此園奇賞聚、爲報王右軍、臼井目已湖、

知是白華餘、寒天寄魚鮓、由來非監池、應出堅水下、

鹽 井 稜善堂三

桐陰詞客集、攀葉各題詩、何必須栖鳳、瑞文已滿枝、

安公雍惠鮓、次韻答謝、

桐葉相思字、舍慏獨自題、安得風吹去、遙々到海西、

隣舍共桐陰、夏天兩人坐、一人今已歸、落葉獨驚我、

其 四

客居對碧桐、適與鄉心愜、吾家井欄上、落盡幾葉秋、

代和子成題客舍桐樹、以老杜何爲韻、五首、

客愁坐樓上、俯視庭下桐、蔭軒今髒々、猶是客愁中、

五言絕

紫溟先生遺稿之四

五邦當日卜皇都、津梅香動春前樹、江月光沈波底珠、

何知壯志忽乘風、赤城遙指晴霞外、淡島回看宿霧中、

浪華潮水到城隅、知爾停橈興不孤、萬播陽海色接遙空、此日揚帆望不窮東歸帆播海

送人遊浪華

絕磴千盤踏雪過、月出菱華流石鏡、雲開菡落水河、

欲尋人處無蹤跡、空谷遙傳樵者歌、

臨風一奏朱紇曲、惹得簾仙雀、

碧霧茫々水漲溪、飛樓遙出碧溪西、月宮堪自窺銀兎、

種玉山高秀色多´峰巒攀盡更嵯峨、飛橋百尺乗虹度、

自南種山村、向河岐村、途中口號、

且憐多少青樓女、樓上迎歡樓下、

、

坐見霓裳舞廣寒、波動銀橋秋影冷、月明金掌露華團、

樽前羞殺酡顏色、不似廬山結社看、

居、用白石先生韻、

草閣相邀共罄歡、四隣驚見狂衣冠、三千上客移珠履、

詠白蓮

皎々芙蓉秀可餐、池亭幽賞共憑欄、還疑水質凌姑射咫尺中厨授玉餐、縱是秋光從此盡、還期雪色待君看、

交情應有重遊日、駐得青松向歲寒、

誰復杨文擬北山、闔國黍稔秋大熟、閟宮冠佩晝方閑、

幽蘭知入瑤琴操、回首盈々一水間、

九月盡、宇治君與諸子携饌、見過萬松廬

莫言歸與易蕭條、此去山陽雪正消、行盡鑿空千里險、

病裡衡門日掩關、蕭條伏枕老紅顏、自憐旅食違南館、

蘇山草堂臥病、寄宇治君、

樓 居

此日紅顏齊上壽、仙家那問十洲墟、

到來環海九州遙、春風匹馬花岡驛、晴日孤帆柳浦潮、

吾亦天涯遊已倦、相期携手老漁樵

♯園花發興何如、歸雁天涯字轉疎、製錦元看同姜被、

東武客舍、牛子孝、取道山陽歸西肥、

春來不得楯家兄弟消息、忽憶大孺七十初度、賦「都下故人若相問、杳然天地一冥鴻、

11

裁斑況復侍播輿、丹霞近照杯中物、紫氣長籠洞裡書、

、曾謂歸心徒憶膾

萬里風煙憶舊溪、移家三市禁城西、花臨大道趨朱雀、

柳擁長坊接碧雞、北里經過終日密、東鄰歌舞幾年齊、

日色何勞報玉雞、天際雲山千卿出、雨餘煙樹萬家齊、

雉至今留跡、

紫溟先生遺稿卷之三

階前燭影簇金鞍、迎客高樓此罄歡、故態漸生知勝地、

新篇纔出冠詞壇、乾坤明日秋應盡、霜露中宵氣正寒,

且喜主人多置酒、醋來累月不爲難、

秋盡前一夕、棲霞舘迎諸君賦、

天涯何處是皇都、獨自登高對玉壺、病起黃花驚歲月、

愁來白雁滿江湖、他鄉搖落雙蓬鬢、故國清狂一酒徒、

九日當時于氣象、可堪蘇嶺夕陽孤、

上方携客此登臨、香刹爭高祇樹林、分座忽同甘露味、

揮毫聊和碧雲吟、諸峰含雪連華界、萬壑生風響梵音、

已是勝遊爲信宿、不妨他日屢相尋、观邸威一作剧陀

原注含雪一作雪

九日寄懷坂惟在京

同諸子遊西岩寺三日忘歸

赤城仙吏舊餐霞、矯跡飄然去路賖、境入山中瑤草色、

春逢海外碧桃花、丹砂鑿井孤村古、乳竇噴泉一注斜、

多病故人唯藥物、惠投何日自天涯、

送人采藥山中

黃雲落日壓千家、雨雪憑陵白鼻騧、一曲郢中歌自和、

孤舟剡水興堪賖、金莖忽擢仙人掌、玉蓋新開帝女花、

誰復同車稱好我、北風回首望天涯、

途中逢雪

五四九

瑤池春日宴新開、瑞氣氤氳九醞杯、錦字凌雲青鳥下、

琪花滿苑彩鸞來、偏憐玉樹階前秀、那問蟠桃海上栽、

君自紅顏長不老、舞衣應勝昔人裁、

楯家大孺人七十壽詞、兼寄柳、

開樽令節故人同、莫遣榴花杯酒空、芳榭園中芳未歇、

欄干霞際望無窮´黃梅雨霧來殘照、白雪花高入晚風、

仙鼎金丹何必問、長應繫醉顏紅、

五日栖霞舘集

清風求友烏相呼、佳節園林興不孤、愛此山中塵事少、

從它客裡歳華徂、榴花色媚臨氷簟、竹葉香浮滿玉壺、

莫問獨醒千古恨、醉鄉元自屬吾徒、

五 H

金錫飄然去不難、天臺遙指日邊看、霞標朝映垂珠樹、

塔勢晴分承露盤、萬里空王回法旆、九重仙吏上詞壇、

歸棲無恙摩尼色、坐對湖中明月寒、

送僧從東叡王還天臺山

春生神嶽自氤氳、殘雪晴烟望裡分、病起青樽仍止酒、

興來華舘一論文、鸞音己廢蘇門嘯、鳳彩新看丹穴群、

須爲清時鳴大雅、便令千歳有餘芬、

首春棲霞舘集、賦示諸子、

飛虹百尺大江隈、散步高秋明月開、自訝乘槎天上落

還驚驅石海東來、潮生寒影通龍窟、波定清光映蚌胎、

何處仙舟愁曙色、吹簫閑傍水雲回、

橋上步月

長安道上作春遊、年去年來不解愁、俠客十千沽美酒、

佳人西北在高樓、花間白日笙歌滿、門外紅塵車馬流

欲識昇平行樂處、請君憑軾入皇州、

大道看春春可憐、五陵公子剧々、飛鷹渭北雪初

飲馬秦川水欲烟、宅裡花香迎玉、橋邊柳色裊金鞭、

長安行樂無窮己肯信楊雄獨守玄、

長安道二首

壯觀知君興不孤、近將書劍寄邊隅、猶餘冀北眞龍種

長照日南明月珠、地盡大荒臨渤澥、天開諸島接方壺、

四彊久浴昇平化、營壘于今跡有無、

寄懷友人在北

前依野岸後山隈、鏡裡花從雲際開、忽報白牛車已至、

相求黃鳥侶俱來、舟能扶老何須秋、菴自臨流勝上臺、

應笑隣莊隱君子、朝風入郭晚初回、

臨流菴席上、次白嶼翁韻、

扁舟他夜須乘興、月裏千山雪未殘、

肥後文獻叢書第二卷

春風日夜憶離群、坐對城頭晴色分、此夕清柳迎月酌、

誰家玉笛隔花開、坐來列宿低高樹、望斷孤鴻入遠尘、

江海寥々消息絕、夢魂應復不逢君、

春夜對月懷人

南至高樓此對君、名山雲物坐來分、偏疑丘壑陪安石、

何用畫圖擬少文、晴雪還從林表照、陽春己向曲中聞、

且憐一線添佳興、盡醉樽前日未、

至日望嶽樓集、分得十二文、

四塞封疆葦北秋、時平豈復作邊愁、海門夜冷懸寒火、

雲氣晴來出薩州、采藥赤松山下路、探珠明月浦前流、

愁吾未得償心賞、名勝何時共爾遊、

寄懷友人在華北

西風載酒木蘭輕、空濶湖天萬重晴、琴瑟夜寒張樂地、

芙蓉秋切濯纓情、青山總傍雲邊出、明月還從鏡裡行

仙侶同舟憐不繫、群鷗沙上且休驚

月夜泛湖

驅馬方暲紫艷光、金羈玉勒繫纓長、橫行唯見飛星過、

一躍還驚閃電揚、白草原頭嘶落月、黃砂磧裡蹈新霜、

據鞍四顧者誰子、好斬樓蘭淨朔方、源注落巨作

懸崖削壁洞天遙、海上雲霞絳節朝、開說鸕鶿曾覆屋、

怪來烏鵲更成橋、帆暮落油津雨、仙路春開淡島潮、

播州望斷海東雲、筑紫春風此送君、谷口啼鶯正求侶、

天邊歸雁奈離羣、帆過赤石思康樂、家近高沙似少文、

但地故人如問訊、爲云衰鬢雪紛々、痾洲志日、高沙湖宗

少文、嘗家其側、

賦得鸕鶿洞、送太田原和卿、還飫肥城、

遠高見子敬還播陽富家、鋪 兼示但州櫻井子良好

盛代文章不乏人、誰如健筆老愈新、驪黃牝牡皆應畧、

翡翠蘭苕豈足珍、己使齊風知大國、奚唯郢雪和陽春、

賞音千載稱難遇、竊抃慚吾聽未真、

馬彥章詩卷詐畢、題後、

劉伶五斗解醒時、却擬陶潛

擬陶潛眞止詩´應羨名泉元作郡、

更嗟璇室漫爲池、老來濟勝雖無具、春至尋芳豈不隨、

醉後高山流水曲、爲君聊自比鍾期、

用前韻答寄

斯酒金牌磐于臂上唐安

祿山事今唯借用其字

故人高飲足平時、爲我新裁止酒詩、陶分欲參廬岳社、

山翁休向習家池、戒成縱是懸牌斷、頌罷仍令荷鍤隨、

却羡投閑春興劇、看花無復尙書期、彥章近爲閑官〞故七八及

晋庾闡著晰酒戒

|

川上茆廬風尙寒、相邀人日罄交歡〞勝花巧映荼蘼酒、

生菜緞添苜蓿盤、奇字却從諸彥問、新詩還借老夫看

五四七

人日川觀亭諸賢載酒見過

玉堂翁見過川觀亭、奏琴歌催馬樂、喜而賦、

相逢昨日共舍尼、未拂朱泣心已知、雨雪蕭條高枕處

江邨寂寞掩門時、興來鶴過茅宇、歌起鶯梭織柳絲、

縱是故鄉人有待、休催君馬赴歸期、

幾年書劍此遊方、歸思今朝忽促裝、春近遷鶯出幽谷、

世淸鳴鳳在高岡、彩毫知爾詩開秕、白首慚吾醉作鄉、

若憶禊川離索處、琴中流水獨洋々、

次安訓導韻、送能勢子文還岡城、

江霧寧愁路渺茫、曾知隔岸即仙鄉、寒花籬下還招隱、

春竹林中不厭狂、莫問白駒過隙速、唯甘綠蟻滿杯浮、

此中元是無何有、談除能令賓主忘、

重過寒玉齋、次井訓導前度韻、

憶昔仁皇嘉樹年´使臣何數漢張騫、星槎忽泛重溟逝、

霜橘新從絕域傳、青史名懸三世績、素花香滿九重天、

君歸暇日尋祠廟、爲我頌歌楚頌篇、

賦得田道間守祠、送池口子繼還但州、

老去勝遊頻入夢、送君空望赤城標、

中秋前一夕、草堂集、琴山翁不至、有詩見寄、云病

不能赴、次其韻以酬之、

樂哉無適不相同、俱是七旬餘歲翁、何用傷悲嘆老大、

唯應遊戲似兒童、彈琴夜靜西山月、垂釣涼多北渚風、

聞說芙蓉開滿沼、名園豈獨桂花叢、

琴先生惠示樂哉篇、次韻奉酬、

今茲之祥、予將赴東都、于時李先生臥病、予訪

其宅、而告別、先生扶起、而疲勞甚、予亦多病、

而爲此役也、殆有永訣之情、暮秋幸就歸途、先

生亦得病癒、因賦一律、奉寄懷、 島嘉

洗馬橋邊柳外家、殷懃告別駐征車、我衰已乏生歸

策、君病猶看離恨加、再會期程今日事、罄歡應醉小

春花、深慚未卜湖山宅、奔走風塵鬢作華、

來詩

攝大奉行島田君、自江都歸、以詩見寄、次韻奉答、

春風告別故人家、秋色歸來東道車、扶杖自憐衰病起、

賜衣頻見寵光加、飽瞻大嶽天邊雪、肯問踈籬笆後花、

盛世恩深須許國'休嗟跋涉鬢爲華、

江上先聞白雁聲、身老登高無勝具、家貧謝客負交情、

唯餘詩社諸賢在、濁酒相邀尋舊盟、

肥後文獻叢書第二卷

至日與諸子過蒲葵園、分韻得灰、四年携梅

朝瞻雲物擁登臺、晚向園亭聯步來、永夜偏宜耿桂、

微陽況復動蘆灰、題詩共剪西窓燭、帶雪新携南苑梅、

餘興何須剡溪棹´板橋霜白醉歌回、願命家僮刺舟來迎‟而

侯之,不至、七八故云、

嚮余請馬彥章節飮、旣而至日會蒲葵園、彥章飮

雄矣、翌日有詩見示、謝其過云、因戲賦此却寄、

遺惠當年及故人、裁縫今日著來新、奇温忽灑追懷泵、

細皺偏宜老病身、深愧不孤心漫切、難酬猶父誼相親、

薜蘿未遂還山志、初服居然一隱淪、

和子成先考有所遺命、惠余紙衣一端、余受藏之、

盖七年、今也衰老、畏寒尤西、乃裁而服之、因書

感懷以寄子成、但意長辭短、其所不盡者、子成必

逆而亮之、

征鞍又指浪華津、道入山陽雨雪新、奕世家聲祇役地、

當年社會結盟人、不唯子羽能脩命、兼待冉求使足民、

到日早梅花已發´舊都應勝故鄉春、

三秋將半雨晴時、置酒先歌窈窕詩、白首交怡星自聚

浮雲變態月難期、已看坐客堂滿、偏怪門生籃遲、

伏枕縱然誇病色、寧無玄度更相思、

送萱野君再赴浪華立*此行進秩、預謀藩計、

一世爲華公館留

五四六

紫溟先生遺和卷之三

諸賢

重陽諸子將過川莊、予乃和白嶼翁舒嘯亭邀客韻

熊府城頭夜拆初、主人、

人間更有班姫怨、露冷風凄奈夜何、

七夕戲詠織女、依琴山先生南直方集、次韵、

重陽何意負幽期、風日凄凉興可知、白雁帶霜從盛會枉容漁釣叟、猶能力疾棹扁舟、

九日川莊集、石授讀不至、次岩君見寄韻、予幗倒瀰盈凉動素河流、長橋挂月窺烏鵲、空檻臨風望女牛、

和之以答、

花開香逆風、

立秋寄白嶼先生並引、聞將以七夕、會諸賢於其園

因有此寄,

佛國師見寄、次其韻、

'故詩中及之已有諸賢來送酒、無由滿酌向君酬、

龍山落帽幾人遊、獨懶登高强上樓、黃菊籬邊清露降、

池授讀不至、見寄詩、次韻答之、

^酬、

靑霞坪下碧川流、此筵只插茱萸熟、何處還棼桂樹幽、

衡宇臨川微逕仄、精藍近海大潮通、献珠龍女浯波上、

蕩漿漁人碧霧中、緇素由來雖異趣、逍遙何處不和衷、

回看金嶺山頭月、珙樹况復携來樽酒美、行杯月下瀉金波、騎行戒酒,且惠南

川觀居偶成

茅屋何妨與市隣、清川一帶滌紅塵、午竄催懶眠書案、

晚檻乘凉下釣綸、蕩漾浮萍隨浴鳥、參差垂柳隔行人、

歸休養老多閑適、笑道明時一隱淪、

今朝爽氣入新秋、先想名園七夕遊、清淺晴來銀漢色、

北塞、

黃花蒻露、東籬、投來詞翰儔應寡、老去懷襟誰共披、

他夜若看川上月、1 駄橋外最相宜、

蔚山街上駐巾車、香醪自勝宜城酒、

玉膾應同丙穴魚、元識阿戎談更好'何妨叔夜懶疎、

風流況有群賢集、四座詩成錦不如、

邀之城居、避寒也、

川頭白屋畏寒多、城裏相邀詞客過、厨冷更無鱸可膾、

門閑只有雀堪羅、一枝照夜南天燭、四坐生春郢國歌、

乞巧樓前望絳河、天孫今夕此中過、佳期縱是經年濶、

靈匹由來問世多、久別錦機聲札々、相逢紅粉色娥々、

官暇逢迎白水陰、何須海岸更簪、清風一曲誰家笛、

明月三更高士琴、聞說連牀眠共熟、應緑數斛醉方深、

歳星相照群星聚、大史寧知屬陸沈、

前簡天近重陽雨始晴、村園風物正凄清、籬邊已見黃花色、

餘、善左衛門等、大治具宴盛定、及其徒于城、獻|幸有前溪可乘興
、扁舟雲夜好相期、

居焉、善左衛門等事之甚勤、盛定信愛之、居旬 正逢黃菊滿疎籬˵ 投
詩古調盟無恙˴伏枕秋懷老共知, 時城中無兵、善左衛門等、佯以城降
、盛定便入歸休一自得三宜、白日柴扉寂不披、聊擬濁醪供小酌、

襲而圍之、

之

九日招池、

花岡、

一臥沈綿日月四極山西葦肥山月移、

、

豐、

別府海門口、原有老松、蟠屈可愛、一日爲風

所拔、安部貞保者、更裁一株、今已十餘年、髣髴

舊觀云、近者貞保與諸緇素、書寫法華經、一字

一石、瘞諸其下、且託能仁寺主、請吾黨題詩因

有此作、

重此莊、彥禮在江都大素近、

酬之間、善左衛門手斬盛定、城兵奮起、盡殺賊

如問陶甄手、草莽之間或可求、室

帶徒、城乃復矣、有吉君今爲戍將、所居即其墟也、

題海門孤松

癘堪乘玉井舟、寶貝日南成錦麗、神龜洛水負交遊、

廟堂過釣耕園懷舊借年與伊大素送赤彥禮、遇雨宿

林莊池舘重裴徊、聽鳥觀魚總自哀、夜雨留連會剪燭、

秋風離別暫傳杯、白雲渺々人新逝、芳草萋々客未回、

咫尺山河千里邈、沾衣不待邃聲催九日叢桂園集、命赴之後至、賦此謝之、

歲々山園九日期、今年莫怪病夫遲、舟洄招隱吟來晚、

帽落登高賦罷時、碧桂經霜寧改色、黃花蔓露轉多姿、

殘樽更就東籬酚、歸棹須乘夕北懷古、爲有吉君賦薩海犬牙中、葦北雲煙驛道通´猶憶群兇當日聚、

正逢屯戍暫時空、壺漿忽設迎師策、杯酒翻收斬將功、

清世疆埸無一事、花岡城裏睡春風城在葦北佐敷鄉、朝鮮之役、主將加藤大和

守重次、從加藤侯、使部下坂井善左衛門等居

守、薩人梅北盛定率賊徒七百餘人、寶膩泉、流膏元自海門邊、蓮華法藏新成處、

松樹靈根再殖年、龍女珠擎明月出、空王莽擁瑞雲

*寶胍別府溫泉

何時一洗塵軀去、閑聽清風正颯然、

二月二十八日輿病、赴川上別園、

移、今朝强起省園籬、却嫌蘭棹穿花急、

還愛籃輿聽鳥遲、雪裡早梅皆結子、雨前衰柳盡垂絲、

病來須斷杯中物、歸醉無由擬習邀岩授讀、有詩見寄云、臥病不至、次韻酬

口薦西方阿母觴、花點斑衣春夏暖、風搖錦帨日偏長、

磨墨峯邊研水頭、澄泥誰學卷荷浮、含風欲動金莖露、

佳氣氤氳滿畫堂、潘與到處有輝光、地疑南嶽夫人宅、

伊山人澄泥荷葉

巷家、乞詩、因賦贈、

氤氳且醉春筵酒、何處蟠桃不可求、

河添氏太孺人令歲七十、其女婿安松長觴于南岳 官跡寧妨物外遊、乘月素嘅尋紫府、摩天黃鶴指高樓、

坐來山岳落前潭、美人爭致琅玕實、上客何論璹簪、

不是陳荀關象緯、誰知齊魯在西南、

聞說雄藩壓九州、口宗瀛海本環流、仙才不厭人間住、

嘅府兒玉翁七十壽詞

客摘來堪悅懌、何妨筑紫是天涯、

高亭雨後擁炟嵐、千里交遊此駐驂、望斷海雲連國、

島原田得中、松懿卿、及吾黨諸子、會于夕陽亭、分

韻得覃、

'雨後春沙日正遲、嫩芽新吐滿園籬´班生嘆罷綴投處、

和田生和馬彥章詠筆頭來詩、用筑紫語、方普通

甲辰仲夏、豐城小宅生、天草中野生、崎陽德見生、

當年躍馬人何在、營壘依稀荒草間、

也´因效其體、駐

苦熱城居萬事慵、登亭忽似脫樊籠、秋風欲度天邊雁、

憐爾悽々游子顏、崎嶇更向信中、春雲不度蠶叢路、

送人之信州

雷雨猶行海上龍、遶檻千家催橘柚、當窓一水落芙蓉、

把酒何須愁暝色、氷輪早已出蘇峯、

世上漫裁平子賦、誰能歸去結幽隣、

初秋納遠亭得冬韻

寂寞龍山高會罷、西風吹帽獨徘徊、

久知田野趣眞、每望農家心自覩、麥秀漸々藏帷雉、

望田家

登高聊酌菊花杯、醉裡愁襟髒不開、遠郭寒聲砧忽動、

九日登龍山

深知栗里多行樂、那問廬山去路長、

當筵且奏將雛曲、已見翩々弄彩章、

安得眞鄉即醉鄉、散步林中時倚竹、逃禪石上坐焚香、

棗垂纍々引行人、公堂無復稱觥日、帝力何知擊壤身、

曉月高懸雞籠山、豈憚靑天懸蜀棧、請看清世廢秦關、

大江秋影雁初來、一官久恨滄洲遠、萬事何禁白髮催、

赤石吟成未閣時欲向水莖岡上種、應從籌筆驛邊移、

微雨娟々帶露垂、猶憶武昌攀折日、寧忘彭澤隱棲時、|熊府城南白水傍、故人移興此相將、不緑淨毗連詩社、

去歲堂前插柳枝、今年春色掛金絲、輕風嫋々舍炯動、

安公雍邀飲隣寺

、

萊園花樹

起的3

佳節蕭條日欲斜歸省薩州、

名園續氏家園賞花、與諸子同賦、得飛字

九日赤彥何處得幽期、郭外名園即習池、花滿錦川春色麗、

鶯啼金嶺夕陽遲´踈狂久愧稱縫掖、酩酊何妨倒接蘺、

記取芳郊歸馬路、重遊猶及浴沂時、

、

城南首夏火雲升´忽喜同人夕陽夏日玄韻

澥上人見過分字

重聽天樂此追隨、

齋心久讀古苔篇、一夕神遊逐衆仙、星佩纔裁朝紫府、

飈輪忽擧度瑤天、行雲不礙三满月、環海唯看九點、

無奈赤城霞色曙、塵軀難遇再升年、

花落四月漫、

近來詩客多疎濶″嘆息唏鶯呼友心、

韻

花江城春盡百花殘、風雨尋 五四二

花

同袍雨中春盡有感

曾是同僚契、離席更深語轉眞、

肥俊义獻叢書第二卷

人間踪跡如飄絮、不待十圍已自悲、

氣氤氳晝欲陰、興來何處得招尋、巾車不厭龍山遠、

漁艇堪乘錦水深、一歳風光春易盡、百年人事老將侵、

十一日遊峯雲院分城中懶賦詩´雙林報道囀黃鸝、流年又過龍華會、

暇日初尋寶月師´宴坐綠陰緣滿處、吟行朱景欲沈時、

已許賞心携斗酒、亭集得支花滿靄餘暉°花下逍遙未擬歸、勸醉淸樽仍囍酒、

携來狂士已春衣、誤疑夢後行雲色、還恐歌中作雪飛、

元自大夫封植地、年々此會豈相違、豚融z余嘗隱蘇山、草堂前有柳樹、

插柳新滋有感 客刊東武、故五六及艺、

蕭々晝自寒、鏡裏鬓毛看欲改、

樽丽懷抱轉難寬、生逢淸世猶多病、夢繞滄洲未罷官、

孤艇十年垂釣處、白鷗無伻水談玄失醻蒸、法味已同金掌露、

禪心還似玉壺水、蝸廬纔有靑山色、烏凡須迎皎月憑、

明日天涯飛錫去、何人此地更傳燈禮過訪、席上有詩、賦此答之、時彥禮將

´忽歡詞客到貧家、樽中幸有賢人酒、

籬下纔開處士花、已覺交遊心共醉、何嗟器旅鬓爲華、

縱隨秋燕歸南海、須逐春鴻向北涯五四】

紫溟先生遺稿卷之三

穆弼的

砂屈

出世

崑山之傍以玉抵烏鵲出

探龍幾度冠詞場、明時豈有投沙屈、善價誰爲韞藏、

馬彥章席上次其韻以贈別

華肯遊能坐印堂、羅列琅凾瑞汎揚、抵鵲由來憐閬苑、

他時將寄雙魚字、莫學吳門變姓名、

人生皓首轉蹉跎、家貧常恨交遊少、花發頻愁風多、

唯有知音挑戶入、燈前呼酒一酣歌、

曾入招提勞送迎、談玄共豁世中情、客居歲晚青蓮宇、

因賦贈別、

往者中川孝華、邂逅于本妙寺、今將還赤石、乞詩、

柳塘飛絮委江波、此日風光奈暮何、時序青春終荏苒、

三月盡、安公雍見訪、喜而賦、

正值雲霄献履辰、竹葉杯濃寧待鹍、梅花香動已生春

從來補袞非吾事、行樂偏貪一線新、

淹留蒲酒休辭醉、歸路天晴擧晚霞、

熊府城東壺水濱、高亭瀟灑絕囂塵、相携雨雪同車客、

至日亭集

莫嫌待月猶留醉、城郭炎蒸夜更新

五日諸君見過

園亭瀟洒錦江濱´岸幘相携訪隱淪、唯有琴書消白日故云

更待版輿行樂處、重陪遲日醉春蘭、

九重山下一川清、卜翩々靑鳥五雲端、新華筵對菜盤、斷織曽徵鄒孟學、

寄題臨川亭

裁斑自舞老萊歡、金絲柳色風初暖、玉樹梅花雪不寒、

築臨川好濯纓、龍出深潭雲忽暗、

烏啼遙嶺月還明、蘩蘋秋冷靈均廟、桃李春荒飛將營、

不但高人能樂志、新詩更見謝公情、精岡城侯題

竹林亭得眞韻

三日將遊叢桂園、遇雨不果、過樂々窩、

細雨何妨命駕來、山園西望路崔嵬、窩成樂々堪容膝、

春逼凞々豈上臺、垂柳時侵頭上帽、飛花忽落掌中杯、

遙聞蘭思彈琴處、流水洋々遶席回、

五日笙歌滿萬家、衡門何幸枉巾車、娟々綠竹風前色、

灼々紅榴雨裏花、鄴下文章誇抱玉、湘流詞賦吊懷沙、

白嶼先生病間閲其所蓄珠玉、有詩見示、賦此酬之、

、

更無車馬惹紅塵、脩竹林間中聖客、清風窓下上皇人、

吉住生歸里天長赤石城、把袂金峯殘月落、揚帆紫海早潮生、

老大看君能益壯、連城早晩發輝光、 鹽鐵誨（擐紅的樂焄融|遊子將行會故人、明燈綠酒遠紅塵、共言歳月驚時好、

休厭關山客路新、名嶽芙蓉應有待、武昌楊柳相親、

日落蘇峯不可攀、尋君澗道榜潺湲、林連行客回車阪、

門對仙人射的山、鶴影參差明月下、聲縹緲彩雲間、

宿坂梨之時

【蘇遊

爲贈靑松帶雪枝、歳寒離緖亂如絲、老來湖海甘多病、

歸去關山阻所思、唯待雙魚書裏語、何堪孤鶴曲中悲、

柳川城上如相憶、只有今宵片月隨、

樽前忽見一枝梅、遙夜高亭客未回、祇待吹灰仙律動、

還疑步月美人來、淸香乍逐行杯轉、疏影斜隨秉燭開、

况復梁王園不遠、凌風何心昔時臺、

失 題

白嶼翁近得異夢、詩以紀之、辱蒙惠示、因賦奉寄、

北窓高臥對清風、枕簟凉生夢寐中、棺是泣官占自吉、

人曾化蝶樂相同、益州已協三刀兆〽松樹眞爲十八公、

忽覺遊仙歌一曲、流霞染得醉顏紅、

籃與衝雨出城頭、欲逐諸賢作勝遊、橋度彩虹懸斷岸、

圖成黃鶴舞高樓、青山乍霽殘雲散、白水初明積霧收、

更有泉聲堪避暑、飲同河朔亦風流、

初明樓再成宴集兼約再遊

吳鈎色冷曉天霜、蒲萄已逐仙槎至、薏苡終從銅柱將、

况復榮芬博奕葉、正如家世主恩長、

肥後文獻叢書第二卷

萬吉宅客初春辛家宴、壽太孺人八十、

昨夜神遊戲九垓、清風入馭姿徘徊、凌雲影粲金鵝蓋、

邀月歌嬌玉女臺、欲向崑崙尋羽客、先將沆瀣勸瑤杯

一聲何處天雞唱、露氣凄凉夢忽回、

乾坤無處不從容、何必休糧住絕峯、紫府丹臺名已在、

霓旌絳節夢相逢、飛霜夜搗雲中兎、奔日晨鞭火裡龍、

莫怪妖邪堪一斷、摩挲三尺古芙蓉、

曾期海上化黃金、誤入塵寰歲月深、匣裡長藏飛電劍、

牀頭時撫落霞琴、遊魚有樂誰能識、飛鳥無蹤獨自尋、

手把瑤華思舊侶、雲中何處寄遐心、

病中雜詩

平安城裡厭繁華、萬里間關公子車、冠益中朝曾賜族、

琴書東道欲移家、峯頭晴雪麑斑色、橋畔春風燕子花、

縱是烟蘿山逕遶、猶能歸夢到天涯、

擬送在中郎東遊

聞說新居更卜幽、靈源不啻舊溪流、草萊纔闢躬耕地、

岩壑深藏獨釣舟、喪我時舒烏儿嘯´爲誰遙憶鳳城遊、

薜羅堪自裁初服、却笑當年季子裘、

聞伊大素移居、賦此寄贈、

香醪莫是流霞釀、醉夢先窺石鏡還、

五四○

階庭不復種芝蘭、自有孤松覆石欄、氣古金膏期寶鼎、

天晴玉露墜仙盤、莫愁彊何違春色、偏愛青葱耐歳寒、

紫溟先生遺稿卷之三

題階前古松

原注二

朝來廬嶽弄雲烟、栗里歸來已暮天、猊坐安禪還淨侶、

鹿車餘興引諸賢、開樃此處憐黃菊、結社何人對白蓮、

與諸子遊蓮政寺、歸路途飲草廬、

乗春辭去雨花壇、秋錫歸來暑未闌、江左名流談已罷、

剡東幽侶唉相看、只言世界津梁倦、應識人間行路難、

縦有芙蓉三伏雪、何如檜栢上方寒、

夏日遊妙心寺、席上探韻賦呈某上人、上人近自江

都歸、

過潜深先生、時先生新致仕、嗣襲禄、

明時何必賦歸田、城北閑居致仕年、嫁娶纔成身自隱、

箕裘已就業猶傳、園幽碧荔供初服、秋老黃花傍醉眠、

吾黨相過殊不遠、扁舟乘興溯壺川"

十畝園開白水頭、夏猃彈罷此閑遊、龍山夜雨雲歸岫、

熊府朝霞日映樓、承澤菁莪才並育、入歌叢桂趣偏幽、

故人舊業蘇門下、回首風煙獨自愁

和安學生雨後行園作

題白躑躅、 是有馬役、上田氏之祖、所載還也、

花開躑躅照林塘、的的當年傍戰場、楚練光搖春夜月

五三九

春帆大海穩風波、更望京華沂澱河、起號西州家

出關東道主應多、琵琶湖上湘靈瑟、杜若洲邊旅服歌

唯恨名園脩禊日、水淸山綠奈君何、

送邮玄齊之江都

祇園山下赴幽期、梵閣蕭齋興賞移、百里雷聲淵默處、

雯峰雪色蔄禪時〝新懸龍象通神跡、驚見珊瑚撑月枝、

誰道音容湖海邈、焚香趺坐對心知、

齊字疑 字訛

庚戌抄冬、遊妙解寺、時大琢尊者得大典禪師八分

淵默字、以扁其齋、有詩卒次其韻典江州人、

蘇山悵望戀初衣、無奈 塵寰意易違、帝子祭壇龍已去、

仙人射的鶴猶飛、雪融澗壑生春水、烟散樓臺靄夕暉,

一自登封藏玉策、長草木有光輝、

其 二

肥陽城外小金峰´勢比南畿秀氣鐘、神女洲長春霧

藏王閣逈暮雲封、祠擅自古分群望、沃野當今屬九農、

猶憶彤弓勞戰伐、山西名將有遺蹤、

春 興

何必棟梁施大廈、幽棲好借一枝安、

爲是鱓心不懷土、天涯却得歲時淹、

西州欲盡紫溟涯、有客淹留興可知、伊昔美魚淮水貢、

辛伯兄弟遊長洲、登虛空峰、因有此寄、

祇園山上月縷々、夜冷黄花多露沾、籃無勞尋惠遠、

秋夕同獨有豪氣縱誇湖海士、吾來寧不盡歡、

夕陽亭與獨有師同賦、時師將減遊、爲賦、得刪韻危樓百尺逼雲端、
高臥蕭條懶倚欄、山作少文圖上趣、

忽聽獅紇一聲振、人間駕說總如鈴、

樓臥寄人

慚吾雙鬢巳星々、舊業依然尚聚螢、憶昔上方親授偈、

于今座右勒爲銘、禪餘散步村非遠、竹下相迎酒始醒、

應緣鴻寶舊傳家、山舍神瀼芳蘭氣、園發南陽黄菊花、

更有陸郎歸献橘、何須仙棗大如瓜、

本莊和氏亭集、晚間佛國禪師見過、有詩次韻以移居勝地就丹砂、開
宴良辰醉紫霞、聞說渥顏長不老、

答

承權欲奏斑衣舞、花下琴歌晚更催

詩、故有此贈、

也翁之伯子元珉遊學吾藩、將歸侍上壽、而乞余

今茲翁自暹日公宮侍宴回、温泉山下、九月某日其誕辰

壽島原吉翁六十

和田翁七十壽詞、應分嗣之需、

霓旌羽節應相遇、何必三山濡足尋、

更喜再遊期不遠、早梅花發此相迎、

况復惠連陪唱和、此行何限謝公詩、

草堂夜集、赤彥禮將還、薩因賦贈

草堂今夕會同盟、杯酒聊餘賞歸家應朱盡、鐘聲猶入曉風聞、

到今黄石穀城祠、鯨邊雨向長洲灑、鵬際雲從小岱垂、

寬離列情、坐客論文鳳翥、

請君盡醉到雞鳴 陳雷豈但稱膠漆、魯衛從來是弟兄、

兒孫共進紫霞杯、壽安山色簾前出、

壺口春流檻外開、何用武陵貪隱趣、定知方朔本仙才、

狂渚長洲探勝深 虛空峯頂更登臨、炎天脩竹風聲合、

白日懸蘿海氣陰、岩上仙人供四膳、丘中隱士撫孤琴、

天草移家、

袈裟相對世情閑、勝地幽亭坐不還、雁塔遙分晴靄外.

熊城半出夕陽間、行藏吾道將浮海、栖隱何年得買山、

祇恐刷翎池上鶴、凌雲一舉逖難攀、

境同沈約詠中看、江流一曲春帆轉、樹色千家暮雨寒、

師過和子成、分得纖字、

袈裟相伴就陶潜、燈前語語秋愈切、方外交情老更添、

紫溟先生遺稿卷之三

風吹片雨過江城、射水斜陽一半明、憶在青山携舊侶、

曾從丹壑弄新晴´殘雲不度仙人掌、清漢還聞王子笙、

1

雨過有憶山中友

衝雪經過物外情、蕭然僧荚捡香城、灑空己訝天花落、

滿地還看寶界平、興動前溪乘一葦、寒凝層塔擢雙莖、

上方霽色無昏黑、應是摩尼照夜明、

雪中過松雲寺晚霽

懶性從來與世違˙比隣歲月往還稀、偶看新竹乘凉至、

憶對寒梅盡醉歸、自嘆詩篇垂老拙、誰言交態逐時非、

門前車馬如流水、此際多君戰勝肥、

重過和子成

新詩何必學應劉、興逸驪珠自可求、擊楫大江明月夜、

拂衣厨嶽白雲秋、人間久厭樊籠役、象外相期汗漫遊、

寸管斯時軀萬物、便令千載見風流、

和子成書至爲詩甚苦因賦贈

積雨寒生五月天、茅堂佳節更蕭然、每逢湘水懷沙日、

轉憶廬山許酒年、夏三衣珠自繫、人間五彩縷空、

當時談笑過橋處、雲霧茫々洗馬川、

五日憶玄海上人借洋勸師

我輩習池還此地、明年重聽白銅、

五三七

雙林八月雨紛々、着屐經過避世氛、己許人間桑落酒、

兼開方外貝多文、露繁深院催黃菊、氣濕香牀坐白雲、

秋雨遊蓮政寺

濯纓何處是滄浪、步出都門興已長、大嶽秋來雲々

平湖日落水茫々、村園野竹迎人淨、野徑寒花向客芳、

更值旗亭新釀熟、抛衣一醉即爲鄉、

秋日間行

青眼相看即竹林、高亭况復此登臨、流年且送前川水、

遲暮猶餘四海心、醉向寒飈歌更徹、歸乘夜雪興應深、

爲期爛熳花開日、一去仙源與汝尋、

歲暮河邊氏枕流亭

澄公曾到紫溟隅、名刹千年入地圖、山鬼雲邊逃法鏡、

江妃月裡獻靈珠´摩寶塔層々麗`架壑丹梯臯々孤

寄語白蓮池上侶、須憐彭澤久迷途、

寄題筑後清水寺

聞君趺坐在雲端、即是千年古法壇、世絺未尋方外去、

神遊曾向夢中看、風傳仙梵霜林曙、月照禪心石澗寒、

欲寄詩篇多遠興、將乘籃接清歡、

寄湛上人

愧我宦遊淹歲月、別來瑤草幾回生、

近春園趣動新題、杯中竹葉兼霞酌、笛裡梅花帶雪携、

客地看春難解顏、崎陽望斷海中山、家書忽報王孫綠、

送齊韻

嫩草爲茵、

德見生歸覲教授門人田途過吾藩

遊常安歲月辛夷寺和僧韻

嘯聲、

萬苗師至、賦贈、得冬韻、

客此盤桓、

采藥將尋靈嶽行寄別、

桂谷隱軒吊桂隱禪師

將陟蘇山、和知、

、

秋栢葉人日旌－作輕

二生

戎王出獵圖

春漲全應好、欲買扁舟混釣徒、

、

壁上天上己識別莊花竹好、巾車來往豈辭勞、

七夕漫成

貪看湖上圖、烟波浩蕩接天隅、四時鷗鳥堪相狎、

千載鴟夷似可呼、憐汝青囊能救世、慚吾白首漫稱儒、

桃花簡辛和概開欲酌遲、巷南回首忽相思、鶯歌幾處能求友、

人日誰家不賦詩、伏櫪蕭條千里志、乘舟浩蕩五湖斯、

歲時漸削風塵跡、門逕唯容二仲公當日雨花壇、細雨霏々花正殘、馴虎徑荒春草合、

降龍池古暮雲寒、何年隻履凌空去、長夜孤燈駐影看、

猶有祇園山色好、能令詞館、喜遙聞塵外蹤、豈圖林下忽相逢、孤雲不繫有無界、

一鉢何分南北宗、曾問杏壇遊魯國、近尋蓮社入廬峯、

清談終日霑甘露、轉覺春天花氣濃佳期夜正凉、銀河萬里爛生光、漫傳行鵲能成駕、

寧識牽牛不服箱、榆影灑來雲表露、桂花吹動月中香、

寄言乞巧城頭侶、別有優游養拙鄉盡天驕獵大荒、翻旌漢主樂長楊、金笳聲轉風吹野

畫戟光寒雪滿塲、一隊射鵰渾白馬、三軍饗士盡黃羊、

氈車更有燕脂女、勅勒歌來勸酪漿子成病不得同遊、云待寥追尋、因賦

、都門回望故人情、勝遊曾約同禽慶、

多病何知似馬卿、白水眞源窺洞府、黃梅積雨臥江城、

莫愁冥跡難相逐、自有雲中長衣是麻、菩提樹下演三車、繫珠白水涵明月

揮麈靑天散瑞花、病渇久思甘露味、靈香初接逆風家、

自慚猶學攢眉客、淨地留連醉紫霞、

歳暮過何夕亭得旅服先裁穉子班、惜問慈圍愎橘去、何如泮水采芹還、|六橋烟水野亭西、舟楫無勞擬剡溪、何夕月華追舊嘗

妙年方有靑雲志、知爾龍鱗重此攀、

紫溟先生遺稿卷之三

城頭車馬正紛々、步出東門野色分、携酒相求黃鳥侶、

郊行日暮、訪井大年、途中口號、

何事高秋獨掩門、吾曹暇日此開槍、應綠麈尾玄啖

莫道蓬頭白雪繁、藝苑一時才並秀、草書千載聖猶存、

好來更有松濤響、七發何妨醉裏論、

草助教席上、和蘭陵先生、却寄、

門對清江白石橋、高人踪跡混漁樵、清歌日暮蓮舟下、

隱趣秋深桂客招、變態浮雲隨俯仰、一枝幽鳥有逍遙、

玄經元是期千歳、肯向傍人作解嘲、

和安公雍閑居韻

連峰夾日自岧、雙樹舍霜更寂寥、齊鼓誤疑鳴石鼓、

塔標眞似挿霞標、普門雲作彌天雨、衝谷流通大海潮、

未得茹芝輕擧術、犬牙隣國亦成遙、

澄公遺跡已千年、澗壑猶存卓錫泉、萬石夾門抽玉筍、

一峯當戶削金蓮、鯨音忽雜花宮雨、雉堞纔分柳府烟、

此地向來稱竺國、蓍閣何必問西天、

寄題筑州清水寺二首

萬樹梅花自作村、朱陳不讓世人婚、及時標實歌相屬、

論族和羹譜共鐏 玉潤由來誇玉骨、氷媒處說氷魂、

上林縱是繁華地、何似山中永託根、

泮宮元傍鎭城高、多士濟々才並豪、詞賦看他揮彩筆、

交情依舊戀緗袍、琴･中歳月無同調、鏡裏風霜有二毛、

遊天籟窟、主人見示春日雜興詩、走筆次其韻、

芳樹逶迤壺水濱、唏鶯處々報良辰、東風忽霽催花雨、

南郭遙尋隱几人、初發芙蓉詩自麗、群飛蝴蝶夢應親、

從來方外無賓主、恣賞林莊一日春、

二陸才名動海方、就中年少飛揚、泮宮舊育菁莪色、

藝苑新推韡蕚光、一世交遊我輩、九州行樂豈他鄉、

懸知別有張華識、紫氣先高北斗傍、

送伊大扑北遊

當年樽酒屢相從、回首高秋思幾重、花滿錦川修禊事、

雲深金嶺躡靈蹤、一時雨雪歌中列、連夜烟霞夢裏逢、

聞說海濱多勝境、欲乘黃鶴問蒼松、

寄田子

共醉園亭花木陰、歸鴻聲盡夜沈々、己無陶分能扶病、

終爲車公損賞心、回首曉烟生白水、惱人殘月落高林、

更期紅甲紺芽地、明日芳蹊載酒、

秦夜集和子亭、井子瑤病不至、因有此寄、

過橋且弄白鷗群、梅花一路迷春月、楊柳千條入暮

上扁舟訪安道、琴聲應得夜深聞、

戲賦此篇、却寄琴翁、以供間中之一笑云,

佐賀府西岡敏卿、遊學余門、甲子初夏、將歸侍其

村、四十年前結大婚、盖謂其相嫁也、因用其韻、

即今停棹沙邊待、兩岸芳菲行可尋、

琴山翁見示謝爾同遊相許深、新詩投罷更瑤音、桂舟已欲先期去、

梅婚篇

以答之、

晩菘未熟秋蓴老、爲課兒童上釣船、

人日邀諸友于川莊、前日井蟠年見寄詩、即日又有「綠水青山別有天、風塵謝去送餘年´憐君宦暇撈壺過

人日川白首交情喜不躁、逢迎樂事在琴書、微韻

披圖各指數州分、東風求侶爲相和、北地催歸雁幾群、

知爾趨庭旬日別、驪歌醉後不愁聞、

大城助教集

聲々縱有催歸息、雲霧應迷鄉路長、

席上得黃字、贈八條子行送別、

新年淑氣己氤氳、栢酒樽前客若雲、負笈俱勞千里至、

按伯姓

、

字作西字似可

時周三春誦罷促歸裝、路指初春草堂飲、同奈孝卿、長大皆肥前人、岡

、

榮城是故鄉、受業己勞千里笈、

承歡欲獻萬年觴、荀家星聚依南極、謝氏蘭滋映北堂、

盛族若非多積善、鳳雛何得更相將、

角井村居白日閑祖栢庵翁七十具慶之宴、因賦送之、兼代壽詞、

、蕭然三畝對千山、應須戲彩同萊子、

何用棄繻入漢關´黃犢廬中開趺坐、驪龍窟裏得珠還、

妙年努力看吾老、七十光陰一瞬間斐、御子相、

士功體脯*岡周禎、西伯翼

省、因禎將歸

莊集得人日群賢訪釣磯、東風氷盡蕩晴暉´春盤供菜靑絲細、

藹酒行杯素蟻微、幽谷鶯移芳樹、長天雁帶斷霞歸、

醉臨流水論交態、此會多年興不違、

豈意豐城聯壁光、梅天夜雨照茅堂、羨君愛日本仍彩、

慚我忘年髮已黃、未及炎蒸可扇枕、休辭信宿醉飛觴、

不堪元是嵇中散、

歸臥初稱陶隱居、燃桂香烟飄枕簟、蘭芳氣滿庭除、

醉來忽棹扁舟去、直到城南一草廬、

白嶼馬君見訪郊居、有詩、次韻酬之、

書、爲令兄問期、且云、先與余同舟而下、因次韻

籃舉還應近午臨、氣早寅正堪試暖、雲輕人日不成陰、

驚我閑中隱儿眠、元是二人金可斷、何妨一室磬空、

夢遊梅溪詩、起句云、梅花溪本在西

三三

紫溟先生遺稿卷之三

席上和桂齋韻

吉梅七八故云

歌聲徒聽繞梁餘´千里神交跡尚涑、紫海揚帆明月滿、

霞擧云々離不

知是靈均餘此品、更令騷侶賦新章、嘟嘟餓糖王來軨々䣜駅

詩見寄、次韻、

海西時諸王每朝朝堂

浪華篠崎向過熊府、不及相見、直赴圻陽、巳丽以風流長託一枝香、
緬懷赤寫會遵渚、恍見明霞忽照堂、

定識君家藏數斗、携來肯伻釣漁徒、

瓊華初發碧川傍、幽賞邀賓勸酒 【封殖猶傳千載色、

星分沃野作丹丘、學仙不用深山隱、按部孽成勝地遊、

肯許故人陪後騎、新詩濁酒與君酬、

把臂相逢林下人、幽亭元自絕風塵、烟蘿不但山中趣、

冬日板徵卿邀

儒臣寵渥老彌優、新賜良田榮白頭、菊覆靈泉同酈縣、

、

田、有詩見示、次韻賀之、

壬戌冬十一月、馬彥章蒙恩命賜菊池郡赤星村之|騏驥應空冀北群、路歷筑山猶菔雪、帆過豐海己祥雲, 、風流互賦習池篇、

侯之臣、家在周防、

送山田遊倅還鄉名薘字恭渼灞城

仕宦久知潘岳拙、秋風况復興相催、

熊府東南中瀨邊、謳歌村里靄人烟、沃土田開千里野、

海天飛雨送凉來、絳河應有奔龍度、緱嶺寧無馭雀回、

廢、因賦此篇、以贈馬訓導、兼屬和者、

淵闕焉、盖以其名不韻也、然二村相匹、不可偏| 村園七夕獨徘徊、欲慰愁情强把杯、野岸殘烟迎月散、

七夕川莊獨的有懷

郡赤星村、爾來君黨倡和、言數及赤星事、而犬

客歲特恩賜馬彥章祿田於益城郡犬淵村、菊池 歸去浪華梅正發、一枝幷寄八行書、

增城嶽秀九重天、蘋繁薦社神憑石、枸杞繇泉犬吠调、

何日別床同酩酊列國中州不分、灞城千里頌聲聞、鳳凰欲下周南化、

小舟新就、將以翌夕汎白河、戲簡琴山翁、

清風滌暑滿江湖、况買扁舟興不孤、餘綺霞堪迎彩筆、

初弦月好映水壺、縱令白水眞人在、其奈靑州從事無、

再遊更有看花豹、秖恐掄才早及君玉蕊先看雪裡春、交到衰年情轉切、宴簫遙夜與新、

羡君長有裁斑樂、遲日重來醉壽辰、

川墅紅梅如花、是菅祠飛梅之種也、輒邀諸友賞

之

赭圻揮翰彩雲舒、衝星己識雙龍劍、題柱先期駟馬車、

將況神湖、遇雨不果、邨訓導有詩、次韻却寄題、

淵村

醉後猶携餘興去、曉風吹入馬蹄輕、

主人初夏集靈壁亭

元自避塵情、白水河邊好濯纓、綠樹重陰舍積翠、「花開刈荒、聞君幽賞日移床、雙懸不但如紅綬、

、

馬月訓導園中旨蘼花開、有詩見贈、次韻酬之、並引

是小草也、其花如組、而相繆戾、故俗名凤摺、或

以爲信夫凤摺者、非也、古者奧州信夫郡、有異

石、天然文理、如鐫刻然、以帛摺之、燎凤繁亂、

殊可賞愛、故縉紳家好以爲服、是所謂信夫反摺

也、非草名也、又或以爲綬草也、而當之旨鷊”亦

未知是非也、今也馬君之詠、兼用二說、盖詩人

之於物、取興而已、不必辨正焉、余和之亦然、

,

侯臣

同隱士冠、

、

、

積馬草堂雨集、訓導見惠笋、云其采地赤星村所貢也、賦此答

謝、

次馬訓導韻、

幽、

、

天、折簡招君要半道、陶杯笑我擬初筵、

門生籃來何晚、恐使主人醉已眠雨梅天黯澹時、狂歌一曲任君知、老來伏櫪思千里、

贏得栖林借一枝、官路莫論腰下組、醉鄉須覆掌中、

扁舟舊侶江湖上、應怪遠遊歸去遲前、次安訓導韻、示安東生幸有纏中酒不空、暮天留客雨濛々´儒珍應繼家聲舊

國賓相歡地勢通、已見凌雲揮键筆、還期破浪駕長風、

·生名守禮、字子和省庵先

柳城元自稱雄鎮、更待朝陽風集桐、甡泠縮,故躇中及之,

草堂集、右田清卿唱催馬樂、躪且云、明日登程歸

鄉´因賦贈之、膳洺括敬遠遊詞客本名流、樂府歌來誰復酬、不有國風傳萬古、

何知王澤遍諸州、春鶯緝柳爲華蓋〝仙鶴啕芝添壽壽、

且學酒觴休竟曲、恐催歸馬動離愁向約舟船載酒遊、南湖浩蕩好銷愁、擬携綵筆題孤嶼、

應釣金鱗滿兩頭、梅雨今朝期忽誤、蘋風何日興相求、

聞君更有盈樽綠、躡屐將驚午夢書社新封圖上看、黃花鎮畔赤星壇、曾開杭秫田皆美、

始識貧幽谷更寬、紫筍貢來供膺饌、彫籠分與勸加餐、

先呼童子收餘籜、清賞將裁黃梅宿雨入新晴、晚餐己有滹沱趣、奇石還傳靈堂名、相戾還應作潑章、陳國風傳知舊俗、奧州聲著挹還芳、

蕭朱老去無心結、笑看人間若々長、

犬紫溟先生遺稿卷之三

H11

老去交疎易隔年、幽期此日接群賢、欲尋綠竹清風處、

有客觀魚論樂事、逍遙誰是姓爲蒙、

蒹葭洲上雁呼風、蒼山不盡連秦寨、白水長流憶禹功、

五德社集、過雨不能赴、簡安訓導、枉過弊廬、再寄

促之、

里通、楊柳橋頭人步月、

茆廬寄在渚田中、爽

况復杏花壇上坐、席珍依舊照緇帷、

衰老故人何以報、久無詞賦擬瑷琚、

主人高興勸金巵、邀客偏憐春晝遲、新賜良田供種秫

誰言方外交稀、寶石投來千里書、原識三危凝露美、

靈芝、

馬彥章宅集田祿、今茲

醉來屈指曾遊侶、地角天涯更幾人、

上巳年々勝會新、漫將華髮則嘉賓、落花飛絮輕風度、

名園置酒此相呼、將作七賢林下圖、茶臼城隅春水漲

薜蘿園集、和大城助敢韻、

三日叢桂園流觴、得十一眞、因次主翁前日見寄|曾識西莊同顧陸、陽崖陰洞碧溪濱、

自煎筐底露芽新、雷聲一夜龍行雨、花氣千峯鳥報春、

林亭瀟洒絕風塵、主客逍遙良人何事不相携、蕙帳秋深良正凄、出岫朝雲窺獨處、

嘯風亭集、宇河陽携新茗、此其別莊所產云、因贈

之

和答琴山子不携吟、戲代其室人、

闗、

秋到處攀、千仭峰巒辣雨外、數家桑柘夕陽間、 小園迎客秫川頭、正值佳期天上秋、凉草引行臨曲岸、

摩天獨鶴玄機發、出岫孤雲素履閑、聖世招賢今一晚風移興上扁舟、乘流欲問支機石、掛月纔看乞巧樓、

右和村井生 生詩曰´離歌唱罷指靑山`叢桂

七夕諸子見過川莊、晚凉泛舟、

日事、蒲輪早晩到紫回棹 金波清影沒、 叢須爲暗香留、

投林暮鳰羨雙栖、豈同紅粉當壚媚´將擬娥眉擧案齊、

三百六十遊別苑、妾身長似太常妻、

烏角巾、相勸甕頭霞醞

啼鳥游魚遲H親、泉石膏肓高一世、古今懷抱惜三春、

彥章客歳賜會開靈 自生芝、閑中日月滄洲趣、醉後風流白詞、

蔚山市上暮烟孤、豈唯求友聽黃鳥、還似遐心繫白駒、

遲日笑談猶未厭、更邀明月倒水壺、

E、此會主客七人、

第二句故云、

謝桂潭師見惠凝露石

還疑五色補天餘、探玄象罔珠先得、生白維摩室更虛、

右和高宮生 生詩曰、神武門前厭世氛、掛冠歸「時明不用梁鴻嘆、賣藥時來入漢關、

黃犢廬存烟靄間、秋色催歸楓葉老、舊園無主菊花、

他日扁舟溯春水、桃花深處再逢君、

一自周顒出北山、丹崖幾歳阻痹攀、黑貂裘風塵下、

異鄉交熟惜離群、肯成雨雪同車好、休勸英靈謝客文、

壑裏、高歌樂聖醉香醪、

十年書劍走氛、此日歸裝指白雲、盛世才踈宜滅跡、

樂志、遙知幽興滿岩扉、

名物外逃、客裡風霜催髮、山中門徑滿蓬蒿、

年4秫供新釀、日々垂竿坐舊礙、應伻高人論

右和黑田生 生詩曰、城頭車馬日塵囂、老去榮

右和良峯生 衛詩曰、薜蘿裁得邃初衣、獨向靑/况復東籬花正發、村々秋社熟新醪、

山避世歸、空谷猿啼山月落、落天崔唳曉霜飛、

枕高、

雲霄矯首羨雄飛、欲追崔駕尋仙嶺、豈比羊裘隱釣磯、

君有奇方堪救世、時緣來樂欵荆扉、

離堂四坐且休囂、聽我當莚唱董逃、明鏡催人白賁、好將薜茘換簪纓、

天涯歳晩賦無衣、寂寞空山獨自歸、風雪銷魂傷遠別、

遶翠微、

右和飯田生 生詩曰、喧々鐘鼓帝王城、五噫歌

舊溪不讓滄浪水、何日君來一濯纓、

右和和子成 子成詩曰、1日新裁薜茘衣、飄然

鴻雁哀鳴月滿城´歸心忽與隱心生、尙平今已過婚嫁、

多幽興、叢桂花開總待君、

西風幾處搗寒衣、使我凄然憶故扉、末照寧無東壁燭、

臥北山雲、荷鋤夕件肥後文獻叢 二卷

蚶、十年愁裏仙遊夢、今日山中豹隱情、高臥縱

能甘素履、幽憂寧不念蒼生、

耕耘侶、采藥朝隨麋鹿群、

盛世猶能邃初志、傍人何用勒移交、遙知隱處

不才應采北山薇、都門月落殘鐘盡´遙嶺天晴獨鶴飛、

他日蓬蒿開徑待、莫愁雲霧晝霏微、

笑指舊柴扉、生逢聖世曾焚草、老向空山獨采

薇、曉帳人口孤雀唳、行宮跡古五雲飛、他時若

問幽栖處、唯有松風梅福何須變姓名、躡屐雲遊周五嶽、焚香露坐接三清、

成別恨生、辭去朝陽鳴鳳侶、擬來梁甫臥龍名、

蘿軒秋老霜華結、蕙帳天寒月色淸、自是丘園甘

終白髮、

朱門轉眼巳黃蒿、豈無塵路乘軒貴、何似雲山伏清溪坐月人蹤遠、古洞看雲琴韻高、羡爾優遊丘

紫溟先生遺稿卷之三

別沔勸君君莫辭、幾年萍水北追隨、關山千里將歸日、

風雨三春欲暮時、授業只愁無久次、到家應自有餘師、

老來轉覺交情切、腹斷重遊未可期、

醉棼楊柳惜斜暉、憐爾游方業就歸、同學幾年依白社、

承歡明日着斑衣、樽前求友鶯猶晦、琴裏離群鶴己飛、

從此德山星自聚、時緣落月憶西肥、

送渡公酢還德山

名園遲日好淹留´桂樹團土洞壑幽、烏几叄差臨水坐、

羽觴宛轉逶花流、出門此地爲陳跡、行路何人問昨遊、

試自松風關外望、金峰山迥暮雲愁、

三日叢桂園餞渡公

故人高調滿平時、長夏何心寄我遲、避暑縱耽河朔飲、

迎風應賦楚臺辭、中原鞭弭元無敵、盛世文章更屬誰、

莫道陽春愁寡和、賞音千載一相知、

白嶼翁常寄佳卷、使余評騭、概無虛日、而今寥濶、 盛八九故

己閲數日、寄此問之、

西崑一鳳無衮

天然五色自分明、宛似芙蓉映水清、不假爲金龍猛術、

仍題補闕女媧名 玄機欲爲談經轉´靈響應綠槲賦生、

誰識高僧衣裡寶、一拳能己抵連城、

因賦、

右和安公雍、公雍詩曰、1 官辭去賦遺榮、憐汝

幽栖問舊盟、離宴共論攀桂意、悲歌已入采薇

五二九

次韻諸子、送人歸隱北山之作、以擬其答、

澎劣無由邀世榮、將尋猿鶴舊時盟知君元自靑器、

送我還成白雪緇、杯酒一宵寬別緒袍十載見交情,

敢論安石東山志、歸臥唯應送此生、

聞說名園春自長、階庭玉樹總芬芳、雪明姑射眞人宅、

霞照瑤池阿母觴、金管千秋傳廣樂、靑囊三世秘奇方、

仙詞應有雙成唱、何問尋常翰墨場

園曰長春、因詩中及之

其孫公魯乞詩於吾、且云、其先爲鎭將 世

壽調母八十 木城"中葉有善笛者、嘗奉勅奏曲、律呂諧調、故

賜令性"而令業醫、所居之山台

邊塞悠々夢不通、搗衣遙夜洞房中、愁情似訴三更月、

哀響難傳萬里風、壯士丹心甘結草、佳人翠鬢任飛蓬、

玉門關外霜應滿、金井梧桐葉己空、

搗衣

鏘然金錢落城隅、羨爾雲遊興不孤、囊裡新詩于氣象、

燈前宴坐即江湖、朱炎一洗蛟龍雨、玄默深探罔象珠

鳴鳳西崑今寐々、代南岱北好相呼、杭州,是夜海布時,云

大盈法海二師見過、時雷雨驟至、得處、

茅廬養老碧川隈、喜見新年氷盡開、自有先生五株柳、

何勞驛使一枝梅、魚緣知樂時々躍、鷗爲忘機日々來、

新歳川觀亭偶成

至日西山探梅、既夜、從者燒野、以覓徑路、戲賦、

探春不覺幾山行、照夜偏疑是火耕、童子燎原何撲滅、

醉人歸路忽分明、灰隨葭管陽先動、光射梅花暖更生、

雲物豈須傅大史、祥烟已自報昇平、

園似若邪溪水涯、丹楓疑是浣春紗、仙杯欲酌流霞色、

漁棹將迷深洞花、只怯曉風聲淅瀝、偏憐夕照影交加、

縱令謝客門常鎖、佳景應延隱士車、

琴山翁見示西園觀楓作、次韻却寄、

村井氏藷郎、與其翁門人、集叢桂園、席上篇什、

輯錄成卷、請余評騭、因題其尾、以示諸郎、

詞場馳逐欲爭先、賦筆縱橫已比肩、今世遊方多鹵莽

君家攻業獨精研、正驚通德門偏盛、應爲高陽里總賢、

品藻慚非鍾記室、謾憑佳宏遠相傳、

憶昨春風鶯始遷´牀邊蟋蟀感流年、琴中綠水聲將泝.

鏡裡清霜色轉鮮、麈榻不緣佳客下、瑤音還自故人傳

貧家酒熟思同酌、莫負烏紗巾上天、

泱々表海風仍大、那問滄浪漁父辭、

肥後文獻叢書第二卷

高瀨邑光淨寺主覺了上人所蓄也、京儒蜷川氏

銘之、曰補天、上人一日袖之而來、乞吾黨題詠、

補天石

群神祠廟 帝都傍、茅土遙分海一方、鞠水池清分郡

邑、襄城野敞築壇場、爭歌黍徐豐年屢、永薦蘋 德

香、自有蒼松千歲古、何須肇祀問星霜

在吾潘菊池郡城野、祭京西松尾七神之一云、平

城天皇大同二年、始祀于此、至今文化二年、實

一千年也、白嶼翁有詩記之余亦效、

松尾祠

歸去家鄉幾日程、披圖指點送君情、扶桑樹轉朝暾影,

豐葦原分前後名、元識中津故國、更看雄鎮擁高城、

即今四海文明化、到處應聞紘誦聲、

丸岡仲堅還中津,

茅堂寂々野川隈、何意相邀此把杯、逐客令嚴書未上,

尋師情切笈空來、燈前纔賦新知樂、紡上愁聽別曲哀、

二子乘舟中夜去、應同興盡子猷回、

中津丸岡仲堅、岡城田能村君彝、至、欲遊余門、

有故遽去、賦以贈別、

忽憶公堂稱萬壽恩波猶灑野人杯、

二元

紫溟先生遺稿卷之三

對彼晴宵月、汲戏春水源、潺湲流粲畹、瀲艷入芳園

十畝餘香滿、三更碎影繁、金光舍潤動、玉蘂委波翻、

蟾兎空勞搗、嫦娥只自奔、何如將上善、夜々灌靈根、

高樓堪望遠、垂柳蔚通衢、求友聽黃鳥、留君繫白駒、

條含春露弱、色入曉煙無、繞指柔應比、同心結豈殊'

人歸霏雨雪、萍泛散江湖、忽送王恭去、蕭4月下孤、

月下灌蘂

誰家對柳樹、栽在綠池邊、纖麗千條色、艷陽三月天、

縈波疑擊絮´哀露欲爲煙、夜月開漁笛、春風繫釣船、

孤鸞臨鏡舞〝雙鯉裹書穿、翠綆吳王井、青絲越女鞋、

同心誰共結連瑣獨空繇、猶勝灞橋上、试々別恨、

賦得楊柳送人

豈但曹溪、元從佛地傳、洗心皆淨界、逐物即迷川、

逝者何須嘆、交情欲奏粒、六時挹上善、同濟喜良緣、

始至雲生岫、將歸雪滿山、眞僧相送出、殘月石橋前、

臨池柳

城上秋光欲盡時、憐君多感寄相思 經霜樹與人生若、

行雨雲兼世態移、短景方將由北陸´寒花無復發東籬、

五二七

園林秋盡起寒聲、積霧茫々晚出楹、猶有菊花堪泛酒、

更無蕉葉可題名、翛然郢雪隨風遠、依舊隋珠抱月繇、

蟋蟀何愁歲其莫、昇平樂事逐時生、

馬彥章九月盡見寄懷、次韻酬之、

遠遊一自到熊城、狂簡相親吾黨情、春服聊酬風詠志、

夏紇忽奏別離聲、非關千里歸心切、已是三年講業成、

聞說崎陽殊域近、幾人浮海慕休明、

送西原長信還長崎

消息相傳會面遲、盈々一水尚天涯、三千遠道榮歸日、

七十殘生養疾時、北渚采芳聊徙倚、西園飛盖追隨、

偷閒何夕乘明月、洗馬橋邊命楫師、

和子成從世子駕、自江都歸、今已浹旬、未得

相見、作此爲寄、

七言律

紫溟先生遺稿卷之三

美人千里至、一見外形體、染翰春雲麗、登亭佈物佳、

引流魚發々、求侶鳥喈々、竹色連淸渚、桃花點翠崖、

共歡名勝會、兼感古今懷、沂水狂安在、山陰跡已乖、

襟期同此宴、禊事屬吾儕、但恐關河隔、明年不得偕、

何年開梵字、永夜見禪釭、葡萄花皆六、沙羅樹是雙、

稻畦堪製帔、苔石自成矼、觀性玄猿靜、冥心白犢寮、

霧中香岫列、風裡玉箏蹤、洗鉢芙蓉水、翻經荔蘿窓、

再遊撈舊侶、群哏入新腔、師自彌天釋、客同居士鹿、

三衣將過海、一葦不須般、罔象驚金策ˊ蚊龍擁寶憧、

定知空樂響、寧厭土人咳、兩別徒爲恨、雲遊詎得控、

講筵秋葉積、歸路暮鐘撞、笑指前峯月、琅々映碧江、

三月夕陽亭集、贈米府樺世儀、得佳韻、

官閒安薄劣、性僻好攀躋、到處皆愚谷、何山有惡溪、

斷巖障日秀ˊ遙嶺與天齊、雪裡微々徑、雲間裊々梯、

碑餘秦代篆、封古漢時泥、暗穴藏玄豹´陽埴舞碧�

身如乘香莽*氣欲吐虹霓、夜座群星逼″朝看萬象低、

增氷連塞北、弱水遶關西、瀛海齊州小、風雷大麓迷、

曠然遺物慮、飄爾叩幽棲、隱士歌芝婕、王孫賦草萋

漿令我醉、石髓爲誰携、舉世爭名利、營々病夏畦、

玄宅寺席上、次伊太扑

肥後文獻叢書第二卷

攀處低枝樹、行時逐步蓮、清音連寶鐸、幻影浴金仙、

纜若臺邊水、冬深更澹然、來聽松下梵、座對鏡中天、

枉渚寒光白、層巖古色玄、龍蟠能護法、烏狎似參禪、

大道無區域、眞借到處家、江都飛錫遠、張海渡杯眙、

明月衣中寶、香蓮火裡花、殊瀾歸一派、同宿演三車、

萬戶肥藩府、雙林白水崖、化城非累塊、香飯異蒸

凴覽口空界、交歡寵國華、梵詞客集、天鼓羽人撾

満壁題玄藻、何篇被碧紗、廻心想祇苑、抱病臥毗耶、

荒跡口終幻、浮生亦有涯、多年混縫掖、何日禮袈裟、

惆悵春芳歇´蹉跎暮景斜、閑窓對古木、陳磬落高霞

丱里人何在、江陵歲已遐、微言誰復緣、絕學謾相誇

栩々身爲蝶、蒙々目待蝦、汎無難捨筏、迷似有棲苴、

看爾敦風尚、令吾解怨嗟、猶期懸慧日、照世遍恒沙、

冬日臨流庵次辛伯韻

尾州萬田禪師、江府獨有上人、但有蓮政寺、五

諸子往會、余疾不能赴、賦此呈二師、

春徂無舞蝶、日永有鳴禽、聲應朱明律、身藏紫翠林

遠近相呼處、頡頏求侶心、杜鵑凝血淚、燕子刷紅襟、

咸若豈唯古´窺巢復在今、正知廊廟念´應為勞端深

但有二字疑俱在訛五疑吾訛

園林變夏禽 館

重陽今日宴、况復會高陽、黃菊引村徑、白雲到洞房、

杯添綴英露´帽落滿頭霜,濟勝具雖罷、登高情豈忘、

主人誇偃蹇、君亦阻行觴、餘酣湫溪水、微月透疎篁、

回顧府城迴、中心忽欲傷,

不至、有詩見寄、次韻酬之、

ﺑﺮ

多謝名園裡、相迎倒玉缸、曾遊花粲々、再度水淙4、

米老分奇石、吳淞剪半江、琴中朱鯉躍〝鏡裏紫鴛雙、

髣髴看斑竹、依稀想盡艘、況復明月滿、終夕倚秋、

九日叢桂園集、主人有故使郎代邀、徵卿亦病

鄰々楊水石、可以補皇天、忽有良工琢、能供虛室眠、

玲瓏明月下、的瀅白雲前、湘簟氷相映、齊純雪並懸、

歌同扣角士、臥異曲肱賢、偶爾將清夢、相逢姑射仙、

重過續子園亭、假山水新成、因賦分韻、

世人聞道笑、之子獨超然、己謝塵中累、將朝洞裏天、

尋師浮碧海、卜宅近丹泉、玉管吹明月、銖衣拂紫煙、

相逢論太素、無語不凝玄、定識多靈籙、何時向我傳、

白石枕

贈學仙者

人當三伏熱、目送片雲還、何日塵埃外、相逢一解顏、

五言排律

五二五

旅群過海、故侶憶衝陽、水濶難投宿、風多易斷行、

天勞去就、何地免炎凉、始識爲形役、應緣戀稻

遊 山

鴈來秋已冷、人寂夜方長、影度南樓月、聲哀北

青山行不盡、白社在何邊、欲聽雲間磬、唯聞石上泉、

煙斷焚香座〝塵凝講法筵、栖鴿銜人起、降龍抱影眠、

入城時乞食、飛錫或隨緣、惆悵尋歸路、東林片月、

月夜聽

築亭成隱趣、城外即林丘、戶牖煙霞發、階庭石水幽、

月窮蒼野濶´心遠紫溟流、絕嶠疑鰲負、長橋似鵲浮、

揮毫文苑會、解帶醉鄉遊、琴響聽松夕、杯香泛菊秋、

異鄉思勝射、何日命輕舟、予亦忘言者、相逢或可酬、

尋山僧不遇

市中尋大隱、壺口泝長川、一室琴書靜、萬家歌吹連、

蘋風纔動日、梅雨乍晴天、湘簟氷新展、齊紈雪正圓、

瑤杯行重碧、彫俎割肥鮮、移席邀樓月、憑欄眺嶽煙、

嘯思蘇嶺逸´狂慕竹林賢、附隘開空豁、方知縮地仙、

寄題忘言亭

過飲佐藤生、至夜登其遠青樓、白嶼翁有排律、和

寺寺空山下、猶餘卓鍔泉、盈池開法鏡、鳴玉繞經筵、

三界無安外、一齋居易前、更涵明月影、夜々照栖禪、

承家爲世祿、賜服更恩榮、門下青衿滿、階前玉樹生、

開樽秋色爽、移席月華、何用三鱣象、新詩總鳳鳴、

寄題手洗山居易齊

改歳天回斗、幽期日得人、山寒猶白雪、城暖已靑春、

興爲梅花逸、詩兼草色新、聽鶯求友侶、時渡碶川津、

石授讀集、主人近有章服之賜、因以賦之、示其

門生、

初春、辛助教積善堂夜宴、歸路口號、寄主人、

明燈張夜宴、獻歳發春初、主是同心契、家仍積善餘、

東風吹雨雪、玉樹照階除、休道雞聲早、華凝錨客車、

年々人日、會余川莊、今歳以避峭寒、邀飮諸賢于

城居、次郇井訓導韻、

寒輕陽欲動、晷短歳應旋、忽領賢人酒、聊開詞客筵、

靑山歸夢裡、白髮醉歌前、更有尋梅約、須從餘興牽、

聞道園亭、幽期好罄歡、乘流初到此、看竹更憑欄、

秋氣方淸爽、暮煙轉淼漫、主人情不淺、何厭夜將蘭、

享和癸亥、冬十月之望、集草堂、安公雍擁濁酒、

有詩、次韻、

肥後文獻叢書第二卷

常時少下山、坐夏更應閑、瀑水淸凉界、禪室紫翠間、

汲水欲澆花、花枝水底斜、甃圓疑照鏡、波動似蒸霞、

恐使金碎、須將翠幕遮、嬋娟長可保、何必問丹砂、

寄生夏

「春日曾分手、相思雨地情、何知今夜雪、口□□□□、

獨步名應起、三餘業已成、明時眞可樂、列國屢逢迎、

井底花影

白河良夜月、赤壁再遊心、歲次還壬戌、人生自古今、

雄文誰復繼、長嘯或遺音、猶有沙頭鶴、依稀夢可尋、

席上贈安東子和得庚韻

蕭條秋雨夕、忽枉到頭春、已勝桑郎釀、何須栗里巾、

黃花香共酌、素蟻色相親、但縱孤觴醉、豈供四坐賓、

壬戌十月望、再泛祓川、

君問龍山趣、龍山我舊過、楓林今不見、野渡昔如何、

原注楚魂一作追懷後一作上或下

只覺滄桑變、空傳錦水歌、楚魂千載後、應爲勝情多、

謝安公雍以詩惠新醅

鴉鳴占法、相傳云、自東方朔、第六句故云、

鶴舞寧無賦、鴉鳴自有經、吉凶何足卜、比興總堪聽、

天問思湖累、陸沈笑歲星、春風催載酒、醉眼爲誰靑、

和答馬彥章秋日思龍山見寄之作

紫溟先生遺稿卷之二

樂奏何朝曲、風陳幾國詩、知君能記得、屈指待歸期、

孟夏山中君集 主人供新麥

擬見殊方客、長崎入貢時、繫船春色靜、開館夕陽遲、

偶逢新雨歇、來訪古溪堂、把酒塞猶薄、題詩夜正長、

龍山雲黯澹、兎谷月蒼茫、欲問楓林色、鐘聲報曉霜、

島田公幹赴崎陽會唐館

村舍新霜滿、留連日己多、忽乗漁艇去、斜傍梵園過、

初日明紅樹、清川疊錦波、上方難可到、回首望煙蘿、

宿安公雍宅、明日將遊龍山觀楓、

孤亭臨水渚、六月絕炎蒸、望鶴歸舟去、觀魚過客凭、

蘋風生綺席、荷氣拂朱繩、極浦蒼茫暮、漁家幾點燈、

歸自川莊、過護國山下、奉寄曇瑜尊者、

偷閑隨酒伴´日出城遊、爲愛沈冥趣、來尋莽蒼樓、

三飧過草野、一醉臥糟丘、似待餘酣漱、冷々澗水流、

有獨

屈大簡集得灰 字

何知城市近、一水隔塵埃、獨笑耽書籍、相迎勸酒杯、

晚涼生翠竹、殘雨送黃梅、爲是遺軒冕、沙鷗日日來、

宴林氏水亭、同押繩字、

壺腹供獨酌、詞賦好誰酬、祇恐新晴日、芳菲不可求、

飲莽蒼樓

五三

誰知三市側、幽趣此中分、封殖千年樹、流風萬石君、

光臨當日寵、盛事至今聞、修竹如淇澳、猗々帶瑞氛、

次陳生韻

是陳氏亭也、元祿中先君嘗將枉駕、有故不至、

使近臣代莅焉、主人謂、猶親臨也、自此以來、

庭内卉石不移易、旦夕灑掃、粲如當日、盖甘棠

之意也、遵守相承、於今四世矣、家風可知、

不復爲醴耻、隔江即酒家、凉桦生竹樹、芳氣有荷花、

彩筆元垂露、駝顏皂帶霞、忽思遊子口、幾歳客天涯、

過伴松亭、得文韻、

唯酒須無量、吾生亦有涯、更憐村落僻、不引世塵嘩、

雨滴梧桐樹、風搖点灰花、小舟堪載醉、歸路莫愁賒、

同前、次南生、懷辛伯、

唐韓洲詩云寅艮咀給

秋夜川觀亭次志方生韻

然可¨

*樂五言˙如初發

梅雨雲纔起、麥秋天正晴、嘗新今日興、話舊久要情、

亭靜紅塵遠、林高綠竹淸、何須山吐月、處々杜鵑

詠盆荷、奉寄滄洲沼先生、生今玆九十鈕藏、

前日淸之分贈荀種、

盆荷宜首夏、況復地仙家、己有田々葉、寧無灼々花、

詩迎初發麗、佩受早凉斜、何必金莖露、氤氳生絳霞、

一時浮白侶、遲日踏靑時、廣莫元開野、高陽豈假池、

交皆方外得、詩總醉除爲、林表妍々月、轉歸鳥遲、

寄書城裏客、何日踏芳蹊、高柳皆飛絮、殘花半作泥、

須裁暮春服、坐候曉更鷄、村舍香醪熟、淸樽不必携、

春遊雙甕酒、不讓玉爲缸、夜臥三間屋、何須綺作、

行迷芳草徑、醉漱白蘋江、心跡有無外、超然憶老龐、

其 十

借問田園老、閑居幾十春、種瓜期子母、采藥辨君臣、

唯說名山事、不知當世人、郊行一相見、頓欲結幽隣、

其 九

莫論身外事、須盡掌中杯、曠野無今古、浮生有去來、

臨流春祓禊、待月晩徘徊、雙鬢看將白、斯遊更幾回、

其

夜雨生行葦、春風長野苹、牛羊自適、麋鹿亦群行、

逢此陽和候、縱吾幽討情、巾車歸去晩、霧裏一星明、

其 七

才劣非謀野、身間可灌園、春來逢美日、時出眺芳原、

隔柳流鶯語、穿花乳燕翻、村翁酒應熟、回步扣柴門、

其六

肥後文獻叢書第二卷

東風吹棚雨、搖颺滿高樓、徒有看花約、無由出郭遊、

再扣元亮門、依然五楊柳、松籟灑夜紘、葛巾漉春酒、

不看明月移、何覺清談久、扶醉尋歸路、曉雲滿谷口、

春雨

偶伴看花侶、來尋賣酒壚、階前饒水石、市上縮江湖、

遠近峯形巧”陰晴樹影殊、鴟夷如可遇、試向此中呼、

重過堤氏松籟園、得酒字、

之子弄柔翰、才名三十年、忽辭人境去、閑傍鹿塲眠、

鑽燧焼寒草、操瓢汲夜泉、偶來憐逸趣、頓欲賦歸田、

酒家假山水

微々松籟裏、何處磬聲聞、入谷人蹤絕、過橋佛界分、

池驕花照水、洞古石生雲、禪室馴麋鹿、吾將共爾群、

宿伊大素田廬、韻、

出郭春天豁、望山晴術多、聊謀騎馬醉、欲聽接羅歌、

村落看花入、林莊聽鳥過、幽尋知己遠、前路漸嵯峨、

第 二

隱居寧絕俗、遊賞不妨官、行處鶯花滿、醉鄉天地寬、

晴郊頻曳杖、春水或投竿、欲問繙經客、寥々杏樹壇、

郊行至谷隱軒二首

其十二

五

紫溟先生遺稿卷之二

欲追河朔飲、避暑倚山樓、雲木參天秀、風泉噴雪流、

十里水邊路、孤峯煙外亭、羊皆爲白石、鵝欲換黃庭、

荷氣開軒入、松風隱几聽、亭々林表月、醉客夢初醒、

又次堤生韻

亭高翠微裏、路細碧蘿陰、絕澗晴虹飮、空庭野鳥吟、

看山乘謝屐、坐石弄嵇琴、六月無炎熱、涼風颯滿襟、

又次草野生韻

尋深誦地、午罄隔花聽、江日搖霞壁、山雲點翠屏、

烏馴常得食、人懶豈翻經、只愛醍醐味、春風吹不醒

栢氏別業、次辛島生韻、

偷食看瀕死、冥知覺愛生、忽然歸大春、誰復問微名、

開篋焚新著、裁書謝舊盟、同袍二三子、努力答昇平、

過知芳菴

欹枕聽搖落、磬々是碧梧、計年猶少壯、顧影己调枯、

只恐棣華盡、轉萱草孤、夙心終不悔、長此謝桑弧、

其

翠樓楊柳樹、風致佛羅韓、三月春將暮、十年人未歸、

喚愁黃囀、無意白花飛、折得難相贈、闌干淚濕衣、

病 懐 前年喪兄弟、五句故云、

折楊柳

知是飛來兩、暮天煙霧濃、蕭條入野竹、黯澹失山松、

草徑衣從濕、茅椽膝可容、自慚非季偉、李意是嗣宗、

其 五

何限人間事、由來以變爻、七雄龍戰野、三季烏焚巢、

清世逢今日、香醪具旨肴、應須與村老、擊樂春郊、

其 四

萬象隨時序、農家占不違、今朝桑下、幾處杏花飛、

野鹿元成俗、耕牛亦自肥、深慚牽毀譽、未得拂塵衣、

春晝何知永、春遊不覺遙、城邊皆柳翠、野外亦桃夭、

扶醉誰家社、行歌幾處樵、花林微月色、餘賞在今宵、

其 二

結宇湖山裏、雙林幾度花、水光明戶牖、雲氣潤袈裟、

樵客時供菓、漁童亦聚沙、莫須乘一葦、長此演三車、

野遊次藪子韻十二首

扁舟乘興到、高檻逐凉凭、片雨炎氛盡、長江晚色澄、

煙涯燒楚竹´芳渚結胡繩、颯爾清風起、玉壺渾作氷、

春日同諸子遊玄宅寺呈冲圓師

群賢來百里、隻語亦千秋、自笑狂夫醉、瑤華不得酬、

林氏水亭同用繩字

高樓坐清曉、客思正紛々、日射芙蓉雪、寒殘碣石雲、

三春唯臥病、萬里尚離群、回首看歸鴈、音書不可聞、

洗手港

秋高淸切地、玉樹夜蒼々、華月流仙掌、新霜滿帝鄉、

雞人纔報曉、鴛鷺忽成行、俄頃朝霞擧、諸王正上堂、

東武春曉

我本山中客、飄々不作家、形骸同土木、痼疾在煙霞、

入夢瀛洲月、關心閬苑花、等閑來玩世、復此閲年華、

擬秋夜寓直

愛爾青山宅、終年車馬稀、唯雲臥穩、遮莫世情違、

密竹無人跡、殘花撲客衣、幽尋知幾度、須帶月明歸、

偶成

春花臨綺席、夜月照瑤琴、暫作連枝會、愁聽別鶴吟、

征帆浮海遠、去路入雲深、雖荷君恩重、涙垂兄弟心、

藪氏山園

幽尋江上路、無奈積陰何、滿目風濤壯、回頭雲霧多、

堪成霖雨操´應發子桑歌、何處幽棲地、冥々不可過、

送鳳雛兄從 駕之東武 時歳十七

愁緒書中語、離情曲裡聞、萬峯揮手去、積張正紛々、

江雨訪友人

肥後文獻叢書第二卷

小住一何賒、行々且采、四望無他奇、千山與萬壑、

斷雨林外晴、宿雲巖際薄、莫是武陵源、鷄犬認村落、

爲無狗監薦、歸去惓遊年、悵別青天外、論交白髮前、

東南空道路、百二只山川、盛世招賢急、休營負郭田、

山行得落字

2日尋靈境、深穿鸞鶴群、歸來溪上月、回望嶺頭雲

洗藥淸波動、灌花芳氣聞、心知今夜夢、應謁玉晨君、

送人還鄉 時歲十四

共期携斗酒、出郭一徘徊、砥恐芳菲歇、那知風雨來、

花間棲鴿室、樹抄釣魚臺、徒自勞遐想、何時盡醉回、

漢上晩歸 蘇山作

將携諸子遊泰勝寺、抵水月臺、遇雨不果、聊賦、

一向招提境´鐘聲薄暮聞、路從鷲嶺轉、地入鶴林分、

問法霑甘露´吟詩對碧雲、來遊皆野老、何必絕人群、

天上雙星夕、人間一葉秋、節同違舊侶、凉至動新愁、

玉笛臨風斷、銀河逐月流、遙思山閣宴、高詠有誰酬、

遊瑞寶寺

日落海天碧、春潮澹不流、欲尋沽酒處、更上釣魚舟、

孤嶼連海出、千峯帶雪浮、誰家垂柳外、往、起高樓、

七夕寄大宮司宇治君

螢火偏留客、巖泉可照人、飛珠還合浦、解佩落江濱、

草密光疑晦、波淸影似眞、請君莫臨水、寶劍動龍鱗、

紫溟先生遺稿卷之二

卒歳無衣客、終宵有酒家、明燈照瓊樹、微雪灑梅花、

莫道才空老、相看鬢未華、又逢春色好、與爾弄煙霞、

泉上爬螢、贈宇治君、君有寶刀

相逢論意氣、飛雨夜冥々、一任黃公酒、不敢玄石醒、

寸心看緩急、孤劍愛精靈、忽爾高歌發、悲風颯曉庭、

歳抄集宴、贈園仲髦、

黃梅苦多雨、力疾弄晴暉、水樹斜當徑、山村半掩扉、

杯仍長命色、履己遠遊非、爲問東林裡、何時聽法歸、

酒家逢俠者

曠野新晴好、行々傍水涯、桃花紛似雨、潭色欲蒸霞、

一曲乘漁艇、百錢過酒家、弄春堪適意、不必競繁華、

新晴過加氏、逢安子孝、要余遊山寺、病不能從、

稍變山中候、乘晴著葛巾、千峯吐翠、一路自無塵、

密樹寢黃鳥、清潭躍紫鱗、幽尋應已遠、寂々不逢人、

春日江行

風微香自遠、日落影愈明、歸去金塘晚、蓮花步4生、

初夏山行

芳綠盈樽酒、暫時此對君、曙煙山半出、晴樹路斜分、

輕屐過橋去、江邊微雨餘、春風堪試暖、煙水澹含虛、

花竹多幽意、琴書榜靜居、徘徊吾喪我、愛此俗塵疎、

留別蘇山諸子

離歌堂上發、班馬陌頭鳴、未盡瓢樽醉、難留萬里行、

月殘沈積水、雲曙逶高城、面會知何日、凄然分手情、

春日過清虛亭

不盡山陰興、芳園杯共傳、春光元自好、晴色轉憐、

柳暗江邊閣、草穿沙上煙、誰知昨遊後、復此會群賢、

別友人

勢州關外地、道路鹿門難.暗谷千尋樹、春流八十灘、

終天存寢廟、瀕海見衣冠、更向清江裡、采芳弔季蘭、

三月四日遊友人莊

江邊乘興到、亭靜愜佳期、星粲新晴夜、螢流徂暑時、

清風堪勸酒、暗水擁題詩、無限此中趣、徘徊只自知、

送人之勢州

清概開美酒、高館聚瑤筵、勸醉榴花色、迎晴梅雨天、

吾曹逢五日、此會已多年、自媿疎慵甚、詩成讓舊篇、

夏夜過漱玉亭

五日棲霞館集

花枝深鬢翩、柳葉未藏身、獨有天涯客、悽然淚濕巾、

錦雲可攀折交々幽谷、秋水緑波濤、織女機絲亂、美人舟楫輕、

賦得新鶯出谷

、

草色新年虎溪橋作

和向陽泰安師韻

偶春遊西巖寺

各自文史立春田承卿歸省

棲霞舘集

煙平仲學醫

遊

水冷長城窟、風高大漠天、奔騰如掣電、萬里暮翩4、

江上春暮

寄二子、

壺口白川泛舟紅石塘西、

騮 馬

肥後文獻叢書第二卷

蓼含風亂、青楓帶雨低、扁舟供喚渡、繫在、馬安二訓導倡和見寄、輙次其韻、却「俠客乗駟馬、朱纓照玉鞭、北征堪破虜、南牧草臨邊、

移舟楫、白川泛渺茫、淵回魚作隊、橋泡鵲成行、

秋氣乾坤爽”露華蘆荻凉、三輪曲中水、猶照鬢蒼浪、

送野原平仲還岡城科

青嚢來受業、彩服去承歡、列國封彊阻、他鄉歲月、

交嫌相見晚、老覺別離雞、分手河橋上、朔風吹雪寒、

歲晚三冬盡、家鄉百里歸、曉風催去馬、春色伻斑衣、

雙鯉永開出、群鴻雪霽飛、老夫傷暫別、莫使尺書稀、

人日川觀亭諸賢見過、壺梁先生後至、賦贈、梁队

君住壺川口、吾廬柳市隣、何知青雀舫、狂訪小烏巾.

藹酒寒浮蟻、春盤日屬人、坐來微雪下、未至賦應新

臨流菴席上兩畔、一水遶雙林、芳艸迷晴蝶、幽花宿暮禽、

春來陪笑慣、方外絺交深、乘興頻來去、扁舟不繫心、

鳥、來作上林春、一任聲猶澁、能合聽屢新、

渚斜暉盡、花灘暝色遲、榭深棲局處、液靜釣魚時

一曲隨漁子、孤舟命楫師、白蘋徒可贈、天濶杳佳期、

野 班荊酚、前峯日欲曛、野花塞露、水樹晝棲雲、

勝地應多酒、醉鄉聊屬文、莫嫌才思拙、此興坐氤氳、

早春到高臺上、晴雲望更開、彩毫聊作賦、濁酒且啕杯、

谷口流覺囀、山邊旅鴈回、偏憐交態好幾歲此徘徊、

重乘藍去、行傍碧溪流、嶽雪春衣冷、巖花夕罄幽、

招提無俗客、兜率有高樓、更掃留題石、帳然憶昔遊、

山中新歲好、山中客未歸、投閑開舊帙、試暖口春衣、

雪盡巖泉響、風輕谷鳥飛、時沽隣舍酒、一醉弄芳菲紫溟先生遺稿巻之二

臺逈臨蒼野、林開白河、棲禪吾豈敢、讃佛坐爲歌、

其 二

欲訪招提境、空山携客過、屢迷攀石壁、幾轉出煙

還丹傳大道、千載尚童顔、身似空中素、神飛海外山、

靑龍爲竹杖、白鶴護松關、漢帝如相待、竦然不可攀、

來迎精舍集

江行不覺遠、忽到一茅廬、月色新晴夜、潮流欲初、

主人元有酒、稚子亦能漁、醉後乗孤艇、前灣好射魚、

贈道士

曲々隨沙岸、行々到草廬、江雲收雨處、山月映波初

偶爾驚春漲、相將觀夜漁、鄕書久不達、且爲問雙魚、

其 二

祗山新日、春色已茫々、幽怼秦松下、散行蕭寺榜、

詩君才似海、酒我醉爲鄕、知有殘花在、前溪水自香、

夜到漁家、限韻、

城裏卜幽居、蕭然似湖海、園花元自媚、門柳如相待、

經籍口紛綸、酒杯澆磊瑰、莫嫌屢往還、同好幾人在、

暮春、與諸子遊祇園山、得陽韻、

羽卮行綠酢、風燭亂靑煙、欲待園林曙、餘酣相對眠、

井子瑤新居、分得在字、

川上多秋興、肯來訪隱栖、魚從童子釣″酒任故人携、

外囂塵遠、唯愁好友稀、忽尋三徑細、遙就一燈微

家醞金花熟、園蔬碧玉肥、携來淹對酒、醉蹈曉霜歸、

川居寄城中故舊

白嶼翁携酒菜´見訪郊居、次辛助教、

我昔過豐野、爭流川晖遊、回看千仞岸、上有一高樓、

窟暗藏玄豹、沙淸狎白鷗、君歸逢夜雪、須待故人舟、

爭流川在青邨下山有吐

霧洞故士功宅日豹隱窟

終日尋幽勝芳園月下過、殘樽猶盡醉、餘與更高歌、

那知憐市井、猶似在巖阿、良夜看將曙、花間露氣多、

送曾士功還豐後青邨

閣出松林上、淸風颯不休、登臨疑化界、汗漫是真遊、

嵐氣山形變´雲端海色浮、降龍如可、從此問滄洲、

遊祇山歸路過辛翼之酌

知爾乗春興、吟行不覺賒、魚鹽經海縣、雞黍宿山家、

玉漱藍田水、關空幽谷花、相思連夜夢、香々繞

登三島山佛閣

乗間來物外、再訪古祠扉、猶見天花落、何妨春色瀅、

清風嗡午磬、柴翠撲人衣、別有降龍處、慈雲凝不飛、

和子成遊玉郡函谷邨賦此屬寄

時非逃北海、主聖亦西山、遺跡烟霞裏、清風宇宙間、

採薇君不見、喬木為空還、原注以下失

清訑懸皓鑱´碧藻間朱魚、影動然犀照、波飄濯錦新、

洋々雖得所、遽々忽驚人、似入靈源路、桃花點水春、

宿靈洞

已有杯中物、兼看木末花、相逢多樂事、誰道是貧家、

聽鳥春將暮、惱人日欲斜、紅衣口落盡、莫促醉歸車、

形役奔千里、心期戀一丘、琴書從此別、花竹爲誰幽、

明日紅塵陌、多年綠水舟、含情將上馬、回首愧閑鷗、

辛夷花下與客對酌

聞說大恩寺、不殊祇樹林、空香飄淨界、法海蕩黃金、

霜下山鐘徹、雲歸澗戶陰、請看高頂月、曾照古禪心、

南望釋迦峰、岧曉天際分、元從靈海湧、豈與衆山群、

樵路横靑靄、香城帶白雲、井公今不在、異鳥有誰聞、

其

黃子神仙侶、初平伯仲間、身稱赤松子、跡隱金華山、

弄月秋多興、乘風晚未還、長歌思令尹、遺響落兩關、

送獨有師登金海山

肥後文獻叢書第二卷

幽亭塵外趣、靜夜轉堪憐、北聽催花雨、何勞流水紗、

春遊何處好、結件過前川、一路牛鳴地、雙林佛滅天、

花移緩步、藉草學安蟬、何必貪西日、孤燈萬古傳、

春雨過飲波々氏宅、得先、

華舘宜新歲、名園即古城、主人能置酒、詞客更尋盟、

細雨春寒盡、盡微花氣生、何須勞剪綵、煕々醉中情、

四月八日與諸子遊國分寺

「奏樂高堂上、春風逸響賒、龍琴先唱雪、羯鼓催花、

波勢翻靑海、僊遊弄碧霞、滿城人盡聽、竊抃在誰家

人日過續氏、得八庚、

春來猶雨雪、終日掩柴門、不得新詩句唯傾舊酒樽

逐年雙鬓變´閱世百憂繁、擧首雲霄邈、何時獻負暄、

聽 樂

良辰住客集、聊復慰寥然、歳改人先老、春遲鳥未遷、

椒盤仍臈酒、茅屋只寒氈、一醉紅顏在、同歌緑髪前、

勝會延群彥、閑園對一峰、清泉縈白石、紅樹間青松、

扶病尋幽徑、追歡己暮鐘、可憐西澗月、廻步影相從、

新歳草堂集

諸子會釣耕園、病後至

五一六

結茆雖近市、種藥即深園、膏雨含潤、靈苗並已繁、

水花添燕子、憐竹送龍孫、更有韓康侶、時々此靜言、

紫溟先生遺稿卷之二

頗似淵明病、非關學子春、不眠偏永夜、一臥已連旬、

詩枉兼金訊〝官叨倚玉親、逢風日好、籃訪松筠、

題井子藥欄、限、

眞僧吹鐵笛、月白廬山岑、巖響雲根裂、谷傳虛化深

三衣風颯沓、一曲氣蕭森、咒得瑠璃鉢、蟠龍不敢吟、

答薇先生見寄、余傷足愁臥、

欲同星夕賞、把酒眺殘霞、月上思玄處、樓成乞巧家、

兼開湘水簟、更進邵陵瓜、坐久歌調露、林庭散宿鴉

逢迎此日近、幾歳怨離群、適性巣枝鳥、無心出岫雲、

聊從東閣引、豈勒北山文、床上圖書滿、城居絕世氛、

星夕集續氏思玄亭、得霞字、

過伊大素新居、時大素釋褐出北山、

然荒徑中、何客枉幽屐、天未夕陽明、風前雨足白

圓珠忽滿荷、行潦欲漂麥、郇酒雖難醉、與君永

報道思玄度、清風朗月間、黃公辭漢室、白首隱商山、

勸酒松陰坐´吹簫雲外還、自憐星世客、安得叩關、

伊大素見訪、席上同押麥字、

秋風吹隻字、忽墜市朝間、聞說乗清夜、行吟遍碧山、

幽人悲月落、游子羨雲還、應被梁鴻笑、明時未出關、

其 二

舊徑緣苔壁、新欄樂園、水縈幽石漑、花簇暖烟繁、

輜墅撈朋好´平泉戒子孫、會心何在遠、即事己忠言、

酬黃山人月夜見懷、限韻、

欲問仙山路、先開靈樂園、花香風外遠、露彩月中繁、

好客名皆仲、眞人姓是孫、桔槔方灌罷、相對共忘言、

汲泉頻抱甕、折柳或成園、莫怪機心息、應耽幽事繁、

艷花稱帝女、芳艸憶王孫、惆悵三春暮、臨風一寄言、

其 四

君家桂林外、藥圃瀧花園、 夜雨幽芳吐、春風翠

葉繁、枸根遇仙犬、竹色見湘孫、總樂高人志、能符

仲子言、

穿渠通野水、種藥滿丘園、培養經年厚、芳菲逐日繁、

品應兼佐使、根已長兒孫、那厭成蹊客、春風此笑言、

元抱烟霞癖、暫遊城市間、望雲千里邀、看月一宵閑

莫論浮生事、一醉總悠々、況近黃花節、兼憐明月秋、

文章期異代爾汝得同遊、長嘯西風曙、飛霜滿水樓、

其

一夜雲間鶴、口口入靜琴、相逢靑眼侶、似在碧山深、

斜月舍城谍、悲風拂客襟、逍遙醒復醉、曙氣滿東林、

其 四

遠山收暮雨、江水月華明、忽有琴樽客、來尋鷗鷺盟、

人間悲聚散、天上有虧盈、今宵不盡醉、其奈百年情、

其 三

故國三江上、孤帆一日程、勞歌殘月落、歸思早潮生、

久作遊方客、常抱陟岵情、業成堪養志、何減錦衣榮、

其 二

殘年猶未盡、時序忽陽春、池水水先解、簷光色可親、

閉門無俗客、把酒對賢人、皓髮雖依舊、心隨物候新、

送村玄橘歸島原

偶送青袍客、因臨白水秋、出山猶不濁、赴壑竟難留

寒色孤劍、行波引別舟、唯餘交態似、分手思悠々、

立春、臘月二十四日、

賦得秋水、送栗生、

肥後文獻叢書第二卷

高人歌月出、影落薜蘿間、遊子聽餘響、飛魂夢故山、

桂花多歲別、竹杖幾時還、偶被微官縛、無由出漢關、

聞君歌一曲、遙想叢桂間、暮色雲歸岫、秋天月出山、

交憐遊宦隔、書附采樵還、擬抱孤琴往、松門莫上關、

其 三

一與黃公別、棲々世路間、詩傳千里月、夢繞萬重山、

顧己無長策 懷痾戀大還、何當青竹杖、歸向白雲關、

其

別來三十載、往事不堪論、身已趨庭罷、人猶入室

釀霞供野酌〝種藥滿山園、醉裏紅顏、何妨白髮

答黃山人對月見贈

新花與嫩葉、相映一瓢中、猶帯泫々露、不聞歴風

臨杯添重碧、傍燭發深紅、借問將何術、能成造化功、

過飲壽林堂、賦呈哲翁、

當晝村園靜、主人仙隱深、丹砂長自煮、白髮不曾侵、

遠道多年別、幽溪此日尋、流霞能醉客、臥薜蘿陰、

和氏夜宴、戯題插花瓢、

好客歌叢桂、幽庭擬小山、將隨白鷗口、口曉下前灣、

過丹井園

紫溟先生遺稿卷之二

人日江邊墅、扁舟詞客停、梅生虚室白、柳映舊能青、

衰老詩難就、歡娯酒易醒、憑欄多遠興、歸鴈去冥々、

答寄和子成

除夕誰知問、因君幽興生、瓶分春酒熟、詩見夜珠明、

偕隱靑山夢、窮交白首情、多少人間事、浮雲自變更、

人日川莊集、得靑字、

偶然訪精舍、秉燭讀君詩、各處當清夜、同心有所思、

河陽花下酌、嵩少雪中期、殘臈將新歳、携遊猶未遲、

除夕馬彥章寄詩酒、次韻答謝、

臼杵城安在、豐南海水濱、曾聽津吏語、知與鶴、

風埌封彊異、烟帆來去頻、音書堪屢寄、此別那沾市、

歳抄余訪大澤尊者、共誦馬翁十二韻排律、激賞

不禁、今讀此篇、乃知當夜先生亦念及尊者、

因賦此記之、請他日之同遊、洎此引

君家天草郡、何事惜離群、本是肥州裏、其如裨海分、

蕙帆天寧去、擊柝夜深聞、別後空相望、老人峯上雲、

送人還臼杵

散行臨白水、歸坐對黃花、荊楚騷人賦、柴桑隱士家、

悲秋疑送客、向晚駐中車、幸有盈樽酒、吾解怨嗟、

送人還天草

#101

相逢新歳酒、不淺故人情、邀月簾綴捲、受風紇自鳴、

鴻聲渡江去、花氣滿園生、莫怪玄談熟、阿戒賞更淸、

路入蒼山際、門臨白水磯、松高生爽籟、水澹動淸暉、

分食魚相聚、聞鐘客未歸、薜蘿秋更綠、可以製初衣、

初春和氏夜飮得生字

舟人貪利涉、溯水泝殘、艶々波間月、蒼々霧裏城、

篝燈猶有影、水碓只聽聲、漸辨山川麗、上遊是帝京、

谷隱軒

春雪乘興、年芳一任遲、欲成終日醉、先赴故人期、

蔬細園中甲、膾鮮盤上絲、脩然高唱處、盡是郢中詞、

舟中早行

良會值新晴、孤亭朱景靜、客皆狂簡風、居是絃歌境、

書帶結香草、講壇蔭繁杏、此筵獨不陪、病裏空延領、

到門青竹杖、言是白雲伴、緩步當安車、浮榮避累卵、

別來愁地遠、相見苦宵短、忽唱還山曲、前林棲息散、

其 二

今朝秋色好、况復入西林、石壁題詩過、源泉采藥尋、

攀援蒼桂樹、怡悅白雲心、欲卜幽棲地、何峰爽氣深、

次 韻

孤飛何處去、喬木鳥遷初、到處花應發、來時葉己稀、

山影含春雪、江流現瑞蓮、知師己成道、令我欲逃禪、

宴坐雙林下、閑居五柳邊、浮杯可乘興、不假剡溪船、

春淺景猶短、野陰風更寒、尋梅隨澗水、究艸涉峰巒、

世上傳金勝、君家打雪團、未能食佛日、人事此時歡、

其 三

獨坐聽夜雨、相思入早春、怪來交態薄、過口物華新

咫尺同鄉侶、音容萬里人、昔年常聚首、椒酒醉良辰、

和辛伯韓雪後人日登祗山、寄大琢禪師韻、

欲躡虎溪踪ˊ溪橋積雪封、山風吹短策、巖坐倚長松、

突兀凌雲塔、悠揚渡水鏡、何時春色逼、許酒一相逢、

其 二

誰扶酩酊去、微月照梅花、不覺頻迷道、寧知已到家、

百年將暮景、萬物更春華、從是須行樂、非無下澤車、

立春夜雨、寄和子成、

出郭看秋色、西山己落暉、更尋騎馬路、還叩故人扉、

桂酒香浮坐、松風露灑衣、休言夜方永、銀漢漸微々、

上春醉歸

郊行歸路過非氏宅

肥後文獻叢書第二卷

纔出蘇山上、清輝滿白河、細沙省玉屑、平地更金波、

樓上蘭樽酌ˊ園中桂樹歌、秋懷聊自緩、休照髮絲

九日與諸子遊白川、歸路欣井子瑤宅、

今霄華月滿、無復片雲生、不淺南樓興、新聞北鴈聲、

白楡光漸滅、靑桂露偏明、遊賞人頻改、孤輪萬古情、

其 二

濁酒三秋暮、黃花九日餘、新知多樂事、聯步訪幽居、

看爾才俱秀、慚吾鬓獨疎、莫言鄉里異、到處有琴書

中秋賞月

重遊雙樹下、花似去年看、一從支公逝、誰令許椽歡、

草生新塔静、薪盡舊爐寒、猶憶揮談柄、禪床坐夜闌、

米府藤君恕園崇天至、携訪辛伯彛、席上分韻、

忽晴連日雪气不减百口春、颯沓随風起、玲瓏迎月新、

鳳琴氷作柱、鶴鷺玉爲人、知爾幽蘭操、斯時妙入神、

過日琴上人舊房

雪竇寄井大年

扶病逢晴日´行吟正仲春、空林花映竹、幽處鳥窺人

遲暮身將隱、烟霞心自親、原注以下逸

催我調瑤、何人繋素書、哀鳴猶似聽、遠影入空虛、

春日閑行

111

紫溟先生遺裯心之一

鄰里招邀、軒楹眺望同、晴來離畢雨、凉動舞雲風、

新竹林皆緑、殘花樹尚紅、吟詩待淸月、莫使酒樽空、

酒醒

看花元有約、惆悵夜來風、散步長江上、經過五柳中、

竊脂新鳥至、載酒故人同、醉裡邀明月、狂歌興不窮、

子成席上、宿雨新

雨後多烟、山々望轉迷、遙聞清梵響、途到古神栖、

靈樹何年種、幽禽竟日啼、時々謝公過、壁上有新題、

仲春過草子善宅、諸子來會、分、

城居通野徑、夜靜草蟲鳴、不假琴中趣、能成物外情、

主賓從坐臥、風露漸凄清、猶憶巖栖地、當年事偶耕、

遊靈榭院得齊韻來對時

欲蹈空王閣、仰看高鳥翔、金繩何界道、寶樹自成行、

塔勢凌雲绣´鐘聲度水長、何妨爐氣盡、更有藍無香、

秋夜伊大素城北宅得庚

蕭々天際鴈、遠過海雲來、求侶物皆爾、離群盤轉哀、

蒹葭何處宿´霜露晚秋獾、只恐虛紇墜、羽毛元自摧、

法宣寺薈華室和松村生

未能藏宿局、虛訝駐遊絲、冀遣金城淚、榮衰自有時、

古時茭牧地、平野擁崔嵬、一自驊騮去、唯餘苜蓿開、

長途連驛嶮、清閒抱村廻、縱有千金骨、何人解築臺、

寒鴉稍擇木´應向故林鲈、閃々翔秋水、迢々背夕暉、

可憐城上翼、猶勝路傍衣、月送長空盡、含情獨倚扉、

二重牧

飄零洞庭葉、來作客秋、颾々風共度、蕭々雨不休、

影移飛鵲鏡、寒秀弊貂裘、歲事當如此、越鄉人自愁、

衆雛隨野雉、飲啄欲相同、弱難踰隴、心疑似忌風、

總看芳草外〝忽隱翠苗中、幸托魯君地、將來無避童、

窓中度落葉

殘陽舍半嶺、雲氣轉霏微、不見雙梟至、空看獨歸、

早年期大道、衰病戀初衣、心雪寒灰久、還丹幾日飛、

雉 雛

爛醉還家臥´醒來夜正深、新寒催雨雪、朔吹動園林、

在眼住人舞、餘竪烈士吟、已無千日酒、難慰百年心、

濟民養父

送南濟民從宇土侯之江都在

江都

東武三千里、從行路不難、關門山樹外、侯舘海雲端、

皂益乘春去、班衣指日歡、庭闈還此地、莫作異鄉看、

山居晚眺、寄道士、

望秋雖早落、春至最先知、細雨催新翠、輕風變舊枝、

逸诜窓前竹´曠然豁疇襟、連山來黛色、遠水清音、

明月臨琴早、清風入坐深、琅玕疎更好、嘯侶幾時尋、

誰家先惹夢、倦客轉傷情、又恐萋々日、流年鶗鴂鳴、「河漢浮雲、
星樓好自看、靈匹經年別、佳期一夕歡、

塵從羅榑起、月照錦機殘、不得乘槎去、更深風露寒、

池塘春色早、芳草夜來生、細雨穿沙嫩、微風委浪輕、

七

芳草

亭々荒草外、貞節新

江上垂釣

偶携同好侶´聊一入招提境響可聽、

新城陌遊觀觀棋

夜、江亭思獨哀、千里人將別、三更鴈始來、

燈連秋月照、席待曉風開、縱有鱸魚美、難留張翰回、

夏日遊淨安寺

三月中元送客

桃源圖

思君千里蘇五一〇

肥後文獻叢書第二卷

贈梅

山吐旭日、積雪出雲端、競秀千巖白、能生萬里寒、

銀水懸瀑布、珠閣擢仙盤、何日乘鸞鶴、天邊指掌看、

桃花水、武陵溪更淡、漁舟達幽洞、閭里隱芳林、

父老驚時世、畫圖傳古今、靈源長在此、再度不須尋、

觀 棋移永日´瀟灑竹間亭、陳布長蛇勢、影連東井星

陰陽分黑白、勝敗炳丹青、時有風度、丁々從班定遠、萬里向邊陲、
野戍煙生處、胡天月滿時、

彫弓插白羽、寶馬縛青絲、封侯何足取、生死羽林兒、

秋江秋風靜、煙波浸石磯、唯憐垂釣趣、一任得魚稀、

山影搖晴翠、水光䠶夕暉、何須勞物色、天地一蓑衣、

池塘生外贈此一枝春、雪裡攀來少年光到處新、

清香風共遠、疎影月相親、應憶江南地、易傷羈旅人、

、朱炎忽欲無、石苔風自掃、園樹鳥相呼、

掛壁開金粟、焚香對苾芻、白河新月口、歸步弄明珠、

續氏別業和辛伯韻

探別業春、拂石時題字、迷花或問津、

千山通翠、一水隔紅塵、幸遇遲々日、賞心隨處新、

色先分、他日期威鳳、幽人護此君、

新枝未防露、嫩翠欲爲雲、唯願龍孫盛´南風歲々薰

齋宇臨溪水、終年弄素波、建瓴巖際落´鳴玉竹間過、

今霄一篇別、幾歲更相看、唯有雙魚字、論文亦不難、

元是輕盈物、爲山潔且奇、光疑懸石鏡、棼欲妬蛾眉、

積雪爲小山

觀風遊列國、望王憶長安、逆旅流年盡、歸程積雪寒、

遶革嶋生歸京

象外經行賦得桂花送人

二 玄宅寺眺望

素履宜青野遊和藪子韻

偶伴逃韡客、來尋惠遠師、方知玄聖宅、即是白蓮池、

得支

階前雙玉樹此日春光盡、吾生暮景斜、獨杯難把醉〝雙鬢欲成華、

三月

、月出更生光、何處【君家膓酒觴、

華箋詩共麗、寶墨字皆香、元夕年々宴、此中歡樂長、

姪家燕醉歸

投雙樹靜、朝涉一丘高、萍水看將別、休辭應對勞、

野遊

元夕井訓導集、次郎

風覺催凉早、露知向曉多、佳朝不盡醉、雙鬢奈秋何、「說經來此地、揮麈接吾曹、林下開靑眼、城中仰白毫、

節變還新月、城頭出絳河、人間聊把酒、天上、

七夕飲

橋斷人蹤少、沙回𪀚迹多、此間淸徹底、其奈出山何、

且停梭、

藤皐再會玄蹤師、賦贈風光三月好、况復一官閑、携榼從微經、尋花近關、

平湖春草外、半嶺暮霞間、佳景兼幽意、徘徊未忍還、

目極唯芳草、心摧更落花、江山昨遊處、咫尺似天涯、

玄宅寺講坐花常下、經行為不疑、勝緣今已得、更結再遊期、

共 處"林端眺望時、野雲元不着、湖水渺無涯

雨露春城近、花明暮磬遲、群禽飛己倦、隋意宿觶枝

終日春園讌、匪佗是兄弟、潛逃杯酒去、猶聽管菘聲、

花際明星點"竹間暗水鳴、山公嬾騎馬、吟步返紫荆、

野、幽人得司占、步從遲日緩、心與遠雲恬、

剁跡餘孽茁、雉催麥漸、不新歸路暮、相送有淸蟾、

萬樹皆凋落、一谡花開、偏憐霜後色、豈羡月中裁、

逸趣邀琴曲、清香進酒杯、王孫遊已倦、好向小山回、

簾外生寒頔〝庭際見晛遲、乾坤春氣滿、邀賞豐多時、

雪後望山

良夜高樓宴、仲秋華月晴、金波連酒動、玉雪拂衣輕、

水冷魚鮮靜、林寒烏鵲驚、胡床與不淺、只恐曉光生、

九日集

令節休辭醉、榴花映酒新、縱長命縷、難獨醒人、

歳月湘流急、風騷楚客親、群芳看欲盡、極目易傷神、

中秋集

同是桃花酒、君家興更饒、清泉如有待、芳樹型

詞瀚吟纔罷〝流觴去欲遙、醉餘栖息、微月媚

端午集

秦霄三五月、漢花九微燈、火樹疑星綴、金壺畏漏增、

遊人車似水、詞客酒如澠、咫尺蓬萊近、鼇山直欲登、

上己集

共賞熊城月、相思鹿島秋、誰家能置酒、異土懶登樓、

鴈度傷心切、雲長極目愁、但將千里夢、迢遞達南州、

元夕集

病理逢迎少、何由意緒寬、幸逢新釀熟、聊罄故人歡、

風葉踈秋後、霜砧響夜閑、莫嫌相勸切、白屋己多寒、

與和子成對月、懷伊大素在薩、

酒熟邀和田生同的

青山時著屐、綠水或投竿、偶爾逢漁父、相將上杏壇、

肥後文獻叢書第二巻

人間還分節、方外有幽期、貝葉飄經處、榴花許酒時、

尋盟逢故侶´爲樂得新知、始識無量壽、非關五色絲、

清世佳公子、逍遙野外車、重陽風物爽、別業世塵賒、

松菊思彭澤、江山似永嘉、題詩憑几久、雲氣滿窒紗、

五日過辨惠師房、初謁玄澥上人、得時字

寒食遊方好、春衣詠未歸、顧身非少壯、着處戀芳菲

把酒寬愁緒、登亭惜落暉、鬪鷄人散盡、前路柳依々、

和花城公子九日報

酒醒將曉天〝風冷遠鐘傳、他席誰扶去、吾廬自在眠、

捲簾窺落月、着屐嗽流泉、一解酒中趣、長懷林下賢、

寒食集

亭高秋更敞、木落月愈明、坐上騷人賦、琴中旅鴈聲、

淸霜催歲晩、斜漢惜殘更、不盡淸樽醉、何禁白髮生、

一葉風前下、乾坤已早秋、青雲違夙志、白露動新愁、

世態炎涼變、人生歲月流、徒思五湖裏、泛々釣魚舟、

九月十三夜、斷山亭集、得更字、

風霜凄九日、不醉奈悲哉、楚客登樓懶、陶家載酒來、

琴中人共適、籬下菊交開、欲眠何必去、各自臥莓苔、

新秋詠懷

老來難濟勝、依舊𨻶情多、海嶽曾登眺、風帆近如何、

幽林亭靜、相邀入社深、松風生石鼎、蘚壁掛瑤琴

茗飮杯中理、雲遊物外心、淸談不覺暝、山月照虛襟、

周防屐國人柳耕沛队屿以扇面乞書賦題之

頻年多病疏、此日罷官身、豈比懸車老、甘爲擊人、

歸資仍祿米、儒服己綸巾、閑向川莊去、白鷗心自親、

琴山社茗讌菊田上氏爲主

使嗣子得碌、

觀風遊列國、冒雨欵衡門、杯酒纔相見、詩書細討論、

三餘攻大業、一命沐新恩、但爲歸期逼、衰顏洒淚痕、

柳府安東子和米府孟篤、相尋來會、因賦贈之、

故人從各地、此日偶同遊、綺纘分雙府、星聯屬一州、

虛名勞負笈、羈思賦登樓、但喜孤酌、紅顏對白、

中津田文文學枉過、有詩見惠、次韻酬之、

忽值連霖霽、猶餘一日春、同遊縱目、閑坐易傷神、

落紮青郊道、垂楊白水濱、老來交漸少、携手幾人、

尙戀西園蓋、相迎北海樽、莫合芳草歇、留著待王孫」

別來經五歲、無日不思君、頃者歸裝就、今朝音書聞

知非吳下士、起望海東雲、早晚風帆至、一樽相共础、

春盡新簡諸友

春遊頻載酒、野趣似休官、勝境烟霞富、醉鄉天地寬、

幽莊心不忘、清舘我曾攀、池引浣紗水、林開伐石山、

三秋看欲暮、一日此偷閑、莫問霜侵鬓、唯應酒借顏

坐有遊方客、時間陟帖章、白雲連故國、黃菊是他鄉、

告別臨南浦、言歸拜北堂、貧交無所贈、聊折桂枝芳、

孤館通宵話、寒燈照雨時、相逢元恨晩、暫別亦成悲、

淅瀝風吹葉、潺溪水落池、臨觴不能飲、屢問再遊期、

埜遊次藪子韻

玉屏金屈膝、偏稱五侯家、影結晨爐氣、光搖夜燭花、

避塵聊可隱、隔坐便成賖、唯有琴中語、冷々不可遮、

耕釣園集、送赤彥禮歸省、遇雨留宿、

南紀地將盡、北溟天更寛、翠華遊聖處、絳節會眞壇、

鶴唳三更靜、鵬飛六月寒、送君空帳望、思滿海雲端、

屛風

何鄉車載士、此郡玉爲名、月向高端照、雲從小生、

松風關己廢、楡石秕猶淸、更憶長洲貢、嘉魚入帝京、

送人遊明光浦

玉名郡高瀨邑人乞余書率賦

在椎

地形巖作邑、橋影縲縈波、椎嶺題名處、君歸拂石蘿、

綿疑訛

凝露爲珠玉´餐然滄海濱、陰陽分黑白、冬夏變温凉、

又嘗新稻飯、仍著舊儒冠、恩渥憐黃髮、才疎愧素餐、

代耕元自足、催租未曾寛、對案空嘆息、惝知稼穡難、

賦得凝露石、送浦君永遠佐喜關、

嘗 新

城郭寧無月、江村別有秋、蘆間寒鴈集、草際暗蟲愁、

獨酌移山影、孤吟俯水流、相期人不至、霜白渡頭舟、

孤行遠水流

仙郎曾是件、野老此爲朋、百日紅霞駐、一叢紫氣、

童摩眞似笑´猱仰不能升、獨後陽春發、幽姿媚醇蒸、

月夜江村待客、不至、

祇山蒼翠外、登眺俯雙林、自有觀河性、能生小魯心、

長天秋色敞、下界暮煙深、獨立邀明月、清輝澹滿襟、

紫薇花

琢、高辻大納言之子,

常時愁獨往、今夕得同遊、不厭園亭遠、先乘野水流、

月明皆勝境、風引即仙舟、此會多餘賞、新詩滿 留

曇瑜尊者登祇山、有所開悟云、賦此奉贈

名紹瑛、恐逾其字、號大

月夜與諸子乘舟、集川觀亭、

色與青衿亂、陰侵縹帙淸、時開凉雨度、總入夏紗聲、

肥後文獻叢書第二卷

孟夏辭東武、行哈向故園、三千經驛道、百二度關門、

新詩君矍鑠、衰髮我悲傷、尺壁眞爲寶、連城豈可償、

平生多俊句、每日滿奚囊、不待啼鶯出、梅花已鼓腹、

喜和子成歸信至

醉後夜將半、童子報君來、爲問緣何事、乞書急更催、

知併雙魚字、欲附驛使回、深漸潦倒草、難比一枝梅、

歲抄答白嶼先生見贈、次其韻、

衰病難行步、相邀進酒觴、庭梅春已發、城漏夜仍長、

月未開疎影、風氣送暗香、諸賢且休去、將唱皎公章、

德山御座生索書

多謝問庭梅、氷姿帶翠開、臨池如照鏡、當序似窺杯、

樹色今難老、春光尙占魁、自從君臥雪、誰復探芳來、

與諸子夜酌

江天微雪下、興發棹扁舟、影動芙蓉塔、花飛蘆荻洲、

質衰難附鳳、機息可馴鷗、蕭索寒颸晩、誰復携手遊、

翠山翁以詩見問纈梅、 韻答之、

冬日汎前川赴別莊、舟中口號、

七八故云、

君永之祖、著

實非王子

善浜、源語所稱

蘇秦傳之語、

德也、嘗府此

勝事傳碁聖、佳名振李唐、君家元有賦、更待遺芳、

山木宜群噪、何要金谷花、寒天千萬點、舊苑兩三

啞啞啼殘景´紛々入落霞、誰言無意緒、猶勝競才

送扶宗師之長州、謁金嶺禪師、

何妨泥濘阻、欲慰別離愁、籃衝春雨、桃花漲夕流、

兒孫歌拍手、老大醉回頭、小謝將歸到、頻登江上樓、

無計留春住、陶杯强自寬、看花爲昨口、苦雨更餘寒、

只恨鶯無語、何知客罄歡、曉鐘猶未報、且莫促歸鞍、

邨玄齋之江都、既發、訪琴山先生、

佐嘉西岡生乞書、且話水上之勝、率賦書之、

佐嘉多勝地、源上最清幽.抱野青山秀、連天綠水流、

花間接鴿室、柳下釣魚舟、酩酊知何日、春風騎馬遊、

賦得田籠浦、送巖下生之江都、生好國風

行到田籠浦、斜遵滄海隈、山回蒼樹合、路轉碧天開、

富士凌霄勢 歌仙賦雪才、駿州多勝景、知汝暫徘徊、

三月盡、子成公雍見過、喜而賦、

紫溟先生遺稿卷之二

五言律

不屬繁華裡、能隨樂育情、芳心緣自展、新葉更還生、

五〇五

已是重陽後、氷輪好更看、沉吟從夜永、取醉耐秋寒、

葉盡清光遍、河傾列宿乾、嫦娥長不老、應為竊金丹、

學中題蕉葉、示授讀諸子、

從師二十載、不復到塵寰、一章將過海、孤雲始出山、

名都開法苑、大士啓玄關、元是吉祥寺、舊傳心印還、

九月十三夜

春天收暮雨、晚嶺送餘霞、緩蹈江邊草、幽尋苑裡花、

主人能置詞、詞客已停車、誰道官無暇、逍遙及暮鴉、

送天然僧赴吉祥寺

不窺園集後至和韻

論心如一日、屈指已三年、重席書生坐、還家釣客船、

知蒸紅朮罷、應對白鷗眠、從此身老、丈人山下仙、

在天草

病酒靑春晚、垂簾白日閑、名山圖上見、芳樹夢中礬、

偶爾流鶯囀〝遶然胡蝶還、同遊人忽遠、悵想暮雲間、

送西玄扑還天草

孤雲出遠岫、容酎肥子城、偶然度海去、似君千里行

關門臨絕岸、潮水引長程、何處功山寺、霜鐘半夜啓、

睡 覺

#兵衛乞之

題郭汾陽圖、以壽某翁'搗原人姊川

裁斑戯舞、孝子、鼓琴鼓瑟、順婦淑媛、黃霍之崎、

佳氣斯屯、嗟吾在遠、臨風託言、

霍當作鵡

五

維此慈親、德劭且壽、獻歲初度、肆筵酌酒、何以祝之、

松島斯有、如松之茂、如島之厚、

四

慈親在堂、孝子色養、圖寫松島、于屏于障、奧海惟邇、

慈親遊望、或濟或所、不刀不杖、

髒彼松島、鹽竈靄々、金華建標、富春吐瀨、泛々舟楫

惟松惟檜、以漁以釣、乃軒乃膾、

11

嘗聞王母、樂彼瑤池、瑤池雖樂、豈如東陲、東陲伊何、

奧海渺翮、洲嶼星布、松島統之、

爲膓子善文學題松島圖、壽太孺八八十、分體得四

言、

四 言

風帆隱見碧松間、老矣勝遊不可再登臨詩酒與誰對

試上雲崖剝石苔、依稀猶有舊題在、

肥後文獻叢書第二卷

郭王兒孫、殊勝萊子、青紫照庭 冠蓋成里、

五〇四

紫溟先生過和卷之一

丁卯之春余羅病、脈終神疲待終命、家人惶恐門生奔,

奔到翁門叩頭請、翁之友誼等弟兄、倉皇來診救你生.

古先有方諸我毒、吾毒稍除厲氣平、未經旬日霍然起、

其 三

t

井翁少壯入帝京、忽遇異人受禁方、歸繙其籍益研、

神驗不唯勝長桑、深知萬病原一毒、毒以毒々人何傷、
宿疾沈痾應手愈、宛如渴者得瓊漿、二千年眼睨宇宙、
一萬奇方献廟堂´何事後世業醫者,不淫釋老即陰陽、
僻而闢之書始出、赫與日月爭其光、大鵬負天莫天、
非翁之道日宏潤、弟子四敷如列星、東窮奧羽西筑薩、
毒々之歌二閦成、長風振林激餘聲、
大化親繼生萬形、人得其秀性靈、粮食爲天常自養、
暭餐劵藥助康寧、毒非毒兮藥非燊、赭鞭一憚物皆馨、
愚者求仙爲藥誤、毒々之歌君試聽、王者出師 天下、
大攻流盡展天刑、神醫執方毒萬病、1 毒云消保壽齡、
先王設官守其職´落在經典炳丹青春秋季年醫失職、
乃越樽俎欲醫國、盧醫邈矣長沙近、縱三折臂誰能識、
毒々之歌々更長、一閃既終思妙
之情也、
高良山上武公祠、石筍成垣號玉垂、祠下蓮臺誰為主、
聞君家近幾頭山、山上仙臺昔日攀´下瞰滄溟千里色、
五〇三
恐是天臺智大師、不但蘋咚供祀事、由來香火足平時、
武公輔世三百載、去騎箕尾爛光彩、况復吾師壽無量、

天衣拂石々崔嵬、我登絕嶺歌此詩、山鳴谷應如神在、

武內宿禰祠、謂之玉垂宮、又有巨石、四繞

【盖如蜀成都石筍‟第十句用天衣掃石刼事

送中條士行還讃岐

阿

高良山歌、代人賦此、奉壽蓮臺院僧正觀公、

「橋生卒然告別離ˈ歸路悠々從此僻、老夫魂驚涎欲

爲問君來已幾時、來時烟花正妍麗、今日草木盡變衰、

嗟吾孤負遠來意、病臥殊非董子帷、君自青雲有前期、

努力須惜白髪移、四時庶物無非敢、歸去求之有餘師、

情長語少空惆悵、急命家童酌別巵、醉望關崇山雪去、

倚杈不熊臨路岐、肥山行盡遵豐海、杵築城臨豐海湄、

城邊春色知應早、時析梅花寄相思、

送橋本子潛歸省

既死又蘇衆皆驚、翁云起生非起死、死生有命我何嘗

敗當作敝入與蔽通

但恨世人蓄其毒、命非其命半途傾、浮雲中夜敝明月

疾風拂雲依舊明、浮雲病風俱是毒、風止雲需夜澄清、

毒々之歇已三閦、春色滿堂髪如雪、

三章、貢諧左右、匪報也、聊以述感恩

余病得起深意託、豈

徒書史誇盤褲、清如梅花傲雪霜、勇如鷹蚋逐烏雀、

#引

此畫非翫物、欣慕其人欲纘功、圖中知有#々古

學中諸賢

老杜

病中三月與明月永相得、歲々年々望夜

二月三月花正開、妬花風雨忽相催、雲飛樹鳴天黯澹、

飄英落蓋滿莓苔、啼鶯寂向何處去、戯蝶紛尋舊叢來、

一年春色夢中盡千里壯心病袒摧、病乖帷幕移甲子、

夢逐芳菲渡江水、健磐龍廟雪推枝、御刀妃祠霞作綺

「故居険陜不可留、方將輕舉且㯎遊´忽駕飛寵企南望

芳野之嶽如雲浮、神女黸袖舞天際、風傳空樂鏘未休、

前度洞門綠蘿合、白波急峡送春流、朝僻金嶺暮石鏡、

下有明湖相照映、潮上荒凉志賀宮、御園芳樹人猶敬、

夕陽眷顧海雲西、誰爲王孫感草萋'惆悵回鑣首鄉路、

綠樹森々子規啼、

到偏愁竣事遲´豫命家人釃良醞´將迎吾輩賦新詩

五墅自茲互來往´風流豈獨習家池'却怪古溪安夫子

一官宅外無立錐、勸人買墅眞自善、所以自爲吾不知、

畱月望、月下獨酌、

一年月興肥後文獻叢書第二卷

HO11

滿十二回、每遇天晴把酒杯、抄冬三五月徒満、

霜雪何人乘興來´獨倚前楹斟綠酯、春色忽生醉鄉開、

偶有清香發早梅°輕風踈影共徘徊、我歌我舞永今夜,

不覺流年看代謝、今年唯餘一夜盈·來歲又得幾明、

唉將滿酌勸明月、潋浇金波如有情、玉兎搗樂丹廛就、

安能授我保長生、顧盡走筆寄攝大奉行島田君席上、觀故奉行藪子梅應圖引、

解道肩輿强老翁、 坐從南郭到城東、佳客滿堂虛左|老去平居甘寂寞、唯與春色期行樂、豈料今歲病纏綿、

待、白頭羞對燭華紅、壁上仰看前輩書、寫出蒼閑 不知百花開且落、昨夜驚風吹雨過´爲問芳菲已如何、

且雄、梅樹槎牙花錯落、永魂玉骨得天工、憶昔斯人 只言三春今日盡驚起據梧感慨多、諸賢良會饒逸趣、

從政日、巍然不改舊家風、德音在耳人已遠、神采却「何處池臺惜春暮"落花飛絮遶彩亳鄴下新詩梁苑賦、

存圖書中、主人今日當要路、乃與藪子才賢同、珍藏「肯憶門逕間無人、蘼蕪滿目獨送春、

老夫大醉歌此詩,擊破玉壺月西落、

暮春臥病、戯作歌行、寓遠遊之意、

歌奉寄琴翁井先生 、實賴先生盡心力矣、既而先生惠佳

律一篇、以見祝壽、余尚在牀、未能裁律體、

作蕪詞紫溟先生遺稿卷之一

昔年三百六十日、君言日々接清歡、即今離索三千里、

自非夢魂相見難、獨對孤燈送除夜、寸心百憂不可寬、

縱存松柏歳寒契、其奈桑榆暮景殘、初志於今未裁服、

舊遊何日共考槃、古溪堂遠跡常阻、鹽井人遙盟欲寒、

唯有梅花似當日、清香不斷入夜閑、

子成嘗有除夜訪余詩、云三百六十日、日日

接清歡、

江城五月熟黃梅、細雨密雲久不開、欲趨芸閣愁沾濕、

陋花泥濘無客來、昨夜長風散毒淫´踈簾澹蕩日暉深、

嘯侶入門看新竹、鳴蟬擇木就繁陰、葛衣體輕如發蒙、

卮酒澆之神轉融、仰視天宇送飛鳥、今古幾人此與同、

八公已近七賢遠、桂樹蕭條竹林空、一時吾輩賞心在、

探勝斳幽途未窮、今宵石上坐明月、明日釣舟運葉東、

除夕懷和子成在江都

梅雨新晴、諸子來過´有賦、可删

斑衣欲趨萱草堂、心與飛雲競飆疾、不憚玖摩峽路長、

衆賓送君歌且舞、宛如列仙宴洞房、碧紋珍簟絕炎熱、

芙蓉之椀薦氷漿、李生酒酣心肝裂、欲語不語空嗚咽、

傍人莫怪涕無由、丈夫豈是爲離別、君過水河問故人、

苔蘚荒凉滿孤碣、

HO1

白嶼先生無別墅、安君此語即微辭 白嶼聽之憤然起、

轉無爲有豈難爲、誰道詩家引窮鬼´宦遊累歲有餘貨、

買山非是巢火隱、墅何須謝公、原識會心不在遠、

城南城北霓勝奇果有閑園堪卜築、背城面野白河湄

當軒大嶽雲縹緲、遶檻長堤樹逶迤、景多莫唉撰名數、

讀安訓導四野遊賞歌、戲賦此篇却寄、

天台四萬八千丈、我昔夢魂凌海往、爾來倏忽五十年、

闕玉堂徒想像、何人舭礴寫崢嶸'天際峰々秀色明、

深壑欲浮嵐翠氣´懸崖似聞瀑泉聲'欲觀華頂蓮花崎、

先認亦城霞色起、誰能石橋躡彩虹、前有智師後潮公、

潮公安在秀眞國、乃是十洲三島東、山靈日日應翹望、

飛錫何時度遠空、潮公洶公莫相´爲我按圖明指示、

茹芝余亦尋福地、

客從江州來、爲我吹玉笛、笛聲逐江風、楓葉倶淅瀝、

緬想琵琶湖水流、群仙乗月會中秋、宛如張樂洞庭野

縹緲管結雲外浮、散入辛崎松籟爽、飄過生嶋竹聲愁、

原注漫去聲

聽君玉笛傳餘響、使我恍爲鈞天遊、斜月沈々霜漫4

忽奏別鶴腹堪斷、何時萬里到君家、重聽玉笛湖水畔

觀豪潮師所藏天台山圖歌

聽藤子信吹笛、賦此贈之、兼送其歸、

昔年氷河岸畔樓、日換不

鴻荒之世地送玖摩

名藉々動王族、

觀奧郡主計劍術引

由來好遠遊、九州歴盡更四州、他日大都奏絕技、聲

有出石祠、蓋祭此也,

刀亦自至淡路島、岛人立祠祀之

海波相擊、書罷投筆不辭主,去逐浮雲不可究、道人

刊幬昔之夜,刀自至於臣家,今朝期熊亮, 天皇神之,不復問為後 何宛轉
、長蛇赴壑自逶迤、倏忽筆端飛雪激、疾風翻

日此神物也、豈可

一日失刀所在、使間清彥、

天皇召

冥觀萬象有餘師、俯仰古今何所慕、會稽內史託心期、

、悉已

時刀露出

神蜜、賜清

无入朝却與此刀比、歸到但州尋葆祠、精靈何啻天外倚、

彥

鐵仙道人草書歌

宮ň珠蜆紫氣空連銅柱標

奔車影發轉長廓'短可制長長制短、忽然天地變陰陽、

携來萬里陵風潮、聖主何嘗資遠物、留在但州久寂寥

一日

白虹不入珠城闕、天染

徵求下天勅、主臣袍中漫秘匿、忽然躍出御筵前˙翡翠

明珠鰖無色、由來此物大有神、時决浮雲落海濱˙鯨鯢

不動蛟龍遠、豈有妖氛與塞塵、櫻郎磊落懷利器、千載| 道人於世元不厲 近作草書便多奇不向

利器、千載|道人於世元不羈,近作草書便多奇、不向時人學粗跡、

觀者驚嘆瘵潨耳、主計自言聊復爾區★元是一人敵

羞與蓬頭突鬢似、神武由來貴不殺、薄伎唯備蠻夷猾、

紀日,垂仁天皇三年、新羅王子天日槍投化、居但馬國、所齎珠玉

及出石刀等、土人崇奉之、以 也.八十八年、命日榭曾孫清彥、

唯出石刀不肯献焉、匿之泡

皇怪而問之、清彥以實奏、

無毫之管不點水、一紙習書蔑四時心中有畫字無跡、

傍人何得見逸姿ˊ高堂置酒請揮灑、昔日百杯今十卮、

奧動神融拂絹素、雲煙遶筆墨淋漓、獨鶴舞空

蒸戒之箭飲

天通、神將桓々下大空、靈劍植地霜凛々、

鋒端箕踞叱群雄、日月昇天爝火息、一麾萬國草靡風、

六龍倏降皇基隆、寘與天墻共無窮˵ 靈劒深藏鹿島裡、

神威赫々嚴祭祀、存往初擊劍術、世々傳在吉川氏

吉川弟子逼四方、就中何人最擅場、伊昔卜傅振療譽,

即今主計襲芬芳、手提二尺行天下、挫鋭折衝誰敢當

疾如瀑水落深壑'閃如巉屐激電光、偃月之刀更揮霍、

蓑田生歸余嘗見疑田生於安子孝家、既而子孝逝矣、生

乃遊學于熊府、今也將歸、餞之復陽洞、適有

懷舊之感、因賦、 得法、可删、

與君轟飲三日遊、今日復陽洞裡天、

與君相見即別縫、浮雲聚散何曾定、西日驚風蕩淅川、

多君千里所有方、多君業就還故鄉'歸綎不假桃花水、

紫溟先生遺稲卷之一

四九九

月下窺

之我心閔、何處仙人朝玉京、曉乘青鸞度大清、青鸞「維昔外夷盡入朝、爭擎方物獻青霄、新羅寶刀號出石、

出石刀引、櫻井子良還但州、

君不見阿蘇山上一拳石、萬古熒々可照顏、疑是瑤臺

問君那不繫駟檉、君道人生苦離別、手礬柳條淚沾裳、

·日礬條仍舊里'明朝落絮是他鄉、他鄉春色亦可憐、

楚水吴山征路前、登樓湖上月三五、買醉花間斗十千、

十千美酒胡姫壚、楊柳靑々繫玉壺、行人此時見楊柳、

回首天涯相憶無、

世耦器身不得還、一夜孤鴻始度河、抱琴携酒就我歌、

風凄凄兮月皎皎、緬想白石與青蘿、予亦生來好山水、

豈能役役老城市、今宵且盡一杯酒、他日相求萬山裡、

蘇山石鏡歌

一月三月綠水傍、千條萬條楊柳長、紫裊烟日弄嫩色、

靈雨山人落人間、引領時々望故山、故山安在白雲外

贈靈雨山人

賦楊柳送人

經過南鄰與北里、北里南鄰H冀喧、七十老翁歌一言、

君不有殷天子爲象客、鹿臺白日喪其元、又不見漢家

謀臣借前箸、赤帝之子踐至尊、人間倚伏皆如此、古

往今來不論、何如皂衣著在身、何如白箸賣與人、

白箸之白白於雪气我心與之絕緇磷、身遊千五百秋國、

名列三十六帝臣、夜々閑眠朝紫、時々高步人紅塵、

莫言歷世人相遇、蟬脫一朝不可駐、東河之東南山南、

滅跡茫茫但烟雰、

壁上婉婉一畫龍、影落澄潭射碧峰、疑是眞僧鉢底出、

宛然靈鷲窟中逢、君不見昨夜三天風雨惡、曉雲橫臥

寺門松、

來迎精舍集、詠壁上畫龍´限韻、

滿園蒲葵幾十株´暮雨蕭々曉風呼´曉風呼我來淹留、

醒復醉臥聽樹聲、園中先生筆如椽、此時落紙作雲烟、

雲烟變化不可測、擲出朦朧殘夢、始如葵蒲之風雨、

使君書巧我眠、

逢著鏡中影、欲往不往忽悲鳴、悲鳴一�の振萬壑、巖

平安城裡春風起、滿城絡繹遊子、車如流水馬游龍、

何如隨我服丹砂、

、

蒲葵園歌

室高人夢魂驚.起向天風一長嘯、誰辨鸞聲與嘯聲佚女统、掛在峰頭彩雲間、清可茹又可轉、上蔡有布衣、早學帝王術、一旦說秦王、萬乘皆股栗、 之酒芙蓉席、歡宴未終已陳迹、茫々世事使人哀、寂

果然帝業以客成、并吞六國銷口兵、女嫁公子男尚主、 寂仙山歸去來、仙山深處是吾家、碧窓近對碧桃花、

揚我氣烱赫我盈、六經爲灰驪山下、棄之道者立被刑、 花落花開人不老、時乘鸞鶴凌絳霞 借問世人買白客、

上蔡貞觀末又不見漢

代長孺已死灰、一朝復然爲内史,天意々不可知、

人生禍福相倚、吾友楯郎本昂藏、小少奇才不可當、

著文百鋊春曄、擊劍三尺厲秋霜、藝苑諸人側目、

王門何日曳裾長、披肝瀝膽論交久、豈意一別即參商、

雨別星散音信少、幾重浮雲掩日光、黃公壚上河山邈、

相思無日不斷腸、楯郎一身無所寄、楣郎兄弟散四方、

鳴呼楯郎眞男兒、莫共女兒泣路傍、

行 時尚十七

詞

贈楯君不見昔人路上逢越石、立解左驂脫其厄、>

時歲十七

白箸翁詞二首

沙丘使者死扶蘇二世皇帝一何愚、龍蟄深宮不可面

我從紫海轉茅龍、來聽蘇門萬壑鐘、蘇門蘇山歌贈阿蘇太宮司君

四九八

把夜文獻術書第二卷

自古神僊窟、

朱劉玉堂五雲重、明燭煌々夜張宴、主是綽約氷雪容、

自我不見海三變、此時還疑夢裡逢、白玉童子傾北斗、

勸我流霞色正濃、醉來捲簾看夜色、依々殘月在高松、

孤鴻啼處彩雲斷、屹立蘇山天外峰、明日躋棼摘芙

子厚 布衣三川群盜盡長驅、無復通唉歸鄉里、俄間丞相見四构

嚴霜一墜百卉死、富貴浮雲掃跡無、誰知黃犬嘆、本自

倉鼠起、何處所稅駕、白日咸陽市、

、京師有一老翁、常遊市中、以賣白箸

爲 業、時人呼曰白著翁、鬚髪皓 白、冠履不

完、著一皂衣、寒暑不變、人問其年、毎以七

十告、京中有賣卜者、年可八十、語人曰、吾

爲兒時、既是是翁一被服顔容、與今無異、聞

者疑其有異術、一旦病終于市門側、市人憫

之、收尸瘞于東河之東、後二十餘年、有僧見

翁于南山、居石室、焚香誦經、問曰翁無恙、

翁笑而不答、邃去、不知所往云、暇日戲作白

箸翁昔年賣白箸、今日賣白箸、昔年今日與誰語、南陌北

街獨來去、白玉之梁紫金柱、樓臺如故皆新主、葡萄

紫溟先生遺稿卷之一

山人窘陰雨、歸思江水深、黃梅落將盡、新竹已成林、

底際有蘭草、本自南澗邊、開英映朝日、光彩一何鮮、

流芳擅大國、乃期千歲傳、認爲君子佩、如何中道挡、

·伊山人阻雨次草廬

明月披霧、金波忽滿地、幾處擣衣聲、秋思在千里、

花時序同、人世悲歡異、銀河看欲落、抱影不能寐、

山中英宅詠蘭

粲々玄圃玉、落々他山石、暗質 明月、光一何赫、

赤子南州彥、剔々排霄翮、欲觀列國風、千里猶咫尺、

斂衿投吾黨´卑謙道彌益、氷心徹玉壺 玄思貫題、

時々揮寸管、瓊華紛可掂、豈惟當世珍、千載留芳跡、

薄俗如浮煙、素交中路擲、獨操歳寒心、與君托松柏

酒共沈醉、雲山同所適、綢繆已幾時´倏忽歳華積

春草怨鶗鴂、凄風悲絺綌、常恐歸期至、一旦音容隔、

秋 至

余謬厠縫掖、每苦羝觸藩、君乃一時性、早年忽鳳騫

高才屬妙選˙轉斯文竹、自云未能信、頗似憂慮繁、

玉帛蒙寵命、辭遜非所論、唯願勗令德 夙夜答君恩、

陰陽有代謝、逝者不可按、吾將退山澤、相憶贈椒蓀、

財赤彥禮

肥陽有高士、列國盛名傳、謔浪百城主、歸耕二頃田、

空廬寄原野、曠然弄雲煙、笑酌杯中物、何勞琴上結、

我來日云夕˙雉帷窓戸前、東風吹百草、春服欲裝綿、

*燎當明燭´藁席供夜眠、今世無此比、古人或能然、

北言古

一曲向君歌、請君爲我和、朝陽鳳已鳴°泥裡龍臥、

烟霧爲痼疾、珠玉在咳唾、不覆掌中杯、奈此百年過,

宿伊大素田廬分韻

何日不相思、此時情更苦、娟々早梅樹、開花映惢戸、

豈無盈罇酒´獨酌醉難取、莫言天已昏、月下轉宜、

和氏亭醉後作、贈伊山人、得臥字、

冬日梅花盛開簡諸子

籌加、但應誇健在、不用更長、

勝地年々會吾生豈有涯、脩禊追右軍、登高作孟嘉、

潺々階下水、泛影南陽花、滿的杯中物、殊勝彭澤家、

維橋雖不到、玉樹共歡娛、仍有無趣、床頭掛落霞、

霜树新曝錦´雲溪舊浣紗、何妨暫伏枕、來歳壽

城中豈無酒、不似薜蘿陰、冥々暮未已、寂々撫孤琴、

九日叢桂園集´主人有故、使命郎代邀、微卿

亦病不至、有詩見寄、次韻酬之

斆者學之半、先賢有格言、若夫好爲師、大患亦斯存、

吾性元憚暑、况乃屬流金、甘瓜與朱李、盤裡徒浮沈、

贈辛伯′

亦自佳、

忽爲雨、空滍滿高城、

余嘗讀少陵東坡槐葉冷淘詩、艷羡淸味、然其|挾策登芸閣、日晏歸柴荆、迨此暫時暇、聊恣遺世情、

製法不可得而考矣、今略據坡詩注、槐葉汁和| 呼童沽春酒、臨觴尙未傾、中心若有違、怒焉懷友生、

麪縷切熟過、淘以冷水、未知合古製與否、然「肯來同今夕、難期明日晴、

槐葉冷徇

苒々陽節暮´孤桐出嶧陽、金徽相照耀、千載藏謝人贈琴鶴

玉匣、竊期奏淸廟、

一朝遇嘉賓、頗揮絰上妙、初謂是知音、何圖不同調、

已矣天地間、罷彈心悄々、魯國饗发居、徒爲達者誚.

簡友人

雜

靑鳥出幽谷、喂々花裡啼、春光何處好、欲向上林棲、

青鳥詞送人之京

園中有槐樹、徐步就其先在、得嘯字、

同好伊誰在、幽客被薜荔、携手行且歌、虛舟貴不繫、

喑香識早梅″隱處認桑桂、主人操古琴、散髮坐苔砌、

相視怡然笑、談究天人際、釀酒膾江魚、盤上銀絲細、

家本富圖書、又多佳子弟、大兒已軒擧、小兒亦夙慧

詩脩酒傷、各々春葩麗、世人裁桃李、何如此常棣

斯筵忝同盟、庶幾無儉替、落月相辭出、雲雁聲嘹

春風翼春鳥、雲路香不迷、一聲上芳樹、春色萬金閨、

繞南薰殿、將與舜絃齊、而我在草間、奈此千里、

唯當與群燕、依舊啄野泥、

贈我瑤臺鶴、兼之綠綺琴、琴已冥靜者、鶴亦狎幽心、

撫彼凌霄翼、奏此流水音、他日兩提携、應罨碧山深、

陰、邃掇青々葉、染麪色稍深、

何必大官膳、野味愜素心、碧雪翻匕筋、一餐滌煩襟、

梟泛戀江藻′鹿鳴樂野岑、羣生各有適、吾飽臥幽林、

九日過耕釣園、赤韓二子秋天苦積霖`令節開晨曜、登高追古人、出郭展清眺、

西嶽蓄金精、斷雲帶孤峭、下有亭舘幽、可以托吟嘯、

緣溪恣獨往、排戶遇同調、濁酒爲君酬、黃花向我笑、

階際引淸流、勾欄可俯釣、豈無戲馬臺、安識觀魚妙、

興闌涉後園、林壑尋窈窕、行遠不愁暝一田家有柴燎

暖々陰雲生、朝來途失小謝、 漢學友-幸生掌上珠、己動連城價、傍讀

太經、丹鼎調玉姹、每尋千栽芩、松下行燃樺、巖

紫溟先生遺稿卷之一

四九五

皓々寒宵月、寥々風雪霽、出門何所之、訪我平生契、

豈無八珍供、鬼神惡華侈、何如今夕歡、濟君家世美、

冬夜與伊山人過辛與之分韻

如拉骼、自憐頭上巾、漉酒不須酢、但恨芳草夢、半

日往還、相課種耙椏、甘爲葛天

民、不見齊人詐、醉舞東村社、狂歌西里禮、家々老瓦 泛々綠水、粲々白華子、壹發獲彼、欲以至甘旨、

盆、殊勝爵與斝、北望名玉郡、山川何温藉、乘興挈妻大人有所與、欣然挈之起、園蔬老僕摘´家醸阿姨酸、

拏、脩然就姻婭、三畝翠微間、占竹結幽架、白雉 幷携出門去、乃赴北早里、所與是誰人、隱居姓爲李、

玄猿窺窓罅、擾々簪纓輩、磬折 相見拍手笑談言一何綺、卷志已如茲´交情亦能爾、

鳳凰棲阿閣、麋鹿飲青泉、服餌聊自適 非關學神仙、

白嶼翁見惠綠梟、云此彥郎所獲也、援筆賦、

親衛執玉弝、禁携君入、

紅水氣何馥、黃精花亦妍、擔鐩入靈境、采々欲忘年、

帽、藤公有分子、

賤者能忠直`低頭承叱陀、貴人苟姦回、瞪目箕踞罵、 岫多白雲,果酸怡悅堪自詫、世路險巫峽、風波員

縣尹束濕薪、秋毫不肯假、駸々千里駒、一跌落阱、 可怕、恒厭舊文傳、萬人稱膾炙、四方來呈卷、如獸

逍遙圜土中、吟誦未嘗罷、適會左驂蚊、如出市人跨、 聚表襴、大國闡文敎、才賢必所借、果有鶴頭書、促

咏懷五十篇、奔激懸河瀉、曄々玉井蓮、開花照太華. 君釋犁杷、人孰無君臣、幡然動征袍、割情辭丘壑、

惠風育菁莪、髦士競相迓、身著青々衿、擔登入黌舍、 改步赴臺榭、府下多舊朋、盍簪樂休假、時々生故態、

銳志躭墳籍、寸陰匪荒暇、一朝嘆匏繫、恐負桑弧射、 壚上解衣貰、憶昨訪田廬、巾車恣碾呀、酌持紫、

欲覿漢官儀、云命千里駕、汎舟指長安、灦水清似潮、 狂呼喉欲嗄、仰視南雲夕、山圻火揚蝦、流光似天笑、

藤公天喉舌、松达尔班列三台亞、一見解顏笑、青箱爲|拍手倶歌々、百年如俯仰、萬事從隆窟、名山儻再遊、

君寫、春宴羅

春宴羅珍饋´瓶 梅忿薫麝´舉袂拂瓊枝、雪點紅錦|待我畢婚嫁、

金吾不敢嚇、沈4

皎々寒月夜、横眠枕玉階、

笑視群卿訝、鈞天夢忽醒、歸來事躬稼、蕭索巖野中、

輻石荠筥映桑柘、農夫和子成侍 世子于銀臺邸、寓居樓下、生桐一

株、今僅三歳、高與樓等、子成乃會文友攀葉題

題桐葉

右女島

長風送海潮、來拂偃松樹、枝々激白波、疑是機中素、

上有神女祠、雲雨自朝暮

右水島

誰分玉井水、洼來孤島中、隨潮相上下、却不與潮通、

本奉君王飲、即今屬釣翁、

右日南

葦北多勝事、日南最殊絕、湯泉寒更温、芳艸秋不歇、

君儻問明珠、夜々海天月、

右赤松山

欲從赤松子便入赤松山、絕壁千餘仞、懸蘿不可攀、

歸來酌山酒、一醉即仙寰、

葦北雜

概懶獨酌´歡然互献酬、商叄恨已散、鴻雁聲猶愁、

胡爲行影斷、孤宿白河頭、忽枉相思字、不關雙鯉浮、

新詩貽玉案、滿紙見銀鉤、明月可怡悅、又堪生隱憂、

不有君兄弟、奈吾獨夜幽、

肥後文獻叢書第二卷

下有虎牙村、奇巖自醋齶、伊氏家其中、何年歲星

頴敏垂髫日、讀書如喙蔗、飯牛抱經濟、捫虱談王霸

亭4靈雨山、神秀贊玄化、時生瘤寸雲、甘澤灑炎夏、

大素約諸子、同用碼韻、作五言律詩數十

請余同賦、余已衰謝、不能以險韻爲律體、因

作五言古風六十韻、以贈大素、蕪詞冗長、雖

不足觀、然篇中所述、皆是實事、他日爲大素

立傳者、其或有所考也歟、

今人重蘭花、古人重蘭草、蘭花榧誠美、私爲蘭草嗟

幽谷可充佩、麗色徒自誇、欲向同心贈、天長日已斜、

贈伊大素

采蘭

猗々孤桐樹、生君戸庭、傍公館饒雨露、日夜長計青

蒼、采掇比雜佩、萬里寄家鄉、豈獨相思切、懷古情

更長、邈彼周天子、剪葉爲圭璋、输言不可戲、弱弟

封唐、周公垂炯戒、日月並輝光、少成若天性、能

使大烈揚、德馨溢天壤、萋秦滿朝陽、靈鳳棲其上、

窈窕紫庭翔、休明視今代、萬載瞉相望´來儀豈無日、

愼勿委雪霜、

詩、且以一葉遠寄熊府、以請余詩、因題此歸之、

故人采雲母、北山澗水濱、大陰秘水雪、清氣瑩子神、

采采欲誰贈、念此平生親、嘉蚘重尺璧、服之度千春、

幽聽松樹下、颯颯風袓聲、風斷聲不斷、無乃石泉鳴、

能令三伏冷、又使萬慮凊、瞑色不歸去、賞心待月明、

和子成遊團谷采雲母見贈

常時遊梵界、能合心縉寬、今日遊梵界、何事生憂端、

驕陽赫天地、萬物已焦乾、小民總咨嗟、雩祭滿江干、

填填伐金皷、苦願起泥蟠、神龍在何處、潭水已爲湯、

我聞法王力、回天亦不難、幾時降慈雨、滂沛十方歡

清盥前川水、徘徊古石壇、還顧青雲府、冠蓋方辯盤、

爲霖豈無賢、救旱又有官、嫠婦不憂緯、

婦不憂緯、跼跨心徒殫

松下聽泉

大旱遊妙永寺觀雩

日日看山坐、滿山只白雲、隨風線裊裊、作雨已紛紛、

風雨滿山暗、何處雲中君、

歸來空惆悵、恨不共歡樂、高縱不可追、矯矯雲間鶴

擧觴繪紫鱗、嘉貺慰寂寞、遙望隱處拜、猿鳴山月落

看雲

賦此以述欽嘉之意、

日夕王弘之、偶入上虞郭、門内置魚去、兼之宜城酌

縱當作蹤

老去仍塵累、空逢三五秋、豈無別廬月、城居强倚樓、

故人室非遠不得同賞遊、何時棹壺水、雙照擬仙舟、

誰與扣門者、無乃嘯詠流、報言小謝至、倒屣出相留

及之,

篇中

腰鎌行野徑、秋熱汗沾衣、陰雲聚復散、赤日吐炎、

星河終夕煽、草露早晨晞、唯有行牛喘、無鳴雁13

如聞奧羽塞、蠻夷犯海崎、蜂蠆猶有毒、防禍在細微、

廊廟運籌策、藩維待指揮、大原期薄伐、德神所、

胡元十萬虜、三人得生歸、俛仰懷今古、安知是與非、

札國憂何在ˊ豳風事不違、但願沐膏雨、稻粱滿地肥、

琴山先生中秋獨坐、見寄懷、次韻酬之、转思燕故

丁卯之秋、久旱苦熱、偶然成咏、

不向青山去、不臨綠水彈、携琴行野徑、夕露沾衣寒、

應是竹林下、相邀靑眼看、

題野徑携琴圖

宇宙悠悠爾、山川自古今、憑高覽前跡 慘憺日云淪、

荑花舊雄鑌ˇ唯餘松樹林、城郭犁爲田、飛鳥夕哀音、

感此長嘆息、歸坐理鳴琴、威鳳翔

望菊池氏墟

爲報衛叔卿、對局將有人、

秋山雨忽歇、白雲繞石牀、娟娟松際月、繁露涩其光、

靈臺澹無事、閑坐夜將央、南澗有蘭蕙、微風送暗芳、

其 八

日入樵者歸、棲林鳥亦靜、坐待花間月、石鼎正煮茗、

心與道爲隣'跡將人異境、惟有遙寺鐘、傳響度雲嶺、

其 七

隔林聽足音、無乃物外友、果來扣柴扉、相見且携手、

步畦摘嫩芽´臨水蔭高柳、日落不遣回、一瓢自有酒、

其 六

雨餘春水漲、繞舍西復東、冥冥花隱霧、嫋嫋柳風、

爲蝶夢猶適、非魚樂自同、幸遇無爲化、於焉得養蒙、

其 五

寒雲!

F時飛、隨風花外颺、映日草間微、

下掬字疑握字訛

掬之不盈掬、漸々濕我衣、此物何足、歸來掩岩扉、

風威朝自微´暄氣隨初旭、陰壑雪未消、陽坡草已綠、

荷鋤就田疇、農務各相勗、祇恐桃李開、儻有往來躅、

下有千歳苓、服之駐容顏、容顏苟可駐 復戀塵寰、

源泉聞亟稱、巖石紀具瞻、況乃朱景變、商臙赫炎、

後嶺陽已沒、前浦魄方糧、洲渚白露下、凄其葭與菲.

欲緩吾心曲、望々就酒帘、瀕海多商客、十一逐魚鹽、

層城臨大都、夾道列飛櫓、北里歌未畢、南隣磬已添、

千里風化洽、四疆雨澤霑、文儒萬鍾祿、劍客七星尖、

交朋取麗澤、自牧在流謙、久要豈可忘、恒德莫不占、

乘時皆鳳擧、抱才孰龍谐、獨有樗散質、吐納學海蟾、

伊九載家醞、及所釣魚見過、會予不在、置之而去、

走筆次水子邦江行韻

廢井水冷冷、甃裂走沙岸、仙禽不復來、千載綠蒲、

改作、 按岸去聲係翰

井深如可食、我衣豈不澣、

翰皆上聲、係早、

不見古時人、惟有古時井、年年苔蘚滋、夜夜星月影、

我來汲幽泉、悲風吹短綆、

春朝風雨晴〻淼漫前溪水、水自山中來、遙々入城裡、

借問城裡人、桃花至不至、沘道上去並押〻他日當改竄、後問清

詩選、有此韻押至字者、似無妨也、

家世徇微祿、豈復辭塵務、偶來寓松林、荏苒歲云暮、

稍知隱士心、朝野不殊趣,出山歸去來、烏鳥思反哺、

前 溪 已下三首萬松廬雜䃯

四九二

紫溟先生遺稿卷之一

隣人對酒

昨夜夢名山、今朝揮袂起、瀑布三千尺、欲嗽銀河水、

矯首望遙天、霞彩粲成綺、其間多靈奇、冥搜無窮已、

攀星摘匏瓜、下谷援葛藟、不拊洪崖肩、則拊雲將髀、

視君在蹊路、屏營嗟塵累、持贈七襄章、欲奪雲錦美、

歸來何以報、珠樹有瓊、

酒有忘憂名、何必種萱草、春風動幽酌、愁緒已如掃、

百年三萬日´隙駒使人老、擾擾皆歸証、何曾辨壽夭、

愛此白日長、勿失青春好、自非王子喬、誰能到蓬島、

往觀北鄉瀑布、酬坂惟熙贈別作、

岐山無鳴鳥、魯郊有獲麟、仲尼一反袂、天紀已崩淪

煢然寓宇內、長醉養吾眞、頹臥在紛境、何必寂寞濱、

兩曜互回薄、卉木藹芳 刀春、寤言揮綠綺、聊寫無累神、

其 二

春日獨酌

五言古

紫溟先生遺稿卷之一

四九一

古松萬餘樹、結宇在其間、黛色無時變、風聲終日閑

余寓蘇山、結宇松林中、名曰萬松廬、塊然獨處、

吟咏自娛、

偶爾故人來、談笑日已沒、復茲携壺傷、散步園中月、

時菊一何妍、使我幽興發、柢恐嚴霜墜、秋芳忽已歇

萬松廬八首

秋夜與伊大素涉園

性僻耽丘壑、弱齡作冥搜、金嶺萬餘仞、神秀冠九州、

上通天帝座、下屬環海流、沓峰紆何鵲、日夜積水浮、

紅旭初霽時、攀險來超遊、我馬玆者矣、冀駕彼青、

長嘯驚飈響´遙斷雲稠、玆行諒可樂、聊與壯志酬

屈虹如旌旗、霞氣縟綢繆、衆山皆培樓、絕頂獨夷猶、

「脫然遣累、富貴又何求、天門何佚蕩、巍巍十二樓、

側身欲往從雲路恨無由、化遷眞可慕、此生如蚍蜉、

古來登仙者、誰能保千秋、

山居改寒服、和暖晝多眠、頹陽紋餘照、徐步愛林泉、

宇宙何悠悠、長嘯憶葛天、良友不須招、鄰里自周旋、

呼童撿囊底、幸有沽酒錢、堂上陳壺觴、孤燈亦

坐臥欣自適、勸酬各陶然、此間有勝地、難向醒者專

登小金峯 時年十六

寂寥祠廟鎖春雲、观雕

軍鬼

發星山下雨紛紛、瞑色鐘聲渡水聞、異域止帝威已盡、

帝疑啼訛

十二文

水公子英風戰勝新、臨流自錦衣塵、只今唯有長江水、

錦

紅蓼洲邊思殺人、3

十一

生仲

生前樂志論総裁、

光悼

夕陽亭畔重徘徊、綠水青山望裏開、嘆息當年仲長統、

林泉何事忽興懷、米府調人當日偕、一別隣邦音信少、

遠遊今更在天涯、洞

九 佳

樺

始識興懷今古齊、駹

生往歳流觴擬會稽、群賢花下醉相携、重來愁對林泉色、

八齊

仲間小陸每相俱、逸氣翩翩千里駒、一自秋風催玉樹、

無人更得驪龍珠、燐

靈雨山人下澤車、翛然長嘯此中舒、修竹風聲今不聽、

錦川何處寄雙魚、熿

肥後文獻叢書 第二卷

古城貞吉 校

氷簟銀牀暑退時、羅衣經繸任風吹、秋聲不入宮中樹、

唯有班姬暗自悲、

賦秋風

超然亭子水之濱、黃菊丹楓秋更新、爲報蘇公今老矣、

空將勝地與他人、

超然亭

林表千年古梵關、泠泠孤磬暮烟間、蒼崖壁立如無路、

片月還能引我攀、

十五

勸君沈醉莫爲難、月出偏宜瀨石灘”蒼龍峽口歸雲靜

白鶴橋頭過雨乾、

十四

節後加餐菊尙繁、故人况 铣復携芳樽、九州何處無行樂、

作賦還將吊屈原、提日的田

十三元

中霄劍舞緩邊愁、蕭颯悲風大漠秋、滿赍蒲桃傾未盡、

塞上宴

修琴歸去度林丘、深竹長藤徑更幽、縱是白雲多變態、

潺湲澗水舊時遊、

送人歸故山

紫陌春風動柳條、玉樓啓送鳳凰簫、誰知萬里征人恨、

吹到天山雪未消、

春 風

三千粉黛總成塵、丘塚荒凉不見春、縱有香魂歸夜月、

漢宮誰是舊時人、

宮人斜

石上圍碁事己非、片雲相送入儲闈、紫芝秋老空山裡、

極目高天鴻鵠飛、

四皓廟

班蛇谷口起秋風、回雁峯頭月似弓、禾黍只今農畝地、

旌旗憶昔戰圖中、

又

漁歌聲斷月如鉤、海霧茫茫筑紫洲、一時王屋流局火、

留照西溟萬里秋、

四八九

宗恐令霜露濕征衣、

川

川生此去布帆飛、聞道秋風破塚歸、飄泊只今何處所、

五 微

憶昔杜鵑花落時、南州徐孺此追隨、今日雁飛書未到、

沈沙古榻碧苔滋、 赫

四支

白髪霜凝映酒缸、丹楓日射照紗葱、陶然酢臥高樓上、

笑道元龍氣未降、

桃花昨日此相逢、黄菊今朝帶露濃、回望舞雩風詠處、

鋅潭秋雨有飛龍、

二 冬

終年擾擾市朝中、烟水雲山夢不通、一上高亭多遠興、

秋天縦目送飛鴻、

夕陽五刪走筆作

亭雜詩 藏怕一東至十

一夜繁霜覆漢營、胡笳何處月中聲、秋風吹滿沙場曉、

萬馬蕭條不敢鳴、

胡笳曲

明朝應飲月支頭、

敦盛墓

秋風惟見白雲飛、

大嶽臨荒野、軒皇昔會神、風動女羅晩、依依如有人、赤膚峰外雁南歸、墨水河邊葉欲稀、古昔六龍巡幸地、

初秋斑雜詩三首

洞門明月獨舟、瀬尾貢王室獨遊寂寞濱 尙憶西巡日、

長濱

雨遍人寰、

海隅宿靈巖洞

出定、雲氣繞前峰、下瞰春潭碧、一聲喝懶龍

杳蚰宜臨眺、雲歸人未歸、暮禽如有意、故向故山飛、

征西

、

故人星散獨憑欄、餘雪江樓夜色寒、唯有梅花枝上月、

春夜眞僧朝懷

一路響春風、

蓮臺寺吊檜垣孃

元宅柳

幽、

大江流分洲渚多、中山詠新蟬

江當作堰

獨大歌

石瀨在何處、蒼松辨不分、晚來風忽起、颯颯水聲聞、

巫山高

瀨古松

七言絕句

飛橋當大路´行客影清波、柳色春催別´車聲夜更過先肥後文獻叢書 第二卷

、

宇治往弄秋色、溪深覺暮寒、松間千古月、能得幾人看

處多淸露、金莖何必尋、預知朱景烈、先就綠陰深、

連湖水、綿綿垂柳下、欲尋湖上寺、寶鐸開幕府、天將出宸宮、草木威風偃、丹靑遺廟空、

鱗負帝陣誰莫勇、憐君獨不殤、春風吹古塔、逆浪至今揚、

巫山高插埜天青、十二峯峯石作屏、忽爾長風吹霧散、

九江三峽晝冥冥、

堰河寒影落清波、晴天一夜西風急、

兩岸爭歌無渡河蓮花臺下水之濱、鏡裏蓮花映日新、惆悵美人何處去、

白河依舊不揚塵、

江樓有朧朧猶似舊時看躋礬、坐誦黃庭對碧山、衣上霏霏雲氣濕、

曉來遙紫溟先生詩集

玲瓏仙嶽、迥在海雲端、大士飛銀椀、盛來六月餐、

落日千年寺、秋風萬頃田、双双外雁、咖果下蒼烟、

雲仙嶽雪

當作街

不見梵王宮、白雲滿谷口、忽然半夜鐘、虛牝月中叩、

平田落雁

平野接城南、綿綿驛馬路、鈴聲夜來微、知與秋風過、

長谷寺鐘

瀑泉何處落、山翠正霏微、磬聲纔報午、天際玉龍飛、

驛路鈴聲

秋不渡水、明月在中流、時放扁舟去、飄飄鏡裏遊、

午時瀑

開窯看落日、明滅白雲峰、中有幽人在、應聞箇裏鐘、

白河秋月

美人葬魚腹、千載水茫茫、香魂招不得、岸菊爲誰芳、

金峯夕陽

白菊投死處云

菊潭 訓婶將成光夫人

昔年高臥處、今日獨遊身、幽鳥驚人起、青山心自親、

無漏寺雜咏十一首

垂蘿鑽洞門、是我舊栖處、日暮白雲歸、依依不忍去、

<

蕭蕭蘆荻暮、寒雁下遙空、影落水中月、聲傳原上風、

新橋行人

出陰雲滅、風光滿地新、茅堂面東嶺、不著負喧人

原良落雁

連山春雨、無樹不開花、欲引看花客、

鶴山旭日

客、新添賣酒家、

巖下有清泉*左右蒼苔積、終古人不知、時時麋鹿跡、

尾黙櫻花

中流纔暝色、前已清輝、金波浩無極、獨把釣竿歸

北山清泉

遙遙山際寺、隱隱樹中鐘、樵夫歸已盡、獨與白雲逢、

伊川秋月

了性寺晚鐘

歸鳥沒何處´秋空不見雲、高高紫金嶺、惟有夕陽、

薩州巖均園亭雜題八首

昔人有古墓,乃在白河頭、昔人不復汲、千載水空流、

金融夕陽

作孤

乍向清波映、還過密篠微、凉風颯爾至、點點入禪扉、

檜垣墓

沙汀螢火

二子中需敲火新、連牀淸話滯歸人、宿春幸有黃粱在、

因賦示大素、

伊大素宿草堂、將蓐食還山、辛伯和子成執爨、

何來江上一孤舟、舟上無人獨自流、波蕩風壺無遠近、

潭深渚淺任沉浮、寧隨海客馴鷗鳥、豈逐仙槎犯斗牛、

不見吳王當日事、牙檣錦艄亦悠悠、

賦得水上虛舟

落魄當年此結營、源家將種本豪英、指揮九國威先振

喪亂中原難未平、天慘兩宮爭鼎日、人悲乘矢叩輪情、

至今欲度高秋雁、殺氣前峯忽自驚

鴈回山懷古

革君豹過飲、時將還鄉、因賦贈別、得魚、

閱君彈鋏嘆歸與、一夕相留醉草廬'只道肥城堪下鳳、

深塹趙舍總無魚、舟經溟海羈愁、家傍丘墟戰畧餘、

歷見諸藩如綺錯、何門更可曳長裾、

城北温泉何處求、山中蒸氣與雲浮、曾聞駕鹿仙人至、

不讓乘車玉女遊、境自羲黃存古俗、渠分鄭白引殘流,

詠風春服平郊路、直上桃花渡口舟、

鹿門溫泉

枉似桃源僊隱地、白雲深處犬鷄聲、

經舊宅

人日年年會草廬、豈忘春色禊川傍、白鷗浮浪水全解、

黃鳥遷喬樹欲芳、老去新詩猶結社、興來沈醉自爲鄉、

若非細馬經金市、須是輕舟到石塘、

五言絕句

人日簡諸君

遺編讀罷獨傷情、逸思飄然弟與兄、燕市悲歌擊筑、

緱山仙駕並吹笙、池塘芳歇他年夢、竹帛光懸異代名、

唯有雲崖栖隱地、啼猿夜夜斷腸聲、

讀伊氏兄弟猿崖遺稿

城裏相思一寄書、山中勝事近何如、玉笙縹緲仙人嶺、

絳旆依稀帝子居、夜靜常多驚露鶴、春深初有上水魚、

清光不改松間月、更爲誰人照草廬、

代簡以問蘇山舊友 萬松、故七八及之,

余嘗隱于蘇山、名廬曰

二月長江春水來、野航乘興日徘徊、仙源窈窕看花人、

極浦迢遙帶雨回、清世獨懷浮海志、蒼天狗棄濟川才、

縱令泛宅堪終老、物色寧無及釣臺、

野航爲某逸人賦

旅食休嫌白屋貧´唯恐陳家忘着算、自誇范命未生塵、

請君努力加餐飯、此去雲山誰與親

四八

御溝春水動宮牆、鵷鷺趨朝紫陌長、萬古衣冠天北極、

諸方賦貢土中央、東關月送驊騮影、西海霜傳橘柚香、

紫溟先生詩集

春興

當年意氣共揚揚、並馬春遊遍帝鄉、消息不傳鯨海外、

夢魂遙到鳳城傍、逢時漏收寒箭、別處殘鐘殷曉牀、

通夕不知雙疑白、依然共在結交場、

夢長安舊友

城埧淑氣入初年´况復良辰興可憐、幾處新花開彩勝、

吾家舊物有靑氈、一樽客至啼鶯裏、五柳風輕繫馬前、

此日晴光人共得、更歡林下對諸賢、

人日草堂集

仰見飛泉界赤城、雪崖霞壁激波鳴、日搖象罔探珠影、

風疊憑夷擊鼓聲、急峽遙從金嶺拆、長流直入紫溟平、

當年洗耳人何處、一曲迢迢萬古情、

皷瀑

彥山高士早餐霞、不信人間鬓作華、大道豈唯茅氏訣、

靈蹤元是葛公家、笙啟夜度瑤臺月、袖裏春携閬苑花、

縱有漢廷來玉帛、蒲輪何似五雲車、

贈彥山道士

亢龍豈獨終天悔´列聖風濤共播遷、

五霞山棧鑿空行、峽盡桑麻土漸平、戚里遺孫長避跡、

荒邨過客獨含情、一成無復興王業、三戶徒存舊國名、

四五

過五霞村

播陽會到枕君祠、崖上岩林氏碑、今古祠人推獨步、

風雲聖主喜同時、芳郊屢扈看花駕、赤石何論帆海詩、

島嶼微茫烟霧曉、歸舟望斷轉相思、

賦得秭大夫祠、送中川生還赤石、

葛城山靄日霏微、伊昔眞人結作衣、驅石長橋虹已斷、

倚雲高堞雉空飛、靈竗欲問三淸事、瑞檢深尋六甲威、

知爾九還丹已就、長懸紫氣護皇畿、

送道士城山城

一作葛

采石磯頭秋色寒、蕭然悵望暮雲端、昔人已跨長鯨去、

此地空留明月看、千載王風生蔓草、一時騷賦灑芳蘭、

仙遊今在名山上、應笑人間蜀道難、

擬采石磯弔李白

受成旌節滯天涯、監國城樓靜歲華、淑氣三春隨玉燭、

輕寒人日讓金花、自憐伏謁趨高閣、猶憶承恩托後車、

使者問安如咫尺、昇平四海總家、

當日壯遊如夢寐、雲烟何處帝王鄕、

人日恭謁 世子

著屐何勞問遠蹤、白河東畔即盧峯、已能許酒容元亮、

自笑談經似次宗、扶醉淸泉松下漱*經行明月竹間逢、

和獨有佛國二師贈答韻

太素獨有與諸生過古溪堂、余後至、得眞字

逢著閑鷗心自親、登亭暮色古溪濱、瑤琴彈罷嵇中散、

麗藻裁成休上人、聊向醉鄕消白日、漫投詩社羡靑春、

餘寒密雪霏霏下、愧似相如授簡新、

空山一路忽囂然、萬樹風回谷響傳、坐視聚沙童子戯、

何殊逐鹿戰爭年´鴻溝一割芙蓉水、龍氣將浮荔薜烟、

却笑支公貪閲寂、此間元自可栖禪、

谷隱觀群兒捉戯

山俊度自東武歸、見示其詩稿、賦之答寄、

綈袍不改故人心、爲我新傳東武吟、借問樓亳臨大路、

何如山水有清音、歸家歳月青氈在、爲客風霜白髪侵、

少日同遊猶記否、披衣箕路薜蘿陰、

聞道千年形勝存、相逢此日問雄藩、蜻蜓州蠹瞻南極、

鹿子城高俯海門、不但俊髦遊泮水、兼知賓客倚平原、

杜鵑花落林亭雨、祇恐他鄉易斷魂、

夕陽亭集、赤彥禮至自薩州、為贈、

此中自有直姿在、笑殺支公鎩翼情、

肥後獻文叢書 第二卷

菊花池水浸烟霞、雲上城樓世己遐、代地頻開宗室府

燕都遙問使臣槎、徒令西海歸黃銭、無奈南山滯翠華、

奕葉忠勳終不冊、後人搔首獨長嗟、

日月重光承久年、上皇猶自弄朝權、震威不假將軍地.

中使頻催歌者田、寇至山川無阻隘、運移城闕入烽烟、

詠史

史終

其 三

勤王將略擅關西、反覆諸藩避皷鼙´肥筑風雲餘戰地、

金湯歳月入禪栖´鳳儀唯聽吹笙過、熊耳曾期積甲齊、

追恨九州環海限、無由上國斬鯨鯢、

懷昔乘與塵再蒙、冥冥氛祲萬方同、誰知海上勤王略、

獨頼山西出將功、轉戰九州軍益壯、折衝千里鎮偏雄、

舊墟不盡英靈氣、筈嶺鞍峯共磚葱、

菊池懷古三首

郭外幽期一解顏、高亭載酒共追梦、暗香已動春前樹、

餘照還開雪後山、世事糾紛玄尚白、年華荏苒鬢成班、

彫弓玉勒雕家子、獵罷平原帶月還、

歳抄夕陽亭登眺、同諸子賦、分韻、

寳珠遙夜相投處、始識寒潭有二龍、

南紀名蹤積水限、地圖今日爲君開、黃龍曾負王舟度、

白鶴猶從仙嶠來、天濶征帆過樹杪、月明飛浪拂珠胎、

送人遊明光浦

城裏幽亭興不孤、隱心何必問江湖、寓居一日先栽竹、

嗒坐終年獨捷梧、流水入琴操古調、名山滿壁掛新圖、

我來醉臥秋風夕、月白天南群鴈呼、

井子瑤鵲巣居分韻

聞說春歸改物華、依然臥病獨長嗟、烟霞難着登山屐、

歳月空懸下澤車、海外寄書求藥物、江邊飛夢入梅花、

交遊滿地無消息、咫尺翻成萬里賖、

早春病懷

玉月玲瓏、

由來爲政推寧靜、知是麻姑信不空、

灬似是

舘外潮流萬里通、寒聲日夜擁長風、羔裘暇日逍遙處、

寄題淺野大夫潮鳴舘

把酒山中夕、英英雲氣催、能將膚寸影、細映十千盃、

流彩金波動、浮香玉葉開、初疑素蟻泛、忽訝白衣來、

借問無心出、何如盡醉回、黃公壚上夢、元自勝陽臺、

七言律

賦得白雲臨酒

鵬翼垂天眺望中、極浦遨波烟黯滄、淸涯餐誰畫仙禽傍化城、逈然毛羽盡分明、長看萬里凌雲志、

似聽三秋驚露聲、衣裏明珠何必獻´牀頭金錫不須驚、

四八三

同詠壁上書鶴

紅塵不到綠河邊、况復香臺擢海天、已許水壺能勸醉、

何妨繡佛此逃禪、培風萬里飛金翅、水月三更現玉蓮、

心地不唯超物外、飄飄身是酒中仙、

夏夜法宣寺

孤客高秋故園情、回頭遙指五雲生、暫時華舘傳杯醉

明日滄溟掛席行、別調琴凄鴻雁滔、加餐書潤鳳皇城、

關西縱是無夫子、待爾重遊尋舊盟

送客歸京

遙指南畿芳野間、悠然清興滿名山、千盤路爲尋花轉、

百丈梯隨飛鳥攀、先帝行宮春草逼´藏王堂閣暮雲閑

從來此地多棲隱、待爾明時招待還、

送人遊芳野

壯遊何問方瀛路、直上瑤妃十二臺、

圓字徒補字訛

浪華賴生寄三原妙正寺圓索詩因賦贈

三原城畔古禪關´想皃烟霞縹緲間、欲問虎溪陪語笑、

難從鯨海一躋攀、潮頭月出摩尼浦、雲際花明優鉢山、

詩賦慚無金石響、投來圖像謾怡顏、

飛錫逼遙空、弄月蓬丘上、看花芳甸中、「但使菁茅入、寧分玉石焚、屯岡休戰伐、率士樂耕耘

三衣歸鳳刹、一乘化龍宮、柳域作一 池淨芙蓉水、一鎮府遐方靜、壺碑肇域分、預斯旋白施、吉甫頌聲聞、

一東

許國三朝將奧地隣毛狄、要荒列雉城、頻傳黠虜聚、忽覩總戎行、

世職推華冑´朝恩假夏卿、幄中千里策、麾下八州兵、

山嶽振金鼓、風雲護旆旌、新降因壘至、舊部出關迎、

昔厭河湟變、今知瀚海清、佇聞橫槊咏、收入凱歌聲、

其 二

茅吾徒橋邊路、新晴興可乘、高城纔夜柝、近市己春燈、

何客聯鏕語、茲堂接袂升、先趨凾丈席、遂見盍簪朋、

羅當作遏

坐愧蒹葭倚、交叨膠漆稱、絳霄能醉德、豈但酒如澠

春日遊高同氏山園、懷伊大素、前日同諸子、

過宿大素山居、

茨齊不剪、黍稷德愈香、山潤經探玉、江淸舊深裳、

幽人思展拜、遠地戒行裝、興發烟霞路、遊成壯麗鄉、

鹿關乗曉月、熊城弄春芳、更聽朱紘唱、應裁淸廟章、

擬送源將軍征奥州二首

配天嚴祭祀、瀕海肅增傷、爲愜如雲望、猶和就日光、

提携黎首集、陟降百神翔、持節周宗伯、振纓漢大常、

教將神道設、命自帝庭揚、垂統鴻基固、貽謀燕翼長、

楊柳將詞藻麗〝綴簡編靑、閑舘邀鄉月圍城走使星、

遺封隨世大、令德至今馨、鳳野松楸遠、龍山廟宇、

霜鐘酆嫋嫋″玉劍氣冷冷、知是騎箕尾、終天赫杳冥、

正月十六夜過辛氏既醉堂得燈字

神廟

疑塲訛

拜

送林香蓓卸風、掩關留野客、行膳命天童、坐久霄鐘徹、

談闌曉漏通´此生徊薄祿、何日退微躬、而我隨師去、

雲遊萬里同、

藻一作餘

四

·肥 元曠逸、何地不逍遙、己訪桃花隱、還遭桂樹招、

侵晨尋谷、忘景怼山腰、雲點丹霞璧、泉飛白石橋

幽人掃榻待、稚子出門邀、仙境乾坤別、靈丹歳月燒、

石糧經餉禹、松子欲遺堯、拔桂垂蘿裊、鶴餐餘芷、

觀奇詩屢就´逐興酒還消、對此沈冥趣、思君拔俗標、

向來同枕席、俄頃隔娸霄、猶憶勞鷄黍、翻疑夢鹿蕉、

光陰一過客、今古幾王喬、但喜休明代、巖阿未寂寥、

宿道冲上人蘚華室、上人嘗遊歴京師張州之間、

得大城訓導之勢州傷、安邊奕世勳、親提貔虎士、遠掃犬羊群、

月滿隨弓影、星明動劍父、投醪河上陣、挾纊雪中軍、

冲公心不佳、紫溟先生詩集

空齋風雪裏、坐對一燈然、金粟先相簇、朱櫻忽己圓、

非關賓客至徒得兒女憐、夜久從明滅、寒光書帙邊、

松浦望夫石

雪後燈花

後一作夜

那愁花已瞑 ˙絳燭吐光新、舞席光憐影、歌梁更見塵

奪將朱戶月、惱殺白頭人、不照厭厭夜、其如苒苒春

春誦來爲客、冬溫去省親、書生推領袖、經術已紛綸、

日淺交情密、天長別恨新、青衿將彩服、冀厭往還頻、

詠燭

州圖天草郡、形勝海溟中、擊拆相聞地、懸帆總候風、

常愁鄉信濶、暫謝秕盟同、待爾重遊日、杏壇花正紅

送脇子善歸覲

口尋初地、池陽憶昔年、山圍棲鴿室、水涸躍龍淵、

潛府巖耕闢、沈灰野燒傳、至今青史裏、猶見白公賢、

送田子正歸省天草

紈袴誰家子、調來碧玉蹄、忽衝垂柳去、還踏花落嘶、

蟻垤步何穩、龍庭行不迷、明時無戰伐、空望隴雲西、

遊谷口過池上村、甓味生池舊跡、是道使君所鑿

也、今涸爲田、

看調馬

曩時當草味【維嶽降英靈、政就丹陽尹、勳傳寶鼎銘、

一繩維將樹、七日哭秦庭、白水空懸誓、黃金不鑄形

風雲還際會、關塞豈飄零、客禮頻參幄、兵機每建瓴、

龍山謁 秦公廟恭賦十二韻

五言排律

愁人不能寐、長夜復如何、徒有滄洲戀、誰聞白石歌、

鶴鳴知露冷゛猿嘯覺風多、明鏡寘無賴、朝朝鬓轉播、

辛家集、主人出此器"使坐客賦之"

雙行厨

相傳朝鮮之役´某將所携也,

壺簞會萬里、人去物猶留、推食鷄林戰、投醪鴨綠流

不勞陽豎飲、堪惜子房籌、四海今無事、好共花下遊、

客遊秋未华、何處拭清砧、水國寒偏早、風樓響自長、

己催千里雁、還動五更霜、爲報家人道、他鄉異故鄉、

不 寐

精衛填東海、愚公移北山、運箕直自苦、街木未曾閑、

今古滄波上、子孫幽谷間、成功雖有分、志士不辭艱、

羈中聞早砧

披搖峯上石、傳是望夫石、孤介終天恨、企予當日情、

海風吹不轉、山雨洗愈清、妬殺春來

春來燕、雙雙掠水輕

精衛

里一作重

將辭五斗米、歸臥萬里心、時掇金光草、相思獨贈君、

遊小野村水石絕佳、相傳云、是小野刺史遺跡、

而小姫所生處、三首

城頭望蘇嶺、不與衆山群、樹色天晴見、猿聲日落開、

仙閣秋山裏、寥寥石磬聲、夜深風更靜、霜下月愈明、

傳谷驚虛牝、穿雲徹上清、洗心聽不畢、天末曉霞生、

望山寄人

汝聞隨師去、雲山何路過、雨中行客少、春後杜鵑多

水遶芙蓉府、城臨楊柳河、飄然携一鉢、到處好成歌、

月下聞磬

夜深人不寐、秋冷雁初來、忽使平居思、翻爲羈旅哀、

羽毛雲路邈、南北歲華催、昔日同袍子、望鄉何處臺、

送辨惠師從玄澥上人赴筑州

孤舘終霄話、寒燈照雨時、相逢元恨晚、暫別亦成悲、

淅瀝風吹葉、潺湲水落池、驚魂難作醉、屢問再遊期、

聽雁有懷

遊子投山舘、故鄉天一涯、杜鵑花落夜、神女雨來時、

衣薄春寒透、燈殘瘴氣吹、夢魂歸不得、耿耿長相思、

雨夜送赤彥禮歸省

雨夜離思

肥後文獻叢書 第二卷

樹認岳陽地、氣和雲夢田、如開湘瑟響、班竹晩風、

一作知

久想洞庭勝、披_忽宛然、乾坤不離水、舟楫欲浮天、

琵琶湖水潤´白浪浸遙空、昔到長橋上、今看素練中、

蒼松疑聽雨、翠竹似舍風、認得歸帆處、高林是梵宮、

題洞庭園

到一作過

晩別山僧去、遲遲向世塵、上方鐘出樹、荒埜目隨人、

多謝青衿子、能扶白髮身、幾回乘宦暇、勝地賞遊新、

題琵琶湖圖

烏鵲翻飛夜、魚龍寂寞秋、江邊開別酒、月裏送歸舟、

靑霧愁邊結、金波到處流、影斜人已遠、佇立白蘋洲、

遊谷院歸路口號示同遊

昔日絃歌地、悠悠世代移、花迷西子宅、草沒習家池、

傳彫管、荒碑滅色絲、猶餘波上月、夜夜似娥眉、

賦得江月送人

琵琶蔡姫曲、紈扇婕妤歌、異域風流盡、斯人麗藻多

一溪縈故宅、千載悵空波、唯有芙蓉發、蘭舟不復過

勝境如鏡美〝淸流繞翠巒、猶憐西施石、留在使君灘、

目斷春波渺、魂歸夜月寒、浮萍千載恨、飄蕩不堪看、

其 二

四

紫溟先生詩集

眠、

赤星氏別亭

1

杏花村裏酒、笻竹杖頭錢、野酌無人勸、樵歌過我前、

聞君新築處、乃在舊溪邊、荒野纔開徑、遙峯總際天、

桿花下井･禮禮雨中田、砥恐重來者、猶知沮溺賢、

野 酌

幽人難着睡、中夜撫鳴琴、四壁蟲性靜、疎簾月影沉、

長風傳逸響、何處寄知音、彈罷空長嘆、蕭條萬古心、

寄伊山人移居

忽值西風候、聊爲東武吟、諸侯爭起第、多士如林、

百二重洲固、芙蓉積雪深、曾遊如夢裡、身臥白雲岑、

賦得起坐弄鳴琴

新秋永德

德疑懷

飄飄終日雪、風定欲凝時、遠寺鐘聲斷、空庭暝色遲、

憐君披鶴氅、就我賞瓊枝、未盡山陰興、林端片月窺

金刀能剪勝、綠酒轉忘憂、初訝翁翁蟻、漸看泛泛鷗、

春風飛絮點、暖水落花流、共道杯如海、兼見芥是舟、

雪中喜諸子過訪

酒席追歡罷´歌臺極望空、吾將理舟棹、湖上伴漁翁、

戲詠酒中花

遙峯殘照盡、遠寺暮鐘傳、春草芳堪藉、何妨一醉老去登高懶、池邊獨自吟、忽聞金錫響、兼見白衣尋、

菊泛忘憂物、蓮成不染心、秋寒須取醉、水氣晚來深、

去路花應好、鶯聲日已繁、悠然天草郡'似向武陵源、

霧迷孤嶼、烟彿遠村、何時返輕棹、幽趣爲予言、

伊辛諸君將遊安寺、霖雨不果、過飲草堂探韻、

「幽期愁積

幽期愁積雨、雲霧滿山昏、不辨花宮路、還開里椰、

荷清珠不定、竹嫩翠初繁、對酌聽簷溜、幸無車馬喧、

九日池上、獨有師草伯信見過´得侵

支公棲隱處、何買沃州山、自有坦夷勢、斜連戸牖間、

青松色映、白日鳥嵘閑、一入烟霞路、聽鐘猶未還、

送芳生遊天草、分得十三元、

何歲剡東山、飛來落此間、危橋葛度、怪石踐苔、

幽趣雲將起、禪心水自閑、莫言雙樹淺、萬鳥此中還、

雲樹院前山

屋後雲峯秀、門前石瀨淸、千盤飛我屐、1 曲濯君纓、

瞑色花纔隠、春天月已生、興來相對酌、不覺玉壺傾、

松林寺假山水分得删

孤亭屋境外、微茫野田中、終歳無車馬暮春引冠童、

捲簾芳草雨、拂檻落花風、欲擬出公醉 暮分樽酒空、

欲擬出公醉˙暮分樽酒空、

續氏別業和辛伯

東海之東日出光、五采煥然拂扶桑、大古神皇出其傍、

天冠地履垂衣裳、爾來文物何郁郁、欲跨五帝越三王、

仙使往々齊玉帛ˊ爲觀土風入李唐、李唐天子含元殿、

蕃客如雲不敢當、勅令畫工寫眞貌、每稱君子在東方、

豊意東方君子國、妖氛屢起大陽蝕、永祿年間四海分、

封豕長蛇紛相食、何人新說胡服功、萬古流風一時空、

故人夢故山、故山白雪裡、覺來日色高、拂袂辭城市、

城市無以開心顏、雲山萬仍待君還、舊廬去天不盈尺、

河漢聲流戶牖間、牽牛服箱向歸路、月中桂樹行可眠、

世人不知高士意、借問還山緣何事、君道山中枕石眠、

笑他鍊石補靑天、君道山中騎鹿行、笑他逐鹿群雄爭、

人生富貴安可保、服藥求仙苦不早ˋ 琴心三疊絕世情、

丹鼎九還奪玄造、知君他日必飛昇、世路栖栖吾獨老、

冠服引贈伊大

還山歌送人

箭筈峰頭雁空來、沐猴而冠者誰子、猛威卷地大風起、

方一作古恐非是

原廟－時逼萬方、荒苔今日無遺跡、俯仰古今感慨多、

請君起舞我且歌、我歌寒谷驚虛化、君舞秋風吹女蘿、

人生到處不行樂、其奈義和不駐何、君不見安石東山

事高逸、時來一爲蒼生出、

肥後文獻叢書叢第二巻

日把長竿釣岸俟、一朝忽獾一雙珠´顆顆欲奪陴璠美、

殊勝神女贈漢皇、不讓靈蛇報隨氏、老翁深交有馬君

投之云君德可比、馬君幾歳客江都、赫赫詩名都下起、

彩筆一揮爲此酬、粲如三花挺玉棠、希世之寳希世才

清輝映發一堂裏´荳唯淸輝滿一堂、遂令傳誦及故鄉、

故鄉故人常相憶、忽得新詩喜欲狂´此日草堂會佳客、

四座傳杯歡未央、熊府城頭暮雲滅、蘇門山上月出光、

朗吟擊迎明月、疑是暗投自東方、

惆悵春光盡´徘徊夕照中、落花皆逐水、飛絮不關風、

五言律

1

客有誦馬雇章謝深川翁贈雙珠詩´因賦寄彥章、

燕都城外深川水´圓折方流幾千里、深川老翁髮皤

诶一作溪

斯疑期訛

彰施五色應有斯、

天地慘澹變於恨、人道殆將牛馬同、運移亂定百餘載、

嘆息斯民有遺弊´垂淚總覵漢官儀、被髪猶除伊川祭、

伊子嘍古之狂、妙年負笈遊帝鄉、威儀逼問三千禮、

衮冕親看十二章、屠龍技術無所用、婦來搔首訴彼蒼、

吁嗟伊子亦何悲、且乘春色醉金卮、即今熈熈唐虞世、

四七月

紫溟先生詩集

影落琶琵峡間水、誅茅三歲住其中、臯臯清猿猶在耳、

靑篷峯頭殘月低、玄兎谷口暮雲越、皤然一日入都門、

勝境迢遙勞夢魂、宛如晉時武陵客、出洞忽失桃花源、

難一本作雖恐非是

故人載酒偶相看´故人情勝恐幽討 霞堂霜崖礬古道、

昔人龍山落帽遊、何似此際龍山好、絕巓箕踞酌金

野曠山淸四面開、鑑海寒火揚朱烱″浩浩洪濤幾刧灰

遙向蘇臺呼帝子、白雲縹緲去不回´黃花藩鎮雄圖盡、

觀伊大素猿崖草堂圖

故人舊隱北山裏、壁上新圖爲我指、猿崖千仞如削玉、

神龜背上文、

龍山蘦薜若龍盤、下有嘈嘈白水灘、涉水登山弄秋色、

龍山醉歌贈安公雞舳有雲

丈一作大

稱石丈是吾師、顧陸千秋誇絕藝彩圖何似天工奇、冢何纍纍、風何蕭蕭、四十六人一時死、天地冥冥鬼

塊然如伏嘉林下、何歲出頭戲綠池、吾 知 高士 筆端|神哭、前有權貴、不忍共戴天、後有湯钱、比之淸冷

妙、萬象從此坐淋漓、君不聞洛書歷歷九疇分、元是柔之泉、白刀之下適然笑、後人拊膺淚潸焉、

圯上老人定彩一作粉

授書、淸世兵符非所用、借問金簡今何如、

四十六士墓

龜文石歌贈蓬平山人

豈無桃李娟娟色、不似靑靑松柏枝、

推、

寄憶蘇山舊遊

賦得飛來石送仲伯盈

余亦東山有草堂、別來春桂幾回芳、人生百年難恣意、

肥子城頭花正發´僊人峯上猶餘雪、雙魚不上白河水、

一碼歸飛紫溟月、城中孤客有所思、月裏回頭望天涯、

東北回頭共渺茫、憐君臥遊入圖畫、牀上鳴琴清響長、

市朝從來大隱地、與君今日坐相忘、

秦人鞭石石凌空、飛來東海老人峯、長風萬古吹不轉、

君不見日東名嶽有芙蓉、積雪皚皚天外峯、駿海洪濤 天際氣與扶桑通、佐岳神功歲時多、片雲緆觸雨滂沱、

倒寒影、瑤光爲石隕其中、海若山靈深愛護、藏在貝|望秩應登宗伯典、六龍不巡空蘿薜、山下中生巖穴士、

闕瑠璃宮、一日忽嬰余且網、人間始見造化功、大陰|欲附靑雲辭舊里、風霜歲晏驚客魂、靈石絕峯愁夢裏、

氣結玄雲潤、銀樓縱橫如白虹、信陽高士米顚癖、得 仙衣容曳若相迎、掛席不待早潮生、老人峯下返茅廬、

之不啻連城壁、提携萬里來鎭西、堂上開囊驚坐客、

疑是女媧補天餘、笑他織女支機石、高士丹書無所月下讀書感述

小知效一官、心欲展微懃、簿書量衡石、秉燭繼餘曛、

苟非經綸手、治絲絲益棼、卓哉單父宰、琴聲不可聞、

我有萬古意、托之無絃琴、美人在千里、誰能聽此音、

馳情入遠雲、延目逐飛禽、冥冥日云暮、寂寂涙盈襟、

有所思鱊總歆-勔對之都諧故,

,高山流水、鍾子期或能知之、

三山臨重溟、萬壑走曠衍、其間生雲氣、微々若抽、

適與長風會、倏忽輕素展、樹樹漸微茫、遠帆互隱見、

須臾彌大虛、白日陰陽變、向來海嶽牀、冥漴不可辨、

晩間忽斂影、英英歸翠巘、仰見天宇、無乃地軸轉、

寄語山中人、可以共舒卷

瞑投三嶽窟、雲霧晦星躔、萬象不可辨、唯聽壑底泉、

天鷄緣一唱、海色已蒼然、扶桑吐靈、冉冉十洲烟、

蹇裳欲從之、洪波恐無縁、舉杯遙相屬、庶幾醉群、

何必控鸞鶴、遙遙朝九天、地上有美酒、大醉勝長年、

同前望雲氣

朔風吹白雪、柳絮漫寒霄、草堂一樽酒、聊以永今朝、

一樽酒難盡、暫時雪易消、君家自不遠、望君一何遙、

宿三山鍾美窟

閼宗之東增城之壘、山千仞兮崗崔、或云荒古之溟海、

黃龍蜿蜿翼御舟、帝不逝兮此豫遊、山貢瑞兮河獻圖、

百神迎兮群黎謳、元化運兮不可留、洪波佪分爲嵩丘、

撫蒼崖兮聊夷猶、舟不倈兮草木稠、霜旣降兮歲云秋、

「玄猿嘯兮風飅飅、君胡爲兮山之幽、雲眇眇分令人愁、

君好古兮博通、又冥 搜兮不窮、乘翔鸞兮適飛鴻、

叩虛牝兮問鴻渮影電滅兮不可從、嘅落日兮訴流風、

御船山歌送辛伯

偶然臨潭水、我影忽在玆、水流影猶止、我行影乃隨、

前水非後水、今姿異昔姿、長爲痷瘻、綠鬢髮素絲、

因知影與水、日夜共推移、一朝我已化 此影亦無遺、

「唯有空潭水、照人無盡時、

七言古

開軒納明月、讀我牀頭書、數行未及畢、眼昏字漫糊、

與頭望天宇、釋卷起蹶躇、豈是雲霧集 精魄早已殊、

懷昔蘇山下、孤介守窮廬、執志耽墳典、邃與人群踈、

月繼餘晷、披緇與影、曖曖烟嵐内、分明辨魯魚、

一日牽塵務、欲歸失故途、磬折合人老、日月互相、

濟人已無術、顧己復何如、還丹或可倚、吾將賦邃初、

泉日已淺、新居日已繁、相助鑿新井、群呼傾一村、

晨起秉畚鍤、息肩已夕昏、豈無累日勞、但願逢其源

重重土脈解、稍稍水聲喧、欣然挈瓶汲、兼得灌田園

玆邑縱可改、此非常長存、吾當乘化去、聊以遺子孫、

牧牛亦可樂、可樂其奈何、晨乘牛背出、夕扣牛角歌、

原芳草逼、無處不經過,黃牛隱東隴、白犢降西阿、

彼得眞性、吾亦任天和、不知肥與瘠、寧問寢還化、

往往飲沙汭、日長泮跡多、無復洗耳人、春水澹清波、

鑿井詞

解吾勞、孤觴聊復持、取適雖須臾、心顏亦己怡、

誰謂田作苦、守拙獲所宜、寄謝問律者、栖栖何所之、

牧牛詞

款訛

腰鐮晨出刈、終日未言疲、但恕風雨至 摧折忽無餘、

恕疑恐訛

春耕如昨日、秋獲已在玆、如何不勞力、吾業重三時

刈禾詞

紫溟先生詩集

五言古

凄凄景云晦、負荷歸茅茨、妻孥樂有年、疑語目依依、

吾亦雪朝簡辛伯彝

朝看雲出岫、夕看雲歸山、幽人終日坐、白雲往且還

往還與獨坐、無心各自閒、

量水劉丹陽、秤藥荀中郎、此事已千載、名士有遺芳、

嗟予負沈疴、悠悠臥孤牀、交遊日益疎、門徑日益荒、

二子執古道、日夜不離傍、豈啻交友誼、湯藥亦必嘗、

自慚衰朽質、無以答龕光、憑君尚能起、風詠逐魯狂、

看雪叟

澤中有故繩、山上有鬼絲、吾亦迨農、絞索正

朔風鳴曠野"積雪壓茅茨、柴燎當膏燭、黃梁夜更炊、

觸物動吾感、緬懷上皇時、上有結繩治、下有舍浦嬉

大運若奔波、淳源日以漓、物皆失真性、茫茫迷路岐、

孰能執古道、吾慕榮啓斯、人生有至樂、窮賤非所悲、

病中示辛和二子

東山不興雨、西山不出雲、嘉苗近將槁、雩祭各成群

土龍矯其首、村皷終日殷、已過遠郊外、又遵長水濆、

誰能凌倒景、爲我訴元君、假彼蛟龍力、滂沱滌赤氛、

此事安可得、久矣天地分、迢迢望雲漢、惻惻中心熏、

索綯詞

祈雨詞

北學中原幾許年。歸來秋興屬詩篇 同携泮水給

更醉匡威白吐筵。獅子寮床連一室 雁王珍菓際諸天。 樂汁集附錄

招

驊騮扶酔美風神。夢迷宇嶺藤蘿月°腹斷參河杜若春0

再會縱尋今夕興。相看恐不昔時身。

大坂城中客若雲。竹山夫子最超群°欲知夫子超群處。

與中井竹山

前山何處落花多

中郎都雅與誰倫4 東道雲山逐望新筆翰如花添粟麗。

擬送在中郎游東國

輕舟移棹入煙蘿。聽盡淸溪欸乃歌十里春風香不斷。

淸梵寥寥度暮天。處士烏巾來就酒 高僧麈尾坐談玄。

三人潦倒邀明月。恰在瀘溪溪水邊。

汎舟桂川

采樂蘇山路自長春風吹動紫霞裳-溪邊白石君休。

恐是仙家玉面羊。

柳市南頭接柳川。鑱過塵境即蒼烟花宮寂寂開地

宿柳川台勝精舍

送人探藥蘇山

莫怪霄間星象動。荀家子弟盡名流。

峨嵋黛色坐來浮。節後攀躋海上樓躇末微風仍落帽。 滿城榆葉人秋黃。獵罷三軍膽尚張大白一星高未落。

月前行酒更添籌。誰知他席他鄉夕來接高陽高士遊6 |轅門舞劍有飛霜。

軍诚早秋

大平樂

雪後叩雪後過聽松舘

壯遊才子屬青年。萬里鄉關入夢懸鳥道斜道三越嶺。 東林初月時如雪。遮苟鐘聲度暮烟。

四七鯨流近接九夷天。許身不愧南金比裁賦誰知洛傳

聞說燕臺招駿急。歸來應沐主恩偏

遊崎陽。重陽後一日眞英伯見邀於望嶽樓。時

諸彥畢至 杯酒交驩4英伯昆季並列○塤篪可聽。

三兒髫齡,皆弄文翰實盛會也。分得流字賦

紀其事。

柴扉?閑庭步夕。微風拂松樹-鶴氄落衣,

大平天子樂時雍?朝罷簾前曉日紅。

鑾車先幸望春宮。

妙立精舍集應萱君譽滿腹精神滿腹文。

古城貞吉按

樂汁集附錄

結交如魯衛析義辨淄澠。 垩上運斤斧4橋中引墨繩

送山文學還弘前

。 遠尋奇石拂嵐烟。飯顆山頭得一拳膚寸雲從牀上合

稚齡慵獨學 藝圃得良朋。一日居吾長三冬服爾能。 數重峰入掌中懸
。襄陽大守顛應拜9栗里先生醉即眠, 風規來切切。警策發曹曹。自鼓
雷門布應同驥尾蠅4 對此清幽堪大瘦,知君不啻苦詩篇。

米大夫飯顆石

腓腓四牡向東方。勝搅何妨道路長鄭卿多潤色。

璧隨趙使倍輝元。琶湖解纜天如水-函谷聽鶏月似霜3

幾處登高堪作賦,秋容猶未減重陽。

重陽後送屈大夫赴江都

山雲自飛。蘭氣有時薰酒。桂花終日滿衣。釣罷悠然

獨立。娟娟凉月窺磯。

懸胍初志邃。負鼎古人曾,舌尚餘三寸擔唯有一

雙峰西澗秋早。一路南村客稀。人將天籟俱寂,禽與

西澗秋意

鹽車千里馬。塵架九霄鷹? 霜翮常思擊風髮久欲騰。 登。竹鞭驅款民。藜杖入峻鱠。暮徑隨歸犢┘秋溪蝘

素餐君子耻。儒服世人憎自抱瑚璉器空期蒲帛徵。采菱。洞探千歲籙-窟訪六朝僧。澗水停琴寫苔碑

辭金同孟軻。離母異於陵。北學遷喬木南圖逐大鵬。」任手腔。叁商從此隔,孤子欲誰嗎。只爲同心少。偏

機絲堂上斷。參膽膝前承。常棣花相映⁰塤箎曲互警。」敎百感增。登樓人不見,對雪興難乘 夢裡池塘草。

友于情太切。烝也歎何勝。眷眷攀桑梓遲遲出驛塍。 愁邊雁足綾。喀雲春黯黯。城鼓夜鼕鼕何以表衷曲。

驪歌臨席咽︾鶴唳入紘凝。別路縈如帶中腹裂似繪。壺淸一片水。

送古公款游洛五十韻

有誰敲寂寞。無日不俊愷。鳳字寧調喜雖然普遍認

慚以巴人調。難加郢斧工。好音君不惜。從是托魚鴻。 排蓬尋仲蔚,把菊憶王弘。薄俗俱逃跡-浮雲共曲肱。

行程可用裹,勝具自堪汁。 美日多經歷 清風拂醻蒸

揚帆滄海上P投宿白雲層。玉碗它鄉酒o寒窗客夜燈。

觀風何處美,見月幾回恒。幽壁多留筆閑吟半滿膰o

人京觀應富。渡洛弄盈澄 館舍雖湫隘名聲忽勃興

人皆知顧陸。誰復畏灌滕,策爲治安獻-辭將絕妙稱。

王侯爭見致。冠蓋日相仍。上座虛襟待西階躡属升。

賦工梁苑簡。藻麗剡溪藤。斗酒紅鸚鳩 ˇ金鞍碧。

玄雲髻一拂。紫石眼雙稜一雪裏窺王恭舟中望李膺比日愁雲霧。斯晨忽快晴,一峯如湧出。百里見鮮明。

貼

朝起望蘇山

我慕延州節。將觀列國風。驅車游此士抱贊謁群公。

流鶯引。花間一徑分。獨行如喪我°幽處忽逢君。

酒榼同春興。苔氈掃夕曛。上方鐘磬響'猶隔數層雲。

字疑自有看花。匡鄉文卿先余而至。偶然柑逢 ˇ花 鹿挺爭奔險。鸛毆本爲叢。折衝千里外指麾十州中。

下留飲。及暮而歸。

龍山。

學士

栽竹晝竹夜集

歌

水極。

夜

肥卷

後文獻叢書第二上有終古不消。玉山老子號謫仙飄然赤脚踏屏嶺?|拄笏仙風灑。餐霞道骨輕。名山有餘韻入我素琴鳴。

送人游天橋

三峰以爲筆。東海以爲研,雪濤題字字如花。神鬼哭巨靈眩。不盡天風捲雪花、吹落綠陽田子家。田家 昔人從此去。鰲背已千秋。之子無塵累-孤身又遠游。

兄弟稱篤古。由來不屑時人妬。滿腹文章吐不休。五」松聲行不盡。海月拾還浮。直到天橋上御風凌十洲。

指颯颯如風雨。上窺姚姒下先秦。東京以降如糞土。

君不見古雪亭上古雪色。永與斯文無窮明樓竹外溪光白。樓頭燭影明。客皆無別調談自有餘。

綠酒傾銀甕。紅爐炙玉笙。起看山月吐4歸路欲殘更。

和国卿應長岡大夫招赴宴探釣園

小隊諸賢集。名園萬竹隣。軒車不容巷。魚鳥亦親人。

語愛支公捷。詩驚庾府新。清風綠池上終日洒衣巾。

游萩府呈明倫館諸勿栽俗士居。畫竹勿書庸人壁庸人無識俗士鄙。

徒使此君氣蕭索。赤霄山人茆爲屋滿壁唯看盡修竹。

何人妙腕合天眞。一掃渭川千畝綠萬個琅玕礙碧空。

烟飛雨濺晝濛濛。蔥翠似含西嶺氣清凉徐引北窓風。

山人淸節少人知。日對此君咏酒卮此君不言又不笑。」大國開藩鎮。名山入﨟葱。城都千雉合天險五丁通。

風韻瀟洒有餘姿。麗門狂客偶相過爲君新裁盡竹歌。」海畫魚鹽利。隴收耒耜功。驪虞知政治庶富覺年0

偉矣先君業。誰如葢世雄。手提龍虎策心抱廟堂忠。

試取瑤瑟推碧柱。葉葉枝枝狂欲舞代己干戈戢。封猶帶礪隆。成均收胄子泮水起黌宮。

不有先河祭。寧知至道崇。菁莪經雨美文杏入春紅。

吉士周南出。良駒冀北空。燕先推郭隗蜀早有文翁。

射御人人肄,綾歌處處问。多才如竹箭逸氣拂霓虹

建字四七一

1

浦郎遊仙山。瞬息之間。既歷數百年。一旦還鄉。 六鼇蹴浪地欲裂、芙蓉鎮山何崔┼八萬四千餘丈高。

仙遊悲

古雪亭歌

滿盈神所惡。富貴衆收淫。願君愼分徳守斯撲素心。 扁舟欲泝青溪口。

澤雉思高隴。谷鳥慧喬林。當此和煦優,誰不豁懷襟。|南山秀出南斗上。舊廬依舊夾青嶂門外蒿荥未全顛

米公室丘園,乃在壺川陰?雖無嘉觀壯˙卜境何幽深o墻頭薜蘿覺日長。須臾林壑生光輝猿鹿欣欣待汝歸。

曲沼引流泉。曠軒面遠岑。舊柯搖淸吹新葩沐甘霖?|數畝石田王秕簿。足以耘耕免寒饑山中酒熟不要錢。

芳杜飄馥郁。游鱗屢浮沈。夫子汎愛衆公退比盍簪。」相就相迎醉即眠。上有高枕之盤石下有漱玉之清泉, 寧無歡樂具。唯挾瑟與琴。取適存微醉言懷在永吟?|我亦夙心存林藪。掛冠耻˙後願待桃花爛熳時。

游米大夫探釣園

爰居厭鐘鼓。野鶴耻軒車。所以曠達士難將利祿。

夫子淵明流。五斗非其志。忽唱歸去來浩然脫塵履

朝陽山人府學祭酒詩二十六首。

于士厚。1字茂次郎一號孤山別號

別爲一卷,附于其集焉。 嗚呼選詩之難。匪啻一

世。誰昔然矣。臣等宵人。焉能辨爲高山也爲流」若此。我欲樂之再游仙之部。仙都雞樂今非吾居。仙

女雖美兮非吾姝、仙殺錯陳兮吾不以爲腴 仙樂迭奏

水也。當于知音之倫哉。然詩家所由。非格調字

句之謂與。格而高。調而整,句而順。字而協。

今吾不以爲娛吁嗟乎我何處何之。去不可樂兮處可

悲。我願與萬物同生。與萬物同死

亦可以弗畔矣夫。聊書輯錄之由。以附于卷首云

安水丁酉六月府學訓導池邊匡卿等識

還山吟送別

上墳。皆是子與孫。紛紛邑中人皆非戚與親。故

樂泮集。於是再命臣池邊匡卿等。選臣愨之詩2

處?今種麻與桑。昔我寢興處。今牧牛與羊。壘壘原

公命臣敷愨。撰邦內之詩?至今歲丁酉撰成矣。題日里如一室。我自仙山返故鄉。故鄉何茫茫。昔我垂給

往歲我

勿願長生仙。長生千歲如一日。勿願飛行仙。飛行萬

閭里故舊。一無存者。因悲而作歌也G

樂泮集附錄

衛門˘筑後人 遊藩 詩四首。

樂泮集卷之十煞

井銓該甡洴上。字元衡。一字長右

自疑身作失津人,

一杖三春暮。行吟蹈落花幽馴好鳥微雨送鳴蛙。

桃花流水盡來新。洞裏乾坤秦晋春相對悠然迷出處。

五十餘亭驛,三千許里程。青山行處笑一依舊一書生。

題桃源圖

春日過田家

-尋古寺,一逕白靈迷。幽院來人少4暮林鳥啼

故國毛州路。飄飄獨自征。匏瓜他日恨蓬累此時情

雜誌

遊山寺

落落長松樹。寥寥一草亭。我來時醉臥-天籟夢中聽。

題

醉後題偃松亭壁

二葉人間夕。三花樹裏陰。白雲出丹洞華露綴珠林｜寄語諸君須健在。孫登終合老蘇門, 帝閣明河近。天垣流火沈。冷然忘熱處ˉ誰似御風心。

。

道院早秋

高吟引杖向山村。惜別聊傾白玉樽幾歳同人憐臭似。

山世驂檳酒牛山字叔瑟。一字冬藏 號兼

‶上毛人遊藩4年詩四首。

將隱蘇門山留別諸先生

雨暮天淸。秋江秋月明。扁舟一釣叟-獨向月中行。

何處逃炎熱。孤村傍水陰?滄浪高士曲-濠濮古人心。

留別葛隱士

何處逃炎熱

訪道士

昨夢山中雪。忽移湖上。煙霞辭濁世°楫棹向清流0

九醖玄都酒。千年白鹿裘。欲知來去處-彩雪隨步浮?

箕坐風泉灑。行歌雲木深。請看東嶺月懸在碧松林

題盡

幽人求道地。松洞晝冥冥。瀑布當簷白峰紋入戸青。

仙雲生萬壑。藥草亂前庭。願辭塵跡去隨君養性靈0

葛翁仙俠侶。敢與世人同。門對長流水°蒽聽萬竹風。

叫壺歌且發。說劒辨何雄。他日若相憶天邊有斷鴻。

千秋吾道見文存。獨探巖穴逃塵跡4更逐漁舟問水源客住成何事。空傳梁楚聲,交遊誰重諾慵慨幾傷情。

夢繞寒鴉水。心飛舞鶴城。索居無賴甚嗟爾曹丘生0

〔眞字元麟-一字三圭。

崎人遊藩三年。詩二首。

綠蘿懲壁暗︾翠嶽入寒低、偶作遠公去。相携過虎溪0

苔澗泉聲滑。蘿軒樹色斜。偶來人境外眞趣似仙家。

伏水僑居偶作

又

同是他鄉客。脚杯復送行。暫時今日別惆悵故人情京師客中送田泰純

歳晚送道士還山

住于京 扁舟萬里季鷹歸。

養朱魚

松江城上白雲飛。煙水溶溶鱸正肥一更被秋風吹旅鬢。

此中本是一天地。臥遊千載件仙人

送劉子誠歸松江

飄然持來西海濱 高堂彩壁五彩新4倏忽咫尺沸風塵。

橋上高樓橋下舟。垂楊繫緩醉高樓樓前碧水清如鏡。 蓬萊只是兒仙寓。安知東海有神封試揮彩毫書精眞。

三尺銀鱗上釣鉤。

山頭白雪無春冬。綠顏仙女把我手-笑指芙蓉海上峯

浪華客舍作

一峯杳出接碧空。青天突兀玉芙蓉盤廻直上五千仞。

遊仙曲裡彩雲飛。青鳥翩翩天上歸玉府春生三秀草。 仙客談蓬萊。塵眼不可望。我泛溟渤濤萬里探蓬

瑤池碧染六銖衣。

芙蓉閣歌

遊仙

田驤機遴。

大細o脖子櫳。字文助。

淡淡遙峰出。盈盈一水縈。山人眠未覺-枕上白雲生。知君高步御長風。歸去飄然似轉蓬行唱驪歌辭洛土。

宿長溪村

獨飛龍杖入雲中。一朝琴酒情難盡千里山河路不窮。

入門雞犬迎客。高枕煙霞染顏。投去數椽白屋。攀來別後西州若相憶。天邊隻字有孤鴻。

題畫

用井伯教韻送向新齋還雲州

晨磬初寒菊有霜。園菓熟時秋色老天花散處雨痕香。蕭然環堵室。松菊滿園繁。口誦南風曲 床無北海樽

廬峰自似陶家趣。一醉悠然引興長。

孤吟睨今古。一屋貯乾坤。爲愛清貧樂o終年不出門。

幾疊青山藩今住于若狹詩六首。

復詩三首。

。

瀫水春流綠。龍山雪色明。假分再期在岐路欲沾纓。

泉石相營罷。朱鱗最可憐。能將一池水o聊比九重。

紅日朝初映。晴霞晚自鮮。吾應同得性高臥事安眠0

山頭明月出。野水送君初。去路千峰外浮雲十里餘。

梅花分舊徑。松雪託新居。我有眞人曲。長歌雜步虛。

客夢年年隔上方。歸來馬

紫九日集天盈上人房余時自京洛歸

已息。海鷗何事又驚飛。

如逢二女相邀語。爲問神仙第幾斑。

按斑字岔班字

送爾千山萬水間。白雲何處采茶還曾於勾漏沙中得?

江村社日菊花稀。籬落蕭條半掩扉-桑柘斜人盡醉。

送人入山采藥

秋日同諸子過芥川氏村居

無端驚破©憊夢。落葉紛紛和雨多。

得船居

碧落秋將牛。廣寒夜正淸,微雲天未歛白露草間生。

秋月揚明輝

憶登金峰絕頂

同諸君過烏元素話舊得四支

江樓分手處。 各天回首白雲愁。

九門更漏徹。五夜曉籌傳。玉麗丹墀上花飄綵仗前。

對傚初唐體

留別津子建

恨別江猿叫。催歸蜀鳥啼。相思唯有夢鄉路楚雲西。紫騮新自渥洼生
。汗血淋漓未敢鳴 此物能敢千里近。

同諸子集知足精舍得十三元

無人竟擲萬金迎°據鞍誰獻平胡策⁰伏櫪空存報主情。

十載鹽車勞駿骨。寧論展足問燕京。

二月春將遍。東郊綠巳暄。輕煙芳草渡°微雨杏花村。

林表明睛景。庭陰濕翠痕。風光可同賞況復酒盈樽。

擬禁中雪氤氳籠瑞日。縹緲雜香烟。荷寵叨宸宴賡歌仰容篇。

金峰何突兀。登眺接虛空。鵬際層雲黑o鯨邊白日紅。

千盤迷積氣。萬壑聽驚風。坐覺天都近o飄然度彩虹。

王孫草色滿汀洲。遊子將歸臨水流柳外人歌金縷曲。

梅邊雪照木綿裘。南州此日空懸榻北客何時復繫舟。

醉裏曾携手習家池- 柳市南頭倒接花裡春筵傳絳燭

樽前夕日照金卮,潮生碧海分殘夜月左靑山咸舊時。

共話交遊十年事。江湖歸去臥茅茨。

賦晶幌鑱含閣。團圓始滿城飞飛光關塞肅揚彩虜營明。 釣罷滄浪鼓榧歌。生涯自分老漁簑0長竿曉拂瀟湘雪。

羗笛聲偏苦。陳庭賦未成。仙娥臨鏡照o烏鵲繞枝驚。 短棹秋凌楚水波。潮落青楓江上宿月明紅蓼渚邊過。

桂酯香愈逼。枞窠影漸橫。星流皆北拱漢轉忽西傾。

戀賞仍留轡。沈吟且倚楹。南樓終夕興無那曉鐘聲。

忽向天台霞外攀。只道多年餐紫术。無勞不老保紅顏。

谿稻粱秋熟蟹初肥。風中琴自踈松奏竹裡碁隨幽澗圍。

野客從來機偏喜屬重陽o幽愆欲暴林生月。

爲奏霓裳出洞遲。相約欲再遊此境擕歸玉笥愼勿窺。 遠客憐芳草》萋萋綠欲齊。三春遊未倦十里望偏迷

常科紫霞醞,月明夜輾白鹿車仙遊未半歸心切。蒿徑無人跡

遊未半歸心切。蒿徑無人跡。蓬門少客過。庭皆松雪落階古石苔多。

眺望故里雲自遮?黃竹璈非所樂長謝仙班欲歸家。」時靄生林木。春烟深薜蘿?顥疑城市外來往到山阿

仙姝聞之心潛悲。摻袪慇懃告前期臨別且眙白玉。 王孫遊

自道金丹能却老。始知宇內有大還世人化舌未化骨。

之子終能保童顏。一朝忽跨诳背去居然海上問仙寰P 漠漠彌天影? 依依出岫姿。臨城狐陳近落水數峯奇。

玉樓高峙九重霞。珙樹長吐四時色多少仙姝相迎語。」輕舞霓裳。仙遊羽益隨,山中無所有對爾轉相怡

供火棗大如瓜。此味人間未曾有笑殺晨肇飽胡麻。 早春靖靜亭集得多字

賦得秋

丹陽海客愛乖綸? 散髮蕭條坐水濱~求魚不得亦不賣。

北風吹急雪飞颯沓滿城隅。虛室愈生白寒林不辨烏,

浦郎行

歲杪對雪

境都能喪我。朝回早自公。猶餘舊題石°醉後意無窮。

举藩入港今住于江都 詩廿二首。

庭松如舊識。潤水送清音。解得樵漁趣˗超然遺世心。」別業三春暮。陪遊此日同。園堪求藥涉溪與浣紗通

】姓古屋˗字公欽˗一字重次出。鼎弟。

白雲生戶牖。青暲入幽襟。机上三皇典一牀頭大古琴。

春日過續氏別莊

盈科書院

靈何足數。

西依翼 本藩人。今仕于若狹矣。詩一首。

不易回。爲是痛哭淚如雨。悠悠天壤無盡期。椿與冥

悄。一字丹

號墨山。

避暑鴨川水。涓涓可揭裳。偶追河朔飲°此濫岷江觴。」瑷雲氣出不休。方外仙遊如一夢°唯見菅川向東流。

礙日蘿成幕?迎涼石代牀、蟬啓竹影。多興在斜陽。君不見周穆秦皇及漢武。求道終是歸黃土。此惑滔滔

同藪十厚避暑鴨川

指點鄉園重惆悵。忽覺天風揚袂吹十州三島一瞬過。

人"今住于京詩一首。

西依儀

試相求。

不似人間搖落哀。

衛6號成本藩

雙舄直落菅川涯。滄海桑田幾遷變纍纍舊塚有誰知。

須更哀來樂自盡。昔日玄鬢忽爲絲空開玉笥灑空飛玉屑。凌曉對氷壺,
未泛扁舟去º蕭條獨攤爐

飄然長與白鷗親。三春花柳總不關心在煙波渺茫間。

山上僧房路萬廻。偶尋禪寂此徘徊門前松樹秋聲僧睽 。

轲蓮待佾。

*後爲儈號大龍`詩一首。

蒼蒼月色照林泉。

訪儈院

借大龍进松时。字子前枞巖茅屋碧蘿懸。獨住山中不。一字调次。

江濱猶有前朝叟。纔說當年淚濕衣。

山居

首夏移閒屐,山莊興自寬,苔痕連錦席竹影拂金廢擬楊州懷古

首夏遊某大夫山莊

僭溟鏬慧驎°饉光寺

雨雪霏霏望欲迷,送君遙指大江西哀猿不解離情切。

偏向情人離處啼。

觀獵

首。

雨雪送人

村北村南牧笛聲。

廻杯不覺向斜陽。

獨結茅廬謝世榮。林間寂寂野雞鳴春崽眠覺無人到。 村南村北菜花黃。日暖寒莊興自長唯有深林鶯語響。

村居

春日過某山莊

僧法視訊線時爾。

一鉢出人間。孤雲向故山。禪心知不繫何用唱陽關。」分明談去住。各自問浮沈。覺後叢林月朦朦不可尋。

字天淑°蓮光寺僧。

送僧還山

歸鄉千里夢。遠入白雲深。鳥道豊山險風帆赤石潯。

*詩一首。

歸夢

詩一首。

僧僧。

溟公讀書處 寺住白河頭。竹送干竿翠梧翻一葉秋。」四更斜尹輝。萬里陳雲飛 蓐食霜如雪將軍拂鐵衣, 早秋遊蓮光寺

從軍五更轉節一首

偶將方外友。來接社中遊。愛此清凉界「荷香夜更深。

圓乘菊池若斬蛟雙劍冷。射虎大弓鳴。歸雖度荒野°風霜拂旆旌。

僧宗勉詩一首。

沙解寺僧。

盤。

客似山公醉。琴懷脤子彈。憐君退食後日日解衣冠

記年。三徑抱琴行且嘯。

同苑荒宮吊客稀。啼鶯處處送斜暉三千歌舞人何在。

一代繁華事己非。輦路春回芳草合御堤風起柳花飛

祇林花滿彩雲浮。人倚諸天七寶樓此興莫爲常住相。溪上時移石。松陰且拂琴、澗泉踈竹外終日送清。

愛林中墅。蒼茫不可尋。染衣嵐翠濕掛壁薜蘿深

秋爐猶帶鍊丹煙。松間鶴向三淸去霜後鐘從萬壑傳

不盡天風洒衣上。還慚凡骨未泠然。

過友人別墅

詩二首

紵纹球。永泉寺僧。

送雲門師

遊大泉道觀同諸子作

詩二首。

借支明機關曾聞朱鯉送遊仙。寂寞靈宮傍大泉月洞誰迎飛舃影。

教寺

一首。

亂紛紛。

萬里同爲客松居

京師送井大年歸鄉

僧玄密光寺偷"詩一首。

寺。

一名獨芳菊池西

秋風南浦夕。投宿傍兼葭。月照紅楓樹霜迷蘆荻花。

一世龍門客。風流難可尋。各天空日月此地奈商參。

行人爭夜渡。鳴雁下寒沙。泛泛舟中夢。猶知萍跡。

僧貞治

贈藪君子厚

柳村夜泊

慈恩寺僧。

相送松江曉。吾師向舊林。天花翻法地佛日照遙。

冬夜與尹上人偕賦

珠滿三衣色。軀輕一鉢心。飄然從此去鄉路白雲深。

借了照證一首。

送圓巖禪師還熊府

I首。

一從分袂京師。故句中及

明朝恐逐虎溪流

別。復此接容音。詩賦難酬璧'交情欲斷金。

寒梅春色動。臘雪歲華深。何謂林間會重論逆旅心。

尹子同門最。常懷濟衆心。 小乘何足慕大道本堪欽。

尹子同門最。常懷濟衆心。小乘何足慕大道本堪欽。

雪裏月華促。燈前夜色深。不談塵世事閑月照祇林。

問字知玄草。論交有素琴。何當修竹裡酢爾玉壺深。

灌園愜嘉遁。曳杖事躋攀。樵唱漫成曲農談自解顏

終朝唯聽鳥。無不看山。笑彼輕肥士°何如耒耜閑。

居。正山寺看花

惠寺僧。

借了儀,今朝却送君。柳邊分手處心赭日夕壺川上。匆匆送別時。去來雖自在萍水奈難期。

鐵鉢雙龍泣。瑤琴獨鶴悲。憐師從此去客路白雲陲0

僧法琳此季冬伊太從玆長9

。余嘗與太素同遊

三首。

。烏呼春夢覺花發夕嵐浮。

灌徑通泉水。看山架竹樓,雲堪馳遠目詩自寄冥搜

素壁琴書靜。靑郊麌鹿呦。時聞嘉客至0一笑起溪頭。

送別道禪師奉 赴京住龍寶山

上方佳絕處。梵宇更蕭條。林掛諸月門臨大海潮。

春光寺

詩一首。

寺僧愛此林丘僻。淸儊足臥遊千載何人俠骨寒。

丘中春臥

結客場中酒行

俠客生來出水自無塵。

市中僧

。

帆向浦送非君祥之江都

子规流水無言。

郊行赴野民招

把苦時竹間路

暮春淵大夫愛山亭集大夫近參政。

淵公新聽政。雅量孰能當。裁錦時從手彈琴日在堂。竹間細路幽。徘徊蒼翠夕。中有吟哦聲鏘鏘似金石。

池魚看得所。座客亦相忘。況有如河酒?三春醉羽觴

引杖隨流水。從容村路長。霜遲楓未染°野鴫菊猶黃。

斷雁呼君靄〝歸鴉負夕陽。可憐將淨業念念在西方。

賦得的的的的春帆影。揚揚一片懸。隔花還似鳥°向浦且疑煙。

從別長江曲。如何二月天,憶君載詩酒穩坐木蘭船。

春日同諸子遊妙解寺

境元稱妙解。大道復何言。幽石看雲坐°垂蘿著屐捫。

青山清淨地。流水寂寥門,相對魚兼鳥林間晝已昏。

踞石上。抱琴獨倚松根。一醉從容自適。白雲

啼夜駐扁舟。江樹蒼蒼落月愁喚起還家千里夢。

一聲遙在水西頭常與市人親。酒宍杜多一老身明月在天堪對飮。

青蓮未乾。燈前說劒夜將開?請看易水悲歌後。

。

一轉牛車入帝畿秋風八月路依依。時開鳳詔降金地。看雲忘色相。開磬滌煩囂。借問速公跡何時一過橋。

忽見猊牀賜紫衣。慧H高臨名剎照瑞雲遙向下方飛。

作人天望。原自心珠有德輝素見訪。有詩次韻十

四六三

徘徊倚杖錫。寂寂鹿門山。淺水浮花去。孤抱石。

縄繫青莎港。帆飛白馬灘。清輝如有意 偏入佼人看。

擬杜工部陪鄭廣交遊何將軍山林八首節一首

樂泮集卷之亭子深相引。松間一路分。餘花時亂點空翠晝氤氳

時過王侯第。還坐金張堂。冠裁翠鷸耳著明月。

爛熳桃李際。歡笑飛觴。愛妾換劍馬圍碁賭山莊。

誰言輕薄子。千金棄路傍。青年動易失玄髮欲爲霜。

同大城文卿中秋泛舟大迁江作

一葦迎明月。衣巾坐覺寒。露華横遠水。山影落層巒。

茶烟深竹裏。筆硯一池傍。更倚喬松樹朗吟共徜徉。

相携閑散好。偶到米家莊。聽鳥憐春暮看花愛晷長。

生來負膽氣。結客入醉鄉。長安十萬戶熙熙春日光。

。

看雲且聽禽。耳目可兌懌。慇懃君寛坐4月來松菊夕。

結客少年場

丹同井大年游米大夫西莊

山中逢重陽。邀得訪尋客。客言山氣佳⁰舉觴踞苔石秋山夕興

秋夜善音堂集得十一

僧若冲趙假。詩二十首。

村樹鳴鳩靜。野橋流水長。此中詩料足欲去倚禪床。

北枝花稍開。南枝花半落。莫失花開期不啻風雨惡。 散步乘秋色。稻畦帶夕陽。排雲尋古寺聽梵入幽篁。

_字天盈* 號君山。蓮光

花開

秋日同古公錬井大年過善光寺

一過臨川寺。徘徊度月橋。澗花春磬度°煙水夕流遙

迢迢淸見寺。一宿海門秋。鼇負山疑動°蜃吹刹似浮。

前峯吐初月。流影落南塘。曳曳春燈薄°朧朧水色蒼。

宿淸見寺

僧大室詩一首。

風過花徑白。酒然羽觴香。醉起長枞際徘徊踏素光。

首夏遊嵯峨

欲窺殘夜月。試上對潮樓。因懷圖畫裡髣髴此神遊。

僧法崇,

光明寺僧。

探勝情愈切。尋幽興最饒。小倉山雨後亭子晝寥寥。

井澆泉日。青苔自絕塵,不妨仙屐印爲值菊花旋。

入室清風好。催詩濁酒新。東山月未出拂石倚松筠。

暮春流水琴宜敦。幽林酒华醺。芳洲搴杜若采采億夫君。

鹿門歸路口號

龐公何處住。松月爲誰馨、古渡鳴鐘晚獨隨沙岸還。

階前零落紫藤花。

寶瑟蕭條俯碧流?岸草华承獅坐偃巖杉欲作鸖林字。

空門寂寂夕陽斜4步傍溪流到梵家幽磬一聲人不見。

捃拾談經鹿野秋。坐思靈境上槅卌金沙縹緲搖明月。

初夏臨流菴作

涅槃巖

小溪澹春波。香芹亂如髮。中有釣魚人。歸艇坐明月。

上

芹溪

隱顯各異趣。長揖復還返。

僧房合在前山裏。鐘磬微微下晚霞。

杖屦肅然野水金皷振四隅。輕騎獵山陵。云是公孫子-俠氣凌噌初冬尋山寺

人生不如華。日夜零麗姿,麗姿不久全孰有百歲期。」 諸法心無住。空門路不難。拂衣臨綠水。持鉢向厨巒

及此少壯日。應須醉酒巵。今我不歡娛老大遺傷悲 桂樹秋愈淨蓮華晚自寒。閑雲隨獨往何用避人看。

雜詩

華滋。華滋一何麗光耀同往時。

僧還山

挺挺園中樹長歌行

宇內公豐白鷺馴碧籠。幽石護仙芝。借問黃庭帖殷懃欲屬誰。

江公正確姓造江。字子方。一字

詩二首。

寶林秋寂寞。山鳥下前峰。時起窺潭水。暮雲結作龍。

秋日興

秋日過法壽寺

但教狂醉許。遮莫暮寒侵。四顧總清景澹然生隱心。」朝來尋道士。輕屐此相隨。竹徑春煙合花園日色遲。

尋藤道士

幽期促杖履。古寺人秋陰。樹樹殘蟬靜峰峰落日深。

秋日過光九寺

寺僧

江公。總入西天寂滅愁。

Þ祠詩二首。

飛來此現涅槃色耦。子

四六二

肥後文獻叢書第二卷

豊煎¨¨º字子子Þ燦燦發山院驚秋早。梧桐落小庭。窺人幽鳥至看石白雲停。

久已甘高枕,誰當叩梵扃。不須絲與竹澗水入清聽。

秋日送。

金鞭耀朝輝。轇服翩如飛。徒搏斃猛獸 醒血灑獵衣。

相遇翠巖間。迎我欲俱歸。榮盛非所願º所願邃肥遁。

涯。徘徊何處問梅花 偏憐幽石莓苔色3

無復:

但市城車馬譁。修竹籬邊麋鹿過殘楓樹裏夕陽斜

。

望阿蘇灺煙

門阿蘇大宮司臣。詩一首。

御嶽金峰夾彩霞。芳野懷古

胡虜防秋急。將軍按部行。雲迎出塞馬風卷渡河旌。

送邊將

四野春煙合。孤亭暮雨深。樽前花覆地門外柳成林春日集

月夜訪隱者

一路入幽處。閑庭落照深。棲禽紅樹晚靜者白雲心。

澗上獨酌

請看古昔登封地。猶自蓊蔥鎮帝鄉。

訪子友先生山居

佐伯字伯孝。一字操。

佐惟純釀藥丸緗司臣。詩三首

。

送付還比叡山

守祠º詩二首、

幽居難詠

笠韶

脫刼風塵色。賦得歸田事耦

*號岐山守祠`詩一首。

書中湖景

擬長安春日馳戀庭闈

尺幅平湖色。蒼茫望不窮。歸帆掛晴日º過雁沒長空,

極浦殘雲外、孤村落照中,賞心翫未足4轉覺書圖工。

字世美。一字攝津。

叡嶽崢嶸倚上方。歸遊千里路偏長º禪關寶樹煙霞裏。

佛座金蓮日月傍。含雪諸峰森並出。凌雲三塔屹相望。

上國棲遲白髮生。春光又入鳳凰城º樽前何日裁斑舞。

客裏多年陟岵情。萬里鄉關空眺望千門車馬自縱橫。

安能十年高臥在煙霞。屋後清泉瀉白沙庭戶無人春晝靜。

黃鶯啼落碧桃花盤石淸如拭。醉即石頭臥。驚聞風雨來°下有澗泉過。山閣宜觀易。空您可弄琴。超然塵外趣〝仙境不須尋

宮經茂額胜喀認字伯懋一字

白雲亭。

歲月供高臥。江山入醉吟。偏憐棲隱處自有白雲心。

:複姓坂梨字惟熙。一字佳那明。

阿蘇大宮司臣今沒。詩三首。

南遷曾駐五雲車紫官跡在禽棲樹。

粉堞圖空蝶傍花、野寺從僭尋寢廟°禁園無主入農家。

前溪不盡東流水。獨對潺湲感歲華龍峰閆峰明月好。邊興訪幽居。谷靜猿聲響山深人跡踈。

晚花三徑入。落木一窩虛。曉色衡門外殘雲書不知。

贈此芙蓉劒。堪當百萬兵。歸來麟閣上千載見功名。

坂愼憲 0

複姓坂梨字子章。一字左

蘇山望不極。巖察幾千重。上有神人窟。雲成五色龍。

上苑芳菲候送僧大無之華頂山

聖壽無疆詞

。

複姓復逐秋風歸去來。

月夜尋龍山隱者

欲別勸將赴熊府留別蘇山諸子

猶似雲山道路難。

曉起春望

楚澤寄懷高子友

僧院

納涼

宴房

宮司。詩十首。

宇治擬行經桃源

地。摩尼爭捧火珠光。

寻子儀肥後府學祭酒藪慤選

。從五位下阿

樂泮集卷之十

祺林春色帝城傍。此去東方謁法王-甘味兼分金掌露。

瑞煙近接御爐香。經聲夜繞龍宮起空樂朝蓮鳳闕長。

肥後文獻叢書第二卷

四六

惟典獻大道士雲樹千重合。清溪十里斜。偶方黃鶴駕遙過赤城家。

寶鼎丹初就。玉峰桃正花。胡麻供客罷°仙醞瀉流露。

定識青蓮趺坐丹洞煙霞映日明。石林蘿徑拂塵清⁰尋源偶泝桃花水。

隔竹遙聞雞犬聲。耆舊猶傳秦代服山川寧記晋時名。

一從避地占靈境。不識人間幾變更。

名剎雲岑上。飛梁出半天。古藤依寶樹-脩竹覆香泉。 清陰倚薜蘿。落日前山裡。微風吹葛巾澗泉鳴不止。

磬自六時響。燈應萬古傳。頓知身世幻類此奉金仙,

遙望江村曉。蒼凉昨雨晴。殘宵星未落深樹鳥初鳴。

垂柳參差見。征帆次第生。滄浪濤若許可寄濯纓情

乘月龍峰夕。留談對隱君。泉聲都似雨嵐氣欲成雲。

松徑無人跡。柴門見鹿群。天明下山去長嘯半空聞。

九月盡萬松亭集

風霜月影寒。愁心歌寄紐幽蘭-美人只隔秋江水。

君君莫哀。高歌旦醉濁醪杯黃花三徑將荒日。

宮川字公輔。一字少

宮宗弼 ↓守祠今沒⁰詩一首林下尋君處。悠然擧酒卮。九秋將盡夜°萬木已踈時。 聖德乾坤滿。皇都日月明。丹墀瑞芝秀玉殿紫雲生。

雲物山河變。風霜鴻雁悲? 偏憐三徑裏叢菊有餘姿。 萬國陪鵷列。千官酌兕觥。汾歌傳漢代⁰鎬飲愴周京

。和風燕喜情。群臣爭獻壽長此樂昇平。

樂泮集卷隈之九怒

伯掖姓偎º醫

趺坐始知方外趣,松愡落月照機。

香煙斜誰定僧衣。上方有路攀援盡初地無色相非。

杖藜何處叩禪扉。間寂山房倚翠微º葉空驚棲鳥夢。

秋夜宿僧院

奧節(今沒詩一首。

一輪寒月在中天。

寥寥深院白雲邊。半夜閒翻貝葉篇°初覺禪心都不染。

微雨松林色。蕭條帶夕陰。流雲與空翠往往入簾深。」幽石酒人枕。
懸蘿山客衣。偏忻一樽興相見不相違。

宿僧院

首夏新晴好。孤亭隱翠微松林。凉風生密竹殘霧傍閑

孤山亭集

二首。

微雨

複姓 开關

闗口一壺又一壺。傾來就幽處。誰知石上雲詭終日掃不去。

‶字三口⁰醫

竹飲

尾祥元對醫 詩一首。

分手河梁上。停觴問客程。暮山連日雨歸雁一峯晴3

咫尺山形失。朦朧樹影浮。如何曙箱色入我鬢毛愁。

送大年先生遊前肥

行

。

冬日早一首

姓田尻字:

客夜聽雨

別有囊中不死方。

|旅館蕭條夢寐稀。燈前聽雨思依依家山萬里音書絕綠柳含煙色。黃鸝惜別聲。遙遙環海潤眺望不堪情。

複姓开闗字實夫。1

洞花發門蹊樹樹香。青山今日問仙鄉藥園常映三池水。

虛擬高漸離送荊卿入秦

請宗英

喬同。

翻疑丹頂秉軒態。應是當年衛地來。

黃鳥遶林端。

中庭斜月傍花殘。五夜春風枕上寒。睡起不知天已曙。

珠樹霜毛相映開。揮毫寫得不群才9月明閬苑渾鶴

複姓山田字幸

詩一首。

學書空卒歲。擊劍遂無成。霜下山河改。風寒草木鳴。

不可尋。

歲晚感懷寄贈敏卿子般

僧舍晚歸

鹿門晴雪夜。清興勝山陰。風篠驚夢°松濤滌髆襟。

素花開暗樹。明月照幽林。一路龐公宅蒼茫˙複姓安成。。

雪後懷鹿門隱者

中天霜月絕纖雲。獨酌空齋坐夜分˗忽訝閑庭寒雨到。

開愢落葉亂紛紛。

安宗流讀《散。

夜聞落葉

天地容吾拙。飄然一儆裘。灌園肥綠芋º經雨裂紅榴。朝辭鹿門山。暮望鹿門山。唯有白雲色不見鹿門山。

幽幌微風度。空林積翠流。人間蝴蝶夢ˇ惆悵獨搔頭。

熊府道中

山家無世事。容膝一枝安。綠篠風聲亂-踈松月影寒。

清溪飛白鷺。秋澤宋芳。魏闕非吾願杯聊自寛。山色送微雨。秋畦引細風。田翁相見語·融融仰年豊。

又

意氣向君看

鹿門

熊府憶菊水隱居舊事有感

擊筑悲歌罷。北風易水寒。腰間三尺劎叢書第

四五八

肥後文獻菽水篋瓢客。心期巢與由。孤亭耽豹隱三經引羊求。

竹裏閑雲出。松間素月流。一身何所似搖落萬山秋。

翩翩雙賦筆。落魄一狂生。何日携酒花間聽早鶯。

書如玉。

雪滿羅浮更似梅。對舞時隨王母去聯翩偏O子黃色滿前岑。歸來祇樹林。香臺靑桂暝定室白雲深。

竹裡禽栖靜。花間仙梵沈。忽看溪上月皎皎照禪心。

山怡 數聲四五七

樂泮集卷之九

流水託一身。富貴見灰塵。千古陶彭澤應與此心論。

送人歸松浦

。

醫麟孤雲峰巒前。微月竦松邊,待此風光來燐君傾一

永麟 複姓吉永字元

扁舟解爰此相歡夜色朦朧春尙寒江上煙波看欲曙。君謂謫仙客。落在世人間。掉頭辭都市高臥灞陵山。

雙雙蜚雁過雲端

悲

寄桂敏卿

豐富田、字子鵬。一字

樹樹猶餘洞口花。

春夜綠河泛舟

劉詩一首清定常

·子魯號

平原十里鐵驕。雨雪翩翩殺氣遙o臂上弓經鳴未畢。 雨歇前山夕H斜。白雲流水繞仙家靈源不識春光盡。

雲端翻落白毛雕。

杖藜四五里。郊外夕陽晴。流水舍煙澹暮林經雨清

時依芳草歇。或蹈落花行。看惜三春晚-幽禽處處黠。

初夏道院即事

暮春郊行

靚獵

春江漾碧漣。十里澹生煙。斜日歸帆外連山過雁前。

一首田安濟情。

。

別有頻伽雜妙音。

春日江村即事

溪上松雲一室深。禪餘迎月調瑤琴休言流水難相和。

禪室聽

禪室人蹤斷。登臨世外心。誰知幽客坐只是碧雲深。

堤高

初冬雲巖寺集

兩袖飄愁淚。孤樽慰別情。可憐松浦月夜待君明。

萋萋芳草色 綿綿送馬蹄。即今梅花落到日子規啼。

送人之江都

坐皆英彥客?興壓河朔游。斯處似仙境-忽解人間愁。詞客催歸思。停橈問水程。千山紅葉合萬里碧潮生。

不知三伏熱。颯爽似清秋。

遙夜春雨時。總是多子規。啼破故園夢枕上使君悲、

行三千里P會遇不可知。黯然難分手我心如調飢。

古殿餘秋色。寒林起夕陰。松風送遠籟似聽海潮音。

沙村微雨露。水寺晚鐘傳。漁叟停輕棹°閑隨鷗鳥眠

。

守善高子醫o詩十首。

詩五首伯淪何爲者,還見謝眺才。詞藻摛華麗淸狂比誰

搖落千山鴻雁愁。秋來多病懶登樓o茂陵心事無消息。|潮滿銀鱗躍。倚檻垂釣鉤。得魚臉其肉°把杯傾玉甌。

大江多凉氣。漣漪不驚。洗竹清風至o隔簾繫扁舟。

臥病

避暑

七月丹楓葉下初。鴻書千里問幽居看君俠氣散人壯和荅帆子幹自東武見寄

已入招提境。幽寂生道心。地非人間地禽非八間禽。

江村一曲水縈廻。斜日柴門迎客開相見青山來染翰。

何妨白髮照陶杯。荆中本重連城璧下爭傳八斗才。」東方明星爛。一路曙色陰。殘月尚皓皓零露沾衣襟。

况有林亭瑤笛起。無端吹落滿庭梅。

秋先生亡後其分子伯仲同諸子見過

鳳山一醫一詩二首。

南北輕離別。酒杯慰滯留。欲待歲來日相逢問壯遊。

E

複姓宮田字君美號

松江探勝去。何處放扁舟,倚劍孤城外觀濤八月秋。

關山月色正蒼茫。

寄懷藪士厚在松江

秋風搖落雁南翔。客夜思鄉淚濕裳孤夢天涯何處落。

開雁思鄉

試向桃花深處行。

一室西山裏,門前芳草深。人携樽酒到鳥遶竹林吟。

簇簇煙霞雨後淸。携來斗酒聽殘鶯前山似有仙源路。

暮春登山

劉詩－直

山亭春興

首。

宗。秋鴻時到問加餐。

子允梅询字。

田園罷去舊儒官。門栽彭澤先生柳頭戴華山道士冠。」空有西風到枕頭。

臨別慰勞君記否梅元掃石移烏儿。停雲彈玉琴,留連塵外客莫惜披幽襟

安萃獲姓安達字支萃0

*詩一首

林惟俊總泩林里。字子

-傑醫-詩二首。

晨過禪院聽梵

。

唉我佯狂與世疎。擊筑誰同燕市酒登樓遙憶武昌魚。

輕肥縱得青雲志。莫念山中舊草廬。

宗梅詢讃喞聲。

禽陶天花去。地總布黃金。隨磬松子落開鐘淨理深。

松古如龍臥。風起作龍吟。已至古松下。無風入松林。

清韻知何處。深沈不可尋。解釋獅子坐高僧誦經音。

江亭吾輩苦炎熱。煩惱如吳牛。江亭堪避暑登臨大江流。

琉璃玉匣藏龍泉。時時五彩飛射天我向燈前試一看。」故人高致可攀難。脫屣風塵對翠巒珠玉爭傳新墨跡。

富子生民秀。名聲冠髦士。意輕軒冕榮°高步謝鄙累。

洞鑿誰得測。韜晦日沈醉,自非羲唐化勇退敦宿嗜

毫未運造化。吐論多逸旨。馥馥洲木欝花嚼其蕊。

伊余遭多幸。疇昔枉高誼。言論何藹藹歡愛兩不遺> 草似含煙動。雲猶逐望低。飛來雙白鸛引我萬峯西。

衢路一分手。參商隔千里。感彼西河嘆索居亦久矣,

貽詩申篤好。實過與璠美。見眷諒不薄ˈ在遠今猶邇。|南華留道訣。其道在忘筌。鳧鶴無修短°陶鑄尙自然

願子修介德。努力逐初志。

渾渾泥裏水。活活間中泉。清濁非關我何須問天。

寄懷富元朗

古劍行

春日閑居

賢材在廟堂。德輝化殊類。濟濟都城內振纓告宏器。

晴好。前峯路不迷,衣巾空翠

報道初夏山行

興來時扣玉壺歌。清風吹落白綸巾且願各遂麋鹿志

求道長與洪崖親

笑他長爲折腰人。已識譽多還毀多唯我愛酒不憂貧。

酬富元朗

喩彼江河濶。橫流渺無梁〝願託排虛翮高飛到子傍。

隆思從中湧。爵紆結束腹。慵慨訴促柱°苦調激清商。日月如奔電。行樂尙及時。勸君一杯酒。安坐且莫辭。

美哉同嚮烏。索群共迴翔。君子德所基視人且不凉。將我白雪菘。寫君絕妙詞。爲歌放歌行請君莫深悲。

猗靡沼沚毛。可以薦廟堂。輔仁亮賴友°久要在無忘。,富貴浮名不足珍。笑他栖栖走風塵偃鼠飮河怍滿腹

贈馬彥章

伊余雖鋼牽?金環雙玦七星懸。。

聊以寬心緒道是歐冶手中作不知爾來幾千年。

磨用越溪玲瓏之白石。率用涪江清冷之寒泉。楚地三

軍頭皆白。壯士腰間久鏗然。由來神物稱難得。何知

一旦所棄揄。君不見昔日豐沛隆準公。斬蛇千秋歌大

風。壯士寸心君不信。請看夜夜吐白虹。

放歌行

佳期難得,傘面不可常。坐憂蕙艸o何由掬馨香。

徂謝後此始。促織鳴我牀,感物悸嘆息o淚下濕衣裳

借問嘆何爲良明隔異鄉。三載闕相見音息何能詳。

新瑤臺春暖紫煙開。八駿高飛黃竹催 回首五雲鑱咫尺。」琴書旣同賞,言論粲披露,何以見幽衷 寬蕖茲筐, 青霞停蕙圃。流雲冠茂樹 昔聞嵇呂遊今留故人。

步虛詞

詩一首。

北牧字延年。

風激龍吟萬物摧。枕簟纔移凉自至4庭陰未霏月先開。

家童忽提一壺去。笑向前村賒酒來。

棲宿喜同林。翻飛歎異處,況我同袍人。豈不懷儔侶。

長夏園林驟雨催。乾坤圍合發殷雷天垂鵬翼千山暗。

高子友見過林莊

弟醫-今沒詩十首。

驟雨

千山樹色自光輝。遙識道人坐翠微?方外禪心秋水冷。

石泉能使塵襟淨。何用煙波作釣,

世間駒隙白雲飛。縱無過客許杯酒 應有眞僧傳鉢衣。

借間給孤相會處拈華誰得破顏歸。

孤雁高飛人碧空。雲間目送坐春風山晴晚翠還含紫。

春日偶作

春日送溪師訪雪堂尊者於光精舍

田園不掃絕人蹤。秋翠斜陽入戶重偶啓郊扉迎逸客。 躋攀香閣近諸天。鐘磐寥寥下界傳枞逕忽迷流水外。

誰携野趣駐昑筇°新詩恰似驪珠照舊隱匭無豹霧濃。」月華相映雨花邊。駕同千里思嵇夕與似弧舟訪戴年

休笑陶家生事拙。風流好向竹籬逢

蓮社由來秋事好。許杯誰及遠公賢。

秋日左元幹田敏卿見訪

還憐舊業守玄經。江湖屈指無同好天地回頭笑獨醒。|海內清平日。貧寒與世違。櫛風殘月出浴雨暮天歸。

烏雀似知栖隱趣。飛來飛去啄庭

蘭臺空有秘。丹竈自燎衣。艱難今若此麥飯幸無饑。

中秋訪安道師

夏夜雜興

安達字

詩三首。

行藏本自非人力。笑見乾坤萬物齊。

仙人駕鶴月中來。

熊陽城北結茅亭。竹色千竿入戸靑誰識新居傳白賁。

日落殘霞尙帶紅。擧竹行題幽逕畔尋芳閑涉小園中。

常聞古人言。分析少游豫。良時難再遇含情將誰訴。

君子顧衡闈〝咄嗟叙寒暑。田廬無豐膳4呼兒具雞黍。

寂寂巖阿性。琴書獨自甘。賦詩多漫興。把酒厭常談 擧案糟糠有逸妻
。心浴江湖千里濶身安飮啄一枝棲。

答友人問余近事

牖桑樞志水西。雖栽桃李未成蹊6彈琴山水無良友。

瓢之酒與君同。

此裏徜徉堪自老。飛樓書閣不關心。

萬松連屋後。日夜起淸風。中有幽人愛淸聽。千秋再|草堂新築水之潯
。獨坐蕭然聽野禽小榭移花先穀雨。

見華陽公°華陽洞天深幾許。嚴扉石磴白雲中。一夜 南園洗竹拂春陰
。善談隣挑棋至問字門人載酒尋。

石門乘輿叩。松間明月照簾櫳。對此悠然忘歸去。一

卜居雜詠

秋夜同田士哲過松籟園分得韻風字

肱臥秋深菊水傍。黄鱸淸興逼江鄉手栽仙杏門常掩。

十一首。

法雲浮水淨。花雨拂衣香。自了無生理一何須對毫光。

田中字禮夫。

珠林人不見。碧澗路何長。忘世遊禪室°觀空坐石牀。

題富元朗浴蘭堂

訪潮音上人不遇

休向江湖論意氣。鬂毛颯巳覺秋霜

水有波潤。回首何物異黄雀。悠悠天地何處安。耳餘 海西詞客錦爲吐出煙霞五色章談笑應同齊辯士。

異日違刎頸。禹貢當年空彈冠。爲道江湖流落士。行「高歌不讓楚佯狂。靜彈瑤瑟迎山月勿脫金龜換酒觴。

路難兮寘嗟嘆?

秋日寄懷伊太素

黄雀養雛日。追啄在林端。縱無網羅患其奈行路難

劉詩首。

三竿紅日影移遲。一枕輕風病起時明日若遭殘菊在。併將家釀暫留君
。

春日病起

神池紫氣結爲雲。重峰高限西東險列樹遙臨城郭分。」時結竹林社。或尋松下菴?微禽如此足。無意事圖南

二苔蘚鑱深階上綠

桃花已老雨餘枝。客稀陳壁長懸榻天董園不下帷。

稍覺耘耕春事滿欲將行藥到東菑。

金丸彈。

君不見天帝一從開混沌。人間常苦行路難花多風雨。

身浴幽蘭室自香。洞裏琴歌寬日月-牀頭詩卷挾風霜。

對君欲問栖遲意。笑指冥天際鴻翔。

呼疄近報後村鳩。離亭客夢孤燈佟鄉思羈心兩地秋。驛亭楓葉已紛紛。孤劍曉回北斗文暘谷彩霞粲似錦。

蘇山道中寄懷池君

家山一別望悠悠。十里江城暮雨愁連字遙過前渚雁。

沼。詩一首。

富直章-秋夜江亭寄懷諸弟

瑞林。

閑月影照牀頭。

猶思竹院孤燈夜。一碗留將待雪天。

栽松樹樹伴清幽。一枕風濤十里秋他日相期栖白鶴0

碧落蔥前小井泉。閒庭曉月汲涓涓°或迎幽客茶先。

偶伴高僧手自煎。素浪仍隨金鼎散°綠雲時逐玉甌連。

山陽日落不堪悲。

米大夫西莊同君山上人品水煎茶

朝來開筐讀君詩。一字如珠一淚垂欲向秋風吹玉笛。

二月天邊少雁行。客裡一書三灑淚唔愁中十夢九歸鄉。

寧堪春草萋萋綠。猶是王孫意自傷。

追悼子坤先生

一日三秋。

蕭蕭長銷孤月。猗猗常臨小流。有客七賢六逸。無君

欲報平安寄渺茫。家山遙隔海雲長東風別後驚花落。

長崎客中寄小弟

未解救人何救時。求道常羞師曼倩°樂天所願學宣尼。

君今問我長生術。活物從來有命期。

此君亭

雪夜殘書半榻。花時濁酒三杯。深林明月相照。古樹

幽禽自來。

蕉雪書齋

毒藥傳家業賤技。神仙一事果無爲不知醫國唯醫疾。

和咨南筑井元衡

解纜臨江口。山西海舟中口占

林莊卜築倚西郊。扉覆柴荆屋覆茅?釣叟閑時陪賞脉。 南天無一雁。西海少雙魚。不知潮水信何日傳家書。

米大夫東行前營西郊別墅

舟中口占

流光逐我絲。

如流水。空嘆微霜染買得順風何日發。棹郎未擬上灘舟。

詩僧過日話推敲。水靑園後沙汀畔山綠堦前竹樹梢。

爲是幽庭塵事絕。長松自有鶴來巢。

鐘下五更。舟人爭曉渡的殘夜日光生。

姓富田o號四五↑

臘後相迎聊寄詩。琴尊不改舊生涯纔逢雁字書雲日。

偶欲聞幽梵。高臺此再攀。尋盟從熟路問法宿禪關。又過鶯梭織柳時。文史三冬堪可用窮通百事未曾知。

春日再遊天草芳證寺

將帥名空在。英雄世與非。長歌倚劍暮何處不沾衣。

歳晚草堂集

一縱登臨目。煙雲接二肥。馬牛風可及唇齒國相依。|浴後悠然凴儿坐
。何來空翠滿閒庭。

戶外青,

原城登眺

橡溪溫泉亭偶作

春風此地求僻。幽邃臨碧溪。水窺無底鏡°花作不言蹊。

自脫朝衣換蘿薜,一堂風月遠塵埃。

江都。

郝園縱禮此趨陪。墻外奉訪高隱老主山莊

空臥煙霞鑴一日。名園無樹不森森。

別業營閑事。幽雲日日停。山溪遙隔竹水石近開亭。」三春多病廢登
臨。初夏幽亭試此尋垣壁新懸蘿薜靜。

燕子花含紫。王孫草亦青。爲耽官暇興不必臥林坰。 籬門自架薔薇深
。花侵石蘚丹青濕竹隔山容紫翠沈。

夜到漁家

蒲葵園集

有酒堪忘坐。無鐔不解頤。剪燭閑窓夜西峰月落時。

續司馬別業

山亭殊寂寂。薜荔繞茅籬。留客餐霜菊呼童折露布衣賦寄諸君

山亭夜宴

噓唏吞聲攪中腸。丈夫何泣貧與賤。八尺身軀空自亡。

秋杪藪士厚古公餗岡子靜城文卿見過。明日

嘗聞直道與世辣。不免高才爲人嫉ᴼ涕淚潛潛流臥床。海雨連春樹。林風出暮山。時看舊題石字字綠苔間。

葵。

非自賤。冠冕道何俘。有興常賖酒無時不出門。

携琴臨水石。邀月步林園。寄語城中友。重來對綠槲。

樵漁自往來。朱戶常依叢桂鑽

綠窩深對小山開。茶煙靜處移琴榻ᴼ棋客過時命酒杯。

漁家通小路。江口綠波平。宿鷺驚人起孤燈隔竹明。

潮隨斜月落。童半扉迎。十里蒹葭裏°歸舟一笛聲。

暮春同君山上人。遊米大夫西莊時大夫在

綠野門前盡。青山屋後迷。一聽鳥去何日爲君携。

連夕雨冥冥。小橡溪頭一草亭樹密不知朝日出。

山幽唯有暮雲停。懸崖絕壁窩前綠ᴼ脩竹垂蘿1

。

中夜哈

。

別。

序

肥四五〇

第二卷

後文獻叢書業船武陵溪口秦人家。家家碧水夾桃花桃花萬樹春欲逼。半蓬扇意多景收。山山不隔來又去山去山來幾自由。

紅堤綠岸映朱霞。士女雞犬知何處-仙源至今人嗟。 乘流不勞推移力。游泳不必問春秋春朝棹花多棹雨

請看前事多勝適。俛仰之間爲陳迹今我不借愚公力。 秋江載月還載愁。欲將絲緡釣閑事不怪魚兒不上鉤。

今我不待巨靈擘。天下名山三十六須更相對枕與席。|乖荇布覆牽幽興。誰知洩洩又悠悠悠悠洩洩絕塵緣

不知身在崢嶸間。千里萬里在咫尺睽他欲登青雲梯。 世人目呼別業船。倚無欄干橫岗橈坐有蒲席代綺筵

幽峻空着謝家屐。我有縮術比壺公小詩借觀他山石。

睽他稱高手佳工。空於書上幾相索縱令短幅開不遠。

一絹卷舒江湖窄。鳴呼我移造物功心匠天機屬神通

神通變化長百出。自誇乾坤小化工余好舟遊、愛山色之從棹屢移也然貧簍不能造一

小船。每興致之至。就諸江之渡而買船?載酒及

琴書雅物。以水行數里。興盡而返9號曰別業船。

以爲坐遊之一品水惟載煎茶具。豈無買魚沽酒錢有客綠簑靑篛笠

欸乃一曲入秋毡。客歌我酌客又醉我醉客去我亦眠,

眠去醉來忘賓主。江天只隔碧蘆煙人世為少開口。

江湖身世羡飄然? 孰道小艇危於葉東海亦變擊桑出。

人間別有風波險,人間風波ㄘ愼旃 亂石狂濤飛流瀉

兩岸靑山如走馬。澄波低樹月近人琉璃盆裏天上下

「鶴與琴書一船中。有酒有茶興不窮伴閑琴書伻眠鸖。

自稱江湖主人翁。江湖何景非我有何景又不爲我友

林園縱有一景長。爭如萬山風月久請爾莫睬花。花謝顏色改。請爾莫淦月月落影不待。

平生踪跡在江頭。時時南渡買小舟來往煙波無定處, 不寐易反側。苦寒徹布衿,雞犬覺殊喧鐘韻殷前林。

一葉任風水面浮。棹過中流不敢棹流至好處不敢流。飢鼠如欲語。繞床齧敗琴、驚鴉似呼人呼月過西岑

泛泛浪前風際去。飄飄醉後眠餘遊寒汀藏蘆或隨雁。 燈花欲落漏聲沈。中夜耿耿躙苦吟忽撫寒枕及身軀

遠浦忘機不驚國。萬里江湖靡不通何凌渤溟與滄洲。 不愧堂堂一丈夫。眉目骨相異尋常的天地生我有意無

滄洲渤溟非我願。縱分凌之幾時休五尺編廬三尺席?| 君不見百頭猴中獨有一頭之白質。九十九頭忌其一。

樂泮小卷之八

余本有山水癖、欲探天下名勝者多年矣? 病而未|東岱御道乾坤小。雨坂雲封擁五松。1岳斗然海似杯。

果。近聚諸方彩石。置之盆中。疊作峰巒江湖之「紅旭先昇日觀峰。五更洞天听雞鳴萬壑千峰次第明。

狀。宛有咫尺千里之勢。聊以供臥遊之一云爾。 大行之頂靑濛嵘。自古巨鎮元鍾英時亘朔方崚標奇

浮生有定分。時命與心違。知音從來是山水。千份之|圖南之烏地俯窺。洞庭波分瀟湘雨三十六峰連武夷。

岡欲振衣,少壯不能極崙崑之巓,老大如何凌物溟之 赤城赤霞坐可餐?蒼梧蒼煙帝子悲嘗聞天台采藥人。

天。君不見陟巇上灘使人瘦,名勝如何少良緣。靑鞋 還家昨夢子孫新。縱凌四萬八千丈°煙霞不似往來春。

假山盆序

相携欲共跨茅龍。金掌三萬丈玉露靑天七十二芙蓉。

首。

幷字大年後更子琴

送人使對馬島

詩一首。

光素 光行字子朴。一字

論。

夕嶺懸餘照。春流送落英?寥寥幽絕境終日白雲生。布襪被塵沒。爰囊竹笈壁間懸。說道人間行路難。却

故入丘壑癖。相伴此登臨。雜樹青溪色 孤村白水陰。

雞聲裡隔。花氣雨餘深。已覺送歸路重來何處尋。

同辛伯彛靈巖洞作

峰下闢靈源。更有煙霞鎖一村路轉千盤闢洞壑。

春深萬樹隔乾坤。寒湫月照驪龍窟 邃谷風生玄牝門。

探勝時窺眞映秘。歸來好向故人官 醫 孤劍腰間動,飄然不可留。一官初報命 雙鬢逢秋。

夢繞雞林月。帆過鯨海流 送君千里外雲水兩悠悠

山一醫(詩二十難於陟鬤上灘。向來煙霞勞夢寐。何以使我臥遊寬。

偶聚六十六州石。大小長短供奇觀。一拳二拳或三拳。

五拳十拳 學峰巒。彩本 非補天之 餘。又不裂 之崐崙

之墟。移來只疑嵐光動-奇奇幻出展拜初青來緑繞落

方池。方池鑿木倚階除-欲擬玉女洗頭盆微細浪泛

碧虛。藉以凝露砂、養以錦鱗魚。剪取不勞並州刀。

霞不樵兮雨不漁。日日濁酒傾三盃醉後往往疊石來。

三峯兩峰相縈鬱,寸碧片岫一螺開時疊一山日十山。

削作峰兮曲作灣,繞者成屏敞者洞雲氣時流十指間。

爽然不覺淸我心。不杖不屐此中磊磊隨我手融結。

|峩峩舒我眼登臨。登臨一時五岳連玉井花開十丈

銀河一帶泻飛流。微茫二華指點西邊毛女宛相逢5

春夜宴城東莊

卷官醫詩一首

山通偷穿匪片山。字君级號

落轅門月似環。

萬里沙場戰未還。胡雲漠漠鎖關山西風半夜征人淚。 幽人日暮棹舟歸

塞上曲

南棣弰·官醫詩一首。

子號李齋井

直過硫黃三百灘。

彩鐫乘風大海潤。長天積水望漫漫o輕帆一片如飛鳥。時有高僧來叩鐘

。

深仁周四海。允命賦諸侯。藥物隨時貢疲癃指日瘳

丹砂堪奪火。紅朮可充糲。稍得瀛洲趣却殊秦客游。

鳧飛仙分舄。星逐使臣舟。晝錦期歸日何須動別愁

渡硫黃灘

送藤井子充貢藥使之江都

官醫o詩二首。

藤其馨 ·近藤°字子寧。一字

蒼嶼丹崖一怪松。千秋不改歳寒容。雲埋偃疑棲鶴。

潮洗盤根似浴龍。

詠女嶋偃松

茅宇新開溪水傍。尋春遲日此徜徉道書讀罷幽人睡。」金壺玉漏到三更。

一鳥陶花下石床。

肥後文獻叢書第二卷

春日尋道士

已愛田園静。更沿山澗行。幽禽如解語芳草不知名,

春日同辛伯遊西郊賦示

°官醫°詩三首。

樋器

樋口°字季成。一字

空山一望白雲飛。下有春流映落暉°借問桃源何處是。

題隱士春流歸棹圖

江耙護姓江村°字悰民。

官醫詩一首。

幽逕危橋樹影重。青苔日厚少行蹤。上方寂寂雲生處。

遊臨流菴

伏枕三旬春已深。不知花鳥滿園林即今秋屨緣君起。

驚見柴門芳草侵。

病中古公欸見訪

一別天涯夢寐哀。雖逢重九懶登臺°故園空憶鱸魚膾。

客舍難同兄弟杯。只有黃花迎節發寧無白雁帶書來。

懸知此日龍山會。誰似風流落帽才。

九日江都客舍懷旅叔匡卿先生

姓池邊字瑞卿o號悰

官醫4今沒。詩三首。

朧朧春月隱高城。花下相逢杯酒傾o清興緣君猶未盡。

雨歇榴花映席新。陶杯聊慰異鄉身誰知佳節思親處。鳥歸霞外峰。淡水通幽處。中有探樵入欲向何路去。

題書

客中端午

遊向夕休歸去。乘月何妨倒接籬。

高子式莊

暮春寒雨江城暮。蕭蕭夜未休。灑梅香暗度入竹翠偏浮。」楚澤秋風起。南飛落木初。叫雲聲忽斷隨月影偏踈。

一夢鄉關遠。孤床涕泗流。故交零落盡○獨擁黒貂裘。 鑱破閨中夢。未傅塞上書。離群千里外孤客恨何如。

歳暮送人還山

送藪士厚田寧嶽還鄉

夫君賦逐初。歸去白雲廬。縱載故人酒○難留高士車。 相逢歡未盡。琴酒奈相違。楊柳離亭笛芰荷遊子衣。

梅臨溪路發。柳傍野亭踈。分手歳云暮躊躇情有餘。」江頭雁孤起。天際一帆歸。縱目雲烟外空傷再會稀。

新雅

夜雨有感

南凱令沒。請五首。

野鹿眠空殿。木魚響翠岑。清泉兼爽籟○時自拂塵襟。

-字子和號李菴官

環佩珊珊月下鳴。

白日禪關靜。藤蘿一逕深。殘花紅點水。新竹綠成林。

仙女如花弄玉笙。彩雲深處羽衣輕○清宵宴罷乗飛鶴。

過古谷院

字元清°官醫°詩七首

遊仙曲

鳥絢護姓為居字元素。一

町玄逄领詩一首。

进河野。馆醫。

肥後府學祭酒藪愨選

遊仙曲

樂泮集卷之九

不是重陽愁殺人。

白日遲遲王母觴。春風問逅碧桃香鸞鳳舞瑤池上。

睽指雲霞仙路長0

池臺宴集余有故不赴賦以寄懷

百尺高臺俯習池。朱簾繡㐅映漣漪°披襟風自青蘋起。

避暑筵臨綠水移。遙憶山公騎馬處還憐惠子據梧時。

勝過續大夫別別館斜開負郭陰。春風遲日此幽尋雲連藥逕蘼蕪綠。

水遶芳洲杜若深。騎馬應同習家飲°濯纓堪擬楚臣吟。

大夫偏愛烟霞侶。退食從容抱玉琴。

洞庭秋水遠連天。落日微茫萬頃煙中有白頭垂釣客。 樂泮集卷之八格

洞庭圖

二月花空落。三年客未歸。可憐多少雁遙向故園飛。

客思

山人高唱考槃歌。遺響泠泠遶澗阿林裡徐行黃葉下。

石頭移枕白雲多。愧將微祿欺丘壑不信朝勝薜蘿。

安得金門掛冠去。與君披髮釣滄波。

代兄和田禮夫

時黃鳥囀。到處杜鵑聲。貪看風光美°徐行不計程。

前途芳草遍。雨後送君情。引杖春烟合過橋野水生。

臏渚花初白。楓林葉半紅。吟詩悲采葛°爲客嘆飄蓬。

送井大年遊京

客中寄故人

<詩一首。

木景珠散靑蓮露。杯薰新竹風。禪心與潭影。相對萬綠空。

亮燉姓沐调。字子寅。

避暑虎溪東。凉雲擁梵宮。雨餘苔徑滑°林外石泉通? | 月出溪流白。
巖懸蘿薜靑。重遊知幾日°仰止隔郊坷。

避暑

春日遊小金峰

邊崧的江山天欲曙。殘月沈朦朧。陽烏迷烟渚霜鐘度曉風。

。一字平助。

烟霞染出老萊衣。

北風吹君元鸞嘯客。幾歲落人間。重問丹丘契-遙名岳還。

四四*

歳晚送人歸省

送李先生之蘇山

綠楊邊。

11

藥猶餘舊煉。花自映童顏。欲逐高蹤去明霞不可攀。

曉發

扁舟陰映雪雪霏霏。歲晚天涯送爾歸行盡千山春應遍。

嶺雲纔辨色。海霧半生紅。自愧東西客飄飄逐轉蓬。

山寺字篇落日沒西溟。山頭忽見星。石崖雲漠漠林壑樹冥冥。

夜色千山月。秋風萬里鴻。自憐故鄉路唯有夢魂通。

別四四五

樂洋集卷之八

何處黃鶯至。好音喬木新。彩霞山郭曙紅日海城春。」獨有飄蓬客。偏驚歲月流。千山凄雨夕。一葉碧梧秋。

嫩柳風光早。菁莪雨露頻。幸逢恩育渥紇誦弄芳辰。 聞雁思諸弟。看瓜憶故丘。鄉關萬餘里佇立望悠悠。

客中驚秋

國學新歲作

複姓栗原ᵒ字長甫一字龍吉。

一身渾膽氣。一死即鴻毛。未見仇家血ᵒ腰間橫大刀。我有煙霞疾。天涯久寄懷。長風吹客夢。一夜度雲崖。

寄田禮夫

俠客行

·庶人。詩十首。

伊淳道經。白雲拂不去。

山中一片石。是我看雲處。坐石讀弟。

蒼烟橫北渚。爽氣滿西山。何處秋聲至°蕭疎髩欲班。

不見蘭花芳。唯見蘭葉碧。誰將楚澤秋°寄與獨醒客。清露桐梧滴。孤坐愛幽閑。落日塞鴻度。長江漁笛還。

山房即事

冥鴻。

中西義紵義位今沒。

秋日作

謝井濟美惠蘭

樹樹搖落。悲秋與汝同。如何將匹馬忽此逐孤蓬

一路青山外。離亭返照中。我無千里翼。相送望路似浮萍。頽然開口笑山色入憲靑。

秋日題僧院

送人

秋日L複姓橫山。字子稽P一字作次郎。

橫爲作題」詩一首。

偶此投君醉。牀前酒一瓶。柴門無俗客°菊蓋有餘馨。

歌聲隔在綠楊邊。

秋日過堤公亮宅同賦得靑字

叢桂淮南隱。芳蘭楚客辭。宦遊非所願°探釣是吾師。」春江無處不春烟。芳草菲菲落照前°釣罷扁舟歸去晚。

春江即事

自笑棲遲久。衡門歲月移。霜隨雙鬢下。風入短衣悲。

瀰瀰南溪水。悠悠北嶺雲。看雲臥幽石°臨水嘯斜曛0

幽曠人同得。淸狂坐不妨。喜君懸榻處醉臥引風凉。

秋日偶成

山中無題

交情同淡水。世尋幽別蓮社。滿壁氣蕭森。霜下獅狀冷°雲歸雁塔深。

觀空臨絕澗。聞梵對秋林。相看不相語的超然出世心。

字太朴質處士詩三首。

流水鳴琴和。桂園凉月佳。覺來君不見落葉滿空階。

卜築堪容膝。銜盃白日宿深水氏

杏林傍。

孤峰殘雪倚鞍看。

過江子遙新宅

阿蘇道中

此地幽斯足。從來興轉多。題詩依水竹枉道入煙蘿

魚網臨江曝。漁家傍岸連。晚來飛鳥急-遙入海門烟。

田花卿宅荅藪文學見贈

舟中作

中流擊楫當年事。坐惜烟波夕日沈。

結髮為何事?優遊欲送年。萍浮唯任水糈散獨知天。

柴門無人事。晨起餉東菑。勸客嘗春酒摘我園中,

霽色遙開神水潯。重携詞客此追尋峰峰空翠林標出。

同諸子重泛神水

許酒還憐堪避世。再遊何復得相携。

良朋難每會。歡娛在玆時。衆鳥鳴高樹孤雲去已遲。

山澤我所性。依依且耘耔。既歸又巳醉貧賤兩不疑?

雜感

白日出碧雲高閣與雲齊。鑱入雙林慧日低-十里薰風除毒熱碧雲寺

體

山莊朱景靜。誰識隱淪深。徑轉藤蘿外門臨澗水潯。

z三字姓左右田字元幹。1字丈九郎。

夏日山莊

處士詩十一首。

游仙詩

茅屋斜通杳靄間。重來投宿問名山與君明日携藜去。

同遊尋野興。徙倚桂河潯。時雨空亭靜春烟小路深。

雞石龍宮次 0

肥後文獻叢書第二卷

REE

青山親鳥語。流水淨人心。趺坐長松下o閑聞清梵音。

清風吹散帶。落日豁幽襟。行藥無人伴采薇唯自吟。

孤雲生石際。衆鳥下庭陰。長使塵榮脫那須嗟陸沈。

過葦北。

千峰花雨落禪栖。幻中揮麈談難盡o淨裡觀空意不迷。

岸岸垂楊雨後深。更喜扁舟同范蠡那須回棹擬山陰。

暘谷。丹霞映扶桑。樓臺百餘尺。排雲通帝鄉。

鸞鳳乖雙翮。蛟龍相翺翔。群仙游其下嚼蘂挹瓊漿。

娛樂何所極。保壽本無疆。安期有妙術 洪崖出奇方。

我將凌倒景。一舉至大荒。微茫雲霄外°魄錬笑人。

效陶彭澤鴻鵠元千里 龍蛇自九淵。愧隨鳩後控地轉聯翩。

轘轅坂下行人歇。侯石村前落日寒馬上春風吹不斷。麋鹿難為伴。漁樵自作歌。城中時有 暇重相過。

長。芳流蘭室外花發四四三

樂件集卷之八

首夏同諸子遊嵐山

遊靈巖洞

爲尋塵外興。相引弄新晴。人自春城出。鳥遷喬木鳥。

銜杯何處好。蕭寂竹林中。酒只耿賢聖詩寧問拙工。

春日郊行游山寺

夏晚竹飲

雲山連道。歌吹隔人天。坐聽空林裏o鐘聲度暮烟。

長岡是知臣。詩二首。

松德

複姓松岡字子崇。一字膝彌。

山雨入茅堂。玄談覺興長。賴君情意厚信宿水雲鄉。登攀長谷閣。絕壁灑飛泉。塔古金繩外花明寶座前。

登長谷寺閣

訪杜兄寓居

青眼交相得。黃花色有餘。厭厭長夜飲欲去此躊躇。

修竹寒流上。閑園木葉踈。偉開賢者酒架插古人書。

蘇山百里程。侵曉出春城。嵐氣籠杉道o樵歌雜水聲。

初冬同公餗先生過井大年

蘇山途中

栗時亮駿上栗鱵字士欽。一字善右衛門。

長岡是知臣ᵒ詩二首。

仰視雲間雁。步聽園中鶯。人生嗟有涯良會愴無成。

松下清齋坐晚陰。如聞疇昔玉琴音天涯一別無同調。習習池塘風。飄飄吹塵纓。粲粲桃李色灼灼媚春晴。

流水高山意淺深。

春日詠懷

寄江子淵

板獻躏睢板洴。字徵懍。一字運右衛門。

流水東溪西澗。烟霞萬壑千峰。青牛眠臥春草。白鶴|白雲當檻落。夜月上簾明。共酌冰壺酒冷然興轉淸。

飛回暮松。

蕭條踵雨後。綠竹入秋聲。不見風塵色ᵒ遙知嵆阮情。

春日山居

林亭

遊友人林包絢ㄘ松籟長臣ȭ詩一首。

秋夕舟行

字公素。一字小次郎。

竹裏拂青苔。不見一人來。前峰明月出照我手中盃。」千峰與萬壑。處處白雲歸。欲問高人臥桃花隔翠微。

十里秋江上。蒼茫明月生。扁舟不用棹潮自由行。

憂思結心曲。永言發中情。自常甘寂寞-終歲托玄經。

願尋肥遁士。罄我隱淪情。窈渺子喬跡˘唯聞黃鶴鳴。

雲歸金嶺上。秋近白河東。把臂山陽侶°隤然嘯晚風。

空山聞梵到。列樹著花明。寂歴安禪境°暫時忘此生。

山莊

遊仙

鄒魯盛。相將泮水弄芳辰。

喜我幸逢水彥透雕丹右衛門。

萬條垂柳翠烟新。驊騮南陌金爲埒°盃酒東郊草作。

煙水蒼茫萬里流。江楓深處泊扁舟舟中乍斷還家夢。 高城近對連山色。飛閣平臨沃野春千樹濃花殘雨霽。

夜半鐘聲到枕頭。

熊府春望

夜泊

‶長岡誉之臣。詩一首。

白玄禮獲姓泊ø字子幹。

聊携藜杖去。緩步出城闉。霜後千林錦江南十月春。

驅馬城門北。春風吹客衣。人攀垂柳別°雁逐暮雲歸。

金嶺消殘雪。松江帶落暉。憶君蝴蝶夢總向故園飛。

春日送江子淵之熊府

*姓澤井字子敬。一字善太。

三日宴集

姜爾蓬萊海上家。春風開宴醉流霞雲中白鶴雙飛翼。唉彼秦皇帝。海上護相求。凡骨不可換-華髮粉滿頭。

雪裏蟠桃並蔕花。

氏雙壽

蓬萊渺茫境。扶桑仙子遊。瓊樓十二重參差若雲浮。

排雲自放情。倏忽無踪踪。寄語蜉蝣性°惡知神仙樂。

欲攀桃李樹。桃李歇芳菲。欲唱楊花曲°楊花爲雪飛。

叉

暮春送人

≥長岡營之臣詩二首。

江源 !姓江見°字子淵。一字源助。

繁華不可持。一旦云零落。富貴若雲浮人生如駒隙。

秋風一夕滿華堂。杯酒傾來興轉長請見天孫雲錦色。桃李下成蹊。天天復灼灼。回飈西南來飄飆吹煙幕。

流成文苑彩毫光。

唯有芳草萋萋色。江南江北映行烟雨紛紛水茫茫。

春江一曲半斜陽。君今不飲爲何事明日開樽是異鄉。

賀井上舍此將何之。升降遍五嶽。朝弄子晋笙夕駕仓威鸖。

丹霞吐明月。光彩照芳洲。銀漢羅華星的歷一何稠。

羽蓋邀洪崖。翩躚件浮丘。揚志凌霄外。逍遙歷千秋。

長岡營之臣。詩一首。

輕風垂柳徑。綠水落花津。諷詠芳菲節。冠童六人。

游魚戲淺渚。啼鳥惜殘春。春服宜新-逍遙出世。

郊行

踈烟失歸鳥。返照逐行人。野趣自相引非關逃世塵。

長岡營之臣。詩九首。

誌。脖子梛字樂件集卷之八

黃鶯近囀野亭花。橋邊藉草題新句柳外開樽醉晚霞

(

七夕過某氏宅

東郊春色滿千家。美日相携神水涯靑靄遙深院春將半。烟霞映坐明。我來餐五石行且問三清。

東郊漫興

。

春夕

重遊今日命舟車。此去天涯道路賒地接神京多壯麗送萱君譽再赴浪華

秋日訪本子馨

*長岡營之臣°詩三首。

宮郁馥姓宮崎。字子女。號瑞菴。

山中遺世臥雲松。午後深溪開遠鏡不管人間春色盡。

嘯侶相逢處。梅花欲發時。撫琴流水響繞洞白雲煙霞長滿兩三峯。

冬夜復陽洞集

題畫壁

客夜寄江南諸友

一徑行人少。千峰落日微。寥寥溪上暮獨與白雲歸

上晚歸

別路霜林曉。星言拂馬鞍溪西方新施文明化。不減粒歌鄒魯風。

送伊太素

林亭人不到。淸夏此相依。冷冷流水響°寂寂落花熊府春望

初夏林亭即事

獨鳥棲寒樹。孤雲鎖翠阿。寄言冥寂士。此夕興如何。」行聽田間農父語。始知堯雨及桑麻。

飛。

江山連素壁。松竹掩幽扉。浴後涉園罷°鳴禽送夕。

。霧栖同豹隱海擊逐鵬摶。

軒冕堪相謝。烟霞可自餐。離粒流水曲°不惜君彈。

千雉層城倚碧空。泮林佳氣鬱葱葱〝長橋柳亂鶯聲滑。

萬樹花開日色紅。金嶺朝霞猶帶雪盡湖春水欲涵虹。

書劒天涯客。風霜滿敝裘。鳴鴻愍旅夢°殘月入鄉愁。綠竹千萬竿。蒼翠射眉宇。幽客彈幽琴雙雙玄鶴舞。

夜雪誰回棹。孤身悵倚樓。江南兄與弟此夕憶吾不。

垂。

開對松間月。同題石上詩。漏聲猶未盡。欲去更合后。

。

鄉餘霸氣競豪華。蘇峰落日猶含雪攝水寒梅早着花。

行矣名山探勝跡。知君彩筆動烟霞含江店樹。

首夏山房即事

田園秋欲半。紅樹映斜暉。勸酒禽獮語談詩客未歸。

杯浮黃菊馥。目送白雲飛。戶外莓苔滿°應緣車轍稀。

道院花外青牛睡。洞邊黃鶴鳴。願隨王子晋長此弄瑤笙。

一夜千林雪。風花處處多依然丘壑心。

君今何處去。家在雨山陰。暫接風塵雪夜懷鹿門隱士

何況同心友。一朝嘆仳離。恨恨上河梁-褰裳薄徘徊。

嗷嗷哀雁度。明月照孤舟,展轉逢夜微茫水國秋。悲風千里臻。浮雲西北馳。長歌且激烈壯心還欲摧。

一聲驚旅夢。千里動鄉愁。誰識天涯客終宵涕淚流。」不有膝上琴。何以述中懷。餘音不離耳翻飛天一涯。

送靈南山人還山

瑤瑟難爲別。青山本不違。奈何求友鳥花裡且分飛。|嘉期難再至。結交各有時。瞻彼幽谷鳥°嚶嚶鳴北枝。

夜泊聞雁

送西寧卿

匹馬翩翩去。垂楊映客衣。三春芳草色。千里故人歸。

送西寧卿還鄉

我同彭澤合。歸去臥烟霞。村落三秋晚門前五柳斜。

停馬東門外。高城曉月沈。歸鴻勞目送別鶴入琴音。

秋日山居

送江子淵赴熊府

之臣°詩一首。

長岡營之臣。詩五首。

田安剛謍懷書山河邈。悲秋草樹踈。無聊一樽酒°欲酌復躊躇。

複姓三宅字士圖。一字吉進。

蘆花楓葉雨紛紛。

-姓田中字子安。一字牛助。

天涯鴻雁恨離群,此去孤帆入白雲江上不知何處泊。獨坐園林裏。凉天月上初。故人千里夢孤雁數行書。

秋夜懷友人

江上送人

1長岡謍之臣詩一首。

一入芭蕉谷。年年伴鹿群。秋雨山聰夕幽人側枕聞。

芭蕉谷

遊子湖中去。秋風送客船。雲光連水白天色與山青。

香臺日落雨花陰。鐘聲頓悟三生夢潭影偏空五濁心。

自吹攢眉蓮社客。酒杯時就遠公尋。

送人之湖中

白雲峰下古祇林。近寄茅廬跡更深°虛谷秋寒天籟響。」白雲生石徑。玄猱嘯烟林。最好峰頭月閑昤撫素琴。

木葉愁邊下。鴻聲夢裡聽。停橈明月夜何處問湘靈。

!姓近藤字子玉。一字八五郎。

泉聲遶砌竹。山翠映籬花。將此一壺酒悠然逃世譁。

客路花應滿。離亭柳欲陰。榮旋堪計日不用淚沾襟。

仲裕複姓仲井。字士城。一字市耶大夫。

長岡營之臣。詩十二首。

事°。所思在丘壑遙夢入煙蘿。

-長岡營之臣。詩一首。

高定國餓蹤搞嘢浮行秋懷

側。一字平右衛門。

三徑羊求去。孤觴嵇阮傳。林泉如此好偏覺主人賢。

獨向山中歌采薇。幽深日永度芳菲欲尋洞口犬雞響。負郭秋雲外。孤亭落日前。碧流斜繞屋o翠竹密啣烟。

如雪風花盈我衣。

秋夕同宅子過岩氏水亭

春日山行

長岡營之臣 詩一首。

田口裂磁孌沺。字子俊。一字守衡。

久願中林臥。衣冠使我慵。鑿池通野水。簣象雲峰。

秋日送人

三日桃花雨。磁頭倍水痕。同尋青草路-忽到綠楊村。

愛爾林亭好。開標日醉歌。七賢元放達。二仲自經過。

乘零露下秋草。栖禽集晚柯。盤桓三徑裡o松月照烟蘿

同田宮二子訪楊里山人

邊城秋詞

江子淵林亭

-長岡營之臣。詩七首。

東郊之約風雨誤期

複姓藤木"字士龍。一字孫兵衛。

何如昔日漢槎游。

桃花爛熳接仙源。流水潺湲藥園薄暮先生猶未返。江天明月照清秋。
唯見金波萬里流。一棹忽乘烟水去。

獨留雞大護開門。

觀潮閣詠月

訪隱者不遇

長岡營之臣ő詩一首。

木口讓胜陈木。間。

字子華。1字仁平次。

一片輕舟獨自還。隱君家在鹿門山巖屏松徑秋何處。|山中何所有。花竹使人迷。誰識烟霞裏寥寥聞大雞。

孟襄陽歸鹿門圖

山行

明月依然烟樹同人永日命巾車。欲向東郊弄物華。豈意春城寒食近。

夜來風雨夢飛花。

秋胡虜入遼陽。天將旅旗下朔方玉帳分弓灣片月。

轅門舞劍有飛霜。

蕭蕭匹馬出弧城。落日西風共送行。一闋離歌激情猗。

飛爲寒雨入秋聲。

迎客開新釀。呼童掃晚園。冠裳吾厭久。難共世人論。

夏日庭中小景

浴後淸風至。琴前晚翠重。誰知濠濮趣。魚鳥近相從。

晚潮送斜日。歸雁入遙天。篛笠何爲者。春江釣幕烟。

秋日登披雲閣應命

春江晚眺

餘勇千人買。威名異域傳。請看來去不敢過山巔。

空懷吳水鱸魚美。月冷楓林霜已飛。

割據遺蹤在。斯公逝幾年。馬蹄風暗響ᴼ弓影月猶懸。

中ᴼ飛雁不過其上。數百年之後猶然。

幾處寒砧送落暉。馬蹄之聲。其

也試射于山

夜ᴼ聞.源爲朝保元中4割鎮西其所城

詠懷古跡五首節一首齀鞠·杬·讀對饣 風鹹龙| 無限西風吹葛衣。長江一望思依依ᴼ數行新雁翻淸影。

懷

千里西州裔。飛蘭接大荒。神輿分島嶼ᴼ天塹異陰陽。

送人之飛蘭島

傳言恩詔日邊聞。欲向中州謁聖君淸夜懸口玄海月

送別堂和上奉詔之京

一夢遙飛洞庭水。澤畔秋風蘭蕙香。采采持之貽何處。

好將淸夜羅浮夢。欲醉美人林下杯。

大素謝人贈梅花作

和伊黿鼉穴深淵。鴻鵠巢高林。同此得栖宿何必論飛況回首天地殊不遠。安能六翮搏長風。

人生貴適意。曷爲久別離。夢寐惟古歡ˇ憂愁當愬誰。 樹廻溪轉路西東。縹緲孤亭靑靄中坐自山川鍾衆美。

顧因雙鯉魚。尺素寄相思。相思何可託心曲不可披。|客皆詞賦欲雄。金峯夕日簾前落紫海春帆檻外通。

山齋讀書

美山亭作

逝川東海注。頹日虞淵馳。流光何遄速。一去不復歸。

書閣披雲霧。高欄俯霽霞。園猶開濮水觀自勝瑯琊3

友詩

四元

肥後文獻叢書第二卷

紫海秋天敞。金峯爽氣遐。承恩歌既醉何厭夕陽斜。

春日上伯緝鍾懷哉携子手。恨恨泣路岐。瞻彼中谷葛既及浴時,

。

我本山中客。結宇薜蘿陰。自遺人世累人已淨幽襟。

閑閲逸民傳。前蹤猶可尋。仰慕龐德公澹然獲此心。

秋夢

美人宛在水中央。相憶相望不相見無邊雲雨暗瀟湘。

爲客新年猶未回。無由北地見寒梅。一枚信自天涯寄

千里春從驛路來。月傍銀鞍花並映槭含白雪影俱開。

長風飛錫赤闊雲。天龍行護慈航去靈雨遙迎法旆分。

試問賜衣何所染。皇宮紫氣自氤氳º

秋日江館寫鵬際巒煙黑。鯨邊海氣黃。片帆斜日外別思兩茫茫。

少壯多年遊自惓鄉關千里夢偏稀。

不顛不傾。保平以降。干戈是爭。上帝板板。鬼神狐

賫

天啓 德。挾輔我王。爰殲巨魁。我武維揚。赫赫神

封。白日再光。淇 嗟斯德。先君焉依乃美其勳俾

侯于肥。垂烈累世。分聞弗違。自西自東是則是歸。

經營泮宮。輪矣烦矣。旌旗悠悠。我公臨止。其德

既積。其酒既旨。頌聲興º我公樂只。祺 芹在在泮。

萋萋郁郁。我公首善。孰不悦服。明明謨訓。靡或不

肅。鼓樂干斯。萬壽是祝。* 蓬麻相直°玉石相礪

造士美。多才濟濟。遊息是何。維仁與巍一日新富有。

永用弗戾。維喬之木。黃鳥集。鴟鴞鴟鴞。好音

弗協。嗟找歸哉。悵恨弗及。心乎憂矣躊躇以泣。

四三七

樂泮集卷之七

樂泮集卷之七終

亂 弗 已。聿 解皇綱

待爾秋風乘興來。

極。爰牖庶民。奄有四海。爲芺下君祺 皇統綿綿。

秋日送人

南浦蒼蒼明月開。歸帆一片白雲限松江白有蓴鱸美。 祥。民棄弗保。天步孔痒。 滿堂仙客醉瑤杯。瑞雪紛紛海上來銀閣玉樓歌吹起。」二儀剖判。自天降神。於皇聖祖。乃武乃文。肇建

初知此地是蓬萊。

萬爲府學生員五年。將歸。作詩述懷。

上賦賀慶焉

述懷詩

À罔measured之臣。詩十七首。

可複姓西垣字子兆。一字莊大夫。

垣萬

昨夜山中雨。森漫春水生。桃花流不盡。何處犬雞聲。

肥後府學祭酒藪慤選

暮春山行

樂泮集卷之八

高歌欲扣靑牛角。長夜漫漫涙濕衣。

癸己春。顯陽先生年甫七十。倘健食º初度日。

宴一碧館。兒孫以序獻壽觴。時天寒驟雪。席

半世行藏有是非。覆瓿玄經空寂寞誰家白面自輕肥3

江北久爲客。江南未返家。蓬窗春雨夜幾夢故鄉花。霜落溪邊木葉稀。據梧靜見暮雲歸。

過田家

洞門寂無人。空留雙白鶴。山風吹不盡°石上松花落。 十畝閑閑城外宅。隣君早已厭簪纓。

春夜旅泊

秋

新詩時對鳥魚成。行藏斯道無知者慷慨吾曹存往盟3

訪道士不遇

林亭日見薜蘿生。斗酒長歌訪潁陽先生隱居

膏雨南郊遍。風吹麥浪淸。村姑共井汲隣叟借牛耕。

田家

江南秋已晚。柚橘半成黃。霜染金苞色°星低玉顆光。

長岡營之臣今沒。詩五首。

津 - 姓下津4字公頊。一字丹左衛門。

春雲。

水元幹驤姓誌冰。字子涸。一字小八郡。

前山積翠映江濆。古寺鐘聲夕照曛烟水微茫汀樹際。

*長岡營之臣詩六首。

橘花

菊城懷古此攀躋。割據當年箕海西但看森森松柏裏。

松井白雲深鎖夜猿啼。

複姓坂井字文卿。一字作大夫。

元良辟鸝瀾。一字囍次馬。

石門斜日白雲端。路逵千峯與萬巒行到遠公禪寂處。

長松落落夏生寒。

菊城懷古

山寺

遊長岡典彭臣詩一首。

榆關西北路漫漫。邊月孤雲倚劍看。一夜秋霜凝馬尾。

田廣成複姓如织。字子仙。一字丈左衛門。

塞下曲

數畝桑麻夕日催。孤村隔竹細泉來°南家紡績東家織

九日過山寺

四三角聲吹斷曉天寒。

上方秋色好。樓閱倚崔嵬。清磬松風送香園菊蕊開。」前路猶逢租回
。

興忘僧帽落。筵任梵鐘催。借問龍山會。何如白社杯。

*長岡營之臣。詩一首。

江樓晚望

歸帆一片度傍山抽綠葉。滿苑動清香。自入楚人頌芳名千古長。

豈世情-古劒猶逢風雨。

鳥語春林噪。農談夕日傾。但教甌滿萬事不關恃。

一首。

欲尋谷口隱。獨往雨晴時。花樹風光美春山落日遲。

杜戶無人事。幽琴又河敏

已矣鹿門約。何人同我心。

春日山行

醉後寄山中友人

詠懷

侯臣o詩一首。

O

殿。

振衣辭魏闕。求藥住青山。朝入白雲暮伴白雲還。水面珠爭碎。江心霓乍昇。不愁衣袖濕o高檻醉中憑。

喜得今朝雨。沛然洗熱蒸。喃喃巢燕語勃勃野禾興。

往事山河邈。何時花月遊。回頭望故國-落日是西州。

山居

喜兩

十載江都客。何由慰旅愁。嗟吾歌采葛知爾賦登樓。」屢迎三徑客。或泛五湖船。肥遯林泉裏憐君得自然。

掛冠出城關。抱道守田園。寵辱浮雲外。行】飛鳥前。

春日寄懷江都友人

贈罷官人

復此忘憂物。聊以愛窭居。

昔抱青雲志。今懋青山廬。雲山兩不就。已驚鬢毛山莊如書裏。泉石映巖扉。山靄含佳氣o海雲連翠微。

雜詩

應命

土侯臣。詩三首。

山桂源别被堵汕訓。字子案。1字類助。

故鄉雖樂半新知。

秋來何日不相思。搖落應同送我時十載舊交君自愛。閑心隨水遠。幽境與雲期。忽向前村去°酒帘飄晚。

矩道疎。

寥寥楊子宅。寂寂原憲閭。雖無一文錢。幸有萬卷書。

山口|攤汕内字牛内。

宇土侯臣。詩一首。

莊陪宴異花林外落。幽鳥檻前飛。叨酒邀明月厭厭夜未歸。

帆通楨轾土阕佧醫。詩二首

!姓帆足。字子幹。井杶弟。

帆修擨萙子。字彥齡0

詩一首。

羽經貞讓坯上班。字子業。一字五耶誰知非其志。官途久滯淫。魚躍深淵水。鳥棲茂樹林。

獨思親朋好。豈無瑟與琴。琴瑟不可拂4流水乏知音。

已侯臣。訣記。一字矢五郎。

濁醪。看雲時枕石披髮或持螯。

但使孤樽滿。何求五斗勞。交遊疎禮俗酣暢愛風騷、

元亮官長謝。梁鴻世已逃。朝朝見麋鹿°處處沒蓬蒿。

容膝安衡宇。灌園笑桔槔。跡齊藏豹遠身慕臥龍高。

親友多分散。思君坐鬱陶。近來同調少山水向誰操。

複姓高柳字尙白宇土侯侍醫。

明月看。

道

寄高故人江海笑彈冠。眼中漸覺西州歸去阻交歡。尺素三秋可寄難傲吏風塵空枕。玄談重更動江西。

浮杯縹渺海雲低。歸去禪林路不迷聞說舊山多法侶。

荅高子式見寄

舍存冋師還防州法華山

千家明月起寒砧。故人無復梯袍贈久客偏傷轤膽心。 芙蓉開木末。灼灼映綺筵。閑庭搖落後獨分秋色。

誰謂開樽堪自適。還教感慨醉時深。

烟雲接地氣蕭森。征雁哀鳴下夕陰⁰萬壑悲風催落葉。

縱看關山月。莫聽隴頭水。關月虧復盈隴水咽不止。

木芙蓉

秋懷

水

亦不妨。

隴頭遊學會窺東魯墻,爲客十年無長物煩君萬卷借餘光。 秋氣夜蕭索。兀坐弄鐵笛。不見梅花落吹裂階前石。

時時來往能憐我。詩酒偏捽退食相迎朱邸傍。一樽乘暇此連床交情自許南陽賈。

鐵笛

田明卿

烟霞色許酒仍耽丘壑。

欲將真諦度東方。

贈書肆慈雲高照白毫光。雪晴蓬岳迎趺坐o風轉曇華聞異香。|泰雲精舍白雲間。與客清晨共一攀傲霜黃術開幽處。

金色相。

雲寺

遙辭天目事竟是陸沈應不老。歲星何必在江湖。

寄懷秋文學携令郎在江文學今茲年甫五十。

兼祝其壽。

三車山上古祗林。佛閣崢嶸試一臨。 初地泉聲廻澗落。

前峰樹色與雲深。石牀苔厚承趺坐貝葉風翻颯四三四

遊泰雲寺贈紹仲師

過虎溪。

贈天目香林禪師

安。

休問垂天堪肥後文獻叢書第二卷

幾何迎送妨禪寂。何用慇懃梵音。

此日參禪何限意。頓仝吾輩欲抽簪。

津梁。龍象驅來峽路長慧日新懸展翼。逍遙不過一枝漢年方朔本吾徒。日侍金門恩更殊'東海蟠桃新結實。

西來青鳥故將雛。負才自傲三冬史避世携五嶽圖。

同玄育子幹仲美遊泰不啻禪餘傳妙偈。背日丹楓照碧山。揮毫忽動聊乘多暇成眞趣。麈尾玄言夜未還。

青山好懷裏誰憐之四三三

樂泮集卷之七

千峰收宿雨。春靄滿高林。鷗泛溪流暖人稀徑草深。石徑縈迴初地迷。象外晴開明月色上方秋到白雲棲

烟樹依依廬岳西。登臨未倦重相携飛樓縹渺諸天出

山房春事

首一首。

山寺

中村雄禽常擇樹歸犢自知家。十歲倦游客空傷鄉路賒。

字雄飛,一字小十郎。

青青楊柳書橋西。萬縷千條映水低落日東風吹不盡。一郊坰渺無際。林薄日將斜。夕霽澄江水°秋霜萎野花。

滿天飛絮使人迷。

野望

水邊柳

複姓田字仲髦。一字五郡次。

諸吏o詩一首。

一塢空村外。龕燈靠翠微。花間停欖轡竹色映披衣。

題三寶寺壁

持贈東籬色。幽香滿酒杯。誰知彭澤興。不待白衣來。

九日謝友人惠菊花

只有求羊遺世侶。時時蒿徑曳藜尋

芙蓉萬仞餘。削出十州墟。積雪開銀闕°層雲擁紫虛。

不知當世務。爭識古人心。何物東方朔。終身只陸沈。

望嶽

熊城南畔白河潯。茅屋蕭條秋色深孤月閑雲來石枕。

高山流水入瑤琴。掩門無復風塵客o開帙悠然天地心。

偶成

靑雲誰屬望。多士爵如林。偃蹇時名失。風塵病色深。

三五秋霖若。登樓獨自傷。濕低萬里哀雁幾多行。

久仰無蟾影。何緣引羽觴。沈吟君不見終夕未成章。

誰道詩無敵。還知酒有神。墻東閑地在可以避囂塵。

中秋無月懷友

諸吏。詩三首。

一臥何爲者。悠悠老此身。鐘簏非我事o丘壑過時人松信|姓凇邨字子述。1字新三郎。

病中二首

【宇土库臣。今汉尼詩十八首。

竹陰

嗔秀長烟霞真島。字子久。一字一十郎。

馥姓毛詩一首。

獨坐淸陰下。靑樽對此君。悠悠華胥境。何識夕陽曛。

甘痼疾、山水自淸音。誰識閑房裡。幽情托素琴

三字姓佐久間。字子坤。一字藤大夫。

八詠 簡。

秦皇徒党藥。禹穴久藏書。何日將仙杖攀援朝帝居。

海月窩中盡。漢雲掌上飛。到來耽水石無意戀芳菲。

蛇秋日遊疎烜號柳合。芳草繞階生。談笑傾題

杯酒悠然遺世情。

抱琴眠石洞。烹茗掩柴扉。不羨楊州鶴浮雲自在飛。 開亭春雨裏。花落綠陰平。谷口白雲起筐前黃鳥鳴。

百年如一夢。世路事多違。禽擇深林去。人隨流水春雨。

人

送人歸山

未仕。詩一首。

小:複姓森木°字伯粃。一字正質

諸繁助。

詩二首。

白雲玄鶴姓小野日相從。

不見字吉右衛門。

有感

赤松四面花開人不到。

道士

予舫片野直諸吏。詩一首。

共脫塵寰從此去。千山萬水香難尋

容與湖一身送僧道雪

山

。

卓錫高秋崎秋抄送僧崎陽

還五霞山

曳秋逢晴日。裁衣對暮春。舞雩風詠處花鳥可相親。

言志

城邑竹裏微微路。松間瑟瑟風。山人呼不起高臥白雲中。

野菉今没õ詩二首。

呼堃複姓野上字子逵一字次三。

會點風雲壯。山川草木稠。文章干氣象ᵒ經術見名流。

未盡同交樂,其如遠別愁。瓊琅休自韜ᵒ縞紵可相酬。

雲路追鴻鵠。天涯指斗牛。行看著海日歸去白河秋。

幸獲賢明主。應逢扃待優。平臺誰未至君自長鄭偉。」鏗爾停鳴瑟。誰知語語眞。聖賢貴適志童冠幾何人。

送人之陽西指海之邊。飛席乘風度碧天雄鎮舊開千古府

要津爭繫百巒船。波搖山岳鯨流湧雲結樓臺蜃氣連。

爲是故人能作賦。揮毫堪擬木虛篇同時還無槃自無心。飛錫吹笙向碧岑借問眞人棲紫府

何如長者布黄金。壺中縮地乾坤小鉢底降龍雲霧深。

近學琴。夢寐之間。意恒在高山流水焉慨然

上翠微。西風獵獵送將歸五霞山上斜暉色。

併與天花映衲衣。

丁子敬一字義三郎。

片野恭吏詩一首

湖上遇上興。雨雪更浮浮。玉樹連波動o瑤花映水流。

千山飛一鷺。孤艇似輕鷗。杳渺煙村晚停橈問酒樓。

恭弟字子清。一字文次。

琴中山。唯聽琴中水。欲彈未肯彈o松風瀧五指。|深山結屋對孤峰。避澀多年學今沒o訪友樂泮集卷之七

四三 1

永日衡門下。盤桓免折腰。浮雲看富貴遠意似漁樵?大國開雄鎮。封疆冠列侯。地皆生寶玉牧尙產驊

首夏山莊即事

送山文學還東奧

一首。

姓屐本字篤夫。一字金溅6號廉齋。

君家朝市外。幽築擬山林。荷風吹

浮雲流水是生涯。

襟。

竹

高僧欲別具袈裟。 遙指西峰寒月斜。一鉢飄然無住着。

察總似少文圖

同垣子兆。過江子淵林亭

山居送僧

幽徑移幽屐。來尋谷口廬。春陰分座靜月滿千峰響杜鵑。

燈從寶塔照。月入石泉流。衣裏明珠色人間未易求

同田子弼過闕實夫山莊

盥漱山中卓錫泉。龍宮夜色一燈懸經聲已息諸天靜。

夏夜宿山寺

渡月橋邊月影多。

捫蘿尋古剎。一徑入山幽。孤幛青蓮秀空潭彩翠

迷雁投寒渚。微風轉白蘋。飄飄蓬客。又作異鄉人。

遊舍利花

一帶長流是桂河。嵐山積翠落清波晚來獨向嵯峨去。

渡桂河

暮花春竹妙音宮。

搖落秋將半。如何別恨頻。村春烟外急山色雨中新。

松江別諸子

田弼破桃飯沺。存士瓦琵琶湖

。1字大入。

三春花鳥使人愁。

江城南去路悠悠。忽聽啼鶯思舊遊桃李花飛楊柳綠

千山萬水使人愁。

南朝天子鳳原樓

芳野覽古

諸吏。詩一首

仙

墨玉河北河南十萬家。丹模書閣帶朝霞海門西望長風起。 白首躋攀罷
。青山眺望遙?千章新樹色更自隔塵囂。

一夜千帆入浪華

江。字仙

琵琶煙水平連空。一片征帆細雨中最愛湖南清絕地。

山色入窘孤,

伐木風中響。鳴禽花裏呼。還疑丘與村酒朋情厚。農歌野趣深。欲湫
餘酣去潺湲流水音。

浪華作

同人多暇此相求。寂歷空山倚素秋叢桂黃花如有待。熊水西流入海長
。蒹葭白露結為霜不憂決口同瓠子。

青樽濁酒不知愁共憐彭澤當年興何減龍山明日遊。 幸有成功濟世才。

九月八日同諸子登米山

早已飛谒有好音。

隨珠自古受人疑。深憐玩世彫蟲是漸解知天失馬遲。|碧水洋洋繞泮林。滿宮春色映青衿

幸有玄談多少侶。相迎共結白雲期。

高歌蓬燥北山陲?笑見深沈各有時楚調于今無客和。

明月照秋水。流光十餘里。樹影將山雲 總在金波裏

肥謳行

浮雲今古總如此。變態暫時何足疑。

月灣

三樂已同榮啓期。自道南山玄豹隱°誰歌空谷白駒詩3 千竿湖上竹。猗猗堪可親。況有清風起時時吹葛巾。

鄭眞人元我師。青囊賣藥獨栖遲〇四愁欲擬張平子。

竹凉

我亦清狂方外士。 飛揚直欲破風烟。

還山

臨池欲學右軍書。逍遙自託三杯酒寂寞堪甘一草廬。|青梯高上白雲邊。月湧江流望渺然⁰ 明鏡平臨殘夜色。

幸有隣翁歸艇過°隔牆呼取釣來魚。

銀河倒瀉素秋天。粒歌醉入層波冷°烏鵲影兼匹練。

白河西畔卜閑居。野服烏巾世事疎開帙寧無元凱癖。

題玉山先生水明樓

閑居

然諸人間總如此,紛紛雲雨爲君哀。

何知金液駐朱顏。天臺時逐翔鸝度閬苑應隨羽客攀?|淮南鴻寶獨堪裁。一片風霜字字開敢比沈江魏公拙。

王母蟠桃携滿袖。併將玉雪寄人寰。

何知覆應陸生才。朱粒本自知音少明月誤投按劒來。

閲君探櫱入名山。偏羨心中萬緒非是靑囊傳寶訣。

責之。辭以失亡。因戲寄

送人之山采藥

田伯文請見余舊文。因錄示之。踰月不還。屢

肥後文獻叢書第二卷

酣醉時窮千里目。滿天飛雁落寒流。

樂汁集卷之七

浦郎行

。

富守訂複姓富州市。句讀師。

裡去

嘯音遙落數峰西。

醫 詩十九首。

山中獨往訪幽棲。澗戸無人一鳥啼應是采眞雲秋風浦浦舟。追飛如偶語。後帆忽入烟o前帆不知所。

訪山人不遇

題盡

仙源寫出武陵天。展卷烟霞丹洞連雞犬千家閒白日。

桃花一路灑紅泉。春風爭勸山中酒秋熟偏耕雲裏田。

爲是秦時能晦跡?垂髫黃髮並忘年,

好是年芳靜。最扉欲暮春。清樽堪共醉黃鳥自相親。

霞外泉聲響。雨餘苔色新。留連車馬客偶此避紅塵。

桃源圖

首春山叔瑟見過。時生將歸省。有詩和答。

知己從來少。相逢紫海傍。青袍迎草色新酒感椒香。

暫惜同堂興,其如陟帖章。故園何處所。遙措白雲長。

井大年復陽洞集

三日泛舟綠河憶左子坤賦寄

腴飲從吾適。孤舟綠水潯。春波沙鴨浴夕照岸花深。

遠樹空间首。流觴難寫心。相思停暮景聊寄詠歸吟。

高鳳雞日。匡衡鑿壁時。文章同好少狂態世人知。

難字常多過。微言且闕疑。舊遊時適至猶有采眞期。

四二九

烟霞洞讀書樂

日本天梁日本東。直與三山碧海通天梁風光一佳麗。

心逐浮雲萬事空。

碧海三山望不窮。綠髪朱顏一釣客

芰荷爲衣芙蓉裳。年年歳歳天梁傍忽跨鰌背縱所至。

碧潮渺渺茫茫。邂逅美人顏如玉 4 相避共入神仙鄉。

七寶瓔珞黃金閣。十二珠欄碧玉堂琪樹繽紛巢孔雀。

琅玕摧揚棲凰鳳。一時群仙來滿坐°雜佩珊珊儼成行。

皆道今日慶女婿。鸞歌剧吹勸玉觴向暮鶴駕皆散盡。

侍兒牽衣入洞房。彩帳月照芙蓉色-金钁風薰蘭麝香。

此中歡樂何時極。自覺悠悠日月長塵心未盡歸心切。

庭開桑梓不可忘。遙夜相見告歸去中心悄悄徒悲傷

臨別相贈白玉匣。粲然秀色似夜光°爲戒此中愼莫開

相思還持此匣來。遙指人寰引歸路'縹緲島嶼一瞬回

歸來鄉縣不可識。累累古墳委塵埃袖中惟有美人。

拭淚纔開雲氣催。綿綿如練且霏霏忽向蓬萊宮裏飛。

心中萬緒擾擾起。已知人間既往非斯須綠髪變爲雪。

斯須朱顏謝春暉。可憐華胥一時夢無端覺來空裏歸。

君不見天梁浦上蒹葭裏。白鷗依舊上漁磯。

山寺

幸有一樽催雅興。交歡取醉莫敎虛。

過友人別墅

遠遊歸臥舊林居。此日逢迎長者車久任蓬蒿侵小徑。

壁上繡彌勒。深沈幽梵聲。松開雙鶴去石際片雲生。

六魚

過僧院

藪先生及諸君見過。時予會遠遊歸。喜賦呈得座待青袍士。門辭白鼻騆。細論丘壑意一醉臥烟霞。

不知城市近。家。清虛仍對竹幽賞欲栽花

得六麻

竹里亭小湖滿龍川通水源。 客釣魚磯自古將軍九首。

田梯酸弟積氣翠烟6日睹鳳嶽鍾神秀

山兵衛,

聳溪深林木繁。

雖是返車同九折。直凌危險促歸鞍

彩筆題詩滿幾峰。

金龍寺 爾能因所住

岐蘇五月崍問寒。餘雪 峰巾上看岸斷人家懸樹杪

五岳崢嶸枕上重。丹崖荟壁紫烟濃不知日日仙遊處。

岐蘇山行二首

寄臥遊亭主人

鐵錫峰頭虎穴隣。松際題詩山寺月花間說法洛城春。春日倚高臺。江南風土美。回首十萬家總是烟霞裏。

高僧不管別離意。長路飄然拂紫塵。

禪寂隨緣出海濱。津梁萬里水雲身木杯湖口龍宮近。

夾岸桃花開。維舟尋渡口。試問桃源人春來酒有否。

浪華行

送桑州師之京

同盟何事蕭條劇。沐道風塵不易尋。

桃源

巖高棧道倚雲端。林行幾日逢樵者 溪宿連宵聞石灘。

孤峰寂寂倚屏空。春日登臨古佛宮昏黑徘徊猶未去0

山花飛散暮鐘中。

。字子華。字伍集飲馬窟猶存

行行幾處逢佳景,千里歸人慰旅魂。

新築類山更呼童僕掃前除。囊開探勝靑山草 盤進垂綸綠潤魚。

葉落孤峰出。風吹萬竹鳴。到來無所染昏黑月明。

草堂甘負郭。深樹晝常昏。苔色侵幌禽情悅樂園

古寺白雲裏。登登一路懸。老僧蟬定處趺坐落花前留題時掃石。隨意日開檜。徐步風凉夕過橋向野村

樂泮集卷之七

樂泮集卷之六 終

淸波十里望微茫。短棹輕舟興轉長薄夜秋光何處好。

蘆花洲畔月如霜。

秋江泛舟

東郊日出彩霞明。十里春山書裏行o携得孤琴兼一枚。

飛花啼鳥似相迎。

新竹林間雨。紅榴花下杯。楚騷是誦罷。魯洒猶醒來。

郊行

午日

洗馬橋邊宿雨晴。雨餘芳草望中生蘇山積翠舍殘雪。

柳市輕陰囀早鶯。桃李千株花滿圃 烟霞一帶錦爲城。

泮宮春宴敍歌起。總是洋洋大雅聲。

熊府春望

四壁茅堂一水陰。諸君何意得幽尋春從郢客歌中動。

地自壺公縮後深。繞洞紅霞流把酒隔林黃鳥和鳴琴。

晚來聊下花間榻。洒風前醉裏心。

初春藪池辛三先生見過

節後登臨倚上方。天風吹帽客猶狂黃花香界浮金色。

明月珠林吐寶光。清味時分甘露淨高阶聊對碧雲長。

支公今探名山去。更待新詩滿錦囊。

四二七

江北江南尚與參。相思中路作悲吟手邊難合雙龍氣。

月下空呼孤鶴节。夢入熊城秋樹隔書倈暮雲深。

牆東世避世。心遠自無喧。移石苔旋綠ᵒ栽松陰始繁。

琴書應養老。花鳥或開樽。從是多幽興 逍遙日涉園。

熊府岡文學宇土佐子坤-約同會予綠陽草廬

故不果 賦此寄二君。

孤島倚溟海。夜船維客愁。蓬窩聽雨冷 漁火照波幽

夢入鄉關迴。身同鷗鳥浮。明朝風便好更欲問滄洲

牆東居成

能美夜泊

逃糶塵外境。幽徑碧苔滋。池淨香風入9日斜林影移。

蓮杯還許酒°幇葉遍題詩°醉後棲眞處⁰高遊誰得知。

郊邨事事幽。晩樹聽嗚鳩?蠶孀知桑日農夫喜麥秋。

新茶供過客。芳草牧耕牛。風煖南下琴歌自解憂。

遊僧院

田家即事

複姓山田字子號口怡雲。

·處士詩十四首。

肥後府學祭酒藪愨選

樂泮集卷之七

舊園春信近。行路歲華殘。別後相思夢的梅花月色寒。

十日寶光精舍集有懷海南師得七陽

送人

衍之京

登祇山時篠子謙將南歸

嗡亭移彥千里郊遊

武歸松江

聞說帝王別續雨莊

。

西山之京

訪西山隱士

歸雨山

。

人

過吟

尋上伯緝隱居

還山西山雲兮依依。山中人兮將歸。佩秋蘭兮菲菲。乘廻|遠出風塵表。遙尋薜荔房。暮雲分返景露菊吐餘芳

風兮褰衣。林壑兮嶙峋︾與猿狖兮從馴。出世俗兮|柳下無紡趣。林間散髮狂。興來一杯酒身世兩相忘。

埃塵。臨流泉兮乖綸深林寂兮無人超逍遙兮遺身。

混天地兮凝眞。森遠入兮白雲有隱士。終年不下山。朝隨麋鹿去 暮共飛鳥還。

頽然溪上醉秋月。夢魂總在白雲間大夫別莊人境外。乘鰕此幽尋。花木仙源近煙霞靈洞深。

竹間留夕照 柳下拂春春陰相顧無塵客o悠然弄素琴。

送尾幼蕁鹹興。秋風歸思深。暫時分手淚9萬古結交心。

驛路依流水。羈禽響暮林。天涯相憶夜孤月照鳴琴。

九日法宣寺呈冲上冲公禪寂地。清夜或彈琴。月上金蓮坐霜深寶樹林。

吾傳流水曲。師有碧雲吟。休道無同調知音方外

送伊大素山高隱士。幾日落風塵。自抱煙霞質'長輕軒冕人。

雪松如有待。猿鶴本相親。一笑携琴去-欲尋蘿月春。

送伊太素州。紅塵紫陌頭。豪華金作市佳麗玉爲樓。

花月東山賞。烟霞北野遊。知君携逸興到處總風流。

三日從李先生會。散步件春風。衣染山山翠花飄樹樹紅。

携來琴與酒。詠去冠兼童。誰識三春興悠然一醉中。

送僧大西山晴色敞。治祖得同遊。客醉茱萸酒°人歸鴻雁秋。

風前烏帽落。盃裏紫霞流。日暮共携手⁰長歌屬别愁。|莫說人間惜別情。袈裟明日入王城五天演法金龍現。

武晚萬里馱經白馬鳴。已見摩尼懸月色還驚錫杖度虛聲。

江南千里客。落日送歸鞍。雨雪臨前渡凍雲擁遠巒。」參玄況又兼三學。到處知師濟眾生。

是舊家山。

郁郁。

松栢大廈用。蘭蕙美人服。良材出中林芳艸生幽谷。

冬日送道士還山

幽徑蘭芽細。小池柳色沈。盈盈一樽酒-好與故人斟。

偶感水子邦

春雨園林裏。憑欄興自深。野禽馴過客澗水訝鳴琴。」不如酌霞釀。長此養天真。

笑他當路子。風塵久滯淫。百年何奄忽榮名遂古今。

春雨訪友人

今沒°詩三首。

颯颯清風至。泠泠入素琴。素琴何所響。山水多淸音。

故人千里去。相送淚沾襟。客思驚秋雁°鄉愁閉暮砧。」結廬人境外。遙遙白雲岑。溟渤環其西列嶽秀其南。

潮生明月浦。雲擁赤松岑。別後知音絕爲誰調素琴。 煙景日夕佳。空翠灑衣襟。此亭稱鍾美戶牖澹秋陰。

清憲之 複姓清成。字伯章。一字武士郡。

題上伯緝西山鍾美亭

送淸伯章歸葦北

府學句讀師詩二十首。

掉頭何處去。遙指白雲間。孤鶴秋天·遊倅未仕詩一首。

西郊秋意

送道士還山

芳直敏繼捞置。字证闸。一字貞助。

舊侣應相待。君自當年張翰才。

浦ㄇ曉炯渎。秋風吹客衣。一身辭故國千里入田子弼歸松江

皇畿。

積水連天潤。孤剩向日飛。天涯逢過雁ᵒ莫使尺書稀。

賦得綠樹陰濃夏日長

夜來踈雨過。綠樹藹蒼然。空翠庭前落-重陰屋後連。

日長無問客。境寂只鳴蟬。獨對青樽酒。猶思大古年。

緩步僻城市。西風動鬱林。四山除暑色。一雨送秋陰。

飛鳥冥烟破。鳴蟬落照深。洒然無俗事一石上坐彈琴。

尾藤字幼武。一字九十郎。

千里蓴鱸歸興催。故人相送倚高臺蕭蕭匹馬嘶斜日。

簇簇丹楓照別盃。兩地雲烟孤雁斷ᵒ滿天風雨片帆回。

松江遠哀猿夕日閑。

携囊餘大藥。飛舄遍名山。一與風塵絕-高蹤不可攀。

字子瑤。一字藤十郎。

笙歌一曲出人間。君自高蹤不可攀石羣羊隨杖起。

摩天孤鶴逐雲還繚宮瓊樹花常發ᵒ置酒瑤池月自閒。

惜問眞遊何處所。蓬萊元我思古君子。樂道甘水菽。顏生樂陋巷°傳說隱巖築。

深山休滅跡。窮途寧可哭。笑彼從麋鹿形骸比土木。

笑彼貪名譽。心神迷利祿。人各務德素分名自何如宗炳畫中遊。

送伊大素經玄海之尋花問柳畿内

春日過江子章宅

裁服伴童冠。舞雩。

三月天。深林黃鳥囀遠嶺彩霞速。

三子整。一字理兵

日

吹落杜鵑花。

傻姓中西島字寧蝍。一字七五郡。

係未仕詩四首。

西

暮春遊山寺

為吏無塵。

事。春眠在草堂。漆園花正發6 華沓夢何長。

,複姓周夢蝶

啊。一字次耶助。

楊花落盡暮江頭。

三字未仕°詩一首

離歌一曲淚沾巾。欄河

江送人

龍峰何寂歷。。

樹人疑雪後山。

春日乘晴上龍峰

樂

自高飛

相送藝苑論才子寄橋時良

詩二首。

拉

山中人語絕。但聽幽禽啼。屋一路煙霞晚°蒼茫出處迷。|歸鴻遙下暮雲間。

江頭風雨暗千山。客路蕭蕭匹馬還別後登樓一相憶。

。

送雨田子弼赴熊府

歇金峰積翠來。花外長堤騎過郊東一路踏青回。

橋南橋北春堪醉。處處敍歌送客杯钅 複姓白井字子玷。 一字壽太郎。

近停未仕詩一首。

o字子健一字兵助。

芸江上。扁舟入遠天。不知春雨夜旅夢在何邊,

田園。文章似爾稀,驊騮元駿逸鸞鳳幽澗垂釣。留客間園弄春。風過落花泛酒。境深[redacted]慷慨餘長劍。窮愁有短衣。山阿多桂樹應蹈白雲歸0

啼鳥親人上携手此躋攀。花白烟中目烟霞無限春此夜片帆何處泊。 雙溪鹿跡滿。一路鳥聲閑。欲訪高僧室 昏鐘杳靄間。

國香 〝遊伴未仕詩一首國友°字子姓河喜多字子敏 一字吉太郎。

遊係峰粛若鎖烟霞。雨過前溪夕日斜寂寂香林人不到。物外烟霞足。風前胡蝶狂。誰知高臥意彼此兩相忘

春風山本齊 遊倅未仕°詩一首到林丘。樓上青山樓下流日日主人高枕臥。花滿張筵處。杯傳曲水邊。相携詠歸路樹樹夕陽

梅花落盡草萋萋。送客高樓白日低悵望孤帆千萬里。 渡海煙霞淑氣催o滿城芳樹愽哉天晴瑤閣披雲出。

送賴春水歸省竹原

翰墨諸賢會。徘徊日已斜。殘花流水口緑樹幾人家。

白馬躍春風。知君行色雄。飛騰千里外惆悵一杯中。

首夏不窺園集

送田路孝卯應西條儅辟赴江都

汝庸。一字尙太郎。

獨坐三春暮。孤亭落日沈,推愈迎岳色隱几聽溪音。

閲風巔上五雲通,十二樓臺羽客宮,笑見滄桑人世改。

高歌黄竹度蒼穹。

遊倅未仕詩七首。

山居

游仙

一字姓和久田。字子修。一字八之肋。

共醉三清沆瀣杯

本惟安全沒詩一首。

曉月前村路。朦朧桃李花o 微風驚宿鳥啼破一峯霞。十二閒干玉作臺。五雲深處壽筵開o蟠桃花下迎王母。

本莊o字喜源太世子侍臣。

某氏大孺人六十壽詞

花村曉月

岡章遊任未仕。詩一首

千山新綠淺。一徑落花深。回望多幽趣清風送野吟

字医瀬4一字半兵衛。

先生何處去。知在白雲中。巖阿人籟絕無聽不松風。 孤笻何處去。郊外散春陰。餘濡垂楊柳°殘煙擁竹林。

萬里書空斷。三更夢忽回。嗷嗷天外雁莫是故鄉來。 籬畔黃花發。門前落葉埋。莓苔堪可步抱瑟下空階, 訪井先生不遇

雨後郊行

秋夕新晴好。含盃坐小齋。清風吹醉面明月入吟懷。

羈旅三秋晚 邪園萬里遙閑崽人不見秋時獨坐

2日暮雨蕭蕭

秋夕獨坐

!姓相。字子敬。一字孫次郎2

羨君歸住空林下。隱几閑聞天籟聲。

故山遙在海西。

停未仕詩三首。

一路紅塵絕。千山綠樹深、幽林呦鹿䟶似和膝前琴

筮仕人俱羨。贈言誰最工。楊花落不盡分手各西東。

章子⁰遊停未仕詩二首。

山色收過雨。鐘撚隔落霞。醉來回首處微月上泡紗。

十載風塵客裏情。求仙服藥欲逃名。忽臨岐路班荆醉。

讀罷五千言。松窠坐明月。夜深聽籟'冷然徹心骨,且向鄉關信馬行。曙色遙分函谷樹春光先入浪華城。

山中無題

江都客舍。送井先生。

歸本藩。

欲尋塵外興。十里到林泉。犬吠孤松下人迷垂柳邊,

一與眞僧話。名山戀舊蹤。鉢中携蜿蜒杯上渡洶洶。|衡門空落日。幽谷自春煙。知是乘風去雲遊幾洞天。

雲月仙宮曉。霜天海岳鐘。追懷高踏處°奇勝逼心胸暮雲歸遠岫。寒鳥護深巢。寂寂南憊下殘碁向月敲。

與冲上人話舊事

。斜暉梵城。逍遙歸去晚空外暮鐘聲。

訪井先生不遇

何處天花落。松間十里行。路從幽壑入雲傍上方生。

聞鶴唳明月數峰開

秋日山齋迎垣子兆賦

天邊始見鎮西山。

堤山人宅同中禮夫本敏卿賦限韻。予備

長風破浪一帆過赤馬關

玉壺何得貯芳春。

絕島有荒村。停橈日欲昏。印沙陽鳥集o蹴浪海牛奔。

孤影何清潔。飛來白雪寒。纔過花外失還映柳陰看。

雲山千里別。琴酒一宵愁。春色重要我的尋芳入帝州。

詠鷺

梅花江上月。長照故人樓。楊柳洲前水忽催歸客舟。 舉杯酬明月。杯傾月未傾。願使天上月夜夜與杯盈。

次浪華萱君譽見送韻答謝

四1111

肥後文獻叢書第二卷

舉杯酬明月

牛嶼醉後題石壁

孤劍餘三尺。輕裘換一。詩成題石壁縹緲彩雲翻0

早發冷水山

歸客頻瞻夜。空山欲曉天。星言催早駕鶯語破春眠。

溪咽巖間水。花塩谷口烟。回看投宿處家在白雲巔。

歸問林丘路。逍遙步緑苔。三年始說一夕共嗨杯

山異愁中過。人疑夢裏问。夜深棲遲丘壑意。誰問一衡茅。林臥驚黃落詩盟得素交。

贈賣酒人噲噲塚歇凉鰤拍河橋酒雄

「上揭以黃島一聲句

一聲黃鳥勸杯新。一聲一杯醉幾人非饢白河花底水。

還。碧海遙環赤馬關三十六灘行欲盡。

木庭泰琮字吉娜遊伴。世子侍臣。

詩六首。

過山寺

片雨過華界之六

四二

龍山之龍飛出鉢。神僧一喝起風雲直乘風雲何處去。

紫微宮前黃道分。行盡三十三天上天花翻風雨紛紛君本江湖客。飄飄意自輕。去留雙袖淚醒醉一樽情。

龍山送空空上人之京

別大納言藤公

游人所羨。歡賞誰同月下舟笑向湖山欲飛越難那吾

身無眞骨。天遊僊侶相思否因君將夢滄洲月

三五月既明。故人何相隔。君今別我何處游。石鏡山、道人何處去。去入洞天雲。夢寐三山色行藏一日分。

我有玉壺清。新釀瀉桂液。欲與故人傾過預期三五夕。

芳宴宜春夜。默默不解間。誰將金谷數能使玉山。

中秋送石大車弄月湖上

向瑤臺。

送道士還山

安事控飛鶴。高蹈凌天外。

海南探勝迹。路轉幾層丘。孤劍衝星宿o飛樓倚象頭。

山鳴天狗過,月落夜猿愁?疑是乘雲霧神仙夢裏遊。

藤公賜宴。既夜。予醉甚誤觸床上瓶梅花

散亂。一坐大笑。因走筆奉謝。并以解嘲。

何得乘鸞鳳。高擧尋靈洞。人世徒相送恍兮如說夢。

遊仙詩

登象頭山

此時醉既酷。頹然臥玉床。歡興漸將熟。東方忽已明。 君有盈尊酒。相迎解旅裝。他鄉疲負笈斯道耻升堂。

唯怪天地覆。俄然失仙鄉。感之傷心魄o殘夜起彷徨。豈意希賢輩。枉容中聖狂。客心聊遣興。一任醉歌長。

鈞天樂清音入妙聽。

帝奏瑤琴曲。天女翩翎翔。無乃玉鼎陳珍餗。金器酌霞漿。菊我賜餘瀝羣仙勸羽觴。」鬌絕而墜海之濱。去影倏忽不可追o緲緲雲波愁殺人

伊豫州河江驛贈希賢堂主人

浩浩且浩浩。雲波滔千里。誰將問蓬萊無乃秦皇使。

樓船載童。漂蕩迷煙海。神仙遠乎哉潛跡朝市。

藏身在藏名。修道在修意。汝南稱壺公一周廷游柱史

拂袂紛飛雪。滿堂歌落梅。欲吟天上月6鶴南明月秋。月照湖山開鏡影光湧金波萬頃流此境此

。

余亦逸氣脫風塵。飄然欲凌百由旬雲中竦身攀龍。

枕頭龍欲化。菘上鶴離群。纔過前溪路。花深不見君。

送人歸湖中

乘月尋蕭寺。看花上古城。關門今不鎖何必唱雞鳴。

奉朝辭金殿側。夕弄紫沂歸。靈契傾瑤笈恩波沾錦衣。

九霄星宿阻。千里雁行違。別後蓬萊夢の相思海上飛。

雲錦張。

小大各有求。笑爾煩心意。今吾袖手坐 還受眞人賜。

雲霧擁群岳。何辨學仙場。臨風呼小照夢裏。

。

翰墨耽遊戲。田園五柳春。李白飛天仙˗俊逸詩無敵。

乘流采明月。雲波沒行跡。伊質其何人卷身蓬蒿間。

遊心于大素。下不窺塵寰。胸中何所祕一三十六名山。

伊豫州河江驛。與宇藤二子同賦。

富貴非我金峯

藏光毫髮中。神行且龍飛。陶潜歸去來豈伊折腰人天若不成章。雲漢不在天。地若不成章地應無山川。 群仙翁獻壽。琴瑟競歡喜。吾生何踈懶高枕連日睡

成章配天地。萬象斐然。其人與骨朽誰繼古聖賢。後此良宴會。瞻望空徙倚。天風時吹雪爲我滌塵思。

斯文終不喪。長敢吾黨傳。仲尼事刪述昭昭春秋篇。」笑酌玉壺酒。坐招二三子。鸞刀割紅肥 爛如霞彩曬0

千載仰末照。赫與日月懸。老聃虐無士意遠言亦微 一餐既忘飢。三杯既成醉。三杯復一餐滿腹將何

長鯨張髫鬣〝蔽彼蓬萊巔。吹滂成雷雨白日味海天。瀨尾撥玉盤錯落珊瑚碎。疑是銀河魚飛自碧霄。

電聯三百人。漂蕩不復還。他日如我求。雲濤但渺然。」口中吐光彩。斐然雲錦字。稽首解其緘殷勤何所示。

報道藤中郎。乘龍朝上帝。賜宴紫宸宮-天敕進班位

110

顛。自安江海士。悠然吾喪我。寧知有天地

夢遊大我讀名山籙,無如金峰勝。欲往陟高岫我馬久疲病。

煙霞凝想喝。寤寐神魂騁。眞遊無隔邈。一身成風影。

倏忽向南麓。氤氳乘春景。栩裼逐芳馥深深迷花徑。

孤翼凌千里。飄飄歸西海。日暮欲何依聊借珠樹枝。 花徑連陰壑。明滅望不定。峨巖屢失脚愕如陷深究。

旅懷何京京。愁來耿不睡。忽喜雙仙禽淸唳來相和。 綠熊雲谷。玄猿嘯松嶺。仰天空躑躅°兩幄絕石梁0

此夕知何夕。邂逅見君子。一接無新故恰如兄與弟。|鞭起山鬼伏。駄去如龍驤飛絕千尋澡o蹴裂萬重岡

論文窮今古。微言拆毫釐。笑傾玉壺酒 沈醉各隨意。天風拂我足。飄颻素霓裳。憑高送遠目天地正茫茫。

頹然臥前楹。山月大納言藤公下賜嘉魚數頭。時迎二三友飲。

大公釣渭水。久既費芳餌。馮驥彈長鋏悲歌知何事。

角遙荅寶螺聲。

要我虛左局。豫掃白雲堂。手啓瑠璃櫝示我古仙。

其書乃鳥跡。粲爛紫泥章。讀之纔-夕°頓使心骨輕。

笑着朝天服。翩然謁眞皇。宮觀環花木簾櫳四一九

樂泮集卷之六

空谷何所有。谓顛秀且滋。馨香爲誰發淸風日夜吹。山中無神仙。海上無神仙。唯是典籍間靈跡杳相連。

垂釣者誰耶。箕踞磻溪喟。烟水濕裘裀霜雪上鬢眉。」六六之名山。崢嶸乎目前。髣髴古仙人羽衣何踞。

生平老匹夫。誰識帝者師。三千六百釣豈與小魚期。鬚眉皓如雪。桃華顏色鮮。自道服元氣不記幾千年

所期釣六合。欲以報明時。皇天借我手西顧牙璋分。顧我撫我背。授我以靈篇。長跪解龍絨°五色炯実烟。

虎變威何狂。鷹揚氣不群。 長風生四海倏忽卷浮雲。」本是玉洞祕。世人焉得体。冷笑秦皇愚謾役徐市船。

又

獨立南山樹。喬喬凌雲霄,烈風無時休 蕭索碎枝條。」昨是千乘君。今守一畝宮。富貴豈長在恍與夢寐同。

由來松栢質。難成楊柳姿。豈不慕纖麗¯崚節竟難移。願我服元氣。天外駕飛鴻2

書以報營丘? 珠以光都。未抗圖南志9或恐肆中枯。|昧谷陶頹影。明月升東嶺。兩曜如飛電晝夜迭相騁。

誰激西江水。爲余潤險叫。而後生羽翼' 風摶凌崑噓。 灼灼桃與李。艷陽鬪光景。殘香未辭枝 蕭颯秋風冷。

榮枯各有時。萬事何曾窮、旣聞東陵侯8種瓜青門中。

窮魚在涸轍。自稱東海臣。欲一躍王舟曾經游孟津

頓失風波勢。泥沙曝此身?吳牛喘月時大車煙塵起 爲鳥莫作鵬爲魚莫作鯤°潮落鯤忽枯風歇鵬難騫。

昊天胡瘥我。五情熱如煅,群蝦得志顧我何傲侈。鷦鷯遊籬隙。陽喬蹣蹄涔?物各貴適意°何論高與深。

穿莫我眼底。眼底明珠莫我腹中腹中藏素書

聖人製衣冠,上下各有等,龍與龍同窟魚與魚共流。

旣聞白帝孫。微行漁潭中。漁箭集其眼。赫怒愬天宮。

變服無貴賤。何如辨魚龍。

。

雜感五十首 節八首

一朝天上日。光輝舊邦新。

湯湯九章?一章六句之邑矣?水之斯縈-山之斯-斯居斯處。

斯就其業。維材維木 其用罔極維魚維鹽其利匪匱。

于野謳歌。于鄉飲食分開不止永懷爾德。

吁嗟康哉。代七章八句。一章十四句。赫赫分德。

黎稷離離。

言磨其璞。匪礦何得。言學其道。匪友何翼。

磨璞磨璞。不差其則。既見君子築之無懈。不日成矣-斯種黎稷-彼

友朋相須。道始成焉。

築之無懈。

吁嗟美哉。彼川之陂誰其築之民孜孜無士無女。

露之灑瀼二章。一章八句。一章十二句。

稻子能之。子分子分吁嗟哉。

黄髮稚齒。于嗟我老。

稻子來止。我其生矣。稻子不來我其亡矣其生其亡。

此日何日。與公同好。言拜其賜詢恩且厚公日于嗟。」彼險之子。胡而其酷?執策比我有脚其目既見爾來

于嗟我老。匪帛何暖'匪肉何飽引爾翼爾俾爾壽者。斯踌斯踻。豈敢憚勞懼爾之勁。

露之耍耍。被彼祜楊此日何日言拜其錫4從公之所。築陂丁丁。餘波既平°無溝不通°無田不疆嗟我士女。

詒粥及醴,受言嘗之詢熟且旨。

實竭其力。得魚與彼艱食。

露之瀼瀼。養老禮行也

饐彼南沚。既聞女歌其誰不善。

有漼三章章四句

他山之石。中林之薪是拆是轉-築彼之濱孌孌者子。

洪流瀰谰。斯決斯道?至海之诶。

斯之稻氏。奉命敬止。匪逸匪豫來我死原野茫茫。

有漼者淵〞維魚依之。豈弟君子。民應歸之。

治被洪水。乃顧左右命斯稻氏。

有漼美時政也

公曰于嗟,天之辜我哀今之人。亦離其禍誰翼我事。

伊

斯失其居。

湯湯。美稻氏也。言稻氏治水。三農着緒焉。

肥後府學祭酒藪慤選

·大素。一字莊

磨璞二章。章四句。

老師員º詩二十五首。

有漼者淵。維魚游之。豈弟君子。民庶休之。

有漼者淵。維魚躍之。豈弟君子。民庶樂之。

湯湯洪水。襄彼山墟4邑里爲淵-人民爲魚-斯漂斯溺

磨璞。美國君好學也。國君好學。則下民化德。

追和白石先生八居韻 1首

樂泮集卷之五 修

山林不用寄幽情。大隱從來在市城3蒙叟逍遙堪玩世。

楊亭寂寞欲藏名。花間久謝成蹊客柳外空聞求友鶯。

請看翩翩遊俠子。銀鞍白馬隔塵行。

洛城閑居

洗馬橋邊綠水涯。垂楊深處是吾家º池邊芳草牽春夢。

屋外青山帶晚霞。有句自題三徑竹探幽誰問滿園花。

西鄰幸有香醪熟。興至能分稚子除。

綠竹蔭閑砌。清流繞晚林。誰知明月色終夜照禪心。

春日閑居

梵閣西山裏。寥寥鐘磬沈。唯餘樵者徑。未有世人尋。

藤蘿深處無人到。閑坐唯聞鐘磬聲。

題山僧房

不仕詩一首。

形核健设

安

郭北青山暮色清?偶從方外問盟成行寶樹圍金界。

欲問避秦處。行行似故溪。桃花開復落咫尺使人迷。

梗姓安野8字形助。遊倅。

首夏新晴遊山寺

青郊十餘里。處處起春煙。遠樹踈還密o遙峯斷復連。 前山微雨過。晴嵐散晚霞。中有隱几人嗒坐聽天籟。

鳥歸晴靄外。花落暮鐘邊獨待前溪月6禪心自杳然。

僧舍晚歸

野澗秋風起。幽人獨住還。目隨歸鳥斷心與暮雲閑。

晚眺

野饌供新麥,香奭薦綠芹,陶然釣檻上坦腹引南薰。

山居

一水合餘照。踈林出遠山。彷徨不能去。明月在松間。

嬋娟微月影横溪。傍有幽棲在嶺西°錬藥階前降白鶴。

煎茶爐上待晨雞。花飄碁局紅堪拾柳拂琴床綠欲齊。

寂寞柴門人不見。新巢雙燕護雛啼。

山中無題

散步天花落化城。虎遶經壇風自起龍歸咒鉢雨初晴,

心中多愁緒。行步自遲遲。嘆息人間世9涕淚滿面垂?|繞屋皆流水。輕鷗日作群。遠村濃淡樹幽石去來雲。

欲向故鄉去。雲衢不易间。仙女贈玉筒-爲言君莫開。 一榻兼孤枕。悠然臥綠陰。樽中千石酒-膝上七絃琴

更從來時路。萬里一時來。人間久別離?舊居不可知。 富貴非吾願。逍遙得此心。鐘聲何處寺8寂寂度前林。

相顧無相識。山川異昔時。試向行人問-纍纍指古碑,

遊鹿迷春草。鳴禽入暮花。不聽鼯嘯何認姓孫家

夏日雜興

龍宮深千尺。樓閣何玲瓏。神人相導引°百花映簾櫳3

龍擎五雲駕。樹着四時花。爲我蒸火棗火棗大如瓜。

一訪椹閑地。風塵跡已遐。壺中饒日月枕上弄烟霞。

訪山中道友

丹陽有海客。避跡丹海濱。生涯無一事長竿託此身。」大海如杯三山垤。六六洞天自在攀忽向瑤池陪盛宴

日日釣磯上。煙波獨垂綸。終年多逸興簑笠幾回春。」綽約伯人玉顏,手排霄漢出明月鸞笙鳳管奏鈞天。

識風塵外。長此得天眞。一日跨巨鼇-忽爾到龍宮。我欲從之不可得。玉佩珊珊三嶽巔。

一出風塵長不還。飄颻忽乘鶴背去天風吹上五雲間

浦郎行

離家幾千載。光陰不可追。惆悵開玉笥雲氣忽離披

白雲與白髮相亂紛如絲。容姿不崇朝倏忽顏色衰。

滄海爲桑田。仙遊不可期。空見釣磯嵎蕭條帶斜暉。

三山鍾美窟談神仙事贈主人上伯緝

四一六

華嶽畜金液。岡山曄紫芝°銳意慕仙類°翹跡企蓬萊?

肥後文獻叢書第二卷

神仙聚靈族〝飄飄泝八埏。王喬控飛鶴赤松嘯紫煙。

洪崖排雲出。顧我一粲然。 我欲往從之雲路恐無緣。

四時更代謝。日月如循環。蕣華不崇朝松栢挺歲寒。

願得安期術,千載方童顏。

山蕭瑟兮水潺湲。山中之人意自辟穀餐霞換凡骨

共欲携手去。倏忽入煙霞。玉佩珊珊響廻合白雲傍。

初知乾坤異。已覺日月長。塵心猶未盡°西望懷故鄉

仙女開盛宴。留我勸飛觴。回看何所見。三山吐月光。 竹間獨酌。天地一狂生。形骨緣詩瘦°囊錢爲酒輕

樓頭紫氣動。忽聞步虛聲。仙人命鶴馭-笙管下三清。」壺中初月徹。釉裏晚風淸。嗒坐還高臥縱吾達世情

飛樓架天上。携手共徘徊。摘去三秀草携來九霞杯。

樂泮集卷之五

黿鼉穴深淵。鷦巢一枝。大小各得意。吾生獨何依。

送人

啡

春秋作所感。絕筆於獲麟。高山不可攀千祀仰斯文。

遊仙

折江南與江北。春風各索居。江南梅巳落-江北不寄書。

前村白雲暮。一犬吠柴扉。竹外孤峯出。松間片月微。

。」文武既已逝。周道久陵夷。吾慕孔夫子。定書且刪詩。

軍城早秋

孝弟爲仁本。禮樂治國基。樂道以忘食夙夜惟孳孳。

榆關搖落早。誰不起邊愁。月冷連營夜°風鳴萬馬秋

馬秋。」水不舍晝夜。逝者其如斯。美玉何堅白磨涅不鄰緇

獵火生荒野。烽煙接戍樓。何事蒙霜露港單衣復此留。」弟子三千人。斯道有所為,子淵在陋巷簞瓢樂可知。

中秋綠河泛舟

鏗爾點也瑟。風詠思浴沂。乘桴將浮海由乎欲從之。

遠山收暮色。閑棹出汀煙。萬里滄洲月中秋綠水天。富貴人所欲。於我如浮雲。長沮與桀溺°鳥獸不同。

酒同庾樓興。人想漢槎年。醉裡留去⁰還疑向手邊。」夫子雖至聖。而厄陳蔡間。絃歌猶不絕¯知命本樂天。

江上寄人

雜詩

晚過井上生山莊

共聽芳園鳥。相求到汝家。暮煙籠萬竹踈雨過殘花。黃菊青松似待人。田園秋色幾時新o家僮門外相迎出。

方外機心少。樽前世路遐。在歌君莫笑。一醉是生涯。」笑指先生漉酒巾。

故山猿鶴侶。幾歲更離群。高志輕青綬4歸心在白雲。

暮遠公室。東村巳宿鴉。忽迎虎溪月閑品虎丘茶。

暮春過野生林莊

題陶淵明歸去來圖

獨生師房品茶

山中春已盡。平村遶翠微。澗戶微風動o殘花處處飛。

山送伊山人還靈雨山 地近鹿門

。

中無題

樵響穿雲遠。漁歌隔綠水環名花。青山近別莊。薜蘿煙外瞑o荷芰雨餘香。昨日折一枝。今朝折一枝。嘆息長河曲°春風幾別離。

浦長。不知冠帶事。吾意在滄浪巖屏春草合。水寺晚鐘聞。况引鹿門月時時訪隱君。晚和登複姓和田。字子成"遊。

未仕o詩十六首。

晚餐鷄黍具。初志薜蘿衣。把酒還高枕°煙霞夢不違楊柳同池先生遊采釣園作

首夏山莊即事

首

松安之帷姓淞细。字子般。1字政丞。

禪戶飛花暮。獨從棲鳥還。殘雲寥廓外o餘照有無間。

柳絮桃花蹈作。

不行久驕嘶o臨風忽下金鞭影。

晚歸

汗血剔剔碧玉蹄看調馬

不言復不笑。冥心守衆離。排雲乘輕鴻剔剔從所之。

爽鳩有齊土。其樂難永期。杞國憂天墜中心常自悲

雨後風光乘興來。白雲深處且徘徊洞門空鑽無人跡。人生實多虞。誰不遭此罹。嵩陽有通士o酡顔方嬰孩。

一樹紅桃花自開。

坐松間。

訪隱者不遇

粲粲玄圃山居晚眺

雨後秋山靜。斜陽照孱顔。幽蹊無客到8 喬木遊倅命句讀師不就詩十四首。

遊仙

送人還蘇山

岛字伯。一字才藏。光輔子

心從詩一首。

涼風殘月荻花秋。

複姓板垣字七大夫。

松橋夜色水悠悠。浦口三更泊小舟何處鐘聲驚客夢。

後鏡4禪時時風雨起。

鉢中貯得一天龍。

松橋夜泊

上方岑寂傍長松。翠壁雲生講過吉祥寺

春餘多四1四

肥後文獻叢書第二卷

杉定宥軺慰從詩一首。

字君恕。一字伊右衛門。

飛舄知何處。天邊萬仞山。欲尋靈草去。遙向白雲還。

嘯散淸霄外。蹊深杳靄間。儻逢婚線畢o隨汝出塵寰。

町其香的唐微˙詩三首 。

丁子光。一字喜七郎。

有禽還。

空翠當欄落。峰陰入戶。興來從所適長嘯勝事。山屋白雲深。青草濃如縟 新篁鬱作林。

携琴依冷石。植杖對遙岑。欲下一杯酒ｏ殘鶯送好音。

玉。迺在昆岡巔。瑤臺排霄漢ｏ丹葩被絳泉。

中有尋化士。命藥延童顔。肌膚如氷雪ｏ綽灼一何鮮。

有待乗冷風。飄忽凌紫煙。聯翩戲九垓 逍遙萬斯年。

延頸俯且仰。碧海變爲田。

。欲行中扈從ｏ詩二翹跡崑丘上。稅駕扶桑枝。咄夫秦皇輩欽羨徒爾為
。

僧舍仙梵寒松懈。胡僧夜坐閑。忽看溪水白孤月出前山。

四一三

樂泮集卷之五

贈峰月上人

田園秋色滿藁莢。遙憧陶家獨把杯九日東籬風雨後。

寄西子彬

内監ｏ詩一首。

岡鴻岡田字子儀。一字瀧平,

起行殘月傍山高。

愁子規啼

平秩東作

池塘數里使人迷。

渡頭風雨歇。草色正萋萋。新水侵磯漲°殘煙繞樹威春

江亭晚

寂寞南山撫素琴。

忽逢春色盡。緩步出城西。蝶逐殘花亂°鶯移綠樹夏日村居

完子府學句讀師詩八首。

西郊春望

借問琴床幽獨夜。淸商一曲向誰彈。

何處夏陰多。清凉水寺阿。薰風滌竹石夕日照松蘿?| 秋高城上桂華殘。美爾幽棲倚翠巒'採藥時隨樵客去。

岸幘時隨鶴。揮毫在愛鵝。煩塵渾不染°間訊病維摩。 裁松無復世人看。苔封片石孤雲宿8月照流泉萬玉寒。

巖靖 下字君恭。一字字左衛門。

寄懷松士哲

水寺避暑

臨流卜草廬。恰似野人居。蔣徑親移竹°濠梁坐辨魚。

高僧結宇對春山。盡日焚香獨自閑野草如煙連色界。

水竹居

跡忘城市近。心與世塵踈。甕裡新醅發陶然幽意舒。

天花作雨禪關。風塵不到觀心處°海壑時開指掌間。

世上悠悠無住著。何人投跡共追攀。

啼。

孤村煙漠漠。一徑草萋萋。欲向桃源去。前峰日巳低。

低。

雲飛孤島外。日落一峰西。倚檻遙相望。長橋拂彩蜺。

玉管吹灰日。春同斗柄東。榮光朝野遍淑氣地天通。

萬物皆蘇色。千家忽惠風。杏花將滿樹o菖葉巳抽叢?

權節傳田畯。乘時命牧童。 耕耘從稼政o丁壯就農功。

水暖溝塍口。煙和甽畝中。新秧何厭厭o宿麥正芃芃,

在畔人無惰。開倉復不空。偏欣沃聖澤長此仰年豐。

柴門傍竹林。清風如水滌衣襟幽寒日日無煩暑。

獨對雨歇草萋萋。引杖閑行日巳低欲向武陵溪上去。

煙霞人獨自臥征袍。萬里鄉關夢寐勞忽聽子規林外科。

複姓不知黃菊向誰開。

白登臺上白榆秋。明月關邊河水流多少征人來飲馬。」萬里鄉關望裡迷。

北風吹落紫金融。

邊庭秋詞

葡萄美酒此相邀。桃李芳園重見招o滿院鶯花春寂寂。」起見城頭大白輝。

一樽風雨晚瀟瀟。

春晚采眞洞雨集分得瀟字

流鶯遶舍囀紅霞。殘夢曉同處士家滿目蒼蒼演樹裡。」羊晚歸。

春風吹落幾枝花。

故鄉萬餘里。搖落客心孤。一日秋風起歸心滿五湖。

春曉

秋風引

一徑斜分熊水邊。江東蘭若翠微連山雲影傍憲中落。

石瀨聲從樹杪傳。遁跡時聞獅子吼。焚香兼見具多編。

人間宿障渾如脫。坐以清齋近法筵。

過春光寺

籃衆相迎壺水涯。林亭朱景晚來佳松間露滴蟬聲響。

石上苔深客跡埋。稍可隱淪淹歲月o唯將習靜託形骸。

留君暫語閑窩下。頓使清風滿釉懷。

夏日迎辛先生古公餗得佳字

池濶雄風起。林深翠鳥棲。爲逢恩顧渥不覺夕陽西。

肥後文獻叢書第二卷

松岡。字獲之。一字八郎平。

松播 句讀師詩二首。

十二峰頭片月低。岫雲深處子規啼無端枕上驚孤夢。

子規

青海陰雲凍不飛。十年征戍在金微°角聲一動楡關曉。

聽角思歸

鑿地緣通水脉。移石時掃苔衣簷前桑柘風冷籬下牛

大渡涵寒影。中流欲暮天。津頭一以望遠樹澹如煙。

續田園樂

晚渡大渡

幽居本自地仙家。數里煙雲傍水涯 北澗禽聲催短晷。

東籬霜色帶殘花。牀前共酌青州酒園後親栽陽羡茶

烏帽相看情不淺。何妨留飲及栖雅。

欲問參同契。相尋蹈紫氛。蒼苔生雜樹白鶴下閑雲。

藥杵清泉響。茶煙夕照曛。生涯唯若此。日日謁茅君。

初冬過某氏林亭

四三

三字姓中山田字稗甫。一字多内。

·府學句讀師詩六首。

觀

樂祥集卷之五

11

飛閣秋晴敞。披雲此上躋。白河軒外遶˘蘇嶽檻低。

一酒后。而況富貴與榮達。優游長與樽酒期。

秋日登披雲閣恭奉和韻

輕過糲林到溫泉

擊筑大醉舞。悲歌慷慨涕如雨。歌罷頽然甕下眠。不

人世如流水。交態似浮雲。相逢不樂良可惜。莫使白 隔憊烏鵲喜。秋瞑望悠哉。偶有香醪贈翩然鍇字開。

日空西曛。主人貯得滿樽酒。酒氣霏霏撲鼻薰。小醉|老妻摘甲菜。稚子洗觴杯。忽覺風塵遠因君清興催。

田生惠濁酒賦謝

前有樽酒行

郊外踈鐘動。徘徊落日斜。荒城餘古徑老樹著殘花。

書服雕弓出塞馳。前行半是羽林兒蒼鷹忽入寒雲去。

雨雪飄搖捲大旗。

衣染春山翠。杯傳臘酒香。共邀林表月清嘯醉來長。

遊菊池途經高田村

羽曲

過良子瓏宅

夜猿啼

散向人間作雨飛。

東皐望不極。整屐訪幽蹤。霜早楓林路歸水寺鐘。

十里蒼山掛夕。一叢花樹映禪屏諸天日落春風起。

秋日訪斗山子

泰勝寺看花

射落高飛雙皂鵰。

波心亭子靜。夕霽望悠哉。水暖鳬浴o風微翡翠來。

霜下平原草盡凋。翩翩胡馬逐風驕角弓彎向天山月。

江亭晚霽

楚天漂泊夜方長。獨對殘燈憶故鄉o裊裊三聲三峽曉。

無端科斷九回腸。

岡文东边俩。字子林凡首。

遙峰餘照歛。極浦片帆间。看取垂論者生涯在酒杯。

渡頭橫晚靄。谷口澹秋容。佳興行無盡。其如夕日。

鳩枕迷微徑。盤桓至草堂。煙霞從勝具一泉石人詩腸。

逐水漁舟下。隔林雞犬譁。回望昨遊處。一路入煙霞

覺疾雷震屋柱。此時縉紳如嬰兒此時軒冕如糞土君

不見塚中枯骨又何爲。百年雖久竟有涯。三萬六千朝

且暮。日日昏昏無醒時。醉後不羡長生術。花前只

屐破苔封。迢迢塵外蹤。風花千萬樹°晴靄幾重峰。

奇石蹲如象。孤松矯似龍。溫源知不遠。一片瑞煙濃。

曙色開扃閣。登臨屬發春。皷鐘已備舉⁰簫管互相因。

東郊一眺望。二月艷陽天。峰巒消曉靄桑柘起春煙。

鳩乳孤村外。犢眠豐草邊,飄飄散步去緬想浴沂賢。

尊明閣聽樂

崑嶺最高頂。層層雲作樓。鳳驂迎弄玉°鶴駟引浮丘。

歌曲才三関。人間巳萬秋。寄言東海叟屋裡幾添籌。

春日郊行

舞蝶將狂日。鳴禽欲變時。流從屋後引石向花前移。

揮塵清風動。彈琴微月窺。此中幽趣足。不必碧山陲。

遊仙曲

爲厭塵間事。來尋郭北田。連巒寒倒影。一水澹含煙。

落木悲風外。歸禽斜照。欲賒村酒去倚小橋邊

首夏小理花榭

秋日郊行

高唱凱歌入未央。自此年年事防秋⁰荏苒8月空白頭。

苦辛巳經百餘戰。轄軻未封萬戶侯6李廣數奇難成績。

廉頗遺矢不見收。刀痕箭搬無人問'鐘鳴漏盛獨自愁0

君不見驊騮新從渥洼來。飛騰奔軼勢壯哉。齒已長兮

人空棄。何知昔是不群才十舍之駑千里駿共在郊野

同困窘。祗今無復田子方兀老骨有誰愍。

肥後文獻叢書第二卷

胡人出獵圖

金錫翩翩一衲衣。空山直指下方歸再遊好認幽深處。

桂樹叢生掩石扉。

山居送信

驛路秋風木葉飛。思親遊子故鄉歸到時一片琶湖月。

依舊高堂照彩衣。

送人歸省湖中

春晚滿園緑草。雨餘一徑青苔。花飛鳥雀陶去一日落午

羊下來。

田園樂

有客遙瀛海潯。爲思同志此相尋東夷貝錦詩中麗

乙岳煙霞袖裏深。早巳韋編脩舊業終能蓬矢篋初心。

新知更引杯興,把臂風流入竹林。

善音堂初接津輕山文學

故人家在碧江邊。寂寞園林傍野田已是文章耽盛事。

豈無書畫入眞禪。世榮好浮雲外赤葉黃花把酒前。

來往只餘幽侶在。相携時上打魚船。

哔哔搖壇樹。嗟嗟滿郭閾。青郊來彩鳥6瑣水銀鱗。

齊魯風聲變4閭閻俗染新。易良兼莊敬。長此敎斯民。

訪富元郎隱居

樂件集飬之五

四 九

颯爽蚪鬚有光輝。十歲學劒單常複十三走馬疾如飛,

君亦引杖去。西山還草堂。草堂何所有藤蘿惹露凉。十五殺人無忤視。二十爲將向全微誓言此行無匈奴

壺樽明月下。朗吟醉淸光。天眞信可保何必問仙鄉。亅旌旆逶迤月夜驅。嚴冬十月殿氣肅o 黃沙飄揚白草枯

對月懷友

雷鼓嶺鼙動天地。魚麗鳥列乍卷舒羗虜驚走陰山傍

西下歛餘曛。暝色何爲遲。隱隱層城上忽已出半規。 乘勝追北膽氣揚。馬上割飛北斗劍-營前射殺左賢王0

素輝稍流動。瀲灑滿淸池。嗟彼同袍子。遙在天一涯轉戰深入度幾日。任他蟣蝨生甲裳麾下斬首三千級0

送馬彥章還山

本是輕薄俠少年。生來好交客幽燕身長八尺腰十圍。

〈詩十九首。

老將行

複姓大城8字文卿。一字多十郎。

獨上高樓碧海隈。明州秋色望來開請看三萲峰頭月。空山忽巳瞑。象稍將靜。絕壁有飛泉°隔溪送淸響。

偏照晃衡奉使才。

林岫鳥還。蘿軒月欲上。素琴殊未彈待君 1 來賞。

登樓

縹緲天風吹羽袍。青谿一路五雲高仙姝總在瑤臺上。 巳除豺狼害。無奈虓虎騰。藩屏將何在瓦解又土崩。

手棒銀盤勸玉桃。

神筭無端倪。衰運難可興。忠肝貫日月義氣激千秋。

擬孟襄陽待丁大作

夢賚同傅說。恢復想武侯。炎沙赤坂上藁人金剛陬。

天風吹送白雲邊。

一朝風雲合。龍光近冕旒。雖無和羮重時有借籓籬。

面面隔雲松。廻磴通何處。植杖倚淸陰閑與山童語。書中何所述,只言悲遠離。湛湛盈樽酒晤語知何時。

遊仙曲二首

詠史

桂旗芝蓋盡遊仙。飛去飛來凌紫煙向夕瑤池謠自起。天綱一解紐。王室如懸瘤。區區方寸地。常懷寰宇憂。

白沙十餘里。渺渺海濱分。月下迷鷗夢眼霜中失鶴群。|中霄起彷徨。綿綿多所思。惻然顧形影。心曲將愬誰。

仰看雲間翩翩翻互追隨。聊此裁書札千里相贈貽

遙遙楓林上。一半掛斜陽。牧羊下村閭歸禽過雲岡。 紅塵都不到。青桂自堪攀。予亦放歌士。修琴相往還。

濱

白官途君所厭。肥遁舊家山。高臥煙霞外ˈ朗吟林谷間。 深谷通滄海。中藏入箇龍。我來試長嘯°風雨過前峯。

八龍谷

瓊浦遙連紫海流。非是名山探禹穴。何能霄漢共仙舟。

到時明月應盈掬。分得清輝萬里投。

三嶽

山有岐蛆之峻坂。海有鳴門之迴潤°馭者篙人一失手。

輪輪扁艇去不還。豈啻鳴門與岵岨人間盡是行路難。

首夏山莊即事

書劍看君作遠遊。故人相送上高樓孤城乍敞浮雲色。

送藪君子厚同城交卿赴崎陽

秋風何事掃幽蘭。明月巳隱幽蘭萎仰屋俯地易摧顏

行路難分行路難。非關千轉與百盤風塵世上常多梗。」分手天涯嘆斷蓬。雲山千里渺無窮。白河秋早關門泡。

遠遊多病長浩歎。燕石從來欺美玉草属欲加殷之冠。」玄塚霜寒草木空。不是金華開禹貢何知皮服慕王風。

猶龍眞人跨靑牛。墨突孔席何不安。雲霧何心障明月。當年修聘堪論樂。海表應看齊國同。

之東奧

大

江之源發岷山。逝波萬里不復還2 百年人事竟如何。

倏忽速於秋風過。眼前唯有一樽酒請君休笑醉中歌。

春花開時多暴雨。夕月欲明浮雲聚春花夕月雖可。

暴雨浮雲使人苦。願尋仙人萬古宅常挹金漿與瓊液。

賦得行路難贈人

芙蓉萬驛樓侵曉發。天末遠鐘音。極浦飛星白°斷山宿霧沈。

嚴霜仍短褐。舊物有孤琴。未辨通津者。悠悠行路心。

開玉山先生登富嶽遙有此寄

君不見大陽之靈出扶桑。夕淪虞淵無餘光。又不見放歌行

鈞天廣樂自鏘鏘。

早行

仞倚蒼穹。日上扶桑大海紅展足大雲垂鵬際。

振衣積氣散鴻溕。霸王羽獵餘山麓仙女霓裳舞月宮。

信宿願餐峰頂。相隨輕皐御天風。

秋日送人山莊纔有徑。時樹自成陰。風外殘紅亂雨餘空深。

窠閒看伏鹿。日永變鳴禽。獨坐彈琴處唯開流水音。三嶽與三島。海上鬪奇絕。欲知羽人來。五雲時明滅。

送人還山

樂泮集卷怒

親和先生住深川。墨蹟海內無不猩毛綵筆燦生光。

上巳前一夕雨迎諸子賦

作

南國有橘樹。過春日潤中昨日非今日盡爲是。

明朝恐作馬蹄塵。

相逢相送幾回春。花落花開別故人君向花前莫僻醉。一朝乃吐芬芳。夕乃生瘡痍。一富與一貫轉移終又始。

1

花下送別

富貴能結交。言笑日相親。一旦遇窮困。相遺如路人。

就農唯問稻苗肥。迢迢山路牛羊下o寂寂烟村鴉鷺飛。

一曲放歌無和者。清風冷月送吾歸。

馬成體进有馬。字彥章。一字源內。

*世于侍讀詩十七首。

古詩

千峰日夕靄餘暉。纔到田園人事稀。藉草不妨衣袂濕。

肥後府學祭酒藪慤選

暮田園

樂泮集卷之五

幽賞移明鏡。高歌把玉觴。遡洄不相見惆悵碧江長。

江乍作枳。雲間有飛龍o原自三尺。

變化無端倪。顯晦從古爾。誰謂柳綠鶯啼日欲斜。淡煙流水兩三家興來試向樵跳去。」不知至道妙。萬物何苞裹。是以蒙莊子混同物與我

一任春風吹落花,

邸舍席上贈井親和

一醉艸堂迎客時。蕭條夜雨涨園池明朝縦問流觴興。 黃卷玉軸寫幾篇。唯訝龍蚍倐飛騰°直捲風雨動雲煙。

落盡桃花多少技。

之四 大篆盤屈小篆棘。蟲書穗書故接連-豈啻懸針與垂露。

儼如玉繩麗秋天。周王石鼓神禹碑。且摹古鐘紫金鈿。

從來好奇還好古。勿論入妙又超支。昔入名山探石室。

相値不老之神仙。列侍香案學仙書 煙篆霞文一何鮮。

歸來乍自誇揮灑。觀者誰能不駭然予好遠遊向東方。

路過曠野接扶桑。何料相視拊髀躍談言如湧互荒唐。

共挹天門碧沆瀣。傾盡崑崙白玉觴醉夢總非塵中事

孤月欲千里。美人天一方。爲尋蓴菜興獨負桂花香。

春日訪隱者

秋夜同諸子賞月懷垣子兆在松江

湘南春巳遍。時見雁鴻歸。驚客過關塞先花渡海磯。

姓辛川。字順甫。一字

番士。詩一首。

春日禪房靜。重來問道安。雲間鷲峰秀雪後虎溪寒。

歸雁

源進。番士。詩一首。

遊月照精舍

複姓安田。字德卿。一字

大污秋色滿。煙水沓無涯。月似開秦鏡人疑泛漢槎。

洩浴沂心。

中秋泛舟大江

一望塵寰外。高高蘇嶺巔°驪珠還赤水鸞嘯下青天。

喜晴

苦雨連旬日。新晴興不禁。杯前黃鳥到門外綠溪深。

偏門。番士。詩一首

奉送宇治公還阿蘇

中川。字子樸。一字着

琵琶湖上白雲飛。知爾思親獨自歸莫向山頭窺石鏡。 竹影爐烟合。松陰鐘磬聽。禪心何所似明月滿前汀。

秋風吹入老萊衣。

一字臨滄海。寥寥古梵庭。空花墜地白潮水與天青。

秋日送人歸省湖中

蕭寺西溪口。松陰古殿扉。人臨流水坐鳥逐落花飛

幽石蒼苔遍。孤燈白日微。欲歸迷出處烟樹暮依稀。

同垣子兆遊慈恩寺

謝山僧惠梅花

遊妙解寺

田匡左門。番士。詡十首。

揮洒敢忘情意重。好將書札寄山濤。

津田。字子弼二字瀨

逢着仙翁采藥還。

謝君千里惠霜毫。月裡遙分玉免毛落紙雲烟生綺席。

臨池光彩照綈袍。醉來張旭興偏發夢後江淹才更高。

高僧掌上一枝新。增道祇林已洩春只合山中供古佛。

還從雪裏寄幽人。羅浮明月香纔動°廬嶽寒雲夜更親。

喜見衣珠相照處。亭亭踈影出風塵。

夾岸桃花落照閑。幾家雞犬白雲間欲將名姓題青竹。

更結看花侶。聊爲曳杖吟。暮春春服薄°洩盤若經纔罷。蓮花漏自閒。誰知香積酒偶許世人歡-

丘壑心依舊。衣冠世自傳。莫言勞祀事。人識太常賢。

行雲千里斷。迴雁一峰遐。向曉移餘興微葭露作華。

影懸殘月迥。聲入曉雲微,目送知何處°行行向北飛。

聽鳥憐林靜。持螯惜日斜。秋香猶未盡醉後勝陶家。
謝人惠
紫海觀龍燈
荏苒歲將除。開君獨讀書。檜岡耽寂寞梅屋愛清虛。
由來傾盖稱如故。秉燭休辭且罄歡。
歲抄贈山叔瑟避喧讀書檜岡
儀子。番士。詩十首。
┐姓秋山。字子順。一字孫太
二妙先生一鶡冠。風流對酒此盤桓夢中芳草催春早。
亭亭漢月照弓刀。
田劉赤三先生枉過邸舍賦此致謝
白登堆上雁飛高。北海陰風吹戰袍-橫笛一聲吹不斷。
松林高秀海東方。仙女樓臺靄淑光千歲流膏供寶鼎。
塞下曲
上上月。字伯蕃。一字
百尋貞幹傍萱堂。金壺酒帶花香釀繡戶風傳琴韻長。
遙識繁陰開宴處。和鳴雙鶴勸飛觴。

蓬憊秋色不堪愁。

賦得松契遐年奉壽某夫人七十誕辰

烏啼霜落大江流。殘月沈沈獨夜舟何處鐘聲驚客夢。

新秋江夜泊

來踈影暗香動。疑是孤山處士家。

冬夜孤山亭集得六麻

相值題詩處。金花勝裏深。青山留淑氣雨色敞春陰。|洗竹山愈下。蕭然絕世塵、清風來縹帙返景照烏巾。

玉樹晴烟起。長松落日沈。可憐園後興綠水映西林。 憑檻送飛鳥。陶杯引故人。西鄰通一徑4幽屐往還頻。

漢上晚歸

人日過飲米大夫

洗竹

寂寂幽溪路。西風吹我衣。耕牛引犢去o歸鳥背人飛。

四野餘秋色。羣山掛落暉。孤雲閑不散o眺望思依依。

景昌郊五郡9畲士。詩一首。

複姓籬外痔綴跡。門前俗客踈。唔咿應不寐。夜雪映崽初。

十日抱月亭集看菊花

築幽亭一逕斜。論心此夜興堪賒人自歌中飄白雪。

酒猶杯裏瀉紅霞。林靜半憊聞鶴唳天清片月 照梅花

坐握裏明珠照夜寒。郢曲千人難共和°吳鉤三尺笑相看。

秋殘星斗懸。何來寒火映波鮮炎炎絳樹枝初動。

落落銀盤珠正圓。非爲燃犀過遠渚 還疑剖蚌出深淵。

相遇幽亭興。樽前駐彩霞。三杯濁酒色°十日滿籬花。靈光休怪多龍氣。此地曾留王者船。

東林重九日。曳杖叩禪扉。野菊薰趺坐°霜楓映指揮

睡越山您春霧開。夜來風雨小溪隈園林處處聞啼鳥。鹿鳴秋氣至,借背夕陽歸。爲許淵明酒°匡廬攀翠微。

聞啼鳥返照在幽林。

睡起

九日山寺

辛夷花自發。春雨綠溪=複姓山中。字伯古。一字才右衛

辛夷塢

山之訓體對子。邻澀。詩四首。

山村十餘里。天寒木葉稀。酒家何處在嵐翠落人衣。 東西耦耕

綠樹千重嶺逸。青溪一道雲生。林花多少開落。隴畝

冬日村居

題書

歸驂忽出寒溪去。回首橋頭滄水烟。

姓遠。字子方一字

樹鳴蟬送夕。

愛此村居人事稀。村南村北白雲飛ᴼ飲牛日日依凉處。

晚過山寺

夏日村居

呼童石鼎煑春茶。暖烟漸長園中柳薄暮間飛檻外花。

已見墻東微月出。斜移林影上窗紗。

壺傾臘酒。」當場辟易幾多人。

前山過雨濕桑麻。返景蕭條八九家聽鳥玉壺傾臘酒

千金結客唉談新。一諾由來賭此身借問腰間三尺劍。

春日閑居

時聞鳴磬落松風。

俠客

雨後乘輕屐。逍遙步落輝。攀林窺菓熟。坐石見雲歸。

杉經昌酸姓杉俗。字直進。

首夏山莊

夏木連幽壑。凉烟滿綠苔。過橋虎溪上。一笑且徘徊。」禪居遙在白雲中。流水青山一逕通不見高僧趺坐處。

訪僧院

愛此香爐頂。清風月色開。山無妨着屐社巳許杯

無數殘紅滿綠苔

山寺避暑

谷鳥過春變。園葵入夏肥。溪邊尋藥去夕月照柴扉。

初地經過斜照前。青山深處問安禪煎茶石鼎松濤落。

移榻珠林月影懸°苑栖鵬紅葉外虚堂鳴磬白雲邊。

筑爲業 桃躓業、字勤夫。一字

「莊内。番士。詩一首。

深番士。詩一首。

深。隔水過四三

竹裏携樽入。花間曳杖行。詠歌春水口不淺浴沂情。

夏日少林精舍陪宴得青字

‷城外雨初晴。前。行行明月夜。此會莫相忘。

坂房吉體遒版印字枳佑儒門 。

郊行

移榻青山出。陶杯黃鳥鳴。逍遙機久息°醉臥解簪纓。

欲綰橋邊柳。朝來露濕裳。送君無一物握手勸離觴。

負郭開幽築。灌園慰此生。春芳經雨歇。夏木受風情。

秋日送人

少次郎助。縣尹。詩一首。

首夏小理花樹

山眞復姓仙內。字俊度。一字

複姓能美。字仲瑞。一字兵大

。

何須包貢自維揚。

美維頑

當年仙使訪殊方?釉裏携來橘子香封植千秋連右衛。聽禽宜獨酌。藉艸足閑眠。欲訪幽人去前村未暮天。

紅塵纔十里。出郭自蕭然。修竹臨流水o穠花帶暖烟。

春日郊行

園丁煖酒醉彤墀。燒盡林間紅葉枝晨起君王無所見。」山色分煙靄。林風拂石牀。融融幽谷外。相伴弄春芳。

從容唯誦樂天詩。

夢後幽竄下。黃鶯囀曉光。遷喬嬌舌巧。求友好音長。

鶯

番士。詩二首。

鐘鳴宮樹散栖鴉。碧瓦參差霜作花莫怪祁寒御衣薄。

傻姓松邨。字膝次。

人道蓬萊不老仙。

縹緲烟霞映綺筵。碧桃花發艷陽天看君健步輕於鸖。

椀纔擎出。

環佩珊珊拜特恩。

渤海使臣朝至尊。賜谷益-姓大浴。饽好赚。一字著兵

萬里江山滿目青。

百濟新羅屬內官。遙遙入貢萬人歡°御衣暗濕追思淚。白日禪林五馬停。梅天晴色滿階庭詩情迴出風塵外。

恨殺先皇不及看。

衣新列紫微垣°枇杷渫賀井翁八十

叡心爲想小民嗟。

聽雁塞書音少。雲山別路長驕正。今沼。詩二首

夫。番士。致仕。詩十首峰彩翠生。冠童相伴去。鷄犬自如迎。

宮詞十二首。

節五首

扁舟泛書湖。

寄語高陽舊酒徒。春風明日好携壺。龍山一路看花去。

偶 成

春日簡香山生

斑竹聲聲不可聽。

稍變山中候。乘晴草葛巾。千峰吐?一路自無塵。

湖水悠悠似洞庭。扁舟何處吊湘靈無端一夜秋風起。

初夏山行

寄湖中人

世網嬰身未得還。一夜孤鴻始度河抱琴携酒就我歌。

風凄凄兮月皎皎。緬想白石與青蘿o余亦生來好山水。 山中白日長。無客過茅宇。手把古人書。獨笑南窗下。

豈能役役老城市。今宵且盡一杯酒。他日相求萬山裏。

祇恐旅魂難作夢。北風蕭瑟寒蘆。

山 中

靈雨山人落人間。引領時時望故山一故山安在白雲外。

贈靈雨山人

浪華潮水遶城隅。知爾停橈興不孤o萬雉至今留霸跡。

送人遊浪華

縱是煙蘿山徑遠。猶能歸夢到天涯。

平安城裏厭繁華。萬里間關公子車冠中朝會賜族。

擬送在中郎遊東州

昔年賣白箸。今日賣自箸。昔年今日與誰語。南陌北日戲作白箸翁詞。

2011

瑞寶寺

有僧見翁于南山。居石室。焚香叢書第二卷

遊肥後文獻誦經問曰。

翁無恙。翁笑而不答。逐去不知所往云。暇

街獨來去。白玉之梁紫金柱。樓臺如故新主。葡萄

之酒芙蓉席。歡宴未終已陳跡。茫茫世事使人哀。寂

寂仙山歸去來。仙山深處是吾家。碧窗近對碧桃花。

花落花開人不老。時乘鸞鶴凌霞。借問世人買白箸。

何如隨我服丹砂。

一向招提境。鐘聲樹抄聞。路從鷲嶺轉地入鶴林分。

問法霑甘露。吟詩對碧雲。來遊皆野老何必絕人群。

琴書東道欲移家。峰頭晴雪麑斑色-橋畔春風燕子花。

五邦當日卜皇都。津梅香動春前樹江月光沈波底珠。

密樹藏黃鳥。淸潭躍紫鱗。幽尋應已遠。寂寂不逢人。

我本山中客。飄飄不作家。形骸同土木痼疾在烟霞。

入夢瀛洲月。關心閬苑花。等閑來玩世復此閏年華直買201

樂汁集卷之四

市人憫之。收尸瘞于東河之東後二十餘年。

褰裳欲從之。浩波恐無緣。舉杯遙相屬 庶幾醉群仙。

瞑宿三嶽巔。雲霧晦星。萬象不可辨°唯開壑底泉

宿三山鍾美窟

府學訓導。 詩十九首。

字于友。

請看一片是氷心。

貞觀末。京師有一老翁。常遊市中。以賣白

吳鉤夜夜作龍吟。相見秋波匣裏深休道短身鑱五尺。

白箸翁詞二首觴於

吳鉤行

楚水巴山夜雨時。濛濛心事亂如絲o 淸猿叫斷他鄉夢。 秋山雨忽歇。白雲繞石牀。娟娟枞際月繁露濯其光。

何處遊人不淚垂。

靈臺澹無事。開坐夜將央。南澗有蘭蕙°微風送暗芳。

東幛帶靑靄。城頭起乳鴉。却望湖水上、落月在蘆花|心與道爲隣跡將人異境。惟有遙寺鐘傳響

夜猿啼

日入樵者歸。棲林鳥亦靜。坐待花間月石鼎正名。

千金買匕首。七尺奔仇家。擊筑悲歌罷寒風吹素車。

下有千歲芬。服之駐容顏。容顏茍可駐豈復戀塵寰。

俠客行

古松萬餘樹。結宇在其間。黛色無時變ˉ風聲終日閑0

。

余寓蘇山。結宇松林中。名曰萬枞廬。塊然

霽後江山風景凉。登臨何處不心傷o空林向晚猿聲響

何必控鸞鶴。遙遙朝九天。地上有美酒。大醉勝長年。

萬松廬八首節三首

何妨野老無長策。二頃田餘稻與粱。

潭水涵秋雁影長、庾亮樓頭迎皎月盧家砧上拂清霜。

楚才偏愧難裁賦。徒愛東籬叢菊芳。

獨處。吟际自娱天雞纔一號。海色已蒼然。扶桑吐靈冉冉十洲煙。

箸爲業。時人呼曰白箸翁。鬚髮皓白。冠履

不完。著一皂衣。寒暑不變。人問其年。每

以七十告。市中有賣卜者。年可八十。語人

曰。吾爲兒時。既見是翁。披服顏容與今無

異。聞者疑其有術。一日病終于市門側。

北風油幕動。蕭颯夜方長,釃酒招前部椎牛宴後堂。 橘柚含黃夜夜霜
。床上菊脂猶未熟村前桑落謾相將

負郭秋深一草堂。後園凉葉墮衣裳戎葵着玉朝朝露。

宴邊將

秋興

駕靑龍兮白鹿。長辭垢氛到帝。

夢同日出萬山開。繁珠欲墮芙蓉露o彩翠堪拾烟水隈。 曉御長風拂澗霓。飄然不覺上雲梯天河高掛三峯秀。

被霜蒼梧陰。餘霞斑竹林。二妃昨夜鼓瑤瑟。彷彿猶｜海日初生萬嶺低。太古瓊漿淸作藥˘千年石髓紫成泥。

聞有餘音。滿堂晨景總斷腹。對此精神四飛揚。我願魂遊何處尋神女。滿目蒼范望轉迷。

友仁何日拂峰巒。橫峰倒巒曙色寒o巫山如黛氣微白。」九日攀香閣。身心頓自淸。秋光諸品靜晚景數峰。

湘江蘆花落月殘。月落樹暗嘯猿哀°點點傍流群鴉來。」僭許黃花酒。童供綠芋羹。此中幽趣足何必待淵明。

行雲未收神女館。宿雨鑱霽荆王臺神女荆王夢已间。

夢上富嶽

楚山欲曉圖

九日過山寺

岩通亮名苑開金閣。登臨萬象低。山通爽氣近o庭放彩禽棲。

湛水涵秋景。高林掛夕恭奉同秋日登披雲閣韻

吉佑

匣裏時時欲吐光。

衞門。府學訓導。詩十三首。

沙場行路絕。鄉信幾時聞。霜下吳鈎冷一天高漢騎分。

吳鈎行

三級流。

尺八吳鈎七采裝。殺人曾擅少年場請看一片氷霜色。

東海烟霞試送岡士騏之江都

牧羊悲白草。過雁入黃雲。不道邊城苦心肝欲報君。

尋道觀

幽人半夜宿清溪。雲樹蒼蒼夢裡迷ᴼ蜀鳥一聲腸斷絕。

起行殘月在山西。

鐃歌振漢月。劍舞拂胡霜。壯士休辭醉邊城鬢易

邊 思

壯遊。長風吹送木蘭舟龍山到日春應好。

欲問桃花該附腋下。悖馱雅。一字日暮相處。春山行路賒。門前唯白鶴ᴼ釉裏有青蛇。

玉液煉迎月。丹經讀對花。簪纓雖未脫`暫服赤城霞。

霓。青袍沐恩澤叨得此攀躋。

當場意氣向人看。

君學鵬搏去。雲波路不難。天低華域近日落紫溟寒。

別酒從沈醉。携琴入剡彈。崎陽逢異客°椽筆冠詞壇。」紛紛飛雪洒皮冠。草盡平原風色寒射殺南山雙白額。

秋日登蘇山

送大城文卿之崎陽

笑迎王母勸金后。

平明新拜入霞司。朝罷神仙宴碧池°白玉盤中桃五色。

蓬壺孤翼遠。珠樹故巢深。彷彿相思夜長鳴入素琴。

春日同古公餗井大年過臨流精舍得花字

梅花零落不堪多。

信中飛雪灑離珂。歲晚天涯如爾何吹笛峰頭吹笛夜。

山行

目送靑天鳥。身凌紫府雲。飛來何處客˘環佩半空間。

鶴

仙禽何處去。碧海杳難尋。明月三清夢-秋風萬里心。

忽御長風去。飄然拂瑞氛。蓬萊珠樹麗弱水錦波分。夢中聽春雨。芳草正萋萋。但恐門前客今朝蹈作泥。

游仙曲

春 雨

曠野茫無極。行行碧玉。長嘶違漢月迴立向秋風。擎玉群龍護法筵。明月橋高珠影滿°金毛閣擢獅音傳。

望斷黃河曲。心馳紫塞中。誰憐將八尺9萬里欲爭雄。」宸恩況侍香爐側。錦繡袈裟染紫煙。

征馬嘶

遙轉牛車向日邊。名藍到處五懸。含書雙鳳降天闕。

送別道師奉 勅住龍寶山大德寺

突兀蘇山石磴懸。振衣絕頂俯烟斜陽半辨鴻蒙外。

歲杪米大夫天盈上人及諸子過訪分得八庚

悠然此中趣。何有旁人知。

秋色遙開大麓前。人道寶珠傳趙氏°誰知碑宇記秦年。

登臨長嘯飛揚甚。直駕青鸞欲上天。

豊圖支謝侶。此日欵柴荆。雪映羔裘白o風吹麈尾輕。

三冬文史業。遲暮美人情。更有烟霞約8重來聽早鶯。

香臺春色好。雲覆水之涯。徐步從苔徑一回頭散雨花。

坐移熊耳樹。爐烹虎丘茶。談笑忘歸去西山日已斜。

峯峯空翠間。人家在何處。遙聞長嘯聲試向白雲去。

歲晚送人之信中

年年歲歲一床書。城北城南又卜居昨夜前流風雨惡。 陶潛竟長往。屈平難再期。不如拾其英°泛來舉酒巵。

即事

秋菊有黃華。佳色映東籬。采采己盈把持之欲贈誰。

正是山人淪茗時。

賦得采菊東籬下

誦罷淮南桂樹辭。漫漫長夜獨眠遲東林微白隣鐘動。

·溪。府學訓導。詩十七首。

辛即事

一字義助。

猶自嵇康有鐘磬故人。

寺

道士

江口青霞館春江垂釣

小集

。

靈書間寫蘂珠經。削壁發。

詞。

十字街頭花發時。東還西往自由吹問君按取誰家曲。

普化禪師贊

堪上壽。承恩長在昭王臺。

。

避秦從入武陵溪遙題桃源圖

賀玉山先生六十度

。

山河勞邈思。城南琴月伻清秋。

洗馬橋邊一病夫肥後文獻叢書第二卷

三杂

負才聊作步兵遊。來宿黃公賣酒樓°鸞鳳音從狂嘯聽。東邊已有化龍魚
。

風塵色入醉鄉收。百年心事空蕉鹿異代文章終棘猴。

相憶。販鹽街上混漁徒青雲舉目終千里。

手展周王八駿圖。不與人間日月齊歸去重尋源上路。

桃花咫尺使人迷言是江南鵡胡詞聞華甲宴新催。東望天門氣鬱哉°滄海
珠從龍口照。

仙源路向武陵開。中原鞭弭總名士。上國風雲誰異才。

知是千金臣才調本風流。醴酒筵開朱邸頭南極靑藜臨座動。

西來紫氣入關浮。應同枚叟梁園在還似孫卿稷下遊。

遙識芙蓉峰雪色。兼將彩筆照千秋崚嵋石氣靑°淸籟一時天鼓千花暖。中停如葉舟。支頤釣錦鯉o烟水引綸流。三花樹裏夜深。

遊正觀餘音深。松華終日落。欲入老僧衣°飄然飛不着。」病懶多年厭世塵。風流此日賴君新休言名飮交渾絕。

水竹居光輔液进碎島。字虞之。三九七

樂泮集卷之四

田生亭

過城南更有使君高興在。陪游依舊此徘徊。

寄懷大川上人

揚字疑楊字訛

相思時起滄洲興。古岸潮聲動綠揚。

白雲幽處是香臺。縹緲諸天俯海隈°積雨初晴空翠合。

夏日新晴少林精舍集得開字

十丈黃塵鬢欲蒼。夢游無復到殊方或敎春服歸會點。

三徑蕭蕭秋已殘。尊前迎客一憑欄o但將靑眼酬知己。

失題

更把黃花欲授餐。歲月久拚雙粪色4楡枋那借一枝安。

故人猶有綈袍在。信宿休辭夜露寒。

四海唯教名對在。何論暫爾隔彌天。

迎客

即知如許乾坤大。何苦生涯事曳裾。

送師重唱遠遊篇°別後蒼茫翻錫前°潮蹴層空帆似鳥。

雲迎雙屐嶽如蓮。壯心徒耻屠龍技°駿骨猶驕愛馬禪。

半生如有得。暫此出風塵。竹色玄餘遠-梵音定裏親。千里江烟解彩初。長流滾滾接淸虛°津邊驛樹濤聲合。

文章徒羽飾。泉石是天眞。羨爾將衣鉢名山寄淨身。」墻外雲山風色餘。濯足休驚東海若投竿欲釣北溟魚。

送鐵牛師之京

詣萬行寺呈梅芳桐鄉二尊者

大江汎舟

目送飛鴻翼。吾心在杳冥。

送別左子坤還宇土

步隨流水入幽林。卜築依然歲月深°芳菊猶餘三徑色。

窮交堪屈指。與汝轉相憐。烏帽黃塵外劉青雲白髮。」古桐無恙獨絃音。涉園石上題霜葉°隱几洲前聽水禽

有心時命駕。携興重開筵。別後詩新句須因過雁傳。 此處蕭條車馬絕。唯教我輩得相尋。

淸在多厭世。得侵韻

何時重伴烟霞侶。窺得摩尼結勝緣。

田氏席上和子華韻

交猶堪把臂。病且起持螯。縱有朱黏在青山輸爾高。

粒在青山輸爾高。映雪蓮峰晚更鮮。誰向人間憐久客無因塵外問安禪
。

九月晦日同米大夫及諸子過飲高子式明月樓

我輩僅晨星。軒冕元浮譽文章獨巨靈。

交疎人易阻。飲屢酒難醒。誤道風詩屬卜商。月免筆驅河漬水氷蠶紙梟貝宮光。

想龍宮東海邊。望來縹渺隔諸天繞階楓樹晴相媚。

雙林近望夏陰開。華簪忽已逃丘壑社何妨許酒杯。

夢斷愁中月。秋深鬢上霜。縱分歸興切、西海路空長。十年無隻字。一旦見同袍。湖海餘肝胆°風塵嘆鬓毛。

過訪佐子坤別來十年於此次

書畫君家事。酒巵吾黨狂。論文唯異代爲客也同鄉。

秋日客中寄米大夫

少年多結客少年埸行

江頭芳已歇。樓上惜春閑。崖樹含風動°煙花隔水殘。

久作商山隱。羞稱漢室臣。暫時長揖去風佩拂烟。

宦閒多醉日。書擲有殘年。形骸知何物°塵埃獨自憐。」手取大還訣。騎牛出紫宸。客星搖帝坐〞仙靄繞龍鱗。

惜春

擬宮中送山人

老來疎懶甚。飽食且甘眠。身豈關榮辱°酒唯分聖賢。

抱甕無定跡。此地又移居。得意丘壑。隨身但道書。

蝸枯涎粘壁。鳧沒水餘淪。初信豪家子。多錢即是神。

征馬嘶

移居

少時誤記字。老去一身貧。書盡爲人役飲餐亻我真。

借問調琴者。秋思何絲深。

新築小齋罷。園林三徑開。冷官席纔暖淸興詩初裁。

佳人抱瑤琴。樓上清夜臨。雲山寂歛色°偏喜交游在。又被啼鳥催。誰言耽寂寞何厭載樽來。

述懷

江上琴興

罔維良核變汸綱。諸子

字吐媒。学墻欧娜。號

煙花看又改。柳色散春城。入夢青年過6懷人黃鳥鳴。

新年作寄田元章兄弟

樂泮集卷之四

三九六

肥後府學祭酒藪慤選

肥後文獻叢書第二卷

朱陵。侍讀。今沼。詩三十四首。

江水澹無音。

素手拂朱絃。悠悠萬古心。曲罷唯自嘆涕淚潸滿襟。

水聲深竹隔。月色半窓虛。病外新詩句多成沈醉餘。

書懷

天游從酒德。經業竟車名。吾輩存丘壑途窮亦勝情。

春初新築小集賦寄聲聲兼薄暮,去去向邊州。白草催寒早黃雲惹恨浮。

遙添征戍苦。飄入別離愁。一出蕭關路。亭亭花月秋。

流年過伏枕。落日懶憑欄。惟有杯中物時散客思寬。

意氣。置酒共逢迎。春深公子第°花照曼胡纓。

千金輕季氏。一劍睨荊卿。白馬五陵陌驕然玉勒鳴。

卷之三

九五

三卷之三

歸省上毛

樂泮集樂泮集送山上方鳴磬晝冷冷。香閣珠林倚翠屏祓水烟流花外淨。

祇山春樹雨中青。清齋獨酌金芽鼎°慧業誰傯貝葉經。

日暮碧雲猶未合。哈成先使故人聽。

遊妙解寺得九青。

萬絮飄空白雪飛。色帶春煙迷去騎陰經暮雨濕征。

行行莫謾吹橫笛。多恐朝來露葉稀。

雪裏相尋溪水隈。柴門暮色正徘徊°橋邊一路雙雙跡。

應是前村問早梅。

雪中訪隱者不遇

楊柳堤邊送客歸。離情欲綰更依依 千條拂地青絲亂。

折楊柳送人

鹿門鹿 山

遠別悠悠歲月深。天涯一望淚沾襟°愁開菱鏡窺衰髮。 蒼翠十餘里。綿連一徑通?仙家在何處°犬吠白雲中。

東都客舍得井大年寄書

秋月懸淸漠。高高吐素暉。偏疑明鏡照°還見夜珠歸?|倦遊才子去毛州。匹馬今朝不少留東道雲烟迷落日。

揚彩星芒盡。淪精物象徵。金波流瀲°銀燭影依稀。故園山色入高秋。鯉魚雙下鳥川水°鴻雁廻飛紫海流。

人倚南樓嘯。鴻横北渚飛。愁思何處婦°終夕搗寒衣。 遙憶弟兄開宴處。彩衣長慰倚門心。

函 嶺

秋月揚明暉

積水縈侯甸。名山擁梵宮。波禦孤島潤°地鎮鬼門雄。」搖落三秋欲暮時。樽前握手重相思地隣北越風霜肅。

極浦藍光動。遙峰翠色通。虹橋呑巨浸°雁塔插虛空。」家近天台歲月遲。忽見王孫靑艸色。還吟孝子白華

衆汰輕塵外。鳴鐘杳靄中。風帆看且去。回首憶澄公。知君歸養心偏切。臨別殷勤問後期。

悔為華簪誤夙心。征馬長風嘶驛樹孤禽落日戀園林。

故鄉此去三千里。尺素憐君寄好音。

山上夜猿啼。獨度溪橋山月低。應是龍公棲隱地。

深深雲樹使人迷。

叔瑟琵琶湖望比叡山

過岫雲精舍分得五微

神龍啕燭照。妖蜃結褸成。灼鬣波臣泣°光身水族驚。

北園滕道士。煉藥舊相知。一向煙霞去。初驚歲月遲。|寶淵兼月動。貝闕假燈明。直訝珠胎散°還疑星斗傾。

深林眠白鹿。幽石秀紅芝。再會終何日°玄蹤未易期。 狂風吹不滅。高浪激仍生。縱向驪宮探°寧將徑寸爭。

同井大年尋北園滕道士

寒煙紫海色。陰火白縫名。燦燦隨潮滿〝煌煌連夜平。

詠寒火

愛此無生境。幽深謝世塵。焚香諸相滅問法一燈新。

遊曇海上人居

妙解精舍集分得五歌

日落秋山靜。澗戸白雲深。已有泉上酌?彼此松下琴。

秋山夕興

·讀。詩十九首。

古鼎

!姓古屋、字公觫。

。半夜禪堂月思師語語玄。

日暮人烟遠。天寒馬跡深。凍雲低曠野°雨雪灑空林。

山中秋寂寂。落日虎溪邊。忽聽寒林響 還疑幽梵傳。」久作迷津客。誰憐失路心。故園千里外。相望一沾襟。

過橋憐舊興。臨水嘆挑燭題新句。銜杯思去年。添衣猶檻何妨到曉天。

龜山上人歿後過光照寺愴然有述

任家僮掃。樽從野客携。相留拚一醉不覺夕陽西。

途中逢雪

此夕逢良會。高秋月下筵。微霜江閣上冷露負郭新晴好。行行傍綠溪。春芳經雨歇。小麥受風齊。

泉自雲間響。山從林上看。清談猶未去。邀月且留歡

林樂亭集

孤雲閑不散。倦鳥自知歸。欲過溪橋去鐘聲在翠微。

首夏游友人莊

出郭道遙處。名園春已殘。階除空翠濕o松石夕陽寒。

莊

靖公禪寂境。三九四

春日遊續氏別桂花前。

白日掩幽扉。洗竹來山色看花到夕。

門流年一杯彈一曲。蘿月澹幽襟。寄言靑項客人是同心。|

冷石堪分坐,淸泉可潔巾。還慚客髮色-猶帶市朝塵。

題城文卿書堂

看君三徑裏。寂寞讀書臺。官訝歸田後情同問字回。

黃花從客摘。玄草任人猜。五斗堪沽酒。何須苦載來。

水寺三春晚。相將入薜蘿。門深啼鳥近-境靜落花多。

樹色栖晴靄。山光蕩夕波。隨風暝鐘響歸興如何。

夏日新晴好。山莊事事幽。路從蘿薜入°煙傍翠微。」好是年芳靜。洞門欲暮春。清樽堪共醉黃鳥自相親。

林鳥向人語。石泉繞檻流。徘徊興未盡返景照林丘。」林外泉聲響。雨餘苔色新。留連車馬客偶此避紅塵。

過友人山莊

七郎。世子侍臣。詩二首。

首夏山莊即事

玄解支公語。詩傳謝客名。幽溪春已過°處處聽殘鶯。

行盡白雲路。山亭雨始畴。烟中新樹色竹裏細泉聲。

恐使遊人不憶家。

首夏過田公度山亭與龜山上人同賦得晴字。

敏馬津邊浪飈沙。 孤舟堪繫翠楊涯南中自有如泉酒。

吉田彥销主媵臣。五首。

送人之大坂

字 一字猪右門。

隨緣欲會出離心高懸明月滿禪扉。

。

阿蘇山上送君歸。錫杖看瓔珞衣知是天龍獻珠處。」靈巖精舍碧江潯。丈室蕭條秋轉深o問疾何妨還問法。

訪曇龍上人席上賦呈

送僧歸阿蘇山

門。内監野槮 嘉卿。鐣伯修。J字吉

HD

藤

不信人間多苦熱。紛紛空翠撲衣襟。

-三字姓小田原。字伯嘉。一字三

一葦西來幾歲時。東林結社共吟詩唔禪心底事思鄉土。 池開寒鏡照禪心。客來無復風塵態o境靜還聞鐘磬音。

唱出淵明歸去辭。

山中朱景薜蘿深。祇樹香臺對碧雲起奇峯臨法座。

訪黃蘗僧。爾本華人。爲余唱歸去來辭。

因賦贈。

夏日遊泰雲寺

井善鐵磁阱上。茶。

不怪淸風飄夢裏。鼎中煎得陽羨字好道。一字

碧桃芳帅映窓紗。寂寂園林春日斜偃臥半時親枕簟。」 雲靜香烟牀上開。紫氣欲生仙客坐曇華忽落梵王臺。

江山頃刻命舟車。閑心偏秏莊周蝶懶筆學生李白花。不愁斜月迷歸路。更有明珠照往來。

濟勝策看許掾才。尋幽雙屐踏靑苔天寒鍾磬林間響

晝 夢

萱來章驪斑晝嘢好裙腿和池子華遊臨流菴韻

號錢塘。大坂守邸。詩二。

。一字同易太首

左衛門。避俸未仕。詩二首。

眞淸雄楼上嘢。詩一首。

返景入水樹。幽鳥欲投宿。相顧園中路往來從此熟。

曾征胡虜見殊勳。邊塞蕭條夜柝聞白髪砥今從一騎。寒藻殿細鱗。暮雪連廈屋。懷抱殮傾樽洪歌共擊筑。

田間沈醉李將軍。

結構依城隅。風流愛素樸。門停長者車o庭餘陶分菊。

贈老將

冬日四時園集得菊字

時時環佩月中開。

複姓山中字彥十郎。號栢溪。

。致性。詩T首。

山遊仙曲

紅甲新芽到處多。

放舟南浦夕。南浦水悠悠。欲投洲渚宿°敗荷不耐秋。|萬仞神山排石蘿。青囊携去躡嵯峨ˇ知君採藥春風裏。

秋浦歌

送人採藥蘇山

江水流不盡飅飅木蘭舟。欲尋桃葉渡。彩霧滿春洲。

朝日三竿照蟄龍。

懸路崎嶇繞萬峰。振衣樹秒白雲重行行下見深潭水。

浮雲蔽日傷情切。流水滔滔變古今。

送人之岵岨

片碣苔封一路深。楠公遺跡此相中朝自許繁纓請。 仙人白鹿雪相同。天際跨來向閬風珠樹開時花裏見。

四海頻開逐鹿心。曠世雄圖空寂寞°偏安天統竟銷沈。|瑤臺過處月中空。

湊川懷古

題仙人騎白鹿圖

山中舊宅多花竹。別後依依似待君。

笑向劉生脫裲襠。

匣裏吳鈎色似霜。携來結客少年場心中無復不平事。

遙指蒼茫一路分。今朝相送餞江濆°鎮西積水魚通信。

吳鈞行

♂ 送左元翰游崎陽元幹瘈門人

天風吹落步虛聲。

知君客裏忘機處。州鳥雙雙伴寂寥。

仙山一道彩雲生。羽客笙歌度太淸弱水蓬萊三萬里。

春滿三河杜若橋。但使薜蘿迷細路烟水送歸橈。

步虛詞

三九叢書第二卷

二

肥後文獻冀北長風馬絕羣。挂席欲攀瓊浦樹°回頭猶認鹿門雲。

扶桑東望海雲分。鶴背風輕凌紫氛。一曲笙歌人不見。

之茂監察三九一

樂件集巷之三

陰陰夏木蔭林莊。更擬名園問辟彊命駕眞成千里遠。 公子風流脫紫貂。裁成旅服下雲霄。雪殘千伊芙蓉嶺。

擬送在中郎游東國

約遊屈氏別莊不果因賦贈

絕頂寥寥古梵宮。松蘿攀盡逼層空山猿栖靜知寒曉。擁車龍象儼成行。云是袈裟入帝鄉。一錫飄然飛海嶽。

水鶴巢深避海風。奇石當門仙篆綠°霜林著履竹橋紅。」三幡忽爾映津梁。衣浮紫極祥烟色°坐近靑天慧日光。

由來此地無人跡。遙認鐘聲杳中。

梵剎到時秋欲遍。重將明月照西方。

送別道和尚之京

過賓積寺

愛駿高僧事自眞。馬蹄盛酒勸閑人°臨風未耐馱經去。

。

凭几何妨醉月頻。意氣千秋耽綠酢飛騰一日出紅塵。

靑蓮居士相迎處。金粟如來誰後身。

詠天馬蹄盃贈月潮師

冬夜從秋先生過孤山亭。得十四寒。

卉服禹功舊。文章王化通。狂濤生貝闕°陰雨閟龍宮。一床上匏樽頭上巾。閑亭事事出風塵。德輝難下千尋鳳。

羣鶴棲松樹。飛仙御閬風。一岳蒼茫外千帆杳靄中。」豪氣猶餘七尺身。展脚誰人搖象緯˘獻文幾日掌絲輪。

送爾蘭樽冷。迎霜楓葉空。壯觀應有賦不減木華工。自憐散木眞無用。卷曲何當匠石斤。

接鬼方雄。

幽居遠意似江湖。冷笑長裾曳宦途。白日絳霄空壯志。

青山濁酒自狂夫。雌雄欲吼腰間劒咳唾頻飛盤上珠。

却喜柴門車轍絕。寒花的碟照冰壺。

又

氣動。微雨竹香流。

蟬蛻仍冥跡。鴻飛自超遊。此心無所染°鐘磬晚來愁。

送人之松島

滄海環長島。蜿蜒日出東。潮涵暘谷近8天冬日閑居

寧識人間熱。山房事事幽。清風荷山寺避暑

城東驅士馬。按獵曉寒催。晋鼓風前急-燕弧雪裏開。」褰裳難涉一江長。牆頭踈蘂空新竹裏殘鶯送夕陽。

誰非千里禦。渾是百夫材。日暮平原路高歌野來。此日書牘求侶意。如何采葛入詞章。

携手幽亭夜未閑。隱囊紗帽此相看。梅花爲借孤山色。

濁酒還開高士歡。凭几玄風生麈尾°推窓微雪下林端。

休言浮世人間事。深坐論交心自寬洲前生暝色。浦口認燈紅。小徑穿林入。寒潮共月通。

小巷無人跡。連朝雨未休。暗滋三徑草-忽張百川流。

匡坐琴書靜。低飛燕雀愁。多年甘蹇劣。彭澤是吾儔。

夜到漁家

十日愁多雨。柴門罷往還。樽猶餘北海¯豹己隱南山。

午磬通窓外。風燈散竹間。幽居如此處。養拙事皆閑。

相望屬搖落。蕭條海上樓,東南非遠地馳去住暫離憂。

書劍孤城外。風濤八月秋。知君尋法刹時與道人遊。

窮陰人事促。冐曉戒行裝。烟樹孤村外梅花十里香。

雞聲寒板屋。曙色鬱漁梁。殘月西州路-微微照驛牆。

寄懷藪士厚游松江

曉行

西溪之水淨如練。游鱗在空觀不倦°忽呼扁舟凌鏡中。

提網鳴榔落日紅。岸上松籟暑一掃水煙澹澹迷西東。

會稽未借任公釣。冷然且御列子風。誰知悠悠清幽子。

其心不在取鰋鯉。

西溪捕魚歌

利器。

肥後文獻叢書第二卷

擔囊何處去。重自臥蘇山。靈液春秋湧°瑤花朝暮。

鶉居違薄俗。蟬蛻出塵寰。欲霓雲芽淨尋師石室間。

羽獵曲

籬下黃花老。牀頭綠酢傾。盍簪眞絕俗。岸幘此同盟。

懶自誇中散。書還羞伯英。乾坤兄弟在更見玉壺清。

送人還蘇山

愛此冰壺酒。相逢繫柳絲。青袍憐舊態。白雪入新詩,

亭上千山出。林間一榻移。山公勸醉處何讓習家池。

藪君亭集分得英字

幽亭多勝事。步屧即園林。一水窓前淨。連峰戶外深。

花香隨曳杖。竹色映披襟。不必濠梁客觀魚此會心。

滄洲亭得池字

歸鞍飛鳥外。揮手謝塵寰。不管衣冠貴º偏娛日月0

凌霄鸞嘯發。藏霧豹文斑。別後望天末高高鎮國山。

耽閑園集分得林字

長安秋欲遍。明月出雲端。香霧開蘭路°清風拂玉盤。

龍貓光自切。虬箭色初寒。獨有西宮女終宵抱瑟看。

送宇治公還山

敗荷沾白露。宿雁叫秋風。不問人間事陶然一釣翁。

長安月

匣裏何人蓄古琴。斷紋蛇腹重南金°髣髴猶餘壽永字。瑳大業傳無窮。君不見麟鳳由來稱世瑞。何況丈夫抱

引

壽永琴幽幷騎射兒。生平擅馳逐。氈帶何翩翩°腰佩雙韃服。一地。蒼龍挾日據正東。朱雀玄武皆羅列。迥控邊徼地

古

灼灼園中樹。枝枝騰春暉。嚶嚶花間鳥流響還翻飛。 將我盈樽酒。留君萬里游。盈樽酒易罄萬里游難留。

移床携酒榼。風花拂我衣。獨酌雖諒樂°嘆息良朋稀。」吾黨公欽氣如虹。翩然掉頭駕長風°洛陽佳麗心所慕。

擬 踪跡冥且沈。轉覺與世違。

送古公欽之京

花前獨酌

和複姓池邊。以字行。一字平太郎。

府學訓導。詩三十八首。

天高月小翠微間。客自淸愁楚地顔°半夜猿聲啼不盡。」子孫封土如裂幅。戰皷雷驚震山川倉皇遁逃大海邊。

秋風吹落幾重山。

此器何人能奉持。不與戰骨沒重淵嘆息天下洶洶日。

一器長傳七百年。

牧篷寒山外。歸來自識家。孤村落暉路°梅吐兩三花。朝臣趨陪承顏色。紛紛聲樂競新奇酒池肉林無終極。

夜猿啼

黃金爲屋玉爲梁。貂蟬盈坐頌其德。一自相國歸九京。

沙岸天風至。枯桑已辭枝。秋聲生獨處°猶似別離時。」離鵾別鶴遶瑤岑。伯牙未死子期嘆°高山流水爲正襟。

題梅牛圖

此器由來廟堂貴。胡爲久得塵埃侵°憶昔芬華平相國。

秋風引

洋洋似聞大雅音,剝落當年龍鳳象。對此不禁懷古心。

旋粒廻軫彈一曲。倏忽坐我湘水陰中庭月白清風度。

蝦夷靺鞨總王土。試讀壺碑問昔遊。

一朝僻我逐飄蓬。維昔神聖創帝業°相攸洛潼種椅桐。

暮鼓弗勝宏麗就。黃金爲 柱 玉 爲 宮。白虎司天臨右

駿馬疾如鳥。飛鞋向平陸。嚴冬雁門北°逐禽芨舍宿。

朔風千里至。積雪沒牛目。醜虜寇邊郡°將軍憂翻覆。

願擒大單于。寫績南山竹。

勢雄。四達九街紅塵起。千門萬戶佳氣通。鬪雞朝趨

桃花底。飛鷹暮歸楊柳中。十里總設錦步障。如意共

碎珊瑚紅。不啻寶玉眩人目。文章自古出鉅公。黃備

未死菅相在。月露風雲奪天工。知君再接都人士。切

古劍行

牧人飛鐵笛。相看賈客雜旃。

府學助敢。詩七首。

九月西風向奧州。白河關外易驚秋°金華初日遙生色。

字士龍。一字雲平,

綠樹陰深布穀秋日送人之啼。

東奧

瀟路煙花踏作泥,昨遊何處暮雲迷°蕭蕭風雨千山晚。五行寸陰奪。千古比肩親。讀書樂如此栖栖莫問津。

病懷

相思歲己暮。寄語鹿河濱。檜野覊離客毛州杭慨人。

斑斑汗血濺連錢。

歲杪贈山叔瑟避喧讀書檜岡

千金寶馬錦鞍韉。永琈調來垂柳邊直見三尋蹄若電。」禽語宿林靜。櫂聲轉水西。迴舟何處是遙夜使人迷。

看調馬

空谷足音絕。懷人雪滿谿。孤燈三甌宅。一榻萬山低。

春眠南窓中。鳥聲亦寂寞。不識東風來庭花無數落

雪夜遲友人不至

大漠非風起。蕭蕭萬馬鳴。金笳秋徹塞烽火夜臨城。白帝秋高雲崢嶸。池光引來橫廣席。一水冷然快風鳴。

轉戰三河北。猶徵六郡兵。何時麟閣上振旅勒功名。|伊昔鴻荒之世簸川之上。老公老婆夜號呼。帝子一揮

三日雨飲友人亭

妖蛇斷。膝前紅臉落如鱸。河沈岸拆竟塵邈。幾歲都

芳晨烟雨暗。觴詠却凭欄┘爲醉桃花酒徧成袱視看。門謁下屠。血腥斗酒褐寬慱。憐爾當途思古人。有客

鶯歌迎客媚。樹色入簾寒。何用投車轄留連興未闌。」東自至。倚爾要路津。比爾海上芙蓉色。一峯秀出無

春眠

贋眞。願託淳樸如靑砥氏者。鼻頭珮燧永衛身。

從軍行

拂拭自字靑龍種。鮫室生色人失聲玉繩天低星錯落

風蹉城市遠。眺望郭門遐。柜柳兩三樹。江村八九三八

門前長者轍。林下諸賢才。相饒與幽吟未忍回。」相劍猶相龍。誰能辨雌雄。縱合補履何爲用。干將莫

出 郭

邪鉛刀同。我無風胡精鑑別。邂逅野人趁虛中。昔日

鏽衣僅兩錢。今日發硎值千金。昔日應繞美人指。今

日還照壯士心。莫言昆吾殊不遇。天生神物何第沈。

家。

鷺鷥曝落日°稚 戲回沙。處處聽漁唱°葦間短棹斜。

羽黒殘雲鬱結愁。忽聽三八七

樂袢引卷之三

直醉金陵市。不知白日殘。腰間三尺劍俠骨向誰寒。」幽亭春欲滿。携手此徘徊。樽緑留人坐?山青入戶來。

和高子友飲藪士厚亭韻

一過花水橋。橋下花映水。試臨流水看烟花使人醉。」優鉢花相映。香龕鳥自剔。雙峰懸佛日驚見放光新。

俠 客

一二同遊子。來探勝地春。入門悟幻境º問道接閑人。

渡花水橋

春日天下滔滔者。孰辨烏雄雌。

僧君山

守歲。

明朝白髮也逢春。河山萬里腹堪 梅柳千門望欲新。

留滯已過三百日。羞將吏事老風塵。

落落三十歲。未有管飽知。偶玆二三子。把臂語幽期。

江都邸舍除夜

武昌城畔遠遊身。回首同鄉更幾人此夜靑燈皆十年留錫海邊山。多時笏室難容膝此日書窓偶解顔。

深識高僧心不染。明朝霜雪送君還。

蘇山留別諸子

草堂無一事。靜坐見天心。掃地移烏几ᵒ嘯風抱素琴。

諦堂師將還松江見過。因賦贈別。

嘗得出人寰。雲水彌天指掌間千里翻經關外地。

偶 作

西去江都向信州。岐蘇萬壑好冥搜畫生雲霧峯重疊。

字士壽,一字市太

空餘殺氣作風雨。

蘇道中

荒城日落逢牧豎。白雲秋樹弔千古ᵒ嘆息英雄骨已灰。

孤身稀舊識。羣雁有歸期。落日關山外港無由見所思。

客衣春稍暖。三月雨晴時。近遠花如繡ᵒ高低柳掛

峽圖風雷水逆流。危棧懸空疲馬苦荒城落日怪禽愁。

行行已訝乾坤別。六月衣寒似暮秋。

佛前連翹枝。月下影參差。來年著花日是我欲歸時。

耶。奉行詩一首。

鳴鳩栖綠樹。飛蝶入花林。君子又何願。乾乾意自深。

大里惟公疛艄谱。字角次。

詩九首。

蘇山千餘。中有三秀芝。探之欲永年¯忽復就塵。

倉皇已告別。相留舉酒后。欲飲忽不飲°請聽醉別辭。

傅說版築下。寧知王者師。膠鬲魚鹽中。功名日月垂4

而予何爲者。栖栖在路岐。詩酒非我志聊以寄所思。

同諸子遊發星山

明日關山君試聽。

河梁分手恨怱怱。客路偏憐烟霧立秋前一日送人

鶴橋寒月落。風雪又傷神。函谷迎歸馬金川別故人。

空客淚滿衣襟。

歲晚金川別故人

湖邊弔古一相尋。白鳳宮前白日沈。只有山櫻自開落。

志賀懷古

遙夜蓬窓外。風煙自渺茫。聽潮知夢短。對月覺愁長。

氷壺傾盡片心寒。

瀫江夜泊

幽亭秉燭結交歡。一曲瑤琴爲汝彈°醉後休論同調少。

今歲看云暮。一倍惜昏黑。

春夜藪草二先生枉過。賦此爲謝

鄉夢秋風夜。誰家砧杵鳴。歸心將片月同滿浪華城。」同病十五年。乃是舊相識。我性離踈放師詩多記憶。

中有蓮花社。遠公常寂寥。抱琴臨流水°許酒醉良宵。

簪笏知何物。暫此得憩息。妙理淨心耳。清譚入毫。

梅開白玉姿。松偃青雲翼。色相三十二物豈不得。

嘉樹看添色。幽禽自喚人。不嫌來往屢-重此醉芳春。

聞砧思鄉

欲尋方外侶。晚度虎溪橋。晴雪迎劒舄°鐘磬滌煩囂。

張宴高樓上。青樽意轉親。千山連書障o積翠撲烏巾。

楚璧人多妬。齊竽計轉疎。憐君從此去。失意幾時舒。

愛山亭集

歲杪。同米大夫及諸子。遊蓮光精舍。

詩十一首。

。

井政賀酒一作他鄉客。年年嘆索居。飯牛頻扣角o彈鋏竟無魚。

還疑乘鶴到蓬洲。

送山叔瑟

先子。香頭。詩六首

堀大1

三六

江上泛舟

肥後府學祭酒藪慤選

字廉卿。一字丹右衛門。

樂泮集卷之三

松井庸之字澹吧。一字垣。長岡瞥

之弟。今逕。詩一首。

不知何樹不秋風。

篠文獻叢書第二卷

簡顆春風吹蕩木蘭舟。濯足滄浪萬里流。一曲醉歌塵想斷。

姓洴口君祥。一字莊左衛

中鴻雁飛何處。鱸魚憶故鄉。天涯人不見°枕上拂微霜。

客心爭短景。鄉路近芳春。驛使如相遇。梅花寄所親。

春日客中作

三八五

樂泮集卷之二

雲中爲迓浮丘公。

樂泮集卷之二維

愛此琴橋名。苔蘚斷紋成。上有高山色。下有流水聲。

步虛聲散蘂珠宮。飛去飛來碧海東新得鶴雛猶未相。

遊仙曲

偶然過橋去。一逕入竹林。散步日將夕人語起栖禽。」何知東海有蓬萊0

閒行

薩埵崖上臨高臺。雪浪雲濤勢壯哉。不見芙蓉天際色。

㠉㠉山中雲。英英繞茅舍。童子采松花飯客南窓下。

薩埵崖上酒樓同數士厚飲

山中作

月白關山草木鳴。

夜兩前溪漲。欲渡向何處。不知水淺深試放黃牛去。|漢室將軍賦遠征。虬鬚颯爽夜吹笙鐵衣忽見秋風起。

小 景

新羅三郎吹笙足柄山圖

崎嶇十餘里。咫尺迷雲霧,身在空山中不見空山樹。總是胡雛戀母聲。

度大利坂是日霧。五步不辨牛馬

月白天南鼓角鳴。文姬掩淚出邊城' 秋風吹落哀鴻夜。

昨日割一縣。今日割一城。割到壯士膽。蕭蕭易水鳴。

文姬歸漢圖

詠史

秋水佳人。

帝掬鯤崙雪。置之扶桑東。突兀五千仞。芙蓉插碧空。片言不朽盛事。五尺無能短身。桃李春風美酒。芙蓉

望芙蓉峰

米大夫爲余寫眞。因戲題其上

向晩何須愁黑月。衣珠猶自照諸天。

日暮三軍偈。茫茫水草絕。壯士刺白馬隂飲青血。

鶯時物色柳如烟。數椽家在青山外。一路人行芳艸邊。

出塞

謝公詩似遠公禪。此日登廬思渺然僧院春風花作雨。 飲馬隴頭水。水寒馬嘶悲。壯士忽一聽秋色上鬚眉。

月自舊時月。春非舊時春。落花逐流水°嘆息舊時身。

隴頭流水歌

妙解精舍陪宴得先韻

鏡

詠

丁夫衝寒出。

漢將雕弓如月懸。酒力乘來窮遠近°鼓聲猶震動山川。

蒼鷹直上五千仞。撩亂芳毛墜馬前。

松濱亭觀鹽丁潮作

登臨香十里黃雲欲雪天。遙聞白額嘯風烟楚王豹舄流不盡。時看歸鳥度林霏。

飛閣陪游九月天。蕭條秋色滿江邊黃芳仍老迎朱紱。

綠酒初寒照綺筵。鸞嘯一時名士在昭雄風萬里大王前。

可知高會關星象。文采何曾讓昔賢。

初冬遊妙解精舍得微

秋日鸞嘯閣陪宴。同樂山公子服子遷賦

當戶東峰秀。開憲晴雪鮮。初寒高鳥外°曙色遠鐘邊。 江上餘霞一鏡懸。流光瀲瀣夜如烟娟娟纔度梨花外

出樹人家點。如絲樵路懸。餘淸歸縹帙ˈ明霽落茶烟。 濯濯初臨楊柳邊。姿見素娥憑酒醉°粧疑玉兎竊丹眠。

梁苑應裁賦Þ剡溪欲放船。梅花何處發昨夜夢相牽。」瓊筵弄影飛觴處潦倒芳園李謫仙。

碧梧亭子一登臨。風聲。

鶴影棲仍密。龍鱗老更生。液堪仙鼎鍊°材使帝家成。

應等甘棠思。何論嘉樹榮。悠悠八百歲不朽托文明。

晨起望東山晴雪

秋日過飲碧梧亭

菅相祠堂古。孤松久巳貞、蟠根餘手澤偃蓋感精誠。

地屬印南郡。年傳昌泰名。後凋憐黛色°遺愛慕三八四

青山成遠夢。白髮為多愁。不寐聞更漏'沈沈曉未休。」瑷銀鏡裏淸
。三餘事業待君成奪將鰕目五行下

播州曾根偃松。云是菅公左遷時所手栽。實八 讀破蠅頭萬卷輕。映雪
孫窓同灼爍看花韓苑已分明。

百年物也。癸酉春適觀之。因賦

還疑太乙靑藜照。天祿當年劉更生。

肥後文獻叢書第二卷

霜落空庭易夕陰4回望千峰紅樹合。

留連十里白雪深。醉來無復蓬心在病起何論華髮侵。

我有瑤琴君試聽。今朝聊作鳳凰吟。

詠春月

閣靄餘暉。寒色蕭條霜氣微°高麗門前紅葉下

祇園山上白雲飛。一官誤奏千秋技半偈鑱持萬事非。

極目長江日日汲潮煎。爲書鹽池似盡田新見漉沙凝素處

還疑伏火煉丹煙。虎形原識周廷禮°魚利兼饒齊國年。

一自鄒生吹律罷。飛霜六月下靑天。

春日聡吽集卷之二

悠悠八百歲。陳迹徒悲傷。都府樓何處觀音寺已荒。 西風吹驟雨。病客思悠悠。天地孤燈夜。江湖獨雁秋。

詩書聊卒歲。杯酒復迎年。芳樹千家雨°垂楊萬井煙。日暖和鸞響,經筵侍泮宮。菁莪多雨露芳興偃春風。

圖唯藏白澤。囊豈著青錢。日日醒還醉 ' 飄飄地上僊。|濟濟青衿子。嚼幡黃髮翁。琴聲將鳥語總在杏花中。

初夏山行

妙解精舍席上。和匡卿韻

山中朱景靜。雨後綠溪陰。新樹雲猶濕前峰路更深。」柄鳥歸林盡。禪房看暮雲。一餐香積飯不立貝多文。

時時聞伐木。處處變鳴禽。幽憩長松下°清風滌煩襟。 寒色生紅葉。山光凝紫氛。無端鐘磬發°但恨易斜曛。

太宰府謁菅公祠

旅館夜雨

于尊明閣上。因僅賦奉獻

新歲 作

未暮春。君侯視學。親聽讀生說經童子背誦

客中奉寄屏山水先生

飛樓架海天。精舍隔風煙。留客蒲桃酒°懷人貝葉編

關西夫子在。悵望夕陽中。家隔千山外一人如萬里蓬。|席迎朱紱色。杯渡碧雲邊。相望不相見秋波一渺然。

詩書游魯國禮樂問周風。自愧支離甚。何曾比易東。

秋日表海樓陪宴大川和倘不至分得先韻。

聊携長劍息椒丘。俛見鵬背青濛濛不辨赤縣與神州

赤縣與神州。」良宴乘春色。名園公子前。游絲不到地°芳艸總如烟,

黃河一帶供濯足。蒼梧之野白雲愁巨靈彙負忽驚駭

負忽驚駭。」戲蝶隨飛盖。啼鶯近侍筵 無緣將薄劣°彊欲鬪奇篇

鈞天鏘鏗鳴未休?此時峰峰爲艹 振衣空翠紛不收。

冷笑當年呼萬歲。漢家天子不少留少文本自向平隸。野燒入翠微薄夜有風威,萬丈金蛇驍千峰火樹圍

空說夙志難相酬。我躡五岳朝華胥天門咫尺屬神游?|長烟生月暈。落點亂星輝。游子如烏鵲何枝可依。

百怪眩耀非世有。駕飛龍兮驂靑虬賜我瓊漿甜如蜜。 春日陪宴樂山公子鑑湖臺

風吹盡藕如舟。寒松言。明日將發。賦此紀之。

色落牀頭。峭壁懸崖屛屛碧?芙蓉朶朶紫煙浮。金� 魂猶䫴澤畔。人似貶瀟湘。唯有梅花色春風憶帝鄉。

夜號跳海日。下飛泉洞壑幽玉井蓮花行可采。在

宿熱海旅館。觀野火燒山。炎烟漲天。壯不可

尙鬱秦時雨。匹練遙曳吳門秋。

百年如急流。欲往從之吾老矣。誰寫秀

臥游亭爲岡士騏賦

陳雲一團晝如墨,戍樓大雪連堞高。士卒墮指命如毛。

錦袍赫奕照路傍。

今日牖下身瀕死。紫髯赤髭盡成霜o憶昔出師蕭關道。 前有三尺魚。後有一坏土。達士由來帝懸解。視死甜

金天秋隼擊寒艸。丈八蚴矛六鈞弓邊兵百萬淨如掃。 於西施乳。寒冬十月雪作花。虎班豚魚味方美。醉將

朝取一營暮一壘。旗鼓森巖肅千里于闐花馳三尋躍。西施葬人腹龟笑殺魚腹埋屈子。君不見吳王白日正酣

氷海枯鮫三尺是。爰喪其馬飛狐北晚暮蒼茫求不得。歌。越來之溪爲血水。又不見吳王三尺魚腹劍。血濡

前軍失利半氷折。掘盡沙鼠飲馬血單于乘虛復來即。一樓人立死。

河豚行戲示岡士

十五已充羽林兵。十八便歌出塞行天子行

深山之阿夕出雲。凄風苦雨鬼成群小鬼跳梁大鬼笑。

老將鍾馗掣鬼圖

劍舞雙雙鬪白虹。屠兒一入四坐傾°卮酒彘肩腥風生。

君不見俎上之肉飛生翼。却望天際成五色,

白面書生爛醉。身後蕙苡何足云。

鴻門高

鴻門高。高且雄。天曆數指顧中謀臣不語目屢動。

色梵篆爛貝葉º獅子象虎吼跳梁'夜叉羅刹來服帖。十 單于如鳥忽遁逃。既危復安盖有神。皆道將軍勇且仁。

有六尊森王立、翠氛撲壁峰巒疊´乃欲西去朝法王。騰 帳下椎牛供壯士。河上投醪飲萬人º書還奏建章宮。

身海雲無舟楫º鐵鉢金策瑠璃瓶。群神扶持翔若蝶五 宮前花木生春風。公卿舉觴賀天子殊恩自誇麟閣功。

天蒼茫風濤驕。靈鷲之山呼可接。秋生軀不盈七尺。亅爾來昇平五十年。北邊寂寞絕塵烟º秕今天子盛好文。

健筆與之爭雄捷。天盈盈無熱池。余亦褰裳欲徑涉。

揮筆長風拂長髯,目送飛鳥彈銀鑷

致青雲。七十餘創無人問七十餘戰有離開。

有時聚米談舊事。旁人指目笑紛紛。已矣哉眼前葡萄

唯高明之家來去紛。終南高士面如丹青袍烏靴峩其冠。

十圍腰間三尺劍。小鬼大鬼肝膽寒。君不見白日揶揄

鬼如林。不獨女蘿薜茘陰。

賜我瘞骨地。

天子遣我絕脉城。三十腰間金印黃-將軍一呼長風起。奇兵突出若波濤亂箭飛天紛於雨。五岳如攢指。樂洋集卷之二

俛搔一痒,快心盎背達眉睫。兩尊持咒焚妙香。金

一

詩集六卷。遺稿十一卷。行于世。今編詩四十四首。

君子行

秋山。字子羽。一字儀右衛門號玉山一府學祭酒。今沒。

梁間語。巉巖欲摧赤脚躡。一寶龕盛佛牙。光如明

忽見山陰道士過。問余佳興近如何。右軍老去書逾拙。君不見大阿羅漢骨相奇。展圖煙霧飛出篋。忽视嶽嶽

無意黃庭換白熬。

林道士

觀十六羅漢圖引

山館示寶阿蘇山上雨新晤。日見烟霞五彩生鳥道人家花不斷。川上看欲暝。餘紅在層巒。彎彎初弦月艷艷媚暮寒。

春風二百里行程。

岸遠行人小。村幽獨樹團。喚舟沙際立秋水正漫漫。

晚 歸

北山道中

桃花李花開滿枝。花下月下勸金巵可憐桃李芳園夜。平生張子宅。蓬蒿二三尺。來往惟明月曾無來往客。

能向春風醉幾時。

今夕蓬蒿上。初見雙履迹。欣然同拍手明月向人白。

見過

春夜宴桃李園

花前三月醉相酬。荏苒年光入夢流此日東西人萬里。霞怡顏。天之寵我。置我其間。我歌我舞樂若循環。

天涯望斷白雲秋。

清風自至。明月可攀。有酒有酒。勿令垮斑。

僣鶴谿。

暮春諸友西歸。總勝城中鼓吹音。

山人勸酒。酒人愛山。愛山斟酒。身心自閒。心如畫靜村園雨色深。共開春酒醉花林蛙鳴鶯語君開否。

山人勸酒

佐氏宅同諸子

蔓蔓將尋斧。涓涓易成淵靈液涓涓急峽間。塵襟滌盡向前山°掃雲漸涉巖阿去。」蟻穴實壞堤,鴻毛或沈船。垂堂戒飄龙。鼓瑟忌急。

旨酒崇神禹。象箸嘆箕賢。曾子逃勝母。伯夷遠盜泉。

龍尾龍頭次第攀。

。焰焰可撲滅炎炎欲燎原。

所以古君子。戰競防未然。

念及逢秋。悵然賦寄流

水。身似雲還,還雲杳渺。流水潺湲。綵鳥戲樹。青

月夜煒燁。深目一喝懶龍。俄頃風雨生鱗鬛。侍者

月夜山行

東山北嶺夜猿啼。

一片前峰月。朦朧照水濱。唯餘橋上雪?不見騎驢人。 浮槎口上月明低。兩岸蒼蒼水樹齊搖落秋風聲不斷。

山水

又

晝夜猿縱破幽蔥夢。不似愁人易斷腹。

試上峰頭夕日曛,西來秋色入看分無邊衆木皆黃葉。

靈液涓涓館舍傍。同遊乘暇此相將滌身何減驪山浴。

北山偶興八首節三首

遊淸音館

問我園中春若何。夜來風雨落花多墻東幸有千竿竹。

醉來靈液相浴。笑蘭亭袚禊人。

遲爾他時嘯詠過。

暮春答辛翼之見寄

林壑睛光逐望新。重遊何須問前津青山有待浮橋上。

白雲山上白雲開。獨向家山萬里回縱是白雲無限好。

植村山偶興

可能持贈故人來。

豈意青雲開宴處。還教我輩此徊翔。

送山叔瑟歸毛州

蕉葉秋風雙字。繩牀夕月殘書。雲深笑語聲遠。園古

朱樓書閣映朝陽。如市門前紫陌長-鳳翼九天誰易附。

往還跡踈。

入京奉謁右府久我公。賜酒饌

蒼翠山閣。上有雙仙鶴,淸唳隨松風時自雲間落。

應爲惠休多麗句。碧雲終夕傍停。

友人莊

同隨錫杖入幽亭。寂寞春園草色青詠罷一觴傳濁酒。」稚子依膝問。山中遊何久。好花春幾多官今折來否。

醉來奇字問玄經。桃林催節花先發o竹塢臨風客未醒。

三月一日同僧君山及諸子。集辛文學亭。得停山月乘清夜。徘徊澗水濱。林間聞獨笑知是讀書人。

字。

肥後文獻叢書第二卷

仙雛五彩更相將。香醪和得仙盤露羞膳分來禁臠芳。

黃鶴如呼繞水濱。桃李猶餘三日色松花更賈一觴春。

高枕具爲華胥鄉。認得鳴流猶怪雨望來閑月正如霜。

何處名山不白雲。

此道雖難矣。斯丘實樂哉。充餐饒野菊°隨意上山杯3|高樓東望八州遙。忽見炎雲擁晚潮。一雨怒雷隨烈缺。

九月十三夜北山望月寄懷古公餗從公在江都市九天垂翼擊扶搖。興來賦海才誰老病後觀濤氣尙驕。

夙昔期秋月、頻年共洒盃。忽遵東海水。恐戀北山萊。 半夜留連窺日出。斯遊不必假橋

應接無餘暇,登臨乏賦才。誰非眈猥狡˘不復憚崔嵬

海樓避暑。晚際佈雷雨

澗水連西曲。峯巒自北來。悲風開嘯虎°飛瀑送鳴雷。」明月團圓出海涯。夜來寒色掌中移忽疑淵客盈盤

露要芝交秀。秋寒艸互摧。釣簑青壁下。樵斧白雲隈。」更憶江妃解佩姿。一櫃光輝難自掩連城聲價待人知。

俗異疑秦隔〝蹊通似蜀開′傍巖危棧掛觸岸亂流回。 即今縱少先容者。會見前程照乘時。

。同諸子酌

早秋夢裡春禽語。醒來曙日移。泉聲催盥漱霞色照漣漪壐古栝蚴跡。燈殘繡佛前。知君春醉興往往愛逃禪。

朱掛嗇

磴道苺苔合。巖阿薜荔懸。小堂臨澗水深戶鑽山烟,

樹色風送岸花香。

至處逢山起。歸程愛水長。斯遊能幾度º停棹意蒼茫。

遊北里翁山園。數日忘歸

十里乘春浪。扁舟下夕陽。烟迷津。

幽樹多成綠。殘花盡謝枝。相看驚借問起臥幾經時。

訪佐氏隱居

山田開百叭。中結白雲廬。秋稼收將盡º霜林染未踈。

移床依水石。把酒弄樵漁。夕漱餘酣去º鳴泉玉不如。

經北湖黃花村三五着將近。盈虛更幾回。離居驚甲子。帳望上崔嵬3

漢逐孤輪轉。江浮匹練來。微雲纔點綴°雙雁互悲哀。

我帮遊巖曲。夫君在邸臺。新知雖樂只º舊興可忘哉

賓客曳裾集。輝光授簡開。不論希逸賦自有馬卿才。

繩翠籠一根輕。可愛新芽日夜生º高傍湘簾搖月影

遙離楚腕掛秋晴。葉間露灑彈琴下花際風飄滿室清0

但爲從來多秀色。憐君亦自國香名。

訪淵大夫。時臥遊亭新成。得删韻。

秋來尋興試躋攀,爲愛風凉晚未還`酒滿清歡思北海。

亭新高臥勝東山。石泉驚見神工似歲月應綠吏事。

況值衆峰當戶牖,更疑身在畫圖間。

蚌珠應美仲瑞

桃林移午影。麥隴靄春暉。水遶村前轉°烟舍野色微。

嘴邊蘆葉露。滴滴作書時。南北忘雲路春秋傍硯池。 消沙疑暴練。彩石億支機。行欲尋源去°呼舟立釣磯。

賦得水滴雁

又

晴日携佳興。來求野水春。香莎經雨茂°杜若傍流新。

戶外千巖拆。花間一逕新。可憐今雨色還勝去年春。」淺渚開樽酒。前灘試釣綸。漁翁閑偶坐°應是子陵倫。

移石通仙液。分池浴我身。丘山休數鑿恐駭郡中人。

云是原氏爲余設。賦謝。

香莎川

園伴看花侶。山逢採藥人。何當避跡去來卜此東鄰。

過北山館。將浴温泉。館後開逕。別搆浴室。

聞說燎原火。無端過四鄰。西南知噀酒老少不傷人。稍覺遠風塵。陶盃暫弄春。松泉元不乏魚鳥亦相親。

晏坐氈如舊。回看廐巳新。自今家醖色更貯幾多春。

縱非三射具。短小愛工奇。自謂宜衰腕°憐似薄眉。 駐馬金川驛。蕭條落月殘。同袍千里別斗酒一宵歡。

負薪雖有疾。穿柳竟無疲。但願從君子。相爭上酒巵6| 山色催風雪。濤聲入曉寒。離情與歸思。去住欲裁難。

市原訪佐氏。佐氏去歲罹災。

春日過續氏別莊

花

前酒如河淮河水流春不暫住。餘暉沈沈藏山霧今夕相

逢不賞春。明朝誰家醉花樹。花樹歌兮勸酒巵。與君

行樂當及時。縱是年年花長好。春去春來鬓作絲。

小 弓

天籟變林夕。徘徊返照餘。使吾能喪我聽鳥且觀魚。

杳霧鐘聲濕。清池鏡影虛。誰知會心處近在此禪居。

金川別故人

澁谷居應好。其中我舊知。峯巒兼石勢°薜荔掛松枝。

爽籟秋聞早。孤雲暮去遲。丘園何所賁醉後有新詩,

會心亭

花樹歌。示藤子豐

花樹歌。歌之未了若夕何。夕花色非朝花色。休辭七里灘前水自流。

秋日聞南郭先生澁谷別業新成。扁曰白賁。

因賦寄題。

相中尋遺跡。跡荒何所見。陰雲起鸛陵°慘澹海南面|終無弋者慕。獨有詩翁知。長此堪投宿-游冥不必期。

霸主臺榭空田疇。日暮寒艸臥黃牛于今猛軍何處在。

古

浮。登龍客到樽常滿°繡虎才高筆不休。

鎌倉覽新亭延眺擬岑樓。退食知君此解憂東閣淸風林外灑。」不如飲美酒。以當長生藥。

徐福帆。悠悠任潮汐。潮汐去復來。之子無形迹。

淵大夫臥遊亭

紅顏豈再新。及時當娛樂。迂哉秦代主°神仙謾相索。

送別江城淑氣開。西藩萬里路悠哉°輕裘日暖歸鄉色。 達者喪是非。愚者多愛惜。愛惜我所嗤富貴亦何益。

緩帶春生濟世才。立馬凾關山月落揚帆筑海雪濤來。」 邈彼去日影。迭如駒過隙。玄鳥一巳歸°蟋蟀便居壁。

故園到日花應好。嘉樹相迎待爾回。

早春送米大夫歸鄉

*時間集四卷。行于世。今編詩四十二首。

詠 懐

最是謝家芳艸夢。幾回春色感同遊。

米著 -複姓米田。字子隱。一字波門。参政。有四

風塵故園西望路悠悠。況復東關久滯留流水朱閣裏向君彈。

和答外弟藪士厚寄韻

初見坂徵卿賦贈

盈尺蒼松樹。飛來似忽生。鶴栖期蓋偃°龍臥待鱗成。 寒玉齋邊白水流。一時諸彥此同遊°松濤竹籟茶將熟。

愛此後凋色。憐君遠寄情。微風吹解帶早巳有餘淸。 | 三碗清風凌十州。

豊州田伯德。見贈盆栽小松。因賦謝此。

遊盈上人寒玉齋。時上人設茶

伊織助。國老。詩二首。

梅發浪華地。詩慚水部賢。携來夜珠在投爾欲相傳。

-複姓三淵。字公明。一字

海上秋將盡。風霜滿客船。青橙千里別明月兩寄懷井君祥

國老。詩六首。

儒臣彩筆日翩翩。忽見飛騰在目前雨露非關逢狗監。

·君綽。一字平太左衛

玉山先生進階。榮歸在近。因賦賀之。

去來唯有鶴鸞群。

萬壑千峰鎮紫雲。白松花落晝紛紛華陽道士人不識。」爲是羣峰如書裡。勝情何減少交遊。

回圓。

風雲原自辨龍泉。青樽置醴稱殊禮°朱邸談經俠盛筵。

到日故園花更好。知君晝錦似當年。

慈思萬里。

減書白雁隔三秋。蘇山雲向愁邊結紫海珠從握裏投。

車馬晤言難。傾蓋今朝初罄歡從是青山流水調。

時時渺渺西山爽氣席邊寄道士,

落暉入古寺。山壑暮雲多。曲徑經氷6禪房帶薜

頻遣靑為會群仙。

遊山寺

。

世爲國有吉立喜悖始。一字四郎右行

游 仙

春蒲江南杜若洲。憐君載酒放輕舟冠童三五詠歸興;好酌蘭陵酒。千觴未用辭。醉來花下臥不復問歸期。

恰似舞雩曾點遊。

開家弟子隱遊神江。因賦貽一

偶 成

是福啦】。世爲國老今沒。詩一首。

山中一路。翻錫夕嵐長寒。乞食歸何處6精舍在雲端。

一字助右衛

題僧歸山圖

蕭條客舍酒盃。歲抄相逢惜別顏明發千山風雪起。終身林壑裡。巖戶鎖藤蘿。幽意無人識白雲獨自多。

不知何路向鄉關。

題山房

客舍別諸子

鳥聲深樹中。獨坐夕陽紅。寂寂風塵外-溪頭一徑通

暮色含初月。

無限清光波上來。

幽居

短棹孤舟久泝洄。葭汀鷗渚意悠哉 前山蘇嶺嶢嶍泛松江

孫登嘯。萬壑千巒引響長。

別園花滿樹。聊此得幽期。忽聽林間鳥閑題竹裏詩春日遊濱松亭

世爲國老。詩三首。

百頃龍湫古。層梯仙路通。我來凌絕頂被髮嘯長風。

長岡營之沐斑松井。賜今姓。字公度。一

蘇嶺倚遼空。迢迢不可窮。白雲秋樹外靑靄夕陽中。

登蘇山

梵音知淨理。人世覺風波。寂寂香臺外。但看麋鹿過。

肥後府學祭酒藪慤選

。

樽開春色靜。坐久夕陽移。潦倒山公興ᴼ何知倒接蘺Þ

倚夕陽。登臨滿目樹蒼蒼山中欲服煙霞氣。

澗底幽尋藥草香。鸞鶴自飛丹洞口鼎爐猶在碧城傍

天風忽送岡老。詩九首三山縹渺出雲煙。玉闕銀臺夕照前ᴼ園裏蟠桃花盡發。

宇土侯弟。詩六首。

早春遊目臺得嬌字

字君中一字酉吉。號

還敢陶分醉中回。

淨界風光盡不如。

衹林春樹夕陽開。花下東風吹面來°爲是遠公能愛客。寂寞禪關興有餘。詩成自覺世情疎楓林相映斜陽外。

臨流精舍集

紅塵不到梵王臺。竹外青山繞坐開況許蓮花池上的。」征客長城猶未還。朔風吹雪滿楡關°夜半更驚烽火急。

玄談偏惜夕陽催。

三軍鼓角動千山。

暮秋遊山寺

和隆上人見贈韻

前村一路夕陽斜。流水澹烟處士家°不辨千林深雪裡。」開窠座上對凉風。江湖寒影生愁裡丘壑清光在夢中。

陳香忽動是梅花。

話盡十年鄉國事。歸心一與故人同。

從軍行

秦城秋色滿長安。萬里雲山望不窮酌酒樓頭迎朗月。

松門塵事絕。蕭寺晝沈沈。山色蔥前近泉聲竹裏深。避暑鱓棲地。風流會我曹。門當山色靜寺出樹梢高。

境閑雲共懶。詩就鳥同吟。趺坐石床上 焚香問道心。」許酒開青草。題詩弄彩毫乛勝遊興處世事醉中逃。

興彭字好牌。一字隼人。

擬長安月夜與友人話故山

遊瑞巖寺呈教禪師

山寺避暑

西溪風景好。轉使客愁寬。落葉飄斜H⁰ 歸禽没遠巒。

一亭丘壑裡。避暑此徘徊。幽逕薪人過ˉ深林野鳥來

遊西溪

夏日山亭避暑

忠英牖學惣今沒。詩二首。

字子和。一字内膳。號峨嵋。公

唯有牛羊向舍歸。

腰間一酒瓢唧歪霸氣薄。枕石水聲寒。所值皆奇絕4何須促轡鞍、

。携去倚岧嶢。嶺雪含霞色°松濤接海潮。

春風花樹動。夕日野煙遙。遊目高臺上°啼鶯勸醉嬌

雲峰當檻聳。海色入窩開。自有清風起披襟入快哉。

曠野風寒行客稀。浮雲流水望依依千日暮炊煙合。

野 望

九日送高子式赴鎌倉草堂

數聲鴻雁過天涯。

鄉園萬里遠相思。城外寒林書。

山中一路到茅廬。落木空階罷掃除採藥幽人何處去。

訪隱者不遇

秋夜思

夜猿啼

宴城北莊

修篁百餘丈。新綠映晴雲。客皆子猷侶何可無此君。

勸杯憐別意。把袂問歸年。今日君分手。何時此筵5

野館開一。景多易成醉。漸覺煙霞中引人着勝地。|新晴芳樹下。春煖帶輕煙。花氣飄衣上°鶯聲繞酒邊。

修竹篁同前

二十勝之一

花下別

千里東風動。江樓眺望時。遊絲生水渚。鷸鳥繞深

屋外南山秀。窗前一水流。何妨終歲醉°種秫在西疇。

和高子式畫鶯寵

早春江樓言懷

嗆議叡和。

和泉。

宇土侯立禮題淵明歸田圖

!義。號鶴城。公族。推恩封宇土。從五位下。

休疑此地頻來往。泉石膏盲一病仙。

菱歌一曲隔林聞。

菴對閑雲獨欲眠。落葉庭中風自掃飛霜嶺上月高懸。亅金龍吐月映江。影落中流嶽色分半夜何人回棹去。

桂樹叢生幽壑邊。行吟曳杖破山煙溪通流水常堪漱3

三七四

月夜登金龍山得雲字

肥後文獻叢書第二卷

甡詩六首一鳥破春煙。飛上垂楊柳。未聞晛院聲應待携酒友。山遠著煙合。天空白日遲。鄉關音信少何處寄相思。

煌扈館 宮川侯中

春天新日。遙向碧山阿。夾路林泉淨啼花野鳥過

巫峽秋深木葉稀。孤猿啼處白雲飛山風吹落三聲恨。 門前芳草秀。屋外白雲多。如此幽莊裏開樽好醉歌。

一夜行人淚滿衣。

木葉蕭蕭下。悲秋獨倚樓。思鄉千里夢落月入愁。

聞雁

牀頭狼藉讀殘葉落時獨坐高齋煙雨裡。

淵明遙向草堂回。籬菊相迎花正開定是山中逢酒熟。

可能秋色負銜杯。

夏日山亭避暑

暮秋病間遊桂源小庵

首夏山庵與友人對酌

放情憐永日。濟勝漱清流。乘興何唯雪前江有小舟字

。

桂源二三月。間客不妨初冬倍肥後侯。遊龍山泰勝禪寺。觀楓。得臺

遊。花發烟霞暖ˇ鳥啼丘壑幽。

桂源山春興

上界重來清淨處。何應趺坐着塵埃。

巖山隣閣出。芝海繞欄開。樹杪層雲起°潮聲過雨來。 一乘南指碧山隈。海驛春雲萬里開衣裏珠探龍頷得。

銜杯秋暑退。裁賦晚凉催。因對蘭臺客°清風入快哉。」天涯錫逐鶴群回。曇花欲落黃金地⁰貝葉新翻白馬臺。

初秋凌霄閣迎秋子羽飲晡後過雨生凉

春日大川上人過訪鑒水亭。得天字

冠蓋相迎小閣前。登臨握手望長天雲峰幷秀芙蓉色。

杖錫乗春至。相迎落日天。玄談堪盡興`詩意不離禪。|江雨新晴楊柳煙。坐上青樽憐客滿o歌中白雪任人体。

林外鶯聲囀。池邊柳色懸。衣珠君自在°可以鑑清泉。 使君明日東方去。早晩風流同此筵。喉辦藩在

送僧法振再赴南都東大寺

不見青蓮相。翻開白雪吟。重期新日禪寂與君尋

白河侯過訪有詩和答

遙望嵩山路。蒼蒼雨色深。層雲連法界落葉祇林池亭懸雨色。水樹鬱蕭森。彥會迎玄度清談少道林。」讀書消暑日。高枕保餘年。此外無他事時時夢普賢

雲連香界暗。秋入碧山深。遙望諸天外剡東何處尋。 九日龍口邸宴集得秋字

鑒水亭雨集寄懷大川上人

卜居移僻遠。獨喜富山泉。溪得觀魚樂o庭同拜石症。

。

暮秋約同中川侯。遊少林精舍。值雨不果。有「重陽朝散客。相駐五驊騮。朱紱兼烏帽o青雲倚綺樓。

詩見寄?和答。

鼓琴傅大雅。懷璧會諸侯。霜葉當簷下°寒花傍酒幽。

張燈連薄夜。裁賦對殘秋。餘醉偏堪濛門前一水流。

龍山名剎倚崔嵬°滿菀丹楓映梵臺長者停車金布地。

會有尋幽客。同樽慰寂寥。古松懸薜荔°新竹破芭蕉。道人張席錦成堆。有時偏怪天花散º向夕還疑寒雨來。

山溜常聽雨。海風時送潮。誰知軒冕外港與汝得逍遙? |爲是虎溪陪語唉。猶窺色相重遲回。

長夏空山裏。幽居萬木深。北窗吹起西嶺夕陽沈。

春筵張燭武陵西。不管餘酣朧月低 桃李滿園紛似錦。 瀑水鳴寒玉。枞濤落素琴。誰知弘景宅。常愛白雲心。

春夜宴桃李園

夏日山居

江邊雨雪北風斜。飛錫寒空逐落花莫道夜來幽興盡。 蹴花飛燕去。隨浪狎鷗浮。此處逢漁者-尋源欲泛舟。

門前留得白牛車。

酬大川尊者見訪

玉川晴望泡。春暮水悠悠。睚斷靑山出汀何問當年買山隱。翠微深處對支公。

暮春遊玉川

初夏鑒水亭子式至賦贈

暮春少林精舍集得風字

磬響孤実外。蟬鳴山寺避暑

中務少輔。今老、詩二十四首。

哭高子褰裳直欲問蓬萊。

當日按書天祿閣。于今猶見照青藜

式

高名伯起似關西。下帷園樹黃鸝𨎌ᵒ授簡春風白雪迷。」扶桑日出彩雲開。百尺樓臺東海隈°不是當年秦漢客。

鬱想佳氣鳳城齊。金馬門前駐碧蹄ˇ博物張華推海内。

褰裳亭集

祭酒

呈林。

潮音高閣海秋夜登潮音閣得東字

夕佳樓上對千門,却弄烟霞日欲吟罷玉堂開錦字。蹈來花下更成蹊。

漉來春酒滿淸樽。丹墀近接風雲色金掌長承雨露恩。

此處采眞何限意。朝回沈醉不知吃門東。萬頃蒼蒼月色中得出人間塵境。

諸天今夜坐清風。

宇土侯興文字好嘩。髖清械。汉獄月淆。公族。维恩封字土。

樓居仙去月明空。百尺寥寥秋色中叔夜山河餘舊跡

柴桑楊柳起悲風。乾坤搖落騷人賦°霜露摧殘桂樹叢?|欲避人問熱?尋幽入梵宮。飛流懸絕壁高竹起清風。

天上不知何處住。人間長阻廣寒宮。

少林高鎩古禪宮。春暮登臨似剡東染翰彩雲來淨界。

開窗花雨下靈空 千尋嶽色懸寒影咫尺潮音入海風。

萬木中。論玄猶未去坐覺世塵空。

小飛花後。相看到夕陰。石苔經雨綠°林翠映衪深。

吹浪金魚出。勸杯黃鳥吟。聊將濠上趣-欲會故人心。

清素練流。

寄題戶部林先生夕佳樓

白日冷中林。

避世裁青筋。逃虐倚碧岑。爲耽秋興好不管二毛侵。

秋日送別

花臺雨歇夕陽長。夏日新晴敞幻鄉天畔雙迎淨界。

蕭瑟山房外。誰知獨往心。丹楓隣四壁山房秋事

夏日新晴少林精舍集得長字

說君元誇楚調。山頭白雪入歌回。

和歌誰共唱。同病好相親。原抱連城色休投按劍人。

夏晚竹飲得通字

芙蓉秋子羽遊芙蓉賦此送別

東莊還卜築。暫此避風塵。翰墨迎雲動-林泉入夏新。

桂樹有誰攀。

答謝山形侯見

空山人跡稀。夏木掩荆扉。丘壑籠朱影｀煙霞隔翠微。」鄴下堪揮筆。平臺且舉觴。清狂誇醉態°豪飲壓詩場。

白雲堪供臥。青荔欲裁衣。寂寞揚雄宅4年年間字歸。 星聚迎諸彥。風雄憶大王。南窓俱寄傲。誰得似羲皇。

三日銀臺莊宴集

贈高子式

負郭銀臺墅。臨風似詠歸。樽開三日宴花映暮春衣。 蘆洲草閣隔塵寰濁酒登臨日日⁰薜荔鎩門常寂寞3

觴泛淸流轉〝翠廻幽微心桃林相值處°偏與世人違。」江河遶檻更潺湲。白雲不斷停高臥明月長懸照醉顏。

試問淮南招隱處。叢生夏日訪某山人

投轄留嘉客。開俘入醉鄉。雷聲急送雨歌曲偏生凉

鸞一別河梁上。蕭疎楊柳低。征裝朝露冷古驛暮雲迷,

名

臣機殼謹選

天外追鴻影。秋風送馬蹄。鄉關何處是〝落日紫陽西。

表海樓避暑限七陽

樂泮集卷之一

肥後府學祭酒藪慤選

嘯閣松閣設宴高樓上。褰簾東海傍。奇峰欄外起°炎熱座來忘。

六月幽篁下。深林一徑通。綠鐘開落日-氷簟坐清風。

揮麈玄談劇。脫巾狂態同。山陽靑眼侶相見晩凉中。

萬仍倚天開。行矣遠遊方壯哉夜未五更先見日

峰連北斗俯聽雷。揮毫何讓凌雲氣°着屐還同濟勝才。

聞世中群俗滌清凉。碧雲將動休公筆°黛色遙來支遁房

莫道上頭昏黑逼。傳燈遍照白毫光。

萬世無窮之統。此乃天下衆人之所知。而無待 微臣

私言之爲徵也。夫和歌漢詩,異體同工。則我 藩

一本國人而今在他邦者收之。以其陶鑄由於我也。本

他邦人而來學於我者收之。亦以其陶鑄於我也然其

來學非經三年者不收。以陶鑄之不久也。

蔽慤識

一我先君 玄旨公之於和歌。上續千載將絕之緒下垂

附言

一此編編集一國之詩。然往往有韞賣而藏之者。有散

者。姑待續編。

慤謹序

度。而得詩人之旨矣。時則有如熊維之溫雅一國風化。

實由泮宮始也

美者矣 大和封建之 如周時之 制昇平之運如周

|| 臣慤謹論 靈雲公之詩?寬裕豈弟。可謂有人君之

今公之世。

一先世之詩既別錄成卷。故此編限以

三七〇

獲。蓋亦由 先烈之作畜云。

亦未有删之以修勸懲之敎是以挑卓 感甄

之人多免 時王之罰而 子夜大堤 之音殆亂

雅樂之籍則詩之 爲物也不過爲競華 靡

之具尚何望其爲政敎哉方今我

上之人既不能采之以行 黜陟之典下之人

肥後文獻叢書第二卷

風雅之興。實胚胎于此。其後 妙解公受學於惺窩

先生、雖以開國多事。未遑翰墨。然斯文漸盛。而朝

野之間。頗有鳴于詩者焉及至 靈公敦好文學。

兼善詩賦。及一時羣臣盛爲慶和。而文風大振矣。

今此編限 今公之世。而論及 先世者。以示當時

之構時之盛則 列國諸侯之 風其必有 如召南之雖然 臣聞之居芝蘭之室者不聞其

香處鮑魚之肆者不聞其臭化之也臣固肥

人也其化 於國久矣庸詎知此集之爲正爲

變爲 雅頌邪謹此輯錄以竢異日大師之采

與君子之删 安永丁酉二月 朔肥後 府學祭

酒 臣藪 。中長

德之和淡。墨昭猷之俊發。水斯立之敏捷。先臣之

遒健。皆一時之選也。錄在別卷。玆存評語。

一此編名樂泮。而偏及野人僧道之作者以稿而不留者。故有有詩名而不收詩者。有富吟哦而

寡收之三卷之一

六九

¸樂泮集亦得自 其所以 暢情志寓比興者則莫不同 矣雖然

倍於上世矣 其體裁氣 格雖與古 詩或異而

夫正朔服色 朝覲貢賦之制 雖一莫不出於

政以敎國子弟 數歲之間敎化大行 公雅

好詩而臣儀尤長於斯是以一時仕進君子莫

不善言其志 而鄕黨 閭閻之民亦往々有興 時列國之 君亦能反射 修德愼風 之自此鵲

於詩者焉不幸臣儀中道即世使臣贼慤承乏」巢騶虞之所以 媲美於周南也及周之 東遷

後事臣慤質野學固最拙辭藻幸有二三文臣 | 也政敎 號令旣不行於天下而其黍離之詩

與臣儀俱事者尙在贵職以得守故規仍舊貫 亦降爲國 風則尙何暇及 觀列國之詩而行

而溫柔敦 之敎亦未嘗廢也今玆丁酉臣慤」黜陟之典哉 自此以降國異政家殊俗而先

奉命謹選臣儀以來所得國中之詩得詩一千」王之風 日以削駿至乎 桑間濮上之音作其

三十首 作者二百九人弁以 公詩十八 變極矣孔子 雖大聖不得其位以行其政故

首凡十卷名曰 樂泮集取 諸魯頌 思樂泮水 獨得就 故籍而删之以 修詩之敎 於是一時

之義也臣怒又謹爲之序曰嗚呼詩之爲政敎

也大矣哉 昔者周時王畿之外廣 建諸侯

勸懲矣 自衆篇什 之盛反

之人君雖不見黜陟而萬世之 學者因 知所

俗之或異然 而天下之廣列國之多不能偏

觀而悉知 焉乃命大 師徧采列 國之詩陳而

觀之辨邪正 明得失以行黜陟之政 是以當

今. 公襲封之初首建學 校命 臣秋 儀典學

樂泮集序

專其國中 矣周之先王懼政教之不齊而風

漢魏以來詩人之 京師 然其生殺誅賞發斂 寬猛之政寬延四年辛未春 西岡 幸寫之

安也、至於後世所定之法、實多與人情相反者、只以

法合 迫之、不問人情之 安不安 何如、先王 之治不

可及者、其在斯乎、孔 子曰好 德如好色、又曰 如好

好色、子夏 曰賢々 易色、蓋好色 者人之 誠意、非自

外來者、故語爲仁深切之蘊、必以好色言之、白虎通

曰、父所以不自敢子何、為恐瀆也、又授之道、當極

說陰陽夫婦變化之事、不可父子相敢也、是必有所傳、

√繫辭所稱、夫乾其靜也專、其動也直、是以大生焉、

夫坤其靜也翕、其動也闢、是以廣生焉、是豈可言

父子之間乎哉、中庸曰、君子之道、造端於夫婦

元者四德之長、仁者萬善之宗、其字皆循二人、二人

者夫婦也、天地之道、必皆有對、獨陽不生、獨陰不

成、二情相戀、二氣相求、日月往來、一寒一暑、明

則有禮樂、幽則有鬼神、要之皆夫婦之道也、聖上苟

能推好色之心、公於天下、則關雎麟趾之化、覃及遐

方、心長翰短、戰灼莫指、枉蒙不棄、蒼生之福、

井田 幸 男

古城貞 吉重校

同校

男

太平策卷之十二

也、如飲酒合歡、先王之道也、飲食宴樂、於易有之、

抗、是非人情也、如夫死再嫁、原情而言之、夫婦之

靡、人才日衰、人壽日促、其害匪細、如我邦輿、四 節者中之謂也、禮之體也、人情可左可右、可上可下、

面環海、島嶼不屬、多舟少車、迺土地不厚、風俗不重、 可長可短、可緩可急、可過可不及、聖人制禮、以爲

人稟心房之精.從婉孌之習、伺纖麗、先巧佼、淫蕩之中禮、一定而不可易、人情以定矣、人少則慕父母、

之風、與鄭衛相類、至優伶妓樂、種々之音、豈在桑間|知好色則慕少艾、慕少艾者人情也、聖人不禁、不三

濮上之下耶、玉膚柔軟、吹氣勝、以脂粉相高、薄十則不娶者禮也、聖人制之、聖人之所立唯禮、禮以

俗滔々、長逝不返、自非剛介之士、豈能獨立、學魯|節人情、豈能得使天下之人情、從吾所好乎哉、以妾

男子耶、孔子曰 君子有 三戒、少之 時血氣 未定、戒|爲妻、亦人情也、出勢不可已、聖人以爲非禮、惡亂

之在色、以是驗之天地、堯之洪水瞭々可見、太古如一名也、夫死再嫁、亦人情也、出勢不可巳、聖人以為

人之嬰兒、至堯之時、天地始有情、洪水泛濫、是天 非禮、惡失志也、凡天下所行、人之所有、莫不人情、

地之血氣未定、豈足怪乎、然謂洪水儆予、即所以爲 先王以禮制之、後世以法束之、禮與法何擇、雖然先

聖人也、好色者天下之同情也、正則爲三綱五常之本、 王之禮、必原其至、合於人情、人情之所宜、制以為

使人心經結不可解、莫貴焉、邪則爲荒淫流蕩之最 禮、未嘗有所作爲也、如以妾爲妻、原情而言之、妻

使國家滅亡不可救、莫甚焉、釋氏恐其荒淫、忌其欲|尊者也、己之配偶也、妾者卑者也、己之使命也、其

志、併案其出於天者、三綱五常皆廢、相牽陷不孝之「人之貴賤自殊、苟以賤者爲己之配的、是己亦爲賤者、

罪、是猶畏火災而禁火、畏洪水而禁水、畏噎而禁食欲貴者人之情也、今無故而貶己之位、與使命婢妾相

先王因制酒禮、以節人情、釋氏掃而去之、絕口不飲、

亦畏酗酣而耳、夫色之有淫奔、酒之有酗酣、皆過其

節也、苟過 節則 雖食穀、亦必 傷於食、盍廢 穀諸、

苟得節、則金石之毒、可以爲藥、故得節之爲貴、得

愛至篤、死生成誓、雖父子君臣、未足比其情之切也、

然所天忽然而沒、爲未亡人者、當淚々相屬、守墓不

去、今粉面飾首、新其衣裳、謂它人夫、亦非人情也、

故禮所制、雖如與人情相反、深探其本、則人情之所

三六七

則不過男女之交而已、聖人以禮文之、禮不可立之目、子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮

就、人情於是乎制矣.聖人之知、豈不大乎哉、伏羲|勿動、蓋不視聽非禮、則忘其非禮、是所以復禮也、

之時、人民淳朴、壽度百歲、聖人立之制、男五十而|若四勿以心言之、則莊禪之陋也、聖人曰放鄭聲、鄭

娶、女三十而嫁、及三代時、先王爲之中制、男三十一聲淫、鄭衛之地、濱于大河、地不厚深、人亦浮淺、

而娶、女二十而嫁、以合上古五十之數、盖人三十則 淫逸荒亂、習以爲性、其聲樂蔓衍流蕩、使人失守恣

血氣充盛、筋骨方壯、可以施化、可以有子、年未三柔情、莫知歸也、聲入人深於色.故俗樂之行、風俗I U

其心文人

情、多其華飾、則所以防、而使不得恣也、如婚禮論其

、夫不覩已久、則忘其美好、猶中國無象、

立、民始尹姓氏 種類、以奉 天子、君臣 有義 是也 十、則血氣米定、筋骨未壯、不可以施化、不可以有

伏羲木德、故爲風姓、是氏族之始也、伏羲以前、生 子、是天地之數也,後世之制、男十六以上、女十四

民已久矣、有聖人長之、雖然嫁聚未制、夫婦未定、 以上、許成婚、以合三十之數、人民澆薄、嗜慾蚤生、

三綱未立、五典未張、是以謂之鴻荒之世、孔子不言、 血氣蚤溢、故嫁娶至蚤、甚者至未離襁褓之中、而相

孔子之所稱、始乎伏羲、稽之易可知已、夫好色者、 約嫁娶、是天下之大不祥、敢化湮蕪、人民夭折、

人之同情也、若充好色之情、則盡天下之女、而奉一 職是之由、王吉所上疏、方見于今、豈不哀乎、飲食

男、盡天下之男、而奉一女、未足飽沉貪求之欲也、 男女、人之大欲存焉、人非木石、孰能無情、聖人深

以力相制、爭亂吞噬、與禽獸相類、聖人有憂之、制「知其然、故自幼聚之於學校、臨以嚴師、規以朋友、

爲婚禮、定之配偶、甲與乙偶、丙與丁偶、若亂其偶、 勵以藝業、不使與婦人雜處、迺男女不同席、不共食、

刑罰從之、於是人情始定、各安其所、然聖人慮相遇|敢之於孩童、孩猶未如惝、只以爲男女决不可狎、習

於道路之間、擇美者專定配偶、於是以儷皮爲禮、夫|以爲常、及其知情也、方在學校、學校無婦人、歸省

儷皮爲禮、父母必知之、兄弟必見之、鄉黨必聞之、 其母之外、未嘗祝婦人、人之情慾出于目、目數觀之、

卒然 野合之憂、於是乎 除矣、禮之爲 敎、所以肥後文獻叢書第二卷

便動畫圖象之、百端盡巧、竟在真象之下、顏淵請問爲仁

三綱五典始於夫婦、有夫婦而後有父子、有父子而後堂之上、可以禮律身、而房閤之間、不可以義制欲、

有君臣、人倫之本、風化之首、王道之紀綱、太平之一豈啻君乎哉、公卿大夫皆然、立朝風節、論政正議、

樞機、盡在夫婦矣、易首乾坤、詩首關雎、禮重大婚、 朝堂之上、指爲名臣、至退朝脫袍、酣臥于衽席之中、

樂主合和、尚書錄釐降、春秋謹妻妾之分、聖人之道、 鐵石心腹、化爲腐艸、驍勇之將、英雄之帥、牽聯於

以夫婦爲先、閨門之內、屋漏之下、雖隱微乎、四海 房闥之愛、而失時機、取荒敗者、相望于册、降至士

九州之表

表正則景自直、表邪則景自曲、 庶、失守缺行、必在房闥、匹夫匹婦之爲諒也、至自

故閨閤不治、帷帳不修、以致天下之太平、上世以來 經於溝瀆也、其弊至此而極矣、自天子以至庶人、修

未之有也、夏之興也以塗山、其亡也以妹喜、殷之興「身之要、正家之初、舍夫婦而何以哉、二南省房中之

也以扶都、其亡也以妲已、周之興也以太任、其亡也樂也、夫婦之道也、先生以爲正家之具、用之鄕人、

以褒姒、三代興廢、未嘗不由婦人也、蓋嘗推其所以 用之邦國、以風化天下、天下之家正、則天下治、匹

然、朝廷之上、堂階之間、百官在前、執法在後、史在

被堯舜之澤、伊尹之志是巳、太古之時、人如

夫匹婦

左右、冠帶儼然、南面垂拱、當斯時、雖中才庸主、 麇鹿、男女雜處、未有定偶、伏羲始制婚禮、嫁聚之

得勉彊於頃刻之間、弗敢放肆也、至於朝散禮畢、 道立矣、於是男以女爲室、女以男爲家、匹配一定、

輦還後宮、寶貨聚目、絲管塞耳、簾薄帷帳、蔓衍相一不相混襟、夫婦 有別 是也、太古之時、人識其母

屬、紅粉皓齒、充滿其間、飮食嗜好、應弊而至、莫不識其父、至嫁娶之禮立、人始得識其父、父子有親

不畢給、四顧無搢笏之臣、呼嘯之聲、寥々莫聞、當斯是也、太古之時、氏族不分、尊卑無別、至父子之親

君、如齊桓公賢君也、葵丘之會、與諸侯約、莫以妾

爲妻、可謂正矣、不能止内嬖六人之寵也、何如者朝

夫婦

故白日朝堂、莫不堯舜之君、袁夜帷閤、莫不桀紂之

水斯立著

太平策卷之十二

雖明君英主黙得從欲抒情、不取須臾之逸樂也、

德之瑞也、數之毫忽、理之隱微、措而不言、只其不「極圖、明易之大原、是數者帝王之寶也、私家藏之、

言、故其妙不可勝窮、所謂知者不言、言者不知、是一其事不祥、王者苟能覽圖象、以思古聖人法天之精意、

已、雖然、孔子晩好易、韋編三絕、鐵擿三折、漆書 與先王光被之明德、所以施之風化政湘之間、滾其

三滅、繫辭極言性命、言其所不言、聖人自有兩端、 來、負圖而出、何必龍馬、

中人以上可以語上、中人以下不可以語上者、可知已、

豈得信其半而疑其半乎哉、歐陽修而下、世儒之疑圖

書者、於是乎陋矣、聖人之敢、不過詩書禮樂、而其

源皆出於易、易者詩書禮樂之大宗也、聖人之極也、

試以河圖言之、一六爲樂、二七爲禮、三八爲詩、四

九爲言、詩書禮樂爲一河圖矣、人在河圖之中、五至

善之位也、天地一河圖、河圖未嘗大、物々一河圖、

河圖未嘗小、小者入無間、大者包無窮、莫非河圖之

妙、河圖者何、河者孟河也、龍馬之爲形也、馬身而龍

鱗、故謂之龍馬、高八尺五寸、類駱有翼、蹈水不沒

背有旋毛、五十五點、名之曰圖、洛書者何、洛者洛

水也、綠質丹書、五老捧之、浮洛而下、象背之紋、

四十五畫、名之曰書、八卦律曆法河圖、井田入陣明

堂九州法洛書、天地之至寮、豈有加于此乎哉、二圖

所在、鬼神呵護、不詳妖邪之氣、望而避之、二圖所

在、雷電晦瞑、風雨崖裂、方圓卦圖、法天法地、大

皆歸於道家、卦爻變為符章、諸圖變爲丹法、晋尚玄|乎鬼神、非禮樂餐爛者比、子貢之高識、猶言夫子之

學、靡然成風、王弼之徒、以老莊之意解易、晋人多文章、可得而聞也、夫子之言性與天道、不可得而聞

以老易並稱、老子專明道德、易十翼多說性命、其書 也、故黜圖書圖象、爲怪妄者、在學者宜矣、比諸世

固相類、況老子之交、魏繫辭傳、相出入上下乎、故|儒開口、說道德性命之理、玩弄圖象、誦說鬼神者、

以書視易、稱之老易、亦可而耳、唐之註疏家、皆王一加一等奖、歐陽修之論可謂正矣、子曰、鳳鳥不至、

弼之奴、晋以後數百年、只有關郎而已、降迨五代、 河不出圖、吾已矣、夫以鳳鳥河圖爲言、以爲王者明

作粲字

故諸圖亦皆爲仙家見奪、儒者只奉易經、以義明辭、 則上有以答皇天不顯之靈、下有以固邦家不拔之基、

卜筮盡爲術士見奪、卦圖皆爲仙家見盜、易亦書已、 太易之道、益神益靈、幽贊天日之統、豈可知其所臻

其實則湮矣、道家者流、本出於黃帝老子、其道以清 極乎哉、夫藏腑見則人必死、先天太極二圖、不豈天

淨無爲爲宗、以虛明應物爲用、以慈儉不爭爲行、合|地之藏腑乎、歐陽修而下、儒者有黜河圖洛書爲怪妄

何思何慮之義、仁者靜壽之說、如此而已、白秦漢以者、有疑先天諸圖、爲仙家所製者、雖是陋說、吾有

來、禖以方士之言、乃有飛仙變化之術、黃庭大洞之一取焉、何如者先王之道、以人治人、樊遲問仁、子曰、

法、太上天真木公金母之號、延康赤明龍漢開皇之紀、 愛人、問知、子曰知人、詩書禮樂、皆以人傳之、人

天皇太－紫微北極之祀、下至於丹燊奇技、符籙小數、 者明也、鬼神者幽也、河圖洛書、先天圖象、皆彷彿

以餬口四方、賣卜日者之徒至多、如鬼谷先生司馬季 華山有真人、傳先天諸圖、發明易道、其言曰、易無

主、可以見已、諸圖亦爲術士之有、其徒傳守、以神其 文字、萬古之秘、啓於宋、大極圖興矣、先天圖、大

術、秦始皇好神仙、漢武帝又好神仙、燕齊迂怪之士、 極圖、流傳天下、宋而下、道德性命荒矣、二圖之行、

附益其事、漢初諸儒率皆襍黃老之學、如淮南王之賢、 癸乾坤之秘、漏天地之藏、不祥莫甚焉、若有豪傑之

有舉家上仙之名、如劉向之博學、猶曰黃金可成、當一人、必盡 收之、以鎭於 天祿石 渠之上、非詔 勅不得

此時、卜祝微賤、不與人齒、以神仙進者動至大官、 幗披覽、流落民間者、亦必待其人而傳、絕口不語、

、

矢舟車、始乎黃帝、可以見已、龜北方玄武、處於水 風、猶盛哉、夏殷之制、欲卜筮則取蓍龜、已則棄去

位、龍東方蒼龍、處於木位、其實龜爲金、龍爲水、 之、以爲龜久則不靈、耆久則不神、至周、卜官常

各處其子之位、以序推之、虎當處南、鳥當處西、而一藏蓍龜、以爲器、蓍、天子九人、公侯七尺、卿大夫五

虎西烏南、七九易所、亦洛書之數也、世稱、伏羲始「尺、士三尺、龜、天子尺二寸、公侯九寸、卿大夫七

造網罟、獲龜以授黃安、安坐龜背、已不矣、此蟲畏 寸、士五寸、以定禮制、藏文仲居蔡、山節藻稅、是

日月之光、二千歲、即一出頭、安坐此龜、已見五出|爲僭禮、雍徹八佾之類而耳、雖迺大夫之潛禮乎、可

頭矣、行即 負龜以 趨、人謂黃安 萬歲矣、是雖不可「見古人重龜之風、夫子亦有龜玉櫝中之言、要之龜買

必信乎、畏日月之光、亦金精之證也、古者龜玉金銀於珠玉、龜策傳、有北斗龜、南辰龜、五星龜、八風

皆爲貨財、天下通用、元龜岠冉長尺二寸、直二千一 龜、二十八宿龜、日月龜、九州龜、玉龜、種々之名

百六十、爲大貝十朋、公龜九寸、直五百、爲壯貝十 蓋古寶龜之目而耳、先王寶之、且與三幣通行、是亦

朋、侯龜七寸以上、直三百、爲么貝十朋、子龜五寸 金精之證哉、天用莫如龍、地用莫如馬、人之用莫如

以上、直百、爲小貝十朋、是爲龜寶四品、大貝四寸 龜、是亦古之遺言也、故卜筮之事、太卜總領之、明

八分以上、二枚爲一朋、直二百一十六、壯貝三寸六| 卜能兼 筮、唐六典、引古占 卜法云、內卦 爲貞、朝

分以上、二枚爲一朋、直五十、乙二寸四分以上、卜用之、外卦爲悔、夕卜用之、是筮亦謂之卜、著一

二枚爲一朋、直三中、小貝寸二分以上、二枚爲一朋肥後文獻叢書第二卷

三六二

根百莖、上有雲氣、下有神龜、是亦和氣所生、與鱗

直十、不盈寸二分、漏度不得爲朋、率枚直錢三、是 鳳及朱草屈軼同類、自非聖人在上、則豈能得之乎哉、

爲貝貨五品、龜不盈五寸、貝不盈六分、皆不得爲寶 以蒿易之、亦三代之制也、何如者、聖人不常有、著

貨、元龜爲蔡、非四民所得居有者、入太卜受直、金一不常生、卜筮不可不日用、故擇其近似者代之、亦聖

銀錢布、皆以貨稱之、龜獨以寶稱之、漢去古未遠、 人之意也、先天諸圖、相傳隱道家、盖大卜傳守、寶

加以王莽好古、復三代之禮、制度鑿々堪據、俘龜之|秘甚謹、及周衰、禮樂散亂、官失其守、術士挾卜筮、

本爲民用、其事至梅淺、匹夫匹孀可辨其吉凶、其唯 人聲所不協、質諸鳳凰之聲、何如者、純氣者爲近天

匹夫匹婦所通用、聖人之所不能盡者、寓乎其中、豈 聖人之相、龍鳳之姿、亦貴其靈異也、故象雖不及聖

二之乎哉、古有房中之書、今無之、世儒豈以爲房中 人之知、聖人之所不知、則龜能知之、是所以爲靈也、

無書、不可復考乎、男女之道、愚夫愚婦與焉,不待夫麟鳳和氣所生、世所不見、龍雖常在、能幽能章、能

讀房中之書、故所待乎讀書者、古今治亂之迹、制度|大幾小、變化不測、可謂靈已、至於龜者、不若麟鳳

沿革之統、聖人之遺言與博物爾、如射御、如卜筮、 之希覯,不若龍之變化無常、廼不過介然一蟲而已、

如律呂、以形與目與耳學之、求之紙上之文則差矣 如此靈不足稱、然聖人列之四靈、以其知也、不灼則

卜筮有書、則非古審、雄玄光虛、以辭爲主、豈能 其知不見、故龜卜之法行、而龜之靈往顯、以爲不仁

法先王乎哉、唯唐李謂、龜卜之法當廢、蓋聖人以一於龜、亦不異乎、如曳尾於泥中、以利言之者也、志

麟鳳龜龍、爲四靈、而獨於龜列之赏之、何其惨也、「士仁人、殺身成仁、靈龜見灼、以成其知、亦類耳、

摘巢毀卵、則鳳不留、刳胎刜孕、則麟不逝、聖王禁 何必以苟生爲樂乎哉、況灼龜之事、順五行之性、本

之、何其仁于麟鳳、而不仁于龜也、書曰魚鱉鳥獸 天地之心、先王之精意存矣、龜介蟲之長也、介蟲之

若、龜卜之法盛行、則自天子以至于庶人、皆用之、 長者、金精之聚也、先王灼卜、火克金之義也、龜見

一歳殺龜、何啻數百萬、是雖亦咸若、而龜獨不咸若 灼而墨兆、墨兆者水氣也、金生水之義也、如宗廟之

邪、雖然先王龜卜之法,必決大疑、定大事、質鬼神 祭割牛羊、亦類耳、牛羊毛蟲之大者、毛蟲之大、木

之道至重、龜性有知而靈、故假靈物以通神、物不靈 精之聚也、先王割牲、金克木之義也、牛羊見割而血

則不足以通神、如觀兎畫卦、殺雞卜戰、雖理則一 淋漓、淋漓者、火色也、木生火之義也、伏羲木德、

君子不用、以其物之不靈也、人固貴於龜、固靈於龜、所畏金氣也、故灼龜始乎羲、亦以五行之數推之、

而人之所不能知者、假龜以問、何如者偏氣者易通神|如黃帝土德、所畏者木氣也、故鑄首山之銅爲鼎、鍊

故也、律呂衆鳳凰之聲、人固貴於鳳、固靈於鳳、而 昆吾之鐵以爲刀、鑑、始乎黃帝、、始乎黃帝、弓

小事以筮、凡古聖人之制、必先分其大小、如大事書」卜筮之書不焚. 雖秦猶然、迺以易爲筮書、謂卜當別

策'小串簡牘、大事從長、小事特達之類、可以見已、| 有書、與禮樂當有經、小學當有書、適同其陋、故卜

古稱筮短龜長、長短猶大小之義也、如文王重卦、亦筮省易、但卜無辭而筮有辭,如詩六篇無辭、是笙譜、

妄說、八卦爲小成、六十四卦爲大成、非出於兩人、 古人口傳、非辭闕矣、後人有補亡者、其陋可醜已先

然古時淳朴、只稱八卦、貴簡也、猶十二律謂之六律、 王之敢、禮樂卜筮射御之類,皆以人傳之、後儒迺求

六十甲子、謂之六甲、古言爲然、太史公而下、儒者「以書盡之、夫天下之事、固多載籍不錄者、風俗人情技

多泥八卦之文、重卦之說興矣,可謂謬已、古人甚重」藝言語、豈能一一載乎哉、縱載錄亦豈能真盡其實乎

卜、而夫子贊易、極著蓍卦之德、蓍重而龜書不傳、 哉、是天下活物、而載籍器也、器之不能盡活物、觀

是亦妄說、夫子贊易、必以卜筮、兼言之、未嘗著蓍 渾儀之測天、可知已、然則載籍所錄、亦多天下無之

而抑龜、龜書列乎藝文志、非滅于孔子時、大抵卜筮者、戴籍有聖人、而天下無之、載籍有鳳凰麒麟、河

之道、古無文字、惟有其象、曰雨、日簿、曰蒙、曰| 圖洛書器車、而天下無之、文人學士所以朝夕操翰著

驛、曰克、卜兆之變、不過五、曰貞、曰悔、占卦之一之篇、儒者先生所以日夜聚徒而告之 其實皆天下所

法、不過二、太古以來、互相傳授、以目不以口舌、 無也、惟人與禮樂、天下常有之、求載籍中所有之人

而敢之曰、是雨也、是墨也、是蒙驛克也、是貞與悔與禮樂、則皆莫有、惟禽獸草木、天下所有、與載籍

也、目擊親見、識其吉凶、故周以前無卜筮之書、至「所錄、未嘗有異、是已、堂释之書所載、有太古以來、

文王始繫象辭、周公始鑿象辭、亦唯魯國傳守、藏于天下所 無者、以是視力、則載 籍富、而天下 狹焉

大廟、左傳所載、占卦多無辭者、可以見已、至卜法、故天下自天下、禮樂自禮樂、詩白詩、書自書、卜筮

則無懈可繫、如大橫庚々、亦出古卜官所傳家言、非自卜筮、後儒告書生、以書爲準、求以書盡天下、卜

聖人之制、要之蓍龜卜筮、孔子兼言之、經文亦有十「無書則謂卜不傳、不可復考、夫灼龜視兆、德性深厚

朋之龜、舍爾靈龜之語、易以道卜筮、是亦古言易以「者、必能辨之、可定某爲雨某爲霽、何必聖人、卜筮

言

卜不習吉、豈始乎禹乎哉、軒轅氏之卜兆、先乎文 知已、後儒援洪範之文、天乃錫禹洪範九疇、以爲神

明之祥瑞、河圖之數、自一至十、洛書之數、自一至 龜錫禹之證、夫洪範者天下之大法也、九疇猶治天下

九、天下之奇、至九而極矣,天下之偶、至十而極矣、 國家有九經、天錫猶天錫王勇智、豈龜之謂乎哉、故

十與九則天地之大成也、河圖之位、北方一六爲水、

武王專以倫爲問、箕子專以倫爲對、即位之初、

南方二七爲火、東方三八爲木、西方四九爲金、中央 請問大禹治天下之道、箕子以禹乃删興為言、銅興

五十爲土、左旋相生以法五德之運、洛書乃右轉相克、 王者也、如大戴禮所記、武王問黃帝顓頊之道於太公、

以法昭穆之序、河圖將來告帝期、河圖持龜、告帝謀、 亦類耳、蓋即位之初、博訪先王之道、以爲師法、至

河圖將來告帝書、河圖將來告帝圖、河圖將浮龍銜玉、 卜筮之事、則九疇之目、有七稽疑擇建立卜筮人、乃

雖緯書之言疑信相半乎、亦必古之遺也、持龜銜玉、

命卜筮 云云者、以是 視之、卜筮之 道雖 大、於洪範

是以爲圖書並出,古書往々雜稱河洛、以爲王者之瑞、爲九分之一、今直以洪範為卜、是洪範雕大、於卜筮

近乎並出於伏羲時、孔安國迺謂、河圖予羲、洛書錫|爲二分之一、豈不顛倒至是乎哉、甚者以�、卜始乎

禹、易範之源判然、錫禹之說、可謂妄已、何如則洛 禹、是妄之大者也、舜將遜位,讓於禹,禹曰、枚下

書者、王者之祥瑞也、禹雖賢聖、治水之時、爲堯之一功臣、惟吉之從、帝曰、禹、官占惟先蔽志、昆命于

臣、非王者也、夫非王者、而天授之、以王者之瑞、 元龜、朕志先定、詢謀僉同、鬼神其依、龜筮協、

河圖

聖人則之、豈禹乎哉、雖禹後來受舜之禪、方其治水

水斯立著

太平策巻之十一

也、猶為人臣、周之將興、鸑鷟鳴于岐山、洛書豈

夏將興之兆耶、雖然岐山周之邑也、洛豈禹之邑乎哉、

禹貢之書、不載神龜出洛之文、不出於治水之時、可

河圖洛書者、天地之寶、陰陽之精、王者之符命、是可怪焉.然則非錫禹而錫堯、易大体曰、河出圖、

洛出書、聖人則之、古之所謂聖人、必王者也、乃堯舜、

卜非始乎堯舜矣、卜筮之道、皆出乎羲皇、大事以下

知聖人何如而已、雖然唯聖識聖、古人所傳、苟

不聖人豈能知聖人乎哉、是大不然、唯聖識聖、並世

而言之、如程孔傾蓋之類、非自後世知古聖人之謂也

春秋之成、夫子得百二十國寶書而修之、春秋之錄、

桓字當作哀字

三代之治、則舍春秋何以乎哉、春秋一萬八千、可謂富

矣、王之一字、是其眼日、大經大法皆賴以立矣、君臣

父子夫婦長幼朋友皆王也、禮樂刑政紀綱法度、亦皆王

也、王者之道如何、曰不敢以天下為私、

萬世之臣也、方今横目含齒之倫、盡被聖人之教、無

皆古帝王也、非王者則不稱聖人、古書之稱以尺二寸之簡、每簡三十字、始乎隱終乎桓、爲公

聖人者、必王者也、聖人不王、始乎孔子、雖迺不王、 十二、其所法象何美焉、聖人之敢、不過詩書禮樂、

詩書禮樂折衷於夫子、筆削春秋、以明王法、是其爲|詩書禮即四時也、四時爲天之四選、春秋之名兼四時, 素王也、故不王祀、則不能答其爲聖人也、素王之說加之春秋敢以禮樂、禮樂之敢、中和爲極、春秋之權

可謂的已、中庸有之、曰仲尼祖述堯舜、憲章文武、度、莫不中和、是禮樂之極也、其唯以中和爲準、故

上律天時、下水土、又曰、聲名洋溢乎中國、施及|君子之道、本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不繆、建

蠻貊、舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、 諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不

月所照、霜露所隊、凡有血氣者、莫不尊親、故曰惑、四代禮樂至周大備、得文質之中、寬猛之宜、聖

配天、是皆素王之證也、王充以爲、孔子素王之業、在「人曰我欲載之空言、不如見之於行事之深切著明也、

於春秋、桓君山素丞相之跡、存於新論、素丞相有之、中和之道、聖人見之行事、事實而道虛、以實載虛

況素臣乎、夫臣而臣者、一世之臣也、不臣而臣者、 誰測其奧、故處大事、決大疑、當大任、解大患、非

一通春秋則不可、王者無意於三代之治則已、若有意於

大抵聖人一人出藩籬之外者、迺謂之仲尼之素臣、亦可而耳、

何啻一丘明而已哉、然自丘明而言之、則丘明素臣、

豈知其它、人々然、素王素臣之說、深知聖人者、

必能信之、不知聖人、則不王祀亦可、不素臣亦可、

只在三五七

過不相掩、故所好未必無不善也、所惡未必無善也、 八卦六律春秋皆聖人之器也一制器未有先天者也、用

達人大觀、豈得有適莫乎哉、平重盛有申生之行、無糖器必先天、卜筮血吉凶應、簫韶烟而鳳凰水、春秋成而

申生之智、楠正成有孔明之謀、無孔明之學、俗儒妄 亂臣賊子懼、是先天者也、先天而天不違、後天而 举

以比類、可謂昧於知人矣、故曰、爲人君父、不知春「天時、聖人之道、豈易言乎哉、仲尼素王、丘明素臣、

秋之義者、必蒙首惡之名、為人臣子、不知春秋之義-其說舊矣、後儒不取用、余嘗稽之典籍.素王之名、

者、必陷纂弒之罪、豈非學者之急乎、王安石黜春秋不始於孔子、伊尹見湯、言素王及九主之事、素王蓋

而不用、蒼生殆無噍類、淸板無春秋、夷狄禽獸於中「上古之帝王也、世淳俗素、故謂之素王、孔子之爲素

國、以是視之、三綱五常、維持統粑、不至廢壞散亡|王、其義迥異、無諸侯之祿、而有諸侯之富、謂之素

者、獨春秋之力爲大、春秋之止獲麟、以待後世聖人「封、無帝王之位,而有帝王之德、謂之素王、夫王而

於無窮、豊乎哉、麟者聖人之瑞也、王者之詳也 王者、一世之王也、不王而王者、萬世之王也、故萬

聖人必爲天子、古聖人時、麟鳳龜龍悉臻、迺聖人不一世王祀夫子者、夫子之所固有也、雖文宣之諱可笑、

王、始乎孔子、麟出魯國者、孔子之瑞也、其爲鉏商其王祀之者固當、周子曰、道德高厚、彰化無窮、實

所獲者、不王之應也、孔子咸麟而作春秋、文終於所與天地參、而與四時同、其唯孔子乎、又曰、宜哉、

感、文中子曰、春秋以天道辂乎、故止于獲麟、元經| 萬世王祀夫子、報德報功之無盡焉、歷代定制、王祀

以人事終乎、故止于陳亡、可謂明已、文成致麟、古「夫子、可謂盛典已、至明改議、以爲尊夫子者以其德、

無是說、始乎緯書、緯書之言、率皆荒唐不經、欲神不以其位、雖加以衮冕之服、夫子之德增其隆、雖以

聖人也、殊不知神非聖 人之所 好也、傍儒以 爲河出 魯大夫之禮、夫子之德不損其隆、且子路使門人爲臣、

圖、洛出書、而八卦畫、箫韶作、春秋成、而瓜麟至、 仲尼以欺天責之況王位加夫子、夫子有靈則不必安

車應雖異、其理一也、是大不可、圖書出而八卦興、 矣、不如師尊其德、不以名位、逐黜王號、夫子為

鳳凰鳴而六律製、麟麒出而春秋作、是後天者也、夫「至聖先師、更張前代之失、是雖如得禮`由不知聖人、

春秋屬商、子夏雖不能賛辭、受春秋之羲、以傳于後 都之爲字、非邦畿則不可用、南都者、先王舊迹、

世、公穀皆出乎其門、但口相傳授.不著乎竹帛,故 在千里之内、猶是可耳、至東都者、大荒之濱、載籍

能免秦火之厄、至漢時、胡母生董仲舒輩、始載以竹 寥々、不開有黃屋紫蓋之人、都之義何在哉、若夫通

帛、公穀左氏互有異同、要之公羊經最正、何者公羊 邑大都、稱之都會、則有之、是國都已、單以都稱之、

五世齊人、其辭雅馴、口吻所傳、庶幾乎不謬聖人也、| 東西相抗、是何不祥之甚、今神京、桓武定鼎、列聖

如邾婁字、詩書論語之外、文章之妙、莫過於檀弓、檀 胥宇、百世儼然、而服土之中、以西目之、是東人之

弓、曰邾復之以矢、蓋自戰於升陘始也、又曰、邾 辭也、無乃齊東野語之比乎、春秋大一統之義、天無

婁考公之喪、徐君使容居來予、迺邾婁比邾、文章爲「二日、地無二王、豈有東西都乎、故吳楚僣王、仲尼

雅馴、當時稱郝婁爲郝、策之文因其舊名、非婁不與、都之一字、雖微文乎、大義所係、雖文人粧飾、

則不可、猶今攝津稱津、紀伊稱紀、陸奧稱奧載筆所 豈得取弓矢斧鉞之府、陪之北辰紫微之列、且仲連不

錄、必具二字、乃爲雅馴、不知者謂、交簡字少者近 帝秦、何代無之、男兒寧塡溝壑耳、膝不可屈、有以

古、夫梟脛雖短、續之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲、 洛陽長安稱京者、夫我王凡百制度、多擬漢唐、故都

文章之道、有長、有短、有方、有圓、各順其雅、何 號亦與漢唐相比類、然洛陽者嵩高之下、土地之中、

必簡、故郝婁曰之郝、雖簡、不如郝婁之雅馴、泥檀 其比固宜、長安者西周豐鎬之地、以我輿圖比之、

弓之書、實與春秋相關、檀弓有之、仲遂卒于垂、壬 猶太宰府耳、迺與洛雜稱、可謂妄巳、稱呼不正、則

午猶繹、萬入去籥、仲尼曰、非禮也、卿卒不繹、可 名實紛亂、雖有知者、不能推究、如厩5菅相、舉世

以見已、郝婁雖微文乎、是以知公羊之正哉、近年文 聖之、固不當、二人有靈、應汗顏忸怩之不暇、然諸

墨之徒、稱京爲西都、稱江戸爲東都、是傚二京三都「儒之辨之者、亦或出乎矯揉、不免譏議、虧損其實、吾

之號,欲其措辭之典耳、始非有深意也、然文章之道、 曾謂既戸有周公之才、無周公之德、菅相有屈原之介、

貴不苟、1 字若苟、則不足以傳後世豈可細而略之哉、「無屈原之忠、要之二人、皆吾所賢也、春秋之法、功

假辭於有德、丘明之意也、春秋之經至簡、左氏「有義、不錄亦有義、史者直書其事、春秋之法、所見

之書、或先經明張本、或後經絡事、迺無左氏、則經「異辭、所聞異端、所傳聞異辭、隱而晦之、有義存焉.

有不可通者、其它如不書非公命也之類、是聖人筆削|探而誅之、有義存焉、片言隻字、皆所以正三綱、明

之迹、待左氏而後見、春秋必與左氏相須而行者也、 五倫、扶植王法也、迺子游千夏以文學名科、不能賛一

豨儀禮與禮記相須而行、夫經者聖人之所作也、傳者辭、非精義入神者、孰能與於斯乎、子曰、易屬瞿、

少、自治天下而言之、則禮之力多、樂之功少、孝經 賢人之所述也、注者儒者之所撰也、注之又注、後儒

日、移風易俗、莫善於樂、是化天下之道也、若夫答 之陋也、春秋經爲目錄、左氏爲春秋.是乃足耳、史

顏淵之問、言治天下之道也、故夏之時、殷之輅、周 者左氏之職也、非孔子之所事、子曰、質勝文則野、

之冕、皆禮之大統、酚三代之宜、執其中者也、樂則 文勝質則史、文質彬々、然後君子、史豈君子之道乎

韶舞、是用虞樂也、放鄭聲、遠佞人、是法外意也、 哉、故筆削魯史、出乎聖人之心、自出機杼、不拘史

夏之時、建寅爲正、爲人統、殷之輅質、周之冕文、 策之舊文、不必守史官之法、後世以史視春秋、以為

皆聖人之所制、孔子集大成、立之中制、所謂祖述堯「聖人之經、能盡魯事、魯大國也、大國必多事、而經

舜、憲章文武、上則天時、下因水土者、而春秋用之、 或有只書首月而無事者、若夫有事而錄、一年之事、

春秋以中爲準、抑揚褒貶、擒縱予奪、皆所以裁過不一或二三、或四五、多不過十、魯之事豈止於此哉、大

及而歸於中也、一字之褒、榮於華袞、一字之貶、威 事則書之策、小事則簡牘、史官傳守、載錄不遺、雖史

於斧鉞、撥亂世反之正、可以見已、盖史官以直爲職、 筆有工拙乎、記事之道、未嘗廢也、戰國時、秦趙淨

不避忌諱、不亂罪戾、直書其事、無所褒貶、君子一 池之會、各命菁其事、又淳于髡謂齊王曰、御史在前、

讀、褒貶自見、是史之體也、未修以前、魯之春秋、 以是視之、則史官至戰國而不廢,況孔子之時乎、

亦唯直書事實,無褒貶之文、左丘明躬覿未修春秋、 秋雖其事則齊桓晋文,其文則史、其義之所取、初與

故詳於事、如禮也非禮也之類、以寓褒貶、稱君子曰史異、史者巨細必錄、春秋雖大事、或錄或不錄、錄

人殆、是治天下之道也、顏淵之問爲邦、聖人之告以

治天下、何如國天下一道也、爲魯而作、以周室、

豈不一道乎、自化天下而言之、則樂之力多、禮之功

桓弑隱而自立、王法之所必誅也′王法不誅、桓成爲

君、途致三桓之禍、首惡在桓、故春秋桓不書王、明

無王法、隱不書即位、所以病桓也、始乎隱、以病桓

服周之冕、樂則韶舞、放鄭聲.遠佞人、鄭聲淫、

三五四

然以貴賢託始、則伯禽之賢、過於隱公遠矣、雖始乎 公、病桓以病三桓、是聖人之心也、魯公雖桓之子孫、

伯禽可也、推而上之、周公之聖、過於伯禽遠矣、雖繼世爲君、則周公伯禽之統也、非桓之有、桓之有、

始乎周公可也、酒不始乎周公伯禽、始乎隱公、非以|止於三桓、知我者公室,罪我者三桓、是公私義利之

其賢也、況隱有讓國之心、而不果其行、罹纂弑之禍、 所由分也、事止魯之君臣、而天下大義;一以貫之、

何足以爲讓哉、故始隱者、別有義存矣.陳成子弑簡|尊王室、即尊公室之義也、黜五霸、即抑三桓之義也.

公、孔子沐浴而朝、告於哀公曰、陳恒弑其君、請討 是以雖一國之私史、一經筆削、爲天下王法之大典、

之、公曰、告夫三子、孔子曰、以吾從大夫之後、不孟子以爲、春秋天子之事、是也、故原筆削之微意、

敢不告也、君曰、告夫三子者、之三子告、不可、孔 則本爲抑三桓而作、推筆削之大法、則所以尊王室也、

子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也、孔子曰、祿之|兩者並行不相悖、後儒只知尊王之大義、以爲百王不

去公室五世矣、逮於大夫四世矣、故夫三垣乙子孫微|易之大經大法、盡在斯書、豈爲魯而作、是可謂昧於

矣、三家者以雍徹、子曰、相維辟公、天子穆々、奚|筆削之素意、志在春秋者、於此乎湮晦不傳,夫孔子

取於三家之堂、孔子所惡、莫如三桓、三桓鼎立、陵|者、魯之臣子也、周之陪臣也、魯侯爵而稱公、臣子

犯公室、公室不絕如帶、孔子墮三都、收其甲兵、以「之辭、内魯外諸國、臣子之道、故春秋爲魯而作、非

謀弱三桓、孟氏不肯墮成、圍之不克、當斯時、魯國˙爲周而作、雖然魯亦周之臣子、周者天下之共主也、

臣子之大務、莫急於弱三桓、三桓不弱、則公室不張、 尊公室與尊王室、聖人之心始無二端、爲魯即以爲周、

自然之勢也 春秋之作、所以抑三桓也、孟子以爲、 亦何擇焉、顏淵問爲邦、子曰、行夏之時、乘殷之輅、

孔子成春秋、而亂臣賊子懼是也、三桓皆出乎桓公、

伯夷一貴讓也、夫讓固美德、雖然人之行何必讓、堯

饟舜、舜讓禹、禹傳子、讓者固聖也、攸者亦聖也

傳者亦聖也、隱公輕千乘之國、固有讓德、可謂賢已、

太平策卷之十

雖然春秋固爲諸侯之史、是所以素其位而行、不願其

外、後儒不知、以爲春秋帝魯、是大不可、春秋之法、

正名爲大、君臣之義、父子之親、以至禮樂制度之統、

也、下至馬遷之書、自謂繼春秋、世家首太伯、列傳

者白恐衍

古者聖人之作春秋也、筆財筆、削則削、九月而書成、 遷、王綱解紐、孔子作春秋、以寓王法 是又妄夫、

游夏不能贊一辭、立法之精.措之密、不可窺測、孔|春秋始隱、不始平王、隱之元年者平王之四十九年也、

子曰、吾志在春秋、又曰、知我者其惟春秋乎、罪我 以平王東遷,則何必待在位半百之後、託始乎哉、後

者其唯春秋乎、夫以生民未有之聖、其志特在春秋 儒自病其說之塞、又從而爲之辭、以爲平王四十九年

所以知聖罪聖者、亦在春秋、是豈可以淺心得乎哉、 秋七月賜惠公仲子之賬、夫以天王之尊、下諸侯之

夫詩書禮樂之敢出乎先王、天下所通行、春秋不過一 妾、於是三綱淪、九法斁、人望絕矣、於此乎託始、

魯國之史而耳、是何小焉、盖三代禮樂、至周大備、 是亦可謂妄已、歸罪之事、在七月、經之託始、在正

周之禮樂、皆出乎周公之制作矣、魯者周公之國也、 月、若以歸爲託始之義、則春秋始乎隱元年秋七月、

春秋者周公之遺法也、子日、甚矣吾衰也、久矣吾不「亦可耳、哀十四年以春而終、不必以冬、隱元年以

復夢見周公、酒孔千所慕、專在周公、何如者魯者父「秋而始、不必以春、迺歸照以前、有儀父之盟、有鄭

母之國也、周公魯之太廟也、天下禮樂之宗也、是以「伯克段、是皆不與託始之義、到秋七月、始見託始之

魯史策書、雖非天下之大典、與晋乗楚档杌爲儔、以「義、其說左支右吾、不足取已、始隱之義,或以爲貴讓

周公制作之大視之、殆與天下相關、非外諸侯之類、

王東

素王

凡係名分者、雖尺寸毫釐、聖人謹焉.魯侯爵、爲諸

水斯立著

太平策卷之十

侯之國、是周之禮也、然今黜周帝魯、紀網不立、名

分失所、何暇執二百四十二年、南面之權黜陟天下而

不谬哉、故帝魯之說、可謂妄已、後儒又以爲平此爲木德、皇朝繼天一姓、是其爲木德也、色尚紫、

雖如傚唐制、合母子之色、數尙三八、御名襲仁、木

德之證也、所恐庚金耳,苟能尙文學、明明德、丙以

御庚、則太祖天壞之訓信、

是之由、若有賈生之賢、豈默所知、夫繼天而王者、

星也、白虎七宿、西方之星也、玄武七宿、北方之星」之又玄有深焉者、孔門之宗仁也、仁者仁之仁也、義

也、雖天常運轉、方位不定乎、先王以五行定之、分-者仁之義也、禮者仁之禮也 智者仁之智也、信者仁

野之制、聖人之大知存焉、如相生相克、古聖人所定、 之信也、五常皆仁、五行皆木、四時皆春、五聲宮、

可謂通天地之性情、今三軍持木杖、匹夫特利刀、伸 漢儒以爲木神爲仁、金砷爲義、火神爲禮、水神爲智, 力角氣、匹夫必死、金性勝木、而木勝金負者、木多|土神爲信、是先王之遺言哉,雖然坐人不語神. 神字

而金少也、積金如山、燃一炭火、以燔爍之、金必不 不如德字之美、木德仁、金德義、火德禮、水德智、

消、非失五行之道、金多而火少也、甲乙之所恐者庚 土德信、萬善之綱盡于斯焉、苟能通五德之蘊乎、於

金耳、丙丁之所恐者壬水耳、五行相制、陰陽相勝、「天下猶庖丁之於牛焉、詩書禮樂之敢、不至深遠乎哉、

四時相推、四方相克、水生木者東北之門、萬物之所 皇朝質素、無帝王五德之說、宮花未定、禮樂二柄、職

出也、火克金者西南之門、萬物之所入也、出其門、

入其門、二門開闔、萬物生死、造化之秘鑰存矣、神

仙得之以壽身、聖人得之以壽天下、苟不達於斯、則

豈足共議先王敢法之妙乎哉、帝王五德之運、雖主一

德、猶一時之具五行也、伏羲雖木德、爰制網罟、非

無火德、神農雖火德、爰制稼穡、非無土德、雖然主

一德以爲王、猶四時之盛德、四敎之正業、一德不

立、則五德皆廢、夫五聲之有宮亦然、以宮爲宮、商角

徵羽從而以和、以商爲宮、商角徵羽從而以和、宮商

角徵羽還相爲宮、宮不立、則五聲皆廢、帝王之主一

德、立之宮而已、四時之正業、亦猶立之宮也、而玄

曠之地、寒冷殊甚、故牖戶不開、低首儿案、覽觀誦 不必拘泥、後儒之識終于比而已、是不通五行者也、

讀、是其所宜、東方朔上書曰、三冬文史足用、董遇| 春木王、夏火王、秋金王、冬水王、不可移易者天地

曰、冬者歲之餘、可以讀書、冬之所以宜於書也、於「之常也、若以不必拘泥、則春可金王、夏可水王、四

是古之敎學、皆以三月爲限、子在齊聞韶、學之三月、時錯亂、五行失序而後已、先王之敢、亦猶是乎、

不知肉味、子日、學而時習之、時謂四時、又曰、四|誦、夏弦、秋禮、冬書、先王法天立制、不可移易、

時行焉.百物生焉、天何言哉、是其明效大驗、指不 雖然、禮樂不可斯須離身也、詩書亦爾、君子日修業、

暇屈、迺詩書禮樂、以序肄習、如環無端、經之緯之、 必於斯四者、是以有正業居學之名、樂之於春爲正業、

參之伍之、十五至三十九、中間二十有五年、四教之 詩書禮爲居學、詩之於夏爲正業、禮樂書爲居學、

學、各二十五、以合百數、百成數也、故四十成德、 之於秋爲正業、詩樂書爲居學、書之於冬爲正業、詩

優而仕、以成人才也、然四敢之業、以五行相生相敘、 禮樂爲居學、正業常處其一、居學常處其三、正業者

樂水也、業於春、春木德、水生木之義也、詩木也、 學之於師、居學者習之朋友、古之道也、學而時習之

業於夏、夏火德、木生火之義也、禮火也、業於秋、 是之謂也、故詩書禮樂分配四時者、指正業而言之、

秋金德、火生土、土生金之義也、書金也、業於冬 通四時者、指居學而言之、其義各般、五行分配四時、

冬水德、金生水之義也、亦猶帝王五德之運矣、先王 是以天之盛德言之、盛德在木、盛德在火、可以見已、

立法之精帝、於此乎見焉、文王世子又曰、春夏學干 然木盛之春、土未嘗滅、火盛之夏、金未盡嘗盡、一時

戈、秋冬學羽篇、皆於東序、干戈者武舞也、羽箭者 具五行可知己、以方位言之、東方爲木、西方之山豈

文舞也、四時皆學舞、何必春之敢樂而已、序之爲義、 無木乎、西方爲金、東方之島豈無金乎南方火、

射也者、四時皆學射、何必秋之敎禮而已、子所雅言、 北方之國豈無火乎、北方爲水、南方之海豈無水乎、

詩書執禮、皆雅言也.何必夏之詩、冬之書乎哉、王、五行滿天下、莫所不有、然其方位定開闢之時、而不

制所謂春秋敢以禮樂、冬夏敢以詩書、亦唯大槩言之、可移易、蒼龍七宿、東方之星也、朱鳥七宿、南方之

人心緩、日出而群動作、日入而群動息、身體骨節、 也、詩必與琴瑟相須、而行者也、詩三百皆爲琴操、

性情疾病、與天相應、向背萬變、不能免東西南北、 故曰之弦、則詩之謂也、禮與書、則直曰之禮書、亦

動靜多端、不能免行往坐臥、天人之道、一以貫之、 何瞭焉、夫溫暖和煦、則鐘皷之聲大振、笙簧之調大

是以先王至日閉關、順天之道、於是爲極、廼詩書禮|和、人之血脉通貫、四體輕便、俯仰屈伸、不勞其力、

樂之敎、專因四時爲之節、王制曰、樂正崇四術、立春之所以宜於樂也、相見於離、則明而且遠、舜彈五

四瀓、順先王詩書禮樂以造士、春秋敎以禮樂、冬夏 粒之琴、以歌南風之詩、周南召南爲風之首,夏之所

敎以詩書、樂記曰天地之道、寒暑不時則疾、風雨不以宜於詩也、肅殺嚴凝之氣至、肌膚充實、筋骸檢束、

節則饑、敎者民之寒暑也、散不時則傷世、事者民之「佩玉鏘、衣裳翔々、秋之所以宜於禮也、北風栗烈、

風雨也、事不節則無功、學記曰、大學之敢也、時散 血氣凝閉、攝生者、猶冬月忌按摩、凡周旋歌舞、牽

必有正業、退息必有居學、不學操縵、不能安弦、不動四體者、皆非所宜、學校之制、要之廣屋大厦、寛

治筋、秋合三材、冬定體、工之四時也、古之攝生之「學博依不能安詩、不學雜服不能安禮、不興其藝不能

言、四氣調神、春三月謂之發陳、夏三月謂之蕃秀、 樂學、故君子之於學也故君子之於學也藏焉脩焉息

秋三月謂之容平、冬三月謂之閉藏、修養之法、皆應「焉遊焉 盖春夏者陽、詩樂者聲、鄷屬陽也、秋冬者

時氣、違之者疾、加之春秋之法、無事則書首月、以 陰、書禮者形、形屬陰也、是以春之所以爲教者樂也、

具四時、易之禰四德、曰乾元亨利貞、以此數者、併 夏之所以爲敢者詩也、秋之所以爲散者禮也、冬之所

而視之、可見古聖人甚重四時、凡百制度、亦皆以四 以爲敢者書也、所謂四時之正業是也、文王世子曰、

時爲節也、而是豈聖人牽合附會、欲與天時相比乎哉、 春誦、夏弦、太師詔之、瞽宗秋學禮、執禮者詔之、

人之於天、猶魚之於水也、魚之前後左右皆水也、其「冬讀書典、書者詔之、禮在瞽宗、書在上痒、是其證

腹中亦水也、人之前後左右皆天也、其心亦天也、故|也、誦者樂歌也、先王之於樂貴歌、以人聲爲主、八

天霽而人心舒、天陰而人心慘、天寒而人心急、天暖音次之、故曰之誦、則樂之謂也、弦與粒同、謂琴瑟

無所配、只其無所配.是以無所不配、一四之合爲五、 三代之遺也 _ 春祠、夏貼、秋嘗、冬蒸者、祭之有四

二三之合、亦爲五、五未離一二三四也、春木德、夏|時也、春狩、夏蒐、秋獮、冬閲者、獵之有四時也、

火德、秋金德、冬水德、播五行於四時、土特無所配、 夫火者民生常用之物、而有四時改火之制、春取楡柳

寄旺四時、亦類耳、雖然帝王之德、五行相叙、不有之火、夏取棗杏之火、夏季取桑柘之火、秋取相檜之

寄旺、詩書禮樂之行也、土德寄王、何以不同、聖人一火、冬取槐檀之火、改火之制、先王重之、何如者五

之道、易爲大、詩書禮樂皆自易出、卜筮之事、大卜|行水最多、土次之、金次之、木次之、火最少、不啻

掌之、象象之辭、瞽史記之、易道即性命道德、詩書|多少之殊、水土金木、天地自然之物、而開闢以來、

禮樂之源也、是可以配土德也、凡先王之制事、必法|已有之、上古鴻荒之世、未有火化、是無火也、後世

四時、如春服青、夏服亦、秋服白、冬服玄、夏季服 寒食禁火、存上古之遺法、俗以爲起於介推者、妄也、

黄、飮食之節、器皿之度、律呂之聲、堂室之設、凡 天地之間、火氣未發、有燧人氏者出、仰觀天象、日

百制度皆隨四時、如呂氏春秋小戴禮所記月分、可以 月星辰、皆含火光、俯察地理、草木金石、皆藏火精

見已、苟政会上不合天時、則災異乃來、帝嚳以前尙 於是鑽木擊石、以求火、火始生矣、乃別五木、而四

唉、堯命羲仲殷春、羲叔正夏、和仲殷秋、和叔正冬、 時改火、貴火也、夫金木可制以爲器、水土可以器貯, 舜詢于四岳、闢四門、明四目、達四聰、至周制度大 至火則不可制以爲器、不可以器貯、火尊而不親、不

備、乃置六官、天地春夏秋冬、春官掌禮樂、夏官掌 其然乎、水流不息、江海百谷、土積不崩、山陵高阜、

兵、秋官掌刑、冬官掌工、唐虞之制、禮樂分爲二官、 木生于山、金生于水、雖聖人不作、固自若也、至火

周制、禮樂合爲一官、唐虞之制、兵刑合爲一官、周則待聖人而生、待薪而傳、聖人不作則無火、無薪則

制、兵刑分爲二官、分合雖異、其義適同、統之以四-火滅、五行之靈火爲甚、先王重之、改火之禮、守燧

漢時猶春行寬大之命、夏布封賞之恩、至烋冬理人之遺法、豈不深乎、下至農工、又皆因四時爲業、

趙堯擧春、李舜4夏、兒蕩 秋、貢禹梟冬、亦 | 春耕.夏耘、秋穰、冬藏、農之四時也、春液角、夏

出于古聖人之制、故法五行之道也、詩者木之道也、 坎陷也、和順陷琴瑟、喜陷舞踏、玉藻有之、升車則

書者金之道也、禮者火之道也、樂者水之道也、藝文 有光、非火而何、樂記有之、樂行而倫淸、又日、樂觀

志曰、樂仁、詩義、禮禮、書智、春秋信、白虎通曰、 其深、非水而何、總而言之、詩有邪正、近乎曲直、

樂仁、書義、禮禮、易智、詩信、是兩說雖異、皆以 書體多變、近乎從革、禮易潛竊、近乎炎上、樂易淦

五常爲言、且以爲猶五行之更用事也、是必有所傳、 蕩、近乎潤下、是其較著者也、觸類而長、細推物理、

但漢儒泥五經之說、所配 或 常 或 不、未免附會、夫|毫分縷折莫不吻合、故詩書禮樂爲木金火水、而土特

三四八

紀、是土德之證也、漢之大儒莫過賈誼、有伊傅周召|禮禮無異名者、內外之符、迺仁義禮智配詩書禮樂、非

之才、知漢土德、是其高識、雖然誼之意、以爲秦水有布置也、詩者人心生生之妙、融々洩々不可已、活

德、漢代秦而王、推五德之運、漢應土德、土克水之|發圓轉不可窮、又有從容溫柔之意、仁之敢也、書者

義也、可謂明於知漢、而昧於知秦矣、尙黃亦妄作已、|人心精明之發、昭々歷々不可差、細密方正不可混、

後來竟致黃巾之禍也、以吾視之、秦當尙青、漢當尙 又有辨白裁製之意、義之敢也、禮者人心中正之禮、

白、是推以三代之禮、秦應火德、色尙青、青者木之「井々堂々不可紊、詳誦委曲不可略、又有收斂修飾之

色也、木者火之母也、漢應土德、色尙白、白者金之「意、禮之敢也、樂者人心和樂之用、蕩々平々不可倚、

色也、金者土之子也、若母子相易、秦當尙黃、漢當 流動通貫不可塞、又有深潛融徹之意、智之敢也、以

倘赤、漢無尙黃之義而耳、迺高祖爲赤帝之子、赤帝「五行言之、詩所以觀民風也、上以風化下、下以風刺

火也、火之子者土、高祖土德之證也、直以爲赤帝應上、風爲木、書法奎星圜曲而作、星爲金、文章千載

火德、可謂謬已、孔子論列五帝德、以下至鄒衍推五「不朽、禮有赫著宣明之象、樂有浸灌滋潤義、禮勝則

德之運、以為帝王之德、爲一代制度之統、天下大事、 離、樂勝則流′樂動於外、有坎離之象、皷鐘於宮、

莫過之者、以五行名家者、亦知帝德之重故也、後世|聲聞于外、水明之象、陳俎豆於堂上、堂下不視、簾

諸儒、率昧於帝德、莫之察也、亦何略焉、詩書禮樂外不見、水暗之象、離麗也、叩德麗黍稷、恭敬麗弊、

太平策卷之九

春夏秋冬、謂之四時、水火木金土、謂之五行、四時「色乎哉、夏向忠、商尙質、周尙文、以是推所尙之色、

五行、相爲經緯、天地之道、如此而已、聖人先天而玄者忠之色也、白者質之色也、赤者文之色也、故所

天不違、後天而奉天時、莫不由四時五行、以爲之制|尙之色、別有義存、不必火德尙赤、水德尙玄、秦人

也、三皇之世、莫有文字、唯由五行、帝王之興、皆|以爲水德、色尙黑、名民以黔首、黔亦黑也、是可謂

以五行相敘、伏羲木德、炎帝火德、黃帝土德、少昊 妄作已、德有吉有凶、凶亦德也、道有善有不善、不

金德、顓頊水德、帝嚳木德、帝堯火德、帝舜土德、 善亦道也、秦雖不德、始皇雖無道、其爲火德也、無

夏以金德垂四百餘年、商以水德垂六百餘年、周以木|疑、詩書爲烟、咸陽焦土、火德之證也、五行皆能養

德垂八百餘年、得其道也數不能逃、秦以火德二世而一人、而失其行則皆害人、金傷人、木毆人、土壓人、

亡.漢以土德不滿五百、失其道也數不能逃、孔子曰、 水溺人、火燒人、秦之德燒人之火也、非養人之火、

堯臨民以二、舜臨民以五、二者火也、五者土也、夫 是以威烈如彼赫々、迺以其水德、以嚴火禁、棄灰於

帝王代興循環無端、猶五行相生、終而復始也、迺|路刑之、以天視之、是其爲 火 德 也、漢亦 自以爲火

禪讓得天下者猶相生也、放伐得天下者猶相克也、是德、色倘赤、是因高祖赤帝子、而所殺蛇、白帝子也、

以人言之、若以天視之、則禪讓出于自然、放伐亦出 白帝子項籍當之、高祖滅籍、而得天下、以爲火克金

于自然、未見其異也、故自伏羲以下、以相生相叙、 也、漢兵皆持赤幟、至有炎漢之稱、又推堯為祖、合

非有他義、秦人不知、以爲周尚赤、爲火德之王、滅|符於火德也、是皆妄作巳、文帝時、賈誼始議、漢土

周而王、猶水克火也、逐定爲水德、命河日德水、以|德、常改正朔易服色、色尚黃、居有間、黃龍見于成

者火色也、火者木之子也、商水德、色尚白、白者金

色也、金者水之母也、夏金德、色尚玄、玄者水色也、

水者金之子也、或以其子、或以其母、何必以其德之

四時五行

水斯立著

太平策卷之九

十月爲歲首、是不通五德之運、周木德、色尚赤、赤

先王之澤也、細民興焉、君子拔乎其中、學於大學、 樂、與心相應、豈必右軌規、左執矩、前六律、後六

非至善而何求、曰善曰誠、一道已矣,但善者藝業之所|呂、而後辨中和與不中和乎哉、伯樂學相馬、顧玩所

載、而誠者德性之所有也無所謂至善、亦必以藝業言|見、無非馬者、宋之 庖丁學解牛、三年不見生牛、

之、禮之中樂之和、是也、致中和、天地位焉、萬物 二者用精之至、移乎習也、天下之易、不習則不見其

育焉、善之至也、十行禮、十得中、十奏樂、十得和「易、天下之難、習則不見其難、習善則善、習不善則

者、所謂止於至善、三月不違於仁是也、十行禮、一 不善、所習不同、所成亦殊、是以君子謹所習也、唯

得中、十奏樂、一得和、是所謂知止、日月至焉者也、百異業、百氏異習、是其所習、非所其不習、紛紛乎

然則中和之難得、如此其甚矣、不知者謂中和無形、 其擾也、盍援先王孔子爲斷、講詩書習禮樂、孔子以

得與不得、何以知之、中與不中者、定之以目、和與「是從先王之教、學者以是從孔子之敢、豈能知其是非

不和、定之以耳、是禮樂之道也、人之耳目有聰明、有「乎哉、爭其是非者、昉以己意爲學、以己意爲學、則人

不聰明焉、能知中和與不中和乎哉、雖然定之以天下「黜之以爲非、人之所是、則吾又非之、若能不用己意、

之目、則視亦公、定之以天下之耳、則聽亦公、天下一從先生孔子之敢、則豈與人爭哉、人非之、則非先

之目者何、尺度之謂、天下之耳者何、律呂之謂也、 王孔子、是與孔子爭者也、吾則不爭、朝堂之上、冠

中和之準、備於兩者、合與不合、人人得而辨之、不一冕相望、不得不嚴、房闥之間、珠翠相屬、不得不荒、

豊明乎、況朝暮所習、心染體濡、聲爲律、身爲度、 習乎嚴則愛嚴、習乎荒則愛荒、使大君習乎禮樂中和

何中和之難知乎、若欲求中和、不由禮樂之敢、則欲之道乎、海之內海之外、大化雨濡、關之東關之西、

舉手摘星也、非狂則妄也、射之中的、不中的、雖不 王風雲興、不然則綱常禮樂、難爲二物、將至漓人憐

善射者能辨之、禮樂之中和、不中和、不學禮樂者辨 王、

之、宜矣、雖然持滿未發之時、識者己辨其中不、待

矢穿紅心、謂之中、豈必識者而能乎、君子之觀禮聽

非先王之意也、且胎敎者、婦人懷姫之時、禮當如此、 退怯、則豈制敵乎哉、先王禮樂之化、中人以上、皆

生子之賢、其應也、非其所期、堯有丹朱、舜有商均、 可以爲君子、其敢大也、若傑出之才、命世之資、纔能

而瞽瞍有舜者、胎教之說、窮矣、天地之道、或應或|爲君子也、君子之類滅已久矣、若夫千載一聖、猶旦

不、是其所以爲大也、君子之胎教也、禮存、不同生 暮也、五百年一賢、猶比膊也、聖賢之難得、與君子異

子之才何如、惟其不問、是以生子之賢、多應者矣、 焉、聖人固不待言、世言賢人君子、賢人與君子何擇、

若期以生子之賢、有待而胎敢、則不應者亦多、何必|君子之多如彼、賢人之少如此者何、是亦可知已、夫

堯舜、鄒陽曰、臣聞忠無不報、信不見疑、常以爲然、 子稱顏淵、曰賢哉回也、宰我稱夫子、日賢於堯舜、

徒虛語耳、胎教之說、若以其驗乎、亦是類也、肥豕 易稱、可久則賢人之德、可大則賢人之業、其立言、

必烹、甘泉必竭、直木必伐、才之過人、其事不祥、 與聖人相類、非君子之類、然連稱賢人君子者、君子

是老子之說也、吾不之信、槌鍾擊磬、所以發其聲也、 之謂也、明德者聖人之德、而君子明之、民者天下之

煮罾燒薰、所以揚其芬也、賢者之窮厄戮辱、此槌擊 農工商賈、而君子新之、君子之所止、至善而已矣、先

之意也、其死亡陷溺、此燒煮之類也、肥豕不烹、則|王之意、以爲善者天下之常也、人之性也.敎化唯使

不成爲八珍之味、甘泉不竭、則不成爲療竭之漿、直一之至而耳、其唯至善、所以太平也、後世不識其意、

木不伐、則不成爲棟梁之材、志士仁人殺身以成仁、「以爲天下與人、率皆不善、先王敢而善之、不孝者化

不殺身則不成爲仁、老子以爲不利其身、退爲全身之爲孝、不弟者化爲弟、是妄之 大 者 也、先王之敢、

計、不爲善首、不爲惡魁、不敢爲天下先 1 何巧焉、 譬如以高下制水、以燥濕制火、是以易化、孝者化爲

吾不取神童、斥才 過 人者 異諸、先王之化、博大悠|至孝、弟者化爲至弟、不同其不孝不弟者何如、甚則

遠、驅天下於至善、若擇神童及過人之才、而化之、 有鄉之八刑、八刑之目、所以表示糾萬民、不必有是

則治化狹焉、大道局焉、亦焉能與天地同其大、善用一事也、一人弑其父、匹夫粉其兄、王者明德之缺也、

兵者、使三軍皆勇、其術良也、若使勇士獨勇、三軍一非下之罪矣、先王之世決無之、戶戶孝順、家家仁慈、

矣、

列女傳所載、形容端正 才過人矣、亦非古言也、才之

灑掃之事、雖微關教也至重,凡古書中、載賢狀、多「可見非小子之所能與矣、後儒以禮樂係之小學者、以

擁篲趨迎者、灑掃所以尊賢敬老也、易稱、天道觑盈|爲三代兒童至穎敏乎、古今人不相遠、今之所難、古

而益謙、地道變盈而流謙、鬼神害盈而福謙、人道惡盈「亦難之、童子豈皆項槖乎哉、若使童子智如成人乎、

而好謙、迺一誰而四益、故低心下氣、學者之先務也、小學之教足而耳、大學爲贅旒矣、然易稱童蒙、左氏載

人之情、執事者其心下、尸居者 其心 高、自 然之 酰 童心、童子豈異於今乎哉、歷代所稱、童子穎敏者、

也、先王深知其然、小學之灑掃應對、書算歌舞、大」何限、目爲神童、爲翰墨家美譚、雖如可愛乎、是亦

學之詩書禮樂、皆所以下心也、心下則氣和、氣和則不祥、夫先王之智不可及己、立法之意、不可測矣、

體順、亦自然之勢也、後世或有空手高論、以心性為學「使人八歲入小學、不問其頴敏何如、三代之盛、無神

者、其心不下、常在眉睫之間、老釋陸王之屬、竟不「童矣、生數月、識字、數歳誦書、七歳賦詩、八歳屬

能窺大道者、其局量偏識、坐不由藝業也、如曲禮後、文、十歳講經、吾曾能之、神則神矣、非先王之致也、

儒以爲小子之事、吾不之信、夫禮有經禮、有曲禮、 先王之敎、嬰孩欲其嬰孩、童幼欲其童幼、成人欲其

猶樂有大曲有小曲、大小經曲相須、而後禮樂備、 成人、故有小大之學、不使躐等、嬰孩童幼屬文講經、

皆大學之道也、內則曰、二十而冠、始學禮、禮非小「學禮樂之事、及成人、唯有死耳、故童子之潁敏、非

子之所能與矣、小子之所謹、唯謹步趨、謂之幼儀少「美事矣、先生蒙以養正、童子之敎、惟在誠篤、禁其

儀、誠可耳、至於曲禮者、禮之小者也、非小子之謂「文之發、文發爲不祥,文雖不發、其質之美惡、才之

也、凡如天王即位、立太子、立皇后、改元、定謚、 高下、固瞭瞭、擇其俊秀、升之大學、亦何詳焉、如

稀郊大祫、釋尊雩祭、祈年巡狩、朝覲會同、冠婚射

御、飮酒、相見、葬禮之類、爲經禮之目、登降出入

進退拜跪之數、以至於筵席器皿、罍爵杖屨之節、盡係

之曲禮、三百三千、維其然矣、子思以爲聖人之道、

過人、豈先王之所貴乎、先王之道、貴與人共、過人者

不祥、況戶行胎教、豈生過人之子耶、劉向生乎後世、

胎敢之道廢於天下、故言能胎敢者、生子才過太平策卷之八

用、所以習威儀言語之節也、雖天子之子、執箒以事

是修身之道也、自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲

長者、挫其驕傲之心、低首屈腰、能下天下之人、是

比、動靜不以度、妄咳唾疾言、嗟氣不順、皆禁也、

經立、因以微磬、日共立、因以磬折、曰肅立、因以一本、夫子所謂九思、曾子所謂三重、以至玉藻所謂九

垂佩、日卑立、立容也、坐以經立之容、肘不差而足容、皆所以修身之目也、天子穆穆、諸侯皇皇、大夫濟

不跌、視平衡、曰經坐、微俯視尊者之膝、日共坐、一濟、士翔翔、庶人蹌蹌、皆修身之容也、修身雖一乎、

仰首視不出尋常之内,曰肅坐、廢首位肘、曰卑坐、 貴賤之容不同者、移乎習也、不移則不足謂之習矣、

坐容也、行以微磬之容、臂不搖掉、肩不下上、身似「魯君之宋、呼於垤澤之門、守者曰、此非吾君也、何

不則、從然而任、行容也、趨以微磬之容、飄然翼然、其聲之似我君也、大抵其位均、則容貌居止、聲氣性

肩狀若汤、足如射箭、趨容也、旋以微磬之容、其始|情率相類、貴人自有貴人之風、賤者自有賤者之風、

動也、穆如驚俭、其固復也、旄如涩繇、踪旋之容也、不得相學、士農工商與生俱成、不可相假借、習之於

跪以微磬之容、揄右而下、進左而起、手有抑揚、各 人、不亦深乎、故士之子歸民、非不肯則不可、農工

竹其紀、跪容也、拜以磬折之容、吉事上左、凶事上 商賈之子、入大學、非賢則不可、上於十人者、必有

右、隨前以舉、項衡以下、寧速無遲、背項之狀如屋 十人之知、上於百人者、必有百人之知、大學之士、

之玄、拜容也、拜而未起、伏容也、坐乘以經坐之容、 有上人之責、學上人之道、所執之業、止於詩書禮樂、

手撫式視五旅、欲無顧、顧不過轂、小禮動、中禮式、學而時習、優游涵泳、剛氣不怒、柔氣不懾、磨稜合

大禮下、坐車之容也、立乘以經立之容、右持綏、而左一縫、養中和之德、止於至善、亦唯習以移之也、孔子

臂詘、存劍之緯、欲無顧、顧不過轂、小禮據、中禮|日、幼成如天性、習慣如自然、記曰、習與智長、化

式、大禮下、立車之容也、介者不拜、兵車不式、不與心成、師傅之嚴、敢法之密、自幼聞見、習以為常、

顧不言、反抑式、以應武容也、兵車之容也、若夫立「蓬生麻中、不扶自直、白沙入泥、不染自黑、習之所

而跛、坐而 隔.恙體 懈志、驕傲 視、數顧容 色不染、如此其甚、如灑掃應對之敢、不給學校朝夕之

中人之性、可善可惡、皆習以移之、子曰、性相近、 五分矢、東方射東方、南方射南方、中央射中央、西

習相遠也、又曰、唯上知與下愚、不移也、上知下愚. 方射西方、北方射北方、皆三射、其四弧具、其餘各

吾未見之、天下之人率皆中人、無大優劣、其美惡邪 二分矢、懸諸國四通門之左、中央之弧、亦具、餘二

正、莫不由習也、廼衆楚之咻、雖欲勿移、不可得也、 分矢、懸諸社稷門之左、然後卜王大子名、上毋取於

先王深知其然、立教學之法、以使天下之人習乎正也、 天、下毋取於地,中毋取於名山通谷、毋悖於鄉俗、

素成胎教之道、書之玉版、藏之金櫃、置之宗廟、以 是故君子名難知而易諱也、此所以養息之道也、硒能

爲後世戒、青史氏之記曰、古者胎敢之道、王后有身 食能言、施之以教、内則所言、備矣、世多有、故不

之七月、而就蔞室、太師持銅而御戶左、太宰持斗而論、及其長也、容貌威儀之間、君子習之、古之容經

御天右、太卜持著龜而御堂下、諸官皆以其職、御於一日、志有四興、朝廷之志、淵然清以嚴、祭祀之志、

門内、此三月者、王后所求聲音、非禮樂則太師撫樂愉然思以和、軍旅之志、怫然慍然精以厲˙喪紀之志、

而稱不習、所求滋味、非正味則太宰荷斗而不敢煎調、 淺然愁然憂以慘、四志實中、四色發外、維如志、色

而日不敢以侍王太子、太子生而泣、太師吹銅日、聲

廷之 容、師々然翼々 然整以

之經也、容有四起、朝

中某律、太宰曰、滋味上某、太卜日、命曰某、然后 敬、祭祀之容、遂々然粥々然敬以婉、軍旅之容湒然肅

爲王大子懸弧之禮義、東方之弧以梧、梧者東方之草、 然固以猛、喪紀之容蚴然慑然若不還、容之經也、視

春木也、其牲以雞、雞東方之牲也、南方之弧以柳、 有四則、朝廷之視、端泓平 衡、祭祀之 視、視 如有

柳者南方之草、夏木也、其牲以狗、狗者南方之性也、 將、軍旅之視、固植虎張、喪紀之視、不泓垂綱、視之

中央之弧以桑、桑者中央之草也、其性以牛、牛者中「經也、言有四術、言敬以固、朝廷之言也,言文有序、

央之牲也、西方之弧以棘、棘者西方之草、秋木也、 祭祀之言也、屏風折聲、軍旅之言也、言若不足、喪

其性以羊、羊者西方之牲也.北方之弧以棗、棗者北|紀之言也、言之經也、固頤正視、平肩正背、臂如抱

方之草、冬木也、其性以彘、彘者北方之牲也、五胍|鼓、足間二寸、端面攝纓、端股整足、體不搖肘、日

1

習

夷狄、習夷狄則安夷狄、不能去夷狄而居中國、漢湖

太平策卷之八

水斯立著

相罵、非漢勇而胡怯、非胡仁而漢暴,其習異也、漢

人習禮儀、胡人習騎戰、不能相假借、漢天子、不

尊單于、胡俘單于、不尊天子、不能相交易、蜀人習

天下之最大而不可變者、習哉習哉、自嬰孩至老死、 乎山、不能使舟、越人習於水、不能御車、壁立萬仭、

耳目所聞見、不可勝數、慣以爲常、所不聞見、則驚 不測之險、蜀中童子能上下之、越人不信、風波霧毒

以爲異、治世百年、人習逸樂、亂世百年、人習艱難、不測之危、閩越幼兒、能往來之、蜀人不信、尚蜀人

所習者身安之、故在治平無事之日、思干戈爭亂之時、一知於山、而愚於水、越人賢於水、而不宵於山乎哉、

履腹涉血、櫛風沐雨、不可一日相聚爲生也、然天下」亦唯所習能之、所不習不能、何知其優劣、廟堂山林

一亂、郡國瓜分、盜賊蜂起、人皆以戎馬爲常、生於矢之相高、翰墨弓馬之相輕、亦猶是乎、心主先入、體

石之間、長於旌旗之下、争先甘死、習與性成、古將士 安所習、古人所稱、居移氣、養移體、於傳有之、天

武勇百倍於今、豈皆賁育乎、習使然、治平之世、文一下之事、惟習以移之、先王之世、風化所扇、民不

物蕃盛、在大亂之世思之、亦不勝其煩節矣、漢初宴 異物、自朝廷至閭巷、所見莫不揖讓、所聞莫不能歌、

會、諸將拔劍擊柱、朱虛侯以軍法行酒、可以見已、 肺腸骨髓、捲爲仁義、堯舜之時、比屋可封、成康之

然太平已久、人生於輦轂之下、長於衣裳之間、人習「際、囹圄空虛, 豈智賢人君子乎、習移之也、後世治

文華以爲常、今風俗華麗、百倍於古、豈皆孟嘗季倫、化不完、衆疾並興、人生於澳沼之中、耳目所見聞、

亦習使然、風俗儉素則國富、風俗靡華則國貧、貧富 率皆不正之事、使心志疑惑迷亂、莫所不至、故千里

亦大、能移人性、千金之子、坐不垂堂、貧人之子、 寥々、英材絕響、酒囊飯袋、項背相望、豈皆不肯、

豊然乎哉、習富則人心亦富、習貧則人心亦貧、習之|亦習移之也、豪傑之士、雖無文王猶興、是不移於習、

移人、亦何甚也、習中國則安中國、不能去中國而居/盜跖雖與堯同居”不悛其惡、是亦不移於習也、若夫

錦背面、相去不遠、古之時、竹簡漆書、甚費人力、

蝌蚪大篆、不可立成、故雜大事、熾以數字、後世紙

字、而衆義條達、後世之文多字、而一意順下、是匹

不知類之大者也、中庸曰、凡治天下國家、有九經、 萬卷、五行俱下、包羅古今、通貫華夷、夫然後驅逐諸

孟子曰、君子反經而已、古之用經字、其例如此、漢 子百家於千載之上、千載之下、收軍還旆、讀聖人之

儒專泥經傳之訓、六經九經十三經、非古也審矣、大|辭、登泰山而小天下也、豈不快乎、向所謂民間所信、

抵六經之名、興於漢、而廢於漢、漢以後、命以五經、 禍福吉凶、皆嬰兒之戲、聚沙爲飯、結草爲家、合土

有禮而無樂、禮有三禮、周官儀禮、經之可、小載禮「爲人、其象宛然、何必爭其有無、是非鬼神、變怪不

記之列于五經、又謬也、程朱氏興、先四子而後六經、 可見、不可聞者、不可測識者、任其存其沒、不必問、

六經者何、五經也、凡諸儒文人、稱六經六經、口將「不必辨、是君子之學所以大也、萬機之暇、覽觀史籍、

酸焉、皆襲漢儒之舊號、其實則五經也、黜禮記曰之「以堯舜爲師、以桀紂爲戒、一言一行、盡以前代爲鑑、

四經、亦後世事已、聖人之智、謂之經、則十三經之 一步一趨、盡以後世爲耻、常以扶植綱常、建立皇極、

列孟子、又謬也、莊子所謂十二經、果何經耶、以是「爲心、海內諸家、皆充百家之品、使各修其業、不責

視之、經術之不古、亦可知矣、伏羲之琴五絃、黃帝|其備、泛訪下問、以裨聖知、日儕之後、誦聖人之書、

之瑟五十粒、絃少者彈法繁、粒多者彈法簡、古文少以立天下之大本、是已、

曰漆彫開受尚書、是肯妄說、漢承大亂之後、篇籍不 墨之器作、行草之書盛、故雜細必錄、累數十百言、

完、人秘其學、互相傳授、聖人之道、散爲家菜、童 苟能通之、古今文雖殊、兩得其槩、經術文章、立古

而習之、白紛如也、比之孔門之學、薰陶禮樂、煥文 今之異者、皆識見未遠、襟懷未洞、未入達人大觀之

章、不規々于章句之間者、豈可同日而語哉、世之信六|域焉、其源由不熟青史故也、文字知往、卦畫知來、

經者、不信孔門而信漢儒、不信侖吾而信莊子經解、 聖人所製、文明之器、知往之學、莫過於史籍、讀書

非得一人於井中、宋丁氏無井、常一人套汲於外、及「不復見、詩無吟法、禮樂變革、不可山是、唯書載以

自穿井喜而告之、吾穿得一人、三豕渡河、子夏曰、 文字、竹帛所傳、經數千歳、未嘗湮滅矣、詩有經、

己亥耳、此類甚多、書豈易讀耶、孟子曰、盡信書不「禮有記、樂有録、經與記録、詩禮樂之書而耳、秦以

如無書也、又曰、不以文害辭、不以辭害意、是讀書 前者古也、秦始變古制、廢井田而阡陌、廢封建而爲

之良法也、禹皐陶稷契有何書可讀、楚左史倚相所讀、郡縣、廢琴瑟而爲箏、廢古文而爲隸、廢先王之禮、

亦唯三墳五典八索九丘、捨之莫爲學、至孔子黜墳典 而爲法律、而書生誦法孔子、古以詆、今於是焚典

丘索、而尚書易職方作焉,非孔子所作、述古也、然|籍百家語、坑儒士、先王之詩書禮樂皆亡、而秦亦亡、

以世家考之、孔子年六十八、乃叙書傳禮記、删詩正「漢高祖不讀書、而天下不可一日無詩書禮樂、大風之

樂、序易繋象說卦文言、皆出暮年手指、壯年時、 歌、鴻鵠之詠、出乎自然、陸賈奏新語、每篇稱善、

孔門諸弟子、有何書可讀、亦唯帝嚳以來、三千八百叔孫制禮、聲氏作樂、一變先王之敢、猶沿舊名、迨

及百二十國寶書、捨之莫爲學、故孔門之所讀、唯史一孝武除挾書律、謁者陳農求遺書、河間獻王好儒、斷

而耳、大學滩教學之大典、俞吾雖洙泗之微言、成於|篇殘簡、往令出焉、灰爐之餘、屋壁之間、探掇成書

孔門、非孔門所讀、況其下者乎、世之經術之士、自如獲至寶、於是大尙典籍、天子建學、大師專門、以

以爲從孔子之敢、殊不知孔門所讀之書、非大學俞吾 明經、詩書禮樂一新于漢、唯書有先秦者存焉.以爲

己之所學、與孔門諸子、始不相類也、孔門之敢、爲「先王之道在書、出孔子手指者、命曰經、變詩三百

詩書禮樂、而詩禮樂之敎、用於今、風化天下者也、 詩經、變尙書爲書經、易爲易經、春秋爲春秋經、然

唯書爲傳古之具、所以知往也、子曰、興於詩、立於|古詩經之目猶闕、竟以爲禮經樂經古有之、亡於秦火、

禮、成於樂、大學造士之始終,三言者盡之、子路口、於是六經之名興矣、是唯死人無口、亡國無驗、誣以

有民人焉、有社稷焉、何必讀書、然後爲學、雖辭之火于秦、孰能爭之、自是諸儒、皆承其謬、爲孔子作

所激、不得其平乎、亦復爾爾、去聖久遠、先王之敢|六經、百代由之、孔門諸子、如書生、曰曾子受孝經、

申、韓、荀、楊、呂覽、淮南、千古少比、最可珍護」有諫臣、有孝子、有貴人、有大人、有賢人、是人

寶愛之不暇、百家如兵家、陰陽家、名家、法家、五]物之可觀者也、降至仙人、方士、浮屠 巫醫、百工、

行家、律家、曆家、天文家、堪輿家、算家、占家、|技術之徒、有異行可稱者、亦一代人物之美、下之庸

醫家、巫祝家、切世用、天下之不可無者、其書亦|々飯袋耳、讀史者先大體、次制度、次人物、兼該通

皆可讀、豈得廢之耶、然諸子百家、各有家言、家言 習、則合古今而一之者、豈難乎哉、古今人不相違、

者、一家所獨、求天下之所共者、唯史而耳、故讀書 今之所有、古亦有之、謂之萬古一日、亦可耳、爲古

之道、莫先於史學、文章之器、莫雄於史才、史哉史 人不可企及、古道不可復行者、不通古之過也、君子

哉、天下之大務存焉、讀史之法、以識大體爲先、君 之所學者古也、所用者今也、苟不可用於今、則萬卷

德明暗、綱常張弛、成敗治亂之機、是大體所在、大體 雖富、無補平治之道、是以經生雖鑿々乎、其言迂遠、

已明、當究制度、禮樂器數、服色官名、律曆刑法、 不可用於當世、天下予其治經、奪其治事、迺几案以

天文地理、水利算數、漕運鹽鐵、城郭隄防、田賦兵|爲城郭、筆硯以爲甲兵、逢掖先生、高視闊步、是非

革、茶政、馬政類、歷代沿革、損益不同、不通、 當世、爲天下畸、一何小焉、是亦不通古之過也、通

則不足知其世、不知其世、則焉知其人、故制度已明、古則知今、今之天下即古之天下、豈有二乎哉、子曰、

當觀人物、創業之君、一等、守成之君、一等、中才一斯民也、三代之所以直道而行也、今日之民、不爲鬼

之君、一等、暗弱之君、一等、亡國之君、一等、古爲魅爲虎豹、有靦面目、猶唐虞焉、喜怒哀樂、愛生

今帝王不出五等、佐命之臣、一等、遭遇之臣、一等、 死、就利避害、今之人情、猶唐虞焉 田畯紅女、

備員之臣、一等、庸劣之臣、一等、姦曲之臣、一等、 相共詠歌、言其情、三代與今如合符節、古今始未有

古今宰相不出五等、五君五臣、人物之大紀也、有英雄異也、古今之所以異者、風化之盛衰、人才之多寡而

雄、有大將、有良將、有猛將、有謀士、有辯士、有「己、豈有他故乎哉、古所傳、夔一足、非一足行、夔

文人、有才士、有儒者、有隱者、有節士、有俠客、 能和樂、平天下。若要一足矣、丁氏家穿井、得一人、

.太平策卷之七

黜諸子百家、

乎、亦何病雜、經者經也、猶經持緯、衆羲之書也、諸」推聖人者、不知聖人之俘、靡與儔故也、聖人大知、

儒之說、雖繁多乎、吾猶苦其少焉、是以先史學、次之莫不貫穿萬物
、是以諸子百家之奧、聖人於易明之、

以諸子百家、經術居後、何如者多聞多見、識見不滞、 曰一致而百慮
、人情之變盡于斯焉、亦何大也、迺

心志不局、然後治經、經亦易々、是遵博約之敢也、 子百家、魚貫雁
列、其書五車、古之遺言、往々存焉、

今之經生、碌々小人、不通古今、不達文章、不習文 如在寶山、左右
探拾、西門豹急、佩韋以自緩、董安

明之器、抱不逮之資、治曠世之言、不應侮聖言乎哉、 于緩、帶以自
促、莫往而非吾師、天下常有無用之

竇太后問老子、轅固生答曰、家人言耳、以明諸子百 用、萬國來朝、
而中國益俘、萬物率伏、而人類往靈、

家之爲聖人之奴僕、王公之富、以待御僕妾之多、與 諸子百家雖無所
用、環拱森列、聖人之經大,艾而

千乘萬騎之盛、問聖人之富、則將數諸 子 百家之繁去之非人情、況
不 可艾 去耶、諸子 如老、莊、列、

依常作

完於本而裂於末、十剖百判、孰能一之、千反萬畔、 亦且徒貴虛俘、
寥★失明、爲天下畸、亦猶徹去儀衛、

孰能合之、孔子以後、經術爲諸儒割據、孰敢知其孰 單騎微行、非聖
人之意也、子夏曰、雖小道必有可觀

是孰非、而不謬乎哉、然舜之大知、隱惡而揚善,取 者焉、致遠恐泥
、是以君子不爲也、君子不爲耳、豈

短、寸有所長、孰能取一捨百、故漢之經術、長乎辭 以對、然奴僕必奉命、若不奉主命、則主鞭笞之、

事、宋之經術、長乎道義、皆聖人之遺也、諸儒之說、 不少假借、仲舒之黜百家、程朱之排老佛者、行鞭笞

左右枝梧、各有所長、吾取其長略其短、以吾視之、「之法也、不知者以爲敵而攻之、夫仁者無敵、王者無

天下無棄物、古今無棄人、何必爭其古與宋乎哉、難|外、道不隅立、敎不孤行、聖人之所以爲大也 仇視

者以爲雜、墨子哭於練絲、楊朱哭於岐路、天下之事、 百家、獨推聖人、猶盡逐奴僕、子立主人、爲主者、

其長略其短、君子之道也、豈謂之雜、況學琴瑟者、 禁人爲之耶、故雖誕如神仙、點如浮屠、佼如術、

先操雜弄、不操雜弄、則手指不熟、音調不暢、雅頌之韻」局如技藝、各有其書、其書皆可讀、吾一以奴僕視之、

不發、故醇出乎雜、約生乎博、荀卿青藍之喩、不其然」役使之、仇視以生一秦耶、故世儒三三

稱君子者、斥而譜之、是其智不及蚩々庸々之民耶、 子百家、其說不一、猶橘柚梨栗異味、而各可于口、無

不然則必有故、世之君子、專翌典籍、典籍之富、如 可廢者、諺有之曰、美色不同面.諸子百家,各有所

山如川、充棟汗牛、浩々莫知其津涯、終身不可窮觀、 長、何必同、故通諸子百家之書.然後聞見博矣、聞

難讀者十之七、易讀者十之三、故君子學厭敢倦、竟| 見已博、患不約當讀經、經至難讀、終身之業也、天

畫所之、覽觀止十之三、皆顯文露書而耳、是以其知之有日月、地之有崐崙、位之有王、德之有聖人、書

囿乎昭々瞭々之間、纔難解者、捨而不信、是其所以「之有經、其至尊也、以卑爲本、故衆星之宗日月、

區々 如 彼也、世之儼 然稱君 子者何限、其實 非君|丘垤之宗鯤崙、臣民之宗天子、諸子百家之宗聖人、

子、何者不知君子之學、夫學求爲君子、君子者人之一 諸子百家之書之宗聖人之經、出於自然、孰敢疑之、

成名也、成名之道、亦必通古知今、不通古則不能知| 故天下之言莫粹於經、天下之辭、莫美於經、天下之

仝、欲通古則捨典籍何以乎哉.經如日月、史如河漢、義、莫精於經、天下之學、寞難於經術、經術之盛、

諸子百家如衆星之粲矣、此三者人文之淵藪也、經者 漢宋爲甚、漢之經術、皆專門互相傳授、名物訓詁、

聖人之書、其尊無對、然統而言之、孔門私稱、自天曲盡精微、註疏之文、豈不富乎哉、宋之經術亦多端、

下而言之、則帝王之大典、史官所職、是史為天下之一迨程朱氏興、倡明道理、鴻沯辨烈、溢于四海、先四

公諧、尚書百篇、亦只史耳、論語孝經雖美、孔氏之子而六經、天下由之、迺古注疏之學、於是乎廢矣、

私書、春秋雖深遠、魯國之私書、皆非天下之大典、 是古今經術之變也、明儒或伺古義黜程朱、程朱之徒、

太史公撰史記以下、史筆繼興、世有述作、雖非聖人 亦黜古義、於是諸儒紛擾、互有異同、各是其所信、

之辭、其爲天下之公書也無疑矣、元經書帝正月、識 至有古學宋學之名、是皆可憂之甚、夫經者聖人之辭

者惜焉,故學者當先讀史、讀史則通天下之一體 禮也、治經者君子之業也、君子無所爭、豈有古宋之辨

樂制度之統、治亂興廢之機、盡在其中、然後局盤定一乎哉、楊子雲有言、曰衆 言浠亂 拆乎聖、苛以 聖人

矣、局盤已定、患不該博,當旁讀諸子百家之書、諸爲斷、誰敢之、聖人不自言其心、孰能知之、尺有所

苟能通象則何所疑怪、後儒謬以爲實有其形、實有其 柝之取諸豫、臼杵之取諸小過、弧矢之取諸睽、宮室

事、是以斥爲妖妄不經、爭其不然、荀子非相而下、儒者 之取諸大壯、棺槨之取諸大過、書契之取諸夫、禮樂

力排幽冥恍惚之說、盡辨其非、欲天下之事、瞭々乎目 之道、盡法象於天地、可謂象之於天下大於義矣、文

下、殊不知天地之道、莫大於象、喜怒休戚之見于面、妍 字雖以義解、亦有不可以義解者、日月山川是也、六書

醜娍惡之著于態、災祥瑞變見乎雲氣星象、吉凶禍福 之首象形、原風之自、義亦出於象焉、龜文鳥跡 奎

動于卜筮产龜、非謂北方圓之形、青黄之色、宮商之聲、 星圜曲、蝌蚪之微、文字由以興矣´奎璧明而圖書繁、

唯彷佛有其象而耳、已謂之象、則非有其實,故民間 劉向晝觀書傳.夜觀星宿、太乙下視、由是視之、日

所信雜占、天堂地獄類,皆虛造之言、亦以盡人情之「月衆星天之象也、卦畫文字、人之象也、卦畫貴象而

變、其能久而不廢者何、有其象也、夫好異喜怪、人 義存、文字貴義而象存、豈不同乎、雖然、象者顯未

情有之、耳目所聞見、慣以爲常、稱述不可聞見、不

立

成之前、義者定己成之後、天王即位、其占大吉

可測識者、以驚人也、亦人情爲爾、神仙詭異、翟曇 太子、其占大吉、賢人登庸、其占大吉、是象之不可

汗漫、累數十萬言、亦唯未免人情之所喜矣、是以信者「以辨、簡策之所載、則曰元年某月某日、天王即位、

衆焉、亦何足深辨、今夫三歲孩兒至無知、不能通文「某月某日、立子某爲太子、某月日舉某爲相、一視昭

字及義何如、至畫圖、則狗知畫狗、馬知其馬、隨見|々、是其所以異也、故卦畫文字、雖皆文明之器、要

隨解.不待求其義也、可謂象之入人速於義矣、太易「之卦畫猶屬于幽、文字專屬于明、道家者流、鍊丹火

之道、圖象爲大、先天四圖、雖無辭乎、其妙不可窮 候、及役使鬼神之術、下至符章禁劾、皆盡用卦畫、

盡矣、是唯包犧仰觀俯察、近取諸身、遠取諸物、以「以其不可讀不可解、隱々然有幽冥之象、青衣神人、

通神明之德、以類萬物之情、法象之道、於是乎祖矣、華山道士、其事頗怪、非誣矣、歐陽修以河圖洛書為

乃若網罟之取諸離、耒耨之取諸益、交易之取諸噬嗑、怪妄、拘儒有做其陋、誣先天之圖、爲仙家所作者、

衣裳之取諸乾坤、舟桃之取諸渙、牛馬之取諸隨、門」是不達之過也、夫民間所信、專在于象、而世之儼然

化民末也、蓋捨彼錦取是布、

肥後文獻叢書第二卷

太古之道、一變爲卦畫、再變爲文字、是二者文明之

器、而聖人作之、聖人不自言其心、孰能知之、唯卦

畫知、文字知性、是其尤赫著可見者也、天下後世

資以爲用、其爲敎也相衡、卦畫以象推之、文字以義

解之、以義解者、君子能之、以象推者、雖民亦然、

凡民間所信、禍福、吉凶、星氣、祿命、符瑞、災異、

夢寐、朕兆、時日、方位、拘忌、禁厭、妖變、靈怪、

因果、報應、天堂、地獄類、非有其形、象而耳、

圖畫之工、圖雷之狀、纍々如連鼓之形、又圖一人、

若力士之容、謂之雷公、使之左手引連、右手推椎、

若擊之狀、其意以爲、雷聲隆々者、連鼓相扣擊、其

魄然若敝裂者、椎所擊之聲也、其殺人也、引連、

相椎並擊之矣、及圖鬼神星宿五嶽眞形、皆識其狀以

別之、是豈果有其形乎哉、皆以象摸寫、上古久遠、

世屬鴻 荒、共工 怒觸不周、女蝸 錬五色石以補天、

鼇足以立四極、黄帝白日登天、振古所傳、斯類非一.

擇其可以爲君子者、進入大學、比諸出小學而歸民者「之多聞多見、雖繁多乎、以一貫之、實視之則未嘗不

之衆、亦萬分之一而耳、雖大學之教以文、以天下視 一也矣、膏肓純白、二豎不生、學之要、莫如一焉、

之、猶大鼎之一臠、天下之廣、人民之衆、豈能一一|豈不然乎、故一則治、多則惑、簡則理、繁則亂、墨

文之乎哉、若夫婦人雖后妃之俘、猶爲小人、以蠶繅 翟之悲絲、楊朱之泣岐、皆憂多之亂眞也、子日、主

紡績爲工 百工類也、婦人稱夫爲君子、以其小人也、 忠信、是以忠兼信、忠重信輕、又曰、言忠信、是以

夫人自稱曰小童、豈不信乎、子曰、唯女子與小人, 信兼忠、信重忠輕、蓋忠者心之誠也、信者言之誠也、

爲難養也、近之則不孫、遠之則怨、女子小人固相類、 聖人之敢、必合内外、是以有忠信之敢、若夫忠恕違

其道也忠、衣服曰信、飲食曰忠、以飯食忠 餐之、人一道不遠、忠主於內、推己及物、恕也、仁則不須推案、

之忠必見於飲食、王孫不忘漂母、光武不忘嘑沱河麥 忠信忠恕、其義雖別、其實一忠、聖人之敢、至忠、

飯、可以見已、婦主中饋、酒食是謀、其道以忠、不胎敢小學、忠之始也、大學誠意、忠之中也、老反質

亦宜乎、其唯以忠爲道、故曰、忠臣不事二君、貞女朴忠之終也、夫不誠則無物、不忠則無人、人類不

不見二夫、忠者不二之謂、農商百工、孜々其業、不」至滅絕、人道不至荒廢者、惟在忠以維持之而耳、静

攻異端、瞽者善聽、聾者善視、各一其志、小人之道 雰虛戶、虛爲道門、泊為神本、寂爲和根、嗇爲氣根、

也、凡人心不能兩用、不專一則不能精、意不並銳、 微爲事工、山林之下、修養之徒、竊帝王之寶、以淑

事不兩隆、盛於彼者、必衰於此、長於左者必短於右、 具身、亦足以久視、王者以天下爲鼎爐、鍊蒼生爲丹、

喜夜臥者不能蚤起也、是其常矣 視如離婁、聰如師「以壽神靈之統者、受一朝一夕之所能致乎哉、其必遠

曠、御如王良、射如夷羿、書如史籒、計如隸首、走「聲色、去浮華、以古風變今俗、尚質素抑繁文、不忘

追駟馬、力折門鍵、若求兼之者、天下無一人矣、故|嬰兒之心、以儕太古之域、乃淳風之興、如雲如雨、

百工技藝之不二其事、古之道也、若夫君子多乎哉、 和氣所蒸、爰生聖人、爰產四靈、禮樂之化、滾 其

不多也、雖君子亦不多其事、周公之多材多藝、孔子 來、詩云、予懷明德、不大醉與色、子曰、聲色之於

太平策巻之六

小學之敢以忠、養質朴敦厚之性、

、聞

其疾、不聞其徐、千歳邈矣、其時與事、不可一一知

朴未散、至淳小、存周公之遺法、子曰、齊一變至於魯、魯一變至 也、其人物皆美、亦唯經有褒增之文、史有空加之言、

於道、俗彌繁華、則違道彌遠、可以見已、自古賢德 在其世而觀之、豈 美乎哉、世俗 情、賤所 見貴

之士、多在蒿萊、以其無粉華之習、磨勵以成其志者所聞、竹古卑今、猶貴鵠賤鶏、鵠遠而雞近也、見當

何限、書曰、野無遺賢、先王之求賢於野可知也、生一今之文簿也、非之則謂、上世朴質、下世文薄也、又

於憂患、死於安樂、於傳有之、人不濱飢渇、則性情|猶家人子弟不謹、則謂他家子弟謹良矣,其實古今人

不定、不堪困苦、則道德不固、貴介公子、生於錦褥「不甚相遠、今之所有、古亦有之、今之所難、古亦難

之上、長於婦人之手、所見開、莫不繁華、其喪志莫一之、陰康 之時、民氣 鬱滞、故作舞 以宣導之、夫

立、往々皆然、非文之害乎、殷高宗之爲太子、下在民 康之民 至質朴、而民氣鬱遏、脉理滞着、非歌舞佚

間、親見稼穡、疾苦所在、自能知之、其成中興之治 樂、則不能宣導、和其關節、與後世何異、尙書詩三

者、職是之由、迺華靡之蠹人心、聲色爲甚、物之入百、雖古乎、其所載時政得失、人情向背、以至里巷

人、莫深於聲、蔓衍流蕩之酆作、民情日倍輕薄、姦|鄙細之事、皆與今不大異焉、今夫人至百歲、臨且死

巧詐僞、無所不至、古樂平淡不美、惟其不美不妖、 時、所見諸物、與年十歳時所見、無以異矣、六畜長

是以能使人心歸於雅正、後世凡百制度、繁於古、 短、五穀大小、昆蟲草木、金石珠玉、娟蜚蠕動、

虛交粧飾最多、求之本實、未有能存者也、三代已遠、一行喙息、無有異者也、今之於古、亦復然耳、上瞻天

漢之儒者、雖不聞道、而猶能守禮、故在朝廷則危言、 文、下察人心、太古與今,未見其異也、山野窮僻之

在鄉黨則危行、後世學者不守禮、晋人放曠、崔顥十 民、今猶太古矣、惟都邑佳麗之地,風氣以扇、然山

五之詩、爲李邕見斥、比々皆然、漢之人物、比諸後野至多、都邑至少、都邑之於天下、特萬分之一而耳、

世、皆忠厚不可及、然三代人物不可及、亦甚於漢、衣冠貴族之天下之民、亦不特萬分之一而耳、迺謂太

雖然、視遠物者、見其形、不見其容、聽遠聲者肥後文獻叢書第二卷

11111111

未醻、亦可耳、先王之世、天下之人、

莫不入小學者也、1111111

太平策卷之六

無忠則其本不、古語曰、市民

然後爲己之學、可得而入也、不然乎薰衣剃面、 玩、山民樸、深山大谷之中、其人必素樸老實、地氣使

學為宦者妾婦、豊學問之道乎哉、子曰、先進於禮樂、 然.迺都多新槎、鄙多古風、子曰、十室之邑、必有

野人也、後進於禮樂、君子也、如用之、則吾從先進、 忠信、十室之邑猶後世所謂三家村、蕭條貧寒、目不

先進者質素、近乎野人、後進者華美、是其爲君子也、 覩華麗、故其人忠信、若乃四通五達、輻輳之衢、豈

然聖人從先進、重實也、不御綺羅、布帛是尙、君子「能有忠信之人耶、春秋時、齊稱最繁華、臨菑之民、

之常也、布帛雖賤、百姓常用之、錦綺雖貴、爲物奇 二十一萬、無不吹竽鼓瑟、彈琴擊筑、鬪鷄走狗、六

麗、鬼神之易繪、而犬馬之難圖、豈非以常者難、而|博蹋鞠者、臨菑之塗、車轂擊、人肩摩、連任成帷、

變者易耶、孟子曰、堂高數仞、榱題數尺、食前方丈、 舉袂成幕、揮汗成雨、家殷人足、志高氣揚、魯最弱

嬰兒之

也、禮樂事也、事之所在、至道寓矣、君子學其道、 侍妾數百人、吾得志不爲也、有志之士、雖富貴、不

而忘其事、百工技藝之徒、習其事而忘其道、其道無|事華靡、不事繁文、土階茅茨之訓、峻宇雕墻之戒、

聲無臭、君子默而識之、其事則學而不厭、誨人不倦、一豈不昭々乎、學問之道、專務本實、痛絕浮華、子曰、

是上下之辨也、嬰兒雖無知乎、其心純一、與天不相 巧言令色、鮮矣仁、又曰、剛毅木訥、近仁矣、綺靡

遠、及其有知、文飾百出、加以巧詐、失其本眞、與一之長、聖人憂之、文辭之盛、鬼神惡之、聖人之敢、

天相離、滔々不返、仕官之貪榮、市人之貪利、少壯之「以仁爲宗、以誠爲本、其實者忠也、曾子曰、夫子之

貪色、老衰之貪生、文薄澆漓殊甚、大古之世、豈有一道、忠恕而已矣、恕者忠之用也、忠者猶未染之絲、

之乎、葛天末襄之民、豈其然乎、後世人情、朝堯而 染之蒼則爲蒼、染之黃則爲黃、君子尙其不染、而卑

冀桀、外夷而內跖、合爲兄弟、離爲胡越、父子不可其染、子曰、涅而不緇、非謂不染乎、子曰、人之生

保北親、君臣不足恃其義、夫婦或爲怨讐、師弟子或「也直、罔之生也、幸而免矣、豈須染之乎、染之者

爲路人、反覆波瀾、殆與太行爭嶮、莫不由文勝之弊 風俗氣習之變也、不染者其眞也、四教之中、忠爲重、

也、故盡廢文飾、惟存質朴、慕太古之俗、返立、枝葉豈能特達乎哉竟謬 解忠字、以爲事 君之道、援論語 臣事君以忠爲「於哀平之間、後漢節義之風未興、所謂忠臣者忠厚之

證、是識其一不識其二、通其半不通其半、孤行一句、 臣也、尚書曰、克忠克孝、孝經曰、以孝事君則忠、

以證其說、豈足據乎、上句有之、君使臣以禮、禮豈以孝事長則順、是二者專以事君而言之、忠誠朴實之

專屬君乎哉、忠之不屬臣、亦猶是也、父曰慈、子曰|意、而未嘗有節義之意而耳、大學曰、爲人君則止於

孝、是不可移易、至於忠則不然、故君使臣以禮、禮「仁、為人臣則止於敬、仁者君德也、敬酒臣道也、雖

爲君道、論語又曰、事君盡禮、人以爲諂也、禮爲臣|然孔門之學、以仁爲宗、仁豈專屬君乎哉、商紂道敬

道、臣事君以忠、忠爲臣道、論語又曰、居之無倦、 不足行、以至滅亡、敬豈專屬臣乎哉、故以忠語臣道

行之以忠、忠爲君道、是可見禮與忠、君臣之所共道|者、猶以敬語臣道也、忠豈專屬臣乎哉、後儒之語忠、

也、禮者文章可觀者也、忠者其實也、水之寒也、火|猶孝慈之類、謬之大者也、孝子之道、清淨無為、合

之熱也、金石之堅剛也、此數物未嘗有言、而人莫不「于自然、可謂忠矣、是太古之遺也、至末世貝錦日長、

知其然者、忠著乎其體也、推亦心置人腹中、人主之|布帛日廢、非君子之意、草木秋死、松栢獨在、水浮

忠也、軍糧未爨、將不言飢、軍井未汲、將不言渴、雨 萬物、玉石留止、忠之屬也、夫人以耿々之身、能賛

不張蓋、暑不設幕與士卒同勞苦、是大將之忠也、犬「天地之化育者、唯誠而耳、苟不誠乎不能動物、豈能

馬戀主、惓々不已、寗武子之愚、屈原之怨、是人臣|貫幽明而一之乎、故祭祀之道、專在誠敬、苟誠敬未

之忠也、屈原離騷、滿腹是怨、其忠厚至情、愛君太盡、則簠簋雕飾、粢盛雖潔、鬼神不饗、苟孝慈未至

深、惟其忠矣、是以怨也、後漢尚節義、出乎俗、 則雖日用三牲之養、猶爲不孝、君子貴實、不貴華、

力以死節相高、後世忠義之士、史册所稱、率皆名高貴情、不貴文、率悖然、禮之得中、樂之得和、是其

死節之徒而耳、求之忠厚之意、則未必有之、故雖大 至善也、苟未得中和、則雖衣冠翔翔、管絃嘔啞、只

節軒天地、至誠貫日月、謂之節義之士則可、謂之忠」有司之賤務、而非君子之所重也、大學之道、在明明

則未也、孝經緯曰、求忠臣者必於孝子之門、緯書作德、在新民、在止於至善、不問禮樂藝業何如、貴實

太平策卷之六

老子曰、樸散則爲器、叉曰、聖人不死則大盜不止、 大也、春秋休日、齊師伐我、公將戰、曹劌請見、其

剖斗折衡、而民不爭、又日、禮者忠信之薄、亂之首「鄉人日、肉食者謀之、何間焉、劌日、肉食者鄙、

也、老子法太古、太古法嬰兒、嬰兒法天、天法鵠卵、未能遠謀、乃人見、問、何以戰、公日、衣食所安、

鵠卵至無知、無知則神合于自然、迺禮樂怒爛、使人 弗敢 專也、必以 办人、對日、小 惠、未徧、民弗 從

華靡、梏自然而亡之、使人壽促、使人心勞、使天下、也、公日、犧牲玉帛、弗敢加也、必以信、對日、小

多事、至人惡之、反樸還素、黜爾聰明、庶幾可遊于信、未孚、神弗福也、公日、小大之獄、雖不能察、

無懷氏之庭也、太古雖邈乎、人己有嬰兒、嬰兒之情|必以情,對日、忠之屬也、可以一戰,古之重忠也如

熊與太古同、渾沌未鑿、素質未彫、泣則呱々、笑則 此、朱公叔私諡議日、夫萬類莫貴乎人、百行莫美乎

許々、適其自然、赤子之心違天不遠、猶卵之無知「忠、故夏后氏正以人統、敢以忠德、然則忠也者人德

也、大人不喪其赤子之心、忠之謂也、赤子之心、純之至也、而猶有三焉、孔子日、進思盡忠、又日、臣

一無襍、真實無妄、誠之本也、誠者天之道、誠之人一事君以忠、奉上之忠也、日爲人謀而不忠乎、日、

之道、天人之道、一誠以貫、五常之本、百行之源、其 忠焉能勿誨乎、謀誨之忠也、左傳、小大之獄必以情、

孰能加之哉、誠則聖人矣、然敲非自外來者、與生俱忠之屬也、又日、上思利人日忠、撫下之忠也、三者

生、情實自然、古之所謂忠者是也、赤子者聖人之無一人之則、而忠行乎其中、國語、忠者文之實也、然則

知者、而聖人者赤子之有知者也、人各全其天、還其文者忠之彰也、忠以爲實、文以彰之、事通義合、兩

本、則聖人豈可外求乎哉、子曰、仁遠乎哉、我欲仁「名一致、忠經曰、天之所覆、地之所載、八之所履、

則斯仁至矣、孟子曰、反身而誠、樂莫大焉、可以見「莫大乎忠、天下盡忠、淳化也、君子盡忠則盡其心、

已、古小學之敎、培養根本、立愛敬之實、成忠厚之「小人盡忠則盡其力、以是觀之、古之所謂忠者、指

質、可謂至矣、記曰、甘受和、白受采、忠信之人、 人之情實而言之、古人重忠厚、故知情實之不可以己、

可以學禮、苟無忠信之人、則禮不虛行、甚矣哉忠之後人菲薄、不知情實之爲貴、外智銷眞、外習奪情、

天地己有太古、人己有嬰兒、忠者太古之道也、嬰兒[redacted]火、由是火化興矣、伏羲氏之時、有河圖之瑞、始制

之心也、夫天地之始爲太素、清氣未升、濁氣未洗、 八卦、以明吉凶之塗、始制琴瑟、以寫中和之音、以

游神未靈、五色未分、中有其物、冥々而性存、謂之「龍紀官、官位尊卑之源立矣、女媧笙、葛天廣樂、陰

混沌、混沌爲太始、太始者元眙之、而在太素之先、康制舞、神農爲市、農圃醫卜興矣、至有熊氏之時、

太極在太始之先、道在太極之先、先而又先、以至於 風氣開、民與天相離、有衣裳宮室律曆文字、文字之

無先、始而又始、以至於無始、無先而又無先、以至 始制也、天爲雨粟、鬼爲夜哭、龍乃潛藏、太朴之散、

於無先而又無先、以至於無無先、無始而又無始、以

益甚、然猶 太古 之世、堯有天 下、飯於土

至淳之醨

至於無無始、至微之微、微不可言、至妙之妙、妙不 一簋、啜於土瓶、其南至交趾、北至幽都、東西至日所

可傳、道之元也、道生一、一生二、二生三、三生萬 出入、莫不賓伏、堯釋天下、舜受之、作爲食器、斬

物、太素降爲太古、太古之時、鴻荒草昧、曆紀未制、 木而裁之、銷銅鐵、修其厚、漆黑之、以爲器、諸侯

不知幾數千萬歲、人民鳥獸、羣居聚處、臥者居、 侈、國之不服者十有三、舜釋天下、而禹受之、作為

坐者于々、生者無號、死者無謚、黃金棄於山、珠玉 祭器、漆其外、而朱畫其内、繪帛爲茵褥、觴勺有彩、

捐於淵、巖居穴處、衣皮毛、飲泉液、吮露英、虛無 | 爲飾彌侈、而國之不服者三十有二、夏后氏以沒、殷

寥廓、與天地通靈也、與鬼神通情也、至淳太朴、莫 周受之、作爲大器、而建九傲、食器彫琢、腹勺刻鏤、

以尙矣、風氣之開、太朴漸散、有巢氏之時、人民機|四壁四帷、茵席彫文、此彌侈矣、國之不服者五十有

智、而物始爲敵、瓜牙角毒、槩不足以勝禽獸、於是 二、世彌文薄、而俗益澆醨、詐偽機巧、日益繁多、

之實、未有火化、飮禽獸之血、而茹其毛、衣其羽皮、

燧人氏之時、觀星辰、而察五行、知空有火、麗木則

明、於是鑽木取火、敎民以烹飪、乃別五木、四時改

構木爲巢、敢民居之、以避其害、未有稼穡、食草木

本實、孔子專尙文、居四散之首、是失風之自、謂

之子桑伯子之流則可、謂之聖人之徒不可、子曰衣

緼袍、與衣狐貉者立、而不耻者、其由也與、又曰士

志於道、而耻惡衣惡食者、未足與議也、或者援以證

聖人不尙文飾、是大不可、敝緼袍、惡衣惡食、今日

所遇之分、舜之耕稼陶漁、雖小人之事、不害乎其

也、顏淵糟糠不厭、雖陋巷之微、不害乎其仁也、單

褐至膝、帶索欲絕、何其害乎爲文乎哉、故以所遇而

言之、或在廟堂、或在草野、蓋亦莫入而不自得焉、

以君子之道言之、可施諸廟堂、而不可用於山野、君

子之在山野者道隱於下、豈爲行道乎、儒多在草野、

文、則四海不文、夷狄之風何免、伏願以堯舜爲師、

黼偖大淨、以孔子爲法、采縟風化、以示永久、終垂

無窮、

王之四術乎、興立成之敢、未嘗及書、可以見已、後

人為善、亦是已、孟子之告齊宣王曰、獨樂樂、與人「慣以成風、雖進講於王公大人之前、例以草野之情、

樂樂孰樂、日不若與人、日與少樂樂、與眾樂樂、孰欲其徹去繁華、以爲布衣行、豐能入乎哉、聖人之道

樂、日不若與衆、大學始敢、以宴會之詩、示與衆共至文、天下之人情、莫不貴文、僧尼落飾、人情惡之丶

之意也、至於讀書、則飛耳長目、止乎一人、而不可與「喪具素質、人情忌之、文其不行乎哉、大寶儼然、

人共者也、亦怕時或觀覽以便學問云爾、詩書樂雖先 文華之宗、一人文則四海文、粒歌之俗可待、一人不

之儒家者流、杜門謝客、埋首於書册、宴會之樂歌廢

矣、鄉飲酒之禮廢矣、學爲大冬之孤松、疾風之勁草、

而廢春風桃李之美、苦硬爲賢、草野爲高、以不飾爲

務從說、不發苦、不開甘對、吾且得從說甘對、大學

衍变

、故君子之學貴與人共也、大舜與

其氣烷音即是也、然必先宴會肥後文獻叢書第二卷

三三六

武、悲而繫之則哀、喜而鑿之則樂、不啻聖人如此人之所習、冠昏喪祭、射御朝聘、飲酒相見、養老

皆然、雖念慮之密心術之微、不可窺其際者、聖人授/投壺、絲竹管粒、歌詩舞樂、律呂算數類、其業繁多、

之以禮樂之器、其心盡見、無所遁形、聖人敢之、以 學者皆孜材其事、不敢逸豫、師執夏楚、笞惰慢者、

救其偏、歸乎中和、又以器也、琴禁也、禁人邪志、「此數藝業、其事雖殊、皆至道所寓、至善所在、學者

笛滌也、蕩滌邪穢、皆古之遺言也、後世諸儒、口娓 之資質心意、皆見乎其業、師視其業、而知心之正不

々乎說大學之敢、有可大疑者、心之正不正、意之誠;正、意之誠不誠、敢誨之方又以其業、執玉高、其心驕、

不誠、知之致不致、自知之乎、師知之乎、自知己心 使卑之、朝玉卑、其心憂、使高之、不高不卑、其心

之正不正、是亦難矣、若自知之、則不待就師而學也、 正矣、張紇急、其氣怒、使铵之、張 緩、其氣緩

其氣慢、使急之、不急不緩、其氣和矣、禮樂之敢、

雖不入學校可也、入學校必受師之敢、乃師知之也、

師知弟子之意誠不誠、視其面而察其意、亦難矣、師 驅人於中和之域、皆是類也、子路之賢、剛暴之氣未

非聖人、焉能察識如神、一一不誤乎哉、若能昭然知其 消、北鄙殺伐之聲、見乎鼓瑟、聖人曰、何爲於吾之

意之不誠、其心之不正、亦莫如之何、大學師徒、危 門、古之教學皆如此、子夏子張除喪而見、予之琴、

坐相守、以待天下之平、亦何益也、故正心誠意、皆不亦然乎、子曰、興於詩、立於禮、成於樂、斯言明

爲虛設之辭也、其實坐忘也、而格物以處事物、驗當一大學之道也、大學始教、霄雅肆三、謂鹿鳴四牡皇皇

否、是其 遁僻、殊不 知學校專 爲學設、初無 外事之一者華、是三者宴會所用之樂歌、入學之始先敢之、先

來、以格物一年之間、不過鑣二三、是何闊焉、而讀「乎習吹習舞、重人聲也、子與人歌而善、則必使反之、

書以爲學者之業、是又遁辞、三代之時、有何書可讀、然後和之、詩三百五篇、孔子皆絃歌之、求合雅頌之

尙書藏于史官、三易秘于太卜、論語大學種々之書未

作、讀書爲大學之業、未經見焉、夫不出横難、不得

之詩、重養老也、詩禮樂之藝、

皆與人共者也、子曰、可與共學、曾子曰、堂々乎張

也、難與並為仁矣三字疑三五

太平策划之五

其實秦以前凡言文者、皆如此、贵恃二文而已乎哉、 皆爲文官、一旦有事、又皆爲武官、文武分官、始乎

漢儒稱六經爲六藝、惟太史公所稱、躬通六藝、指禮|隋矣、樂有文武舞、交舞持雉羽、武舞持干戈、文武

樂射御書數而言之、與周禮同、小學指爾雅急就章類之德見所取之器、其實皆文也、古者農兵不判、後世

而言之、謂小子之所學、止於書字、三代至今皆然、武人之事擊刺者、即古之農也、非君子矣、文人即古

六藝之文、係之小學、未經見、二十而冠、始學禮、「學士之遺、是其爲君子也、然後世文人、專修文辭、

舞大夏、禮樂不爲小學也審矣、詩云、芄蘭之葉、童|彷彿乎古史官焉、非詩書禮樂者也、亦異乎古之君子

子佩谍、譏童子之射、射之不爲小學也、亦審矣、至、矣、古之時、人皆被 禮樂之化以成德、其苴餘 發爲

于御者、上車御六馬、最非童子之事、書數二技、雖文辭、不待修而采縟足、史官所錄、下至里巷歌謠之

精微乎、書字知數、童子所能、小學之敎、亦唯書字、 辭、皆莫不美、古語諺童謠類、後之文人窮筆墨之力

識聲與形、布算識乘與除、至於其精微、則大學之道、 莫能及之、甚矣哉禮樂之化、如此之大也、德彌盛者、

而小學不與焉、歌舞之易者、亦兼習焉、爲大學々樂 文彌縟、中彌理者文彌章、猶醉者之面發赤也、文於

之其矣、不聰明俊秀者、不敢歌舞、只敎書算、歸農 外者、必誠乎中、亦何疑、後儒惡飾外之虛文、是固

歸商、知書算而足矣、禮樂射御、非下民之業也、禮 然、然是自虛字之可惡、而文字之不可惡也、名之以

不下庶人、樂亦然耳、惟百工之徒、其事與藝業相接、 虛文、猶名之以俗學、俗可惡、而學不可惡也、後

如伶工專 取瞽者、與君子 周旋乎學校 之間、是其所 惡其虛、廢其文、非忘而何、子擊磬於衛、有荷蕢

以異農商也、雖然百工之事皆專攻、因以爲生、君子]而過孔子之門者、曰有心哉、擊磬乎、聖人未嘗一

賤之、以其不交也、後世以文武對言、文人輕武、武忠天下、發乎磬聲、荷蕢者聞而知之、甚矣哉、文之

人輕文、夫文武皆君子之德、乃武乃文、見于尙書、

文事武備、載于家語、女王武王同爲聖人、交近於仁、

武近於義、豈對言之有、古無文武分官、太平之朝、

不可以撿也、夫子之鼓琴瑟、其音清徹以和、淪人至

道、親出手指、猶爲近真、至於磬、則擊之以桴、與

人相離、然人心盡見乎其聲、凡鐘皷 知、怒而擊之則

文、博學於文、此二文謂六藝之文、匪文字之謂、

天真全、即名上等者、是不知詩之甚、夫辭不修飾、

采、書華穰、壁瑠軒楹、皆飾以黃金、猶爲得王者之 則風韻不正、天真不全、豈有二乎哉、不修其辭、而

體矣、武帝好儒、禁纂組之害女紅、唐玄宗亦好儒、 求全 其真、求無花之菓者 何限、是皆不 思之過也、

焚珠玉錦繡於殿前、二君惑儒者之說、貴人之性能信、 人心惠而目多采、人心忍而目多白、多采者文之道也、

故信其 質 素之 道、而禁焚之、其後武帝惑方士、玄 大人虎變、其文炳也、君之豹變、其文蔚也、文之爲

宗或貴妃、奢侈紛華、無所不到、比諸前所禁且焚之 義、物相雜之謂也、以水濟水、誰能食之、琴瑟一聲

不啻萬倍、夫奢儉俱非美德、常必相因、奢者必儉、 誰能聽之、故獻酬俯仰、一進一退、律呂清濁、一高

儉者必奢、其勢不可以已也、欲去錦繡華麗之物、其 一下、錯雜以成禮樂、推之驗天文地圖之秘、經緯貴

心深惑之故也、猶釋氏之輕死、實生於畏死之心也、 賤、雜成星象、山川原濕、雜成方輿、風雨霜露、雲

身至卿相、爲布衣行、史載稱之、是雖如難能、其實雷虹霓、生于兩間者、亦皆雜以成文、鳥獸之羽毛、

出矯揉、所爲卿相見動、未嘗異挾位驕人者也、卿相|草木之花實、亦皆難以成文、況於人乎、五品五

則卿相、布衣貼布衣、何所避嫌、尚儉素、甘淡泊、 之絲、天下 之人、互相 [結不 可解、是以有 三綱之

黃老之徒爲然、晋人率皆高嘅清爽、不治事務、清淨 名焉、不雜則不交、物皆然、聖人之敢爲甚、有司之

相高、簡素相誇、先王之世、必誅之民、而儒者從附「於禮、工之於樂、豈不美哉、然君子賤之、以其專

和之、質糝之風、君子惡之、先王之道、以文爲常、 一職、心滯一隅、不雜不交也、信都之官、合四、

唯居喪、主哀素之心、徹琴瑟、去衾褥、不近華麗、 而以爲大學、德成而上、先之以格物者、貴雜文也、

以變常也、若好質素、不尙文飾、是以喪爲常、禮為「子曰、博學於文、顏淵曰、博我以文、曾子日、以交

人子者、冠衣不飾素、尙文也、以哀素爲常、是欲

母之遄死、在子則爲不孝、在弟者爲不弟、在國家則

爲不詳、今有日詩不假修飾、任其醜朴、但風韻正、

友、是皆謂詩書禮樂之業也、漢儒謬解文、爲文字

典籍之謂、詩禮樂不與焉、論語最貴文、屢見於經、

儒者皆謬解、沿漢儒之舊、司馬光總覺其非云、博我

以太平質之五

111111

繡綾羅人文之最精者.聖人之所重也、孟軻乃不願 之、是貴交之道也、枕席之事、夫婦之本也、聖人飾

人之文繡、孟軻雖賢 生於戰國,其言不似聖人、吾 之、以制婚禮、築埋之事、父子之本也、聖人飾之以

頗惜焉、夫珠玉爲天成之賚、錦繡爲人工之文、古之制喪禮、禮之本非自天降、非自地出、人情而已、人

聖人珠玉以飾冠,以貴天成也、錦繡以裁衣、以重人「情者、匹夫匹婦之所同也、所謂忠也、聖人粧飾人情、

工也、故禮樂之器、主觀美、觀不美、則不足以風化「以爲禮樂、聖人之敢、莫不文、若不交乎、男女相奔

天下也、子都之姣、能動人心、以其美也、禮樂亦然、以野合、亦可謂婚、投親骸於水火、亦可謂葬、奈不

有子曰、禮之 用和爲 貴、先王 之道斯爲 美、子謂韶文何、夫道不可見、非人々之所得知、聖人因立教文

盡美 矣、又盡善 矣、謂武盡 美矣、未盡 善也、武之「之、文者可見、非人之所得知、迺文則中禮、不文則

未盡善、唯孔子知之、天下之所共知、唯美而耳、子一失禮、雖不學、一視而辨、豈不明乎、聖人之知、可

曰、君子成人之美、不成人之惡、小人反之、日、 謂至矣、然天子無飾、祭天無壇、至敬無文、父黨無

遠而光者、飾也、飾喜飾怒、於傳有之、書飾之道、 容、是唯文極返本、示不忘初也、夏尚忠、商尚質、周

聖人所稱、美麗粧飾、君子之所常也、君子比德於玉、 尚文、說者謂夏商之世、猶忠質、至周始文、是殊不

衣錦尙絅、惡其文之著也、聖人之重文也、如此、若 然、夏后氏之璜、商之六壺瑚璉、己極其文、贊禹曰、

不以文乎、君子比德於石、衣布尚網、亦可耳、罍以 致美於黻冕、夏商承堯舜之後、人文豈不盛乎、偉忠

盛酒、扇以招風、是其本也、然以黃金飾、覆雲錦 倘質、示不忘本也、所以救其偏也、至周禮樂大備、

綴金錢、以金碧繪扇、要珠玉、垂朱孫、非便盛酒招 故不復患偏、直尙文、周末文始衰、天下質勝、賢德

風之用也、鸞刀以鐚於用爲貴´故金罍畫扇不便於用、 之人、多不得志、珠玉錦繡、盡爲王侯貴人奢侈之其、

君子用之、是猶糠秕之微事已、衣裳之生也、爲蓋形墨翟始以儉爲道、以矯其弊、雖然獪錦衣吹笙、秦而

暖身也、然而染五采、飾文章者、以待肌膚血氣之情「下儒者愈益質勝、不御綺羅、不事粧飾、漢時儒者、

也乎、高冠大屨、方領長裾、不便於起居、而君子用議以爲當尙忠之世、文帝儉、雖然未央前殿、彫文五

駕象輿、六古龍、畢方並轄、蚩尤居前、風伯進掃、 之、洙泗三千、斐然成章、可謂高春、至戰國時、文

雨師灑道、虎狼在前、鬼神在後、蟲蛇伏地、白雲覆 之道廢矣、孟子言必稱堯舜、人以爲迂遠、秦始皇

上、大合鬼神、鼎湖烏號之事、頗怪、是唯淳厖未全 滅先王之詩書禮樂、斯文湮崢、雖迺湮晦乎、天下不

變、與天相通、至帝顓頊、命重黎、牙民神、絕地天 可一日無文、漢以後文物之盛、日加一日、衣冠服飾

通、至堯舜氏、人文大彰、推黃帝爲文祖、明其始也、 之美、禮樂器數之繁、過乎三代、然不知聖人之道在

子曰、荒鴻之世、聖人惡之、又曰、法始乎伏羲、「玆、故爲湮晦、固自若也、濂洛諸子、發明道學、續

而成乎堯、匪伏匪堯、禮義哨々、八卦儷皮、先乎黃千載之傳、朱子繼興、集諸儒之大成、聖人之道、可

帝、是豈不可爲文祖乎哉、然非堯之祖、宮室衣裳未 謂転々矣、然求之孔子之詩書禮樂、則彈丸黑子之小而

制、人道猶未交也、伏羲鷄鳴、黃帝味爽、堯舜日出、 耳、亦何不文之甚焉、文王既沒、文不在玆乎、不曰

故曰、帝堯其仁如天、其智如神、望之如雲、就之如|道而曰文、以爲謝辭、文之爲謙、吾未之聞、堯舜以

日、書曰、光被四表、格于上下、又曰、重華協于帝、來、所傳唯文、若必以道乎、周公之制盆、不曰道王、

濬哲文明、天下明德皆自堯舜始、故孔子叙書、始乎而日文王、是貶其祖考、而以爲謙也、亦何倨焉、錦

服始制、衣服制而人道立矣、西陵氏者黃帝妃也、偷堯舜、貴文也、禹之文命、湯之日儕、皆堯舜之道也、

倫造律、容成造曆、大橈作甲子、倉頡作文字、倕作文王受命、八百啓基、周公制作禮樂、三代之法大備、

車、貨狄作舟、此六人者、黄帝臣也、雖葛天造歌、陰|可謂堯舜之日中、子曰、唐虞之際、於斯爲盛、又曰、

康造舞、先乎黄帝、廼律呂未制、何以定聲、衣裳朮周監於二代、郁郁乎文哉、吾從周、子畏於匡、日文

制、何以飾體、是民間樵歌牧笛之祖、而非君子歌舞之一王既沒、文不在茲乎、天之將喪斯文也、後死者不得

道也、故六樂之目、以雲門爲首、雲門象雲氣出入、 與於斯文也、天之未喪斯文也匡人其如予何、春秋

黄帝樂也、吾瑟能使鬼神上下、合軒轅氏之律呂、客「春王正月、王謂文王也、仲尼祖述堯舜、憲章文武、

立齊門者、猶能言之、昔者黄帝合鬼神西大山之上、 傳周公之詩書禮樂、其敢有四、文居其首、行忠信次

1111111

太平策卷之五

無也、位登將相、祿有百萬、財累巨萬、壽保百歲、

雖兼此四者而有之、苟不德乎、未免爲小人、然草野

之間、非無君子、況身履聖人之位、行聖人之禮、奏

聖人之樂、而無聖人之德、則縱自輕、奈蒼生何、

11111 I

堯舜孔子之道至文、其爲敦華藻繁縟、可施於廟堂輦轂之間、而不可用於山林草野之中、詩歌修辭、最富采縟、圖書殺青、最貯菁華、禮樂之器、飾以珠玉、彫以山龍、刻以犀象、覆以錦繡、望之有粲爛之色、聽之有鏗鏘之聲、天下之文盡聚、繁華之極莫以尙焉、堯有文思之德、舜有重華之名、孔子稱之曰、焕乎其文章、子貢曰、夫子之文章、二帝孔子、相去數千載、文章之道未嘗不同也、堯之所以受天下者、爲文祖、或曰、堯之始祖、世莫能定其爲誰也、以吾視之文祖者、黃帝廟也、黃帝始制器.宮害衣裳興矣、伏犧之佃漁、炎帝之耕作交易、皆民業之源、至於禮樂文明之 事、則自黃帝 始矣、易稱黃 帝堯舜垂 衣裳而天下治、蓋取讀乾坤.是黃帝之爲文祖也、書曰、予欲觀古人 之象、日月 星辰、山龍 華蟲作會、宗藻火粉米黼黻 絺繡、以五 栾施彰 于五色 作服、古人亦黃帝之謂也、何者黃帝以前無衣服、西陵氏之眞也、衣文

水斯立著

太張策卷之五

學習其事、思味其道、兩者不可偏廢、思之思之、王之道如此、天之君子、人之小人、人之君子、天之

又重思之、思之不得、神其通之、思亦大矣、雖然以 小人、是叔季之道也、先王之世、以貧賤爲耻、後世

思無益、不如學也、君子之於學、亦何急焉、後儒謬 以富貴為耻、孔子浮雲之喩、曾子秦楚之論、先王所

知己、神人化人浮屠類、以無所不知物說、是亦與焚 以爲君子儼然在上、豈親藝業、殊不知古君子之學、

溺之辨同、聖人有所不知、道之大於是乎見若一人盡 專在詩書禮樂, 而周旋升降、詠歌舞蹈、斯其所業也、

知之、則爲知覺爲囿、亦何小焉、譬登泰山覽衆山之 詩云、君子至止、懋聲鏘々、又云、念彼君子、温其

小、豈能知衆山、各有紆紫屈曲之勢、與斷巖絕壁谿 如玉、君子之容舒遲、其情和平、其言從容不迫、後

谷樹木之數乎哉、聖人之大知亦猶是乎、百家之雜、 儒求爲聖人、其志美矣、然求之君子之德、克肖者何

百工之瑣、聖人豈能一一知而能之乎、其極皆出乎聖 眇、夫不似君子而求爲人、一何倨焉、詹何坐、弟

人、聖人知其極而不問、蒭蕘之言、聖人擇焉、人解 子侍、有牛鳴於門外、弟子曰、是黑牛也、而白蹄.

之以爲 雖蒭 蕘之言、聖人必擇其善、非也、蒭蕘之|詹何曰、是黑牛也、而白蹄、使人視之、果黑牛、

言賤、有聖人之所不知者故擇焉、天子雅爲天下之主、 而以布裹其蹄、漢以後諸儒之言君子也、黑牛也、而

天下之民不視其面、天子亦未視天下之民、老少男女 白蹄、吾惜其末、證以洙泗之言、將以白其蹄、中論

形狀風俗何如、聖人大知爲天下之主、有所不知、有一曰、古之君子、貴爵祿歟、曰然、諸子之書、稱爵祿

所不能、下亦有不知聖人者、夫百姓日用而不知者、道 非貴也、資材非富也、何謂乎、曰彼遭世之亂、見小人

之大也、不知不識順帝之則、化之深也、故欲以知盡「富貴、而有是言、非古也、古之制爵祿也、需以居有

天下者、非聖人之意也、夷狄以不治治之、欲治之如「德、祿以養有功、功大者祩厚、德遠者爵、功小者

中國則亂、鬼神以不可知知之、欲知之如人則惑、不「其祿薄、德近者其爵卑、是故觀其餒、則別其人之德

可知不可能、聖人不求必知必能、所以爲知也、泥君一也、見其祿則知其人之功也、不待問之、古之君子貴

子乎、學者君子之事也、學而不思則罔、思而不學則 祿者、蓋以此也、天人之論、起于衰世、非先

111110

三九

太平館卷之四

無爲之奴、是固然、雖然至人如廣成子之屬、是已、 聖人之敢、以上於民者也、入大學者、皆爲君子之學、

處焜崙之墟、遊無極之野、視天下如指甲之垢、是蜚 大學之道、在明明德、在新民、在止於至善、是其

遯者也、與之小郡縣、豈能使民無飢渴之憂乎、雖其 君子也、人之才性不同、氣質各異、而其學一在詩書

迹高於聖人、王者以麋鹿待之、至人虛無者、猶然、況 禮樂、所謂在敢無類者然、其所成各循其性、各因其

神人化人學狐魅而以惑人者乎、蹈水不溺、入火不焚、 材、不必同、大者大成、小者小成、方者成矩、圓者

化人爲然、其徒信以爲妙、吾黨之妙者異 諸、蹈水 成蜆、均之君子人也、先王建官職、以待君子之異材、

則溺、入火則焚、盖水火之所以溺焚人者、化工之神 官々職掌不同、人々材能各殊、擇其人應其官、不一

存矣、天地之道亨矣、若能蹈水不溺、入火不焚、則 其德、不一其用、皆所以爲君子也、君子於其所不知、

己身雖免、柰水火何、君子之心寧不利已身、有補於 蓋闕如也、以是視之、君子豈無所不知乎、有所不知、

天地、欣然爲之、孔席不煖、墨突不黔、禹八年于外、 則有所不能、先王用其所知所能而官之、其所不知不

巫馬期戴星、其事雖異、其意適同、故不溺不焚、則 能不必青矣、贵君子而巳哉、雖聖人亦有所不知、

不足以贊化育、水火其水火也、化人之事、苟利區々 有所不知則有所不能、其唯聖人有不知、而夫婦之愚

之軀、而損水火之用、缺化工之神、亦何自私之甚、 與知、聖人有不能、而夫婦之愚能行、是所以道之爲

水能溺人、聖人制舟以濟、制橋以度、火能焚人、聖、大也、張衡曰、仲尼耻一物之不知、後世以爲聖人無

人制鑪以扇、制竈以爨、水火不能害人也、是所謂大所不知、凡古書多以禽獸草木爲物、仲尼耻一物之不

知者、被天下民用、化人不溺水不焚火、纔足自免耳、 知、謂識鳥獸草木之名、如辨土怪識萍實之類是也、子

天下之民豈能乎哉、後世貝多之文東、其往々有化」產博物亦復爾爾、人爲萬物之長、萬物爲人之屬、爲

人類、世多有、故不論、至人神人雖奇、吾 甚小焉、 長不識其屬之名、則可乎、或問禘之說、子日、不知

聖人必爲王者、以風化天下、仲尼不得而見之者、慕･也、若信世儒之言乎、是不知何謂也、子曰、由誨女

先王之化也、後儒之所謂聖人異諸、若夫君子者、學|知之乎、知之爲知之、不知為不知、是知也、古之學可

子之道焉可誣也、子貢曰、君子一言以爲知、一言|飾、子貢曰、君子亦有惡乎、子路曰、君子之仕也、

以爲不知、子曰、不知命、無以爲君子也、凡是類雖行其義也、子夏曰、君子有三變、公羊傳曰、君子樂

以德稱君子乎、比諸後儒、以爲學成德論君子者、其一道堯舜之道、董仲舒稱孔子爲大君子、是類直指脾气

意逈別、何如則君子不幸在草野者、今日所遇之變、「而言之、猶言夫子也、其實聖人與君子、其分逈別、

以其德視之、宜在位焉、雖無鶴乎、猶有矣、故凡論 聖人吾不得而見之矣、得見君子者斯可矣、盖聖者孔

君子、以上於人言之、或與民對言、若乃顯然以雹無「子不居、以其至極之名也、且聖人必爲天子、聖人而

爵言之者、子曰、先進於禮樂野人也、後進於禮樂君|非天子者、孔子一人而已矣、故謂之聖人、則賛王者

子也、孔子曰、君子之德風、小人之德草、草上之風必之明德之辭、孔子歎鳳鳥不至、河不出圖、且後世雄

有作者、虞帝不可及已、又曰、作者七人矣、又曰、

子曰、小人哉樊須也、子曰、言必信、行必果、

經々然小人哉、子曰、君子謀道不謀食、耕也綏在其「若有王者、必世而後仁、子思 以 爲 仲 尼祖述堯舜

憲章文武、迺不見聖人、謂王者之不興也、古樂府有

中矣、學也祿在其中矣、君子憂道不憂食、子游曰、

昔者偃也聞諸夫子曰、君子學道則愛人、小人學道則「聖人出、聖人出猶言王者興也、唐時猶有衣黃者聖人、

易使也、子路曰、君子尚勇乎、子曰、君子義以爲上、｜衣白者山人之語、可以見聖人必爲王者之號也、西方

君子有勇而無義爲亂、小人有勇而無義為盜、周公謂「有坐人、文王之謂也、詩云、彼美人兮、西方之人兮、

魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不以、故舊無所指適同、列禦寇因而奇之、爲西極化人之類、夫至

大故、則不棄也、無求備於一人、子夏曰、雖小道必入神人化人、道家所欲言、皆指通神奇異之人、下至

醫卜之徒、挾術執技、欲其術之神、故必以神人、先

有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也、子夏曰、

百工居肆、以成其事、君子學以政其道、凡是類、專｜乎聖人、旁援孟子以爲聖人之上、更有神人、殊不知

以尊卑言之、然錯綜以考之、則德或兼爵、裤或兼德、孟子之所謂不可測者、贊過化存神之妙而言之、即所

非必判然為二、又有指孔子爲君子者、君子不以新陬」語聖人也、道家 以 爲 至 人無爲、聖人有爲、有者

子不黨、君子亦黨乎、子曰、躬行君子、則吾未之有「若人、尚德哉若人、子曰君子而不仁者有矣、夫未有

得、子曰、君子 坦蕩々、小人長戚々、子曰、君子篤「小人而仁者也、子曰君子上達、小人下達、曾子曰君

於親、則民興於仁、曾子言曰、君子所貴乎道者三、 子不出其位、子曰君子耻其言而過其行、子曰君子道

曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節|者三、我無能焉、子路問君子、子曰脩已以敬、子路

,而不可奪也、君子人與、君子人也、子曰、君子居之、慍見曰、君子亦有窮乎、子曰、君子固窮、小人窮斯濫

何陋之有、子曰、論篤是與、君子者乎、色莊者乎 唉、子曰、君子哉蘧伯玉、子曰、君子義以爲質、禮以行

周有曰、如其禮樂、以待君子、司馬牛問君子、子曰、之、孫以出之、信以成之、君子哉、子曰、君子病無能焉, 君子不憂不懼、子夏曰君子敬而無失、與人恭而有「不病人之不己知也、子曰、君子疾沒世而名不稱焉

禮、四海之内、皆兄弟也、君子何患乎無兄弟也、棘「子曰、君子求諸己、小人求諸人、子曰、君子而不

子成曰、君子質而已、奚以文爲 子貢曰 惜乎、夫·尹、群而不黨、子曰、君子不以言舉人、不以人廢言、

子之說君子也、駟不及舌 子曰 君子成人之美、不「子曰、君子不可小知而可大受也、小人不可大受而可

成人之惡 小人反是、曾子曰、君子以友輔仁、子曰、 小知也、子曰、君子貞而不諒、孔子曰、君子疾夫舍

君子於其所不知、蓋闕如也、故君子名之必可言、言一曰欲之、而必爲之辭、孔子尸侍於君子、有三愆、

之必可行也、君子於其言、無所苟而已矣、子曰、君 孔子曰、君子有三戒、孔千曰、君子有三畏、孔子曰、

子和而不同、小人同而不和、子曰、君子易事而難說君子有九思、陳亢曰、聞詩聞禮、又聞君子之遠其子

也、說之不以道、不熟也、及其使人也器之、小人難 也 子路曰、昔者由也、聞諸夫子曰 親於其身不

事而易說也、說之雖不以近、說也、 其使人也、求「善者、君子不入也、宰我問、三年之喪、期已久矣

備焉、子曰、君子泰而不驕,小人驕而不泰、南宮活|君子三年不爲禮、禮必壞、三年不爲樂、樂必崩、子

問於孔子曰、善射、;、俱不得其死然、禹稷張曰、君子尊賢而突泉、嘉善而於不能、子夏曰、小

躬稼而有天下、夫子不答、南宮道出、子臼、君子哉「人之過也必文、子夏曰、君子信而後勞其民、子夏日

實玄黃於匪、以迎其君子、其小人簞食壺觴、以迎其 | 莫定其處、然後君子始有出處行藏之道矣、是後世之

小人、逸書曰、穆天子西征、君子化鶴、小人化猿、 不得已也、非先王之世有之、小人之名、或以其無位、

是皆以貴賤别君子小人也、逸書之言、世儒以爲不經、 | 或以其不德、小人或在朝或在野、亦莫定其處、夫德

是以辭害志之類耳、穆王遠遊、周于西極、跋涉經歷、 不德爵不僻之别、君子小人也、一而耳、後世分爲二焉、

上下勞苦、史官潤飾之曰、君子化鶴、其形瘦也、小 孔子時、君子小人已失其所、論語所載、君子小人

人化猿、其形衰也、以調遠遊之非禮也、文章之妙、 以德不德言之、子曰、人不知而不慍、不亦君子乎、

如此、是雖微文乎、讀古書之道、可槩見已、小學之「有子曰、君子務本、子曰、君子不重則不威、子曰、

敢、學爲人下、大學之敎、學爲人上、君子學爲下、 君子食無求飽、居無求安、子曰、君子不器、子貢問

而學爲上、小人學爲下而足矣、言其爲童幼、故名之|君子、子曰、先行其言而後從之、子曰、君子周而不

以小人、小人固非惡稱、易曰、聖人大寶曰位、故德比、小人比而不周、子曰、君子無所爭、儀封人請見

爲聖人、則爲天子、富有四海之內、是其常也、有一曰、君子之至於斯也、吾未嘗不得見也、子曰君子去

德者得、有才者得官、有功者得祿、是亦其常也、 仁、惡乎成名、君子無終食之間違仁、子曰君子之於

無德無才無功者、乾役於下、爲有德才功能者使、是「天下也、無適也無莫也、義之與比、子曰君子懷德、

亦其常也、聖人不得位、初於孔子、有德不得鹤、初一小人懷土、君子懷刑、小人懷惠、子曰、君子喻於義、

於顏淵、是二者衰周之運、風氣之不振乎、和氣生聖人、 小人喻於利、子曰、君子欲訥 於言而敏於行、子謂

不能養聖人者、惟在衰周乎、學校之敎廢、君子小子君子哉若人、魯無君子者、斯焉取斯、子謂子產

人、各襲其家、不同德才功能何如、君子之子雖不肯、有君子之道四焉、子謂子夏日、女爲君子儒、無爲小

依然在上、小人之子雖賢、依然在下、是以人與官相人儒、子日、文質彬々、然後君子、子日、君子博學

離、德與位皆失其所、是以君子之號、岐爲兩途、或|於文、約之以禮、子日、聖人吾不得而見之矣、得見

以位稱之、或以德稱之、君子之人、或在朝或在野、「君子者、斯可矣、陳司敗揖巫馬期而進之日、吾聞君

爲道、孟子非之、大人之事、勞心以治人、小人之事、 詩云、展如之人兮、邦之媛也、詩云、人之無良、我

勞力以養人、天下之通義也、詩書所載君子、所指不 以爲兄、詩云、盧仝々、其人美且仁、是類非一、其

同、有指天子者、有指諸侯者、有指大夫群臣者、有所謂之人、皆指君子而言之、若日之國人、則指民而

賓指主人而稱之者、有主人指賓客而稱之者、有婦人|耳、春秋稱王人齊人衛人之類、或指諸侯、或爲大夫、

稱夫者、有女稱男子者、有衆妾稱后妃而言之者、均之一其爲君子、其義適同、君子小人對言者、詩云駕彼四

君子、而無異稱矣、其所指雖異、爲在上之義、始未嘗 牡、四牡騤々、君子所依、小人所腓、詩云、周道如

有異也、若夫小人細民庶人野人之類、所稱雖異、所 砥、其直如矢、君子所履、小人所視、書曰、其君子

學者君子之事也、詩書禮樂成德達材、是其爲君子也、 天子之子、方其童幼、則爲小人、未爲君子也、小學

迺公卿大夫士、百官衆職、各因其才德所成而任之、 小人之學、而民業足矣、迺小子爲小人、凡民爲小人、

爲君子愈定矣、庸々不俊之民、出小學歸農業、百工 皆以承小學之敎而言之、所指適同、異而言之、君子

商賈各循其素、農之子爲農、工之子爲工、商之子爲 稱人、小人稱民、亦古言爲爾、詩云、假樂君子、憲

商、於此乎爲小人者定矣、聖人之世、以君子治小人、一々分德、宜民宜人、受祿於天、書曰、凡厥庶民、無

以有德役不德、是先王之道也、故在上者稱爲君子、 淫朋、人無有比德、惟皇作極、人之爲君子、民之

在下者名爲小人、尊卑一立、不可移易、貴賤相因不「爲小人、可知已、夫民之爲小人、誰不知之、人之為

可相無、上古之時、草味不文、然上者爲巢、下者爲「君子、不可易解、詩云、嗟我懷人、宾彼周行、詩云、

營窟、隱然有君子小人之分、爲神農之言者、以並耕乃如之人兮、逝不古處、詩云、彼美人兮、西方之人、

君子

指適同、皆指農工商賈而言之、俘在下之義、亦審案、

水斯立著

太平策卷之四

婦人雖如后妃、衆妾之所君子乎、其實小人類也、

子曰、女子與小人爲難養也、可以見已、女工亦工之

業也、非君子事、若夫未冠之童、是亦爲小人也、雖

儒

附賛之、吾甚怪焉、凡雖小技、身學之則必覺其大

雖大業、不身學之則必小之、不知其大、是人情也、

孔門學者學禮、旦夕修業、豈能問其本耶、林放魯人、

非孔門弟子、未嘗學禮、故請問其本、一言欲以聞其

本、是不學之人而耳、聖人大其問可見、孔門未嘗問

禮之本也、禮有本有文、忠信禮之本也、故曰、禮自

其奢也寧儉、喪自 其 易 也 寧戚、是明忠也、林放之

不傾不覆、雖學術大業、不偏不倚、周廟欹器、虞廷

王燭、於吾身親見之、若夫不然、龜玉之毀櫝中、誰

任其罪、

謂狂耶、非耶、後世口耳之徒、黜黃老、問其所道、

三四

可以見已、黃老之學、以自然爲宗、貴忠厚而賤文簿、 問、出聖人之敢、大之者、見其小禮也、非美林放、

太古之淳朴、是其所慕、掃詩書禮樂而去之、其言曰、其爲泰山之隃、亦外之辭、若後儒之說、孔門三千、

五色使人目盲、五音使人耳聾、文華使人心昧、吾不」平生講習、唯其末事、不學林放、忽然問本、是亦可

敢與之爭、知詩書禮樂之敢、莫如老子、何者、視以「怪矣、禮序樂和、其說雖簡、吾不欲聞、指序和爲禮

爲文而惡之、後儒之於先王敢、尊而信之、然掃文與樂之本、以器數爲禮樂之末、猶指心性爲人之本、形

器去之、彷彿老子、老子之所惡者、眞聖人之敢也、 骸四肢爲人之末、是豈可乎哉、許由雖一瓢棄焉後

後儒之所尊者、非真聖人之敢也、呪老子爲周藏室史、 之君子盖傚之、非聖人之敢也、皇朝尚器度越四外、

圖籍禮制、是其職掌、爲賢有司也、豈容疑乎、其惡-帝王綿綿、神器是守、聖明當推及天下之器、正名分

文者、知文之至也、棄器者、知器之至也、仲尼之所 立紀綱、敦風俗、施敢化、不襆它術、雖天下大器乎、

書第二卷

肥後

以天地自然爲宗、以質朴爲教、以無爲爲德、以器爲

末、是黃老褚餘、聖人之所不言、而假名於聖人之

敢、是謬妄之至、舉世不察、如林放問禮之本、後三三

太平策卷之三

以賦詩、不待設器張燭、至於書、則有几案筆硯筐箱

之紋、織花鳥珠玉、罍之畫雲氣、皆聖人之道、以器 之類、無之則書不可讀、至於禮、則拜起進退、用器

寫天、故器雖人爲乎、必以天物爲飾、至于詩者、直「多品、無之則禮不可講、至於樂者、不正拜起、加以

以天籟和天物、所以首四教者、以其去天不遠也、載「舞蹈、不止陳設、加以發聲、無之則樂不可習、故

籍雖人爲乎、字猶近於象、目可視、口可讀、而手不「人之敢、樂爲盛矣、典樂之敢冑子、樂正之崇四術、

四代之服器官、太史公喜得觀琴車書、皆可見古者重 繁、滿于天下、亦唯以形爲用、目能視之、未嘗有耳

器之意、不啻古而已、今播种重衣裳、武弁重弓矢、 聽之聲、大禮之行、唯佩履鏘々而耳、其餘器雖陳設

巫祝重幣帛、僧尼重經像、要之其尊崇信奉、莫不在 交錯乎、寂々無聲、於幽默之道也、猶爲近矣、故禮之

器、童子持白刀、孟賁避路、醜婦擷錦繡´子都寓目、次詩書、以其去天不遠也、至於樂者、有歌、有舞、

甚矣器之大也、詩書禮樂、古之四敎、書有載籍、禮一有八音、其器干戚羽旄、琴瑟笙竽、其文可觀、其美

樂有器、詩獨無所有、歌之爲樂、錄之爲書、發心著 可聽、入人也最深、化民也最速也、故曰、生民之道、

聲、是之曰詩、比諸禮樂與書、則可謂小也、然風花| 樂爲大矣、又曰、樂觀其深、盖人爲之工、聖智之精、

雪月、鳥獸草木、天然之物、盡屬詩、而書禮樂不與至於樂而極矣,不可以尙已、故樂之後詩書禮、以其

矣.書禮樂皆以人爲之器、鼎彝鐘簴、鑄鬼神百獸之「去天之遠也、去天遠者、文明益彰、聖人之敢、樂

形、笙簧、象鳳凰之聲、文字、擬鳥跡蝌蚪、衣裳、 文、禮次之、書次之、詩次之、燕居於一室之內、可

絺繡、日月星辰、山龍華蟲、繪宗 藻火粉米黼黻錦綺

朝廷紀綱之所立、孰不以器、舜陶河濱、河濱器皆「麗薪而然、字假筆墨而見、比諸禮樂之器、稍近自然、

不苦欲、以是視之、聖德之及物、器爲先、禹聲尙文「所以先禮樂、以其去天不遠也、天下之器、上自冠冕

王之聲、以追蠡、孟子雖非之乎、古之觀德、以器也、一衣服符璽銳劍車弓矢祭祀喪葬之器、下至鞍轡術勒

可知、孔子譏管仲之器小、又以樹反坫爲失禮、魯傳 漁獵農桑械棨斧錢斗量權衡之具、皆禮器也、禮器之

之制、冕旒衣帶之等、車仗鹵簿之儀、弓矢斧鉞之典、 可取者、唯字爲然、筆墨之於字、猶薪之於火也、火

材多藝、孔子之多聞多見、皆學之事也、若夫多乎哉、 天下之人、咸皆再拜必從己說、甚矣哉、丝儒之好勝

不多也、爲多學而識之者與、曰然、非與、曰非也、 也、瞽者之行、前者步、則後者又趨、矮人之慨、處

吾一以貫之、言其德也、後儒喜易簡之說、好一貫之 前者譽、則處後者贊、處前者毀、則處後者笑、何

論、博學審問 茫然若忘者、後儒之厭煩也、譽人、　己無所見、專師前人、後世之學亦猶是平、先儒之所

不增其美、則聞者不快其意、毀人、不益其惡、則聽是、從而尊之、先儒之所非、從而黜之、吠影吠聲、

者不慊於心、增之益之、又重增之、以至失實、厭常|拔茅茹焉、甚者章句之徒、推算其師、其師之所是、

喜變、棄故取新、人情爲爾、先王之敢、在天下也, 從而俘之、其師之所非、從而黜之、豈有識見之素定

亦己故矣、漢有經學、晋有清談、宋有議論、明有心|耶、黨枯竹、護朽骨、其何固陋之甚焉、學之擬師、

學、此四者先王之所無、聖門之所不言、皆新法類而「以器與藝業、當仁不讓於師、皆自明也、故至於道、

耳、後儒有厭其新者、又自抗顏、以爲古學、以爲古則父不可以傳子、師不可以傳弟子、是以君子自得為

文辭者、亦先王之所無、聖門之所不言、雖故亦新而「大矣、後儒擬共師以道、師非聖人、焉能知道、故其

耳、其實學豈有古今之異耶、以古今論學者、皆不知「敢法學術、出乎好之偏、非復聖人之舊、不知者、

學者也、刈蓍薪而亡蓍簪、所得雖多、魯之婦人、猶「竟從人生活、如坐大霧中、是丝儒之踏襲也、凡是類

泣之、何則貴其故也、先王孔子之敢、其猶蓍簪乎、 瞭々無疑、盡非天下之學、而自聖、是聰明之失也、

後世讀家、誇蓍薪之之多、求之先王孔子、則未有能|諺曰、不入虎穴、焉得虎子′已前十害、皆吾所嘗、懲

合者、甚矣哉、後儒之好新奇也、良醫服百病之方、 瑟殊甚、古之言、雁廢祭者、不日廢祭、日簠簋不飾, 故能治百人之疾、大才懷百家之言、故能口百族之亂、 稱淫亂者、不曰淫亂、曰惟薄不修,稱夫婦不和者、

美色不同面、皆佳於目、悲音不共聲、皆快於耳、酒「不曰夫婦不和、曰琴瑟小乖、稱欲危王位者、不口危

醴異氣、飲之皆醉、百穀異味、食之皆飽、故鸝々之「王位、曰問鼎輕重、皆以器言之,周禮、大喪、問陳

學、各習其師、呱々之子、各慕其母、何必同、欲使重器、以華國也、顧命陳寶、錄於尙書、如九錫五瑞

肥後文獻叢書第二

倫之道至簡、後儒專主人倫之道、而畧禮樂之事 是鶉鳥之欺孺子也、鶉鳥之性善近人、飛不峻也不速

而禮樂不可無、又立心之敬和爲說、是形而上者耳、 也、蹲々然、似若將可獲也、卒至不可獲、是孺子之

夫下學而上達、仲尼言之、後儒廢下學而務上達、是一所以跟膝踠足、而不以爲弊也、道德之美、貴於鶉鳥、

老佛類耳、君子不貴焉、夫器與事有司共之、小人與「學者之求得之、急於孺子、心知口言如將得之、然竟

之、可謂卑矣、至道德性命者、唯君子知之、然道德|終於不得、孔子以後、逐鶉鳥者、盖亦衆矣哉、逸材

性命、全具於器事之間、無上下之辨、故卑攻器事、 高足、馳騁盡思、而能得者何眇、是徒知逐鶉鳥、不

不言而喻,不亦至深遠哉、後儒不察、掃器事而爲末、 知設網羅也、詩書禮樂、譬如網羅、鶉鳥不可以一目

攻道德性命之說、以爲本、是後儒之過高也、萬古綱 獲、故多其日也、迺鶉鳥無所逃矣、廢網羅而求鶉鳥

常、極天罔墜、後儒賴以爲重、謂聖人之道在玆、中一者、後儒洲等也、夫易簡者乾坤之德也、非學問之道、

庸之書曰、天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂敢、 老子曰、爲學日益、爲道日損、斯言至矣、周公之多

太平策卷之三

者無益、不如學也、學之爲義、擬其師之謂、迺左左、 聖人之所以有功於天下後世者、敎而已、至於道者開

右則右、宮則宮、商則商、惟擬其師、不同其它、檀 闢以來、未嘗增減、五品人倫、不待聖人而存矣、儒

弓記孔子尚右、二三子皆向右、古之所謂學者如此、 者援五倫、爲其私有、是何倨 焉.今之 儒者、專事

爲師者以身散人、學者以身學之、後世師弟子、徒係 典籍、是亦有司之一、焉足以聖人之道爲其私有乎哉、

名位、教學以言、不以身、禮樂之說、瞭々指掌、而|况先王之敎、以器爲體、以事爲用、終身學之、不易

授之器、則無一所能者、後儒之空言也、禮樂所以文 到其極者、今皆恬然莫之顧、獨推綱常之大以爲道、

人倫也、無文則人偷不和、如父子之親君臣之義、皆是後儒之誇大也、君子之道、辟如行遠必自邇、辟如

天常所存、文之以禮樂、而後始得盡其道、叔孫通制| 登高必自卑、自小學而人大學、下學而上達,皆循

禮儀、而高祖始知皇帝之也、可以見已、若夫徑行有序、宋人之助長、害學也深矣、故欲一跳而造其極

無文、夷狄之道也、君子不貴焉、雖然禮樂之事至繁、

妄人已、不修禮樂而求中和、不習藝業而欲至善、

人獻、一獻之禮不足以大饗、大饗之禮不足以大旅、大益、其爲用也未嘗有異矣、若使孔子之敎、廢而不用

旅具矣、不足以饗帝、毋輕議禮、凡是類、夫子禮樂於後世乎、何其在爲聖人也、詩書禮樂廢而不修於今

之雅言、其所以問老聃學長弘者、是已、子曰、人而一乎、何其在爲萬世之敢也、故今之詩書禮樂、先王

不仁如禮何、人而不仁如樂何、又曰、禮云禮云、玉「孔子之敎也、豈二本耶、推尊典籍、以爲聖人之遺、

帛云乎哉、樂云樂云、鐘皷云乎哉、是類君子之道、 四敎之中、獨主書、歌舞器數、豈非聖人之遺耶、而

非有司偷工之所能與也、所以魯太師之承敢、賓年買「棄之、問之則曰經孔子所傳、聖人所作、禮豈非孔子

之請問、師乙之自賤者、是已、禮樂之道、與器相爲所傳耶、樂豈非聖人所作耶、若以禮樂非古乎、書亦非

體、未嘗相離矣、而其分者君子任道、小人任器、豈一古矣、三代之書、皆古文蝌蚪、今之書生豈能讀耶、古

容疑乎、後世諸儒、以理說禮樂、以器爲末、其異端交變爲楷、不失其爲書、三百變爲律、豈失其爲詩耶

於聖人、若使生乎三代之時、則峻刑重誅、何辭以免、 先王之禮樂、變爲今之禮樂、豈失其爲禮樂耶、雖然、

若乃有司份工之傳、徒器是守、其道則昧矣、是其職書有親出孔子手指者、如易大傳是也、樂有猗蘭臨河

也、士君子之於禮樂、下學而上達、若不上達、則與一類、豈不出孔子之手指耶、况趨庭之詩禮乎、然獨推

有司何辨、後儒竟務上達、而廢下學、是謬之大者也、| 書爲聖人之敢、以爲詩禮樂非古者、後儒之偏見也、

故善學者、必於器與事、大學之敢、以格物爲先、不 鬼神無形、聖人制宗廟、以萃其氣、設社稷、以寓其

其然乎、後儒豈不 信 聖 人 乎、獲罪於孔門、豈其所|神、斬尺二寸之木、名之曰主、以寓祖考之靈、天之

好、然甘犯之者、十病爲害、一偏見、二空言、三過 寥廓、星辰之遠、聖人制璣衡旁羅、以寫其象、道德

高、四誇大、五蹶等、六厭煩、七好奇、八好勝、九|仁義之無形、甚於鬼神與天、口不可言、目不可視、

踏襲、十聰明、十害爲母、百孔千瘡、不遑枚舉、苟「聖人制禮樂之敎、禮樂惨器、以寓至道、故致學之方、

論其詳、更僕何罄、請得舉其大略、詩書禮樂、孔子「以器傳道、鼓瑟吹笙、執圭將幣、升車束矢、所以

所傳、先王之敢、天下後世、因之不能改、雖少有損 知止能得之術也、所謂終日不食、終夜不寐、以思、

太平策卷之三

聖人之道器爲大矣、制器唯聖人能之、易曰以制器者君子用之、以爲禮樂、其實皆器也、記曰、禮器、是

倘其象、周禮曰、百工之事、皆聖人作之、聖人之制「故大備、大備者盛德也、樂亦然耳、玉在山則物也、

器、必法象於天地、以合三才五行之數、造化之秘、 人探之製爲冕旒則器也、製器者百工之事、用器者君

鬼神之妙、盡寓諸尺寸毫釐之間、天子三公諸侯卿大 子之道、其原共出於聖人、其流貴賤殊業、不可相假、

夫士、降殺以二、以嚴貴賤之等級矣、所以貫幽明立 小人製器、君子用器、古今由而不改、然有司之於禮、

紀綱者、莫如器焉、迺雖簠簋籩豆罍噼之小、皆綱常 偷工之於樂、唯能守俯仰升降之數、記鏗鏘皷舞之節

所係、名分所存、故繁纓小物也、孔子惜之、又曰、器 而已、君子賤之、以爲百工製造、有司守記、皆類而

與名不可以假人、器之於天下豈不重乎、鴻荒之時、 耳、君子之學禮樂也、其道在明明德、在新民、在止

屯蒙草昧、草本榛々、鹿豕狂々、人民與鳥獸雜居、 於至善、不啻習器與事而已、子曰、君子不器、叉口、

未有君臣上下、以力相制、人無羽毛、以防寒暑也、 籩豆之事則有司存、可以見其意、然君子之學、未嘗

無爪牙、以爭食也、故獸蹄鳥跡、縱横于中國、猛獸 一日離器矣、子夏曰、百工居肆、以成其事、君子學

害人、名之曰猎、有聖人者出、制宮室以代巢窟、制 以致其道、其所爭、唯在致道成事之異、德上藝下之

衣服以代羽毛、制舟車以濟不通、制網罟以取水物、 別、而以平生所業視之、則未嘗一日殊其事矣、子曰、

制農桑之器、以利天下、鑄泉布、以通民用、制弓矢 俎豆之事、嘗聞之矣、軍旅之事、未之學也、又曰、

干戈甲冑、以威天下、以代爪牙、於是人 報 器以御 優々大哉、禮儀三百、威儀三千、又曰、經禮三百

萬物、猛獸不能害人、龍蛇入海、虎豹歸山、人始得易矣、威儀三千則難矣、又曰、誦詩三百、不足以一

人々裸體,不避風雨、人之類滅己久矣、是以器之於

人、關係至重、有器則存、無器則亡、聖人因設禮樂

敎、禮樂雖大、其實皆器也、俎豆玉帛鐘皷管結

制器

水斯立著

太平策卷之三

平土而居之、若器之不制乎、人々空手、與猛獸相搏、

而用之、以爲材也、百年而用之、以爲棟梁也、學以

積之、行以發之、若夫行有餘力、則以學文、其說雖如

相反、其實互相發、何如者有人于斯、日、吾學未成、

才未達、未可以事父母、待學成才達、事父母、善

乎哉、然行餘學文、文施行、正如斜纒、有主父而言

者、有主行而言者、所以聖賢立言之異也、孔子曰、

觀夫大學、而知爲王之易々、王者之化、扇斯民也、

未嘗不由學校之器也、聖人之道、假器以傳、器廢則

道亦廢、學校不興、則大學之道何以爲乎、方今數學

無制、學者肄業於私家、各出新意、造爲異端、處士

横議、五分七裂、聖人之道、爲諸儒割據、春秋大一

統之義、六合同條、四海共貫、以尊王、學問之尊孔

子、亦復如此、今下明旨、一以孔子爲宗、以詩書禮樂

爲敢、若有庠序之設、直以三代爲法、不擬漢唐之陋、

則猶坐峻嶺之上、而飛鳥皆視其背也、自古王者能尊孔

至而豫習之辭也、至其用之則行也、故種樹者、十年「乎哉、

能矣、非學也、講詩書、習禮樂、學也、事父事君、「無對、宜祀之
祖宗百神之上、親執籩豆、奔走階下、

和夫婦兄弟、則著其所能矣、非學也、學之爲義、未「以祈蒼生無疆
之福也、培養國家昌泰之運者、有它術

子、則天下太平、不尊肥後文獻叢書第二卷

1110K

孔子、則紀綱廢壞、世之治亂

興廢、未嘗不由尊孔子何如、聞之、孔子布衣、其

草、勒金石、銘碑碣、則著其所能矣、非學也、學劍

者、飾木爲刀、命處相擊、操兵刀傷四肢、則著其所

大平策卷之二

之天子、是使天子自聖、天子自聖、而師道廢矣、以 當於私家、夫婦之別、當於閨閤、事君之義、當於朝

堯舜之聖、每事必咨訪於四岳群牧、好問則裕、自用 廷、先王之則、不於三者之行、而於學校、不於五倫、

則小、故聖人之道、常在三老五、天子就問、北面 而於四敢、是文與行之別也、學書者池水皆黑、千紙

鄭正履、祝融在前、祝饐在後、不啻三代如此、高貴 受教、是所以爲得人君之 體也、雖人君以問爲、

鄉公時、三老祥南面儿杖、以師道自居、天子北面乞|可也、人君以聖人之道 爲 己職、則是以師自居、孟

言、周武帝時、幸大學養三老謹、三老入門、皇帝迎拜 子所謂、好臣所敢之敢之 類已、先王大知、以人治

門屏之間、有司設三老席於中楹南向、太師晋國公護「人、尊三老、所以敢天下之敬師也、而不與焉、至治

升階設儿於席、三老升席、南面憑几而坐、大司寇楚｜道者人君之熾也、後儒不知大學之道者、天子所師、

國公寧升階正舄、皇帝升立於斧之前西面、有同進 以天子治道混說之、甚者至以治道爲聖人之道、是皆

饌、皇帝跪設醬豆、親自祖割、三老食訖、皇帝又親|可謂杜撰之尤者也、蓋學術政治、猶絲與帛也、織絲

跪、授爵以醋、有司徹訖、皇帝北面、立訪道、三老|偽帛、用學術爲政治、雖前後一物、其分迥別、大學

起坐於席後、皇帝曰、猥當天下重任、自惟不才、不 之道、猶五色之絲、天子用之、以治天下、三公用之、

知政治之要、公其誨之、三老答曰、木受繩則正、后以正其位、百官用之、以共其職、皆細繹其所學、施

從諫則聖、皇帝再拜受之、三老答拜、禮成而出、是「之用、猶織五采之絲、爲綺、爲羅、爲綾也、先王之

竹師之大典、教化之源也、故雖九五之尊、鞠躬俯伏、 治、譬錦綺也、古學校之敢、譬五采之絲也、小學譬

北面再拜、不敢視其面者、只三老、其次爲五更、天 未染之絲也、後世欲天下之太平、不本之學校教化之

子尊師如此、是以天下之人、皆尊師勉學、天子不 道、是猶織錦綺不貯五色之絲也、契爲司徒以來、聖

師、則天下之人皆不學、不學則禽獸、人倫不清、風、人之敎必以五敢、四代之學皆所以明人倫者可知已、

化不扇、職是之由、後世儒者、皆以爲大學之道天子雖然敢之有術、學之有序、詩書禮樂、正心誠意、習

之事、明々德於天下云、新民云、民之父母云、盡係之學校所以明人倫也、若以人倫明人倫乎、孝慈之行、

藝之華飾者、可與講事、事者、有司之職也、道者、君 鉸時子斯、武王師太公、雖所傳不一、疑信相伴、師道

子之業也、先王之賤藝者、蓋賤有司也、君子兼之則 之久、可槩見已、記曰、三王四代唯其師、師嚴然後

貴也、故子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝、 道尊、朝廷則君、家則父、鄉黨則老、學則

藝者心之使也、仁之聲也、義之象也、其道則君子專 師、古之制也、師必以長老之人、不長則不能上人、

之、其事則有司共之、此藝之大體也、諸儒之論藝、未 不老則不能熟業、長者師之道也、入學子弟以齒相序、

有如是言者也、禮之有有司、樂之有份工、賤役也、 長者處上、幼者處下、古學校孔門、一遵是法、夫年

然君子必就而學焉、何如者專攻其事以爲職者也、仲|高則人憚之、年少則人狎之、是常情也、故雖有子奇

尼問禮於老聃、老聃者有司也、學琴於師襄、學樂於甘茂之才、少年妙齢、不足以師之、況其下者乎、是

萇弘、師萇弘者、工也、有司工、雖至卑賤聖 以古之師皆高年老人、安坐受養於弟子而不辭、叉執

人師之、雖聖人師之、其卑賤固自若、所謂德成而上、 夏楚、以罰其不從者、尊嚴不可仰視、而師道立矣、

藝成而下、何必揖讓登降以無禮、鏗鏘皷舞、以爲樂 師道立、而藝業進矣、學問成矣、是所以束修之誨夷

乎哉、子曰、禮云禮云、玉帛云乎哉、樂云樂云、鐘 待之叩也、禮天子父事三老、兄事五更、是太學之師

皷云乎哉、雖然是於藝業之中、殊揭其道而言之、未 也、其餘大學及鄉校、皆有師、亦以三老稱之、漢時

甞離藝業矣、徒治藝業、專通一職者、有司之守、治 新城三老董公、請爲義帝發喪、壺關三老、令狐茂上

藝業而通大道者、君子之事、兩者皆由藝業、瞽宗學書、救戾太子皆鄉三老之遺也、後漢明帝以李躬爲三

禮、胥學干戈、太師學詩、典書者詔之、所以百工之「老、桓榮爲五更、安帝以李充爲三老、靈帝以袁逢

有事於學校也、大學之師、三老五更、通三才五行之「三老、魏高貴鄉公以王祥爲三老、鄭小同爲五、後

道者也、難詔於天子 無 北面、昔者神農師悉老、黄 魏孝文帝以尉元爲三老、游明根爲五、後周武帝以

帝師大眞、帝顓頊師綠圖、帝嚳師赤松子、帝堯師尹于謹爲三老、其餘歷代、皆無三代之尊、三老五更也、

壽、帝舜師務成跗、禹師西王國、湯師伊尹、文王師天子親祖、割性執醤而饋、執爵而醋、三公設儿、九

11104K

三〇五

無家事、無賓客、無往來、況雜事乎、故雖有處「飛耳長目、古之遺言、後世乃有貴耳而目者、豈不

事之智、無所用、不以處置、亦可知也、漢唐蠅建學異乎、中論曰、通乎郡藝之情實者、可與論道、識郡

大平策卷之二

子彌衆、是所以孔門全沿古學校之敢、不襟它術之證|校、置生員、存古名、沿舊制、至教學之法者、亦唯

也、述而不作、信而好古者信矣、大學之書、成於孔 讀酉、捨之莫爲學、而頗忌其少、漢以專門立家、以

門、古學校之遺典、孔氏之遺書、惟此而耳、詩書禮樂、多其類、元嘉之制、有儒学、有玄学、有史學、有文

士子所通習、晝夜肄業、大學孔門、慣以爲常、故其學、以充古四學之名、至 唐 有四 庫之名焉、後世經

書、惟論列所造之淺深、所得之先後、不及藝業、猫一生之學、拂四學而去之、獨留經係之大學、乃大學之

孫吳之書、論列用兵之情、不及陳營行伍兵革器械之|道、日益削矣、經皆深奧、不可易解、是以講說之。

制也、此數者皆兵家之常、戰國所習、故其書所論、 欲早冷人也、凡性命之微、道義之蘊、孔子之所罕言、

只止其情、後世途以爲大學之道不在藝業、而古書 子貢之所難聞、盡颺之口舌、人傾耳而信、操觚血錄

之論藝業者、不勝其多、恐拂去之、以係之小學、先|夫道者、不可言、可語者影響耳、況不擇其人、不問

王詩書禮樂之敢、皆降屬未冠之童子、明德至善、正|其才、一以己說告之、學者之淺深、所受有限、豈可

心誠意之類、係之大學、然此四者皆無形、師不可以「築而告之哉、孔門不貴言、若言則必資其才、中其病

敢、弟子不可以學、不過爲點坐之別稱而耳、格物窮|問仁則一、而顏淵仲弓司馬牛其告不同、問孝則一、

到事物、其說可謂盡矣、然藝業已係之小學、大學無」而孟武伯子夏子游其告又不同、是以人各得其所入、

事物、故以讀書議論處置類充之、讀書者四教之一也、 今講席知愚共集、告之皆一、縱命令其言沛然懸河、

詩禮樂拂而去之、以屬童子、獨留書係之大學、是不窮明白、於學者猶爲無益、況不如此者乎、經筵進

世捧服、議論處置、古無之、孔子七十、不爲少、孔 講雖崇學之盛事乎、無補聖學也明矣、況親講乎、惟

門三千、不罵寡、其平素問答、不過纔二十篇、不以「乙夜觀覽、俯留神爽、徒徙賢儒以備顧問、是倍講說

議論可知也、古學校專置博士、四十初仕、其間無官「之功、不啻什陌、天下所化自不能已也、學問之道、

其小者、莫大有文武之道焉、夫子焉不學、而亦何常「也、是也、三代與今難時異乎、君子文華、小人質素、

師之有、斯數者皆以禮樂爲道、分而言之、道德仁者」一定不可易矣、農民鄙俚質村、彷彿乎太古之民、士

虛也、藝者實也、大易道器之辨、於是乎見焉、故小大 治隅修禮節、比民爲文、自公卿播种而視之士亦都

之學、未嘗斯須離藝業者、求之聖人之言、青崖白谷、俚質朴、天子至文、反乎淳素、是而下文者處上、質

仰見仙掌、無毫髮之疑也、天下之事至繁、人各有業、」者處下、猶古焉、小人之業、耕作釣漁、樵牧交易、

士有士業、農有農業、工有工業、商有商業、婦人有百工奴僕、其事皆可數、所以奉上、而質素體、君

婦人業、苟無業則爲游民、鄉人不齒、士農工商、所|子之業者、詩書禮樂而已、詩者 歌 詠諷誦、聲音節

業雖異、皆出乎聖人、其事足終身用之不竭、其用 奏、書者簡冊文學、圖籍譜牒、禮者器數制度、威儀

足以利天下、杜陵杜夫子、善奕湘、爲天下第一人、 品節、樂者 金 石 絲 竹、干戚舞缩、四者皆古聖人所

或譏費日、夫子曰、精其理者足以大稗聖教、迺雖斵 作、至道寓焉、天下不可一日無者、聖人因以爲敢化

輪、轉丸、搔蟬、游淵之微、盖亦莫入而不自得、 之具、學之者手々相傳、目々相示、至善之美、中和

各在其芷、誰得招之、而君子小人卑高以陳、其藝事 之妙、不言而喻、得之乎身、不亦善乎、四者之敢、

有文質貴賤之等、文而貴者宜君子、質而賤者宜小人、 皆所以臨下、而文華爲體、不啻古學校之敢如此、雖

不可移易、是以俊選入學爲士、庸下出學歸農工商、 孔門亦然、子日、興於詩、立於禮、成於樂、又日

孜々其業,各臻其極、子日、君子上達、小人下達、 詩書之不講、禮樂之不習、是丘之過也、子所雅、詩書

是也、夫唯小學練絲之敢、天下之人皆得學之、至大|執禮、皆雅言也、子思日夫子之敎、必始於詩書、

學染絲之敢、則君子學之、而小人不與、是其所以大終禮樂、雜說與焉、衛將軍文子日、夫子之敢人、先

學爲君子之道也、小學爲人下之敢、大學爲人上之敢、 之以詩書、終之以禮樂、萇弘日、堯舜文武之道、或

爲人下者貴賤共有之、爲人上者君子専之、凡民不與、 弛而墜、禮樂崩喪、亦正其統紀而已矣、夫子聞之日、

子日 中 以上、可語上也、中人以下、不可以語上|吾豈敢哉、亦好禮樂者也、世家臼、修詩書禮樂、弟

垂衣裳、以文治天下、青赤之染絲哉、文明之道盛, 一體、事理無問、故廢器與事、則道理無所寓、豈有敢

而至淳醨矣、太朴散矣、故太古之俗,不可用於文明 事敢理、前後隔數年哉、夫教學者虛名也、道德者空

之世、猶嬰兒之戲、不可用於成人之年、三墳雖大道 稱也、其實必資藝業、藝品有小而易者、童子學之、有

乎、仲尼删之不用、鴻荒神代、其事久遠、以練絲之俗、 大而難者、成人學之、初未嘗一日離藝業、子曰君子

假嬰兒之言、自堯以後、視之則喃々不字、豈足揚于 無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是、子思曰

王庭乎哉、惟夫喃々不字、混沌之譜、是所以爲三千 道也者、不可須臾離也、可離非道也、樂記曰禮樂不

禮樂之元也、孩提之童、取筆紙、倉頡未見之字生、 可斯須去身、以斯三言者併而觀之、仁與道與禮樂、

發聲爲歌、伶倫未聞之律出、點畫不定、節拍不協、 其辭雖異乎、所指適同、子之武城、聞弦歌之聲、

天機自動、天籟自鳴、是其爲練絲之絲也、八歲入小 子莞爾而笑、曰割雞焉用牛刀、子游對曰、昔者偃也、

學、敢之歌舞、習之書字、其教忠厚質朴、以培其根、 聞 諸 夫子 曰君子學道則愛人、小人學道則易使也、

養天然之眞、不假彫刻、不事文飾、及十五入大學、 孔氏注云、道謂禮樂、子曰志於 道、據於德、依於

詩書禮樂以陶鑄焉、明德至善、其教文華、孔子曰學-仁、游於藝、又曰人能 弘 道、非道弘人、子貢曰文

之染人、甚於丹青、是之謂也、四十成德、織五采爲「武之道、未墜於地、在人、賢者識其大者、不賢者識

養國老庶老、所奉大人童子、是其辨也、古者甚重冠 文錦、出仕服政、所以衣文錦而晝行也、七十致仕、

禮、故冠者爲成人、以入大學、未冠者爲童子、以入 歸老鄉里、爲小學師、或受姿於大學、是所以反辣絲

小學、童子之學、必以小藝、聖人之學必以大藝、小 「乎、童子之時、龍門未鑿、皓首之後、呂梁既塞、練

大之序、君子之由、譬如登高、必自卑、譬如陟遠. 絲之學、不亦宜乎、一竅開而萬竅並開、一關通而萬

必自近、譬猶練繇、染之藍則青、染之丹則赤,其質 關俱通、其唯大學青赤之間乎、先王之敢、有小大之

彌素、則其染彌文、青赤一成、眞色無異、以是觀天 學者、敎法之精、孰得閒然、後世不得其意、徒泥其

下、堂上而耳、上古至淳、天地之練絲哉、黃帝堯舜「名、曰小學事也、大學理也、是妄說之大者也、道器

學曠野之葛、嗚呼、執不欲太平哉乎、

肥後文獻叢書第二卷

先王之道、莫大於敢化、敢化之器、莫大於學校、學

校譬如洪鑪、所以鎔鑄人才也、金得鎔鑄以成其器、

人得鎔鑄以成其德、人無貴賤入洪鑪、詩書禮樂以

陶鑄焉、大者大成、小者小成、莫不各充其量、各達

其材也、天地爲鑪、萬物爲銅、陰陽爲火、造化爲工、

其言雖荒唐、古之遺也、迺以學校為鑪、人材爲銅、

禮樂為火、敢化爲工、亦復爾爾、子曰、仲尼鑄

淵、仲尼所鑄、洙泗三千、何啻顏淵、譬如杵臼之精

米也、化粟爲米、糯米爲白、相摩而成其白、何必粒

々白之乎、顏淵雖賢、臼中之一粒、仲尼之杵何擇、

泥古學校之盛哉、風俗之樞機、太平之命脉、一在學

辟雍泮宮、雖非聽政之堂乎、治道根本、賴以立

唉、其實所以養天下之老、慈天下之幼也、子日、老

者安之、朋友信之、少者懷之、故養老乞言之禮、學

校之本也、虞有上下、夏有東西、商有左右、周有大

小、四代之制雖異乎、有大小之別者、未甞不同也、所

古學校

水斯立著

太平策卷之二

111011

則禮樂不 行、遠圖廢、因循佚樂、泄々殊甚、故求治渴賢、欲

文、先王之不可及者、果在此耶、兵家有機會、古之善 其急、而太平之效、欲其待也、後世不求太平、不渴

用兵者、善待機會之臻、動而應之、擅脫兎之奇、若 賢、不求言、而青太 平之 效於 今日、是可謂兩失之

機會未至、百端計較、以求其得、雖十黃帝莫能爲焉、 矣、君子思不出其位、政事得失吾不得而知焉、然太

今夫啜羹者、熱則置之、待其冷而後啜之、不然必傷 平之道、天下所共願也、太平必可致、唐虞必可則、

其舌、項籍屢勝而終大敗、高祖屢敗而終大勝、是待 三代必可復、名器綱常可必正、是豈賞罰法令之所能

與不能待之辨也、士之爲學、有小有大、古之制也、 乎哉、又豈奇謀秘計、一朝一夕之所能乎哉、先王太

如十五入大學、十三舞勺、成童舞象、二十舞大夏、 平天下之道、敢化爲大、古學校之制、彬々可觀焉, 皆待年數之滿、春夏秋冬、有業有學、各待其時、三 天下爲敢化驅、猶風雨寒暑之入萬物、蕩不知在和

代之敢爲然、後世之學、結髮治性天之說、少壯厭藝 低之中、君臣之義、父子之親、淪於骨髓、天下沛然、

業之煩、其病百出、原之人情、始乎不能待焉、甚矣 知大義之所在、不刑一人、而王者之政、可行於天下、

哉、待之難也、故助長躐等、君子所戒、躁進小成、 致化不興、學問不明、君臣父子之道、昧於天下、廼春

志士莫取、十年之謀種樹、是將待十年之後而用之、 秋雖作、纂弑之徒、接武者何限、由不務敢化、而專任

若年年用之、則無完木矣、後世人主、志不遠大、其 政故也、夫表正者景自直、其必勉勵聖學、一以堯舜爲

用人、惟取充今日之用、以爲足矣、故天下之民、皆|師、謹掖庭帷帳之問、以培養治化之本、朝廷大典、

急於用、巫不致思於清淨、而專事禱禳、醫不潛心於 遵由舊章、用人求言、殊出宸斷、斥小康之近計、念

素靈、而先務湯藥、爲君子者、視傚其陋、至於不務 大同之遠圖、乾剛離明、霄旰匪懈、則先王在天之靈

禮樂而講經濟、不讀墳籍而先力行、是皆不能待之過」以至海隅蒼生、神人以和、世登雍熙、是谁迂逗乎、

也、不待問而致也、至講說 其弊 極 矣、不待聘而仕 默禱以待黃河之清者、豈啻乎哉、不然則蓬累而行、

太平策卷之一

01

至科擧其弊極矣、此二者衰世之事也後世短喪、至於易月以日也、蚤婚短喪計

、於是近、皆失禮之大

者、而原之人情、始乎不能待焉、人情不忠其事瞭然可行於目下、其利可擧足而待也、是刀筆吏| 今之儒者治天下乎、何以異諸、然是陋儒之末失也、

之所務、非國體之所存矣、遠圖者、常慮數百年之久、 非先王之道爲然、一妻一妾、雖不能養、三畝之園、

制於未形、禁於未然、其狀如有之不爲益、無之不爲雖不能芸、試之牛刀、必效所能、子曰、君子可大受、

缺、而知若汲々恐不及矣、是大小之辨也、先立其大不可小知也、夫金石絲竹之聲、不奏乎聾者之側、山

者、小者不能逃、故能識治道大體者、心能用人、錢|龍華蟲之文、不陳瞽者之前、故法律之世、天下爲法

穀簿書之繁、皆得良吏而任之、豈親小事耶、後世吏 驅、欲東則東、慾西則西、莫不用命者、雖高世之才、

治、日極精工、彫刻天下、法律之書、可謂備矣、其 屈首就中人之列、無所用其才矣、先王之道、不絕如

長吏術者、非無數百年之慮、高祖之智、在良平之下、 處士傳之、亦何衰矣、創業之主、名宰相、雖遠

而其區處計畫、邈出乎良平之上、創業之主、率皆如 圖、用其智術、與術同、故其遠圖、或中或否、智

此、其長策遠算、卓立於天下人情知見之所不及、名|有深淺、術有巧拙也、以先王比之、則其爲近計下策、

宰相之於天下亦然、吏治雖非先王之道、豈無遠圖乎 固自若也、漢唐宋明雖盛、無復三代之風者、可知智

哉、儒者傳先王之道、言必唐虞、其論治道、必根據術之不可恃、而先王之不可及也、先王之治、後天而

經術、可謂昭々焉、而其大要本於人君修身、身修而「奉天時、待風氣之開、其爲政、待人情之安、其用人、

舉而措之天下、緣飾以絜矩之說、仁政之論、是以「待才德之成、待才成而使之、待學成而用之、發乎持

德化民之言耳、非治道之體、以創業英雄之略、視之、 滿、浴乎既盈、古之道也、後世文治、不能待、政

其以爲腐儒陳言、莫之用者非誣矣宜也、故吏術雖小、 不問人情之安不安、用人不同才德之成不成、不待敢

能用之者有遠圖、先王之道雖大、陋儒用之、未免爲「而刑、不待學而仕、童子備官、弱冠爲相、未太平而

近計、宋人有御馬者、馬不進、拔劍頸而棄之於溝中、稱祥瑞、是不能待之弊也、三十而娶、二十而嫁、古

又駕一馬、馬又不進、又頸而棄之於溝、若是者三、「之制也、後世之人、率皆菲薄、婚約或在嬰孩、情竇

以法威馬至矣、然非王良之法也、如何則無術也、使 早啓、情志早暢、嫁娶早成、三年之喪、亦古之制也

肥後文獻叢書第二卷

00

太平策卷之一

百折東下、其勢不可回也、誰能障之以掌乎、不知者 皐陶馬口、孔子反羽云者、相家小術、非君子知

謂、天子一姓、公卿世官、是可耳、太易之道、一君

知 人 於 學、不以面貌、不以口辨、

之方也、君子之

而二民、禮夫得再娶、婦不得再嫁、是故皇統綿、 不以年齒、不以譜族、觀其藝業、才能可知、觀其踐

永絕窺覦者、君道也、賢才更用、俊彥並進者、臣道 履、德行可知、人焉廋哉、故治天下之道、用人爲先、

也、臣擬君、欲其綿々、一何倨焉、聖人大寶曰位、 用人之道、知人爲先、疑之勿任、任之勿疑、古人之

何以守位、曰人、故王者之所以長久、不與圖籙之符、 言、豈不信乎、天下譬如一人、兵革譬如疾病、天下

國脉之所以壽不與麟鳳之詳´得人則治、失人則亂、 之經兵革亦多、每一兵革、天下之氣衰、王者改正朔、

用賢才則盛、用譜族則衰、況親々、賢、尊貴,其義易服色、制禮作樂、所以扶天下之氣而盛之也、譬如

一轍、並行不悖、皆所以用人之道乎哉、故官人以譜「人每一疾病元氣衰缺、補養調攝、漸復常也、昔者唐

族、不以才德、厚於親々尊貴、而薄於賢々、夫唯賢 虞之化、至夏桀初衰、湯聖人也、故補養調攝至矣、

々之道廢、國無賢才、被褐懷璧者、亦且晦迹於山林、 故又盛矣、至紂再衰、武王周公聖人也、補養調攝至

以待後世聖人、君子視天下之盛衰、猶越人視秦人之一矣、故又盛矣、至戰國三衰、秦始皇非聖人、非聖人

肥瘠、始不相與也、治道學術、離爲二途者、始乎不 而創業天下者、始于始皇、不知所以補養調攝之、天

能用人矣、自是而後衆疾並興、風俗萎靡、國勢不振、下始不及古、秦而下、聖人之道不傳古今、於是乎鴻

彷彿周季、誰敢謂不然、子思曰、聖人之官人、猶大|溝、今無兵革、則便以爲大平、是大不可、太平者、

匠之用木也, 取其所長、棄其所短、人非聖人、孰能 以禮樂之化言之、禮樂如時雨之化、人各得其所、鳥

無瑕、惟能用其瑜、而不問其瑕、天下無棄人、是用|獸魚鱉咸若、草木條達、五日一風、風不鳴條、十日

人之道也、然不知人則不能用、故知人爲急、黃帝龍 一雨、雨不搖塊、然後太平可得而言矣、天下之患在

顔、顓頊戴午、帝嚳駢齒、堯眉八采、舜目重瞳、禹 詳於近計、略於遠圖、近計者、其區盡在總數年之間、

摧如死灰不復然"天下日趨于衰弊、滔々不返、如江河|耳三漏、湯臂再肘、文王四乳、武王望陽、周公背僂、

雖然十步之內、必有芳草、四海之廣、豈無俊才、故一用人在擇才德而官之、才德之人、或在上、或在下、

雖學校荒廢、育才之道、不復修、其天才超衆、自能 若例以譜族取人乎、四凶終不可去、傅說終不可舉、

學問、以成其才也、往々有之、有之而不用、則與無」且欲備百僚之名、而不問才德之實則莫如鑄金刻木

之同、梗楠橡樟之朽空谷、明珠大貝之委棄海濱、莫爲人、而列於朝也、其容儼然、不爭不怒、且莫食祿

之探、識者惜焉、今有蹂蹈三尺文錦於泥塗之中者、珠之費矣、夫由匹夫、而登三公、解布衣而被文采、大

人必痛心、遽取而洗之者、常情爲爾、文人在草菜之 丈夫之志願存矣,今三公匹夫、一定不可易、布衣文

中、賢者之處衡茅之下、蹂蹈之類也、人生不遽取而一采、一服不可解、是摧折天下丈夫之志、丈夫之志、

法而已、無法則不立、無人則不行、法者一立而不可 洗之、又下土焉、可謂察於小、而昧於大矣、綿之葛

易、用之能通其變者人也、先王之治、以人用法、後 在於曠野、良工得之、以爲絺紵、良工不得、枯死於

世之治、多不得人、故徒守法、律令科條、以維持之、 野、擊節長歎、夫何有終極乎哉、君子之所學者古也

吏挾簿書刀筆、以斷天下事、夫法本人之所制、久則 所用者今也、若用之則非相將不可、不用則巖穴、

必生弊、弊而不改、人爲法使、莫得有所爲、故人才 穴雖僻、萊雖陋、君子居之、發其所能、以爲文章

能足包法之外、然後能用法、若以法爲主、庸之倫、 藏之名山、託於不朽、孔子若王、春秋不作、子若

危坐守之、一旦有變、五色無主、不至敗亡者、亦幸 相、太玄不成、是豈有所損乎哉、自天下而言之、枯

唉、是以土地壤域之不廣、非朝廷之害也、金銀貨財|死之類也、相將之權、降爲家物、文武百僚世官、

之不殖、非國家之憂也、所患岞乏人耳、古今天下同 雖有命世之才、非搢紳貴族、不得登庸、縉紳貴族以

天下也、豐古之多人、而今之乏人乎哉、其必有使之父祖之蔭爲大官、不問其所學何如、春秋譏世卿、何

者也、夫人才不育則不成、不用則不見、學校致化之一者卿才不世有況相將之才乎、工之子爲工、守高曾

道廢、所以育之者闕焉、郡國選舉之法廢、所以用之一之規矩、天下豈可以高曾之規矩治乎哉、故以譜族取

者熄焉、此二者乏人之由、天下大患、未有甚焉者、 經無明文、雖於親々之道也厚、亦三代所無、盖

不、是其所以爲大也、漢儒乃一一比校、曰某應某、 匹婦有不被堯舜之澤者、若己推而內之溝中、周公思

是亦滞泥不通、王安石以爲災異不足信、開人君今將 兼三王以施四事、有其不合者、仰而思之、夜以繼日、

之志、實爲春秋之罪人矣、故災異之變、竦動人主者、 幸而得之、坐以待旦、盖憂之一字者、王者之至寶、

上天愛護國家之至、人生當夙夜修徳以答寵靈、何必 四海九州之永々不抜之業、悉皆在其中、何也者憂天

問其應不、問其應不者、太史之守也、至於祥瑞之說、則 下之未太平、欲其太平、猶谒者求水、饑者求食、雖

使人君自聖、人君自聖則天下之耳目廢矣、視不以天下欲徐々、不可得也、人君求太平、如是其急、擢才於

之目、而以一人之目、聽不以天下之耳、而以一人之|草萊之中、徵賢於江海之濱者、自不能已、上不聾、

耳、憂樂好惡、不以天下之情、而以一人之情、孑立于一下不暗、壅蔽決、言路開、下情上達、天下之耳目、

殿陛之上、爲匹夫紂、豈不孤乎、是以明主必信災異、兼聽並觀、始可共論太平之治也、太平之道二、人與

疾痛症、莫所不至、惡在其爲太平乎哉、足寒傷心|而却祥瑞、暗君必信祥瑞、而忌災異、不唯暗君以光

民寒傷國、呱之子、上動天心、五穀不登、貨財不 武之賢、頗信圖讖、人主之易惑、亦何甚焉、天下猶

殖、水火盜賊之害、地震旱潦之壁、皆天使之也、蒼|棋局然、故雖敗局未必無勝勢、雖勝局未必無敗勢、

々雖邈乎、吉凶應人、捷於影響、日月不違其行、陰|危亡大亂之世、必有創業一統之人、治平無事之日、

陽不愆其度者、吉之道也、災異變常、可驚可怪者、 必有大逆謀反之臣、以是觀之、人主危懼、日謹一日

凶之道也、苟紀綱未張、治化未洽、則雖五色之鳥 朽索之御六馬、一絲之繫九鼎、未足况其不測之憂也、

翔其閣、一角之獸徘徊其庭、其爲不祥莫大焉、紀綱 許由巢父、去而不顧者、知其憂之大也、聖人之治天

已張、治化已洽、則雖日食地震山崩川竭、又非所憂、 下、意匠慘憺、常以累卵爲心、有終身之憂、無一朝

況無之乎、漢儒爲洪範五行之學、專明災異、如日食 之患、堯以不得舜爲己憂、舜以不得禹皐陶爲己憂、

君德之缺、地震民心之動,其說數十、皆暸々可信、 文王視民如傷、禹思天下有溺者、由己溺之也、稷

本之經、實有所據、然天人之道、幽明相凾、或應或一思天下有飢者、由已飢之也、伊尹思天下之民、匹夫

天下者天下之天下、非一人之天下、故能以天下治天足、居蓬衣白之士、坐而學之有餘、衣冠之人不必賢、

下者、天下太平、若以一人智力之所及治天下、則小「草萊之人不必不肖、惟在其人如何已、夫人主之心、

康或有之、大同則未也,以天下治天下之道有二、日「欲天下之太平、是常情也、非聖賢之君如此,雖中才

用人、曰求言、人與言則下之所有、用人求言、則上庸主亦然、故帝王未有不欲太平之治者、雖然治日常

之任也、昔者堯能用舜、舜能用禹、湯用伊尹、武王|少、亂日常多、太平之化、堯舜擅美、指不再屈、是果

用太公、桓公用管仲、高祖用三傑、先主用諸葛亮、 何故乎哉、盖人主錦衣玉食、居于深宮、金碧之色炫

聖帝明王、英雄之主、賢諸侯、皆能用人、故能成其 於目、絲竹之聲喧於耳、侍從之臣、歌詠蹴鞠、後宮

治、古者諫無官、上自公卿輔弼、下至官屬小吏、百 婦人、傅粉施朱、拾珠翠以相、又有阿諛粧飾之臣、

工之徒、莫不得諫、而倘以爲未足、於是敢諫之皷、 加以祥瑞之說、景星、慶雲、醴泉、甘露、嘉禾、瑞

誹謗之木設矣、迺蒭蕘之言聖人擇焉、唐虞三代、莫|芝、天書、地寶、麟鳳、軀龍、虎豹、犀象、莫不悉

不皆然、高祖雖不學、從諫如流、提三尺劍、以取天 備、表賀慶頌、積如丘山、自堂上至堂下、呼萬歲者、

下者、非其威武能過秦項、以其不自用而能用人、不一紛紛相屬、文人好奇、仍附會其事、下筆著篇、仰贊

自信而能從諫、故能用人取言者、視不以一人之目、 聖德、以爲五帝不足六、三王不足四、於是人主高枕、

而以天下之目、聽不以一人之耳、而以天下之耳、憂「謂天下已太平、元元己安樂、是以不求人於漁樵、

樂好惡、不以一人之情、而以天下之情、捨已從人、 不徵言於蓬蒿、泰然以爲安矣、然菜色之民、涕泣乎

同人于野、是以天下治天下之道而已、然則堯舜其君、 道路、指蒼蒼以自冤者幾千人、都鄙困窮、遠近騷動、

天下

堯舜其民者、四海之內、孰不任其責、在廟堂之上、

、每苦不

則措之事業、親致稷契之功、在山林之下、則託之結
歌、遠慕顏閔之志、用捨有命、行藏有時、至以天下
爲心、則未嘗有異也、經綸之業、臺鼎之任九五
投闐脚字作示字
飯於牖下 檀弓云子游曰飯於牖下、小飲於戸內、 愛日齋隨筆孝經說
意、悲哀志懣氣盛、故袒而踊之、所以動體安心下
氣也、婦人不宜袒、故發胸擊心踊殷々田夕、如
壞牆然、悲哀痛疾之至也、故曰辟踊泣哀以送之、
卜其宅兆 案士喪禮、筮宅卜 此經則據大夫以上而
言也、小宗伯疏、孝經云卜其宅兆、注、兆以爲龜兆
解之、此兆爲墓塋兆者、彼義得兩合、相兼乃具、
經云、卜葬兆、甫窒亦如之、注、兆墓塋域、唐
子西曰、古人建都邑立室家、未有不擇地者、如書
達觀新邑營、卜瀍澗之西、詩升虛望楚、降觀于桑、

度其隰原、觀其流泉、盖自三代時已然矣、今凡通

都人府、山水固皆翕聚、至於百家之邑、十室之市、

亦必倚山帶溪、氣象四合、若風氣虧踠、山水飛走

則必無人烟起聚、此誠不可不擇也、乃若葬者藏也、

藏者欲人之不得見也、古人之所謂卜其宅兆者、乃

孝子慈孫之心、謹重親之遺體、使他日不爲城邑道

路溝渠耳、借曰精擇、亦不過欲其山水回合、草木

茂盛、使親之遺體得安耳、豈籍此以求福利乎、

邪代醉編

二古城 貞吉 重校

井田 幸男

武藤 嚴男

餘字、炫本止千八百七字、異今文僅二十餘字、孫

本云異二十餘字者、即古文也、其異四百餘字者、

或云張霸僞書、

桓譚新論云、古孝經千八百七十二字、今異者四百

之心、非寒之謂也、春雨露旣濡,君子履之、必有

怵惕之心、如將見之、

按祭 上有其字

春雨既濡 祭義云霜露既降、君子履之、必有悽愴

春秋祭祀 閟宮箋、春秋猶言四

卜字下可有件字

也、語亦出坊記、而首多浴於中雷一句、

漏水 御注疏引此傳、作有伏石涌水、

以鬼享之 祭義云、君子生則敬養.死則敬亭、注、

享猶祭也鄉也、陸云鄉也許亮反、鼓人以路鼓々鬼

享、注鬼享、々宗廟也、鼎云、謂之鬼享者、以別

天神地示也、

大斂於阼、殯於客位、祖於庭、葬於墓、所以即遠

在棺曰柩、動尸擧柩、哭踊無數、惻怛之心、痛疾之

愛日齋隨筆

哭泣擗踊哀以送之 問喪云、三日而斂、在牀 尸、

俯而就之、不至焉者、跛而及之、喪服四制、賢者

不得過、不肖者不得不及、此喪之中庸也

俯就企及 成文理、則釋之矣、

含人下试有注

二十五月而畢 三年問云三年之喪、二十五月而畢、

杖然後起 檀弓文、

子

不滅性 檀弓云、喪不慮居、爲無庸也、毀不危身、

也、

足文理 襄二十五年左傳言以足志、文以足言、杜

聖人立制 三年間先王焉爲之立中制節、

舉火、

圓外方、簋、内方外圓、皆受斗二升、旊人云、

左、君薨以是舉、

水漿不入 檀弓、子思曰君子之朝親之喪也、水漿

謂三日之内、孝經云云、謂三日之外乃食也、

衣衾以舉之 檀弓曰、扶君、卜人師扶右、射人師扶

三日而食 閒傳云、斬衰三日不食、孔疏云、不食者、

爲之棺椁 孔穎達以椁字爲句、衣衾連下讀、得傳意

制也、

不入於口者三日、又問喪云、水漿不入口、三日不一簠簋 鄭注周禮云、方曰簠、圓曰簋、疏云、簠、内

注、足猶成爲無後也、雜記云、毀瘠爲痛、君子弗爲、毀而死、

君子謂之無不勝喪 曲禮云、不勝喪、乃比不慈不孝、

若駟之過隙、然而遂之、則是無窮也、故先王焉為

之立中制節、壹使足以檀弓子思曰先王之制禮也、過之者、

簋、實一觳、豆實三而成㪷、豆四升、三豆則一千

二升可知、周官舍人、凡祭祀、共簠簋、注、方口

簠、盛黍稷稻粱器、賈公彥疏云、案公食大夫、簠成

稻粱簋盛黍稷、少牢疏引孝經注云、外方曰籍、孝

經緯鉤命決云、敦規首、上下圓相連、簠簋、上圓

下方、法陰陽、小牢注、敦有首者、尊者器飾也、

飾蓋象龜、周之禮、飾器各以其類、龜有上中下甲

疏、敦益既象龜、明簠 亦 象龜 爲之、考工記、瓶

人爲簋、實一嶽崇尺、厚半寸、釋云、祭宗席用

木簋、今此用瓦簋、據祭天地及外神尚質、器用陶

匏之類也、按簋法圓、舍人云、方曰簠、圓曰筥、

指損

泩與此合 孝經注曰、内圓外方者彼發簠而言

之

愛日瘵浩筆

按大功哀殺、故哭聲宛傻、童子未能聲、直送其

哀而已、按漢書天文志、哀局、甘氏星經作依局、

聲字上件成字

哭不依 雜記曰、曾申問於曾子曰、哭父母有常聲乎、

曰、中路嬰兒失其母焉、何常聲之有、汪、嬰猾

彌也、言其若小兒亡母啼號、安得常聲乎、

不偯、陸德明云、侯、於豈反、說文悠、云痛聲

又廣韻、於豐反、集韻韻會、隱豈切並音扆、哭餘

聲、禮雜記、童子哭不鋗、又閒傳大功之哭三曲而

依、鄭注、三曲一舉聲而三折也、依聲餘從容也、

喪親章

瑕不謂、中心藏之、何日忘之、

謂字下岔有矣字

詩云 表記云、子曰事君遠而諫則謂也、近而不諫則

尸利也、又曰事君欲諫、不欲陳、詩云心乎愛矣,

有道之君 管子君臣篇、有道之君、正其德以莅民、

而不言智能聰明、智能聰明者、下之職也、所以用

智能聰明者、上之道也、

詳才能 管子君臣篇、論材量能謀德而舉之、

上之道也、專意一心、守職而不勞、下事之也、

謨明弼諧 皐陶謨、

無過之地 禮運之文、

明有內發 白虎通喪服篇、服者思從內發、故為之

二九三

衰麻在身 表記云君子衰絰、則有哀色、端冕則有

敬色、甲冑則有不可辱之色、

稱情立文 三年問云三年之喪何也、曰稱情而立文

表飾中情 曾子問君子禮以飾情.

眼美不安閉樂不樂食旨不甘此哀戚之情也 問喪云

夫悲哀在中、故形變在外也、痛疾在心、故口不甘

味、身不安美、

言不文 喪服四制曰、三年之喪、君子不言、書云、高

宗諒闇、三年不言'此之謂也、然而言不文者、謂

臣下也、又曰、禮、斬衰之喪、唯而不對、齊衰之

喪、對而不言、大功之喪、言而不議、緦小功之喪、

議而不及樂、雜記亦云、三年之喪、言而不語、

而不問、

斬衰之哭 閒傳云斬衰之哭、若往而不反、齊衰之

哭、若往而反、大功之哭、三曲而、

禮無容 禮器云至敬無文、父黨無容、士相見注、容
謂趨翔也、案禮謂威儀也、
依亦音哀也、曹植詩、君懷良不開、賤妾當何依、
可證、
思補過 御注以爲君過是矣、蒸民詩曰、袞職有闕、
維仲山甫補之、傳云、仲山甫補之、善補過也、宣
二十年左氏傳、士會諫靈公曰、人誰無過、過而能
案史記管晏列傳、論列二子行事、而管子則曰善因
禍而爲福、轉敗而爲功、晏子則曰國有道即順命、
無道即衡命、而賛乃引語曰、將順其美、匡救其惡
故上下能相親也、以鑿於管子、引進思盡忠、退思
補過、以繫諸晏子、太史公蓋亦有取於此章之旨爾、
晋語史黯對趙簡子曰、夫事君者、諫過賞善、薦可
而替否、獻能而進賢、擇才而薦之、朝夕誦善敗而
納之、道之以文、行之以順、勤之以力、致之以死、
聽則進、否側退、
事君章
二十六年左傳云臣之祿君實有之、義則
否則奉身而退、專祿以周旋、戮也、

尸位 五子之歌大康尸位、漢許后傳曠職尸官、

師古注尸主也、妄主其官、

奉身

三諫 曲禮云爲人臣之禮不顯諫、三諫而不聽、則

逃之、

必犯嚴顏 檀弓事君有犯而無隱、

肥後文獻叢書第二卷

淸法 荀子解蔽篇、中心不定、則外物不淸、汪淸

明審也、呂刑、皇帝淸問下民、孔傳、帝堯詳問民

患、

謂將順其美也、驕謂言行謀從、恃知而慢之、

按少偉郡注無實行從四字孔致有曾行 用字慢之

將順匡救 鼎口將讀爲獎、春秋僖公二十八年左傳、

要言曰、皆獎王室、無相害也、杜注、獎助也、陸

德明獎將丈反、孔穎達曰、勸獎者、佐助之意、故

爲助也、字彙、子兩切音獎、詩大雅、天不我將、

哀紀、獎厲大子、師古曰、獎彻使也、字彙資良切、

助也、相如傳、補過將美、洛誥、迪將其後、傳、教

道將助我今已後之政、按少儀、為人臣下者、有諫

而無訕、有亡而無疾、頌而無謂、諫而無驕、怠則

張而相之、廢則埽而更之、謂之社稷之役、鄭注頌

獻可替否 昭二十年左氏傳,晏子云君所謂否、

有可焉、臣獻其可、以去其否、

有犯無隱 檀弓曰事君有犯而無隱、

改、善莫大焉、詩曰、袞職有闕、惟仲山甫補之、

能補過也、君能補過袞不廢矣、宣十二年左氏傳

士貞子曰、林父之事君也、進思盡忠、退思補過、

社稷之衛也、

訾食 管子形勢篇小謹者不大立、訾食者不肥體、

註、訾惡也、惡食之人、憂嫌致瘠、劉績曰、疾

移切、嫌食而多惡、形勢解、紫者、多所惡也、諫

者、所以安主也、食者、所以肥體也、主要諫則不

安、人訾食則不肥、故曰紫食者不肥體、注、移

切、嫌食貌、按韻會小補、炸、蔣氏反、引說文苛

也、徐以爲呵呰之義、又疾之反、苛也、瑕也、字

彙乂見呲字、疾移切音慈、嫌食貌、並而觀之、訾

毕呲四字、音義通用也、

過而能改 宣二年左傳、士季曰人誰無過、過而能

改、善莫大焉、

一日萬機 皐陶謨、一日二日萬機、

尙書禂字作

疑丞輔弼 尙書大傳古者天子必有四隣、前曰疑、

後曰丞、左曰輔右曰弼、天子有問無以對責之疑、

可志而不志責之丞,可正而不正責之輔、可揚而不

揚責之弼、其僻視卿、其禄視次國之君也、文王世

子、虞夏商周、有師保、有疑丞、

焉、臣献其可、以去其否、是以政华、而不干、民

無爭心、又云、以水濟水、誰能食之、鄭語、和實

生物、同則不繼、

會諫靈公曰、人誰無過、過而能改、善二九一

號泣而後之 曲禮子之事親也、三諫而不聽、則號

泣而隨之、

而不從 鼎曰而猶之、

見志不從、又敬不違、勞而不怨、

皇侃本敬字下有字

父有過 內則云父母有過、下氣怡色、柔聲以諫、

諫若不入、起敬起孝、論語里仁篇事父母幾諫、

忠告、論語顏淵篇忠告而以善道之、包咸曰、忠告

以是非告之、以善道道之、

以家爲號 按周禮天官家宰九賦、四曰家削之賦、

疏、二百里之外地名削、其中有大夫采地、謂之家

故名家削、又字彙大夫之邑曰家、

莫大焉、

宗老 邢蔬引此傳作室老、按宗老即宗人之老、魯

語、公父文伯之母、欲室文伯、饗其宗老、師亥云

宗室之謀、不過宗人、

士李又随台下思神過法亦同

誰非聖人 晋王述曰人非堯舜、誰無過、宣二年士

降殺以兩 哀二十六年左氏傳鄭伯賞入陳之功享子

展賜之先路三命之服、先八邑、賜子產次路再命之

服、先六邑、子產辭邑曰、自上以下、降殺以兩、

禮也

閨、說文曰、特立之戶、土圜下方、有似圭、玉篇、

閨門章

父頑母嚚 堯典父頑母嚚象傲、克諧以孝、烝 雙

不格姦、

罪於萬民也、是故爲善必自内始也、荀子大略篇、

賜予其宮室、猶用慶賞於國家也、忿怒其臣妾、猶

用形罪於萬民也、大學、君子不出家、而成敢於國、

言治以下 管子明法解、

作淵字下同

由字皆同

未有治而任可知者、先脩之謂也、故孝子能事君

悌弟能事長、君子一孝一悌、可謂知終矣、

居家而理 曾子立事云、是故君子、爲小由爲大也

居由仕也、備則未爲備也、而勿慮存焉、事父可以

事兄、事兄可以事師長、使子由使臣也 俊弟由使

承嗣也、能取朋友者、亦能取所予從政者矣、賜與

其宮室、亦由慶賞於國也、忿怒其臣妾、亦由用刑

无字作君字

下能字亦 同

君子事親孝故忠可移於君 祭統云、内盡於已、而外

順於道也、忠臣以事其君、孝子以事其親、其本一

也、曾子立孝曰、是故未有君、而忠信可知者、孝

子之謂也、未有長、而順下可知者、悌弟之謂也、

任字作能什二字

孝經緯之語也代醉福云、

肥後文獻叢書第二卷

可否相濟 昭二十年左傳、晏子曰、君所謂可、而

有否焉、臣獻其否、以成其可、君所謂否、而有可

疑思問也 論語季氏篇文、

若夫 疏、若夫慈愛、並却明前理、而下有其趣,故

言夫以起之、劉瓛云、夫猶凡也、鼎按、夫有所指

之僻、

白虎通、諫間也、更也、是非相間、革更其行也、

說文曰、諫止也.謂罷止其失也、

諫章

人有嚴君 易象傳云、家人有嚴君焉、父母之謂也

父謂 按謂疑當爲爲、殷之誤也、

嚴親嚴兄 坊記云、子曰、父子不同位、以厚敬也、

書云、厥辟不辟、忝厥租、注、爲君不君、與臣子

相褻、則辱先祖矣、君父之道、宜尊嚴、

子曰閨門之内具禮矣乎 鼎按此章言聖人之所以治天

下、父子君臣之禮、咸備具於閨門之内、所謂居家

而理、故治可移於官也、

夫禮 隱十一年左氏傳文、

宮中門小者曰闈,左傳,篳門閨竇、又通作圭、禮

儒行、華門圭竇、注、小戶如圭形、

日竇团单

鬼神著矣 鼎案、著者、謂洋々乎如在其上、如在其

左右也、祭義曰、骨肉斃于下、陰爲野土、其氣發

揚于上、爲昭明、焄蒿悽愴、此百物之精也、神之

著也、吳澄曰、著、猶祭義致愨則著之著、如見所

宗廟致敬不忘親也 祭義曰、築爲宮室、設爲宗祧

以別親疏遠邇、敢民反古復始、不忘其所由生也、

脩身愼行恐辱先也 祭義曰、樂正子春云、惡言不出於

口、忿言不反於身、不辱其身、不羞其親、可謂孝矣、

追孝繼思 坊記曰祭祀之有尸也 宗廟之有主也、

示民有事也、修宗廟、敬祀事、教民追孝也、祭統

曰、祭者所以追養繼孝也、

故雖天子必有尊也言有父也 孔穎達祭義疏、雖天子

必有父也、注、謂養老也、祭義云、至孝近乎王、

雖天子必有父、至弟近乎霸、諸侯必有兄、先王

之教、因而弗改、所以領天下國家也、注天子有所

父事、諸侯有所兄事、謂若三老五更也、曾子問、

孔子曰、天子巡守、以遷廟主行、藏於齊車、言必

有尊也、注、齊車金輅也、

人神不擾 楚語古者民神不雜、

樂明備、天地官矣、

求忠臣 後漢書韋彪傳彪上議曰、夫國以簡賢爲務、

賢以孝行爲首、孔子曰事親孝、故忠可移於君、是

以求忠臣、必於孝子之門、注、求忠臣於孝子之門、

二八九

廣揚名章

詩 案陳暘解泮水第七章云、隆禮樂之敢于西雝、而

自西自東、自南自北、無思不服者、近者悦之、遠

者懷之、大學之道也、

癘鬼 癘與禪同、無後鬼也、春秋傳曰、鬼有所歸、

乃不爲厲、祭法云、王爲群姓立七祀、曰泰厲、疏

云、謂古帝王無後者也、此鬼無所依歸、好爲民作

禍、故祀之、

光於四海 祭義、曾子曰、夫孝、置之而塞乎天地、

薄之而横乎四海、施諸後世、而無朝夕、推而放諸

東海而準、推而放諸西海而準、椎而放諸南海而準、

推而放諸北海而準、詩云自西自東、自南自北、無

思不服、注、放猶至也、

依歸 金縢我先王亦永有依歸、又昭七年左傳、子

產曰、鬼有所歸、乃不爲厲

也

祭也、彰謂微之顯、洋々乎如在其上、如在其左右

故聖人作樂以應天、制禮以配地、禮

克明厥德 尙書謂任用俊德之士、故傳改俊

器曰五献察、鄭五献祭四望山川也、方愨曰、四

望山川地道、故言察、

王肅家語注、章咸速也

明察 吳澄云、明察、謂于其禮其義能精審也、案禮

、易以說安之、民皆有

父之尊、有母之親、正義云皆孔子閒居之文也、樂

者人之所愛、當自彊以敢之、易謂性之和悅、當以

安民、故云悅安之、鼎曰、孔子間居當爲表記

應咸章

儉韻感動也、从心咸聲、增韻格也觸也、易雜卦

福佑、故曰彰矣、疏、明王之事天地、既明察、必

致稠應、則神明之功彰見、謂陰陽和風雨時、人無

疾厲、天下安寧也、

悌

以說安之、

樂易 毛詩傳云樂以彊敢之瘱薄於太折、祭地也、兆於南郊、所以定天位也、

祭地於太折在北郊、就陰位也、郊處各在聖王所都

之南北、書曰、越三日丁巳、用牲于郊、牛二、周公

加牲告徙新邑、定郊禮於雒、明王聖主、事天明事

地察天地明察神明章矣、

父北面而事之、所以明子事父之道、郊特牲云、

神象也、祭統云、尸在廟門外、則疑於臣,在中

則全於君、君在店門外、則疑於君、入廇門、則全

於臣全於子、是故不出者、明君臣之義也、

天子祖而 樂記及祭義文、

天地明察 漢郊祀志、禮記曰、燔柴於太壇、祭天也

之道、孫爲王父尸、所使爲尸者、於祭者子行也、

肥後文獻叢書第二巻

詩云 案君子禮樂以成德、故樂易于人也、梓材、王-鬼神章矣 御注云、事天地能明察、則神感至誠而降

惟德用、和懌先後迷民、禮表記、愷以彊敢之、別也、禮運曰、祭帝於郊、所以定

天位也、祀社於國、所以对地利也、祖腐、所以本

仁也、山川、所以鬼神也、五祀、所以本事也

云、故禮行於郊、而百神受職焉、禮行於社、而百

貨可極焉,禮行於祖庙,而孝慈服焉,禮行於五祀、

而正法則焉、故自郊祀祖廣山川五祀、義之脩而戰

之藏也、是故夫禮必本於太一、而爲天地、轉而為

陰陽,變而爲四時、列而爲鬼神、其降日命,其官

於天也、樂記曰樂者敦和、率神而從天、禮者別宜、

居鬼而從地、威者也、得民則威立、失民則威廢、蛟龍待得水、

而後立其神、人主待得民、而後成其威、

三老五更 文王世子曰、設三老五群老之席位

焉、鄭注、三老五更各一人也、皆年老更事致仕者也、

天子以父兄養之、示天下以孝悌也、名以三五者取

象三辰五星、天所因以照明天下者、群老無數、其

禮亡、以鄉飲酒禮言之、席位之處、則三老如賓、

五更如介、群老如衆賓必也、孔疏、三老五更各一

人、蔡邕以爲更字爲叟、叟老稱、又三老爲三人、

五更爲五人非鄭義也、三辰謂日月星、五星謂東方

歳星、南方熒惑、西方太白、北方辰星、中央鎮

星、其三辰之星者、二十八宿及諸星也、三老如賓、

五更如介、按鄉飲酒注、敷席、賓席牖前南面、介

席西階上東面是也、羣老如衆賓、按鄉飲酒注、席

衆賓於賓之西南面、各特焉是也、樂記、食三老五

更於大學、鄭注、三老五更、互言之耳、皆老人更

知三德五事者也、孔蹺、三老五更互言之耳者三老

亦五更、五更亦三老、故云皆老人、更知三德五事

者也、三德正直剛柔、五事謂貌言視聽思也、文王

世子注云、象三辰五星者、義相包、漢書禮樂志、

*日療隨筆

又曰君致齊於外、夫人致齊於內、然後會於大廟、

君純冕立於阼、夫人副禕立於東房、君執圭瑕裸

大宗朝璋瓚亞祼、又曰、及入舞君桃干戚就舞位、

君爲東上、冕而總干、率其群臣、以樂皇尸、夫祭

二七

此君納干戚塹係乾之文則又曰二字岔作

按君

皇尸 既醉傳、公尸天子以卿言諸侯也、箋曰、

諸侯有功德者、入爲天子卿大夫、故云公尸、公君也、

養三老五更於辟廱、李奇曰、王者父事三老、兄事

五更、蔡邕曰、五更之更當爲叟、案列子禾生伯子

出行經坰、外宿於田、又嫂字晋帖作、則知其

說之非、白虎通鄉射篇、王者父事三老、兄事五更

者何、欲陳孝悌之德、以示天下也、又曰、不正言

父兄、言五更者何、老者、壽考也、欲言所合者多

也、更者、更也、所歷者衆也、即如是不但言老

言三何、欲言其明於天地人之道而老也、五更者欲

言其明於五行之道、而更事也、三老五更幾人乎、

曰各一人、何以知之、既已父事、父一而已、不宜

有三、又王者不臣篇、不臣三老五者、欲率天下

爲人子弟、禮曰父事三老、兄事五更、鼎按言五之

間、疑脫三老二字、邢昺疏、按舊注用應劭漢官儀

云天子無父、父事三老、兄事五更、

殊事 樂記曰、禮者殊事合敬者也、樂者、異文

合愛者也

禮經三百 禮器曰、經禮三百曲禮三千、其致一也、

中庸曰、禮儀三百、威儀三千、春秋說、禮經三百、

威儀三千、禮說正經三百動儀三千、

愷悌君子、按君子禮樂以成德、故樂易于人也、禮

表記、愷以彊敢之、悌以說安之、梓材、王惟德用、

和懌先後迷民、

按詩曰云示疑係舛

禮者敬而已矣 僖十一年左傳、禮國之幹也、敬禮之

輿也、行不敬則禮不行、禮不行則上下昏、詩曰、

性有男女之情、妬忌之別、爲制婚姻之禮、有交接

長幼序、爲制鄉飲之禮、有哀死思遠之情、爲制喪

祭之禮、有尊尊敬上之心、爲制朝覲之禮、哀有哭

踊之節、樂有歌舞之容、正人足以副其誠、邪人足

以防其失、故婚姻之禮廢、則夫婦之道苦、而淫辟

之罪多、鄉飲之禮廢、則長幼之序亂、而爭鬭之獄

蓄、喪祭之禮廢.則骨肉之 恩薄、 而背死忠先者

衆、朝聘之禮廢、則君臣之位失、而侵陵之漸起、

故孔子曰、安上治民、莫善於禮、移風易俗、莫善

於樂、

肥後 獻叢書第二卷

蛟龍得水 管子形勢篇、蛟龍得水、而神可立也、

虎豹得齒、而威而可載也、解曰、蛟龍水蟲之神者

也、乘於水則神立、失於水則神廢、人主天下之有

案、禮記仲尼燕居曰、古之君子、不必親相與言也、

以禮樂相示而已、鄉飲酒義云、民知尊長養老、

而后乃能入孝弟、民入孝弟、出尊長養老、而后

成敎、成敢而后圀可安也、君子之所謂孝者、非

家至日見之也、合諸鄉射、散之鄉飲酒之禮、而

孝弟之行立矣、

廣至德章

子弟臣 祭義曰、祀乎明堂、所以敎諸侯之孝也、

食三老五更於大學、所以敢諸侯之弟也、朝覲、所以

敎諸侯之臣也、樂記曰、祀乎明堂而民知孝、朝覲

然後諸侯知所以敬、食三老五更於大學、天子袒而

割牲、醬而饋、執僻而酳、冕而摠干、所以諸

侯之弟也、注、三老五更老人、更知三德五事者

也

說 案說謂感動歆喜、興於孝弟也、緇衣曰、長民

者、章志貞教尊仁、以子愛百姓、民致行已以說其

上矣

二元六

愛日齋隨筆

風俗 周禮合方氏疏、風謂政教所施、故曰、上以風

化下、又云、風以動之、俗謂民所承襲、故曰、君

子行禮、不求變俗也、樂記曰、樂也者、聖人之所

樂也、而可以善民心、其感人深、其移風易俗、故

先王著其敢焉、又云、樂行而倫淸、耳目聰明、血

教民親愛 書伊訓、立愛惟親、立敬惟長、始于家邦、

終于四海

按存於已則先修德而後行道、施於人則先行道而

後示德、是至德要道之所以互爲先後也

廣要道章

鼎按親當作身、聲之誤也、今案據任法篇

之言作親爲是、

其親

利莫害莫

於亂、

繫辭、子曰小人不恥不仁、不畏不義、

管子正世篇、夫利莫大於治、害莫大

不恥不畏

非孝者亡親 按孔傳以親爲親愛、

祀、無廢二勳、敢不辟邑、乃立臧爲、紇致防而奔

齊、此所謂要君也、朱熹曰、要有挾而求也、著不

得請、則將據邑以叛、是要君也、表記曰、子曰、

事君三違、而不出竟則利祿也、人雖曰不要、吾弗

信也

此之謂也、又云、禮之敎也凝、其正邪也於未形使

人日徙善遠罪、而不自知也、是以先王隆之也、郊

特牲、男女有別、然後父子親、父子親然後義生、

然後禮作、禮作然後萬物安、漢禮樂志曰、人函天

地陰陽之氣、有喜怒哀樂之情、天稟其性、而不能

節也、聖人能爲之節、而不能絕也、收象天地而制

禮樂、所以通神明立人倫、正情性缔萬物者也、人

二元五

按教字下當有

安上治民莫善於禮 經解、禮之於正國也、猶衡之於

輕重也、繩墨之於曲直也、規矩之於方圓也、故衡

誠縣、不可欺以輕重、繩墨誠陳、不可欺以曲直、規

矩誠設、不可欺以方圓、君子審禮、不可誣以姦詐、

是故隆禮由禮、謂之有方之士、不隆禮不由禮、謂

之無方之民、敬讓之道也、故以奉宗廟則敬、以入

朝廷、則貴賤有位、以處室家、則父子兄弟和、以處

鄉里、則長幼有序、孔子曰安上治民、莫善於禮

上下亂 孟子曰、無禮義則上下亂

屏息 論語鄉黨籍、脾氣似不息者

深思遠慮

氣和平、移風易俗、天下皆寧、說苑云、觀其俗而

知其風、

子曰五刑之屬三千 呂刑曰、墨罰之屬千、罰之屬千

祭義曰、衆之本敢日孝、其行曰養、養可能也、

爲難、敬可能也、安爲難、安可能也、卒爲難、父母既|

沒、慎行其身、不遺父母惡名、可謂能終矣、仁者仁此者也、禮者履此者也、義者宜此者也、信者信此者也、强者强此者也、樂自順此生、自反此作、

案以首章有身體髮膚不敢毀傷之言、乃言不孝之罪必及刑辟以戒之、

五刑章

繇 案固疑由訛、猶由三字通用

在醜不爭 襄公十三年左傳、世之治也、君子尙能而讓其下、小人農力以事其上、是以上下有禮、而魂慝黜遠、由不爭也、謂之懿德、及其亂也、君子補其功以加小人、小人伐其技以憑君子、是以上下無禮、亂虐並生、由爭善也、謂之昏德、國家之嫩、恒必由之、案爭爭善也

祖葬 檀弓云、祖於庭、葬於墓、祭道神曰祖

旣葬後反虞 雜記、士三月而葬、是月也卒哭、大夫三月而葬、五月而卒哭、諸侯五月而葬、七月而卒哭、士三虞、大夫五、諸侯七、

肥後文獻叢書第二卷

孔安國日、要約勒也、按小雅斯干、約之

要君者亡

闇々、傳、約束也、釋名、勒絡也、絡其頭而引之也、

字彙、有銜曰勒、論語、孔子曰、臧武仲以防、求

爲後於魯、雖曰不要君、吾不信也、孔安國曰、防

臧武仲故邑也、爲後立後也、魯襄公二十三年、武

仲爲孟民所譖、出奔邾自邾如防、使爲以大蔡納、

請云、紇非能害也、知不足也、非敢私請、苟守先

孔氏云、言不孝之舉大於三千之刑事、

辜莫大於不孝

案、此言不孝之宰、於三千刑中爲最大焉、非謂三

千條外別有不孝之刑也、周禮大司徒、以鄉八刑糾

萬民、一曰不孝之刑、賈公彥疏不孝之刑者、有不

孝於父母者則刑之、孝經不孝不在三千者、深寨逆

源、此亦一說、

啣罰之属五百、宮罰之属三百、大辟之属二百、五

刑之属三千、王制曰、刑者俐也、俐者成也、一成

不可變、張逸曰、夏三千、周二千五百、長孫無忌

律疏序、夏刑三千條、案穆王訓夏贖刑、其書曰、

五刑之屬三千、是夏刑三千也、周禮司刑、掌五刑

之法、墨罪五百、劓罪五百、宮罪五百、剕罪五百、

殺罪五百、是周二千五百也

能有其國家 能有國家以下、北宮文子語、見襄三十

君有君之威儀以下、 見于襄三十一年左氏傳、

容止可觀 孔傳、容止、威儀也、雜記、威容稱其服、鄭

注、容威儀也、士相見、容彌蹙、鄭注容謂趨翔、

正其衣冠 論語堯曰篇、君子正其衣冠、其瞻

視、儼然人望而畏之

以臨其民、左傳作其下,

言必信 論語子路篇言必信、行必果、意與此不

同、德誼可象 誼一作儀、在氏傳作行、

言則思忠 論語季氏篇、言思忠、事思敬、

言思可道行思可樂 邢昺曰、道、謂陳說也、樂、謂

使人悅服也、論語學而篇、君子不重則不威、正與

此章相發

富貴浮雲 論語述而不義而富且貴於我如浮雲、

味食 鼎按昧貪也、文二十六年左傳、楚王故昧

於一、

得志 今文作雖得之君子不貴也

爲度、鄭縫人註引書分命和仲度西日柳穀、度陸氏

音宅、韻會小補引漢書注云、古文度宅同、按字典、

度宅古文俱作宾庑、則亦知其吉文同也、

虔恭朝夕 商頌那篇、温恭朝夕、朝事有恪、又

襄二十三年左傳、公鉏敬共朝夕、恪居官次、

三

病則致其憂喪則致其哀祭則致其嚴、祭統云、孝子之

事親也、有三道焉,生則養、沒則喪、喪畢則祭、

養則觀其順也、喪則觀其哀也、祭則觀其敬而時也、

盡此三道者、孝子之行也、内則曰、子事父母、鷄

初鳴咸盥漱至於父母之所、敬進甘脆而後退、又祭

義曰、妻可能也、敬爲難、是盡敬之義也、文王世

子、文王有疾、武王不說冠帶而養、文王一飯、亦

一飯、文王再飯、亦再飯、又云、王季有不安節、

則文王色憂行不能正履、

子曰孝子之事親也居則致其敬養則致其樂 眞德秀云

所謂養則致其樂者、言人子養親、當有順適其意、

使之喜樂也、大凡高年之人、心歡樂則疾病必少、

若中懷憂戚、則易損天年、昔老萊子雙親年高、己

亦七十、常著綵衣、為兒童戲於親側、欲親之喜、

正似此也、

保族供祀 一本作保族供祭祀、左氏傳供祀作宜家

紀孝行章

一年左氏傳

通用、大雅文王有聲、宅是鎬京〝禮記書宅

至死而不

不宅於善 不宅今文作不在、左傳作不度、鼎按、宅

凡上之所施 管子形勢解民之所以守戰無味之食也、

亂、雖大輕也、天祚明德、有底止也、

也

經皆以養老

而言

曰兼之者父也、

父母而婉、禮之善物也

爲兼者簿 而其所薄者厚、昭二十六年左氏傳、晏子曰君合而不「子曰
不愛其親而愛他人者謂之悖德、大學曰、其所厚

猶養也、

父慈而

孝優劣章第十二

則民

去之

二二

父母生績章

其法令、信從其敎之謂成、服從其政之謂治、案治

案生謂生育也、按管♀字上有加字

字從水者、言號分之行、猶水之得道理流行、

小雅正月篇、父母生我、又周禮大

宰六典、六日、事典、以富邦國、以任百官、以生

萬民、鄭注生衰者、上之所以施於民厚也、故上旒薄則民之軌上亦

薄、故薄施而厚責、君不能得之於臣、父不能得之

於子、又日民之從有道也、如飢之先食也、如寒之

先衣也、如暑之先陰也,故有則民歸之、無道違臣共而不貳、父慈而敎、子孝而箴、兄愛而友、

弟敬而順、夫和而義、妻柔而正、姑慈而從、婦聽

之事 士章生之 周禮大宰六典、六曰事典、以富邦國、

以任百官、以生萬民、注、生猶養也、正月篇、父

母生我、傳、父母謂文武厚莫重焉 重直龍反、

撫育顧復 詩蓼莪篇拊我畜我長我育我顧我復我

攻苦之功 漢書叔孫通傳、攻苦食啖、顏師古曰

啖當作淡、無味之食也、言共攻擊勤苦之事、而食

未之有也、與此以訓則昏 鼎曰、昏以行禮言之、所謂德禮之悖、

昏也、僖十一年左傳、禮國之幹也、敬禮之輿也、

不敬則禮不行、禮不行則上下昏、何以長世、又哀

十五年傳、子貢曰、君其不沒於魯乎、夫子之言曰.

禮失則昏、名失則愆、失志爲昏、失所爲愆、生不

能用、死而誄之、非禮也、稱一人非名、君兩失之、

宣三年傳、桀有昏德、鼎遷于商、诚祀六百、商紂

暴虐、鼎遷于周、德之休明、雖小重也、其姦同昏

度古文明堂者、天子太廟、所以祭祀饗功德養老教學

選士、取正室之貌、則曰太廟、取其正室、則曰大

室、取其堂、則曰明堂、取四時之學、則曰大學、

愛日齋隨筆

神明堂 切蝗法 等所記辟廱、帝布政之宮、

、

及

舊說明還去

王城七里

所配、

中、人所致敬、幽隱淸靜、鬼神所居、而使衆學處

焉、饗射于中、人鬼慢醋、死生交錯、四俘截耳、

瘡痍流血、以子犯鬼神、非其理也、茅茨采椽、至

質之物、建日月乘玉輅、以處其中、非其類也、夫

鹿鬼神之居、而祭天于鬼神之室、非其處也、王者五

門、宗廟在一門之內、若射在於廟、而張三侯、又辟雍

在內、人物衆多、殆非宗廟之中所能容也、明堂太

廟者、明堂之內太室、非廟之太廟也、明堂法天之

宮、故可以祭天、而以祖配之、按邕所言、明堂爲五室

之一、自不可易、其以明堂之太廟爲宗廟、則非也、

如準所論、故爲得之、而漢儒相傳、或以明堂爲文

王廟謬矣、又或謂文王廟如明堂制、亦屬附會、孝

經緯,得陽氣明朗、謂之明堂、鄭匠人注、明堂者、

明政之堂、九月大饗五帝、亦稱上帝、即宗祀文王

等文王之廟結業 上圓下方匯明堂

其外有水名曰不肅而成不嚴而治、吳澄云、肅、言其聲容、

一

言

是故親生 吳澄本、此一節在次章厚莫重焉之下

育 說文、養子使作善也从云肉聲、云音他骨切、與

云不同、徐鍇曰、云不順子也、不順子亦教之、泥

順者乎、六書正譌、通作毓、

各以其職來助祭 祭義所謂備物也、表記云、子曰后

稷之祀易富也、又曰、大饗其王事與、三牲魚腊、

四海九州之美味、苟可薦者、莫不咸在、且禹貢所

陳、及庖人所共好羞、若荊州鮭魚、青州蟹貨、亦

此物也、今文無助字、周語云、甸服者祭侯服者祀.

賓服者亨、要服貢、

云明堂、

天子告朔於明堂、朝享於五廟、

梳、用熊氏、

諸侯告朔於大廟、朝享自皇考以下三廟耳、鄭玄以

爲各異者、袁準正論云云、如準之所論、是鄭不同
之意、
記注、文王之廟爲明堂制、杜預以明堂與祖廟
明堂是文王之廟、如明堂之制、故
取其圓水、則曰腔廱、雖名別而實同、用合草、周人
明堂度九尺筵、喘;旗明堂禮誼之堂、即周公相成
王所以朝諸侯者也、酸、明堂者、明政教之堂、
蔡邕圳室
于階之上、王寢與明堂同、則南北七筵、惟有六十三
尺、三室居六筵、南北共有一筵、1 面惟有四尺半、
何得容殯者、案書傳云、周人路寢.南北七雉、東
西九雉、室居二雉、則三室之外、南北各有半雉、長
三丈、則各有一丈五尺、足容殯矣、若然、云周制
者、直制法同、無妨大矣、據周而言、則夏殷王寢
亦制同、而大可知也、何楷日、申培詩說口、清廟
周公成雒邑、奉成王見諸侯、作明堂宗祀文王、以
配昊天上帝、率諸侯祀之、鄭玄曰周公攝攻、制禮
作樂、乃立明堂于王城、又趙商問云、說者謂、天
子廟制如明堂、是謂明堂即文廟耶、鄭答曰、明堂

主祭上帝、以文王配耳、愚謂明堂之作、不始于周

公、自武王之時、業已有之、樂記曰、武王克殷、

祀于明堂、而民知孝、是也、然亦不獨武王有之、

淮南子言、神農之世、祀以明堂、新論亦曰、神農

氏祀明堂、有益而無四方、通典曰、黃帝拜祀上帝

于明堂、爲祀之所自上古而已然矣、諸儒者言、周

按附字上有西字

堂崇一筵、五室、凡室二筵、注明堂者、明政教之

堂、疏云、如鄭意、以夏周皆有五室十二室、周舉

明堂、則宗庙王寢亦與明堂制同也、若然、周人殯

而世之儒者、合爲一郲、取詩書放逸之文、經典似之語、推而致之、考之人情、失之遠矣、宗廟之一

相

爲)

袁準事非之謂、明堂宗廟大學、事義不同、各有所二〇

公營雒邑始立明堂、當自是雒邑之明堂,惟宗祀文

王以配上帝之禮、本防于周公、孝經以此贊周公之

孝、而曰孝莫大于嚴父嚴父、莫大于配天、所云嚴父、

蓋主周公文王而言也、又云、清廇即明堂之大廟、

月令所謂中央土、天子居太廟太室者是也、何以知

之、以茅屋之制知之、左傳言、清廟茅屋、而大戴

禮亦言明堂以茅益屋、上員下方、所以明諸侯尊卑、

漢濟南公玉帶上黃帝時明堂圖、其制中有一殿、四

面無壁、覆之以茅、環之以水、斯知清廟即明堂矣、

蔡邕月分 謂、明堂者天子太庙、所以宗祀、夏世

室、商重屋、周謂明堂、東曰青陽、南曰明堂、西

曰總章、北曰玄堂、中曰太室、人君南面、故主以

明堂爲名、在其五室之中央、皆曰太廟、鶚射養老、

教學選士、皆於其中、故取其宗祀之清貌、則曰

廟、取其正室之貌、則曰太廟、取其尊崇則曰太室、

取其堂則曰明堂、取其四門之學、則曰大學、取其

周水員如壁、則曰辟雍、雖各異名、而事實一也、

案祭法曰、周公禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王、注

禘郊祖宗、謂祭祀以配食也、祖宗通言爾、祭義曰、

天子祭天 曲禮及王制文、

周公攝政 文王世子文、

郊祖宗 祭法曰、祭法有虞氏禘黃帝而郊嚳、祖

顓頊而宗堯、夏后氏亦福黃帝而郊鯀、祖顓頊而宗禹、殷人稀嚳而郊冥、祖契而宗湯、周人禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王

昔者周公郊祀后稷以配天 明堂位祀帝于郊、配以后稷、天子之禮也、御注、郊、謂圜丘祀天也、邢昺云、孔傳文、今孔傳無其語也、

正吾臣上下之誼 管子版法解愛施之德、雖行而無私、內行不脩、則不能朝遠方之君、是故正君臣上下之義、飾父子兄弟夫妻之義、飾男女之別、別疏數之差、使君德臣忠、父慈子孝、兄愛弟敬、禮義章明、如此則近者親之、遠者歸之、

日至德、二曰敏德、三曰孝德、散三行、一曰孝行、二曰友行、三曰順行、鄭玄注云、孝在三德之下、三行之上、德有廣於孝、而行莫尊焉、又孔序云、孝者人之高行、

祀乎明堂.所以敢諸侯之孝也、註祀乎明堂、宗祀文王、大雅生民篇云、后稷兆祀.庶無罪悔、鄭注、兆、四郊之祭處也、應劭平紀注、上帝、謂古時帝大昊之屬、咕甜、九月大饗五常、亦稱上帝、即宗

祀文王所配、何楷曰、序及蔡邕獨斷皆云、我將祀
文王于明堂之所歌也、按孝經、子曰、孝莫大於嚴
父、各以其職來祭、上帝者、兼昊天上帝與五帝之
稱也、孔安國尚書傳、遂以攝告天及五帝、孔穎達
曰、周禮司服云、王祀昊天上帝、則服大裘而冕、
祀五帝亦如之、是昊天外更有五帝、上帝可以兼
之、雖兼祀五帝、而以天爲主,故篇中但言天、孝
經言宗祀配帝、而首曰嚴父配天、亦其義也、孔穎
達云、此言祀文王于明堂、謂大享也、案月季秋
大享帝、蓋以兼昊天上帝與五帝而祭之、故曰大獎、
郊祈穀之祭、以后稷配雩之祭、以五人帝配、皆與
文王無預、此以知其爲大享也、其曰宗祀者何也
程子謂、以宗廟之禮享之、朱子亦謂、祭于屋下、
而以神祇祭之、此其義也、魯語、天子祀上帝、諸
侯會之受命焉、注、上帝、天也、助祭受政命
匠人、周人明堂度九尺之筵、東西九筵、南北七筵
二七九
案、周禮師氏、以三是其民謂人也、傳言天災地妖民亂、歷序以 爲
次、更言亂則妖災生、明妖災由民起、妖災亦通言

耳、凡天反其時、地反其物、以害性、皆爲妖災、

是言妖災、皆通天地共爲之也、此傳地反物者、唯

言妖耳、洪範五行傳、則有妖孽禍痾靑祥六者之名、

以積漸爲義、漢書五行志、說此六名曰、凡草木之

類謂之妖、々猶天胎、言尙微也、蟲豸之類謂孽、々

則牙孽矣、及六畜謂之禍、言其著也、及人謂之痾、

按焦書件字下有者字

之性、聰明精粹,有生之最靈也、

樂子春云、漢書. 字下臂之字

祭按義、子曰天之所生、地之所養、

术字作物字

凡生天地之間

爲貴、貴有知也

有其物二字

萬物之靈、荀子王制篇、水火有氣而無生、草木有

聖治章 御注通下孝優劣章合爲一章、

用善、則自取謫於日月之災、言以政取謫、是由「天地之性人爲貴 泰誓武王曰惟天地萬物父母、惟人

君、不由民、以民表人、故釋例引此、即改民爲人、

禍亂不作、

動天地,爲之見變、妖災因民而生、天地共爲之耳、

福應 邢昺曰、福謂天下和平、應謂災害不生、

按左傳天地下又有天地二字

旱之烖及疫病之害也、

在地、故属災於天、属妖於地、其實民有亂德、感

據其害 物謂之災、言其怪 異謂之 妖、時由天、

卿大夫稱家 湯誥傳、國諸侯家大夫、

災害不生禍生亂不作 傳、妖孽不生、禍亂不起也、

案、宣十五年左傳、晋伯宗曰、天反時爲災、地反

物爲妖、民反德爲亂、々則妖災生、故文、反正爲乏、

杜註、天反時、寒暑易節、地反物、群物失性、、

々病類、言浸深也、甚則異物生謂之告、自外來謂之

祥、是六名、以漸爲稱、唯告祥有内外之異耳、六者皆

是妖也、皇侃曰、天反時爲災、謂風雨不節、地反

物爲妖,妖即害物、謂水旱傷禾稼也、善里逢殃爲

禍、臣下厄逆爲亂也、司救云、凡歳暉有天患民病、

注´天患、謂裁害也、疏、謂天與人物爲烖害、謂水

非獨天爲災、而地爲妖、民、謂人也、感動天地、

皆是人君感之、非庶民也、昭七年傳日.國無政不

生無知、禽獸有知而無義、人有氣有生有知、亦且

有義、故最爲天下貴也、孔叢子日、天地之性、人

無人爲大、父母全而生之、子全而歸之、可謂孝矣.

按*♀春云四字钻 仁

刑法志、夫人宵天地之貌、懷五常

德敢國子、一

人之行莫大於孝

先王、孔踠、案宗伯、

以肆稞先王、以下宗庙之祭、凡有六饗、此云

大饗、々中最大故爲拾也、賓之初筵亦云、百禮既至、

有壬有林、傳、林、君也、箋壬、任也、謂卿大夫

也、諸侯所献之禮、既陳於庭、有卿大夫、又有國

君、言天下徧至、得万國之歡心、孔疏云、其禮物

之外、又有卿大夫、又有國君、史樂書、夫南風之

愛日齋隨筆

推器無字

故得萬國之歡心以事其先王 禮器、大饗其主事與

三牲魚腊、四海九州之美味也、豆豆之薦、四時之

按東字當作肅字

按主字岔作王字

詩曰 皇侃謂無先王在上之、故斷章引太師之什、

孝治章 通雅、舊紀、紹興中作君臣事迹屏

高宗命鄭諶書盤庚無逸詩之車攻篇,孝經

孝治章、列于左右、嘗以諭輔臣、

分行而禁止 周書文傳解令行禁止、王始也、管

子形勢解、人主之所以分則行禁則止者、必分於民

之所好耐禁於民之所惡也、

和氣也、内金、示和也、東帛加壁、鬲德也、龜為

前列、先知也、金次之、見情也、丹漆絲織竹箭、

與衆共財也、其餘無常貨、各以其國之所有,則致

遠物也、其出也、奏肆夏而送之、蓋重禮也、鄭玄

日、大饗盛其饌與貢、謂袷祭管子明法解明主者、兼聽獨斷、多其門

禮運、仕於公日臣、仕於家日僕、

駿奔 詩周頌淸廇篇、對越在天駿奔走在席、

不敢侮於鰥寡 鄆邪代醉、引諸史偶讀、曰蘇世長

十歲、上書周武帝、帝問讀何書、對曰、治孝經論

語、帝曰何言可道、曰爲國不侮鰥寡、爲政以德、

楣上爸下 易象似日、益損上益下、民党无疆、

自上下下、其道大光、

盈數 閔元年左傳萬盈數

戹、群臣之道、下得明上、賤得言貴、故姦人不敢欺、

卑者不待尊寵 又曰明主之道、卑賤不待尊貴而

見、大臣不因左右而進、百官條通、群臣顯見、有罰

者、主見其罪、有賞者、主知其功、見知不悖、賞

罰不差、有不蔽之術、故無壅遏之患

昭十八年左傳昭臨四方曰明

得道上

詩者,生長之音也、舜樂奸之、樂好之樂、與天地

同意、得 萬國 之歡心、故天下治也、呂后紀日、

凡有天下者、駛作 治萬民者、蓋之如天、容之如地、

上有歡心、以使百姓、百姓欣然、以事其上、驩然

下有命

交通而天下治、雅然作欣然

下照臨群下

道之以禮樂而民和睦 鼎案此禮樂、乃指養老鄉射

鄉飲酒等之禮言、鄭玄註、開宗明誼章曰、至德、

孝悌也、要道、禮樂也、鄉飲酒義、民知尊長養老、

而后乃能入孝悌、民入孝弟、出尊長養老、而后成教、

成教而后國可安也、君子之所謂孝者、非家至而日

見之也、合諸鄉射、散之鄉飲酒之禮、而孝弟之行

立矣、燕義、上必明正道以道民、々道之而有功、

然後取其什一、故上用足、而下不也、是以上下

陳之以德誼 齊語、相示以巧、相陳以功、注、陳亦

示也、案、德、至德、誼、謂行之於民也、論語曰、

移民之義、晉語、悼公與司馬侯升臺而望曰樂夫、

對曰臨下之樂、則樂矣、德義之樂則未也、公尺、

何謂德義對曰、諸侯之爲、日在君側、以其善行

以其惡戒、可謂德義矣、

而有新體、 謂之爲化、 如月分鳩化爲、 是爲

之時、非復鳩也、猶如善人無復有惡也、周禮大宗

伯、以禮樂合天地之化、鄭注、能生非類曰化、賈

公曰、變化相將、先變後化、故中庸曰、勸則變

々則化、荀子註、改其舊質謂之變、馴致於善謂之

化、

禍避於萬里之外、雖以此制彼者、唯能以已知人者

曰、牖民孔易、此之謂也、緇衣、故君民者、章好

以示民俗、愼惡以御民之淫、則民不惑矣、周語、明

利害之鄉、注、示之以好惡、鄉、方也、韓子、齊桓

公好服紫、一國盡服紫、當時十素不得一紫、公患

之、告管仲、管仲曰、君欲止之、何不自試勿衣也、

謂左右曰甚惡紫臭、公曰諾、於是郎中莫衣紫、其

明日國中有衣紫、三日境内莫衣紫也、昭十五年

左傳、荀吳曰、吾聞諸叔向曰、好惡不愆、民知所

適、事無不濟、過他、

適、歸也、

按*記號民作誘民

也、樂記、是故先王之制禮樂也、非以極口腹耳口

目之欲也、將以敢民平好惡、而反人道之正也、注、

敦之使知好惡也、又曰、爲人者、謹其所好而

!矣、君好之、則臣爲之、上行之、則民從之、詩

按雖字當作能字

示之以好惡而知禁 管子禁藏、禁藏於胸脅之內、而

·

禮以强效之 表記、凱以强教之、弟以說安之、

道之斯行 論語子張篇、道之斯行、綏之斯水、動

之斯和、

和親、而不相怨也、和寧、禮之用也、此君臣上下

之大義也、

愛H褰笨

其法、天行而萬物被其利、聖人亦行其所行、而百姓

案天行下富有其所行三字

然而天不爲一物枉其時、明君聖人、亦不爲一人在

天地不爲 管子白心篇故苞物衆者、莫大於天地、

化物多者、莫多於日月、民之所急、莫急於水火、

外 管子版法解、天覆而無外也、其德無所不

在、地載而無棄也、安固而不動、故莫不生殖、 聖

人法之、以覆載萬民、故莫不得其職姓、

按地之利上常有因字

萬物生焉、主不易其則、故百姓安焉、父母不易其則

故家事辨焉、臣下不易其則、故主無過失、子婦不

易其則、放親養備具、故用則者安、不用則者危、

則天之明因地之利 禮運夫禮必本於天、殽於地、

按生物上留有故字

之則 管子形勢解地生養萬物、地之則也、治安百

姓、主之則也、教護家事、父母之則也、正諫死節、

臣下之則也、盡力共養予婦之則也、地不易其則、

天地之經而民是則之 孔氏曰、是、是此誼也、鼎案

是則之、猶曰以是爲則焉之語助耳、

列於鬼神、注、聖人則天之明、地之利、取法度

鬼神以制禮、下致命也、既又祀之、盡其敬也、

民嚴上也、文二年左傳、孝禮之始也、楚語地有高

下、天有晦明、民有君臣、國有都鄙、古之制也、

覆而無齊語今夫士羣萃而州處間燕、則

其敢不肅而成

與父言義、子與子言孝、其事君者言敬、其幼者言

悌、少而習焉、其心安焉、不見異物而遷焉、是故

其父兄之敢、不肅而成、其子弟之學、不勞而能、

夫是故見敢之可以化民也 按中庸、動則變、々則化、鄭注

動々人心也、變改惡爲善也、變之久、則化而性善

也、孔穎達曰、既感動人心、漸變惡爲善、變而既

久、遂至於化、言惡人全化爲善人、無復爲惡也、

又曰、初漸謂之變、變時新舊兩體俱有、變盡舊體

二七五

士之子恆爲士、吳澄曰、肅言其聲容、嚴言

其法令、信從其敢之謂成、服從其敢之謂治、

登山而呼 荀子勸學篇登高而招、臂非加長也、而

見者遠、順風而呼、聲非加疾也、聞者彰、假與馬

者、非利足也、而致千里、假舟檝者、非能水也、

而絕江河、

按明道本今字作分

法天合德 管子版法解桓公謂管子曰、今子敢寡

人、法天合德、合德長久、合德而兼覆之、則萬物受

命、象地無親、無親安固、無親而兼載之、則諸生

殖參於日月無私、葆光無私而兼照之、則美不惡隱、

被其利、是故萬物均、既誇衆矣、

堂之上、罍尊在西、庙堂之下、縣鼓在西、應鼓在
東、君在阼、夫人在房、大明生於東、月生於西、
此陰陽之分、夫婦之位也、君西酌犧象、夫人東的
罍尊、禮交動乎上、樂交應乎下、和之至也、說命、
明王奉若天道、建邦設都、樹后王君公、承以大夫
師長傳、天有日月北斗五星二十八宿、皆有尊卑相
按禮器易致下有在作品靠四字
荀子王制篇、天地者、生之始也.禮義者、治之始
也、君子者、裴家之始也、爲之貫之、積重之致好
之者、君子之始也、故天地生君子、君子理天地、
君子者天地之叄也、萬物之總也、民之父母也、
夫孝天之經也地之義也 案此謂聖人則天地而建孝
也、春秋昭二十五年左傳、子大叔日、夫禮、天之經
也、地之義也、天地之經、而民實則之、則天之明、因
地之性、生其六氣、用其五行、又日、爲居臣上下、
以則地義、爲夫婦外內、以經二物、爲父子兄弟姑
姊娌舅昏媾姻婭、以衆天明、爲政事庸力行務、以
從四時、爲刑罰威獄、使民畏忌、以類其震罐殺戮、
爲溫慈惠和、以效天之生殖長育、民有好惡喜怒哀

樂、生于六氣、又禮器、天道至敎、聖人至德、 廣

三才章

木主生、夏火主長、季夏土主養、秋金主收、冬水

主成、是故父之所生、其子長之、父之所長、其子

養之、父之所養、其子成之、諸父所為,其子奉

承而續行之、乃天之道也、故曰夫孝天之經也、此

之謂也、王曰、善哉、願聞地之義、對曰、風雨者

地之爲、地不敢有其功名、必上之于天、可謂大忠

矣、土者火之子也、五行莫貴于土、土之于四時、

無所命者、不與火分功名、此爲孝者地之義也、王

曰、善哉、物先生曰、有曰天之經地義也、賛禮之

言也、經者、謂禮之大者、能持衆義、如經韓之經

焉、義者、謂禮之細者、各制其宜焉、所以謂之天

地者、賛辭已、

按春秋繁露文不與此同骝因古先生援整露略文而取意也

正之法、言明王奉順此道、以立國設都、莊子天道

篇、君先而臣從、父先而子從、兄先而弟從、長先

而少從、男先而女從、夫先而婦從、尊卑先後、天
地之行也、故聖人取象焉、天雪地卑、神明之位也、
春夏先、秋冬后、四時之序也、萬物化作、萌區有狀、
盛衰之殺、變化之流也、夫天地至神、而有尊卑先
後之序、而況人道乎、河間献王問董仲舒曰、夫孝、
天之經地之義、何謂也、董子對曰、天有五行、春

管子形勢、艸木有時以生、有時以
解爲主而賊、為父母而暴、
爲臣下而不忠、爲子婦而不孝、四者人之大失也、
大失在身、雖有小善、不得爲賢、爲主而惠、為父
母而慈、偽臣下而忠、爲子婦而孝、四者人之高行
也、高行在身、雖有小過、不爲不肯、

一揆 孟子離妻下、
爲君而
具、而孝子之事畢也、又天有時、地有氣、材二字、
不敢犯非 昭三年傳晏子曰、君子不犯非禮、小
人不犯不祥、古之制也、

北字當作

二字作見宜嘛三字

也

莖字當作菜

死、石有時以泐、水有時以凝、有時以澤、此天時也、

庶人之業 齊語分夫農拿拳而州處、察其

節其用、耒耜柳斐、及寒擊葉除田、以待叶耕、深耕

而疾稷之、以待時雨、時雨旣至、挾其槍刈鏄以旦

暮從事於田野、脫衣就功、首戴茅蒲、身衣襪、

霑䣊塗足、暴其髮膚、盡其四支之敏、以從事於田

野、少而習焉、其心安焉、不見異物而遷焉,是故

其父兄之敢、不肅而成、其子弟之學、不勞而能、

是故農之子恒爲農、

宜教甿稼穡、釋云、高田種黍稷、下田種稻麥、是敢

之稼穡、地官草人、掌土化之法以物地、相其宜而

爲之種、注、土化之法、化之使美、若汜勝之術也、

以物地占其形色爲之種、黃白宜以種禾之屬、又土

訓、掌道地圖以詔地事、注、道、說也、說地圖、九

州形勢山川所宜、告王以施其事也、若云荊揚地宜

稻、幽幷地宜麻、釋曰、職方幽幷之州、並不言宜

麻、鄭以目驗知之、說文、泰伯益之後所封、地官

禾、考工記、瀚人爲翰、斬三材必以其時、弓人為

弓、取六材必以其時、注、取幹以冬、取角以秋、

漆以夏、又云、凡爲弓、冬析幹、而液角、夏治

筋、秋合三材、寒奠體、冰折僨、又曰、知者創物

巧者述之守之、世謂之工、百工之事、皆聖人之作「終始 荀子禮論篇、事生飾始也、送死饰終也、終始

有美、工有巧、合北四

者、然後可以爲良、材美工巧、然而不良、則不時、

不得 地氣也、橘踰 淮而 北爲 枳、鸜鴿不踰濟、貉

豫汶則死、此地氣然也、鄭之刀、宋之斤、魯之削、

吳奧之劍、遷乎其地、而弗能爲良、地氣然也、燕

之角、荆之幹、妍胡之箭、吳粵之金錫、此材之美

者也、天有時以生、有時以殺孝卒章 御註通上爲一章、無子曰、聖人之道備矣、

一下有天接二字

日月流邁 秦誓日月逾邁、若弗云來、論語陽貨

教

孝者子婦之高行 管子形勢解忠者臣之高行也、

孝者、子婦之高行也、

父母外内倡和爲忠路豔 案、孝弟者、自天子以至於庶人、

所當同也、然孝經獨於士章言之者、蓋天子諸侯、

五更之外、少以弟事之者、鄭大天、則位在衆官之

上、亦少以弟事之者、唯士位卑、弟道最廣、故於

此章乃言之、

以孝事君則忠 祭統云、内盡於已、而外順於道也、

忠臣以事其君’孝子以事其親、其本一也、冠義云、

責成人之禮焉者、將責爲人子爲人弟為人臣爲人少

者之禮行焉、將責四者之行於人、其禮可不重與、

故孝弟忠順之行立、而后可以爲人、左傳昭十二年

正其臣、則臣不知於爲臣之理以事其主矣、為人父,

而不明父子之義以敢其子而整齊之、則子不知爲人

子之道以事其父矣、

肥後文獻叢書第二巻

父母以下本管子形勢解文、而字多變易

守其祭祀 尚書大傳、祭之言察也、察者至也、言人

事至於神也、邢疏、祭者際也、六神相接、故曰際

也、祀者似也、似將見先人也、音似、

冬昴昏中、可以收斂、洪範曰、庶民惟星、所謂因天之時也、舜本紀、就時於負夏、索隱云、就時猶逐時、若言乘時射利也、尙書大傳曰、販於頓丘、就時負夏、職方氏曰、靑州、其穀宜稻梁、雍州、其穀宜黍稷之類、所謂就地之利、地官途人、以土因天之時就地之利 案、書傳曰、春張昏中、可以種穀、夏火昏中、可以種黍、秋虛昏中、可以種麥、大戴禮少問篇、庶人仰視天文、俯視地理、力時使以聽乎父母、曾子立事、庶人日旦思其事、戰々唯恐刑罰之至也、荀子儒效篇、以容俗爲善、以貨財爲寶、以養生爲己至道、是民德也

庶人章

小宛之章 魯詩作鳴鳩、

進德脩業 易文言君子進德脩業.

詩曰 曾子立孝、夙興夜寐、無忝爾所生、言不自也、魏略、文帝爲五官將、而臨淄侯才名方盛、各有黨與、有奪宗之議、帝使人問賈詡自固之術、曰、願將軍恢崇德度、躬素士之業、朝夕孜々不違子道如此而已、

篇、日月逝矣、歲不我與、

祿位 神契云祿者錄也、取上所以敬錄接下、下

所以謹錄事上、裳々者華亭、古之仕者世祿、疏、

古者有世祿、復有世位、世祿者、直食其先人之祿、

而不居其位、不賢尚當然、子若復賢則居父位矣、

三章箋曰、守我先人之祿位、並位言之、見此意也、

晋語云、范宣子與龢大夫雒田、久而無成、宣子欲

攻之、徧問於大夫、無決、問於訾茄、對曰、昔

叔子、違周難於晋囫、生子與爲理、以正於朝、朝

無姦官、司空以正於囫、囫無敗績、世及武子、佐

文襄爲諸侯、諸侯無二心、及爲卿以輔成景、軍無

復言復行 管子形勢解言而不可復者、君不言也、

行而不可再者、君不行也、行之不可再者,其行

暴也、故言而不信、則民不附、行而爲賊暴、則天

下怨、民不附、天下怨、此滅亡之所從生也

口角乱則憂其民张、正義曰、民無自怨、皆君上

失政、故下民生忌也、吳澄日、卿大夫立朝、則接

對賓客、出聘、則將命他邦、故言行滿天下、三者

服言行也、人之相與、先觀容飾、次交言辭、後考

德行、孟子曰、服堯之服、誦堯之言、行堯之行、

意與此同、

思其終也,思其復也、書云、慎始而敬而不俘、父俘而不親爲二七一

管子形勢解為人人君而不明君臣之義以

父者

表記母親至親、

至

孟子、王子墊問云、士何事、孟子曰、尚志、云

上則公卿大夫、下則農工商賈、皆有所事、而士居

其間、獨無所事、既未得行公卿大夫之道、又不當

爲農工商賈之業、則高尚其志而已、記曰、凡學、

官學事、士先志、漢志、學以居位曰士、正義曰、

說文云數始於一、終於十、孔子曰、推一合十爲士、

毛詩傳曰、士者事也、白虎通曰、士者事也、仕事

之稱也、傳曰、通古今辨然不然謂之士、

士章

終以不困、

詩曰、夙夜匪解以事一

「字下又有終字

詩曰 春秋襄二十五年左傳、大叔文子曰、君子之行、

敗政、及爲成師居太傅、端刑法緝訓典、國無姦民、

後之人可則、是以受隨范、及文子成晋荊之盟、豐

兄弟之國、使無有間隙、是以受郇櫟、分吾子嗣位、

於朝無姦行、於國無邪民、於是無四方之患、而無

外内之憂、賴三子之功、而饗其祿位、今既無事、

而非龢於是加寵、將何治爲、

僭礙也、射義曰、卿大夫以采蘋爲節、采蘋樂循法也、

修德於身 表記云君子耻有其德而無其行

擬議

繫辭擬之而後言、議之而後動、擬議以成其一行滿天下亡怨惡 鼎曰、行、謂施於政者也、案記

順德以學子、擇言以敎子、擇師保以相子、呂氏春

秋大樂、先聖擇兩法一

口無擇言身無擇行 案、擇、謂擇取之也、呂刑曰、

法 禮運曰、大臣法、又曰、大夫以法相序

者、將責成人之禮焉也、責成人禮焉者、將責人

子爲人弟為人臣爲人少者之禮行焉、孟子亦曰、服

堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣、三者之

次、宜若此、

僭下偪下 雜記曰君子上不僭上下不偪下廣韻、

冠義曰、冠而后服備、服備而后容體正、

之

留有其字

齊、僻分順、已冠 而字 之、成人之 道也、成 人之

言以折衷之也、

無定 管子形勢解無儀法程式、蜚搖而無所定、

法服法言德行 案表記云、居子服其服、則文以君子

非先王之法言不敢道 此言卿大夫臨朝聽政、必誦古

章善明理也、大夫之為言大扶、扶進人者也、故傳

臼、進賢達能、謂之卿大夫、

謂之蜚蓬之問、蜚蓬之問、明主不聽也、無度之言,

明主不許也、

正義曰、說文云、卿章也、白虎通曰卿之爲言章也、

中能應外 國語云内能應外曰忠、

索典謂禮也、

家可保也、

變化、

肥後文獻叢書第二卷

典誼

之容、有容則文以君子之辭、途其辭、宵以君子行其敬忌而罔有擇言在躬、論語曰、子曰、我三人行、

必得我師焉、我擇其善者而從之、其不善者、而改

之、又曰、多聞擇其善者而從之、左傳、季札云、

吾聞君子務在擇人、中庸云、擇乎中庸得一善、何

氏注論語云、論篤者、謂口無擇言、皇侃疏、擇

除麤取好之謂也、左傳云、賓有札、主則擇之、

哀元年、闔廬永服財用、擇不取費、注、選取堅厚、

不尙細費、晋語、范文子曰、擇福莫若重、擇禍

若輕、韋昭云、有二福、擇取其輕、又鄆無正曰、

及景子嗣立矣、亦纂修西身、以受先業、無謗於國、

愛日齋隨筆

無配祭之人、鄭玄曰、稷原隰之神、稷有播種之功、

配稷祀之、鄭必以爲此說者、社即地神、稷是社之

王肅難鄭日、后稷配天、孝經有配天明文后稷不稱

天也、祭法及昭二十九年傅云、句龍能平水土、故

祀以爲社、不云祀以配天、明知社即句韻也´又曰、

召誥、用牲干郊、牛二、明后稷配天、故知二性也、

又曰社于新邑、牛一羊一豕一、明知唯祭句龍

兩冠下有字作雪字文字作犬字

敬、故封五土以爲肚、王肅曰、句龍、人鬼也、非

地神、許君謹案、春秋稱公社、今人謂社神爲吐公、

故知社是上公、非地祇、孔穎達日、祭祀、用牛角

尺、而用大牢、天子服絺冕、爲鄭學者云、社稷是

地之別體、有功於人、報具載養之功、故用大牢、

貶降於天、故角尺也、祭用稀冕 取其類陰、大

又曰、社之祭一、歲有三、仲春命民社、一也、詩

云、以社以方、謂秋祭二也、孟冬云、大割祠于公

社、三也、其主、宗伯注云、社之主蓋用石、傳

曰、祭法王社大社、各有其義、穀梁傳云、天子親

耕、故自立社爲報也、國以人爲本、人以穀爲命、

爲百姓立社、而報焉、事異體殊、此社所以有二、

張載曰、古者、丘来共姿盛、恐十里之中立一社也、

自危者 下繫辭、子曰危者安其位者也、亡者、

保其存者也、乱者、有其治者也、是故君子、安而

不忘危、存而不忘亡、治而不忘乱、是以身安而國

二六九

自為立社者、在藉田之中、其亡國之社、穀梁

傅云、亡國之社、以爲席屏戒、或在鹿、或在庫門

内之東、則亳毗在東也、案祭法注、大夫不得特立

社、與民族居、百家以上則共立一社、今里社是也、

如鄭此言、則周之政法、百家以上得立社、其秦漢

以來、雖非大夫民二十五家以上、則得立社、故云

今之里社、又鄭志云、月令民社、謂秦社也、自秦

以下、民始得立社也、

曰、庫門内雉門之左右、爲群姓立社者、庫門内之

東門街之西上富有

細別、別名曰稷、々乃原隰所生、故以稷爲原隰之

神** 王肅曰、稷祭后稷、人鬼也、非地神、異義、

今孝經說、稷者五穀之長、穀眾多不可編敬、故立

稷而祭之、古左氏說、烈山氏之子曰柱、死祀以爲

稷、々是田正、周棄亦爲稷、自商以來祀之、許君

謹案、禮緣生及死、故社稷人事之、既祭稷穀、不

得但以稷米祭稷、反自食、同左氏義、社稷所置之

祭義

處、郊特牲疏、小宗伯云、右社稷左宗廟、同”鄭玄

制節謹度 鼎曰、制節謹度、制以節謹以度之謂也、

猶如易曰制度數議德行也、制節者、以奉身而言之、

謹度者、以行禮而言之、楊慎云、符謂之節、尺謂

之度、節取有其限、度取其不差、易曰、天地節而

四時成、節以制度、不傷財不害民、或云、制節

言節性也、周禮大司徒職十二敢、九曰、以度教節、

則民知足、援神契云諸侯行孝曰度、皇以謹度、謂

高者必以下爲基 老子三十九章貴以賤爲本、高

以下爲基、

高而不危、桑扈詩、不戢不難、受 福 不那、說文云

戢、藏兵也、收歛之囊、難通作儺、說文云、行有

節也、孝經言諸侯之孝云、高而不危云云、此可以

通戢難受福之義、何楷云、

必讓、然後爲人、故士雖聰明聖智、自守以愚、功

被天下、自守以讓、勇力距世、自守以怯、富有天

下、自守以廉、此所謂高而不危、滿而不溢者也、

琅邪代醉編、崔英年九歲、符堅問卿讀何書、

曰孝經、堅曰、有何義、曰、在上不驕、更問有何

義、曰上愛下、下敬上、堅曰、卿好去、年十七、

用爲大夫、

肥後文獻叢書第二卷

人宇當作之字

能平九州、故祀以爲社、春秋昭二十九年、左傳句

龍能平水土、故祀以爲社、鄭玄云、社、五土總神、

山林、陶*賓行 腳濕甗 句龍有平水土之功,故配社祀之、異義

今孝經說曰、社者、土地之主、土地廣博、不可偏

陵、墳衍、原濕也

按左博無能平水土故 以爲社九字唯杜注云能平水土

川澤、丘

社曰國社、諸侯自爲立社曰侯社、大夫以下成群立

社曰置社、又曰、共工氏之霸九州也、其子曰后土、

按祭法王自爲立社曰下有王社緒侯

保其社稷 韋韶注國語云、保、守也、禹貢、徐州、

厥貢惟土五色、孔傳曰、王者封五色土爲社、建

侯、則各割 其方色土與之、使立社、燾以黃土、直

以白茅、々取其潔、黃取王者覆四方、叉案、韓詩

外傳曰、天子大社、東方青、南方赤、西方白、北

方黑、中央黃土、若封四方諸侯各割其方色土、 苴

以白茅而與之、諸侯以此土封之爲社、 明受於天

子也、郊特牲日、社祭土而主陰氣、又日、所以神

地之道、祭法云、王爲群姓立社日大社、王自立

孔安國尙書傳、滿、謂盈實也、疏、滿以器、

滿而

故爲盈實也、天迫虧盈 易家傳、天道虧盈而益謙

自多 家語六本篇、孔子曰夫自損者必有益之、

自益者者必有决之、

宮室車旗之類、皆不奢僭也、

二六八

諸侯章 鄭注孝經云、列土封疆、謂之諸侯、

愛日齊隨筆

休和、可不務乎、書曰、一人有慶兆民穎之、其寧

惟永、其是之謂乎、周之興也、其詩曰、儀刑文王、

萬邦作孚、言刑善也、及其衰也、其詩曰、大夫不

均、我從事獨賢、言不讓也、世之治也、君子能

而讓其下、小人農力以事其上、是以上下有禮、而

讒慝黜遠、由不爭也、謂之懿德、及其亂也、君

稱其功、以加小人、小人伐其技、以憑君子、是以

上下無禮、亂虐並生、由爭善也、謂之昏德、國家

之敝恒必由之、

土匄佐之、使韓

起將上軍、辭以趙武、又使趙武將上軍、韓起佐之、

欒黶將下軍、魏絳佐之、新軍無帥、晋侯難其人、

使其什吏率其卒乘官屬、以從於下軍、禮也、晋國

之民、是以大和、諸侯遂睦、君子曰、讓、禮之主

也、范宣子讓、北下皆讓、欒黶爲汰、弗敢違也、

晋國以平、數也賴之、刑善也夫、1人刑善、

智富作都

天子章引呂刑傳主讓而說 春秋襄公十三年左氏

傳荀罃士魴卒、晋侯蒐于緜上以治兵、使士們將中

軍、辭曰、伯游長、昔臣習於智伯、是以佐之、非

能賢也、請從伯游、荀偃將中軍、二六七

窮人、資給疾速、無以先人、剛毅勇猛、無以勝人、

不知則問、不能則學、雖智必質、然後辯之、雖能

又曰、高上賢、無以驕人、聰明聖智、無以

又字當作迢宛

按家語知

字作撈所三字又無故字

此之要、故南面臨官、貴而不驕、富雨能供、有本

而圖末、修事而能建業、久居而不滯情近而知遠

故察一物而貫乎多、治一物而萬物不能乱者、以身

本者也、新語云、夫居高者、自處不可以不安、履

危者、任杖不可以不固、自處不安則墜、任秋不固

則仆、是以聖人居高處、上則以仁義爲巢 乘危履

傾、則以聖賢爲杖、故高而不仆者、堯以仁義爲巢

舜以禹稷契爲杖、故高而益安、動而益固'然處高

之安、乘克讓之敬、德配天地、光被四表、功垂於

無窮、名傳於不朽、蓋自處得其巢、任杖得其材也

按子闕字上有能字

朵

居上不驕高而不危 管子形勢、天之道、滿而不在、

盛而不衰、明主法象天道、故貴而不驕、富而不奢.
行理而不惰、故能長守貴富、久有天下而不失也.
故曰持滿者與天、家語、入官、爲上者、譬如緣木
鳥、務高而畏下茲甚六馬之乖難、必達於西達之交
衢、萬民之叛道、必於君上之失政、上者嚴而危、
民者卑賤而神、愛之則存、惡之則亡長民者必明
官辦 一作辨、案字彙、辦叶皮變切音卞、三略、
軍幕未辦、將不言倦、軍竈未炊、將不言飢、
辜較 劉煒曰辜較、猶梗槩也、孝道既廣、此祇
舉其大略也、鼎案、辜與姑通、詛楚大沈久湫文、
虛不姑、巫咸亞駝並作辜、又樸姑或作鏷辜、孟康
津歷志註、辜必也、廣韻、較、略也、鼎案、必猶
姑也、論語.必也射乎、廣雅、媁、榷也、家語入
官篇、君子南面臨官、大域之中而公治之、王肅注、
謂致命也、
授事以能、則人上功、審刑當罪、則人不易訟、無
亂社稷宗庙、則人有所宗、世遺老忘親、則大臣不
怨、舉知人急、則衆不亂行此道也、國有常經、人
知終始、

紀綱 字彙、大曰綱小曰紀、總之曰綱、周之曰紀

愛敬盡於事親 樂記云、禮者殊事合敬者也、樂者、異

艾合愛者也、禮樂之情同、故明王以相泓也、注、法、

猶因述也.古者天子父事三老、兄事五更、是內能

事己父兄、而後行此禮、是以民莫不興於孝弟矣、

故云、愛敬盡於事親、然後德敢加于百姓、刑于四海

故身者 身猶己也、

肥後文獻叢書第二卷

法象天地 版法解、凡人君者覆載萬物、而兼 3

之、蠲臨萬族、而事使之、是故以天地日月四時爲

主爲質、以治天下、天覆而無外也、其德無所不在、

地載而無棄也、安固而不動、故莫不生殖、聖人法

之、以覆載萬民、故莫不得其職姓、則莫不爲用

故曰、法天合悳、象地無親、霸言、霸王之形、象

天則地、形勢解、天生四時、地牛萬物、以養萬物

而無取焉、明主配天地者也、敢民以時、勘之以耕

織、以厚民養、而不伐其功、不私西利、故曰、能

是以天子 君臣上、是故天子有善讓德於天、諸

侯有善、慶之於天子、大夫有善、納之於君、民有

善本於父、慶之於長老、此道法之所從來、是治本也、

予而無取者天地之配也

物宮作財

物字當作民字

有其人 又曰、道也者、萬物之要也、爲人君者、

執要而待之、則下無有姦僞之心、不敢殺也、夫道

者虛設、其人在則通、其人亡則塞者也、

者化民、其要在上、是故君子不求於民、

按看字衍

故身者 管子君臣上、主身者正德之本也、官治

者、耳目之制也、身立而民化、德正而官治、治官

二六六

大域、猶辜校也、

愛日齋隨筆

而周興、非文王之德不至此、聿通作昨、說文云、

詮辭也、徐鍇云、詮理也、理其事之辭也、脩、說文

云、飾也、德字从彳、謂悳之見於行者、內得于心

曰悳、外見于行曰德、承上章言成王得無念爾祖文

王之能脩飾其德乎、曰左右、曰陳錫、文王脩德之

實也、所以得民心而受天命者、其原正在于此、漢

元帝時、頗改宣帝之政、言事者多進見、人々身以

爲得上意、匡衡上疏曰、陛下聖德天覆、子愛海内、

然陰陽未和、姦邪未禁者、殆論議者、未不揚先帝

之盛功、尹言制度不可用也、務變更之、所更或不

可用、而復々之、是以羣下更相是非、吏民無所信、

臣竊恨國家釋樂成之業、而虛爲此紛々也、願陛下

詳覽統業之事、留神於遵制揚功、以定群下之心、

大雅云、無念爾祖、聿修厥德、孔子著之孝經首章

益至德之本也、按漢宣之德、無足言者、而匡之說

詩、則可謂得其意矣、左昭二十三年楚囊瓦爲尹

城郢、沈尹戌曰、古者天子守在四夷、天子、守

吉字當作告字

*毋*念爾祖聿懷,脩厥德 世本古義、文王、周公陳

之義、以洎小臣也

由字盼之世起

女王受命作周、以吉成王也、爾祖、指文王也、殷

滅有功、則十輕死節、師士以人之所戴、則上下和

師士二字常作上帥十三字

僻授有德 管子問篇、篙授有德則大臣興義、祿予

愛親者不敢惡於人 此章孟子所謂老、吾老以及人之

老也、孔穎達云、孝經天子之章、盛論愛敬之事、

立愛唯親、立敬唯長、即孝經所云、愛親者不敢惡

於人、敬親者不敢慢於人、始于家邦、終于四海、

即孝經所云、德教加于百姓,至于四海、是也、

在諸侯、諸侯守在四鄰、諸侯卑、守在四竟、詩曰、

云云、無亦監乎、若敖蚡冒、至于武文、土不過同、

慎其四竟、猶不城郢、今土數折、而郢是城.不亦

難乎、引詩之意、亦以脩德屬爾祖、時說指爲勸王

之辭非是、乂孝經、子曰、愛親者、不敢惡于人、敬

親者、不敢慢于人、愛敬盡于事親、而德教加于百姓、

刑于四海、益天子之孝也、章首引此詩、其意以愛親

敬解念祖、以不敢惡人不敢慢人解脩德、則脩德乃

自脩其德、亦斷章取義、邢疏、此經有十一章引詩

及書、劉炫曰、夫子叙經、申述先王之道、詩書之

語、事有當其義者、則引而證之 亦示言不虛發也、

七章不引者、或事義相違、或文勢自足、則不引也、

天子 章

足以與之、知足以利之、可謂賢

賢而勿伐、可謂恭矣、孔疏、上、謂光揚先祖、下、

謂成己順行、哀公問、公曰、敢問、何謂成親、孔子

對曰、君子也者、人之成名也、百姓歸之名、謂之

君子之子、是使其親爲君子也、是爲成其親之名也、

内則云、曾子曰、孝子之養老也、樂其心、不違其

志、樂其耳目、安其寢處、以其飮食忠養之、孝子

之身終、終身也者、非終父母之身、終其身也、是

字當作列字

云、母、技也、釋名、母、冒也、合生己也、祭統

云、顯揚先祖、所以崇孝也、又云、夫鼎有銘、銘者、

自名也、自名、以稱揚其先祖之美、而明著之後世

者也、爲先祖者、莫不有美焉、莫不有惡焉、銘之

義、稱美而不稱惡、此孝子孝孫之心也、唯賢者能

技字當作牧字

以顯父母孝之終也 釋名、父甫也、始生己也、說文

乎親、信乎朋友、獲乎上之說也、

之、銘者、論撰其先祖之有徳善功烈勳勞慶賞聲名

刑於天下、而酌之祭器、自成其名焉,以祀其先祖

者也、顯揚先祖、所以崇孝也、身比焉順也、明示

後世教也、夫銘者壹稱而上下皆得焉耳矣、是故君

子之觀於酩也、既美其所稱、又美其所爲、爲之者、

明足以見之、仁志邁清風 淮南子、志厲清雲、非夸矜也、案邁

與勘同、字彙、適、莫解切音賣、與勵同、尙書

皐陶邁種悳、六書正、別作勵非、勸勉力也、勵

注、力霽以示榮幸也、致仕懸車、蓋亦古法、韋孟詩

時字下有

懸車 漢書薛廣德傳、廣德代貢禹爲長信少府御史

大夫以歲惡民流、與丞相定國、大司馬車騎將軍史

高、倶乞骸骨、皆賜安車駟馬黃金六十斤罷、廣德

爲御史大夫凡十月免、東歸、沛太守迎之界上、沛

以爲榮、懸其安車傅子孫、師古云、懸其所賜安車、

致仕 致納也

無過之地 禮運云、君者立於無過之地也、

始於事君 孟子曰、孰不爲事、事親事之本也、

禮男初生至有事 射義文、

反音例、勉力也、有修飾振起意、鼎案、

據此注、則鸛勵二字、音異而義同也、

國字當作字

按淮南子作志购青非本矝也一本作改

束修 後漢胡廣傳、尙書史敞等云廣才畧深茂、

堪能撥煩、願以參選、紀綱頹俗、使束修守善、有

所勸仰、

故父母之所愛、亦愛之、父母之所敬、亦敬之、至

於犬馬盡然、而况於人乎、

二六四

天地之道得 管子形勢解、天不失其常、則寒暑

得其時、日月星辰得其序、主不失其常、則羣臣得

共義、百官守其事、父母不失其常、則子孫和順、

愛H舘

南史、庾子與字孝卿、南陽新野人、幼而岐嶷、五

歲讀孝經、手不釋卷、或日、此書文句不多、何用

自告、答日、孝者德之本、何謂不多、

德者得也

以然也

管子心術、德者得也得者、其所得

南史本傳南海新野人五

謂本者、非耕耘種植之謂、務其人也、務其人、

貧而富之、寡而衆之、務其本也、務本莫貴於孝、

人主孝、則名章榮、下服聽、天下譽、人臣孝、則

事君忠、處官廉、臨難死、士民孝、則耕耘疾、守

戰固、不罷北夫孝、三皇五帝之本務、而萬事之紀

也、夫朝一術、而百善至、百邪去、天下從者,其

惟孝也、又如禘嘗之義大矣、治國之本也、愛與敬、

其政之本與、禮其政之本與、祭者敢之本也、昏禮、

禮之本也、温良者、仁之本也、忠信者、禮之本也、

亦皆謂所始也、邢疏、論語云、孝弟也者、其為仁

之本歟、今言孝者德之本歟、三嘆美之辭、舉

者而言、故但云孝、德則行之總名,故變仁言德也、

二六三

傅立身者立身於孝也 案立身於者以孝立身也、

中庸所謂在下位不獲乎上 民不可得而治矣、獲乎

上有道、不信乎朋友、不獲乎上矣,信乎朋友有道,

不順乎親、不信乎朋友矣、順乎親有道、反諸身不

誠、不順乎親矣、誠身有道、不明乎善、不誠乎身

唉也、孟子亦曰脩其天爵、而人傳從之、荀子大畧

篇、曾子曰、孝子、言爲可聞、行爲可見、言爲可

聞所以說遠也、行爲可見、所以說近也、近者說則

親、遠者說則附、親近而附遠、孝子之道也、亦順

身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也 案、曾子臨終、

分啓手足、亦怕入刑辟之意、免者、謂免於刑戮也、

故曾子曰、吾知免夫小子、邢䟽、毀、謂虧辱、傷、

謂損傷、故夫子曰、不虧其體、不辱其身、可謂全

矣、及鄭注周禮禁殺戮云、見血爲傷、是也、

推敵能讓 周語、慈和能慧推敵能讓、揚子方言

自關而西、秦晋之間、物力同者,謂之臺敵、

立身行道 家語六本篇、孔子曰立身有義矣、而

孝爲本、

親戚相驩、臣下不失其常,則事無過失,而官職政

治、子婻不失其常、則長幼理、而親疎和、

年曰、漢之傳謚常爲孝者、以長有天下、宗血

干所問、不犯所咨、王曰、然則能治其民矣乃命

魯孝公於夷宮、家語、孔子曰、不孝者、生於不仁、

不仁者、生於喪祭之無禮也、喪祭禮、所以敢仁愛

也、能敢仁愛、則服喪思慕、祭祀不懈、人子饋食

之道也、喪祭之禮明、則民孝矣、漢書霍光傳田

字

夫孝德之本也敢之所生也 史記、文帝日、朕德薄

而教不明、又武帝詔云、維德菲薄、不明于禮樂、

傳、孝道者、乃立德之本基也、敢化所從生也、德

者得也、案立德者、謂立德世也、春秋襄二十四年

傳、太上有立德、鼎曰、孝者成德之始、敢民之源也、

又曰、忠以事君、信以接人、皆後於孝、民俗孝悌、

而後可施諸博愛敬讓禮樂之等矣、周語、言孝必及

神、又宣王欲得閒子之能導訓諸侯者、樊穆仲曰、

魯侯孝、王曰、何以知之、對臼、肅恭明神、而敬

事耆老、賦事行刑、必問於遺訓、而咨於故實、不

妻之父為一旅、妻之母爲二族、妻之親略、故父母

各一族、杜預云、九族、外祖父母,從母子、父

母、姑之子、姊妹之子、女子之子、非己之同族、

皆外親有服而異族者也、

食也、鼎案傳當是音附、物先生解有子之言曰、周
仁於天下、以敢孝弟爲先、宗庙之禮、所以敢孝也、
養老之禮、所以敢弟也、孝弟化行、民俗和順、天
下自然治、而後世不知其意、以爲迂濶、故有子語
其意也、言觀於孝弟之人、不好犯上作亂之事、可
以見其效弗差焉、君子務本、本立而道生、蓋古語、
有子引之、有本有末、莫非道也、本立而道之行於
彼者、自然而然、有非我之所使者、辟諸草木之生、
勃三乎莫之能禦、故曰道生、於孝弟、未甞忠、
未甞敢敬、未甞敢和、未甞敎順、而忠敬和順、自
然生於彼、先王之知其要也、鼎案、本猶首也、敢者
樂敢化之謂也、民俗孝弟、而後可以施諸禮樂之
敎矣、亦忠信之人可以學禮之意、●物先生解有手
之言曰、本始也、林放問禮之本、天下之本國也國
之本家也、家之本身也、德者本也、財者末也、皆
謂所始、古言爲爾、古之言、皆注１之故也、 鼎
按、祭義曰、立愛自親始,敢民睦也、立敬自長始、
敎民順也、敢以慈睦、而民貴有親、敢以敬長、而
民貴用命、孝以事親、順以聽命、錯諸天下無不行、

呂氏春秋口口篇、凡爲天下國家、必務本而後末、所

民用和睦上下無怨 案和睦、謂夫婦和兄弟睦也、禮

運云、兄弟睦、夫婦和、鄭玄周禮注、睦、親於九

族、首章傳云、是故自生至于三十、則以事父母接

兄弟、和親戚睦宗族、敬長老信朋友爲始也、定九年

鮑交子諫齊侯曰、臣嘗爲隸於施氏矣、魯未可取也、

上下猶和、衆庶猶睦、鼎云、和睦、互文、上下無

怨、高祖下至玄孫之親無怨疾也、所謂親九族也、

故孔氏云、遠者和附、近者睦親也、所謂率己以化

人也、廢此二誼、則萬姓不協、父子相怨、又曰其

德以和天下、而長幼之節肅焉、卑之序辨焉、是

故不遺老忘親、則九族無怨、又云、凡上之所施於

下者厚、則下之報上亦厚、厚薄之報、各從其所施、

薄施而厚饋、雖君不能得之於臣、雖父不能得之於

子、應感章、長幼順、故上下治、傳云、謂克明厥

德以親九族也、長者、於王父兄之列也、幼者、於

王子弟之属也、能順其長幼之節、則親疏有序、而

之化也、又白心篇、道者、一人用之、不聞有餘、

天下行之、不聞不足、此謂道矣、小取焉則少得福

大取焉則大得福、盡行之而天下服、殊無取焉、則

民反、其身不免於賊、

THRI

以之化天下、上下之爲九族也、明矣、又案、事君

章、子曰、君子之事上也、云、上謂君父也、

下文、故上下能相親也、傳惟言君臣者、承上焉爾、

又紀孝行章、居上不驕、與上諸侯章同、故傳云、

上、上位也、案上下所指不一、尙書堯典云、格于

上下、臯陶謨云、天聰明、白我聰明、天明威、自

我明威、達于上下、湯誥云、並告無辜于上下神祇、

又云、朕未知獲戾於上下、皆謂天地、此其正義也、

春秋傳、晏子曰、若有德之君、外內不廢.上下無

怨、謂神人也、尙書微子、我祖底逐陳于上、我用

沈酗于酒、用亂敗厥德于下、此以世言也、燕云、

上必明正道以道民云云是以上下和親、而不相怨也

此謂君臣也、魯語、父文伯之母、朝哭穆伯、而

哭文伯、仲尼聞之曰、季氏之婦、可謂知禮矣、愛

而無私、上下有章、謂尊卑也、九族〇白虎通云、謂
父族四、母族三、妻族二、父族四者、謂父之姓一族
也、父母昆弟適人有子、爲二族也、身女兄弟適人有
子、爲三族也、身女子適人有子、爲四族也、母族三
者、母之父母一族也、母之兄弟二族也、母弟子三
族也、母兄弟者男女皆在外親、故合言之、妻族二者、
至德要道 鄭注、至德、孝悌、要道、禮樂也案下文
德敢加于百姓、又曰道之以禮樂、而民和睦、樂記
侍坐 邢疏云、侍坐者、言侍孔子而坐也、凡有坐
有立、此曾子侍、即坐也、曲禮、有坐於先生、
侍坐於所、坐於君子、據此而言、明坐於夫
子也、鼎案據此則坐常活字讀以下傳有還復本坐、
不可爲死字看也、字彙坐、徂果功、坐與行對、
古人謂跪爲坐、釋名、坐、挫也、骨節挫屈也、又
去聲、徂臥切、坐罪坐獄告反、从土从留省、土所
止、與留同意、
間居 禮記疏鄭目錄曰、退朝而處曰燕居、退些避人
口間居、東方未明蔬、居、安坐也、
所止泥丘、郭注、頂上汙下者、尼丘之山、取義於

此、則或改作尼、讀爲夷音非是、

按泥斤之泥又从丘感

仲尼 韻會小補、尼、女夷切、鼎案、爾雅釋丘、水源

開宗明誼章

胡笳吟動 毛詩疏動聲曰吟、

經又云敬其父 廣要道章、

霍光、字子孟、官至大將軍、

肥後文獻叢書第二卷

者扶持萬物 管子形勢解、道者扶持衆物、使

得生育、而各終其性命者也、又曰、道者、所以變

化身而之正理者也、故道在身則言自順、行自正、事

君自忠、事父自孝、遇人自理、故曰道之所設、身

曰、教者.民之寒暑也、鄭注、敢、謂樂也、又古謂

詩書禮樂爲四術、洞酌疏、在身爲德、施行爲道、

案論語、以文王泰伯爲至德、故仲虺之酷云、志自

滿九族乃離、樂記曰、樂至則無怨、禮至則不争、

揖讓而治天下者、禮樂之謂也、暴民不作、諸侯賓

服、兵革不試、五刑不用、百姓無患、天子不怒、

如此、則樂達矣,合父子之親、明長幼之序、以敬

四海之内、天子如此、則禮行矣、案郊特牲、委貌
周道也、章甫殷道也、世追夏后氏之道也、鄭注,
常所服以行道之冠也、孔疏云、行道、謂養老燕居
之服、物先生云、要道猶要術、殷仲文曰、以一管
衆爲要、鼎云、要者、爲於此而驗於彼之謂也、
要道以訓天下 案凡稱天下者、總而言之、先王有
至德以訓天下、則天之明、因地之利、以訓天下之
類、是也、稱民者、別而言之、先之以博愛、而民
莫遺其親、陳之以德誼、而民興行之類、是也、
二〇
愛日齋隨筆
按風物三老 孫本孝經釋疑云、昭帝時、魯三老獻古文、
王名、

1

二字

前漢律歷志、風之以德、感之以樂師古

風德風物

-當作以字

必爲寫與之、留眞、加金帛賜以招之、繇是四方道

下秆也字

貞吉按讀

夫樂以關山川之風 晋語、師曠曰、夫樂以開山川之

孝景前二年立、脩熟好古、實事求是、從民得善書

河間王得而獻之 漢書景十三王傳、河間獻王德、

作孝經、

風、以耀德於廣遠也、風德以廣之、風山川以遠之、

風物以聽之、修詩以詠之、修禮以節之、韋昭云、

開、通也、故入普通通八風、耀明也、

子游爲武城宰 論語雍也篇、

曾參 史記仲尼弟子列傳、曾參、南武城人、字子

不害、吾驟歌北風、又歌南風、南風不競、多死聲

婦之高行也

楚必無功、

者、父母之高行也、忠者、臣之高行也、孝者、子又師曠云 襄公十八年左傳晋人聞有楚師、師曠曰、

孝者人之高行 管子形勢解、慧者、主之高行也、慈|其說移風易俗 廣要道章、

孝經孔氏序

三老所獻、建武時、議郎衞宏所校、皆口傳、官無

其說

愛日齋隨筆 經說部 (一)

吳澄今文孝經考、許冲云、古文孝經、孝昭時魯國

少孔子四十六歲、孔子以爲能通孝道、故授之業、

術之人、不遠千里、或有先祖舊書、多奉以奏獻王

者、故得書多、與漢朝等、所得書、皆古文先秦舊

書、周官尚書禮記孟子老子之屬、皆經傳說記、七

十子之徒所論、又魯恭王、以孝景前二年立僞淮陽

王、吳楚反破後、以孝景前三年徙王魯、好治宮室

苑囿狗馬、季年好音、不喜辭、爲人口吃難言、恭

曰、以德化之、以樂画之、韋昭曰、風、風宣其德、

廣之於四方、作樂各象其聽、韶夏護武是也、又曰、

風物、風化之動、物莫不傾耳而聽、○漢武詔、蓋

開導民以禮、風之以樂、師古曰、風、教也、宣

紀詔郡國二千石、謹收養民、而凰德化、師古曰、

以德化被於下、故云風也、詩亭曰、上以風化下、

鼎案陸德明顏古讀風皆如字、

古城貞吉重校

武 藤 嚴 男校

八木田府庫

して加波禰とはひひたる也されば始は姓氏のうへ

にも官のうへにもかよはして加波糖といひたる放

書紀にも其心をえて貶姓とはかれしなるべしさ

れども加波といふ言の意はいまだ考へす物には氏

骨、尸、などかくれしかどもそは昔假字がきにて本

にはあらず賀茂真淵が説にあがまへ名のついま

れる也といひたるはおかしくときえたるやうなれど

もなほひからんおぼつかなく那牟

一もじにひひたるは本二もじならを一もとにつめ はあらで品等位階あるものをすべて加波禰といひた

てひひたるにはあらでもとよりさるべきよしありてるにて姓の字を加波禰と訓せたるも姓氏の品等をさ

などやうにた

サト

いひし物はもとは姓氏のたぐひのみをひふとに

ムマヒト

オサカ

楽蓄おく處なる放稻城とはいえなりしかるを書紀

に稻城とかくれしはいづれも兵士のたて籠りたる

にて常の城とばかり物にさしてかはりたるさ

まとも聞えざるは稻城は租稻をたくはへ置く處にて

盜賊などの長もあればめぐりに煌など深く堀まはし

てかねて要害よく構へたる所なる故事あるをりには

便宜につきてそれに引籠て敵を防ぎるなりとSへ

此説は前のあがたの考よりはまさりて難なきやう

なれどももしはたしてしからんには稲置も稲城もお

なじ物なれば事に依て其心をえて文字をおかしく書

かへたるといふばかりなりされぱおもに稲置の置

の字をおきのおをきてきとのみいふは日置をへき

といひたる傍例もあれば牧をまきとひ馬城の意と

せんより馬置の意とはんそおだしかるべきにあら

ずやさらばまた城をいふもおきのおを略きたる

ことひはんにそはしからずすべて物の名などにもじ

の二つも三つもかさなりたるを上下たがひに略きい

ふは常のことなれども火をひ木をきもじにのみひひたる物とおぼしければ城をきとい

ふもまた共たぐひにておきを略きてきといひたるに

はあらでおのづから別に其よしありしなるべしさて

稲置といふ職稱は縣主の色々の中にては最下の卑職

なりしにや天武天皇の御時天下の姓を混じてた丶入

色の姓に定められしに稲置をば第八等に置れたりま

いまだ御里に おは

た允恭天皇の皇后忍坂大中”姫の

せし時間鶏國造が貴人なるをしらすして皇后に

花一もと請まうすとてなめけなる詞もて穢れいひた

しを皇后御心のうちにふかく憤ておはしましいか

ば皇后にたくせ給ひて後件の國造を罪せられて姓を

貶して稲置となされし事允恭紀に見えたり是は國造

が位階を貶されたるとなれば貶爵とこそかくべき

となるを書紀には貶姓とかくれたるは當時はやく

稲置とS職稱は廢れてかの八色の姓の中に稲置あ

ればそれにまがひて誤て貶姓とはかれつらんと

もおもひしかどもつら(おもに往古の加波禰

には覚えされども大もれはたがふべか

此説一わたりはげにさることのやうにもゆれど 牧の字を馬を楽めおく處なる放うまきともまきとも

も何とやらん強ひごとのやうにおもはれてひたふる ひふは馬城の意なりしかれば稲城も同意にて租稲を

て城の字をきといふも兵士を聚めおく處なる故にて

往古は窪田よりも高田のかたおはかりし堅固なるべきとも思はれねば本居宣長は書紀の説を

放田舎の事をすべてがたといふことになりしとやば取らずして往古はすべて物を置くを支とひS

にひひたることあり 豆長が説は古事記際に見えたりつばら

にて高田は今の畠窪田は水田

城壁「不可破也と見えたりには信用なりがたしさりとてまた外に考へえたるこ

主稲置等の名義職掌

し

積

なるべ

は盆城の豐田を知行して豐田十郎と名のりしも此た

ぐひの事にてありし也中昔より諸國國中の有勢の

者を撰て押領使惣追捕使警固使などい物に補せら

れて國中の警固追捕の事を專任せられし事あり俵藤

太秀郷が下野の押領使奥の秀衡が奥羽兩國の押領伊

東祐親が伊豆の押領使佐々木經房が近江の惣追捕使

伊豫椽橋遠保が常國の警問など是なりされば菊

池が家も大かた世々警固使を相傳してありし主と稲置との名義はおのれひまだうまく考へたる

ことはなけれども縣をあがたといふよしははやく本

居宣長が神代紀に高田窪田と並べいへる高田をあげ

た窪田をくぼたと刻ませたるに據て縣をあがたとい

ふはあげたの轉りたるともなければ姑く此説にしたがひて後のよき考を待

べきにやさて縣主といふはた文字のまゝに心えて

よく聞えることなればくだ~しくいふに及ばず職

掌の事は前にひひたるごとく國造と同しく撫民の職

といふより外にくはしきことはしられされば大かた

に応えてあるべきにや稲置は前にいふことく縣主は

統名には稲置は其色々ある中の一色の名なり此名義

も文字のまゝ租稲を置く品のとにて後の圧官に税所

とひふによく似たるとなりそれをやがて職稱にした

るも税所などひひたるに同じかるべし書紀にま

た稲城とかきていなぎと訓せること垂仁紀推古紀

なとに見えて垂仁紀には其さまを解してされどもひなわら

をかさねて城壁としたるが破りくづされぬやうに

のことなり二五五

桃元問答

菊池則隆が官途の事日本史武重傳には菊池家譜を引 しを鄉府内の軍を出して追拂はれし事ありき其勳

て太宰將監とかれしかども心えかだくおぼつかな 功の賞などにて菊池郡を給はりてありしを後に孫の

き事にて従来府官には少監ありて將監なし共うへ府 則隆に譲傳へて所領の地に下し付られしにもあるべ

の大少監は太宰府の判官なれば変更にて武官には して則隆が菊池に安堵せし後は常國の警固使に補

らさればおもふに選史の人則隆が頑父隆家卿當府 せられたりしと見えて其子の經隆が假名を系圖に兵

の師にておはせし故其ちなみにて則隆も府官に補せ 藤太郎と見えたり昔は父の官途を取て其子の

られたりしが其後猶筑紫に留り居りつひに菊池を 假名に加へて名のるは常の事なりしかば經隆も其例

せしならんとおもひつきたるより家譜に則隆が官 にならひて父の則隆が警固使なりし故やがて其職稱

を將監とあるを字音のちかきより府官の少監と取 を假名に加へて警固太郎とは名のりしなりまた兵藤

がへてつひにあらぬ事迄も杜選したるにてことは を名字としたりしことは父が世にありし程は津江の

菊池家譜のムに據て書出せしにはあるべからず系圖兵藤村を領してありし放初は領地の名を名字として

にも左近將監と見え武朝が申狀にも大夫監と見え ありしにて後の武光が兄の武士が讓をうけざりし程

菊池則隆か官途

されども上件の考どもはまことに愚が臆量の僻案に

右等の外にはたしかなる設左とてもなきことなる

前書には其ことわりをば申さで本よりさる事なり

しやうにげにくしく書立置たる故かさねての

御推問にも預し事とまことに進退恐おほくおほえま

うし候

たれば則隆始は近衛府の監に任せられしが後に五

も大野庄なるにはたがふまじくおもひなりたる也

位にせしより大夫監とは名のりたるにてまこ

とは初より府官に任せられしことはなかりし也さて

則隆が後に筑紫に下りて菊池を知行してありしこと

はいかなるよしありしにや武朝が申状にも其事は何

とも載せれば今よりはだかにしらるべき事には

あらざれどもの例の試に強いは隆家卿の帥にてお

はせし時刀伊とい國の夷賊ども寇せしことあり

件の下に見えたる石貫の地

見えて玉海の作者月輪閣實公は當時はまだ は後の郷村帳には玉名庄の管内としたれども前に

右大臣にておはしましゝが頼朝卿より月輪殿の御領 いふごとく郷庄の廣狹は世に随て沿革一定ならされ

伊豆國馬宮庄を其よしをも申されずして押して常國 ば當時石貫めたりは大野の莊内なりしもしるべから

の走湯山に御寄附ありし放其替地として八條院の御 其上此庄の公文所の政所を當時たま紀氏の人

領肥後國豊田莊の預所職をまるらせんと申されし故 の□じてありしをおもふに國隆が大野の地頭に補

大臣の御身にて院宮の御庄の預所になりたまはんと せられたるは建久四年の事にて件の公文所の下文は

こよなき御耻辱なりと御不快ありて其よしをまた鎌 承元二年の物なれば其間わづか十五六年ばかりに過

倉に仰遣はされなり是は實公は譜第攝關の御家 ぎずしかれば國隆は此の地頭になりて下りし後程

とび御身もはやく右大臣になりておはせし故に女 なくまた預所の家より公文所の政所職に補せられた

院の御庄の預所となり給はんこをかくは耻さらひ給るに件の下に政所紀と見えたるは一定餘人にはあ

ひたるにて大かたは其頃の風習攝大臣の家ならぬらで地頭の國隆なるべく覺ゆればかた件の御

タフ

公交ハナハダ

所

所といひて其實は地頭代官などSふも同物なり玉海

しからざれば頼朝いかに威權に募り給ふとも月輪殿

庄の

にゆるや

朝紳は院宮はさらにて攝器などの御庄までもその預

所をばきらはずうけもち給ひしは常の事にてありし

見えたりについてなしき御ふるまいありし事は

あまりなる事しかれば件の御莊とあるは當時豊田元暦二年九月二十五日の條に又頼朝合申云〝伊豆國

馬宮庄亂-初不知御領寄進當走湯山 了

此進退有恐被替而八條院御領肥後

國豊田 所預此子細有疑件所自女院 八條院の御領なりしごとく何れの院宮かの御庄な

放賜頼朝 □今宮代進之修理可 しと見えまた本家といふも當時朝神の中より其御

然若″頼朝給預所職以下官爲三女院御莊預 莊の預所にておはせし家をいひたることしるかりま

所之條太以可見苦 凡家之習無如此事

件の御圧とある大野庄の事とし國隆を其處の政

以此等子細 計 答之光長朝臣と 所なりしと申しことは二五三

桃元問答

國隆法御恩地を被下建久四年卯月二日御教書を輔成宗が阿波國の守護人にて営國一宮の大宮司に補

頂戴候而八日‶關東を被罷立肥後國玉名郡之内 大野一せられ託摩別當次郎時秀が小貳豐前々司景資に代て

二百五十町被給中尾高岡居屋敷にて子を男子三人 筑前國志度の地頭職に補せられたるなど此外にも

女子五人被持候云々と見えて隆は建久四年の四月 なほいくらもありしなるべし父大野庄は權門領にて

大野庄を賜りて鎌倉下向せしとあれば隆は あり國隆共處の地頭に補せられてまた其處の領

倉殿の御家人にて其時始て所領に附られたる 家より公文所の政所職になされたりと申しことは是

にて是すなはち武家の新所謂庄園に地頭を置かれ 廣福寺文書承元二年三月公文所の下に本家預所

たる一ッなりかいる事證とものある故に隆を大野 御庄太平之田停止雜事可被早寄進と見えて本

庄の地頭なりしといひたるなり國隆が初の假名は何 家とあるは何がし殿なりしやさだかならされども

とかひひけむ件の置には八幡別當とばかりあり 預所御莊とあれは此莊當時院宮か又は闘家など

て假名をしるされぱさだかならず國隆肥後に下り の御領なりしを件の本家とSふ家より其處の預所職

て後に男女の子共八人まで設けしとあれば始て所領 になりて爲給ひしことしるかれば此庄の當時權門領

に付られし頃はSまだ年かなりしにはうつなけれ なりしこともまたさだかなるにあらずや預所とSへ

ば八幡別當とは鶴岡の八幡の別當なりしとは聞えずは權門領の所務雜事をちなみの人に預かるを預

にて肥前鏡~宮の大宮司に補せられ三好宮内大

は清源

寺文書甲伊豆入道宗善が弘治三年三月の置

に其昔關東より直に被成御下知候然は八幡別當

前書に大野國隆は大野庄の地頭なりし由申候事

紀國隆大野荘の地頭たりしさだかにいひあかすべきしかたとてもおもひつかさ 大かた國隆が晩年に入道したりし後當圧波禰岐八幡

りつればなり

の別當になど補せられしなるべし其頃かく諸國の在

廰地頭などより當國他の社務をたし例は佐々

木秀義が父兵庫助經房近江國の惣追捕使にて佐々

木の庶務職に補せられ草野次郎大夫永平筑後國の

在廳二五二

やしきやうなれば朝紳なるをば守護職にむかへて 在國司はみな其國の在廳のとにて東郷の在國司とは

とさらに國司と稱し世の受領といふ物に名實ともに 谿山郡の東郷にある在廳等にて縁物はへりのものに

殊なるやうにせられたるにていはゆる奥州國司北 て其國にては家徒の物にはあらざるゆゑへりの物と

畠顕家卿伊勢國可中院顯能卿伊豫國司四條隆 ひたるとおぼしければ件の在司は國はしの在廳

資卿信濃國司堀河 光朝臣能登國司中院 定清朝 等なりしことしるかりまたのたることにはあ

臣など是なりされども是は公家の勢を張られんため らねども豊後國岡田帳に常國の在廳道忍が狀あるに

の一旦の新制なりし故南北御一統の後には公家には 政之御使い下向去*正月以來直人相共"昇向"博

また朝紳を國司に任せらる事なかりし程に世には 多候間云々直人等組合注進狀一巻内々爲三御

司とS名されて人もいはぬとになりしなりさ 存知)三進上候とある直人はみな在廳のことにて

てひと後になりては武家の守護職といふ名もひつと 府廳に番直して吏務をさする故直人ともひふなり

なくやうくすたれ行て近き頃よりまた守護にかは されども其頃はすべて番直の者をば直人とひひ番直

て主といふこと出来たりし故世の物に心えぬも の所を直屋とSひたるうへにかの廣福寺文書の公文

のは其となへの似かよひたるより國司も國主もおな 所の下文にも政所圖帥公田所などをすべて直人と

じことのやうに心えたがひたるもおほかりさて在廳 いひたること見えたれば、直人と計Sひては何て

の事をまた在國司ともひひたるとは東鑑に筑後國 の直人ともわきまへがたかるべしされば常時とても

住人草野次郎大夫永平が其家相傳の在を先例に よその人よりふをりには一定國府の在廳をば府の

まかせ補任せらるべきよし鎌倉殿よりしきりにし 直人とかの直人とかいひまた公文所の寄人をは

申されし事見えまた阿曽文書將軍宮に供奉の人の薩 文所の直人などいひたらんとおもひし故前書にはし

摩より阿蘇惟時におこせられたる狀に東郷 司 か申たるにて本より杜撰のことなどもしか名をま

以下緑者共可參御方之由内通申候など見えたるうけてことわりおかされば外にはまた其はひだめを

肥後文獻叢書二巻

分公廨法、大小國長官、六分次官、四

分判官、三分典、二分史生、一分など見えて司

ひふは史生以上の統名なる故或は守計をも司と

びあるは介以上あるは椽以上或は目史生以上をもか

~時により事に從ひて其差等を限りてひづれにも昔

國司とはいひたる也さればこれらの事共を併見て蒲

桃元問答

また

司、謂介以上また凡國郡司撫育有〃方戸口増益 者

各准二見爲ご十分論”加一分*各進考一分とあ

る注に國郡司、謂こ椽以上及少領以上又凡大貳以下

及國司每年分番朝集とある注に國司、謂11月以上すま

儀制令に凡郡司遇三本國司者、下馬っとある義解に

謂境内境外皆同”三國司史生亦是也其博士

醫師於三部内取充”者、不同,此例と見えて郡司

路にて本國の國司に行遇る時は位の史生とい

へども下馬する格なれども博士と醫師とは昔部内の

人を取充ることにて郡司と同等のものなれば有位の

博士醫師とても下馬するには及ばずとまた民部式

に凡官物運〃京”差綱領米三百石以上、差ñ

司 史生以上勝 *任”者二人っと見え主税式には鮭即

未進數司 史生以上)公廨、

凡國二五一

守ととなへんには當時は武家の主達暗記のに也

S

にも受領したる者はくありて其となへ名膏共に

など

シュピチ

生が説の杜撰ならざりしことを悟るべし其上國司と

ひふことは蒲生のみひとりしか心えたるにはあらず

中昔の末までは世の人みなしかのみ心えてありしと

見えて東鑑元仁元年十月二十日の條に阿波殖

保預所右衛尉基清興地頭小笠原太郎長經7日來

有相論)事」今日兩國司於御前決といふ事

見へてかいる莊保の卑職の者をとらへて兩國司とい

ひたるはいかにも作者のひが心えなれども當時世の

人も大かた瞬司といふは其司の尊卑をすべてひふと

ぞと心えてありしより此作者も莊保の卑職までも在

廳などのたぐひぞと心えてかく國司とは書誤つと見

えれば其頃迄は國司の名はただ長官のみに限りて

はSはざりしとさだかなるべし然るに後醍醐天皇の

御世になりて司の名伐に尊くなりて世の受領とい

物とはしな何からぬやうになりたるとありき元

弘に鎌倉をほろぼされて後朝紳武辨の功ありし人々

をばみな諸國に封ぜられて武辨は是迄のまゝ守護人

守護職などいひたれども朝紳は昔のまいた〝何某

及下國守”者、昔馳申太政官考課に強

なれば大化以前よりはやく國司の名はありしやう濟諸事肅所部國之最」とあるに國

たれどもくたしければ引出すに及はずされども ふこと見えたり其後には選叙令に凡在官身死及解

推古紀に見えたる聖徳太子の十七憲法の中に國司國免者皆言上、其國司、大上國介以上中國〝株以上並

造莫斂民と見えたる計は當時に出されたる法令

主帳などS

・大化の前はや

代替國司といへるはけにさることなれば其下に改

に見えたれどもまさしく國司を置ことは大化の

新令に始まりたこと孝徳紀の載する所明白なれば憲

法の文もそのもとは國造主などかれたるを大化

以後は國司國造とつらねひひたるより傳寫のをりま

がひて書ひがめたるかまたは例の選者の潤飾にて後

司あらんには

の名を前にまはされしにもあるべし

主のたぐひすなはちすべて固司なれば

さて蒲生秀實か職

司國造とつられてはいふべからざるなや

官志に守以下史生以上を總て司といふよし見えた

るは書紀には都"之曰國司などの明文とてはなけ

れどもまた蒲生が據もなく杜撰したることにはあ

らず國司郡司といふは國の官司郡の官司などSはん

も同ことにて國にては守介椽目史生郡にては大領少

領主政主帳などの色々の官司をすべて國司郡司とは

ひひたること故書紀の大化の新合にも國司の事をい

ふには介以上判官以下また長官次官主典などSN

見え郡司の事をいふには大領少領主政國司日國守とひひたるは自語相違したるやうに見え

たれども是は謂國司爲三國守などかくべきを大

たに心えておもふやうに筆もまはらざりしなるべ

それもくほしくいは守とは司の中の守ばかりをさしていふ

ことにて司のことをさしてた らに風守といひたるにはあらす

齊明紀四年のに越守阿部 比羅夫云々天武紀

壬申の亂の段に伊勢國司守三宅石床介三輪子首云

二年の春馬より始て白金を献せし段に授其國

司守忍海大國‷小錦下など見えて續紀以前にはか

く國司守國守などかれしかども大寮以後には總て

國司の二字を略きて大和守和泉守とやうに國名の下

に直に官稱をつらねて書れしより後までも國司の官

稱をSふにはすべて其定にしたがはれししかるに

書紀にはまた孝徳紀の前にも國司といふことの所々

に見えしらがひたるは例の後の名を前にはしてか

わたるにて書紀の文にはさる例どもいくらも見え

それは後の贈封なしを此卿は配所より帰京

の始に二國の國造に封せられてしかも質封なりしは

たがへりまた此卿の國造は其身一代限りて昔の

造の世襲なしにも同からざりしなり

□乙とS名見えるも馬長と同じく當時の郡司

なりしが其子孫も後までも肥後に土着して後には

是も在磨になりてありしと見えて件の建久六年の國

宣の連署の中に權介真上、真人といふ名見えたりさ

れば國造の始末は大かたかくのごとくなりしと見え

たれども其事くはしくしるしたる物なければ此上は

考るによしなししかるにまた大化に始國可郡司を

置れて國造をすべて郡司となされし後また新たに朝

官の人を國造に任せられることありき後紀延暦十

八年の條和氣朝臣清卿の小傳に中清卿を大

隅の配所よりめしかへされし後美作備前二國の

造になされし事見えたり是は昔の國造とは事さま同

じからで後に國とひひたる大國のしかも二國の造

となされたるにて是より前後にはさる例も聞えされ

ば何さま是は一時の特恩に出る事なるべし前に不

比等公の淡海公に封せられ給ひしによく似たる事な

かはることなきかたよりはんには文武天皇以

後の事とせんも大なるたがひはなかるべし又前に歷

二四九

職原抄乃成務天皇四年始定.國造”とある大全に上

皇極天皇時始改司

古以三國守7日

古以國守皆日三國造「至皇極天皇時始改國司、

歷代替云三國武天皇改國司”日國守と見

えたるは本文も大全もたぐ事の大かた斗をいびて

くはしからぬとい迄にてすべて據所もなく事實に

もたかひたるとははれまじきにやらん本文は年

紀は書に據り事實は古事記に據て主の事は略か

れたるにて大全に孝德天皇を皇極天皇としたるは御

世のちかきよりふと心えたがひたるか後の傳寫の

謎にてもあるべし始改國司云々又改國可日國守とあ

る二つの改の字はともに事質にはすこしたがひたる

やうなれども國司を置きし後は國造はすべて郡司と

なされしかは造の名はあれどもなきがとくにな

りにたることなれば是も大かたには國司に改む

ともはるべしまた書紀には天武紀にはやく國司守

國守などふと見えたれども定まりて國守とばか

りいふことになりたるは大以後の事なれば共定

國司は守以下史生以上の統名なる事

江命の

ふ名二三人見えて是等はみな火)國造*遲男

に國造の員数も減じたりしにや延喜の頃になり 後にかばねを初は火君後には肥君などひひて盆

てはつひにかく國造のな國なども出来たりしと見 城の小熊野なる淨水寺に延暦廿年に立たる石燈樓の

えたりしかのみならず其たまく世に残りたる國造 残りたるに肥君馬長と名見える人の遠孫と

の家ども延喜の頃になりてはかならず郡司に補せら もにて後にかばねを宿禰と改られたる家々なるべし

るにもあらず大かたは其家の神の或は其家 依ておもふに件の延暦の馬長は一定當時益城郡の大

の遠祖よりいつき祭り來れる神社などの宮司務と少領にてぞ有けむ件の石燈の連署に馬長が上に異

チ

アガモノ

なりて國造と名さへ失ひたるがおはかりし故當

一條,其國造、出馬一疋又民部式に諸國大馬

若無國造 ，國者以正買用價、不得過五十

東」など見えてかく國々の大ある時には其國中の

國造等は郡司なるも郡司ならざるもかならず馬一疋

カバチ

毎郡出刀一口皮一張鍬一口及雜物等”別‶嵐

とはや何からざる事あり神祇命に凡諸國須

出雲

勘造 云々國造帶意宇郡大領外正六位上

臣廣島と見えて云々とは國造にて郡司を兼帶した

るなり國造の郡司になりたるはかく世襲の國の顔

はなは取はなたでもちたる故供奉の間には自餘の郡

司時國造といひしはたゞ出雲國造のみ式に見えて其外

には國造の名は一つも見えず今の世までも出雲の外

に國造の名の残りたるは紀伊隱岐また攝津の菟餓

國造是三家のみなれども此家どもははやく衰

微してSとかすかになりてありしと見えて是等の國

造の式に何とも見えざるはさらにほかの物どもに

も其名だにつや見およばざるはいかなるよしに

か心えがたしまた國造の中にも初は例のこと~郡司

に補せられたるが後に戸を改賜はしをりなどより

の物を出すをもて定課としたるとは後までも其傳 造のとなへをやめて後には國司にもへのぼりて在

領の地をかたばかりは失はずして有し故なりしかる 司になりてありしもおほかりしにや阿蘇文書建久

に世を経るまいには諸國の國造等或は子孫なくして

S

六年の國宣の在願等か署の中に權介肥宿禰と

家たえ或は罪ありて傳領を收せられなどしてやう

れて國々を治めしめたまひまた其々にある國際

どもをばすべて郡とい物に改められ北國造縣主共

桡元問答

どもすこしくはしからざりしにや大昔は國がた

並びたちて其間には大小の差等とてもなかりしかば

主といにも國造と同やうに君別直稲置などの色

々ありしと見えたれば主も其色々をすべてる名な

りし故に古事記にもかく大小の國造縣主を並べて

はかきたるなりしかるをや後になりていかなるよ

しにかといつとなく廣く大きくなりては

其内に属して後の郡といふものやうになりたる故

國造といふ名も縣主までもすべてひふことになりて

後に内官外官とむかへひひたるごとく造國造とむ

かへいふことにはなりたる也さてかく風といふ物の

廣大になりたる後には縣主はさらにて國造といはれ

しものまでも後のといふ物の中に主と共にひく

らもありて各その國を領じてありしなり

古事記 攝

井耳命の御後の事をしるしたる中に道奥石城造常道

一造と見えて道奥は陸奥國石城は盤城郡常道は常闧仲

郡なるにて常時後の園といふ物の中に

大昔の国々存在したることをさとるべし

しかるに孝徳天皇

の御代になりて西土の郡の制にならはせ給ひて後

の風とい物!に守介椽目などを遣

二四七

領強幹聰敏工書算者"爲主政帳」と見えまた大

寮の選余分にも凡郡司云々其大領少領才用同*者、

先"取三國造"と見えてこには主をすべ

ていひたる國造にて郡司には其國人の才幹ある者を

選補する定にてかならす國造ばかりを任せらるには

あらされどもまでの國をして新に郡に改られ

各郡司を置其政務を執行せしめらる事なれば是

までの國造縣主は伐に職を失ひて身の措所もなき

風情なる故大方は昔のまいそこに置てたちに其郡

の郡司になされしなりそれ故もし餘人を郡司に選補

するにも其才用そこの國造と同等なれは其人はさし

置て先″國造を取て任用せられししかるに始の程

は郡司になされて後も職の國造はなを世襲してか

はらざりしと見えて出雲風土記の尾に此書を撰著

したる年月撰者の姓名をしるして天平五年二月卅日

をば其郡を治むる郡司と云物になされてめしつかは

る事にはなりし孝徳紀に大化二年春正月宣二新

制之詔云々又置内國司郡司″郡以四十里爲

爲三小郡

大郡三三十里以下四里以上爲中郡二三里

其郡司、並取國造性識淸 務者爲三大領小

此御代に前々の國 伯子男と五きざみのしな有しそれはた國造君別など

どもを併せて共區域の大小をほとりにつきの色々あるに似たり其五しなの中に一つの名をとり

て正し定められたるなるべしされば其頃まではむてすべて諸侯とひしもすべてをも國造とひし

かしのま國あがた並びたちていまだ統屬の制は立に似たりといへるはげにさることにてよく聞えたれ

及稲置主也と見えまた景行犯にも七

ぜられしと見えて古事記代宮巻に七十七王者

は大かた新建の風

を

昔國造と同じさまなる物にて此色々を一つにすべて

ざりしと見えたれども其大小を定められしといふに

て何とやらん後つひに統屬の制にうつりたることは

やく此御代にきざしたるやうにおぼゆるやまた國

造縣主の事の西土の封建制に似たるといふことは

はやく本居宣長が説にSにしへに國造といひしは今

の世のこと大きにこそあらざりけめども大かた何事

も大名のごとくなる物にて國々に多く有し也それが

中に國造また君また別又直又稲置また縣主などSふ

色々の有て奪き卑き氣ぢめも有つるをその氣ぢめは

さだかにしるせる物なければいづれ尊く何れ卑かり

けん今こと!くはわきまへがたけれとも大

長

クサ

二四六

長なししかるにかく倭漢の謂を取ませてあやなさ

肥後文獻叢書第二巻

れし故書さまのいとまぎらはしきのみならず倭漢と

に其實をうしなひてあらぬ事になりゆく くをや

此前年の文にも郡”無二君長邑‟無二首渠ナル者又

長邑置」首「また任

見え此外にも園

を用ひられ

に見え これにつきて

論すべきことおほかれども事長くくだしければばさのみばとて

しかるに古事記の書さまにはさる物をこなひ

ぶきつ

は一つもなくしてた當時の事さま有のまにかき

たる趣に見えれば今はひたすら古事記の説を正し

き據所として大むかしの國縣の事をばとともかくと

もさたすべきことなりかして成務天皇の御代にな

てかく大小の國造縣主を定められしことは是まで

御代々々に追つぎておかれたる國造主もおはかる

べきうへに前朝にかの東征伐の功にて土地を開か

しこと昔に倍して廣大になりしかば新たに開か

所々にも國あがたを立て國造縣主を置れたりし

前朝には皇子あまたおばしましゝ後にも國造といへりき書紀などに造國造などあるはか

の色々をすべて一つに國造といへるなりさてもろこ

しの國にもSにしへ封建制とかひひし代の諸侯と

三国造 物これによく似たり其諸侯に五等の爵とて公侯

餘皆封三

封國郡 各園と見えたりふもに屬せるものにてはなかりしともさだかなる

べし其後國あがたの事の古史に見えたるは古事記高

穴穂宮に定大國小國之國造大縣小縣之縣主と

あるを書紀の成務紀には郡'置三造長縣邑置稻

置と見えて二書の書さま大かたはおなじ趣のごと

聞えたれども書紀なるは例の漢文にて縁飾せられた

る故當時の事實とはひたくたがひたることおほしそ

はまづ國郡といふは孝德帝以後の制にて當時いまだ

郡といふものなかりしのみならずもし郡の字を縣

ことにあていかれたらんにはまた下に邑とあれ

はあがたのことかさなりて聞えがたしまた大昔は國

縣の宮司には稻置の外に君別直首縣主などの色々あ

してとなるた稻置のみを書れしもいかな

るよしにか心えがたくもしまた漢文のみに依てかい

れんには漢文には州郡ありて國郡なく首長ありて造

高宮わぎへの

にて大昔の國とひひし物のさまもしろくまた豚とい

しく引はせていはんにはまたおなじからぬ事とも

とよく似かよひたるといえばかりのことなればくは後にはかく山澄と城下と二郡のにたる一郷也是

大和國上郡の郵名

て世襲ならざりしはたがへり其

ませ給へる倭の郷のことにて是は式の

うへ國造は國司とはちがひて始よりかの封建制を名帳に大和岡山邊郡大和〃坐*大國魂神社また和名抄

ならはれたるにはあらでおのづから事さまの彼と是

あたり

ば其官司遷轉更替しもまじりて見えたりそはまつ大昔の國といひしもの

は封建制のごとく百里七十里五十里と封域の大小

定まりたるこそありしにはあらずまた其大國とS

も大かた後の一郡ばかりの地にて小なるは其頃大縣

といひしょう猶狭小なるもありしうへには豚をす

べ縣は國に属したりといふにもあらず國とあがたと

並べたて、各共首長を置れたる也神武天皇の御時珍

渣を倭國造劍根を葛城造となされまた弟を

猛田縣主弟磯城黒速を磯城縣主と定められしてと

神武紀に見えたる是國造縣主などを置し起源なり

しかるに其頃の國といひし葛城國の後に郡となりて

葛上葛下とひたるはさらにて倭國といふも後に十

五郡を管して一國となされたる大倭國にはあらで仁

徳紀の皇后磐之姫命の御歌に青によし奈良をすぎ

たで倭をすぎ吾見かほし國はかづらきれが家人を名代としたるを小目代とも又代官とも

ひまた略しては又代とばかりもひひたることあ

りされば誌版の文も太宰府の又の治地にて肥後國は

太宰府の所管の國なればしかひばれまじきことにも

あらず又代官といふはいと後の世の俗稱なればそれ

を引證として奈良の文字をさだせんはいかにも物

遠く似つかはしからずも聞ゆめれども書などの古

き物に人の異稱別名あるを亦名日某は父名或は

更名なとかきたるをすべてまたの名と訓ませるこ

とあり是等の文字ども西土の文にはさく見およ

ばぬことなればまたの名といふは本より古きとなへ

にて常時世の常言なりしを書紀には其まいに文字に

ば治は脩造の義なりしかるを近俗あやまりて空棺の

事を治棺といひならはし川別もそれを聞馴てる事

とのみ心えてありし放文字の用格をたづぬるに及ば

ずしてかいるわきまへなきことをも書出したるさ

りながら件の父の字もし川別等がひふごとくまこと

之のじのそこねたるにはあらざらんにはまたしひて

さながらにして讀まれざるにもあらざるべしてはい

と後のことなれども地頭の目代々官などい の

國造の職掌始末などの事御垂問を蒙り候へども是ま

でさしてことさらに考置たることいても無之候うへ

あまり大むかしのことにて候へば職員分などのごと

きくはしく各官の職掌を載せたる物も無之候故・

しきことは考ふべきよすがも無之候へども其大

ばかりをば例の試にして申候は、孝徳天皇の御時

國造を罷られてみな郡司になされて其代に國司をば

置れたることなれば國造の職掌も大かたは國司の事

にさまで打かはりたる事もあるまじきにや聖徳太子

十七憲法に國國造」民とかせ給へるにて

ひづれも撫民の事をむねとして同やうの職掌なりし

ことさかなるべく覺ゆるされども國造は西土封

建の諸侯の如く始封以來世襲の職にてありしかども

司は西土郡縣の制をならひて設置れたることなれ

國造の職掌始末

うつしてかくさまには書いだされししかれば

又の治地といふことも奈良の人と絶ていまし

きことにもあらじかしされどもほかにはさる例もな
くあまり殊やうなる書ざまなればなほ之の字として
讃たらんぞ聞えやすくおだしかるべきをや
二四四
の見
えたるはみな後の名を前に廻してかれたるにて書
紀の文にはさる例いくらも見えたりまた太宰府の事
を皇極紀を引て此御代より以前に定らしと見ゆと
へるも前の七道の考と同心えたがひにて太宰府の
名と文武帝の大資の分を出されし頃に定められたる
名にてそれより前には筑紫惣領所といひ其長官後に
帥といひたるを筑紫惣領といひし也 此事別にくぼしき考
あれども事長は
ましゃれば文武紀以前に太宰府の名の見えたるは
是も後の名をはしてなされたるなり又治地の考
は高教授又の字を之の字として太宰府之治地なり太
宰府の管内なるをひふといはれしはげにさる事にて

令に西海道九國の事をいには大かた太宰府部内

とばかりありて國別に其名を出されたることなし

誌版も例にて肥後風はもとより太宰府の部内なる

故治地とはひたるなり治地は治所とSはんも同意

さむるとなれば治略して

アヤ

武紀より以前に東海東山北陸など七道の名どもることなれば特亭が無稽の説とは同からされども天の字と見ゆるはうつなく之の字の上の一點滴らせて

といびたるにて

川別が崇峻紀を引ていひたるは正史を引識して

なれども西土の文に治所とあるは其官府の所在をさ

していふこと れども此治地は官府の所在をひひた

やおもふに通俗の年代記などやうの物にしか見えた

るをふかくも考へず筆にまかせたるひが事なるべし

また見えざる也しからされば太宰府にて句絶になりて下

の文にかざるゆゑ前文開白以下太宰府といまで

何のためにSひたることも聞えざるをやもし父の

字を之の字として讀ときは極めて拙澁なれども

意はよく聞えて開白す此葬地は七道の中西海道の

太宰府の治地なる高野山なりとなるべししか

るを亭川別などが考のごとく又の字を字のまいに

して讀まんには全文連結せずして太宰府以上の文字

は無用の物となる放つひには何のわけとも聞えぬか

に落着するなり其うへ二人ながら治地を葬地のこ

としたるはあまりにをさなきとにて物にをさむる

物とをさむるとのけぢめをわきまへずして同との

様に心えたがひたる也葬るとをさむるといふは土中

にをさむる事にて文字にては埋臓の義也治の字は物

棺といふとも治棺桶をSひたるにて大斂に先だちて棺桶を造作する事なれ

よろしく覺ゆるなり樗亭が淳和天皇の天長五年に

まつたなくして讀がたく解がたきやうなれども定められしといひたるは世にある正史實銖にはかつ

いをえてたとる~讀まんにはまた絶て聞えがたきて見えざることなるを樗亭は何に據りていひたるに

さて誌版の傍にある文字は書さま

ばしくしども久しきあとの事にて其堀出せし村の名はわすれめ

との岸

べし畿内七道を走られし事は高教授の考難な

とにもあるまじきにやしたちはの東郷河原村の支村の中

因に

在所もまたさしておぼつかなきこ

二四二

れども江田うけなどは遠く文獻叢書第二巻

隔たれば件の日置氏

の誌版の在所もちとおぼつかなきやうに思しめされ

候御氣色に候へども今臺村の玉名になくして山鹿に

あるは前には玉名にありしが後にちかきよりまぎれ

て隣郡に入れるにて郷村などの上にはさる例は

にもおはかる中に近くはこの小河海東などの地は

今は盆城の下郡に属したれども昔は八代郡に属せし

と見えて阿蘇文書甲佐の社領の事につきたる建久六

年の在廳等が口巻帖に八代 北郷南小川北小川また

南小川の下に加海頭幷"國領薗四箇所一定と見え

たり其うへ昔の日置といふは郷名なれば昔は今の

とく小の地にてはなかりしかば廣く江田うけた

りまでかけて日置の郷なりしもしるべからずしかれ

は日置氏の誌版のすとて堀出した。

ども古めかしく裏に永の年號と津守といふ文字を彫つけたるな

どそこのあたり近さ小谷村に富永それがしといふ醫生が物語にてく

とも覺へざるをや開白は啓白といふも同ころに

て事の次第をさだかにまうし述ることとなる故事をい

のにかく開白と題したるにて川別が淨水寺の南

大門の古碑の初に開白と題したるを引たるはよき證

左にてありしなり件の古碑は延暦中の物なれば日置

氏の誌版と大かたは同時ほどのことにて此頃はか、るたぐひの物にはしか題するが通例のことにてもあしにや啓白といふことは物にもおはく見えたる文字なれども開白といふは物にはをさく見およばぬ文字にてひとめづらしてにてははやくより寺院の大法會の儀式に開白といふこと有て時の導師法會の初に佛前にむかひて其日法會を執行する事のよしをつぶさに佛にまうすことなり物に法會の次第など書たる所に開白、某縮など見えたり是より外にはまた稀にも見およばぬ文字なれば昔よりた佛家にのみ用ひ来れるもじにて通俗には好みては用ひざりしにもある命に十箇品部を賜りしことをいへる其十商品の部の中にも日置部の名見えれば昔はさる名の作法を行ふことありてそれを行ふものを置部とも日置部ともいび其件部の居る處を置の鄉日置の鄉などいひたりしが延喜の頃までは出雲國には其作法のこりて行はれたりしと見えて前に引たるごとく出

雲國には其料の田代二町まで定置れしなりされば日

桃元問答

トクサノトモノミヤッコ

土記舎人鄉の下に志貴島)宮)天皇之御世"倉)舎人等

之祖日置臣志毘大人供奉之即是志毘之所居放

三人と見れば置といふも日置とSふも其もと

は同ことにて置部臣と日置臣とは同族なりつらんと

おもふなりさて置とSひ日置といふはいかなるよし

ともさだかならされども垂仁紀皇子五十瓊敷命に石

上の神宮の神賓を主しめたまへる段に一書を引此

・チリ

オホトチリツカヘマツレリ

トチノ

所故"云置部」と見えまた當時當國の郡司の中に大

頭部臣布禰また宜などふ人見えるも件

の置鄉にありし遺作部等が後にてご有けんしかるに

件の置鄉を和名抄には日置と見えたりこは和名抄の

ならんかともおもひしかども民部式にも凡出雲

國)日置)田「定三町といふことも見えまた出雲風

きてのひが調なるべしとSへれども是は宣長が日頃

古事記を信仰するあまりにすきたるかたより引れ

てかはりなつみれる強こどなるをやされば日置と

いふ地名はかく諸國にもいくらもありて氏にも姓氏

朝臣日置部日置 造出雪風土記に置部っ臣

銀に日置

日置臣などくさ

日置臣などくさんあるをおもへば玉名の日置氏

日置郷はまた是らの外の日置なるべくおもふなりし

るに今は玉名郡の中には日置といふ所なくして山

鹿郡の中に日置村ありて玉名の分田村にはさかひた

ヨミ

置とSふわさは敏達紀に日祀部を置れしこと見え氏

にも日本部ありて此日置とSによく似よりたる名

なれば置日置など作法も祭祀に属したる事にて

はなかりしにやもしはたしてしからんには日置のも

には日祀日本などをもじのまいひまつりと調っこと

〈日置も和名抄の訓のごとく初の程は比於木とぞ♪

ひたりけんそれをまた弊支ともいふは例の後にな

て口とくいはんとて比於木をつめて支とも比木

ともひひたるなるべししかるを本居宣長が説には

日置は古事記にはやく繁支とあれば是ぞ正しきとな

へなるべく和名に比於木とあるは後の人の文字につ

るうへにもじのやうも諸版なるは正しく郡の字と見 るべしまた件の郡公が氏の日置の字を當時はひか

えて部の字とは見えざるをやしかのみならず公文に となへけん古事紀には日置君のことをはやく弊岐公

官人の連署するには官位氏姓ばかりをしるして名を かきたるが後までも人の名字なるも地名なるも大

はぶきてかざるは古来よりの通例なれども誌版は かた弊支とばかりひふことなれば郡が氏のもかな

さる事例には同からで後の世までもたしかに何がし らず弊支と稱へたるなるべしされども和名抄に載た

が墓所なることをしらせんがために物することなれ る諸國の鄉名おはかる日置共には大かた比於木とば

ばいかにもたしかに共姓名まで開具して残し置べき かり見えて唯一所國郡はおぼえされども比木とかき

事ならずやさればおもふに件の郡公の二字はかな たるも見えたれども弊支とばかりかきたるは見えず

らず日置氏の名なるにはたがふべからず郡公の二字 しかし其中にも訓の固たるもまじりたれば弊支とか

は唐の制に九等の官爵ある中に郡公あれども從二品 きたるが有しもしるべからずこれに依て猶おもふに

封戸二千戸などい尊なればそれを取て名とすべ 出雲風土記に神門郡置鄉の事を志紀島)官‴御宇メス

きにもあらず書紀の垂仁紀に一書を引壬那の都怒 天皇之御世置作部等 所遣來宿停而爲政之

マリ

ツカサ

ミヤナ

ムラギミ

尸なるは大山守命の後なる日置 朝臣初はかばね の訓のまゝにむらづかさと呼ばんは古代とてもひか

なりしと見えて古事記の大山守命の後のことをいひ がに覺ゆれば神代紀に天邑君をあめのむらぎみと訓

たる所に弊岐君と見えたれども岐部公とは見え ませたるがごとく文字のまむらぎみと名のりしな

郡公を取て名としたるなるべしされども垂仁紀

とき貴人とは聞えずしかれば日置氏も大かた垂仁

キミ

たる事さま村長などS程の者と見え唐制の郡公の

カバチ

ムラサ

良都加左と訓ませたりげにも一書に見え

にて大少領にはまた一等を降して叙せられしなる我阿羅新かアラ

等が事をいひたる處に郡公等日云々と見え

郡をむべ

しまた日置郡公とあるを姓氏録の日置部を引郡の

字を部の字の誤寫とし公の字をそのかばねとしたる

もえがたきことにて日置部は姓氏録に尸をしるさ

いれば本より尸なき氏にてありしなるべく日置の公紀の三九

桃元問答

文に下姓之輩除官給之外 外階者例と見

の二分以上を給ふことなれば外位に叙するは定例 當時任の少領なりしか位階はすでに相當の從八位

のことなるを江次第に諸宮給先″叙外位後日依 下になりてありたるは年勞にて進みたるにて日置が

愁"叙内位自餘、依姓内外位云々と見えた 少位は初任のをりの叙位なるべし此外にも出雲風

れば當時給の外は外官とてもすべて内位を授られ 土記に見えたる郡司共の中には大少領の六位なるは

しことしるかりされば内給の叙位は藤氏源氏などの さらにて主政主帳までも六位になりたるも見えまた

貴姓とても始はかならず外階に叙せらるよしは内 主帳にはいまだ先位なるも見えたるをおもふに大少

給の官爵は正しき朝除の官とは同じからで私家の 領の相當は外從八位の上下なれども年勞などにより

に出ることなれば公官はかけながら私家の家 ては内外の六位までも進みしなるべし主政主帳の相

家人なる故卑姓のごとくしなをおとしてまづ一旦當の事は官位合選敘合などにも見えされども大少領

其おほきに就て源氏

ことになりたるより昔の内外位の制は疲れたれども えたれども此事さへ後には行はれずしてつひに位階

中昔まではさすがに其かたばかりはのこりて源氏藤 のうへにて内外といふことは跡かたもなく絶はてに

氏などを貴姓 清原菅原大江平氏なといふ氏々も卑姓といふには

たるなりまた少領の相當の位階の事は選余分に外従

りを擊て とし自餘の庶諸をばすべて卑姓としてそれ 八位下チモデ寂之っと見えたれども日置氏はいまだ權

に内外位の差等を引あはせたる放つひに内外の名義 任なりし故まづ少初位下を授られたるなりしかるに

までも取失ひたるなりさて内給の官には大かたは風 前に引たる出雲風土記の秋鹿郡の少領蝮部臣は是も

司のは外位に敘せらる事にてありし也それもや、後に

なりては事のさまうらうへになりて卑姓の外官まで

も内位の人はかならず内位に叙せらることになり

と見えて朝野群載嘉承二年の大内記藤原敦光が

相當より推考するに外大位の上下なるべししか

るにそれが无位なるもあるは人によりて新任の間は

位にてもありしと見ゆれば少領の新任のしかも權

擬なるは外少位に叙せらるいも相當の事と見えた

また主政主帳などの六位になるは外階の六位まで

二からざるがごときにはあらずたとへば大國守は相當 ども散位の中にても官を解たる人は光官になりても

從五位上なれど最初づ外位の從五位に叙せら 獪前の位をもちたる放其位階は前官の内外に依て内

れて後に年勞に依では外官ながらも内位の從五位に 位とも外位とも定めらること也さて本より死官な

轉叙せらるゝなりさて其後功勢などに依て正五位に る人に位階ばかりを授らることあるはいはゆる蔭

進めらるゝをりは其まいにて内位には叙せられずま 位にてこは本よりの死官なればいよ内外の差別

た本の外位に引もとして外正五位を授らることな とては有まじきやうなれども有官の人すら外官は内

り續紀光仁紀に天應元年九月前年 征夷の勞を 位に叙せらることなければまして官の人を内位

賞せられて正六位上阿部臣墨縄に外從五位下勳五 に叙せらるべきいはれなき放蔭位はすべて京官の子

等を授けられこと見えたり件の墨縄は動績の勞を

定めなりされども

とてもみな外位をもて叙せらる

賞せられたるすら京官の人にてあらざりし故かく内 京官の五位以上の數代京官に任せられたる人の子孫

位の正六位よりまた本の外位に立かへりて從下の五 は蔭位を内位もて叙せらる事あり川別が引たる三

位に進叙せられたるなり是にて當時外位叙授の法は 代格神龜五年式部省の奏に五位以上子孫累世之冠

常例の叙位は其格おなじからざりしことを見るべ 並云々即叙位自餘、叙外位と見えるはすな

し選叙分の凡張内資等云々若任職事者改入内 はち其事を定めらる始なりしかるに江次第朝野群

位」とある義解に内外職事者亦即改敘 載などに姓氏の高下にて内外位の差等あるやうに

外位､也と見えたるもすなはち上件の類例をSへる Sへるは今京になりても中昔以後のさだめにて奈良

なりまた外位は其本は外官のために設られたる位階 に近頃まではさる例ありしことをさく見およば

なれども位階は無官の人にも授らるゝ事にて是所謂 ず中昔よりは藤氏ますゝ類ひろくさかえ給ひし故

散位なりもし官なき時はまた内外のいふべきものな 朝官は大かた藤氏の人ばかりになりて其氏人は外官

ければ散位には内外の差別とては有まじきやうなれに補せられたるも位階はかならず内位に叙せらる

トキ

第二

11111

肥後文獻叢書二三七

桃元問答

是はたいの人より稲錢などの物を献じて官爵を望み

まうしたる故位も外位の少位下を授られ官も少領

の正官には任せられずして擬とは字のごとくかり

に少領になぞらへて員外の官に任せられたるを權擬

とはいふぞと解したるは今にて富商等が錢物を

官に納れて其成功を募まうすを士席格知行取など

ふものになさる事なるを紀をあしくて昔より

さる事もありしやうにおもひなりと權擬といふこと

今の格列など物と同しことのやうに心えたがひ

たるにて權擬とはさるむつかしくあらぬ事まで引出

していふべきことにはあらずこれは後にS權官の

ことなれば擬の字を略してた少顔とSはんも權

擬といふに其心はかはりたることなしされども古き

物にはおはく擬少領擬大領とばかり見えて權擬とい

ひたるはをさ~見およばずしかるに出雲風土記秋

鹿郡の郡司等か署の中に外從八位下權任少領蝮

部臣と見えたる權任少領はすなはち件の權擬少領

とまたく同書さまにてた擬の字を任のじに書かへ

たるばかりなれば當時は權任とも權擬と

外のはげな故物れ

に

と

さる

はくば擬義諸書を引外位を授らる事はにりり

また內外位の事を續紀以下の

見

とぞと心えるより擬といふもさるたぐひの事にかよはして書たるな
るべし

暫準の

りで任でかにはの

少

いふ

んも同

いふべしさ

しされば構

領つるなり

かも

おきて後

にするもなぞらふろもい

お前んと待心ある

したお

ござる

物麗は準也

字はもににじ暫

なに

に

字書に

な少少擬少領といふはまた只情少

かなり幅任といふばそれ

ばそれとはおな

は幡少額のを任少

任少領とはいばれざるなりにて權任と幅

ひたる

神龜五年に始まり外

位はた卑姓の人のみに授らるやうにひひたるは

くはしきに似てくはしからず内外位の事ははやく大

寅のに載せられて選余分に内外、五位以上、勅授内

八位外七位以上、奏授外八位及内外、初位、皆官授

と見えたり内外位とは内外官と同ことにて京官を内

官とし自餘を外官とすること故内外位もまたそれに

準じて京官に授らるゝを内位といひ外官に授らる

を外位といひたるにて姓氏の尊卑に依て内外の差等

を定められたるにはあらずされども外位は五位以下

に限りることにて四位以上には外位を設けられた

ることなしさるは四位以上には太宰師より外には外

官といふものなく府官は大貳以下國司は大國/守以

下外官はすべて五位以下をもて叙せらるればなりさ

れども外寂授の法は内外官の内外一定して混すべ

なとばれ其なろれそばうかへしたりきされば此考どもを御一覧あらんには始は大領に進められたる事を納」錢買のしわざ

レテ

かたばかりは見申候どもいまだ異物を見たるこ の誌版を出せし次第もさだかにまた誌版の文字

とは無之候此老人が考にはくちに故高本教授の考を も大かたは御了解もあるべきかと心づきし故件の三

いだして此老人も亭と號してすこしは読書もした 考を其一つに併さて賢覧に供することに候然る

る者なし故奥にはおのれが考の教授の説と同じか に川別が考は人のあとより物したることなればまさ

らぬよしどもを附録したる物なり此二老の考にて一 りてくはしきには論なけれども打かへしてよくく

わたりは聞えたるやうなれ共亭が考は強て引ぁは 見れば猶まだしくおぼつかなきこともまじりたるが

せる事はくして都ては聞えがたきやうに説な いかにも口をしくおぼえしまいに其よしをひひやり

したる處も見えたればかくしと知つくほめてのみ て今一たび考へなほさせんと心がまへはしたりしか

やまんは其人にむかひてはいとまめならぬわざなれ どもおもひかけず川別もまたとみに世をさりしかは

ば其しとおもふふしんをそこら引直しておどろ つひに其あらましもいたずらになりしはとにせんす

かし聞えんと思ひたちしかども事にまぎれてとかく べなくて今まではもだし罷在候處に御垂問に預り候

せし間に亭にはかに病つきて程なく身まかりぬと て今さら往事をおもひ出し候故今は要なき事ながら

閉しかばSとはみならずくちをしきことに思ひしか 始よりの次第をかくかひつまみて聞えまゐらする事

どもいかはせん其後はかたさなければ心ゆりたる に候此うへにはいかにうるさくも思しめさるべく候

まにそれとなく打すてわすれたるやうにてさし へどもさきに川別にSひやらんと稱へたりしてとゃ

置つるに近き頃横田の川別が前に聞たることや有け もを思ひ出すまいに書つゃりて御垂問の責を塞がん

むそれ見せよとて借におこせたりし程にゆるしやり とするなり川別が權擬の考に續紀に見えたる諸國の

て見せたりしかば川別もまたおのれが新たに考得た 郡司等か稲錢鐵材などの物を献じたる功を賞せられ

る事どもを書ついて亭が考のしりにくさり付て ていづれも比としく従下の五位を授られ少領なるを

二三五

桃元開

話か書載たるなるべしさはいへ此考はもとよと見せし中に誌版の圖などもくはしく出したるに

説を打聞たるまいに

命共が物に心えずに

セメ

玉名郡少領日置介以下になりて下りたる人解任の後もなほ其國に

いまりゐて其子孫も代々前官に補せられて常に國

に出て吏務を執行してあることなりされは件の紀の

在も當時に常國の介に任せられて京より下り

たる人にはあらではや常國の介なりし人の子孫に
て當時相傳の在國司に補せられてありし人なるべ
し此紀氏の家かく代々常國の在廰してありし放武内
の大臣は紀氏の始麗にておはせしかば久我に祭られ
たまへる萬代繼神を常にうつして紀の在廰が家
氏神として祭たるを後になりて件の在廰が家も子孫
なくして家絕たるかまた他國に移りすみなどしたる
故た此神社ばかり其跡にのこりて紀氏の神を祭
たるといふことのみわつかにひひ傳へたりしが紀貫
之は高名の歌人にて誰しらぬものもなきほどなれば
世の人紀氏とだにSへば貫之のとと心えたる故事の
本をばたづねずして紀貫之を祭れるならんといひた
るが世にひろご!傳はりたるを此証につきたる田舍
氏の誌版
例のしひごとなればよしとおもひて書出せるには
あらずたま~御教示によりて思ひつきたることな
あらんと聞えまゐらするにこそ

ればかくてはひか

さて南郷なる乙姫神を近頃惟の庶務そこの扁

額に奈我神とかくれたるよし此事は今御教示によ

て始て承知したる程の事に候へはもとよりいかに

もと覺悟可有之やうも無御座候すべて古き神凪ど

もの名は大かたはそこの地名を負せまひらせたるが

おほければ昔は此のあたりを奈我といひたること

にてもありしにや庶務はかならず家の記などにた

しかにさるべき事の見えたるによりてこそ物せられ

たるべけれさりなから此務のかくれし物と家の

ことなど考へたるを一二冊見たりしにひづれにも杜

撰の説ども所々見えしらがひたれば件の奈我神社も

かぐらんおはつかなくなん

臣といふ名見えたり在廳は在國司ともひひて始國の

文政二年の二月玉名郡うけ村の鷲原より堀出したる

郡の少領日置氏の誌版は先年玉名の山べたに小森田

伊内といふ老人のありしが件の誌版の考を出置たる

して其傳に出て吏絡みま

く菓子

の

代綴神社をうつし祭たるにはあらぬにやとの御者は

小子~御教示にて初めて心づきげにもさることに

イフニモタラス

託摩の代繼神社こと紀貫之が霊を祭るよし社説に

見えたれどもこれは蒙昧無稽の説にて可有之とある

はいかにもさることにて代の社説のみならで寺

託摩郡本庄に坐す代繼神社

并

世よりおこりたること、見えたれば手永といふも豐

前斗にはあらで餘國にもいくらも可有之と思はれ

申候されども諸國おしなべて組手永といくにはあら

で國によりては昔のまいなほ鄉庄の名にてあるもお

ほかるにや若狭の昔今富いつきの庄などいひし所

今は其名も傳へうしなびていづこなりしやさだかな

らぬほどになりたれども件の兩庄の跡ならんとおぼ

しき所をば今は國富阿賀庄などいふより

彼國人のかきたる物に見えればこの組手永など

云所を若狭わたりにては今何も庄くれの庄といび

れると見え申候

の縁記などい物大かたは附會杜撰の妄説どもにて

考證のたよりともなるべきはひとく稀なることに

て可有之覺申候さてこいの代繼神社は山城の久我久なるをたいへい
ひたる詞にて代つぎ物語代繼の翁

などSへるみなその心もて名つけたるなり殊によろ

づ代繼といふはひよく遠ひさなることをたいへた

る詞なれば此神は武内の大臣を祭れるにはあらぬに

や此大臣はみづからも世の長の人とさへ歌にまで詠

たまへるひみじき長いきにておはせしかば此大臣の

御名をしかたいへまうして祭れるなるべしもしはた

してしからんにはこの代繼神社も件の久我の代繼

神社をうつしまつれる物なるべくおもふことあり阿

曾文書建久六年の國宣在廳寺か連署の中に權介紀朝

オホオミ

セサ

あらんとは思ひなりて候久我の代繼神社は式の神

名帳には乙訓郡に坐す神社ともの中にた 久我神社

とばかり見えたるを頻聚國史に貞觀八年七月十四日

"從五位下"と見えて祭

丙戌授山城興我萬代

神は例のさだかならぬやうな共萬代神といふは

すなはち其祭られ給ふ神の御名のこと聞えたれば書

記古事記などにはさる御名の神は見えされども二書

にもれたる神々もおはかればさる御名の神もおはせ

しなるべしおのれこれに依てつらくおもふにすべ

物の名などに代繼といふことのあらは其代艦の遠

11111111

ども天草郡は今も手永のことを組とSひて大矢野 ふよしは是も室町家の頃殿中などにて倍膳の事ある

柄本組などSへるは天草は前代の頃は小西家の領 時其役のことを手永といひて御手永某また某御手

分なりしかば其頃より親とSひしが今に其名の残れ 永に登るなどいひたることと其頃の物に見えたりこれ

るにはあらぬにや此外にも四國九國の間は手永とい は物を次第に取績たるが手の遠ながくとどきたる意

ふは稀にて大かたは皆組とばかりいふよしを聞けり にて手永とはひたるにて今俗に手つだひといふも

親といふよしは多少の村をむすび合せてその一組 同意なるべし後に郷圧のたぐひを手永と云ふも此倍

としたるには軍陣の隊伍を組といふよりうつり 膳の役よりうつりたることにて郡奉行の下に大莊

たると聞えたれば大かた室町の季世などより起 屋小莊屋などある郡奉行の手ながとしたる意にて

こりたる名目なるべく思はるなりしかれば郡の組 ひ出したることなる後にはまたうつりて大莊屋

の名も肥後國こそ天草一郡に限りたれには親との手のおよぶかぎりを定めて一手永といふことにな

いふが多かるを思ふに前代以前よりはやく組の名はりたるなりしかれば是も件の組とおなじく室町の季

ハイゼン

制度立ざりし故なり

ありついまだ一定の を見ることありしに今の川原手永

と見えたれば井田衍義の先代と加藤家をさし

のことをた川原村とばかり見えて郷庄の名はさら ひひたるはたかひたれども園にかけて前代

にて組とも手永とも見へされば中山が井義に手 の頃は手永のことを組といひたるとひはんには中山

永のことを前代は組とSひたるよし見えるは貴説 が説も無下に據所もなき安謝ともひがたかるべき

のごとくおぼつかなきことにて前代は組手永など にやさて肥後の郡々に手永といふ物も立られたるよ

ふべき所をば郷庄の名の残る郡共は其郷庄の名 は御先封豊前國ははやくより肥後の郷のたぐひ

を用ひの名を傳へ失ひたる郡共は菊池郡の川原 を手永といひたる故肥後に御移封の後もなは御先封

深川などのごとく大庄屋の居る村の名をそれが所 の奮制に依らせ給ひて御分の諸郡にも手永の名を

管の大名にして一郡をわかち治られしと見えたりさ わかちたてられしと聞およべりしかるに此手永とい

れ員の多少増減時に

山本にえる定女と長見

件の見岡

ろ

八代庄 東艦阿

など今は皆

は或は二

夫庄屋玄蕃元和

或

「名字變革あることに候郡にて申候は、鎌倉以後の物に見

行

て奉

無之事に候へども庄の名は領主の有無にて時々は天正十七年慶長二年元和四年などの見圖帳

尾

上に事長 たくしければこにはぶきつ

文書に御藏公文と並べひひたること見えたり

書にもひひたるごとく津守郷を保とも庄ともひび伊

しなり庄官にも御臓といふ職事ありしことは塔福寺 本の郡となりて
庄の名はのこらず郷にて申候は、前

本で

肥後文獻叢書第二巻

1111111

郷莊の沿革

倉の保を圧ともひ大野郷を別府ともともひび豊

和名抄に載たる郷名どもいつの頃より廢れたりと申 田郷を圧ともひひたるなど鎌倉以後にも庄の名はか

こと一向に覺悟つかまつらず候へとももし例の強て く時々にかはたれば今までのこりたる郷庄どもの

申候は、諸國に新立の莊園おほくなりたるを停止せ 名もひつ頃のまにて残りたるにか其かはりたる際

られんがため名田の制をおこされし頃後三條院の御代な

「り此事別にくぼし はとてもさだかならぬにて可有之覺申候また肥後の

き考あれどもはやく拙著の解の中書出で置たろ などより郷村 諸郡の中にて他領

諸郡の中にて他領に属したるはまだ考へ不申

のすがたも昔とは一變し郷名ども~やう!にうつ 候へども合志山本菊池山鹿の四郡はSかなるよしに

り變りたると覺申候へは白河鳥羽兩帝の御代の間に か鄉庄の名傳はらず庄は人の所領の地なればたまた

など大かたは變革したるにても可有之哉小拙が淺聞 ま庄のたざる郡もあるべけれども鄉は本國のわか

寡見にてはSかにともたしかには考定出来かね申候 れて郡となり郡のわかれて鄉となりたる物なれは鄉

さて肥後國に今まで鄉庄の名の残り居候は鎌倉頃の のなき郡とてはあるべくもあらずしかるに件の四郡

物に見えたるかぎりはみな當時のまゝにてかはらた に鄉庄の名の見えざるは始よりなかりしにはあらで

る名も聞えれば其名の物に見える鄉ども、大 後に傳へ失ひたることしるかりさてかく傳へうしな

た鎌倉頃の名のまゝにて可有之覺申候されども郡 ひたるも近頃の事にはあらではやく先封加藤家の前

鄉の名は朝制に出たるもの故一定の後容易には革より傳へうしなびて有しと見えて菊池郡川原手永の

庄託に人江詳奉は

略奉行の名字をしろして天正なるには平井十兵衛

兵衛田寺 まらず官一桃元問答

111111

狀一巻と見え又但此狀者無四度計候

追進上之節可/被取替候などあるにて當時此帳を 本は詔勅令官符省牒のたぐひをすべて公といえ

岡田帳とはSはりしてとしるかりされども岡田帳 より轉じてすべて官府にある簿帳のたぐひをも公

といふも古き名目めきて聞えたれば當時今の岡田帳

大帳朝集 税帳~公文從

とSへり民部式に凡諸國

といふ物の外にかの岡師の差圖と田所の田文を引 官下之後云々また正税帳大帳出舉帳田租帳調庸帳

合せて一巻としたる岡田帳と名づけたるがありし などをすべて雑公文といひたるとも見えたり諸家の

にはあらぬにやさらばまた今の見圖帳とSふも此圖 公文所は其家の領地の所務をさする所にて其事に

田帳よりうつり来たれる名目と見えたるを見圖帳は かりたる文書帳簿を取扱故公文所とはなり

御岡帳と書べし昔民部省に岡帳といふ物ありしを下 昔は御藏公文などにはおはく僧徒を補せしことあり

よりはかしづきて御岡帳とひたるが後までもの 後白河院の御時西光西景などいへる法師を御臓の

りたるなりといふ説ありてそれもよし有て聞ゆれど 預となされしこと源平盛衰記に見えまた廣福寺文書

もりに古代に上り過たる考なれば見岡帳と名付 の承元二年の公文所の下に見へたる直人等が連署

るよしはさることにはあるべからずさて右の年預 の中に惣公文權公文など見えたる公文共も皆僧なり

以下の色々の外に所公文御などいふものあり税 東鑑暦仁二年九月十一日の條に諸國地頭等以山僧

所は朝官の主寮と同じく租税收納の事を沙汰し御 商人借上代官」事一切被停云々と見えた

藏は庄内に在る領家の御臓の出納の事を預たる職事 れども久しき習風なりしかば後までも其風のこり

共なりしかるに御臓といふは庄内の藏預のみをいふ て室町殿の時までも御の預は正實坊定泉坊などい

にはあらず院宮をはじめ公卿達の京にある倉庫どもひて大かた僧形ばかりにて有し故御藏法師ともひひ

なるべく覺ゆるなり其の預もみな御藏とばかりSひたるなり公文は公文所

の書にて司の目史生郡司の主帳などいへる類な

公文とはすべて公事にかいりたる文書のみにて其

うへ圖田といへる題目は後

の人の名づけたる物と見えて其中に出せる沙彌道忍

が狀には注進田代の員数經堺をくはしく注したる文書を田

にはあらず郷司庄司の中には政所年預田所税所圖師 とSひ其圖中の田文どもを國衙に取あつめて一つ

公文御朧など色々の諸職共ありて其中には政 に合せて大帳冊としたるを大田文とはいへるなるべ

所といふは一所の管領にて上司ともいふべき物なれ し豊後國の惣田代の員数をしるしたる物を岡田帳と

ども其餘の諸職はいづれを中司いづれを下司と定た Sへるがあるは件の大田文のたぐひとは見へたれど

るにや淇差等をつばらにしるしたる物なければくわ も岡田帳は郷村名田等の員数と其所々の領家地頭な

しきことはわきまへがたし次に岡師とSは畠の どの名しるしたるばかりにてさしてくはしからぬ

廣狹長短はさらにてすべて其管内の村里山林屋敷地 物なればひはゆる大田とは同物にてはあるべから

など迄もくはしく岡にてしたむるを掌る職事な ず大田文はSかなるさまの物なりしやさだかならご

其の書圖にしたるを差圖といへる曲は右の村里山 れどもおもふに岡田帳のごとくたい田地町段の數ば

林田畠などの方所狹を共闘を開て人にさししめす かりをしるせるにはあらで田地の方所四至はさらに

ための物なる故差圖とはいひたるなりされば差の字 て土地の肥脊則の多少までもくはしく載せたる

書に見えたり

た郡家にもならひと鄉庄の公文所にも年預職をオホタブミ

步の員數經堺を換技する事をつかさどるものにて

ば今の年番年行事などに同じく其の年中の雑

事をすべあづかりたる職事なり三典生産と見へ

氏要覧に主事四員一監寺

たれば年額はことにても其本は寺院の政所の監事なりしさるをま

が後にかく他の官府などにもうつり来たれるなるべし

預と同こゝろにて一年の事務を預るといふことなれをかくは當らぬことなれども昔より指岡とはかず

して大かたは差のじのみをかき来たれりしかるにま

た此差圖といふことを活らかせて事の指揮するやう

の事を差するとい常のことなるをまた共職稱い

うへに轉して岡師申すといひたると庭訓往來に見え

たるはめづらし次に田所とSは管内の田代の町段

置

るにて託文書などに見へたるはすなはち鄉圧の

文所の年預職をいひたるなり次に下司といふは鄉司

庄司などの中にて上司中司 中司の名阿曽変 下司と差等 東鑑などに
大田とい物の見えるは此田所共が

を立てひひたる下司にて一職を限りていひたる職掌 共庄の桃元問答

年預以下の諸職事は中昔より始まりれることにて大

かたは鄉の吏務に預る職事なれは是等の諸職事を

すべて鄉司庄司などもひひたるにやされぱいづれ

年預下司圖師田所等の職掌

人にて共時の賞には少貳覺恵が子息三郎景資が豊

前守になされたる例もあれば武房も同時に肥後守に
任せられたらんもしられねども景資は鎮西奉行の嫡
子にて弘安の頃ははやく左衛門尉になりて有しかば
それより直に受領したるはことわりなれども武房が
家は九國にては宗々しき大名にてはありしかども當
時の勢にては少貳は代々鎮西の奉行にて菊池は一郷
一郡の地頭なれば比擬すべき家にはあらざりしうへ
に蒙古合戦の頃までは菊池の二郎と名のりて
の尉にだにならずしてありしかば 季長蒙古合戦
常時常園にては竹崎五
依て海頭郷を賜はり右兵衛尉
なされしいと海頭文書に見たり 武房が肥後守もひかわり
けむまたおぼつかなしされば共子の寂阿入道が肥後
守もかたひかゝとおぼゆればかの寄進状の署名
はいかにも信用なりがたかるにあらずやさはS へ此
事もし外にたしかなる御考證も御座候は惜まれず
重て御教示を加へられ候やう仰ぐ所にて候也

も年預といふこと見えまたそれにならひて攝關以下

公卿の家の政所公文所などにも年預といふ物

ありまた建久年中の内臓寮年預が申狀といふこと何

かににてたしかに見たることありさらば後には諸寮

諸司にも大かた各年預職を置れしと見えたり其外に

もまた官寺などの政所所謂延暦寺衙弘福寺

どいふ所々にも年預の憎ありて是を西土にては直歳

とSへり直は字書に當也と見えて直歳とは其處の年

中の事務を専営する意にて年預といふはそれをやは

らげたるにて年預の預は御書所預御厨子所預などの

二二九

まづ年預とは件の色々の中にて是ばかりは郷庄

の職事に限りたる物にはあらで院のの職事の中に

サ

も領家々々より其家人に仰せて勤じさせる職事に

て朝廷より設置れて官司にてはあらざる式など

の如き官務職掌をつばらにしるしたる物もなければ

いかなる職掌共なしにや後よりはさらに考索する

によしなしされども或は其名目の文字につきあるは

事の物に見えたるをたどりて引はせ考へたらん

にはくはしくこそわきまへがたからめ其大かたばか

はまた推知せられまじき事にもあらずかしされば

汰せられる物にはたとへは前摸守高時法師結城上

野助宗廣法師など書法名をはかざる例もあれ

ども是は上の人よりかくれたるにてみづから其名を

しるしたるにはあらざれは他の署名のうへには例と

すべきことにはあらずしかるに件の寄進状にはさる

書式の定例共にたがひて名字官途を開具したる下に

ただちに法名を書つけたるはいかにもいぶかしき

書ざまなるうへにかいる寄進状などのたぐひにはか

ならず其年紀月日をばたしかにしるしおくべきこと

なるを年紀はさらにて月日だにしるさゃるといふも

またあやしむべきことには候はずやこれにて狩

らく考えるに件の寄進状の文體はさらに後の人の

僑作したるものとも見えればとし月をふるまにいつしか狀尾の慮されそこねて年月も署名もさだかならぬやうになりたりしを後に當寺の物に心えぬ法師等が署名の書式をはしらずして大檀那の名字なればかくことしく書きた狀尾の損所ばかりを補おきたるさかしらとの今までものこりゐたにて可有之覺申候其上寂阿入道は始の二郎のまいにて入道してつひ受領などせしことはなかりしには

あらぬにや太平記にも菊池入道寂阿入道など見えたる斗にて一つも肥後入道と書たるとは見えず又武朝が申狀にも曽祖武時入道寂阿と見えたるばかりにて是にも肥後入道とは書出されば菊池家にて受領したるは武重が始にてそれより以前は受領はさらにて官途をかけたる人も稀なりしやうに覺ゆるなり系圖には隆直武房を肥後守と見えたれども此外にはまたさる事を見およはさるうへに隆直は治承に軍

をおこして源氏のみかたをしたりしかば平家の

筑後守貞能にいたくられて力およばずしばらく平

家に従ひたるよし鎌倉に申ことわりて一谷段の浦な

どの合戦には東國勢に向ひて軍をもしたりしが平家

ほろびて後鎌倉になるりたりしを罪ゆるされ所領を

も返し付られなどしてやう(御家人にはめしくは

へられし也されは隆直は鎌倉殿にはさしも功なかり

し人なりしかば受領などすべきよしもなくまた鎌倉

三代の間は受領は只御一族の人のみに許されて御家

人の受領はかなはざりしてとなれば隆直が肥後守に

なりしといふは後に家にての矯飾のしはざなるべ

しまた武房事は文永弘安の蒙古合戦に高名したる

さまをよくわきまへさる人

の心にはさるひが応えしたらんもまたことわりな

らずとはいふべからずすべて當時の守護地頭などの

所知所領をかくへ持たるさまは今の世の大小名の
とく城つきの國の内とても所々にとびちりたるの
みならず他國の遠き境にも悪持にしたるが打まじり
たるは常の事なりしかば常時菊池家の分地とても菊
池に隣りたる山鹿玉名の地はさらにて菊池以南の地
の たしかに物に見えるは飽田の府中託療の近見庄
號の地にては盆城の豊田小山の雨などありしお
もへば是等のほかにも狩南郡にかけていくらも所頭
の地はありしなるべしなど見えたるほかにも豊筑の間
自園の外肥前の神代豐後の大坪一松名
には懸持の所
ども今よりはだかならず
かる散在の所領共にはかな
らず一族家人の中より代官を遣はして共處の雑事を
さだせしむることなりしかば當時南部にありし代官
の一族扶持人等がにはかに武朝に叛て守山の要害に
たてこもりたるにて守山庄も又當時武朝が所領なり

しも知るべからざるをやしかるを井澤澁江などか深
くも考へずして土俗の謬説を其まいに物にまで書
かしきことにおも
るよりかくは心えあやまりた
るにて初より其頃の世の二二七
寂阿入道父子が受領の事文書とも数々御引設ありて
くはしく御教示を蒙候事荷にへ申さず候しかる
處老兄にはひか思しめされ候や小拙は寂阿が寄進
の署名の書やう例にたがひたるやうに見える故
受領の事までも覺つかなく覺申候菊池肥後守とかく
名字官途をさだかにそなへ書たる下にはかならず藤
原武時姓名を開するが定式にて若入道の後なら
んには菊池肥後入道寂阿と受領したる人はかく守の
字畧きて入道の下にはたちに法名をかきまた打と
けたる事には名字法名をもきてた肥後入道とば
かりに書たる例共おはかりされどもそれは大かたは
宛〝所なきをりの書式にて件の寄進状のごとき宛所

あるをりには名字官途入道等の文字をはみなはぶき

てたい沙彌寂阿とやうにばかりかくこと是また當

時の定式なるをまたそれを略してはた沙彌とばか

書て形を加へおくこと是また通例の書式にてあ

しなりまた上の人より入道したる人の事を他へ沙

菊池寂阿が受領

らはしおきたるは物しりには似ず疎漏なること共に

覺申候

二日攻 破守山關所之時自, 小河城,下令 〲ちに馳向て追おとしたる趣にてSはゆる守山の要

散々合戰々と見えまた建久六年甲佐の頭 害は無下に間近く足もとなりし所とも聞えずしかれ

の事につきたる在廳等が立券帖に北小河郷の四至の は所謂守山の要害は外のところにはあらで前にひ

ことを北限守山庄南」など見えて當時は守山は たる守山の關所と同所なしにはうつなかるべし依

庄號の地にて八代郡に属したりしなり依ておもふに てまたおもふに後の土俗等が守山を隈部の城地の本

武朝が申に所謂守山要害も是らの守山と同所に の名なるよしいひ傳へたるは異は昔よりさるたしか

其頃武朝が一族扶持人等武朝が年少なるを侮りて なる傳へのありしを閉すぎていひれるにはあるべ

武家方に心をかよはし惟澄が申狀にひはゆる守山の からず是は後のなまさかしきもの件の武朝が申狀に

關所に要害を搆へて楯籠り武朝を討んと計りしなる 一族以下扶持人等受彼朋黨之語楯籠守山之要

べしもしまこと守山の要害が隈部城と同所ならんに 害とあるを見て武朝が一族扶持人等なれば共領分

は可ならず當時の通稱に就て菊池の本城とか隈部城 の菊池をはなれて遠き南郡の守山に籠るべきいは

とか書出すべきことなるを耳遠き昔の地名を書出し れなければ此狀に所謂守山はかならず菊池の郡内

て遙なる吉野殿まで注し申さんこと何の所詮もなき の地なるべくさらば今の隈部の境地には別にひひ傅

人まどはしのひたすらことならずや上隈部は菊池 へたる山の名とてもなければ此守山こそ一定隈部の

の本城にて武朝が常の居所なるべきを末々の一族 城地の本の名ならんとおもひつきたる臆推の妄説な

持人等が分際にいかでしかたやすくは入替りて る所の者なればやがて傳來の説に取なして人に

籠るべき本書の趣を案するに當時武朝は外にありて も語り物にもしるしなどしたりしが後にはつひにひ

其留守をうかゃひたることも見えずしかるに不 つとなく舊水の傳説のやうになりたるなるべしされ

廻時日自”向”分”追落畢”とあれば武朝其時は ども始に武朝が一族扶持人などが菊池より程へたい

本より菊池の本城にありしが其事を聞とひとしくたりたる南郡の守山にしも楯能たるをゆくりなくいぶ

本ブア

壬 九月問答

二五

桃はす武敏に寄られたる かくれしは傳聞の謎にてはあらざりしなるべしまた

むくひせんとて津江口より菊池に攻入虎口盤久 武朝が申狀なる守山之要害を隈部城渡山なと同所な

どの端城一ヶ所攻落したるを小城にて名もさだかな るべしとあるは何に振られたることにや菊池の土俗

らぬ故た菊池山城とばかりいひたるにて隈部の の説にさるいひ傳へありしと見えて亭齋が菊池軍記

本城のことにては有之まじく覺申候また了俊の狀に の附録に武朝が申狀を載せて守山要害とある傍に菊

くま目の城とあるは隈部のことなるを聞を誤れる 池郡にありと注し澁江公正が風土記にも隈部の城地

なるべしとあるはさることにてはあるべからず地名 昔は守山といひたるよし見えたる外は當時の諸家の

などのとなへの古今一やうならぬことは常のことに 文書共にはをさく見およばざることなればもし土

て候へば當時隈部をくまめとひひたるにて可有之候 俗の傳説のみならんにはいかにもうけがたくおぼつ

ちかく地名のうへにて其例を申候は、土佐の長曽我 かなしいかにとなれば當時の文書に守山の名の見え

部香曽我部を昔はちやうすがめかすがめと稱せしたるはみな今の益城郡廻江手永の守山村のことにて

と長元物語に見えるが彼國にては今までもしか 阿曽文書惟澄が申狀に次頼重三下向正元年

カ

に發向して少貳妙恵を攻殺せしかども多々良にて となへ来たれるにや土佐の谷重遠が俗説賛 にも長

尊氏卿に出あひ負軍して本國に引入たりし前月の事 曽我部をちやうすがめと訓ませたりかく部のじをめ

なるにもし共時隈部の本城までも攻落される程の ともいふことは上達部を昔よりかんだちめといふな

負軍したらんには武敏いかに猛くともひく程もさ と同例にて此外にも地名には昔よりよこなまりて交

るに押返して足長に寄府まで打出たるといはんもち 字のまにはとなへざるがおはかることにて益城の

と心えがたき事におもはれ候へば件の菊池山城と 守富庄のことを阿蘇文書には假名にてもりづみとか

ひふはかの所謂外城共の中にて小代文書に見えたる 若狭の今富庄のことを太平記には文字にて今積と

寺尾野盤久虎口穴川などの外城どもの中にて可有 かきたることもあればかた了俊の目の城と

之其時少貳託摩など前年のし元むかへてひひたることにて本城の外に別に所々に小

城ともを描へ置たるを外城といひて今いる外廓のこ

にては無之はゆる菊池の十八外城阿蘇の二十五

外城などみな本城のほかに所々に措置たる小城ども

にて一條輝家が甲斐宗運に寄る詩に雄圖二十五)

都城星斗然秋氣清と作る二十五都城すなはち

阿曾の二十五外城のことなれども詩には外城は俗稱

なるへに湯桶よみになれば文字のまにては用ひ

がたき放西土にて昔周の代に國城の居の外に都城

といふがありてこの外城といふによく似たるさま

の物なるうへに音訓のたがひこそあれ其となへはた

や同ことなれば外城の文字を修めて都城とは作りた

るなりさて菊池の十八外城といふは是も土俗のひひ

傳へたることなれはいつ頃の事なりしともさだかな

らざれども當時の文書共に見えたる所にていはんに

は小代文書に見える寺尾野盤閣久虎口穴河等の城

々了俊の歌に見える陳の城野の城水しまの古城

などみないはゆる當時の外城どもにて可有之候され

ば合志が武士に入替たる本城といふは隈部城のこと

にて外城には合志が手勢ばかりを置其身は武士

若黨等討死”

寄來寄府之間於中途一致合戦

同三年正月八日 菊池山城合戰之時致軍忠迫

畢*同三

落 と見えて此菊池山城の合戦は武敏が重て宰府

力

を追出して隈部城に入替てありしを武光馳付てまづ

外城を追おとして焼拂ひ競にのりて明る日たち

に隈部の本城を攻て難なく合志を追おとしたるにて

深川の城は本城に近所なれば此外城とSへるぞ一

定深川城にて可有之歟と覺申候しかれば菊池家にて

は武士が前よりはやく隈部城を築て本城としたるこ

惟澄が狀にて明白なるべく候されども隈部を本城

としたることはいつ頃よりの事なりしやさだかなら

託屋文書に渡山合戦とあるは建武五年八月の

事にて武重がいまだ世にありし頃なれば共時も合志

託など隈部城に押寄て武重を攻めんとしたりしを

武重城外に打ていて渡山にて合戦し合志等を追拂び

しと見えたれは菊池が隈部を本城としたるは猶武重

が以前よりのことにてぞありつらんと覺え申候また

件の渡山を菊池山城と同所とせられしはひかへお

るへきや菊池山城のことは託摩文書に建武二年十二

月三十日新田左衛門尉義貞興同仁菊池掃部助武敏

とき窖をとらへていかで城院などはSはるべきさ

れども水しまに大城小城などふ名の残りたるは前

アナグラ

るべして其家後にまた山鹿郡に移住してありし放

後にはまた其處をも城村といひたるは其名字より

たれる名にて始の城村の城跡あるより名におひてそ

れがまた領主の名字となりたるとは何からざりしな

されども後にかく新に城むらといふの地出来た

れる故にやひつの頃よりか本の城むらをば其境内に

ずとあるはいかにもさることにて城院と稱

する程の事なれば城内に倉庫など置べき處を築地

などにて一搆にしきりたるかさらば城の際に引付

別にやしきを搆たる故城院とはいひたるには可

有之候すべて院といふは昇築地などにてかこひて

搆にしたる屋敷地のことなれば水島の大城小城の

アザナ

木庭とS字の地のありしを取て今のごとく呼かへ

たるにてもあるべし此事もしはたしてしからんには

深川の城跡を菊池家代々の居城の跡とせんにもさは

りなくまた木庭村を鞠智城の跡として城家の名子

の地なりしとひはんにもよしありて聞え可申かと

申候また城院は藏屋敷なれば城より遠く隔りてはあ

るべから見えてはやくより菊池家の外城を構へし處1111111

本城當時合志入替武士楯籠去十五日武

池

光發向″追落″外城焼拂″打取囚徒廿餘人*同十

六日追落隈部城″と見えて當時外城といふは本城に

なる放さ

る字どもの今までも残りたるにて可有之と覺え申候

戰阿

さて託麼文書に見えたる菊池山城並に渡山合

蘇文書惟澄か申狀の隈部城了俊ののくま目の城武

朝か申狀にはゆる守山要害などかく様々に名は

かはりたれどもまことはみな同慮なるべきとの御考

ひともさるとにて可有之小拙も早くより大かたは御

同意に心え居申たることに候つる然るに惟澄が申狀

に菊池本城合志入替武士云々とある菊池本城は

深川の城なるべく深川は小勢にては守なりがたき慮

なるゆゑ合志にもかくたやすく乗取られたるにてさ

る要害うすき所なる故いづれの代にか菊池山城とも

に城を築城とし常には便利よきにまかせて

深川に居城しそこを根城としてありしなるべしとあ

るはすべての御考には似ずしてくはしからぬやうに

申候それをいかにと申すに件の惟澄が申には菊

トンヤウ

書にもひひたるごとくのにも水しまの古城と

すがにはやくより其土俗の申傳へたることなればある處故やがて其慮を城村といひたりしが後に城家

則隆が當地に來し頃までは昔の鞠智城の跡なほ形ばの始祖地を知行せしより名字も城と稱したりしな

るべし

の跡と城ばやしといふ名の残りたるをおもへば件

ことにや則

延ならしいことと知なな和ら後池へ

たるはいつ畑を支久知

さこにな考久音と久脈は支のたたれて

また菊べとのこな久はなん菊候

しばまとはろふゝは久菊由菊かろば

なるべししかる

池

菊

輕重の重と聞えたれ

久

ば

たり草のは昔より本音の

わりだろなり本音之

はずして

とさ

菊池

地名菊盛

始菊池の

久々利姫菊理姫

注に俗どの字

ふ

口字本音

昔は鞠智

ともわきまへれども常時の音

呼が正音なる故

こと

ことに

いぶ

かりは残り居たるを取しつらひて居城としたるも知

脱力

城跡にて可有之と思しめされ候よし小拙は彼方の地

理不案内にて候へども深川の城跡は彼方の土俗も菊

池の始則隆が當地に下向せし始に此城をきづきて

菊の城と名づけたしといひまた菊の池の跡も此地

に残りて郡の名も此池あるによりて負はせるなど

申傳候故郡人澁江公正が風土記にもなは其説を取用

して則隆以來菊池家の惣領は武光迄代々此城に居住

したるよし載申候但”菊の池の城などひふことは

例の土俗の妄説にてひふにもたらぬこどもにて候へ

菊池は和名抄に久々知と見え紀には智とかられたれ

本音之重と見

じて支久と呼ことゆゑ俗

とはるべからず候へ貴説のごとく深川の城跡すなはち

昔の鞠智城の跡にても可有之候へども前書にもま

うしごとく城家の名字の地まさしく鞠智城の跡

にて有えたるかと覺え申候へば今の深川の地むかし

は城といひて城家の始麗共處を知行して名字にも名

のりる事にても候は貴説のごとく心之候てもよ

聞之申べく候へども深川の城跡は菊池家の惣領代

居城とし所といふに定まり申候はそこをまた

城家よりも知行して名家にも名のりたりしとはいは

れまじきかと覺申されば例の強て試に申候はゞこ

れも土俗の説にてたしかには信用しがたき事なれど

も城家は始麗より今の木庭村の地を知行して其居城

の跡を城林といふよし此城ばやしといふは山鹿郡の

城村のごとく城家の居所の跡なる故城林といひたる

まぁなる菊池にてもあるべけれども城家の久しき知行地に其居所

ことな

へたるなり久

より草の菊の頃

喜天暦の頃とは打かわりたる事もおほか かた隆が頃

菊池も今のごとく支久知と呼ことになりてありにもある

頃にはすべての世

重く聞えたろにてもあるに

さま和名抄かきし頃までは昔(

の城林すなはち昔の鞠智城の跡にて中昔より其城跡

桃元問答

11111

は官軍のしきりに勝に乗した 鞠智城の舊跡はSづかなりしとも定められがたく

るを深く悦給ひたる趣なりしかれば此狀は顯家卿の候へども地理に就て御考へ被成候へば今の深川の古

天王寺などの合戦に打負給ひて一旦よし野に引

入らせ給ひし以前に出されたる物と見えたれば延元

三年の二月の中に出される狀なることさだかなる

べし共境之事于今無爲承悦候とあるは其境とは當時

宮の御在所のわたりをさしてひたるにて其頃宮は

讃岐より伊豫に御渡海ありていまだ御合戦を始めら

ざりし間なる放當時其御無爲なることを探し申さ

れたる也御稽古之事云々とあるは頼元父子は清原氏

にて講第儒林の人達なれば其頃宮の御としもはや十

ばかりにならせ給ひて御讀書御手ならひなどの御稽

方をも始めさせらるべき御年頃にならせ給ひたる放

事をは良氏定めて由なく申沙汰せらるにてある

べしとなりされば此事共を併見ても宮の九國御下向

は延元三年の秋の事にはあらて此前延元の初にはや

~御下向ありてかの十二月卅日以後の合旨ともに見

えたるごとく其頃はまだ伊豫わたりに御逗留なり

ておはせしてとひょうたがひなかるべきをや

鞠智城の跡

見出したる故さまではいか奈良ゃともおもひしかどもよ

き證左をえたるがうれしくてしのびへぬまに今

またに引出して共よしをはむとするなり五條

文書に稍之處潛通殊〝悅″思″給″候 近國〝官軍既″

始合戰候度」「勝時節到來〝候歟境事于

今〝無爲承悅候此時節殊″可被第一候哉賴

元賴氏等忠貞之至感″思″給″候□□可被口候哉籌

策定不可有三等開候口御稽古之事良氏定〝申″沙

汰候□理世安民之謀只此一事″候此堺形

勢以專使可申候也と見えたれども紙尾切断して

年紀月日はさらにて狀主宛所もさだかならされ

ばいつ頃の物とは確かには定め難さやうなれ共うつ

なし延元三年の二月頃に吉野の公卿達の中より頼元

父子の間に返事せられし狀なるべくおぼゆること

り近國〟官軍既始合戰云々とあるは正統記に戊寅

の春二月鎮守府将軍顯家卿また親王を先だて申か

さねて打上り海道の國々ことんくたいらぎぬ伊勢

伊賀を経て奈良の京になん着にけりと見へたる時の

事にて時節到來候歟と證験にはあ

をかたらひ付たまひしかどもそれもはかしくは らずやまた宮中の延元の始よりはやく九國の地に

事ゆかざりしうへに九國の者共が御迎にや参らんず 下着しておはせしことは當時の文は共に見えてたし

らんなどかれこれと御見あはせありてひかへ~下 かなれども宮の御下向ありしことはかの年紀をしる

らせ給ひし放つひに九國までの御下着もかくあやし されざる九月十八日の綸旨と十二月卅日の合旨と斗

きまで御延引にはおよばれしなるべしていにまた後 に見えて餘の文書どもにはたしかにそれとは見えさ

れながらもひはまほしきことあり宮中將は延元三年 る故三年の秋四年の春などいふことも出来たれる

に召に應じて上洛せられしにはあらで後までも猶九 然るに近頃五條文書の中に宮の延元の初よりはやく

國に逗留しておはせしといふことは前にはやく親房 九國へむけて御下向ありしと見えたることのあるを

ウニヤグ

ふかしみておぼつかなく思ふ人もあるべけれども今 卿の興國三年阿曽惟時への狀を引證してくはしく辯

つら(常時の事を考えるに最初宮の山門を出 じおきたれどもそれよりもひと手近證左のあるに

たいせ給ひし頃は山上に籠りあつまりたる官軍もさ 心つきたる故いはでやまんも口をしきわざなればう

して大勢なりしとも聞えざりしうへに洛中を口々 るさけれどもしひてひふべし宮中將の參洛をしきり

の合戦に隙なかりし折からなりしかば其中よりまた に御催促ありし事は延元二年の冬より三年の夏まで

多勢を引分て宮にとてつけまゐらせられんこともか の間にてそは顯家卿の東國より打上り給ふと東西よ

なまじかりければ宮にはさぞ弱の御勢かさにて おし合せて云に都を攻られんとての御催促なりし

ぞ下らせ給ひけむさてはまたたちに九國に御下向 かばまこと中將の召に感じて参洛し給はんにはおそ

あらんにも其まにては御合戦など始めらるべき御 くとも夏の末にはかならず上りまゐられしなるべし

事ならねばまづ四國の官軍を御からひありて御勢 しかるにかの福寺領の御沙汰文は延元三年の十二

かさをまされてこそ九國へは打入らせ給ふべけれと 月八日に出されし物なれば中將の其としの夏上洛せ

てかく御路すがら所々に御逗留ありて四國の軍勢 られざりしことは件の沙汰たしかなる物なりしこと辯をまたずしてしるかるべし然るにか

の十二月卅日の合旨に讃岐より伊豫に御渡海あるべ

きょしのせられたれはおそくとも明る二年の春の中

には一定伊豫に御渡海ありしなるべしさて伊豫と日

向とはわすかの海をへだてむかひあはせの國なれ
日向大すみの徒等を對治せられんには伊豫より
たちに御向あらんこそ便宜にてはあれかでさ
る便宜をすて何の望に道をまげて肥後よりは向は
せ給ふべきそのうへ豊後路にかいて肥後に入御
らんには御敵の大友一定御道を塞ぎてさいへまるら
すべければSかでさはたやすく速にはおし通らせ給
ふべきさるはまたは宮のおうへばかりにもあらず御
迎にまるれ御供に候せよと御催促ありし阿蘇菊池の
者どもがつひに一人も御催促に感じて四國の地まで
は參りたる者なかりつるもたゞ自國の合戦に隙をえ
ざりしのみにはあらで道を大友にふさげられて往來
自由ならざりし放なるべければかた日向大隅へ
の御發向はうつなく伊豫よりの御事なしとはおも
ひ定めつるなりま宮の日向大隅の間に御打入あり
しことはいつ頃なりしとも定めがたきやうなれども

其事の御沙汰ありしは十一月廿八日のことなりしかは其としのをはりかおそくとも明るとしの始かにてありしなるべしさて延元三年の春より興國三年の五月まで五年間日向大隅の間に御陣をめされてまた大隅より御船にて薩摩の山北の地に打入らせ給ひ谿山を御在所と定められ正二年の冬まで六年が間三の囚徒らとあまたび御合戰ありてやうに三國をうちしなへ給ひとしの暮に薩摩を出させたまひ明る三年の正月の始にまた御船にて宇土の津に御着ありしかば宮の山門を出させたまひし延元元年の九月よりは十二年のひさしきを経て始て肥後國には御打入ありしなり今當時の綸旨旨共に據て宮の御履歴の次第をかくのごとく考定むるときは御道すの次第もさるべくおもはれまた當時の事實事情にも何一つさはることもなくたしかにおだしくも聞ゆべきことならずやされども九國まで御下向の御路次にて讃岐に四五月伊豫に十月あまり御逗留ありてや

う~十四五箇月をへて後やうに九國の地には

御下着ありしといはんはあまりに遲々せられたる御

事のやうにて其よしもさだかならされはあやしみい

二九

んとて三富文書にSごとく閏二月十七日鎌倉を打 宮の旨を奉行したりし右兵衛佐も同人にて五辻宮

出給び武州狩野河まで御發向ありしを十八日に 供奉して宮中將と共に九國に下向したりし人には

義宗朝臣其事を閉付給ひ十九日に狩野川に寄せんと たがふべからずされば共頃宮の中にて九國に下向

し給ひしかば將軍もまた其事を聞付給ひて二十日に したまひしは懐良親王のほかにはおはしまさゃりつ

狩野河より金井原に出向て御合戰ありしなり然る れば五辻宮のはたして懐良親王にておはせしことは

右の注進狀に義宗朝臣十八日に鎌倉に攻入たまひし 宮中の此宮の大將なりしと右兵衛が此宮の令旨

かども將軍は開し給ひて前日はやく鎌倉を沒落し を奉行したりしとにてその設左ひょ〜たしかなる

空腕 立

給ひしやうに載せられたるは義宗朝臣そらうでたて

にあらずやまた件の右兵衛佐が奉行したりし延元二

を申されるにてことは始より一度も鎌倉に攻入 年十一月の旨にはた日向大隅の囚徒等を退治せ

られしことはなかりしなり是らはみな遠のみかた られんため彼國へ御向あるへきよしを載せられた

の心をやすめ力をそへんためわざとかく虚聲を張 るばかりにていづれの御在所より出されしものとも

事もなげに注進せられたる事なれば件の綸旨の追宣 さだかならぬやうなれどもおのれはやく伊豫よりの

もかるたぐひの御用意にてありしことを悟るべし 事と定ていひたりしよしはかく五辻宮のはたして懐

さて又五辻宮と宮中將と御同人ならぬことは前にも 良親王にておはせしてとたしかなるうへは件の令旨

くはしくひひたれども五辻のはたして懐良親王にて に延元二年とさだかに年紀をしるされたればかの勘

おはせしことはいまだたしかにはSひかさざりし 解由次官の奉行せられし十二月卅日の台には宮の

故に今又こに其證左をちかく取てあかすべし宮 鎮西に御下向の最初まづ讃岐に着御のよし見えたれ

中將を大將と稱せしよしは征西將軍宮の屬といふは十二月卅日は延元元年の十二月なりしてとうつ

なることは前に辯せしごとくにてさだかなるうへなかるべし、かればく又宮の画將軍に御拜任の事を

は件の中將の沙汰文を奉行したりし右兵衛佐も五辻 載せられたる九月十八日の綸旨も同しく延元元年の

ち

に一つ二つ共證を擧ていはんには興國三年の二月親

房卿城より結城親朝に後措の事を御催促ありし狀

に關城宗祐一身奔走守備粗全而城園已”

酒驛路絕不得三白書出行兵器

1117

應三年

さるやうの例がひづくにも安いおはかる事にて今茲

囚徒”十八日攻入

らず諸國の勢ども一同に上洛したるよし載られた 倉”候之處氏已下囚徒已“沒落””狩野河候

るは當時まことにさる事の有しにはあらず九國の者

仕候決雄候者重

之間今月十九日發向彼方

共が上洛をうながされんとてかくそらごとを造仰可候云々と見えたるに三富文書に三富彌三郎

ふれられたるにて是また軍略の一手段なれば當時 元胤申軍忠事一去年將軍家御下向之時海道供奉

井原同廿八日小手指原兩度合戦に致忠事中略觀應登

年三月十六日とあるに據るときは此をりの事は太平

記に見えるがごとく上州信州等の官軍蜂起して鎌

倉によすべきよし聞えしほどに將軍はそれを追拂は

一今年閏二月十七日武州御下向之間御供仕同廿日金

のあとを追て上洛したまひたりしが將軍鎮西へ落下 狀には此方城に云三要害 兵之用意雖

り給ひし後東國のこと心もとなしとて親王と顕家 年月不可有三子細と見えたり是らはみな

とを重て東國に下されしかどもいつしか東國の者共 同時同人より同所のさまをいはれたる消息なるに

この五月親局より阿蘇惟時への

5將軍

観主

まつ

。

したるとは聞えた

しも

炊骨易子之患將」「至ランド也姒黜

を甲以過ご旦ター見およばずされば此東国勢とあるは顯家卿の東國勢

引率して上洛ありしことをひばれ文なり撰史の人の潤飾せたの数行刻の熊本書と同ずらすと見べて急危旦夕に迫りし

やうに聞えた

將軍に心をかよはすものおはくなりて結句宮の靈山 により所によりてはかく事のさまをうらお

におはしましいを攻圍まゐらせなどして御みかたに

北朝戎 の條に

がへてかくれたりまた園大曆正平七年

參る者すくなかりしかば其頃顯家卿の東國勢をひき 載せられたる新田義宗朝臣閏二月十九日の注進狀に

ゐて御上洛などあらんことはおもひがけなき程の事 今月十五日於信州揚三義兵同十六日 治國中凶

にてありしぞかししかるを件の綸旨に東國勢のみな 徒同日打越武州一打随常國口湊撰の說なれば是また信據とするにたらざるを また

記の宮の御下向を延元三年のことしたるは前にも 月の初に伊勢の津より御船にめされ海路はるかに東

くはしく辨じおきたることなれども獪いひもらした 國のかたへおもむかせ給ひたりきされば其頃宮噢州

ることもあればちなみに其のこれるを出して前のた の御下向に引ちがへて東國勢の上洛すべきひはれも

らざるを補るべし件の九月十八日の綸旨の追宣に追 なくまた東國にある囚徒らが外には上洛すべき官軍

申"東國並"謎方~官軍巳"上洛"候也といふこと見え てはあるまじき をや淇うへただに此事のみならず

たりしかるを此綸旨を延元三年の物とする時は其と すべて件の綸旨の趣一事も當年の形勢に似たる

しの春顯家卿奥州宮を先だてまゐらせ東國の官軍甘ことだに見えたらぬもて ひよ櫻雲記の杜撰なる

万騎を引率して上洛したまひしかども畿内所々の合こともしるくまた件の綸旨の延元元年のものなりし

戰に官軍すべて利を得ずして顯家卿も高師直と軍しこともさだかなるべしさりながら延元元年の九月頃

て五月二十二日和泉の境にて討れ給ひ其後顯信朝臣に東國勢の上洛したること當時の物共にはさく

之後云々とあるにて排出したることにて享齋が例

下の東國の官軍等も宮の御下向に従ひまゐらせて九

武光奉入御大王最初於三八代城自令退三治一色入道ヶ父

武朝が申状に興闘以来 春顯家卿とともに上洛したりし結城入道新田義興以

の供奉の人々の交名御路次の次弟までく

など八幡まで攻入て男山にたてこもり給ひしかども

るに右の綸旨共は十七日と十八日に出されたれば

づかに一日のたがひこそあれ正しく同年同月に出さ

れてしかも同所に當下されたる物なるに綸旨共

に載せられたる當時の形勢一事も書符合したるこ

となくすべての趣殊の外に相違したるにてかの九月

十八日の綸旨はうつなく延元元年の物にて系圖の説

はいふにもたらぬ杜撰の妄説なることさだかなるべ

井澤亭菊池車記に宮の御下向を興國元年の事と共時

きをや

八月の中頃にこいをもまた師直に打おとされて顯信

朝臣は河内へ引入たまひし以後は官軍みな吉野に帰

参りてしばらくは畿内にての合戦とてはなかりし

なりかくては始終はかしからじとて結城入道か

すいめに従はせ給ひ奥州宮を陸奥太守に任せられ顯

信朝臣を鎮守府将軍になされ猶また御任國に御下向

ありて重て東國の勢を催さるべきに御議定ありて此

に八代高田に入御ありといひたるほかの二五

元問答

せざりしに依て山上の官軍無勢にして

京都の合戰合期せずはかしからざりし放將軍は

御入京のまい五月の末より此頃迄猶東寺に御在陣

朝臣をさすなり

軍等かく一揆本意哉云々にで鄭州とある家

ロツメ

院系圖には將軍宮の九國に御下向の事を延元二年の

利”とあるは兒島範長が播磨にて赤松勢と軍して討

宮

成歩 ほのみるなは四りし綸旨のたしかに延元元年に山門より出されし

られたる事共を案するにいづれもみな延元元年ふた

たび山門に遷幸ありし間のこと共にて朝敵追討の事

ことをSはわたる也さればこれらの條々を併見

て件のうつることを語るべししかるに醍

ᄃ

死せしを始め兵庫の合戦にも官軍すべて利を失ひし

といへる或は城守而似怠慢とあるは太平

記などにはさるさまの事は見えされども當時の有様

をおもふに近國の官軍にも将軍西上の兵勢に畏れて

山門にも参らず京軍の後措をもせずして我城にのみ

引こもりて世の成敗を観望して居たるものもおほか

しなるべし就中九州、士卒等無功雄

及参洛之遲引」とあるは阿蘇菊池の者共が筑前に攻

入て少貳妙恵を討取しかども狩一色以下を敵にうけ

将軍のあとを追て参洛せざりしと共春顯家卿の

東國勢を引ゐて將軍東上の後をおふて参洛せられし

には似ざることをとがめ仰られたるなりまた依之凶

徒縉不退帝都渉旬日之條云々とあるは四方官 如月、背としたるを此事外にはまた考ふべき物なかりし

故にや日本史にもまた此説に據て後醍醐紀同年の條

是歳以懐良親王爲征西將軍,經略なんぞ!

見へたりされども阿曽文書に同年九月十七日に吉野

より大宮司惟時に下されたる綸旨あるに諸國已相競

之間京都囚徒追日無勢に候仍防戦失術計歟之

忽搆一謀計、當山已"沒落"了""有御和談な

んど種々以説方々に披露之候更に不可成り

疑京都御弱以之可被察時巳"至*歟不失

此時分急速"可貴三京都之處諸國遲々之間延引ル

者也"奥州去月十一日進發之出去**夜飛脚參申又

北國近日可入浴候而九州今度不參者日來~忠功

とあるば義貞 と見えたるにもし系圖の説に據て宮の

御下向を延元二年のこととするときは件の九月十八

日の綸旨もまた同年のものとせざることをえずしか

八日の綸旨に常時の形勢を載せ

祚延長天下泰平の御器の事を書くはへて沙汰文に

をさし置て中將家の守護職に補せら

の

入あるべきやうに聞え

出された物なれば是また當然の作法にてあり

興國四年の秋は

かぐわ

れば其年の内にはSかぐわ

興國四年の秋結城親朝を上線して文獻叢書第二巻

二一四

れば其年の内にはS春の初などには一定右りけむおそくとも明る

雨國の間に御渡海ありつちんとおもふさては宮中 し時常陸宮の旨をば用ひられずして親房卿より

將の廣福寺領の沙汰文を出されしは其としの霜月の 例の秀仲が奉書をもて沙汰せられし事ありきかいる

ことなりしかば宮の初て御下着の頃よりはほと 撰寂補任の公事にすら綸旨をさし置てかく私家の

一年に近き間なれば其頃廣福寺より所領の事を御在| 奉書迄にて事をすまされし例もあれば旁々宮の旨

所まで注し申したればとてさしてそれをばにはかな

ることともいはれまじく又あやしむべき事にもあら

ざるにやまた廣福寺領の事につきて宮の旨を用ひ

られずして中將家の奉書もて沙汰せられしことは此

事もし宮より新御寄附などの事ならんには一定合旨

を出されてこそ御さたあるべけれ是はさる樣の事に

はぁらで廣福寺の新の所領是まですべて若干なり

しといふことを御在所の御奉行まで注し申たるを中

將家より其返抄を出されたるといえばかりの事にて

其頃軍功ありし者よりその次第を大の奉行所にあ

注し申を大の執事より承候了と出て判形を加

へて批答すると大かた同趣の事なる故件の中將の沙

汰文にもた被閉召候""とばかりありて奥に

の奉書にて沙汰せらし事をばさ

まで深く御疑惑には及はれまじき御事かと覺え申候

抑征西將軍宮の始て九國に御下向ありし頃の年月を

延元元年の九月のことなりしと定めひひたるよしは

前書にもほ語を取て一とほりは辨じおきたりしか

どもひひもらしたることもあまたありてくはしか

らざりし程にかいる御難識どもをもうけ給はりたる
ことなればくだしくうるさくもおぼしめさるべ
かめれども例の腹のふくるが苦しさにもだもえあ
られずして憚らず数々の設左どもを立て重てヽい
にもひびあかさんとする也阿曽文書に見えたる五辻
宮城に無品親王の宣下ありて征西將軍に任せられ
直に鎮西へ下しまゐらせらるべきよし阿蘇大宮司に
御沙汰のりし九月十111 桃元問答

011

ゆるうへに其としの十二月のつこもりに讃岐より 福寺のごとき寺のたぐひまでも宮の御下着ありし

旨を出されて伊豫へ御渡海あるべきよしまた大宮ことを承知せぬものとてはあるべからずそのうへ宮

司に仰下されしかば其をりも前のごとく菊池以下にの御下着ありしはいつ頃なりしとはSはれされども

も仰られしなるべくて明る二年の十一月日向 伊豫よりの旨の趣にてはやがても日向大隅に御打

せてこそありつらめさらば宮がたの分地にある廣

ありけめと

らめこばつはやく御沙汰を仰て所知所領を安

なに菊どの

しほうろはどそれには年頃の家

共頃惟時!

云々と書出

九月に山門より綸旨を下され しょり二年の霜月伊

をあ阿のがくしに官惟な境前

大宮司は惟直

本行ら潜軍直りな

「さるべ

の件の論旨

主の

河内に越

梨惟定

ほなり

とて

京在してり失て行其の

在事山

はぺた下たほ開共置え

りしに

由ま

と

の開

れにねづ程しさにい中直

て

肥前の

て職場はとか

合期

に

にもしたを常敬ばき司

合戦前

事家京な惟りふの

深

出されしとは

んは何ともいぶかしき事に思召され候よし此疑難一

わたりはSかにも御ことわりのやうにも覺え申候へ

ども前書にも申ことく征西將軍宮の鎮西に御下向

るべきとのことははやく延元元年の九月に阿蘇大宮

やく

な下惟れにこれてまにか性と

かさわ初としはだてれ直

●元年の

WAS

文書の電

兵術文をく

が奉書に

將軍宮おはしますこと故旨をこそ出さるべきに右

りの事にてはあるべからず右の雨度の分旨は今たま

きよし阿曽に令旨を下されしかば此をりも阿曽ばか

より出され沙汰文ならんにはいまた寺院のたぐひ

べ

直に御大隅伊豫より

までは御渡海のことも承知すまじきことなるうへに

国徒御追討として發向あるつれれたしひ下びの世権の供在業のたお
酒年へ時って土らざ入なしくして合

ざまにしてしす也合戰

御ぱり梨うたあつれ自打

沙論し惟きりろゆどまでは

しらであ

れば綸 豫より合旨を施行せられしまでは其間十四五ヶ月の

久しさを經たることなればた 右の兩度の合旨のみ

にはあらで事にふれ便宜につきてなさま の事

共く度も御沙汰ありつらんとおもふなりされば宮

の御下向の事は大かた九國の間にては宮方ならぬ所

までもはやくより閉部へて誰しらぬものもなかりし

程なるべし其中にも年頃宮方に心をかよはしたる者

共は讃岐よりの旨の始に鎮西恩賞の事綸旨をもて御沙汰ありしはどの事されたるを見てなれば菊池はさらにて九國にある宮方の者には阿曽堵せんと宮の御下着あらんことをいつしかと待

同やうにこそ大かたのこりなく御沙汰二年のと足がつるなりと見えたるにて宮中將は延三

年四月+ 越後守にて

物ろと

此幸秀には 刑部大輔と

ひか

に下されし旨の趣を惟時より

不

元弘勅裁・付三本証管領セラ

関

軍

健

すべて當時の事質にも事情にもいたくたがひたるや

うに覺へ申候Sかにとなれば常時阿蘇にも中將と同

しやうに上洛の事度々御催促を加へられし中にも

不依三三位中將参の可被三参浴とまて仰

下されし程なれば菊池以下の御身かたにも一定同じ

やうに御催促をくはへられつと見えたるに其頃は菊

池も阿蘇も一色少貳大友等を敵にうけて自國の合戦

に隙なかりし故九國の官軍は一人もめしにじて参

洛したるとのなければ中將とても同事にて折ふし大

隅日向の凶徒等と取むすびて合戦ありし最中なれば

是またそれを打すて洛せらるへきはれなし阿

蘇文書の中に興國二年三月廿四日親房常陸の小田

城より阿蘇惟時に給ひし例の秀仲が奉書ある其追

啓に追"申"宮二位中將殿當時何所に御渡候哉此御書

可令三傳進給之由可申旨に候也店の神が本書に

のみしるして年

も崖がたきやうなれども件の奉書の中

以目出度候哉とあるは前年(延元五年三月に肥

以前年(延元五年三月に肥後園

肥後文獻叢書第二巻

ば

裁れ

故は

の前に郡之た

ころ仲りの年慶て浦 次年にはつひに上洛せられずして後までも獪宮につき

そひまゐらせて九國に逗留しておはせしこと此秀仲

が奉書たしかなる設左にて可有之かと覺申候さて此

ちなみにつきていふべき事あり件の中を大将と

稱せしよりは前書にもほ辨じたれどもくはしから

大將顯時~朝臣

ず此大將といふは關城書に竹園御座

經廻之間加酌許歟また結城文書興國三年十一

月大城合戦の事をいひたる處に大將春日中將一條

少將率城中勢出張悉"追散"など見えたる大將

同趣にて顯時朝臣は大塔若宮をもりまらせて大

賓城に籠られし故宮の御手の大将とS意にて大將

顯時朝臣とは Sひたるにて宮中將も懐良親王をも

まゐらせて軍の事をおきて給ひし故此卯をも大將宮

三位とはいひたるなりされば心づれの大将とひひし

も皆宮のおはしますにむかへていひたる大將にて征

夷征東征西などのごとき朝廷より一方を専任せられ

たる重大將軍にてはあらざりしなりまた宮中將よ

廣福寺領の沙汰文を出されし事を中將もし宮副

將軍にていまだ九州の地には御寄附もなく奥州より

直に大隅日向の徒退治として御渡海ありし其陣中

11111

桃元問答

1111

宮中の事の阿蘇文書の外に當時の物に見えるれば中将は召にして參りし故其跡に宮をば征

は書寫山行幸記に供奉の人々の名を載せて關白 西將軍になされてさし下されしものだとの御趣意な

殿牆別常殿五辻宰相殿從三位行助宮中將甲斐るべく推察せられ候然るに貴説のごとく心得候ては

るまのらたしと記されば其時迄は未だ三位には叙せられざりし

にこにおどろかし置て後のよき考をまつことになむ

と見えたり然るに阿曽文書に見えたる五辻宮の令旨

は延元二年十一月に出されて右の書寫山行幸の元弘

三年よりは五年の後の物なるにて貴説の如く五辻宮

の九國に御下向の後に始て三位中將に叙せられ給ひ

しにはあらざりしこともしるく又五辻宮の御同人に

はあらでうつなく懐良親王の御ことなりしことも

よく是にてたしかなるにあらずやしかるにまた貴

説に五辻宮は延元以前よりはや~九國に御下向あり

諸方を鎮撫して九國の官軍を引具して御上洛あり

しと御見きはめ被成候とあるは此中將もし後までも

に逗留しておはさんには其年また懐良親王を

ま征西将軍になされて九國にさし向らるべくもあらざ

あらざれ

せる向なの加とろ宜姓三王なしいと

おもひよせたる

'揣たかはら下す男男はく正成はとにし

忠彦の中なりにはたっふまじくおもふなりされど本より臓器

とも定めが こども何さま大

房

とばさる例とても見およばす

お人臣に降りたる人

になり給ひにより、

忠成王の御二

しこと

源氏系圖に

【忠房親王を彦仁郷の御子としたるも彦仁卿を忠

今は順徳院の第四

房

あり忠

ふこと御弟の御子か

鎌倉まで打入給ひし彈正尹忠!

づれの宮かの御子にて孫王にておはせしにはうつな

鎌

ならまりしにくさとるべししかんば性のをお持ちの字はやく時本の人々の中にも三位中期

忠が殿とひひたるも同例にて良忠すなはち攝園の身 月廿七日播摩岡書潟山に行幸なりたるにて宮中物

同

殿法印良

ずさるは此宮といふは父宮少將一條中將行房勘解由次官光守とをさしたるにて其人をさ

して宮といひたるにはあらず前書に引れる

見えて此行幸は

元弘三年の五月伯耆國舟上より還辛の御 Sでに子運男のは御賀しれ下位のかてはさけ

な彦そば頃ち弟たばあ賜の御りければまつ是にても五辻宮とは御同人ならざりしと

だかなるべきをや宮三位中将はいづれの宮の御子なりしと

宮三位中将はいづれの宮の御子なりしと

、建武二年尊氏卿御謀叛の時大 宮と共に 東山道の大

にかならざれども例のして試

たろも共に紹運録の誤にてまことば 忠房親王は忠成王

宮豐彦王の御子にて彦仁はまた豐彦王の御二男

にておはせしを源姓を賜りて三位の中にな

2件の宮三位中野にてはなかりしにやされども宮

頃までは何とやらんいまだわかき人なりしやとのこち

仁卿にはあらで忠房親王の御子に彦といふ。

なれば宮三位は此人なりつらんもし

薩摩より御船にて宇土につかせ給ひそれより直に筑 ひなかべきをやさてまた五辻宮と宮中將との御同人

後へ御發向あるべきとてまづ菊池に越させ給ひしは ならぬことは前書にもあらく辨し置たることに候

らくそこを御在所と定めさせたまひしなりされば宮 へどもくはしからで筆もまはりかね候故今のごとき

の初て肥後に入御ありしは武光が代となりても四五 御疑をものこされたると覺え申候間くだんしきや

年後の事なりじ故此事を武光に係て武光奉成入御故 うにも候へどもたしかなる設左ども引出して重て

大王とはいひたるなりもし延元四年の春の事ならん 申試べく候東鑑壽永元年九月廿日の條に中納言法眼

には其としの夏までは武重いまだ世にありて肥後筑 曉城 是後三條院御後輔仁親王御孫陸奥守源朝臣

咕

後の間所々にて合戦したりし事託小代などの文書 義家御外孫也武衛好所 請 申也云々と見え

に見えたれば宮の入御ありし事をば武重にかけて たる圓曉法眼を宮法眼としもまうしいことは曉の

そいふべきことなるに武重武士が間にはつゆさるけ 花園左大臣有仁公は輔仁親王の御子なりしが鳥羽院

しきだに見えずして興以来とことさらにはしを改 の元永元年に御年十七にて源の姓を賜はり直に従三

めてもはら武光が代の事にかけてひひたるにて宮は 位に叙せられ程なく權中納言に任せられ保安元年權

興國以前にはあからさまにも肥後の地には立よらせ 大納言に進みたまひ明る年左近衛大将に轉任せられ

給ひしこともなかりしてとしるかり其うへ惟澄が正 給ひたりしを當時世に宮大将と稱しまうし、故圓曉

平二年九月の申狀は延元元年より正二年までの間 其御子なりしかばまた同しく宮といふことを冠らせ

おのれが手にかけたる大小の合戦をば前後年だてに て宮法眼とは稱せしなりこれよりして後此例にな

しておちなく書載せたる物なるに一言一句も宮の御 らひて孫王の姓を賜りて官途をかけたまひたるを

事に及びたることなければまして當入御の御事は 大かた宮のそれがしと稱することにはなりしなりさ

其けしきだに見えたることなしされば常園にて入れどもそれは孫王の御上手にて皇子にて姓を賜

御しは明る三年の春なりしことよくうたがりたる宮のとしてと其例をさく見およは

るか

1110

のごとく北宮もし七月の頃にはや 四将軍に任せ

られておはしまさんには吉野をこそ東國御下向の宮

達と同時には御門出もあらんずらめ御身は鎮西へ御

下向の御事なれば便宜にまかせて和泉の境か常の

どく難波の津などより御船出ありてたちに鎮西へ

は御下向あるべき事なるにかなれば鎮西へ下り

ふべき御身にて東國御下向の宮達に具せられ給びは

ると上総の地ちかくまでは下らせ給ひけむそれ

が思ひかけず大風にたまひたる故にこそ四國の地

にもたゃよひつかせ給ひたれもし此逆風なくして追

手のみならんには早く常陸か陸奥の間になど落着て

こそおはすべけれさてはまたひつを期としてか鎮西

へは下らせ給はんすらんさりとも是によしある事に

やひと(心得がたしまた征西將軍に任せられしは

七月頃の事にて阿蘇などに御沙汰ありしは九月の

にて有しなるべしとあるも心がたきことにて

新たに一方の將などを任せられんには其管內の

桃元問答

向の始より征西將軍に任せられておはせしとにはぁ

らで當時始は牧宮と申しが鎮西に御下向の後に始

て征西將軍には任せられ給ひしとなりしかるを貴說

110R

のみゆくりなく任所に下向したらんには其管内の者
共いかですみやかに其まうけをもなし路までの迎
などにも出合すべきさらばたあはてるまでにて
おのづからなめしくおろそかなる事のみおほか
るべければつひには大の威勢もさめて管内のおき
てもだちかたきことになりゆくべきをやまた宮は延
元四年の春九國に御下着ありて直に肥後國に入らせ
給ひ菊池に三四年御逗留りて興國三年に薩摩へ御
發向ありしとあるは何に握られたる御考にや此宮の
初て肥後に入御ありしことは武朝か申に興國以来
武光奉成人御故大王云々と見えて興國以来と
は此前に寂阿以來武重武士三代の間先帝の御ために
忠義をつくせしてとをいびて武光は興國三年に兄武
士が譲りをうけて家を相織したりし故是より以下
武光が一代の動労はんとて興國以来といて

をあらためたるなりさて懐良親王の始て肥後に入御

ありしは阿曽文書に見えたるごとく正三年の正月

地方には拝任の日やがても其よし御沙汰めるべくさ

らずともかならず其赴任以前にはあらかしめ御沙汰

らずともかならず其赴任以前

し其御少し なくして人

あるべき事にてこそあれもし

といふ趣に見えたれば作者の心は此宮東國御下

後に

記などよりば一定南

やうに聞え

便宜にまかせられて追つぎて征題目せられさい

筑紫の

~さだかなるべきを

うし

とにてとりどころもなき杜撰安作の説なることよりしなり其事程なく吉野へも聞えたりしたとに是も

よ會したるも是らの事どもと同じたぐひのさかしらでなれば近さにつき便宜にまかせて鎭西には御下向あ

いとくに~

になるべく覺ゆるなりもしばたしてしからんには

く

/さざま又東國の

二〇八

しかたさかしら心な

や物し

赤松

附たてあがに此のろば宮上ろ見名のし正に

年

きて御卒ときや共のじょれののある御件れり中

おんかはと記もひなこ名しひのにさよの

の

せと年年べ

はれにかたかえに初生

わせさる段

あて●暗

集

また

事

ひすごしまことば杜撰

へあて

大塔

は

て

見ある

り正

よ

「宮

かさま宮に

き粉にしごをばたら

またふたし見初

られ

の

じ此宮の

「あり共感!

よう

こお

作

ことを

令旨あ

やうに作

平六年の二

たるは義良

隆

ひて 常陸おかした常>!

六

の一

大塔

討ての御は常にくと宮らを常月

までもみな和田和泉守正武が奉にて諏訪部

結構

朝と號は宮座のもまに隆

かとりを御っしで頃きなてだのあ年

御事跡ともありし事をばつゆひさいかもしらざりし

も

らくろて破叛られヾ陸かん陸などに二み 其

ほとに常陸にての御事はあらぬ宮の御へに附會し

て一段の事跡を杜選し大塔宮の御事はた太平記

にのみ據て謀叛の一件ばかりを書出したる故たま

くまこ しゃかにくはしく物しおきたる御生年も

御名も其杜選の痕あらはれやすくしてすべていたづら事となりたるなり其軍ののきか年おとしさ宮旨件の令旨

合旨如此云々と見えたりこれに仕

ことりて一字つい

ともおもひしか

露斗もしらざりし

宮ならんとて大 たろに

この御名を杜撰

に打謀かかた常てら常か御るののなのわとあ御ひう難給方載もがはり名てし南ここ陸御落たにもりこ陸王なるただのろま

しろ北にるに範の思程も御よぐ宮ふ下宮書うにあるも極雲記によりてかきたる物ならんとおもふなり、されども

櫻害記の作者は近頃やう~世に出たる阿蘇文書

Sかではやくは其片はしをもうかひ知るべきなれ

ば懐良親王の御事は只元弘日記裏書にのみ據て心え

たがひたるにて其杜撰の罪もさしてまたふかく咎む

べき事にもあらざるうへに其所の次第は事實に

こそたがひたれ趣はよく聞えて知らぬ人の打見に

はげにさる事にてぞありつらんとおもはるべく見え

たるをやされば趣に就て其次第をSはば懐良親王

も宮達宗損魄王頭と同じく奥州)宮に従ひたまひて

東國に下向したまはんとて同時に伊勢の津より御船

を出されしが伊豆の崎にて大風にあはせ給ひ御船ど

もみなちり(なりたる中に懐良親王の御船はおも

ひがけなき方に吹はなたれからうして四國の地に漂

ひ着かせ給ひたりし程にそれより引返してされはかの懐良親王に牧宮の事を附方へおもむかせたまはんはいかにもたやすからぬ事

だに初て聞たる物なれば

西軍にはなされた

りし桃元問答

1107

に據て書出したるはよかりしかども其御

と見えたれば經泰は延元元年顯家卿に従ひて奥州に 誕生の年月をしるし御名も陸良親王とまたの

下りたりしが同三年の春又顯家卿と共に上洛し顯家 御名までも知りたるやうにかまへたるはさかしらの

卿討死し給ひし後は吉野に帰りて肥後守に轉任して ひがことにて宮の御事をまことそれ程くはしくし

ゐたりしを其年の秋親房卿か顯信卿かに具足せられ えてあらんには宮はやく吉野に遷幸の初攝津の

てふたひ東國に下向せし人なるべし殊に秀仲が事 座摩の庶務以下に早く吉野に馳参行在を守護しまゐ

は延元四年の九月吉野殿御讓位の御事を親房卯より らすべきよしの旨を出され其後先帝の御猶子

結城親朝がいまだ大藏大輔にてありしに仰しらされ となり給ひて親王の宣下蒙らせ給ひ無程常陸に

たる狀をばはやく此秀伸が奉書にして出したるより 御下向ありし御路次にて駿河の狩野介が許にしはら

其時季仲は越後までも結城文書阿曾文書などにあま

興國二年の夏小田城に御下着あ

く御逗留ありて李花

た見えたる一品家のどもは大かたいつも秀仲が奉 りしより同五年の春まで四年が間顯時朝臣と供に大

行したりしてと見えたれは此人は初より中院家の家 賞)城に御逗留ありて關大貸等城落たりし後親房卿

司にてうつなく宮の供奉して下りたる人にはあらざ と供に吉野に帰り上らせ給ひしまで御事跡どもをば

しことしるかるや櫻雲記載する所かくかた かならず落なくらはしおくべきことなるをさる

に誤おほかる見えたり次に廣橋肥後守は是も具信朝臣の興國三年

の四月親朝への歌の中に廣橋肥後權守海邊沙汰事候

其後何様に候哉と見えたれば此人斗は宮の御ともし

下りたる人ならんともいはるべきやうなれども日

本史後醍醐紀延元元年三月二十二日の條に相馬家傳

を引て修理亮廣橋經泰攻 相馬光胤小高城「不克

々二十四日源顯家攻 小高城斬 相馬光胤

にて此の大かたは附曾杜選ばか

にて信據とするにたらざることを悟りたまふべし

此外にも當時の宮の御事は無下にち案内なりし

と見えて關城書などに見える竹園は大塔宮興

良親王の御事なりしことを夢にもわきまへしらざり

しのみならず大宮の吉野にて御謀叛ありし一

件を太平記後のことなる故櫻雲記の作者此守護職補任と前の轉

任の事とを一つに混じてしかあやまりたるとは見

れども此守護補任のことも宮の旨をもて補せられ

たるにはあらずしかるに親朝か官途の事を轉任にも

あれ新補にもあれ一定宮の旨をもて御沙汰ありし

やうに心えるよしは結城文書の中に當時親房卿

の出されたる沙汰あるに所被申上總國守護

職也早可被管領者依一品家執如件奥

國四年七月十二日刑部大輔秀仲奉結城修理太夫殿と

見えて裏に親房卿の形のりされば此一品家とある

は其頃此卿は位の従一位にておはせし故の事にて

世には中院入道一品あるは中院を略して入道一品と

ばかりあるはまた打とけてはたゞかく一品家と斗も

稱せしなり其事は櫻雲記の作者も大かたにはわきま

へたりしにや正平十四年此卿のかくれ給ひしと

をしるして北畠准后薨年六十七號中院一品と見

えたりしかるに件の沙汰文には中院とも入道ともな

くしてた一品家とばかり見えたる故にや例の作者

此一品家を心えあやまりて一宮の御事としたるゆ

ゑ是より後には一宮の御事をすべて一品宮と手書

把文獻叢書第二巻

元年の冬など吉野より下向せられしと

御下向

宮

は興園二年の

夏興國その月の末下向

年宮には先だちまゐらせて

たる也最初にかく心え誤たる放送にはまたみづから

誤をうけて件の沙汰文を奉行した刑部大輔秀仲
ば宮の御家なりしと心得て此前宮の奥州より小
田城に入御の時御供に候じたりし人々の交名を舉て
春日)中將顯時一條少將具信廣橋)肥後守經泰 刑部
大輔秀仲と見えたりこれは結城文書の中に所々に見
えたる名字ども拾ひあつめて書出せるにて質はSづ
れも宮の供奉して下りたる人々にはあらず顯時朝臣
の常陸に下られしはいつ頃なりしやたしかにはSひ
がたけれども延元三年の秋親房卿の下り給ひしをり
入道は年わかくもおはさず軍などしたまふべくもあ
らざらし故一族の中にて中のわかく軍にもなれ
たる人なりしを大将にのみて具足して下りたまひ
つらんとおもふなりまた具信朝臣は是もいつ頃下ら
しとはさたかならされども常州に下着の結城親
朝に送られし狀に去十月廿五日令下着當所了*
云々歳内は依深雪及始合戰候明春早々退
治當國 可罷上候と見えるを思へば親房卿

にはお

親房剛は延元三桃元問答

「妻等の文書

文二〇五

陸奥の御子証説 など見えたるはすべて皆後村上 此事は宮の小田城より大城にうつらせ給ひし

五

向ありしなりまた當時の物共に奥州宮 陸奥親王 推舉にて親朝を上總國の守護職に補せられしことあ

られ給しかどもそば天授中のことにて

結城

も外にてはをさく見及ば

頃はいまだ無品親王にてお任せしなりまして尊良の一宮は

ざるうへに新葉李花などにも絕て其けしきたに見え 當時諸王の御身にていまだ親王の宣下を喋らせ給ひ

されば裏書の説は是も傳聞を誤るなるべしまた奥國 しことだに聞えざるをやしかるに櫻害記にかく物せ

二年に小田城に入御ありし宮は大塔若宮興良親王に しことは結城文書などを見はつりてをかしく心えた

て尊良親王の一宮にはあらずことは阿蘇文書親 がひたるにて結城親朝が大藏權太夫より修理權太夫

房卿の消息の中にたしかに見へたるうへに奥州より に轉任せられしは興國元年の十一月の事にて其時の

入御としたるも妄説にて結城文書親房卿の歌の中に 口宣の結城文書に見へて宮の旨にはあらざるう

吉野御座候宮御一所今月一日 御下向候了又無爲へに大塔宮の小田城に入御ありしは明る二年の

之條返々目出悦入候と見えてまことは吉野より御下 夏の事にてありしなり其後同四年の七月に親房卿の

城落居せしまではた 皆一品此御二方ばかりにて自餘の皇子

達の一品に叙せられ給ひしてとは聞えず親も暖

天皇のひまだ御子にておはしましける間の御覽に

て良の一宮にも大塔の若宮にもあらず北御門御幼

の御時より北畠顕家卿に具せられ給ひて二度まで

奥州に御下向ありしか後には陸奥太守にさへ任せら

給ひし故かく其國の名を御稱朓にも負せまゐらせ

たるなりまた當時後醍醐帝の皇子達の中にて當時は

やく一品に叙せられ給ひしは尊良親王筑後國住吉上 宗

良親王版たい宮とびて事を結びた

りかく御所の御うへを御在所にてかつ御稱

號をかきかへたるは當時の物どもに奥州宮一品家な

ど見えるは時所によりての御假名にて其實はた

ヾ尊良親王の一宮御所のみの御事なるよしをし

らせたる也されども此一段の事跡どもはすべて作者

の附會杜選に出たる事共なれば一つとして其實を得

たることなしそはまづ尊良親王の一宮家良親王と

供に井伊か城に入御ありしといふ事只かの裏書にの

み見えて當時の物どもに影記者証統また櫻害記の説のうけがたきは
とおもひなりたるより結城文書などに奥州宮となう

たゝ裏書の牧宮を懐良親王に附會したるばかりには すが見えたるも
是また外の宮にはおはさで件の一宮

あらで他の宮の御うへまでも狛かの裏書の説に據て にておはせしに
はたがふまじくおもひ定めてつひに

さまに附會して一段の事跡を偽造したる事あり 件の御三所の御事を
た一ノ宮御一所の御うへに附

裏書に尊證法親王尊良親王 一宮着御遠江國井伊城 してあらぬ一段の事跡を造出して宮の始遠州よ

とあるを用ひずして一旦は李花集に據て家良親王の 奥州に御下向のには尊良親王の二宮とSひ奥國

御船は遠江國白羽の湊に着たりとは書あらためつれ 二年奥州より常州小田城に入御の處には奥州)宮と

とも初より據たのみたる裏書の事なればさすがにま ひひ其後同四年關の城より旨を出されて結城朝親

た捨がたくなりたるまいに關城書に竹園御座大將顯 を修理太夫に任せられし處には一品の宮といひてそ

時~朝臣經廻之間加斟酌許とある竹園は阿曽文 れより後開の城より奥州にたち帰らせ給ひ宇津峰の

書

の説をも取ませている所は外にたしかなる傳説

ありてかの裏書の説のみに據て杜撰したるにはあら

ぬやうに書ざらさんとしたる也さてかくかしてく

はかまへたれ共親房卿の船の着たる地名をしらずし

常陸國」とばかりかきたるは同時の事に詳

略同じからざる故なほかの裏書に入道一品船着三常

陸國記"とあるに據ることしるくして其竊據襲所

の痕つひにかく露見しやすきにはいれるなり

東をさして常陸國なる内海につきたる舟

其のつきたる所をしるし置たまひたる・

おか

書に二〇四

親土に附したる其杜選い痕を掩はんとてかく他肥後文獻叢書第二卷

見えた大塔宮李花集に見えたろ興良親王の

御事なれども本書にはた 竹園と斗ありて何がしの

宮とも御名をしるされたることなければ櫻雲記の作

者は李花集は見たれども阿曽文書を見ることなけ

れば件の竹園の興良親王なるにはおもひよるべきよ

しもなくたいかなる宮にておはすにかといぶかし

くのみおもひるたる處にかの裏書に尊良親王の一宮

家良親王と共に井伊が城に入御ありし事まで見えて

其後はSかならせ給ひしとも見えざる放さては件

の竹園は一宮尊良親王の一宮にてこそおはしつらめ

器にる妄説にて彼日記裏書より外にはまだしか引證すべ

たしかなる物とてはなかりしなりすべて櫻雲記に

東國御下向の御船共の難風に逢える事をいへる一段

はまたく元弘日記裏書と新葉 花などにて書

ものにて八月十七日解纜九月十一日遇 暴風とある

などは正しく彼日記裏書に八月十七日解九月十一

日於伊豆崎一過大風」とあるを取て於伊豆崎の四

字を略して大風を暴風と書かへたるばかりなるうへ

にまことは共據所としたる裏書の時日も正統記など

の實銖とは相違したることもしらざりしと見えて正

統記には其をりの事を九月の初纜を解きしに十日頃

の事にや上總のちかくより雲のけしきおどろおどろ

しく海上あらくなりしかば又伊豆の崎といふ方にた

ゃよはれ侍りしにSと、波風おびたしくなりてあ

またの船行がしらず侍りけるに云云と見えて伊勢

の津より御船を出されしは九月の始にて八月中頃の

ことにはあらず此をりの事は正統記の作者親房卿も

陸奥宮の供奉してしたしく此大風に逢えまひ

たるとなればかの裏書の説は後に傳聞の誤たるまい

を書出したることしかるべし其上海上の事は日数

株元問答

の説をば用ひずして新葉李花下らせまし け

に着たるよし聞へし

し侍りしに天龍な

らうしてしろば

李花集

て島院ふ所に涙にうちあげられ

111011

どもたしかにしかも實録なるを引出して裏書の

かならぬを補ひたるといふばかりにはあらず作者

本意はこれが竊かにかの裏書の説に據て牧宮を懐良

まらず湧きよせ侍りしに夜もすがら涙を引出して物せして

とは裏書には親王顯信卯等歸着勢州一澄法親

王尊良親王一宮御遠江國井伊城と見えて

井伊

船ともの着たりし地名などもさだかならぬ

おくにて大船などの

つくべき所にあらす

書ざまなる故新葉李花などの地

れなずや々る

て風な

て元

だなな

三

とりとかに集

互か

ば

奥國へ舟伊秋葉

などの説の後村上院

御花

説

集

に

をさし定めてはひひがたけれども八月十一日に伊勢より出されたる船どもの三十日あまりを経てやうやう上総の地ちかくまでおひたるといふもあまり久しく日数をへたる事なるを櫻雲記の作者さるうたがはしきふしにも心つかでかの裏書にのみに據て物したるは世に正統記といふ實録のある事をばつやつやしらずしてありしなるべししかるにまた櫻雲記に義良

親王の御船は伊勢の篠島につき宗良親王の御船は遠

江國白羽の湊に着たるといひたるばかりはかの裏書

に據られて阿蘇文書なる大宮司に下されし九月十八 良と申しいことも當時五辻宮とまうし候こともしら

日の綸旨も十二月卅日の分旨も皆延元三年に出され ざりしうへに御としの程をもわきまへずして其頃此

たる物ぞと思ひなられし放さては九國に御下着は延 宮の御行へさだかならざりし放さきに大塔宮の山伏

元四年の着なりしとはおはしめし定られ候よしこは の姿になりて熊野のおくにかくれ給ひし事などおも

さるたしかなる設左ともをえたまひたらんにはしか ひあはせて大かた此宮もさるさまにて吉野になどか

おぼしめし定められたらんもげに御ことわりのやう くれたまびつらんと思ひやりたるとやがてまこと

にも思ひ給へられ候へども愚拙が日頃考へ持たる處 しやかに書出したる杜撰の妄説かと竪え申候また櫻

より申候はゞさしより其御證左のみ給へる太平記 雲記の懐良親王の御事をひひたる一段は元弘日記裏

櫻雲記などの事どもいづれもひとおぼつかなくのみ 書に桃園宮着御四國牧宮御四國可有御下

覺え候故まづ其よしよりことわり置申べく候懷良 向とるに據て附したる說にて元弘日記裏

王は後村上天皇の御弟宮に當らせ給ひて此御門は延 書の趣にては桃園宮も牧宮も前後に共に四國に着御

元四年の八月御歳十二にて御受蟬ありしとなれば死 ありしが二重ながらそれより直に鎮西へ御下向ある

元元年にはいまだ九歳の若宮にておはしまし候なり べきとのさまに聞えてあながち牧宮御一所ばかり鎮

しかれば親王は其頃おほくとも七つか八つかの御と 西へ御下向ありしとも聞えざるに櫻雲記の作者此二

しにてぞおはしけむさる幼稚なる若宮のにはかに山 宮の御事は本よりいかなる御かた~なりしとは知

伏の姿となりて山深くたちしのばせ給ひしといはん らざれども牧宮着御四國とある下に引つきて可有

はあまりにゆくりなく似つかはしからぬことなる上 御下向鎮西とあるに依て頃諸皇子たちの中にてま

に此宮を阿曾宮とうし候は九國に御下向ありて後 さしく鎮西へ御下向ありしは懷良親王ならではおは

のことなるを當時はやく阿宮とうし候やうに出せざりし程に桃園宮の御ことをば人しれず取すてい

たるなどをおもへば太平記の作者は此宮の御名を懐牧宮ばかりを取出して懐良親王の御うへに附した

11011

桃元問答

1101

征」と見えたるなと

代繼神社祭神不分明候社記に紀貫之は靈共

御座候へとも是は蒙味無稽の説に而可有之山城名所 征西將軍宮の始て筑紫に御下向ありしは延元四年の

圖會かに久我代繼神社貞觀 御座候得共祭神は何 春のことなりしと定められしよしは太平記後醍醐天

共無御座候何を御見當り被成候儀は無御座候哉叉上 皇還幸の段に阿曾宮は山伏の姿となして吉野の奥に

南部の乙姫宮に三位大宮司の筆にて奈我神社と鳥井忍はせ給ふと見え櫻雲記延元三年九月の條に懐良親

の額に標し被申候何を據有ての事に御座候哉若御

西將軍 牧宮俊爲

王院號

一詫摩の下向の年紀

候

田中元勝樣

ナシ

木桃 水

弘化三年丙午四月

一圖師日置私の手に入候事は文政四年に而一昨二年

江田村の鷺原三寶寺の境内より堀出候由紫銅の板に

彫付ありたるよし銘中央に玉名郡人權擬小領少初位

下日置郡公右に開白七道西海道太宰府左に治地高野

山一向に解し不申候あなかち墓誌とも見え不申御手

に入候も此通之銘に而御座候哉日置は山鹿郡に有之

玉名の分田村と界居申候江田よりは餘程隔り居申候

江田請の間に日置と申小村に而も有之候か又被仰下

候河原の畠中より掘出候鰐口Sつかたの河原にて御

座候哉御知せ可被成下候

味被成置候は御知せ可被成下候

一和名抄の名いつ頃廢申候哉其後鄉庄之唱御座候

飽田郡に而立田鄉鹿子木庄池線飽田郡河尻庄の二

鄉三庄詫摩郡に而は本庄の庄安富庄神倉庄の三庄の

如き安富庄は鎌倉の時分より出居申候神倉なとも詫

摩文書に多く出居候其外御國中之庄名鎌倉時分より

出申候も御座候 いつの頃立られ候哉左候而今以郷村

帳公義之被差上候節は右之郷庄に而手永に而は無御

座尤右之郷庄は御先代奮稱により新に立られ候共に

而は無之候哉中山か井田衍義に御先代は組と申候と

御座候へとも八代の高田手永の植柳大福寺西馬下の

三村は御先代より之代々庄屋に而少々見圖帳様の

残り居候に慶長十二四年之帳にひつれも八代郡高田

郷之内何村見圖帳と御座候しかれは郷庄の唱にて御

座候儀違は無之様聞え申候組と申に何を確據御承知

共は無御座候哉御知せ被成下候様奉希征西將軍宮筑紫に御着御四國
之下向鎮見申候しかれは蔵屋敷も遠く隔り候而は有之間敷水

島は深川よりは壹里除之所大城小城といふは城に面

無之山腹の岩を穿て崛としたる所にて御座候米原に

床と申焦米と出る所有之を不動倉の跡とも申候

得共是は米原長者か米の跡にては有之間敷哉扨乂

今の隈府の城今の正観寺村の内守山村の地に築かれ

し故守山城といひたる由又隈部城共隈部舊は城
下の名にてありしよし洞然長狀阿蘇文書抔にも隈部
城と所々に御座候今川了俊か書簡に隈目城と有之も
傳聞え誤に而隈部城の事なるべし阿蘇文書志賀文書
に菊池山城詫摩文書小代光信申狀に菊池渡山合戰
此渡山は正観寺村の隣村輪足村昔は其あたりの村
名にて輪足村の東北の山即ち城山なれば是も今の隈
府城の事と被存候又阿蘇文書の惟澄注進狀かの中に
菊池本城合志入替云々とあり是は深川の城なるか深
川は小勢にては保守なりかたくいつれの代にか菊池
山に築かれ悪城とし常には便利よきゆへ深川に居
住し根城とし置れたるにては有之間敷哉誠に至愚之
僻説に而御座候得共得貴意試申候御再考所仰候
一縣主稲置無二職の名義職掌御書記被下度奉願候
一保は中昔より餘國にも郷荘と可唱所に某保と稱す
肥後·
甘九ヶ不分明

村邊も九ヶ領し申候

モ

一被仰下候内久井原村は東郷彌之屬村石貫村は玉

名郡玉名庄之屬村に而御座候大野庄の屬村は高瀬中

一詫摩文書中に年頭職下司職圖師職なと出居申候 S

か様なる職掌にて御座候哉乍御面到御書記御教示被

成下候様奉依賴候

一菊池武時受領の事私所藏の廣福寺文書人類に而寫

候處悪筆其上誤字落字分兼申候寄進状は菊池肥後守

あと御座候得共年月無御座候嘉暦二年詫摩文六え

たる書簡には武時肩菊池次郎と御座候得は其後受

領有之たると相見申候武重も寄進状に大智和尚か書

入に菊池次郎武重自筆之狀元弘四年甲戌正月廿五日

到来とあるときは是も其後肥後守には任せられしと

相見申候

ること東鑑餘の物にも多く見え肥後にては玉名郡

の伊倉庄を伊倉保益城郡の津守郷を津守保と云小代

詫摩か文書に多く載て其外の郷には一ッもSはす

此二所迄保と稱す其保と名つくる意は命に五家相

保、五家爲保、比隣相保祐の義。 即全五人組の事

て夫より起たる名なりと今天草にて郷を大矢野

組久玉組なといふことし

1100

桃元問答

一菊池城院の院は穀倉院の院と同義にて城に屬たる

兵器根糧なと入れる倉庫を建置れたる所に而今ひ

藏屋敷之由此鞠智城の跡何方共定めかたく候處

深川の城跡手陸キラキラ之地に而防戦守城には堅要

にも有之間敷候へとも水陸之便利よく唯異賊防禦の

爲に設置兵器糧備置れるには宜き地と相

一九九

寺方云々不依三位中参洛遲速急に可致上洛と

一將軍宮延元四年三月九州之地之御下着と心得居候

成は深く考候事にても無之太平記に延元元年十月簿 文言なり是は二年十一月三年四月の綸旨なりしかれ

天皇を花山院に押籠奉りし時懐良親王は 吉野 は其年其官軍を率て御上洛ありしと見究申候事御座

山中にかくると有之元弘日記の裏書の牧宮櫻害記に 候ゆえ五辻宮と三位中將とは御同人と心得得貴意候

は懐良親王註に號牧宮爲征西將軍と御座候着御四國 事に御座候又宮三位愚案にては延元初にもはやく鎭

從是御下向鎭西此文により阿蘇文書の讃州御下着可 西へ御下向肥後へも追々御往來廣福寺なとへも御參

有與州御渡海鎭西御船付御下之事急に可被召進故實 詣有之たると覺申候寺の文書之趣を以考候得は大智

之仁於奥州などの文櫻雲記などの三年十月の文とよ か寺領の轉替を届いたし候を被閉食了と申沙汰文

く符合仕候間九州御下向は四年春と存居候事に御座 に而御座候將軍宮の別將軍にて未た九州の地へは御

候尤八月十七日解九月十一日遇暴風九月十八日之 寄り付もなく奥州より直に大隅日向の徒退治とし

綸旨と前後仕候得共將軍の宣下蒙せられ候事は九 御渡海其陣中より出されし沙汰にて候へは未た

月と見え申候扨四年春菊池に御入り有之阿蘇以下之

諸將御目見なとにも罷出公卿抔にも心安くなり宮も

御折合の上中二年にして興國三年より薩摩御征伐

一五辻宮小拙心得居候處に而は將軍宮とは御別人に

て九國の宮軍を催進んかため延元元年か前にもは

やく被差下二年に大隅日向の徒從ひらさる故御

退治有之其頃既に姓を賜り三位の中將にはなされし

なるへし阿蘇文書に十一月十六日参議奉文に大將

宮三位中將定被加催促歟中略 奥州参已近々云々又四

月廿七日の綸旨に奥州官軍上洛之間近日合戰最中な

へは存もひたす間敷折々の事に而上將軍宮被

成御座候事故旨をこそ出さるへきに左兵衛佐の奉

に而宮三位の沙汰文を出されしは御賢考を難し候様

御座候得共奉伺候

世になき人の筆の跡を見るはかり幾年経てもさらに

かなしきものはなかりけりこにおほち桃水翁の

にし弘化三年の春のころより同き夏のはしめまでわ

か肥後の内にてあかりたる世のさたかならさるふ

しくを田中元勝とかたみにとひもしてたへもし給

へるものへちりほひのこれるかあるなるを冬こもり

せるつれ にとうていよみおかへつるにひとむ

かしのしのはれてせめてはとかくとち文とはなしつ

さて何とか窓の名をつけてむとかうかへにかうかへ

てもさるへきふしも思ひよらねはたいに桃元問答と

かいつけてをさめおくことはなりぬころは明治の

五年とひふとしの霜ふり月十日あまり五日たちはな

のまさのりしるす

桃元問答の序

肥後文獻叢書第二巻

142

野田三郎兵衛勝一

-野田一溪種信

當理流小具足及伯耆流居合

-村上大右衛門

-村上八郎右 衛門正行·

村上平内正勝

始學于新免弁助

○村上平内正雄

村上流系圖

寺尾鄉右衛門勝行

六男

-新免弁助信盛

五男

寺尾加賀助勝明澳洲”

四男

寺尾藤次玄高

五石

三男

寺尾新助勝冬~祿二

二男

——寺尾左助信形

橘子家相續

C寺尾藤兵衛信行

一

志方半兵衛之經

◎于家相續

——志方半七之鄉

二男細田家相續

三男

田 七

-志方彌右衛門之只

四男

志方右 角

五男

-新免弁之助玄直

村上平内正則始數馬

尾權五郎後號徒山

-高田十兵衛

-井田仁九郎

-曽根權三郎絕

村上貞助

-財津久左衛門

天保十五甲辰歳孟冬 友成正信識

一九七

或曰、村上平内正雄者、學兵法於新免弁助之門、其派存于今者二家、子今作武藏流傳統系圖、而外之者何耶、曰、余嘗聞正雄學兵法於弁助師之門久矣、藝既成、以爲天下唯師勝己也、心竊害之、乃携四尺餘木刀、擊其不意、師徒手奪其刀、叱而逐其門、後數年、正雄授劍法於人、師之姪志方之經開之、以書責其僭、正雄答謝曰、浪士無由糊口、用此自給耳、然所授于人、非所受師也、之經恕不問、是以遂興一家、名曰村上流、謝書存于志方氏、木刀存于寺尾氏、皆歷々于今、然而世人以村上大塚二家出于正雄者、混志方山東二家出于武藏

守者、而共稱武藏流、余恐眞偽之辨久而益廢也、

故作武藏流系圖、別附以村上流、揭之於二天記之

末、以示後人矣、

-野々村廣之助永昌

-岩崎羣次

-大塚又八常淸

-應野市十郎 |

右同

——大塚庄入昭博

村上大右衛門

右同

宮本伊織樣御報

五日

判

長岡監物六月預御文札致拜見候然は武州病中肥後守所より寺

尾求馬と申者附置被申御死去以後の儀も被申付

候樣體被入御念被仰越御紙面の趣肥後守所入可

申遣候仍胡桃一箱鰹節一箱(貳百入)被懸御意御

心入之段忝存候尚期後音之時候恐惶

長岡監物参る人々御中

閏五月廿九日

宮 本 伊 織判

肥後守様同名武藏病中死後迄寺尾求馬殿被爲成

御附置於泰勝寺大淵和尚様御取置法事被下御執

行墓所迄結構。被仰付被下候段相叶冥加私式迄

難有奉存候此段乍恐 江戸岩間六兵衛方迄以書

狀申上候乍慮外彌後貴殿様可然様被仰上可被下

候隨て書印の印迄胡桃一箱幷鰹節一箱(貳百入)

致進上候恐惶謹言

一筆政啓上候然は従

肥後文獻叢書第二巻

武藏流系圖

●新免武藏守玄信

始求馬助

寺尾藤兵衛信行

求馬助五男

新免弁助信盛十八歳誠

求馬助六男

寺尾鄉右衛門勝行

楊心流柔術兼帶後號如雪

吉田善左衛門正弘

右二藝及游兼帶始佐十郎

山東彥右衛門清秀

陽心流柔術兼帶

山東华兵衛

通

-山東新十郎清武

寺尾家兄弟之系

志方家兄弟之系

山尾甚助

小堀平右衛門

寺尾十郎助

志方司馬助之村

-淺井新右衛門榮廣

-岡島要右衛門好和

始圓七

-志方彌左衛門之只

始猪左衛門

-新免弁之助玄直!

之經三男同姓志方彌次右衛

繼後號虛白

-志方半七之鄉

之經五男

-志方半兵衛之經

之經嫡子

寺尾藤次男

寺尾藤次玄高

求馬助三男

一九六

記

二 天

一筆致啓上候去る廿三日私者罷歸候即刻貴札拜

宮本伊織方より長岡監物殿への昏面

安永丙申仲冬日

豐田景英子俊書印

此書本景英 祖父下川甫所卿、而雜在故書筒中、蓋

以說二天師之事者、當時已紛然無由取眞、是以得

故老證話則筆之、備其忽忘、已至父八水甫、以上

去先師之世愈遠、夫人區說不分眞僞、不辨溢美、附

會復滋多、於是採輯祖父所録讀之、其信而明、無

有若此者、因以爲、學此流者、不知先師之事、固

不可也、況於聽誤以爲眞者乎、是以抄書其所録、

加之以自所傳聞、書未成、會不幸病歿矣、景英 傷

其事不卒、且先師之跡、茅塞焉、故謹校之、如其

文猶未脱藁、唯取明事實耳、恐致毫釐過千里、是

以不敢改之、幸我同志之人垂裁焉、

右泰勝寺住持春山禪衲書之

也、病卒於肥之後州、時自書於天仰實相圓滿之兵

法、逝去不絕字、以言爲遺像焉、故孝子某立碑以

傳于不朽、分後人見之、嗚呼偉哉、

長岡監物樣人監 物一九五

宮本伊織様御報

判

日

長 岡 閏五月二御札拜見申候如仰今度武州病中肥後守所占6寺

尾求馬之申者付置被申養生被申付候<無詮

御果候儀御殘多存候武州病中御病去の以後の儀

迄色々被仰立爲御禮御慇懃の御紙面忝存候如何

様自是可被申入候恐惶

右返事

宮本伊織列

御中

五月廿三日

寺尾求馬之助殿被爲附置養生被仰付被下候得

ども定る定業故無甲斐相果候以後取置三日目の

御法事並墓所の儀迄被入御念可被爲仰付旨誠以

冥加の至難有奉存候武藏病中御見廻被成御取置

の砌野へ御名代被遣幷法事の節御香奠被懸御

意其上爲御燒香御寺迄御出被成候由諸事被入御

念候段忝奉存候爲御禮先以飛札如斯御座候尚自

是可得貴意候恐惶謹言

見仕候然;今度同苗武藏相煩候内 肥後守㤀!

於手、彰勇功於身、方年十三、而始與同州新常流

有間喜兵衛者、進而決雌雄、忽得勝利、十六歳春

到但馬之國、有大力量兵術人、名秋山者、又決勝

負、反掌間打殺其人、芳聲滿街、後到京師、有扶

桑第一兵術吉岡者、請決雌雄、彼家之嗣清十郎、

於洛外蓮臺野、尹龍虎之威、雖決勝負、觸木刀之

一擊、吉岡倒臥于眼前、而息絕、預依有一擊之諾、

輔弼於命根矣、彼門生等、助乗板上、藥治温湯、

漸而復、逐棄兵術薙髮畢、然後吉岡傳七郎、亦出洛

外決雌雄、傳七郎袖五尺餘木刀來、武藏臨其機、

彼木刀擊之、伏地立所死、吉岡門生含冤密語云、

以兵術之妙、非所可敵對、運籌於帷幄、而吉岡又

七郎寄事於兵術,會于洛外下松邊、彼門生數百人、

以兵杖弓箭、忽欲害之武藏平日有知機之才、察非

義之働竊謂吾門生曰、儒等爲傍八速退、縱怨敵

成群成隊、於吾視之如浮雲、何恐之有、散衆也、

似走狗追猛獸、震威而皈洛陽、人皆感嘆之、勇勢智謀、以一人敵萬人者、實兵家之妙法也、先是吉岡代々爲公方之師範、有扶桑第一兵術者之號、當靈陽院昭公之時、召新免無二與吉岡、分兵術決勝負、

限以三度吉岡一度獲利、新免兩度決勝、於是分免無二賜日下無雙兵法術者之號、故武戕到洛陽、與吉岡數度決勝負、遂吉岡兵法家泯絕矣、爰有兵法達人名巖流者、與彼求決雌雄、岩流云、請以眞劍決雌雄、武藏對曰、倆掉白厚而盡其妙吾提木戟而顯此秘、堅黠漆約、長門與豐前之際、海中有島、謂舟島、兩雄同時相會、岩流手三尺白刀來、不顧命術、武藏以木刀一擊殺之、電光猶遲、故俗改舟島謂岩流島、凡從十三迄壯年兵術之勝負、六十餘場、無一不勝、嘗云、不打敵之眉八字之間不得勝、每不違其的矣.自古決兵術之雌雄人、其算數不知幾千萬、雖然、於夷洛向英雄豪傑、前而殺人者、古

今不知其名、武藏屬一人耳、兵術之威名遍四夷、其

譽也不絕古老口、所銘今人肝、誠奇哉妙哉、力量

早雄、尤異于他、武藏常日、兵術手熟心得、毫

無私、則恐於戰場領大軍、亦治國豈難矣、豐臣大閤

公嬖臣、石田治部少輔謀叛之時、或於攝州大阪、秀

賴公兵亂時、武藏勇功名、縱有海之口溪之舌、寧

說盡"簡畧不記之、加旃無不通禮樂射御書數之文、

況小藝巧業、殆無為而不成者歟、盖大丈夫之一體

旋風打、連架打者、異僧之妄話也、粙裡青蛇飛而

下者,方士幻術也、劍客新免玄信、每一手持一刀、

稱曰二刀一流、其所擊又所指、縱横抑揚、屈伸曲

直、得于心應于手、擊則摧、攻則敗、所謂一劍不

新免玄信像之賛

羅山文集に出づ

二重臺上一尺計下一尺五寸位

四方一坪位あり

幅二尺計厚一尺三寸位

佛石高五尺餘

正保二乙酉年五月十九日

許克武藏居士石塔

兵法天下一

森の中にありさ七尺計り

篦田郡大津往盧杉馬場之南

臨機應變者、良將之達道也、講武習兵者、軍旅之

用事也、游心於文武之門、舞手於兵術之場、而

名譽人者其誰也、播州之英彦、赤松之末葉、新免

之後裔、武藏玄信號二天、想夫天資曠達、不拘細

行、盖斯其人乎、爲二刀兵法之元祖也、父號新免無

二、爲十手之家、武藏受家業、朝鑽暮研、思惟考

索、約知十手之利倍于二刀、甚以夥矣、雖然、十手

非常用之器、二刀是腰間之具、乃以二刀爲十手之理

其德無違、故改十手爲二刀之家、誠舞劍之精選也、

或飛眞劍或投木戟、北者走者、不能避、其勢恰如

發强弩、百發百中、養由無踰于斯也、夫惟得兵術

一九三

兵法天下無雙、播州赤松末流、新免武藏藤原信

二天道樂居士碑正保二乙酉暦五月十九日於肥後國

熊本卒、于時承應三甲午暦四月十九日、孝子某

建焉

碑銘

勝二刀、誠是非妄也、非幻也、庶幾進可以學萬人

手敵也、若椎而上之、則淮陰長劍、不失漢王左右

之、以小譬大、豈不然乎、

一末々什物となる古き道具所持せず

一我身にひたり物いみする事なし

一兵具は格別よの道具たしなまず

一道においては死をいとは思ふ

一老身に財寶所持もちゆる心なし

一佛神はし儒神をたのまず

一常に兵法の道をはなれず

一世々の道そむく事なし

一身に樂みをたくまず

一よろずに依怙の心なし

一一生の間よくしん思はず

一我事において後悔をせず

一善悪に他をねたむ心なし

一何れの道にも別をかなします

一自他共にうらみかこつ心なし

一れんぼの道思ひよる心なし

一物事にすき好む事なし

一私宅におひて望む心なし

一身ひとつに美食を好ます

獨行道

肥後文獻叢書第二卷

葬の時、一ッ雷鳴しことは、如奈にも其例な

きにしもあらず、細川右京太夫勝元、或は山名

右衛門佐宗全等、葬の時、如右有し應仁

記に見えたり、必豪傑の死去葬禮には如是事有

と云へり、

ふ、

玄信例

一同五月十九日、千葉城の宅にて病卒す、歳六十二、

武藏遺言にまかせ、甲冑をし六具を固めて入棺

也、兼て約なれは泰勝寺春山和尚導師にて、飽田

郡五町手永弓削村の地に葬す、 規式尤夥し、 春山

和尚の引導終ると齊しく、一天晴たるに雷聲一

あり、諸士の下部とも驚き、葬場大に騒動すと云

へり、其後寄之主廟参有て、弓削村の庄屋を呼出

し、墓の掃除等無可致被申附、米五十俵賜

新免武藏

正保二年五月十二日

一九二

と各様迄以書附:御理申候、兼て病者に御座

候處、殊に當春煩申候て以来、別て手足難立罷

成候此前拙者年久敷病氣故、御知行之望抔不仕

罷在候、先越中檥御兵法御數寄被成候故、一流

之見立申办度存、粗兵道之手筋被成御合點候時

分、無是非仕合せ失本意候、兵法之利とも書附

上可申旨御意候へども、書付迄に御合點如何敷

存下書斗調差上、兵道新敷見立候事、儒者佛者

之古語、軍法之古沙汰をも不用、只一流を心得、

利方の思を以、諸諸能の道とも、大形於三世

界之理明らかに得道候へども、世に逢不申體

無念に存候、今迄世間兵法にて身過候様に存候、

右様之事は眞の兵法の病に成申候事に御座候、

今申處末之世に拙者一人之儀は古今之名人に候

へば奥意御傳へ可申候處、手足少も叶不申候、

當年斗之命も難斗候へば、一日成とも山居仕、

二天記

與其文

一正保二年の春、武藏疾病也、同四月書を家老衆に

者もなく見えたり、是伯耆一生の卒也と、比

批判有しとなり、

一同五月十二日、寄之主友好主へ爲遺物腰の物幷鞍

を譲りあり、寺尾勝信に五輪い巻、同信行に三拾

五ヶ條の書を相傳也、其外夫々遺物あり、増田惣

兵衛岡部九左衛門と云者、武藏譜代の者の由にて

しかも手に相し者故、被召使可給由頼にて、亡後

に寄之主召抱らる、物事がたつけ極められて、自

の心にて書せらる、

一九一

其後 に靈岩洞に至り、静かに終命の期を丁せん

とす、然るに早世上に何角奇怪の浮説ありと、寄

之主聞し召し、放鷹に託して岩戸に至り、武藏を

諫めて誘ひ、千葉城の宅に帰りぬ、爲介抱寄之主

の家士中西孫之允を差添置る也、

宇右衛殿

監物殿

式部殿

玄信判

宮本武藏

四月十三日

死期之體、世上へ對し蟄居候事被仰付候様に、

御取成可被下候、 以上、

却て我を罪に陥るにあらずや、思ふに渠か賊術

奈ぞ懼るに足んと云て門弟を返す、先年渠か清

十郎及ひ叔父傳七郎とせし時は、我期に後れ凝

滞して勝之、這回は是に引替、我先達て行へしと、

鶏鳴より獨歩し、洛を出る路に八幡の証あり、因

て思ふ我幸に神前に来れり、正に勝利を祈るべし

と、証壇に至てて鰐口のを把て將に打鳴さん

とす、忽ち思ふ我常に佛神を信仰せす、今此難を

憚て敬觽すとて神夫受めや、吁怯しと、即ち共釼

を措て孜々として壇を下る、慚愧汗流して踵に至

る、直ちに馳て下り松に至る、夜未明寂々として

松蔭にイむ、暫く有て又七郎數十人引卒し燈を提

て来り云、定て武藏又遅滞して期に後んこと必せ

りとて、松根に近く時、 武藏待得たりと高聲に呼

大勢の中に入る、又七郎同く合んとす

る所を、又七郎を眞二つに斬殺し、徒黨の者共周
章切懸る、或は鎗を以て突掛り、弓にて射る、共
内矢一筋我袖に留るのみにて、幸に疵を不蒙、我
前後左右の者とも斬崩し追れは、大勢崩れる
息に蹈留る者もなく狽し、竟に我全勝を得たり、

殿の膝本につかと座し、我幼少の時蓮根と腫物
致し、其痕有て月代難成、惣なり、岩流と勝負
の時は、渠は真劍我は木刀なり、真剣にて先を打
しならば跡あるへし、能御覧可有と、左の手
にて燭臺取、右の手にて髪を掻分け、頭を顔に
突麗る、伯耆殿後に反りて見え不申となり、
と御覧有へしと云、成程待度見屈申たりと、其時
に立て燭臺を直し、本の座につき髪掻撫て自若と
して在り、簀に一座の諸士手に汗を握り息する
一或年正月三日の晩、御花畠に於て御謝の時、各
座列にて武藏も在り、規式未始、潜かに整有、然

るに志水伯耆殿于時大組頭なり、上座より武藏

に云く、貴方先年岩流と勝負ありし時、岩流先に

打たる由風説如奈、共通りの様子にて有りしやと

らる 武藏とかくの言なく立て燭堂を取伯耆

武藏自誓の書の中に、佛神は尊し佛神を不頼と

あり、狩奥に出す、此時帯せし刀三尺餘、大原

真守の作、今澤村家に侮れ惟伯額制

八大点真守一本

退て彼の前の事を思ふに、事にて心を不

と難しと云へり、

一九〇

一武藏居開靜にして、或は歌、 茶、 書書、 細工

等にて日月を過了す、 寄之主の亭にても連歌の會

度々有り、長岡右馬助重政森崎立三等執筆有り、

連衆物聲次の間に聞ゆれども、武臓の物聲計り一

向なかりしと、其寄之主の近習申し合へりとな

二天

日本開山神明宮本武藏政名,

赤松にて源氏

書等にて不見

政名と云たるか不詳

一鹽田濱之助と云者、棒捕手の上手也、 忠興公より

五人扶持拾五石賜り、諸士に指南す、或時武藏を

相手になし度由を詩人、武藏直ちに短刀を以て對

す、濱之助は六尺八寸の棒を持て立向、 武藏濱

之助か棒を振出さんとする頭を押へて不爲、

又振出す後を打つ、武藏云、吾無手にて居るべし、

吾間の内に足蹈入れば之助可爲勝と、濱之助

大に怒て棒を捨て手捕にかくる、武藏間の外より

是をつきたをす、依て間の内に寄く事不能、

依て濱之助拜伏し流を改め門弟と成んことを願

ふ、武藏則ち門弟とす、濱之助棒捕手の上手なる

を以て、門弟中に是を習さしむ、世に武藏流の棒

と云は、鹽田流の事也、

此名流

と所にし、勝負を決せんと約す、然るに我門

弟來り告て云、又七郎は公を父叔父の仇とす、清十

郎以来の門弟大勢を引卒し、公を挟み討て仇を報

せんと企る由を聞ぬ、是公死地に着也、誠に危さ

所也、願は我々も相從て倶に拒之、武藏云、各數

輩を引出て戦闘に及ぶ時は、是徒黨を結んて戰を

催すなり、是公義の固く禁止する所なり、慎ます

んば有へからす、若し一人も從ひ来る者あらは、

一八九

一武藏或時打話に、事にて心を不變こと實に難

し、先年吉岡又七郎と洛外一乗寺村藪郷下り松

り、或時寄之主の差物竿は如何ためして可然哉と

有しに、武藏云、竹有之は出し玉へと、寄之主近習

に命して頃日知行所玉名郡より能竹を取寄せ置た

り、是へとて則近習もち出、武藏竹の根の方を

把り、椽端に出て強く打振る、其勢にしはくし

て中より割るいもあり、節より折るいもあり、數本把て右の如くして不折を、是か能候とて差置ぬ、寄之主感稱有て、是はたしかなる試なれとも、貴方の如き力量の人にてなければ、此試出来ましと笑へり、

寛永九年忠利公肥後に御國替にて、 武藏は十一年に小倉に来る、而して正保二年の五月十九日死去なり、忠興公は同年十二月御逝去なり、武を憎み給ん、已に其日の號合嚴重なるを以て知るへし、譬ひ門弟恨とも君命を背きて師に最負せん、又勝て後止めを刺こと怨敵の所作也、渠と我と争ふ所は、唯劔術の手技を比ふるのみ、何を以て怨み憎み、勝て後刺殺さんや、我若渠かに罹らば、忽ち兩段とならん、然とも渠一旦我木刀にふれて薨ると雖も、若再活ることを得ば渠に於て幸ならずや、既に先年吉岡清十郎と勝負を爲せし時も、木刀を以て撃之、清十郎息絕るとども後甦活壽

に於て幸なり、小次郎不幸にして我手に死する所、

誠に以て可惜也、又島原の軍中功なしと、我壯年

より軍場に出る事凡六度なり、其内四度は先登す、

則感狀證據あり世知る所なり、島原賊徒征伐の時

は、我始終忠真公の御側に陪して自ら手を不下、

攻擊の籌策をす、明らかに幕下の諸士見る所な

り、何れ區々の小功を貪らんやと云へり、誹逡

巡として去る、

肥後文獻叢書第二卷

り、後鎧人と號すとあり、何國の人と云と未考、

宮本武藏政名父は無二齋と云、十手刀術の達

武藝小傳に、武藏門弟に青木城右衛門と云名あ

戡一本作織

一武藏或時興長の亭に至る、詰合の者ども何れも玄

關に出迎ふ、武藏笞段を上るとて足元よろめき、袴

腰に手を掛けやつと聲を出して上る、興長主の士

山本源五左衛門進出て手を添可申哉と云、武臓よ

しょし夫には不及と云て通りぬ、或時一丁目八百

屋町に火事有り、町幅狭き町に屋根より屋根に梯

子を打渡し、其を走り通る者あり、下より見者、

何者成と驚く計りなり、何れも誰と云ことを

不見知後に武藏なることを知り、平日氣を包

み極老體の如く、既に興長主の亭にては脇より手

を添んと云程の體にて、又如斯輕捷なる事あん

平日供廻りは侍六人程、鎗、挾箱、馬な曲、大

組頭は今云備頭なり、 門弟には長岡式部寄之主、

澤村宇右衛門友好主を始め、諸士千人に及ぶ、寺

尾孫之允勝信同求馬信行、此兩人に流儀相傳あり、

孫之允後夢世と號す、

臓程の者の何如斯小慮を思んや、

1くく

有て、武藏と彌四郎と密かに御前に於て其手技を

比へしむ、尤互に勝負の批判致すへからすとなり、

近習も除けられて、御腰物持一人差置れしなり、

扨兩人木刀を以て立相事三度、彌四郎曽て勝利な

し、武臓も御前故強く繫ことなく、唯技を押へて

働かせす、忠利公御工夫を回らされ、御自身に

も御立相在しかとも、一向御勝利なし、依て書

玉ひて、如斯異なる者とは思し召れさりきと感

稱し玉ひ、夫より二天一流を御修行あり、其道に

御器用有て追々御相傳を受けらるなり、寛永十

八年二月命有て初て兵法の書三十五ヶ條の覺書を

録しててて差上らる、于時三月十七日忠利公御逝去

なり御歳五十四、御法號妙解院殿臺雲宗伍大居士、

一氏井物語に先年武藏廻して江戸に在し時、柳生

家の士大瀬戸隼人辻風何某と強力の者あり、武

臓!勝負を爲んことを請ふ、武藏心得たりと立向

ふ、大瀬戸進んて打んとす、武藏其先を擊、大瀬戸

立所に倒る、續て辻風打て懸る如何爲けん辻風

ろに斃れ、椽の先なる石の手水鉢にて背骨を打て

氣絕す、其後病て遂に死すとなり、 是は書院の内

一武藏岩流と勝負を決せしこと區々の評あり、或人武藏に謂て日、岩流と勝負既に決しぬ、然るに武藏止めを可剰に倉皇として退歸る、夫勝負は時の運にて優劣何そ懸隔ならん、又勝負の後、一應小倉に到り、興長主に對し禮謝し可去事なるに、即日歸する事の逆かなるや、 定て忠興公忠利公細川中務大輔立孝公も岩流を厚く遇し給ふ、是その御遺念なくんは有へからす、 家士の中にも門弟有て恨みを含み仇と成へしと、 是等懼有て敢て不近、後に肥後を賜りて幾程なく小倉に来る、扨父島原の軍中に何の功なし、幸に門弟伊織か軍功有て登せらるを以て是に凭りたるなり、以可笑、武藏笑日、岩流と勝負せし峠、國君何そ渠を助けて我

氏井は熊本新一丁目に居住す、子も柳生家に門弟となる、柳生流は神陰流上泉武藏守の傳な

り、疋田文五郎神保伊豆守學之、新陰と稱する

也、柳生但馬守一家を建ると云へり、

の事のよし、辻風と云者は豪兵にて、駿馬を脇よ

り走り懸り、平首に抱付組留る程の強力の者なり

と云へり、

一我等事只今迄奉公人と申候て居候處は、一家中

6 無之候、年罷寄其上近年病者に成候へは、何

の望も無御座候、若逗留致候様に被仰付候は、

自然御出馬の時、相應の武具をも持せ參、乘替

の一疋も牽せ参候様に有之候得はよく御座候、

妻子も無之、老に相成候へは、居宅家材等

我等身上の事、岩間六兵衛を以御尋に付、口上

にては難申分候間、書附懸御目申候、

一武藏肥後に逗留有へきことにつき、忠利公より岩

間六兵衛を以て御尋あり、口上書を以取次役坂崎

内膳迄達す、

一同十七年の春、忠利公の召に依て肥後に来る、于

時五十九歳なり、小倉より肥後に来る時、城外の

山に壽臧を建て、跡を残して肥後に来る、其後承

應二年四月伊織石碑を建て、其銘を春山和尚に請

ふ、此書の奥に出す、

連し、宮本伊織と云者、抜群の功有り、因て召抱

らる、其後祿二千石にて家老職となる、且つ忠兵

公の命にて武臟養子と成て奉仕す、 武藏は遊軍の

備なる由なり、

四後文獻叢書第二巻

一武藏肥後に来る以前に、氏井彌四郎と云者、柳生

家の頼にて肥後に来る、忠利公も但馬守殿より相

傳あり、一流奥儀を極められて、専ら柳生流盛也、

彌四郎も必多度御相手に出て御修行あり、武藏召

に隠して小倉より来り御國に留る、 或時忠利公命

忠利公より十七人扶持に、現米三百石賜り、御客

分にて座席は大組頭の格合なり、居宅は熊本千葉

城と云所に屋舗あり、

坂崎内膳殿

宮本武藏

寛永十七年二月

右者若年より心に懸、數手致鍛練候間、御に

おひては可申上候以上、

一武具の拵様、軍陣におひて夫々に癒し便利成事、

一時により國の治様、

一若年軍場へ出候事、以上六度にて候、其内四

度は其場に於て拙者より先を懸候者一人も無之

候、其段はあまねく何れも存る事にて、尤證據

も有之候、乍然此儀を全く身上の申立に致し候

にては無之候、

の事思ひもよらす候

ること昨日也、是を後の山、七の墓の傍に埋め

んと思へとも、我等持行事不能、つくづく思んに、

我等一荷の物は擔ふにより、此刀を以て父の死體

を兩段に軒て一荷とし、擔行埋めんとなり、 武藏聞て其言を偉とし、其志を感し、太た稱歎し、吾幸ひに止宿せり、二人して葬るへし、憂ることなかれと、死體の肩の方を武藏負ひ、足を童抱て山に行、亡母の墓と一所に埋め、石を立て誌とし、家に皈れは夜既に明たり、童懇に云、我孤頼母しげなし、客は暫逗留し玉へ、 武藏不便に思び、 汝一人此所に居住せんより、吾に従て来らは随分取立へしと、童云客に従ひ何方へも參るへけれとも、一生奴僕の身ならは參るまし、武士となり鎗を把馬に跨る身ともならは行へし、左なくは此地に孤居して、自由一生を過さんがまされり、武藏云、吾に從ひ來らは望の如く爲んと肯ふ、童喜悦面にれ、然は付參るへしと、彼一腰をさして進む、武藏云、何方よりも故障の事は無や、童云何方よりも故障なし、姊も有と云とも久く音信を絶す此事告るに不及、父此州屋我等父子にて造りたる

一同十四年、肥前島原の城に切支丹一揆楯る、忠

眞公出陣、武藏相従ふ、五十六歳なり、皈陣以後、

忠真公麾下の諸士の軍功を吟味ありし時、武臓召

一八五

一寛永九年、豊前細川越中守忠利公へ肥後國を賜ふ、

北跡を小笠原右京太夫忠眞公へ賜るなり、同十一

年武藏小倉に至る、忠眞公篤く之を遇し玉ふ、因

て小倉に留りぬ、五十一歳也、

伊織父は正法寺村の者と難とも、本州最上家

の浪士にて、此にて自然と農夫となれりとも

云り、伊織武藏養子と成、宮本を號す、又宮本

次郎太夫と云しも、武臓の親族にて無二の門弟

なり、當理流稽古有て、相傳の巻物みえたり、是

は豊前に於て忠利公三百石賜り召抱へらる、宮

本家の事に不記、

家なれは、何方よりも無構、但し跡に残すも無益

なりと、火を放て焼棄、武藏にて出行 夫より

國々を回し、豊前小倉に留る、後に小笠原家に
仕え、誠に如夙志鎗を把り馬に跨る身と成、子孫
相續して、今に豊城の諸士の冠たり、宮本伊織と
號す、

ひらめく、是家有りと思ひ、火をしるへに漸くた
とり着き見れは、ふき艸屋一軒あり、内に音つる
れは、あやしや童出て如何なる人と云、武藏旅
行の者なるか、不案内にて宿を不求得既に日暮
て如何とも爲かたし、何とそ一夜の宿を借んと云
り、童云此狭き艸屋、殊に我一人居りたに無く、
客を容る事不諧、武藏又、旅行の事なれは、如奈
一武藏常陸より出に至る、出羽の内正法寺原と云
所を通る、路の傍に十三四の童、泥鰌を小桶に入
て持つ、武藏是に向て其泥鰌を少し所望すへきょ
しを乞ふ、易きことなりと云桶を差出す、 武藏
云吾餘計には無用なり、少し得て足ぬと、手拭を
出て包んとす、 童笑て云、旅人の適所望せる

に是何そ惜まんや、桶ともに持行玉へと云て、不顧して去る、武藏怡然として受之、次日武藏曠野を経過し、不覺錯て宿を不得、日既に暮ぬ、往こと三里計り有り、跡に返れは四五里ならては村坊に不遇、如何せんと思ふに、遙か山陰に火

一慶長十九年、大坂陣武藏軍功證據あり、三十一歳翌元和元年落城なり、

肥後文獻叢書第二巻

體の所にても不苦と、頻りに請ふ、童ックくと見て、其元は前日泥鰌を乞し人にあらすや、 武藏驚きなるほと其者なりと云、童さらは内へ入玉えと、武藏座に着く、童小鍋の下を焚て柴茶を出さんとす、其生資聰明俊俏なり、 武藏云、如何なる人なれは幼年にて愛に居るや、父母は如何にと、童我等正法寺村と云處の產なり、父農業を癒し此野外に居住しぬ、父母歿し一人の姉も此所より三里外の農家に嫁せりと云て、栗飯の少し有しを

出し、夜陰秋風冷し、客は休み玉えとて、童も次

の間に入りぬ、 武藏不審なからもそこに寐たり、

草虫聒耳´白露袖に結ふ計なり、夜半過る比に、

刀を磨音切々として枕に響き睡覺ぬ、佐て思ふ扨

こそ盗賊の餘黨にて曲者よ、吾熟睡を待て害する

と不思欠伸す、時に童聞て客は何故睡眠せさ

るや、武藏云、刀を磨音耳に障りて不快うち覺た

り、童笑て云、客は剛強なる顔つきに不似臆病

なる人哉、假令我等利刀を以て殺さんとするとも、

此小腕にて如何程の事をせんや、武臟云、さあち

は何故刀を磨や、童云何をか包み可申、我父死す

る、武藏は絹の拾を着て手拭を帶にはさみ、上

綿入を着て小船に乗て出る、人は太郎左衛門

か家奴也、船中にて紙線をしてにかけ、右の綿

入を覆す、島には檢使警固の者を差渡さる、

其號合嚴重也、海巳の刻過に、武藏向島に到る、

島の洲崎に船を深めて、覆たるの綿人を脱き、

刀は船に置き短刀を差裳を高くかけ、彼木刀

を提け素足にて舟より下り、淺汀を渉ること數十

歩行(帶にはさむ、手拭を以て一重の鉢巻にす、

小次郎は猩々緋の袖なし羽織に、染革の立付を着

し、わらんじを履み、三尺餘の刀を帶す、備前長

光の由、甚た待ちつかれ、武藏か来るをは

見、憤然として進て水際に立て云、我は期に先達て

來れり、汝何をするや、呼汝後れたるか、 武藏

默然として不答、聞かざるが如し、小次郎霜

を抜て鞘を水中に投、水際に立て武藏か近つくを

迎ふ、時に武藏水中に踏留う、につこと笑て云く、

小次郎負たり、勝者何そ鞘を捨ん、小次郎益々

怒て、武藏か相近くと齊く刀を眞甲に振立、武藏

か眉間を打つ、武藏同く擊處の木刀、小次郎か頭

岩流は佐々木小次郎と云、此時十八歳の由なり、

英雄豪傑の人なりとて、武臓も是を惜みしと也、
富田勢源は五郎左衛門と云て、中條流を修し得
て、天下に其名高し、甞て眼病にて、後薙髪し
勢源と號す、弟治部右衛門と云に家業を譲りぬ、
覦九郎左衛門と云は、朝倉家に仕えしなり、
に中り立所に作る、初め小次郎を打太刀の切先、
武藏か鉢巻の結目にあたりてや、手拭分り落つ、武
臓は木刀提て少く立ち、又振上て繫んとす、 小次
郎伏なから横に拂ふ、武藏か拾の膝の上に垂れる
を三寸斗り切さきぬ、武藏か撃處の木刀、小次郎
か脇腹横骨を撃折て即ち氣絕す、口鼻より血流れ
出つ、暫く有て武藏木刀を捨て、手を小次郎か
鼻に覆ひ、顔をよせて死活を窺事也、而して
後遙に檢使に向て一禮し、起て木刀を把り本の船
に行き飛乘、自らも共に棹さして行事速か也、下
ノ關に帰り興長主に書を呈して禮謝す、其後小倉
に到り、興長主に忠興公の士何某と勝負せんこと

を願い、老役會議し、此事類願ひ不達して、又下

關に踊りぬとなり、

其日を定め、小倉の絶島に於て勝負を決せしむ、

向島と云、又舟島とも云、今又岩流島と云、豊前

と長門の境、小倉より船行一里、長門下關より

も同し里數なり、扨前H府中に觸有て、此度双方

勝負の贔負、及び遊觀を禁止あり、興長主武臓に

謂て日、明朝辰の上刻、向島に於て岩流小次郎と

仕合致すへき由を諭す、小次郎は忠興公の船にて

差越さるへし、武藏は興長船にて可被渡、武

藏喜色面に顯れ、願望せしことを謝す、然るに

其夜武藏去て迹なし、遍く府中を尋れども、行衛

不知、皆云く渠れ此間逗留の内、小次郎か技藝妙

術なることを聞及び、隠してたりと云り、興長

主も如何んとも爲かたなく、茫然として臍を噛に

至る、稍有て興長主家士に命して、我ッラ(是を

接するに渠懼れてるならば、何を今日を待た

ん、察するに渠心持有ことならん、先の日下關に

着て翌日に来れり、定て下關に到り、 夫より

向島に往んこと必せり、急ぎ飛脚を立べしとなり、

即ち飛脚下の關に至り見れは、果して問屋小林太

郎左衛門と云者の所に在り、 飛脚右の趣を告る、

肥後文獻叢書第二巻

宮本武藏

右返答す、扨翌朝になり日高なる迄、武藏寐て不

起、亭主太郎左衛門は、無心元思ひ、辰の刻に

及へと起し告る處に、小倉より飛脚來り、舟

渡の由を武藏に告る、武藏無〃程參り可申由返答

し、手水し飯を仕廻ひ、亭主に詩を以て木刀

を大きに削る、其内又飛脚來り、早々可渡由急告

佐渡守様

四月十二日

明朝仕合之儀に付、私其許様御船にて、向島に

可被遣之由被仰聞、重疊御心遣之段忝奉存候、然

共此回小次郎と私とは敵對之者にて御座候、然

るに小次郎は忠興様御船にて被遣、私は其許様

御船にて被遣と御座候處、御主人へ被對、如何

敷奉存候、此儀私には御構不被成候て可然奉存

候、此段御直に可申上と存候得とも、御承引な

さるましく候に付、態と不申上候て、爰元へ参

居し、御船之儀は幾重にも御斷申候、明朝は愛

許船にて向島へ渡候事、少も支無御座候、能時

分参可申候間、左様に可被思召候以上、

武藏書を呈す、其文に日、

二

二天

一岩流小次郎と云劍客有り、越前宇坂の庄、淨教寺

一石川左京と芸人、 武藏に因て道を學ぶ、 武藏江府

を別る時、像をして是を信仰す、共讃を林道

君に諦くて書之、羅山文集に見えたり、此書は奥

に出す、

一武藏江府に在し時、夢想權之助と云者、來りて勝負を望む、權之助は木刀を携え、武藏折節楊弓の細工有しが、直に割木を以て立向上、權之助會釋も無く打て懸る、武藏一打に繫仆す、依て閉口して去る、

一武藏江戸に至りし時、一傳流丸目主水が傳に波多野二郎左衛と云人あり、 武藏にし刺擊の理を改作爲んことを請ふ、 武藏其利を諭し技を改て一轉流と號す、 波多野後に入道して宗件と、技藝卓絕して世に其名有て、門弟に多しと也、

短刀を抜き、完戸が胸を打貫、立所に斃れしを進んで討果す、完戸が門弟等拔連れ各斬て懸る、 武藏直ちに大勢を追崩せば、四方に逃走す、 武藏優然として引去る、

二十九歳なり、長岡佐渡興長主の第に到り、興長主は父無二の介門人、其故に因て来るなりと、

曽て興長主に請て日、岩流小次郎今此地に留りぬ、

其術奇なりと承る、希くは吾手技を比へんことを、

公は無二か故有る因て憑み奉る者也と謎て願、

興長主應詰ありて武藏を留て、忠興公御聽に達し、

一八一

于時慶長十七年四月、武藏都より小倉に来る、

村の產也、天資豪宕、壯健類なし、同國の富田

勢源が家人に成て、幼少より稽古を見覺え、長な

るに及んで、勢源が打太刀を勉む、勢源は一尺五

寸の小太刀を以て三尺餘の太刀に對して勝つこと

を爲す、小次郎常に大太刀を持て、勢源が短刀に

對して粗技能あり、鍛錬して勝利を辨するに、

高弟各小次郎が太刀先きに及ぶ者なし、於是勢源

が肉弟治部右衛門と勝負を決して之に打勝つ、依

て勢源が許を缺落して、自ら一流を建て岩流と號

す、其法術尤奇なり、諸國を巡回し、名高き兵法

者に會し、數度の勝負を決するに、勝利を不失、

斯て豊前小倉に至る、太守細川三齋翁忠興公開し

召し、小次郎を停め玉ひて、門弟出来て指南の

一同九年辛丑春、二十一歳の時都に上り、天下の兵

一同五年庚子關原合戦武藏働き群を抜んす、諸軍士

知る所也、

一慶長四年己亥春、但馬國強力の兵法者秋山と云者

勝負を決して勝之、于時十六歳、

神道流を新常流と書るか、有間大和守學之、有

間流と云、有間豊前守と云とも聞えある人なり、

有間喜兵衛は其家族なるよし、常陸國飯長威

齋と云者、鹿島香取の神より技術を受る、天

眞正傳と書す、是神道流なり、

一武藏箕裘をて、藍よりも青し、慶長元年丙申

三月十三歳の時、播州の剣術者新當流有馬喜兵衛

と云者と、初て勝負を決して勝之、

新免は無二之介劍術を修得て、自ら新免と改

むと云、又吉岡と勝負を決して、日下無双の號

を賜ふ、此時より新免と改むとも云へり、未詳

或説に曰、慶長十九年六月、禁庭にて御能興行

有し時、其席に於て吉岡押〆の雑色共と口論し、

途に身を果すと云へり、

肥後文獻叢書第二巻

一同年南都賓藏院覺鑃坊法胤胤榮の弟子に、奥藏院

と云日逆の借あり、鎗術の達者也、 武藏僧に遇

ひ、鎗術を試る、僭鎗を以て立向、武藏は短き

木刀を持て立合ひ、兩度勝負を爲すに僧利なし、

依て武藏が技術を感賞して院に停め饗應あり、共

夜談話するに、巳に曙なんとす、 武藏去りぬ、

一武藏伊賀國にて完戸何某と云者、鎌の上手也、野

外に出て勝負を決す、完鎌を振出す所を、武藏

法者吉岡庄左衛門の嫡子清十郎と洛外道臺野に於

雌雄を決す、清十郎は真剣、 武藏は木刀を以て

擊之、清十郎忽斃れ息絶る、渠が門弟等板上に助

け乗て家に歸りて藥治し本復す、其後兵法を棄て

剃髪す、其後弟傳七郎と洛外に出て勝負を決す、

傳七郎は豪兵にて、五尺の大刀を持来る、 武藏

顔に其大刀を奪て、一打に撃之、立所に斃れ死す、

依て吉岡か門弟恨みを含み、 清十郎か子又七郎と

組し、數十人兵杖弓箭を携え下り松に會す、 武藏

又七郎を斬殺し、徒黨の者を追退け、威を振

陽に歸る、於是吉岡が家断絶す。

一八〇

二天記

一新免武藏藤原玄信、其先 村上天皇の皇子具平

親王の後胤、播磨國佐用の城主赤松二郎判官則村

入道圓心の末葉也、故有て外戚の氏姓宮本に改む、

又兵書等には新免と書せり、天正十二年甲申暦三

月播州に生る、幼少の名は辨助と、老年に及び

肥後に来り居住なり、立田山泰勝寺二世の春山

和尚に綴り、道號を二天道楽と號す、 流書に日、

我若年より兵法の道に心を悪て、國々所々に於て、

名高き兵法者に對し、眞劔或は木刀の勝負六十餘

度に及ぶと難とも、一度も其利を失はす、程踐

十三より二十八九迄の也、三十を越て跡を思ひ

見るに、兵法至極して勝たるには非す、自から道

の器庸有て、天理を離れさる故か、又は他の兵法

不足なる處にや、其後も深き道理を得んと、朝

鍛夕疎して見れは、兵法の道に遇ふこと五十歳の

比也、夫より以来は尋ね入へき道もなくして、光

陰を送る、扨兵法の理に任せて、諸藝諸の道と

二天記

一武藏父新免無二の介信綱と云、劍術を得、當理流

號す、十手二刀の達人也、將軍義昭公の御師吉

岡庄左衛門兼法と云者、洛陽の士、扶桑第一の劔

術者也、將軍の命に依て、庄左衛門と無二と雌雄

決せしむ、左衛門一度利有て、無二兩度かちを

得たり、因て無二に日下無双の號を賜はるなり、

一十九

赤松家の事は、赤松大膳太夫源滿祐入道性具、

嘉吉元年、足利将軍義公赤松の所領備前播磨

美作を割て、赤松貞村に封せんと爲らる、實は

其勢を減せられんか爲なり、滿私かに是を聞

甚憤怨し、同年六月將軍を招待し、忽ち弑

し奉り、播州旗山の城に還る、依て山名右衛門

佐持豊入道宗全是を攻む、同九月に城陥て満

自殺す、其後赤松家衰微す、 慶長五年關原合

戰の時、赤松上総介義祐石田三成に組し歿す、

武藏守系圖未考、

爲せは、萬事に於て我に師なしと書せん、一流を

實相圓満の兵法、逝去不絕、二天一流と稱するな

一岩流勝負のとは、長岡興長主其事を取計ひありし

故、今に精く聞傳る所なり、又正徳二年の春、豊

州小倉の商人、村屋勘八郎と云者八代に来る、正

剛之、岩流島の事を問、八郎委しく其事を

語る、勘八郎親族に、 小林太郎左衛門と云者、長

一先剛勝負のことは、數十度の事なれは、世説に謂

る所或は相手の遊び、或は別人の勝負、或は其手

技の違ひ區説多し、最も洩れたること多し、

一先師直弟老健にて、正剛にし物語有りし人々は、

熊府の士、道家角左衛門、後に徹水~號す、 正剛

剣術の師臟の父なり、或は代城の士山本源五左

衛門、後に土水と號す、 中西孫之允、田中左大夫

等の噺なり、是等は先帥にて、各形相傳も有

し門弟なり、殊に中西は先師病中に、松井寄之

主より附け置れし人なり、

一此書は預め先師一生の事を録す、家父卜川正剛若

年の比、老健なりし直弟の人々物語りに、先師徒

然の折節、自然打話有し事なり、或は先師自筆の

文書等抄出する也、

凡例

肥後文獻叢書第二巻

一此書の文體は、其人々の噺を直に書留置し覺書い

儘にて、文言を不」改書するなり、猶五倫の書等

中より、少々書加へ、 一書と爲す者也、

賓暦#乙亥年二月

橋八水正脩著

此書武公傳と有りしを二天記~改めて、宇野惟貞

に序を乞うて、全書と爲す者也、豊田景英校

一七八

州下,關の問屋なり、則先帥其宿せし所なり、彼

の家に老人あり、北者先師舟渡りの時、 稍人也、

勘八郎度々出會し話を聞に、毎回一言も不違と、

故に此度委しく知りと語る、

可枚擧、其特聞者、吉岡當理二流也、吉岡

雌伏、獨當理雄鳴于天下、當理者武藏父

無二之流也、無二用十手器、武藏代之以

短刀、長短刀並用者、自武藏始矣'武藏承

家業、傳其妙而不襲其爲、故其術至矣盡

矣、於是大成也、可謂善繼人之志、善述人

之事也、其爲人也、天資卓絕、通治國之體、

達軍旅之事、有文有武、以故所至諸侯、

不師之、實有相將之材、而不居其職、是以

宇貞識

豊臣氏之際、此技最盛、而各自名家者、不 安永丙申仲冬

人、能者從之、豈若衆家以其技衒于”

之以二段位、於是乎段位者定也、平相國諸懷而與之也哉、豊田氏三世、能學其

傳之鞍馬僧、鞍馬僧傳之源廷尉、織而後有 而淑諸人、今子俊校父祖所記、欲以示人、

中條神道神陰等諸流行于世云、而足利氏」亦善繼志述事者也因爲叙、

者段位之法也、公然擧以示

古自日神帶入握十握等之劍、而世蓋劍技

二 天 於其技也精、序

記 於其道也極、正直以持身、奇

變以應物、故術有三先五方、蓋三先者臨機

之先也、五方起焉、日本武尊始作之三段位、源幕府綫増|常國之船其元に参候間一筆啓上候去々年者三善權

太夫宿歸り申に付預舟候其已後此方よりも兩三度狀

を以申入候が相届申候哉貴殿も其元へ御引越之由本

國はうち捨何とて共元へ御越候哉

何々我等も年は寄申候へ共于今息災に居候今一

度懸御目むかしをかたり申度候何に而も用之儀承

度候三齋公军人衆其元に歴々御入候由承候とれ

御入候哉承候已上

高山加右衛門方より之狀届過分に存候頓而長崎へ

人遣候間從是返し可申候以上

天野屋太郎左衛門殿

五月十四日

長内匠

對馬樣殊に御懇之由可然口追付相調可申候隨分可被

入御精候於長崎萬御心入之段難申御座候口何方へ御

越口不仕以書狀も口我等も上り候故留主へ御無音

申口加賀守笨人分呼被申に付今程佐倉へ引越居當春

其許に參上仕貴殿御宿本 不存加賀守屋敷に居不得寸暇

以書狀不申入無晉心外に口彈明に而愛元口山かし面

談に相積儀申入度候恐々謹言

太郎左衛門様

尚令其方仕合能通承是又分満足候此元何事無御座

候間可御心安候内儀えも御心得可給候已上

其許かい物奉行に被仰付兵庫罷越候間一書分申候

先度者御子息御越候刻見事成やら給満足に奉存

候稍重而可申入候間不具恐々謹言

七月十四日

加藤主水正判

天野太郎左衛門様

五月廿三日

昭元判

一色内藏

一此狀便宜次第に肥後熊本へ慥に居申候様に憑存候

一此船戻りにひかにも白き砂糖五拾斤入に而も七拾

斤入に而も又ゆかた北絹之よき地候は、ニッロ取申

度候直段能候様御越憑申候代銀は此船頭相渡可申候

此船頭無如在者に候間用之儀申入候は、御引廻可被

下候於此地何にても用之儀承度存候委は此顕可申

候間不能多筆候猶期後音之節候恐惶謹言

一肥後守殿跡目少も無相違相濟申候由江戸申來我

等も大慶此事に候

一七六

柏原家舊記

1千五

段は去年於長崎井上筑後守様兩御奉行様え兩度迄御 良久不申通候處に口過分に存候今春口諸候由御苦身

訴訟申上候得ども 御江戸様に而不被爲仰付候得 無申斗候内に御訴訟口能御老中被聞名阿部豊後様同

忝可奉存候

左様御座候ば何程も走廻りも罷成申候黄糸口錢銀此 (原書損候而不分明誤脱之儘) 天野屋太郎左衛門とのへ

判

候尚友田源左衛門より可申也

六月十一日

立允 御爲見廻飛脚を差越殊手作之由に而瓜一籠五到來喜悅

已上

天野太郎左衛門

五月十一日

御奉行様

慶安元年子ば不成候由御意被成候間去年之冬長崎地下中より惣

御江戸に而井上筑後守様馬場三郎

代三人罷上り申

左衛門え参上仕長崎より御訴訟に罷上申候由申上

候得ば兎も角もと御意被爲成候處に又御兩人様長崎

え御下着被爲成候により御訴訟も不申上罷戻候得ば

地下中次第に及飢申候故何も御奉行様方長崎に御座

候得共御訴に罷上り申候御慈悲之御上より被爲聞

以上

召上被下候は普末代迄忝可奉存御事

長崎地下中惣代

一唐人船入津仕候に付通口共致才船を付させ口銭

銀子とらせ申候長崎地下中に而五八十人之者とも富

貴仕候而も地下中之御公役之為には罷成不申候間此

口錢銀子平等に被爲 仰付被下候者忝可奉存候御事

一長崎近年殊外詰り迷惑仕候去年より取分地下中身
上何共罷成不申候勿論長崎中に五八十人身上罷成申
者御座候得ども惣様は伐に去年よりひしと詰り何共
可仕様無御座候是は去頃異國船着津之砌随分身上に
不應御奉公仕候共通は井上筑後守様長崎兩御奉行様
高力攝津守様日根織部守様能御存知被爲成候若重而
御制禁之異國船萬一着岸仕候は、他國之御人數御集
り不被爲成候内に先長崎地下中之者走廻り可申候本
意に御座候處に唯今之體身上罷成不申候得ば心やた
けと奉存候而も走廻り罷成間敷候左様に御座候は
肝要之御奉公はかけ申候間如何様之曲事にも可被爲
仰付候第一指當其所に罷有不走廻候事迷惑に奉存候
然時はあわれ先條にも申上候御地子黄糸之割符口錢
銀子此三色以御慈悲被仰付被下候者難有宛乘
せ申御用等何に而も相調申候其上御船御座候に付船 ば長崎地下中有
甲斐も無御座奉存候左様に御座候得
子六百人仕立指上申候夫とても御扶持方は少も御請 ば唐船より黄糸
少宛積來申候此黄糸地下中之割符に

不申候其外地下中之者日夜相詰申御用承不殘御奉公｜被爲 仰付被下候忝可奉存候御事

相當之御奉公申上候然ば及近年去年以來取分詰り迷

仕候若又重而之御奉公申上力も無様に罷成申候得

一去年御制禁船參申候に付方々より御人數御集り被

一右如申上候御制禁船參り申候に付長崎地下中之者

致迷惑候其上 御公役に付船手岡手船子人足每年五

萬人餘出し申候就夫口錢銀子被下候得共二三年に

度町々へ廻り合申候得ば少しに而御座候間 御公役

之指合せに罷成不申候殊に阿蘭陀船には大分之公役

仕候得共資物より口錢銀少も取不申候間地下中之爲

には罷成不申候御事

一白糸之割符五 所久被下候內一所分長崎之被下

事

一長崎之町數六拾五町并家數三千七百軒餘御座候町

數之內四拾貳町は末次平藏殿御請地之內に而御座候

に付每年御地子銀御納所仕候殘る武拾三町は內町と

申候此御地子銀地下年寄四人之方之御納所申候然ば

長崎中殊外詰り迷惑仕候間此御地子銀御赦免被下候

は添可奉存候御事

乍恐謹而言上

一長崎地下中之者近年唐船之商賣は不仕殊之外詰り

天野屋太郎左衛門殿

仕候處に高力攝津守様日根織部守様馬場三郎左衛門

卯月十三日

一七四

外零落仕候條是以爲存知斗に御座候伺期後喜候恐惶

謹言

長崎仕少々に而も指遣度存候得共右如申入候當所殊之

門後文燃叢書第二登

形

惣町中印様御三人として今度長崎中之者共無殘處御奉公仕候

次第則 御江戸様之被爲仰上候間忝可奉存旨地下中

家々迄御觸被爲成候事

候長崎之家數之内貳百軒餘に而御拜領仕候殘る三千

五百軒餘之者共御拜領少も御受不申候其上御公役之

儀は勤申候條被聞召上被下候者忝可奉存候御爲成候左様に御座候へば長崎地下中此度御奉公申上

度奉存俄に御通船五拾六艘拵船一般に舟子八人一七三

柏原家舊記

より筋氣差發罷有候に付面當時引籠致養生候然は柏| 逗留之儀に而候條遣銀も御座有間敷候處奉察候何と

入共地御無事に御座候哉爰許相異儀無之候誠其地永

々御逗留被成候就夫當地惣中之儀に御座候得ば早々

以飛脚可申入候處に貴殿當地之御座候時分より地下

中彌逼迫仕候に付皆々乍存知も延引仕是耳命存候無

申入迄候得ども地下惣中普之者共貴殿壹人之以情力

訴訟相叶申候様にと朝暮之念願不過之候許永々

天野屋太郎左衛門様人々御中

判

態以飛脚申入候貴殿爰許御立之後竟に以書狀も不申

村田彦兵衛

末次判

博多屋與兵衛

八月十九日

貞次相濟し申上は慥成儀共に御座候向以面拜旁御禮等可

申上候恐惶謹言

曾根入左衛門様

極月六日

中村一無

一書分啓上候然は菊原如安高砂之出入跡先不存儀被

申上候に付御腹立之段御尤に奉存候右に貴殿御喜朝

之砌より爰元にて御手柄之沙汰隠れ無御座候に

か爲仕儀と被申中々可申上様も無御座候今度亦

不珍敷儀共に候得共濱田彌兵衛殿え如安引合口を聞

せ申候貴公高砂に而之御手柄無比類儀共被承仰天被

仕候就夫如安手前より我々兩人相賴被申候に付御理

り申上候處に御分別被成如安狀斗に而相濟し被下候

事千萬に忝奉存候尤如安へいか様共に書物させ進上

可申上候得共右に如申上通に御座候我々兩人相賴み

原金右衛門と中

原金右衛門と申候牢人親天野屋太郎左衛門と申者之唐高砂之城主生捕申候段書付を以御奉行所へ御沙汰被成被下候様にと柏原金右衛門貴様迄申入候に付彼太郎左衛門高砂城主生捕申候様子之儀を拙者へ太郎左衛門物語仕候通金右衛門に拙者申聞候に付貴様え可申入と存候金右衛門差出申書付之通咄承申候事久敷儀に而御座候得ば段々こまかに覺不申候へども書付を見申候へばSかにも此通に太郎左衛門咄申候以上

御手紙致拜見候然は已後は御物遠に存候拙者儀當一同五月廿八日に惣談合を以濱田彌兵衛同小左衛門同新藏雨かた町喜左衛門尾の道九郎右衛門對馬四郎右衛門我等共に七人おらんだ城え參日本へ歸朝仕候様にと色々詫言申候得共承引不仕候故我等一身之分別を以一命を究おらんだの大将を生捕縄をかけ召置候處におらんだ方より味を入申候間就夫脇大を五

人質に召連日本へ歸仕候其座中之内四郎右衛門は

本國に而對馬に被居候殘五人は長崎に居住被申候

らんだの一巻右之衆ならては被存知間敷候其外平戸

おらんだ藏に居候ふらんすと申通子其座中之事委

敷爲存知儀に候不及申候得とも此狀之趣長崎に而御

披露可被成候おらんだ一巻の通共に申入度候得共面

一おらんた右之仕方に而御座候間我等舟中之衆に種

々談合仕候得とも同心一人も無之候然とも彌兵衛を

とりか5五月五日におらんだ城へ禮に出武略をお

らんだの大將生捕可申と内談仕候處に舟中之衆聞付

肥前之國村田彌三右衛門平戸,町秘永吉左衛門兩人

以我等一人斗聢留置彌兵衛親子三人おらんだ城え

參候へ共右申合せ候手筈相違仕力に不及其儘罷戻り

被申候是又舟中に無其隱候事

肥後文獻叢書第二巻

天野屋太郎左衛門様

菊原如安判

八月十九日

一昨日は預貴札候折節他出仕候故御報不申上候然は

高砂に而おらんだの一巻貴殿御手柄被成候段不承候

由我等八城様に申候に付御不足之由候就夫村田彦兵

殿橋本惣右衛門殿被仰候は濱田彌兵衛殿高砂物談

承候由に付同道仕參貴殿御手柄之段此度具承届候右

には貴殿御手柄は不承候に付濱田彌兵衛殿斗之手柄

之様に承候由申候御手柄此度承御不足尤に存候乍去

我等方に如在候而何かと申る儀には無御座候

何も面上之節可申述候恐々謹言

猶以申入候急長崎之御出待申候若御延引被成候

拙者小倉之罷越面上に而申可承候以上

菊原如菴老

豊前之國小倉に而

天野屋太郎左衛門例

六月拾日

ならては難申候條書中不能一二候恐惶謹言

一態壹人を以可申入候處に能便宜幸に存未得御意候

得共一書合啓上候然は去六月八代様御上波成御

座豊前内裏に御着被成御座候刻 御前に貴殿御出に

而先年高砂おらんだ之一巻御存知之様に言上被成其ましき由堅申付候事

柏原金右衛門判

寛文元年十一月

日

當御國之可罷越候旨被仰下候に付熊本久參上仕候

處に忠廣様より平左衛門殿を以右高砂之手柄自分

に言上申上間敷との堅書物相調させ御取被爲成候に

付自分に言上不申上候 忠廣様被仰出候は来春は早

々江戸之罷越間太郎左衛門手柄之様子被爲成御披露

御國之覺に可被爲成之由被仰付候身體之儀は重而從

江戸御下向之上以可被仰付候是は當座之御褒美之

由に而百俵被爲拜領候家屋敷之儀も重而之御沙汰可
被遊之旨被仰出候然處に忠廣様御改易に御逢被成候
無是非仕合共奉存候然共一旦自分言上申上間敷との
堅申上置候間我等一代には不申候而相果申候以後に
は右之段時節を以言上可仕之由遺言仕候間如此に御
座候.

一七一

一末次本藏殿船貳艘高砂え被相渡候事別之儀に而無
之候其前年江戸御奉行様に我等罷越於異國おらんだ
不届之儀日本船に仕候共通言上申上候御上意を
以我々は商倍に付此舟に罷渡候船頭は濱田彌兵衛
めかた町喜左衛門侍衆其外上下人數四百八十斗乗り
渡候事平戸より聞傳おらんだ高砂川口に番舟武艘出
し置陸には土塗をつき石火矢を仕懸日本船待請已に
打可果と仕候に付迷惑に存我等共に五人おらんだ城
へ參理り申候處に少も合點不仕其儘我々籠者させめ
し置淇間日本武艘船を改不殘武具を取其後高砂本湊

船を入させ其時能より出し日本仁一人も師朝させ
上我等事殊外御さらへ之由此春承候間其地へ罷越お
らんだの一巻互に旨趣申承度候得共豊前御國中にお
らんだ一巻御存知之方無御座候故不參申候承候へは
貴殿毎年長崎へ御越之由に候我等も六月末には長崎
へ罷渡り可申候間急度御出可被成候若遲御越候はゞ
八月中は待可申候おらんだ一巻手柄之黒白長崎なら
ては存知之方無御座候就夫高砂に而我等仕たる覺あ
らまし申入候
一右七人同道に而大將に一禮仕其後にふらんすと申
通子に我々申候は能様に御申日本に歸國仕様にと種
々に申候得共大將申候は日本へ毎年拾人宛之質被
取置候其質御戻候は、其方共も日本之歸可申候無左
は高砂之土と相心得可申由申候間何とも仕様無之候
而何れも居申候我等ふらんすに申候は日本之作法に
而袴着仕候然共溫氣に而候得は道服袴ぬき申度由申
候處に大將聞如何にも道服袴ぬき緩々と涼可申由申

候に付ぬき申候其時に余も山の咄ニッ三ッ仕時分か

一同五月廿八日に惣中談合を以濱田彌兵衛同小左衛

門同新あめがた町喜左衛門尾之道九郎右衛門對馬

四郎右衛門此六人おらんだ城へ行日本之歸岡之斷可

申由に候處私申候は我々も同意參斷可申申候處船

中之者前以之儀共被仕候間同心間敷由申候然に

我等申候は左様成儀共にては少も無之候Sヶ様とも

斷申無事に歸朝可仕と申我々共に七八城え參り申候

其時に我等召連參候安兵衛と申者に我等刀相渡申聞

せ候者自然之儀有之候時此刀に而番之者に随分一命

を捨働可申由具に申付候事

儘罷戻り申候事

一右高砂之一巻江戸之言上申處加藤平左衛門殿に被

仰付先以忠廣様より口上被聞召上儀有之間早々

んかへ一命を捨大將之前に近付寄間間斗にして則

大将を捕て押へ脇指をぬき首にあて日本へ帰朝させ
間敷哉と申處石火矢三ッ四ッ打懸申候其時ふらんす
に申候は矢の口を留させよ無左は大将指殺と申に付
矢の口留申候即大將に縄を懸召置申候右我等召連候
安兵衛と申者番者兩人きりふせ申に付殘番之者共壹
人も無之候日本のはし船のか本船に迯申所を城よ
石火矢にて一人打殺申候其後我等申候は前以理申
に不入聞然上は唯今指殺可申由申に付尤之儀候然上
は日本え戻可申候間御赦可被下候立而断申に付我等
申候は然は先年日本之高砂人二拾人被召寄其者共に
御拜領被仰付候を其方押置不相渡候間只今彼二拾
人者共に相渡可申由申に付則相渡申候其後我々荷物
並武道具貳艘之船につませ大召連日本之相渡可
申由申候處立而斷申に付城大將之子又頭おらんだ四
人以上五人召連日本え歸國仕候て大村に籠者させ召
置申候大將之子は病死仕候相殘四人は以後御歸被
爲成候事

間荷

物少に而も相渡申間敷と申押置候に付種々斷申候得

一おらんだ右之仕方に而御座候間我等船中之者に種

共渡不申候間不及力明船に而歸國仕候之處明る年お 々談合仕候得共同心壹人も無之候然共彌兵衛をとり

らんだの大將長崎へ相渡江戸へ御禮に参上仕候に付かひ五月五日におらんだの城え禮に出大將生捕可申

我等おらんだ大將より先に江戸え參上仕候而御老中と內談仕候處船中之者聞付肥前之國村田彌三右衛門

樣え去年おらんだ高砂に而日本船に不義仕候一言 平戸之町松永吉左衛門兩人にて我等を留置彌兵衛親

上申上候處 御老中樣被仰出候は其樣成不義者と不一子三人城え參り候得共右申合手はつ相違仕不及力其

敷由堅申付候事

一寬永六年に長崎より末次本殿船二艘に而高砂え

え船を入させ其時より出日本人壹人も歸朝させ間

高砂之相渡申候之處平戸より聞傳高砂之川口に番船

貳艘出置陸には土塗をつき石火矢仕懸日本船待請既

打可果と仕候に付迷惑に存我共に五人おらんだの城

へ參理り申候處に少も合點不仕共儘我等共籠者させ

召置候其間日本船貳艘改不殘武具を

異國高砂一巻

十一月

一寛永八年之春右二艘之船に人數四百八拾人之餘乘

被遊御存知御禮御請可被之處一々以不所存者之由

寛門一年三齋樣御上國之時分長崎之召置申候蛎相果

申に付天下領之町屋敷荒申候間此方之可被越由町中

より切に申越候間就夫御 公義之御理り申長崎え罷

越年月居申候夫より又々常御國小河町引越罷居

申候而十年以前に相果申候右之樣太郎左衛門遺言仕

置候通如此御座候以上

柏原被聞召上御禮御請被爲成間敷之由にて大阪より追返

御老中樣より來春高砂え相渡智略を以

し被成候右

右之荷物取返し可申候少も武邊わざにては成間敷候

若智略にて不相渡候は如何様とも被遊御分別と御

取返し可被下候様被仰出候事

判

斷狀參候間肝忍仕是乂于今傳置申候夫より太郎左衛

文元年金右衛門相渡買物相調歸國仕筈之處おらんだ城大将より此方

之船日本へ相渡不申内に此方へ無斷買物相調候等其 來召置候間只今三百石の御知行拜領仕候而者其覺悟

陣に而に見届申候か彼の彦右衛門爲には其方は甥

罷成申間敷候間兎角御前可然様に御断被仰上可被下

之由被聞召上候由被仰出候則太郎左衛門申上候は如

立允様一入御念比に御意被下候に

候由申候其時分

何にも彦右衛門儀は私爲には伯父之由申上候其時 付一年少之御進物抔差上申候に付則御書頂戴仕候間

三齋様被為成御意候日太郎左衛門儀6柏原一門之者 只今傳置申候其後太郎左衛門高砂手柄之様子爲後

に而候間是程之手柄爲仕由被仰出候而殊之外御喜悅 日存長崎へ罷越豊前菊原如安に長崎え御越可有之山

被遊候乂々被爲成御意候は其時分豐前に而菊原如安 申候に付則如安被罷越候間其時太郎左衛門申候者

長崎より罷歸候を御前に被召出高砂之手柄御尋被成 三齋様より高砂之手柄之様子貴殿御尋被成候に

候に不存其船の船頭濱田彌兵衛爲仕由申上候間右 則船頭濱田彌兵衛爲仕様に御咄被申上候由承候間

は左様に被聞召上候由被仰出候其時太郎左衛門申上 則彌兵衛方に貴殿参彌兵衛に聞可被申候由申候に

候は常國えは其時之首尾為存者無御座候長崎文は爲 付則彌兵衛方へ行右之様子尋被申候得者其段は太郎

存者あまた御座候間早則長崎へ罷越共穿鑿仕證據取 左衛門爲被仕由申候夫より如安方より理狀遣申候

可差上由申候處に 三齋様被仰出候は太郎左衛門 其時太郎左衛門申候者其方と我との肝忍に而は縁者

今度高砂の手柄仕間敷者と不被思召候は様には之據に而御座候間餘人一兩人證據人可被立候由申

不被仰出候之間穿鑿は無用の由被仰出候而明る日入候に付博多屋與三兵衛村田彦兵衛右兩人之者より

(合渡カ)

代の様に御通夜遊候夫より太郎左衛門早刻御幟致參

子具に可申由被仰出候其時太郎左衛門右之様子

一々御咄申上候處に 三様被爲成御意候は無比類

手柄之由被仰候夫より被仰出候は先年原陣に而

石川治部少輔家老柏原彥右衛門一番備之大に而が

の城大將生捕無比類季柄爲仕由御聞被遊候其時之様

上夫より諸事御懇意の御意共御座候其後槇島雲菴老

御取次にて御知行三百石拜領被仰付候其時太郎左

衛門雲老迄申入候者今度御知行被爲拜領候段難有

奉存候得共貴様御存知の通方々之家屋敷持大分の家

うどんの渡にて無比類致手柄打死爲仕首尾則我原家記

以私儀も常國之居住仕候尤長崎えも家屋敷持方々仕 不申上候由申上候乍去自然子共代時節を以て言上可

候由申上候處左馬助様被爲成御意候は柏原と云名字 申上候其時分は可然様奉頼由申候左馬助様被爲成御

を聞候得は先年關原陣に而石川治部少輔家老に柏原 意候は夫は堅事に候然共左之心底に候は、何時

彦右衛門と申一番備之大將に而打死申たるはひか様 に而も御取次可被成候由被仰候我等代は各別假子孫

其方の一門にても有之哉と御被遊候に付太郎左衛 迄も堅可申置候間左様に心得可申由被爲成御意候而

門申上候は彦右衛門儀は私爲には伯父に而御座候由 色々御懇意之御意共御座候又々太郎左衛門申候は長

申上候其時左馬助様被仰出候は右より太郎左衛門儀 崎之家屋敷も御座候間以後には長崎えも引越可申由

故有者と見及候に扨々彦右衛門甥に而候哉と被仰候 申上候其時左馬助様被仰出候は當國は 越中守様え

而御悦喜被遊候其後被仰出候は太郎左衛門儀は長崎 御拝領被仰付候八代 三齋様之御隠居分に御取被成

え家屋敷持居申候は一年長崎より高砂え相渡りおら 候間其方之儀は可然様に御申可被成由被仰出候て入

んたの城大將を生どり無比類手柄爲仕者如何様之者 代之被爲成御通候夫より太郎左衛門御殿に参上仕候

仕爲哉其方は存不申哉と御尋被遊候に付太郎左衛門 處殊外御悦喜被遊夫仰出候は自是江戸之歸可申と

存候は此段は太郎左衛門仕爲手柄餘人とは不被申則 存候得共又々に其方え行今一宿致し其方と咄申度

私仕爲由一々申上候時左馬助様被仰出候は是程 候間左様に心得可被申由被仰候而又々御立寄被成御

日本之覺仕爲事何とて江戸之言上不申上候哉と被 一宿被遊候而夫より江戸之御通被成候處三齋様御

仰出候若言上申上候は、我等江戸に而言上可申上由 入國被遊候道中之御行合に而 三齋様え左馬助様御

被爲御意候其時太郎左衛門申上候は此段は右より江 對面被成太郎左衛門儀具に御咄被遊候に付八代へ御

月に而御老中様之御意請高砂え相渡り爲仕手柄之 通之節直に御立寄被遊則御一宿被爲成太郎左衛門儀

儀御座候得共其時分 忠廣様被聞召上自分に言上申 御前之被召出被仰出候は其方之様子左馬助殿御咄に

上間敷由之書物差上堅御契約申上候に付私一代には而具に御開被遊候一年長崎より高砂え相渡おらんた

一六七

休足可被遊と申上候處殊之外御悅喜に而御

座候十六歳にて一門之者共高麗陣に罷立申に付此者

立寄被遊候に付本宿本へ申置事御座候得は御内衆

共一同に高麗陣に罷立申候其後繡陣に罷成候に付

迄潔御馳走申候其時左馬助様被爲成御意候は扨々今

清正様常國に御内入被遊候に付柏原平左衛門と申は

度太郎左衛門馳走之段何より以不淺被思召候尤我等

則太郎左衛門親類に而御座候其以後 御名字被爲拜 儀は不辨之儀は
無之候得共此國之内入候より道終ら

領加藤平左衛門と申候縁を以當國之參對面申度候 下々之者及難儀何
共不便に存候何より以今度之馳走

得共陣草臥之牢人之儀御座候得は其儀無御座先に町 御滿足に被爲思
召候由被仰出候其後被爲成御意候は

人仕居申候而次第に身體宜罷成候時分親類共にも面 太郎左衛門儀は
當國之者に而は有之間敷候兎角一宿

談仕猶以清正様之も御目見仕候夫より熊本之家屋 致し太郎左衛門と
御咄可被遊由被仰出候而御一宿

敷定居住仕其後八代郡小河町に家屋敷持又は長崎え 被遊候其時御前
之被召出由來委咄可申由蒙仰候に

家屋敷持方に仕居申候處に忠廣様御代之時分長 付太郎左衛門申上候
は私生國は津の國の者にて御座

崎の家屋敷則太郎左衛門惣領天野藤左衛門に相渡置 候由申上候得は
亦々御尋被遊候は兎角太郎左衛門儀

中候其後 忠廣様御改易之時分一門共牢人仕候に付 は故有者と御見
及被爲成候間先覦不包名乘可申由被

太郎左衛門儀&熊本より小河町え引越罷居申候處共 仰出候に付則太郎左衛門申上候は私親之儀は小堀遠

後從江戸 御上使御兩人被爲成御下八代には内藤左江殿御内に柏原兵部左衛門と申而御奉公相勤申候私

馬助樣御通夜遊候に付太郎左衛門存候は當時御落居儀は幼少之時分高麗陣に罷立 清正樣常國へ御内入

之時分に而道中諸事御不自由に可被爲成御座と奉存 被遊候に付其内え親類共奉公相勤居申候に付其縁を

【仕上由來書之事

柏原家舊記

候而宿本え種々申付候而小河江頭と申所迄御迎に罷

出申候而其時太郎左衛門申上候は道中御草に而可

被爲成御座と奉察候間見苦敷御座候得共拙宅え被懸

一私親天野屋太郎左衛門儀は生國は津國之者に而御

御腰御藤名

四隣之邦。亦皆敬之。不唯四隣之邦而已。延及京攝

遐遠之地。亦皆無不敬之。是何以使之然哉。蓋公之

神。磅礴天地?果有不隨死而亡者也。蘇子題韓文公

公濆業記

略姓

從

井田幸男

古城貞吉重校

武藤嚴男

同校

之爲也哉。同志之人與有力者。其姓名錄下

碑陰

維善

賽主 撰

府學訓導大城允鹿子木堤而合之。排而注之。以爲一道入于海。曰綠河。決|碑日、其生也有自來。其逝也有所爲。余於公廟亦云。

佐俣川。移御舟川。堤盡湖之流。皆合之綠河。下及

杉島。分其流。以殺洶湧之勢、或迂而緩之。或激而

流之。西至于二丁入于海。曰白川。發源蘇山之麓。

黑川出其北。合為一道。而過都東。西迤于海。曰菊

池川。呑納迫及合志鍋田之諸川。導至高瀬。移流於大保長鹿子木維善有禱公廟。欲建碑而賽之。旁求大

大小濱之間。西入于海。殛瀕海之斥鹵堙味生之池。」石而不得。過廟後之山。見其僅出土上。試掘之則果

以爲佃田。設堰于此。置閘于彼、築隄防。構掃柵。 大石也。然距廟十餘町。路險而臨崖數百人蟻附之, 通溝渠。開水櫃。凡其所營爲。皆得其宜。是以乾無

徜偈。涝無氾濫。荒蕪之野。不鹵之地。變而爲沃饒

者多矣,今皆賴以爲利。最工穿渠。有剪白川而溉于

馬場楠者。其渠在兩崖壁立之間不便漭俊"是以其穿

也。一濶一狹。相承而下。濶處湛之。狹處噴之。水

常激盪。自無壅淤。民蒙其澤者。有私建祠而祭者

其所憩之樹。有比之甘棠。夫公攻戰之功如此,治國

之績乂如此。而今威靈赫赫。一日盛於一日、邦人之敬

事之。災患疾病。凡有求者必禱焉。不唯邦人而已。

無由轉致。沙門溪玉院日玩性多機智。與維善之男維

資謀,日役十八人而運之。其術巧妙。聞睹者不能覺

其所以然。是雖出於日晄及維資之圖。蓋亦神之所助

也。日玩語人曰。予有所不得其術者。則思之不错。

以夜繼日、必有得之夢寐之間。如有使之者然。豈予

三派。

を奉し國中を廻り 神君の御遺業を見聞するに始

末貫通する史録なし是故に慶長年より里俗傳を

以推糺す中に官舎の記或は處々に家録拝領の御品

を見地利水理御變革の御遺業顯然たるを見其所

々の役人と相謀り事實を得る事而已を識甲申の

冬 先君に上り徵とするに足らさる諸説の中に取

洩したる事多からん事を恐れ心力の及限り相糺

し漸く加増して文盲の筆を愧惡する事を不顧

爲國。數主領之。是以政令各異。 風俗不一。民易蠢

右御遺業之稜々は文政六癸未年我 先君より内命

一御武功の事は記に在り猶其を御神碑の銘大城 欲新建碑。請繼先君子誠之。余因舉其揚較、昔肥之

允撰たるを別紙奉納也

して奉戴する事稷宗廟の如し誠に 御神徳の化

後世益光輝なる事聖神の下に置難し

嗚呼公事上忠。 御下也仁。至其智勇。則古今絶倫。

民たる者其澤を蒙らさるはなかりき其化三都

を始諸國に至迄 御神徳を奪崇奉り禱祠祭祀

淨池公廟碑

鹿子木維善

御當代魔詠九眸王仲計に切に至田地より産出す米穀前

文の積に肥後國の有ん限り萬々歳無窮に傳る者也

大禹后稷王武王農事を以天下を開給ひける

御遺業に同於本朝者 垂仁天皇 仁德天皇の

御遺業千萬歳の後に傳る御仁政に等しく常國の

奉納也誠恐誠惶敬白

天保壬辰冬十一月

謀無不中。戰無不克。其勳爛焉于前朝。史卌之所載。

口碑之所傳。雖婦人孺子。昔知而稱之。 余先人叉既

著神道碑。鹿子木維善軸而藏之寺中。頃維善來告白。

公之長于治國也。世之所不遍知也。恐無傳後世。今

動。其於水利。曲防自便。故失其性。公之就封也。

法令嚴明。 寬以濟之。人心帖然。 昔愛戴之。築城於

茶臼山。 外至四陲。 設險各所。 以便防戰。實爲四塞

之國。 都下壺川入白川。白川水迅。灘磧下流。積

砂易致填塞。 公慮失船運之便。 塞所入。 決之于西

西至高橋入于海。故都下哲蒙其利。

南。會井芹川。

於是大興土功。身親督之。

公旁巡封内。察其水理。

是以成功速。而民不怨。 其浸四。日玖摩川。峽間

石峻水駛。至于八代而漸穩。其奔放之衝。分爲闢公遺業記

米四千八百四石

合四千八百四町餘

球

共= 出一田畑五百八拾九町餘

附害庄

一同貳百町餘

七百町之新牟9

縣兩成候二

田

一同貳千貳百三拾六町

本行之通

七步

内端之見込

一同一夕村之:

山手永立岡之大池井小池

一同五百四拾八町九反四畝三步

- 嵎手永築地磧懸杉鳴回江

一田畑數四百町

甲佐手永鵜瀬大磧

天正十六年より寛永九年迄四十五ヶ年御先代に

大方相調候由申傳候得共瀬田馬場楠程に各別の

御仕法申傳無之故不加

神君之御遺業無粉右の外諸開田畑壹萬五千六拾七

町貳反貳畝九步有之中汇多く 御先代開有之由

申者有之候得共徵~寸石汇足石故不加之

一田畑數四百三拾町 大津手永瀬田之大堰井韶山津手永馬

場楠磧より大津沼山津本庄手永懸り

但白川筋の水取堰二十九ヶ處の水懸田數三千

四百八拾八町六反の内堰分本行の通

四百壹町五畝貳拾七=不田御本内懸五松共摩石共杉 甲

百相毛迎外一端十口山 川嶋佐

由八分四出

新ク毎手來

村村永=

分分惣之付

別 無水本

田河天 田手

養原池種共

水之井 山八

懸大小 野代

池池津一六三

御先代四十五年の産穀は不積立寛永十癸酉年より

右者天正十六戊子年より寛永九壬申年迄

御先代開多有之候由申者有之候得共不加故此開

以可足也

二口合千五百貳拾四萬七千百貳石五斗七升

但産穀積立豐凶之見込以相糺候汇付相違有之

間敷候萬一大凶年と穀見込にて及不足候は、

諸開田畑壹萬五千六拾七町餘之内

但右同斷作德米穀六民分

惣米敷合九百拾四萬八千貳百六拾壹石五斗四升貳

合

但寛永十癸酉年15天保三壬辰年迄二百年分上

納米四公分

但六民之作德一年七七千百六石宛二百年分

惣米合六百九萬八千八百四拾壹石貳升八合

米合百四拾四萬千貳百石

但二百年分之上納分

但惣撫反宣斗宛内端之積也五百八拾八町餘之水

害田は撫反七斗にも可相增候得共水悪に加候也

米合九抬六萬八百石

惣畝數合千八百町三反壹畝貳拾四步

高貳萬參千四百八拾貳石五斗九升貳合

米瀫合貳拾萬三千八拾五六斗四升貳合

但六民之作德貳百年分一年

米合拾參萬五千三百九拾石四斗貳升八合

二百年分上納米

物成六百七拾六石九斗五升貳合壹勺四才

高七三步貳朱

但六民之作德二百年分一年汇六百參拾九石宛

一田畑八拾四町三反九畝拾貳步 八代郡新牟田村新地

高九百貳拾四石七斗九升貳合

米穀合拾貳萬七千八百石

二百年分上納米前條同斷

米合八萬五千貳百石

上米四百貳拾六石 但此新地無高

新地

一田畑八拾四町八反餘

宇土郡松山手永笠岩村

斗

高反壹石三但四公六民之作德前條同斷二百年分一年

八百四拾壹石壹斗參升四合六民分

米濲合拾六萬八千貳百貳拾六石八斗

高千百貳石四斗

右古新地以諸郡皆有之 御先代新地又御先代開共

記來候處寶暦地引合改正之時一統古新地人改名ㄥ

相成候由地引合請持之田添源次郎永井七兵衛より

鹿子木維にす

米穀合四百八拾萬千五百貳拾九石壹斗

但六民之作德米濲右同斷

二百年分

高貳萬三千八百三拾石貳斗九升七合九勺三才

物成壹萬六拾五石九升壹合 一年分

米合參百貳拾萬千拾九石四斗 上納但前峰铜斯

畑貳千七百五拾壹町九反九畝貳拾六步

一田畑四千貳百五拾五町四反八畝拾壹步 古新地

内･田千五百三町四反八畝拾五步

右者玉名託摩宇土八代四郡之内新地御開發宇土笠

岩村新地之外は本方に加り申候

米瀫合貳百九拾萬五千五百參拾貳石四斗四升貳合

但六民の作德米穀右同斷二百年芬

物成九千六百八拾五石壹斗八合壹句四才

米合百九拾參萬七千貳拾壹石六斗貳升八合

但寬永十癸酉年10天保三壬辰年迄貳百年之上

納米四公分

高四百五拾五石

同手永鹽屋塘新地

一田三拾五町

高七百八拾石

荒尾手永名地塘新地

一田六拾町

高八百四十石

荒尾手永古塘新一田六十町餘

地

拾五石八斗

行末新地

一田百四町七反内计 U嬈反 拔下手咏螈三十町八反

蝣咧六乡村 荒尼手

高壹萬千四百四拾九石餘

地 九村

一田畑八百七十町九反餘 玉名郡小田手永石塘新

一稼稿本源を開き給ひたる御遺業は御國中悉皆に施

し給ひし事里俗の説に傳るとSへとも徵とするに

足さる事は省き慥なる事迄を撰て前條に記し侍り

ぬ神君の御遺業後代に傳る御積善左之通

て日本一の御城を経営し給ひ内外の御要害山川

陸海御國境の堅固無殘所第一天下無比類 御武

威に恐れ天正以前の悪の遺賊ありとへとも御

國政を犯すものなく泰平の化邦内に充塞して國家

安寧なり

高千四百六田畑合千百三拾町六反

神君御在世新地

1ki

二百年分上納米前條同斷

米合拾壹萬貳千百五拾壹石貳斗

四成にして一年分

物成五百六拾石七斗五升六合

一田畑百拾壹町五反七畝貳拾七步 摩郡下牟田村御開

高千四百壹石八九升

右者玉名郡御遺業之御積善也明癸巳,以後千萬

歳無窮傳者也

但右之田畝之產敦四公六民之吉法以一年汇壹

萬貳千三拾貳石壹斗六合二百年迄作德

米教合貳百四拾萬六千四百貳拾石

米合百六拾萬四千貳百八拾石 上納米國益分

但寬永十癸酉年46天保三壬辰年迄二百年分本

行之通

但高四成にして一ヶ年分

物成八千貳拾壹石四斗

一田畑合三百八拾九町四反六畝廿一歩

高合五千六拾三石七斗壹升 忠廣公右同斷

高合貳萬五拾三石五斗壹升

高合壹萬四千九百八拾九石八斗

止故郡村嚮も不穏人氣反して安居するもの無し

其中に海川の堤破れて水害有と雖と普請する力

なく古田の荒地を開志唯當前々々の暮方に

押移る不安の民君の御世に至合戰止 放火

小領主の合

人氣穩に成民安堵して農力を断す然處國中海

川の堤防を築留川々に水取を營み給ひ稼穡の本

源に深く御心を用給ひ夫民は國の本也とて四季に

御回國ましく庄屋名主百姓の者共被召出川成海

成田畑成田を開く事を御開上山林村立 紳佛

閣御覧ありける事場に被召出たる者の子孫甲

佐手永に住む渡邊玄察記に在辱も 君の御遺業

を奉考に稼禍に深御心を用ひ地利水理を修給ひ往

浩より不有來大川に積を營み新地を墾闘而後世に

傳給ふ事聖帝の如き大禹后稷王武王農事を以天

下を開給ひ周成王を輔佐し禮を定め給ひ天子

の以元日新穀于上帝、乃擇元辰、天子親戴耒耜措之

于叄保之介之御間、帥三公九卿諸侯太夫、躬耕帝

籍、天子三推、三公五推、諸侯九推、 反執僑于大

寢、諸太夫御命日勞酒、大日本史日、 垂仁天

皇詔諸國開池溝、遣皇子五十瓔敷命于河内、作高石

駛、毎逢霖雨、海湖逆上、里乘船、道路泥濘、

其決流通海、以全田宅、至此鑿宮北郊原、號日堀

江、築茨田堤、是歳新羅人朝貢、因休是役、甲申

十二年冬十月、鑿溝于山背栗隈縣、乙酉十三年秋

九月、始置茨田屯倉、冬十月、作和珥池,築横野

堤、丙戌十四年、鑿溝千感玖、 是歳開大道于京師

南門、直達丹比邑、己亥八十七年春正月、 天皇

崩、壽一百十、帝幼而聰明、容貌端麗、及壯仁寛

慈惠、夙興夜寐、專心政理、通溝渠、作堤防、

闢郊原、以乞貧民、是以海内富庶、稱爲聖帝、水

戸義公日、仁以百姓之心爲心、一百不得其所、

若已推而納諸溝叡、菲飲食、恶衣服、宮室徹而不

改、三歳除課役、民休息、及四海殷富 君御遺

業之澤千萬歳之後に傳る事禹稷文武周公成康之天

下を治玉ひ垂仁天皇 仁徳天皇の御遺徳に

等敷也開闢以來一統せさる肥後國御一統まし

タ

池茅浮池、亦作作倭狹城池、迹見池、是歳合諸國

開溝九八百、以農事、民頼殷富、 仁徳天皇癸

未十一年、鑿池宮北、 築茨田堤、 帝詔日、股

見、是國郊澤曠遠、田圃少乏、河水横流、注不

ハヤカラ

マムク

ミノ

ト

チメン

藤公遺業記

一八代郡は吉本町の南往還上に船繋松あり夫より野

一益城郡豊隅より下は海にて有し故 神君新型の

御見立として葦北日奈久邊まて 御出馬ありたる

事河江手永に書留置し者ある由犬塚安太河江の惣

庄屋の時間及鹿子木維善へ管話有

一宇土郡は右に記す岩熊村鯛釣岩にて其下なる村々

海成の地なる事推て知れたり

開郷中島海氏内田新開右七ヶ村は海成の地名なり

今村中牟田は手永の上に有故其下の村々海成の

地と見へたり池田手永は大地の高低を以推て知れ

たり

一本学・

一飽田郡稲田の海塘出来て後外構藤新地築立の時

是より外に海開きすましき誓にて濱の龍王建立せ

しあり椎田塘の内東の方海開にて在ける事は權

藤村の出し時の誓詞に明か椎田四ヶ村が

南北中推

權藤在三ヶ村池畑金光九ヶ村共古の海開きと見へ

たり以上横手々永の村々引上りたる所也銭塘手

永も海開の村々からと見へたり大慈寺の開塞

巖和尚錢塘を築立給ひけるより銭塘の地名出来其

錢塘の外に出来たる村々多し今村中牟田新地西新

田西河田玲 上片野川の事は前文に記す通なり

球摩川南高田在の上に在豊原村は往古 景行天

皇の御船を考給ひし處なり委前條記す通なり其時

火の光りたる所田地を開村を立往古の由来を戴き

火の村と號く其村名を本一玉名郡は菊池川筋上内田迄潮滿登其南木葉川筋稻

佐村迄湖滿と小田手永伊倉唐人町は唐船着岸艦繋

の大木あり此方里二十一ヶ村且新地村八村都合二

十九ヶ村の地八百七十町九反餘は 神君御築立

の新地也されは飽田託摩益城宇土八代玉名六郡の

海成田地間謀村名地名等を問謀り里俗の申傳地利

水理を視て深く古今の變化常國は海成の地廣太也

又川成江瀬成の地多かりき然に天正年迄は小領主

僅宛の地を裂て治られし中世乱れて年久敷合戰不

一五九

野村と改む今高田在の中

あり是を以海成の地たる事を知る

津

津手永至 御津は船着の地名也今野津の東往還の

邊りに丘陵山野有其野を目常に船を着ける處よ

村々出来て後野津と地名に號けたるなるへし種

山手永岡古路村古城跡の下に船津と云所あり往昔

海の船着の處と云傳是より高田手永に至る東河

を製各國の造を立給ふ元明天皇四十二代國の造を

改國司と続け國郡郷村の名を定め給古の大八洲

漸割て三十三ヶ國となる後別れて六十六ヶ國と

成る抑肥後は本肥前と一瞬にして火國と云後に兩

國に分りて肥前肥後と號く 此時に替

へ玉ひとなり 其北迄は

阿蘇國葦北國天草各別國にして國の造を定置れ

ヤ

皇御腰掛の石有けるに不知の民不敬に取扱時は御

だいりある故川下に森國の淵に沈たる故今其石無

維 高田在勤中森國の淵より取揚石王に小塚を

築尊崇し奉ん者有て森國の淵底をさかし見るに王

石のある所知れざる故其儘止ぬ嗚呼天子の御腰掛

石淵に沈ける不敬不人情を嘆息するのみ玉名郡腹

赤村庄屋々敷内に 景行天皇御腰掛の石あり又

屋敷の境内に供御池有此庄屋は其時より于今連綿

として相續す 維善玉名出在の時此屋敷に入王石供

御の池を見先祖以來の事を閉式任石塚を築立崇する様

に維善教し故小く塚を築立

天皇腹赤の濱に着せ給ふ時掉人朝勝見魚を

釣て帝に献りたる嘉例にて中古迄は腹赤鯛を差

上奉りける由申候里俗云所同しき也 景行天

皇諸國の名を立給ひ 成務天皇付代素國郡の境

ぬ肥前肥後を分てる時右三ヶ國を肥後に加古の國腕を以郡名となり同書に在維善 不育の微臣恐らくも肥後國古今の變化を考井上平八中山市之進へ問謀るに當國は西方に海あり天地の間西に傾く理有是故に當國の海邊は洲を置揚肥前島原より天草常園の内の海は洌を置さる處にて考へしと井上中山ともに同説也於是地理水理を考えるに杉島手永碇村と云所は往古海船の碇埋れし所より碇村と地名に続け此村の南阿高村に確塚在其下榎津回江小岩瀬菰江前崎花江宇土の地名に馬瀬沖田鹽田古保里村の内に従塚在曽畑と伝岩熊村の内山付に鯛釣岩と云地名有右地名を以考るに江は海の江筋瀬は海川の瀬にて在けるよし津は船の津端也岩熊の山付に在鯛釣岩にて地理を考村の地名にて往古海にて在ける事敷也御船は 景行天皇の

御船着たる處より御船と云地名に號けしとなん今

緑川筋の満潮を見るに杉島磧の上に登る事は秋

潮の高滿ならては常には杉島硫の上に登る事な

き故中山昌禮杉島在宅の時に變化して東高に成

現顯を授けられたり

奉考に玉名郡の方早々御成務の化被行人數增加せ

し處より新牟田村の出百姓右に記す通玉名郡より

來りて村を立る由來村名に著し八代郡は小西領に

天正十六年より慶長五年迄十三ヶ年治られけ

に僅八十四町餘の新地を稼する力無さ嘘より玉名

郡より來り村を立たる事玉名八代の盛衰顯然た

小西行長肥後半國に封られ 神君に對する大名

にてすら斯の如しましてT小領の所治をや球摩川の

水を磧揚田地の養水取力無さ將緑川筋も右準稼檣

本源に心を用られる故鵜の瀬磧以下の水利且球

摩川筋の水取其外前文之通旁相考るに海川の堤防

堅固に成し稼稿の本源を開き給ふ

の糖と

塘の一種部制作ましくれる由里俗云傳今形容地名を以考

るに上片野川村東河田五ヶ村の地名川成の田地多

かりき小諸侯僅宛所領有し時球磨川の堤防海の

堤防等洪水高波に破壊せし時廣大の公金を出され

急場の普請出來秉破壊所より河水海潮の入て稼

を荒し置ける事多かりしとなん玉名郡は天正十六

年六月廿七日 神君御入國同十七年正月廿=石

・小田手永大八百七十町

経留

の新型鍬立有程の御遺業を

所也

を巡ります四月熊之縣にて熊津彦を征伐し給ふ夫

より海邊に趣葦北の小島に泊り給ふ五月火の國

に至給ふに日暮て岸に着事を知らさりし時遙に火

の光りを見てに岸に着ける其の火の光る處を

問給ふに八代の縣豊村と答ふ彼火を尋給に火を

とほせるものなかりしかは其を続けて火國と云

是世に云不知火夫より船を出し玉名腹赤の濱に

着せ給ひしに掉人朝勝見魚を釣 帝に奉る是腹

赤の御贄の權輿也 維 上古を考今世の地利水理に

施し見るに 景行天皇八代の縣豐村と答ふと有

は高田手永豊原村神の前と云處也此所に湧水あり

其側に御船田と云傳ける田地有り此處に 天皇

の御の着たる所と云傳ふ同村の内に天子森と云

大木り其下手に天子塘と所有又球摩川河原地

の中に石王と云傳へたる地名あり近古迄は 天

一五七

抑吧名医の開闘を考るに國名初りし時火の國とい

人皇十二代 景行天皇十八年四月葦北の水島

に泊粉ふ此鳥素より無水に古 神祇に鳶寒泉湧酌

以献す因而水島と號五月火國に至以上大日本史に

在且一書に 景行天皇十八年三月 帝筑紫の
一片野川邊より新牟田の所の様流落來古の水理あり
其水上は日置の水より分れたるなるべし今其實を
邊より三日置を流海士口より海に入りける由南
北の分水を引田水に用來りしに海口よりは潮汐訴
て稼稿の實らざる處多かりき 神君の御代に
至遙拜山鹿町の間に八字形りの大磧左右の惣間數
三百八拾七間大石を以營み給ふ八の字の頭に通
を明け通船支なき御仕法なり南は高田在の田水に
備へ北は高田手永數十ヶ村種山野津手永に懸廣太
の田水に備へ給ふ双方ともに屈強の井樋二重に營
如何なる洪水にも大河の水田中に入る様に海川
の堤を築立水害を避給ふ其水備りたる田數高田
手永にて百町餘也貳千百三十六町種山野津兩手永
にて百町餘なり球磨川は求人吉町の奥深く山林
幽谷より數十里山間を流遙拜山鹿町の間流れ出る
水勢四大河川館の第一なり是によつて大石に

て八字堰を営み給ひ其下手萩原村の河原より古町

村の畑地に續百二十間地堰大石にて平水より六七

尺ての増水地堰を不越一丈程に至る越水前川流

入の二筋の川となる

肥後文叢書第二巻

一八代郡は往古火國と云ける本にして今まで出る

所なりされば球河筋に大なる八字を營南北と

もに大井手を堀古よりの川々を開き莫太の田地を

一新牟田村沖塘筋に七軒屋と云所あり此所に井樋番

被仰付置候者有之若も井樋障るもの有之は此長

刀にて討捕候様長刀被下置候を于今其子孫忠兵衛

と申者所持仕候且茶壺一被下置候を家に圍置け

るを取出し壺の口に耳を當聞けばしんしん啼音あ

古物と見へたり

一新牟田の中に神請尊崇す

慶長年中迄は八代郡人數少かりける由右新牟田村

は玉名郡より出百姓來しと云傳ふ古郷の村名を新

牟田村の小名に言傳へ高瀬小代新地中間と所

神君新地御覧の時能出来る大慶と上意有

ける村名に傳來りしなり

高九百拾四石七斗九升貳合

一新牟田村は全 神君御築立の新村也其儀左之通

一田畑八拾四町三反九畝拾貳歩 新牟田村

一五六

記したる書なく里俗の言傳迄にて徴とするに足ら

藤公遺業記

但立岡大堤之儀木山原南麓に有之右之山々谷々

畝數六反

佐野村

大砂請提

一殼堤一口

大貫下名

右堤の水掛善導寺境目松山下松山四ヶ村の田方養

水に御定の由水口有立岡古保里雨村は漏水にて

田方養候様御定之由申傳候

一右堤の北側に帳塚山と言所有堤堀の時 御床ルに

出夫着到の帳付場と申傳候

右大池の水境目村より松山村へ通る井手筋深さ三

間底幅三尺掘方の節は御物頭衆出馬有之抜身の鎗

にて指揮有之たる由所柄申傳候

但水吐より深拾八尺

土揚廣

畝數五町六畝

水

一大堤一口分計に因で堤と記す

松山手永立岡村大池 俗に云堤

本名は池也堤は堤防之堤

上納米四百貳拾六石壹斗九舛四合三勺

殘入拾三町六反七畝拾貳步

荒地

壹町壹反七畝三步

同三町壹反九畝拾五步

一球摩川は往古三筋に流れて海に入來りしとなん本

川は今の河筋を流れ河南は今の遙拝のより流れ

藻川筋を流れ植柳の南より海に入川北は山鹿町の

一五五

神君慶長年中堀方被 仰付候由里俗申傳候

八代郡

水溜貳反入畝貳拾七歩水吐深さ九尺

右七口之堤

一同一口

内浦

水溜壹反貳百拾貳歩水吐深さ五尺五寸

畝力

松山村

一同一口

山内沙門堂脇

水溜四反五畝水吐深さ壹丈四尺

同村

一同一口

西請下名の内

水溜三反五畝水吐より深さ壹丈壹尺

小曽部村

一堤一口

上

西詩下名の内

打出候大砂請の爲設け給ひたる殻樋と申傳

道場村

禁制

杉島村 一慶長五年九月廿六日より小西行長の跡宇土の城御

征伐の時御人數をさせ給ふ時藤井六彌太廼江川の

橋を取除大軍を防んと搆たり此者手に立ものにあ

らざれば御歸陣の時蹈潰せと被仰出上杉島村の

内道場村御小立有之御制禁の御書を下賜

一千原村堤内に 天満宮 御建立有て緑川筋の守護

神と崇め給ふ今千原村氏神に奉尊崇なり

一永村の塘筋村床等御縄張の時密に其御縄張を違私

慾せし者有よし其所の民家暮人不具者不絶全冥罰

を蒙りけると云傳人誠に 御神威の後世に及ぶ

所筆に盡し難し

父御船川の水源も奥深き山谷の落集七瀧より打

落す急流犬塚の北より緑川に會す各其水源深山幽

谷の數量り難所を思慮して潮と云程の洪水出る

時は是程の廣きにて水勢を休されは川下の害救へ

からず寛政八丙辰の洪水は前代未聞の大變なりけ

るに杉島河尻の害思ひしより薄かりき是を以

神君御深慮の水理奉感戴候也

院山よりもろくの深山幽谷の水を導て緑川に入

吧後文獻叢書第二巻

内

一松山手永笠岩村御先代新地左之通

一田畑八拾四町八反四畝拾五歩

宇土郡

右條々若違犯之輩於有之者可處嚴科者也

慶長五年十月六日 清正御判

一對社信社人非分之儀申懸る事

六殿大明神

一於當社軍勢陣取亂妨狼藉之事 付放火之事

一伐探竹木事

禁制

此道筋はさけ玉の川上木原村 六殿宮へ被爲入

夫より宇土へ御人數押させ給ひしと云傳追面

此社の制札を下賜御書に日

橋本村

右條々若違犯之輩於有之者速可處嚴科者也

慶長五年九月廿六日 清正御

一五四

一軍勢甲乙人亂妨狼籍之事

一放火之事 付田畑立毛刈取候事

一對地下百姓非分之儀申懸る事

藤公遺業記

一御船川を川に移入給ひし時杉島手永筑地坂本千

原三ヶ村掛桑鶴と云輿塘を築千原の内に至り塘な

した塘は坂本より千原村耆町に行く洪水の時は増

水漸々とさりのはり洪水勢ひを殺く所也其下千原

蓍町永村迄緑川の幅大にし此所は古田の中に堤

平日は無水畑

築川幅廣めかたに成則其川内に古田

有

な

一木倉手永御船川慶長以前は同手永今城村小坂村の

間より鯰手永甘木村の南より馬場の瀬に至り北し

屋形川に入其下記摩の下牟田鳥ヶ江邊より玄海

下ヶ名の低地を流玄海島邊り三俣橋に至椎在を

經夫より權道邊に流又川尻あたりより緑川に入水

理と見へたり御外郭の堤防出来て後江津川沼山津

川木山河間島川會して加勢川と成て飽田郡野田村

大慈寺の東より緑川に入御船川を緑川に脅し給

ふ本は飽田託摩の内に御外郭の堤防出来しより起

る故御船川堀替八龍塘の由来飽託摩の部に記す

なり

奉推考に普請奉行森勘左衛門杉村茂吉に命し給ひ

畑成田を見立有て川筋に堰を營み田水に備んこ

と残るあるへからす

一右永村の廣きより上鯰杉島の河原畑を見て是程の

廣場入さるものと云人有一通の洪水と唱ける時は

左程の盆も見へさりし故深く心を用ひさる人は左

も有ん乎 維善 杉島に八ヶ年被召仕増水毎に川

筋に出深く心を用ひ此水理を観るに一丈以上の増

水と一丈以下の増水の流異同あり一四五尺に至

時は川上より流落る水勢力の及所に非ず緑川の

水源は矢部奥川の口より出低用甲佐三手永の深山

幽谷より流出水緑川に落入且佐俣川は八代郡釋迦

其廣口より古の川筋に取附真横に堤を築立是故に

永村の構塘と云古の川際に石刎あり此處にて川幅

を縊りはそめ上手の廣場に緑川御船川の洪水を貯

兩川の急流を休る御仕法也洪水の時此水理を見る

に兩川の水源は高山より落る水勢至て烈しくて

川尻邊の水害御救の爲此所に渾休永村の石刎の所

に縊りたる挾川より量りて流す御仕法なり洪水の

時は永村の横塘より桑鶴塘迄湖の如き永村の民家

塘下に引添居るは心悪能洪水の時は一命に替へ

塘手の防信切に致すべき旨の 御深慮にて永村は

塘下に人家を建しと言傳ふ

右田上先祖附と渡邊記を参考するに鵜の瀬の堰出

來の時上揚村の下に新堰を營上豊内村東西寒

野村の間に新川を堀佐俣川と會せ古の緑川は上豊

内下豊内岩下町横田有安中下横田上下早川淺井白

石古閑八町芝原吉田萬ヶ瀬を経て犬塚の邊りより

今の緑川上豊内より吉田の間古の緑川跡田地と成

たる畝數莫太也之由田上監物 御縄張の御手傳に

被召仕其後大庄屋に被召仕たる人にて其時の

始末記録すへき虎自身の事のみをしてる御國

盆の本を開き玉ひたる實事を記さるは残念也惜

前髪にて被召出御縄祟之御手傳被仰付名を鬼丸

と被爲召呼候其節の御普請奉行森助左衛門杉村

茂吉兩人へ被仰付惣見計仕候様 御直之御意に

て同十二月十日より井手掘方始明三月十六日成就

仕候其節御馬上にて被遊 御上覽宜出來仕候旨御

懇意之 御意筋にて御酒被爲頂戴御盃拜領今以所

持仕候其後も段々被爲在 御成同十三年申十一月

二十四日木山より監物宅へ被近 御成御膳被召

上即日川尻の様被成御通候此節右監物大庄屋被

仰付田上次郎左衛門と改名被仰付候

する源鵜瀬の堰より始るなり今川尻麟米の上段是

地開闢の古より緑色の水は有なから大河に堰を營

み田地をふ事を始る人なく數千年押移に成ける

斯る大業を開給ひ永世無窮に傳へ給ふ誠に稷

の御神と可奉尊崇者也右に記す渡邊玄察記 君

春夏秋冬御國回の時庄屋名主百姓の内理々敷ものとも被召出河成田畑成田海成田御開井手塘山林村立神社佛閣御覧色々被遊 御問と有之候是を以地をふ事絶美也しと言傳甲佐の上米を産

哉嗚呼名将の御遺業記録し人無事を嘆息す境野嘉十郎先生に稷宗廟の事を伺ひし時 神君の御遺業甲佐手永の一を以稷の神なりと敢に有ける意此處に来り愚力の及び見聞し其實を得て奉戴境野先生を始中山市之進開傳へ主意は雑善へ授ら通渡邊玄察記にも慶長の始比迄は早川村畑迄迫々に天水田少々有と記たりされは慶長以前は僅宛の領主地を裂て治られし故大河堰を営力無其比迄は川深かいりし畑勝にて有来りしとなん慶長年に至り 神君鵜瀬に大なる堰を営み給ひ大井手を堀水上田と爲し給ふ緑川は緑色の清水にし

亡父に限り不申古老身共數人申閉候 清正公へ
被召出候村々庄屋譯有之大百姓名主等罷出候に
も當分御給人か御郡奉行衆へ罷出候同前に有御座
たると申傳候既に軍兵衛右之通平米を差上御馬の
跡より伺公申上候にもふはひれと不被仰出候に
は參居申候故犬塚へ被遊 御上御馬より下りさせ
られ御床ルに被爲 召諸方被近 御覽池田左右衛
門へ此碧川めか兩方の山野限りに水出候事か可有
之哉と被仰出候左右衛門申上候は此川は遠方
り流來申候扨又山湖と申もの出申候て多分はたへ
一はひに出可申と奉存候と被申上候得者其水さき
熊本迄來り城にかかるへく候然共就夫城へは別
條無之候向後此犬塚目は重な塚なりしやと被
仰候扨此碧川を防く塘は折々見候而合了簡候根は
池田左右衛門と申人申上候得者御鐙の下に被爲
召ゆりの内の米を御つまくせられ御口に被爲入

皆是をくゑくと被遊 御意畑成田の内上田三反

被爲拜領と御直に被仰出柿原孫三郎と申役人右

の田見計軍兵衛作取仕候由

田を仕立申候其田の稲にて平米を作乍恐奉備尊覽

一盆城一領一疋田上權内先附之内田上監物と申者

清正公當御國御預知被成慶長十二年十月十八日

監物宅へ被 御成翌十九日豐内御築場井手筋御

磧所井樋床等 御上覽御自身御繩張之節右監物儀

一五一

一清正公御領相成と其儘神事祭禮寺社辻堂に至迄修

理可仕旨被仰出候小西殿跡領せし者ともく慶

雷鳴せし樣有之候と申傳候以上渡邊玄察記也

一同書に 清正公肥後國惣て被 御領候而御國を

春夏秋冬四季に被避 御回國川成田海成田畑成田

御開井手塘山村村立神社佛閣御一覧庄屋以下の面

々被 召出御問上前文之通吉次程奉遂御心候者下

には多くは其比無之候と被遊 御感譽たると申

傳候

二十間高さ七間に築候へは洪水に何の難も無之

候然共通塘を築水をいため候得者脇へ廣まらず

底をはりうかつ故淵になりたるへく候其時は彼川

水田の養水にとられず候彼碧川は流れの儘に置候

あちらこちらに水を取川成田をも仕立て置候

かよひと被仰候て被成 御立候故軍兵衛罷歸候

と被申候

一二川一流と爲し給ひける處は鶉の瀬の堰下より新

川を掘て中山手永岩下村の下に佐俣川流れ出る所

にて二河會同す此所に大なる石刎を築立鶉の瀬よ

川なり緑川は豐内羊腸より岩の鼻に至立岩水神今

檜在大淵なりしと云其外淺井深井上下北早川の名

皆流より出其恒有に取白岩大淵なり山出陣秋只の

前を過犬塚水神又大淵なりしといふ佐俣川は岩下

を過附岩蛇淵かめ岩不動岩夫婦岩金八森船井神神

の元和田内田口の間古川の名有府領出水村彩島今

兩川一流と成る古の佐俣川筋の流と見ゆ

ヒグリ

同く水上田と成甲佐居住渡邊玄察と云人の書附に

早川村は慶長の始迄は畑迄にて追々に少々天水田

有と記せり開闢の古へより緑川筋に水取磧の無き

譯を問謀るに里俗の云傳に古は僅宛の小領主の力

にて大川に磧を営む事不能故畑作仕来りけるに

君の御世に至鵜の瀬に大なる磧を居井手を掘て

十分田水を畑成田に成し由云傳ふ此説を以形容を

見るに上楊村より犬塚常りの村々畑成田かちにし

て古川開始。新地を加豊饒の地となるなり

一甲佐堤防序に云夫往古は甲佐に二流有り緑川佐俣

肥後文獻叢書第二巻

眞直に打懸る水勢を刎る仕法也甲佐は緑川佐保

川共に山間より流れ出る所にて洪水の時は急流烈

敷故所々に塘所を設急流を休る處

也寛政八丙辰六月洪水の時緑川筋破壊の堤多し翌

-丁巳六月鹿子木維善 杉島の惣庄屋を奉し上盆城山中
に石場願収數度甲佐谷へ往水理を問謀るに古閑村
の下に石刎有此石刎の外に畑地有て耕作する事年
久し寛政辰の洪水は非常の大變にて右石刎表の畑
地洗流し刎の元淵と成時表石垣崩落其淵を埋共
に立派なる石垣有全二重石垣にてかる大變わら
ん時表石垣崩落て刎の根を堅め裏石垣にて保つ御
深慮の敦厚なるを感戴す右に類せし處多かりしと
なん渡邊玄察記に 清正公御國中四季に御巡覽
川成田畑成田御開井手堤仕立神社佛閣御覽村々庄
屋名主大百姓等も理々敷者は被召出古今の事と
も御問答被成けるに常分御給人御郡奉行衆へ同前
へ御座候を老人共且祖父共より申傳候襯父軍兵衛
前年見積りの畑成田に出来たる平米を差上度拵ゆ
りに入喜六と申小者にかつかせ早川前向ふの道に
罷出護而申上候立年御掘被下候井手にて大分畑成

より教を施し御國中の川々大小となく水取磧

藤公遺業記

一御當代に至瀬田の上の磧出來三百三十四町餘の田

水備る也里俗の説に白川磧は井手口肝要なり

一御先代下の磧に習の上の磧出來しと云傳ふ

一天正年に至阿蘇大宮司滅亡に及び給ひけるを神君

御取立ましくてより今の通神社佛閣 御再興有

しとなん阿蘇家滅亡至程の世にて稼檣の教導を

施す人なき故水源以下田水取の仕法施給ひ瀬田馬

場楠田水引を手本として杉村茂吉森勘左衛門

て洪水の時は川水井手筋に不入仕法なり此井手筋

に丘陵を堀割たる所有兩岸共に高十間餘此所井手

灰石也十間計の間に岩を切扱たる石橋あり石橋

数ヶ所共に橋とはし間は幅廣く石橋の下は狹して

水勢を溢り出す水激流して砂を操り流す仕法な

寛流の井手筋は砂を居込毎春井手するに井手

の兩岸十間餘居込の砂堀揚事なり難からんことを

慮り給ひて如此無類の仕法を施し給ひたる處に深
く心を用見れは誠に 君の徳業奉戴して是を識
すなり此井手懸大津沼山津本庄三手永田地九十五
町四反餘畑成田と見へたり
神君緑川の水理を修玉ひける 御遺蹟を考るに水
源より矢部研用甲佐の山間を流れて堤無し甲佐手
永上楊村よりて堤あり往古は甲佐谷に緑川佐俣
川二流有り 君緑川を佐俣川に會して一流に爲
し玉ひ鵜瀬に大磧を營み田水に備へ畑成田を開水
上田と爲し給ふ森勘左衛門杉村茂吉普請奉行にて
共事業を勤と有り古川開の畝數亮太なり今古田と
一四九
居て稼穑の道開けしとなん天正十六年 神君當國
へ封玉ひ寛永九年迄四十五ヶ年間 御二代の御郡
政殘る所有へからす白川黒川の田水績より盆城合
志摩飽田に至三十ヶ所の田水磧 御先代に出来
たる水取多かりしとなん然れ共瀬田馬場楠の如き

著しき言傳へなき放徴とするに足るは略しぬ

一立田口白川筋上河原に大成洲あり河原開の畑あり

或は墓所あり河原開の中に石刎有此石刎は何用に

立ものかと言人多かりけるに寛政八年非常の洪水

の時上河原の大洲川と成右の石刎にて洪水をた

る故熊本中無難なりけるとそ右石刎は君 理

に深く御心を用ひ給ひし事感し奉る人多かりき

益城郡

一天正年迄は緑川塘筋海の塘筋ともに至て危く洪水

凧波の時破壊に至ても普請出來し所より水害の

荒地多かりき御外郭の御備として東方は託摩より

飽田の野田村に至南方杉島小岩瀬の間に新川を増

大渡一口に通路を備今村中牟田の塘筋より二町川

口迄緑川筋の堤防を築高め西は二町より白川迄の

海塘を築固め白川高橋川の所に御要害を備是より

千金甲の古城跡に取附是より飽田海邊の七洞入崎

を経て玉名境に至北は玉名の部に話す右御外郭の

堤防東方より南方西方共に堅固に成放水害を免れ

ける是故に五穀の出来事廣太也飽託摩の人民

一右佐藤又右衛門以来の事綴書吟味に付差上候處上

にも感激しくて七拾錢三貫七百目被爲拜領候

安永四年未三月權左衛門幷子宅右衛門庄屋清右衛

門連名之請書筋々當上之書付寫に在

一佐藤又右衛門覺書之内川尻外城町の裏に沼御座候

間申上三十町餘の開仕上申候に付乘馬大小特鎗等

被成 御免候と有村を記さいる故其所を考る

に椎田村の中なるへし飽田記摩の内に其他の新村

有へし

一白川の水理は水源白川村の湧水を源として竹崎の

湧水及所々の湧水を導て數鹿流が瀧の下に出黒

川の湧水を源として鹿漬川に會し所々の湧水導て

黒川と成て數鹿流が瀧より落ち其下に至黑白の二

川會同す是より下白川と號くされは内牧の茶屋會

所屋敷迄加藤右馬允の住給ひたる城跡此所は黒

川を後に備へ前に新川を堀て要害全備せり阿蘇南

郷の士を引率し東寇の異を守らせ給ひしとなん

的石の茶屋より二重の峠迄の間處々に防禦の備所

あり東方は坂梨の大なる坂屈強の備あり

一田地養水引の事は第一瀬田村大なる石の有所を目

常に大石井樋を居磧を營み二百六十九町五反餘の

養水を備へ給ふ淇下に沼山津手永馬場楠村懸りに

磧を居新井手を堀土手口は石井麵にて堅固にし

白川筋の事

其澤を蒙らざる者なかりき往昔小諸侯僅宛の地を

裂さ治られける時は海川の堤防崩れ成にして押移

田地の中に潮の溢る程の事而已有りけるに

君の御世に至右之通海川の災害を免れその御遺

業の積善永代無窮傳る也

右者慶長年中 御外郭之堤防出來に付益城水の流

入りし牟田佐藤又右衛門と申者開明新村仕出

のよし君新村御覚ましませし時上意に今度新村

藤公遺業記

高千四百壹石八斗九升

下牟田村

畑拾四町八反六畝拾八歩

九拾六町七反一畝九歩

内

一田畑百拾壹町五反七畝貳拾壹歩

出来る前は盆城の水御船川ともに託摩様に流落

来る事故田の中海の如き玄海島玄海下ヶ名有水害

田地凡七百町程有田迎手永七ヶ村其中下牟田は

新村なり上牟田上木部小原中木部南笛村合七ヶ村

是なり本庄手永六ヶ村西村平野方指崎西牟田近見

高江合六ヶ村是也横手手永九ヶ村中椎田南椎田北

椎田椎田池畑金光權藤三ヶ村合九ヶ村是なり錢塘

手永七ヶ村今村新村中牟田西新開江中島海氏内田

新開合七ヶ村是也飽田託摩手永の水害田地新村共

に都合二十九ヶ村の田地七百町程は 神君御外郭

の堤防出来て後水害を除き毎年稼穡の地と成也其

中新村の記録愼なる分左之通

一四七

御郡頭衆中

奉行中

九月廿二日

右の如き小鞭也維善拝見しててて佐藤又右衛門

六代之孫權右衛門と申者零落に及候に付安永三年

九月 上に差上度願書付出す時の惣庄屋芥川兵右

衛門書を以郡代澤田又太夫益田慶次へ郡代衆

より郡頭へ被達夫より上達に成是に依而左之通

此小鞭差上候段尤之事に候得共下牟田村之由緒も

是に依て相分候程の品候條爲後年證跡元之通權右

衛門持傳居候様可被申付段御郡代之可有御達候以

上

御郡方 御へ移始る者の軒數言出候様被仰付又右衛門子久

左衛門罷出候楢被仰出候は新村の民は雀の子を

飼立候様随分心を用且乂當村へ入込候者は假合家

來之者主を失候共御免可被下候而將又三ヶ年の間

作取被 仰付又右衛門子久左衛門儀移始村任立

候に付爲御褒美御馬之水呑井小鞭被爲拜領候于

今又右衛門子孫持傳る水香は洪水の時流失す

小鞭 長サ六寸八歩下地黒花塗り 耳以トゥ

託摩郡今村より飽田郡野田村迄堤防を築立水前寺

御外郭之要害稼檣の本を開給ふ事

田に及ける故塘底より石を以て築立白川塘の不崩

様此處に水取磧を營み給ひける故兩手永の田地四

百壹町五畝廿七歩

武百八十町邊反池田 白河塘不破様に

百計町廿七歩 横手

石塘にて堅固に成し故小川突埋る害を免る此時杉

島新川新御城臺一同之經營ありける由毎日朝五時

夕七時二度宛 御出馬にて御覧有し也

この味

も砂流れ下り増水毎に砂を置揚る事如何ともす

る事不能なり依之 維 存寄は白河砂置揚るに従ひ

新地開き共租を普請料に備へ床海際迄新地にて砂

留仕外無之段申達松下太夫被感共通の仕法最上な

らんと被仰其後小山門喜に松下太夫の時白川口の

事を語る小山門喜同意有て白河砂留 佰川不入 の爲

新地築立に成是を砂新地と云於是名將の数百年の

後を慮り給ひ高橋川口の府中に通船永代無窮に

傳へ給ひける故しらす 其澤を蒙らさるものな

かき父次池田横手雨手永田水引の事は慶長以

前は石の所白川の塘く洪水毎に其塘破壊して

芹川 に流入砂突埋横手池田の田水懸り兼早

一外郭の堤防を營み給ひ御要害備りし故託摩より飽

田迄の村々大に水害を免れ新村出來 御外郭の堤

以下の湧水流集畫湖と成其下沼山津川木山川間島
川等して加勢川と成緑川に入此川筋深くして人
馬の通路を停め中瀬橋一口の通路に定玉ふ右に附
ては鯰沼山津の牟田在水害に及ん事を厭給ひ御
川を緑川に移し鯰手永を流來りし所を止め玉今
其古川の跡有御船川の末緑川に入る所新川を堀せ
玉時河底より頭に八の字有る蛇出たり 神君御
覽ましくて此を八龍大明神と堂を立祭り給ふ今
其社尊崇す是故に此塘を入龍と號く其下に大名塘
と云緑川の塘あり其時は御家中地方渡にて大名衆
の百姓築立し故言傳八龍塘より新川堀りの時
御床ルに召して御覧ましたる處に松を植御
床ルの松と尊崇し枝葉障無し誠に 神君の徳化
を奉戴する所謂召伯の甘棠に齊きなり此八瀧塘笠
揚腹附の普請堅されは牟田在中の害と成へし若も
山潮出る事有八龍塘破壊に至は託の下牟田烏
か江の塘を破り流すへし其水の末は海の堰を破り

落すへしとの御遺命也

一四六

藤公遺業記

天正十六戊子閏五月十五日肥後國五十四萬石之内

二十五萬石 加藤公二十四萬石小西へ被下殘分は

兩人御預半分宛可代官旨 秀吉公の御朱印也慶長

五庚子九月小西石田於關原戰負誅に伏す 加藤公

小西跡不殘 源君より被封肥後國御一統なり

一清正公御國中の鍛冶を撰給時菊池家の末裔上野

介信賀と云者玉名郡同田貫村に居住し菊池延壽太

郎國村の傳を受數代鍛冶職鍛煉の者にて被召出

御諱の一字を賜て小山上野介正國と名乗御城内御

用被仰付忍通鉄障子鎗刀釘等に至まて差上候に

付炭鉄料として左之通奉書を下し給ふ

藏米之内千石炭鉄料に可計渡者也

慶長九年八月廿日 清正御判

肥後國御一統且御城經營之事

十二年 清正公の御仕建と云傳後是大濱御國境

迄二里程松原御仕立長洲山の松は上方種松御取寄

植給ひける故木性宜敷也大濱の内虚空藏山は誠に

御要害の地と見へたり他田海邊の七洞入崎より玉

名大濱迄海の御要害深く心を用ひ是を見れは奉感

戴候也

山へ御經營

御幡國茶臼山開き大夫の命を奉じ白河の海口の砂高橋川に入通

の障に成を見其害を除仕法を見計けるに水に

一四五

盗島と云ふ

一坪井川之末白河に入りし所 古川塞唐人町の

裏を堀通三町目の橋に至り夫より下井芹川にし

高橋町を経て海に入此川堀替の子細は第一 御城

御要害の爲其國家府中便利を兼又其次には池田横

手両手永水引の爲也御城の要害は目前に見ゆれ共

慶長年に掘替成る新川の譯不知人多しとなん其

次國家府中の便利は白川は砂河にて後年海口高く

なり通船の便りを失ひ府中より積下の品を始海中

より積登す品々不通に成ん事を慮り給ひて坪井川

井芹川を會せ給ひしとなん今白河の海に入所を見

るに荷を積たる船の通路絕たり加之高橋川の様に

白河の砂流入る故高橋川の水尾竹洞梅洞方へ流其

末放島に寄 近津村の島一名 維善寛政の昔松下久兵衛

玉び御自

三月

身御繩張有之其八月より鍬有之無比類御城成就

に至御天守一巻の事は赫々たる御經營御要害之

事は筆に盡し難し

一慶長六年

正月江戸へ参府ましく御城を茶臼

小田手永石塘新地

八百七十町九反

内

高壹萬四千九百八拾九石八斗

大野牟田同様

右二ヶ所之新型は 忠公御代に出し也

一田畝千百三拾町六反

反撫壹石三斗

高五千六拾三石七斗壹升

反六畝廿一歩 荒尾手永四ヶ村受持

二口合三百八拾九町四反六畝貳拾壹歩

五拾九町四反

坂下手永三ヶ村受持

内

一總畝數百三拾九町四反六畝廿壹歩

恨なきにしも非らす其大に記録無さは此所に不限

嗚呼其古を嘆息す

口村島の地高く養水引の井手堀る時上古一尺五

六寸堀たる底古海の深沼にて誠に竿を差入るに土

底の手答へなくすらと入れるよし山下村の中

舟津下ヶ名は古へ船の津にて有之由一圓大野牟田

にて有けるを忠廣公の御代に御開發の新地なり

所柄之役人及里俗の古老の説村々云傳へけ

肥後文獻叢書第二巻

七拾九町九六拾町

行 末に記百七十町餘の塘なりより西に巡り横島を經

て大濱の川口に至川西は晒の川口なり此所に松山

を仕立給ひ所謂の松原の川口より長洲迄

の間洲高き所は松を植其他は堤防を築立常に風波

を凌非常の時は御要害の備長洲の松山は慶長

名留と

一飽田郡二町川口暉により海塘を固め白川

高橋川を渡り千金甲の古城跡より竹洞梅洞列の七

洞入崎を経て玉名郡小天立花部田見より久島山に

海邊御要害之事

右者玉名郡七ヶ所之新墾 藤公御二代に御開發ま

しくて人民を巻國家の幅を廣め給ひ米穀魚鹽の

産を兼人民永世無窮其澤を蒙るなり

高合貳萬五拾三石五斗壹升

總畝數合千五百貳拾町六畝廿壹步

右者 清正公天正十七年より慶長十二年迄五ヶ所

之新型御開發之次第前條之通

鹽屋塘新地

三拾五町

名切塘新地

六拾町

古塘 新 地

坂下荒尾 百四町七反

新地

池河原堤之事

右三ヶ所の新墾慶長十二年開發し給ひけると言傳

此處も行末塘同様表裏共に石垣なく根張廣くして

かめ形の塘新築の時に御出馬有ける由里俗

の説有れとも年久敷事にて徽するに足らされは不

說也

清原寺腹赤

宮崎出目

鹽屋平原

高四百五拾五石高反壹石三斗

一田畝數三拾五町餘

鹽屋

塘三百拾九間

中一部向一部

藏滿水島

長洲梅田

中水小野

高八百四拾石高反宣石四斗

古塘新地

一田畝數六拾町餘

塘筋三百拾間

荒尾手永三墾

一田畝數六拾町程高反壹石三斗

同百五十間

名切塘新地

高三千貳百五拾石高反抬一石三斗

一四三

種々の下ヶ名有貝島船島折口榎島外島の名

野

右村々は古の海にてありし由其中地高所にあり

來りたる村々の内大野牟田新地出来て後田開作村

も有之由尾田手永伊倉在二十一ヶ村の類も有

中村 繁根木

永德寺高瀬町

上野口下野

濱田 大器屋

野口中野口

高道 山

小濱 滑

一田畝數或百五拾町

一荒尾手永上荒尾下荒尾增永向一部中一部藏滿水島

小野中水梅田長洲十一ヶ村は川水の水なく天

水田の早損所也 藤君之御時池河原貳町七反餘の

大池を掘らせ養水を傳へ給ひ早損を救稼稿

の豊饒を施し給ひ永世に傳へ玉ふ事中々小領主の

及所にあらす十一ヶ村の民其澤を蒙らさるものな

かりき宇土郡立岡の大池に等し 御遺業也

忠廣公御代新型

へたらん時は夏商周三代の年数に應すへし此處に心

玉名郡腹赤

濱着せ給ひしに掉人朝勝見魚を釣 帝に奉是腹

帝に奉是腹を用る人無を嘆息して別の譯を以子孫庄屋役に被

赤贊の權輿なりと古史に在此時腹赤村庄屋屋敷内に召仕度惣庄屋に
内論す

景行天皇十八年五月八代より御船に召

腹赤御贄之始井 庄屋事

と

して相勤候文政七甲申秋閏八月経玉名出在の時

扇崎村庄屋宅へ止宿行末塘一巻古人の事實を問明

めたる子細且朝鮮御征伐の御朱印書等右に記す通

りなりされは扇崎村庄屋儀慶長年中以來勤ける

に此屋敷中に盗賊入事難成若譯を不知して少な

る品にても盗取んとすれは忽身體すくみて手足を

動す事不成此事普く聞へて盗人避て不誠維止

宿の座敷常に戸を打たる事なき由掛金なし誠に

御威德千歳不朽と傳る也斯る尊き事は世に類有へ

からす

一扇崎村庄屋慶長年中行末塘御築立以來今迄連綿なや

之時庄屋屋敷へ被爲入井水被召上茶碗庄屋へ賜

る于今傳尊崇す 雑善 玉名出在之時右庄屋屋敷に入

つしま

御腰掛の石有又供御之池有 神君之行末塘御築立

寺澤志摩Sau

守

右四ヶ所に次舟を置毎日先手より注進無油斷可申御腰掛の石拜見仕候處常並之處に有之候に付地高き

上也

所に祭尊崇様に相談す此庄屋家筋古今未曽有之

景行天皇以前の事は不知 同帝十八戊子年より文

政七甲申年 迄千七百三十七年腹赤村庄屋 連綿

神君此屋敷へ被爲入候時は慶長年にて

として相

凡千五百年程庄屋連綿として勤績たるを感給ひ御褒

詞あり御茶碗給りける先より申傳を善へ云然

るに近年相變父之死後相續之子若年なる故初て他に

庄屋被仰付候段内話す也 雑歎息して奉考に我日

本の天子の外は中華を始萬國ともに未聞也大禹夏

世を開給ひ凡四百五十年にして滅亡す成湯商之世を

開給ひ凡六百四十四年にして滅す文武の世を開給

ひ八百七十二年にて滅す夏商周三代を合千九百七十

四年也腹赤村の庄屋は 景行天皇以前の年數を加

貳百人

千五百人

六百人

貳千四百人

貳千八百人

貳千八百人

三千人

六備

壹萬人

五番三備

壹萬人

四番備

合壹萬人

三備

八百人

五百人

六百人

三百人

八百人

島津又七郎

九郎

良東

相良宮内大輔

鍋島加賀守

羽 同

信濃守

羽柴薩摩侍從

羽柴 柴土佐侍從

藤 堂 佐

池田

加 藤

菅

助守守從

出左伊佐

雲馬豫渡

來島出雲

修 理 大夫

滕公遺業記

ふさんかひ

總都合拾四萬千五百人

合貳萬三百九十人

あんこうらひ城御目附三百九十八大田飛騨守

せひかひの城 三千人

千人

ふさんかひ城壹萬人此内三ヶ所之城々へ見計可加

竹島の城

五百人

かとくの城

淺野 左京大夫

五百人

羽柴久留米侍従

勢也

筑前中納言

備前中納言

壹萬人

此兩人先陣替女

安藝宰相

三萬人

合壹萬千百人

三備

脇坂中務少輔

千貳百人

生駒 讃岐 守

貳千七百人

蜂須賀阿波守

七千武百人

七番

合壹萬人

四備

場へ出たりと上意有女房に不相替罷出候段申上

させ自身裏口より救出藪をくり外塘を越御普請 貳千人

字か

御出馬毎朝未明に御出馬高山日之出馬に飼

料五時扇崎村庄屋八郎兵衛屋敷内に御馬を休め

夫より新築の所に出御有之委敷 御覽まし~

七比より木葉通 御歸城有御供衆は日々代りに

被仰付候由されば潮留成就の日八郎兵衛へ被

仰付候は此後普請其方世話すべき旨の御意なり

八郎兵衛畏て御受申上候處數十日 上の御出にて

心遣の餘りに勞れて翌朝は毎之通起不得して休み

居ける處毎より早く 御出馬あり八郎兵衛は普請

一田數百村村

地产

反 内十三町九反 坂下手永扇崎列六

高壹間石垣な

一塘筋貳百五拾八間

根張十八間築留幅三間中

肥往文獻叢書第二巻

四町七三町八反 荒尾手永四赤村新地

高千四百六拾五石八斗 高反壹不四斗

右は慶長年中 加藤君築立の行末塘井田地の數也

行末所柄繁昌致すべきとの上意有しを行末の塘と

続け又新地の中に小川有を行末川と言傳ふされば

熊本より扇崎村七里餘の所日々 御出馬し

新築の事を施し給ひ日數三十餘日に至築

留に成由七里餘の道日々

千人

七百有 馬 修 理 守利壹岐守

毛守

利黑

五千人

田

三番

後藤大

四備

合壹萬四千七百人

人

松浦刑部卿法印

太夫

三千人

貳千人

羽柴對馬守

千人

此兩人先手二日替 取非番は二番目可備也

七千人

小西攝津守

加藤主計頭

壹萬人

慶長二年二月廿二日御朱印

三備

伐御陣立之御書附被爲拜領候樣奉願御書付被下置

しを于今所持仕寫左之通

場へ罷出世話し處に御出有て八郎兵衛儀不相替

出精甲斐々々敷者と被賞新地三町餘被爲拜領且何

願之筋は無之やと御内命に付乍恐朝鮮 御征

一小田手永原倉村半高山と云處あり是を御陣山と云

玉名郡御陣山附山鹿往還筋防戰地

なん、始坂下にて古の事を問謀りし時、

古老の手代上村太兵衛聞傳へたる事を書見る證

前文之通天正年迄は小領主地を裂いて、僅宛の領

地を所務せられけるに、年久く世剛て合戰無止時、

海川の堤防を営む、無力處より、荒地多稼檣の開

ざるに神君の御世に至、 海川の堤防堅固に成、

一圓殘る所無稼檣の田地を開、永代無窮に傳へた

数、数量は大墾にもまさるべし、今所柄

の官に史録無きゆへ、里俗の開傳へたる事と水

利地理の形容を見、 内田坂下荒尾三手永の平田五

e有へし、又山里の地は荊茂りて、耕稼の地

少かりけるを、山村の間迄開明て耕作する畝數量

難し、天正以前の年に割算せん時は、廣太の

出来増なるべし、是によつて逐年民數増長す、則

天地の造化生々の萬歳に傳ふ、誠に祇稿の御神

なり

處は、川水

等の入らざるたけ堤を掻立たる所

も出来しと一三九

行末塘新型の事

一説に勢隠山といふ双方山高道筋之處低東西より

登りつめの處平地なし若敵らん時双方の高山よ

伏兵興一戰に挫く爲の備なり是より熊本迄の所

々に防禦の處有中にも五町手永坂下村黒井坂は双

方岸高く一騎打の所屈強の防戰場なり植木山も

高山に對する御陣山なり南關より熊本まで防戦

味取

の場所有凡植木町

元年の新町 植木町より熊本出

町口まで往還を掘旅人常に御府中の形容を不見爲

の御備と云傳田山本の境向坂は双方登立の高

岸にて防戦場なり五町手永の馬狭屈強の防

戰場也此處東は高村に周りたる高岸なり徳王村

周る高岸なり若敵來ん時東西の高岸を鍬を以て切

落さば人馬の通路断絶す其期に至れば坪井川井芹

川吐合の下に磧を居兩河の水東は高山室に溢登

西は釜尾の下迄溢登り双方共に湖の如く渾て人馬

の通路を絶御備也寛政入丙辰洪水の時維善此所に

來東西の洋水を見るに高山室の下まで如湖洋へ

西は釜尾の下迄右同是を見て名將微を審に施

し置給ひたる御明徳を感戴

一玉名郡坂下内田雨手永の地は、引並たる所あり、

地利水理を見て、古今の事を黨正以下に問謀るに

藤君の治に至地利水理ともに治定し、稼稿の道

存分に開け、民其口得て安處せしとなん、如何と

なれは天正年までは、 久世亂御國の小領主多所

々に城郭を構、合戰無止時、或興り或亡、郡村哲

も不稔、人氣反覆する時節にて、放火亂妨等多有、

折人數離散して郡政難行山里の地方は、荊藏茂

りて耕稼の地少く、川筋海邊は風波洪水に塘崩れ

し儘、塘筋に手を入る力無古田の中すら、 荒地空

地と成程の時節にて、海川の塘を築立、古田の荒

地を開、仕法行れざりし故、新地を開稼穡の増事

は存悪も無かりしに 加藤君の御世に成、人民安

稼穡之開流事

一寺田村の下より向津留、桃田千田河原、小濱、

濱の様新塘を之束糖なり

掘替菊池川

築き新邑八ヶ所御制作之時

大濱町の遊に御休所の跡に九尺に二間の堂を建

十王を請して國君の御休所と申傳誠に御

化之後世に遺所也

て、石塘の井麺より海に入る

肥受文獻叢書第二巻

に、川上の内田村に満潮差上りし時の勾配を

考るに、河西は月田、溝上、青木、玉名下社家、

奇名、秋家、兩迫間、川崎、秋丸、高瀬町、永徳

寺、滑石、栖川口なり、河東は藤田、原口、江田

白石、上小田、下尾田、山部田、10稻佐村

の所 の下に安楽寺、下村、津留、寺田、向津留

桃田村也、是より下は新地村なり、往古菊池川筋

上内田村迄潮滿登り、且木葉川筋、稻佐村迄潮滿

登り、且船島山伊倉唐人船の大木を目幟にて古

の滿潮の勾配を考、稼田の古を考えるに、上古は

人間少かりし故、海内の洲高なる所を撰、耕作仕

來し由、年脛にしたがひ其人數多く成作足らざる

心して古田の荒地を開、新田を作り、稼稿の道開

けしとなむ、固是維善 小田手永新墾の水理を推し

て、坂下内田兩手永の古を問謀るに、往古は高瀬

池の上内田の遊迄潮滿登り、又河東木葉

高瀬川

川の奧に出る、稻佐村迄滿潮登る故、同所の山手

に古の椛からあり、 夫より北に廻り、上小村の

山中に砒からあり、又社家村の田中に船島山あり

彼を見是を聞て古を考、その實に當るべき所を問

三八

と同し

三七

一石塘之内久島山の方に、十八間洪水落之所有、

洪水落場之事

水を引入伊倉の田地養水に備え、此川を唐人

一大型成就の爲御御能興行有、黒而其能面を村方一菊池川掘替之時
寺田村之内に井槌を居、 木葉川の

へ被下置于令所持せしなり

唐人川並十王堂之由來

改京泊村と替たり

無し

す

手永、千田村之者

人柱に沼留、成就に至なり、右人柱の鬼を大菌

村田中に塚を築立、其中に安置有、毎年十一月廿

五日祭日に定、祭主は大薗村幾右衛門と云者、先

以來主に成、其方の田主七人にて祭の永年無

懈怠、古より海開の時は人柱を沼築留例あり、攝

津國長柄の人柱、同國兵庫築島の人柱、備前岡山

沖新田の人柱、三ヶ所ともに寺社を立其鬼を尊崇

有是を以、海開の難き事を知る

一横島の御御一慶長十年十一月廿五日、中富、へ諭て

日、則藤公社稷の紳也

郎へ社稷宗廟の事問ける時、 境野鹿子木維善頂に經塚有、此新地築留の時、塘底には人

柱を沈め有、經塚より法華経を読誦有て築留成故、

經留の塘と言、本の地名は石塘なり、横島南海洲

開新村仕立に成、是を經留村と云

後年字面を根敷石の上に土手築立、洪水田中に溢れし時、此

所を破り水を落備也、其譯を問ふに、菊池川古は

此所の様に流れ來しを、 桃田千田河原にて留、

今の河筋流し給ふ攸、高瀬、御藏、御茶屋及高瀬

町

天正十六年鑑 人家共:漂沒せん事を御思惟有

桃田千田河原の川塘床に敷石を營、其上に土手を

築立、御臟漂沒の洪水の時は、土手を破り川水

を殺さ、水害を救え御端を付置れし由、然る時は

新地に溢れ入水石垣十八間の水落所より海に落

水理之由、又久島山の南の腰を深く掘て、尾田竹

崎邊の洪水を落備有、其下部田見村の海塘之根に

敷石を設け、水害を披備有、然るに今其水井手

之下に、新開出來水理塞洪水の備を失、嗚呼名

特の古蹟を廢せん事を嘆息す中に井手掘り落

維善此所分之時村役人

候相

川と唱ふ、古の大河筋唐船渡の所にて川名に

附しなり、此流下に至尾田村丸池尻の流二十四萬石小西行長へ秀吉公より被下置、殘

八幡不此所を丹倍の港と云、此所に繫の木と云傳 高五萬石は兩人に御預也、然るに今の總高七十五萬

ふる大木あり、此地は平田より遙高き陵也、古の潮 千六百五十五石餘と成袄近年領之神は天草肥後國中也

則を見測りて所の人に問謀るに、久島山の東を巡り、差引二十一萬石は、玉名郡新地御開發の比より、

部田見村、尾田村、竹崎村の田地は古の入海にして、稿の地を御制作と見えたり、是を以先師境野嘉十

往古之事なる

櫻井、 上櫻井、櫻井町、西小町、伊倉、北方、中北、

中尾、中北帳、東北、下村、東北新町、東小帳、 唐

八町、 桃田、立山、合二十一ヶ村は、前々より有來

し海邊の村々にして、畑地は有來りしとなん、田

大濱町、横島村、大薗村、

地は慶長年中の新墾也、

北牟田村、川島村、小野尻村、千田河原村、小島村

合て八ヶ村は、新に制作ましたる村々也、田畑

高二萬千八百八十石餘之由、

八百七十町九反餘、

御先代之新墾一萬千四百四十九石、引殘九千八百九

十一石餘なり、往古より有來ける田地より、多墾闢

し給ひ、一手永御功業を以て、辱も尊神肥後國御一

統ましたる御遺業を推量るに、知らすしらす、

御仁政の澤は蒙らさる人民なかりき、天正十六年肥

後總高五十四萬石之内二十五萬石

御先代海開の第一を誇るに、小田、手永、久島山、横

玉是より北の方、野邊田、横田、片諏訪、宮原、南方

名島の間を流れて海に入、菊池川を高瀬町の前より大

野牟田を経て、今の大濱小濱の間を流し海に入、雨

島の間を突埋、新村八ヶ所制作、且海邊二十一ヶ村

の入江新田地出来、 廣大の耕作地出して、天正十

六年後、五月十五日當國五十四萬石の内、二十五萬

石に對し玉ひ、六月十三日大坂御出船、同廿七日熊

本へ御着座、同十七年正月廿八日石塘の鍬有り、

御入國後二百日餘なり、慶長十年成就に至る、横島

村順右衛門古記に在り、天正十七己丑年より、慶長

十己巳年迄十七年に留に成、年数を経るに譯有、

天正年迄菊池川久島横島の間を流れ、河底深き故、唐

人船入津の所有今伊倉に唐人町の所有 天正年に至唐

清正公勝公遺業記

嗚呼公、上に事るや忠、下を御するや仁智勇に至る

時は、古今絶倫也、御武功の光輝ある事、 和漢に赫

たり、されば肥後國天正以前は、數主僅宛の地を

裂きて、是を領し、政令各異なり、加之合戰無止時、

放火亂暴不穩、民安堵する事なし、是に因りて、海

川の堤防を堅固にして、洪水高潮の害を除事不能、

於是民力を合せ、築立たる堤防破壊に至り、稼田荒

るれ共、數主自便を論じ、水利の性を失い、堤防を

築くこと不成、或は其力なき故止み、且大川に堰に

營み、田水を取る力なき故、河端の民稲を稼する事
不能して、千萬歳を経たりけるに、神君常國一統を
至り、政令嚴明、寛にして以て治給ふ、故に人心恬
然として皆是を感戴す、御城を茶臼山に築き、四方
の要害、御國境海陸防禦の備、質に四塞の國と爲し
玉ひ、海川の堤防を築固め、高潮洪水の害を除き、
荒地を開き、大川の堰を營み、大仁田水に備へ、將
海川のを熱闘有りて、廣太の田地新品を制作し
て、民産を授給ふ、開闢以来、不一統肥後國、慶長

藤公遺業記之序

三五

鹿子木維謹識

天保壬辰冬十一月

年に至り、御一統之化、感戴する事、大禹后稷の遺
業に等きなり、孔子曰、有事者必有武備、有武備
者必有文事、神君者文武兼備の名將也、然るに武備
而已を舉けて、記を撰み、 文事を撰む人有ることを

不聞.於是維善内命を奉し、邦内を巡りて、御遺業

の永世無窮に傅ったるを見、官舎の役人、里俗

問明めたる事而已を記して、御遺業の化、御國の民

たるもの、不戴者無さを、内命に報す、今獪洩たる

事を加増して、文盲の拙き筆、愧を顧みす遺業記を

撰ふことしかり

候故煩能成只今罷下候と申酒を乞出し給候て潮時

宇野東風 古城貞吉校

程も過き如本書盗出し申候其刻土佐は薬物より少

引さかり爲見」に出候體に仕屋敷の侍共を召連 助兵衛嫡子右門三郎と申候千五百石二男喜平次に三

若あやしめ申事候は、喧嘩の様にて討果し申覺悟に 百石三男藤六に二百石給候右門三郎藤六兩人は早世

出候へ共無異儀」通り申故土佐は屋敷へ歸申候 仕候私共親喜平次に二百石加増後六百石加増にて

扨川口に二ヶ所の番御座候私に水樽に二重底を 千百石罷成候兩代共厚恩濛申候故二君に仕申間敷由

仕下に内儀を入上には共刻雨の後故幸濁り水をため 申達配所庄内へも忍參申由終病死仕候某共右之首尾

船に乗助兵衛儀は番船に乗移り本より番衆と知人ににて貞享三年迄行年七十餘歳空人にて罷暮申候

も供仕於宇土討死を仕候

惡敷成候様にとのたくみにて緩々と居申に船頭申候

は潮惡敷成候間早船に乗候へと申に付私の船に乗候

へは彌悪敷成候故助兵衛申候は一刻も早く爰元の

様子清正に申聞せ急き上り申様に可仕候「次の番

へは爰元にて船中御改候段先へ被仰遣」御番船に

遅々不仕様に通り申度由賴み候へは尤と被申次の

番船へ小早にて被申入候故直に乗通り豊前國仲津

へ致着船黒田如水老へ大坂の首尾共具に語申候へ

は古今無比類と直に被咸候彼地より陸を参候

故路次爲三警固如水より足輕五十人被差添熊本へ

着申候清正は宇土への出陣も大坂の左右を相待延引

候折節にて預咸一廉大身に成河内と申處に可波

置山被申候翌日清正小西攝津守居城へ出陳被仕候

故助兵衛此書の五に梶川才兵衛と書出し申候は實は梶原

兵衛景俊と申候某共爲三兄弟」祖父にて候助兵衛儀高

麗陣之刻清正手の惣奉行被申付」候則自筆之判形

于今所持仕候 石田治部少輔謀叛之砌諸大名之人質

大坂城中に可被之沙汰有之由熊本へ相聞之清

正助兵衛に被申付,候は早く大坂へ罷越大木土佐と

三密談 妻女を盗出し可下由被仰付候に付大

坂へ上り候て方便に申候は清正は治部少輔方を仕候

に付様子見籍のため上り候と申なし大坂衆と知人に

罷成折々參會仕候中に土佐と申合虚病を搆へ醫師の

處へ通申由にて乗物に乗綿帽子をかぶり大夜着を着

ひたし毎日番所を通り申候初の程は度々に改申候へ

ども後には例の病人ならば通り申様にと申に付廿日

拉撒滿正記第七

玄冬廿四日に本妙寺において千部の法華経讀誦の結

願に住持日延上人の法談の時家來の者残らず聽閉し

けるに上人御出有て高座に登りたまひ法華經方便品

を訓讀有て法談は仕給はずして先宣は何れも御存

知の事なれども野僧は元高麗國の者なるを八歳の

き文祿年中の亂により父母の逝くへをしらず孤とな

途に迷ひ居たりしを高橋三左衛門と云者にとらは

れし故定而生害にあふべきとをさな心におもひける

所に一命を助り剩清正の御介抱にて人となり本朝へ

召連玉ひしに文字の平反をば辨せすといへども一連

の句を漫に綴る真似をしければ此童子をば出家にな

本妙寺法談の事

にても下説に云叉世間にても今に云事也予其頃若年

たる故虚實分明分におぼへさるにより先年信州へ行

中川入道に尋ねければ其時の廟所の普請奉行は飯

角兵衛三宅角左衛門 したるに萬事の本しめを

我仕たる故具に知る事也石のぼり出したる時も

右の兩人と同道して行て見たり何やらん文字を彫付

ては有たれどもえて字性見えざるなり清正房と云

名有たりと云はり也たとひ清正家の者誰が咄候

とら虚説也と申されし也

1111111

終

續撰清正記巻第七

の来るを防ぐに黒兵なきか容花即焉て墳際一拍の

塵と成り命葉忽落て幕數庁の煙と立上り給ふ事惜

に獪餘りあり啼涙するに忍びかし上古在原の中將

の昨日けるとはおもはざりしをと詠じ玉ひし言の葉

の末迄もおもひ出られたると宣ひ上人落涙し玉ふを

見て満座の聽衆一度に瞳と泣てはらくと座敷を立

寺外へ出ければ上人も高座よりおりてすごくと内

陣へ入給ひ畢

シボミ

御父母の菩提とはせ給ふべきと仰有て甲州身延山

へつかはされたる故關東を行脚して大善知識の法

の端に陪高租日蓮大菩薩の流をくみ忝も金襴の伽梨

身にまとひ今北高座に上る事偏に日乘大居士の厚

思誠以忉利より高く蒼海より深し端的何をもつて

か此恩を報せん嗚呼哀哉朝に紅顔有て世路に訪れど

も暮には白骨となりて郊原に朽ぬと云事今更驚べき

にあらねども大明百萬の軍兵を蔚山においてきり退

武名を朝鮮國に残し此國柳瀬表において一番鏡を

合加之天草にて雨城を崩宇土柳川の城を無爲に落

し名を日域に振ひ玉ふ武將たりといへども無常の

一自然各分別相滞虎藤爲に不可然義於在之者前 清正房と名書付有たり清正はむかし清正房と云て

廉御奉行衆迄可:申上,候事

六十六部の經を諸國に納たりし僧の再誕なりと肥後

右廟の普請いたす時石の櫃をほり出したるに其櫃に

一虎藤幼少に御座候とて諸事我儘一我等式事奉對三兩御所様自今已後表裏別心毛 木土佐金官が棺も清正の跡にて興せ同く宮離の

頭仕間敷事

一虎藤幼少に御座候處に無相違御國被仰付誠以葬職は十月十三日に西光寺原におるてとけおこなひ

忝奉候 御所様御厚恩存忘申間敷事

京都本國寺の持日桓上人の引導也追腹きりたる大

人の家老兩人の使者一度に家康公秀忠公へ御禮申上

忠廣の供仕九月下旬に熊本へ下着致候也

清正葬禮の事付廟所の事

起請文前書事

たる事也

右之通起請文いたし國中の仕置の様子仰わたされ五

111111

並川藤

以上

肥後文獻叢書第二巻

日

上候扨肥後より後何公Sたしたる五人の使者に

參たる兩人已上七人家老に仰付らるへきとの義を江

戸において本田佐渡守殿より水野隼人殿を以て内所

けるに和田備中飯田角兵衛此兩人は御免被成様に

隼人殿まで兩人びとひたしける故五人の者共

ばかり家老役仰付られ國中の仕置等清正代にかはら

ざる様に申付べきよし上意有則家老共に起請文仰

付られ候也右之使者に参りたる兩人は別紙に起請文

八月 金右衛門

下川又左衛門

加藤與左衛門

加藤清左衛門

加 に仕間敷候乍去

虎藤爲に可然御座候者各致三相談可申付事

一如何様之知音叉者親子兄弟親類等と云共虎藤に存

替贔負編頗之覺悟存申間敷事

内に左右に双をきて同日桓上人の引導なり廟所は本

書の通中尾山に建也右の兩人の者共の廟も日乘大居

士の廟の左右の脇にならべて立置也扨本妙寺は元熊

本に有るを引中尾山の麓にたてたる也

檀撰清正記巻第七

慶長十六年七月晦日

已上

三番備頭

二番備頭

一番備頭

先手三組の備大將

肥後國中知行方

其外萬奉行

熊本城留守居之者共

清正いとこ

田寺久太夫

清正いとこ

中川壽林

下川又左衛門

其上

いとこ

中川 周防

加藤平左衛門

並川金右衛門

吉村橋左衛門

和田勝兵衛と

清正内義の妹

ひばり

成田彌兵衛

但清

妹

左

人近

森本儀太夫

飯田角兵衛

三宅角左衛門

下川又左衛門

加藤與左衛門

·志 守

111

續 清正跡相違なく虎藤肥後國拜領いたし候事

清正跡相違なく虎藤領いたし入國仕る時秀忠

公の一字御免被成 加藤肥後守忠廣になりて御禮申

抱奮参の者小身なれば必其家不和にして齊さる子細

有と宣ひし故也

右之帳指上候を家康公御覽有て被仰しは思召より

人数は多有清正身代に應じて高知行とりたる者な

きとの御意有ると云下説有し也人數の多子細は柳

川者残らず抱置又宇土籠城いたしたる小西者筑紫家

の者三家中の者共が慶長六年より加りたる故過分に

有し事也又高知行取のなき故は清正常々宣ひしは一

萬石取一人持よりは五千石二人持たるがよき子細有

高知行取無之殊に新参者に高知行取る者を

右之外千四百廿一人大小身共に騎馬の侍有之しは別

紙に書上申候知行高足輕の數迄記し上候へども事長

2故畧之矣

右二十人之者共人質を出し在江戸させ爲申

青木金兵衛殿

加藤美作守

加藤清左衛門

右兵衛殿へ

圜悟墨跡

正宗

御脇指

助眞

御太刀

家康公へ

求堺

御茶

御豊後堺

指

來筑後堺

長御太刀

光

光

秀忠公へ

清正遺物之事

兼光脇指

す通定て家老と名付たる者のなきにより一門の中

役人の内にて五人清正遺物家の者共右之書立持て

駿河に伺いたし候也名は左に記す

右に記す兩人の使者駿州へ伺いたし口上の旨本田

上野守殿まで申達る翌日はや清正逝去の由つげ來

るに依て上野守殿より仰わたさるに家の侍共の

家名知行高諸役人迄具に書立家老共に持參いたすべ

旨肥後國へ申遣す様にと青木金兵衛と云仁をもつ

熊本へ此旨を飛脚を以て申けるに右に記 御脇指

肥後文獻叢書第二巻

脇國越平後八代城代

在番

中川太郎宇土城代

豐後

作

水俣城代

小清正ぃとこ

佐敦城代

後 云馬

中村將監

清正ぃ

と後丞

矢部城代

と右

加藤與左衛門

日向界

ぃ阿蘇城代

加藤萬兵衙

清正又ぃとこ

南關城代

加藤清左

加藤美

清正

家來の者共の書立の事

右之遺物共指上無相違何も納たる事

本田上野介

當麻脇指

本田佐渡守

以上

延壽

上線守殿へ

御茶入ほし

御脇指

御太刀

左文字

常陸介殿へ

御脇指

11110

續撰清正記卷第七

清正逝去の時家の者共駿河へ伺いしたる

一二九

に往生有て必定成佛とこそ本國寺日桓上人は引導し

妙典の功徳にて六道四生がたき事也

を出離して眞如寂光の浄土

永代成する

有べからざる者也もとより法華宗門の心は此大乗り是を以て見れば高麗人も純柔純弱兵と斗りは又申

かけの鉈を取腹十文字にかき切死たりけ

續清正遺言に軍神に成給はんと宣言の事

に戴せ城の上一戰を途べき也とありかやうの義は

何者が私に作りて虚言を書る兎角の是非申がたき

事也清正一生の行跡常の志を以此書の始終を能々見

詐實鑑たまふべき者也

大木土佐達也家康公は征夷大将軍にて駿府に御在城にて大御

所様と申奉たる時也利家は大納言にて加賀の國主た

る故江戸駿河へ諸大名と同じく参勤有るをならべ

て一所に書べき道理曽以てなき也

清正家の者への一通の遺書の末に此判形を侍共

追腹きりたる様子の事

給て淨池院殿日乘大居士と戒名を付にて鑑らるべ

き也

御公義への遺書に家康公利家公と書たる事大きに相

追腹りたる事は本書のごとく六月廿五日

の辰刻に私宅において切腹いたし候ひしとき則家老

共へ此旨申達し何も来て様子を見けるに三宅角左衛

門けるは扨々武逆に叶侍成異國本朝にて數度

忠功をいたし御厚恩を蒙り今又黄泉までの御供致事

美布武士也と土佐が死骸より流出したる血をと

て我が手の上に置いたゝきてなめたり此義是非は

斗りがたけれども自餘にて聞きる事なる故誌之也

金官と云朝鮮人は同廿四日に切腹せんと致を兩人の

子ども是を見脇指をとり色々教訓してとめ脇指を

かくして丸腰にして置けるに十四五日も過ける故思

といまりたると子共も思ひ油断したる時分がかけ

をよび入古桶共の輪を懸させて見居るが人のなき

時が本書に清正遺言に具足を着せ太刀刀をはかせ棺に入

納べし末世の軍紳たらんと云々右に記す無言と云に

て申に及ばざる事なれども是獪の印は和光同塵し

衆生済度し給ふ垂跡の神は格別の事也末世の衆生

の身として今この娑婆に輪廻して軍神に成なんと念

はばかへつて修羅道の苦みを脱ずして遺言相違の證據の事

かく寄件の使に参る通申ける時一言も物は不被仰

に病中に熊本にて家中の大小身者共を振舞歌舞

指る故則角兵衛には此旨申渡す備中は朝野左京幸 妓を興行し諸待に直に云おき有ると記す皆爲也右

長重病る故に見舞として伏見より紀州へさし越者 に予書記したる通病日々に重たる故貴僧高僧集り

幸長逝去あらば逗留致葬禮に逢候様にと有紀州へ 數百部の法華経を讀誦し慈救延命の法種々の懇を

遣しけるに早幸長は逝去有て高野山にて葬禮有故高 Sたせどもかなはず醫師數を盡して参集り倉公華佗

野山へ参り葬禮過六月十七日の酉刻に熊本へ罷歸 が術をつくし君臣佐使の薬を施しけれども更にしる

則登城致したるに右之通一門の者共申渡しければ備 しなくして天なる歟命なるか春秋五十歳にて本書の

中申けるは各の仰を背にては無之候へ共長々在江 通六月廿四日に逝去也右に記す通病の初より舌かな

戸仕直に紀州へ参只今罷歸候也其上今度は大事の御 はずして物宣ふ事ならざるにより公義へも家中へも

使の事なればかた以御免有様にとて餅し申け 遺言は無之候増筆の下川兵太夫に一通の遺書

れども各入札にて其方と角兵衛を指つめたる上は君 を書せたるとあるは大きなる虚言如斯覺へ候へ

御本復有たりとも是非の仰有間布事也一刻も早くし ども予其節は幼少の事なれば失念にても有かと不審

たく有被出可然候其方の被歸候を待かねたる に存態と書簡を認信州に遣し候て中川周防入道に尋

と一門の者共一同に申により則支度同十八日の 侍れば御遺言及右之七ヶ條法度書共跡かたもなき

卯のに角兵衛同道して清正閨へ何して枕もとちのよし自筆にて慥に申來候也

事

有て云出す者なきは常々家老と名を付置れたる夜を日に續で駿河へ参りける也

御目を少ひらき打うなづかせ給ひて御涙ぐみ給ふを

見て兩人の者も足が長さ別の御暇と存袖をしぼり

退出し者

なければ近き一門共には城共を預置萬事の仕置は

自身付られる故也然るにより一門の者共外の

城代致たる者共寄合入札を以て遣へきに定め扨入札

を開ければ和田備中飯田角兵衛此兩人に惣入札に 本書撰清正記第七

人に過奉公を仕える者は云に及ば 復あるべき事は十に一も有がたかるへしと見及た

ず子共孫共迄も重科成とも輕罪に行輕科ならば宥 未存生の内に駿河まで使者をつかはし清正申は我

有べしと兼てより定置れしにより奮功を致たる者は 病次第に重り今度は助がたく奉存候相果候に於て

忉々有難き御情かなといひて感涙を流し彌子孫に は虎藤若年の事にて御座候間御前の義よき様に奉

聞老若忠功を勤る故法度を背者鮮然 賴旨本田上野守殿まで申つかはし有て可然と云け

者又新参者不足におもふべきと云へば却てさはなく れば各此義に同じけりさらば誰か使者に遣すべき

して有がたき君哉先忠を思召忘ずして子孫までに及とに指圖仕がたき子細有若本復被成る時誰が

御情はとかく申に及がたき也かやうにたのもしき主さしづにて此者はやりたると仰有時かならんと

の數書其奥のしめに右條々於三違背之輩者速可

被處科者仍如件可入者也と書れた

る事も有估の様に見えけれども子細の有事喩

ば何事によらず自然法度を背たる者共五人も三人も

有に昨今抱置て何の奉公も致さぶ者も有又天草高

麗宇土方々に粉骨を盡して忠功たる者も其中に

有て同罪に行ば光忠は皆空しく成也數度の忠功

家康公と秀頼公の御對面の事目出度相濟御暇被下

病に付て駿河へ使者差越事

清正君の下にて一度忠功を致餘慶を子孫に残さん事これ

傳虚をば萬人傳實と云語に等し上代異國にさへ

有る事なれは今此作者の錯りとも云にはあらさ

る者歟

清正法度書に世間に替える事一ッ有何事にても法度

に芭蕉を書るに似たり又こに記たるは一人

にたる幸なしとて法を重じ一命を輕じたる故新

参者禮讓を以古参に交參は倹約を以新参を伴故君

臣合道朋友和合して清正一代は國に治り民安堵し・

此君萬歳々々と蔵ひたる事也

清正同年五月下旬に熊本へ下着ある中より氣色不

例して次第々々に病煎り熊本へ城の二三日過ては

舌不自由にして物曽てならず豚もよろしからざ

るによつて治がたかるべき由醫師ども申により一門
の者城代ひたしたる老臣共相談いたしけるは清正本
たし又は諸と見えたり誠に武道用大國を治んとは車一輪
にてまはし鳥片羽にて飛とおもうなるべし清正文
道の端を學れたる證據は笹屋と云儒者に江戸上り
下りの船中にても四書をよませて聞給ひけるがあ
る時伏見にて論語に自手朱引を致玉ふを子飼の猿
常々傍に居てつくづくと見けるが清正用有
わたる跡にて此猿筆に米を付論語にめたと塗付
たるを見玉ひて上古より猿は見る事を學と見えた
り昔有僧終南山に隠る時に袈裟を失す猿これを盗
み其身にきて岩上に座す羣猿これにて座禅す
此猿たはふれに袈裟をかけ人まねに座したれど
も其功徳によつて成佛したるときけば此猿もわる
さに論語に朱を付たれども少は聖人の道にかな
べきかと宣て一笑し給といふ物語を小耳に聞ける
間武勇一偏の大にては無事必せり然るにおいて

は本書のごとき法度書出されまじき也

右之條々晝夜相守べし若右ヶ條難」と存る輩於有

之者暇を可申速邃三吟味男道不成しるしを付可有

追放事不可有疑仍如件 加藤主計頭清正在例と

あるを能々鑑み給ふべし先つ寅の刻に毎日おきず

して卯辰の時におき弓鐵炮をうたずして双六を

打鷹野狩には出ずして花見月見に行木綿紬斗を

きずして紗綾羽二重の小袖を黒米の食は喰ずし

朝夕白米の飯を喫し相手懸てはさして五人

七人出合語無不にはなくして謠を諷を打

毎日人を殺すべきたくみはせずして聖人の道を聞

慈悲心ありふつしかにはなくて歌を詩

を作り夫にはなくして身を嗜み萬事に花車なる

少人までも法度違背したる大科人に成永代男の

ならざる印を付て追放さるにおいては清正家に

心あらん武士は一人も堪忍を致間敷と被存候肥

後入國より清正逝去迄一千有餘居る侍共を替

一覧有て世間の人々の思召所近頃恥敷候併予が祀

も親も肥後へ入國の翌年より逝去巳後まで奉公致

て居候が右之法度の條々勤がたきとて暇を乞たる

者も又法度に背たるとて男道のならざる印付て退

出したる者をも一人も見も聞もしられたる物語一

度も不承候いつ頃か何者ぞ我心に任て書置たる

反古を見出して此書の作者若年なる故貿歟と思ひ

書記候成べし倩思に此法書は上古摩詰が雪裏

此者は本書に名を記たる故に書之外

また有之大勢たる故名を記さず予が祖父も紹巴

の流をくみる故親もならざれども歌のの

末にも連りたる事もあり又香車風流なる事有て手

よはきことも存ればいかにも女の様になるとあり

此事も相違の證據には其頃は茶湯はやりて古田織

部數寄の宗匠にて道巴覺甫とて兩人織部弟子に名

えたる茶湯有けるを京童共が文殊普賢と申たる

也其道巴を二百石知行下しおき半年ついくまもと

に居て家中の大身小身ともに侍共茶湯方稽古いた

数寄屋を立或は座敷に圍を付て夏は風墟の茶湯

冬は壺の口切の茶湯に清正を申請又傍輩中にも毎

年茶湯Sたしたる也此頃小性馬廻の若者共

たしけ七月八月時分は大かた毎夜有たりかやう

のも國中平均に治りたる故なるか一度も笠着の

場に何事も出來す毎度恙なく百づひたしたる

事也事くどきやうなれども金右衛門齋藤立本此兩

人連歌若き時分より致し後は上手になりし也庄林

隼人も年寄連歌透になり素丹指南を請後はよく

せし也加藤右馬亟中川周防出田宮内連歌透にて仕

€

武道のみ有し様に開およびて何者か私に書る

湯にて呼候へば六ヶ布事に思ひ明朝は去がたき隙

入或は精進にて有又は伐に出氣になりたるなど、
ひびて行きると云事を清正聞て夜話に宣はきけ
ば小性外若者を數寄致す者共が茶湯にて呼
ばかれのこれのといひてゆかざる様に粗聞及たり
近頃不心懸也今程は世間ともに數寄はやる折なれ
ば何方へも使者にやりたる時清正へ馳走のために
茶をくれられん時様†能呑てこそ我ためも然るへ
き事なるに時宜作法散々取亂ては清正迄の恥辱な
るに數寄Sたす者へは此方より望みても折々ゆき
せめて人中にて大恥かぬ様に呑み效ふべき事と
咄の様に宣てより若輩なる者まで數寄稽古いた
しる也子は其頃は若年なる放委しく不存事な
れども香車風流をやめて田夫野人にては茶湯はな
るまじきと思はれ候上城の本丸の内にも數寄屋
有て家の者共折々清正手前にて茶を紛りたる也
又山崎と云所に花畑と名を付色々の花を樹泉水を
掘山を築様々の風流を盡し数寄屋を立られたるが

今に残て有と聞および候か様の事どもをしらずし

同靡傾治安家待也と云々然

るに右の法書の如くかたづまりたる仕置にては

近世人を得て諸人和合はなるへからさる歟仁と徳

と云事を一圓らざる法度書也又詩聯句歌を詠る

こと停止と書たりさもあるへき事かな共傳たる

者の人前にて三十一字の言の葉を或は長く或は短

くいひ連歌誹諧の上下もしらざるが武士の道とも

歸之三人之死解三人之難救三人之患濟三人之

急者徳也とあり然は兵書にも我明徳を明にして

仁にそむかぬが第一也三略輿同好靡不成

ユルシ

強者徳也剛賊也と云々又六韜仁之所在天下

右學問と云は兵書ばかりの事と心得たるか君に忠

つくし親に孝をする事は兵書より出たると思ひ

て書しと見えたり三略に軍織云柔能制剛弱能制

第七學文の事可入情兵書忠孝の心懸專用也詩聯

歌を讀事停止たり心に香車風流なる手よはき事を

存候へばSかにも女の様になる物也と云々

可不愼也とこそ古人も云おきしに人をきらん殺

んとおもふ心斗持と云仕置は近頃珍布事なり自餘

の事は不存清正家には無之事也

申されまじく候言新しきやうなる申事なれども上

古源雨家の公達に歌を詠詩をつくりたる人あま

有けれども女の様にもなり給はねばこそ今に英

雄の名殘て有り他の家の義は不存清正家にては

法度これなきしるしには清韓長老は 清正家

來の者の子たる故學問の時より清正取立玉の朝

鮮國迄も同道Sたし大明人との書翰の通じをさせ

玉ひ歸朝有て熊本に小庵を結び座す内に詩聯句の

指南をえる侍共近習の小性にも外様の者にもあ

また有り又和歌の道は法橋紹巴の弟子もあり又素

丹と申て九州にかくれもなき歌道を心得たる老翁

熊本にありしに便りて連歌の指南を請て月次の連

歌の方々に有たり又笠着とSひてかたはらの辻

に夜に入て燈を立一間程に幕を張て其内に執筆一

人居て發句一句して出て吟ずるに何者成とも望次

第にあみ笠を着顔をかくし行て出次第に付句仕候

を指合かあれは則執筆返し能句なれば書とめて名

をきけば作り聲にて色々の作り名書付させて一句

なりとも二句成共又は絡まで成共人々の心次第

に居て仕酉の刻の始子刻時分には百韵出来い

三四

太夫役者共に分兩座有六祇園會八月放

生會に毎年兩太夫能五番宛致し候に數度見物に

被出候溝尾九郎兵衛と侍に比類なき翼の上

手家の者に有て諸共大形溝尾が弟子になり諷

本書に太刀をとれば人をきちんと思然ら

ば萬事は一心の置所より生る物にて候間武器の外

亂舞稽古の輩切腹をくはふべき事と有清正ヶ様の

法度申仁にて以なし右に記す通亂舞致したる侍

の切腹出る事に不承候第一慈悲ふかき大將

にておはした事長々しけれ共本書の相違を延

んがためにに書記すなり關原合戦の明る年八代の城

普請仕る時自身八代へ行普請申付られ候内に用有

熊本へ歸城有し跡に残しおかれたる子小性年十

二と十三になる者喧嘩をして双方少手負ける

所へ人々出合押分候へども兩人が手負たる故下に

濟がたきにより熊本へ申ける共なれども

我留守といひ殊に双方手を負たる事なれば法のひ

とく申付よと宣ひて一人の檢使には庄林人一

の使には森本義太夫を云付て八代へつかはしけ

るに兩人行て翌朝切腹いたさせしるしを取歸た

は泪もろき仁にて有り是は右の八代にて切腹い

たしたる小性を何とそ助やうも有べきをと思召た

ると後に知る事也隼人儀太夫兩人が一代のあや

まちと替人取沙汰し候也此外重罪の者が輕罪に

被仰付して一命助たる者もまた有之されば昔も

孟子見梁襄王出語人望之不似三人君就

而不見所卒然問云天下惡乎定吾 定

一之對不殺人者

へり

毎物有經緯道武道治道の経緯とはいへとも文

道殊に樞要ならすやホ矢人豊不）仁於人哉矢

人惟人人 人巫匠亦然術不

其後一雨年もてあ夜舞まひが来りて多田滿

仲を舞ける聞て四方山の御有て宣は惣じ

歳にたらざる少人又はいかにも軽き者を切腹さ

せるは臉使にも似合ず大身成者又は重役義いた

す老人などを云付るは心得有事也主人は諸人への

仕置なれば助度おもへとも急度付ねばかなはぬ

物流石の老人共も斯様の事は気が付ぬ物なるに

扨も中務は名譽の侍なると宣落涙なされたり惣じ
清正は舞浄瑠璃又は昔物語にも哀なる事を聞
右は中々不及事なれども七十萬石有餘の國主
の家中にて客と亭主斗出合てなる物にてある事か
右之身上相應に武具を嗜み人扶持すべきと有は尤
衣類に木綿紬との間と有は不相成事也一萬五
千石三千石取る身上の侍が木綿紬斗が可被着
事か大身小身共有にて彌也小身成者は着たる
も不存候五十年以前の事なども大身なる者と
もの木綿布子紬斗きたるをに見不申候
第四平生傍輩つきあびに客一人亭主之外咄申間敷候
食は黒飯たるべしと云々
五町餘の馬場の左右に樹し双木の櫻花紅紫の色を
交て錦の如しされば吉野初瀬にもおとる間敷とて
袖をつらね裳をひるがへして酒肴をたづさへ行彼
この木陰斯の花の下に立よれば香風四方に散じて
浮香世界の中にあるがごとし鰻を引屏風を立

てつ舞つ老若男女貴賤となく遊舞を催す者引も
きちず此外淨導寺知平寺など所へも花見に往
来たるに誰も曲事に逢る者一人も無之候
第三衣類は木綿紬の間たるべしと有又身上に相應に
武具を嗜人を扶持すべしとあり
肥後又獻叢書第二巻
右大きなる也子細は藝者共數多抱置て正月十六
日に本丸の定舞臺にて毎年能有て諸人見物仕けり
家中へも振舞の節は役者呼候て何方にても五番三
番苑ははやし有之也其證據には靭負と申太夫
信佐と云太夫两人扶持しおき小鼓打に庄田與右衛
門と云て天下に名を得たる上手有稲邊伊右衛門と
云脇宇野宇右衛門と云太鼓打之らは世間に沙汰有
たる者共なる故に名を記す此外藝者共大勢抱置け
るに高三千石知行出し玉事也又町に本座新座と
第五ヶ條之法度書は如斯これあるべき事也
第六亂舞一圓停止たりと云々

清正の仕置には君臣父子兄弟朋友和合して人我の

隔なき様にとこそ有るに客一人の外無用との法

無之古語にも天の時は地の利にしかず地の利

は人の和にはしかずとこそ有に傍輩ども出合ぬ

様にかたつまりたる家にては大國が治る事にては

無之候食は黒米たるべしとあるは中間百性共へ

の事か鄉中への仕置を取違てこに書たるか乍

去武藝修行の時は多人數出合べしと有なれば鄉中

への仕置とも申がたき也

T1111

續撰清正記卷第七

本妙寺法談の事

續續清正葬禮の事付廟所の事

定り起請文書候事

續

續 清正跡虎藤拝領し下國る事付家老とも

續 家來の者共の名書立上候事

續清

清正遺物ともの事

逝去の時家来の者共駿河へ伺公ひたす事

續清正遺言に軍神になり給ふ事相違の事

追腹きりたる者共の様子の事

續 清正逝去の事

清正病に付て駿河へ使者さしこしたる事

遺言とも相違の證據の事

第二清正逝去の事家來中へ遺言の事

第一家中へ申出さる七ヶ條の事

七ヶ條の法度相違の事

續撰清正記巻第七目録

1117

第二慰に出ば鷹野鹿狩相撲ヶ様の事にて遊べしと有

右は尤の様成事なれども是も偽也清正鷹透にて有

し故家中も鷹透は大形致けれ共相撲ははやり不

申候其頃は諸大名方相撲取御抱おかれけれ共清正

は一人も持れ不申候扨又諸侍慰に出るには中春

の頃は龍田と申所に豊國大明神を勧請致し宮を立

右に申ごとく陣中にては如此もなるべきが常に

寅の刻に毎朝起て食を喰たる者なし出陣旅立の朝

又鷹野鹿狩は格別の事也出家山伏はさも有べきが

それも一夏の中又は別の時ならではなりがたき

事也

第一朝寅のに起て兵法をつかひ飯を喰弓を射鐵

を打馬を乗云々

法書の條々

清正家中へ七ヶ條大小身によらず侍共覺悟すべきの

條々とて法度本書にあり皆大きなる信也自然高麗陣

中にての事かと思ひ中川周防へ開候が陣中にても

無之由に申候の證據ども具に左にこれをし

す

・續七ヶ條の法度相違の事

知行下行有へきとて方々より御呼有けるを七百石に續撰清正記巻第六終

に付米五升づ極月に出し申候也

山城國伏見近き在郷美須と云所に彌右衛門と云百

喩ば美須の家中への知行制の事

たし又は仕寄場にても何々といひて一夢弟子の鐵炮

の名人が幾人斯城には籠て居ときけば敵方にておそ

る物と宣を聞て誠に深き御心入なりとて感じ

みり

て抱べきと被申候に彌次右衛門聞、偉方八千石に

て参らんより何程にて成ともと申七百石の知行にて

清正所へ参り奉仕りたりいかさま諸人の思ひつく

のありたる大とぞんじける

11:0

油断なくうてば自ら上手になる物也自然籠城い

肥後文叢書第二巻

彌右衛門奉公いたす事

千石にても五百石にても其者に相當りたる鄉の

高を代官方より書出させ物成の多少地の上下をかく

して高斗御覽有てそれに下行有りてうど千石

五百石ある鄉はなき故あるひは千十二石何斗或は四

百九十何石何斗と高よりあまるも有り又少不足も

ありたるを有餘も不足も鄉ぎりに下行有し放たとへ

ば千石と定しものが千三十五石と折紙に被下たる

も有り又九百三十何石と不足して千石の知行にわた

りたるも有し也は雅之さて役は知行請取後に

物成の帳を渡し地の高下に随て軍役致たる也積は五

五分の物成のある知行なれば千石に十人出し二月

二日より十一月晦日まで普請役いたし候也若未進あ

れば一人性有けるが常に心悪深き者にて閨の窓の子の竹を

本自由にぬきさしするやうにして置けるに或時盗人

九人表口の戸を明内へ忍入を開付て件の窓の子の

竹を扱忍て出表口の戸きに刀を抜て待居て相圖を

定め能時分に閨の内にて女房に聲を立させければ盗

人共面口より退出ぬるを待請て召出しに三人切す

るを見残る六人の盗賊共一度に瞳と出彌次右衛門一

人を取はして切合けるがにおしよせかしてに押

五人叉切ふせたり此時漸近隣より聞付大勢かけ合

殘一人は仕留たり彌次右衛門十七ヶ所手負けれど

も命恙なくしてみな愈いたしける時諸大名聞召

前代未聞の百性の手柄なりとて或は千石又八百石の

道を歸國有時信州松本の城主石川玄蕃 指南して一夢は尾州に帰る清正も翌日桑名を立て歸

頭へ見舞として立寄給に玄蕃頭色々様々の馳走有て 固有り弟子になりし者共は禮の爲とて銀子一枚帷子

清正歸らる朝に駒を二引出して玄蕃頭被仰ける 物を持せ使を尾州までつかはし清正供いたし國へ

は此駒我等目利にて調置たるが當所において近年に 帰りける也後は遠國故に二度一夢にはされば一色

なき出來物也御目利有て此中にて一疋御取候へと宣 も稽古いたしたる事なき間一夢弟子になりたるかひ

へは清正宣は扨々御志の程過分至極に候然ば御目 もなきやうに思ひある時の夜話にしのことを

利を以て取立られたる駒を我等目利にて申うくるは 申出しけるを聞召て宣は汝等が合點なき事也一夢

見にくき事有り千細は若劣たる駒を申請れは我等目 ごとき有者は名聞のために何れの家中に何と云者

利が下手になり可申候又勝るを取申せば何とや は我等が弟子なりと云て弟子中間又所々にて觸る物

らんよりくずを残しおくに似候て大事の駒にが付 國持の下にて少も大身なる者数多弟子に持ては

申候とかくより申事はなりがたき事也ヶ様に候て申身の彌上手になる故師か右のごとく能弟子と云へ

請ねば御志を破り候て大きなる慮外也只二疋ながらば者の名も尊く成て世間にて入替しる物也鐵炮は

石川玄蕃頭より馬申請られ候事

稲留一夢鐵炮申請るが目利の仕様にて有べきとてニッなが取て

下られ候を諸人聞てもこれ程よき御客ぶりは

有間布とほめ申候也

がセッ引来る中を六疋とり給時此者申けるは今日上

ケ候馬共の中にて我等馬六御意に入御取候故跡に

疋残申候が七疋牽て御めにかけし中にて一疋は御意

に入ずして牽て歸たるとあれば我等外聞悪く存申候

何商にもそへと申事御座候間此馬をば添に上申と♪

ひて馬屋へ入て儲けるためづらしき商ひの添也と其

頃京童共の口すさみなりき

の弟子に家の者共なる事

東海道を上り給時勢州桑名に一日逗留有ける處に尾

州より稲留一夢齋御見廻として来るを其日止め給て

家來の者共の内にて後々は一役を云付べきと思はる

者を五人一夢弟子に彼成炮の構様ーツニッ

江戸より東山なり彼名主に 熊本より江戸へ参勤有時は五畿内中の博労ども清正

とりつき口走けるは我君の御恩あさからずして太 着艦を待て大阪伏見へ馬共引懸たる事也馬數寄故

の銀子を被下養生を仰付らる、處に薬の一貼もあ 馬の目明も大形上手にて有り數多の馬共を見て氣に

たへざるさへあるに剰野原に捨て穢多の手にわたす 入たる馬十疋もは十五疋も引退此馬をし込て何程

事遺恨山々也子共一人も残らず取殺し後には名主夫 と直段極一度に買取玉故何れの馬が何程此駒が

婦もなぶり殺しにせんすると云詞の下より子共 Sか程と云直段不知により買そこなびの馬もしら

煩ひ付ひたしと死るを見て一郷の者共あつまりて れざる事也或時伏見にて馬を十八疋馬苦労三人して

禰宜神子を頼み色々様々れども中々あざわらつて引來るを九ッ気に入て買とられたるに一人の馬苦労

に及とはかうの事をや可申也

召出し直に宣ふは此馬高麗陣中乗る馬なりに如

ないさ

二元

云は名主一家とりころして後は此郷中の者共までに
此遺恨をとげんと云て首を振て高に馬けりこれ
を見かれをきく村老野身の毛を立ておそれおの
いて寄つく者更になし此分にては郷中の者までも
ところされん事疑ひなして近隣より貴僧を多
ひかへ法華普門品を千讀して馬頭観音にはひ
堂を立て郷中より田地を付堂守を置様々の供養をい
たしけるにより怨霊しづまりけり種々諸悪趣地獄鬼
畜生生老病死苦以漸悉滅の金文末世といへどもむ
なしからず畜類の業を出離して今にくつの馬頭観音
といはれし事は偏に清正の御慈悲淺故也誠に恩
昆蟲ひ出しひかんとするに一足も進まず随分不便
に思へとも途中の事なれば詮方なし此馬汝に預置
しかるべき伯楽を呼養生をいたすべし若又死たらば
薪を求焼て捨よ畜生なりといへ共數使用に立たる
なれば野外に捨て長吏の手にわたす事努々あるべ

からずと宣ひて銀子二枚名主にわたし馬取二人相添

お江戸へ御通候跡にてはかしく養生もせず

いまだ息のあるうちに原中に打捨て馬取と密談し

て銀子を分てとり馬取斗江戸へ罷帰り色々養生Sた

し候へともよく無之に死し候間薪を調へける

りに仕りたると申により件の様子はしらず共通にて

有けるに未一ヶ月も過ぎるに此馬霊と11

續撰清正記巻第六

に成庄屋を取殺候事」

しりがたし具によと有て畑をうつて居ける百姓に 上州舘林の城主榊原遠江守は清正聟たる故ある時見

尋問ければ乞食の云候通なきよし申ければ金銀の 舞に行玉ひ江戸へ帰り道にくつと云所にて高麗よ

錢少々興へ玉ひ何も供の者も少々興へよと宣へば則り乗れる芦毛の馬に煩つき候放其在所の名主を

ける

金錢一貫銀錢一貫宛紅の糸指に貫き中間が頸にかけ

徒者共がばひ取て却て仇になるべしとて所の名主を

出し有盗人にとられざるやうにして乞食をかい

ほういたせと直に仰られ名主に錢を渡し被下けり

まことに慈悲ふかき御大名にて孝行を感せられ乞食

非人までに御情ふかき事古今稀成大かなとて尊卑

老若かんじあへり

尾州ちつけを着草鞋をはいて乗り何時成共心のひき次第

五里三里宛かちにて道を行被申により供の者子小

性共もたちつけを草をはいて馬に乗り清正あゆ

まる程老若ともに歩行の供仕り申候也

見えけるを御覧有て否々此銭をあの盲目に渡ならば

旅行の節馬上のときは申に及ばず輿に乗給時も

鏡を百文二百文づ残らす奥へける程に夥布集りて

旅行の時の事

いづら

右備立には口傳有之事也

の中村は清正出生の在所たる故江戸より上り下

りの時は百性共新しき桶に餅を入て人々の前におき

老若ともに海道端に出ならびるければ老人には

々達者にてよき事と宣び若輩なる百性には是は誰が

子かれは誰が孫ぞとそれに詞をかけ給ひて父

姥ときの者にも念頃に仰られ銀子一枚づ毎度佳

例として下給ひければ百性も感涙をながして帰り

申一人宛左右の馬の先へあゆませ道中にて何者成とも

指當りたる奉公いたしける者に五十文づ當座の

褒美に下行し給ふある時東山道を上り玉ふ時美濃國

の大井所を行過て道に盲目の女乞食しけるが大

名の御通を聞清正の馬のさきにて歩行者に向び

錢を乞ける馬上にて見給ひ物申は何者ぞと御尋有

けるによつて乞食則申上けるは年寄る親を一人は

くみ申由Sひければ扨も不便なる事也盲目の女の

身として年寄る親を養はどくさりながらも 上州くつと云所にて馬の
霊すりさしも有り船幕も同前也

幕は白き布にて黒き輪の中に桔梗は輪の内に墨の

御馬じるしは金のばれん也

にていたされけるが後は紙にてしたる再也

り御麾は初は唐 の字に似たり藤の仮借なるべきか

の頭

編者会、原本行體にて読み難きも唐

さい

分より上に書其下に丸の内にくろき桔梗の紋二つあ

旗はしろきねりに南無妙法蓮華經のはね題目を旗所にはよりけれども七備の岡大形かくのごとく也

老人衆の物語に馬上に火が何共もちがたき物にて

おりしと也

有事

めたる事也

大小身ともに馬乗分の者は一尺三寸或は一尺五寸の

はかぶらずしてなめし皮の笠又は百重張の笠をかぶ

片鎌の鍵は熊の皮の寸袋にて横手は黒羅紗の袋な

ると見えたるが身に皮具足きても頭に何もかぶらね

ばこたへがたき物甲をきれば具足はきずしてもこ

たへよき物也とて右の通也

刀脇指は虎の皮の寸袋なり

甲は銀の梨打烏帽子に左右に朱の丸有

目有矣

具足は佛の胴を黒きなめし革にて包前後に金の蛇のはれし清正常々
宣人は他家の足輕は皮具足をさせ甲

續清正鎧の事

二尺に白き練一はの小しなひを雨に二本立て指物

の旗指物也右三人の外は再拜もたさる也

先手三組の備大將は再拜御免有馬印を持其組々ひに入て定りて付ら
れけ

割しなひを白練にて仕り候也

出陣の時六具被成て腰に白米一升燒食鹽少うちが

足輕共は具足は着して甲斗かぶり候甲の脇立に長

り柄は惣靑貝也不斷居間に有て出行の時鍵を渡し請

とるにも役人定て有り鍵持も不斷の者といひて二人

定有て其外の者に見たる者なき放此鏡に色々異説

鐵炮を馬上に持て鐪前にははたくと打て鍵をは、

たる也小性の外弓鐵炮頭左右へ其時に當りて加りけ 大小の小性組馬廻組惣の番指物は右のごとくなる切

が六組あり一組に頭一人宛有三組宛左右へ分て備 番常の使番は別に有ける也

ありこれに大母衣小母衣といひて二色ありし

大幌の者といふは一度も二度も手柄仕たる者也白

きしゃらの幌也小母衣と云は一度も手柄は是なき者

なれども役にも立べきとの御見立の者又は数度手柄

有る者の子供也これはしゃらの幌の内を黒く一布

そめて入し也此小幌の者能はたらき一度いたしたる

時黒き布を取て白幌にして大母衣の者とはれたる

事也是は宇土の一戦までかくのごとし此後肥後の

國主に成玉ひて慶長六辛丑年より先手三組の備大將

もかはりたる時に大小の武羅もやみて長九尺の淺黃

練をきりざきにして雌雄に二布合わる一本しな

ひを三十人の使番の者指たる也右三十人は軍陣の使

大小性組と云

めんどりはおんどりは

ほろ

旗本の旗奉行二人鑓奉行二人弓鐵炮頭あり使番の者

三十人續常に定おかる軍法の事

先手三備左備右備旗本跡備以上七備也したるに其樽に酒は出さず樽代を出しけり大樽小樽

ひて二色に定置大身なる者は大樽小身なる者は

小樽を出しけり大樽代は鍬三具小樽代は鍬二具づ

出したるを取置陣請有之時とり出し入次第に

卓散につかひける也

り跡備は常に定たる頭なし其時に當りて云付給也組

はつれの者ども又は牢人分の者が跡備はいたした

常々旅行の時の宿札も右次第也旗本には子小性ぐ

み二組に頭二人有り馬廻組は十二組有り頭一組に一

人宛にて十二人あり此者共が旗本也

上巳端午七夕陽には樽肴にて人持以上の者禮いた

一番二番三番

の三備は一備に大將一人武者奉行一人旗奉行鑓奉行

鐵炮頭弓頭使番其組々にて常に定おかる家来にて大

身なる者は人持分と云て右の三組の内へ入たり組下

に付たる人持の内にも興騎十騎十五騎足輕五十或は

三十二十人宛預たる者また有庄林隼人は興騎十三

人足輕五十人預りて一番備の組下に付武者奉行也森

本儀太夫も興騎十人足輕五十人預り二番備の組下に

付武者奉行いたす平野五郎左衛門は興騎十騎足輕三

十人預り三番備の組下に付武者奉行いたし候此外興

力同心付たる者あまたあり左右の備は立たし自身も喰家臣ともにも
粘りける也

ぶしにて取申されるに鷹場より直に持せ使者を申付

家康公秀忠公兩御所へ指上申江戸駿河において首尾

よく上りたる返事聞さる前は何程鶴がとれ候ても喰

被申候兩御所へ指上れるの一左右聞候で料理 S

二日には櫻の馬場と云て山崎に四筋有ける追廻の馬

毎年冬の内に鶴を十二三程づい大鷹を以て自身の ~

右の禮共は巳の刻に過申候午の刻に本妙寺へ参詣S 見物仕り申候

たされ先祖の位牌に焼香仕られ候

座へ鶴を持て出置時又餘の包丁人右の通に包丁仕舞

候時清正立て内へ入玉ひて後則鶴の料理出何喰候

て酒三献過て膳を取と清正出られ着座有と廣間前

に定舞臺有ける故則ち大文字屋と云狂言師面箱持出

せんさいふりを舞翁は例にて傳臓と云町の本座の

太夫のて三番三過候て能は七番宛あり諸侍は望次第

罷出て見物ひたしけり芝居には下々の者町人共入て

しさる

の鶴を俎板にするかき出座の左に置時包丁人長荷に

出作法のごとく鶏を切て仕去と乂前のごとく右

新参の者父馬廻組大小の小姓組の者共は半にて禮

同十六日の早朝の次第に着座し清正出られ候時鷹

者共を

致次第帳を祐筆持て出て中座して讀申候何も禮仕舞

候て跡に右馬亟は太刀折紙を持参して禮申候馬代は

銀子一枚つ也

宛射は鐵炮一挺づい手づから下給ふ也

跡二人持分と云て先手三備の組々に入る一一四

肥後文獻叢

込

錢を或は一貫或は五百三百宛身礎に感じて自ら提て

我々の名を書札を付惣が一度に次の間へ噓と出清正

御前へ禮錢をくらくと投て颯と御禮申候例

る故如此右に太刀折紙にて禮いたしたる者共

おしてみの禮有間は立退て甘ぎ居て昔の禮すみ候

後又本座へ着羹吸物給候て一人宛罷出清正御土器頂

戴申候鷹師共は鷹を居て廣間の緣に伺し並居て目

見えいたし候也

其次に鎧炮の者たる頭罷出て鐵炮二放宛打

て中たる物頭には清正前へ呼出し弓頭には弓一張鐵

炮頭に場へ出て自身馬をはじめ有て日隠しの内に着座有

と等く家の者共も自身馬乗候て御目にかけて馬

乗仕舞候と馬末の的場へ行玉ひて自身弓を一立射

られ日聡へ入着座有と弓の者預たる頭共罷出て二續撰病正記巻弟六

11 111

一門者共次に禮を仕其後一二三の備頭禮をいたし共

は延慮有とて屋敷の前の川中に御船をかけ船中にて

秀頼公大阪へ御歸城の時清正伏見の屋敷へ入御有事

事

正月元日には續秀頼公大阪へ御歸の時於三伏見清正御膳上 熊本城の時年頭の作法其外常の仕置の事

かやうの事はめづらしき事に申けり

上

にひたし刀

已信竹越山城守

覺仕たると共頃は大阪伏見にての一

左炭の火を卓散に信文字刀

清水國刀

一文字刀

たくさん

水甲斐守

對馬守

御膳上られ候也屋敷の前の橋を今に肥後殿橋といふ

助眞刀

橋の上より川下へ三町左右を竹にて虎落を結金屏風

を立すきまもなく圍御供の衆中下々迄不殘馳走を

大阪まで御供いたし被下候也其頃都に梅春と

料理仕者有けるを下して御供の衆中下々迄の引

物にかまぼこを献立に書出るを見て大人数の事な

ば蒲鉾をする事も又板に付てあぶる事もなりがた

かるべきやうに諸人思けるに魚共を取寄大勢よりて

ひたしとおろし骨を去て大きなる臼をニッ三ッ立

ならべておろしたる魚の肉を入杵を以て舂ければ即

時にかまぼこになりけるを板に付庭の中を長く掘

安藤帯刀

長光刀

秀頼公より御兩人供の衆中へ

能衣裳

御正木長門守

百巻

御脇指

狩衣十小袖十

二字高木貞宗

御太刀

秀頼公より常陸介殿へ

子

國俊

巻純子

百吉

光

吉光

御脇指

百巻

小鼓かりた

野成瀬内匠頭

國おこし疊を左右に立ならべかまぼこ

を段々に指てあぶりて少も凝なく出しけるを見て扨

も能才ける今時は物ごとに大きに成にける慶長年

中の頃までは候加藤右馬亟奏者致し長袴にて太刀折紙

を以て加藤美作初禮をいたし偕城を預り置たる近さ

銀子十枚2丶

大藏

綿五十把つい

銀子二十枚つい

已上

三百斤21

紅

百把つい

百枚つい

姫君様へ右兩人より御進物

銀子

三百斤つゝ

綿

百把つい

百枚つい

銀子

上様へ右兵衛殿常陸介殿より御進物

二百枚

銀子

御馬

友成

御太刀

秀頼公へ常陸介殿より御進物

二百枚

銀子

御馬

御太刀

一文字

秀頼公へ右兵衛佐殿より御進物

肥後文獻叢書第二巻

より御女房衆御太刀

秀頼公より右兵衛殿へ御引出物

まくり信國

渡邊筑後守

同二十枚

銀子三十枚

大野修理

織田民部

同 膳

片桐 銀子五十枚

片桐市正

織田有樂

御姫榛御女房衆中心

右の御兩人中へ

銀百枚

御姫様御乳人

正永殿

宮内鄉殿

三位殿

御方

お

二位殿

銀 同 同 同 銀 同 同同同同同

上々好御方

右京太夫

綿五十把2ヽ

銀子十枚?丶

あいけ綿五十把つい

殿

丨丨丨

續淸正記卷第六

三百枚

銀子

上様へ家康公より

千枚

銀子

家康公爲御名代右兵衛殿常陸介殿大阪<御下 時

秀頼公人家康公御進物

已上

三居種とり

御鷹

・鶴とり

御馬

十疋

御脇指

なべ通し正宗

左文字

御太刀

大秀頼公、家康公御引出物

已上

大工大和守へ

銀子二百枚

銀御馬取三十人

同

御鷹匠三人

銀子三十枚

御馬屋別當諏訪邊宇右衛門

同同

永忍

任か

庄三郎

銀子五十枚

後藤西尾丹後守

同

銀子百枚

大津少將

御姫様へ家康ハより

銀子

綿

銀子五十枚

同

銀子三十枚

銀 同同同 同同同同同

銀子二百枚

綿五百把

銀子百枚

綿三百把

已上

111

御姫様御女房衆中へ

御女房衆中心

御Sちゃ

正永殿

御御方

御姫様御乳人

上之好御方

三位殿

宮内卿

あいば殿

右京太夫

二位殿

大藏

二百把

二百枚

三百把

同百枚

御太刀

光忠

右兵衛佐殿御馬

同斷

へ秀頼公より

猩々緋

銀

十巻

同斷

純子

同斷

二十巻

三百枚

同斷

鯰尾藤四郎

御脇指

金子二十枚

御腰物

同斷

一文字

御太刀

同斷

實守

家康公へ秀頼公よりの御進物

金子三十枚

と御

對面有ノ之様子日本書記し九如L其時互亿被、成

九 御進物之事

金子三百枚

|斷

同晰

慶長十六辛亥年三月二十八日に家康公と秀頼公家康公と秀頼公御對面の時御進物の事

金子三十枚

せ給けり

となん仕ければ當意則妙なりと被仰彌笑をふくま 御馬代金子

見る人ひたき腹の皮かな

御太刀

腹鼓うたん狸はさもなくて

とりあへず

御馬代金子

肥後文叢書第二巻

常陸介殿へ秀頼公より

已上

同同銀子城野和泉守

秋本但馬守

榊原伊豆守

永井右近

村越茂介

安藤帯刀

檟戸清右衛門

1 本米详

成瀬隼人

板倉伊賀守

大久保石見守

本田上野介

奥にて御女房達中へ

御かつ

御あめ

御あちゃ

百枚

守家

百枚

はうたず

多くの狸共這出て歌をうたび拍子を踏太鼓三味 して見物人が腹をかへたるとて一人興に入せ給へ

線にのせて腹つぐみ打ことをしたくせり然るに此催 ば御近所にまかり有け御はなしの者一首の狂歌を

山の内に狸の出立にて若黨共安き事なりとて山の穴の中よ

山を飾り車にの

成熟して七月十日の卯より出立作り山の内にこ

又其頃おかしき事有けり同年の盂蘭盆に家の者

續踊に狸の腹皷うちし事

が踊興行いたし御目にかけんと申ければ尤なりと有

ける故に一組々々にわかりて異類異形の事をたくみ

美を盡して踊けるに子性組の先踊にみ入城の追手門際へ引付先々の踊のを待ける

に一番親二番組三番大小性組の踊の過て未の剋に子
小性組の踊入よと有ければ絡先おとりの山を廣間の
庭へきやりにて引こみ御目通にもなりければ件の通
のことども云てさらば子狸共を呼出して腹つづ
みをうたせ御めにかくべきと云て山の内の狸どもを
よびけるに此者共の出立は狸の皮或は兎犬などの毛
皮を縫集て着し狸の面をかぶり早朝より八時までせ
ばき作り山の内にこぞりあびてゐたりければ炎天の
日にてり付られたる故に悉く霍を仕り漸々這出け
ども中々腹鼓打事はおもひもよらずあるひは吐逆
をし又はえもSはれぬ様なる不仕付のみをいたしけ
れば見物の老若これを見て申けるは子ふ性組の踊は
餘組にかはりSかさま伽車風流なる事ども有て諸人
の耳目を驚す物見有へきと内々おもひしにさはなく
てこれは大きなる尾籠かなとて各瞳と笑ひけれ
ば清正是を見玉ひて宣ふは踊子ともが腹皷を三十人籠置て
扨狩人が弓に矢をはけ持て來り狸狩をいたし古狸を

一疋追出し射んとする時狸手を合せわびこといた

し候は我子共孫共多く持たり今にて殺し玉は、子

共孫ともめいわくすべき事が不便に存ればひらに御

慈悲を以て偏に御助あらば子共孫共有がたく存べ

きと申時狩人も流石岩木ならねば誠に畜類も我子

おもふ事は人間にかはりなきと見えたり我も子共持

たる事なれば一命を助るしからば此禮に子共孫

を残なく呼出し腹鼓を打せよといひし時彼古狸咸涙

をながし申けるは扨々有がたき御情にて候物哉何が

な御殿をも可申上となる處に子共の腹皷うたする

様にとの御事は何よりて年月を送と聞けばはや氣つかひの仁に

慶長十四年の中秋の頃肥後へ歸國有ける時攝津國兵 ては毛頭なきといはるが第一能分別にて有べきと

庫の浦に舟からし給折節隈なき月海上にうかんで 宣へば老臣共御意尤とぞ感じける共頃八幡の國と云

風光もいと靜なりければ鳳金丸と云わたけ船の二階 やくこを下し熊本の鹽屋町三町めの武者溜りにて物

に登玉ひ夜すがら月御覧ありし時御身近家臣一兩 進能をいたし其能の跡に歌舞妓をして家來の諸侍は

人傍ちかく召ての夜話に去る春の頃奥州の正宗が 銀子一枚宛出し棧敷を打て見物し地下町人は八木を

介と云遊女を下し舞妓を興行致したるが家康公の 持來て鼠戸の口より入て芝居にて是を見る此國が歌

御氣色に相應したるとほのかに聞たり子細は石田治 舞妓の始なりければ西方の者は聞及びたる事もな

部少輔等が謀叛を事故なく退治有て今は天下御堂の 頃なる放貴賤上下の老若男女鼠戸の前に市をなし

内に入たる事なれば正宗とき國主を始め太刀も刀 押合々々見物したり又其後京都に又市と云者の抱お

もいらぬ泰平の世とおもひ歌舞遊興のみにて日月を きたる遊女に兵助長介と云て其頃名をえたる歌舞妓

暮せば心元なき事なしと思召ると也今又西國にて の太夫にて有けると清十郎金作と云脇太夫と以上四

は清正などは秀吉公の御取立とひひ其上秀頼公大阪 人を召下して歌舞妓をさせ家来の者共並に下々の者

御在城の事なれば世間の者もうたがはしく思ひ家康にも見物いださせられたる也尾州なごや普請の後の

公も自然は心元なく思召事も有べきがさりながら我事也本書に女三百人とあるは積りもしらざる虚説也

續八幡の國と云歌舞妓女肥後國へ下たる事

ける也

に肥後殿建立の門所の者共申年月は何の頃に

有りしか失念致候也如此の事をおもへば信心も

深く御座るか鬼神を敬ふにはの國を始て祭ると

云置し古人の心に叶給ふ故清正一世は武運目出度か

は家康公の厚恩に忘がたき事有加之肥後一個の主と

なり殊に常陸介殿を聟に仰付らるる事旁以常家の御

思深ければ努々二心なきことなれば彌御心安く思召

様に正宗がごとく帶紐をといて老身を慰め遊人と成

世間の沙汰にも清正は年寄れば武の道は泰平の世

たる故忘れ續撰清正記巻第六

續輿次兵衛が歌舞妓の座にて足輕喧嘩たす事

同普請の時與次兵衛と云者京都より女共あまた

下り尾州宮の町はつれに棧敷を打ち鼠戸を立て勸進

の歌舞妓興行しけるに清正足輕二人用有て宮へ使に

行けるが其邊を通るとて芝居をかこみたるわら莚の

すき間よりのぞきけるを與次兵衛が下人是を見て詞

あらくとがめける故足輕もあらいかなる返答いたし

けるを棒にて内より足輕のつらを突けるをいかにも

神妙に申し何のかまひもなく其所を退き錢を出して

鼠戸の口より見物の者とつれていり舞の際へそろ

(寄て時分を見はからびてきつてまはり狂言師一

人女二人きりたして楽屋へ入與次兵衛を彼方此方

へ追まはしてはうさぎを切けるを見て楽屋の奴原も

蛛の子をちらしたるごとく方々へ退たるにより足輕

はゆくへもなく欠落しける彼與次兵衛からうし

名護の楼風呂と銭湯の有町也又女共が杵歌に

も音にきこえしなごやの城を踏やならいた肥後の衆

がと諷ふも此時の事也かやうの事ともをよく不知

者か女三百人つれて日夜歌舞妓興行し給と本書にし

るしたる者か

清正熱田大明神へ参詣し大宮司神主をよび出し

宣は常國は我生國の事なれば當において大破に及

たる所あらは造營有度と有ければ家の者承り御志

の程有がたき旨申す然ば西の門大破いたし候と申上

るにより則馬場左京と云神主に銀子二十貫目渡し置

下國有け左京則奉行致し程なく造營出来にけり今

一〇七

尾州熱田大明神の門造營の事

牘

て助り件の様子を具に申達ける清正聞召次兵

がいかにも道理至極なり乍去 たすべし足

輕は見合次第に急度せばS致すべし女の義は望む

程調であたへぬべし又舞臺棧敷の破損は本のごとく

普請申付べし其方が瓶の養生をいたす 金子は被下

べしと宣へば奥次兵衛承是は過分至極の御意共何

様にもしかるべきやうにと申により萬事望たるより

も結構に仰付られ女も元のよりすくれたるを求て

被 る故輿次兵衛は禍出来て却て徳付たりけり

毒薬じてとなるとはかやうの事たるへきと世

ぞつて申けり此時分は人のうりかひの法度無之故

此事子

に歌舞妓女を二人買取て京より下されけり

細不聞仁の本書は逃作成べし

なごや普請いたし候時清正は萬松寺と云曹洞下の禪

寺借て居玉ひけるにある時宮より大きなる角石を五

六千の人數にて引給に大石を毛氈にて包み青き

大綱にてからげ石の上に片鎌錠を立て亦何れも齢二

入計成小小性の容貌麗にして縮に書とも筆にも及

尾州名護屋普譜の時大石引事

都合七十三萬千八百四十石九斗六升一合ハ夕九オ

右の内二十萬石は役なし殘ての軍役也

二萬三千六百石五斗四升八合六夕九オ

一萬九千三百八十三石三斗四升三合一夕五才は

葦北郡

合高七十萬八千七百三十四石四斗一升三合二夕

外豊後國の内にて高

五石三升四合三夕は

六萬三千四十六石六斗一升九夕五才は 阿蘇郡

十八萬千五十石七斗九升二合八夕五才は 益城郡

三萬四千百九十六石九斗九升八合二夕は 宇土郡

六萬千七百七十七石八斗二升八合四夕六才は

鹿郡

二萬八千四百託摩肥後文獻叢書第二巻

郡

山八十三石九升四合五夕は

三萬五千四百松寺の庭に木の裏の有ての二十一字あり

うござると作りて花の盛の頃なるによそ八子小共

の美なるを譬て作りたる輿の小歌也萬松寺其時は今

作りての下一本に

びがたき程なるが綾羅錦繍のを身に飾り桃顔
石上に並居たり自身も石の上に登り大音聲に
てきやりをし給により家来の老若干残花麗なる出
立にて本綱に手を付引けり然るにより名護屋清洲よ
り酒肴餅豆腐菓子等に至る迄種々の賣物を持運商人
共幾百人と云數を不知宮より名護屋までの消端に
市を立てぞ居たりける然るにそれの賣物並に其
器物ふ樽荷棒までの直段を少もねぎらずして云か
け次第の代物をくれ其うり物を道路に抛ちらし諸人
にばSどりにとらせ酒は何なりとも呑次第にのま
せければ商人も見物人も綱に取付て浮について手拍
子を打愛宕參りの小歌をうたひしるもしらぬもえい
やら聲にて唯一時程になごやへ引付大踊をしたりけ
るときならず數度大石を引けるにひつくしき小性
ども普請場の供につれて出給ふに小袖羽織をいかに
もだてに染させて金翠の絆をなし玉へば楊柳の風に
なびきかつさく花の匂ひふかきがごとしされば其頃

の小歌におよびなけれど萬松寺の花を折一枝はし

一〇六

纐撰清正記巻第六

菊池郡

あるべきかと諸人も存し家康も殊に心もとなると思 二萬六千五百八十四石八合六夕六才は

一〇五

合志郡

玉名郡

四萬八千五百五石二斗九合二夕は

十一萬四千二百一石一斗七升九合七夕五才は

秀吉公御他界の後加州大納言利家と家康公と不和七萬被行事

肥後國拜領の郡ともの高の事

秀吉公他界の後利家北國へ家康公息を證人に取の海道を拝領有たり知行高は左に誌

江浦の城共兵部太輔方

へ相渡し扨又豊後國の内つる崎と云船着より熊本迄

續西居城並八代の城とり家中への知行割の事

續續續

美須彌次右衛門奉公Sたす事

信州松本にて玄蕃殿より胡馬被申請候事

績 上野國くつといふ所にて馬の靈になり所の庄屋 家康公不斜び思召けるに今度御味方だし小

申候故清正者共も事故なく伏見へ歸宅仕り候此儀を

召れ候旨清正開及び和田備中に侍騎足輕五十人付

續 旅行の時の事

軍中七備の岡の事

清正鎧武具ともの事

常に定めおかれたる軍法の事

道中見送りのためにつかはされけるが利家いかゞ

おもはれけるやらん一日路同道いたし黄門を返し被

をとりころす事

綾稲田一夢鐵炮の弟子に家來者共なる事

しかのみならず筑後の國中

の城共事故なく請取かれこれ以て一方ならざるを忠

ひださるにより本書に記す通の書簡家康公より

清正へ被下たる故筑後肥後兩國を所領いたし明日

丑の年筑後は田中兵部太夫へ相渡すべき旨仰有る

により二月に柳川久留目山下の

様に見え自然鉾楯にもおよぶべきかと世以て申あへ

るにより諸大名衆中御とりもちにて兩人の御和談有

て利家加州へ歸國有時に家康公の息男黄門御若年の

時證人に取て北國へ同道有ける時は道中にても

四百二十九石六升四合七夕は 熊本城お飽田郡府

二萬五千六百七十六石四斗三升八合は 山本郡

續撰清正記巻第五 終

關に居玉ふ也同國の内山下の城主筑紫上野介門居

城山下をも同時に請取城代を入置上野介も法體

有て夢庵と云て八代にて三百人扶持合力されて

置給家の者も過抱本知下行して五騎十騎づき分

て興騎に付てつかはされけり清正去の後上野介息

筑紫主水正を寛永二年の頃家康公御前へ出された

る也

名付てつかはれし也左近は則法體有て道伯と

肥後文獻叢書第二巻

績 熊本在城の時年頭の作法淇外常の仕置共の事

績 秀頼公大坂へ御歸の時伏見において御膳上られ

たる事

續家康公と秀頼公御對面の時御進物の事

第四秀頼公家康公御對面の事

踊に狸の腹鼓うちたる事

八幡の國と云歌舞妓の女肥後國へ下り候事

績 熱田大明神の西の門造の事

與次兵衛歌舞妓の座にて足輕喧嘩たす事

尾州名護屋の普請の時大石引し事

第三名護屋普請に清正歌舞妓興行の事

牘 京都本國寺において萬部の経韻論の事

熊本の城にとりたて給ふ事

績

肥後國清正拝領の部の知行高の事

男を設人に取て被行事

ユカ

秀吉公他界の後利家公北國へ歸城の時家康公息

第一清正如水兩將薩州へ働として出る事

第二清正家康公へ御目見えの事

續撰清正記巻第六目録

103

續撰𣳾正記巻第五

わたされ候により清正請取和田備中

久留目の城代に入おかれたる也

そっ

かくて柳川の勢右の一戦に討たるにより士卒機を

しなひたる體を見て左近将監清正方へ城相渡すべ

との内所有し子細は本書の如し清正方よりも籠城

仕たる士卒の心を鑑て立花左近將監へ無事の手を入

柳川の城開渡す事

必死に極て破籠をもちたるこそ一入強き志也誰も

かくこそ有度事なれと感じる者も有右の合戦の次

第具に見たる老翁の語られけるは如斯併他家の事

なれば伏見大津にての様子大の前にての申分など

は定て相違も有べけれどもそれはさもあらばあれ

竟は討死と極りたる者が破籠をもちたるが是か非か

僉議に深き意味あるべき事なれば清正家の事なら

されども後學のためにもなりなんかとおもひ具に記

之也

られ雨の心啄して相違なく柳川の城請取加藤美

作を城代に入おかる也本書には和田備中を城代に

して入置とあり相違也同國の内久留目の侍従も立花

左近と一所に大津より下着いたされけるが是も柳川

と同時に城を1011

静りけり古語云事後則は反て其殃を受と云事を用得

給物歟扨程なく火事をとりけし城を請取家来の者不

残召抱何も 柳川にての本領知行下行有柳川組と

チクル

立花左近將監下城の時清正陣屋に火事出来事

贛

右の通立花左近下城有近習の小性共四五人供いた

し清正陣所へ来り玉ひ互に一禮有未一言も物は宣

はざる所に陣屋に火事出来して陣中騒出たる折節柳

川の城内に残り居たる者共心えなくおもひ昇櫓への

ぼり清正陣屋の體をうかひ見ゐたる時節なる故斯

事を見て扨は謀出して左近を討たると見えたりこは

口をしき事押寄討死して主君の御供す

べきと云て惣軍勢既に討て出んとひしめける所に良

は必敵の心を察ると云ふ事早き事誠なるかな清正

火事と云聲を聞とひとしく宣ふは城中の諸卒いろ

もとなく思ひ騒事これあるべく候御身近き者に被

仰付早々かへされ火事の様いひしらせ然るべきと

有ければ左近将監聞玉ひていかにも尤にて候我等も

さやうになるに扨もはやく御氣を付られたると

感じ其詞の下より小性二人城へかへし火事也心もと

なき事はなし少も騒ぐべからずと有し故城中の諸卒

夜 事なれば朝日の光と長刀の刀の光りかやきてさな

の未明に大将の御前へ伺して申けるは某常々存け がら電光の水にう
つるがごとく也敵も味方もこれを

るは自然の事も候は、御馬の先にて一命を捨て數年 見て天晴勇士なる哉と心に感じて見る所に名乗ける

の御恩を報じ奉るべきと心懸候へ共武運盡申たるか 詞の下よりあやまたす敵の備へ只一人少も擬議せず

伏見大津の兩城にて能き敵にあはされば何たる働も 走りかいる其勢のことがら誠に勇鋭たり十二段に備

仕を諸人嘲と承る誠に恥辱身にあまりて存也 立たる軍勢とも此勢びに僻易して先手二段の備二ッ

はれ天道すて給はすば此耻を一度雪がせて給はる様 に切られ中をあけてぞとほしける然とも大軍の事

にと佛神に祈けるに明日の一戦に逢事是ぞ諸神の擁 なれば三段めの備にてとりかこまれ狂ひ死にぞ死た

誰と存る也然れば存じ定たる事御座れば君の御目 けるこれを見かれを聞てをしまぬ物はなかりけり

に二度かるまじく候也只今こそ今生の御暇と申 かくて一戰過て翌日討死したる者共の死骸を見ける

ながら泪をはら~と流し大将の御前を立て諸軍勢 所に三太夫が腰に焼食三ッ付たるを見て諸人評判し

とうちつれ勇にひさみて出たりける然るに肥前勢十 けるは無二に討死ときはめたる者が破籠を持たるは

二段に備を立てをせんど待懸たり柳川勢もおめ 心えがたし必死にきはめたるにてはあるまじきかと

さけんで押寄たり敵間近くなりけると馬よりひた いひければ又或老武者の云けるはいや~さにてな

に大長刀を水車にはしけるが辰の上刻の

大音を上て名乗けるは我は立花三太夫と云者也今日

の合戦の一番鎧をはじむるぞ我とおもはん敵あらば

進み來て此三太夫が首を討取て名を後代に残せやと

なかりける故諸人嘲を申けるは若き者は事に鍵被をつくり互ににらみ逢計にて未

鍵を始める所に柳川勢の中より只一人進み出て

とおりやりぷりま

立て合る

先には舌長き言は云間布事也三太夫が常々の口程な

ば今度比類なき働して敵味方の耳目を驚すべきか

と思ひしに伏見にても大津にても敵と出合える沙汰

も聞えされば三太夫は只兎兵法の上手なりとて諸人

笑を聞は口惜事哉如何してか此を可雪

と肝に通りておもふ處に今此合戰ある事を悦び續撰清正記巻第五

101

努計も報じ

奉り度旨申上により南條伯耆を始大身なる者をば先 續 立花左近後に飛守 内小野和泉鍋島と合戦の事

手三備の組に割入小身なる侍共は十騎十五騎づ奥 立花左近統虎は本書に記す通り大津より柳川へ帰り

騎に仰付られたり然る所に小姓組馬廻組の者共訴訟 籠城たすにより鍋島加賀守黒田如水清正三方より

ひたすは先手三組の者は町を破りたる時又は夜討入 おしよせける時立花内小野和泉と云者を大にして

たる節常城において兩度まで何も手にひたる事な 一千有餘の人數山伏の結袈裟を藁にて作り惣軍勢の

れば明日柳川表への御側には我等に先手を仰付られ 笠符とし肥前衆と一合戦して名を後代まで残さん

候様にと達て申により此旨先手備の者共に宣ふは今 とて勇に勇んで出加賀守備へ面もふらず突てかいる

度柳川へは小性馬廻の雨組の若輩者共の望により 加賀守者は待かける事なれば髪をせんど防ぎ戰

遣されたくおぼし召すがひか有べきとの御断有け ひ互に討つうたれつ辰の刻より巳の刻まで戰ひけれ

れば先手の者共申上けるは斯義存ともよらざる事と とも肥前人數は大軍の事なれば新手を入へ~防

も也先一二三と常々の事にさへ次第定たる法を今度 ぎ戰ひける故柳川勢のこりすくなに討なされ流石老

新法を仰出され小性馬廻の両親に先手をさせ我々共 功の和泉なれども叶びがたくや思ひけん城を指て

か御家始て更になき後陣にひかへ申事ふつと罷成間 引退くこに左近内に立花三太夫と若者有ける

敷との御請によりてて仰付られがたきは前々よ が常に申候ひしは何事もあれかし諸人に逸れて一と

り定おかれたる軍法なるによつて小性馬廻の者共の して名を後代迄残すべしと廣言しけるがSかし

志の程は御感有けれども右の通なる故に小性馬廻は てか有けん今度伏見大津の雨城責ける時させる働も

に早五更の天になりけるゆゑ一ばんそなへの人數出

勢いたし二番三番と次第におしいだしちくこのくに

井手のはしと所に諸勢着陣有ける也

一命を御助召抱られ候御厚恩は山よりも高く海より

前々のごとく次第を定め玉の謎とある中

もふかし何を以て報謝仕らん幸明朝柳川へ御出勢の

先手へあはれ加へ被下候ば是非今度立花殿の勢と

牒し合敵の為に身命を投うつて御恩志を去程に九月十五日に關原の合戦家康公勝利を得給ふごとく抱おかれけり然るに斯者共申上げるは今度

の

綴 宇土の城請取事

淤泥深して底のかぎりなし人馬の足の反事にてあら

ず卒爾に入たるにおいては犬死する事必定なりと諸

人により其田の端まで仕寄竹束を付て守り居たり

扨城を請取て後に見ければいかにも淤泥あさくして

漸々一尺計足入て人馬の往來自由也熊本と宇土は三

里隔て諸人往通常々能しりたる所なれども敵地に

なれば人々の目も心もかける物か共時はいかにも深

き泥田の様に諸人の目に見える近所へ如

なれば況や遠國より来る敵には色々の行あるべ

事故に敵人の境に入ては必地の形勢を察せよ

古人の云置し事とも尤也

いては一命助たるかひ有まじ不抱かれて攝津

石田治部少輔生とられ落去の注進める故に宇土の城

開渡し有てしかるべき旨小西隼人方へ仰入られけれ

ども謀に云越かと疑て合點Sださる處に小西攝津

守身近く使える小性關原より落人と成て下りしを能

見知たる者有て召捕て斯小性を城の塀ぎはへ寄せ此

口を聞給べきよし云入ければ城中より二三人出向ひ

治部少輔合戦の次第小西仕合具に聞ては關が原の

合戦負になりし事疑なし此上は力なし城を渡すべし

さりながら宇土八代雨城に籠たる士卒落人となり方

へ離散して妻子以下迄見ぐるしき目を見するにお

績 宇土城際の沼田に懼たる事

宇土の城際に大きなる沼田の有しに此田は如何にも

竹力

兵介は左麓の由申によつて常々筑刀にても鍵の稽古
ひたしたる者共申けるは元來兵介左鏡の證據正布有
けるにより向よりの鏡疵に定り御咸狀被下たる也か
ほどの事は誰も見しるへき事なれども事急なる時節
一覧にはや見とがむる事愚意のおよびがたき事也
守所にたがはす本知下行有においては宇土八代の雨
城代小西隼人同若狹切腹いたし雨城わたすべしさな
きにおいては城を枕にして討死すべき旨雨城代より
申越されければ清正開召一段と尤なる被申分也雨
城代切腹致され城を開渡さるにおいては家來の者
共扶持せしめ候事少も相違有間敷旨返答りければ
大に悅で小西隼人同若狭兩人切腹いたし城共を開渡
す清正雨城を請取玉ひて小西家の者不約束續撰濤正記巻第五

かへし權六と太刀ニッ三ッして押ならべ馬上にて引右の夜討の時出合働者共清正前に呼出し其様

組で落けるが權六力やすぐれけんとつておさへ首を子尋玉ひける時田中兵助右の肩先に鍵負ける則

とりたる故比類なきいたしたるとの御感を給ひ見付給ひて兵介手疵には不審有と宣び僉議有ければ

給ふ物かなと引返し勝負あれと詞をかけられ敵取て續田中兵助手疵改め給ふ事

も後を見せ

を負ついて坂給ふ也

相田權六郎は小川の一戦におそくり手にあはる

ぬ右の小川合戦の様子相田權六働は本書に記たると

おもひくのさし物なる故怪布思ひ能く見ければ

敵也扨は見そんじて敵方へのきれりこは心を静

め課て退べきとおもひ左右の者に云けるは敵利をえ

引退を追懸て一人なりとも討とりたるこそけや

みきたるべしひさ 各は追懸玉ふ間布かと云て

其儘馬を乗出したる跡にて見付やれ敵にて有けるに

たばかられぬるぞのがすなあますなんてひしめきあ
ひて追かけぬれともなんなくのがれ味方の陣へかけ
こみけり右小川合戰に八代勢を引出し勝利を得玉ふ
事は誠に敵の策を以て味方の策にするを良將とすと
云は此合戦の事なるべし

大きな相違仕候が其合戦にひたる者の物語聞置し
はかくのごとく候へば何れをか是とせん又本書に吉
村橘左衛門庄林隼人二組小川へ押向と有る是は相違
也吉村橘左衛門は三番備の大仕り石の瀬の責口を
請取城を賛させ仕寄付させ組下の者に下知をして
ゐたる故小川のおさへに行者にてなし庄林隼人は一
番備の武者奉行いたし加藤百助組下に付て居る故
隼人組と云者は是なく候此儀は具に存申たる事也

宇土の城より夜討出たるを突したる事

續

かいりける處にある夜雨風はげしく吹降して城中よ
夜討出る時に日下與助一番に出合鏡を合せ手

て見ければ件のさし物さしたる者二三騎有て何もは

相田權六郎働の事

無念に存じ八代勢の引退をしたひて行けるに武者

一騎後殿をしてのき行に追付、きたなく川忠兵衛伊藤新五右衛門佐久間角助

井村彦右衛門田中兵助一度に噓と出て敵を城内へ突

歸して左右の備のしらざる事神妙なる働なりとて何

も感狀を下し宇土城より忍びて出たる飛脚とらへ候事 有て八代より出勢のおさへに吉村左近を其日の大将

或夜の刻時分に城中より仕寄の竹束際へ何者とも に定め相田六左衛門を武者奉行仰付られ出勢いたし

しれずそろと忍び来るを聞付足輕共出て組伏て たるに本書に如記小川と云所にて八代より出たる勢

見ければ年四十餘の男丸腰にて何も道具も持ざる下 にひしと行逢と等く鐵炮を打かけければ入代勢右の

人也則からめ何者だと事の子細を問ければ宇土の町 謀を夢にもしらざる事なれば周章騷て弓鐵炮を少々

に居たる商人なるが風と籠城いたしけるが堪忍しが 打防戦ひけれども難なく追立られ八代へ漸々引退

たきにより今夜忍びて城より落來ると計此外は味方も敵少々討捕颯と引あげたるに北川監物と云

何と問へども一言もいはず如何様怪布者なる故本陣 者未軍なれざる若年の時なるに敵味方入亂れ一戦し

へ引て行ければ清正宣ふは此者は自然杖は水らごて雨方へ颯と引ける時味方のさし物何も白線の切さ

るかと御尋有に付てとらへたる足輕共が今存常候組 きたる一本しなひなる放さし物に目を付二町計退

が鍵をたきおとしける故力なく角左衛門少引退九八

け

る所に飯田角兵衛身近くつかひける小性一人連主従

二人進み出来るを見て角左衛門取てかへし三人して

南條主従を難なく城内へ突退けたり敵味方互に勝負

はあらされども諸人に一人進出たる志神妙なり

角左衛門氣を許し感を下し給又飯田角兵衛

鍵を合せ角左衛門を助け敵を城中へ追込たる手柄

類なき働仕たると感状下さる此一戦を世俗は南條

と角左衛門とたると云事も偽也右に記所は飯田角

兵衛直の物語聞申候也

伏候に何やらん投捨たるやうに覺申候と云てとらへ

たる所へ行火を燃て見ければ竹の杖を見出て来れり

杖を見玉へば案のごとく杖の中に八代への文

有けるを抜き見玉へばいつの何時人數を出し後詰有

べし城内よりも切て出べしとの相圖の清正不

斜喜悦有其文を如元いかにも能封じ地下の者に金

銀を被下城中よりの飛脚にして謀て八代へつかは

しけるに宇土城代小西隼人判形まぎれ無之により

八代より後詰の出勢の日限を定たる返事則認出しけ

るを彼者持参いたしけるにより飛脚には彌美下行

續撰清正,巻第五

撥 三宅角左衛門南條伯耆守と鏡合の事

くらく成る故あだ矢もなく打

守土の町脚田口へは加藤百助大將にて一番備の軍

寄けるに南條伯耆守元宅西九郎左衛門と云者一

つれ主従只二人物見のために出たるを見て三宅角左

衛門一人進出承り及たる南條と見およびたり三宅

左衛門と申者也一致べきと名乗懸暫く戰けるが南

條主は大力の老功の者なれば事ともせず角左衛門

九七

こそ付たりけれ

合せ町口の木戸を閇てれをる加之跡よりにて宜は今宵宇土へ押寄明日曉より宇土の惣曲輪

の町を責破るべきと惣軍中へ出るにて木山

より宇土へ先手押寄たるに此義何かは露有べき敵町

口へ人數を張出しよりを焼て待懸たるにより味

方も町口迄押寄少間を隔て篝を焼夜の明を互に待て

守居たるに石の瀬の町口へは吉村橋左衛門

味方の打にも中り残りす

くなになるを見て和田備中前野助兵衛に向て云ける

は士卒足を立乗ると見えたり斯に支て有ならば前後

の弓鐵に中りて一人も残るまじいざ一づに木戸を

突破らんと申ければ尤しかるべしと云和田備中前野

にて 助兵衛尉兩人一番鏡と名乗て眞先に進み出るを見て

三番備の軍勢押寄れるが拂曉より合戰可始との軍 芦野九太夫石田鶴右衛門追機て進みけるを木戸際六

令なりけれどもはやり立て翹より弓鐵炮を射懸岡 七間迄引付打ける鐵炮和田備中甲の眞向に中りうつ

聲を上責かいりけるに敵も待請たる事なれば

ふきに倒けるを郎等の和田宇右衛門走寄て備中を取

て引立て肩に打懸退を見て助兵衛九太夫鶴右衛門三

人の足軽大将共も手負を圍て引退し故跡に控える同

勢夜は町口に備を立居翌日に町を破り城の堀際ま

で押よせ竹束を鐵炮をうたせ弓を射懸暫く支

て防戰ひけれども味方甲のしころを傾け頻に責ける

故叶ひがたくや思けん町二町破られ三町の木戸迄

引退き島津又助と云老功の者足輕共に下知しけるは

夜中に町屋を寄來る敵をば左右の見世棚を目中に鐵

炮をはなせとて雨の降ことくに打けるに味方の士卒

の檐下に付て戸障子簾なとを楯にして寄る者共

将棋たをしをする如くひくと討たをされけれど

事ともせず手負死人を乘こえはねこえ漬ける時後

陣に控へたる味方とも跡の町へ火をかけるにより後

は明に見え敵方は彌本書に記豐後國へのとて熊本を出勢有木山

人共Sかして見付たるやらん加兵衛に向て方は

致候浦 宇土城責の時石の瀬の町破る事

の云し詞の驗か

此時家康公の御味方いたし無二の志の通書札を認め

何様やし曾て以てなし扨又家康公の重恩に忍びがたき事九六

肥後文獻叢書第二卷

数多

有り故に今度家康公の味方になり九州の軍勢を引請

合戦をし若運の極ならば一命を當城において拾んこ

清止か本望也惣て至理にあたり必死に極りたる時

命を遁んと兎の角のと諸人を集め談合を區々にし

日月をせば大の威輕く成て諸卒疑心出来て軍

法堅固ならず士卒和合せさるは是大將の心靭なる

より起る事也と無二の御志にて宜ふ故家の者共の

心も金石のごとくにかたまつて斯君の下にて一命を

捨ん事は露塵程もをしからじと思ひ定たるは清正の

方寸の内より出る事也六韜日將者人之司命三軍興

之倶治典之倶亂得賢者兵強國昌斯之事なるべし

續家康公への使四國にて自害いたす事

き人と見及たり名来ずは通すましきと云

ふにより舟よりおり色々陳じけれとも浦人共寄合是

非此者を生捕て上方へ上せ忠功に致し恩賞に可預

と談合したる事なれば次第に大勢集り遁がたきを見

付兎の角のと云て浦人共が少油断せし透間を見て走

出し二三町斗行寺の有けるに走込て見ければ幸墟

中にくはつと火を焼て茶を煎僧の一人居けるに則爐

邊へ行肌に付し文を火にくべ忽煙にして僧に向て云

けるは我は加藤主計頭の者成が私用の子細有て上方

へ上り候を浦人共利欲のために非義を申懸生害に及

候故斯仕たると後日に若る者あらば被仰玉へと

云所に浦人共寺の門前に追々に来るを見て雑人原が

手にかいらんよりは自害をは御結縁を頼み奉る

と云捨て腹かきて死にけり誠に比類なき勇士成と

ほめぬ者はなかりけり上古駿河次郎清重が鎌倉に

義の廻文を燒て捨數人を亡し其名をあげしには

おとるまじき事なれば上代とても不賢末代とても

不愚と古人家康公の使に明石加兵衛と云小性立の侍を申付つか

はされけるに早國々の敵共蜂起して容易關東まで通

がたかるべしと諸人云ける故に加兵衛我一人商人の

Sに真似商舟に乗て行に四國の内に舟を懸て潮時

を待居る所何の浦とやらん申候所の名失念續撰浩正記巻第五

をあげしは清正一人が武勇を以てしたる忠功を治部

續 石田治部少輔と一戰に及よし家康公より飛脚到少輔一人の説によ
つて秀吉公の勘を蒙りたるの遺

來の事

の人數にて取圍て責けるを恙なく運を開き本朝の名

ナリ

籠城のしたく致すべき旨申渡さる則家老の共

へ大明國より百萬

チサム

部少輔謀叛愈あらはれ一戰有へきに定たる由家康

公より申来る翌明清正家臣の者共に向て宣ふは九州

の大名小名不殘治部に組す中國四國も皆謀叛の色

を見せたるとなれば清正一人家康公の御味方いたす

により近國の敵とも常城へ押寄責べき事は案の内也

へける放水底見えて中底の有を見付ずして通過

て無くまもとへ着城あり誠に鰐の口はのがる

とも此難はがれがたき番所ともを安々と通り給ふ

事は偏に梶川才兵衛が勇智謀の故也とて清正感

不斜して才兵衛に加増知行給りたり扨土佐守は湊

口より屋布へ歸ければ老者の女房達御前のおはしま

さぬきやしみ泣さめくを一度は諫め一度はおどし

色々様々にして静め下女はしたどもにしらさせず取

静めて屋敷に居たりし處に長岡越中守の御前を城内
へ入べきとの使を立ければ其儀に随はずして家に火
をかけ自害有る故諸大名の人質何れも如斯有な
らば大きなるなるべきとて此儀やみたるによ
つて何のかまひもなかりし故土佐も恙なく屋敷に居
住したる也土佐守此忠功淺からずとて御感にあづか
ける此事を思に夫爲國之道は特賢興信賢
如腹心使民如四支策無所如三支體相隨
骨節相救天道自然とあれば清正慈悲有情深き大
たる放戦を重に命を輕する臣有たる者歟
申は逢坂より西は不殘治部少輔に粗いたされ近國
敵に成るに此御勢計にて熊本一城にたてこもると
も御ひらかるる事は十に一も有がたく存る旨憚
所もなく一同に申ければ清正宣ふは汝等が云所も尤
の様なれども心をしづめて聞候へ我秀吉公の御とり
立被成たる御恩は淺からざる事なれば今秀頼公へ
の非義をいたし不忠の様に存べけれどもさにはあら

す是は石田治部少輔等が私のひたす謀叛也加之我高

麗陣中七ヶ年の間粉骨を盡して朝鮮の王子を生捕奉

兀良蛤之都を焼拂共上蔚山の城恨山よりも高く海よりも深し治部少輔に組すべき理

九五

て舟をおし出しけるに淡口にて船番所の改

事を密談いたし置て肥後國へ下國有たり右兩人の者の見けれどもその頃長雨の降る故にごり水をたく

する

石田治部少輔謀叛企る時分の事は本書のごとし其時

清正内儀は人質として大坂の屋敷に有しを治部少輔

分別を以て大坂城内へ取入かた~番を付おくべき

との内談あるよし風開す清正思はれけるは今

度は無二に家族公の味方ひたすへし然においては

人質を城内へ取人ては無念の次第なるべし何とそ計

略いたし屋敷に居内に盗とるべきとて大坂におかれ

清正内儀人質として大坂に置けるを盗出す事

の時の事

く通しけるかやうに二十日餘して番の者共の油断

立花左近將監柳川下城の時清正陣屋に火事出來つもの病人ならばくるしからずと云て改むる事もな

物の左右の戸を開き往来しけるを始の程は一度々々

柳川久留目の雨城請取事

に乗物の内を改め見けるが後は番所の見知てい

戦いたす事井立花三太夫討死の事

立花左近將監授飛騨守内小野和泉鍋島加賀守と合にのり大綿帽子をかぶり大夜着をうしろに打懸て卵

第八清正西國筋方々はたらきの事

共談合さはぁ梶川才兵衛は大坂でんぼ口に向けるが

續宇土八代の城鯖取事

續 宇土城近所の沼田に懼たる事

毎日二度づ、屋敷へ通いるに老人と云病中と云かた

もつて行歩不自由のことわり番所々々に申乗物

かるてひをとくと見付扨御前を乗物にのせ申彼大夜

着を打懸我後に押付てきつともたれかつて大綿ぼ

うしてかぶりいつものごとく乗物の左右の耳をくわ

つとおしひらき土佐守を歩にてつれ若ぁやしみ乗物

を改んといは、あやまたず取ておさへよ其間には御

前をさし殺して他人の手には渡し申布と兩人が心

金石より堅固に云合ていかにもしつかに通りければ

番所々々にていつもの病人ならばくるしからすとい

ひて難なく通り扨舟には大きなる水溜桶を三ッ居淇

中に中底を入て何れにも水をくみ入其下に御前

大木土佐守と船奉行の梶川才兵衛兩人の者に斯を入置續撰清正記巻第五

續撰清正記巻第四 終

高麗國の寺々は在家を離れて山中に引籠て有り一ヶ

寺も市中にはなし乞食にならでは常に僧の市中へ出

事なし此故に道中にて僧に行會へば町人百姓は下馬

をいたし殊外崇敬する也寺々は申に及ばず武家にも

書籍の二駄三駄程宛なき家はなし町屋在郷にも少よ

ろしき家には書籍おはし是をもつて鑑れば朝鮮は夷

狄の國なれとも今に道の沙汰はあると見えたり

勢の糧にしたり後は所の町人百姓をし前々のこと

く年貢を納させける也町には後々は日本人渡海し來

小屋をかけ居て商いたしたるにより清正の居城西

生浦には高麗町日本町と云て分て住しけり

續 宇土城より出たる夜討を突歸す事

續田中兵助手疵あらため給玉事

九三

續 宇土の城責候時石の瀬の町破る事

三宅角左衛門南條伯耆と鑓合の事

續 宇土城より出たる忍の飛脚生捕事

續 相田權六郎小川にての働の事

第七清正宇土城せめらる事

家康公への使者四國にて自害いたす事

石田治部少輔と合戦におよよし家康公より飛

脚きたる事

清正内儀人質として大坂に置けるを盗出す事

第六石田治部少輔謀叛の事

第二大明梅栢蔚山の城へおしつむる事

第三秀吉公御他界朝鮮在陣衆歸朝之事

第四朝鮮在陣衆と石田治部少輔不和之事

第五小西朝鮮陣中の悪事在陣衆中より秀頼公へ申上

る事

第一左馬助幸明順天城守事

續撰清正記巻第五目錄

などにて人は一人もなし尤夜明かたの事なれは物 高麗國の年貢は皆白米にしてる也夏虫にならぬた

の色さだかに見定かたき時分の事なれとも是程には めに石灰をませておくをしらずして始には常のこと

周章間敷事なれ共併上古氏の軍兵か富士川にて水 くかしぎて食にたき喰して食傷する者多かりし也後

鳥の羽音に驚きて逃けたると聞けれは有間布事にて は是を知りて幾度も水に立て石灰を流して食にして

もなし其時の平氏の侍臆病にもあるまじきと思ふ 喰ひし也始一二年の間は兵を日本より渡して惣軍

ふ如く也國の名にてはなし

右に記すことく大明人出張して數度日本人越度を取

朝鮮國事

共にも御感のよし仰られ候也

突崩し加えず首をとりたる御感有和田備中には

長光の刀大助には月毛馬褒美として下

は齋藤實盛か奇異の曲と云はれしか其中に在り今

此敗軍の勢の中に手柄を仕たる勇士もありかや

うの事は深き吟味これあるべきと思ひこれを記し侍

九二

加藤大助能も首をとる此兩人真先へ出て敵を

肥後文獻叢書第二巻

外の者

枯木を旗と見て敗軍いたすの道の一里は日本の關東道の法也一里木と名

付て一里塚の上にけづりたる木を立其次の鄕何と云

所迄は何里何町有りと具に書付て置ける也

朝鮮國の名に赤い國國とて五色の名有と世以て

Sひたる事也不知者の申事朝鮮の繪圖を書きた

る時國々を色々に彩色しけるに或は赤く或は青く色

どる故により其國の名を覺がたき故其色に付て云な

らはしたる事ならば日本の静岡に國分をしらせ

んために上野をばあかくどり信濃をばくだみた

る上野を赤國信濃を青と云よきまいに他の者

の云により諸勢少恐懼の心出来る時分ある山道を夜

更に押行けるに夜明かたに先手の勢敗北して申け

はおしゆく向の山に漢南人と見えて旗共夥布立置

人數何萬共不知谷にも峯にも見え候此小勢にて通

る事は思ひもよらすと云ける故於然は先つ老功の

者をつかはし敵の様子を見て合戰有へきとて惣軍

勢をは其所に備を立置物なれる老武者を二騎つか

はし夜明能々見けれは白旗と見しは枯木のしゃ

わたる也又は紅葉したる木葉也人數と見えしも皆木

石續撰清正卽卷第四

馬草刈を漢南人追來續

うるほ

る時出合ての事

良蛤人の

働は弱兵たりといへ共叉強在り漢南人の働は強し

て少弱也故に後は日本勢手をとりたる事有り故

に此書を見るによく心を付て鑑べき者也

ひ

から陣中の働に甲乙の次第有事也始釜山浦へ着

ひたすらょはき

高麗にて働きに甲乙次第の事

同城連開きて亦普請有けるに小水の付たる草原の

ひ有所を堀にほりけるに長さ七八十間横三間程の内

に二尺三寸斗なる蛇共が何程とも積りもなく底へも

八九尺程の間蛇也はり出し持籠に入て川へ何程と

もなく運び捨たり寄ふしぎ成共云べきやうもなき

諸人申ければ何者が云共なく風説には漢南人が薬
を蒔如此とひひならはしけれども何の益もな
事なれば藥まくべき子細もなし又敵の陣取る所な
れば漢商人も定て蛇のゐる上に陣とる事好間布事也
然大寒の中なる故大きに不審なる事也右三ヶ條慥
に見たる仁とものの物語數度直に聞たる故これを記し
候也
し也
船時分の朝鮮人のは純柔にして純弱也兀九
漢南人出張しては馬の草刈に出たる者共有る時は追
立られて陣屋まで来て働きる事有り或は草刈共
不殘討とられたる時も有ける放後は侍五騎七騎に
足輕廿人卅人宛添て草刈を出したる事也此時數度敵
に逢て一戰有て手柄をいたしたる者もあり又おくれ
をとりたる事もあり朝鮮國古都にて或時草刈出ける
を漢南人出張して討捕んとするを足輕共防き戰ひ
けれとも事ともせす弓を射かけ大勢出重りたる放

叶びかたくして草刈をつれて出る五六騎の者足輕

共に追立られて陣所近くまで敗北し來るを聞付和田

備中加藤大助真先へ進みでけるを見て相加藤

蒲助 助六 駈出る漢南人も暫く戰け

れとも右四人の者甲のしころを傾けて懸りけるに

相續て大勢出来るを見て叶はしとや思ひけん引退

處を切伏突伏首をとる備中は向脚を半弓にて射ぬか

れけれとも馬より飛ており敵の甲の眞甲をきりけれ

は太刀眞中よりをれける故おしてみて組駄首を取て

立わからんとしけれとも痛手放足自由ならずして暫

く休みるたる所に飯田角兵衛鶴次來て矢柄を抜て

捨て角兵衛備中を馬に抱き乗せ兩人しててて退た

しみたるに恙なく蔚山の城中へ入て剰へ運を開き給

に御座したる大將衆の後詰の人數を見て大明の勢恐 放吉の相にて有けると後に思ひあたりけり

懼して百萬の軍兵ども不殘引退ると本書にあり 蔚山開きて後漢南人共の寄來て陣とりたる跡を見

此後詰に色々の僉議有て後詰の大将衆と横目衆と口 廻るにしたる跡一所もなし百萬有餘の大軍勢か三

論出来て既に大事らんとひたしける後詰有りし方 十日の間晝夜寸地も不殘ときて居たる跡なれ

々の宣ふは誰々後詰いたし候に依て漢南の軍勢退散 ば一度も糞をせぬと云事は有間敷事なれば穴を掘

Sたし籠城仕たる諸卒無運を開きたるとの書 埋めても有るかとて色々尋見けれども見出したる者

を認め秀吉へ註進の狀に各列いたされ横目衆に なし長陣とSひ大軍と云かた(以藉なるべきに

加列れと被申候時家名は失念仕候兩人の横目被 其跡をけがす事なく奇麗にして引退さし事不思議な

申しは漢南人退散は各後詰故と不存子細有之故 ける事共なりとて諸大将御舌をまいてかんじ被成

加判なるまじきとの事なるを清正様々あつかひ被申 たり日本人の十日共陣とりぬる跡は中々足のふみ立

て無事になる其書札に横目衆加到有秀吉公へ註進所もな程むさき物なると数度事に逢える老人共申

にも下りにも横様にも自由にかけて半弓を射る事也

殊にふしん弓と申て長さ八寸有る矢を竹の筒の中に

入れ其筒を引矢を射出す事也中のこまかなる事は

本朝の射手などの矢尻に似る事にてもなし漢南人殊

にすぐれて上手也馬に乗る程の者は具足を着て鋒

をはくなり歩立の者は皆徒肌也鐵炮打事は比まて

は下手也

清正西生浦より蔚山へ出勁被成候時刻少過て跡に

蔚山の城にて不思議ともある事

あたり

ありたり具なる子細共有る物語聞候へ共失念いた

し申候也先此通にて有り能知る人かさねてこれを

しるさるへき也

る事は中々およへる事にてなしけはしき山坂を上り

不思義なる事有り城際に横百間程の大河有けるに

何ともなく来て三町程の間に水の色もみえぬ程浮

居けるを見て此儀吉凶いか、知かたきとて諸人や

二騎が

きつと馬上にゐて明る辰の刻迄下馬する事もなく馬 城へ押寄する時は楯の板に連尺を付脊負て後歩み寄

の首を左右へまはしもせずして居て下知をなし攻け る其跡より指を曲て吹ならし弓を持ち歩行立に成

るを見て是は人にてあるべからず木か藁にて作りた て押来るを間近く引付鐵炮にてきびしく打立つ

る人形を馬に乗せたるべきと諸人たる事なりける 楯の板をば其所に置き堀と引退て又来て楯の板にあ

十二月の事なれば寒氣のつよさ我朝の北國などより る書付を見て我名のあるをえて歸る何程鐵炮にて打

しきに々大乗の根器とも中々云べきやうもなき ころされ矢に中て死ぬれとも他人の楯をば不取爰

事也日本人なとのおよぶ根器にてはなきと其時見た を以て鑑れば末世たりとSへ共大明國の者は大きに

る老翁の物語也右の通來る人數毎朝入替るに城の守る所あるかと見えたり漢南人朝鮮人の野合にての

向に在る山の尾崎を通るかみえたる所有り或時老 働きは馬上に弓を以ての勝負馬を乘事の達者な

漢南人楯の板をとる事井戦中働の事

度の合戦にあはれたる仁なれば武道の功者達にてお

はしますなれは定て人数の積よくたんれんあるへき

と存る也此往還人數何程有へき積聞度と申ければ老

人共申けるは我々共の取りは何の時誰の備は何程有

しが其より此人數は多ければ何程有へし又此備は何

の所にて誰の備よりすくなく見ゆるにより何程に

有べきと積る別に見るなり此様なる大軍の

勢を日本にて見る事は不及申に古き物語に聞

る事もなき事と何も申たる也

漢南の軍勢城資けるは毎朝辰の刻に惣人數代りける

漢南人共の城を責たる様子の事

おさへの備を残し先勢にこそ退へけれ其上

を捨楯に火を付退くとしらせて夜明がたより退し

は城内の者を引出し討捕へき行也卒爾に追て人數

を話せるにおいては大きなる越だたるへし敵の謀略

を知るが大る上の第一也と宣ふなり

功者共に若輩なる者か開けるは各は永禄此方數

偖くそかくあるべき~見えた誠に退くならは跡に

に一備々の大将と見えてはあさぎ或は黒きしない

の七八尺斗有をさしたる武者二騎づ先立て押寄せ

惣軍勢の備立置我は城へ向て馬の首をならへ焼捨の板を火を付捨置
て惣軍勢一度に引退けるを

見てすは敵か退と見えたりひご追懸て討とるべきと

諸卒ひしめける時清正暫見給ひて敵方便て退と見

およびたり一人も出べからすと宣ふ故城中さわがず

静り歸て守り居たれは案のことく酉の過よりあの

木の陰かしこの岩の下に伏かくれるたる敵共がお

き立て見る中に如元城を取る時清正宜ひしは

たばか

のことくそひ来り脂を吹なら弓を射る事

蔚山をとり圍る大明人共ある夜の明方より篝火を

ゆひ (指か

に鍋島軍勢悉敗軍し来るを追すがつて大明八雲霞 大明人謀に引しりぞく事

とりこめられ既にうたれんとしたる所に手勢十一騎

有けるか清兵衛をとり包みて眞丸に成て退けるに城

小屋との間はづか一町ばかり有ける所にて九人枕

並てうたれ残る二人が前後に付て働たるにより

無恙城中へ懸入け歸朝有て後肥後國の中南關

の城を清兵衛に預かれしに城の向の山に右の討死

したる九人の者共の廟を立て忌日には毎月参詣し

て焼香したるを諸人聞てし侍りける九人の者供討

死して清兵衛一命を助たるは重き忠功なれ共年長時

うつれは忘やすと物なるに如此はなりがたき事共

也

もあるへきかと思ふ比鍋島加賀守陣所に銀炮の音し

丸ń

けれは諸人聞てひつものことく白鳥をうつにてある
べきとておとろく者もなかりけるに又の音先の
よりおはくきこえけれは是はいつものより時もは
やし其上鳴音も何とやらんちかひたるそ何様不審な
とておきる者もあり又いや~何事にもあるま
しく今朝は鳥共澤山に通るにより大勢出て打物にて
あるへきと云てさわがして寢て居る者も有けるか
今度は夥布鐵炮の音したる故は敵か寄るか若又
謀叛人か出来たるかとてさわきて物具取できる者も
あり漸おきて帶をしめる者もありせざるも有ける所
天地も須臾にくつかへるかと震し然故とる物もとり
あへす城へ入らんとしける敵道をさへきつて半月
にて射る事雨の降ことし殊に十二月三日の未明の事
なれば敵の鋒さきに行當るもしらざる程くらかけ
る故敵も味方も見分がたくして十方にまよび周章け
然るに加藤清兵衛は具足を取て着鎗を持てさへき
る敵を突拂々々して城へんとしけれども敵大勢に

伐にたて籠た ひたりゐて夜明方になれは五十三十づむれて鍋島

にて兵とぼしく其上水の手を敵よりこめられ 陣所の上をいかにもひきく通る所有けるを足輕共鐵

たる故諸卒飢渇におよひたり腰に付たる米は漸々五 炮二三十挺一度につるべてはなしかくればー ッニッ

七日の糧にこそ成れ後は馬を殺し飢を助たると云 自然に當りて白鳥を打おとしたる故毎朝右の通りに

事必定也適雨降れる時は器に請て主人は用ひ給へ共白鳥をうちし也 然るに十二月三日の夜七ッ時分に

續蔚山籠城の事

相違也十二月六日の中の殼の事也

續 加藤清兵衛蔚山の城へ入る時の事

内也なる程米と鹽を腰に付くし定諸卒油断はある

ましき事なれ共自然は若輩なる者は城ぎはにて討死

したる時兵粳澤山持たるか尸の上の恥辱なるへきか

と思ふ事も有へしそれは軍術の至理をしらさる放也

或は城中より切て出るとき又は野合の一戦の時は
さもあるへきか假時なりとも食物をもたすして
は働事なりがたき物なれは今日の心入は又格別の
となるぞ陣中を笑わつて城内へ入り堅に城を持へ
心懸が専一なれば少も多く兵を持たるこそ却
志深き験しなるへしと宣びし放老若ともに力の及程
兵を腰に付たりかやうに諸人が御一言にて合點S
たすやうに下知は中々愚将のなりかたき事と申たる
事也ける本書には十二月廿六日に蔚山の城へ入と
下々は然なきに依て寒気を忍び布子はおりごときの
物に雨を請天氣上りたる時にしぼりて口中をう
るほしたり第一鹽を喰はさるにて諸人よはりたり少
づきも鹽を喰ばこへる物なりとの物語り聞侍る也
心得へき事共也此時清正諸大衆に申されしはとて
も餓死せんよりは突て出て討死すべきと宣を何れ
もの御留に成る故やみたると本書にありこれ沙汰
もな事也又東門を開いて三百挺の鐵炮を持せ夜討

をいたしたるとあるもされなき事也右の雨條は詐り

なるへし

蔚山の城普請最中なる故諸軍勢城外の近邊にひしと

小屋をかけて居候て普請を仕たる事也鍋島加賀守小

屋は清兵衛陣所より十二三町程手先也けるに近所に

大きなる沼水の有けるに白鳥共彼沼に何程ともなく

蔚山普請に思ひよらす大明人寄來てして諸勢

待ちぬる内に若落城するならは清正か恥辱は一命よ 西生浦出勢のとき諸卒に仰せわたされけるは今日は

重し殊に諸大將の居城は遠し我居城は近きに遠路 餘の一戦とは別也敵射る共突とも左右をかへりみる

勢を待へき理なし是一″敬遠國より押寄來て未陣 へからす眞丸に成て馬の首をならへ甲のしころを傾

取かためまと是討べき節也是二勢の多少を計時 け一文字に城へ入へし若向てさへきる敵らは切捨

を延ばして敵に備をまふけさする事大きなる味方 突すて首をとるへからす一足も早く城へ乗こむへし

のよはみ也是三″敵は大勢をたのみにして日本人の偖又此籠城は伐の事なれば糧~ぼしかるべき事案の

蔚山城の内へ入時の軍令の事

〃もなし惣して敵の多少を計討へき時か討間敷

時か其時節を能鑑みて討へき理至極ならは無二に押

寄せて討か戦の法也敵幾萬人有て防ぎさへぎるとも

ニッに突破で城内へ入るへき事は身命をかへりみず

清正が下知にさへ随ふ物ならは蔚山の城内への大道

は諸卒の心中にあるへしと大音聲にて宣ふを聞て誠

に此大將の御下知にては假令大明國の勢共か何百萬

騎ありとも眞中を突破て通らむは平地を行より安か

るへきとて士卒勇々に進み行きける故敵防戦ひけ

れとも事ともせす眞中を切かつて事故なく城中へそ

入たりける

大明國より百萬の人数にて蔚山へ押寄たる由清正聞

山へてもらる重

也彼といひ是といひ諸勢を待て延引いたすべき理一

蔚山へ大明人寄せんとする時西生浦より清正蔚 小勢を見めなつり油
断有へし是こそ第一突破に好節

給ひて即時に蔚山の城へ籠るべきとて人数分を致さ

候時家老の者共申けるは御勢三分一は蔚山に有り

今此勢を半分當城に残しおかれは漸々三分一の御

供致す事なれは敵は百萬有餘の人数と承る味方は小

勢の事なれは士卒悉くうたれ候て後若御大將討死

そばす物ならば大きなる御不覺なるへく候暫く御支

度有て諸方の御勢を待請被成大軍を以て後詰めそ

はされ候へは然るべきと頻りに止め申候時清正聞召

てる所尤理なきにはあらね共心を開候へ此

蔚山の事は我持ぶんの城なれば家の者共籠置ける

に此一左右を聞なから敵の大勢を開催に續撰清正記巻第四

續撰清正記巻第三終

け一揆の大梅木田をばことゆゑなく討たるそ早々

出合と呼はりける時方々に居る足輕井町人共出合

瞳と城へ押てみて一揆の者共方々へ追散し即時に城

をとりかへしけり此節秀吉公名護屋に御在城たる故

兩人の者を召寄られ今度の様子神妙の至り比類なき

手柄仕たると仰られ御前へ召出され御盃を被下知

行二千石の御朱印善右衛門に下行あり理右衛門も同

御盃被下御朱印頂戴いたしたり知行の高は失念

仕候兩人の者面目をほどこし前々の通り清正家に罷

在て逝去以後迄奉公勤めたる事也

八玉

枯木を敵の旗と見て日本勢敗軍の事

續

朝鮮古都にて草刈を追るに出合漢南人とはた

らきの事

續 高麗陣中働に甲乙次第ある事

續蔚山の城にてふしぎともある事

漢南人楯の板をとる事井戰中働之事

大明人謀に退散せし事

加藤清兵衛蔚山の城へ入んとする時の事

續蔚山籠城の事

蔚山城へ入時の軍の事

積蔚山へ大明人寄せんとする時西生浦より清正蔚

山へ籠らる事

第四清正居城蔚山へ揚鎬吳惟忠百萬騎にて押よする

事

第三大明人朝鮮へ百萬の人數催す事

第一清正勘氣御赦免の事行長讒言露顯事

第二梁山南原落城之事

續撰淸正記巻第四目錄

く一同して則町人を頼み申けるは今度の御手柄の段 餘りにや兩人の者を呼出し云けるは我數年の望を達

とかく申べき樣なし我等共大きなる弓断者と成候 し今此城主になりたる事一生の幸是に過たる悦びな

上はくまもとへ何の面目候て帰り申べき又何方へ参 し汝等も向後は忠功を盡すへし一廉恩賞を興へんぞ

りたり共ゆだん者ときくならは誰かは扶持し申べき 二心なきにおいては上戸にても下戸にても三盃飲め

自害をもたさんと存候へ共流石に父妻子共か不便 と云て盃をさしければ善右衛門出盃を取て三度い

に御座候により罷不成候也あはれあはれ 召かへ たいきも忝仕合也と云て引請ひき受大土器を

下され候へかし若叉御扶持なき物ならは餓仕るに もつて三盃つけて呑けれは先も氣味よき飲様也さ

有へくと存候へは御慈悲をくはへられ候において は肴を出すへしと云ける時つると傍へねり寄

は生々世々忝かるへき旨無二の志の通り再三Sひけ けれとも酔亂れたる故なれば何の氣づかひもなく

れは梅木田あくまてふてきなる者たる故安々と同心 えて大根の淺蹟をはさみ汝これより後は大剛者に

して云様は誠に彼等は大きに油断者也其上妻子共の れよとはふれてもひとつとてぞしひたりける忝と

餓死せん事を歎て自害をもせぬ程の不覺者ともな 儘に又たふくと請けしを見て々手際な詩様と

れば別の子細も有ましたとひ野心を存るとも何程の 手を打て笑ひ彌興に乗したる體を見すまいて持た

事か有へき我今扶持せずんば餓死する事必定たるへ る土器の酒を民部がつらにさつと打懸け脇指を抜て

し誠に不便なる事也達で降参するならは扶持し抱へ 飛かつて眞甲をきりけれは心得たりと云儘に腰の

し此情を過分に思ひ野心を不存奉公いたせと云て 刀に手をかけしが大酒に酔ひつる事なれは難なく二

相違なく抱へけり兩人の者忝由申上二心なき體に 刀に切伏たり其座に在る者共是は狼藉なりと云つ

かにも忠功ふりをして勤けり然るに此梅木田比類な つ善右衛門に討て掛りける所を理右衛門刀を抜て切

大上戸にて有ければある時酒宴をはしめ夜陰に至 拂ひけれは流石一揆の奴原なれは蜘の子をちらすか

下人を呼出し盃を指てつ舞つ飲けるが酔狂のことく逃さりけり善右衛門矢倉の上へ懸登り大音

やすく かし若又承引いたさすんば共時汝と某と指ちかへて

と城へ入り門々をひたしと打て我手の者共に所々死すべきとよんどころなく云けれは理右衛門是非な

押かけしに此城落城以後ははかしき普請もこれ

覺悟もな

あらは

を少々引逆てどろく

自害して然るへきと云ければ善左衛門聞てかく

失念

の番をさせ難なく城をとうし也此梅木田民部ぞとく

名字は

高麗出陣の時分は天草の郡とりかへす事

念したとひ礫わたり申候共少も恥辱になるましき儀

也後々においてとかく申者ありとも清正内誰かれと

者共くるしからざる據に立可申云て彼仁石

垣の上へのぼり呼りて内より人出合返事通じた

る事也是は他家の者の事なれとも心得にもなるへき

なりと思ひ誌す也此地震の時日本へ踊られたる

清正家にては中歸朝とS此節は惣八數は朝鮮國

に残し置て近習の侍小性共ばかり供にきたる事也

梅木田民部と云者本渡の城とりしを策をもつて

を清正預り給ふ故中歸朝

前に本渡 転の城の番に酒井善左衛門と理右衛門

者兩人に足輕少々相添殘し置けるにある

時兩人の者を所の町人振舞ける故町屋へ出て終日店

ける留主に梅木田民部太夫興風思ひ立て一揆を愛し

我手にしたかひたる百姓共太夫~

云者は天草の地下の侍也兩人の町屋にて此由を

聞けれとも少身者共の事なれば人数はもたず城をと

りかへすべき方便はなし十方にくれて居たりけるが

善右衛門心をしつめ暫思案していひける時偖々是非

におよばざる仕合何の面目有て熊本へは歸るへき

これよりも何方へ行たりとも誰か一夜の宿を借すべ

き又爰にて自害をして死なんも餘り口惜き事也最早

此上は恥を捨て降参をして梅木田家臣になるより

外の分別は有間布と申けれは理右衛門聞て興さまし

是は思ひよらさる分別かな其方は狂亂して云か我等

においては只今爰にて居なから首を刎られ候共降参

をして民部か家來の者に成事はあるしきいへばとて命を惜むにあらね共能々思案して見給ふ

べし只今自害をして死する事はいかにも安き事也さ

なから何の盆もなき犬死也活で泥中に尾をひく

も一度蓬莱に逢と云事もあるぞかし曲て降参し給へ

くてゐたる折なれば門番の足輕共を追散しなきにより四方の圍も露破になり其上何のる事にてなかりけるに件の立して置たる雨戸の 候へ共申さて不叶用にて御座候まいのぼり申候礫

口より清正も小性共も一度に大庭へ走り出ると則共にうたれ申候とも越度にはなるましきかと存候各

家ひしとつぶれけり常のごとく宵より立しめておく への爲にと云けるを聞て倍々若き御方の一段と能

とて諸人産と焼ける事也此時歳廿二三程にみ

本書にある大地震の夜清正は夜咄常のことくいたさ えたる若堂一人清正者共のゐたる所へ來り我等は増

れ亥の池に閨へ入給にいつも次の座敷に近習の 田右衛門尉者にて候か用之義申付られ使に城中より

小性共けるが縁の雨戸を一枚たてずして皆ねける 罷出候ひけるが返事申へきため色々ことわり申候へ

がある者これを見て誰か用所に行跡の戸をしめす 共ふつと御門を入不申候大事の用にて候により返

してねたるぞ開たる仁おきて立られよと云に我は先 事申さでは不叶事にて候間の崩れる石垣の上

に出たり誰か跡に出たると互に云合間に皆寝入ける にのぼり呼はり城内より人を呼出し可三申通」候が石

時大地震にゆり出て中々夥布事にて障子の開垣の上に登りたる者をば内より礫にて打っとみえ申

大地震の時の事

常座に抜かねは肉喰しめ後に抜けぬ物とそ

肥後文獻叢書第二巻

入二

也但其御成狀見る仁が記たるが不審に候子細は

角兵衛後迄この角の字自他ともに書申候此覺の字書

たる事なし同晋州の城に乗入候時矢木八右衛門と申

者具足の綿上に矢を射付られけるを取て引抜けれは

矢柄斗て根は止りけれとも事急なる時故其儘城へ

入偖共夜に入陣屋へ帰り矢の根を扱に骨肉に喰

しめ一圓扱さる手負を足にて踏つけ鐡鋏を以て矢

の根をはさみ漸々扱たり此時老功の者は何時も

ならば中々開くる事なるましき不殘打詰めらる

にて有べきに兎の角のと云て戸を立さるは清正常

に鬼神を敬ひ稷の神を祭り給ふと依て天神地祇の

擁護の酢を廻し御守紛故なるへしと冥咸肝に銘し

給事也偖伏見の御城へ馳行清正は城内へ入給ふ供

の侍共は皆城外堀端になみるけるに何者の申とも

なく秀吉公も押にうたれさせ給ひて御他界有たる

ひそめきへるとき七つの太鼓をいかにも押しづめ

て常々のごとく打ける聞ては秀吉公は何事も御

座なき續清正記巻第三

なり併其者は石にう

たれたすかる事は有間布なれは隣にある妻子共に思

賞を興ふべし若命恙なき事ならは常座に知行下行 晋州の城一番楽仕
比類なき忠功と有て秀吉公より御

有へきと宣へは御言葉の下より足輕三人出て申け感状被下たる末の文に儀太夫の義の字角兵衛の覺

るは我等式が命を捨て此城の一番あそばされ諸軍の字右の字たるへしと本書に在り儀に不承事

八一

秀吉公より御感状に角兵衛儀太夫名字不審ある

人却て活するとは此足輕共の事なるべし

いっぱり

を見ずふしぎ希代なる事也勢に勝れて御手柄をとらさせられ候はんに身命を捨

る事これに過たる幸なし石垣はね崩事は御心安くお

ぼしめさるべく候石にうたれ助る事は百に一も有が

たき事なれは日本に残し置たる悴共御歸朝目出度あ

そばされて後御恩賞にあつかるにおいては可と

申上則の甲に打て勇にひさみ押寄る城中に是を

見て弓を射悪石を以て打かけ明松に火を付投懸々

々防けれ共思切る者共なれは少もひるまずおしょ

せての甲より飛で出て金手子を以て石垣の角石を

えいた聲にてはねければ流石小石にて築重たる石
垣故輒々と崩ける諸軍勢これより瞳と乗入れる事也
一番二番乘の次第は本書のことし右の足輕共は石當
り班は負けれとも命は無助かりけり則三百石宛
知行被下馬廻組に入おかれたる誠に大死の底の
と諸大將舌をまき給ひし
也塀際へ責寄れば火矢を射懸明に火を付おひた
しく悪手をかへ品をかへ防戦ける間軍勢これにせ
めあんて只徒に數日城を打てみて守り居たる計
也時に清正の甲と云物をたくみ出し給ふ其の甲
といふ物は乗物の様にして足に車を四ッ付乗手が金
手子にてそろ~押寄る事也それに長き細引を付跡
へも自由に引もとすやうにへ續松の火のつかさ
るためには本書のことく牛の皮をはぎ生肉の付
方を上にして包たる牛數百疋とあるは相違の
甲三つ也足軽三十人とあるも誰也三人也其時の様子
は清正足輕共に向ひて宣ひけるは誰か吾れに先つて

命を輕し此の甲にて押寄石垣の角石を一ニッは

ねたらは難なく崩れたるへし其時城中へ入べし

此城第一寄がたき所を請取るに清正か手よりのり

とるにおいては日本第一の手柄をとるにおいては本朝の恥辱不可過日入迄

待給ふべし大國の者の根器厚とも大きにかはる事は

有べからずと宣時諸大將尤と有りて良久布まもり

給へは案のごとく酉の過よりも愛かしてより伏か

くれたる者ともみな起立てみるがうちに雲霞のこ

とく城中に滿みてり此時卒爾に城へ入たらは一人も

殘らす討捕らるへして清正慮の程をせぬ者な

こちじうゅう

晋州の城近く押寄るに誰かともなく晋州の城を

開け軍勢は殘らす退出したると風聞有けるにより諸

大將手廻りの者共計召連城のむかひの山へ忍て上り

見給へば城内に人とおぼしき者曽てもつて見えずS

かにも離りかへつて煙の立たる跡もなし誠に開城と

みえたる時ある大の宣は敵城を開きたる事疑

なしい人數ばかりにて行城内を見給ふべきや

と有けれともとかくのあひさつなき時清正聞て宣ひ

しは少不審に思事もあれは暫見給べし誠に開たるに

おいては見ても益なし若又日本人を謀て見るへきた

め伏かくれてゐる所へ此小勢にて卒爾に行てふかく

晋州の城のものみの事

の恥辱たるへき事也

晋州の城ひかにも堅固に見えたる放清正見斗び諸勢

の手賦し給ひ晝夜のさかひもなく責けるに城中に敵

大勢てこもりたると見ゆれ共少もさはかす静まり

て高櫓の上より大石を投懸々々楯の板を微塵に打

碎漂所を弓を以てさしつめ射ける事雨の

降ることとく也さらは夜中に責んとて數騎の勢共城

の四方を稲麻竹葦の如く打かてみて尺寸の地もさ

ず充満ちたり旗の風に翻て靡く氣色は秋の野の尾

花か末よりもしげく劒戟の月に映して輝ける有様は

枯野に布ける霜のごとく也大軍の近つく所には山勢

是か爲に動き時の聲の震ふ中には坤軸須臾にくだけ

たりこの勢にも恐れすいかにも静に夜もすから屏の

さまごとに松明をひしと出し朝迄一も滑る所なし火

の大小もなく同じ太さに見えけり續松一丁にて明日

迄有けるが又ともしかへてけるが刹那もさえる事

續晋州の城責の時龜甲を作る事

八

かりし惣して朝鮮人は伏るる事がおよびがたき

上手也清正宣ひしは日中に伏たる者は日入西に見え

夜中に伏たる者は旦寅にあらはる者也此義心得

へき事也

なるにて以てこれるべからすと却てはれ誠に本朝

綾梅木田民部と云者本渡の城をとりしを策を以て事思ひもよらざる事也上朝鮮人なりと有間布こと

續右の大地震のときの様子の事

本書にある是虚説也終に此物語いたしたる者なし

第八大地震の事清正登城の事

第六小西行長秀吉公へ清正を讒言する事

第七清正歸朝御勘氣蒙らる事

此義偽りの子細を能鑑みるへし初に記す如く

陸奥守武道のみにして交道をしらざる故に肥後國

治らざることを能く清正見及道の端をも行び慈悲

を以て治るに治らすと云事有間布と窺知て前篇に記

すことく一戰もせずして肥後國治められたる故今高

麗國退治の兩大將其一人に撰はれ給ふ人が謀に成

共君子の道をこそ行ひて見せ給ふへきに匹夫の勇を

まなび美女を自ら殺害さるへき理なし第一此美

女に咎がなし古語にも剛刀雖利不斬無罪」と有

弥生而殺と云は無罪而討則殺之とこそあれ清

正若年の時肥後一國を治るにさへ大人の道の端を學

ひて無爲に治められたる人が大國退治の其武に備

りたるに罪なき女人をかろくしく自身鎗にて

撥晋州の城査の時龜甲作る事

第五晋州落城付森本飯田後藤堀先陣後陣論の事

晋州の城の物見の事

績 秀吉公御咸狀儀太夫角兵衛名の字不審の事

うちの事

第四朝鮮王子歸京の事王子より主計へ禮書の事

艦の事

第三清正と諸大問答の事井かせんは川の陣所へ夜

續朝鮮美女殺害相違の事

第二清正おらんかい朝鮮人等軍の事#唐人敗軍都辭

第一大明勅使に清正對面大王よりの勅書見の事付 正自身鎗にて笑殺
して大明國の勅使に見せられたる

返書 #美女殺害の事

鍋島加賀守家來の者のとりたる朝鮮第一の美女を満

續撰清正記卷第三目錄

朝鮮の美女殺害相違の事

とりかへす事

況や大明國の勅使が此小勇を見ておそるへき

事曾所｣止也 と 有り若又敵たばかつて我をうたんとする 續撰清正記巻第二終

名代に

被仰付御馬じるし渡され乍恐清正なりと名乘

王子を請取申べくと頻に諌申ければ清正仰られけ

るは汝等が止むる所も一理あれど我家の者を

清正と名乘らせ大國の王子を請取奉るべき事本意

にあらざれば天爵のがれがたし日本を出し日より我

命をば朝鮮國の苔に埋べきと思ひ定めたるは此王子

を討取奉るべき爲計なりしに今此所におゐて追付し

事は我弓箇の冥加に叶ひたる故也然るに今身命を惜

み若王子をとりがして他人の手にわたすならば

此度粉骨を盡したる事皆空しく成べし時至而疑道之

ともたやすくは討る事有ましたとひ運命つきて討る程ならば王子御兄弟をばのがし申まじきそ満正が一命捨て此の王子御兄弟を討捕るにおみては弓矢とる身の面目これに過たる本望めるべからず昔が今に至る迄將不勇則不鋭と云事をしらざるやと宣以朝餉之支度出來候と究竟の勇士共にあるひは辨當をもたせ又は樽肴などもたせて色々の役者にしたて五十餘人卯の上刻に城中へ入たる事也王子御兄弟請取奉りし事は本書のごとくなれは不及誌也

にて御入有べし然るに城中盡て王子二三日何にた

もきこしめさず候間朝餉を御支度候て上らるべき旨申越により共旨急度したくいたすべし明卯にいかにも小勢にて城内へ入べきと仰出されしとき家老共申けるはこれはもつたいもなき義也敵大をばか入討奉るべき質にてや有らん若又さなきにして案内も知らざる大國の城中へ小勢になりてうかう

かと入ん事深淵に望て薄氷を踏よりも猶わやうし唯

御大将を敵の見る事に候はねば誰にても御續撰清正記巻第二

右同咸鏡道押行ける時にある野の原にて人馬の息を

休め晝の破籠をとり出し喰けるに十六七になりける

小姓わりをもたず故に諸人の喰ひぬるを守りぬけ

れば淇者の伯父が見かねて我もちたる焼食を一っく

陣おしの道中にて相陣には或は父子又は兄弟其外に

も近親類を一所に組ませて陣屋を張り申され候也

此故はたがひに氣づかひ有て不作法いたさる物な

との事

同長路押行けるにある時のなき所に陣取る事有

ければ馬に飼へき糠なくしてひかすべきとめいわ

くしける所に藁をこまかにすさのごとくに切てやは

らかにして大豆に合せて飼へと清正仰られて馬共に

飼ひてけるにひかにもよく喰侍る者也

具足の請筒指くもでのつぼが幼稚なるは悪し右の

長陣のとき折々雨にぬれ風に採てくさりたりしが大

きなるしなひさしたる者横風につぼがねを一戦前に
吹をられことのほか迷惑したる者有る故これより
清正家にては蜘手のつぼがねを片方にニップ両方
に四ッ打申候萬武道具は長陣にそこねざる心得が第

七七

本書の通りはいれくと云所へおしつける時城中よ
り書翰をもつて申越けるは王子御兄弟此城の中にお
はします也諸卒の命御助安堵の領知下行し玉ふにお
ては相違なく王子渡し奉るべき旨申越しけるとき
清正不斜よろこび給ひて則返事を本書の通りした
めつかはしければ又重て申越すは明朝王子渡し奉
るべしさりながら城内へ多勢人申義はなりがたく候
清正に對面し直に相渡可申候間上下十人に過ず小勢
けるを清正御覧有小姓の伽車だても時により所
による事今此時に花風流は不都合也て老若に
よらず其時事に随一の守事を忘るが武士のた
しなみと云物なりと仰られ今日わり持ざるはぶた

しなみの志輕からず過代として馬召上られたり又燒

食くれたる伯父も同罪也甥が若輩なる故軍中の様子

しらずは萬指南して心がけあるやうにこそ致すべき

事なるに今清正が見る前にてわりでくる事一入不

屈なりと仰られ同罪に馬取上被成候也此後は父子兄

弟もがひにわりごくる事ださる故老若上下

腰辨當を絶えさず持候也

續 王子御兄弟生捕の事

きゃしゃ

加藤主計頭一手大河をこし都へくと押程に清正先

備庄林隼人加藤清兵衛所より注進申けるは是より巽

の方に向て家數おびたいし通詞も都るべしと申す

うしとらの遠山に小西が旗相みえ候條早々都への一

番入しかるべき旨申越す清正返事に兩人申越ところ

ひばれなし都と見るにおゐてはおしつめ放火せよと

めとも水深して然も大河ひかすべきと諸人途に

まよふ所に清正少も動顛なく良久しく守りゐ給へば

川上より水鳥ニッ三ッおよぎつれて向の川岸をいか
にもしづかに通りけるを見給ひて少もくるしからさ
るぞ敵と見ゆるはいかさま作り物にてあるべきぞ川
心得たらん者共およぎこえて向ひに見ゆる船共に乗
きたれと宣へば御言葉の下より曽根孫六川へ飛入た
るを見て川たちの若き者どもひたしととび入およ
ぎこしつなぎ置れる船とも悉て打乗来るに軍勢と
り乘なんなく此川を越たり清正さげすみ給ふに少も
違はずみな藁人形に物具させ旗は紙にて繼立ておき
たり水鳥の游にて敵の謀計をしる事上古より申おき
たる事な共其時に當ては名將ならでは行ひがたき
事也

肥後文獻叢書第二巻

加藤主計頭とのへ

撥 王子御兄弟を追奉り咸鏡道押行時之事

王子御兄弟の跡を追奉て行けるとき晝夜百日餘り具
足をぬがずして長路をおし行ければ老人は申におよ

ばず年わかき者も身瘦はそりて胴に相たる具足な

どもことのほかく成て着にくい成て諸人めいわく

ひたしたり常々少せばくして一寸も一寸五分も脇板

のはざるが後は合もの也殊にだけの長きは一入き

にくき物なるとて清正家にては少せばくみじかき具

足をもちゐたる事也

五月朔日

御朱印

四月十一日之書状及上覽候都一番入放火候得共帝

王退散軍士一人も無之故不及三一戰之由聞居候

近日帝王とらへ可申之由氣味能被思召候

油斷,可」抽戰功 候猶淺野彈正少弼木下半助可中

候也

の事なれば則おしつめ火箭を射かけ一の煙と焼た

つるといへども朝鮮の帝王は十日已前御退出あつて

敵一人もなしかるがゆへに合戦におよばす旨注進

に及ぶ則下さる御朱印にSはく

釜山浦へ日本勢着る時敵の退出したるあき家こと
に大なる甕に酒卓散に湛々として有けるに何者が云
出すともなく此酒共には日本人をたばからんがため
に毒を入おきたるぞ一口も呑べからずと云により諸
人恐懼酒瓶のそばへよりつく者一人もなかりし
然る處に或者申出しけるは此義誰いひだすともなけ
れば實不實分明ならず若虚説にて有るときは朝鮮
の酒を實もなき説におぢて一滴も呑ずして捨てると
夜の世までも嘲弄せられん事口惜き事なるべし若又
績 釜山浦へ着船の時酒呑事
えて馬は一定もなし歩にて供は成かたき者共が牛の
有けるをうばひ取て乗ける然る若き溢者ども時
の興に申けるは方々は騎馬とはひがし騎牛衆と
申べし何時も馬乗より遅かべるしとされことを云け
るを始の程は互に打笑て居るが度々申により後に

は腹を立て偖は各々は誠に笑とみえたり然らば牛に

乗る者がおそきか馬に乗る者が何程早勝負

たすべしと云て巳に一戦におよびけるを家老共これ

を聞付色々つかび悪口る若輩者共詫言いた

し漸々無事に成にけり

渡さんと欲すれども来るに所なし馬にて越さん!

七五

望

本書には小西内木戸作右衛門と云者を遣し舟共切流

たると計有川を越えたる様子なし本書に記す通り

清正河端へ自身往て見玉ふに川向ひには舟共多く懸

置陸には敵大勢備を立てなみわけるとみえて白旗

川風に随て翩翻せりこれを見て諸卒氣を屈し船にて

綾南大門道にて大河を渡たる事

毒を入置たるは必定にて自然呑て一人も死たらばこ

獪以恥辱たるべしたとへばしらざる國へ行大河

の瀬ぶみをし諸軍勢をわたすも此毒酒を呑て實不實

を諸人にしらしめて餌をたすぐるも同じ理也されば

何事にても我一命を捨て萬人を助くるが武士たる者

の本意也日本を出しとき捨てる命なれば露塵はとも

をしからず我此酒を呑て諸人の疑ひをはらし申さん

と云て大盃をもつて引つけく三盃のみけるに何の

恙もなく其味甘露のごとく也故に高麗陣中諸軍勢た

くさんに酒をのみたり是ぞ誠に世俗の毒の試に

てありけりされば呉子云必｣生則必死則生云々何れ

の道にも命ををしみては諸人にぬきんづる事ある

じきとみえたり

本渡の城を乗取る時或*武者刀脇指の鞘を金のし

つけにて指たるが城の塀に手をかけ乗りこすべきと

續金のし付の刀脇指の鞘きられたる事

包みて一

人ももらさず討捕て見ければ男は一人もなくて皆女

人なりける故に首をとらず斬捨ける此時手負たる

者五七人有けるを傍にて申けるはSかに働くとも女

人にきられ突れたるはよはやうにとりさたしける

を清正聞召定てこれは不吟味なる若輩者共の申分な

るべし女人はのがれがたき所にても命を惜むが世以

ならひなるに死をかろんじ思切て出たる心中は却て

男子より堅固なるべし手負たる事も越度ならずさ

りながら働男ほど有る間布事なれは高名にはなりが

たし然とへとも一人も不討捨たるは一段と氣

味能と仰られたる也

Y!

本渡の城の本丸まてせめ入る時徹三十人程具足甲

鳥獣の落来る事不思議なり清正落城の相と仰られ

し詞を少もうたがはず明日は必定落城と諸軍勢が

無二に思い入れるは大將の大きに有徳のしるし也

續本渡落城のとき女人働の事

肥後文獻叢書第二巻

を着て鍵長刀を持て撞と切て出たるを追坂釜山浦へ着船有とやがて
とくねぎ海道へ出勢りけ

るに日本よりの馬船いまだ着岸いたさずして馬に乗

らざる侍共五十人餘有て跡舟を待つへき歟又驚馬な

とも尋求て乗入へきかと評議せしむるの所に風波

あしく候により五日も十日も船共港を出す間布旨

頭共侍るにより在々に入て馬を取べきとすれど

も敵どもが或は乗又は荷をもつけて退出したると見

續釜山浦にて牛に乗

する所に何者やらん二人來て後より尻を押あける

に此者は我を助侍る味方と思びいかにもよろこび則

城中へこみ落城の後小屋へ踊りて見れば刀脇指

のさやの延付の金を半分過きりまはしてとられたり

是を諸人のさたしけるは腰に指たる刀脇指の鞘を切

てとらるゝを不知はふかくなる由れ清正聞給

ひて是猶以愚なる申分也此者の城内へ乗入べきと思

志深き故に後をかへり見ざるは一段と能働也古語に

も逐鹿獵師は山を不見と有りさりながら陣中に金

延付の刀脇指さしたるは若輩故也軍功入たらば勇士

になるべき者なりと仰有けるを聞諸人かんじたる

事也

續撰清正記巻第二

月

七三

は本書のごとく倩此事を思ふに城中よ

第八清正おらんかい兄弟生捕事

第六主計頭筑州に着陣の事主計と小西口論の事

續 釜山浦に着船のとき毒酒呑事

釜山浦にて牛に乗る事

かばさるの事

第五主計頭釜山浦につき給ふ事付秀吉公より御書つ

第四秀吉公主計頭に朝鮮御掟仰付らる事

第三秀吉公小田原責たまふ事

の事

そし本渡の城の堀際まて押詰竹束をつけせめけるに霜

第二志岐本渡落城の様子秀吉公へ清正御ものかたり績 本渡城より鳥獣夜出る事

續金延付之刀きさしの鞘斬とらる事

績 本渡落城の時女人はたらきたる事

績 本渡の城より夜中鳥獸出る事

ひくさの事

第一本渡落城の事

第十清正鏡の城へ歸陣おらんかS人狼藉糺明の事

第十一清正王子官人等召具し吉州へ歸陣梅天といふ

續撰清正記巻第二目錄

清正内裏へ押詰火をかく帝王都を落給ふ事

第七清正朝鮮の都に着給ふ事王子兄弟Sけどりの

縦 王子御兄弟を追奉り咸鏡道押行時の事

續 王子御のの事ゑんたん落城の事

第九清正陣所へおらんか5人夜討則唐人等敗北の事

廿四日の夜に伐に物の音おびたいしく鳴さはぎて

竹束際へ来るを聞てすは城中より夜討がきたるとて

味方周章騒て物の具取て着るも有り或は鍵をとつて

出るも有り敗北したる者も少々有けり堅固にとり

りて見ければ人にてはなくて城山に住たる狐狸或

は城に有る犬雞のごとき禽獣どもが幾百ともなく

來れる也諸人不思儀の思ひをなし則注進いたしけ

れば清止聞給ひて一段と能相也落城する事疑なし明

早朝よりせめよせ即時に城を乗とるべし此旨諸勢に

急度仰渡さるに依て士卒勇にいさむ夜の明くる

と待卯の剋より攻かつてなんなく落城す

其時の様子うち御意に背さ候へば恐れおほくは御座あれどもあ

はれ今は御勘氣御免下さるやうにと云て清正御影を續撰清正記巻第一終

近世にはめづらしき者なり主人の思も年長けぬ

れば忘るもの也されば朱熹遠者人之所易い忘也

云々叉我身おちぶるれば却て主に怨をいひ我身の非

をおもはる物なるに主君の恩を忘れずして我身の

非をしり共上一旦は善根をも行ふ事もあれ共途では

りがたき物ぞかしすでに十年に餘り今に懈怠なくさやうに仕るはきどく千萬な侍なりとて國主へ召出され本知下行有りて盥たれ衣脱捨て二度武の家に立歸て箕裘の業をつとめけり誠に有陰徳陽報之といへるは此又藏が事なるべし

畫して茅屋にかけおき網の手を引き又魚をうりて錢をとれば一錢米をとれば一つかみづ我とるたびとに御影に手向拝みける浦人ども見て此者は何者にて有るやらん不審なる者哉ととりさたいたしけりかくのごとく仕事十年に餘りける故長州中にかくれなかりける放後は國主此事を聞および玉び共は只者にては有るまし子細を尋問と所の代官をもつて聞玉により始終の様子かくす事なく申ければ扨もいたし度よしを望ければ番頭聞共は過し頃蟹の才

臓といふ者生笹をさし笹野才とよばれ世にかくれなきさし物なればひかるべきかとSひければ其

才臓に某少もおとり申まに是非仰あけられ候様にと
申すにより件の旨申ければ清正開給てとかく一曲
る者達で望むならばさせ候へと宣ひしかば忝の
旨申朝鮮國にて能働いたし首をとりたる時に二百石
加増下行あり扨朝の後知行の百姓といひょんを
ひたしけるに又藏非分重々ありたる故身を退行方
しらずなりにけり清正殊外立腹有者見合次第に
討捨に仕れと宣ふにより方々をかくれあるき後は長
門國の側なる海邊に名をかくし唯夫婦二人になり漁
人どもをたのみて我は網の手を引き女房は鹽をくみ
中々淺間布にて漸々露の命をつきて年月を送
りけりしかるに清正逝去を聞咸涙をながして我至
愚たる故君の厚恩を忘れ奉てさせる御奉公をも
さずあまつさへ重々非義なる事ども仕りたる御罰
たり今此體になりくだり候事千悔萬悔なり御存命の
右の出勢の時清正道の端におはしまして押行軍兵共
の様子を見給處南部無右衛門眞先に進み來り清正

宣は無右衛門がけふの合戦は大事なるぞ一入精を出

せと有ける時無右衛門申けるは別義あるまじく候た

死ぬるまでよと云て通りたるを聞てあまり大きな

る廣言成と諸人思ひけるに言葉には似して彈正が

勢に追立られ旗本まで敗軍し來れりさて一戰すぎて

後諸勢の僉議有りたる時無右衛門も側に居る清

正見玉ひそこにわたるは何者だと有りける時加藤清

兵衛申けるは南部無右衛門なぁと答申ければSやS

や無右衛門は今爰へはきたるまじく若又無右衛門な

らば定てそれは幽霊にてあるべし清正家に死人の幽

霊と成たるを抱へおく事は忌々布ぞとう(これよ

り地獄へなりとも極樂へ成とも行候へと宣ひ其場よ

り追拂玉ひし也其日の一戰には敗軍の者あまた有り

けれども無右衛門は本書に記すごとく冑の廣言と朝

にて突返したるは乙にならす右の道具に卒の穿

鑿有りたる様子は大方如此外委事とも聞候へと

覺す候

七

がし時にあはざる者又は小身なる者などの草履とり

鍵持などが不作法をば見出して主人へもきかせ又は

法度にも行くが世もつて人の常情也然るに權左衛門

が従者を討捨に仕えるは何様役にも立べきものな

と仰せられ知行百石共事となく下行有りて馬廻の奥

に入られたり其後高麗へ出陳のとき生をさし物に

者の法度をそむきたとはしらざるふりして見の

本書に有る木村又臓は元歩行の者にて有けるに清正

熊本にて城廻り有ける時の供に直の者の中へ又内の

供の共猥に入まじへざるためのおさへに又藏を云

つけおかれけるに小身者の草履取中間など自然に交

りたるをば見ぬ體にして或時新美權左衛門と云出頭

人の若黨直の者の中へ入るをとがめけるに此者主

の出頭を笠に着て常々萬事に奢ける故口答しけるを

あやまたす討て捨清正前へ行直に仲の様子串た

清正聞給ひて宣は何様此者は丈夫なる者也今時尋

常なる者は主人の前能出頭する者には權勢におそれ

の過言故に一人右の仕也誠に過言は禍を招く大端

也と云うされば古人の詞を能々守るべき事也

木村文藏が事

諸卒穿鑿の事

も誰かれと頭の名を四人かきたり相違也惣て先手三

組の備は頭只一人づに定りたる也加藤善右衛門加

藤清兵衛の外は皆々兩人の親下也此合戦の時清正自

身は十騎計召連一番備にこみ押上られたると本書

に有もなり

續 加藤善右衛門働の事

本書に一番備の頭は誰かれと七人の名を書す二番に

るも誰也流矢に中て死たると云も相違也鳴渡は朝

鮮國へ渡り大河の水にて果たるを見る仁の物語

直開也

一番備二番備の頭相違の事

かけす法を守り備を堅固にして勝利をうるをこそ

大将たる者武勇とは云ふと仰せられたる也

二番備の共出の時刻少おそかりけるにより中途

にて夜も明る故相圖相違して一番備合戦を始めた

るを見て取てもどし加藤清兵衛横鍵を入れ敵を突し

だける也

木山弾正が弓持て清正と一矢まいらんと云えると本

書に有る詐也又清正彈正をひやうつて鍵をすてられ

たるとあるも詐也右に書記す通也

阿波鳴渡と云者が彈正が首を清正にもらひたると有

片鎌になりたると本書にあるは詐也元来より片鎌也

右に記す通り先備の諸卒は悉敗軍いたし候へとも善

右衛門は少も退かずしてSかにも堅固にして進み來

る敵を突拂々々して鏡疵蒙り候善右衛門傍には日來

念頃に目をかけたる小姓一人Sかにも堅固にして働

き痛手二ヶ所負たれども一足も退かすてたへたるに

依て若手の身として主の恩を忘すして死をかろんじ 右の合戦に敗軍したる者共の甲乙の僉議有る事一番

たる志の程を諸人感じたる事也家名聞候へども失念 備の中にても左右の谷へ敗北したるか乙の内の乙に

故記さす此時の合戦に加藤善右衛門自身は堅固に なりたり谷へは落くだらず本道を静かに追立られて

き加之鑓洸二ヶ所からふり候へ共軍法を相違して 来るは乙の内にても甲也本道筋を諸人より跡に退き

戰を始め剰諸卒敗軍したる事これみな將たる者の越 さて取てかへしたるがはやき者はあまりの乙になら

度也惣じて一手の大將をいたす者は自身の心にす旗本にても一たん敗北したるも返す事早くして敵

續撰清正記卷第一

愛に有り悪蓬し返せと御身を揉みがみをして

にくしきたな

けましくけるが此器を御覧じて是口惜き事哉清正

に係りたる事なれば坂中にて支防戦けれとも

容易突立られ旗本迄崩れかいる清正は机に腰をか
討ならは必周章騒で左右の谷へ悉崩落つべし共時谷
底にて一人ももらさず討捕れと如此軍法定めらる
此時二番備の大将は加藤清兵衛 かれこれ軍法
仰渡され諸卒支度いたす間に五更の天に成けるによ
二番備押出し旗をかくしいかにも静返て山間を押
行間にはや夜も明けるにて一番備も押出し敵陣と
相向び谷一ッ隔て備を立て互に守りるたる處に善右
衛門内伊藤次郎右衛門と云者段々の一本しなひさ
し手錠提け拔懸に一人進出てしを大將見付給ひて何
者なればさしづなきに鍵を始るあれ止めよと善右衛
門備の使番の者を追々につかはされけれとも早向ひ
の山六七分程登りたる時步立の敵三人刀を提けて出
合て次郎右衛門が鍵と支へ戰處に敵二三二十人瞳と押
よせなんなく次郎右衛門を討しを見て一番備の共
我先と進みまばら蒐にかけるに敵は勝に来て勢
然もかさよう直下て進み來る味方は法令を背いてば

右に記す通り先手敗軍して旗本までくつれかつて
備を立かねたる時弾正大身の鏡を持て眞先にすす
御大将と見およびたり木山彈正と申者也一鑓仕るべ
きと名乗かけいかにも誰々と歩み來る清正は牀机に
腰をかけ御座て士卒に下知をし給ふが彈正を屹・啀
毗て推参なる事中といひながら例の片鎌の鏡を取
て立上り玉び手の下に弾正を突伏玉ふを見てつゞい
て進みきたる敵を二人突たふし儘討拾にし玉ふ也
此時片鎌の鏡少のりたる瞬躅の木の切かぶに押常
ニッ三ッおしなし玉ひ足にてふみなをし係り
来る敵を突退け玉ひたる事也十文字の麓か此時折て
六九
怒玉へ共一陣剛て残黨まつたからされば敗軍の勢悉
左右の谷へ散亂す斯時清正傍を離れす居たる者とも
は本書に記たる計也其内の柏原藤五郎と有るは後加
藤左衛門と云たる者也和田竹丸と有るは備中事也
右兩人は若年にして小姓の時也馬印持善吉は其時庄

林善右衛門に被成知行三百石下行有り乙者とある

はみやと云者也大吉と兩人の草履取也是も知行二百

石下行有り右の侍共には御感の加増知行下され候也

木山彈正を討給ふ事

撥

右の三十七騎の者其節に抱へられたるは一人も敵陣の後へ夜中に忍て押廻し夜の明るを相に鬩音

なし三千石の身上にて内々扶持おかれ候心根愚慮にをあぐべし其時旗本にて鬩を合せ前後より押挾て

と云

有るべからずされば共道違、則雖有威不久、曽聽

趙高刑咸陽祿山七三鳳翔、是をもつてみれば畢竟陸

奥守交道をしらずして武道に伐て仁政にそむきたる

事必然故に秀吉公彼が不義非なる事有其器

に當らざる事を見およぴ給ひ誠めに仰出されし也

の々を承り彌大國を治むるには文を本とし豪傑の

士を撫て考弟を興すを大本として慈悲を以て治むる

ならば安々と靜り萬民服すべき事を掌に掬り肥後

の國を拝領仕り度旨を望申されたる事也清正其時

知行三千石にて二十七の年の事なる故々およばさ

る望み仕ったる大氣者かなと諸人目ひき鼻をひき

天草肥後國天草合戰事本語に肥前と

にぎ

はかりがたき事案のごとく入部ありたる翌日より

不及

の剛なるがいたす所也故に仁政をもつて治めずは

國人混混と歸服して城共を相渡し一合戦もせずして

一揆ことんく退治して國中平均に治りしなり誠に

賢者所前無敵とはかやうの事にて有るべきか

本書に入國の節玉名郡の内小森とい所に伊津野將

監と云者一揆起したるに清正自身退治として行き鐵

二ヶ所蒙られたると有り此事終に郡の志岐にての合戦の様子は本書の通小西加勢

として出勢有けれども人數半分程着して跡勢は

ひまだつ かざるに木山彈正といふ者を大にして

人數押出したる由清正着陣有し夜の九時分物見の

たるに秀吉公は開召老功の陸奥守さへ治めかねた 者注進いたすによつて清正は跡勢を待て時刻をう

る大國を若輩なる主計頭が望候はひかさま此者は必 つすにおるては敵備をとりかたむべし明暁に一戦

定可治者也内々見おきたる事有と仰られ肥後國中 して囚徒悉く討取べし先軍法を定べしと有て一番備

におゐて二十五萬石くだしおかれ候との御朱印頂戴 は敵間少遠く隔て備へ相圖を待つべし予が指図なき

ひたし數日を移さず大軍を引連入國Sたし早辣熊本 うちに必合戦始むべからずと也此時の一番備の大將

後岡田將

へ着城有る也諸勢の中に翼の臣三十七騎ありし は加藤善右衛門尉二番の備は未明に出勢して

續撰清正記巻第一

所よとおもひ隼人が首をかしてに投伏せ 剛純強、其國必亡、とあり巽朝の昔湯武王久しく代を

先程其方が申たるごとく若輩のはやりすぎて馬に輪 持給ひけんも武のみ事にして治めにあらず道

六七

を空しくしうづくまつてぞゐたりける愛こそ最前の

全ていたらく

オピタヤ

曲者也先きかざる體がましなりと思ひ愈馬 して國を治るの謀攻にあらず孫子曰、凡用兵之法、

をはやめすすみ行一番鏡を始め波隼人を討捕しか全上、旅之、全卒爲上、破卒次〉之、

申けるはそこをはるは虎之助にてはなきか若輩な

る者のはやり過て敵前ちかくなりて馬に輪をかけた

るは見ぐるしき物なるぞ控て馬を乗候へといひける

時近頃悪き言葉かな何とそ彼に返答すべきと思ひ振

かつて見侍ればは少こだかき上に馬をさまに立

て居たりけり いや~彼は功の入る老武者也味方

は糀の勢なれば若追立てられ敵勝に来て競びきたら

ば横鎧を入突返すべきために屹と控へたると見えた

佐々清正肥後國拜領いたし度旨望まれ候事

ぢが子孫までへの物語にせよとひび捨てからと

スキ

笑ひけるに彼者眼尻にてこれを見て更に一言の返答

をもえせずしてかへつて面を朱にしうなだれてぞ居

たりけるこれぞ某が一代の心よきふるまひなりしと

機嫌よさをりふしは毎度高聲におはせられ御悦喜な

されしなり

行ける谷の兵太夫といひし道の傍よう我を見付

タニ

に吹上法のごとく吹しまひ馬を引よせ打てて進をかくる者はかくのことくし侍るぞ能々見置てなん

陸奥守肥後仕置に下り給ひし時の横目に仰付ら

る清正も肥州へ行仕置の様子具に見られたるに一と

とかくばみかたこれに利を待つ おめきさけんで責戦此勢

に辟易して多の敵共討散されし爲體天に光り地に

響き血は馬蹄に蹴かけられ屍は野徑に横りて尺寸の

地もあまさずして震し斯て戸波隼人が首を秀吉公の

實檢に備へ立退て見ければ未かたつらに彼兵太夫謀

伍爲上、破伍次」之、是故百戦百勝、非三善之善者」

、不戰而屈人之兵善之善者也云々、しかるに陸

奥守は若年より弓箭を業として長じ更に文を不曉

が故に武道のみ専に用びて異賊襲来の守を堅くすさ

れば敵の兵といへば根をたち葉を残さず皆討亡し

國家を治んとし給故治むることをえず黄石公曰純

すべき天草合戰の事

キット

第十一志岐落城主計頭はたらきの事

へ加勢の事

の上の耻辱これにすきじと思ひ貝をとりいかに、

第十肥後國天草志岐林専一揆の事付主計頭小西行長る物と世以てい
ひならはし候事なれば心臓してふか

續清正肥後國領いたし度旨望まれ候事

ざるかと秀吉公もおぼしめし又諸人も存すべししか

續天草にて諸卒せんさくの事

第一清正秀吉公へ奉公に出る事

加藤善右衛門働の事付加藤清兵衛横鍵の事

一番備二番備の頭相違の事

續撰清正記巻第一目録

續木山彈正を討給ふ事

肥後文獻叢書第二巻

御御傍らかく居候ひけるか先に合戦はじまるべきと見

およひし故我一人扱悪してよき敵あらは討取んと思

ひさらぬ體にてすみゆかんとせし處に秀吉公屹と

したるは事の急なる時分らば假分手柄をいたし又は討死したる跡までも弓矢

六者偶にして陰の九は奇に

して陽の數也陽は天也陰は地也辭日天地交而萬物

通也上下交而共志同也 亦程子日 小謂陰大謂陽也以

人事これをへば大は則君にして上なり小は則臣

にして下なり君誠を推て以て下に任し臣は誠を盡し

て以て君につかふまつり上下志通る時至れる故に

唯愚慮のおよぶ所を誌て以て先君の厚恩を報んとお

もふ者恰一毫を大虚に致すがごとく一滴を巨室に投

るに似たる者欺抑手が祖父は秀吉公の播州におはし

ます時に清正と因有けるにより肥後へ入國の翌年招

るるに應來て家臣と成れる故愚父も若年の頃より天

草の合戦朝鮮陣中清正傍を離れず相働き宇土柳川の

働の時も忠功を盡したる故に重恩を蒙り逝去以後迄

續撰清正記第一

さらばあれ

もふに退いて観れば前編を誇るに似たる故に南端

を持して模稜の手のごとくなる所に朋友來て斯事を

聞て云孔夫子の日過則憚改といふことあればし

かしこれを撰でこれを改んにはと諌らしにより先

集の作者の誹りは任他先君への忠にも若しはなりな

んかと思び指を屈して見れば清正逝去慶長拾六年よ

今茲寛文四の暦までは五十有四年に相當り五十四

は六九の數也易に日んためならず雖然興詳に知り委しくおぼへたる

老翁有一覧の後にかさねて正之者先君への忠心

至大至厚ならん予も父慶慢ならざらんや

ブリト

近臣としてつかふまつりけるに忠廣代に至て不幸に

して一族に事有官を退去埋風光掩柴屏東

闇のに整居して正保年中迄暮齡八十歳におよび存

へられたる故に清正一世の行状の品の詳なる物語聞

置きけれども予が素至愚極陋たる故に前後漫にして

品々連續せずと雖ども少々書留おきたる反古を求出

して疑しき事は中川入道に尋問先集の誤りを撰び

改之有不足事をばこれを縦て以て積撰清止記

と號する者しかるに前編に書たる家臣共の名後代

に替りたる前に書たるもあり或は昔の名を後に書

たるも有之今予が記すには改」之書べき事なれども

後覽兒童不易暁べきために前編のごとく其名を

書也吾今頭白く黄み命を延るの日なき故に斯編

忽に撰で以て子孫に付興す曽以て他人に見せしめ

竊以萬物と生死を同して衆物復帰する者は暫聚るの

形也萬物ともに盡ずして卓然として朽さる者は後世

の名也所謂判山の璞は天下の蜜也石中に晦ます事其

れ幾何年といふ事をしらず和氏に遇て後世に顯れ豊

城の剣は天下の寶也地中に晦ます事幾何年と云事を

しらず雷氏に遇て而後時に顯る物の顯晦回に各時有

物にも然り況や君子の徳をや爰に加藤肥後守源

の清正朝臣は若年の頃より武勇に達し天下の相とし

て凛々たる威風日域に振ひ而堂々たる意氣朝鮮を動

す加之内三寶に歸し外五常を守る故に一生身脩而家

齋而國泰平にして萬民仁澤に濡ふること豈近世の

雄ならざらんや蓋積善の家に必餘慶あらば長く子孫

を保ち岡家繁興たるべきに天哉命哉二世忠廣代に當

國破家亂て剰送流の身と成給の面子孫跡を晦まし

群臣離散す然るに清正世を相去る事は殆遠くして

又遊也故に其名のみ殘て仕事を知者まれ也かくて今

十ヶ年も過ぎば其名をしる者曽てあるまじきと思え

もんみれば

續撰清正記

次 序

去迄の事を書記して清正記と名付去る年の孟春

に梓に鋑めて世に行て以て之を顕す其志登盛ならざ

らんや復快らざらむや恰も白骨再宍枯樹重榮ならざ

らんや予去る中春の頃武州江戸におゐて斯書を求め

一覧するに清正先祖の事は委細也肥後入國より天草

の合戰高麗陣中の事は可也朝鮮歸朝の後逝去迄の事

は粗にして又不可なり宜哉此書の作者其ころの事を

見ずきかずして唯美作、又助、兵太夫、古橋等が覺

書の少々たるを拾い集て推量に編みたる故に志は

至厚なりといへども相違ある事は若年るにより短

臂産所におよばざる者也しかりといへども法華経に

日五十展轉隨喜功徳無量無邊とあれば先君への忠心

は至れり盡せり倩思に戰場の事は人々の説々區々

にして定かならざるものなれば少々の相違は不可の

敷にはあるべからざる者しかりといへども尾州

名護屋普請の事溝正去の時の遺吉井家中への七ヶ

の法書は大きに相違したる事有りて後人の嘲味

るべき事どもなるゆへに斯を測り斯を正さんとお

所に何れの許の人とひふとをしらず父姓字を詳に

せずといへども他家の臣とは見えざる者清正先祖よ

儁正肥巻三

清正記巻三絡

編者云、下巻に登録せる武政箇條書、此

と相同し、讀者宜しく参照せらるべし

中

加藤主計頭清正 在

右條々晝夜可相守若右之ヶ條難勤と存輩於有之者

暇を可申速に吟味男道不成者の験を付可追放事

不可有疑仍如件

流なる手よめき事を存候へはいかにも女の様に成

るものなり武士の家に生れてよりは太刀かたなを

とつて死る道本意なり常々武士道吟味をせされは

いさぎよき死は仕にくきものなり能々心を武にき

さむこと肝要也

六三

古城貞吉按

觀持院日遙 在判

肥後本妙寺宿坊本國寺塔頭

此清正記三卷將軍吉宗公可有 御覽之旨肥後本妙

寺本寺本國寺へ以淺草龍寺本妙寺へ可申遣之由

享保十六年六月十三日申来る從本國寺本妙寺

へ申遣し同年七月従肥後細川越中守殿江戸へ被差

上將軍家御覧の後明年享保十七年春本妙寺へ御

返也

古橋左衛門又玄 在

此清正記三卷集記奉寄進本妙寺畢

一清正侍従に任し肥後守とあらためられし其後方々

への書状などには肥後守と認られし何そ後代迄残

るへきものには主計頭と被書しかはたして遺言の

棺に入納へし末世の軍たらんとの殘詞なれ

は任其儀中尾山といふ山に葬し京都より本國寺

日桓上人を招請し淨池院殿日乘大居士と戒名をな

しまいらせ及葬送清正廟所中尾山本妙寺と號し永

代迄代々上人の勅願寺なり本妙寺上人は清正百濟

國守の子九歳に成しを日本へつれこし出家させ日

遙上人と改め住持職になされける

一國中の士農工商悲歎に及大木土佐守といひし者佐

佐陸奥守に仕へしが奥州逝去の後清正に奉公し三

千石の身上にて勤たりしか數年清正別而志にな

りかるかゆへに重恩を謝しかたし冥途迄御供申さ

んとて切腹す金官と云朝鮮人日本へ連れ越如形ね

んころにし八木二百石宛行し清正に離れ一日片時

もなからふへきにあらす御供申さんとて切腹す

一清正遺言に我死せば具足を着させ太刀かたなをは

右の如く書置次第によわり六月二十四日丑刻

逝去

一學文之事可入精兵法をよみ忠孝の心懸專用たるべ

し詩句歌をよむ事停止たりころにきやしや風

一亂舞方一圓停止たり太刀かたなをとれは人をきら

んと思ふ然上は萬事は一心の置所より生る物なれ

は武器の外亂舞稽古の輩可加切腹事

一軍禮法侍之可存知事不入事に美麗をこのむもの可

爲曲意事

一慰に出へきは鷹野鹿狩相撲ヶ樣の儀にて可遊山事

一衣類の事もめんつむきの間たるへし衣類に金銀を

ついやし手前不成旨申者可爲曲意候不斷身上相應

に武具を嗜人を可扶持軍用の時は金銀可遣事

一生傍輩つきあひ客一人亭主之外はなす間敷候食

は黒飯たるへく候但武藝執行の時は多人數可出合

事

一奉公の道油断すへからす朝辰の刻におきて兵法を

つかひ食をくひ弓を射鐵炮をうち馬を可乘候武士

の嗜能者には別而加増を可遣事

大身小身によらす侍共可覺悟條々

書にも主計頭と好みかくれし也

清正家中へ被申出七ヶ條

一主計頭は至肥後國熊本歸城船中より熱病をうれひ

て御膳を上種々様々の御馳走被申上ける家康公よ

りも道すからさ~御使者を被遣種々進上あり

清正被申けるは秀頼公御成人の程京童子おかみ可

申ために候問御乗物の左右もくつろけ雨の日をひ

らき清正かちんの肩衣袴を着し伏見より二條迄三

里の所を歩行にて供奉扨二條の御城の玄迄家康

公御出迎互に御禮あり秀頼公御側を清正少もはな

れす被居すなはち御振廻出清正も相件被申互に御

盃有之座も宜時分清正被申けるは嘸や大阪には御

逢被成度おぼしめさんはや御立被成候得と被申上

けれは家康公も尤なり扨も(御成人めてたしと

て色色進上有而秀頼公御立被成家康公も玄開迄御

送り被成御乗物に御乗被成正歩にて供奉し伏見

にて御膳を上御船に召れ至大阪御歸城左京太夫行

長は持病差發之由にて秀頼公伏見御上着の刻も屋

敷に被居洛中は不及申日本國にて清正今度家康公

秀頼公御對面之儀を調へ忠義を盡され始め終迄首

尾調たる武士なりと感しあえり秀頼公家康公清正

へ御暇被遣につゐて及歸國

六

家老中

六月廿三日

態遣置候病氣相果候肥後國虎藤之可下給於無左

は此判形侍共にいたいかせ籠城之上可途一戰な

清正刊

利家卿

家康公

六月廿三日

主計頭清正判

清正事病氣相果無念に候悴虎藤丸儀可然様に奉

頼候委曲家老之者へ申置候恐惶謹言

興行し一興を催し何も侍共聞候へ今度秀頼公

家康公御對談之儀を調へ天下に名をあけ歸國し能

始終を勤めしそかし今病相究命の終り此時なり十

は十一可相果虎藤丸をもりたつへしとあれは何も

及悲病氣次第におもくなり六月廿三日には

はや身もこかれくろくなられける家老の共召寄

只今病死す右筆下川兵太夫を召寄一通をのこしお

かる

煩しく有けれとも家中の大小身共にふるまひかん

一家康公尾張國名古屋城普請あつて薩摩守へ可被遣

との儀にて諸大名へ普請御頼被成清正も伊勢う

にて石を割せ尾國萬松寺を宿陣とし女を三百人

召連日夜かふきを興行し天下の大名小名に目をさ

まさせ九月中旬普請成就大阪へ下着し秀頼公へ御

目見をなし大阪伏見にて光陰を送る

一慶長十五年正月七日中納言秀忠卿征夷將軍になら

せ給ふ清正も従五位上侍従に被任

一清正慶長八年三月六日熊本を立大阪へ着し秀頼公

へ御目見をし利家へ参候し夫より家康公へ御見廻

と有て淺野左京大夫令同道關東へ趣る家康公殊の

外馳走しく江戸の城普請等可仕左もあらは兩

所をも可有御頼との儀にて清正幸長縄張等の御相

ある然るに家康公被仰けるは兩所ながら息女有

之由承及右兵衛督を左京殿むこに常陸介を主計頭

殿聟にとの御望なり兩人達而辭退被申といへども

御立腹ゆへ御請被申上しかけ家康公御着あつて

御振舞等あり二十日滞留し及上京

し肥後一國の仕置等申付熊本と云所に九州第一の

城を構ちる

は秀頼公御成人日を追而遊すよし承り珍重不可

過之乍去家康は種々うたかひを得候者なれは近年

不懸御目候御成人見申度候間兩所賴入候條御上

洛候様に左有におるては二條の城にて御目にか

らん御母公氣遣に思しめされむかたは右兵衛

常陸と一所の事なれは兩人を兩所へ渡し申條大阪

へ同道有秀頼公御上洛候様に賴入と仰らる兩人

返答に夫迄もなく兩人罷下申し候は御上洛う

たかひ候ましと被申家康公満悦したまひさらば御

下り候へと退出有兩人なから伏見を立大阪へ着

し利家へ相談あれは兩人被申上は御母公も異儀有

へきにあらずとて三人同道有て右の段々被申上し

かは主計頭左京被申上うへは如何様にもと被仰主

計頭被申上けるは日本の神も御照覧あれ秀頼様御

身のうへに氣遣び成儀候は、私左京なからへ申ま

したのもしく被申上ければさらば上洛あるへし

と秀頼公大阪御立被成河船にて御上洛清正用意に

は淀川左右の陸地一方は清正人數一方は左京太夫

人数を備へ河中を御上洛あり伏見御清正河船に

一家康公清正幸長を二條の御城にて御振廻被成宜び

清三

一立花飛騨守守虎は治部少にくみし大津の城を責落

しけるか於關ヶ原治部少失勝利山聞層のか在所

筑後國柳川へ立歸籠城す鍋島加賀守是も治部少に

頼まれ伏見の城を崩しけるか元來手たれの鍋島

なれは家康公へ申上けるは今度治部少に頼れ伏見

へ罷向ひし事千惟不過之乍去此科を御免におみて

は立花を責崩し忠義を可勵由申上しかは家康公可

任意と御返事ゆへ肥前の國へ下着し筑後國はち

いんと云所へ二萬の人数にて押詰る清正は宇土表

等の仕置申付柳川表へ押詰らろ豊前の國より黒田

如水押詰る飛騨守清正へ使を以被申越しは内々清

正とは入魂の事なり治部に頼まれかくのごとし城

清正へ渡すべし侍分の者は御助成頼入家康公へ

よきやうに被仰給はれと被申越しかは急ぎ下城可

有清正能様に計ひ可申との返答にて飛騨守清正陣

所へ下城城を清正請取和田備中と云者を城代とし

飛騨守は南の開に屋敷を構馳走ましく

立花か侍共一人も不殘預置立花無疎意段家康公へ

河金右衛門を入置八代には吉村吉右衛門堤權右衛

門を城代に入おかる

一清正如水一談し薩摩へはたらくへしとて肥後と薩

摩の境いつみと云所迄押諸共旨家康公へ及注進島

津は細川氏を頼家康公へ内通るに仍て島津事御

免被成候條早々人數可被打入旨申来るに付て二將

相談し面々の城へ人數を入らる家康公より申来る

は小西か領分不殘肥後一職主計頭可被領筑後は兵

部太夫治部少を生捕彼是の忠勤によつて彼を被

下行筑前國は黒田甲斐守に被扶助豊前國は細川越

中守へ被遣旨申来るに付て筑後の城をも田中へ渡

五九

加藤主計頭殿

進之候

被申上しかは立花は老強の武士なり先上洛有へし

とて一萬石の領知を下行し家康近習に勤をなせし

が無程本領を返し被下けり家康公より今度無二の

忠義不由にて一通の御書を送り給はる書に日

雖今度上方鉾楯候御方の儀別條無之蔵着之至候

然は肥後筑後兩國進置候間心次第可被申付候此

節之條隨分無油斷様専一候猶津田小平治佐々淡

路守可申候間分省略候恐々謹言

八月二日 家康 御判

大阪にす仍之清正は宇土の城を攻はすべ

きとの用意にて熊本を打立木山越に豊後の國へ入

數を押詰と觸廻し木山峠にて惣軍兵にふれられし

は宇土の城責らるへきとの儀なり木山より宇土の

城迄三里なれは無程先勢宇土の惣曲輪までひたひ
たと押詰清正旗本は大うす山に陣をすべられ竹た
ばをもつて晝夜のさかひなく仕寄を付らる城中に
は伐の事なれは小勢にては有中々持かたむへき様
も不覺南條元宅と云者に小西城を預け置南條もと
より老剛物なれる武者にて侍の妻子等や~~
城へ取入ける三宅角左衛門は牢人の身となり飯田
覺兵衛を頼宇土へも出陣したりしか鹽田口へ元宅
はしり出妻子等堅固に取入ける所へ大身の鍵を持
元宅か口のはつれ左のほう耳のはつれ迄突はつし
ける元宅角左衛門か鍵に取付を元宅か手の者取
廻し角左衛門を切らんとす敵は大勢我は一人叶ま
しと鍵を捨引退く扨清正晝夜ともなく仕寄を被申
付に仍て三の丸の堀を悉く埋塀際へ竹たばをなん
なくつけ寄たり清正手共義太夫を始早御乗込
可有として申とSへとも存旨有その人數そこ

なはて此城を取へし委細心安思ふへしとの儀な
然所に薩摩より本郷能登と云者三百人召連八代宇
土の者共に力をそへんと八代へ出張し小河表の町
屋を放火し自由を振廻由告来る吉村吉左衛門床林
隼人二と小河表へ押向らる小河に着陣し吉左衛門
隼人備をなし能登か手の者に切懸り相田權六本郷
乗る馬のふとはらを鐵にて打通す能登馬よ
りおり立てのく所を二刀にて切とむる大將討死の
上は手の敗北して薩摩の方へ迯て行を追討に三
十八人討取宇土に至り歸城す然處に家康公より飛
脚到来す九月十五日關ヶ原におゐて一戰をとい
利を得治部少輔小西を始め生捕落着の由来る小
西方よりも城を渡し侍共命を可助と言来るに依て
城をあけ小西が家來の侍下城す勿論八代の城を明
渡し城代小西若狹及下城小西か侍南條を始被拘置
宇土表にて伊藤新五大門坂川忠兵衛佐久間角助
伊村彥左衛門田中兵助日下部興助右の者共少々働

に仍て加恩有相田權六は無比類別して感をな

内匠と名を改らる三宅角左衛門は南條を突し事

を褒美あつて本知に加思し宇土に加藤興左衛門並

の城に取手を構關ヶ原にて一合戦すべしと評定す

景勝謀叛の色を立案のことく家康公景勝退治と

して關東へ發向有へしとの義にて備の定あり加藤

主計頭清正は元より三成と不和なりけれは家康公

に屬し伏見に住居せられける山岡道阿彌を以被申

けるは今度關東への御發向始終われなしいかん

となれは家康公は内大臣の宣旨を蒙らせ玉ふ御身

にて自分手をくし合戰したまはん事無用の至り

なり今幸ひ人數を召連參上候先某並細川福島加藤

黒田を可被遣若無覺東思召におゐては隣の事な

れは伊達正宗を可被召加も無心元被思召候は、

其時御進發宜しからん此外の儀は候まし其理いか

んとなれは治部少輔並奉行共景勝を讒言しむはん

と稱し餌に飼家康公をつり出し東國へ下し跡にて

緩々と謀へしとのたくみ鏡に移らふとくにて候と

申上らるれは家康公返答に委細の懇意蔵着不可過

之乍去我弓矢の家に生れ箇様の所をゆるかせにせ

は武門の名を汚すへし清正は武勇と云智謀とSS

天下に隠れなし其上我に内線の間なれは帝都を守

護のため伏見にとめ度は候へ共九州の内心元な

一豊後國きつきの城主細川越中守家老松井佐渡守所

より飛脚到来し大友義統治部少輔にくみし空人の

身として本國なれは下向し民百姓を頼きつきの城

せめんとの用意なり仍之鐵炮御加勢被成被下候

様にと申来る清正は内々武具馬具の吟味晝夜をわ

かさる折柄なり三宅角左衛門と云鐵炮頭に百挺相

添可有加勢との儀なり角左衛門申せしは近日何方

へそ可有御然におゐては某儀は御取立の者に候

へは御側にて忠義を可勤と申清正Sかりをなし獨

可仕者と思ひしに沙汰の限成申様此上は奉公も

成ましと知行を取上人の身と成扨きつきへは坂

川忠兵衛日下部興助兩人に申付鐵炮百挺被差向し

かれ共黒田如水謀略をなし大友をとりこにし事濟

たるとの注進によつて兩人熊本へ帰陳す

一家康公治部少輔と及鉾楯可有合戰との儀に定りた

家康公より飛脚到來す小西攝津守行長はもと

より治部少輔と一味の事なれは朝鮮歸陣より人数

しいそき城有能に計ひ玉ふへしとの事なれは

伏見を立大阪へ着し利家へ参候し秀頼公へ御目見

有て御暇被下大阪より乗船し熊本へ歸城

公公

利在家康

家

在在在

黒田甲斐守 在判

加藤主計頭 在判

三月日

右之條々能々可被逐御吟味候朝鮮在陣中表裏を申

扱越度を取日本御外聞失候樣に仕成候事誠前代未

聞に候秀頼樣可爲御法度初候間速被成御糺明被仰

付可被下候恐惶謹言

一 兵父子左同一組の衆並對馬守志摩守今度於番

船不似合見合にて日本御外聞に失候事は如何に候

其上順天つなきの南海へさへ不取籠剰三十里餘南

海引拂相遁候事各御分別にも雖可有御座と申上

候先年大友事小西敗軍に付歴々諸侍迯來小西相果

候由再三申に付陣所を明退候其儀不所存被仰出國

を召上られ日本一之臆病者と御勘當之御朱印を被

下關東久被召失候如此之御法度有之事に候此能

可有御聞届候事

速判中串分

如何可有御座候哉之事

廿二鍋島加賀守 在判

毛利壹岐守 在

輝元一生計頭清正は家康公へ屬し御馳走申されけれは家

康被仰けるは清正は妻女なし我等娘をまいらせん

とて水野泉州息女を御養子に被成被道候也

一太閤被仰置には加賀大納言利家は大坂在城有秀

頼公を守護し江戸内府家康は伏見在城有て萬事利

家相談之上にて天下の仕置等宜様にあるへしとの

儀也石田治部少輔三成は天下に一度旗を立むと謀

略を廻す三成にくみする大名は長尾景勝毛利輝元

宇喜田秀家島津義久小西行長鍋島加賀守其外數十

人に及へり治部少輔はかけるは景勝謀叛と稱す

べし然におゐては討手として家康公發向有べし

留守を伺洛中へ旗を揚へしと左あらんには岐阜

如此の返礼なれば小西彌面目を失び太閤御前への

申成は石田治部少輔なるにより治部行長立腹し一

度天下をくつ返し掌の中にひれんとて二六時中謀

をめくらしける

御奏者御中

秀五六

家公司

公公景

勝

清正記巻三

一なむもんの城八月十三日に押寄十四日に取巻候而

仕寄の様子爲談合蜂須賀阿波守所に各打寄有之内

に其晩小西爲使太田飛驒楢村監物を以城州に有之

大明人共先年已來御無事の取仕者共に候此度被

壹岐守申分

とて候て召連太閤様えは此王子御返し候は添

奉存高麗之儀は不及申大明迄屬可致由申上に付

てとは不被思召王子を返し被遣候如此倉申上太

閤様御外聞しく仕成剩王子返候儀主計頭人數に

仕候て大明之方へ申合證文唐人之方に有之事に候

然は重て御無事之儀被仰下候日王子も日本へ差渡
候事第一に被仰下之由小西書上之由左様に候得は
左程王子一人さへ日本へ渡度被思召候に王子兄弟
並官人之女房王のしうと其外高官人等數多生捕候
を種々儔を申上返遣事如何可有御座候哉其上又
御無事取慶之時も日本へ様々僑申上唐人にはぬか
數越度を取り日本御聞外惡敷様に仕成事前代
未聞に候又今度御無事取曖之由にてぬかれ度之
儀は不及申今度の引足には兵左を餌に飼其身
は其間に南海の南の沖へ廻り迯来り手柄の様に申
不審に存候事
去去年甲斐守てんしゆより先へ相働刻唐人ちくさ
ん郡に同勢有之ててんなん都へ出相抱候を追崩
刻同勢居候ちくさんの館をも追拂數多討捕候其刻
都より遊撃使を出し都迄被押入候得共共身相果候
小西とかく申合子細有之由にて使者を相越候然る
に返事不仕跡へ被相詰候はんかと注進いたし候間

滞留中に又遊撃兩便を指越小西からさし物並遊撃

方えの書状相越候然は主計頭甲斐守迄にて都を押

候事Sかの旨御目付衆被申に付て任其旨遊撃兩

度之使を召連加主一手に罷成それより小西指物並

書狀之寫仕兩度に三人之唐人に使者を相副小西方

へ遣し候所に使の唐人をは留置甲斐守方への返事

は無之候如右御朱印相背重てほしいまいに有之段

討果候得共御無事手切仕儀に候間御助候様に被

申越候太閤様より諸手へ御朱印を以向後大明と御

無事の取扱仕候は曲事たるへき旨御觸に候然共小

西大明との御無事御同意被得候事に候は諸手へ

一札をも被出任旨助おかれ候事と返事申候左候

得は不及是非旨にて城中被助置候儀は止られ候御

朱印御觸を相背如此之段可爲越度哉之事

甲斐守申分

大明の首を討取候由申候て出し剰壹番乘仕手柄

彼に手柄にて可有御座候哉又ちんしう御責候

刻も小西は何もより遅候て責落申候日參候て片桐

市正家来の者取候て鼻をかき候て捨置候首をひろ

一小西朝鮮中粉骨仕候由書上候旨に候各可爲御存候

へとも申上候先年平安道へ相慟河端に陣取候處小

西先手へ敵朝懸仕先手之者とも追立候得共其身す

けをも不仕候然處に甲斐守懸合大明人悉討取候此

敗軍たるへき體に候間不屈の儀とは乍存不及是非

拙者も可罷出之由申候然は日限を承候て竹島に置

候船人數可召寄と申候へは可被相待之由候さらて

順天竹島之間凡海陸片道さへ五六日之間之處に

て候間今少被指延候得と重て理申候へとも無承引

候時時は無見懸所に早船二三艘の體にて出候而

も用に立儀無之候間自身之儀は不罷出親類之者三

人鐵炮相副指出候得共最前被急候旨に被指延候由

二三日過候て承付候間手前におゐて雨城相抱候條

猶以於相延は我等者共可被指戻之由申遣候無實儀

候處種々物かま敷申上候儀不及是非候申上度儀候

得共是式候猶被聞召上候は、可申上候事

甲斐守中分

肥後文 獻叢菁第二巻

=

一小西事平安面無事巳下失手に付て出都は無事の取

敵かたへ懇望王子をも都に至てかへし可遣

由にて遊撃を呼越其儘遊撃に釜山浦之城を可相談

主計 申分

一小西中安政軍之刻大官城之のつかひに甲斐守家來

小川傳右衛門と申者入置候しょほんの城迄正月九

日の晩に迯來候を城主甲斐守所迄注進せしめ候に

付て甲斐守迎に參小西召連罷歸五六日も足を休さ

せ候内に都に御座候備前宰相殿石田治部少輔増田

右衛門尉大谷刑部少輔迄於此面可被相抱哉と注

進候處にかせんほと甲斐守間のつたびの城をも無

層引拂かせんほをも可被引入に相定候第一かせん

ほと都の間に大河御座候氷とけたるよりは人數引

取事不成候間早々可打入旨返事に候そのうへ大谷

刑部爲迎かせんほ迄被罷越候間此上は不入儀と存

小西拜大友召連都へ罷出候寒天の時分に候間迯來

候をきるもの以下其外遣しはたへまでかくさせ都

へ召連候を結句しさまの様に名古屋におるて申

上候由ヶ様之儀幸に御座候間御せんさく被成候

被下候何も墨付共有之候事

をいたしたる様に言上申段珍敷儀と存候事

甲斐守中分

間此談合に不及候哉人質片付られ候事は其方可被

任分別義候條此方不及相談候旨返事申候兎角程遠

候ては談合難成候間丸山へ打寄可然と存志摩守所

小西左へ打寄候は、それへ可參と申遣候

得は不及打寄候間使を以可申承と返事候間其上に

彼方より相談の儀は此御朱印にて分別仕候へ迎
宮長渡海の時被差渡御朱印最前は双方へ合
隠密彼時相越候其返事此方より申候様子此御朱印
は御無事相濟上を以ての御仕置と相聞申候左候へ
は不入かと申遣候只今の御仕置は博多より淺彈石
治被差越候書中の趣歟又は伏見内府公大納言
被仰下候筋目か此雨條の内可然と存候由申遣候然
時は彼方より返事に右兩條の内に分別候得は相談
は不入候由小西申候重て申遣候は釜山浦の城被請
取度の由は御無事の筋目も候哉又は西目衆被打入
候船の乗おくれも候哉自然於釜山浦各御自分の隙
入儀も候哉と申遣候得は小西被申候はSはれぬ人
の心中をさくり候哉と申候然所此方の使の者申候
は左様被仰候へは御相談にて無之歟と申候へは有
無之返事も無之に付別に被仰分も無之候哉と再三
一順天面番船差出に付て談合可申條早船にて急度可
出の由寺志被申越候間九月廿九日固城へ罷出候

處翌日寺志南海より被參候樣子承候得は番 か
にも手よはき體に被申急可被及行の由申候某存候
は大明朝鮮相催海陸取詰る事に候間日本衆後巻
も可有之と敵可致其覺悟と合推答候殊小西城堅固
に被相抱の由被申越候間然時は聊爾に仕懸られ自
然越度も出來候へは結句は小西可被致難儀候公義
御爲も不可然候間諸城各相談の上を以丈夫に支度
候てしかけられ候は可然の由雖合申候無同心先
々取懸られ於難儀は可被引取の由被申候左候へは

使の者共申候處志摩守中には今一應御朱印を能
拜見有之可然之旨申之旨右使の者共中開候に
付て重御朱印收に遣種々樣々拜見仕候上を以て
談合候へとも右の趣に替樣子不致分別候間其通
申遣御朱印返進候處はや寺澤小西羽左船に乗うか
へられ候由にて御朱印を請取人も無之樣子に候間
左候間寺澤内梶原六郎兵衛と申者に合右の御朱

印相渡候旨使の者共申に付此上は各可致出船候條

城中の儀は陣拂可然と談合せしめ放火仕候事

加賀守申分

申渡の由にて御注進狀被下志摩守指岡をもつ

西東同前に仕候得と甲斐守に堅く申合候て其注進

の文言も申台筋目に相違候右表裏の段御使衆存

知の前に候然所に御無事重て取扱候由小西申越之

旨寺澤觸狀十月廿五日の日付にて被申越候又

きくしたるへく候得共各分別次第と返事仕候・

仕候左候

霜月十二日の日付にて又々小西ぬ

小西ぬかれ候て介入

城候條其見次可の由にて羽兵左居城引補注進狀

寺澤方より差越候如此の上は諸城引拂釜山浦へ被

指出可有相談の由被申越 主計頭甲斐守返事仕候

は十五日夜半の儀に候へは翌日引拂の儀不可成候

間十七日に引拂釜山浦之罷出任書中可談合と申

遣候右の首尾に罷出候虎主計頭甲斐守をも不相待
釜山浦の丸山打出の由依之同十八日に西目
へ可及斷と存出船候於加鍋島令談合候内に十九
日の曉彼西目衆於船手敗軍の由聞候付て早船を
以相尋候處唐島瀬戸口入候左候時は順天善
悪如何候哉順天於相果は各早々加德邊迄も可被打
入候か若又小西善悪をも不被開候は是迄爲後詰
差出候間善悪を可承知の旨兵寺志方へ十九日に

申遣候虎に早々至于唐島指越候へ合打合小西善惡
承知度の由寺志方より申候羽兵左より返事に
委曲寺志可被申と有之儀に候如此の内に小西廿日
の暁南海の南の浦を廻り唐島瀬戸口に至て相着の
由寺志注進し如此に候へは此衆中油断の様に被申
上候處も御穿鑿を被請候は、無油通墨付御座候
然は小西善悪爲可承にこそ可及斷とは存寄候得共
此上早々釜山浦に被打入可然の由申遣此方衆中は

釜山浦一國一城の儀に候共上東目の敵悉く差向候
由相聞候左候へは一日も無心元候間先様相越候由
申遣霜月廿二日に釜山浦差越候翌日廿三日西目の
衆中釜山浦の瀬戸迄被相着候同日晩に可相談之由
志摩守申越候就夫廿四日の朝相談と有儀は如何様
の儀たるへく候哉内々承度の由志摩守所迄申道候
處一つには志井の木島瀬戸口に番船のおさへとし
てあたけをかけ置候や一つには唐人於西目人質
出し候此取納様日本へ可遣候哉又は成敗も可有之
哉大明へ可遣候哉様子如何たるへきやと寺澤内
三井角左衛門を以て申越候此趣は此方衆中不能分
別候處おさへのあたけは番船待付候て不入事候

付相談を以後丈夫可然と申候得共無事に可相済
之由被申西目へ被越候間此上にも御無事於済日
本御外聞に候間共方次第と申遣候如此時分何之道

にち相抱候得は御忠節と存彼丸山も請取雨城御番
仕候共身へ被御預候城を明渡すのみならす剰無
事をも不相濟結句小西善悪をも不見届番は追散
され南海の城を明退五里十里ならす三十里餘日
に迯退し事前代未聞と被存候其上釜山浦へ各打入
一兩日も逗留之内に御兵も於有之は上様御三
百艘渡海候間可被積來儀に候其刻は釜山浦一回一
城に罷成様子に候御爲を被存候は縦其身か無事之
被越候共外に有之兵根をも九山城に可被人置
儀に候處結句城中に有之御兵粗さへ悉船に積被申
候間御上米之儀一粒も拙者不存候次に釜山浦引取
之刻放火之儀と四人と相談各西目衆へも談合の使
を遣候に何れも舟に乗浮へられ此方之使にも無
對面候間此上は陣拂可然と申談放火仕令歸朝候事
一小西攝津守御無事仕候由にて九月十九日に大明人
爲對面罷出候處にぬき公事にあひ其儘被追立其身
の居城へ取入かね軍兵をも數度被討捕剰對面所に

右之如く敵引取候上は主計

一右之如く敵引取候上は主計頭存候は兎角太閤様御

薨去被成候由有増相聞候間朝鮮表無越度引取候へ

は日本の御爲に候間引取候ても可然と甲斐守迄合

相談候へは尤と奉存候間御使徳永法印宮木長治滯

留の中へ志摩守可令相談と甲斐守申候てくちゃん

におゐて出合志摩守談合候處に尤候間西目衆中へ

五一

連判中串分

付置候雜兵巳下をも捨てろし沙汰の限成仕合にて

籠城仕候處向廿一日蔚山へ敵人数を押寄同日夜討

申付先手一陣打崩に付て翌日廿二日城際の陣を自

身用心に陣所の廻り土手柵を付明廿三日辰之刻よ

惣勢を以搆へ押寄候條柵際迄引付鐵炮にて打

立崩口を見合諸口より切出首數千討取候其外手

負不知其數候然間途を失ひ手もとの陣へ引入在

陣仕種々致武略候得共別の子細もなく同廿五日諸

陣を放火五里程の間へ引入毎日足輕武者物見を

出有之體に候同廿七日羽柴兵庫頭抱泗川出城へ敵

押寄出城へ取入刻敵得勝利就夫敵乗勝泗川の城へ

十月朔日に押寄候處兵之切出被追崩候如此敵於

所々討果候へ順天を取巻候海陸の敵も十月十日

に引取候事

一今度御無事之取に付て此方之衆中釜山浦陣拂仕

候により其手筈相ちかひむさと罷成候由言上

之處何れも僑に候其子細は此條數之内に證跡相見

可申候先年御無事被相濟之由にて遊撃弁官人等渡

海之時太閤様へは大明より御詫言申上と合言上候

へとも大明より申分は太閤様御懇望に付て大明よ

位をゆるし則日本の王になしまいらせ候由書物

連判四人車分

高麗前後之儀在同衆中申上條

藤左馬介黒田甲斐守淺野左京太夫池田三左衛門此

七人不和成により七人評定ありて秀頼公御代初に

治部少輔を折果との企ありとへとも治部少輔も大身小身に何十人となく入魂之衆有之不任所存小西攝津守行長は寺澤志摩守と相談し朝鮮在陣中越度を取るとの沙汰有之に申開きの爲め書物を認め家康公利家卿輝元卿景勝卿秀家卿五人之衆へ差上る右之書物に主計甲斐守加賀守壹岐守此四人の儀を申に付て書物の四人の所へ来る四將参し小西寺澤越度を取ての上か様の書物不及言語と相談し小西越度を簡條に書立五人の御家老中へ差上る書にはく

一釜山浦城番寺澤志摩守被仕啖爲加勢壹岐守被仰候然處十一月十六日丸山打明西目八被越之由承間同名九郎左衛門を以丸山被≡候儀如何可有之候哉左様に候は、拙者壹人非可相殘儀候間前に打明可相候哉と申遣候處志摩守儀は小西同前に自最前無事之_髻仕候間能越候由被申候雖然早此表

へも敵物見相見へ殊天龍城之上は御無事之儀は

事成間敷候間主計頭甲斐守明日は可被越候間波待

壹岐守申分

人も其趣を存候てたひぬき申候段眼前に候今

度引口之樣子共能々被成御分別御法度之事侶間可

被仰付儀專一。候事

進上候彼書物被取出御見改可在御覽候如此の上御

不審に候は、主計頭方に大明之證文とも有之事に

候太閤樣御存生之時小西數年偽申上候段被聞候不

屈により大明との御無事の曖主計に可取扱之由被

仰出小西事は向後彼峻仕におゐては曲事之行被仰

出候則可被成御成敗候得共朝鮮引口之樣子により

可被仰出之旨に候然間任御諚大明人之御無之儀

主計方より申遣候とSへとも主計口にては正直に

申遣候故同心無之候小西表裏迄を申扱に付て大

五

けるは夜詞は鎧炮頭の役にて御座候間兩人は後詰

可然之旨申に付左あらば清兵衛隼人は兩人鎧炮に
こなし候跡へ一備働くべしとの事なれば二人の
鐵炮頭門を開鐵炮を一度に放ち懸る故梅栢が先手
千五百人討とられ引退く然處に栂栢太鼓ををを打て
押詰る欄際迄引付録にて打たて共崩口を見合せ
清正さをふり門をひらひて切て出よと下知なれ
ば榊平馬和田備中堤權右衛門一番に鎗を入はらひ
たつるに依て不相叶引退く其後極々武略を盡すと
Sへども力に不及引拂ひ紫兵庫頭在陣泗川へ取
詰る人数のうちに備をなしせめよすると聞へし
一慶長三年戊辰の年夏の頃より太閤秀吉公御不例之
御心地有之八月十八日薨し給ふ御遺言に朝鮮在
陣の軍勢不殘ひつ取へしと委細家康公利家卿へ被
仰置しかは熊堂佐渡守石田治部少輔淺野彈正少弼
を朝鮮へ遣し此旨可申觸と被仰付につゐて三人博
多まで渡海其后朝鮮へ觸られしかは主計頭左京太
夫加賀守壹岐守甲斐守相談し持たる城に放火し陣

拂し順風に帆をあけ日本對馬渡海朝鮮の番船とも

おそれをなし船軍もなくして歸せられ黒さて

一朝鮮在陣中石田治部少輔三成太閤殿下へほしいま

にさへ申につゐて治部少輔へ不随者は讒言申

依て治部少輔不和の大名は折を得可打果との所存

なり就中加藤主計頭福島左衛門太夫細川越中守加

清正は弾正名島に至り一宿し彈正同道し博多え

来る彈正治部少輔諸大名を呼集鮮在陣の苦労を

感し太閤御遺言を申渡し御遺物節々に配分す何れ

も頂戴し及悲歎暫有之彈正治部少輔涙をおさへ申

されけるは各自是伏見へ御のほり有で秀頼公へ一

禮被申扨面々の國々へ下向し數年の窮屈御のへ有

へし中にも治部申されけるは來秋の頃又々上洛有

べし左あらんにおゐては茶の遊宴をはしめ各を

慰め申さんとの挨拶なり清正もとより治部めと中

あしければ進み出治部の御茶を玉はるべし某は七
年朝鮮おらんかい在陣し手を碎兵一粒もなく茶
酒も持されはひへかゆにてもてなし申さんと大聲
にて申されける治部心にさわりけれとも返答にも
不及諸將伏見へ上着し秀頼公へ一禮申上る主計頭
も禮を申御暇被下及歸國
鮮國在城在陣の諸大名博多に至り治部少輔に参
一日本人朝鮮より中帰朝あつて重朝鮮陣の大将
四方を下知する城三所に結構す蔚山を爲東路主計
頭清正在陣順天を爲西路攝津守行長在陣泗川を爲
中路甲斐守長政在陣す蔚山は別の要害の地なり
敵の大軍にせめられてはあしかりなんと清正
諸將相談し毛利宰相筑紫衆をくはへて正月十日よ
り普請はじまり成就の上清正へ渡さんとせし時順
天にある諸大將小西をはじめ順天の城をあけば釜
山浦近邊につぼんと語定すいかにといへば順天
は北蔚山は南其間百里に及べり大明人百萬にて今

度は順天え取かるる由頻に風聞あるによつて取

まかれてはあしかりなんと只中路と南方と二筋を

持かたむべしと或時加藤左馬介幸明一人進み出被

申けるは敵のつらを見ずして此城をあけのく事武

加藤主計頭殿

正月廿二日 御朱印

請取候就夫蔚山西生浦兩城難抱之由被聞召候則

毛利壹岐同一手之者ども西生浦に可在城之由被

仰出候間得其意可相渡候猶歸朝之者共罷戻様子

被開召候而重而可被仰出候也

肥後文獻叢書第二巻

一大明の大將梅栢六萬の人数を催し蔚山え重て押寄

清正下知せられしは先非を悔押寄たりと覺たり

今度は城普請兵も成就し一ッとして危き事なし

今夜一夜討せんと加藤清兵衛庄林隼人を呼若者め

しつれ夜討すべしと有かるか治井上大九郎申

加藤主計頭殿

三月廿三日 御朱印

先書に如仰遣方事今度蔚山え早々懸入に付

而異國之大軍兵引退事無油斷故右之通感被思召

候次に順天可打明之何も相談之通開屑順天え安

國寺遣候事武之吟味不可勝計候仍光忠之御腰物

被遣候猶淺野彈正少弼可申也

士のすべきわざにあらず各は兎も角も候へ左馬介

におゐては一人成とも此城にとまり申べしと申

さる此由左馬介より清正へ被申越しかば清正秀元

相談し安寺を使に申付順天に被申遣しは順天

被明候事は能々諸將御相談有之御分別可有左馬介

申分に過申間敷由被申遣故諸將も任其儀右之段秀

吉公之言上申上られしかば大閤御感有て左馬介主

計宰相申分尤なりと御蔵之御朱印を被下書曰

八

清正巻三

まばらに成し處に後詰の軍兵おし付突懸る清

正左京太夫に力を待門を開鐵砲にて打立其崩
口を見鍵を入ょくと下知あれば森本義太夫庄
林隼人赤星太郎兵衛いかるか平治古橋清助壹番に
鍵を入首數貳千三百七拾討取清正下知せられしは
大明勢は水の手は取切ぬ彌急に責べしと支
痩せし處に釜山浦より後詰として毛利宰相黒田甲
斐守金吾中納言の軍兵三萬水の手より乗上る其外
順天より四國勢二萬押詰るによつて大明朝鮮人の
軍兵恐をなし正月四日百萬の軍兵不殘引退ける大
覺兵衛森本義太夫近藤四郎右衛門古橋清助相田
權六鍵を入敵七百式拾討取ければ大明勢追立られ
しどろもどろに成し處を敵大軍なればかりをた
きやうにそなへをかためける味方の軍兵は心
よげに一夜討して打入りぬしかれども城中兵つ
水の手を敵にとめられ牛馬を殺しなどして
肌を助け十死一生の有様なり清正籠城衆へ被申し
はかく兵盡き餓死せん事口惜次第なり突て出

死すべしとの事なれば左京太夫飛彈正返事に近日

後詰可有と種々Sさめをなすによつて先任儀ら

四七

長追すまにとて人數を乗廻しまん丸にして城中へ

入る毛利宰相の備よりとんほうの様成引雨の

馬印の大眞先に乗入ると朝鮮の一備どつと崩

毛利の陣所の奥の古城え朝鮮人引取引雨の馬

印眞先へ乗込先を取切を見て後詰の日本勢一度に

鐵砲を放ち鍵を入に付て不相叶悉く敗北す清正後

に中國の馬印を縛らるに吉川藏人廣家也と云

清正廣家參會なり比類なき働入御馬印ちいされ

故見兼候御改可有之と被申藏人被申は然るにおる

ては色を替可申條清正のばれんくしを拜受有度と

被申清正所存に相叶大悦不過之とばれんくしを出

さる藏人の馬印はあかきばれんなり大明人二年

のあいだに七拾萬の軍兵を催し四海の力を盡し朝

鮮國の軍兵共に百萬蔚山の城攻落し得散々に引

退笑ひを遠國迄残せし事末代迄の恥辱なり右之段
秀吉公之進せしかば感狀二通下し給ふ書に云
今度蔚山面之大明人取出候處懸入城中堅固に相
抱數千人討捨候付而敵敗北の由神妙之働に候
然ば兵糧五千石最前被遣候へども重而五千石被
遣候都合壹萬石被遣候間寺澤志摩守手前より可
間に陣を取大明の大將呉惟忠とい者を見て曉
方に忍入三千人にて取包み二百人之者一人も不殘
詩取ぬ左京大夫是を聞今日蔚山え打入べき筈なれ
ども二百人の者共を討せ敵と一戰せすして入城す
る事や有べき跡山のかけに敵の備あるらん押詰一
戰せんと身をもまる宍戸申樣左京殿被仰處尤に候
へとも大明朝鮮人百萬にて押つむるよし及沙汰急
蔚山へ御入可然由申せしかども左京太夫耳にも不
入勇氣かつたる人なれば呉惟忠か備へし所へ押入
手をくだき一番に左京大夫鍵を入らるゝにより城
内よりも清兵衛下總平左衛門立本と共に門を開き

突て出しによつて呉惟忠か軍兵追立られ三百八十
九人討取心よげに吊合戦して左京太夫蔚山久軍兵
を取入此旨清正え告へしと左京太夫より木村
頼母を使に申付西生浦え遣し委細被申ければ清正
書状を披見し頼母口上聞とひとしく六具をかた
早船をこしらへよ一騎成とも乗出すへし日本を出
たる時彈正我に左京太夫を頼との約をなせり左京
討せては生て日本へ帰り何の面目有て彈正にまみ
へんや迚も死なん命左京一所に果べし若又行着ぬ

數百艘清正を遮りとめんとする所へ眞一筋に乗込
鐵炮を放させける森本義太夫飯田覺兵衛猛威を振
ひ番艦二艘乘取捨ける其勢に番船どもおおお
のの子をちらす如く方々へこぎもどす清正
急難をのがれ蔚山え打入らる城中には清正籠城に
力を得大明數萬の軍勢せむれども鐵にて打ちた
をし物ともせず清正下知に我籠りし驗に一夜討せ

んとて東門をひらき庄林隼人森本義太夫吉村吉左

衛門飯田覺兵衛を將として鐵砲三百挺先へ押立侍

三百人にて押出し鐵砲ひたしとったせ壹番に飯

四六

先に訪れば大明人と戦びて討死し日本の約をめ

Sど迄合すべしとすめは手もとにある軍兵我も

と打立ける加藤美作片岡右馬允を大將として

人數千五百西生浦に残し釜山浦の大 き

蔚山之とり懸り日夜手いたく攻けれども鐵炮に打

立られ自由を得す明日大攻をすべしとてこしらへ

ける處へ廿六日早天に清正手勢二十艘斗にて妙法

の旗を押立例の銀の長帽子の甲を着し長刀を脇に

はさみ六尺ゆたかにのびあがりのへさきに立上

供船共に下知をなし城中へ入けり寄手の番

清正記巻三

ほと一度に放ち相戰清正先備加藤清兵衛庄林隼人

か備の共鐵炮にて打たてしところに吉村か備よ

城内に横合に切れは叶び難してやう~門を
うち城主陳愚衷和平を乞につゐて城を追出し籠城
の土民に安堵させ城を宰相に渡し四將相談あつて
從是全義館をせめんとて段々に人勢を出させらる
る元來清正は先將なれは一番に人数を出し全義館
の右脇に庭といふ所迄着陣せし所に解生と云ふ者
三千の軍兵を引つれ全義館に入らんとせしか清正
に行逢たり清正先勢清兵衛隼人一備の者共懸合鐵
炮を放させ隼人一番に鑓を入るれは解生か軍兵悉
く敗軍して方々へ迯散しを追詰七十三人討取ぬ
北勢に全義館の者とも恐をなし四方へ散城をあ
けし故不及合戰清正は清兵衛隼人をよび今日の働
不可勝計と兩人の者共に褒美し先備の者共手を砕
し軍兵それに加盟して蔚山へ人数を打入らる
一大明朝鮮の軍兵日本勢をふせがん爲人數百萬にて
押向よし及注進依之小西攝津守行長は松島とSふ
所に在陣す是船手にて順天えもちつけたり清正

は蔚山と所に在陣此所は要害の地なれはさし

一加藤主計頭清正蔚山に籠城之由大明朝鮮人開及び

軍兵百萬惣大將揚鎬とS者十二月四日大軍を集

め壇にのぼりて地を祭り數萬挺の強炮を一度には

なつ音天地もうごくなり城中には清正家來加藤

清兵衛小代下總佐々平左衛門齋藤立本毛利家之者

共に筑紫衆にて固めたり敵のおさへの當番として

出し淺野左京太夫太田飛彈守毛利家邪宍戸備前明

日は蔚山え入らんとて彥湯とい所に陣を張一里

跡に河ある所に物見の者二百人残し置三里五里の

て不及氣遣とて諸大將相談して順天に大軍を入澄

蔚山順天の道筋心安く往還せんため順天蔚山の道

筋に城を搆大軍を入置方々城をきつく惣大將は清

正なり清正は船手の城とも修造せんため自身西生

浦へ行夫より棧張にかへり蔚山には家來加藤清兵

衛小代下總佐々平左衛門齋藤立本に人數三千籠置

毛利家の者に筑紫衆を加へ普請最中也清正繩張し

日本の軍勢普請の城々は釜山浦安康加藤竹島西
生浦松島棧張泗川蔚山順天右の所々へ大明朝鮮兩
國の人數を手分しおさへをし先蔚山を攻落さんと
の評議にて蔚山之大軍押詰る
大王をも朝鮮王子の如くとらへ日本へ渡し中華四

百餘洲焼拂灰燼となすべしと日本をかざり小西を
怪く申美女を勅使の前にてはたもの木にあけひも
さしに突見せ申時勅使幷下々迄是を見恐をなし舌
をふるひ退散す夫より主計を鬼上官と申候と辯舌
は達しつ一ッも不殘被申上時太閤御涙を流され扨
々太閤に能似たる者哉渠が後ろひもの時分よりわ
れかひさの上にてそたち某かはかりことをよ
く見置儘似せたるもの哉我等爲には近親類な
りされどもあまりあらきものにて人がらかひをち
いさき時に仕るに仍て親子名乗を致さずと家康利
家に被仰序に豊臣氏に改むへしと上意なり右の如
く太閤主計頭を御褒美有て小西事表裏を申上あな

たこなたといたす事不及是非殊に王子を返しつる
事千悔盡難し成敗可被仰付候得共先被差延今度高
麗引口の様子に寄り可被仰付と又先手雨將に被仰
付小西も御前へ被召出右のたん(被仰聞主計頭
には御刀一腰 圓光 被下猶歸朝のうへ大身に可被仰
付との上意にて御暇被下及歸國
肥後文獻叢書第二巻
一南京の城を責んとて加藤主計頭清正毛利宰相秀元
黒田甲斐守長政淺野左京大夫幸長相談し南京へ押
詰四將として四方を取巻西は清正請取軍兵一度に
竹たはを以て押よせ大筒を放しかけ矢を放つゆへ
内よりもふせき戰ふといへとも竹たば堀うちへ押
詰たり然處に城主陳愚東の門を開き弓三百挺
一主計頭は御暇被下伏見を立肥後國熊本へ歸城し今
無の讒言にふといへども無料段直に申ひら
豊臣氏を被下重て先將を被仰付事大慶此上有間
敷と侍共休息させ振廻をなし對馬へ渡海し高麗國

へ着陣し竹島に残し置し軍兵共を集め梁山を責へ

しと軍兵梁山の城にひたしと竹たばをよせ責寄

る小代下總坂川忠兵衛出田宮内諸人に先たち一度

に鐵胞を放させ大筒を打入によつて梁山の城主平

城を明渡し可申條命をたすけ給はれと和を乞ふ

ゆへ春を追出し土民一人も殺さす安堵させ城主

として加藤喜作を籠置直に西浦に着陣す

所に在陣仕内北京大王より勅使參り申様は往

古は中華四百餘洲の魏帝日本の王へ王號をゆるし

御貢を納来る近代は左様の儀をも捨て剰今又太

閤秀吉人數を差渡し高麗國へ發向大明境迄人數

を押詰るにより大明より四十萬人の人數を東へ

指出す勢におぢ一戦にも不及日本勢武道具を捨

一生計頭登城進物は虎の皮五枚三間つきの猩々皮

折につみ御間の椽迄被持出治部少披露なり太閤

御諚には此進物は高麗にての亂妨物か主計御前へ

近く參り候得と被仰扨々其方は無分別者哉小身に

有之時も今大身の時も少も替らす傍輩せりを

仕小西程の者を堺の浦の町人と云其方には御免し

もなき豊臣朝臣など、北京への勅答に書事不及是

非委細可申上との上意なり主計而家康利家にむ

きよく被聞召上被下候へ勅答を調申は某あんへん

にて主計頭虎之助と申御膝元にて被召仕候時の

とく何事を被仰共口答に仕まし今は一天下の主し

太閤まて御昇進しく候古への如く不被存何様

之儀を被仰候共謎而承りて可然之由被申委細奉

得意との返事にて早速登城

一戰太閤名代の者を先として一人も不殘迯散

夫より釜山浦迄つたひくの城に居候者迄不殘討

死朝鮮國の内に日本人と云者一人もなし主計はか

也主計は諸事仕置等正直に申付段達叡聞朝鮮王

子幷高麗第一の美女を正手へ生捕之由此王子此

女を早々返し遣におゐては一命を助け北京より數

千艘の船を被仰付日本へ送り届へし左なきにおゐ

てはあんへんへも四十萬の大軍兵を差越一人も不

殘可有誅伐との勅諚なりと申彼美女は鍋島生捕の

由承に付呼寄王子兄弟并女を勅使に見せ候へは無

此王子此女と申に付大王への返書を調申意趣は

王子は太閤へ不倒して返す儀難成美女は勅使の前

におく大明口へ發向する小西行長は日本堺の浦の

町人也本大にてなし宗對馬守縁者たるにて大

明への案内者ゆへたるも道理なり又豊臣と書申

事我等は四才五才の頃より親に放れ候へは氏を不

存相調申扨日本太閤の本大將といふは清正なり

是へ四十萬の人数をこされ候へ幸よき所に在陣す

悉く切崩し勢いに押詰大明國迄責入放火し北京

四三

小西攝津守迯散に付て高麗都迄追詰南大門にて散

治部なりくるしくなり通し候らへと被申主計者共
申様何治部少輔なと、云者か今迄には遅く参たる
ものかな通すじといふ治部被申は誰か天下にお
て此治部を知らさる門番は何者だと云加藤計
と云其時治部被申しは主計は御前を御免か主計者
返答に御前御免被成間敷子細は如何と申を太閤聞
召治部少輔通し候得と被仰により主計申様にはか
のせいのちいさぬわんさんものか通し候へと被申
に付門をひらき治部少も被通候なり其後諸大名小
名何れも登城に付庭もせばく成に付太閤様政所様
松の丸殿を始め各石垣のうしろつるち犬はしりへ
提灯を御上げ被成其時太閤御説には未御前をも御
ゆるしなき者か御前を取持候間石垣より上には無
用と被仰とSへとも主計は夫にも不搆がんぎの下
に立被居候其時迄も何とも御詞も懸給はず何と思
召けん提灯をとばし上主計を御覧被成御
落涙政所様松の丸殿よりも御上臈衆を被遣御前は

大方事濟しそかしさ~御落涙被成候間少も氣
遣ひ仕間敷と被仰下父内々治部少を何とも不思主
計に心よせの衆は主計とがなくて治部少にさく

一御政所松の丸殿より主計所へ御使有り主計御勘氣
之儀早相濟也乍去主計程の者の御勘常を御うらつ
たへにて召直さる事は世上の批判も如何也御表
向にて家康利家なと熟成を以被召直候はんとの儀
にて只今御廣間へ被成出御候定て頓て可被召出條
左樣心得候へ進物抔何にても上候はんと被存候物
を書立御臺所へ主計ものを可指上との御便なり然
處に家康利家より使として榊原式部太輔參被申は
唯今太閤樣御廣間へ出御被成主計事被仰出により
御執合申上候得は夜前早速罷出段神妙に被思召御
前を御免被成委は治部少輔右衛門尉徳善院より可
申との儀なり案のことく三人より三使來り口上
に主計頭數ヶ條不屈の儀有之といへとも夜前早速

登城神妙に御思召御勘氣御免被成候條早々登城可

致との意也次に三人内にて申上る橋未筑前守

られ難儀仕候を不便に被存此様子を見主計際へよ

られ心安被存候へ主計あやまりなき段は顯れ斯御

念比に上は日本は神國なり扨々目出度事なりと

詞をはなつて悦を被申衆多し漸夜も明かたに及び

候に付下城すべしと仰に付主計も退出

所々に至迄一字も不殘たおれおしにうたれ死する

數をしらす地震ゆると則清正起上り二百人の足軽

にてこを持せ侍共召つれ伏見の御城へ行太閤御

座邊迄被參早太閤も御居間を御出座有大庭へ出

御被成御敷物を敷幕屏風にて圍ひ大提灯をともさ

せ被成御座所へ主計頭つと被參候へは太閤は女の

御装束にて政所様松の丸殿高藏主其外上衆の中

に交り被成御座候然共御聲を聞しり御出被成たる

と悦ひ高藏主と主計被申はたそと答候時加藤
主計頭是迄参りたり大地震夥敷候條上様を始めお
しに討れ可被成御座と奉存はねはづさん爲二百人
の足輕にてこを持参候通太閤様へ被仰上候へと
被申其聲を太閤様政所様被開召扨々早くも参りた
る者哉のきいたる者哉と政所様には主計頭を御
念頃に被成により様々の御あいさつなり淇時主計
頭被申は高藏主能開召て上様へ可被仰上主計事此
五六年朝鮮へ被遣數ヶ度の合戦に得大利都への一
番人仕王子御兄弟官人等悉生捕おらんかい迄押詰
猛威を振ひ吉州表にて手をくたきかせんほにてか
くなみ十萬の大將麻貴を主計自身討取惣勢河へ追
はめ悉く討捕傳奏館にて手を碎晋州の城一番乗を
し安康へはたらき骨を碎し忠戦は少も不思召分
小西攝津守數年の陣におくれを取表裏申上和平仕
段は不被開召則治部めと中惡敷につき種々讒言仕
候を誠と被思召今乂切腹すへきと高麗國より被召

寄といへとも私あやまり無候之得は天道の加護可

有之と歸朝仕治部少輔さいへ申に付腹を切せんと

の儀只今共に三度なりあやまりなさによつて申び

らきに今なからへ罷在なり今度の次第もよく被聞

召候は、越度なき段は頓て知れ可申といかにも高

聲に被申しを太閤も具に聞召主計事五六年以來朝

鮮國にて炎天寒天ともいわす晝夜苦勞仕放日にや

け色黒くやせおとろへたる姿を太閤被成御覧むさ

んと思召けん御涙を流され候時計高藏主に被

申は夜中はつらなる體に候中門には我等者を

付置可申と被申高藏主御前へ被申上といへとも未

ものも不被仰御うなつき被成により主計内加藤傳

藏同與左衛門和田備中大木土佐小代下總出田宮内

を付置主計不申断うちには誰をも通し申しと申

付其後治部少輔外奉行衆登城中門にてとめ申時

なく仕かりし城普請等夜を日につき成就のうへ

鍋島へ相渡し歸朝し伏見に参着し日來增田右衛門

尉とあいさつよきに付太閤の御理談合として右衛
門尉所へ直に參らる折節台長老なとなかばな
奏者谷市助罷出清正面して高麗より歸朝の通
申入候へとの事なれは其段市助取次則右衛門尉對
面ある主計頭被申は我等只今高麗よりすくに貴殿
へ參る事餘の儀にあらず御存知の様に治部少輔め
と中惡敷により種々我等をさへ中に付太閤誠に
思召切腹仕候へとの急使有に寄り歸朝仕部めと
我等中惡敷段上にも内々御存知の上數年高麗陣中
に忠を盡し功の御褒賞にこそ預へきを讒言を容
給ふと是非に不及と被申右衛門返答に數年の御忠
儀は天下に隠れなし去なから上への御理の儀は治
部と中を御直りなくは事濟まし誰か今の世におゐ
て治部めなどと申者日本中に有へしや治部と中を
御直り可有との儀ならは明日にも我等治部へ申相
濟すべし無左は理の談合成申ましと被申清正返事
に八幡も御照覽あれ治部めと一世の中中直り仕ま

と其故は朝鮮國にて数ヶ度の合戦に手にあわず人

一慶長元年七月十二日の夜の大地震は二百年三百年

にもかかる例を不及日をこえて止す洛中洛外伏

見大坂は不及申五畿内押なめて地震京中其外在々

のかけ言のみ申まわり讒言をかまへ人をたをし候

はんとのたくみ仕きたなきやつはらに一度中直り

して何にかせん縦へ太閤の御前直らす此儘切腹被

仰付とも治部めと中直り仕まし貴殿もきこへさる

仕形なり誠朝鮮在陣中晝夜苦勞して只今清正直に

參たる上は日來のよしみとひひせめて玄關迄こそ

なく共次の間迄出られてなつかしなとは可被申

事なるを被居首はかりひねりまわしての挨拶は過

分にもなし所詮貴殿などの様成禮義をも知らさる

人と談しても何かぜむ向後申通ましと座を立被歸

其時右衛門尉立送り其儀にてはなし今少御咄候へ

と被申けれ共聞も不入宅せらる清正家来の共

くやみには扨々物くるはしき人かな笛様の讒言は

昔も今も有そかし清正を三奉行五奉行衆にくみ中

悪敷内に右衛門一人入魂なりしに如此中ちかひ九

て(不及是非儀なり定めて御断もするとに立ま

し切腹可有やと何れもくやみ候なり

四〇

一主計頭は晋州落城已後安康へはたらき猛威を振び

引拂せつかと云所に在陣す小西はやくさんと云

所に在陣す小西攝津守虚言の和平を太閤へ申上王

子を返し北京大王へは古への如く大明國へ日本よ

御貢を運送し北京の下として永可申由申遣に

付而大明勢も引退日本勢も釜山浦迄引退く依之北

京より日本への傳奏二の傳奏として勅使來朝す一

の傳奏金銀珠玉を持結構成體にて来る清正内三宅

角左衛門かるか平治と云鐵炮頭の足軽共おSは

仕により二の傳奏來朝す治部少輔と清正ともと

より中悪敷により主計頭を何とそして可遠流の由

工みをなし小西とは水魚の夜なれは種々太閤へ讒

言し其ヶ條に主計頭事今度朝鮮國にて數度手柄を

仕るといへども一方の大將被仰付小西攝津守を日

本堺の浦の商人と申我身は御ゆるしなきに豊臣清

正と北京大王への勅答を相調剰異國本朝の御和平

小西才を以相調大明より日本へ和を乞候勅使其

一の傳奏を足輕に申付おいはき仕狼藉之段前代

未聞に候と種々申上につゐて太閤御立腹被成さて

(悪き主計めか所存かな日本の外聞と云太閤を

一生計頭清正は太閤御勘氣を蒙り日本へ被召をも悔

一大明朝鮮の傳奏來朝の旨小西治部少輔を以申上に

付て太閤もてより馳走可被成との儀にて及奔走

傳奏登城太閤も上段に御着座傳奏は次の間に被道

候を傳奏通詞を以て申は日本太閤大明王へ和を乞

被申上は我等共とは傍輩なり第一此冠を太閤へ御

免被成勅使なれは太閤無禮なる仕形なり太閤次

の間へ下り従大王御免被成勅書冠を頂戴可有と云

旨太閤被聞召殊の外怒り給ひ小西表裏を申上つ

ると思召此冠捨へしと被仰横庭へ御捨被成勅書を

台長老哲長老に讃せ御聞候得は小西申上旨と相違

して勅使申上る通りなり太閤彌御機嫌惡敷秀吉を

大明國王の聟になし朝鮮四道を指上へしと段々小

西申故人數をも釜山浦より引取王子をも返し千悔

盡難し小西を呼候へ御前被召首をはぬへしとか

り給ふ種々御詫言申上治部少輔もて申上るに依

常座の難を遁れ異國本朝の手きれとなりぬ

ないかしらにする事一方ならぬ曲事不及是非小西

和平を相調候上は主計頭も歸朝すべし科の軽重を

御開可被成旨被仰遣

加藤主計頭内

一番に乗入候得共鐵炮に當り流落 森本儀太夫

黑田甲斐守内

森本に續き乗申候然共名乘不申候 後藤又兵衛
呼出し對し宜からんと有諸将尤なりと被申黒田も
兩人召つれられしかば四人呼出し一番は誰やら
んと問森本は痛手を負ひひさをも立得すして有け
るか晋州の城石垣はね崩し一番に乗越しは主計頭
内此森本儀太夫なり然共向ひさを鐵炮にてうたれ
城より流落する所へ又兵衛久七角兵衛もりしそ
かしと云又兵衛久七も森本申上る通り成りと申飯
田申は森本申ことく某後藤堀三人よせ合かしらに
上候後藤は某より一足はやく上り候を足具の
上引すへ妙法の旗をなけ入加藤主計頭内飯田角
兵衛一番乘と名乗る然處に後藤も堀も名乗扨某は
敵を一人切伏せ首を取り候所へ主計頭も甲州も御
乗越候に行逢一番乘一乘一番首と名乗候かく仕た
る角兵衛を座中におるて誰争ふ者有之哉と云後藤
堀も角兵衛申上る通りなりと申上る付て注進狀に
主計頭晋州の一番乗殊に石垣一番にはねくづし一

番乘の次第書付にSはく

肥後文獻叢書第二巻

加藤主計頭殿

今度牧使か居城晋州軍勢を以責崩候刻其方事

名譽のの甲を仕出し石垣をはね崩し一番乗段

粉骨之至に被思召候其上家來森本儀太夫飯田角

兵衛無比類働不可勝計候則爲褒美正宗之刀被遣

候惣て主計頭事おらんかい表奧高麗傳奏館かせ

んほにての働無油断入情候歸朝之上可被加御恩

地候儀太夫の義の字角兵衛のの字可爲右之交

字能々可抽戰忠候猶淺野長束可申也

七月三日 秀吉 御書判

一清正陣所へ歸宅森本飯田を召寄扨も兩人の粉

骨無比類飯田能もしたり日本の手柄るべしとて

飯田に三千石の加増をし森本に二千石の加恩あり

石垣はねくづしたる足軽三十人に二百石苑知行を

下行しける扨晋州の城一番乗仕無比類忠儀之旨太

閤より御感状を被下書に云

如此書付及注進

上帯引すへ名乗申首

飯田角兵衛

後藤に一足藥上候得共後藤

加藤主計頭内

堀久七

後藤同前

黒田甲斐守内

三八

清正記巻二

長溪君書判

一小西攝津守は秀家並奉行衆と相談し大明朝鮮と和

平をつかさどり和睦相濟段申上けれは太閤仰には

長谷川藤五郎木村常陸加藤遠江等に敗軍させ牧

使が居城晋州を責落し其上にて和相濟すべしと

被仰下清正は小西和儀を調粉骨を盡して生捕

王子二人を送り返す事安からず思ひ晋州を落

し和平をゆらんとをみ陣拂して都を出十三日と申
には釜山浦より三里奥へ着陣し清正繩張してやく
さんこもかひに城を取惣軍兵として普請に及び五
月中旬やくさんを立牧使か城晋州に着陣す惣軍勢
陣し晋州の城を取竹たは附晝夜十五日之間
責よす城中より火矢を出し様々手段を盡すゆへ責
あぐんて見切大手の門丑寅の責口左は加藤主計頭
右は黒田甲斐守なり主計頭は此城を責め落し和平
を破らんとの所存なれば數百疋の牛を毛を内にな
し龜の甲を作らせ其内に足輕を入自由を振廻
つて火矢もたらす石垣のすみの大石をはねは
七八間崩れたり一番森本儀太夫乗込所に鎧に
て向すねうたれ流落二番黒田甲斐守内後藤又兵衛
等内後藤又兵衛堀久七一番に乗越候と被申主計頭
返答に幸森本飯田を召つれ候間御邊も兩人の者を
三七
堀久七上る三番主計頭内飯田角兵衛乘込三人よ

せ合かしらに行合ける飯田後藤が具足の上帯を取
御邊一番楽と可申哉とび捨て妙法の旗を差上加
藤主計頭内飯田角兵衛一番乘と名乗る又兵衛立腹
し一番乗後藤又兵衛と名乗る角兵衛ははや敵一人
切殺し首を取り二番に加藤清兵衛柏原藤五郎吉村
吉左衛門赤星太郎兵衛小代下總三宅角左衛門乘込
主計頭甲斐守も乗入られける所へ甲斐守へ飯田
し首を見せ一番乘一番首取りと云は角兵衛なり
と申扨軍勢乘込落城す牧使は痛手を負て石垣のす
みに隠れ居れる秀家内岡本權之丞首を取る扨秀
家陣所へ諸大將及参會秀家被申しは晋州の城落居
之儀太閤へ注進可申上一番乘は加藤黒田所の内
被成如何と被申主計頭被申しは我等甲斐守口同
所なり然れ共龜の甲を仕出し石垣をはね崩し一番
に乗込しも森本儀太夫飯田角兵衛と申者なり甲斐
守申分有ましと被申甲斐守返答に主計頭被申こと
一番に石垣をはね崩したるは御邊なり然共我

一宰相秀家並三奉行衆は清正かせんほへ發向せし跡

にて相談し都をあけ釜山浦迄引取可然の旨及注進

可仕其儀の旨秀吉より御朱印被成下もとより主計

右の通りに何十枚も相調首を取被申衆は銘々前

に澄被相待候らへ清正只今實検に参候と被申遣に

付何れも河端に首をすへ相待候處へ清正被参此首

は何かし所より参たる何と申者計取由申に付名譽

の働無比類と被申則右之感狀に月日首數宛所書付

被相渡何れも感狀を頂戴し以来迄の御文章旁以忝

と申及一禮Sつれち歸陣可仕と申清正返答に各是

へ可被参此上の大臟に米大豆澤山にあれは臟を破

あの牛馬に米大豆を附て可被歸と被申に依て一

入して五疋十疋宛馬に米大豆を附迄引もきらす

牛馬ついを運送す左有て右之感狀取所の者共主人

主人え清正より如此の證文を給り候と申に付諸大

名衆褒美あつて清正は名譽の大將軍神の化身なる

へしと稱美す

加藤主計頭清正

月

を我等方へ可有持参雖爲清正小身證人に罷成何

方八成共身上可相濟依感狀如件

肥後文獻叢書第二巻

順和君書判 行護軍書判

萬曆廿1年六月初二日 臨海君書州 南兵使書判

關白殿下雄桀無比四隣皆畏之且善於分別待隣國

王子諸官稍存舊意愍其渡海使復于京其恩厚與

此海俱深一行之人其敢或忘後日若對 日本及

計頭復發雜談少有背負之意非人情也天地鬼神

共知之矣脩好之日通書寄情事

關白殿下到釜山浦還許放還京城其慈悲如佛眞箇

日本中好人也況素聞

と秀家三奉行五奉行中しけれは主計か王子を生

大功を無にせんために遊撃をよび相談太閤へ

は王子を返し被下候は朝鮮四道を差上秀吉公を

大明國大王の聟になし參らすへきと種々偽申上に

付太閤喜悦被成二人の王子並官人等宰相三奉行迄

渡し可遣と主計頭に被仰下につゐて及其儀王子歸

京之時主計頭へ一札の禮書を送る書に云

兩王子臨海君順和君兩府夫人陪官長溪君上洛君

行護軍大將南兵使等自壬辰年七月廿四日被琥

本大將軍計頭清正入城相見即加燗遇一行下

人並給衣粮撫恤頗至又票于

ひ王子の番として新美藤寺田之助に人數五百

付置其外は何れもめしをたへ可打立と觸廻し自身

ははや六具をかため軍勢おそしと下知し時は何時

そやと尋らる三月晦日夜計なり清正一番貝を吹

立はや打立けれは家中の面々我もと出立て其

夜五里有之かくなみ勢陣所へ押詰候へはまた夜

は明ず七時分なり敵陣寐い物音なし折節小雨

交りの風吹けれは敵前後を忘れ起もせす清正下知

に一段よきそ殊に雨降天のあたへ是なり日本歸朝
之後國を大分給はるへしと秀吉公の仰なれは一稜
褒美すべしくつわの音せさるやうに手ぬくひにて
巻へしと云捨て清正は敵の本陣の方へ馬を静に乗
込大将の陣屋とおはしき所に蠟燭かしこにとも
し前後も不覺所へ清正懸込て大将と見えし者切殺
大将を満正討取たるそと大音にてよはめられ
けれは其ひきはひに軍兵責入を見てかくなみ人取
物も取へず南西東北に迯廻る清正下知に首を取
事なかれ鎌をはなちかけ火矢を射懸よとの事な
れは本陣に火矢を射かけ鎧を放ちかけ一番に鎗
天御照覧あれ追ちらすべしと即座を立歸宅に及
今度かせんは川の邊にてかくなみ八十萬の大
麻貴將軍を清正自身討取其勢を以追討之刻其方
事河中にて討被仕手を頭いくつ討捕手柄之
段無比類候武士は不知者也若牢人被仕候は此

入る加藤美作小關半助並河金右衛門長尾安
左衛門坂川忠兵衛かるか治小代下総三宅角左
衛門飯田覺兵衛森本儀太夫阿波伊兵衛大脇次郎左
衛門赤星太郎兵衛榊治右衛門吉村吉左衛門堤權右
門池田甚四郎有賀太郎助久保田吉松下清藏久
保吉右衛門井上大九郎太田半左衛門齋藤與三右衛
門齋田傳右衛門大木土佐木村又藏面もふらす突て
懸れはかくなみ大軍兵赤はたかにてかけ出河向の
味方をたのみかせんは川へとひつかる都に在陣の
諸大名相談にには主計情のこはき者にて一身敵軍へ
趣し定て可被追崩何も人數を五百三百ついくべ
し清正跡へ人數を押つむ加勢の人數おくれはせに
川端に着陣し河につかる半死半生の者を引け一
入して二人三人宛首を取高名仕たる體にて何れも
河端に首をすへ置罷在體を清正見及はれ右筆並手
能書者數十人呼出し感を調文章に
一南大門の外清正陣所の大家へ宰相秀家をはしめ三

奉行五奉行其外大名衆會合し永々の在陣奥高麗お

らんかいの合戦に手をくたかれ御手からさせられ

其上朝鮮國王子兄弟官人等被生捕都へ帰り無休息

傳奏館の一揆御退治候事無比類御手柄御忠戰名譽

の至り成りと被申中にも石田治部被申は此都に永

籠城有て各在陣馬の草らさうしなども手つま

りらしき體なり是より五里有之かせんは川のこな

たにかくなみ勢十萬川の向に三十萬にて陣を張り

ひがたくや思ひけん悉館中へ飛入火をかけ火中に

飛入(自害してけれ清正手へ討取首三百九十清

正手勢討死の侍二十一人雑兵七十一人則勝鬨を揚

軍功を抽たる者共に賞を宛行歸陣せしかは洛中お

たやかに成る去十二月七日よりせるとうす將軍

津田三四郎と者に預り置三四郎は信長公へも

つき清正内にて五千石身上の者なり如何したり

けん清正都へ着陣の夜せるとうすを取にがし三四

郎あまり迷惑いたし切腹すへきと申といへとも其

儀に不及と赦免におよひかせんは川合戦のせる

とうすも討死

夫故方々の通路不自由其上路中兵もされつ釜山

浦へ引取海邊に城普請有之日本より兵根をも取越

候様に無之は中々永在陣叶まし爰にて大明人にし

つめられんよりは釜山浦に出城を構王子を籠奉ら

は都は籠の内の鳥にことならすと被申清正返答に

我等は左様には不存此都を手を砕き我物にし今又

大明と一戰もなくて捨事無念の次第なり秀吉公

一左右申上の儀ならは兎も角も有へし其様子に

寄り太閤是迄御馬を被出異の都可有御覧と有儀

も候へし左ある時は何と被申治部少輔被申はいか

にしても都にては兵狠もつきて人馬の無之如何

あらんや太閤へ申上御朱印頂戴し其上にても可有

之哉と被申加藤遠江守被申は御朱頂戴迄は砂を

S堪えよろしからんと治部少輔へ挨拶なり

清正被申はかくなみ人十萬の人數川を渡し日本人

を仕詰るに於は此中何として退散しでは見られぬ

ぞ我おらんかいへ發向し手勢八千にて敷度戦ひし

に敵は二萬三萬なれと勝利不得と云事なしと被申

治部少輔返事に左様にたやすく候は主計参追散

され候へ清正いたけ高に成追散せとの儀也摩利支

申越は朝鮮おらんかい人狂勢にて城をせめ候由

申来る清正狀を一覽し後詰の爲とてあんへんを打

立長橋に着陣し鍋島へ右之段々語られしかは鍋島

返事に吉州迄飛脚を立切拂可來可被仰遣我等持

分も自是三日路四日有同名の者を始め召置候得共

自然加様之儀申来るにおゐては拾にすべしと被申

清正返答に加州は左様候共我等は家来の侍難儀お

よくを見捨儀は仕間敷以來迄の爲にて候間清正迎

に参難儀及候は清正一所に討死すべしさらは王

子を預け申さんとて王子幷せるとうす迄鍋島に預
け吉州へ着陣し順覧あればおらんかS朝鮮人三
萬も有らんと見へしか城を打かこみ責にけり清正
下知せられしは大將の備を見定め鐵炮を一度に
し鍵を入よとの儀なり敵陣東の山の尾先に五色の
旗見へたり庄林隼人いるか不治小關助ける
は旗の有所は大將なりあれへ懸り申さんと妙法の
旗を押立一度に鐵砲を放かけとつとつきかけし
は敵陣さつと引退く城中より是を見て門を開て一
度に突て出一時計り戰ひしが城中城外に首三千二
十討取かちときをあぐ山口奥三右衛門は敗軍の敵
に深入して中途を敵大軍にてとりきられ手勢共に
三十七人討死す味方討死侍七十五人雑兵二百十一
人なり清正鎧に弓の矢三ヶ所有といへとも小
にて顔て平癒諸軍功を抽たる者共に感狀褒美をつ
かはし討死の者共の死骸等にすべしと庄林隼人
齋藤立本に申付能々計ひ人數をあつめ段々に備心

静に陣拂して都路さしておさせらる清正は鍋島
陣所の長橋へ出王子幷官人せるとうす請取清正手
勁鍋島相良勢も都に着陣し大家を請取王子を籠置
る然所に秀家幷に三奉行衆より申来るは朝鮮一揆
の奴原傳奏館に楯籍仕候條彼表へ押詰退治有
へしと使者来るに仍て傳奏館東口へ清正南口へ鍋
島西口へ相良勢に清正家吉村吉右衛門加藤美作
をくわへ押向清正のはね月毛と云くつふ入の
馬に乗先にくい下知せられし時館中より半
弓を射たて突て出此方よりも鐵砲をはなち懸合戰
す一番飯田覺兵衛赤星太郎兵衛新美藤臓鍵を入散
々に戰ひし所に森本儀太夫三宅角左衛門二陣より
只二騎かけ出し飯田赤星新美におとらしと敵の中
へ割込を見て一番二番の軍兵一度に突て悪れば叶
權官大閤秀吉人數を取渡し朝鮮へ發向し狼藉
の段叡慮不稔因茲日本勢誅伐のため四十萬の人数
をさし向うとう境迄指出す所に不及一戰小西行

長を始め日本勢悉武道具を拾迯退朝鮮都迄追詰都

に有之宇喜多秀家を先として何も討取釜山海を限

り朝鮮國之内日本人と云者一人も無之清正計なり

乍去清正は法度を能し無科者を不切慈悲深き者之

由秉て達叡聞朝鮮國王子幷朝鮮第一の美女を満止

手へ生摘し由石の面々此方へ可相渡於然は數千艘

の船を北京より被仰付清正無巽儀させらるへ

きとの勅使なりと申清正勅諚の意趣を承り四百餘

州大王の倫旨を秀吉が家臣として拝見段生前の

大幸なりと頂戴し勅使をも馳走有て引出物として

日本小袖一宛兩使へ被出勅使も此様子を見喜悦を

五日あり其間に鍋島陣所の長橋へ使を遣

し美女を可被差越旨申遣す鍋島返答に此美女の儀

は太閤へ可差上との所存なれ共清正の下知に随

へしとの仰なれば如何にも清正次第の儀にて侍一

人美女に相添あんへんへ差出す美女到着せしかは

納來る近來は左様の事をも取失

王の一浮田宰相幷三奉行列にて申来るは都表一揆起り

釜山浦への往還不得自由早々引返し都を守護し可

然旨飛脚到來す清正書狀拝見し返答に早々引取都

を可相護とSへとも吉州方々に人數を籠置候間呼

集可罷上旨申遣す然處に吉州に籠置七人の者共ょ

王子御兄弟幷美女をも勅使に見すれば此王子此美

女の事なりと云則勅答を相調意趣は朝鮮國王子之

儀太閤へ不伺しては其方へ相渡す事ならす美女は

勅使の前に置平安道へる小西行長は日本堺の

浦の町人なり宗對馬守緑有者故朝鮮大明への案内

者につき彼道へ指向日本太閤か本の武将は加藤清

正なり是へ四十萬の人數を被差越へし幸能所に居

住す此大山をよく越るとも一日に一萬ならでは越

まし一日に一萬つ~四十日之内に輙うちはたし直

北京へ押入宮殿樓閣悉燒崩大王をも生捕て朝鮮

王子の如くにし日本へ渡すへしとした豊臣朝臣清正と書判をすへ勅使に相渡扨美女を外にて渡すべしとてはたもの木にあけ穂長の鎗にて自身 Sもさしに突通す勅使見届舌をふるひおそれ帰宅し鬼上官と大明國迄も風説す

野三郎左衛門原田五郎右衛門天野助左衛門山口興三右衛門以上七人を將として千五百置さうとうには近藤四郎右衛門岡田善右衛門佐々平左衛門をとして五百たんせんには加藤興左衛門九鬼四郎兵衛出田宮内井上大九郎を將として五百りくせには小代下總大脇次郎左衛門長尾安右衛門を將として五百ほくせんにす吉村吉左衛門堤權右衛門を將どして五百はんかには多賀茂左衛門並河金右衛門を將として五百はつかいには坂川忠兵衛和田備中大木土佐を將として五百籠清正はあんへんとS

ふ所に居住すへし加州の人は今迄のとくたるへ
しと相談し加州は歸宅に及ひ扨清正はあんへんへ
行城普請等經營し移徙有て數日の苦労を少休息
せられ處に鍋島居城近遊の者一揆おこりてにか
敷躰に注進す清正一通の状を送らるゝ書に日
其表一揆發候由書中之通承屑候いかにも丈夫に
被討果可然候其方之人數にて難成候は無御隔心
可被仰越候左程之事遅候ては唐人めにうちかふ
とを見候は隣郷隣郡へも移り可申候間可有御心
得候最前面にも如合申唐人との武篇はためらひ

111 1

重て鍋島より注進に一揆不殘退治之由来る清正

心よけに鹿狩など興行し休息の所に遠見の方よ

注進に大明人あんへんをさして参上仕由申越清

正返事に朝鮮人ならば此方への使たるへし共旨重

て可申越との儀也重て注進に大明國の官人勅使な

り上下三拾人馬上之上官二人と申越す勅使無程清

正陣所へ参着し通詞を以申は大明國北京大王より

の勅使なり大將清正に可對談と申に付陣屋の掃除

等申付種々のもてなしをす満正は火おどしの具足

に銀のなしうちかふとを著しとびやううつほを腰

につけ太刀をさし重藤の弓を持座につき扨勅使清

正へ一禮し大王よりの勅書を渡し通詞を以慮の

通りを申意趣は日本は昔中華帝王の下にて七ッの

覇王也百王の約束をなし王號をゆるし毎年貢物を

鍋島加賀守殿

十一月十七日

加主清正

候てはなかれ矢の一も被射當候而惡敷候萬人

の内にも只一騎乗込候得ば中々手にたまるとに

無之候下々へ其段可被仰聞候貴所御わかゆき

尤に候恐惶謹言

陣す然る處にかくなみ人梅天と云者二萬計にて梁

山といふ所に陣を取清正歸陣の道に人數一萬計

にて陣を張依之清正も其様子を見届け下知せらる

はかくなみ人我と一戰と定めたる體なり明朝の

合戦には我先をすべし横鎗吉村吉左衛門出田宮内

森本儀太夫二番加藤清兵衛庄林隼人山口與三右衛

門横鎗加藤美作片岡左馬允長尾安右衛門三番小代

下總佐々平左衛門と段々に定めらる吉村吉左衛門

進み出て申は明日の御先 御自身可被成との儀は

御尤には存候得共大将の荒こなし承たる事も無御

座候先手の内御くわくり被成御下知は被成へし明

日の御先某に不被仰付候は、八幡大菩薩唯今切腹可仕と申に付て然るうへは不及是非吉村先手を仕り候へと被任其儀吉村跡に山岡肥前を加へ夜中にしたいめの用意をすべし辰の一天に梁養山の道筋吉州へ人數出させらる かくなみ人は待もふけたる事なれは大將武伯一萬の人數三手にかけ山の上の二萬の人數は梅天下知をなし一萬山下へ押さけ助勢の躰なり武伯先將に加はり籏をふり半弓を千張程一度に射懸馬を入清正先手吉村一備Sつれも

馬よりおり立て鏡を持をりしき鐵砲ひたしとうたせらる、武伯鐵砲にうちたてられ引色に見へし處を清正吉村備に届けるがうちわをふり自身馬を入鎧を入よくと下知をなす大吉村面もふらす一備まんまるにして鎗を入に付てかくなみ人追立られ敗北す吉村はかくなみ人山春と云者と馬上よ組合落し所を阿波伊兵衛おり合首を取るかくな

み二番備太鼓を打てかいる處を横鎗二番の人數鐵
砲を打鍵を入るに付て不相叶山上へ引取是を幸
ひと清正惣勢まん丸に備へ吉州へ備を入ら鍋島
加賀守相良宮内少輔は長橋と云所に在陣ゆへ迎と
して自身出られ吉州に出丸を構置候是へ清正御居
城被成候様にとの用意仕由加賀守被申けれは清正
喜悅してさらは入城仕らんと出丸に移り加州是へ
參り王子を拝し扨おらんかい表の働きかくなみ人
に手をくたきし物語をひたされ吉州は所がら都
におとらざる自由の能地なり吉州よりあんへん迄
十三日路は清正持分として年貢を収納すべし其外
はあまり大分の事なれば用捨すべし所々の人数を
定めらる吉州加藤清兵衛片桐右馬允加藤傳藏永

の皮百枚を持参し一禮を申ゆへ清正も

心よけに又河を越し元のごとく朝鮮の地へ歸陣し

鏡城へ着陣し王子御兄弟へ一禮を申通詞を以王子

へ被申しはおらんかい表の委細分申せるとうす

將軍をとらへからめ置段申上則清正王子の前へ罷

出る王子は高間におはします淇次にほう君其

次に清正被居せるとうすを呼出し王子叡覧なさる

せるとうするん迄もあかり得すしらすにひれ伏し

クロッチ

是迄押詰り都を放火しゑんたんの城を責崩數度

合戦に勝利を得しかし日本帝王の勅諚にてもな

し其方なとへ宿意もなし今日當所の向を通しに

おらんかい人數百人程此所に出向清正に尻をたい

を見せ狼藉の次第不及言語中にも頭たりし者三人

あり彼者をからめ不渡るては是より十日も廿日

も發向し兀良哈中悉く黒土に成べしと云やり か

ばおらんかS人三人出て返答に清正の御所存至極

せり彼の者からめ可差出と申三人をとらへ清正

の前へ引出し頭をあてにすけ劔を首にあてつち

て打とひとしく頭は一間計り先へ飛び落三人の者

共首を切て清正へ佗ひ申に付清正も和平をなす爲

謝礎とつひ一清正鏡城にて越年し王子幷官人等召具し谷峰大河

を越へ都の方吉州と云所へ歸陣し蓮下と云所に宿

二九

牧判官都ヨリ北江原道咸鏡道黄海道平安道此四

海武者大將はせるとうすと定置しを其かひもな

一合戦もせず効此王子を日本清正へ被生捕し事

かばねの上の恥辱不及是非日本人今少緩々と追つ

むるにおゐては図々へ觸遣し人数を集め一戦すべ

きと思ひしに共儀にも不任王子を生捕れ我等もか

く囚人に成し事生々無々迄も口惜き次第哉Sきて

二度龍顔に對せし事何の面目か有へき貴て死

ちば加様にかなしき目には逢間敷を警固稠敷自

害もならす力に任せぬ憂世かなとなきかなしむ

時王子をはしめ清正もせるとうす申分 至極せり

と及落涙

クソ

京畿道忠清道慶尚道全羅道此!四道武者大

ジャ

グシャグ

首を地につけ涙をなかし愁す暫有て首を砂にき

つくうちつくるゆへひたひより血なかれ出る清正

後藤を以自害すべきと存る哉と尋らる涙をおさ

へ申は我は其昔小身なる者なりしを此王子の御父

御目利を以國を下し給わり武官をさつけ都より南

乗風にはなされせS州へ着二十年彼所に居住する

によつておらんかい口をも朝鮮口をも日本口をも

自由につかびよき通詞ゆへ清正重寶せられ則二郎

と名づけあなたこなたへ案内者を申付られしせい

州より天氣能時は日本の富士山見ゆる彼所より富

士山は未申にあたれり松前よりは北也せい州にも

に

砲をはなち懸れはせるとうすも鐵砲を打せけれ共

中(おかしき鐵砲にて思ふよふにあたら清正

下知をなし塀を二三間ふみやふり押込けれは相叶

はすいんきんの前にげんとせしを小代下總い

申に付所の者に案内を申付先へ押立せるとうす屋

敷構へに着陣しいかるか平治井上大九郎小代下

この三人に鐵砲二百挺相添せるとうす屋敷構の

さいんきんと云所へ差向清正自身は百挺の鐵砲を

先へ押立侍分に鍵を持せ二百人歩にて連殘勢は

いんきむの二方を取まかせ一度に鬨を作

か平治井上大九郎おろしあわせせるとうすを生捕

せるとうす將軍年五十四なりせいは六尺五寸有之

かすおひけにて大の男なり此所にて後藤といふ通

詞を一人生捕此後藤と云者日本松前の者

昆布にて家の屋根をふき人民居住すおらんかS高

麗の事は是迄なり清正被申しはおらんかいにて合

戰に勝利を得都は放火しつせるとうす將軍はとら

へつ最早思ひ置事なし王子をこめ置し鏡の城へ歸

陣すへしとて後藤に尋られしは是より鏡城へは最

前押諾し如く行なり又近道はなきやと尋られ

は鏡城へは是より五日路なり最前の道は九日路な

り近道をよく存知たりと申に付せS州より三里跡

へ戻り横道に歸陣せられしに河向のおらんかい

内に家五百斗りも有と見へレ在家に三百人程取出

其中より三人清正を招き尻をまくりたいき笑ふ淇

清正ひかりをなしにくさやつはらの仕形なり鐵

砲を放懸よと下知有て一度に鐵砲をつるべ放に

かくるといへとも程遠故あたらす清正後藤に被申

しは此河の渡り瀬はなきかと尋れしに即此一町下

渡瀬と申に付惣軍勢打入向へ渡りあかると見て悉

く逊込一人も不居後藤を以て彼所の者へ云やりし

は此おらんか と云國は日本にて夢々知らざる國

なり朝鮮にて初而名を聞けり北國は弓の上手武勇

*達したりと閉しゆへ日本の弓矢の風を見せん爲

<

清正記巻二

弓五千挺程持せ押立太鼓を打弓を射かけ

のなく様成聲をたて懸り来る清正被申しはほいれ

く人はかまふまし惣軍勢眞丸に三段に備敵に取

わざる様に乗廻し自身ばれんを振り時分は能だか

かれ頭は取まし鑓を入よくと下知せられしかは

詞の下より和田備中井上大九郎大木土佐一番と名

乗鐵砲放つと同じく鎗を入しかはおらんか5人追

立られ一度にとつと敗北す然りといへとも敵は大

軍也後陣の軍勢人替ちんとせしに頃は九月十二日

寒國の事なれは山上よりあられ交りの雨降り山

下へふきかくれは叶ひかたくや思ひけん敵軍段々

にくりひきに退散す清正被申しは我山上に陣取し

にてしたふといふ事有へしや後勢もつしかす一旦

のいきほひ迄にて押詰日本の弓矢の風を見せん爲

なり追討も無用なり只放火すへし一番に内裏へ火

を懸方々手を 矢を射かけ燒立一塵の煙と

へ上る清正軍兵共に觸られけれは兀良哈の都放水

をし此利にのり朝鮮國の地へ陣すへしとおらん

かひより五里引取り山陣を描らる所におらんか

い人三万餘清正陣所へ寄かくる彼國の軍法と見へ

二七

故今日の急を逧れしぞつけなしたふなと觸廻し

兀良哈人の死骸をかそへけれは九百七十三人討取

味方討死侍九人雑兵七十九人夜は野陣を張りか

かりを焼翌日朝鮮國へ陣せんと用意せし所にお

らんかS人一萬程にて太鼓を打弓を射懸一文字

にかける由遠見の者所より及注進清正備を立今

日のしつはらSは大事なり某しつはらいしてのく

へしと二百挺の鐵砲を備へ左右に歩行立の侍二百

人に鎗を持せおりしかせしづかにくり引にひかせ

らるおらんかいの先將れんめんと云者清正の出

立を見て半弓六七百挺段々に押立矢をはなつ清正

少もさはかす敵の間三十間程間近く引寄せ百挺つ

鐵砲をはたせ時分は好鎗を入ょくと下知

せられける阿波伊兵衛出田宮内森本儀太夫一番と

名乘とつと突入しかはおらんかS人追立られ一度

にとっと敗北す亂立たる大軍ゆへ東西南北へ迯散

る清正是を幸ひと朝鮮の内せくと云所迄歸陣し

きせくに十日滞留し人馬の足を休め軍功の者に感

狀を遣しきせくより五日東へ行せいしうと云所に

着陣す此所にせるとうす將軍人数を集め居住の由

夜不慮に口論す子細は清正申るいは明日ゑんたん

の城にて一番は誰たるへしと被申けれは儀太夫は

誰々と候共某可仕旨申孫兵衛申けるは御前に人も

なきやうに物申うつけ者と申兩人既に打栄さん

としける清正中へ入られさすが武士共哉今夜の

命それがしにくれられ明日の事に仕へしとあれは

入と申兩人共に我陣屋へ帰る儀太夫は罷踊ると

食をしに兵を調夜の内にゑんたんの城へ押

詰居たり夜明がたに孫兵衛も諸人に先立おし詰た

儀太夫申けるは今来るほれ者は孫兵衛か返答に

尤なり互に可仕と申儀太夫ことばの下よりゑんた

んの城大手の悪入おらんか5人と組合けるか終に

首を取孫兵衛も續てかけ廻りしが大の男せ 八尺

も有やらんと見へし者と組合しが終におらんかい

人の鈎につかれ討死すおらんかい人七百三十討死

待七人雑兵廿七人落城の後右の段々儀太夫申上し

かば清止落涙有てさすが儀太夫なり孫兵衛不便の

次第なりとて儀太夫に五百石の加恩有孫兵衛は子

もなき者なれは兄弟なり共あらは尋へしと有之歸

の後弟を呼出し孫兵衛跡式を下行さられける

庄林出つけ申さんと申けれは清正返答に小人數

は微弱いの習則帝王内墓をあけのかる

一清正はゑんたんの城乗崩し其夜は河上に野陣を張

惣軍勢へ觸られしはおらんかいの都程遠し定而夜

討を仕かくへし少も油断間敷と手かたく觸廻さ

けるに案の如く共夜時分おらんかい人三千程

取懸候此方にも りをたき鐵砲を段々に備油断

なき所へおらんかい人太鼓を打弓を射かけ候に

付て三宅角左衛門坂川忠兵衛小關平助赤星太郎兵

衛つゐて出鐵砲をうたせ相戦に付て二百三十一人

討捕おらんかい人は朝鮮よりはすくやかなると

は申せ 共中々日本勢の戰ひとは三分一にも不及

と見へたり扨清正下知せられしは人数の多少に敵

に見すかされては成まに追付此方より逆寄にせん

とて清正打立夜中に二三里程押詰明日早天におら

んかSの都へ着陣し山上よりおらんかいの都を見

くたせは日本の都ニッ程も有やらんと見へし中

中おびたし清正下知に五百挺の鐵砲を山上よ

揃へ打大貝を吹立曳聲を揚べしとの事なれ

は軍勢いきはひ大鐵砲を打貝を吹ときをとつとあ

清正記卷二

加藤主計頭殿

十一月十四日御朱印

七月廿五日之書狀被加御披見候高麗國王子兄弟

並官人等二百餘人生捕之山無油斷故と被思召

候都立六十八日炎天を相凌押詰事可爲武門棟

梁おらんかい國へ罷越殿下之御弓矢之風儀見せ

可申之由無越度樣に可申付候仍爲褒美吉光之脇

差並黃金五百兩遣L候歸朝之上一稜領知方可被

爲拜領候猶淺野長束可申也

淺野彈正少弼殿

右之飛脚名古屋に到着す折節秀吉公御前には家康

公利家卿其外満座して歴々被申上候處へ右注進狀

彈正被差上秀吉公被成御披見御手をうたれ何も此

狀見られ候へ朝鮮國王子を主計生捕れるとの書狀

なり扨も(手柄此上有ましと被仰家康公利家卿

被申上しはさする御先を被仰付たる者程御座候趣

申上らる、太閤一入御機嫌よろしく御感狀を被下

候書にSはく

七月廿五日

加藤主計頭清止

預御披露候恐惶謹言

一清正はおらんかいの様子をはいれく人に通詞を以

尋らるゝにおらんかSと申は弓の上手にて心もか

くしゃ國の由申清正手を打日本人の弓矢の風

をおらんかい人に見せむ道は如何程有や従是四里

半程行は在家あり夫より一里ゆけは城あり猶一日

ゆき候へはおらんかいの都の由申さらははいれく

の者案内を可仕彼所へ押寄すへし味方打なしる

しにはほれく人五百にひつれも南無妙法蓮華經

の文字を書笠につけさせ先へ押立おらんかひの内

ゑんたんと云城に押詰人馬のひきを入明日早天に

ゑんたんの城へ押寄ときをとつとつくりかけ鐵砲

を放しかく異國のならい前は堅國にかこふといへ

どもうしろは深山高石垣をたのみ防體無之に付て

ほいく人に日本勢を交へ前へ押詰満正は勢六

百にてうしろの山へあかり五十人三十人持の石を

かな手にてうちによつて大将おんてん不相叶

退散し城を明渡し降人に出る愛に森本儀太夫太田

孫兵衛と云者おらんかいへ取懸るへきとの評定の

二五

秀吉公御前之様子は淺野彈正方より申るに

書也

都よりの流罪人を置まわりの野をひらき栗びへ

を作り渡世を送り候然處に其城に有之代々流罪人

一味して王子は我々爲には敵なり此時王子をたは

かり日本人に渡し日本の欝憤を散し我々榮花にはこらんとはかり悉住所へ呼入奉る王子御兄弟兄をはSもはS君と申御舎弟はしゆの君と申左大臣をは~くんと云右大臣をはんしんそうと云月郷雲客十二人の后々の女官迄以上二百餘人籠置清正へ金官を以及注進清正夜もすから惣軍兵へ觸られしは明日段々の備にも不搆一騎かけにほひれくさして来るべしと觸廻し夜も明かたに成けれ清正秘臓のはね月毛とてくつ入ずの馬に乗眞先かけて掛られけり一二旗本の軍勢入亂れ思ひくに懸寄る清正金太夫を呼書を書せ王子を渡すへしとの事をひいやられけれは城中より返答に王子をとらへ置城中の者共一々安堵の領知を下行し給ふにおるては城中にて渡すへしと申越清正兎も角も申とくすへしといいやられけれは城中の者共喜悦して門をひらく清正ともに侍四十五人入城す流罪人はもとより内通の事なれは手向にも不及王子の供を勤め

二百人の共生害にあると心得て弓に矢を

はけ一度にはなさんとす清正巾着より印判を取出

しおして渡さるそこにて弓を持たる者共例を

て一度に弓を捨つ異國人は難儀に及び命を助る

時印判をみさる内は誠にせず内々清正も此儀を聞

おかれける武道に達せし心なるにより早く出合急

難をのかれられける王子御兄弟官人共に不満止

請鏡城にこめ置随分馳走をなし奉るへき旨田寺

久太夫前野助兵衛と云者に人數千相添王子の番を

申付步の侍の内に辯舌者なる者を五人撰み出し飛

脚に申付淺野彈正所にて及注進狀にSはく

謹而致言上候去五月十六日都を立ゑあん道東

寅をさして六十八日押詰王子御兄弟並官人都

合二百餘人生捕申候帝王大明國へ御退出之由王

子被仰候二六時中帝王を生捕可申と心懸候に付

て意に叶御威光を以如此御座候朝鮮國微弱之

國故今迄一戰不仕候因仰にては無御座候得共

おらんかひ程遠く候間彼表へ罷越日本 太閤様

の弓矢之風儀見せ可申と存明日發向仕彌可抽忠

戰候王子官人等之書付別紙に差上候右之旨宜

清正卽巻二

一加藤小西鮮國都へ押詰諸勢を可待と評定し逗留

の内に秀吉公御名代宇喜多宰相秀並石田治部少

輔増田右衛門尉大谷刑部少輔其外日本勢陣す加

藤小西秀家へ参候し帝王とらへ可申人数の手分を

伺被申秀家並三奉行衆波申は高麗帝王を生捕手段

れは道筋手分可仕と相定めらるいへいあんとう

へは小西攝津守一手はんはS道えは黒田甲斐守一

手かせんほへは小早川左衛門一手ゑあん道へは加

藤主計頭一手かあん道へは毛利壹岐守一手其外日

本勢釜山浦と都迄の間つたひ~の城へ籠被置主

計頭はゑぁん道東丑寅をさして押寄る都を出

て十三日にゑん道のさし口あんへんと云所に着

陣し彼所にて鍋島を待合として十日滞留し五月十

六日清正も鍋島も諸勢共にあんへひを立三日ゆき

長橋と云所に着陣す然所に金官と朝鮮人高札を立

置意趣は帝杏眼は大明國へ御退出王子御兄弟共

加藤主計頭殿

帝王とらへ可申之由気味よく思召候彌無油斷

可抽戰切候猶淺野彈正少弼木下半助可申也

五月朔日 御 朱印

11:1

に是より奥へ御通り有由委細に書す清正美濃部金

太夫と云者によませ喜悦をなし王子をとらへ可申

とていきほひゑみをふくまれしに鍋島被申けるは

異國のならS加様に遠路せつ所へおもむき込此方

の者迄たやすく討取候はんとのてたて成へし誠ぞ

御心得有て進過しなば不覺御取有べし第一我等

者共は都より十六日路此天に大難のせつ所を押

候得ば草臥無十方當所は米大豆澤山成所なり逗留

有て都へ御注進候か左右次第都へ御引取可然の由
被申清正返答に札を朝鮮人の立たるは加州は如
何被存候哉全く共儀にあらず天照大神宮八幡宮の
御立被成たるなり神意にまかせ追詰王子を生捕可
申加州は愛に御待候へと金官を先へ押立清正手勢
八千先へと押詰長橋より明ても暮ても東丑寅
をさして押程に都を立て六十八日鍋島にわかれて
五十二日と申におらんかいの境なるほひれくと云
所に着陣す王子はほいくの城に入置此はひく
と云所は日本にては八丈ヶ島いわうの島などの様
成流罪人の居所なり朝鮮國の内なり三里四方の野
有り其中に由有を石垣をつき城のやうに家を作り
島相良令同道廣野にて及參會小西被申しは從是都
へ兩道有東大門口は南大門口より十里遠し南大門
口は十里近しされ共大河有之主計闘収をし共上に
て可相定と被申返答に某南大門口へ参るべしと被
申行長立腹し我儘の仕 形なり J被申清正あさ笑ひ

て天草にて一揆にたてられ 事は今に覺へずやと
詞をはなつて被申ければ愛にて天草入べきやと行
長刀に手をかけられければ清正被申しは小西おか
しき様子かな其きせいを何として天草にて出ささ
るやと笑互に言葉高に成りければ鍋島中へ入ら
れみち如斯の儀日本秀吉公の御外聞をうしな
ひ愛にて御討果あらば秀吉公かほどの思召立無に
成べしと種々被申ければ雨入尤なりと和睦し南大
門口へ清正一手の衆出し候なり都への案内者を對
馬守所へ被申遣ければ徳右衛門と通詞ひまた都
へも行たる事などもり一人差越對馬守と小西は
縦者へにかくのとし小西は主計過言を無念に思
ひ木戸佐右衛門日比左近右衛門兩人に申付若者共
召主計かおしへ行道筋の船悉く切流すべしと申
付らるゝによりて作右衛門自身の大河のを殘

らず切流し心よけにわき道して小西か陳所え歸る

此儀主計頭夢にも知らず三月十九日ちく州を立都

へ~と出されける清正先手加藤清兵衛庄林隼人

方より巾三町に及大河有船一般もなし依之可渡

越便もなしと注進致すによつて清正自身ゆき見廻

若き者共百人程およかせ向に有之船を不殘の

こし左のみ手間不入及渡船百人の若者の中に曽

孫六いかにも河を自由に得たれば諸人に向てか

うそ若者はあるべけれと褒美し刀一腰下されける

一加藤主計頭一手大河を越都へと急程に清正先

加藤清兵衛庄林隼人所より注進を申るは是よ

辰己の方に向て家數夥敷道路も都たるべきと申

寅の方遠山に小西の旗相見へ候條早々都への一

番入可然旨申越正返事に兩人申越處Sはれなし

都と見るにおるてはおし詰放火せよとの事なれば

則押詰火矢をかけ一座の煙とやきたつるとSへ

ども朝鮮帝王は十日以前退出有て敵壹人もなき放

に不及合戰共旨及注進則御朱印被下書には~

四月十一日之書狀及 上覽候都一番入放火候得

共帝王退散軍士一人も無之故不及一戰之由近日

法正記雹二

右之軍書の利吉村左近と云者に清正相傳なり左近

予か愚父に相傳この故に予不殘相体するものなり

此利を得ては家る者は一郡を掌にし一郡をもつ

者は一國を治め國ある者は我か心まいにする所也

一三月朔日小西攝津守一手の衆出船加藤主計頭は肥

前名古屋御城の縄張等見廻り能に沙汰し高麗山へ

可參との儀えるによつて二日おそく出船小西行長

一手の衆釜山浦へあかり放火 主計おそしと待し

所に主計頭釜山浦へ着陣し小西對談して釜山浦よ

り都への道二筋ありやくさん海道へは小西とくね

き海道へは加藤人數をおさせらる釜山浦より十

三里おくけくしうと云所へ着陣し則放火し一千百

五十人討とり朝鮮人はもとよりよはやらん不

及一戰清正むさんの次第なりとて一笑し此段言上

一あらなはと云事

一山海と云事

一かつらと云事

一破磨虎と云事

一つちと云事

一一と云事

一けくしうよりちく州と云所に着陣し所の者生
より先へ日本人とおりつるやと相尋ければ一人も
不通由申に付てちく州に二日逗留有處へ小西一手
の衆亂妨をいたし布もめんの類を大分取牛馬につ
け来るに付て路次のはかゆかず清正行長に面し
被申けるは都へ上着におるては巻物の類みちく
たるべしか様のものは何の役に立へきぞ愛にて合
放火身をかろくせては如何と被申ければ行長尤と
同して蹴妨の物とも悉く放捨す行長清正へ申こさ
しは明日忠州の廣野に可愛會忠州より都へ兩道
あり鬮取つて可發向のよし申怒るに付て主計鍋
加藤主計頭殿
四月廿九日 御朱印
三月七日之書狀被加 上覽候けくしうに至て合
放火一千百五十討取之由神妙候朝鮮國微弱之國

たるによつて不及一戰之由書通之通高麗國御手

に入事程有間敷候誠心地よく思召候彌可被入精

事專一に候淺野可申者也

とて庄林喜右衛門と云者使に申付委細申上しかば

御朱印を被成下共書にSはく

是はもろこしの事

秀吉

大公望 周武王

づく

なんぢ大將の機有によつて今高麗國の先とし

て遣すかるがゆへに兵法廿五ヶ條之而是をさ

右之條々若於違犯輩有之は忽可被處嚴科者也

天正廿年正月 御朱印

一秀吉公清正に下し給ふ軍書に日

一薪ぬかわらごうし以下亭主に可取之事

一於陣中取火を出す族於有之は芸者をからめ取可

出之自然令逐電ば其主人可爲曲意事

一軍勢於味方地亂妨狼藉輩可爲一錢切事

定

天正廿年正月 御朱印

治之條々堅合停止之訖若違犯之於有之は可處

嚴科者也

一對地下百姓等非分之儀申懸事

一放火事

一軍勢甲乙人等亂妨藉事

肥後文獻叢書第二卷

110

一きりんと云事

一とかけと云事

一舟軍と云事

一太見と云事

一先後と云事

一紅葉と云事

一各別と云事

ISなつまと云事

一手の内と云事

一割と云事

一天地の目と云事

一息と云事

一夏草と云事

一一より十の足手形と云事

一大に飛弾小にトと云事

一松朴と云事

一兵と事

一武と云事

一と云事

是は日本の事也

清正記巻一 1

清正記巻一

一北條氏政御誅伐有之會津迄御動座御蹄陣に及主計

頭可能登之旨奉書到来に付清正は熊本を立大阪着

三州岡崎迄御迎に被罷出刻主計頭を被召出今度關

東奥州迄悉く御手に入御武勇の由々敷事共御語被

成候處主計頭御請に御武勇天の下を掌の内に被成

御治、御歸陣有に尾州中村は御在所そかしあわれ

御一宿被遊候は日本の外聞にて候と所の者共願

申と被申上しかは秀吉公も御機嫌宜しく能を申上

候御一宿可被成之旨被仰出主計頭内用意として中

村へ黄金を遣し置しかは孤垣杉垣只一日に結構し

秀吉公御満足大形ならす道すから主計頭を御駕

の右に召御のSさつ申上られしかは岡崎より中村

迄里の所を歩行にて供奉し扨中村御一宿遊ばし

在所の者に永代千石の領知を下し給ふ

加藤主計頭殿

七月十二日 御朱印

可申也

座候頓∀可有御鯖陣之餘可逐參上候独山内橋内|清 正記 巻 二

一九

高麗國

禁制

いわく

一天正二十年正月五日秀吉公高麗國爲征伐人數を被

差渡先手一日替に可仕加藤主計頭清正に鍋島加賀

守相良宮内少輔を差添一手と定め小西攝津守行長

宗對馬守松浦法印有馬修理太夫大村新八郎宇久

大和守を相添一手と定加藤小西を被名出加藤には

高麗にての制札幷軍書一巻に南無妙法蓮華経の

御旗を下し玉此御旗は秀吉公播磨國拝領の時信

長公よりゆるし給ふ吉例に任せ下し給わり小西に

は制札幷軍書一巻に日本無双の大黒の馬を下し

主計頭秀吉公へ被申上しは朝鮮國にて此御籏を

以て猛威を振御蔭にて高名を異國に顯さん事死

しても難謝と申上退出す次の間にて攝津守

しは御邊の旗は如何様に可仕候哉小西返事に

の袋に朱の丸附て可仕とひすて互に退出して大

阪出船有て至熊本歸城秀吉公より下し給ふ制札に

古橋左衛門藤原又玄集記

去月六日之書狀十三日被成御披見候仍小田原之

儀彌丈夫に仕寄等被仰付候依之城中難堪缺落之

輩雖有之於其場被 候又は被返候間上

下千殺にせらる」を を相待候迄に候昨夜和田家來

之者百餘家康へ相斷小屋に火をかけ走出候雖

被成誅伐候兼て心合候山候條被助置之候次東

州之儀城々悉く相渡候其内岩付之鉢形八王寺忍

付井何も命を被相助候様にと北條安房守御詫言

申上候得共不被聞入右之内武州岩付は北條十郎

城に付八州にて要害堅固之趣被々聞召可然所

り先可責干被仰遣則木村常陸介淺野彈正少弼山

崎岡本家康内本多鳥居平岩巳下二萬餘岩付へ押

寄即時に外構とも乗破千餘討取之本城一之門へ

相付候然は城中可然者大略討死候て殘は町人百

加藤主計頭殿

五月十三日 御朱印

内一人成り共手負死人有之候は如何と被加御思

惟則取塀欄を堀土居等夫に被仰付並海上

警固船數千艘浮置候仍之城中鳥の通ひも無之様

に候可被干殺候間小田原落居一途條可被爲御座

居御覺悟に候増田右衛門尉可申候也

肥後文獻叢占第二巻

急度被仰遣候昨日北條氏政同陸奥守刎首即刻京

都へ差上之候氏直事は家康依爲緣者助一命候然

は奧州出羽御置目被仰付来る十七日會津被移御

加藤主計頭殿

六月七日 御朱印

姓其外妻子之類迄候十郎以小田原に有之候間命

之儀被爲助候樣にと申上候條城請取儀被仰遣候

十郎妻子を始悉く被召籠置候殘死候長は同

前に候八州城之小田原に籠城之者妻子共何も右

之分に候其趣小田原へ相聞彌排儀無正體之旨

缺落之者申候安房守儀不打置被成御助候樣にと

歎申候既鉢形へは越後宰相中將加賀宰相淺野木

村を始五萬餘被差向候忍城えは石田治部少輔佐

竹宇都宮結城多賀谷水谷天德寺被相添二萬餘わ

以可被取巻旨雖被仰出候眼に仕候岩付の城被加

御成敗は命斗相助城可請取被仰出候奧雨國の面

々不殘叄陣候其内伊達參上候彼手前之儀此頃抑

領之地返上可仕趣堅被仰出御請申候彌相究

成御對面候將父韮山之儀端城五ッ執之候日々夜

々仕寄無油斷被仰付候間落居不可有程候猶山中

橘内可申者也

請正記卷】

去月廿一日之書狀幷唐織之袴立付今月十二日於

相州小田原到來遠路喜悅思候仍此表之儀先書

に如被仰遣候山中の城專相拵丈夫に覺悟人數

四五千人入置候處去月廿九日中納言被仰付候得

加藤主計頭殿

之箱根足柄外所々出城十所退

散候條附入に小田原へ押寄五町十町取卷一方海

手警固船を寄詰三方多人數を以取廻則堀土手塀

以下被仰付候北條首可刎事不可有幾程候尚様

子は不可有氣遣候次に韮山儀も付城堀塀柵出

候是又可被干殺候委細長大戕太夫可申者也

四月八日 & 御朱印

ニラ

此節之樣子爲可開飛脚付置候由尤悅被思召候

先書如被仰遣候去月廿七日より至三枚橋被成御

加藤主計頭殿

數候然は明朔日箱根山峠へ爲陣取至小田原表手

遣候條落居不可有程候猶追々吉左右可申聞也

三月十九日 御朱印

着陣翌日山中菲山體被成御覽廿九日山中城中納

言被仰付即時に被崩城主松田兵太夫を始め千

餘被討捕候仍爲端陽祝儀生絹帷子五幷帶二筋遠路到來悅被思

召候仍關八州諸城共或は崩或は明渡し悉く被

任御存分出羽奧州迄一簾相濟候北條一類小田原

一城取籠候條早速乗崩し雖可刎北條首御人數之

一十

加藤主計頭殿

卯月十二日 御朱印

は崩始城+松田兵衞太夫士卒悉詩捕之則付

入にひたし小田原二町三町取堀を掘塀棚を相

附け二重三重に取籠諸卒番所陣屋等無透間町作

に被仰付海上之儀は警固數千艘浮城鳥の通

も無之付而城中無正體去る八日夜も下野川
山城守侍以下百餘人引具走入命を助ヶ候様とな
御詫言申上候是は先年御馬太刀をも被納候者
之儀に候間無是非被成御助家康へ被道候此以後
縦北條刎首候而持來り候共一人も御助ヶ有間
敷と被思召候關東八州の物主共不殘相籠一城に
て關東一籏に被討果事に候落居雖不可有程候長
陣被成城内之奴原悉く干殺に被仰付出羽奥州日
本の果迄相改仕置等堅く可被仰付候繒淺野彈正
少弼可申也

あり庄林隼人二ヶ所手を負互に相戰ふ敵三十一人
討捕清正より行長其外四頭衆へ使を遣し明廿五日
辰の刻に此城を乗取へしと有家中別而可抽粉骨と
總軍兵召寄清正立廻られしは人は一代名は末代天
晴武士の心哉と三返押かへしく大手を打て廻ら
れ酒を軍兵共へしゐられける明朝敵を討取可申事
手の内にありとひきはひ下知を待し處に清正撞模

にあかりて貝を吹立かれくと下知せらる一番

柏原左馬介森本儀太夫鳩平治奥田九右衛門飯田覺

兵衛新美藤藏久保田吉藏久保吉右衛門太田半左衛

門榊治右衛門有賀太郎助齋藤與三右衛門木村又藏

塀へひたしと乗上らんとせしを左馬介は内より

鏡にて突倒す其外の者とも鐵を打せ乗入れはつ

つねて清正も乘込るれははや二の丸は乗取ぬ清正

下知して云く此いきほひをぬかるへからす直に本

丸を乗収へしと曳聲をあけられけれは詞の下より

小關半助赤星太郎兵衛齋藤傳右衛門加藤清兵衛加

藤與左衛門加藤傳藏乗込を見て敵ふせき戦とへ

-も不相叶一人も渡さす落城す清正の手へ討捕首

數七百三十餘清正手の者共討死の侍百廿九人雜兵

共に五百七人なり城主天草伊豆守妻子共に差殺し

肥後文獻叢書第二巻

而染筆候中納言山中城入今廿九日取則午

乘崩城主之事は不申及首千餘討捕其外追討不知

一秀吉公關東小田原之北條左京太夫氏政父子御誅伐

として御進發の刻清正へ御朱印六通を下し玉ふ書

に日

加藤主計頭殿

十二月 御朱印

天草伊豆守居所本渡の城去月十九日乗崩し一人

も不殘首七百三拾餘討捕之清正手前無比類段書

中被加上覽候粉骨之至り候無越度殘黨成敗之

儀小西攝津守相談可申付候猶淺野彈正少弼可申

也

切腹して十一月廿五日落居せしめ柏原左馬助と

芸者は十六の時より清正の側にて念頃に勤仕する

に仍て川尻より出船難成人數を三隅より押渡り

人数をつれてし候へとの事なれは左馬介志岐下城

の翌日到着し合戰にあわさる事を無念に思ひ清正

常々念頃の芳恩を志岐にて謝せさりし事を口惜と

云しかはたして討死したりむさん成し事共なり右

之段々秀吉公へ言上有しかば御感状の御朱印を下

し給ふ書にSはく

書狀被加御披見候志岐城爲成敗小西働に付て人

數相添遣し自身又渡海の旨尤候然る後詰として

に日

愛に此合戦に義死を勤たりしは伊藤次郎右衛

門と云者なり岡田善右衛門に仕へしか生國尾張の

國の者にて清正も存知の者なりしが善右衛門八千

石い身の上にて八百石遣したり清正も二百石宛

行しか善右衛門痛手を蒙りたるを甥の小兵衛に相

渡し清正鍵を自身入玉ふ日來の報謝すべしとて敵

をふせきに討死したりける天晴義士哉と清正も

おしみ給扨木山弾正か首を始め四百六十の首を

志岐の濱へ梟けれは林専も内々和平の便りを申立

清正へ使を立城を渡し可申條能々頼み申と被申し

かは下城有へしと小西相談して城を行長請取林專
は下城に及び志岐表へ小西人數を加勢其身も渡
海して粉骨を盡し志岐の城落城の旨委細に秀吉公
へ申上られしかば御殿の御朱印二通迄下し給ふ書
味方討死の侍九十一人雑共二百七十九人天正十
七年十一月五日辰の上刻より午下刻迄の合戦なり
行長は清正一戰無心して手勢二百斗りにて出ら
れしか清正猛威を振れる勝利を見て本陣に引退れ
頭衆請取廿一日より廿四日迄竹抱を以て晝夜の隔
てなく責寄るに仍而廿四日の晩堀際二三間迄清正
人數押寄互に鎧炮矢軍始り清正家來瀧野讃岐名手
長左衛門下村庄助場を去らす討死す其外手負數人
一五
加藤主計頭殿
一志岐の城より五里奥にほんど、云城あり此城も可
貴と十一月廿日清正行長有馬五島大村平戸勢一つ
になりて押寄たりほんとの城と申は三方險しき難

所なり一方は山へきたる所を大事に思ひ堀を

り塀柵を築二方は清正請取一方は小西一方は四

志岐之城落去之様子言上其方儀碎方無比類之由

被聞召屑候無油断條尤に思召候次天草表之儀是

又無越度様可申付候狩淺野彈正弼可申候也

十二月五日 御朱印

加藤主計頭殿

天草出候處共方手前おるて追崩悉く切捨の由手

柄比類なく候遠路不及差上候重而志岐天草物主

共申付次第彼首共可持上候猶以及行之儀涯分惜

手無越様に小西攝津守可相談候侮候而卒爾の

働不可仕候猶淺野彈正少弼増田右衛門尉可申也

十一月廿一日 御朱印

度目には敗罩す清正三十人計りの一揆の中へ十

文字の鍵を以て四方八面にひ玉へは二人かけ倒

さる庄林森本も敵一人宛つき伏せいきおもせずし

共

林隼人森本儀太夫柏原藤五郎池田甚四郎和田竹

丸弓持の水谷安之助馬印持善吉草履取乙若大吉ひけ大工甚七なり清正下知に日先勢敗軍の躰なり愛にて追返して討捕とSさみ身をもみ給ふ所に一番逃訣る者は沼藤小作田中小兵衛村尾宗伯南部無右衛門なり清正立腹し無右衛門にてはなきかかせ辰の上刻に一番備へ三千本道筋を押くる二番備は左の尾崎を押あくる清正籏本の者に被申しは先手無心許自然一番敗軍せば旗本の勢は横筋遊びに鏡を入へしと云置自身は十騎計にて一番備へに無込押上る案のとく彈正三百挺の弓に射立られ一番備へ悉く敗軍し登りも立得す清正林隼人を使として觸られしは清正にあり棧敷の前の軍な病心なくして押あがれと下知なれ共亂れ立たる敗軍勢なれは耳にも不入散亂す清正傍にある者

との給へは岡田善右衛門痛手を負て家來の伊藤次郎右衛門引退けんとせしに敵三十人にて追立

來りしをつき拂ひく二度まで鑓を入ると

三矢に當り討死す清正難儀に及び給を本勢見付

横合にとつと突ている一番飯田覺兵衛新見藤藏松

下清城奧田九右衛門鑓を入いて佐々木平左衛門

近藤四郎右衛門齋藤立本山内甚三郎堤權右衛門舞

野助兵衛横に突て悪れは一揆の者共悉く笑崩さ

れ敗北す敵數四百六十三討捕清正終に勝利を得玉

彈正心得たりと弓を捨清正おつ取彈正高も、

をかけ落しなけ給へば谷間にころび落床林森本彈

正一勢の者について懸れは彈正討死の上はその勢

ひに追立られ敗軍す猶も清正床林森本は敗軍の者

共もり返さんと敵の中へ割込鑓を入相戰此時清正

十文字の鑓片方折てかたかまに成る然に阿波の

鳴戸と云者武者執行をして小西を頼み有けるか主

計頭彈正を突倒しはねられける首を紛れと名頭懸

て清正の側に来る清正返答に鳴戸共覺へぬ者哉主

計相打也とこそ云者なりよつてとれとSかられけ

鳴戸彈正か首を取り立上ちんとせし處に流れ

て相戰ふ所に左右五六人召弓を持清正の馬印

のばれんを見て御大将にてはなきか木山弾正な

一矢参らせんと云清正返答に主計頭なり大将の出

合に飛つるき可入哉太刀打せん~十文字の鍵を捨

を打懸迎に出たる侍共打倒し心能に押上り大手の一

門の向なるはけやまに陣を取小西陣所へ参り城責

の評議をなす小西人數手薄し人数を加勢申さんと

齋藤立本藤野助兵衛堤權右衛門を大将として千

五百人相加然處に志岐の城爲後詰天草伊豆守兩所

より木山弾正と云者を頭として弓三百挺歩立の侍

武百都合五百にて清正陣所のかさ山に陣を取から

ちの浦より天草主水と云者七百人にて小西陣所

下城においては秀吉公へ申能に計へき由文狀

を調被差越に付有馬其狀を城中へ送り届けるによ

大形和睦せんと林専内存ありしか共未返答無之

に付而惣軍勢晝夜の境もなく竹抱を以て押寄る

一加藤主計頭は乗而より小西攝津守行長手勢斗にて

は一揆退治する事成しと軍勢を集め手勢一萬熊

本より川尻と云所迄五十町川尻にて惣軍兵船に乗

十月十九日川尻を乗出し寺田篠助と云者林尊へ使

に申付小船を先へ押出す篠助は志岐の湊へ船をつ

け口上には主計頭扱に罷越候條可然様に相計可申

との儀を云遣しけれは城中よりも内々小西和平の

事は云懸しかは喜悦をなし迎として侍十人程濱際

迄出向人主計頭には直に志岐の湊へ船をつけ

1m

ひぃの尾かさ山に陣を取城中へ申けるは明朝切
出るへく然るおゐては三方より押包み加藤小西
を討取ん事案の内なりと示とへとも城中にも小
西謀略を被仕により謀叛人繁多有について林専不
任淇儀仍之主水ははか敷事有まし迚かうちの
浦へ引戻し籠城の用意して歸陣木山彈正は天草を
出し時一戰せすんは歸陣すましきと誓文を立し事
をむねにおさめ是非主計頭と一戰と定め清正の陣
所の上山に陣を取清正行長へ使者を以被申しは弾
正は我と一戰を定めたる貴殿は城を堅固に可
被取巻我等彈正を討はたさんと申遣して侍定めあ
一番岡田善右衛門山岡肥前加藤傳臓小口奥三右
衛門南部無右衛門近藤四郎右衛門天野助左衛門を
頭とし都合三千先手と定め明朝辰の一天に押上る
し二番加藤清兵衛片岡左馬介七尾安右衛門加藤

與左衛門を頭として三千三番には旗本と相定ちる
一番の者共爲暇乞清正本陣へ參上す清正被申しは
明朝は清正も一番に押入上るへし棧敷の前のは
れ軍一入可精出と被申南部無右衛門罷出申は高山
の石は崩れ懸るとも此無右衛門におみてはと申扨
何れも酒を下され退出す夜の内より段々に備をし
いや自身下知をなしふみつぶし國中の者共に目を
さまさせんと思ひ鐵炮五百挺侍貳百騎召つれ小森
の要害に取詰火をかけ鐵炮を放しければ内より突
出戰ひけるがことくく鎧炮にて打倒し將監が
首を受茂助と云者討取る一揆のやつはら悉く退
治および清正鎧に鎧炮二ヶ所あたるといへとも少
しの手疵にて頓て平愈せり軍功を抽る侍七十二
人足輕十人熊本陣有夫々に賞を被宛行畢
一小西攝津守行長領分天草郡の地侍志岐林專天草伊
豆守小西下知に不隨然處に小西は宇土と云所に城
普請等經營す小西家中同前に普請可仕旨志岐天草

へ申遣す兩所返答に先年秀吉公薩摩御進發の刻筑前秋月迄罷出薩摩えの御先手被仰付候は、千臺川へ舟を押込可抽忠勤申上秀吉公御褒美有天草郡を兩人へ永く下し給ふ御朱印頂戴仕る天下の普請諫立の時は行長手に附へし其外行長私普請は難成私式も似合のかき上城をも持手前にも普請繁多の趣申越に仍而攝津守右の旨秀吉公へ申上られしは左様のむつかしきやつはらを小西に討伐すへしと被仰出仍之伊知地文太夫と云者を大将として人數三千天草の内志岐と云所へ差向けの城主林

倒しけれは又助も左のむねのはつれをつき扱れ夫より一戰始り敵の首二十一討收其きほひに城際迄押寄る城主林專二千にて籠り奥天草より鐵炮三百挺爲加勢 むる志津の城と申は南は深山北は侍町へつき里其外は海なり東は深谷底は川な堀際岩なり惣軍勢谷間迄仕寄を作る有馬大村木

唐津勢も志岐の城へ押詰丸山に陣を取林専有
馬は縁者の事なれば小西有馬をして和平を入林専
専種々手段をめくらし文太夫を始め袋の浦と云所
にて一人も不殘討取歸陣するものは頭かり
なり攝津守大きに驚き人数を集め主計頭へ加勢を
乞自身渡海清正より佐々平左衛門古橋又助瀧野讃
岐山内甚三郎大将として千五百小西手勢六千五百
都合八千にて押出し志岐の城の袋の浦へ上
十月十三日より同十八日まで及對陣志岐の城よ
袋の浦迄二十町有然處に城中より散々悪口す京
衆々々なせ鑓せぬかかますのかわのすこりかと歌
に作り笑ふ其時清正加勢の四人こらへ兼千五百の
者共濱邊に付て出る小西人數も押出す小西内木戸
作右衛門一番に鏡を入續て古橋又助鍵を入宮部忠
と云者も又助相つきに戰ひしが忠彌を終につき

付候處一ヶ月をも不相立及錯亂儀曲事思召

候雖然被遣御上使被成御糺明以其上可被仰出と

思召候處御上使をも不相待上段罷在彌曲事に候

大阪へ不及御屈肥後國人被立者共かたへ喧嘩

國

陸奥守事加藤主計頭方へ以御一書如被仰出對

陸奥守家中侍共へ被成下候御朱印日

加藤主計頭殿

後五月十五日御朱印

其方事精を入一稜御用にも可能立と被思召に

付而肥後國領地方一廉被爲成拜領限本在城之儀

被仰付條御法度之旨諸事可申付候就而陸奥守事

以一書如被仰出去十四日腹を被爲切候雖然家中

者之儀は不苦候間其方小西相談其々に見計知行

方念を入遣之爲兩人可召抱置候淺野彈正少弼

戸田民部少輔可申也

十五萬石加藤廿四萬石小西に被下残りは兩人に御

預ヶ被成候條半分宛代官可仕旨被仰加藤には御

知行の御朱印並目録に左文字の御刀被下主計に被

仰付は陸奥守家來の侍共其方小西可召抱旨上意也

御朱印日

殿下數度雖搆逆心不便に被思召助置剩肥後

被仰11

右之御朱印を請取御膜被下入部す主計頭は尾藤が

武具一識船につませ侍人數召抱六月十三日大阪出

船有之豐後國鶴崎へ着す大友より馳走ましく一

日逗留有廿三日鶴崎を立廿七日肥後熊本城陸

守家老の面々より城を請取御朱印を戴せ陸奥守

家來の士三百人召抱さて奥州代に一揆起したる始

終を聞届け領分を廻り其所々にて不屈の地侍等合

誅伐首を梟し平均す處に玉名郡の内に小森と云所

覺

に伯耆左兵衛が家来の者伊津野將監と云者一門家

僕に百三十人餘狼藉を振魍由郡奉行富田主膳より

申上に付誰を遣すべき〜清正思案せられしかいや

陸奥守家中之者

肥後に有之

後五月十五日 御朱印

同前に被懸る付而國中侍百姓等起一揆候間被國

人悉被刎首候然上陸奥守被助置候得者諸國者共

存處如何被思召則去十四日於尼ヶ崎陸奥守腹を

切られ候然は陸奥守家中之者共之儀無其罪事候

間爲眼近隈本に有之加藤主計頭宇土に有之小西

攝津守可致合宿候知行方夫々に入念可相渡之由

被仰出候條可得其意候也

一天正十六年四月朔日尾滕甚右衛門依召大阪へ着佐

佐陸奥守も召に依て四月三日大坂へ着陸奥守所へ

主計頭爲上使被遣御一書を以被仰出候御朱印に日

覺

日都を打出玉同廿五日長門國赤間關御着陣有同
國ときと枝の城に十日御滞留有て方々い人質國中の
御仕置等被成御先勢豊後の國へ着陣す島津中務太
輔不及一戰府内の城を迯散けれは三月十九日豊前
の國馬か嶽着陣ましくかんしゃくの城責干へき
旨被仰出四月朔日落城す依之小熊の城も明け渡す
威風に恐れ筑後肥後の城々明け渡し申に付て夫
に城主を入置玉肥後の國宇土の城主伯耆左兵
も城を渡し申に付主計頭を入置玉島津義久降
參申上るに付て御赦免被成九州の御仕置等被仰付
肥後國一識の守護に佐々陸奥守を被仰付宇土の城
をも陸奥守に主計頭相渡し供奉可仕旨仰によつて
筑前國甲良山迄歩行にて供奉す同國宰府安樂寺の
岩家に御茶屋を結構し一興を催せしかば御座被
成瀬戸の御茶入島津へ被遣候御御使にも主計頭被
仰付候

一秀吉公御前へ計頭清正を被召出數度盡粉骨大器

備へたる武士也依之尾藤が武具不殘下し給讃岐

の國を可領也肥後の國にて二十五萬石を可領

とかく御請可申上との儀也内々秀吉公高麗國御人

數被遣旨淺野正内設有しかは御先手望可申爲に

や忝骨髓にしみ奉存同くは肥後の国にて可被爲

拝領と被申上秀吉公被聞召大氣者哉さらば小西攝

津守をも呼候へと被仰兩人に五拾萬石の所を二

主計頭御一書を尼ヶ崎へ持参し陸奥守に高聲に讃

聞せ切腹尾藤所へは増田右衛門尉爲上使被遣九州

表にて不所存の旨申渡し讃岐國被召上流浪の身と

成る

加藤主計頭殿

四月十四日 御朱印

一肥後の國人一撥起し候様に仕段重々曲事に候事

一陸奥守事南登宗門とろひ候得と被仰出とSくん

許容不仕段彌以罪科不輕候此ゆへに切腹被仰

付候此旨可申聞也

一陸奥守事對 殿下數度意を仕段曲意に被思召

候得共被加御不便肥後へ被遣候事

よつて不及合戦、秀吉公柏井迄討人給ふにより武

右衛門主計も備を入翌日秀吉公本陣樂田へ可有御

入陣明日のしつはらSは堀尾茂助加藤主計頭に被

仰付鐵炮を備へ時刻を待けるに秀吉公十二萬の勢

をたんに備へ夜の中にくり引にひかせ給ふ多

勢なれは辰の刻程に漸く里をはなれ野へあかりし

堀尾加藤も退陣せんとせしにはや一揆雲霞のこと

くおこり來て堀尾加藤か在陣の所へ大勢押寄せ打

かてみ弓鐵炮を打入時の聲を作りかけ既に責

入らんと見へし時計茂助に被申けるは一揆の

つはら弓鐵炮を持たり共たしなみの武士か鐵炮打

合せ鑓入つき崩しなはなにかはたまるへきと主計

頭腰に差たるさいはいをぬき廻し敵と十五六間

程の間にて鐵炮を互にはなち合鍵を入よと下知し

兩人共について悪れは一揆等東西に迯散ける然れ

とも南の尾さき)をとつてしたひ嶺よりも貝

をならしかしこの谷よりも聲をおくる事おひたゝ

し茂助主計に申されけるは加様の時節本道をまん

丸に備へをなし退出せんと談合し静にのきし處を

一揆共頻りに鐵炮を打かけしたひければ堀尾か手

一秀吉公島津修理太夫義久爲討伐天正十五年三月朔

城中へ引しを総勢附入にして敵千三百討取り勝

時をあけ彌八郎か首御實けん有て城の掃除等被仰

付稲葉左京進を城代に入置給ふ

一秀吉公富田の寺内に御陣を居られ加賀野井彌八郎

か居城を取まかせ玉ふ信雄卿より二千の人数を爲

加勢入おかる四方より柵をつけ竹たはを以て付ま

わし弓鐵炮を透間なくさめければ城を渡し可申

條命を助け被下候様にと彌八郎申上しか共秀吉公

御承引なく唯貴つぶすへき旨被仰出しかは諸軍勢

彌押詰し處に主計頭は大手の門の脇に鐵を備へ

乗入らんとせしを城中より門を開ひてついて出る

主計頭武道に自由を得たる事なれは透間なく詰寄

二十六人一度に討たおしければ敵も是にいたみ

日のしつはらいもしたり兩人共に御取立可被成

との仰なり

の者は不及申自身も加藤鍵を打入突拂けれ

はいきほひに恐れをなし互に相引にして一揆共

したふ心もなく退散す秀吉公羽黒の古城御普請被

仰付堀尾茂助を入給 計頭茂助被召出昨

今度信孝對秀吉及鉾楯雖爲信長公御連枝可討果

事在手裏殊柴田修理亮瀧川左近將監と被仰合儀

必定也依之濃州大垣之城分在滯可攻崩岐阜之城

の虎柴田先勢柳瀬表致出張之旨告來り候條不移

時日走歸柳瀬決勝負刻秀吉於眼前一番鏡を合

波隼人を討取北國勢及敗軍候事無比類慟咸覺候

仍爲加增三千石遣し候猶可盡忠戰之狀如件

天正十一年五月十一日

と名乗ひつれも一度に鍵を仕虎之助被申けるは

ひさや敗軍の敵を一追おはんとて五町程進み行に

随て玄蕃が軍勢彌敗北して終に勝利を得玉柴田

一類御誅伐有りて方々の御仕置被成五月朔日至坂

本御着陣今度於志津ヶ嶽抽軍功七人の者被召出今

迄何程宛知行を遣し置つる哉と御尋被成加藤虎之

助四百七十石福島市松五百石加藤孫六五百石平野

權平五百石脇坂甚内三百石糟谷助右衛門三百石片

桐助作五百石と御請申上扨も(虎之助事鳥取の

城責このかた大功の者に小分の領知を遣置事憮哉

無念に有つらん七人共に一同に三千石の加増すへ

しと被仰出則御感狀被下書に日

肥後

書第二巻

一天正十二年三月三日織田信雄卿と秀吉公と御中不

和になり於尾州犬山及合戰池田勝入森武藏守討死

の由卯月九日於樂田、注進有り秀吉公急貝を立諸

軍勢可打立と觸廻し玉へは一番目に先勢押出す主

計頭も先勢の鐵炮頭なれは與力を引連れ段々にお

させ龍泉寺の坂を下りく見れははや合戦すぎて

小幡の郷へ家康公信雄卿入勢被成兩軍侍共しつし

つとのく敵に星野武右衛門主計に申けるはSさや

無理の鎧炮はなさせんと横合につるへはなしに三

百挺のつめ放させけれは侍五人足輕十三

人討をしけれ共敵南山につゐて道をかへ取入に

一七人の内虎之助は戸波討取候事一かとすくれて被

遊たる御感狀を頂戴し諸人に見まさりて威雄有

翌日七人共に被召出物頭に被仰付虎之助には鐵炮

百五十挺與力二十人御預被成何れも名を改め虎之

助事は主計頭市松は左衛門太夫孫六は左馬之助權

平は遠江守甚内は中務少輔助右衛門は内膳正助作

は市正に被仰付候

加藤虎之助殿

秀吉 御

か要害佐久間玄蕃亮大軍を以て責候由申こしかは

秀吉公足をうどふみならし柴田一類ことく

く誅伐の時今にあたれり是天の御めくみ被成と打

笑ひ即時に大を打立給虎之助所存には是より

志津嶽迄は二十里に及へりいつもの者したりと

も今度は就中天下わけめの合戰なれはすねたす

はSかに思ふ共歎く共働き心に叶ましと思案し拝

領の馬をひき立乗らんとせしに永々の在陣に草臥

中~用に立かたふ見へけれは乗替馬に乗秀吉公の

御跡に押つき乗られける如何したりけん乘替の

馬足をいたみける谷兵太夫と云者是を見て虎之

助に申けるは大柿より志津ヶ嶽迄は二十里に及へ

其方馬は中~ついくまし不吟味成りと申虎之

助返答に拝領の折悪病と成乘替の馬もか

のことく馬つかずは持合のひさ栗毛にて百里も

行へし能馬を持給貴殿に先にての働少もまけま
し敵の名馬を取て乗見せ申さんとにかく敷も被
申ける案のことく大柿を立三里行過たりとおはし
時虎之助の馬跡へも先へもゆかす則飛おり具足
ぬひて白き折に朱にて蛇の目を書たるを著し鑓

持に被申けるは汝等随分我をはなれす鏡を持来る
へしだらんにおゐては一褒美すべしと申付虎
之助小身たりといへとも元來すくやか者を鎗持に
して六人扶持するにて一足もさからす夜に入
けれは秀吉公在家の中よりたいまつなか程出し宿
かゆを出し候へ天下御安堵之上一廉褒美可被下
との御觸あれば在家の者共燈し出る事萬燈のこと
たいまつの明りに無程志津ヶ嶽近邊に御著陣被
成夜の明るを待かね木のもとをまたほのくらきに
押出志津ヶ嶽の南に御旗を立させられ弓鐵の頭

共に堀きりの玄蕃允か軍勢にはせ付うたせよ射さ
せよと使番衆を以觸らる長と申もあへすひれかへ
詰かへは记くと討せければ暫時に手負死人數百
人出來ける敵は手負死人をのけんとせしに軍勢
を屈しらつしもなかりける秀吉公きつと御覧して
團御取被成近習の者共先かれ勝軍に軍兵の守は
時にこそよれ鎗を入よ~と御下知なれは御詞の
下より加藤虎之助一番鎗と名乗相鄉五左衛門か手
の鐵炮頭戸波隼人と云者つき伏せ首を取福島市松
加藤孫六平野權平脇坂甚内糟屋助右衛門片桐助作
如此御自筆に被遊御脇差一腰被下遣る夫より秀吉
公一入御念頃に被成一度大身に可被仰付との仰也
一秀吉公は勢州瀧川左近将監御討伐として七萬餘の
人數にて於近江國出馬し給え安楽越を出させらる
るに虎之助を召れ被仰けるは汝小身なれはよき馬
をも持まし馬取共にとらせよと黒の御馬拜領す則
馬に乗られけるかつくと遠慮しかく御念頃に

被仰付處を馬に乗たらは御機嫌の程も如何と分別

歩行の内に入勤仕致されける勢州龜山の城主瀧

川内佐治新助籠りし秀吉公先勢にて被責崩し

玉時虎之助先勢の働き見て参るへして被避け

る虎之助者第一の若者なれは諸勢貴入し跡より

乗越し所に佐治か家來近江新七と云者下知し鐵

を打せあたりをはなつて見へける木村隼人かお

Sに木村十三郎とS新七を目にかけ十文字の

を振廻しくけるを虎之助二間半の鎗を鐵の

中へうち入拂び新七か肩先つかれける十三郎つい

てぬかれたり無念也とのしり新七かはらを裏

加藤虎之助殿

肥後文獻叢書第二巻

六月十三日

秀吉

一於北近江柴田修理亮勝家出張之旨注進有に仍て秀

吉公勢州表の仕置被仰付龜山の城より江北指て御

出馬然處に織田三七信孝秀吉と和睦の契約をせ

られ瀧川柴田と被仰合の色を被立由注進有に仍

秀吉公卯月十七日早天に江州長濱を出馬有て濃

州大柹に著陣し同十九日至岐阜押寄可攻干との用

意成けれと夜半迄の雨夥降ければ共日は用捨被

成候處に廿日午刻飛脚到來し志津嶽中川瀬兵衛尉

加藤虎之助殿

表につきぬきしを虎之助被申けるは一番につきし

は我也然共御邊つきたをされ候上は首を取候へと

SM捨て先へ乗入跡より城主佐治降人となりたる

そ諸軍ひきとり候へと鯛けれは立帰り秀吉公御前

へられ先勢の働委しく言上有し處へ隼人罷出お

Sの十三郎虎之助一々申上けれは虎之助十三郎

兩人共に被召出威狀を被下御刀一腰拜領す書に日

瀧川左近將監爲可討伐令出馬先勢州亀山城を取

巻候刻近江新七弨討捕由不可勝計候依之爲褒美

信國之刀遣之畢全可抽忠戰之狀如件

正月廿九日 御朱印

一於山崎表明智日向守と合戰の刻秀吉公御先一番高

山右近二番中川瀬兵衛三番池田紀伊守高山慢氣の

武士なれは寶寺門を打我一勢に他勢一人も交す

可盡粉骨を相定合戦をこそ始めけれ秀吉公共趣聞

召歩行の者二三人も参り候へと召れけるあつと答

清正記巻一

加藤虎之助殿

三月十八日 秀吉 御

天正十年三月十七日備中國冠之城攻崩刻一番乘

仕鎗合高名之段粉骨之至也褒美之知領重而可下

行者也依咸悅の狀如件

しく乗上り敵なけれは幸と加藤虎之助一番乗りつ

つけ武士共と聲をあくる甲賀の者内に美濃部十郎

二郎二番楽と名乗杉原か内山下九兵衛三番と名乗

三人よせ合かしらにせめ入ける敵二十人計り一度

について出虎之助十文字の鎗おつとりたかひにつ

き合けるか武士一人つき伏首をとり十郎二郎も

九藏も敵と鍵を合けれは味方の大軍ついて責入

を見て二十人餘の敵も城の内へ引退く扨落城の後

秀吉公段々被聞石今度も神妙の働狀を被下書に

武勇ころかけもの手から本の若者とはな

んちたるへしいよ(武功をつくすべし

五.

へし内より加藤虎之助參りたればSかに虎之助高

山の寺南門を打合戦を始めたる様子見て来れと

被仰付歩行衆三人にも被仰合ける虎之助得たる達

者なれははしり出し南門を心懸いくさの様を見廻

し所に日向守先勢伊勢與三郎 近藤半助と名乗鐡

炮を打せかい(敷體を仕者あり虎之助歩行衆へ

申されけるはあの氣逸物の半助を討とむへしと

二尺九寸の刀をぬき眞すくに敵の中へ割込半助

馬上にて下知したりしを前輪の通りよりうしろへ

つきとをしけれはまつさかさまに落けり則首を取

り腰につけたる袋に入んとするを助か家来の侍
すけ合せ虎之助をきちんとせしを虎之助同道の歩
行の者かけ合きり合けれはすけんとせし者も敗北
す虎之助走り歸り高山合戦をはしめし様子を委細
言上有てせり合を仕取れる首を秀吉公へ御目に懸
られけれは仰には汝武に心をおくゆへ鳥取冠の城
今日の中(言舌にのへかたしと被仰御視取出
され御自筆に遊はし被下ける書に日
一天正九年三月三日信長公秀吉公を安土え召播磨
國を給り中國探題職を被下ける同六月廿五日因幡
國鳥取の城の刻秀吉公彼域を見廻り給ひ地の利
よっ城なりたやすく攻崩すへきやうなし遠巻にす
へしからめての體を見て參れと蜂須賀彦右衛門尉
を召れ委く被仰合ける秀吉公何と思召けん加藤寅
之助も彦右衛門と同前にまみれとの仰なり虎之助
彦右衛門に被申けるは城の體を見るに東の森の蔭
に伏兵あり老功の人に如何なれど足輕二三十人、

召れ間敷哉と被申彦右衛門返答に氣のきひたる人

哉我たびヶ様の所見覺たり何の障りも有まし

急さのり候得と城を左に見てからめての様を見ら

れけるあんのことく森の内より敵二十計鎗おつ

とりく出る彦右衛門虎之助(と聲をかく虎之

助常々平弓を得たりければ腰に付たる半弓をもつ

ておつとりかゝる敵を射たてられ手負また出來

少しらみためら所に虎之助馬よりおり跡たつて

のく敵一人うちとめ首を取袋に入彦右衛門も敵

一人討取兩人共に馬に乗秀吉公の御前をさして参

見の役に被仰付暮勤仕被申たり

肥後文獻收書第二巻

一秀吉公三萬八千の人数を卒し備中國冠の城貴の魂

に秀吉公虎之助を召れ杉原七郎左衛門かせめ口見

て被參と被仰付けり則七郎左衛門攻口に行し伊賀

甲賀のしのひの者とひとつに成てあなたこなたと

見まわりし處に冠の城の北の門脇に手よわき塀あ

いかにも自由に乗らる地形なれはゆくとひと

加藤虎之助殿 二十歳也

此時虎之

秀 吉 御判

天正九年六月廿九日

因幡國鳥取之城爲可責崩著陳爲物見遣刻伏兵起

候處以半弓射退其上太刀打之高名诚以神妙之

至也因兢爲加增百石宛行之畢彌於抽軍忠者可加

增者也仍如件

りける秀吉公はや其體を御覧して伏兵あって手に

逢ひ高名したるかひれくとの御諚也彦右衛門

御前に参りせり合の様子並城の體を委細言上被申

ければ仰には虎之助若輩たりといへとも目も心も

きいたる仕形今日の働彦右衛門に抜群ましたりと

被仰御手つから金一すくひ給り加增の領知を給は

書に日

四

一前肥後州大守加藤主計頭豊臣朝臣清正の先を尋

るに大職冠の末葉加藤因幡守藤原清信と云人なり

清信尾州犬山に住し齋藤山城守幕下なり山城守と

織田信長公と犬山におゐて一戦の刻清信討死し畢

清信死去の節子息壹人あり鬼者といひて二歳な

みなし子となり母に養育せられ人となり尾州愛知

郡中村と云所にて光陰を送る後彈正左衛門兵衛と

號す彈正三十八歳にして死す 一人の男于あり年三

歳虎之助と名つくよふく母にそだてられ五歳ま

ては中村に住す太閤秀吉公の母公と虎之助母とは

いとこなり此故に虎之助母おもわれけるは木下藤

吉殿今近江の長濱にて五貫の領をしろしめさ

れゆ なる體なり此子田舎にてそれてたらんに

は武士の作法も知かたし只々秀吉公を頼奉らん!

分別し虎之助を召つれ長に至秀吉公の母公之

委細申入られけれは母公の外馳走しく兩人

清正記卷一

古橋左衛門藤原又玄集記

と仰られ二百石の加恩有て木村大膳輿の小もの

共に藤吉殿御目に被撫母公の側にて養育なり虎之

助十五歳の時母公へ申上られけるは我御蔭を以成

人仕歳は十五歳と申せ共せいも高し前髪おとし奉

公をもつとめ可申と申されけれはおとなしく申た

るもの哉藤吉殿へこまくと御語れば藤吉殿一

入機嫌よろしくましくて内々かの者か眠さしを

見るによく頑清信に似たるもの哉と存候ひし前

髪おとし申さんとて則男になし加藤虎之助と名つ

け始て百七十石の領知をたまわり奉公の身となる

藤吉殿内に塚原小才治と云兵法者ありト傳遠類の

武士なり彼に従ひ兵法執行す或時長濱の町人の所

へ人をあやまちとの籠る者あり町中さわかし虎之

助右の様子聞付常々体授の兵法は此時なりと思ひ

かの町人の所へ走り行けれは四方にみちくた

大勢の中をくいり入藉人を討たをしつなをか

け手一ヶ所もかふむら搦めて出られけりとり

こもる者は秀吉公足輕に市足久兵衛と云者なり右

の首尾秀吉公つぶさに召常々かの者は常の若者

の様にもなく役に立へきと思ひしによくも仕り

城守时

兩信長子彈正

固愛知郡中村清方

義時長子

義時

男

長子

三三郡三高

三二男

正家二男

忠家

郎四郎

教笮長子

忠家

敬臣師敔大

家

明峯

基實關白

通法正

關白

忠忠實

大 國寺法 條大

中臣11

孝通

元淅川太

輔情原

師輔

冬顥臣

長良

臣太

大

内租清政九大大臣右

納大原大條 臣政

良房納

保忠言

左 言大 大

兼家兼基公

定經經房實

師通的大

臣

長頼伊勢守家

高二虎虎三男

正吉

清正翳主

淸信因幡守

清忠二男

主計虱

二條左

大臣

忠孝冲钠

敎藤冲钠

正家薩武者

號美濃國

編者云、本系岡、淡海公4月忠家汇至石系統、卑分脈!據

り之を接するに頗る杜撰に似るも都べてに仍りて改めず

『大夫妻

女子阿部修理

女子配伊大納言

任加後守

忠位男

從廣

四四

正

清

後以肥後守任從五位上侍從永祿

五年壬

〃

一清正朝鮮陣中の働は下川兵太夫木村又臟といふも

の書置又臟が覺書はあらまし斗書付兵太夫は清正

の右筆を勤し者なり兵太夫が覺書に云朝鮮陣中始

より終り迄の事を書付然共度の小せり合の儀は

清正記一

一清正先祖幼少の事は加藤美作守と云者書置

一清正若年より天草迄のはたらきは古橋又助とSN

者書置又助は天草にて痛手をかんむり歸陣有て五

十日すぎ死す

此書のおこり

清正一世

のふるまひのあらましをやまとかなの一字につ

いり清正記としかひふ

カイ

英雄の士は常にあれと能知るなし其しらせ給ふは

太閤秀吉公なり秀吉公の見出し玉諸士の中に加藤

主計頭清正若年にしては秀吉公の供奉し奉り忠を盡

清正記序

中年にしては朝鮮國兀良蛤大明迄も高名をあら

をし終には源家康公豊臣秀頼公御對談の勤をなし名

は天下にあらはし能始終をつくしまれける海智1

魚名公女

良繼訥大

大職冠

麿

淡武公

○清正系圖

一子は清正御先祖より譜代の被官なり清正若年より

逝去ての事其名は世にあつて其しな書付さるこ

とをくやみ愚筆を染書物となし黒

一子は文盲なるゆへにからやまとの理に通せす美作

守助兵太夫か覺次第のちかはさる所やうく

愛に誌す

一此書物は清正在世中の大要を書あつめ小事は事長

きにより略之

一清正は活撥の勢もつて胸中かみの如くの生れつ

きなれば中(筆力に及かたし撥金鏡の所に目

を付て此書をよむへきもの也

一清正朝鮮より歸朝あつての儀は予が愚父古橋清助

氏保といふもの書置

一清正朝鮮陣中事繁により朝鮮人大明人との筆談を

兵太夫不書留のゆへに愛にしるさす

事長により略し其大旨を書付る也

呉淞園 歌 集巻一

壺梁先生遺稿八巻

高本大人家集一巻

田廬歌集六巻

先君子歌集一巻

肥後文獻叢書第二巻

11

三四

六

七四三

·五九四

紫溟先生遺稿六卷

紫溟先生詩集一卷

樂 泮集十卷

卷

太平策 十 二 卷

卷卷

十一

桃元問 答 一

二天記 一 卷

柏原家 舊 記 一卷

藤公遺業記 一卷

卷卷續選清正記 七卷

肥後文獻叢書第二卷目次

1

肥後文獻叢書 第二巻

六

五

例

識

七月

者

編

明治四十二年一呉淞園歌集は、堀鶴の歌集なり、巣鶴は名を勝名、一名を完、字を君綽、通稱を平太左衛門と云

へり、霊咸公の知遇を辱して家老職となり、祿三千五百石を食めり、寛政五年四月十三日に、年

七十七歳にて歿せり、

惟典に似て、和漢の學に通じ、最も古史に精しく、家臓の文書を整理して、阿蘇家傳七巻を作り、

文政三年四月に年四十八にてせり、

一先君子歌集は、従三位阿蘇惟の歌集にて、其子惟治の編輯せしものなり、惟は温厚誠實、共父

一田盧歌集は長瀬真幸の歌集なり、眞率は通稱を七郎と云ふ、追廻田端にせしが故に、田嘘と號

り、敬神王の志深く、伊勢に遊び、本居宣長に師事し、又江戸に抵りて、加藤千蔭、村田春海等

と交わり、學校御目附、御天守支配頭、御鐵砲抬頭等を勤め、天保六年五月十八日に、年七十一

を以て歿せり、

四

一高本大人家集は、高本紫溟の歌集なり、 編者は宇野東風にて紫溟の肥後歌壇に於ける地位は、其の

序文に詳なれば愛に云はず、

一壺梁先生遺稿は、時習館大城壺梁の撰なり、梁は名を炊、字を文卿、 通稱を多十郎と云ひ、

壺梁と號せり、微賤よりつて祿百石を食みしが、 文化八年七月二十五日に七十一歳を以て歿せり、

原本は武藤嚴男臓本にて、壺梁門人池遊展の手校本なり、

一紫溟先生詩集、遺稿は、均しく時習館教授高本紫溟の撰なり、聞く詩集は其の自選に係ると、按ず

るにの題して紫溟先生詩集と云へるは、蓋後人の追記に出しものなるべし、原本は武藤嚴男の所

臓にて、時習館の本なり、

の詩をせしめたるもの、二十六首を以て巻末に附録せり、蜜暦明和の際に於ける、肥人の才の美、

此編に於て其の一斑を窺に足る、

女プセ

肥後文獻叢書第二巻

言

一樂絆集は、霊咸公の世に、 時習館教授孤山に命じて、國中の詩を選せしめたるものなり、詩凡一

千三十首、作者二百九人、靈感公の詩十八首を以て首に冠し、又別に池遊匡卿等に命じて、孤山

一孝經説は、古屋鼎の撰に係る、愛日齋随筆の一なり、他に詩書易禮、論語、春秋、太戴禮、荀子、

呂氏春秋等の諸説あり、故に本書は姑らく愛日随筆 (一)として、愛に探したり、鼎は字を公錬、

通稱を鼎助と云ひしが、後専ら鼎を以て行はれたり、秋山玉山に從ひ、専ら注疏の學を攻めて、頗

る造詣する所あり、 時習館訓導、世子近習目附、御次儒者等を勤め、禄百石を食みしが、寛政十年

正月廿二日享年六十八にて歿せり、舉世滔々、宋の門牆に局促して、曽て其の範圍を超脱する能

はざるの時に當り、毅然として滄海横流の街に特立し、漢唐の古訓を闡明したる愛日の學識、並び

に最も欽仰するに堪へたり、本書原本は武藤厳男の藏本にて、愛日の門人渡邊琴臺の手抄本なり、

一太平策は、水足博泉の撰する所なり、博泉は名を安方、字を斯立、通稱を平之進と云へり、博泉は

・其號なり、 水足屏山の長子なり、 宏材を懐きて、家の坎擦に遭ひ、快々としてまず、終に二十六

歳を以て歿せり、時に享保十七年十月十四日なり、 其の歿するや、平生の著述散佚して、多く傳ら

ず、此書僅かに存して、獨り完璧と爲す、所謂吉光片羽、最も珍重すべきものなり、原本は野田寛

氏藏本にて、時習館訓導西岡の手抄本なり、

いつれも後に採録すべければ、詳しきことは愛には省きぬ、

一桃元問答は、八木田桃水が征西將軍宮、五辻宮、 菊地城院、縣主、稲置、保、菊池武時受領の事、

知名抄郷名の廃止、代繼神社の祭神、年頭職下司職、岡師職等につき、田中元勝に問ひたるを、元

勝それ考えて答へたるものなり、元勝には征西将軍宮譜、桃水には新撰事蹟通考の大著あり、

一柏原家舊記は、仕上由來書、黒國高砂一巻、及び附随書類數通を總稱す、柏原太郎左衛門が灣島

にて和聞人を生擒せし事蹟を記述したるものなり、太郎左衛門は、小堀遠江守の家臣、柏原兵部左

衛門の子にて、加藤清正肥後入國の後、肥後に來り、小川に住して寛文元年十一月に歿せり、子孫

今は小川に住す、本書は同家原本に據り校訂したる、宇野東風藏本を以て底本と爲したり、

一二天記は、宮本武臟の事略にて、原名を武公傳と云ひし豊田正剛の未定稿を、子正修、孫景英を經

て、始めて整頓せられたるものなり、正剛は通称を又四郎と云び、川と號せり、 武藏流兵法を道

家族に學び、その奥旨を極む、依て師範を命ぜらる、寛延二年八月廿日に年七十八を以て歿せ

り、正修は通稱彦兵衛と云ひ、景英は左近右衛門と云ふ、相て師範を命ぜられたり、本書は井田

幸男氏本を以て底本とし、武藤男藏本を以て検討したり、

イチマキ

勤め功を以て飛百石を賜はりぬ、天保十二年七月四日に、享年八十九歳にて歿せり、本書は熊本縣

廳本に據りしが、魯魚の誤、少かならざるのみならず、原文亦頗る晦澁を極むるも、都べて其の

に仍れり、淨池公畑碑は、維善の建立せしものなるが故に、巻末に碑文を附載したり

肥後文獻叢書第二巻

1

一藤公遺業記は、鹿子木維善の著にして、加藤清正の肥後の水土を治められたる功績を記述したるも

のなり、維善は通を量と云ひ初めは幸平と稱したり、莊屋より起りて、郡横目、郡吟味役等を

一猜撰清正記は、梶原の撰に係る、其の體例は古橋本を送條探して、其の異聞又は訛傳と思はる

を補修したるものなり、各巻に於ける目録は、都べて原書の面目を存し、書中古橋本の本文は、

一律之れを別り、單に修文のみを登載したり、古橋本と重複すればなり、原本は熊本物産館本に

據り、帝國岡書館本(板本)を以て校訂したり、

一清正記は、古橋左衛門又亥の撰にて、加藤清正の事略を集記したるものなり、其の端書を接するに

又は加藤家の世臣にて、材料の出處も、一一淵源あるに似たり、原本は、古城貞吉蔵本に據り、

上野圖書館本を旁参したり、岡書館本には、古橋宗左衛尉方宣集記と署せるも從はず、

一本には、清正記三巻、續撰清正記七巻、藤公遺楽記一巻、柏原家記一巻、二天記一巻、 桃元問

答一巻、孝經説一巻、太平第十二巻、 樂絆集十巻、 紫溟詩集一巻 紫溟先生遺稿六、梁先生遺

稿八巻、高本大人家集一巻、 盧歌集六、 先君千歌集一巻、呉淞園歌集一巻、都べて十六種、六

十一巻を探輯したり、其の解題大要は、即ち下の如し

4,2

肥支野藤

城武

東京

隆

宇後

獻

貞東

吉風男

同

編

館

箴

二卷

版

書

成野

隆
後
獻
館 取

版
風男
編
第
卷
|

1

THE LIBRARIES

COLUMBIA UNIVERSITY

EAST ASIAN LIBRARY

JAPANESE COLLECTION